
六花神

シオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六花神

【Nコード】

N3620R

【作者名】

シオ

【あらすじ】

奇妙な血筋を引いて生まれてきた雫。
けれど雫はそんな家に生まれついたにも関わらず何の力も持たず無能だった。

そんな雫は幼馴染の苦手な千草とある日から同棲することを命じられ、その日を境にするようにして、逃れることの出来ない禍ツ子である宿命に否が応にも立ち向かわねばならないのだった。

第四章から吸血要素/グロ要素追加になります。

逆ハーノークファンタジーなので苦手な方はご遠慮ください。

キャラクター説明（前書き）

第一部の現時点での説明になりますので、後々追加することもあると思われます。

2011/06/22橘さんよりいただいたキャラクターイラストが表示されるため、自分のイメージを優先されるかたは画像表示なしを選択してから見てください。

キャラクター説明

降矢雫（15歳）

> i 2 5 6 9 2 | 3 3 5 3 <

六花学園高等科、普通科棟（一年）

学園出資者の孫娘、そのため周囲には色々と線を引いて接するようにと祖父からは申し渡されており、不自由な生活を強いられる。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

かがり

> i 2 8 9 8 4 | 3 3 5 3 <

全てが謎の少女。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

高遠千草（17歳）

> i 2 6 2 4 7 | 3 3 5 3 <

六花学園高等科、普通科棟（二年）

雫の祖父宗一郎より見出され、雫の許嫁？として降矢邸で暮らし始めることに。

現在は許嫁候補、となっている模様。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

綾小路櫻子（15歳）

> i 2 6 5 6 2 | 3 3 5 3 <

六花学園高等科、普通科棟（一年）

雫とは祖母の関係で知り合い、幼少期からの付き合いである。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

成瀬健（16歳）

六花学園高等科、普通科棟（二年）
雫と事件で深い仲になり、降矢邸で千草と同じく許嫁候補として暮らすようになる。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

杜村奏（16歳）

> i 2 5 6 9 3 | 3 3 5 3 <

六花学園高等科、普通科棟（二年）

降矢邸で暮らしているが本人はあくまでも居候だと言っている。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

須賀圭

六花学園普通科棟、一学年所属。

雫のクラスメイト。

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

山田ジュリ

六花学園普通科棟、一学年所属。

雫と同じ教室に属している。

雫を目の敵にしている。

+++

降矢宗一郎（83歳）

降矢邸の主、降矢をほぼ一代で巨大企業グループと言えるまでに成長させた才覚の持ち主。

雫を遠ざけているが真意はどこにあるのか……

他設定などは用語集 Wiki を参照ください。

降矢義経（42歳）

雫の父。不老であると本人も言っている。

六花神の一族の重要人物でもある。

他設定などは用語集 [Wiki](#) を参照ください。

鷺宮守（42歳）

義経が個人的に雇っている使用人。

他設定などは用語集 [Wiki](#) を参照ください。

澤田光輝（42歳）

義経が個人的に雇っている使用人。

他設定などは用語集 [Wiki](#) を参照ください。

塩見麗（42歳）

義経が個人的に雇っている使用人。

他設定などは用語集 [Wiki](#) を参照ください。

羽山

降矢邸で執事をしている。

島田

降矢邸お抱え運転手の一人。

主に雫や奏、千草のお伴。

キャラクター説明（後書き）

2011/09/30

用語集 Wiki を作ったのでこちらの内容を少し変更させていただきました。

2011/4/12 かがりについて追加。

同年4/13 更に追加。

2011/06/22 橘さんよりイラストをいただきました。

そしていただいてから表示まで手間取っていて中々表示が出来ませんでした、申し訳ありませんでした。

2011/06/24 橘さんよりイラストをいただきました。

千草です！わーい！

表示出来なかったので変更していただきました。

お手数おかけしまして！

2011/08/09

朝一で！かがりが！！携帯に！届いた！（興奮のあまりなんかおかしい）

ありがとうございますー！！

序章（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

序章

櫻子は目の前でまるで小さな子供のようにはしゃぎまわりたいのを必死で身の内に押し留めている雫を温かな眼差しで見つめている。もうこんな時間では誰もいないはずだから、教室中を思う様駆けてもいいわよと告げるも雫はそんなことはしないと櫻子へと宣言した。

そんな浅ましいまでに勝利に酔った愚かな真似は出来ないそうだと。櫻子は苦笑した。

この友人のこんな子供っぽいところがどうにも憎めない。むしろ愛しいと感じていた。

大きく振れ回ったとしても恥ずかしいことではないと思う。少なくとも櫻子はそう思うのだ。

自らが勝ちとったものをどうして触れまわることがいけないのか。

「馬鹿ね。もっと大声ではしゃぎ回っても、誰も貴方を叱ったりなんてしないのに」

この友人は本気でそれを心配しているのだから、悲しいと思う。

櫻子は窓際で俯きながら一人幸福を噛みしめる少女を見て目を閉じた。

雫は先ほどから、達成感に似た感情を得て頬を紅潮させていた。

漸く誇れる物が手に入れられた。自身の手で初めて納得がいく結果を得られたとそう思った。

これで認めて貰えるだろう、認めてくださいと、雫は生まれて初めて胸を張って言えるだろうと一人頷く。その口元には知らず笑みが零れていた。

これで納得していただけるはず、そうでしょ？

右の拳をきゅっと握り締め、それを胸に押し抱くようにして左の掌でそっと包み込む。

掴み取った実感が湧いてくれば、今にも嬉しさに小躍りしてしまいたくなるほどだ。

「喜んでくださるかしら？」

喜んで貰えるだろうかとそれだけを思いながら、けれど喜んで貰えるはずだとその言葉に被せるように自らの願いを紡いで見せた。言葉に出してしまえばそれが逃げてしまわないかと、まだ恐ろしい。

漸く私の望みが叶う？

願いを叶えるために、叶うまではその願いを口にしてはいけないという呪い（まじない）だ。雫はそれを幼い頃からずっとずっと守り続けてきた。

けれど今日、言葉に出せるかもしれない。そう思えばあと少しなのだからその呪いを最後までやり遂げなくてはと思った。

必ず叶う、そう願い続けてきたその集大成に違いないのだから。今気を緩めるのは駄目 雫はきゅっと唇を結ぶと面を上げた。

櫻子はその表情を見て、いつ見ても美しいと、友人のきつと空を睨みつけるような姿を目にしてほうつと感嘆の吐息を吐きだした。

色素の薄い髪の間から、鼻梁の通った細面の美しい少女が現れる。虚空を見つめている眼差しは決して穏やかなものとは言えないだろう。こう言ってはなんだが、とても力のこもった眼差しだった。それはもう、雫が真実その年齢なのかどうか、本人に問いたただいたくなるほどに強いものだ。

彼女を知らない人であれば、きつと睨みつけられればその眼差し

のあまりの苛烈さに一瞬たじろぐほどだが、櫻子はたじろぐどころかその目が好きだった。

雫の気高い魂が全面に現れる瞬間は、まるで負けるものかと天に真向かうようなその表情、それが一番よくあらわしていると思うのだ。

そんな表情をするけれど、雫はただ普通にしていれば可愛らしい少女だった。

その細面の美しい顔は、人種を疑う程に色素が薄く、肌理の細かいつるりとした肌は触れれば吸いつくような感触を与えてくれるに違いないと思わせるほど整ったものだ。けれどそれは決して病的なものを窺わせるものではなく、むしろ頬は薔薇色に染まり、雫が快活な少女であることを思わせる肌色である。

百人に訪ねれば百人が百人ともに雫を見てこう答えるはずだ
印象に残る程の美少女だと。

雫をその印象的な美しい少女に見せている大部分というと、その長く濃い睫の所為と言えるだろうと櫻子は思う。肌の色素が薄いのがゆえに、瞼を彩る睫の濃さが強く印象に残るのだ。

目を縁取る睫はそつと伏せられてしまえば濃い影を生み出す。それは色素の薄い雫の肌に墨を落とし込むようにして陰影を濃く作りこんでいた。

その瞼を開けてほしい、睫をそつと上げてほしい、一体その瞼の奥にはどんなにか美しい瞳があるのか　と、美しさに惹かれる心があるものならば誰もが願わずにはいられない美少女なのだ。

その美しい面に櫻子はくすりと笑みを零して見せた。

ただし櫻子は雫の顔が好きだからこうして友人関係を結んでいるわけではない。

櫻子自身は雫がどんな顔でも構わなかった。美醜を問わず彼女自身が好きだからだ。

二人きりで居たいだけだと願うのであれば、むしろ雫の美しさは邪魔だった。

美しい花には余計な虫がたかるのが古今東西常である。

そしてそれは雫にも言えることだったからだ。

ただ美しいものが櫻子とて嫌いなわけではない。だからこそ雫が美しく、そして可愛らしい盛りだからこそ思うのだ、今であれば、と。

願わずにはいらなかった。

櫻子は瞳に映り込む夕日を一身に浴びて輝いているように見える雫の姿に、大丈夫、やれるはずだと、安心しろと心の中で語りかける。

”あの場所”ではどうかは分からないが、この学園内では雫の愛らしさは彼女を救う一つの武器になるはずだと思う。

いや、そうでなくてはならないのだ。絶対に。

愛されるべくして生まれてきたのだと櫻子は思ったかった。

折角恵まれて生まれてきたと言うのに、どうして愛されずに育たなければならぬのか。

櫻子は口惜しいと唇を噛みしめた。

どうして自分には力が無いのかと、自らを憂えていいとは思われない。憂う心を持つ前に、やるべきこと、成せるものがあるならばそれを必死でやるべきなのだから。憂いを覚えている暇等無いのだ。

けれど神と言うものがあるならば、どうして雫を救ってはくたさらないのかと、櫻子は思わずにいられない。

櫻子の目から見ても、雫の運命は今まで余程過酷なものだった。

そろそろ救われてしかるべきだとそう思うのだ。

櫻子の胸中等知らぬ雫はにこやかだった。

雫は未だ成長の兆しを見せない薄い胸を反らして、すうつと深く息を吸い込んだ。肺の隅々にまで行き渡っていく済んだ空気は何と美味しいことだろう。

雫は今、自分は満面の笑みを浮かべているに違いないと、そう思った。

帝都六花学園、高等部。

帝都の中央より西に位置するこの学園は、明治よりある古い学園である。

明治の頃よりある学び舎、ここはその古き伝統ある学園であることを誇りとする学園で、幼稚舎、初等科、中等科、高等科、大学と分かれている巨大な一種の学園都市でもあった。

一流の教育を受けられるだけの教師を揃え、遠方より通う苦勞を軽減するためと、寮も完備されている。そのお陰か金銭面で問題が無ければここに入学したいと言うものは後を絶たない。

全てにおいて一流を揃えられた環境に、魅了されこそすれ、嫌だとそっぽを向くような学生は居ない。

けれどそれは本当に飽く迄も金銭面に余裕があればという、最難関の壁がある。

普通の人ならばそこで振るい落とされてしまう、それほど高い壁だった。

実はこの学園は、”金持ちのための大仰なまでの学校”と、中流家庭レベルの親や子供からは揶揄される程に、ここへ通うためには莫大な学費が必要なのだ。

だからこの学園に通う大半は上流階級の人間であり、上流階級のためだけに作った学び舎であろうと言われても仕方無い。

けれどある一面ではそうとも言えなかった。

中流階級に位置するごく一部の人間も背伸びをしてこの学園に子供を入れたがる。それがどんなに家計を圧迫してもだ。

それは何故か 理由は簡単だ。子供のためであるというのだ。

詳しく言えば子供の将来を思えばこの学園に入れた方がいいからというのが親の弁である。学園で作ったパイプは後々生きてくるから無いよりは有る方が断然良いと、そういうことらしい。

寧ろ所謂上流階級の出身で、生まれた時からお嬢様という、所謂

勝ち組に生まれついた少女だった。

櫻子はこの学園にぎりぎり通える程度の家出身なので、それこそ人が羨む程のものを生まれながらに雫は持ちえていると、多少妬む気持ちもあった。

ただ、雫を幼い頃から知っているだけに妬むよりも称賛してやりたい気持ちのほうが勝るのだ。

今まで良く頑張った、これから必ず報われる日が来る　そう告げたかった。

雫がどれだけ努力を重ねて苦汁をなめてきたのかを知っているだけにその気持ちのほうが余程大きい。

それに　と、櫻子は思う。

お金があっても幸せとは限らないものね。

「　雫、幸せにならないと駄目よ。貴方は幸せになるべくして生まれたんだから、幸せになりなさい」

「櫻子……またそれ？私は十分幸せだよ。櫻子が居て、お父様も居て、お母様も居て……これ以上ないまでに幸せだわ」

言った方も言われた方も、どこか苦いものを漂わせる顔をしている。

見つめあう二人の少女の顔はどちらも辛そうだ。

どちらもが続きを心得ているらしく、知った言葉が待っているからと、この話はお終いとでも言うように、雫はすつと視線を外す。

聞きたくないと言外に告げられれば櫻子も仕方ないとも言うようにそのまま学園指定の鞆を取り教室を後にした。

その背を雫は黙々と追いかけた。

二人はこの時愚かにも、全て上手くいくと信じていた。

明日、学園で何が待ち構えているかも知らずに。

1 (それは生徒会長に当選した当日のことでした) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

1 (それは生徒会長に当選した当日のことでした)

雫の不幸は今に始まったことではなかった。

それは彼女が生まれながらに背負った、業のようなものだった。

櫻子は思う　彼女の一番の不幸は、彼女の実の兄達の存在なのではないかと。

彼らを兄に持ったこと、それこそが不幸だと言えるだろう。

赤の他人の自分から見ても、雫の家が異常なまでに兄　”男児”を溺愛していると言うのだけは分かった。

子供はそれこそ男児以外目に入らないのだと言う、それほどまでに扱いが違った。

女兒に生まれたこと不幸、それを雫にわざと気づかせるように仕向けているのではと勘繰る程に酷かった。

そしてそれは、どうにも櫻子には受け入れがたいものだった。

長兄である啓一は跡取りと言うこともあってか、雫の家　降矢一族の系列企業を今、一つ一つ回っていつて経営を直に学んでいる最中だ。

啓一は良くも悪くも真面目一辺倒の人間だった。詰まらないと思うことはあっても嫌うことはない。が、かといって好くことも出来ない、そんな人間だった。

次兄は名を何と言ったか　櫻子は彼とは一度きりしか会ったことがないのだが、それだけでも十分だったと言える。

雫の次兄である彼は、雫とはまた違った印象を持った　けれどこれまたとても印象に残る人物であった。

見目で言うなればこれまた美丈夫で、見惚れるに相応しいもの圧倒的な存在感を有しているのだ。

だが、そんな彼に櫻子が見惚れることは無かった。

初めて会ったあの日、笑顔を向けられた途端に毛穴という毛穴が一瞬にして開いた。あれはそんな生易しいものではないと直感で感

じ取ったのではないかと、今ではそう思う。

雫の瞼は開けて欲しいと願うものだ。美しいと思い、どうか瞼を開けて私を見て欲しいと請い願う気持ちになる。惹かれてやまないものなのだ。

けれど彼の瞼、あれはもう二度と開いたところを見たいとは思わない。

あれは危険。駄目よ。

ぶるりと櫻子は身ぶるいをした。思い出しただけで怖気がする。髪がはらりと視界に落ちてくれればぐくりと視線が釘付けになる。

黒……黒は、駄目……

櫻子の真つ直ぐな性格を表したように美しいそれは、墨に墨を重ねたような漆黒だった。その頬の横にはらりと落ちてきた髪を、櫻子は鬱陶しげに撫でつけた。指先が細かく震えているように見えるが、櫻子は努めて気にしないようにする。

黒は彼のことを考えている時は見たくない。

しつとりと濡れたように光沢を放つ髪は、彼の持つ色、そのものだと言える。

黒、闇夜、それは彼を表す色だ。

一度会えば十分に理解する、二度でも沢山だ。三度目は会う予定もないのに丁寧に辞退願いたいと先に宣言してしまえる、それほどまでに強烈な人物だった。

長兄がどこまでも淡々と仕事をこなす、どこに出しても恥ずかしくない降矢の後継ぎというなれば、次兄はどこまでも超然とした存在で、その存在感だけで他を圧倒するほどなのだ。

彼が何をせずとも、一步引いてしまうほどの存在感を持つ、そんな次兄までをも持てば、普通を地で行く雫こそが、あの降矢邸では

異質の存在だった。

類いまれなる才能を有した二人の兄を持つ妹。それはなんと悲しい存在なのか。

櫻子はぎゅっと目を瞑る。

長兄はどこまでも完璧な降矢の後継ぎ、次兄は雫曰く、こちらも何がしかの後継ぎなのだと言う。

降矢の家くらい大きくなると一人が全てを背負うことが出来ないものなのかもしれないと、それを聞いたときは何とはなしに考えていた。成長しすぎたがゆえに、後を継ぐほうも大変なのだろう。そこにきて、では雫は？と問えば困ったように笑われたのだ。

「私は降矢には必要の無い人間みたい……」

どういう意味なのかと思っただが、降矢邸へと初等科に上がる頃になり、初めて降矢の本邸へと遊びに行けばそこで理由が知れた。

金持ちと言うのはどこも往々にしてそうなのかとも思っただが、跡取りである人間以外、存外に扱い方は適当だったりする。

とは言っても昨今、そうまでして後継ぎ以外を差別化して育てる家等減ってきている。だからこれは金持ちの一部、古い考えに未だ取りつかれたままの人間達による悪習のようなものと櫻子は考えられている。

そして降矢は、未だにその悪習に取りつかれ、そのきらいが強いように見受けられた。

とは言え、飽く迄も櫻子の視点からそうと見えるだけに過ぎないかもしれないが、降矢の家では格差と言ってしまえるほどにそれは顕著に現れていた。見ていていつそ醜悪なと言いたくなるまでに、それは酷いものだった。

櫻子は青白く、今では白磁のようになってしまった面を歪ませる。降矢の家のことを考えるとどうしても怒りか恐怖以外の感情が浮かんでこない。

「まだ幼稚舎に通っているような小さな子供に、お前は役立たずなんだから、なんて、言うべきじゃないわ。本当にあの家は、どうかしている……」

そして初等科に上がる年齢にまでなつた時には要らない子と公然と言い放つなんて、まともな神経の持ち主であれば、していいはずがないと分かるだろうに、降矢ではそれを当たり前に行っているのだ。降矢の皇帝として君臨する雫の祖父　一代で財をなした人物、降矢宗一郎。

彼こそが全ての元凶であると櫻子は考えている。

宗一郎こそが、幼い頃から雫を無いものと振舞い、無闇矢鱈と傷つける。そういう存在だったのだ。

あの血の通わぬ冷血な皇帝の元に、末の孫として生まれたことが彼女の不幸の始まりだったと言えるのだ。

宗一郎の孫として生まれ、そしてあの二人の全てに恵まれた兄を持ったこと、それこそが不幸だろう。そしてその不幸は櫻子には真実理解することは敵わないのだ。

傍から見ているだけでは、全てを理解したなどと軽々しく言えるものではないからだ。

けれど、降矢の家を外から見ていて分かるだけでも十分すぎる程酷いのだ。

それを雫本人が、どれほどまでの重圧を感じながら生活しているか、それを考えるだけで胸が苦しくなるほどだった。

櫻子は祈る。雫のためを思って。彼女に幸せになって欲しいのだと祈った。

けれど、真実雫に幸せになつて欲しいと願うのであれば、それこそ、別の家に生まれ落ちるようにしてほしいと、過去から彼女の運命をやり直してあげて欲しいと神に願わずにはいられない。

その生まれ、そのものこそが間違いだっただから。

ただその場合、櫻子と雫は、出会う運命に無かったことになるだろうと分かるだけに辛いものがある。

彼女の生まれを否定するならば、自分達の出会いそのものを櫻子は否定しなければならぬ。

それだけは決して間違いではなかったと櫻子は思う。

どうして上手く行かないのかしら。

櫻子は運命というものを呪った。

二人が出会うこと、そして雫の生まれ、この二つが最も自然な、そして最も幸せな形で訪れたならば……と思う。

けれど現実はどこまでも残酷だ。その両者が綺麗に並び立つことはあり得なかったのだから。

櫻子は歯をぎりりと噛みしめた。

悔しいと思う。

自身のちっぽけな存在を呪い、そして理不尽なこの世界を呪う。

せめて自分が彼女を守るくらいにもっともっと強く生まれてい

たならば　　櫻子はそう願わずにはいられなかった。

そつと口元を綻ばせながら迎えにきた車に乗り込んだ、そこまでは良かったのだ。

にやついた口元は、常ならば卑しいと蔑まれるか怒られるか他の家ではどうだか知らないが、降矢ではそんなはしたない表情をして！と言われるようなものだった。

だが、今日のははしたないと言われようと構うものかと開き直ってしまいたい。怒られてもいい、むしろ怒ってくれたらいいと雫は本

気で思っていた。これが現実だと分かせて貰えるならば幾らでも叱りたい、怒りたい、怒鳴られたかったのだ。

誰でもいいからこの現実を実感させて欲しくて堪らなかった。持ち上げられた口角がどうしても戻らない。嬉しくて嬉しくて、抑えきれない思いを胸に暴れだしたいくらいだ。それこそ降矢の令嬢が何たることかと怒られかねないが。

そんな浮ついた気持ちでいれば、いつの間にか降矢の本邸前で車は止められていて、降りるようにと運転手の島田より促される。いつ着いたのだろうか。全く気付かなかった。

島田に手を取ってもらい裾を押さえながら淑やかに降り立ち、礼を述べた。飽く迄も上品に。先ほどまでのにやけた表情は降矢の令嬢の仮面の下に押し隠して完璧な淑女を演じた。

けれど礼を述べる際に島田の顔を見れば、その顔には笑い出したいのを堪えているのか、けれど笑うことは失礼とでも考えているからなのか、懸命に神妙な表情を作ろうと努力しているような、そんな奇妙な顔があったのだ。

それを見れば流石にむっとして寧ろ口を開く。

「……島田、別に笑っちゃだめなんて誰も言ってますよ」

「いいえお嬢様、誰も笑ってなどおりませんとも」

「そうね、笑ってはいないわ。でもね、とつても笑いたそうにしているけれど？我慢は身体に良くないですよ。笑ったらどうなの？」

つんけんと言い放てば、島田の口元でぶはつと音がした。笑いをかみ殺しきれなくなったようだ。

「どうせ私は子供です！」

「お嬢様、まだ子供なんて言ってますん」

「まだってことはこれから言っんじゃない……！」

島田とは割かしこのようなやりとりをしているのだが、一步降矢の屋敷へと足を踏み入れれば島田も雫もびたりと口を噤ぐむ。

この家ではこのようなやりとりはしてはならないからだ。

そして、問題は降矢邸へと入り込んだここからだつた。

屋敷へと足を踏み入れた瞬間、雫に執事の羽山より声がかかる。

羽山は常ならば空気のように降矢に溶け込んでいて、決して雫の傍近くには寄つてはこない。

そして帰宅しても「お帰りなさいませ」と言う、それこそ儀礼的な言葉のみしか口を利かないがため、暫し反応が遅れてしまった。いつそ思う、羽山も他に口が聞けたのか、と。

ある種の挨拶マシンのように考えていた節が雫にもあつたがゆえのこの考えだが、決して本人には言えない。言つたが最後、それこそどんな目で見られるかと思うとぞつとしめない。

「お帰りなさいませ、お嬢様。遅いお帰りで御座いましたな」

「え……え、ええ。少し、櫻子さんと学校で残ってお話をしていたの。だから少し遅くなつてしまいました」

「そつで御座いますか」

驚きに目を見張り、けれど直ぐ様平素を装うと、雫は何か用事でもあつたのかと執事に返した。それ以外羽山が雫に積極的に話しかけてくる理由が無い。

すると矢張りそつだつたのか、羽山は雫の鞆を自然に取り上げ、先へ進むようと促して見せた。

どうやら二階に何か、あるらしい。

「お嬢様、旦那様がお呼びです」

「……お爺様が？」

余程奇怪な顔でもしていたのか、羽山は不愉快そうな目をくれる。

雫は慌てて涼しげな表情を取り繕うが手遅れだった。

羽山が旦那様と呼ぶのは降矢邸ではただ一人、雫の祖父、宗一郎のみだ。

雫は思わず身構えた。雫が覚えている限り、宗一郎の呼び出しで今まで記憶している限り、好かつたことなど一度も無かつた。

基本的に存在しえないものとして扱われる雫にとつてみれば、無視か冷やかな声音でもたらされるお叱り。その二つ以外宗一郎から雫へ贈られるものは何一つないのだ。

「先ほどよりお待ちです」

さあ、さっさと上がれと、そういうことらしい。

羽山に促されるままに、雫は渋谷階段を昇り始める。元より逃げられるとは考えてもいないが、けれど追い立てられるように行かなければならないこの状況は嫌だった。

雫は一つだけ溜息を零し、仕方ないと気持ちを切り替えた。逃げられるものではないのだから、行くしかない。

よし、行くわ！

背をしゃんと伸ばして歩き始める。

常ならば、とは思うが、昨日であるならばまだしも、今日だ。もしや、とも思う。

そうだ、呼び出しはもしや、もう御大の耳に入ったのだろうか？ 雫はそう考えた。

思わずごくりと喉を鳴らして唾を飲み込む。

それで呼び出しなのだとしたら、そう考えるが指先が見つとも無いほど震えている。矢張り宗一郎が怖い。

震える指先をぎゅうつと握りこみ、抑え込む。だが、今度は視界がぐらぐらと一定せずに揺れ始めたのだ。雫は己の弱さを痛感した。

幼い頃から染みついた宗一郎への畏怖、それがどうしても拭い去ることが出来ない。

このままでは呼び出しに応じるどころか階段の半ばでふっと意識を失ってしまいそうだった。

けれど今日この日の呼び出しは、雫の期待通りであれば恐らく、常とは正反対のものなはずなのだ。

そう、初めて宗一郎から認めて貰えるはずだった。

だから今日は恐れる必要などないのだと自分に言い聞かせるようにするけれど、どうしても膝頭が笑うのは止められなかった。

逃げ出したいと心底思う。

無様だと思う。

だから私はお爺様に嫌われてしまっただ……

長兄も次兄も、雫とは違い、宗一郎から眼を掛けられて可愛がられている。

雫が思うに彼らが可愛がられるには可愛がられるだけの理由があると思うのだ。

人間は誰しも、自分に懐く人間の方が当たり前前に可愛いと感じるはずだ。

だがしかし、その懐くことが雫には出来ない。

そしてそれがゆえに蔑まれるような目で見られるのも仕方ないと思っていた。

私はどうしても懐けなかった。だって……怖いんだもの。

宗一郎を前にすれば、いつだって恐ろしさに身が縮みあがるほどびくびくと怯え、震えていた。

ただ、怖かったのだ。

何も言葉を発することも出来ず、ただただ怯える雫の姿。それを目にすれば宗一郎は一瞥をくれるだけで何も言わず去ってしまう。

立ち去って欲しくないと思う。けれど立ち去る姿、それを見ても

どうしても近寄ることが出来なかった。

置いていかないと欲しい、見捨てないで欲しいと、その背中に祈るように思うのに、どうしても一歩が出ない。

それが悲しくもあるし、悔しくもあった。

心臓の鼓動が忙しなく音を奏でる。煩いほどに。

年齢から見ても身長があまり大きくはない雫だが、その雫からしても平均的な女性の身長である櫻子からしてみても 今はいないが 見上げるほどに大きな扉があった。

降矢邸を建築したのはもう五十年も前のことだろうか。当時からこの大きさのままらしい。

どれだけ改築を重ねても扉の大きさは変わらない。

そして、昔よりもどれだけ自分が大きくなって見せても、この扉が大きく威圧的に見えるのだけはいつまでも変わらないのだ。

まるで雫を拒絶する宗一郎の想いそのままに、どこまでも威圧的な重々しさがそこにはあった。

二度ほど扉を叩けば待つことなく入れとの声がかかった。

恐らくは随分長い間待っていたのではないかと、とも思う。

不興を買ったのではないかと一瞬気を揉むが、中に入って見ないうちから何を、と被りを振ってそんな考えを振り払った。

雫は思い切って扉を開けると中へと足を踏み入れた。

宗一郎は自室にて読書をしていたようだった。

安楽椅子に座り、きいきいと木の軋む微かな音をさせながら、彼は老眼鏡を膝に置いて目だけで雫を見やった。

帰宅した旨と先日体調を崩したと聞いたため、ご機嫌伺いも忘れずしてみる。

だが、宗一郎はそれには答えず目頭を押さえて呻くようにするだけだ。それだけなのに雫には室温が一気に下がったような錯覚に陥った。

震える声音で問いかけた。

「お呼びでしょうか」

直立したままに雫は宗一郎の言葉を待つ。

「……高等科の生徒会選挙に出たらしいな」

矢張り、そのことかと思った。

「はい……」

期待と不安と恐怖がごちゃ混ぜになり雫の胸内に溢れてきた。

勝手に出たと怒られるか、それとも結果を出したことに對するお褒めの言葉をいただけるのか どちらがどうだか分からないが、雫は必死に逃げ出したい気持ちを抑え込んだ。

宗一郎が安楽椅子から降りると、そのまま豪華な机まで歩いていき、その上にある一枚の書類を手を取った。

遠目からでは一体何が書いてあるかは分からないが、何の変哲もないただの紙だ。

A4の一枚の紙。だが、何故かそれが酷く気になった。

雫は首の後ろがちりちりとするような感覚を覚えたが、努めて気づかないふりをした。

嫌な予感がする、ような気がしたのだ。

けれどあえて無視をする。そんなことはないと思いたかったから。ぱらりと音をさせて宗一郎がその紙を放る。すると紙は滑るようにして雫のいる方へときた。

机の端へと引つ掛かるようにして紙が止まると、宗一郎は顎だけで雫にそれを見るようにと促して見せた。

紙は帝都六花学園高等学科所属、降矢雫に対する処遇、そう書いてあった。

「どう、してですか……」

絞るようにして声を出す。まるで自分の声ではないような、酷くしゃがれた声だった。

「どうして、と聞くか」

「当たり前です！こんな、こんな横暴！認められるはずがありません！」

幼少期以来、始めてだった。宗一郎へと声を大にして逆らうような言葉を発したのは。

雫にはその紙に書いてあることを認められるはずがないのだ。

漸く手に入れたものを取り上げるようなことが書いてあるその事実、そんなものは断じて認められない。

「理事の名の元に、お前から生徒会長職を剥奪する」

それは、高等科にて生徒会総選挙が行われ、雫が生徒会長となった、その日の出来事だった。

2 (許嫁がいるそうです) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

2 (許嫁がいるそうです)

降矢の家は、とても裕福な家だった。

それは雫が物心つくかつかないかのうちに、自然と理解した厳然たる事実である。

その裕福な家に生まれながらも、虐げられて育った雫。

何もかもが与えられているようで、実際は檻の中で飼われるようにして育っていた彼女には、守るものが一人もいなかった。

そして、誰もその事実は知らない。いや、少なくとも、降矢の家を傍から見ている分には、誰もが知りようもないことだった。

彼女を庇護するのは身内では両親だけで、実の祖父からも蔑まれて育っていった。それも仕方ないことなのだからと自身で納得し、慰めるように自身に言い聞かせる子供の姿に、両親はどんなことを思っていたのか、雫は知らない。

雫の両親、祖父の宗一郎の他に、屋敷に住まう人間は大勢いるが、彼女を囲む人間はただの一人も彼女を”降矢の令嬢”として見たこととはなかった。

出来ない末の娘としか誰も見ない。それも、不要の存在としてしか見られない、その言いようのない

降矢の家は雫にとってそれこそ檻、そのものだった。

じわじわと心を内側から壊されていくままに任せることは簡単だった。恐らくは、雫に櫻子という何よりの友が居なければ、彼女が自壊するに時間は要らなかっただろう。

けれどそうはならなかったのが、櫻子がただの友人では無かったからだ。

雫を何より信じ、愛し、尊ぶ心を持っていた櫻子。だからこそ雫は今も、己の心を守り続けることが出来たのだ。

雫の不幸は出来すぎる兄を二人も持ったことだろう。

それは櫻子よりも何度も指摘されてきたことであり、事実その通りだろうと雫自身考えていた。

そして降矢の家の中でも両親の庇護がある、そのことだけが雫には救いではあった。

けれどそんな二人は仕事で忙しく、常に家を空けていた。それでは居ないのと変わりない。少なくとも雫にとってみればそうだろう。空ける理由は”むかがみ”のため。だから仕方ない。

仕方ない、仕方ないのだからと、何度自身を納得させてきたことだろうか。

櫻子にはこれだけは言うことを許されていないため、未だ話すことが適わないが、この降矢の家は”むかがみ”を存続させるためにあるものだ。

だからこそ、両親は出かける。”むかがみ”のために。

雫は”むかがみ”のために動く両親を見ていつも考えていた。

どうして私には”むかがみ”のために働く力が無いのだろうか。

それは時を経る毎に、強く、強く、それも狂おしい程に願っていることだった。

”むかがみ”に入るには力がある。それも、類いまれなる力が必要だ。

自身の力の無さを何度悔やんだか知れない。

無力に泣いた幼い頃。

役立たずと何度となく宗一郎より言われ蔑まれば、更にそれは強い願いとなり、雫の中に生まれて降り積もる。それは澱のように今も雫の胸底にあった。

請い願ったそれは、未だ叶うことなくそこにあるだけだ。それを悔しいと思う。そして、悲しいと思う。

置いて行かれない、この家に一人にしないでと雫は願うがそ

れが叶うべくもない。

両親だけが雫をこの家で唯一愛してくれるというのに、雫にはその両親の傍にいれるだけの力が無いのだ。

”むかがみ”には力が必要で、それ以外の弱者には要がない。完全な能力主義で出来る”むかがみ”に、雫はせめて両親の傍に居ることだけでも許されないものかと考えてみたことがあった。だが無情にもそんなことがまかり通るわけではないと、素気無く返されたものだった。

危険だから、危ないから、関わらない方がよほどいいんだよ。そう両親より告げられたとて納得出来るものではない。むしろ余計に”むかがみ”への執着はわいた。どうにかして力が手に入らないか。

強くなりたい、どうしたらなれる？

考えて、考えて、考えて……どうしたって手に入らないのかと二年も前に諦めた。ただ人でいい、そう考えた。

ただ人でしかあり得ない自身をいつそ、不甲斐無いとさえ思いながら。

どうして欲しいと願うものに与えられないのだろうか。

この世界はどこまでも理不尽で、どこまでも残酷だった。

雫にはどんなにか欲しいと願ってみても与えられない力。それは、力を望んでも居なかつたはずの次兄、蒼緋には溢れんばかりに与えられている。

目の前にぶら下げられたそれは、どうして自分には無いのか、考えても考えても分からない。

どうして私には無いのか、与えられないのか、そう言っても詮無いことと分かっている。与えられないものは与えられないのだ。だ

と言つのにどうしても諦められないでいる。

目の前に一人、溢れる程に力をその身に蓄えた人物が居るのだ。それも、血がもつとも近い者にそれがいる事実。

なのに。

何故なのか　そんなものに理由はない。

これはただの突きつけられた現実だ。

蒼緋の身から迸るその力は、なんと凄まじいと”むかがみ”の長老達よりも称賛される程のものだった。

称えられるに相応しいそれを現した蒼緋を見て、それはまるで、神々が彼に与えた祝福のようだと思つたものだ。

だからこそ蒼兄様は”むかがみ”にも両親にも歓迎されてる。

そして、それはあの宗一郎にまでも、のようなのだ。

気難し屋である宗一郎にも気に入られているのか、蒼緋の行動は全て黙認されてきた。

それがどんなに破天荒であろうとも、この邸内に住まう者、”むかがみ”、その全てが彼につき従う。

私と蒼兄様の一体何が違うと言つもの！？

何をしても許され、何をしても褒められる。そのことが羨ましくて妬ましくて、ずるいと思う　雫がだらしなく口角を上げてにやつくことすら禁じられているのは大違いなのだから、その扱いは推して知るべしである。

全てにおいて監視され、禁じられ、蔑まれ続ける自身と比べ、素直にそれを羨ましいと思うのだ。

だが、蒼緋の存在は確かに特別かもしれない。けれど、たとえ力がなくとも長兄　啓一は、祖父の事業の一端を担っている。

居ることを許されているのだ。

何故、と思つ。

けれど、何故、と問つても空しい程に、彼は存在自体完璧だった。

だからこそその扱いなのだろう。

雫は自身の存在を振り返ってみる。どこまでも寂しい子供だった。悲しい、寂しい子供。どうして、一体何のために生まれたと言っのか、いっそそれすら自身に問いかけたくなってしまう。

そんなことをしたとて、虚しさ以外、訪れないというのになだ。

一つでもいいから、私にも どんなにかそれを願う。

せめて自分にも何か欲しい。そう願って何がいけないと言っのか。雫は願う。役に立ちたい、父の、母の、役に立ちたいと。

そしてここを連れ出して欲しい、毎日のように雫はそう願っていた。

毎日を苦痛に感じる降矢でと学園の往復で過ごしていた、そんなある日のことだった。

雫は全ての物事に対して、真面目に全力で取り組む姿勢を常に取っり続けていた。実際はそれにより理事をしている宗一郎の耳に入ればとの打算込みの気持ちからではあったが、周囲より認められるようになったのは思わぬ副産物だった。だがその姿勢に嘘偽りはない。真人の役に立ちたいと動き続けてきた結果だった。雫は人から頼られることにより、自らのアイデンティティーを保ちたかったのだ。雫は、高校に上がりメキメキと頭角を現し、その結果が出た。

生徒会選挙により、当選。

それも、圧倒的な勝ちを持ち、彼女は生徒会長となったのだった。それも今日、経ったの数時間前の出来ごとでしかない。

だというのにこれは一体、何の冗談だと言っのだろうか。

いつそ笑えないと言うものだ。

数時間前に、生徒達を相手にする堂々たる演説を終えた。心臓が痛いほど鳴り響いた。雫はそれでも懸命に努力したのだ。

声が震えないためにと必死で虚勢を張った。無理に声を出して見せた。弱いところを見せてはいけないと必死だったのだ。

ばれなかったと思う。

事実ばれてはいなかったのだろうと思う。でなければ会長職にと誰も押すはずがない。

全投票数が凡そだが千五百　数十票程が無効票となったが休みの者がいたり、あだ名だったり判別不能なものだったり様々あったため、これが全校生徒数ではない　そのうちの六割が雫へと投票された。

その数は、雫が今まで積み上げてきたことの証、そのものだった。紙片一枚の、どれを取っても雫を応援する言葉しかない。だと言うのに　どうしてそれを今、取り上げられようとしているのか、分からない。

ぐらぐらと足元が揺れている。いや、実際には足がふら付いているだけで、思うように立つことすらままならないだけだった。

「きちんと、説明してください。何の権限があつて、どうして、私に生徒会長を辞めると言うのですか!」

「辞めるとは言っていない。剥奪したのだ。お前の意見等ない。ただ取り上げただけだ」

言葉が一瞬詰まる。宗一郎は全く悪びれた様子も無かった。

雫は混乱を極めた。一体どんな理由があつてしたことなのか。

ここまで堂々とされてしまうと、何故か雫の方が悪く思えてくるから不思議だと雫は頭の端で考えた。

「……一体何のためですか!」

剥奪とは無理やり奪い取ることだ。確かにそうだ、宗一郎は雫に辞めるとの勧告等していない。無理やりその任から解き、今日行われた選挙を無かったこととしただけだった。

書面にはこうある、本日選挙の結果として降矢雫の会長職を認めぬものとする。無効であると書いてある。

だが、全く理由が分からない。

理不尽なまでの仕打ちに怒りを覚えるが、それでも理由をどんなに考えてみても、全く思いつかない。

一体何のためにそのようなことをと、雫は真つ赤に染まった視界の中から宗一郎を見据えた。怒りに濁った視界では、宗一郎の表情が白けたものに映る。愚かな子供だともいいたげなその表情に、更なる怒りを雫は覚えた。

理不尽なことをされると人間は怒りを覚えるのだと、この時雫は始めて知った。

「お前には要らないものだからだ」

要らない、から？まさか、それだけの理由なの？

「他に用はない。出ていけ、私はこれから仕事がある」

視界が何故か眩む。どうやら耳鳴りもするようだ。きんきんと耳の奥、頭を中心あたりから音がする。それも、煩い程に。

そのあまりの煩さに雫は眩暈でも起こしたのかと思い、けれどここで倒れれば何一つまた言葉を発せなくなると、必死の思いでその場に留まった。

つま先に力をぐつと力を込めてその場に留まろうとする。

目の前に居るのは祖父ではない、雫の敵だ。敵なのだ。

負けない、負けるものか。

いつだってそうだった、どうして今日に限って宗一郎が認めてくれるだ等と考えたのか、雫は自らの思慮の浅さを呪った。

小さな頃からそうだった。何一つ雫の手元には残らない。使用人達でさえそうだ、何一つ出来ない、出来ない娘だと兄達と雫を見比べて笑う。何度幼心をずたずたに引き裂かれてきたことだろう。

啓一には宗一郎の跡取りという座を、蒼緋には両親を、そして雫にはこの、雫に対してどこまでも冷たい家だけが残された。

そして今、自らが自らの力で行き入れた、目に見える形となった人からの信頼というもの、それそのものさえもお前には必要がないと言われ、雫は泣きたいのか笑いたいのかわからなくなった。

どうして何も手に入れることを許しては貰えないのか。

悔しさから雫は唇を血が滲むほどに噛みしめた。それは雫の形の良い唇を、紅のように彩る赤となる。

雫の薄らと血の滲んだその唇を見て、宗一郎の眉根がついと持ちあがる。けれど雫からはそんなものは見えない。見えたとしても、ただ顔を顰めたのだろうと考えるだけで、動揺しているとは思われないに違いない。

動揺している宗一郎は、けれど何を発するわけでもなく、雫から身体ごと別の方向へと向きなおし、視界から雫を排除して事なきを経たようだ。気取られまいとこちららも必死のようだ。

理不尽の代名詞とは祖父宗一郎のことであろう。雫は本気で辞書があれば今ここで書きなぐってやるのにと思っていた。

宗一郎は雫が何かを手に入れば、その何かを叩き潰す、理不尽という名の塊だった。

それは時に友であり、それは父であり、母であった。

友とは引き離され、そして父も母も遠方へと仕事で追いやられるため、一年の間の僅かな間しか雫は二人とは会えないのだ

ただ一人、自らを傷つけ続けるためにあるような籠に飼われる自分、それは張りぼてのようだ。雫は自らを時折思い出しては嘲笑った。

櫻子だけか、未だ掌中に残されているのは　そんなことをぼんやりと考え、雫は拳をそつと開いて手のひらを見つめる。

宗一郎は櫻子をどうにかして引き離したいと思っっているのかも知れない。けれど実際はそんなことが出来るはずもないのだ。

他の誰かであればまだしも、彼女は宗一郎の愛する人と縁故がある。その人から宗一郎が嫌われたくないと思う限り、櫻子をどうにか出来るはずがない。だからこそ、無下に扱うこともできず、引き離すこともできず、そのまま放置されている。

友人で今も幼い頃から残っけていてくれるのは、櫻子ただ一人だ。

何一つ残らないが、ただ一人の友人を得た自分は、ある意味では幸福なのかもしれない。

櫻子が守ってくれる雫の心、その役割は大きかった。

雫は自分というものを卑屈な目で見てしまう。

見た目だけのご立派で、中身はすかすか、何一つ詰まっっていない。詰まっっているものがあるとすればおが屑程度かそんなものしか詰まっっていないに違いない。雫は自己分析をした結果、そんなことを考えた。

信頼を得た高等科の生徒達に言いたい。雫はここでだけしか頼られることなどないのだと。余所では詰まらない存在なのだと言いたかった。暴露してしまいたかった。けれど出来ない、そんなことは暴露すれば憐れんでくれるかと思っただが、憐れんで欲しいわけじゃない。ただ好きになっけて欲しいだけだ。人から好いて欲しい、ただそれだけなのだ。

生きる場所となっけてくれるはずだった。その場所すらまた取り上げられた雫は怒りのままに声を張り上げた。

「勝手に決めつけないでください！私に何が必要か必要でないかなんて、どうして分かるのですか！」

見つとも無い程に声を張り上げて喚き散らす。

酷い、酷い酷い酷い！

私が気に入らないだけ？！

そんなに私が気に入らないの！？

私が何をしたと言うの？

煮えたぎる程の怒りを感じた。

必死に抑え込むも宗一郎への怒りは消えない。むしろ考えれば考えるほどにそれは大きく膨れ上がっていった。

ふいに視界の端に動きが見られる。室内に置いてある小物がかたたと、音を鳴らして倒れたのだ。地震だろうか危ないなと考えるが、否と直ぐ様打ち消す。いつそ地震でも起きればいい。

この屋敷が崩れる程に大きな揺れでも起きればいいわ！

悔しくて堪らなかった。

ただ、どんなに怒りが感情を支配していつても、怒りで我を忘れるまでにはならなかった。雫はどこまでも理性的で、どこまでも現実を知っていたのだ。

宗一郎の不興を買うべきではない、それが分かっているだけに悔しさもひとしおだった。

怒りで我を忘れる程になればいいのにとおもっても、それは出来ない。

雫はそこまで愚かでは無かったのだ。

悲しいことに。

雫は毎日のように辛い思いをするだけのこの屋敷に帰りたくないがゆえに、学園で出来るだけ遅く居残って仕事をした。

教師の手伝い、生徒の手伝い、率先して何でも引き受けてきた。楽しかった。働くことが楽しくて楽しくて、一時だろうが雫は辛い生活を忘れることが出来た。

ただ、どんなに頑張って見たとしても、降矢で何かあれば直ぐに馳せ参じなければならぬからと言う理由で、雫はあらゆる部活への入部、委員会への参加が禁止されている。

そのためどこまでもただの手伝いという身に甘んじなければならなかった。

それは雫の足を宙に浮かせたようなもので、頼りない足場に雫はしがみ付くものを探して、どんなところでもいいからと手を伸ばした。

どこにも参加が禁止されている雫が何かを掴めるはずもなかったが、それだけ必死だったのだ。

何にでも参加した。何にでも嫌と言わず手伝った。

いつしか生徒達も雫を手伝ってくれと呼び出すまでになった。

雫を皆が頼り始めたのだ。それが嬉しかった。

身の置き場の無い雫にとって、それはどんなに最高の迎えられ方だったのだろう。

始めはひよっこりと委員会等に顔を出しては「お手伝いすることはないですか？」と聞くだけで嫌な顔をされていた。降矢と言えばこの学園でも一、二を競う資産家なのだ。その令嬢が何のつもりかと、また金持ちが道楽でも始めたのかと勘繰られるのも無理はなかった。

当時は嫌がらせだろうが「じゃあグラウンドの小石でも拾って貰おうか」等言われたものだが、今は違う。あてにされて待たれているのだ。それは何と甘美なひと時であったことだろう。

「降矢さん、あの書類どこにあるか分かる？」

「それでしたら中央の棚の二段目にファイルして入れてあります」

「降矢、先生が呼んでるんだって聞いたんだけどどこ行けばいい？」

「第二職員室でお呼びです。お早めに」

どの委員会で何をするか、雫にはもう分かっている。言伝も雫の元へと通して今では行われるところさえある程だ。

何がどこに置かれているか位置を全て把握し、どう動けばいいかが全て理解出来ている。

委員会、部活、そして教師塔への出入りの自由。それらは全て雫が高等学科へと進学し、数か月の間、毎日のように努力し続けた結果、その集大成だろうと言える。

雫が今までの間、頑張った結果が花開くようついできたのだ。

生徒達より絶大なる信頼を得た今、雫はその代表たる人物からも信頼されるまでになっていた。

そう、生徒会選挙に出ないかと現生徒会長より直々にお達しがあつたのだ。

出てもいいとは思ってもいなかった。所属禁止を申し渡されていたがゆえ、元よりそんなことは頭の中にこれっぽっちも無かった。

だが、断るよりもそこで認めてもらえれば、こんなにまで雫は出来るようになりましたと、降矢一族から認められるのではと、そう考えたのだ。今思えばそれは浅はかな考えだったのかもしれない。

啓一も確かこの学園で生徒会長を務めあげたはずだった。

であれば雫も同じく生徒会長を務めあげたならば、宗一郎は認めてくれるのではと、そう愚かにも思った。思ってしまったのだ。

実際は今起きている通りだ。宗一郎が雫を認めることは無かった。ただ淡々と雫が得たばかりの資格を剥奪し、剥奪したとの事実を書面としてただ出してきた、それだけだ。そこには何ら情が見えない。

惨い、そう思う。

「……理事長たるお爺様がそう決めたとしても、他の理事はどうなされるおつもりですか。こんなこと、理事長だからと言って許され

るはずがありません」

怒りで震えながら雫は言う。

理事どころか確かに宗一郎は理事の長だ。理事を束ねる権限があった。

だが、では一人で全て決めてしまえるかと言われればそれはない。そんなこと、していいはずがないし、その考えは危険ということ。理事での決定は過半数を可決による、承認性だった。

だからこんなことを一人で決めたからと持つてこられても、承服しかねるものがあつた。

雫はきつと宗一郎を見据えるも、宗一郎は窓の外を見続けているだけ。雫の顔をちらとも振り返りもしない。

飽く迄も淡々と口にされる。

「その理事で決定したことだ。最早覆らん」

今、何と言った？

理事が過半数の可決を持って承認したとそう聞こえたが、一体どういうことなのか。

理由は？

承認するには可決するには、過半数のものが納得するだけの理由が必要だろう。だがどんなに考えても分からない。

宗一郎の言うように、ただ必要無いだろうとの理由がまかり通るはずがないではないか。

愕然としながらも、必死に自身を立て直し、雫は宗一郎へと真向かう。

「 ですが！ ですが、ではあの選挙は？！ どうなさるおつもりか！ 最早生徒の中では私は会長です！ 本日決定された事実です！ では私の代わりに誰が会長を言うのですか！ そんな、行き成り無かったことに何て出来るはずがありません！ 理由だつて通るものではないわ！ ……ではなく、通るものではありません！！ 」

無茶苦茶だと抗議する。

そもそも代わりが居ないのだ。 そんな中、誰が会長を務めると言うのか。

けれど宗一郎は間をおかずしてつらつらと、決められたことを述べるように告げる。

「 高遠の者が同じく選挙に出たな。 お前の次点だった、そうだろう？ 」

高遠の名を耳にした途端、雫は怒りが急速に縮み、枯れるように萎んでいくのを感じた。

まさか、まさかまさかまさか……！

「 高遠千草、彼を副会長ではなく、会長に昇進させることとする 」
「 そんな、な…… 」

よりもよって千草だなんて。

わなわなと怒りに震えていた肩は、今では力なく落されている。

宗一郎の口より千草の名が出る悪夢、これは一体何なのか。

よりもよって雫を忌避している千草に、雫より剥奪した物を授与するだなどと、あり得ない。

どうして自分では駄目なのか、聞きたい。

何か特別な理由があるのかと思った。雫はそう思いたかったのだ。けれど宗一郎からもたらされた理由は、とんでもないものだった。

先ほどまでの必要ないから、という理由ならざる理由も、それを聞いた後ではある意味では領けた。

確かに特別は特別だが、それは悪夢としか言いようがないもので、雫は言葉を無くし、その場に力なく立ち尽くすしかなかった。

「高遠千草はお前の夫となる身。未来を約した許嫁だ。その許嫁、言わば夫たる高遠少年より、お前が上の位だ等と許されると思ったか？」

「何を、言っているのか……」

どこの時代錯誤な風習だとなじりたい気持ちもある、あるが口が動かない。

のろのろとした緩慢な動きしか出来ないことに、焦りが生まれる。けれど言いようのない感情が足元からせせりあがってくるのだ。

それが指先まで届く頃になり、宗一郎からまたも淡々と告げられる。

「高遠千草と降矢雫は先日、許嫁と交わされる間柄となった。ただの生徒同士であれば良かったかもしれないが、お前はもう人の妻となる身だ。妻が夫より前に立つ等おこがましい」

宗一郎の声が雫の耳から遠ざかる。

あれは何年前の出来ごとだったか、去年の今頃だったようにも思うし、もっと前の出来ごとだったようにも思う。詳しい日付は忘れた。思い出したくもないからそれでいい。

雫はその時過呼吸に陥りそうになっていた。

あまりの出来ごとに頭が、心が、追いつかないでいたあの日、あの時だ。ただただ恐怖に喘いでいる雫、そしてそれを見下ろす相手が千草だった。

千草はむき出しになった雫の肩を見て、恐怖に強張った表情を見

て、言ったのだ。

「お前から誘ったんじゃないのか？」

手荒く扱われた瞬間、それがフラッシュバックする。

雫はそれ以来、千草を避けるようになった。もう二度と関わるべきではないと思った。

雫をこの世の誰よりも嫌悪しているであろう千草。その彼と結婚する？

これは一体、何の悪夢だと言うのか。雫はこれが夢であって欲しいと願うことしかできなかった。

3 (許嫁と親友と私) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

3 (許嫁と親友と私)

櫻子は鬱陶しいと目の前にいる長身の少年に目で訴えかける。ただし、そんな冷たい眼差しを受けても、少年は全く意に介した様子もないのだが。

何度となくこうして目の前に立ち塞がるようにされ続け、その度同じように追い払うのだがこの少年もめげない。

自分が相手でなければその心意気に免じて一度でいいから付き合いを試みたら？などと言ってみたいが相手が自分だけにそれも言えない。むしろそんな言葉を軽々しくも言われたならば、櫻子はその人物を呪い殺さんばかりに恨むことは想像に難くない。

今ではただ「邪魔よ」その一言のみを発してそこを退けと言っただけだった。確実に嫌われているだろうと分かる言葉である。なのにこれなのだ。本気で少年は頭の螺子がどこかに飛んでしまったらしい。

櫻子も初めのうちはきちんとした応対をしていたが、そう何度も続けられればそれも空しい。本当にただ、鬱陶しいとしか 流石にそれは悪いとは思うが 今では感じなくなっていた。

櫻子のそんな手厳しい言葉に対しても、少年は涼しい笑みを浮かべて全くひかない。

こちらにも慣れた様子であり、むしろ櫻子の態度、言葉、それすら楽しんでる風である。

にこやかに少年は言い放つ。その笑顔はどこまでも華やかなもので、女性を虜にしようそんな魅力にあふれたものだった が、こちらにも櫻子には全く効果がないようだ……

「つれないな」

咄嗟に「帰れ」だの「出直してきなさい」等と出かかったがぐっ

と堪えた。

何だこのプレイボーイ風な態度は。櫻子の脳内に、鬱陶しいを通り越して殺意が閃く。

苛々としながらもどう返せば凹むんだこいつと櫻子は頭を捻る。考えこみながらも頭の片隅では全く別のことを考えていた。恐らく目の前の少年はドMという、羞恥心や屈辱感による快楽を得ることのできる、特殊な性癖を持ち合わせているに違いない。本気で櫻子はそう考えていた。

だってこいつすつごく気持ち悪い。

一部の人間から非難を轟々と受けそうなことを頭の中でだが発すれば、益々頭が痛くなってきた。

大体、これは違うのだ。

「本当はつれて欲しいなんて思ってもいなくせに」

つれないな、ではない。つれてほしいと考えてもいなくせににぶざけているにも程があった。

相手に聞こえない程度で発したつもりのその声は、少年の耳にしっかりと届いたらしい。少年は首を心持ち傾げるようにして何故と問いかける。

「この気持ちに嘘偽りがないと、いつになったら櫻子さんは信じてくれるのかな？」

煩い地獄耳のドエム。黙らないとその芸能人も真っ青な真っ白な歯を全てへし折るぞ。とは言えないので苛々としながらもきちんとして櫻子は少年との会話を試してみた。

櫻子は自分がとても大人だなあと偉いなあと、自分で自分を内心

褒め干切ってやりたい気分になったが、実際は大人でも何でも全くない。どちらかと言うと櫻子は沸点が低い子供であろう。ただ表面を取り繕うのを覚えただけマシというだけの子供だ。別名、一番性質の悪い子供、である。

「よしてくれる？高遠君。そういうの。私は貴方に名前でも呼んでいいと許可を与えていないわ。綾小路と呼んでくれる？」

「どうして？前は櫻子ちゃんって呼ばせてくれたのに、何がいけないの？分からないな」

櫻子は少年を睨み据えた。

櫻子ちゃん、そう呼ばれた時代も確かにあったろう。けれどそれは最早少年と櫻子の間には過去も過去、ずっと昔の話なはずだ。今は最早その時代に比べるべくもないほどに、二人の関係は悪化していた。

名を呼びかわしていた間柄だったのは、最早過去の時分のことなのだ。なのにどうして未だに彼はそんなことを言うてくるのか。

そも二人の間には隔たった境界があった。

過去と現在をわけ隔ててしまったのはたった一度きり起こった出来事。ただし、一度とは言えそれは、櫻子にとってとても重大な事件であった。

少年はそれを忘れたかのように接してくるが、櫻子に限って言うなればそれはあり得ないことだ。

忘れられようはずもない。櫻子の前で血が滴り落ちたあの日、絶対に許さないと少年に櫻子は言い放った。

そして少年もそれに倣うように櫻子へ自分からは近寄りもしなかったというのに、なのにどうして今更、少年は櫻子へと興味を持ったと、ちよっかいをかけてくるようになったのだらう。

いっそ不気味なと櫻子は思う。

「今年に入ってからだった？そういう冗談をし始める様になったの
つて。一体何が目的？性質が悪いわ」

どうしてこんな奴がいいのかと思う。

この学園で可也の高い支持を得ている目の前の少年は、容姿端麗、
頭脳明晰、その上武道も嗜んでいるとのことで素晴らしい……のだ
そっだ。

その上どこがいいのか櫻子には全く見当もつかないが、何故か生
徒達からの人望も厚いためか、大層もてるそっだつた。

だが櫻子には理解が出来ないでいた。どうしてこんな奴がもてる
のかが分からない。

確かに見た目だけは合格なのだろうが、逆に言えばそれだけだろ
うとさえ櫻子は思っている。

と言うよりも、櫻子よりも少年が頭が良くないがためそう感
じるのだが、櫻子以上の頭脳を持ち合わせているのはこの学園では
たった一人しかいない。学年で二位という順位なのだから当たり前
だが。だから「こいつのどこが頭がいいっていの？」なそうなの
だが、この学園の生徒数を、高等科のみで数えるだけでも約一千六
百人もの生徒がいる。

そんな大規模な学園で、一応少年はトップより五十以内に入っ
ているのだ。これで頭が良くないとは言われたくないはずだろう。

だが如何せん相手が悪い。学年二位様が相手では五十以内では無
きものと見られるようだった。

「目的なんてないよ。ただ今まで自分に素直になれないでいただけ
だ。素直に自分の気持ちをぶつけて何がいけない？」

「全部いけないわね。大いにいけないわね。と言うよりもあり得な
いわね」

畳みかけるように櫻子が言えば、流石に少年も表情を変えた。と言っても、変化はほぼ無いに等しいものでしかない。細めていた目をすつと僅かに開いて見せただけだった。

冷めた目をしているなと櫻子は思う。

どちらかと言えば口説くと言う行為そのものではなく、櫻子との会話。それによる櫻子の反応を楽しんでいるだけだろうと先ほどから感じていたが、矢張りそれは間違いではないのだと確信し、さて……と思う。

自分に素直になった結果がドMか。ならばある意味では仕方がないのかもしれない等と、櫻子は聞き流しながらも考えていた。とりあえずこの後どうやって少年を振り切るか、目下の課題はそれだった。

むつと唸るようにすると、少年の背後より声がかかった。

櫻子は自分への声かと思いい顔を上げるがどうやら勘違いの様子。少年あてのようだった。

「お早う御座います、高遠先輩」

「ああ、お早う」

声の主は少女のようだ。頬を染めて楚々とした風情が可愛い少女だ。

少女の挨拶に、少年も爽やかな挨拶で返した。

目の前で繰り広げられる光景に、いつそ砂を吐けそうだと櫻子は思う。ついでに今なら鞆だって投げられそうだ。主に軽薄な少年の麗しい顔目がけて、だが。

お前さっきまでの言葉をどこに放り投げたんだこの野郎　荒っぱい言葉で櫻子が脳内でだが少年に怒鳴りつけた。

先ほどまで口説いていた相手が目の前に居る状態で、よくもまあ抜け抜けと「今日も可愛いね。あれ？髪型を変えたのかな？」だとか言いつつ髪を触る等の行為が出来るなど、いつそ関心する思いだ。

素敵な笑顔^{……}を振り撒く少年　高遠千草に櫻子は頭が痛くなる。
万事が万事彼はこんな感じだ。櫻子にのみちよつかいをかけてい
るわけではない。

だと言うのにどうしてこれで人望が厚いのか、櫻子には全く理解
できないでいた。

皆見る目が無いんだわ。

もしくは皆変態なんだろう　とりあえず櫻子はそう考えること
にした。

それは面倒だから千草に関する事を考えること、それすら放棄
したに過ぎなかっただけなのだが。

その時、ちょうど間の悪いことに雫が千草と櫻子より死角となっ
ている方角からやってきた。

雫は酷く憂鬱だった。それもそのはずだろう、昨夜からほとんど
寝れないでいるのだ。

そうだ、寝れるはずもないのだ。

雫が寝ようとすれば、宗一郎の言葉が頭の中で木霊する。こんな
状態ですやすやと寝息を立てることなど出来るはずがない。

ふらふらとした足取りになりながらも、何とか大地を踏みしめ歩
く。

左足を引きずるように持ち上げれば、宗一郎の言葉が風に乗って
聞こえてきた。

幻聴だ、分かっている。

雫は自らがストレスを抱え過ぎていること、そして過去の出来事
による傷が、膿を吐きだすようにして、またも疼き始めていること
を知っていたが、それでも休むわけにはいかなかった。

休んだら休んだで、また何を言われるか分からない。

下手をすれば両親まで連絡が行ってしまう。それは嫌だ。そして
両親をそんなことで心配させるわけにはいかない。

だからこれは、雫の意地だった。

雫は両親を助けたいわけであって、助けられたいわけではない。だからこそ、最後まで弱音は吐きたくないのだ。

最後まで助けて等と言わず、ぎりぎりまで一人で戦うつもりだった。

声だけの宗一郎は言う。

「高遠千草はお前の夫となる身。未来を約した許嫁だ」

知らない、そんなこと知らない。

雫は頭を振って脳内にべったりと張り付いてしまったように消えない声を払おうとする。けれどそれは、どこまでもへばりついて離れない。

宗一郎はなおも言う。

「高遠千草と降矢雫は先日、許嫁と交わされる間柄となった。分かるな。お前はこれより人の妻だ。妻が夫より前に立つ等おこがましい。そうだな？」

妻、妻って何？

おこがましいって？

許嫁なんて知らない！

知らない、知らない、知らないわよ！

雫は巨大なグループ組織のトップ、その孫娘という立場であるにも関わらずに、自分にはそんなものが来るはずがないと思っていた。

余所のご令嬢が許嫁があると聞いてもそれを自身と重ね合わせる
こと等一度たりとて無かったのだ。

そもそも雫は、結婚なんて全く考えたことが無い。

確かに人並みに結婚願望はあるだろう。けれどそれはいつか遠く
の未来だ。今ではない。もしくは近い未来には到底起こりえないイ
ベントだと考えていた。

後を継ぐのは兄達であり、自分はただ両親の手伝いをするものが
出来ればそれでいいとさえ考えていた。

そう、雫は跡取りが結婚を縛られるものだろうと、無意識のうち
に考え納得していたのだ。

誰からもそんなことを言われたことがあつたわけでもない。だが
そうだろうと考えていた。

要は雫が子供だったのだ。

だが現実とは違う。雫が別の企業の御曹司と結婚となれば縁戚関係
がそこに生まれることになる。それはひいては降矢のためになる。
であるならば、あの宗一郎がそれを利用しないはずがないのだ。

そこに気がつけば雫は愕然とした。そして自身の愚かさに泣いた。
雫は自身に利用価値があつたことを昨日まで全く意識したことが
なかったのだ。そんなことがあるはずがないとさえ信じていた。

なのにこんなことが起こるだなんて……

そもそも宗一郎が、どうして嫌っている雫をそのように 言い
方は悪いが 使おうと考えたか、それすら理解出来ないでいた昨
夜。

何もかもが分からないし理解したくなかった。

雫は頭を抱えた。

高遠の家との縁戚関係が生まれるからということとは理解出来たが、
それ以外のこと 実際に行われるだろうとか、こういうこ
とになるだろうなどといった、現実感が妙に欠けていてどうにも考
えられないでいるのだ。

それは雫がこれを、どうしても現実として認識したくないのもあ

るかもしれない。

鬱々として歩いていけば雫の耳朶を聞きなれた音が打つ。それは女性の声にしては若干低めの落ち着いた声音で、雫は直ぐにそれが櫻子であると気がついた。

雫は視界を上げると櫻子を探す。

その後ろ姿だけで雫は探し人を探し当てた。艶やかな黒髪が美しい滝のように背に流れ落ちて落ちている。背面からでも相当な美しい女性だろことは分かる。

鬱屈としている気持ちだが、その背中を見た途端に吹き飛んでしまふのだから、雫も大概現金だ。

「さく……っ！」

櫻子の傍にその姿を認めた瞬間、雫の血の気が一気に下がる。

目の前で起こる出来ごとに息すら吸い込むことを忘れて魅入ってしまった。

不愉快そうに櫻子が手を払う。払われた手は千草の手だった。

どうやら櫻子へと伸ばした手を触るなど櫻子が払ったらしい様子。千草を嫌う櫻子だからこそその反応であろうと、雫は妙なところで納得してしまった。

「痛いな……一度でいいから付き合ってみようって言っただけじゃないか。食わず嫌いは良くないよ？試しでいいからどうって言うてるだけなのに。櫻子さんはどうしてそう、僕を邪険にするのかな……？」

「試しも何も無いって言うてるの。分からないの？高遠君の遊びに私は付き合えない。大体高遠君は素行不良で諸先生方から何も言われてないのがおかしいわね」

「素行不良？僕が？」

櫻子はお前以外の誰が素行不良だつて言つんだと言いたいのをぐつと堪えた。

「この間は杉田さん。その前は前崎さん。その前は沢村さんだつたわね。そもそもどうして付き合つては分かれてなんてしょっちゅう繰り返してるのかすら全然分からないし、理解出来ない。高遠君みたいに、そういう軽い男としか見られないような行動をする人間が、私は一番嫌いな。だからあり得ないつて言ってるの。おわかり？」

雫の立ち位置からでは櫻子の表情までは窺えない。けれどからかうような表情を浮かべているに違いない、そんな声音でそれは言われた。

さらりと櫻子は頬を撫でる髪を払う。払われてふわりと舞い散る黒髪の、何と艶やかなことだろうか。

雫はその光景を見て悲しくなった。

自分は悲しい結婚しか出来ないだろうと悟つたのだ。

嫌われている千草と交わされた許嫁という名の未来へ続ける契約。これはどこまでも悲しい結果しか生み出さない。

櫻子が先ほど言つた通り、千草は恋の噂が常に付きまとう、恋多き少年だつた。

それこそ刃傷沙汰にならないのが不思議なくらい、それはそれは沢山の恋をしている千草に、雫は何故か心がざわつくのだ。

それはいつからだつたか分からない。胸がざわざわと、落ち着かなくなるこの気持ちは何なのか。雫は知らない。否、それは知りたくないだけなのかもしれない。

ふいに視線を感じて雫が視線を走らせる。すると、千草がこちらを見ていた。ような気がした。

そんなはずがあるわけがないと雫は思う。けれど瞬間、目があったように感じられた雫は、思わず全身に力をこめる。

ただ、千草の場合、流石と言つていいのか悩むところではあるが、

誰と別れるときにも、一切揉めた等といったことは聞かないため、上手く分かれられているのだとは思う。

そんな千草との結婚生活は、必ず雫を不幸へと追いやるはずだ。それが怖かった。

きゅつと唇を噛みしめれば、千草の口元に笑みが広がる。

次の瞬間、千草は何を思ったのか、櫻子へ顔を寄せていくではないか。

あっと思った時には遅かった。櫻子の頬にかすめる様に口付けがされたのだ。

櫻子も黙ってされていたわけではない。雫の目の前で、乾いた音をさせて千草が顔をかばうような真似をしたからには、櫻子が千草をぶつたのだらうと知れた。

「痛っ……」

「当然でしょ、痛くしたんだから」

雫は目の前で起きたあまりの出来事に、痺れたようにして立ちつくしてしまった。

想像が現実になるのはそう遠くない未来のようだと雫は痺れた頭で考える。

家に一人ぼつねんと居る雫に、外で愛人を何人も囲う千草。一人楽しく過ごす千草に、雫は当然何も言えないだろう。

そしてそこには当然のように愛も何もない、ただ冷え切った家庭があるだけだろうと思った。

怖い、と思う。

そして、悲しい、と思った。

ただ雫は考えた。今とその悲しい未来では、どちらがマシだろうか、と。

雫は答えが出せなかった。

頬を痛い痛いと言いながら押さえる千草に雫は何も考えられなか

った。

櫻子が何かを言っているような気がするものの、最早雫の耳には届かない。無音の世界に一人、雫は居た。

「熱い……」

否、冷たいの間違いかもしれなかった。

「……私、泣いていたの？」

雫は頬を伝う涙に、この時始めて気がついたのだった。

その時雫は知らなかった。

千草が櫻子を越えて、雫をじっと見つめていたことに。

4 (そして信用と言つものすら剝奪される) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

4 (そして信用と言うものすら剥奪される)

寮生のものはいざ知らず、健達のような自宅からの通い組は毎朝遅刻しないようにと電車で通学、バスで通学にと、大変だった。

ふああと大きな欠伸を一つすると、健は首を回してぱしりと両頬を叩いて気合いを入れる。

「にしても昨日は、健惜しかったよな」

「惜しいって何が？」

未だ眠気が飛んで行かないとふわふわした思考で健は居た。

友人の言葉を耳に入れても何だか中々脳みそまで行きつかないなと思う。

健は昨夜のゲームがいけなかったかと思った。面白すぎて止まらなかったのだ。

「いや、昨日の選挙。高遠とあんま差が無かったじゃん？」

「そうかあ？」

そうでもないと思う。

昨日行われた来年度の生徒会メンバーを決めるための生徒会総選挙、こちらに健も出ていたのだが、投票数で惜しくも落選と相成っていた。

けれど健は別にそれは当然の結果と受け止めていた。残念とは思うが、これはこれでありだろうと受け止められた。

それは何故か 生徒会長と副会長に受かった生徒が素晴らしい生徒だったからに他ならない。

圧倒的大差により生徒会長になったのは降矢雫だった。これは誰もが認める好人物だ。嫌とは全く思わなかった。

尊敬もしているし、憧れてもいる。

あの降矢の家の人間があんなにも好感のもてる人間だったのかと、雫と同じ時代に生徒をやれて良かったとさえ思っていた。誇張でも何でもなく、健は本当にそう思っていた。

そして次点となったのが高遠千草だ。こちらにも何ら不満はない。自分も生徒会長、副会長、どちらかになれたならば、この六花学園のために身を粉にして働いて見せるとやる気はあった。けれど、あの二人には到底それは及ばないと思うのだ。

雫はこの学園のために、朝から夕まで常に仕事を抱え奔走していた。何を頼まれても嫌とは言わず、この学園を良くするためですと笑顔で何でも受け入れた。それが雑用であれ、大変な重労働であれ、だ。いっそあつぱれと思う。

健も時折その仕事振りを見ることがあったが、その驚くほどの処理能力に圧倒された。

そしてそれを見れば無理にでも納得せざるを得ないのだ、ああこれは、俺の出る幕ではないなど。

だからこそ健は当然と思うのだ。

雫こそが誰よりも生徒会長に向いているのだから、生徒会長になるべくしてなったのだからと。

どうせならば自分も書記等別の仕事で立候補をするべきだった。

そうすれば、雫の隣で仕事が出来ただろうに。
脇を固める千草が少々妬ましくもあつた。

「百票も差が開いてれば僅差ってほどでも無いっしょ？」

健は肩を竦める友人にどうしようもないなあと苦笑した。友人が健を立ててくれるのは嬉しいのだが、健からしてみれば千草も嫌いではないから困る。

千草は健の無二の友人だった。親友とさえ呼んでいいだろう。

まあ、千草がどう考えているか知らないが、健は勝手にそう思っ

ていた。

幼い頃から知っている親友が自分の代わりに受かってくれたのだから、それはそれでいいと思ったのだ。

健は千草がこの学園にしがみ付きたい理由を知っている。

この学園を自分の住みかとして大切に思う気持ちを千草は持っていた。

そんな千草だからこそ、相応しいかもしれない　そう思うのだ。健は自分にそんな覚悟みたいなものがあつたのかと、思いを致してみた。けれどそんなこと、考えたところで今更だろう。

頭を振って健は考えを散らすようにと口を開いた。もう二人と自分を比べ無いために、健は必死だった。惨めな思いをしたくは無かつたから。

「ところでさ、昨日出されたレポートやった？」

「ええ？俺、健に見して貰おうと思つてたんですけど?!」

「はあ!?マジかよ。俺やってねーし!うわ、やべっ。絶対間に合わねー!一限だろあれ!」

「お……お先!!」

「ちよっ!待てよ!置いてくな!」

矢のように駆けだした友人を、健は追いかけて走りだした。

健は坂を一気に駆け上がると、そのまま門扉を抜けて昇降口へと向かった。

途中何人もの知り合いにあい声をかけられたのだが、それに応える暇も惜しいとばかりに駆ける足は止めることはなかった。

挨拶もそこそこに健は走る。教室にいつて誰か　誰でもいいからレポートを写させて貰わなくてはならないからだ。

この時健は、早くせねばと気だけが急いで仕方がなかった。

だが、それは不意に阻まれてしまう。
下足入れ、そしてその前の廊下あたりにわんさかと人が集まっているのだ。

一体どうしたことだろうか。怪訝に思いながらも健は前にいる生徒に声をかけながら無理やり押し入っていく。

「ごめんなー！通して通してー！」

「あ……成瀬先輩」

「悪り、通してくんねー？」

何か言いかけたらしい後輩　と思しき少年だが、実際どうだか知れない。健も生徒会選挙に出るくらいなので、そこそこは有名人なのである。なので知らない生徒から声をかけられることは別段珍しくも無かった　に、眼前まで手刀を作り片目を瞑って謝り先に進んだ。

自分の下足入れまで辿りつくときっささと健は上履きに履き替えた。そして集まっている生徒を押し分け更に先へと進む。

事の収集をせねばならない気がしたのだ。

中心付近まで辿りつくと、声をかける。

「おーい、一体どうしたんだよ？こんな朝から集まって」

「成瀬……」

「うん？」

「こ、これなんです……」

見知った顔があつたのだが、皆押し合いへし合いとしているために、声を発して早々に埋もれてしまったようだ。

一体何をそんなに必死で皆集まってんだ？

おかしいと思った。

健も所謂おぼっちゃまといっやつだったが、自分含め周囲の人間

も相当いい家の出身なのである。その生徒がこうまで興味津津と一か所に集まり慌てふためく姿は早々ない。基本的にこの学園に居る連中は忙しく動くことをしない。のんびりとしたところがどこにある。

それがこんなにも慌てふためいて、更には押し合いへし合いの競争をしてまで何かを求めるなんてことは稀どころの騒ぎではなかった。異常、そのものだ。

一体何があったというのか。

これと言われ示されたものを目にしたのだが、何やら書面のようである。

健は首を傾げる。一体そこに何が書いてあると言うのか。

「何何、理事からの文書？」

書面を上から目で追い始めると、次第に軽口を閉じて、終いには健は言葉を無くしてしまった。

健はごくりと唾を飲み込む。

「一体、何したってんだよ……降矢さん……」

降矢雫、左記の生徒は理事会よりの決定におき、生徒会長職を剥奪するものとする。

「理由、……も、何も書いてねーけど、何だこれ？」

理事会の決定、そうなると恐らくだが何がしか それこそこの六花学園に迷惑をかけるようなことをしてしまったと考えるより他ない。

補導でもされたのか、それとも 良からぬ妄想が脳裏を駆け巡る。

「何だつてんだよこれ!!」

まさかあの降矢雫がそんなことを？と、生徒達は朝から騒然としていたわけだ。

道理でこののんびりとした学園で朝から生徒達が浮足立っているわけだった。

だがしかし、健は信じられないでいた。恐らくは他の生徒の大半もそうであろうと思う。

あの雫がそんなことをするはずがないのだ。

そして、健を苛立たせる理由は他にもあった。

その文面の最後にある、自身の名、その脇に書いてある文字が健をどうしようもなく苛立たせる。

「っんだよこれ!!」

「……これは、どういうこと?」

「どういうことも、なんもねーよ!!」

腹が立って言い返してから健は気がついた。脇にいつの間にか立っていたのは黒髪の美しい美女だった。

何であんたがここに居る?!

ぎょっとしていれば、構わず美女が健の目の前まで歩いてくる。

このままではぶつかってしまつと健が避ければ、当然のように彼女は貼り付けられた文書の目の前まで行き、そこで食い入るようにその文書を穴が開くほど見つめ始めた。

どうやらこの美女は人を避けて歩くことを知らないらしい。

愚民どもが避ければいいのよってか？

何だか釈然としないながらも健は一人ごちる。本当に一体どうなっているというのか。溜息しか出なかった。

健は周囲をちらと見回せば、どうやら皆同じようにして自ら彼女のために道を譲ったらしいと知った。

この彼女も有名は有名なのだが、健とはちょっと違う種類で有名だった。

健は気さくだがスポーツ万能で様々な部活から引つ張りだこという状況。話しかけやすく友人の数も多いという、学年に一人はいらるだろう人気者だった。そういう意味で言うなれば、千草のように女性だけには、という頭がつかないだけ健全なイメージが健にはあった。

片やこちらの美女はというと、逆に近寄りがたいイメージで有名なのである。

近寄りがたい、高貴なイメージ。侵しがたい、不可侵の美。そんな代名詞が幾つか健の耳にも入ってきている。

美女の名前は綾小路櫻子と言う名で、この学園で知らないものは恐らく居ないだろうと言うくらい有名だった。

それも、違った意味で美しいと評判の雫と並ぶと、それこそ圧巻の一言につきるのだ。

その片割れがどうしてここに？　そう健が思ったとて仕方無かった。

「さ、櫻子さん？」

恐る恐る話しかけるも櫻子は健の言葉に全く反応を示さない。

実を言えば健は櫻子に話しかけること自体そわない。

と言うよりも学部が違ったため、どうしても合わない。

ついで言うなれば学年も違うのだ。だから時折挨拶を交わす程度の間柄ではあるが、それまでだ。仲がいいか悪いかで言えば良くは

ないただけ言えた。

どうしてほとんど言葉も交わしたことのない自分の脇に立つのかと、健は心の中で櫻子に言いたくなった。

他にもなんかいるじゃん？

と言うより、普通はこういう人垣が築かれているときは、自分の知り合いを見つけてそちらへと寄っていくと思うのだ。誰だって一人は寂しいから当然と思う。

なのに、何だって俺なんだ……

ぴりぴりとした空気が辺りに漂う。

ああ、居心地が悪い、どうして俺はこんな場所に居るんだろうと、健は己が不運をひしひしと感じていたが、櫻子は健の存在自体今、認識していないようだ。

櫻子は眉根を寄せて不快そうに言い放つ。

「雫が生徒会長職を剥奪。そして生徒会長職には次点として副会長として当選していた高遠千草、空席となる副会長には、落選した成瀬健……これは一体どういうことなの？」

自分に向けて言われたわけではないらしいとは分かってはいる。

櫻子はただ聞いているだけだ。それも恐らくは理事に向けて聞いているのかもしれない。

健は呻くように言った。周囲が健にせっつくようにするから無理にでも口を開かなくてはいけなかったのだ。

お前ら自分で言えよな！！

何故か断頭台上に上るようなそんな心境の健に対し、櫻子は櫻子で死刑執行人のような裁判官のような、どこか健を断罪するような思いでもあるのか、剣呑なものを漂わせていた。

何だろうこの罰ゲーム……

健はいっそ泣きたかった。

「どっいう……ことなんでしょーねえ？」

だらだらと脂汗が滝のように流れてくる。

健はどうして事態打開なんてことを考え、こんな場所の中心にきてしまったのかと今更ながらに後悔した。

だがどうしようもない。起こったことを、してしまったことを嘆いても意味がないのだ。

櫻子は首だけ動かして健をきつと睨みつけた。

否、睨んだわけではない。ただ健を見ただけだ。

だが視線を浴びる健からすれば、その眼光の鋭さは、ただの人に睨まれる以上の鋭さがあり、針の筵のような心地がするほどに、それはそれはきついものだった。

健はぐつと喉が詰まるような感覚を覚える。首を絞められているような痛みすら感じて恐ろしくなった。

喉を思わず擦る様になると櫻子が興味が失せたとも言うのか、健から視線を外し書面へとまた向き直った。

途端、喉の詰まりのようなものが解けた。

恐らくそれほど圧迫感がある視線を向けられたのだろうが、それにしたって本当に喉を絞められたような気がしたと、健は喉を擦りながら青くなる。

「けほっ、けほっ……」

「何の騒ぎだこれは」

「……ち、千草」

「おめでとう、とでも言うべきなのかしらね？高遠君、これは一体どういうこと？」

「どういうって……櫻子さん、一体何を言ってるんだ？」

「惚けないでくれない？高遠君が知らないはずがないでしょ？雲が生徒会長職剥奪って、一体どういうことなの？きちんと説明して」

櫻子がぐるりと振り返ると、千草へと糾弾をし始めた。その姿を見れば、周囲の生徒達も何かを千草がしたのではと僅かでも疑念に駆られるのも無理はなかった。

けれど千草は一体何が何やら分からないと困惑するだけで、答えらしきものを持っていないようだ。

そうと分かれば、今度は櫻子が詰まってしまった。

何が何やら分からないといった面持ちで、櫻子は動揺を隠せないと言つように言う。

「じゃあ一体、何があつたって言うの？」

「だから、それでどういうことになってんだろ？皆わっかんねーからこんな騒ぎになってんだって！」

「まあ、でも確かに高遠君ごときがそんなこと出来る権限も何もないわけだし……」

だったら何でさっきあんな言葉言っただお前、と健は思ったが流石に口には出さなかった。また怒りを向けられては敵わなかったのだ。

健は乱暴に髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜるようにすると、面倒くさいと言いつつも、踵を返していつてしまった。咄嗟に櫻子はその背中へ声をかけようとするも、当の本人にそれは阻まれた。

「なんもめんどくさいことなんてしねーよ！つかこんなん、当人に聞けば済むこつたる？つてことで、あーもう！誰か俺のレポートどうにかしてくれよな！一限の現国！」

「現代国語なら私が得意」

「櫻子さん、僕つてばあれなんすけど。一応君より上の学年なので……」

「高等学科の現代国語だったらもう全部自習で頭の中には入ってま
す。一応大学のレベルだと教授には言われているわ。それでも不満
？」

「うっは、マジ？さっすが櫻子大先生！櫻子さんのレポート見せて
貰えるとか、何今日俺つてばついてるつてやつなんかね？」

「どこに行くの？理事会のメンバーが分かるの？」

「んー……いや、理事会にじゃないつか、当人つて言つたら他に
も居るでしょ？まあ、皆こんなんじゃ授業になんねーしさ、聞いて
くつから……降矢さんにさ？そだ、全員教室な！遅刻はまだしない
時間だけど、それでも早めに移動すること！一応俺副会長らしいか
ら、副会長めーれーな？」

健はにやりと笑つて生徒へと勧告すると、生徒達が笑顔で分かっ
たと了承の声を発した。

確かに人心を掌握するのは上手いのかもしれないと、櫻子は健を
見て感心していた。

雫が降るされたことは気に食わないが、それでも千草よりはマシ
な人物を見つけて少々ほつとしたらしい。

櫻子は靴に履き替えささと出て行くこうとしている健を捕まえると、
自分も行くつと告げた。

「私も行く！」

「うん？あー、まあいつか。確かに部外者つてほどじゃないしね。
それと、千草はどうすんの？」

健と同じく千草も繰り上げで職を持ちあげられている。それも、雫の職を剥奪した上でのことだ。だからこそ健は自分自身で聞かねば納得がいかないのもあり、聞きに行こうと考えたのだが、健と同じ理屈であれば、千草もそうなはずではと思ったのだ。

当たり前前に本人に聞きたいはずだった。

どうして職を取り上げられるようになったのか、そしてどうして自分達がそれによる繰り上げなんてことになってしまったのか、健は聞きたかった。

普通こんなことになれば、もう一度選挙になるはずだろう。と言うか過去に例を見ないことなので分からないが、そういうものだと思う。

けれど職を取り上げる、そして繰り上げで当選だと言う。

何だか、納得が全然行かないのだ。

健は何としても聞きだしてやる！そう考えていた。

けれど千草は否と言うだけで。健は何故、と思った。

「気になんねーの？」

「どうせあいつのことだ、またロクでもないことをしたんだろうさ」

「また、そういうことを言うの？」

「降矢の令嬢だからって、何をしても許されるはずがないっていうことだろ。これは。いい教訓になるじゃないか。理事会もちゃんと仕事をするって示せたんだ。違うか？例外はない。それも、一番の出資者の令嬢だからって手抜きはない、そう示せたんだ。理事会はいい仕事をしたと思うが？」

「雫がそんな問題行動、起こすはずがないでしょう?!」

櫻子が千草を大喝すると周囲の生徒達は気圧されたのか、中々去りにくいと昇降口から去らない人垣の群れが、一気に波が引いていくように消え失せた。

ぼつかりと開いた空白に、三人だけがぼつんと立ちつくす。遠巻きにこちらを見つめている生徒達に、俺も連れて言ってくれと、内心で救難信号を出すものの、誰も健を助けてはくれない。むしろご愁傷様との視線が投げかけられた。

「わああ、誰も助けてくんねーわけ？」

健は少々恨めしく思った。

友人がひらひらと対岸では手を振っている。

後であいつは締め上げようと、健は心に誓った。

「ふざけない、……で……し、雫」

「櫻子……」

真つ青な顔をした雫が、そこには居た。

「そう、ここにまで張り出したのですね。そう、そうなのね。お爺様、本気、なのです……？」

雫の真正面には今や人垣は無い。

タイミングが悪かったと言うより他ないだろう。

否、雫が来た時点で人垣はひいたかもしれない。

素行不良で理事会からその職を、任を、剥奪された生徒として、今や雫は名が知れ渡っているのだから、そんな人物の傍に、誰が寄っていくと言うのか。

雫の面には笑みすら浮かんでいた。

もうどうしようもないのだ。

賽は投げられた。もう止まらない。雫はそう悟ると、その場で笑いたくなった。

笑って笑って、そして最後に泣きだしたくなる。

けれど人前だ。それは出来ない。

笑うことも、泣くことも、怒りをあらわにすることも出来ない。栗にはそれが許されていないのだから。

降矢で最も厳しく禁じられていたことは、人前では絶対に泣くな、怒りを見せるな、心情を吐露するな。だ。

人よりそれは付け入られるからと言われ、感情を封じる様にして生活をすることを強いられてきた。

学園生活では微笑のみしか浮かべられない。

それは今なお彼女の中で生きていた。

最早それは呪縛とさえ言って差し支えないだろう。

栗は微笑を浮かべる。ただし、微笑を浮かべようとして出来なかつたらしく、強張った表情になってしまっているけれど。

正面にあるのは、昨日見せられたものと全く同じ内容が記してあった書面で、けれどそこには更に記載内容が追加してあるものがあった。

栗はそれを読んで唇を噛みしめた。

「栗、これは一体、どうということなの？」

「そういうことよ」

栗には、強張った顔でそう言うことしか、出来なかった。

気丈にもそう言い放ってはみたが、声がふるえなかったことは奇跡に等しかった。

「理事会が決定したことです。私からは何も言えません」

栗はそれだけを告げると歩き始めた。教室に向かう栗に、櫻子は慌ててついていく。

何が何やら分からないけれど、栗が沈黙をするときは必ずといっていいほど何か裏があった。

それは大抵雫の実家　降矢に関するものばかりだ。
また降矢で何かあったのかと櫻子は悟ると、腹立たしいものを感じた。

どうしてあの家は　！！

櫻子に雫は言えなかった。

否、櫻子のみならず、誰にも言えないことだろう。

千草と許嫁との関係となったために職を剥奪されたなどという馬鹿げた話、そんな話を誰に言えると言うのか。

そんな馬鹿げた理由で剥奪されたのだとは、言えなかったのだ。

それは愚かかもしれないが、雫が自身のプライドを守るためにしたことだった。

けれど、それが後々惨憺たる結果を生み出すことになるとは、この時誰も考えもしなかった。

5 (人の噂、罵倒、嘲笑) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

5（人の噂、罵倒、嘲笑）

一般の生徒もこの一連の騒動にいたる経緯を知らず、更には一般の職員及び教員に至るまでの者達も、知らされては居なかった。

事実を知るのはそれこそ、今この教室と言つ場所だけで挙げるならば、雫本人だけだった。

空気が悪いな……

いや、空気が悪いわけではない。ただ雫の居心地が悪いだけだろう。

教職員からもあれから頼られることはなくなった。と言つよりも彼らからは避けられるようになった。

ここまでできて始めて、雫は事の重大性を真に理解したと言えるだろう。

生徒会長となったにも関わらず、学園側からその資格を剥奪されるには、何かとんでもないことをしたのではないか、そう考えられることは先ず真つ先に想像が出来た。

それは宗一郎との話し合いの時にも、確かに予想していた出来ごとだった。

ただ、今まで雫が築き上げてきた様々なものがそうはさせないのでは、そう、浅はかにも考えてしまったのだ。

皆惑わされなはずだ。大丈夫、それだけのことを自分は積み上げてきた。そう雫が考えたとして仕方ないのかもしれない。

ただ、それは安易に物事を考え過ぎていただろうと言える。そも慢心していたのかもしれない。

雫は唇を噛みしめる。まだ教室だ、泣くわけには行かなかった。

「と言つわけで、今日の授業はここまでだな。それと、忘れず

に期限内にレポートを纏めて提出するように。それでは終わる」

教師は意図して教壇の目の前に席を持つ雫を無視し、誰か号令を、と告げた。

今までは自然と教壇に立つ者と目があい、号令をかけてくれと頼まれたものだ。だが今はそれすらない。

胸が痛い雫は思った。

「きりーつ。れーい」

号令は右となりの女子生徒がすることになり、間延びした声が教室に響き渡る。

礼の姿勢で深く上体を曲げたことにより、雫の肩からはらりと柔らかな髪が滑り落ちた。

どうしてこれはこんなにも明るい茶をしているのだろうか、雫はそんなことを考える。

六花学園では髪を染めることは校則で禁止されている。だからこそ雫は髪を黒へと染めることをしない。

人形のような淡い色彩を持つその頭髮に、嫌でも染めたのかと疑われ、その度に雫はこの降矢の血を持つ自身の身の上に助けられてきた。

降矢でなければ恐らくは、散々疑いをかけられて処罰を受けていたことと思う。

けれど今は、その降矢の血を持つがゆえにこんなことになっている。

悔しいと思う。

ぐっと血が滲む程に唇を噛みしめれば、雫は机の上を整理し始めた。

もうこの場には居たくない。

ただの逃げだとは分かっているが、それでも雫は今は、今だけは逃げたいと、自室にこもって一人で泣きたいと思った。

一人になりたい。それくらい許されたかった。

教科書とノートを纏めると、鞆に丁寧にしまい込む。今日は午前で授業が終わりだったので、まだ早いけれど帰宅する準備を始めた。鞆を抱けばその重さに目を見張る。石を抱いているのかと思うほどに、それはずっしりと重かった。

今まで鞆を重いと感じたこと等なかった雫は何故と思う。

けれど理由は簡単だ。雫は今まで学園生活を楽しいと感じていた。だからこそ重い荷を背負ったとしても軽々と運び、駆け続けられたのだらう。その足取りが軽かったからこそできたことだ。

だが今はその学園生活そのものが辛い。だから、気だけできていたものが、途端に失せた。軽く持ち上げられていた荷、それは今はただの重荷なってしまうのだらう。

雫はもしかしたら罪人の気持ちとはこんなものなのかもしれないと思った。

以前読んだ本に、昔の罪人について記したものがあつたのだ。

それには重い石を胸に抱き、そしてそのまま刑場まで自分の足で一歩一歩歩く罪人の姿が記してあつた。

重い石を抱いて歩く道のりの長さは死へのカウントダウンだと言ふ。何と辛い行程だらう。一歩一歩自身で自らの命を絶つ場所へと向かう、その辛さは何と表現したらいいのか……雫には分からなかった。

だが雫が今抱えている鞆は石とは違うが、似て非なるものではないかと思つた。

これは実際雫の枷であり、そして降矢郎も雫を断罪するための刑場と言えるからだ。それも降矢はじっくりねつとりと、雫の心を少しずつ蝕むためにある刑場だ。いつ心どころか身体までも殺されることになるのかと考えるだけで苦しくて息が詰まる。

降矢のその惨さに雫はいつそ笑えると思った。

降矢が何のために雫を飼っているのかは今回の一件で分かっただろう。

ただ雫の使い道を物色していたのだ。今までは。

そして今、雫の使い道が分かった。完全に決まったのだ。

嫁ぐことでしか雫の使い道はなく、そして嫁ぎ先も決まった今、恐らくはもう降矢に完全に居場所はない。

否、ある意味では嫁ぐまでは居場所を確保できたと言えるかもしれないと雫は考える。今までのように宙に浮いた存在よりは余程確実なものとして雫は受け入れられたのかもしれないと、皮肉にも思う。

見えない鎖に繋がれて、そして見た目だけは整えられて 本当はただ、降矢として恥ずかしくないだけにされている自身に笑いがこみあげてくる。

周囲は降矢だから満足に暮らせていると考えている。そして雫自身そのように振舞っている。誰にも同情なんてされたくはないから 誰も雫を救えない。巨大な降矢という組織は大きな生き物だと思う。それもあれは神話等に出てくる化けものだろう。一つの首を叩きつぶそうとも他の場所から首がずるりと生え出てくるのだ。

誰も助けられっこない。

誰も真実雫を救えない。

だからこそ雫は誰にも言えなかった。言うことが出来なかったのだ。

同情をされれば若しかしてではあるが、奇特にも雫を助けようと言う人が出てしまつかもしれない。だがそれはいけない。それは、あまりにも危険過ぎる。

だからこそ雫はひた隠しにしてきた。

降矢で可愛がられて居る様に、令嬢として蝶よ花よと育てられているように振舞い、楚々と微笑む。

だからこそこの整えられた服装に、髪にと、雫は決して手放さない。

「でも、千草は私のそんなところが気に食わない……」

ぼそりと呟いた言葉に胸が押しつぶされそうに痛んだ。

綺麗に整えられた見た目は千草のお気に召さないらしい。

そうと知りはずるものの、雫はこれを手放せない理由がある。

だから、一体これからどうすればいいのかが分からない。

学園生活も、降矢での生活も、そして、今後の千草との結婚生活をも、雫はどうしたらいいのか、どうすればいいのか、全く分からなかった。

重い鞆を胸に抱いて息をつく。

今までであれば荷物を纏めても帰ろうか、ではなく、委員会等に顔を出して仕事を貰っては動き回っていたのだが、それももうない。最近は暇を持て余しているような状況にも慣れたと、雫は苦笑した。

今まで慌ただしく仕事を見つけてはそれに取りかかっていたと言うのに、この落差は一体何だろう。

がたん 背後に席を配置されている生徒は、授業が終わると早々に席を離れて遠巻きに雫を見てはひそひそと しがない噂話でもしているらしく、微かに聞こえてくる言葉を拾ってみれば、悔しさに目じりから視界がじわりと滲んできた。

「新しい話し聞いたんだけど。実は高級クラブで内緒で働いてたっ

て……」

「高級クラブで年齢詐称して働いていたところに理事が来られたんですって。まあ降矢さんともあるう方が遊びでしょうけれどねえ。そんな、結局あれって水商売でしょう？高級クラブとは言いますが、ただの娼婦ではないですか」

「それではれたから内々で……ってこと？」

「そりゃあ言えないでしょう？理事だってそんなところに行っていたなんて公には言えませんし。そうしたらでは内緒にするからって……そういうことじゃないかしら？」

「私は近くの公立校の子達と連れだって、……とてもじゃないけれど口には出来ないようなおぞましいことをしていると聞いたけれど？」

「えー？」

周囲のまるで腫れものでも扱うような態度にも慣れた。汚物を見るような目にも、慣れた……と思う。

人とは簡単に離れていくものなのだとなり、雫は悲しくなった。

ここも最早雫の居場所ではないのだ。

私は一体、どこに身を置けばいいのかしら？

不安そうな表情を見せないで、きつと前を向く姿だけを周囲には見せる。

強くあらねばならない。

肩にしどけなくかかっていた髪を乱暴に払うと、雫は笑みを浮かべてさえみせた。

そして先ほどから雫を根も葉もない噂によって傷つけ、言葉と言う見えない力による暴力を振るう少女達の方へと自ら寄って行った人のことを面白ずくで小突きまわして何が楽しいの？

それは振るわれる力の種類こそ違えども、紛れもなく暴力そのものだった。

そして理不尽な言われように雫は負けてなるものかと思う。

ここで屈せば向こうの思い通りだ。噂を認めたも同じになる。
雫は花弁のような可愛らしい唇を開くと、小さく笑う。

「失礼しますわ、退いてくださる？扉の前で先ほどから何ですか？
山田さん、塩野さん、結城さん、須賀さん。大きな声で、はしたないですよ。一体何を話していたのですか？そんなに楽しいお話でしたら、私も是非伺いたいわ」

一人一人、じっくりと見つめていく。誰一人逃さないと、全員顔を全て覚えようとするかのように。

雫は一人一人全員顔を覚えたぞ、とでも言うように最後にもう一つ、にこりと笑みを浮かべた。

けれどその笑みは、決して好意的に相手には見えなかったはずだ。満面の笑みではある、だがその笑みの種類は狡猾な、肉食の獣を思わせる、どこか黒いものだった。

その笑みを見れば少女達は青くなった。何かされると直感でそう感じたのだ。

ただし、少女達は雫の背後の降矢を敵に回したと怯えたのだろう。雫は使いようによっては降矢は武器になるなと思った。

びくついた様子で視線だけ外すと、少女の一人はそそくさと扉の前から退いてしまう。

「あの、何でもないんです」

「そう、そうですわね。済みません。退きますわ」

「あら、お話を聞かせてはくださらないの？」

「降矢さんに聞かせるようなお話ではないの」

「ただの噂ですわ」

少女達とは踏んだ場数の数が違う。だからこうした立ち回りくらいなら幾らでも出来る自分に雫は誇らしくもあり、悲しくもあった。

雫は幼い頃から自らを守るためにと学んでいったものがあつた。それは大人たちのどろどろとした様々な駆け引きを巧みにかかわすための技であり、生き抜くための技術そのものだった。

生きるために必死だった。両親も雫の元には居ない、そして宗一郎も雫を庇護することはなかった。自らを守れるのは自分だけだ。雫が必死に学びとつたのも頷ける話しだった。

それは恐らく、守られてしかるべきで育つた令嬢達には備わっていないものだったろうし、駆け引きなんてものはそれこそ、少女達は学ぶ年齢ではないと思う。

そして、学ばずに大らかに伸びやかに、生きることが適うのであれば雫もそうして生きてきたかった。けれど現実はそのままで上手くはいかないのだ。

雫にはこれが当然であり、当たり前前で育つた。大人達の間でも発言には余程注意してしななければいけない子供だった。

今更ながらに自分と周りにいる少女達の多くは全くの別物なのだと自覚して、雫は落ち込む。

そんな中、そそくさと扉の前を明け渡した少女達のうち一人が、未だ血色が元通りには戻っていないが、果敢にも雫へと挑んできた。どうしてと雫の前へと進み出てきた少女は山田だ。昔から雫と何かと張り合ってくる少女で、雫はその度全力で向き合ってきたが、今回のようなことになって始めてこういった絡まれ方をしたなと思つた。

山田はどこか笑みが強張っているが、挑戦的に笑いながら言ってきた。

「どうして教えて差し上げないの？降矢さんに関するお話なのに」「ちよ、ちよつと、山田さん」

言えるわけがないと少女達は俯いてしまふ。

けれど知つたことではないと山田は続ける。ただ、その口元には

苛立たしいとありありと見えた。

少女達がついてくるのが当然と思っていたのか、山田は悔しそうに口元を一瞬ゆがめる。

けれどついてこないものは仕方ない。

山田は大きく身振り手振りを作って言うのだ。大仰に、厭らしく。雫は嫣然と微笑んだまま表情を崩さない。だが内心では大いに冷や汗をかかされていた。

何を言うつつもりなのだろう。

「降矢さんが理事会から煙たがられている理由をお話していたんですよ、私達。ねえ、そうでしょう?」

「い、いえ……」

「そんな、ええと……」

少女達は齒切れ悪い。

どうしても山田は先ほどまで話していた少女達を巻き込みたくて堪らないらしい。だが少女達からしてみればいい迷惑だ。巻き込まれて降矢から目をつけられては堪らないと、必死に雫からだけでなく、山田からも視線を外し、逃れる様に少しずつ距離を置こうとする。

山田は顔色を次第に変えていった。青から次第に赤へ。しまいは黒く変わろうとしている。

そんな山田を見ていて恐ろしいと、雫は視線を外したくなった。醜いと思ったのだ。

けれど視線を外せない。それは負けたも同然になってしまっただ。だ。

「そう、そうなの。貴方達が言えないなら私が言ってあげる。降矢雫さんは」

破れかぶれの行動なのか、山田はどす黒く染まった顔を歪な笑みで彩ると、勝ち誇ったように口を開いた。

少女達の声が無くとも続ける気なのか。山田は言えない、少女達の代わりにお優しくも代弁してあげようと、そういつつもりらしかった。

臍をかむ思いがする。

雫は手が出すことが敵わない状況に、どうすべきかと思案を巡らす。

そんな時、山田の背後の扉ががらりと開いた。

「雫、お昼御飯、中庭で食べない？」

「櫻子……」

正直、助かったと思った。

狙っていたのかと思えるようなタイミングで入ってきた櫻子に、安堵の息を漏らすと、雫は山田に微笑む。

その目はまだ続けるつもりか、と言っていた。

「降矢雫さんは！聞いて！聞いてください！高級クラブです」

「ねえ、山田さん。貴方の話し、とても面白くて……私、ずっと廊下で聞いていたの」

櫻子に聞かれていた？

雫は一瞬青くなる。こんな風に教室で扱われていると知れば、この心優しい友人は、雫のために何かしようとするに決まっているからだ。

どうしよう、迷惑をかけてしまうかもしれない。雫は思わず手にした鞆の取っ手を強く握りしめた。

「けれどおかしいわねえ？高級クラブで楽しそうに微笑んでいるのは、山田さんの方じゃない？この間さる筋から頂いた写真に写っているの……これ、貴方じゃないの？」

ぴらりと櫻子は一枚の写真を山田へと見せつけた。
そこには派手な化粧をした若い女が写り込んでいる。

「なっ！こ、これは……どこで貴方これを！」

櫻子はくすくすと笑みを零す。

「ってことは、認めるんだ？」

山田は顔を青ざめると、次の瞬間真っ赤に顔色を染め上げて喚き散らす。

「そんなバカなこと！そんな、そんな……娼婦の真似事を私がするはずがありませんわ！」

「あらあら、おかしいわねー？これ、さる筋って言ったけれど、実は学年主任の教授からちよっと拝借したのよ」

ちよっと拝借と聞いて雫はぎょっとした。何て事してるの貴方？！と叫びたかったが声が出ない。

「後で貴方、呼び出しを食らうわね。そこでもそんなこと言えるのかしら？証拠も写真以外にもあるみたいだけど？」

からからと笑われれば、山田は顔色を無くしていった。

何て事をしてしまったのだろうか、唇を震わせてこの世の終わ

りでも言いたげな風情を醸し出していた。だがそれは今更だろう。

「そ……そんなはず……だって、ほんとお遊びですよ？だ、だって」

「遊びだったから許してください？都合がいい言い訳ね」

「だって本当ですもの！ちょっとお話をするだけでいいって、それだけでいい簡単なお仕事ですって誘われたんですもの！」

「へへ、誰に？まさか道で殿方に声でもかけられた、とか？」

「そ、そうよ！だから私は悪くないわ！だって……ただ、体験入店って…… たった一週間いただけじゃない！それなのに、そんなの酷過ぎる！どうしよう、どうしよう、私、退学処分にもなるのかしら？お、お父様になんて言われるか……あの殿方についていかなければ、こんなことには……」

キャッチだ。何て事なのと雫は頭を抱えなくなった。

そして簡単に引っ掛かる山田に対しても馬鹿かと言いたくはあるが、声をかけるほうもかけるほうである。どう見つくろっても山田は高校生でしかなく、大学生くらいには見えない。どうしてそのような年端もいかな少女に声をかけたのか。

雫と山田を取り囲んでいたクラスメート達にわかになざわつき始めた。

櫻子を止めなくては、と思うものの、櫻子は自然な動作で雫の顔を陣取って山田と話しているため、それこそ可也強引に割って入らないといけない。

だが、櫻子は割って入らせるつもりはないのか、雫の鞆にかけられた手に手を重ねて押し留めるようにしている。

ここで割って入れば、櫻子の気づかいを無下にすることになる。けれどこのままでは山田が取り返しがつかないことになる。

雫はぐるぐると考え込む。答えは出ない。

どちらも雫にとっては大切なものだ。

櫻子は無二の親友であり、山田はクラスメートだ。どちらも切れない。

私はどう動けばいいんだろう？ 雫は未だ答えが出せない。

「馬鹿ねえ。でもその殿方もとんだ拾いものをしたものね。こんな馬鹿な子に声をかけて……ねえ？」

「馬鹿とは何です?! あるうことか私を捕まえてそんな言葉……」

「馬鹿は馬鹿でしょう? この写真、学年主任からじゃなくて、本当は私が個人的に手に入れたものだから、学園側は全く知らないのになのに上手いこと全部話してくれるんだから呆れるわ」

「なっ!!」

「だから馬鹿って言ってるの。さ、雫行きましょう? 私お腹が減ったわ」

そこまで言うつと櫻子は強引に雫の手を引いて扉をまたぐつて出て行くとする。

わなわなと肩を震わせる山田に、櫻子は思い出したように告げた。

「そうそう、もう雫に無理に張り合おうとするの、止めてくれない? 見ていて貴方、目ざわりなの」

そこまで告げると後はもう用はないと、櫻子は雫を引きずるようにして去って行った。

後に残された山田の瞳は、ぬらぬらと赤く濡れていた。

その瞳に宿るのは今や狂気そのものだった。

「降矢雫……綾小路櫻子……絶対に、あんた達は許さない……」

6 (許嫁がお引越し?そして父帰還) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

6 (許嫁がお引越し?そして父帰還)

「またそんな重箱なんて持ってきて……そんなによくお腹に入るわね。感心します」

自身の教室に戻ると、櫻子は重箱を用意し始める。櫻子は細身ですらりとした美しい身なりをしているが、これできて呆れた大食漢なのだ。

恐ろしいほどよく食べる櫻子に、毎回呆れるほどなのだが、彼女いわく「まだ育ちざかりだから」なそうなので、食べるのを止めることは出来なかった。

一度「もう駄目よ」と雫が取り上げたブリオツシュに、今にも世を儚んで自殺でもしかねない程に顔色を変えられた時にはこれは駄目だと悟ったものだ。

食べることを止めると言われれば、櫻子は恐らく命を経つに違いないと思ったのだ。大げさでも誇張でもなくだ。それほどまでに彼女の食に対する執着は強かった。

「今日は雫の好きなものも入れてきたのよ。天気もいいし、行きましょ?」

強引に手を取られそうになったが、雫はすいとその伸ばされた手から逃れる。

「……雫」

「あの、これは違う……うっん、ごめんなさい。でも、一緒に居ない方が、いいから」

「さっきのこと?あんなの気にしなくていいわ」

「うっん。そうじゃなくて。他にも噂が飛び交っているのは知って

るし、一緒に居たら、櫻子の迷惑になります……」
「そういうのなしにしてくれる？私は好きで雫の隣にいるし、それを例え、雫本人からだろうと隣にいることが迷惑になるだなんて言われたくないわ。勝手に決めないで。迷惑か迷惑じゃないかなんて自分で決めるわ」

きつぱりと言い放たれば胸が塞がれる思いがした。

雫は良かれと思ひ友人を遠ざけようとしたが、それは相手からしてみたら全くのお門違いだと言うことか。

私が間違っていたの……？

雫は戸惑いを隠しきれないでいた。

そんな雫を見ながら凜とした華やかさを持って櫻子は言い放つ。

「それにね、私も山田さんを前にあんな大立ち回りをしたんだから、もう巻き込まれてると思うわ」

「あの、うん……それは……ごめんなさい」

「さつきからそればかりね。それとも、雫は私が友達だって言うてるの、嫌なの？」

「嫌なわけがありません！ただ、巻き込みたくなくて……！」

「なら、もう巻き込まれてしまったのだから、遠ざけるなんて馬鹿なこと、しないで欲しいわね」

雫は言葉に詰まった。

何を言えばいいのかは分かっている。分かっているのだ。櫻子の優しさに甘えて、ただ有難うと受け取ればいいのだ。だがそれがどんな結果を招くか、それを想像するだけで雫は怖くなった。口さがない噂を、櫻子までもされてしまったら？自分だけならば良かった。なのにこれで櫻子までされたらと思うと怖い。

雫は自らの思考に呪縛され、完全に身動きが取れなくなってしまう。

それに気づけばしようがない子だとも言うように櫻子は苦笑いを浮かべると、そつと雫の頬まで手を伸ばしてくる。

そのままそうつと頬を撫であげ、輪郭線をなぞる様にして柔らかな髪をかきあげた。そうすると雫の形のよい面輪が剥き出しになる。

「櫻子……?」

「雫。私は貴方に幸せになって欲しいだけ。だから私は全力で貴方を守るの。貴方に嫌われても、蔑まれても、私は絶対にそれだけは曲げない。貴方に一度救われた命だもの、貴方のために使いつて、私が私自身で決めたのよ。だから私を遠ざけようとししないで。お願いだから、傍に居させて頂戴?」

「救われたって……」

雫は困惑する。

私が櫻子を一度救った?いつ?どこで?

分からない、そんなことは雫の記憶になかった。

雫は真摯な眼差しを向けてくる櫻子の瞳を受け切れないでそつと瞼を伏せた。

胸が苦しい。いや、熱いのだ。

唐突にわんわんと頭の奥が鳴り響く。

一体何だ、これは何だ。

雫は頬に添えられた手の暖かさを感じながらも、頭の中で鳴り響く音と胸の熱さに自分の今居る場所を見失いかける。

前にも一度こんな時があった?

前にも一度こんな時があった。妙な既視感を感じる。

そうだ、前にもこうして手を伸ばされて、髪をかきあげられて、そして頬に温かい熱があった。

そしてあの声があった。

『泣かないで。大丈夫。絶対助かるよ』

あの声は一体誰が発したものだっただ?

雫は耳を塞ぐようにして耳に手を押し当てて。胸が熱くて熱くて堪らなかった。

「熱っいい……」

「雫? 雫、ねえ、雫?!」

雫が胸を押さえて呻けば、櫻子が咄嗟にその小さな身体を支えた。今にも雫は倒れてしまいそうな顔色をしていたのだ。

自分が悪いのかと櫻子は青くなる。何か自分の言葉が雫へと変調をきたすきつかけとなってしまうたのか。一体どうすればいい? その場で支えるより他になく、櫻子は強く強く雫を抱きしめた。

「雫! 雫!」

あれはいつ、どこで、一体何があつたの?

目の前に瓦礫の山が築かれて、轟々と火が燃え盛っていた。

『痛い、痛い……痛い……』

『大丈夫、絶対に助けが来るから、だから泣かないで』

『……う、うん』

そうだ、その時瓦礫が崩れてきて　そして頬に熱くてぬるぬるとしたものが降りかかってきた。

『あ、あ……ああ……』

『怪我……ない?』

大好きな大好きな人だった。そのお腹に、肩に、大きな裂傷が生まれていた。

たった一瞬のことだったのに、一体何がどうなったのか分からず混乱した。

そして庇われたらしいと知れば、気づけば獣のような咆哮を上げていた。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！死なないで！

強い願いを胸にした。

次の瞬間、かっと眩い光が目の前に現れたかと思うと、燃え盛っていたはずの火は一つ残らず消え失せ、瓦礫の山は、塵と消え失せていた。

それこそ、怪異である。

『やだ、やだよ……しんじややだ……』

えづきながら言つても、もう相手の息はほとんど無い。

「しづくー！…」

はっとした。

ここは、一体？

「顔色が真っ青よ？何か私、いけないことを言ったみたいね。ごめんなさい」

「え、さくらんじゅ……」

辺りを見渡ししてみれば、教室のようだ。
だが自分の席の場所には見た事も無い小物が置いてある。思わず首を傾げれば櫻子から言われた。

「私の教室。さっきのままよ。雫、大丈夫？体調悪いの？」

「……………そう、なのかもしれません」

「帰る？」

「うん……………ごめんなさい、櫻子。お弁当用意してくれたのに」

「いいのよ。頑張れば一人で食べきれないことないし。無駄にはならないわ」

一人でその分量を食べるのかと呆れを通り越してもう、どうにでもすればいいと雫は思った。

ただ、一つだけ言っておきたいことがある。

「食べ過ぎで太ったら友達は解消しますね」

「え?!太ったら駄目なの?!」

「太りたいんですか?!」

体調を崩すほど食べ過ぎることを禁止するつもりで言ったのだが、まさかの反応が返ってきて更に頭が痛くなる。

最終的には結局、櫻子が健康のために運動量を増やすことで決着がたった。

櫻子の食に対する思いは業のように深く、どこまでも重かった。

一気に住みにくくなる学園の中　けれど雫はもうすぐそれも終わる、何とかなると考えていた。

終わりが見えてきたと信じることに、ただそれだけが絶縁^{よすが}だった。

誰か助けて。助けて欲しい。

強く強くそう願う。

父が、母が、帰ってきてくれるはずだと信じていた。

二人が帰ってきてくれたならば、宗一郎に異議を唱えてくれるかもしれない。そう思い歯を食いしばって雫は何とかその場に踏みとどまり続けていた。

今逃げれば自分で全てを認めることになってしまう。

それは嘘も、真も、全てだ。

それだけは嫌だった。

「お父様、お母様……早く帰ってきてください」

雫は帰りの車内で小さな声で呟いた。

その声は、室内の空気の中に、儚く溶けて消えた。

上手くいかない時と言うものは、万事が万事、全て上手くいかないらしい。

降矢邸へと戻れば一体これは何の騒ぎだと雫は先ず驚愕することになった。

家具が業者の者によって運び込まれ、降矢邸の門扉を潜り中へと入れられて行くのだ。

一体誰のための家具なのか。

まさかお父様とお母様が向こうで買った品、とか？

海外へと出かけているはずの両親が、戻りしな先に寄越したもの

かとも考えた。

けれど、良く見てみればこちらでも手に入るような品が多い。否、こちらで手に入るような品以外無い。

では、一体誰の物なのかと思った。

降矢の屋敷の住人が住む部屋、使用人の住む部屋、そして大事なゲストを通すための部屋　そのどれもに全て家具は配置されている。そしてそれは全て取り換える必要の感じられないまでに、手入れの行きとどいた磨き抜かれた家具ばかりである。

そう、全くと言っていいほどにそれらは老朽化をしていない。

その変える必要がない家具だらけの降矢邸に何故、こんなにも大量の家具が運びこまれていくのか。

まるで、人が一人、引越してくるような量だと思った途端、雫は駆けだした。

気持ち悪い、吐き気がする。嫌な予感がするのだ。

否、嫌な予感なんてものじゃない、頭の中で警鐘が鳴り響いていた。これは直感だ。何かが起ころうとしているという直感がするのだ。

雫は駆けた。

途中雫を制止する声が聞こえたのと、使用人の一人　恐らく執事かと思う　が「はしたない」と口にしたのが聞こえたような気がするが、構ってなんていらなかった。

雫は業者の者が上がっていく豪華な階段を階下から見上げると、どうやら家具は二階か三階の住人が住むプライヴェートルームへと設置されるらしい。

「誰？もしかして兄様達が戻ってくるの？」

両親ではないのであれば、では兄か？そう考えるものの、雫は直ぐにその考えを頭の中で打ち消した。

いいや、兄二人の部屋も専用の家具がある。それも壁紙や間取り

に合わせられた家具はオーダーメイドで作られた一点ものだ。あれを新しくするなんてことはそうそうないだろう。それこそあの二人が今よりも、もっと気に入った家具を見つけない限りはあり得ないことだった。

こういつた豪華な屋敷は通常、一階がゲストルームとなり、二階以上が住人の住まうところとなる。

そして奥塔等、本邸とは別に作られた別邸のようなものを使用人だけの住みかがあることもあるのだが、降矢邸はまさしくそれだった。

この降矢邸はとても豪華で煌びやかな屋敷である。

それこそ住人は使用人含め、数十人が暮らせることのできる場所として作られているのである。

その二階、降矢の住人が住まう場所へと運び込まれる真新しい家具に寒気がする。

真新しい家具はアンティークのような、どこか古びたものにありがちな怖さ。雫がそう感じるだけかもしれないが、といったものはない。寒々しい恐ろしさなんて有り得ないはずだと言うのに、何故か嫌な予感が拭えない。

新しく美しい豪華な家具。だと言うのに、どうしてこんなにもどこか禍禍しい気配がするのか。

雫は階段を見上げると運び込まれる家具の行方を目で追った。

「左……」

ここ降矢邸は、左右対称に作られた大きな屋敷である。

大扉を潜り抜けると正面に大ホールがあり、その先には豪華な階段が構えているのだ。

階段を上がると踊り場には今は亡き祖母の美しい姿が肖像として飾られている。

祖母の肖像から右には宗一郎と兄達の部屋があった。後は控えと

して執事と侍従が待機する部屋、それと宗一郎の執務室がある。

後は何に使われているか分からない部屋が幾つかあるが入ることは制限されているため、雫は見ようとすら思わなかった。制限されるということは、雫にはそれを見る資格がないからだ。

資格を持たないものは宗一郎の言葉に逆らえば罰を食らう。それが恐ろしい。飼い慣らされたものの思考だとは思うが雫はそれに気付かなかった。

肖像から左には雫の部屋、そして両親、その侍従たる四名の居とする部屋が点在している。

後は幾つか空き部屋があるが、住人が増えた時用にと空けてある部屋である。

「もしかして、誰か空き部屋にでも、来るの？」

何故か唇が震えだす。

何を怖がっているのだろうか。ただ、誰かが引越してくるらしいというだけなのに。

否、そうではない。それが好ましい誰かではないと、頭の隅のどこかでは分かっているのだ。

雫の指にかかる力が抜け、するりとそのほっすりとした指先から靴の取つてが落ちていく。

ばさっ、たす……

音を立てて靴が落ちて漸く我に返った。

確かめなくては。一体これはどういうことなのか、確かめなくてはならない。

雫は足を踏み出した。否、踏み出すことが出来なかった。雫の背後より声がかかったのだ。

「どづいうことだ、これは」

「どづいうことって……どうして貴方がここに居るの？千草……」

身体の震えが治まらない。

雫が振り返ればそこには、不機嫌極まりない顔をして千草が居た。

「宗一郎氏が俺に今日からここに住むように言ってきた」

「今日、から？」

どこまでも冷たい視線を浴びせかけられ、睨み据えられる雫の顔は真っ青だ。

唇の赤さだけが異様にうつるほどに、顔面だけが今では青く、そして白くなっていた。

嫌な予感しかしない。

千草が不機嫌なのは決して雫の所為ではないはずだ。だと言うのに雫はいつだって千草の前に立てば自分が悪い気がしてしまう。

「後、こうも言われた お前と俺は、許嫁なんだって？」

「……し、知らない！私知らないわ！」

知りたくもなかった。

宗一郎と千草が何かを話した。そしてこの家具が運び込まれていく様。とすれば否応なく考えなくてはならないことは山とあった。けれど知りたくはない。恐ろしい。

嫌嫌と雫は首を横に振ると自らの耳を塞ごうとする。けれど千草はそれを許そうとはしなかった。当事者の一人はお前もなんだ、良く聞けと大喝すると雫の手を無理やり取って耳を塞がせまいとすると、怒りをあらわにして言うのだ。

「お前が知らないはずがないだろう！？知らされないでいいはずがないだろう？！ お前と俺は許嫁で、その上俺は今日からここに住むように親父と宗一郎氏から言われて来たんだ！それも、お前の

部屋に近い場所に部屋を取るって？一体どういうことなんだよ！答えろ！」

「し、知らない！知らない！知らないの！私は、わたくし、は……」

千草は普段の取り繕った表情も、飾った言葉も全てかなぐり捨てて雫へと詰め寄る。

「知らない知らないじゃない！知らないんなら聞けよ！俺とお前が許嫁なんだ！これから俺はここで暮らすんだよ！それも、これからずっとだ！降矢に婿養子として入るんだとさ！おい、聞いているのか！？聞けよ！聞けって言ってるんだよ！」

ひゅつと風切り音がした。咄嗟に殴られると雫は思い、ぎゅつと目を瞑ると、きたる衝撃に備える。が、男性から振るわれる暴力と言つものが雫の記憶を揺す振った。

「いやあつ！！」

「おい！止める！！」

ぱしつと音がするものの、いつになつても衝撃は来なかった。

雫は恐る恐る目を開けてみた。するとそこには大きな影が出来ていた。

「お、お父様……？」

「ただいま、雫。それと、君は誰なのかな？雫の許嫁さんとやら。僕は君のことなんてちーつとも知らないんだけど、ねえ、君は誰？どうして僕の娘に暴力をふるってるのかな？」

「お前の、父親？これが？」

千草は驚きに目を見張っていた。有り得ないものでも見たような、そんな表情をしている千草に、雫の父はへらりと笑いながら言う。その笑みはどこまでも邪気のない、無害そのものな笑みだった。口調も声も、どこもかしこも降矢の人間に相応しいとは思えない。それが雫の父と出会ったばかりの千草が覚えた第一印象だった。けれどそれは、直ぐにも訂正しなければならなくなった。

「これ？ああ……君は羨が出来ていないガキなのか。なるほどなるほど。どうせ降矢うぶに婿に来るわけだし、ちよūdい。何事も早め早めが肝心だ。君には教育が必要なようだね……」
「なっ……！」

羨が出来ていない子供と言われれば千草はかつとなる。

確かに先ほどの雫に対する行動も、発言も、そして今の雫の父に対する発言でさえも外ですることは許されるものではない。

雫にはしてもいいが、雫の父にしてもいいものではないだろう。そう考えると千草は、早々に謝罪をしようとする。癩に障るがこれでの場所も放りだされたならば六花学園の寮からも追い出されて千草には行くあてがなくなってしまう。

宗一郎に手抜きりはなく、寮からは早々に退去させられてしまったため、本当にここしか彼には居場所が無いのだ。

だから、今この家の住人の不興を買うわけにはいかない。

千草が先ほどの無礼は、と言おうとしたところで辺りの空気が一変する。

すると、雫の顔色が変わった。

「お父様！駄目っ！千草にそんなことしないで！」

「置きだ、受け取れ……」

「なんっ……ぐあっ！」

千草は首をぐつと締め付けられてそのまま吊られるように持ち上げられた。

何と言う力だ。千草は呻いた。

千草の身長は平均的な男子の身長よりは幾らか高い方だ。そのお陰というわけではないが、体重もそこそこはある。

確かに雫の父である目の前の男よりは千草の方が多少低い。とはいえ筋肉なんて隆々としているようには見えなかった。

引き締まった体軀をしてはいる。けれどそれだけだ。細身であることは違いないはずなのに。何て力なんだ！

苦しさに呻くも一向に力は弱まらない。息が吸えずにいれば、更に千草は上へと持ち上げられた。

「お父様！お父様止めて！千草が死んでしまっ！駄目！」

耳にきちんと声が聞こえてくるがそれはどこがおかしかった。

千草は口端に溜まる唾液を呑み込むことも出来なくなった。視界が霞むのを自覚すれば、拙いと思うが足をばたつかせても、もう地につま先すらつかないのだ。

懸命に首を動かし雫の叫び声がする方を見て、千草は驚愕した。

「浮いて……る？」

「そうだよ少年、君は今俺が浮かせている。君の首を掴み上げてそのまま浮かせるなんて俺には簡単なことだ。だからね、君の命を奪うのも、とても簡単なことなんだよ」

千草の口端から泡が涎を引いて滴り落ちていく。

淡々とした声で言われれば否応なしに理解する。

この男が自分を殺そうとすれば、いともたやすく殺すことが出来るだろうと。そして自分の命にはそれほどの価値しかこの男にはないのだ。

千草は悟ると全身が震えだすのを感じた。
それはまごうことなき恐怖だった。

「自己紹介がまだだったね。俺の名前は六花神義経。この家に君を
歓迎しよう。精々宗一郎さんの顔色を窺いながら暮らすといい」

人ならざるものとして、圧倒的な力を揮った雫の父と呼ばれる男
に、千草は得体のしれない恐怖を感じた。

けれどこれはまだ序章に過ぎなかった。

六花神に連なる数奇な運命に翻弄されていく少女と少年達の、数
奇な運命のほんの序章に過ぎなかったのだ。

7 (祖父と父) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

7 (祖父と父)

いつだって父は雫のことを第一に考えてくれた。

むかがみに縛らず、むかがみに縛られず、ただ普通の真つ当な暮らしをさせてあげたいと言われれば、頼られない寂しさもあつたが、そこには我が子へと向ける愛があつた。だから純粹に嬉しかった。けれど、そのむかがみの力をこうして見せつけられてしまえば、どうして父はむかがみなのかとも思う。

そして雫はどうしてむかがみになれないのかとも思うのだ。

雫が止めてと言っても雫の父である男は千草を甚振るのを止めようとはしない。ぎりぎりと言われれば首を視えない手で締め上げ、中空で吊り下げられてしまえば誰も手出しが出来ない。

「お父様！お父様！千草を殺さないで！千草を殺さないで！！」
無力であることが、こんなにも悲しい思いをしなければならぬことならば、雫は力が欲しいと思う。

大好きな父を止めなければならぬのに、無力な自分には何も出来ない。出来ることと言えば縋って止めてくれと請うだけだ。

空に浮いた千草の足のばたつきも治まった。このままでは本当に

！！

雫は男の腕に縋りついて駄目だと言う。

「千草を　お、お父様を人殺しになんて、したくないっ！」

涙がぼろぼろと溢れて止まらなかった。雫はただ悲しかった。止めてと何度言つたかしのれない。なのに父は止めようとしなかった。理由は恐らくは自分のためだと分かっている。けれど、雫は悲しかった。自分のために犯される罪、それは何と重苦しい重責なのか。そしてそれは、また自身の無力に泣くことを指すのだ。

もう沢山だ。無力に泣くのは。

お願い、誰か、誰でもいいから助けて！

「うつ、うつ……うつ、ひつく」

「おら、そこまでだバーカッ」

「ごっ 鈍い音がした。かと思えばこの場に何とも不釣り合いな口調が聞こえたではないか。一体誰だと雫は思考を巡らせてみれば、該当する一名へと直ぐに思い至った。

この声は ！

ばつと雫は面を上げると嬉しさに今度は涙した。

「鷺宮さん！」

「おう！お嬢、元気してたか？」

「はいっ！」

先ほどの鈍い音をさせたのはどうやら鷺宮だったようで「痛いんだけど」。鷺宮ったらひーっどー。もうちょくっどでいいから加減くらいしてくんないと、僕の頭が凹んじやったらどうするつもりなの？酷くない？行き成り暴力とかさいってー。これだから最近のおっさんはさー……。」と、音の元となったらしい頭を擦る男は、ぶすくれていた。

どうやら男を鷺宮が殴った音だったようだ。

強か殴られた頭が痛むように頭を擦る様にして唇を尖らせる。

「おっさん二号が何言ってるんだ馬鹿」

「鷺宮程僕は見た目がおっさんじゃないからいいんだよー？」

へらへらと笑って男は言った。

その笑みに毒気を抜かれたようになれば雫はほつと息をつく。漸く男が雫の知った父に戻ってくれたと安心したのだ。

けれど、そうして男が戻れば、今度は未だ虚空の檻に捕まえられた状態の千草が気になった。

慌てて男の手を引いて降ろしてと言うが、男はまたもや機嫌を悪くして言うのだ。

「僕この子嫌いだからなあ、どうしよっかな」

「お父様！お父様お願いです！」

「義経……降ろしてやれ。大体、吊りあげてんのは余所の坊っちゃん

んじゃないのか？つつか、ちつとばかり拙いんじゃないか？勝手に六花神の名乗りもしちまったみてーだし」

「ああ……僕の雫にあんまりにも酷い扱いをしてくれたから、歯止めがきかなくなつてさ？まあいいや、もう抵抗もなくてつまんないし。鷺宮にあげる」

「え……つて、おうわっ！」

鷺宮と呼ばれた男の上に、見えない手に首を掴まれ宙にぶら下げられていた千草は、不意に掴まれていた襟を離されてもしたのか、途端、重力に従い真下へと落下してきた。

あわやといったところで鷺宮が千草を抱きとめれば、そこにはぐつたりとした千草が居て 雫は真つ青になった。

「きゃ、きゃあああああっ！！！」

「あーあ、やり過ぎちゃったかな？」

「……いや、義経にしちゃあ上出来だろう。まだ普通に呼吸もあるしな。偉い偉い」

鷺宮の発言に雫は思わず男 義経を見やった。義経はにこやかにその視線を受けると「どうかした？」と言うだけだ。

「い……いつもはどうしているんですか？」

「何が？」

「千草みたいなの、人を……」

何と言えばいいか分からず言葉が尻すぼみになっていけば、ああと義経はぼんと手を打ち口を開く。

「僕の物に手を出したら次はないよ？つて、言つてもどうせ分からないだろうから身体に分かるまで刻みつけるよ？」

真つ青になる雫を見ても義経はどこ吹く風だ。

「お前の父親に道徳心や倫理観なんて説いたつて無駄だ。それくらい分かるだろ？」

「分かりません！」

分かりたくも無かった。そんなこと今まで知らなかったし、父であつた時間はいつだつて義経は優しかったのだ。

ただ、むかがみの力を見せてもらった時はあった。けれどこんな風に豹変する瞬間を見たことが無かった雫にこれは刺激が強すぎたのだ。

「ま、力を込め過ぎて娘のところに来た始めてのボーイフレンドをくびり殺しそうになるくらいには、お前の父親は凶悪だ。それさえ知ってれば問題ない」

真顔でそう言われても全然全く安心なんて出来るわけがなかった。問題なんて大有りじゃないですか！ 雫はそう口にしたかったが出来なかった。

そんな中、千草は鷺宮の腕の中で、完全に意識を伸びていた。ある意味では、それはそれは幸せそうな寝顔に見えた。こんな風に周りで「ではこいつをどう調理してくれようか」と、化け物どもが自分をにやつきながら眺めているのを知らないで、ただ全身の力を抜いて寝ていられたのだから。

今後のことを考えると、助けがきてくれたと喜ぶべきか、それとも千草を殺されはしないかと気を揉むべきかと大いに悩んだ。

勿論それは、雫ただ一人の悩みであったが。

どうしよう、どうしようと唸る雫の脇では、じつと雫を見つめる二人が居た。

義経と鷺宮の瞳がきらりと物騒な光を湛えた瞬間を、雫は見逃してしまっただのだ。

+++

雫の生活圏内を、学園だけでは飽き足らず、降矢邸までをも侵し始めた今の現状は、義経からしても噴飯ものだったらしい。

表情だけは何とも言えない、人の良さそうな笑みを終始浮かべているが、それでも宗一郎を見つめる視線の厳しさはそんなものでは

打ち消すことの出来ないものだった。

ただしそれも、相手に届けば効果がありそうなものではあるが、宗一郎は義経を見ようとすらしなかった。どころか黄金で象嵌された豪華な長椅子にどっかりと腰かけている息子に、宗一郎は視線すら合わせることもせず黙々と執務に励んでいたのだ。

積み上げられた紙面に目を通し、さらさらと筆を走らせていく。すると「ピピピ」と電子音が聞こえてきたが宗一郎はそれにすら反応しなかった。

代わりに彫像のように大人しく宗一郎の脇に控えていた羽山がすっと動いた。電子音を発していた正体である、小さな機械へと手を伸ばしたのだ。それは小さなディスプレイのついたポータブルテレビのようだった。

ぶちり 小さな音をさせると、ディスプレイに壮年の男性の姿が写り込む。

「誰だ」

「岸本様で御座います」

羽山からの答えを聞けば宗一郎はディスプレイに一瞥をくれて端的に告げた。

「済まんが今来客中だ。こちらからかけ直す」

「ああ、申し訳ありません降矢様。いいえ、こちらからかけ直させていただきます。そうですね……一時間程しましたらこちらからかけても宜しゅうございませうか？」

「……羽山」

名を呼ばれば羽山は宗一郎の脇に控えたまま、宗一郎のスケジュールをつらつらと告げ始めた。どうやらこれから二時間は身体に空きが無いようだ。

「二時間後になりそうだ。どうにも間が悪い。矢張りこちらからかけ直そう。岸本、そちらはこれから出かけるかね？」

「ああ……そうですね。これから出かけてしまいますが、二時間後と言ったことでしたらまたこちらへ戻ってくることも出来ます」

「では車内電話にかけることとする」

「申し訳ありません。では、お手数をおかけしてしまいましたが、宜しくお願い致します」

「いや、こちらこそ済まん。ではまた……」

ぶちり……

義経は長椅子から起きあがると、つかつかと宗一郎の元まで歩いて行き、そのままうず高く積まれた書類の山に手を伸ばした。そのうちの一枚を手にとると、「手伝うことある？」と何とも気軽に尋ねたものだが、宗一郎は黙したままに答えない。

「つれないのー。ったくさ、最近降矢の方を全然手伝って無かったからってそんなに怒ることないでしょが」

「……」

幾分筆圧が強くなったようで、宗一郎の手元にある紙面が歪んだような気がする。まあ、それも僅か歪んだ程度なので気になるほどでもないのだが。

それを見てしまったらしい羽山が必死に平静を装っているが、顔色が悪いのは丸わかりだった。すわ旦那様のご立腹か！？と、気が無い様子だ。宗一郎の怒りが相当怖いと見えて羽山は脂汗すらひっそりとかいてるようだ。

そんな羽山のことを知ってか知らずか、義経は宗一郎の背後まで回ってくと宗一郎が腰かけたままの革張りの椅子の背もたれに、だらりと押し掛かる。

僅かに傾いだ椅子の背に、身体ごと宗一郎は背後へと持っていられると、流石に眉山をくいと吊りあげた。

「そんなに怒らなくてもさ、僕ちゃんはこの家のことは大事に思ってるよ？父上のことも、母上のこともさ？　まー……、ちよこーっとその比重があやこさんと雫に最近は寄っちゃってるかなーって思うけどお……」

自分には後二人程子供がいることはどうやら記憶の彼方へと消え失せてしまっているらしい義経は、今は妻のあやこへと想いを馳せ

ているらしい。「あやこさん今どうしてるかなあ？」等と、ふにやふにやとした声で言われれば宗一郎は聞いていられないとばかりにべしりと皺の刻まれた己の額を叩いた。

そのどこまでも幸せそうな笑みを見せられれば宗一郎の胸の中には苦い思いが広がっていく。

後二人はどうしたんだ　宗一郎は孫二人を忘れ去っている義経を見て、少々頭が痛くなる。この息子の元からは、一人　啓一を預かっているわけなのだが、あの子が不憫だと思う。流石に啓一には聞かせられんと考えた宗一郎は、はあと小さく息を吐き出すと眉間に寄った皺をついと伸ばすようにした。

先ほどから思考が纏まらないと宗一郎は雑念を振り払うために頭を振る。あれこれと考えている暇等、自分にはないのに。

どうにもこの息子は苦手だ。昔はそうでもなかったが、今では何を考えているか分からない。

否、昔も、何を考えているか分からなかったな。

今更だ、今更なのだが、それでも過去に自らが犯した過ちを思うと未だに辛くなる。

宗一郎は渋い顔をさせながら、それでもそのまま執務を続けた。元より宗一郎は寡黙な人間ではあるが、こと身内に関わるものに関しては最も口が重くなる。話すことが出来ない理由が沢山あるからこそ黙すのだが、それは言われなければ分からない。特にそういうものを感じているのは雫が強いのかもしれないが、宗一郎には言えない理由が多分にあつた。

雫に対しては特に。

そしてそれは、義経に対しても同じように言えない思いが同じくあつた。

この息子に言うことは恐らく一生無いだろう。あれもそれも、墓まで持っていくつもりだった。

絶対に悟られてはならないと、宗一郎は心の手綱を締めるつもりでぐつと腹に力を込めた。

心を引き締めなければならぬ。ばれることはあつてはならないのだ。

そんな宗一郎を気取られぬように、義経がこっそりと探る様に見ていたことに宗一郎は気付けなかった。

義経は申し訳なさそうな顔をしながら、そつと机の上に置かれた書類の山を半分程持ち上げると、そのまま先ほど座っていた長椅子の前の、装飾も美しい円卓の上へと置いた。

「うっは、結構量あるねー。半分でこれだけとかどんだけため込んでたんだよつていう」

「戯けが。義経、貴様がため込んだ分だ」

「……まあ、僕六花神で忙しかったですし。羽山ー、ペン頂戴。僕も手伝う」

「畏まりました」

羽山は義経の元へと予備の万年筆を手渡すと、義経専用の印も持つてきた。

「用意がいいね」

「有難うございます」

書類に目を通し始めた義経は、書類に目を落したままに宗一郎へと問いかけた。

「こんだけ僕が手伝うこととして、この後十分でいいから時間あく？ちゃんと話したい。話そ？」

「……」

宗一郎は答えない。

さらさらさら、さらさら、……カチャ、コトリ……

書面に筆を走らせる音が静かな室内に響き渡るだけで、誰もが声を発しない。

そんな時間が数分続いた時のことだ、数分が数十分にも感じられるまでに長かった時間を打ち破った声があった。

「羽山、資料が足りない。ここ、筑波のホテルのやつが欲しいんだ

けど」

「畏まりました、ただ今ご用意致します」

そう答えると、羽山が執務室を後にした。資料が届く前に出来るだけのことをしてしまおうと、義経は別のホテルの書面に目を通す。こちらは簡単だ。さらりとサインをするとそのまま裁可が通った山へと置いた。

義経が首を疲れたと言いながらこきりと鳴らせば、それを合図にしたようにして宗一郎が重かった口を開いた。

「五分なら何とかなりそうだ」

「五分か〜……ま、いつか。んじゃ終わったら話しましょう」

「……さっさと終わらせろ」

「りょーかいっ」

こうして義経は久々の執務に大いに励むこととなった。

8 (濡れたタオル×倒れている人〓) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

8 (濡れたタオル×倒れている人)

羽山に淹れて貰ったこのハーブティは一体何だろう。いや、一体と言つ言い方はおかしいかもしれない。

すんすんと鼻を鳴らして義経は淹れられ間も無いハーブの芳しい香りを嗅いでみせた。だが二つ三つは分かったが、それ以上は分からない。恐らく、この香りからして五種類はハーブが入れてあるはずなのだがと首を捻って考え込んだ。

「義経様……」

「いや待て、待って。言わないでね！お願いだから言わないで！後、後たぶん……二つなんだよね。後二つ分ければ」

「アップルミント、ストロベリーリーフ、レモングラス、スペアミントの四種だ」

「正解で御座います旦那様」

「あー！あー！何つで言つちゃうかなあー！僕が考えてるのにもう！」

地団太を踏んで悔しがると宗一郎はふんと鼻を鳴らして紅茶を啜る。その口元は僅かにだが笑みが漂っていた。それは本当に小さな勝利であつたろうが、それでも嬉しいらしい宗一郎を見て、更に義経は苛立った。否、逆に小さな勝利だからこそ拘つたのかもしれない。

義経は一頻り悔しがると別のハーブティーの用意をするようにと羽山に告げ「次は負けないんだからね！」と、再戦を申し込んでしまつ始末だ。妙なところで勝負事を始めてしまつた義経に鷺宮は呆れ果てた。当初の目的をこいつは絶対に忘れていると思つたのだ。

嘆息を零すと鷺宮が口を開く。こうしたところで主たる義経のブレーキ役として連れまわされているのだから、きちんと嗜めなくて

はいけない。それが鷺宮の仕事だった。

今回ばかりは多少　　本当に多少だが　　宗一郎の手前、形ばかりは畏まった口調に聞こえる程度の言葉で鷺宮は喋った。それでも羽山はいい顔はしていないのだから、それがどれ程酷い言葉づかいに分かると言うものである。

「どうせハーブティーなんて上品なものの味なんて分からないんだから黙って飲んでくださいませ、義経様」

「……うっわもう、何て言うか全然敬う気配の欠片もないよね鷺宮さんたら。あのさ、偶に言いたくなるんだけどさ、僕君のご主人様なんだけど？あの、雇用主さんなんだけど……分かってるのかなとか」

「十分に理解していますよ義経様。そんなこたあどうでもいいからとつと飲みやがれで御座います義経様」

「あの、語尾に義経様ってつければいいってもんじゃないと思うんですけど……」

目の前で完璧な従者が恭しくも仕えているのは義経の父である。その目の前に座っている状態で、自分の従者として連れてきた鷺宮のこの発言はちょっとばかりいただけない。

これでは面目　　と言うものが義経の辞書にも一応はあったらしい　　丸つぶれだと、流石にあんまりではないかと義経は鷺宮へと無言の内に抗議するものの、鷺宮は拳を作って見せてこう言うのだ。その顔は素晴らしい笑みに彩られている。ただし、ちょっとばかり物騒な笑みではあるが。

「宗一郎様のお時間を五分だけでいいからと取らせておいて、紅茶の茶葉当てだけに三分も使われてるわけなんです　　私目の訴えたいことが本当に……お分かりにならない？」

「……済みません、やります殴らないでください御免なさい」

どこをどう見ても、これは義経が悪かった。

「さつきホールで会った奴、雫の許嫁だって言ってたけど……あれ、何？」

「何、とは？」

義経はどうしても先ほど首を絞めて吊りあげた千草のことを名では呼びたくないらしい。

雫から聞いていて一応は知っている　恐らく千草が名だろう　だが分かってはいたが呼びたくはなかった。愛しい娘を傷つける者を、どうして名で呼んでやらねばならないのかとさえ思う。だからあれと千草を呼べば、宗一郎は宗一郎で、はぐらかすわけではないのだろうが、一体何を言っているのか分からないと空惚けるのだった。

義経は宗一郎のそういう態度が嫌いだ。

実際宗一郎には分かっているはずだった。この屋敷の中で知らないこと等宗一郎に限ってあるはずがないのだから。

いつもいつも何もかも分かった様に言う癖に、肝心なところはひた隠しにして実の息子にさえ話そうとはしない。そんな宗一郎のことが義経は嫌いだった。

どうしてもつと分かりやすく言葉を紡いでくれないのかと聞いてきかたてたせられてきたのだ。

「だから、許嫁とか、まあ……要は婚約者でしょ？それは一体どういうことかかってことを聞いているの」

「ああ、そうだな。あの少年はあれの許嫁で婚約者だ」

「だからっ！なんでそんなことになっちゃってるのかって聞いているんだよ？！分かっている！？」

義経は苛立ったままに宗一郎にがなりつけると、そのままカップを荒々しくテーブルに叩きつけた。

「雫の婚約者なら僕にだって関係ある話じゃないか！どうして勝手に決めちゃうんだよ！」

「貴様には関係ない」

「無いわけないだろ！？僕の娘だ！僕達の娘なんだよ！あんたのもんじゃないんだ！僕の娘なんだ！なのになんでこんな勝手に……」

「もう決まったことだ」

「なっ！」

「繰り返すが、これはもう決まったことだ。そもそも降矢の家と高遠との家、この二つの家の間で決められたことに、貴様が今更どうこう出来るのか？未だ降矢を継ぐでもなく居る貴様に、どうこう言われる筋合いではなからう。そもそも貴様の一存で今更取り消すこと等最早不可能だ」

確かにそうだ、許嫁と交わされた相手を、こうして降矢の屋敷にまで住まわせる話になってしまっていると言うことは、その話自体がそこまで話が進んでしまっていることの現れだろう。となれば無論、義経がそんなことは無効であると、今更言ったとて向こう様が納得しないはずだ。元よりそんな話は無いと言っても、下手をすれば許嫁と言い交わし、そして結納はいつで、結婚式は、披露宴は……エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ……この宗一郎のことだ、手抜きなくその全てが整えておいてあるに違いなかった。

そんな状況で今更義経が茶々を入れてひっかきまわしたところで、事態が好転するとは思えない。雫の許嫁等居ないのだと言ったとしても、これは終わる話ではない。当の昔に義経が入ったところで治まる話ではなくなってしまうているのだ。

そうだ、ここで義経が「雫にはそんなことはまだ早すぎる。それ

に父である私は承諾していない」と言つたとしよう。そしてこの許嫁との取り交わしが無かつたことだと相手方へと訴える。けれどそんなことをしたとすれば、下手をすれば相手方に婚約詐欺か何かで訴えられかねないだろう。事態はそこまで進んでしまっていたのだ。

いや、そこまで行かずともこの婚約を破棄するのであれば、相当な対価を降矢は支払うことを余儀なくされる。それが目に見える物でなかつたとしても、確実にそれは降矢という看板を傷つけるものであるのは言わずもがな、である。

そう、義経は悟つたのだ。

最早打つ手なしなのだ。

義経は悔しげに奥歯を噛みしめた。自分がもつとこの屋敷に居れたなら、こんなことにはならなかつただろうに。

「否、どうせ降矢こいに居たとしても、父上にいい様に踊らされるんだらうな、僕は」
「……」

宗一郎は無言でハーブティーを啜る。その面には何の表情も見えない。

義経は疲れたと目を覆うようにして顔を隠すと、大きく息を吐き出した。

納得したくはない、けれどせざるを得ない状況に、義経は内心で切歯扼腕して悔しがった。

表面に出して悔しがるには義経は悲しいことに大人過ぎたのだ。

どうしようもないのだと嫌でも理解せざるを得なくなった途端、

宗一郎を責めることさえ出来なくなった。

ただただ義経は視界を覆って呻くばかりで何を言うことも出来なくなつてしまった。

娘がいつか結婚する、そんなことは分かっていたけれど、そのいつかが義経にとってみれば早すぎた。もっともつと、ずっと先のこ

とだと考えていたのに、まさか十代で許嫁だなんて。青天の霹靂と
はまさにこのことだろう。

「早すぎるよ……」

「そうか？六花神の嫁と貴様が出会ったのはいつだったか……同じ
年だったように思っていたが、私の勘違いだったかな？」

「……ああ、そういえばそうだったかもねー」

確かに妻のあやこと義経も許嫁として目通りをと場を設けられ会
うことになったのも、確かに雫と一つしか変わらない歳だったよう
に思う。古い記憶のため思い出すのに時間を要したが、ああそうだ、
思い出した。義経が十七で、あやこが十八だったはずだ。

そうか、今思えば同じなのだ。義経の時と、雫の時と 同じく
周囲に許嫁と言う名の先を共に歩む伴侶を用意され、そして周囲に
こちらの意思など関係なく、勝手に縁談を調べられていつて 気
づけばいつの間にか逃げ場等無くしていたなと思いだした。

それを思い出せば喉の奥から乾いた笑みが零れ出てきた。

何て事はない、以前は六花神、そして今回は降矢だった、ただそ
れだけの違いではないか。

「ははっ！僕の時は六花神で、雫の時は降矢が用意した許嫁なわけ
だ。けど、全くおんなじじゃないか。許嫁を勝手に用意されて、い
つの間にか縁談が調べて……あーああ、僕らには、相手を選ぶこ
とすら出来ないわけか……」

可哀想な雫だ、とぼつりと呟けば、室内は無音に包まれた。

裕福な家庭に生まれたものの運命みたまとでも言えはいいのか、伴侶を
自ら選ぶ等といったことは、あまり自由に出来るものではない。

伴侶として選ぶには、それ相応のものを求められるのが普通であ
った。

それは相手の家庭、その生活水準。そしてその背景まで全てだった。

自ら選ばうとも、その水準を満たしていないようであれば切れと言われる。

だが、義経にはその肝心要の相手が居なかった。だから用意された相手を選ぶことに何ら躊躇は無かったけれど、雫にはそういった相手が居たはずだった。

だからこそ、尚更不憫に思うのだ。

「可哀想な、雫。ごめんね……僕の娘なんかに生まれたばかりに相手を自由に選ぶことを許されない環境に生み出してしまったことの罪悪。それが義経を責め立てた。

宗一郎はカップをゆっくりとソーサーへと戻すと、義経へと目を向けた。

「それでも貴様は、あやこを愛するようになった」

「……それは、そう、だけど」

だがそれは、長い月日を重ねた結果のことだ。

「でも……」

確かに結婚から生まれる愛もある。

だが、雫には普通の子供として育てて欲しかったのだ。義経はずっとそれを望んでいた。

何ら六花神に関わりの無いようにと育てていきたかった。けれど六花神は雫を放っておかない。能力が発現しないからといって、手放そうとはしなかった。

義経は覆っていた手を取り払うと宗一郎に告げた。

これは裏切りだとはつきりと、告げたのだった。

「いつか来るだろうって思ってた。六花神も、雫を狙っていたからね。けどさ、まさか降矢まで狙ってたなんて誰が思う？僕は……父上を信じてた。降矢はそんなことに使われないって信じてたのに……」
「信じた貴様が愚かだったのだ」
「……もういいよ」

そう告げた瞬間、義経の手元のカップはパンツと爆ぜて塵と消え失せていた。

さらさらとテーブルの上から風となって消えゆく、元はカップであった砂に、宗一郎は何と思ったのか　義経はもう、そんなことにすら抱く興味も無くしていた。

「父上がそういうつもりなら、もう、いいよ……」

これ以上はもう、聞きたくも無かった。

+++

使用人達は雫のためには動かない。

それに対して何故とも雫は思わなかった。それがおかしいとも、どうしてとの疑問を持つ余地すら無かったからだ。

それは、降矢の屋敷で生まれた時から今までずっとそうだったから、だから疑問にも思わなかった　それが正しい答えなのかもしれない。

雫は使用人達の手を誰からも借りることなく、どうにかこうにか千草の身体をホルルの端へと設置されている長椅子へと横たえると、

小さな桶に水を汲み入れてきて、持っていたまっさらなハンカチタオルをそこに浸した。小さくてこれがまた重宝するのだ。

先ほど鷺宮が降矢のかかりつけ医を呼びつけてくれたらしく、到着までの間は雫が見ることになったのだ。

電話をしてからもう三十分は経つだろうか、一分一分が嫌に長かった。

千草の顔色は未だに白く、血の気が戻らない。

せめて脂汗に塗れた顔は綺麗に拭っておこうと、雫は濡れたタオルを軽く絞ると額に頬にと丁寧に拭いていった。

首を苦しそうに掻き毟る仕草をされればそのまま釘をいくつか外してやり　と、甲斐甲斐しく世話をしていると、鷺宮が戻ってくる。

「どうだいお嬢」

「うつん……駄目。目を開けません」

答えながらも丁寧に拭っていると、鷺宮が言った。

「……随分と優しいんだな？」

「え？」

雫は浸したタオルを持ち上げようとしたところで固まってしまった。

随分と優しいとは、どういうことか。

「いやさ、だってあんだだけ怯えてた相手だろ？なのに随分と甲斐甲斐しく世話すんなーって、思ってた」

「そっ、そんなことありません！ー！」

雫が叫んだ途端だった。

千草がつめき声を発したのだ。

「う、うっ……」

「わひゃあああっ!!」

雫は千草から大きく飛び退くと鷺宮の元まで目にもとまらぬ速さで駆けていくとそのまま手に持っていたタオルを手渡した。

「後は任せました!」

「え」

それじゃあとばかりに雫に走り去られてしまえば鷺宮は嫌そうな顔を隠そうともせずそのまま千草の傍まで行き、溜息をつきながら仕方ないと零した。

「しゃーないから看護しますかー……」

だが、その言葉とは裏腹に、鷺宮がやったことはと言えば思い切り振り被って千草の顔面にタオルを叩きつけたこと、だった。

びちゃりと水気を帯びた音をさせて千草の顔面にヒットすると、タオルからは夥しい量の水が滴り落ちていく。

勿論、呼吸なんてこんな状態で出来っこない。

けれど鷺宮は水がびたびたと音をさせて滴るのをそのままに、爽やかな笑顔でホールを去ろうとするのだ。

「さて、看護しゅーりょー。仕事もーどろつと」

「……………んーっ!んーっ!」

「ああん?」

踵を返して自分の仕事に戻ろうとしていた鷺宮の耳に入ったのは、

健やかな寝息とは到底言えないものだった。むしろ盛大な抗議の声に聞こえるつめき声だ。

煩いなあと振り返ってみれば、「ぶあつ！何だこれは！？」と上半身だけ飛び起きて叫ぶ千草の姿があった。

「どうやら復活したようである。」

鷺宮は思わず手を打ち笑みを浮かべる。

「おおっ！起きたか。んじゃ、そゆことで。もう平気そうだから仕事戻るな！」

「ああ！？あんた誰だ？！というかなんだこれは！なんつで濡れタオルか！これあんたか！？あんたのなのか？！」

水も滴るいい男になった千草が喚くと、手を振り違つと鷺宮は言う。

「まあ、確かに間違いではないだろう。確かにそれは鷺宮の持ち物ではないのだから。」

「いんや、その持ち主は俺じゃなくって」

「あ……そうなのか。それは失敬した。申し訳ありません。非礼を詫びます。では、これを俺の顔に置いた人物にお心当たり等はありませんか？あつたら教えていただきたいのですが……？」

「あ、それは俺俺！」

「やつぱりあんたじゃないかああつ！」

長椅子から跳ね起きてきた千草に、どうどうとまるで動物にするように鷺宮は抑えろと言う。

「まあまあ、そんな起きて直ぐに怒ると、血圧上がっちゃうぞ！」

「んなことなんざどーでもいいんですよ！何で濡れタオルですか！？死ぬだろ？！つか殺す気か？！」

「いや？殺すつもりなんて無かったけど？」
「じゃあっ」

何でこんなことをすると言われ、鷺宮はあっけらかんとのたまった。

「何でおれが男の世話なんぞしなくちゃなんねーんだよ。男の世話するくらいなら、可愛い子の一人や二人口説くぞ俺は。タオルを乗っけてやっただけでも有難く思えよなあ、ったく。んじゃな、起きたんだから俺はいくぞー」

「なっ……なっ……」

あまりの言い様に言葉を無くしていれば鷺宮は知ったことではないと言っことか、そのままホールを抜けて大階段を登りいつてしまった。

一体ここは何なんだ。

千草は完全に混乱していた。

9 (不気味な一枚の絵) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

9（不気味な一枚の絵）

さつきは助かった。そう言われて微笑んでいるのはどこか独特な雰囲気を持つ青年だった。

「澤田が止めてくんなかったら、僕、何かしちゃってたね」

「いいえ、差し出がましい真似をしました。お許しを」

「ううん。いいんだ。僕の代わりにごめんね」

澤田と呼ばれた青年は、この後どうするのかと義経へと問いかける。よもや義経がこのまま宗一郎のいい様にされようはずもないと考えているようだった。

義経は黙考し、暫くすると口を開いてみせた。

「楽しげに歌うように言いはするものの、その瞳はどこか物騒な光を湛えていた。」

「とりあえず、隣の部屋つてのは……いただけないよねえ？」

「と、言いますと」

「栗の隣の部屋にあれ、持って来られるらしいんだよね……あんなの栗の傍に置かないでよ。教育上良くないよ」

教育上良くないのは、恐らく義経も一緒であろうと思ったが、澤田はそれは賢明にも言わずにおいた。そもそも義経自身、自分が安全であるとは思ってはいないようではあるが、それでもそれが対娘となると自分は父親であるから安全であると脳内変換されるようである。全く言葉が通じないのだ。

とはいえ確かに肉親ではあることは間違いない。だから安全と言えば安全ではあるだろうが、教育上、となるとそれは些か疑問が残った。

そして義経曰く、あれ、と言うのは言わずもがな千草のことである。

それを耳にすると澤田は至極真面目腐った口調で答えた。

「所謂、お嬢様への夜這いをしると、宗一郎様はおっしゃっておられる？」

「ははは！いやあ……何それ笑えない」

笑ったのは義経のだがどうやら取り乱している様子だと言うことで澤田はそこには触れずにおいた。

この屋敷はシンメトリーに作られていて、ホールを挟んで左右に分かれている。

手前が本館で、奥塔には使用人達の部屋があり、長年暮らす使用人、それも良く仕えてくれた使用人には小さな家のようなものが奥塔の傍には建てられている。小さな、とは言ってもそれは普通に一軒家であるため、可也大きくはあるが、降矢邸と比べれば小さい、と言う意味である。

玄関扉を潜ると大階段があり、そこを中心にして左右に分かれて建物があるのだ。

その左側に義経とその妻あやこ、そして娘の雫、更には義経本人に仕えている使用人として鷺宮と澤田と一名程暮らしている。後の一人は未だ挨拶すら交わしたことが無い間柄なため、澤田は誰が暮らしているのか、知らない。

そして、ここからが肝心なのだが、シンメトリーとはいえ、完全に同じ部屋が左右対称で作られているわけではないのだ。

「雫の部屋の隣って言ったら……さ」

俯いたままに義経は言う。

「壁、取り外せますもんね……」
「……」

それを繋ぐ形で澤田が続ければ、何とも言えない妙な空気が辺りに漂った。

「たぶん、宗一郎様はこのまま外させるでしょうね。壁」

左右別の構造をしている部位があるわけでは無いのだが、この屋敷の三階部分、それも左棟のみが厄介な作りになっていた。

そして、その厄介な部分に雫は居を構えているのだ。

「どうしてあんな部屋にいるんだ、雫……」

「義経様があそこがいいよね、と、あの角部屋にしたんです」

「知ってるよお！言わないでよお！！」

雫の部屋は三階にあり、L字型になっている。

だが、そのL字も使わない部分が多いため、半分を空き部屋として解放していた。

その解放された部屋との間には、後から吊り壁を取り付け、カーテンのようにして解放も取りつけも自由自在にされている。

要は、いつでも取り払えるようにしてあるのだ。

それこそが厄介なのだ。

「ただの空き部屋だった時は、全然構わなかったんですけどね。ですが居住者が、となれば別の話です」

隣のあの空き部屋に干草を放り込むとなれば、壁は恐らく確実に取り払う形になるだろう。

それが遅いか早いか、その差しかないように思う。

そこまで思い至れば義経は青くなって叫んだ。

「じよ、じよ、じよ、冗談じゃないよ?! 雫と同じ部屋に男とか?! 何言ってるのかな澤田君?! 有り得ないよそんなの! 雫はまだ十五! 十五歳ですよ! ? つかふつざっけんじゃねえぞ親父いい! !」

「はあ…… 最初からそれくらい息まいて反対をなされば宜しいのに」「いやあーっ! 雫が! 雫に獣けだものが襲いかかるっ! なんてことしてくれただよ父上!」

何やら自身の想像の中では愛娘が襲われる映像でも流れているのか、悲鳴を上げている義経に、澤田は冷静に突っ込みをいれた。

「いえ、まだやってないと思います。お嬢様も悲鳴を上げて応援を呼びませんし。まだ平気なはずかと」

「う、うん! そうだよね!」

「まあ…… 有り得ないことだとは思いますが、合意であれば悲鳴はあげませんか……」

でしたら困りますね、分かりませんと深刻そうな表情で言われれば空気が凍った。

何て事を言い出すんだ貴様。

「上げて落とす高等技術を使うとは、いい度胸をしているね澤田君」「そもそも先ほど落したんでしよう? でしたら恐らくまだ、先ほどの少年は何もやっていないはずかと」

むしろそんな気力も根こそぎ吹き飛んでしまうような歓迎のされ方をしたのだから、千草が雫に手を出すこと事態難しいとは思うの

だが、そこに気づかないのがこの男の悲しいところである。
自分がどれほど破壊力のあることをしでかしたか分かっていないのだ。

まあいいかと澤田は階段を足早に登っていく。

「兎に角、お嬢様の部屋まで行き、急ぎ調べましょう。二つの部屋に寝台だけが一つに減らされていた、何て事になっていなければいいのですが……」

「そつ……！！そんなことになってたら僕、あれのこと飛ばすよ！投げるよ！突き刺すよ！」

「洒落にならないので止めてください」

飛ばすのも投げるのもまだいいが、突き刺すとは何事かと頭が痛い。

この主はどうしてこうも妻と娘にだけおかしな方向に愛情を向けているのか、大いに疑問だった。

さて、その頃先ほど獣呼ばわりされた少年千草は、巨大な屋敷の中で迷子になっていた。

こう大きいと誰がどこに居るのかすら見当がつかないと思わず舌打ちを打つ。

誰の目も届かないため学園内のように猫を被らずいられて楽ではあるが、心細いことにかわりはない。

何故誰も居ないんだと心細さから腹を立てて千草は歩く。

「どれだけでかいんだよ、ここ……」

廊下を歩いてても歩いてても、向こう側は見えるものの、それでも可也遠くに見える。やっこのことで角まで来たかと思えば、更に角を

折れた先にも道があるのだ。

何だここは、広すぎるだろう。

「五十メートル走どころの騒ぎじゃないな」

百メートル走だつて出来るだろう、恐ろしい程に長い廊下だつた。当てもなくふらふらと歩いてはいるものの、正直どうしていいのやらといった心境だつた。

宗一郎にこの役目をどうにか解いて貰おうか？ そんなことも考えてみた。

けれどそれは千草には出来ない。戻れる家が無い彼にとってみれば、ここを追い出されることは死を意味するものだったからだ。

ある意味では真つ直ぐ育つてきた結果か、家を追い出され、寮にも戻れないとなると、どこをどうやれば生活が出来るのか分からないのだから健全な育ち方をしてきたのだろうとは言えた。

ただし、逆にいえばそれまでだ。それは千草にはどうにかして生きてやるうとの気概は無いと言う意味でもあつた。

千草は初等科の頃から六花学園の巨大な寮での生活をしてきた。寮生達こそが今では彼の家族であり、寮こそが家だつた。

千草にも一応は住所録に記載されている住居があるにはあつた。それも二つほど。

だが、そのどちらにも歓迎されていないのだ。

どちらの家族からも受け入れられない自分。

だからこそ今、ここを追い出されるわけにはいかないのだ。

けれどここに居ればあのわけのわからない父親に殺されかねない。

千草にはどうすればいいのかが分からなくなっていた。

いつ見ても不思議な絵だと言える。
祖父母の並んだ姿を描いた肖像が雫の目の前にあった。
けれどこの肖像、どこかおかしいのだ。

「それ、宗一郎氏か？」

ぎくりとした。

「いつ、入ってきたんですか？」

雫は三階、ギャラリーと呼ばれる部屋に居た。

いつも何か辛いことがあるば、雫は祖母の笑顔を見るためにこの部屋にやってくるのだ。

そこでは宗一郎も笑っている。だからこそ、この肖像に思いを馳せるのかもしれない。いつか分かってくれれば、笑みを自分に向けてくれるはずだと。

「適当に人の気配がする部屋を探しながら来たら、ここについただけだ。それで？それは宗一郎氏でいいんだろ？」

「……うん。お爺様です」

「隣って、お前でいいの？仲、いいんだな」

「隣？いいえ、違うわ。お爺様が私なんかと一緒に並んで、笑ってくれるはずない……」

千草はどういう意味かといった目を向けるが、雫はそれには答えない。代わりに先ほどの問いに対する答えを発した。

「これは、お爺様とお婆様を描いたものなの」

「……………ええと、後妻か？」

「……………いいえ？何故そう思うのですか？」

「いや、だって……………」

千草は目の前に置かれた肖像をもう一度上から下まで眺めてみた。描かれているのは宗一郎である、それは分かった。

だが、それとは別に寄り添うように描かれている女性が居たのだ。それがとても美しい女性である、ここまではいい。だが、その年齢がおかしいのだ。

「どう見たって、三十にもならないような見た目だろ？それが、後妻じゃない？」

「三十？」

首を傾げる雫に、千草は得も言われぬ恐怖を感じる。どうして雫はこれがおかしいと思えないのか、そしてそれが何故か、不気味でならないのだ。

薄気味悪さを感じながらも、千草は言った。

「さっきのあいつ、あれがお前の父親ってのも、まさか実年齢とまたかけ離れてるとか、そういうことで、あれも実の父親だったりするのかわ？」

「あいつ？あの、千草がさっきから言ってること、良く分からない

……………」

「だからっ！お前、お前の家、変だ！」

不気味だ、不気味でならない。話が全く通じないことに対する恐怖もそうだが、これをどうして当たり前と受け止められるのか、それが分からないのだ。

あまりにも気持ち悪くて千草は自分でも気付かないうちに首を振

つて拒否を示す。あるいはこんなことは嘘だとの否定をしたい表れかも知れなかった。

肖像に描かれている宗一郎の年齢は、ほとんど今と変わらないような見た目だ。

今現在の宗一郎の年齢が八十三。この肖像の宗一郎がどう若く見積もっても六十といったところだろうか。

そこにきて実の祖母だと言う女性はいえ、三十には到底見えない。どう見積もっても二十代前半の女性にしか見えない美しい女性だった。

だからこそ、並んで仲睦まじく描かれている様が、どこか奇妙に見えるのだが、雫にはそれが分からない。

その仲睦まじさは、長年連れ添った夫婦、そのものだから奇異に映るのだ。

だがそこまで観察眼が無い千草からしてみれば、ただただ不気味にしか見えない。

「お父様は確か今年で四十二だったかしら？」

「四十……二？」

「ええ、こちらにお父様が二十歳の時に描いていただいた肖像があります。見ますか？」

「見る……」

そこに描かれている義経の姿は、今と全く変わらない姿だった。

いや、多少変わったところもあるか、と千草は呟く。

若々しく理知的に描かれているのは、まさしく少年から青年に移り変わるうとしている男性で、二十歳と言われればそうだなと言えた。が、これが今も変わらない姿であると言うことが、問題なのだ。

理知的に描かれていることだけが今とは違うのだが、先ほどの義経の表情はどう好意的に見てもあほっぽい。頭が良さそうに見えな

い。

年月を経て、外観だけは変わらなかったが、内側だけが劣化したのか、等と至極当然ではあるが、だが大変失礼なことを考えてみた。表情の差異はあれど、今と全く変わらぬその姿に、何故だか分からないが、千草は寒気を感じた。

ふいに首がぐうつと締まるような感覚を覚える。

いや、実際は首等絞められてはいない。ただ、先ほどの痛みを思い出して首が絞められるような感覚に陥っただけだった
もしや、と思った。

「お前、お前の父親、人間じゃ、無い……とか？」

あまりにも荒唐無稽、あまりにも馬鹿げた質問だった。けれど、この時の千草は真剣だった。

「ぐくりと喉を鳴らして雫に再度問いかける。

「俺のこと、さっき、上空に浮かした、よな？」

先ほどの人は人ではなく、その性は魔性のものなのではないか。そして雫は、その子供なのではないか。

震えているのは千草の足か、それとも雫か、最早それは二人にすら判断がつかなくなっていた。

10 (不老の一族) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

10 (不老の一族)

雫は返答に困っていた。何と答えればいいのか分からない。

自分等が何を語っていいはずがない。だからこそ言えなかった。

どんなに答えを求められても、雫は語る言葉を持たないのだ。

ごくりと音をさせて唾を飲み込む。喉が急速に水分を失い、からからに乾いていくのを感じた。

けれどそんな雫を知ってか知らずか、千草は雫の答えを待たずに口を開いた。

「なあ、答えろよ。俺は一体、何をされたんだ？なあ、答えろよ」

「あの……」

私は、言うことが出来ない。

「首が絞まった。けど、首に温かさなんて感じなかった」

私は、許されていない。

「そりゃそうだろうよ、首を掴んでたのは手なんかじゃないんだ。

何か得体のしれないものに掴まれて、掴まれた方を見たらなんだよあれ。地面が遠いんだ」

存在してはいけないのだから。六花神について語ることをすら禁じられているのだから。だから言えない。言えない。言えない。

雫はぎゅっと唇を引き結ぶと、そのぎりぎりと睨みつけてくる、痛みすら与えてくる視線から眼を逸らす。

千草は恐ろしかった。あまりにも恐ろしい目にあつたために、雫までをもああしてわけのわからない、得体のしれない存在として攻

撃ってくるのではと警戒していた。だからこそ、その視線も強いもので、受け止める雫からしてみれば、あまりにも強すぎる視線に、挫けそうになる。

雫は千草が怖かった。何度も何度も挫けそうになる心を必死に支えてどうにか目の前に立っていた。

何故なのだろう、目の前にただ寝ている千草がいるだけならば、怖くもなんともないと言うのに。どうして目を開けて自分を映すその瞳が、こんななまでに恐ろしいと思うのか。

雫は千草に恐怖して、そして千草は雫に今、恐怖を覚えている。いつまでもすれ違う二人の気持ちに、二人だけが気づかない。

「さっきのお前の父親って言ってたやつ、あいつ……本当にお前が言うように、四十二なのか？」

「……え、ええ。そう、です」

質問を変えてくれたことにホツとした雫は、そうだと肯定する言葉を返す。

「じゃあ、この絵の宗一郎氏はいくつの時のものなんだ？それと、隣の貴婦人も……」

雫は記憶を掘り起こしながら質問に答えた。

この時描かれた祖父と祖母の話は、以前母より聞かされていた。

「確か、私の生まれる三年前と言っていたから　宗一郎お爺様が六十八、そしてお婆様が六十の時の絵になります」
「ろく、じゅっ……」

千草は息を飲んだ。

「はい」

完結に答えられれば言葉も出ない。

千草は寒気がした。これが六十歳の女性とは、何たる冗談かと思つたものだ。

いつの世も若く美しいままに歳をとりたいと考える女性は多く存在しているだろう。だが、根本的に違ふのだ。この絵の女性は、どう見ても歳を取ることを拒否した、若さにしがみ付いている女性には見えない。

若くして若いままの女性。そうとしか見えない。

瑞々しい張りのある肌に描かれている女性は、気品すらその絵から立ち上るように見える。健康的な肌には曇り一つ見当たらない。頭髮も美しい黒髪を撫でつけて後ろで結びあげている。

完璧な淑女。そう、どこに出しても恥ずかしくない淑女そのものと言えるその姿。そこに称賛さえ贈りこそ、忌避することはあまりにも愚かに見えた。

これが見合い相手に贈る絵であると言われれば、そうかと頷ける程に完成された美を閉じ込めた姿絵なのだ。

なのに、これが、還暦の記念に描かれた肖像画だと言う。何と言う冗談だろう。いつそ笑えなかつた。

実を言うと先ほど雫から年齢を聞いた時に愕然としながらも肖像の足元に視線を落としていけば、そこにはレリーフが貼り付けてあった。それをよくよく見ればそこには、還暦という字と記念という字が書かれているのだ。それを見れば先ほどの言葉は冗談でもなんでもないのだと千草は悟つた。悲しいことに嘘ではないのだ。

匂い立つ美しさを持つ女性であると思う　これは掛け値なしに千草の本音だつた。

だと言うのにこれが還暦を越えた女性とは、未だに信じられなかつた。

「お婆様はお爺様の元へと嫁ぎ、そして二人の間には一人の子が設けられました。それがお父様です」

では、血筋によってその若さが　と千草は考える。
けれど雫の次の言葉によって、それは打ち消された。

「そして　ええと、こちらですね。この絵に描かれている女性がお母様です。お父様はお母様と出会い、結婚し、そして子供が生まれました」

そこには十代と言ってもぎりぎり差し支えない程度の若い女性が描かれている。そしてその女性の腕の中で大人しく抱かれているのは産着に包まれた赤ん坊のようだった。

そこまで見ればああ、結婚して早々に子を授かったのかと微笑ましい絵なのだが、どうにもそうは問屋がおろさないようである。

女性の脇には先ほど千草を攻撃してきた義経そっくりの、いやに若い男が描かれており、その手前に描かれているのは十歳になるかならないかくらいの少年が描かれていたのだ。

女性と義経の姿、そして赤ん坊の姿だけであれば普通に若夫婦といった体であるのに、それをぶち壊すようにして少年が微笑んでいる。

考えたくないことを考えてしまう頭を、必死に騙そうと無かったことと思いきもつとする千草に、雫は追い打つような気持ちは無いのだろうが、注釈を入れてくれ始めた。

「こちらはお父様とお母様と啓兄様と私です。蒼兄様はこの頃、むかがみに居て、降矢には来ることを禁じられていましたので、家族はお爺様を含めて、五人でした。そしてその隣の肖像は家族が六人、きちんとそろった時のものになります」

そう言って指さす先にあったのは、赤子を抱えていた時、そのまの美しさを誇る女性、そしてその夫の姿だった。

宗一郎と先ほどの絵の中に登場していた少年、そして雫だけが歳を取っていて、義経とその妻は全く歳を取っていないのだ。

それに気づけば先ほどまでの疑問が一気に確信に変わっていった。

「お前の父親」

「え？」

「いや、お前の父親も、母親も、一体何なんだ？歳を取らない一族だとも言うつもりなのか？でも、お前もその子供も、……じゃあ、じゃあ何なんだ？！なんだお前、なんなんだよ！」

「歳なんて、取ってるじゃないですか。ちゃんと」

「どこがだよ！一体何なんだお前！いいや違う、お前らだ！お前ら一体何なんだよ……！」

「な、何って……そんなこと……」

「答える！わけわかんねーんだよここ！一体何なんだ？ここに来て早々に首絞められたと思ったら空中にぶら下げられて、その上歳を取らない一族？ふざけんなよ！頭がおかしくなる！」

髪をぐしゃぐしゃにかきまわして千草は苛立たしさをあらわにする。

「こんなわけの分からない場所でこれから暮らす？ふざけるな……ふざけるなよ？耐えられっこないだろう！いいから話せ！きちんと説明しろよ！」

雫を大喝すると、千草は雫に腕を伸ばす。

今は雫に対する恐ろしさは無かった。それよりも恐ろしいのはこの屋敷だ。これを当たり前と寛容する、この屋敷が恐ろしかった。

謎を明らかにしたい、知りたい。今の千草の頭にあるのはそれだけだった。

「い、いや……」

じりじりと雫が怯えて後ずさりをしていると、それを追うように千草はこちらにもじりじりと壁際へと逃げられないよう雫を追い詰めていった。

「こ、答えられません！」

「答えられないはずがないだろ！」

「……い、言えないんです」

「言えるだろ！知ってることだけ答えればいいんだよ！」

「私にはその資格がないんです！」

破れかぶれに叫んでみたが、千草はそれでは納得しなかった。

千草はかつとなつて腕を振り上げた。無意識の行動だった。

雫は咄嗟に自らを庇うように防御の姿勢を取ったが、振り下ろされようとすする瞬間に、またもそれを制止する声が入った。

「ロングギャラリーは宗一郎様のお気に入りの場所なんです。ですからここで暴れるのはよしていただけますか？やるのであればこちらへ」

声のする方へと目を向けてみれば、にこやかな笑顔を携えた青年が立っていた。

「……」

千草が片足をすつと後方へとひくと、くすりと笑って澤田は言う。

「そう警戒しなくてもいいですよ。私は比較的安全ですから」

比較的　その言葉に一抹の不安を抱えながら、二人は澤田へとついていった。

千草が大人しく彼についていく理由はただ一つだ。彼が付け加えて言った言葉に興味をひかれたからだった。

「それと、雫お嬢様は決して自分からはお話くさいませんよ。お嬢様はその資格がないと、そう信じていらっしやいますから」
「だって、本当にそうなもの」

一体、資格とは何を指すのか、それに興味があった。

そして、この屋敷に隠された秘密、それを知らなくては、こんな物騒な屋敷では暮らせない、そう考えた。

けれど千草は一つだけ間違っていた。

知ることによって、後戻りが許されなくなってしまうことも、あののだと言うことを、彼は知らなかったのだから。

11 (美貌の父) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

11 (美貌の父)

どこで話すのか、といった時、適当に全員が集まって喋れる場所があるにはあった。

けれどもどの部屋にも人の耳目があるため中々難しいようで 結局軍が「では、私の部屋で」と言ったことで雫の私室で話すことと相成った。

一個人の私室では大の大人が三人と、そして大人とは言えないまでも高校生の時分である少年と少女が一名ずつとなれば、狭いのは？と千草は、まあ当たり前だが考えた。けれどそれはいい意味で杞憂に終わることとなった。

呆れたように千草が言い放つ。

「お前、こんなでかい部屋に何でこんな……」

「はい？」

雫の部屋は千草の想像をはるかに超えた大きさの部屋で、廊下より入って見て驚いたのが先ずその奥行きだ。二十メートルはあるうかという広さがあった。

けれどそれもただ、広いだけなのだ。

無駄な装飾の一切を取り払ったような、どこか無機質な印象を与える室内に、どこか違和感を覚える。毛足の長い絨毯も、美しい壁紙の模様も、統一された家具もある。だが、それ以外の何も無い室内なのだ。

違和感を覚えて扉を入ったところで立ち止まっていれば、先へはいるようにと促される。

慌てて千草が中へと入れば、背後からきた人物が耳元へと口を寄せて話しかけてきた。

「済みません」

「何かこの部屋変だなんて、思ったんじゃないのか？」

「え？」

振り返ってみれば、そこには困ったように笑う鷺宮の顔があった。

「変だろ、この部屋」

違和感の正体は分からないまでも、他の部屋とは違うように感じるのには確かだった。

家具は揃いのものらしいが、明らかにホールにあった長椅子や、ここに来るまでの間、千草が降矢邸内を迷走していた間にみた家具と比べると、どこかランクが落ちるように思う。

一応、室内にある家具は全て揃いの物に見えた。ただし、この部屋のために誂えたと言った、その部屋に合わせるための家具では無いように映るが、気の所為では無い様子だ。

色も、形も、この部屋にある壁紙とは完全に合わない。

千草は出来あいのものがそのまま置かれているだけにしか見えな
い室内、そして家具に、少々違和感を覚えたわけのだが、怪訝
に思うものの、鷺宮に言われるように、変、とまで言っていないのか
は疑問を覚えた。

確かにこれだけ裕福な屋敷だ、全てを統一するように家具くらい
揃えるのは当たり前にも思えた。けれど、逆に言えばこの屋敷でな
ければそこまで金をかける必要性もないわけで、だから千草は
変とまでは言えないのでは、と反論を唱えなくなった。

だが実際、不思議には思う。

どうしてこの部屋だけがそうなのかと考えてしまうのは仕方ない
はずだ。

他の部屋は全て、花をモチーフにしてあれば、その花に合わせた
色合いに揃えたり、柄を揃えたりと、一部屋一部屋が全て整ってい

るのだ。

合わせてあることこそが、当たり前であり、合わせていないからこそ、この部屋だけが異質に映る。

千草はどういうことなのかと思った。

千草の中で雫は、愛されて育った金持ちの娘だから、その理由が全く、分からなかったのだ。そこまでは把握しきれていないまでも、矢張り雫は外では金持ちの娘であるからと、何も貰えず、持たず過ごすことを余儀なくされているとは知られていないのかと鷺宮は把握した。

まあ、それも当たり前だろう。こんな馬鹿な話を、誰に言ったところで理解等されるものではないからだ。

秘め事であると前置いて、鷺宮は相手にだけ聞こえるか聞こえないか程度の声で話し始めた。絶対に義経や澤田、それどころか雫に聞かせることは以ての外だったからだ。

「義経もあやこさんも気づいて無いのかもしれないが、気い使って安もんにしてんだよ。家具一式全部な」

「気を、使う？」

一体それはどういう意味か。

「本来ならお嬢は全てに金をかけてもいいかもしれない。実際そういう身分だろ？金持ちなのは周知の事実だしな。だからもつとこう、お前さんも華やかな部屋だと思ってたんじゃないか？けどな、それは無理なんだよ。お嬢は嫌われてると思いきこんでる。いや、実際嫌われてるわな。それも、宗一郎様に嫌われてるんだ、この家じゃあ住みにくいに決まってる」

「何だつて？」

宗一郎から嫌われているとはどういうことだ。

わけが分からず戸惑いの表情を隠さずにいれば、何とも言いにくそうに鷺宮が続ける。

「お前、お嬢の旦那になるんだろ？知っておいた方がいい。お嬢は宗一郎様に嫌われてる。ついでに、この屋敷に住んでる使用人からも、嫌われてるんだよ」

使用人まで嫌われているとはどうにもただ事ではないようだ。

どういうことが訊ねるべく口を開こうとすれば、唇に指を当てる仕草をしてきた。黙っていると云うことが。

「お前だったら嫌ってる人間によさげな家具とか買い与えるか？」

答えはノーだ。

そんな無駄金、使いたくはない。

「じゃあそいつが いい暮らししてたらどう思う？」

「……それは 何となく、嫌な感じが……します」

そうだ、だからこそ千草はあの女が憎らしくて堪らないのだと、千草は我知らず、拳を作ってぎゅうつと握りしめた。

鷺宮はそのまま続けた。千草が何かを思い出し、苛立ちか腹立たしさを覚えているのを知っていて、気づかれたくはないだろうと素知らぬふりをしてみせた。

「この屋敷に住んでる奴らは、今ここに居る人間以外は全員、そんな連中だと思え。お嬢は俺たちが居ない間、いつもそういう奴らと戦ってる。自分を不幸にしたがってる奴らと戦ってるんだよ」

「……」

「俺は別にお前がお嬢の旦那になるんでも構わん。ただ、守れ。宗一郎様からも、使用人の下種な奴らからも、守ってくれ」
「宗一郎氏ならまだしも、使用人っておかしいじゃないですか」
「……この部屋、家具以外何も無いのは気づいてるか？」
「まあ、そりゃ……」

ある種、どこか物悲しい雰囲気になる部屋だとは思う。
雫の性格からか、それとも使用人の仕事かは分からないが、綺麗に整理整頓をされているためか、物が少ないことが矢鱈と目立つのだ。

千草が目だけで室内を観察していれば、鷺宮があそこには三ヶ月前までは義経が買ってやったぬいぐるみが居たんだと指を指示された。その場所にはがらんとくに空虚な空間が空いている。

ぬいぐるみと言うのが高校生と言う身分には不似合いな感が年齢的にもっと色気のあるもののほうがいいのではと、鷺宮と澤田で義経に進言したらしいのだが、義経はいつまでも雫に子供であって欲しかったらしく、ぬいぐるみを買ってきたらしい。あるが、けれどそれよりも、何故そのぬいぐるみが今無いのか、それこそが問題なのだと言った鷺宮は言う。

「全部使用人が滅茶苦茶にするらしい」

使用人が滅茶苦茶にする、それも勤め先に置いてある私物をだ。そうと聞けば有り得ないことだろうと千草は答えた。そんな使用人ではまともに仕えてくれるかどうか、それすら分からないではないか。

そもそも、先ほどの言い草からして本当にやったとの確証があるようだが、聞いているだに思うのは、眉唾物である、と言ったことだけだ。どう考えてもまともな思考をしていては、信じられるような話では無かった。

「らしいって……証拠はあるんですか？」
「ある。やった当人たちが言ってたからな」

今日は置時計を捨ててやった、清々する。びりびりに裂いたぬいぐるみをゴミ箱に突っ込んできた、すかつとした。そんな声を幾つも聞いたと言うのだ。

何とも胸糞悪い話である。聞いているだけで気分が悪くなったと千草は言った。

けれどそれを聞いてこつとも思うのだ。どうして鷺宮はそれを聞いていて知っている、なのにも何もしてやらないのかと。

当たり前のようにその疑問を口にした 否、しようとした。けれど鷺宮にその言葉は途中で遮られてしまった。

「なら」

「現行犯で捕まえるって？そりや無理だ。言つてた奴らと俺は、その時遠く離れた場所に居た。俺にその場で奴らを取り抑えろつてのは無茶な話しだ」

「……そんな奴ら、解雇にすればいいじゃないですか」

「それも無理な話だ。雇つてるのは俺でも義経でもない。雇つてる奴こそが、雫のことを一番嫌つて憎んでる、宗一郎様なんだからな」

長椅子に並んで雫と義経が座り、その対面する位置の席を千草に勧める。

千草は勧められるままにその席に座って見たが、どうせならば義経の斜め向かい側辺り等、ちょっとだけ離れる位置が良かったとぼやきたくなった。真正面は何かとぎろりと睨みつけられようが視線を泳がすことも出来ず、それら全てを受け止めなければならぬ

め、辛いのである。

そして余った席に澤田と鷺宮の両名が適当に座ると、義経が口を開いた。

「それで？何が気になるって？」

「……何、って言われても」

その何が分からないかが分からないのだから千草にはその「何を答えられようはずもない」。

眉根を寄せてしかめっ面を顔に張り付けたままに黙ってしまった千草に、澤田は困る　　と言うよりも澤田が困ったのは、千草ではない。義経が頭から千草の言葉を聞く気が無いようで困ったのだ。このままではまともに話することも出来ないはすまいと、仕方ないと澤田が二人の間に入ることにした。

このまま二人でダンマリを決め込んでいては埒が明かないからである。

「一部くらいでしたら、話してあげられるんじゃないやありませんか？」

「一部って言ってもね、外に話せる話は限られてるしね」

義経が指し示す外と言うのは、要は義経からみた部外者のことである。

そして、逆に言えばその「外」以外の者　　内側のことが千草は知りたいのだ。

さて困ったぞと、義経が気だるそうに足を組んで額を手でびしゃりと打った。その動き一つ、どれをとってみても、一々目を奪われるような男だと千草は素直に感心した。

何と言えいいのか、義経はただ足を組んだだけだった。実際にただそれだけの、何て事はない所作なのだが、こうした何気ない仕草一つ一つに目がいつてしまうという希有な男だった。

かといってそれを見ても何ら羨ましいという、嫉妬に似た感情は抱かない。抱けようがないのだ。

それは何故か　理由はその義経の顔にあった。義経の顔は、男であればそうなりたいたいと、欠片でも思えるほどの美貌ではないのだ。雰囲気だけで言うなれば、どこかモデルのような雰囲気を持つ男である。だが、美貌は決してモデルと言ったレベルで語れるものではない。もっと強い何か　惹きつける美、そのものと言えるだろう。

義経がふざけた様子でいてくれる間だけはいい。千草は何とかまともに目を見て話す事も可能だった。

だがしかし、こうして空気を一変させられてしまえば、まともに目を合わせるだけでもう駄目だった。目を奪われてしまうのだ。

視界がどこか余所へと行くことを嫌がるように、余所へと目移りすることが出来ない。誘われるようにして、自然と視界にその姿を捉えてしまう。

千草は自分も　ナルシストではないが　学内では一番格好いいと言われていた。そのため、顔には多少だが　こう言う用語弊があるやもしれないが　自信があった。

けれど、こうして義経を目の前になるとそんな自信は木端微塵に消し飛ばされる。

それほどまでに圧倒的な美貌なのだ。

義経はどうしたものかと首を巡らせ、うつむと唸る。

矢張り、こうして見ているだけでは四十を超える年齢とは、とても見えなかった。美しさもさることながら、その肌艶がどう見ても千草とそこまで変わらないのだ。

十代と言ってさえ差し支えない程に、それは張り艶を未だ保っている。それはもう、いつそ恐ろしいまでにつやつやとしているのだ。何だあれば、ありえないだろう。

驚異の美容法、ってわけじゃないだろうし。

千草はどうにかして現実的な答えを出そうとしてみた。けれどい

かな美容技術を駆使しても、肌の艶を十代のレベルにとどめること等不可能だ。無理があるにも程がある。

降矢の医療部門の最先端技術か？はたまた降矢の美容部門の最先端技術だろうか？いやさて、それならばどうしてそれを降矢は売りに出さないと千草はああでもないこうでもないと考えてるものか、一向に答えは出てこなかった。

そんな千草を見て、雫は困ったようにして義経を見やると、そのままそつと手を差し伸べた。

「お父様……」

「うーん？……ああ、うん。だいじょぶだいじょぶ。さつきみたいに行き成り切れないから。ただ、何て言うかね、何から説明するべきなのかなって。まあ、不本意ながらも家族になっちゃうみたいですし。そうになったら確かに、多少なりとも説明は必要だろうからねえ……」

家族と聞いて雫は微妙な顔になる。

嬉しいわけではないが、けれど嫌だ、と言うまでの感情も無い様子だ。だが、何につけても複雑そうだった。

千草は雫にとってみれば、雫を攻撃してくる敵の一人だった。だからこそ、怖いとは思う。かといって嫌だ、とまでの強い意思が働かないのだ。

それが不思議で雫は戸惑う。一体何故、それが不快であると思えないのか、それがいつそ不思議だった。

「ロングギャラリーってことは、あれを見たんだろ？だとしたらお前が歳を食わないこととか、先ずそれから話すべきなんじゃないのか？」

鷺宮はどつかりと椅子に腰を落ち着けて義経に促すも、義経は不

満そつだ。

どうにも他人事のように語られるのが嫌らしい。彼からとってみれば、鷺宮はこの件に関しては他人事と言われることが酷く不愉快なのだろう。

どういった理由かは分からないものの、義経はずるいと一言漏らすのだった。

「僕が歳を取らない、ねえ？一応これでも歳はそれ相応に取ってるつもりなだけどね」

「俺から見ても、学生の頃から全然変わってないように見えるがな？」

「まあ、私はあの頃の写真をまだ持っています、義経様は全く変わっていないように見えますね」

改めて人から言われて矢張りそうなのかと、それについて知りえてしまえば、更に不気味さは増していった。

それを知ってか知らずか、義経は千草のことを冷やかな目で見据えているのだ。まさに居心地の悪さは最大級か、と言ったところである。

千草は居心地悪げに尻をもぞもぞと動かした。どうしてよりにもよって義経の目の前の席なのか、これでは居心地どころか生きた心地すらしないではないか。

「うーん、困ったねえ？でもまあ、僕だけ気味悪がられるのもあれだから言っておくけどさ、鷺宮も澤田も、僕と同じ年だからね？」

一瞬、呆気に取られた。

今、何と言われた？

千草は首を機械仕掛けの人形か何かのように、ぎくしゃくと動かし、鷺宮へと顔を向けた。

そこには細面のどこか気だるげな印象を与える男の顔があった。女性のもっとも好みそうな、甘いマスクと言って差し支えがないだろう顔立ちをしているのだが、そこに義経が居ることによりそこまでのインパクトを与えないでいる。

そしてその脇に顔を向ければ、そこにはにこやかに微笑む男がいるのだが、こちらは鷺宮とは極端なまでに正反対な顔立ちをしていた。

鷺宮が西洋の美と称されるような美貌だとすれば、澤田は東洋の美、そのものだった。

瓜実顔に人のよさそうな柔和な笑みを貼り付けた澤田は、常に微笑んでいるためか、その顔を知っているかと問われれば、真実そうとは言いつれないものがある。そうだ、千草は未だ彼の目を見ていないのだ。

男二人と目が合うも、どちらもどこをどう見たところで四十を過ぎたようにはとても見えない。

そもそも四十を過ぎるとなると、世間では「初老」と言って差し支えない歳である。だが、この二人　義経を加えれば三人だが　を目の前にして初老と口にするのは大変な勇気を要するはずだった。

千草があんぐりと口をあけてものも言えずにいれば、細面の男は口元を皮肉げに歪めると困ったように肩を竦めて見せた。

「あーああ、義経さんよお？お前、もうちつとばかりでいいから、手順を踏まえて物事は言えよな？少年がびびっちゃまったろうが」

「だってほんとのことじゃない。それに、自分達だけは普通です、みたいな顔されるのってのも嫌だしー？」

「そんな顔なんてしていませんよ。ねえ、鷺宮？」

「だよなあ。つたく、お前ってやつは……まあ、そういうこった少

年。俺も澤田も、これで四十二なんだ、悪いな」

悪いなと言われても、どう返せばいいのやら、である。

千草は口を開いては閉じてを繰り返した。何か言おうとしたのだが、言葉が出てこなかった。

12 (許嫁さんと一緒の部屋になりました) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

12 (許嫁さんと一緒の部屋になりました)

千草が衝撃からまだ立ち直れないでいると、若づくり三人組の大元締め 千草の見る限りそのようである 義経の胸元から軽快なメロディが流れてきた。どうやら携帯電話だったようで、着信を告げる音だと義経がごそそと胸元をまさぐり始めた。

程なく目当てのものを見つけた義経は、相手先を確認し、唸る様に言う。

「なんで、父上？」

室内子機使いなさいよとぼやくように言うなり、次のコールが鳴る前に通話ボタンをプッシュした。

「もしもし？何？って言うか室内子機あるでしょうが、何でそっちからかけないんだよ。ったく」

室内子機と言っても、義経が居るのは娘の雫の部屋なわけですからこれをこの場に居ない宗一郎に言うのはどうかと思っただが、千草は首を若干傾げるだけにとどめておいた。

だが、雫が千草が覚えた疑問を即座に解消してくれた。まるで彼の思考を読んだような阿吽の呼吸である。

「ここ降矢の室内には、個別のコール音があるのです。お父様とお爺様のみ、ですが……」

「……それって、二人だけはどこに居ても、受話器とんなきゃいけないわけか」

「この屋敷に居る限りは、そうですね」

個別のコール音と言うことは、どの部屋に居ても恐らくはだがベルが鳴るような仕組みがあるのだろう。そして詳しく聞けば千草は個別のコール音を持たされている二人に同情を禁じ得なかった二人を識別するコール音は、一斉に邸内全ての室内電話が鳴る仕様なのだそうだ。何とも不憫なものである。そして、それと同時に思うことは何とも喧しい、との感想であろうか。千草は一斉に邸内にジャリリリツと電話が鳴り響く様を想像して嘆息を零した。

「と言うことは、それでも出ない場合、今度は手元にあるはずの携帯のご登場ってことか。何それ犬の首輪かって……なんか、可哀想な感じがしてきたな……」

「まあ、広いからなあこの屋敷。じゃあ使用人が探してきますなんて言ってる場合じゃないからな。使用人の仕事は仕事で別にあるし、かといって主人達を探すのも仕事じゃないのかって話だが、こうまで広いと何とも言えん」

「探しにいつても、入って数週間程度ですと、迷いますからね」

主人を探しにいつて邸内で迷子は笑えませんが、糸のように細められた目が楽しげに弧を描いて笑う。千草はいつでも笑みを浮かべている澤田に、どこか恐れを感じた。

少々怯えながら千草は聞いた。

「迷うって、あのー……どこで？」

千草の言う「ここ」とは、言わずもがなこの降矢邸である。

千草の問いに笑みを浮かべて鷹揚に頷いてみせるのは鷺宮だった。何とも素晴らしい、小憎らしい程に好い笑顔である。

「お前も洩れなく迷うこと必死だな」

と言うよりも迷え、だそうだ。自分も勤め始めた頃は迷いまくったという事で、新入りには大いに迷って欲しいらしい。自分が迷ったからといって、他人にも同じだけ苦勞をさせたいとは、この男も相当にいい性格をしている。

+++

「ごめん、呼び出された。何か、ごたごたしてるみたい。ちょっと行ってこないといけないんだけど……」

「あ、ええと、俺なら……じゃない。僕なら平気です。先に宗一郎氏との用件を済ませていただいて結構ですから」

「いやいやいや、そう簡単に済みそうにないんだ。悪いんだけど後に……後と言うかまあ、そのうち話すってことになりそうなんだよねえ」

後に話す、と言うのと、そのうち話す、と言うのでは随分と違うのだがと、千草が若干引きつりながら聞いていれば、義経の口からは更なる問題発言が飛び出した。

「まあ、忘れなければ話すってことにもしておいてくれると助かるよ」

これで「こいつは全く話す気が無いのだな」と千草が解釈したとして、誰が責められようか。

忘れないでいただければ助かりますとだけ何とか答えたものの、千草は怒りにふるふる震えていた。千草の好みと言うわけではないが、こういう適当な受け答えは嫌いな類いのものであった。お陰で義経の信用はがた落ちた。

千草はまあいい、とにかくこの屋敷で暮らす以上慣れようとは思った。

それは好きか嫌いと言うなれば嫌いだとしても、慣れる慣れないはまた、別問題だと考えていたからだった。

もういいから忘れていなかったら後で話してくれと言い、宗一郎氏の元へ早く行ってあげてくれと千草が発した後のことだ。義経が出かける前に一言あると言いだした。

「この雫の部屋ってね、L字型の部屋なんだよね」

「へえ、そうなんですか」

千草は周囲を見回してみても確かに長方形のばかりでかい部屋の突き当たりには、折れて向こう側へといけるだろうと思われる扉があった。

その扉は、こちらもとても大きく出来ているようで、天井の方から吊り下げられた扉なのだ。三メートルはゆうにあるその扉に、でかいなと、至極当たり前の感想を抱いた千草は普通の反応であるだろう。

だが、義経と澤田の反応は違った。

とてもじゃないがまともとは言えない反応だったのだ。

「そうなんですか、か。へえ………そんな他人行儀な。あっはっは。何これ笑えな〜い」

「いやあ、他人事のようにおっしゃる。本当に笑えませぬ義経様。ふふふ」

「いや、他人事って言われても………」

事実千草にとっては他人事以外の何物でもないわけなのだが

二人は低い声音で乾いた笑い声を響かせ続ける。そして目は全然笑っていない。何とも異様な体である。

そんな二人に不気味なものを感じながらもどう対処すればいいのかが分からない。

仕方なしに千草は周囲に助けを求めてみるが、鷺宮は首を傾げているし、雫は不気味な笑い声を響かせ続ける二人を交互に見てはどうつしたものと行つた表情を浮かべているだけだ。どうやら何も知らないらしい。

何を言いたいのか分からずに困惑をしていれば、義経がその扉の前に立つようと告げた。矢張り目は笑っていないが声だけは軽やかでいつそ楽しげだった。

ここは逆らわないでいるべきかと千草がそのまま巨大扉の前に立つと、そこで義経が指をぱちんと弾いた。

「うわっ！」

千草の目の前で扉がカシャカシャカシャと音をさせながら開いていく。どんな手妻を使ったのかは知らないが、千草の目の前から消え失せた扉はカーテンのように奥へとかつてに仕舞いこまれて消えてしまった。どこかにスイッチでもあつたのだろうかと考えてみたが、先ほどの指を鳴らすことが合図なのかもしれないと千草は一人で納得した。

どうやら扉は吊り下げられているだけで、鍵も何も無いようだ。引き抜けばそのまま開閉が出来る仕様のようだとしてとれた。

行き来するには簡単なほうがこの部屋の住人にとってみれば楽なはずだと、したり顔げば、奥へ入るよう促された。

千草が奥へと足を踏み入れてみれば、奥には真新しい家具が並び、壯観、この一語に尽きる空間が広がっていた。

圧倒されるほどに広い空間が広がり、そして家具はと言えば洋風すぎず、モダン、カジュアルと言った、どこか若者の使う家具のような雰囲気の家具が使いやすいようにと配置されている。本棚が二つ、大きな勉強机が一つと、その端には真新しいパソコンが一つ備

え付けてある。そしてクローゼット以外にキャビネットまであるのだ。いたせりつくせりである。

足元もふかふかとしていて真新しい絨毯であることに気づくと凄いなと千草は漏らす。

「こつちもまた広い……んですね」

「あれ？なんだなんだ、こつちにいつの間にも家具なんて運び込んだ？」

先ほどまでの空間と同じだけの空間が広がっているのかと確認すれば、雫の部屋がいかに巨大な部屋だったかを知った。

けれど妙だ、鷺宮の反応がおかしい。

「運び込んだって、どういうことですか？」

「いや……ここは空き部屋だったんだけどなあ……おーい、義経。これはどういうことだ？お嬢のために新しい家具のプレゼントでも……って、おい、こりゃあまさか」

空き部屋に運び込まれたばかりの真新しい家具。そして新しい家具を買い与えられるはずのない雫の、それも、使われていないはずのもう一方の部屋にあるという事実。これが指し示す事を千草も今、思い至った。

そして、それが間違っていないことを鷺宮の反応　　鷺宮は雫と千草を交互に見て、最後に嘆息をついたのだが、それがどこまでも重苦しい息で、千草は嫌でも気がついてしまった　　で確信すれば千草はうめき声を上げた。

「宗一郎氏は、一体何を考えているんですかね？」

「それこそ、こつちが聞きたい」

男四名が重苦しい空気に包まれていると、雫がとことこと扉の奥へとやってきた。

そして中を見て、大きな目を瞬いて首を傾げた。それはどこか小動物にも似た動きが可愛らしいが、この空気の中その動きをされてもどこか滑稽にしか映らなかつた。恐らく雫も緊張をしているのだろうとは思うが、それにしても今は、何と言つても笑えないのだ。

雫は本当に新しい家具が完備されたいと知ると、一体どうしてこのようなことになっているのかと首を傾げた。先ほど運び込まれた真新しい家具を目の前にして、そしてその家具がここにあることを知つても、どうしても頭の中で繋がらないらしい。

義経を最初に見て、そしてついで鷺宮を見る。けれど何を言つても出来ずに、雫は困り切つたような顔をして立ち尽くした。

これは嫌でも認めなければならぬということらしい。

雫はもう一度室内をよくよく観察してみる。そこで始めて気がついたことがあつた。

「ベッドがありません」

「ねえな」

「ないようですね」

「なんでだろうな……」

「しばき殺す」

全員が雫からはそつぽを向くようにして各々答えると　一名全く関係の無い事柄を口に行っているが誰もそれに対する突っ込みは無いようだ　嘆息を零した。それも一斉に。

おろおろとしながら雫がまたも端的にそれを告げる。

「ソファもありません」

「ないんだな」

「どうしてでしょうね」

「何を考えているんですか宗一郎氏……」
「絶対に殺す」

雫は考えた 意図的にどろどろとした殺意を垂れ流しにしている父親は無視して が、簡単な結論しか出てこない。千草はどうやら雫のベッドを使って寝なければいけないらしいと分かってしまったのだ。

けれど雫はこう考えた。宗一郎は雫から寝所を取りあげたのかと寂しくはあったがそれもまた仕方ないのかもしれないと思い、こくりと頷き納得しようと努めた。

別に寝るのはソファでも構わないし、一応は雫の身体をすっぽりと包みこめるほどに大きなソファも雫の部屋には完備されているわけだ。床に寝ることにならずに済んだだけましかと思いなおし、よしと腹をくくった。

「同じ部屋なようですが、扉は締め切りでも開けはなっておりまして、私は一向に構いません。特に問題はありませんので」

「いや、ちよつと待てよ！」

「雫?!」

「お互い干渉はしないと仰うことで。基本的にはそのようにしていきましよう」

「あの、いや、ちよつと……ベッド、一つしかないんだぞ?それも、この扉は鍵が閉まらないみたいだとか……」

「こういう形の扉ですから元から簡易扉としてつけただけなのです。最初は扉なんて無かったので問題はありません」

「おおありだよな?!何言っちゃってくれちゃってんの雫?!おかしいよ?!おかしいからね?!」

千草は気にならないのかと告げるものの、何が気にならないのかが分からない雫は問題はありませんと言うだけだ。全くもって問題

はおおありなのだが、周囲の慌てふためく様を当人だけが理解しないで落ち着き払っている始末だ。どうにも歯がゆいものがあった。三人が揉めに揉める中、鷺宮が片耳に手を当てて眉根を寄せて何やら考えこんでいる。ぴくりと片眉を上げると、鷺宮は義経に呼びかけた。

「義経、ちよつといいか？」

「何かな鷺宮君?!今それどころじゃないんだけど?!」

「工事業者が来るらしい」

「そんなもんどうでもいいよ!後にしてよ!」

「いや、この部屋に来るようなんだが……」

「工事?何の工事ですか?」

「いやまあ……その、扉についての工事、か?」

全員で一斉に吊られて壁の中へと消えた扉をじいつと見つめた。

これを工事する?

「取り外すんじゃない?」

鷺宮がぼつりと呟くと、義経は頬を紅潮させて吠える。

「……み、認めないんだから!認めないったら認めないよ?!」

千草はとことん頭が痛かった。

目障りにならないように努めるので宜しく願いますと雫は告げると、そのまま自室へと戻りかける。それを待ったと、当たり前だが追うのは千草だ。

「まだ何かありますか?」

「いや、他に言うことあるだろ!？」

「ええと……ああ、屋敷の中を案内しますね」

「違う!いや、違わない!」

確かに千草もこの歳で迷子にはなりたくない。だから案内はして貰えるならして貰いたいところだが、一体どういう神経をしているのかと疑うが、雫はどこまでも落ち着きはらっていた。　　といつても、千草が近付けば小さく肩を震わせているように見えるため、別の意味では緊張をしているようではあるのだが。

千草は額に手をぴしゃりと打ちつけた。

「もついで……」

どうにも付き合いきれなかった。

13 (理事長代理に任命です) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

13 (理事長代理に任命です)

義経は娘の態度に安堵を覚えはしたが、それでも若干すんなりとはいかないものがあつた。

「何と言うか、お嬢もどうも……」

「男性と言つものが分かつていない風ですよね」

「そうそう、それ！なんつか、嫌われてる人だから手を出されないと思つて……凄いい理屈でものを考えるよな。あいつ」

そもそも雫は自分と同じベッドで寝る様にと宗一郎が言外に告げていること等頭にないのだが、ある意味では良い様に解釈したらしい大人三人組は言う。

このままでは千草以外の男に手を出されかねないのでとの懸念すら湧いてくる。いつそ貞操観念についてももう少し危機感を植え付けた方がいいのではと澤田が主に告げれば、その主たる義経はそこまでしたくないと言い、首を横に振るのだった。

雫がそういつた物事に嫌悪を抱いているのは視なくても義経には分かつた。いつ起こつた出来ごとかは知らないし視たくもないが、それでも、以前異性に対してそういった事柄による怖い思いをしたことがあると知っているだけにそんなことは出来なかつたのだ。

「まあ、でも心配はして損した感じはするよ。それと、雫が全然そういうことに興味無さそうで良かったかなあ……」

父親という立ち位置からしてみればほつとしたところである、というわけだ。

疲れた様子でそう言われたとて二人からしてみれば納得がいかないわけなのだが。それでも二人は何も言わなかつた。義経の意向に

逆らうことは二人には考えられなかったからだ。義経が要らないと言っているのであればそれは不要物である。だからこそ、雫にそういった物事の植え付けは必要が無いという判断になった。

兎に角雫と千草の件に関しては一旦置いておくとしても、宗一郎が何を言ってくるつもりなのか、先ずそちらの方が問題だった。

「なんかさっきから煩いんだよな、向こうの方」

「煩い？」

鷺宮が指し示す方には宗一郎の私室があった。と言ってもまだ三階に三人とも居るために、それが実際に目に見えるわけではないのだが。

執務室の手前に私室がある宗一郎の部屋作り、それは三人ともに全員が頭に入れてあった。

鷺宮が言うにはその周辺で何やら忙しく音がすると言うのだ。

「僕は鷺宮と違って耳そんな良くないから分かんないけど。そんなに煩いの？」

「煩いつつか、使用人が何人か来てるみたいだぞ？」

「はて、本日は何かありましたかね？」

「さあねえ？僕ら今日帰ってきたばかりだし。それにまだスケジュールも見えてないからなあ」

義経がしきりに首を捻っていると鷺宮がまた片耳に手をあてている。何か聞きとったのかと思っただが、義経は耳を凝らす鷺宮の邪魔をするわけにはいかないと黙って鷺宮の言葉を待った。

鷺宮は聞こえてきた音に驚いたように目を見開いた。ついではつと宗一郎の私室のある方へと顔を向けると戸惑うような表情を面に張り付けて唾を飲み込む。

「どうかした？」

「宗一郎様は、引越しても為さるつもりらしいが。お前、聞いたか？」

「え……何それ、聞いてないけど」

どういふことかと義経も鷲宮も困惑していると、澤田が言った。

「兎に角、いってみましょう。本人より呼び出されているのですから直接聞いて見ればいいわけです」

それは尤もな意見であったため、三人は直ぐ様階下へと降りていった。

階下へと降りて見ればスーツケースを持った使用人と、二名程すれ違った。中身は重いのか、一人が一つずつ抱えるだけでやっとの様子だ。中身はどうやら衣服ではないようだ。一週間程度の滞在用のスーツケース一杯に、衣服を思い切り詰め込んだとしてもそんなに重いはずがないからだ。

「本当に引越しても為さるんですか？」

スーツケースは二つ出ていったところだが、今もまた新たなスーツケースを持って出て行くこうとしている使用人が現れた所で、最低でも三つはスーツケースがあるのかと分かると流石に旅行の量では無いだろうと分かる。

「僕、てつきり旅行のつもりなんだと思ってたんだけど、父上は旅行する時は基本的に長期滞在だとしても向こうで何でも買い揃えるから、こんな量を持っていくとしたらほんとに……」

義経はその先が出てこなかった。

先ほど仲たがいがいる形になった時、その時のことを義経は思い起こした。

まさかあれが切っ掛けで出ていくつもりなのかとも思いはしたが、けれど宗一郎はそんな馬鹿げたことで出ていくはずがないのだ。ではなぜ、先ほどは何も言いださなかったのか、それが分からず義経はただただ戸惑った。

「遅い」

執務室まで赴けば、開口一番そんな言葉を投げられる。宗一郎には苛立った様子はないが、それでも流石にこれには反論の余地もなく、義経はただただ恐縮する。かと思いきや、義経は怒っているようだ。宗一郎に詰め寄る様にしてどうということかと問い直し始めた。

「どうということか、とは？」

「これ、このまんまでしょ？一体どうということ？引越してもするつもり？凄いや荷物じゃないか！何これ？！」

「所在は移すつもりはない。ただ暫く海外に住む」
「住む?!」

反射的に叫び声が喉の奥から飛び出てくれば、宗一郎は顔を顰めて耳に手をあてて呻いた。大変痛かったらしい。

「喚くな。ただの出張だ」

「いや、だってそんな急に」

今までに無いことだったために義経は酷く困惑した。

宗一郎は義経のスケジュールを大体だが把握している。そのため、いつ頃帰る予定かを知り、いつ頃出かける予定かも把握していた。それは六花神の仕事巾中であろうとも、降矢の仕事であろうとも同じだった。

宗一郎も同じく自分のスケジュールを義経に伝えていた。こちらは大きなスケジュールである場合は伝えてほしいと、義経から言い出したことだった。二日以上屋敷をあける場合は特に早めに知らせてくれるようにとも言い含めておいた、はずだった。だと言つのにこれは一体どうということなのか。

「何も言われてないよ!」

「そうだな、急に決まったことだったからな」

「急過ぎるでしょ!?! 一体何? 海外つてどこ!?!」

何から聞いていいかが分からないまでに混乱が極まった様子。義経は、自身の髪をぐしゃぐしゃとかきまわすようにしている。どうやら苛立った時の癖らしい。

「貴様が戻つたのだからちようどいい。暫く降矢に滞在出来たはずだな?」

スケジュールは向こう先数年まで把握 数年程とはいえ、後で変わるものもあるが、それでも大体はこういう日程にしましょうと決まっている予定である しているにもかかわらず、こうして念を入れて聞いてくるとは、矢張り本当に長期滞在で、しかももう決まったことなのだと、否が応にも理解した。

つまりはこうして今呼び出してそれを告げるといふことは、それほどまでに切羽詰まった用事でも出来てしまったと言つことなのだろう。

そういつことかと悟ってしまえば義経は諦めたらしく、なれば事

態を正確に把握しようとするに努めたようだ。

宗一郎の滞在先、連絡先、それらを手早く書きとめ始めた。

「それで？ホテルの方は後から連絡してくれるとしても、緊急で連絡するにはいつもの連絡先？それともロンドン支社までかければいい？」

「いや、ヨーロッパを飛び回ることになりそうだ」

「となると……緊急で連絡する場合は携帯か……」

「そうしてくれ」

宗一郎はそう告げる間も象嵌された豪華な机の引き出しを開けては必要な書類なり印なりを引っ張り出していく。

「五ヶ月はいられるんだっただな？」

五ヶ月とは義経がフリーで降矢の仕事に戻る期間内のことを指すもので、義経は首肯した。五ヶ月の間は六花神の仕事も降矢邸から通いでいけるレベルのものしかなく、距離はそうない場所の仕事以外無いのだ。

だから大丈夫だ任せて貰って構わないと頷けば安心したと言うこととか、宗一郎は満足げに頷いてよしと言った。

「六花学園も任せて良いか？」

「学園？他の理事に任せるわけじゃなく？」

理事は宗一郎の他に数名の者が兼任していた。だからこそ、こうした発言だったのだが、駄々をこねる子供に言い聞かせる様に

「貴様が、やるんだ」

と、言葉を区切って言われてしまえば反論する言葉を封じられてしまった。

「いや、……そりゃあ構わないけど」

けれど不思議な話だと義経は思う。

宗一郎が学園に関して任せると告げたのは始めてのことだった。それもそのはず、この学園は宗一郎の亡き妻の持ち物の一つで、誰かにそうやすやすと手渡すことは到底考えられなかったからだ。だと言つのにこれは一体どういうことなのか。

義経は少々怪訝に思いながらも、けれどそれを尋ねるには相手は少々、どこるか大変忙しそうである。今は聞くべきではないのか、そう思いとどまるにとどめておいた。

「いいか、自分の思うとおりにしろ。分かったな？」

「思うとおり？」

「異論は許さん。では出かける」

「う、うん……。いつてらっしゃい……」

自分の思うとおりにしろ　義経は言われた言葉を反芻し、漸く頭の奥底まで浸透したところで聞き返した。

「何だつて？」

けれどこの部屋の主は、息子を置いてさっさと出かけてしまっていた。

その足取りは、どこまでも軽かった　と思われる。

「父上が僕にそんなこと言うの、初めてじゃない？何？何か悪いものでも食べたの？」

14 (一つのデータ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

千草はクローゼットの扉を開け放つと嘆息を零した。

引越しの手荷物なんて千草は詰めた覚えがない。けれどこれは一体どういうことなのか。クローゼットの中にはみっちり千草の衣服が納められているのだ。

因みに今朝はきちんと千草は寮の自分の部屋から登校したわけだと言っことは自ずと答えは出てくる。

要はこういうことだろう。誰かが学園へと登校を済ませたこの荷の持ち主。千草が居ぬ間に、これらを詰めて運び込んだのだ。

まあその犯人の検討は大凡つくものの、げんなりとする。

寮の管理を任せられている寮長か、もしくは寮の運営をしている管理会社か。どちらにせよ自分は売られたのだと千草は気づいたからだ。

泥棒かと声高に叫びたくはあったが、それでも訴えようにも無理だろう。千草の細々とした荷物は全て、降矢に運び込まれている。

一つとして欠損することなく、ただ運ばれただけなのだ。その時点で盗まれているには当たらず、降矢側から「千草から荷物を運ぶよう頼まれた」とでも言われれば何も言い返すことなど出来ないのだから。

確実に仕組まれていたことなのだろう、そう気づいて手も足も出ない自分に苛立たしく感じ、そして無力感を感じた。

「……宗一郎氏は、どうやら俺を逃がす気が全くないようだな」

まあ、逃げられるとも思っていないし、千草自身も逃げようと考えてもいなかったが。

それでもだ、こういうことを自身の知らぬところでされるのは大いに不服だった。

千草は渋面を無理矢理押し殺すと、いつものように余裕を見せるように笑みすら浮かべて見せた。

こんなことくらいで何か反応を見せれば向こうは喜ぶだろう。であれば、喜ばせるわけにはいかないのだ。

兎に角今はこのまま様子を見るしかない、か。

にしても無駄に広い室内だとぶつくさと一人ごちると、千草は衝立の向こう側にあった机の引き出しを一つ一つ引いて中を確かめていく。

「おかしいな。入ってると思ったんだが」

特に中には何も無い様子だった。

これには少し肩透かしを食らったような気持ちになったが、中身がないならそれでいい。千草は鞆の中身を取り出すと、引き出しの中に一つ一つ詰めていった。

そうして全て納めてしまっても引き出しの中はかなりの余裕があった。

「でか過ぎだ」

余裕を持った作りと言うのもこうまで余裕がありすぎるとむしろ邪魔になるのかと嘆息を零す。中に入れたばかりのノートは不釣り合いな引き出しの中で妙に浮いて見えた。

「もうちょっと……なんか、うん……」

せめてリングノートの大きなものでも買えば良かったのか、安売りにしていた薄めのノートでは引き出しの中は空白が大きすぎるように見えた。

真新しい机には、同じく真新しいデスクトップパソコンが鎮座ま

しましている。ここにあるのであればこれも自分のなのだろうと一人で納得すると、千草はパソコンの起動に取りかかった。

起動ボタンをプッシュすると、カタカタと極々微細な音をさせてパソコンが動き出していく。

画面が二度程変わると出てきた初期画面を見て目を細めた。

「やっぱりな」

机の中に何も入っていないということは、恐らくはこのパソコンに何かあるのではと千草は考えていたのだが、どうやら当たりのようだ。

千草はコンピュータのアイコン、インターネットのアイコン、ゴミ箱のアイコン、アンチウイルスソフトのアイコンがある画面に一つだけ真ん中に置かれているテキスト形式のファイルがあるのを見れば、嫌でも気付けよと暗に言われている気がした。

テキストをクリックするとファイルがぱっと開く。

中身はと言うと 千草は中身を見て息を飲む。予想外のものが画面に広がりを見せたのだ。

「文字……化け？」

そんな馬鹿なと別のソフトでファイルを開こうと試みるが、何度やってみせても文字化けしてしまう。

どういふことだ、壊れてるんじゃないのかと千草は苛つくも、十分も試せば諦めた。

恐らくこれは壊れているわけでもなく、間違えたわけでもない。

「暗号、か……何か、特殊なことをしなければ見れない仕様か？」

とにかくこの中には、宗一郎が自分にそのまま渡せない情報が入

れられているに違いないと千草は考えた。

どうにも今回の降矢との許嫁、婚約、これらの話はきな臭い。だから説明をと思つても宗一郎は学園で聞いてみても何も話さず、尋ねたところでのらりくらりとかわされてしまった。

そして当の本人である雫も知らないときて千草はきな臭いどころか山火事だ、ぶんぶん臭うぞと考えたわけなのだが、本当に何かこれには裏があるようだ。

千草はそのファイルをフラッシュメモリにコピーすると、そのまま内ポケットに落とし込む。

「健に後で見せるか」

暗号ならばいいが、何か機械　それもソフトウェア関係に関する処置は自分には難しい。

兎に角ここでは出来ない処理になるだろう。それだけは隠された形式という事実からして分かることだった。

さてどうするか、次は何をすべきかと千草が考えていると壁を叩く音がする。

千草が振り返ると引き戸が無くなった壁の脇に雫が立っていた。

「済みません、お邪魔でしたか？」

「いや、何か用か？」

「食事の用意が整いました」

「……今いく」

千草はパソコンをそのままスリープ状態にして席を立った。

彼にしてはすんなりといつてくる気になったのは何故だろうか、雫は多少首を傾げる思いがしたが　間違つても自分についてくるのが当たり前とは思っていないのと、千草のことだから自分が呼べばそれだけで怒鳴るのではと考えていたのだ　それでも良かった。

これから同じ部屋で暮らさねばならないのに、何かあるたびに怒鳴られていては身体も心も持たない。もしかしたらこれからは多少仲良くなれるのでは、仲良くしてくれるつもりがあるという意思表示なのではと考えた雫だが、無情ではあるがそんなはずもなかった。千草はそんなことを気にして雫の後についていつているわけではなかったのだ。

くるるるるっ

雫にはばれていないようだが、千草の腹は先ほどから、ひもじい、辛い、何か食料を、と鳴いている。これこそが千草が怒鳴りつけない最大の理由だった。

流石に千草も置いていかれると食堂の場所が分からぬため、大人しかったのだ。

けれど雫はそんなことは知らない。

ただ「千草が怒鳴らない」という事実だけが彼女の頭にあり、そしてこれからは普通に接することも出来るようになるのかと淡い期待を抱いていた。

部屋をでて雫の後をついていくと、はたと千草は気がついた。

先ほどの会話はどこか夫婦のようではあるまいか、と。それに気づけば愕然とする。いっそ頭をハンマーで殴られた気がした。

「……冗談、笑えないぞ」

それも亭主関白タイプの旦那がするような返事だったなとまで考えればいよいよ不機嫌になった。

「俺は……女は嫌いなんだ」

櫻子あたりが聞けば鼻で笑いそうな言葉ではあるが、本人は青ざ

めた顔で何やら深く考え込んでいた。

+++

二人きりの晚餐に雫は緊張しきりだった。

何故か義経達の居ない食堂には、緊迫した緊張感が漂っている。

それもそのはず、千草が妙にぴりぴりとしているのだ。

怒ってるのでしょうか？

呼びにいったときは普通にしていたように思うのに、どうしてか食堂はここになると告げ、千草をくるりと振り返ったときにはもう冷たく射るような眼差しになっていた。

何か不興を買うようなことをしでかしたのかと考えてみたが覚えがない。

もしかして……

まさかではあるが、雫が歩くのが遅かったと言っことだろうかと落ち込んだ。無駄なお喋りはしてくれないだろうからと、黙って黙々と歩いていたのだが、それでも彼はお冠なのである。だから恐らくは歩幅の小さい雫を鬱陶しく感じたに違いない。そう考えたのだ。

顔を窺うようにちらちらと雫が盗み見れば、その都度千草からぎろりと睨まれて、雫は震え上がった。

千草の虫の居所が悪いらしいと思うと、何とか間を持たせようとするものの、雫が何をしても気に入らないらしい彼のことで、逆に怒らせるのは目に見えている。

雫はうんうん唸って考えてみたがやはり駄目だ、何もいい案が浮かばなかった。

「宗一郎氏は？」

「……はあ」

「おい」

「……むづ……どうしたら」

「おいつて。おい、聞いているのか？」

「……はい！わ、私ですか？」

まさか千草から話しかけてくるとは思わず、雫は慌てて返事をした。お陰で銀食器が一つ手元から転げ落ちてしまったが、給仕に付いている使用人が替えを置いて落ちたものを拾い上げる。それに有り難うと礼をして軽く会釈すると、千草へと雫は尋ねた。

「何でしょうか？」

「宗一郎氏はどうしたんだ？まあ、あの三人もだが」

「お父様達はあれきり戻っておりません。どうやら火急の用件であったよう。なのでお爺様も恐らくは、それでなのではないかと」

宗一郎の話が出てきたあたりで羽山が進み出てきた。

「その件なのですが」

雫はまたも慌てる。羽山が二度も自分に向けて言葉を発する日など今まで無かったのだ。

今日はおかしなことが続くものだと思うものの、それでも頭を打ったのかとは流石に聞けない。仕方なく何とか平素を装って雫は何かと尋ねてみた。

「旦那様はこれより後数ヶ月程海外へと出張となります」

「……え？」

「旦那様？」

「ええと、お爺様のことです」

宗一郎のことを旦那様とこの屋敷では呼ぶのだと知ると、では何故その宗一郎が出かけてしまったのかと尋ねた。

それもそうだろう、普通に考えてあり得ないことだ。

千草はフォークとナイフを置くと、苛立ちをそのまま視線に乗せて羽山を真っ直ぐに見つめた。

雫も慌ててフォークとナイフを置くと、再度どうということかと尋ねた。食事をしている場合ではない。

兎に角千草と降矢の人間を争わせてはいけないと、有事の折りに自分が割って入るつもりで会話に入っていたが、千草が怒るのも無理はないと雫は思った。

彼が怒るのは当たり前なのだ。

千草はその宗一郎から呼び出されてこの降矢邸に居る。それを呼びつけた本人は出かけます、数ヶ月居ないのでそのつもりでと人伝に聞いても承伏できかねるのはどう考えても正論過ぎた。

「そのままの意味で御座います」

「そのままじゃ意味が分からないな。ちゃんと答えてくれないか？どこに、どうして、行くんだ？そして俺を呼びつけておいて……おかしいだろ」

「申し訳ありませんが旦那様より言付かったのは、これより出かけるのとこのこと、そして高遠様のこれよりの面倒は私が仰せつかったと言うことしか私も存じ上げません」

さらりと涼しそうにそう告げられれば煽られるようにして怒りが増大するのを感じる。

千草はがたと大きな音をさせて席を立つとそのまま食堂を後にした。

腹の虫が鳴くが、それでも後悔は無かった。

「つきあつてられるか！」

「千草っ！」

雫はどつちやら千草を追ってきたらしい。

「うるさい！ついてくるな！」

「だって、」

「だってじゃない！」

千草を追ってきた雫に千草は怒りをぶつけるも、雫は何故か怯まない。追いつがる雫に鬱陶しいと怒鳴りつけようとしたところで雫に言われて千草はぴたりと口を噤んだ。

「せめて湯には浸かってください！」

確かに慌ただしく降矢邸まで駆けつけたために、千草は埃まみれだった。ついでに体育の授業もあったために汗にまみれてもいたため、さすがの千草も風呂もいらん！とは言えなかったのだ。

雫に着替えは湯殿にあるからそのままでもいいからせめてと言われれば、もう断れなかった。

ただし千草は

「お前が、そこまで言うから……仕方なくだからな」

と言った。

どうしても素直についていくには格好悪すぎると考えたらしいが、むしろこちらの方が格好悪いと言えるだろうに、気づかないのは一人だけだった。

「はい。ではしつこくお聞きください」
「ああ」

15 (風呂の使い方と方向音痴) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

15 (風呂の使い方と方向音痴)

湯殿の入り口であると言われて示されたのがどこかの銭湯か温泉の入り口かと思われるような大きさのものであり、言い方がこれでは適当ではないのだろうか、それでも、大変立派な門構えであると千草は思ったものだった。まあ、それと同時に呆れもしたわけだが、松で拵えたらしい作りの見事な構えの門が一つ。その隣にあるのは岩を砕いて作ったらしい何とも厳めしい出で立ちの門だ。その二つの門を示しながら雫は言う。

「日替わりで男湯と女湯が変わりますので注意が必要です」

「あ……ああ」

今日は男湯は松風呂で女湯が岩風呂らしいのだが、普通の一般家庭ではそもそも男女に分かれた湯自体を設けては居ないはずだ。そんなことさえ恐らく雫は知らないのだろうかと思えば、千草は頭が痛くなるのを感じた。どうしてこんな場所にきてしまったのだろうか。これがこいつの当たり前なんだろうな。

これだから金持ちは嫌なんだと千草はため息をついた。

松風呂が男湯と言うことであれば、見た体のままで考えて松作りの門を潜れば男湯なのだなどと判断した。そして岩作りの門が女湯なのだろう。

「それと、脱衣所に置いてあるバスローブは何着かあるはずですが、覆っているビニルにタグがついているはずです」

「タグ？」

「タグです。そちらにはアルファベットで書いてあるかと思うのですが、サイズはそちらを見て確認してください。サイズを書いたものになりますので。後、そちらのバスローブは次の日にそのままべ

ツドに置いておいてくだされば回収してくれるはずです」
「ホテルかよ」

全く持って贅沢にも程がある家である。

つくづく常識外の家にきてしまったことを後悔する千草だったが、それでも今そんなことを言っても無意味だ。最早なれるより他無いのである。

雫が千草の身体を頭の天辺からつま先までじっくりと観察してぶむと考え込んだ。

「Mサイズですか？それともS？」

身体のサイズのことだなと思ったので、千草はその問いにそこまですみじまにないと前置いてMであると告げた。

「では二番目の棚に置いてあるかと。シャンプーやトリートメント、それとコンディショナーはどうされますか？」

「どつという意味だ？」

「いえ……気に入っていてそれしか使わないと言っただわりがあるものがあつた場合、悪いかと思ひまして」

「いや、こだわりとかそんなの無いだろ。男だぞ？」

「そついうものですか？」

雫は首を傾げる。男の方だとこだわらないと言つ理屈は彼女には通じなかつた。それは何故か、簡単な理由だつた。雫の傍に居る男達は全てが全て、こだわつたものしか身につけない。そもそも何につけてもそつなのだが、こだわらないことが無かつたのだ。

そのため雫はこれが分からず、けれど曖昧に頷くに止めた。これ以上千草を刺激すべきではないと考えたからだつた。

「備え付けてありますのがそれら三つと固形石鹼があります。剃刀等はバスローブが置いてある場所にあるかと思しますので必要であればどうぞお使いください」

「分かった」

「それではごゆっくり」

雫はそう告げると、そのまま元きた道を帰ろうとするので、千草は待ったとその背に手を伸ばした。今帰られるのは困るのだ。

薄い肩を掴むと、掴んだ千草のほうに驚いて引く程に、雫はびくりと大仰に肩を揺らして悲鳴を上げた。

「きゃあああっ！」

これには流石に面くらい、驚いて手をぱつと離すもそれでも恐怖は消えないようで、雫は千草から後ずさりして逃げた。

どうにも警戒心の強い猫のような反応である。ふれただけだというのに酷く警戒をさせてしまったようだった。

雫は目を見開いて今にも喉をついて自殺しそうなまでにその顔色を悪くさせている。息もだいぶ上がっているようだ。

千草はなんと声をかけるべきかと思っただが、それすら躊躇われる。普段であれば怒鳴りつけてそこまで俺が嫌いかと言うところだが今はなぜか言葉が出ない。

普段は雫がこんな反応を示したところで嫌悪しかわかないはずの自分が、今は罰の悪さを感じているこということに千草は気づかないが、そつと視線を下に落として千草はぼつりと呟いた。それは、やっこのことで彼が絞り出した言葉だった。

「いや……わ、悪い」

「……いえ、私こそ、済みません」

雫は深呼吸を二、三度繰り返してそれから千草に何かと尋ねた。
そこで出たのは千草からの気弱な言葉だった。

「置いていかないでくれないか」

雫は虚を突かれたのか呆然としたように口を　知られれば降矢
の人間達全員から怒鳴られかねないことだが、あんぐりと大きく
開いて暫し言葉を失った。

何とか言葉を取り戻した時には　暫しの間、その思考すら閉じ
られていたように思うが、そこまでではなかったと思いたい　聞
き間違ったのではないかとの思いがあったが、言葉を失っていた際
に二度ほど置いていかないでくれと言われてしまえば流石にそれ
はないと言っものだ。

明日は槍が降ります。

雫は本気で明日の天気を心配していた。槍が降らないまでも、雹
程度　程度と言ってしまえるかは大いに疑問が残るが　は降る
のではないかと思う。

「……どういうことでしょうか？」

いつそのこと「私にそんなことを頼むなんてあなたらしくもない」
そう言えればいいが流石にそれは意地悪と言っものだ。

雫はその思惑だけを尋ねるに止めた。

すると千草は頬を染めてこう言った。

「ま……迷子になりたくない」

明日の雹は確実だろう、雫はそういたって真面目に考えた。

雫は大きな眼を見開いて、ついではちばちと瞬きを繰り返してか
らようやく答えた。喉はすでにからからだ。緊張をし過ぎているの

だろう。

「では、これから三十分後に今のこの場所で合流と言うことで。それで宜しいですか？」

「……頼む」

そして各々が自分の性別の湯殿に消えていった。

雫はネグリジェを取りに自室へと戻ろうと考えていたのだが、千草にああも置いていかなくてくれと言われてしまえば仕方ない。では隣で湯に浸かれば問題なからうと考えた。

よってこれは当たり前のことなのだが、千草も雫もバスローブ一枚の出で立ちだった。それも、汚れ物 言わずもがな先ほどまで着ていた衣服のことだが はそのままでもいいと置いておくよう言われてしまったために、二人ともその下は裸身のはずだった。

きつちりと合わせを閉じているが、それでもバスローブの下を想像すると閉じていようがいまいが関係ない。

それは少なくとも千草には、だが。

湯に温められた肌は赤みが差して艶めいて見える。そしてほんのりと湯上がりのいい匂いが鼻を擽るとくれば嫌いな相手だろうがやはりぐっとはくるものである。

ぐっとなって……いや、俺に限ってそんな馬鹿な。

頭を振るも千草の頭にわいた煩惱はなかなか消えてくれないようだ。どうしても雫の首筋に目がいつてしまう様子である。

「お前……それは反則だ」

「はい？」

「反則だ」

自分で置いていくなと雫に待ったをかけたことも忘れて千草は言うが、雫には何のことか分からなかった。首を傾げて何がですかと尋ねてくる。

「兎に角、お前が悪いんだ」

「……済みません」

何だか納得がいかないといった様子の雫を置いて、千草はずんずんと歩きだした。慌ててついてくる雫に舌打ちを打つと、千草は振り切れないものかと更に歩幅を大きくして歩き出す。

置いていかないと云っていたのは千草だと言うのに、本当にすつかりとそのことは頭の中から消え失せてしまったようだった。

けれど千草は千草なりに考えがあったから置き去りにしようとしていたのだ。

一緒に居たら宗一郎と千草の実の父の思惑にはまってしまう、それは嫌だった。だからこそ置いていきたかったのだ。共にいられなかったのだ。

それでなくともこうして先に許嫁だぞ、婚約したぞと整えられて、さらにはその相手と寢床は一緒だと、全てお膳立てを整えられてしまっているのだからこのまま思惑通りに運ばせるのは癪に障ると言うものだ。

「先に部屋に戻る」

「……え？あ、はい」

兎に角俺は手を出さないからな。

絶対に、そう心に誓いながら千草は歩を進めていく。

そもそも千草が好きなのは櫻子なのだ。

女性としては幾分身長が高く見える櫻子は、千草と並んでも見劣

りしないほどの身長だ。

けれど雫は自分の胸ほどの身長しかなく、そして凹凸はなくまあくびれはあるがそれも今見て初めて知ったため、あの学園の大多数が雫をつるぺたでまだ発展途上のお子様であると考えているに違いない。これで手を出したらと考えると少々外聞が気になるところだ。

やれロリコンか、幼児愛好のケがあったのかだのと言われかねない。そこまで考えて千草ははつとした。

いや、出さないぞ!!

手なんて出さないからな!

確かに首筋の艶めかしさに唾を飲み込みはした。確かに洗い立ての髪はさわり心地がよさそうだった。細身と考えていた雫の体はそれどころか華奢な体つきで、抱きすくめたとたんに折れてしまいそうだと思った。

だがしかし、千草は手を出すわけにはいかないのだ。

これ以上雫と傍に居るわけにはいかない。理性が欲望に負けてしまつと、頭の中で警鐘が鳴り響く。

千草は雫を置き去りにしてずんずんと更に先を突き進んでいく。

絶対に、絶対に手は出さない。

俺は手を出さないんだ!

頭から邪な考えを振り払いながら一心不乱に前を目指していると背後から声がかかった。

「ち、千草!」

「なんだ!」

「あの!」

「だから、なんだ!」

「そのまま真つ直ぐ行くと温室になります。自室へ戻られるのであれば上ですが……」

千草はびたりとその場で止まる。

その背後ではおろおろとしているらしい雫が居ることは気配で読みとれた。

そもそもこれは当たり前のことだが、道に不慣れな分際で、雫と離れられるわけも無かった。

「何も言うなよ」

「……はい」

千草の背中にはどこか哀愁が漂っている。

喚いたところでどうにもなる問題ではないのだが、千草は吠える様にこう言った。

「いいから連れていけよ!」

「はっはい!」

どうにも格好の付かない男であった。

+++

「十六の誕生日の朝。それまでにどうしても婚儀をあげなくてはならない。婚儀を……」

宗一郎はプライベートジェットのゆったりとした椅子に凭れながら誰にもなく呟いた。

「約束をしたのだ……」

時間がない、そう口にした後疲れていたのか、静かに皺の刻まれた瞼を落とした。

16 (同衾?いいえするつもりは全くありません) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

16 (同衾? いえするつもりは全くありません)

「いやらしいな」

「いやらしいね」

「いやらしいっいたらありませんね」

男三人が雁首揃えて言うことがそれかとは思うがここにそれを突っ込める人間は居ない。

義経は宗一郎からの引継書を読んで唸る。

「これずるいよね。雫とあれには手え出すなって。なにそれ」

「そのまんまだろ」

「わかっているけど! 結局あれ、追い出せないってことでしょ?! ほんつとむかつぱら!」

引継をすませるためにあらかじめ作られていたらしい書類は五十を越える枚数があった。何とも長大な量であることから、恐らくは元から今日のこの日ないし、近く義経が戻り、それと共に自分が出かける予定だったのだろうとわかる。

それらが指し示すこと それは、全ては宗一郎により仕組まれていたことだったと言っことだ。

そうは言っても何を仕組んでいったのか、それすら未だに全てを把握しきれない。

そもそも元より出かけるつもりであったのであればおかしなことが幾つかあった。

一つは、ではなぜ義経に前もって伝えてなかったのかということだ。

宗一郎はいつでも義経のスケジュールの把握はしていたくせに、理事を押しつけ海外逃亡を送るのであれば、ただ自分の仕事を押し

つけるだけなのだから隠す必要性がない。だったら何故隠すのか。これは先に伝えてもいいはずだ。なのにそれをしなかった理由がわからない。実に不可解なのだ。

次にあのように、反則気味な手続きの方法で寮生であった千草を寮から追い出す形にしてこちらへと住まわせたのはなぜだったのか。千草に手出しをするなど書いてあると言うことは、千草は元よりこの屋敷に住まわせるつもりだったのは、それこそ前から決められていたと見える。

そして義経が納得しないままにここに住まわせるつもりであることも分かる。

だが、それならば何故なのか。ああして無理矢理に寮から連れ出す必要性はどこにあったと言うのか。意味が分からなかった。

寮の手続きの書類も同じく山とある資料の中から発見されたが、本日付けで退寮手続きとなっている。それも無理に降矢が引き取るということで行われた手続きのようで、どうにもお粗末なやり方と言えるのだ。

「あのお人らしいやり方じゃない……」

腑に落ちない点多すぎるのだ。

更には雫の件に関してもどうやら生徒会の方にまで手を出した様子である。

「生徒の自主性を重んじる宗一郎様らしくありませんね」
「だなあ」

宗一郎が一体全体何をしたいのか、それが分からない。
義経は頭を抱えてしまった。

「上手いやり方じゃない。こんなの、父上のやり方じゃないよ」

「そりゃ……分かるが。だがあのお人のことだ、確実になんか理由があるんだろうな」

「でしょうね。宗一郎様のなすことに、今まで一つとして意味がなかったことがありますんでしたから」

「分かってるけど……こんなのおかしい。変だよ」

兎に角今分かっていることは、千草と雫に手出しができないこと。そして、義経は自分の思うとおり動くことを願われていると言っただけだった。

+++

さて、問題はここからである。

千草は大いに焦った。何せ整えられたお膳立てとは言え、据え膳は据え膳である。どうするかはそれこそ、千草の一存に委ねられていた。

雫の部屋にそのまま足を踏み入れて早々に寝るぞ、といえればいいのだが、いかんせん今までとってきた態度がそれをよしとはしない。

時刻は夜中の十一時を回ったところだ。そろそろ寝ようか寝るまいかと言ったところだろう。

どうすべきか　千草は少年らしく大いに悩んでいた。

悶々と悩んでいる千草が壁の向こう側にいるのをよそに、雫は教科書を引っ張りだして予習、復習に精を出していた。

きゅるるっ

雫は腹部に手をあてるとため息をついた。

「お腹が減りました……」

千草につきあった結果だとは言え、正直自業自得とは思いたくなかった。

そもそもどうして付き合ってしまったのかとすら思う。

ああまで嫌われていて、雫自身も嫌っていて、それでいて尚これなのだか本当に自分が分からないと雫は言いたくなくなった。

確かに放ってはおけなかった。

どうやら千種は無理にこの屋敷まで連れてこられたようだったし、そして宗一郎のわがままですませていい問題でもないが、で許嫁と交わす間柄にさせられた、互いに迷惑を被っている。妙な話ではあるが、仲間でもあった。

だからこの屋敷での生活に慣れるまではついていくべきか、とも思うのだが、それでも今日のような形で振り回されるのであればとも思うのだ。

「付き合えませんし」

食事抜きを何度も続けるようなことになるのであれば最早にべもなし、である。放置をしようとするは決めた。

未だ成長期に差し掛からない体に栄養不足は言語道断、大敵である。

百四十数センチと言う己の身長に雫はじれる。（細かい部分は正直口にしたくもないので割愛だ）それは、いつになったら自分には成長期と言うものがくるのだろうか？そんなことを日がな一日考えていたこともあったほどだ。

そこにきて栄養不足で育つものも育たなくなりました、では困るのだ。

だから千草がああして今日のように食事の席を蹴るようなことを

何度も続けるようならば、付き合うことなど出来ない。
早々に見捨てるが吉だった。

雫は予習復習を終えると自身の寝台を見やる。

そして暫し黙考すると自室を後にした。

雫がどこにいったのか、その答えはすぐに分かった。廊下に出て直ぐに雫は隣の部屋の扉をノックしたのだ。

だが、その扉から出てきた人物は千草ではない。ノックに答える声が扉の向こうから聞こえるが、それは千草にしては低音の音が響いていた。

「はいよー」

ぱたぱたと足音をさせて扉へと近づいてきて雫を迎え入れてくれたのは鷺宮だった。

雫は千草よりも上を見なければ視線を合わす事が出来ない鷺宮に視線を合わせるべく上を向くとあのう……と言いだしくそうに口を開いた。

「どうした？」

鷺宮は雫がきたことに疑問を抱いた様子もなく何かあったのかとどうしたか尋ねてくるだけだ。そして雫もそれを当たり前と考えているのか、申し訳ありませんがとそのまま話を始めた。もうここまできてしまつては腹をくくるより他は無いだ。

「うん？」

「予備の毛布等がありましたらいただきたいと思ひまして」

「……はは、ってことはなにか？少年とは別で寝るつもりなんだ

な？」

鷺宮はずばり言い切った。こうして雫が毛布を借り入れる理由はそれ以外ない。

そしてなにがしかの必要物資がある場合、義経に欲しいといえな
いこのお嬢様は、鷺宮を頼るのだ。

だから欲しいのは毛布だけではなく、毛布が足りないと言う事実
を義経まで陰徳してくれる人物、その二つなのだろう。

「はい。なので毛布が欲しいのです」

まだ季節は秋だ。だから上がけに毛布一枚でも十分寒さは凌げた。
なるほど、同じ寝台を使うでも、上掛けを別にするのであれば密
着しないと考えたのかと鷺宮は納得すると、そのまま奥へと引ッ込
んだ。

程なくして戻ると、その手には厚手の毛布が一枚と羽枕が二つあ
った。

「一つが攻撃用で」

そう言って鷺宮は一つの羽枕を雫に押しつけ、

「一つが自分の枕で使えよ」

そして二つ目を押しつけた。

毛布も手に取ってみて気がついたが、重さを感じさせない素材の
ようで、軽い。そしてとても暖かだ。

雫はそれらを受け取ると鷺宮に感謝し、笑みを浮かべる。
けれど鷺宮はいらないと苦笑して言うのだ。

「義経に怒られるから、感謝されても困る」

「どうしてですか？」

「義経は今回の件についてお嬢達二人には触ることを禁止されている。それこそそれはこの許嫁云々に関する全てになんだが……。だからお嬢から義経の部屋に逃げ込んでこない限り手出しが出来ないんだが」

びつと鷺宮は雫の胸元を指さすと、困ったように言うのだ。

「お嬢に毛布を貸したってなったら、少年と同じ部屋で寝るのを手伝ってやったのかって俺は怒られる。だろ？」

確かにそうなるだろう。雫が鷺宮に毛布を借りた時点で手伝ったようなものになってしまう。

けれど雫は違うと言いたかった。決して干草と寝るためにこれを借りていくわけではないのだ。

だが、鷺宮は聞いてくれない。

「ですが……」

「っそ。お嬢は義経にはいろいろと迷惑をかけたくない。ついでに、毛布の予備を借りにいくのも悪い気がするよきたもんだ」

「……」

義経には内緒にもして欲しいんだから俺はただ怒られるしかないんだよと言われれば、雫の胸は痛んだ。雫はそこまでは考えていなかったのだ。

何も言い返せない。浅慮だったと恥じ入る気持ちだった。

俯いてしまった雫の頭をぽんと軽く叩くと、鷺宮は励ますように言う。

「でもな、俺はお嬢が俺を頼ってきてくれて嬉しい。義経のことだけを思うなら、そのまま義経の部屋に連れていくんだが、そうしたくないのもあるんだよ。分かるか？」

「はい」

「だから、……ほんとに少年が嫌なら逃げてこい。俺は隣の部屋にいるから。今晚中くらい寝ないでいてやるからな」

「……いえ、それはだめです。鷺宮さんがそれじゃ体を壊してしまいます！」

「いいや、俺はやる。お嬢が泣いて喚いて助けを求めているかもしれないのに、寝れるはずがねえだろう？」

片目を瞑って茶目つけたつぷりにそう言われれば、雫は心の中にたまった重みが幾分軽くなったように感じた。

そしてついで言われた言葉に胸が熱くなる。

「偶には大人を頼りなさい」

頼る、頼るって……分からないです。

雫は大人をほとんど頼りにしたことがなかった。だからこそ頼れと言われて困ってしまう。

今のように毛布を借り入れるだけでも十分に迷惑をかけているはずだ。これは自分からすれば頼りにしていることになると思う。けれどこれは鷺宮からすれば当たり前のことであり、そして頼るには当たらないのだろう。

彼の言う「頼る」は、何かあれば助けを求める相手になるということなのか。そうと気づけば目の前がぱっと開けたような気がした。

雫は晴れやかな気持ちになると、笑みを浮かべて

「無いと思いますが」

と言い、こう続けた。

「では……何かあれば叫びます」

「おう、そうしろ。俺がちゃんと助けてやるから安心して寝ろ！」

「はい。それではお休みなさいませ」

恭しいまでにきちんとした腰を折る形の礼をして雫は笑った。その晴れやかな笑顔を見れば、もう十分だと鷺宮は思った。

数か月しかない待機期間、その間はきっちり守ってやるには十分な報酬を今貰ったと思ったのだ。

その笑顔さえ見れば十分だぜお嬢。

「ああ、お休み。いい夢を」

「はい。鷺宮さんもいい夢を」

「だから、俺は寝ないっつの」

「あ……そうでした」

「早く寝る寝ろ。そんで早く育てよ」

こんな感じに、と言いつつ鷺宮が手で曲線を描くように動かした。手つきは若干だが艶めかしいものを想像させるそれで、それはいわゆるボン、キュ、ボンという奴ですかと、雫はその曲線表すことを察してかちんときた。

「どうせ私は曲線がない真っ平らです！もう！鷺宮さんは意地悪です！」

雫にしては多少荒々しく扉を閉めていかれると、鷺宮はまだまだおこちゃまだなあと笑った。

幾分遠く聞こえはするが雫のもの分かる声が聞こえてくる。

「まだ十五歳です！まだ成長するんです！胸だって、お尻だって！まだまだ大きくなるんです！身長だって！！どうせ、どうせ小さいですよ！鷺宮さんの馬鹿！」

「あらら、嫌われたかね？　まあ、何にせよ可愛いこつて」

若干十五歳ではあるものの、それでも周囲に出遅れて発育不良であることは本人も自覚しているのかとも気づけば笑みは益々深まった。可愛らしいと思ったらありゃしない。

「早く育てよ……お嬢」

鷺宮の顔には、穏やかな笑みが広がっていた。

雫は自室へと戻るとそのまま寝台へといくのかと思いきや、長椅子を机の脇まで運ぶと、その上に先ほど借りてきた毛布を敷いて更に枕を置いた。

元から長椅子は中世貴族が生み出したうたた寝も出来る椅子の仕様をそのまま受け継いだものである。だから寝るには困らないサイズであり、寝心地もばっちりなのだ。

後でシーツを一枚用意して、更に寝心地をよくするべきかと考えつつ、雫は用意したばかりの寝床へとするりと潜り込んだ。

「気持ちいい……」

鷺宮の匂いがする毛布は、どこか義経に似た匂いもしていた。だから雫はまったりと微睡む。

たゆたう意識の中に身を任せるのはとても気持ち良かった。

「お父様……御免なさい。雫は一人でもう少し頑張ってみたいのです」

雫は義経の手は、まだ借りたくはなかった。

一人で手に入れた力で、父を、母を、助けたいのだ。

だからこそまだ借りれるわけがないと思っていた。

けれどもこれも思うのだ。

いつか鷲宮の言つとおり、義経にも甘えられるようになるだろう。頼つてもいいようになるのだろうか、と。

そんなことを考えながら深く深く、眠りの淵に落ちていった。

「お父様、御免なさい」

そんな風に寝入ってしまった雫に対する男たちの反応は各々興味深い反応だった。

千草の場合　自分が今日寝るはずの寝台が何故か寝室は真っ暗であるはずなのに空であることに気づくと、室内をぐるりと見回した。

そして小さな膨らみが長椅子の上にあるのを見つけると唸るように言ったものだ。

「何でそっちに寝るんだよ……」

雫は元から自分とは同じ寝台で寝るつもりがなかったのだと、この時千草は初めて気がついた。ある程度は期待していただけに……（シヨックらしく、千草は寝台へとふらふらとたどり着くとぼたりと倒れ込んだ。

もう二度と期待なんてするもんか　この時千草はかたく誓った。

「鷺宮の場合　ただただ啞然としていた。じつと隣の部屋に耳を傾けていたのだが、流石に彼も予想をしていなかった事態に耳を疑っているようだった。」

「なん……いや、ああ、お嬢……だからな。そうか。そうだよな」

長椅子をうんしょ、よいしょと抱えていつてどこかに置いたらしい音を聞いていると何をしているのかとはらはらし通しだったが、何かバリケードでも作っているのかと思っていたのだ。最初は、

それが予想を大きく裏切って長椅子を移動した上でそこで寝るといふ、千草からしてみれば、一種暴挙ともいえることをしているではないか。

啞然呆然とした後は、ただただ笑いがこみ上げてきた。

「く……くくく……そうか。そうかそうか。傑作だなあ……くくく」

そしてひいひいと笑い転げていけば、今度は千草の入室である。どうするのかと鷺宮は笑いで滲んだ涙を拭くとそのまま聞き入った。

「何でそつちに寝るんだよ……」

最早笑いを堪えることは不可能だった。

「あははははは！ハライテー！ハライテー！ハライテー！！ひーっひっひっ！あははは！」

そして手出しをしないのを確認すると、鷺宮は自分の仕事に手を着け始めた。

暫し仕事をそのままし続けていれば、何やら千草の声らしき声が聞こえる。

「だから女なんて嫌いなんだ……」

そんな言葉が静まり返った部屋から聞こえてくれば鷺宮は撃沈した。

「ね、寝言か？寝言でも恨み節かよ！くくくっ！やつべえ、少年のこと好きになりそうだわー。まあ、このまま寝言を聞くくらいはいいよな？」

このまま聞き耳を立て続けることも止めるつもりがないようだった。

「止めるなんて勿体ないよな」

悪趣味ここに極まれり、である。

義経の場合 澤田と酒を酌み交わしつつも、穏やかとは言い難い雰囲気である。

澤田が言う。

「義経様、もうお休みになられては？ついでにもうアルコールの摂取もお止めくださると……」

「いい。やだ、止めない。まだ飲む。って言うか雫がくるはずだから。それまで起きてるからね」

「ですがもう夜中の二時ですし……もうお休みになられたのではと」「そんなはずないだろ！？あんなのと同じ部屋ですよ？！同じベッ

ドですよ！？無理じゃん！無理じゃん！寝れるわけないよ！」

義経は信じたかった。愛娘があのような得体のしれない男 言わずもがな千草のことであるが と、そういったことに及んでいるとは信じたくなかったのだ。

だからあんな輩と同室で寝れるはずがないのだと言いきれば、澤田が首肯しながらこんな爆弾を投下してくれた。

「はあ……まあ、寝かせてくれないということはあるかと」
「不吉なこと言わないでくんない！」

毎回思うが澤田には義経を労わる気持ちは欠片も無いのではないかと思う。

表面上恭しくはしているが、それでも内心は全く違うのではないかと。鷲宮のように表面はああでも、中身はきちんと敬う気持ちは持っているのは正反対である。まあ、こちらも大変分かりにくい表現で中中に気づきにくくはあるのだが。

「ですがこの時間まで何も言ってきましたし……やはり最中なのか、それとも仲良くお二人で並んでぐっすり」
「どっちであつてもいやああああああ！！」

義経は耳を塞いで泣き喚いた。最早澤田の発する言葉一つとて、聞きたくない。

優しくない従者の言葉に傷つけられるばかりの義経は、そのまま一息にカクテルをぐっと呷ると突っ伏して泣き始めた。
今日と言う現実が、彼にはとてもきつかった。

この日、何も知らずに穏やかな眠りを得られたのは、果た一人だった。

「しずくうづー！」

「うるせえよ義経！！お嬢が起きんだろっがつ！ついでに寝言も聞けなくなんだろっがつ！」

「寝言って……貴方何してらっしゃるんですか？全くもっ……」

三人はそうして酔い潰れるまで酒を飲み、久々の安らぐ時間を共にした。

こうして夜は刻々と更けていった。

1 (天才は何事にも頓着しません) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

1 (天才は何事にも頓着しません)

鷺宮と澤田で見慣れてはきたが、ブラックタイを身につけた人間なんて、間違っても一般家庭の早朝、それも朝食を運んでくるスタッフとしては見ないと思う。

そもそも朝食を運ぶスタッフって何だ。あり得ないだろ。

千草はこんな目覚めじゃ目覚め立ての頭に霞がかかるなんてこともなく、毎朝ばつちりと目が覚めるだろうなと思った。

朝から何やら千草は疲れた様子である。顔を覆ってもう嫌だと呟いた。

「何でこんな……こんな……」

まだ二日目の朝だというのに千草は弱音を吐いているようだ。まあそれも仕方ないようにも思うが、雫はそれに気づくも何が嫌なのか自分なぞが質問していいはずもないと考えたために、困ったような表情をするにとどめた。

雫はワゴンカートを押している、スタッフの制服に身を包んだ少年に言葉をかける。朝の挨拶だ。

「お早うございます、奏」

「お早うございます、雫お嬢様」

朝食を乗せたワゴンを押して入ってきたらしい少年　　と言つていいのが疑わしい。少年とも青年ともつかない男なのだ　　に、千草は呻くように言った。

それは起きて早々驚かされたため、意趣返しのつもりだった。

「この家は朝くらい静かに寝かせておいてくれないわけか？」

「……ああ！えっと、雫お嬢様の許嫁さん？」

「……千草だ」

「許嫁さんじゃないの？」

「千草だ……名前で呼んでくれないか」

まだ寝ている人間の部屋に断りも無く入るなんてと皮肉をこめて言ったはいいが、雫の前にいる少年には全く通じなかったらしい。ぼやんとした口調で指を指されて今気づいたといった風で許嫁さんと言われてしまったのは、千草の残り僅かな気力もごっそりと根こそぎ奪われてしまった。

千草がげんなりとしていると、はいとタオルを手渡された。

「何だこれ」

「タオルだよ？見てわかんないの？やだなー」

タオルくらい見れば分かる。けれど早朝起こされたばかりでタオルを突き出される理由が分からないのだ。

千草はいらつきながら少年をみると、少年はワゴンの下からステンレス製の桶を用意する。それはよく、保健室等で見るとような桶に見えた。そこに少年はこれまた持ってきていたポットを持ち、桶の中にぬるま湯を注ぎ始めた。

千草が訳が分からないと眉根を寄せて考えこんでいると、雫が長椅子から歩いてきて言った。

「それで顔を洗うのです。そしてベッドの上で朝食をとります」
「……」

雫はもう先に洗顔は終えたようですっぱりとした顔をしていた。

「本来はこうして朝食をとる前に歩くのは不作法なのですが、奏、許してください」

「いいえー。誰にも言いませんから安心してください」

「有り難う、奏」

雫は笑顔で少年と言葉を交わしあっているが、千草は意味が分からなかった。

席を立つことが不作法とは何ぞやと首を傾げている。

千草にとってみれば、もはやカルチャーショックだ。異文化すぎてついていけなかった。

「雫お嬢様、何を飲みますか？オレンジとアップル、あとミルクがありますけど」

「ではそうですね、ミルクを」

雫は寝台の上　　と言っても千草がいる寝台の中央からはだいぶ距離がある、端に腰を下ろした　　に腰を下ろすとその前に置かれるように少年がトレイタイプのテーブルを備え付ける。

そしてその上にワゴンで運んできたカリカリに焼いたベーコンにスクランブルエッグを添えたもの、そして焼きたてのクロワッサンにサラダ、ドレッシングは三種類あるようで、自分で選んで使うようだ。デザートなのかフルーツも幾つか持ってきたようで、飾り切りされたオレンジやリンゴが爽やかな香りを漂わせていた。

そこまで並べ終わると少年はコップを用意し、その中にミルクを並々と注ぎこんでいった。

雫はそのコップを受け取ると笑みを浮かべて感謝の礼を述べた。

「有難う御座います」

「どういたしましてー。あ、許嫁さんは」

「千草だ」

恐らく雫に尋ねた時同様に何を飲むのかと言うことだろうとは思
うが、千草はそんなことよりも名前を呼んで欲しかった。許嫁なん
て呼ばれ方は不本意以外の何者でも無かったからだ。ついで言うな
れば許嫁と言う身分も宗一郎が居ない今、ある意味宙に浮いたよう
な存在だ。そんな呼称で呼ばれたくはない。

だが、少年はあくまでもそれで呼ぶつもりなのか、

「はい。許嫁さん」

と笑顔で言うのだ。

千草は頭が痛くなってきた。

少年の名前は奏と言うらしい。

何でも使用人の息子としてこの屋敷で暮らしているらしく、偶に
思い出した時に屋敷の仕事を手伝っているようだ。

今回もたまたま少年がきたようだが、朝食を運ぶスタッフの仕事
は、いつもは他の使用人の仕事なのだそうだ。

「じゃあなんで今日は君なのかな？」

雫ではないため、千草はある程度畏まった口調で話す。

「ええとですね、今日は皆さん嫌がっていました。だから僕がいき
ましようかーって軽い気持ちで言ってみただけですけど……そしたら
よろしく頼まれました」

本当に言ってみただけだったらしく、奏はまさか本当に頼まれる
とは思わなかったと零す。

「嫌がる？何故だろう」

千草は昨夜言われた使用人にすら嫌われているという雫の話を出した。よもやとは思うが、あれは事実だったのか、との再認識をし直した。

けれど少年がついで発した言葉により、それは少々別の形としての認識に変化する。

「なんかね、事後の部屋とか生々しくていけないって。だって昨日でしょうとか、やだーって。笑いながら言ってたけど、いまいち良く分からなくて。理由を聞いても許嫁が同じ部屋ってことは〜ってしたり顔って言うの？そんな顔で言ってくるだけで、もう一体何が嫌なのか……全然分かりませんが」

雫は黙って聞いていたが、奏の言葉に首を傾げて他には何も言うてはいないのでかと尋ねるも、奏は言っていないと繰り返すだけだった。それでは分からないと雫はお手上げのポーズを取ると二人で分かりませんねと食事をとりながら頷きあつた。基本的にこの二人、他者に対する興味があまり無いようだ。使用人が口さがない噂をしていても、内容が良く分からないならばまあ言わせておけばいいと言うことなのか、兎に角今は食事だと、トレイの上に置かれたものを胃の中に収めるといふ、目の前の仕事に取りかかった。

一人千草だけがテーブルに突っ伏しかけるが、育ち盛りの少年はこんなことで食事をだめにしてたまるかと途中で賢明に踏ん張った。事後、と言われて千草は気がついたのだが　そうか、この屋敷の人間は全員が全員ともに千草と雫とが許嫁と言う間柄の上、それも共に同じ部屋で生活することになったのを知っているのだと気がついたのだ。（普通に考えれば知っていて当たり前なのだ。使用人なのだから全ての私室をメイキングするのは彼らの仕事なのだから）

だからこそこうして昨晚はあれをそれして致しているはずであるから、と、要は初夜の席を設けたばかりの場所に待るのは嫌だと考えたのだろう。それもこれも、雫への嫌がらせの一環なのかもしれない。普通、そんなことくらいでは使用人が仕事を放棄する理由にはならないのだから。

そこに至ると千草は焦った。

冗談じゃないぞ！

実際には何も無かったと言うのに、使用人どころかこの屋敷で暮らす人間たちは全員が全員その勘違いをしていると言うことなのか。千草は唸る。

何てことになったのか、慣れればなどと言っている場合では無かったのだ。

雫は量が多すぎて食べれないといい、共に奏と一つのテーブルで食事をしていたが、その横から見える笑みが今は憎かった。

千草はろくに租借もせずに出されたものを喉の奥へと押し込む平らげると 勿体ない食べ方だなあと奏が言っていたが無視をした

ゴチソウサマと棒読みで答え、さつさと自室と割り当てられた千草の部屋のほうへと戻っていった。

千草がいなくなるとこそりと奏に雫は言った。

「ねえ奏」

「はい、雫お嬢様。なんですか？」

奏は凡庸と言われる顔つきではあるが、へらりと笑えば愛嬌があった。

愛くるしい顔で笑みを浮かべて雫の次の言葉を待った。

「申し訳ないんだけど、明日からもこうして食事をここへ運ぶ役目

をして欲しいんだけど……頼めますか？」

「いいですよー。でも、どうしてですか？」

常からこうした給仕のスタッフは別のものに任せられている仕事である。その仕事を奪うことになるのであれば、それなりの理由があるのか聞いておきたかった。

そうでなくとも奏はこの屋敷には居候のような身分でいるため、あまりもめ事に巻き込まれるのは嫌なのだ。

ただ、それでも雫のためならばそれも構わないとも思うのもあり、一応それなりの理由があるのか尋ねてみたいと考えた。

「理由があるならあるでそれを盾にするし、ないならないででっちあげればいいけどさ」

あっけらかんと言いつつ放たれて雫は虚を突かれたようになった。

そうだ、この少年奏は見た目に反して実に抜け目ない少年だったのだと雫はその性質を思い出した。

抜けているところは抜けすぎていってしまうほどに抜けていて、それでいて抜け目なく動くところは動いていてーだからこそいつだって頼りになる少年なのだ。

「ううんと、言いにくいんですけど、他の人に頼みにくくて……」

「それは食事を持ってきて貰うの、他の人じゃやだってこと？」

スプーンをくわえると奏は首を傾げるようにしてみせる。そうしているとなりに奏は小学生かそこらの年代にしか見えぬ、見た目の年齢とは実にそぐわない仕草が妙にしっくりくる少年だった。時折頭の方はしっかりとっているんだらうなと親でさえ心配になり奏に言うのだが、そちらは心配するだけ損だからいい加減あきらめるべきだらうと思われる。一応これにて彼は頭がいいのだ。

雫はコップを両手で持つと言いにくそうに口を開いた。

「千草にあまり……私は、よく思われていないのです。ですから、その……他の方と千草とを両方ともに朝から相手にする自信がありません」

そして毎朝別の寝床で寝て起きてとするつもりは、こうして寝台まで歩いて食事をとることになる、これも奏以外であれば不作法だと言われるだろうとも言つ。

朝から問題が山積している状態は流石に嫌だ。だからこそ雫は今更ではあるが、困ったことになったと思つたのだ。

千草が自室にくるといふことの問題点がこんなところにあるとは、雫は考えても見なかった。

「ふうん？許嫁さんにはよく思われてないの？」

「はい……むしろ嫌われているようです」

「うわあ、それなのに許嫁さんなの？」

「そのようです」

本当に、嘘のようではあるがこれは本当の話だった。

「ご愁傷様って言っちゃいけないんだろうね？」

「お気の毒、と言われても悲しいです」

奏は困ったように笑つと、いいよ、と言つた。

「そのかわり僕もここで毎回食事でもいい？別で用意して食べるのだと、僕の朝食冷えちゃうから」

今日の食事も本当は雫一人で平らげられる量だったにも関わらず

に、それでも冷え切った食事をとらせることが忍びないと奏にそのほとんどを分け与えてしまったのだろうと奏は指摘する。すると雫は奏にはかなわないと言い、肩を竦めて言うのだ。

「ええ、それは構いません。むしろ一緒に食事をしてくださると助かります」

雫は言い切ると、はっとしたような顔になり口に手をあてて口を噤んでしまった。

余計な言葉を口にしてしまった。そう悔やむような顔をしている雫に、奏は告げる。

「雫お嬢様も苦手なんだ、彼のこと」

「……はい」

「うん。そつか。いいよ、一緒にご飯して、一緒に出かけよう?」
「出かけられるんですか?」

「うん。今日は、だけど。お父さんがいい加減学校の出席日数を稼いでこいって」

「一応単位だけは足りてるんだけどなと呟く奏に、雫はくすりと笑った。」

「奏、単位だけでは卒業は出来ませんよ?きちんと六花学園にきてください。このままでは留年してしまいます」

「うん、まあそれでもいいんだけどなあ」

「いいから、いけと言われたというのであれば、いきましよう?」

「留年したら雫お嬢様と同じ学年になれるのに?そっこのほうがまだいいなあ。ね、駄目かな?」

雫はこれには返答に窮したものだっただけだ。

「留年は……やめておきましょう」

「駄目か……」

「ええ、駄目です」

送迎は車を今まで送迎していたお抱え運転手の島田がこのまま担当を継続することになった。

ただこれまでと変わるのには、そこに千草も加わるということだった。

千草は腕を組んでじつと何かを考え込んでいる。

邪魔をしてはいけないと、雫は哲学書を広げて読書に専念をしていたのだが、ばしりと千草が柏手を打つと「思い出した！」と吠えるように声を発した。

「……何をですか？」

そうだそうだ、あいつは！と、しきりと叫んでいる千草に雫は尋ねると、千草は雫に言うのだ。

「さっきのあいつ！奏だ！」

「奏がどうかしましたか？」

「奏！あいつ、うちの学年一位だろ！テストの時かたまにある特別授業の時にしか来ないからあんまり顔が知られてないけど、前に一度視聴覚室でぼーっとしてるところを見たことがある」

「ああ、そうです。奏は六花学園高等科、普通科の二年に在籍しています。クラスはどこだったかしら？確か……千草の二つ隣の教室

でしょうか？」

「こか。ああ、うん。そうだったな。 いやいや！じゃなくてだな！！なんであんなところに学年一位がいるんだってことを言うてるんだよ俺は！」

「奏はうちの使用人です。使用人の身内ですのでそれはまあ、そうですね。家族のようなものですからいるのは当然かと」

「そうじゃなくて！学年一位の杜村は病弱だから来ないって聞いたぞ？！ぜんぜん違うじゃないか！」

杜村とは、奏の姓である。だから杜村奏がフルネームだった。

病弱だから学園には来ないと言われていたのかと雫は今知ったらしく、目を丸くしている。

ついで雫は後ろを振り返ると窓枠越しに奏と目があつた。

奏は今、助手席に座っている。ひらひらと雫に手を振っていて、全く緊張感の欠片もないその奏の姿に、千草はこんなやつが一位だなんて許せないと歯ぎしりをしている。とはいえ彼は五十位前後の頭でしかなく、奏とは比べるべくもない学力のだが。それでも嫌なものは嫌らしかった。

「それは初めて聞きました」

「家族だったら知ってるよ！」

「いえ、いかないう理由が私に知っているものとは違うので」

雫はしきりとそういうことだったのですねと頷いている。

その手元にあつた哲学書は今ももう鞆の中に既に納められて空手のようだ。

「どんな理由なんだよ」

「えっと……」

「いえないような理由なのか？」

「いえ、そういうわけではないのですが……奏は集団行動が苦手なようで、授業などを受けにいつてもちよっと……上手く授業が受けられないようで、そのためお爺様が特別に通信教育のような教育にしよう」と

そのため六花学園高等科の普通科のカリキュラムを全て書面化し、それを自宅　　と言っても彼の場合は降矢の屋敷がそれにあたるがで行う方式にしているらしい。

だが、授業を受けるのとレポートをこなすのではわけが違うはずだ。生きた勉強をするにはやはり実地で受けるのが一番いいはずなのだ。けれど彼は書面化されたレポートのみをこなす日々でどう考えても千草は納得がいかなかった。千草からしてみれば、どれだけ塾に通おうが、家庭教師をつけようが、自分では無理だろうと思うからだ。それをたった一人で分からない部分を人に聞くこともせずにあれだけの点数を出すとは信じがたいものがあつたのだ。

「それであの学力って、なんか、……凄い勉強法なのか？それとも家庭教師が凄い人数ついてるとか」

「まさか！奏は一人で勉強するタイプですから。それに家庭教師なんてつけても、話が全く通じませんから無理です」

ぶるぶると勢いよく雫は首を横に振ると真面目腐った顔で断言するのだ。家庭教師なんてつけられるはずがないと。

流星にその剣幕には千草も驚いたようで、少々引き気味である。

「……通じないって宇宙語でも話すのかよ」

「いえ、ただ脳内補完が激しいんです。答えを導く式を書かないと分からないくらい複雑な式がありますよね？」

「ああ、中間式な？」

「奏は中間式を要せずに式をみただけで答えが一発で分かります。」

数学だけならばまだしも、化学式でさえそれなので、流石にちょっと……」

「……有り得ないだろ、どうやってだよ」

それは当たり前前の台詞であった。

千草の言葉を受けて雫は気持ちに分かると沈痛の面もちで口を開く。

「千草の疑問はもつともです。奏はどうやってやったんだと同じように周囲に聞かれます。そして彼はそれに答えられないのです。」
「何となくだよ。どうしてもわからないの？だって出来たんだもん」

なんて言われてください。発狂します。自分達が信じて疑わない知識を全てひっくり返されるんですから。それも、今まで自分達がやってきた通りの手法、その悉くを打ち破る形で答えを出していくんですよ？家庭教師は全て自ら辞めさせてくださいといって辞めていきました。二日も持たないのです」

ある種壮絶である。

千草は流石に言葉もないように絶句している。

重々しい空気とは裏腹に、窓の向こうでは奏がにこやかに何かを告げている。クッキーを片手に持っていることから、恐らくは「食べるか」と尋ねているのではと考えられるが二人は何故か胃もたれがするような気がした。と言っても、先ほどの奏の話聞いたお陰でそのように感じられるだけで、実際は胃がもたれているわけでは全くないのだが。

千草が外の景色眺めやり言った。

「俺、頭よくなっていいや……」

「いえ、頭はいいほうがいいと思います」

「なんでだよ」

「奏に”なんでわからないの？教えてあげるよ”と言われかねませんよ？」

学年一位様に教えてもらえるのであればいいことではないかと千草は一瞬考えたが、雫が首を横に振って言うのだ。

「奏は分からない人のことが分からないため、教え方が……凄いです。”なんでそうなるの？おかしいよ。式がそれなら答えは出てるでしょ？”なんて言われるんです。式から中間式を導き出す行程をすっかり忘れて分かるはずがありませんから、こちらは全く分かりません。けど、それでも分からないほうが間違っているそうです。中間式を飛ばして答えを”でた？まだなの？”と聞かれる日々がそんなにいいですか？」

「俺……勉強がんばる」

他に言いようが無かった。

けれど雫はそれを聞いても笑うでもなく真剣な表情でもっともであると言いつつ言う。

「そうしてください。と言うよりもむしろそうすべきです。お父様が成績が下がると奏を遣わすため、本気で取り組まないと、うちでは恐ろしいことになります」「頑張る……」

あの義経であれば千草には百位以下になったが最後、即座に遣わしそうである。

千草はぶるりと身を震わせると今日から勉強には本腰を入れるべきだろうと考えた。これでは遊んでいる暇などなくなるかもしれない。

後部座席で重苦しい空気が流れる中、奏は助手席でのほほんと島

田と少し早めのお茶をしていた。(と言つよりもむしろ早すぎる)
こちらは後部座席とは壁を一枚挟んでいるため、全く話の内容が
伝わらないからか、こちらは至って楽しげである。

「奏君、もうすぐつくよ」

「うん！あーあ、怖いなあ。やだなー。めんどくさいなあー。凄く
久しぶりだから緊張する」

「だからもっと小まめに行くように言ってるのに」

「だって、つまんないしなあ」

「でもねえ、そろそろきちんと通って貰わないとね。旦那様も困っ
てしまつたろうし」

「うん。そつだよねえ」

奏はこくりと頷くと、分かっているのかいないのかわからない顔
で言う。

「今日くらいは頑張ってみるよ」

「そうしてくれると有り難いよ。奏君のことはお父さんから頼ま
れてるからね。じゃあ門前で今日はおるすなつてことだから、ちょ
っと遠くだけどここら辺につけるね」

車を緩やかに停止させながら島田が言えば奏は間延びした声で返
事をした。

「はい」

2 (嫌がらせ、そして監禁) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

2 (嫌がらせ、そして監禁)

六花学園高等科には大きな食堂がある。食堂と言うからにはどこかばたばたとした忙しない印象が強いかもしれないが、ここ六花学園においてはその実は全く違う。

食べたいメニューを選んでそれを受け取り、そして各々で席を選んで自由に座る、そこまではよく見かける食堂の風景である。まあ、多少煌びやかな外観を誇ってはいるが普通は普通であるだろう。

だがここからは違う。思い思いのメニューを席まで運ぶと、席と席の合間を縫って歩いている給仕をするスタッフがいて、生徒達へと飲み物を配るのだ。

そして雫が櫻子の姿を見つけてそこまで歩いてくる間にもスタッフがワゴンを押して歩いているのと何度かすれ違ったわけなのだが。

「雫、こっち」

雫は誘われるままに櫻子の座る席の向かい席に腰を下ろした。

「今日は混んでるのね」

スタッフの他に生徒達も相当数が居るらしく、どうにもこうにも人の合間を縫って歩くのも容易ではない。

「仕方ないですよ。生徒会の選挙がすめば、今度は新規メンバーのお手並み拝見、六花祭です。皆忙しい時期ですから、カフェや外にまで出かけている暇が無い方が大勢いらっしゃいます」

カフェとは、ここ普通科棟と数学科棟の間に併設されているカフ

エである。喧騒を嫌う生徒は専らそちらを使用するのだが、こつ忙しい日々が続くとカフェまで出ている暇がないようである。そして外とはそのままの意味である。ここ六花学園より簡単な外出許可を取り昼食を取ってくるのだ。

「まあ、そうね……」

櫻子は避けていた話題　生徒会の選挙のことだが　を自ら振ってくる雫に言葉を濁した。なんと反応していいのかが分からないようだ。

六花祭とはこの六花学園高等科、及び中等科合同の学園祭のことである。

基本的にはこの学園はエスカレーター式の学校であるため、そこまで派手にやらずともと部外者は言うものではあるが、それでもこの六花祭は実に華々しく盛大に行われた。

どうしてそこまで盛大にやるのかというのは、この祭りの趣旨が

「まあ六花祭はチャリティーを兼ねてもいるから当然よね」

と言うことなのだ。

チャリティーを兼ねて行われている学園祭は、要はどのクラスが社会福祉にどれくらい貢献出来たかを競う、競争をかき立てる仕組みをしていた。それも、貢献出来たクラスは名誉にあずかれるのだ。

といつても、名誉なんてものは目に見えるものではない。だから実際には名誉、ではなくて目に見える形となって生徒達の元へとこれらは返るように出ていた。

六花学園は基本的には金持ち学校と言われ、恐ろしいほどの学費を支払うことの出来る、一部の富裕層の通う学校とされてきた。ただし、今現在はその様そうを変え、一般の生徒も入れるようになってきている。

一芸入試　そのような形ではあるが、学費を免除された生徒も在籍しているのだ。

だからこそこの学園祭は、金持ち学校との呼び声をどうにか払拭しようとして努力をしてきている六花学園を、内外に広くアピールするチャンスなのだ。

アピールとして分かりやすいのは福祉である。そのため、チャリティーとして外からきた客から得た金銭は、そのまま全てチャリティーとして出すようにする。とはいえ、実際にかかった費用分は学園に戻すようにとされているため、それをいかに増やせるかがポイントになってくるのだ。

そうして広くアピールすることが出来たクラスは表彰をされ、そしてポイントも稼げる仕組みになっていた。

このポイントだが、六花学園には中等科より選考科目ごとに通う棟が変わるのだが、その所属する専攻科目の棟でポイントは合算していく仕組みとなっている。

雫、櫻子、千草、健、奏達の五名が通うのは普通科になるのだが、その他に理数系に特化した数学科、陸上や球技などの運動に特化したスポーツ科に分かれている。もっとも、科ごとに分かれてはいるが、科の内部でも更に細かく専攻科目は分かれており、普通科であったとしても一口に普通科とだけで言い表すことは難しいものがあるのだが……。

兎角三棟にわけられた中高の生徒達は、その年度ごとにポイントを競わせられていたのだ。

そしてこの六花祭はもっともポイントがたまりやすい体育祭に次いで二番目にポイントがたまりやすいイベントだった。

因みにポイントをためて優勝すると直接いいことがある、というわけではない。ただし、優勝したことのない棟に所属していると大変不名誉な扱いを受けるといのは決まっていた。それも、不名誉な扱いを受けるのは外に向けてのものだけで　つまりはその棟に新しく入学する生徒数に思い切り反映されるのである。

それが一つの側面であるのだが、ここの生徒達はその年齢と不釣り合いなほどに外部と接触することが多い人種でもあった。そのため、どの棟に所属しているのか、何度（在籍中に）優勝したことがあったか、どれだけ福祉貢献が出来たか、それらが全てその生徒の評価、及び判断基準になるのだ。それは社会に出た瞬間に、何の後ろ盾も裏打ちもない状態のその生徒を見るための指標となるし、これ以上分かりやすい目安もない。

だからこそ躍起になって生徒達全員がこつしたイベントごとに参加をするのだ。

実に上手く出来ているものだと思子は素直に感心した。

そして文化祭では商いの練習といった一面もあるので、それこそいい勉強になる。経営学を専攻している未来の社長や、グループの後継ぎ達には現場を知るいいチャンスでもあるのだった。

「雫のところは何をするの？」

「まだ決まっていないうつです。といっても、もう決まっているのかもしれないませんが」

「どういふこと？」

「選挙に出るためと言つことで皆さんが応援してくださって……今まで、文化祭の話し合いは参加をしないでいいと言われていましたから」

それが今になって困ったことになったと思子は思った。

それでなくとも今の雫の立場は微妙だ。周囲から浮いていると一口に言えないほどに浮いていた。

雫は周囲の目があるにも関わらず、どんよりと沈み混んだどこまでも暗い表情で続ける。

「誰も教えてくださらなくて。ですからお手伝いも出来ないのです」

ですから困りましたと落ち込む雫の頬に、櫻子は唐突に手を伸ばすと薄く色をつけた爪をぐいぐいと食い込ませる。どうやら口角をつり上げようとした結果、思いあまって爪を食い込ませる形になってしまったようだが、櫻子は止める気は毛頭ないようだった。

「いふうっ！いひゃいれふ」

ぐいぐいと頬を容赦なく引いてやれば雫の可愛らしい顔は見る影もない。美少女が台無しである。

櫻子はふふふと笑う。

「駄目よ駄目。ほら、もっと口を横に引いてあげましょうか？スマイルスマイル」

「うひふひいふっ！」

ギブアップということなのか、雫が櫻子の腕をぺちぺちと叩く。すると櫻子はぱっと手を離れた。

ひりひりとするのか、雫は頬をしきりとさすって涙目だ。

「突っ込まれたくなくて笑顔じゃないといけないって言うんだっから、ちゃんとなさい。じゃないとこっちも心配になるわ」

「……ごめんなさい、櫻子」

「ああもう、暗い暗い！笑顔って言ってるでしょう？」

そう言うと、櫻子は雫に向けて大輪の薔薇が咲き誇ったような笑みを浮かべた。

それを見れば雫は敵わないと、苦笑まじりではあったが笑みを浮かべるのだった。

「失礼いたします、お飲物はいかがでしょうか？」

スタッフの一人がワゴンを押しながら二人の元へと近づいてきた。雫も櫻子もまだ飲み物は受け取っていなかったらしく、スタッフがきたので、ではと飲み物を頼むことにした。

「何かあるのかしら？」

「本日は取れたて産地直送の絞りたてミルク。絞りたて果実はオレンジ、キウイ、クランベリー、ブルーベリーが御座います。それとコーヒーと紅茶が御座いますが、いかがいたしますか？」

ワゴンの上に並べられたポットは実に色鮮やかだ。

「雫、何にする？」

「ええと……」

暫し黙考し、雫は花も恥じらう笑みを浮かべてスタッフに言う。落ち込みきつたらしく、もういつもの雫の笑顔だった。

「ブルーベリーをお願いします」

「畏まりました。そちらのお嬢様はいかがなさいますでしょうか？」

「では私はオレンジで」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

スタッフがグラスを取り出しポットの中身を注ぎ始めた。色鮮やかなブルーベリーのジュースだった。

「どうして今日はブルーベリーなの？いつもはミルクなのに」

櫻子が思い出したように質問してくるのを、雫はああと答えた。

確かにいつもはミルクしか頼まないため、櫻子が疑問に思うのも無理はない。

「今日は目が疲れているようでちかちかとするんです。体調を崩し気味なようですので大事をとってということですよ」

「なるほどね。確かにそれならブルーベリーが必要かもしれないわ」「でしよう?」

雫が答えたところでスタッフの手からブルーベリーの注がれたコップがテーブルへと置かれたその時だった。

「きゃあ!」

スタッフの背後で悲鳴が聞こえたと思った次の瞬間、どんつと強い衝撃音がしたと同時にスタッフが叫んだ。

「うわっ!」

何かがスタッフにぶつかったのか、スタッフが雫と櫻子めがけて倒れてきた。

危ない! 咄嗟に雫はスタッフの体を身を挺して庇おうとしたのだろうが、腕を差し出しても寸足らずであったため、スタッフの体は雫の腕の中には落ちてこなかった。

かわりにブルーベリージュースが雫の頭の上から大量に降ってきたのだが、雫はこちらは咄嗟に身動きすることはかなわなかったらしく、もろに頭からかぶってしまった。

ばしゃっ

「きゃあっ!」

「いっ……っ……」

痛みに呻く声が聞こえると、櫻子かと思った。そしてああ櫻子も何かをかぶったのかもかもしれないと雫は思う。二人でぬれ鼠は笑えなかった。

腕を伸ばした拍子にバランスを崩して倒れた雫は尻餅をついていたのだが、怪我はないようだ。ただし制服と雫自身はぼろぼろ、というよりもずぶ濡れでひどい有様だった。

雫は換えの服の用意がないことを思い出すと困り果てた。今日に限って雫のクラスには体育がないのだ。代えの服が運動着すらないのが分かると途方に暮れなくなった。

そんなときのことだった。聞き覚えのある声が耳に飛び込んできたのだ。それも、ごく最近にそれは聞いたことのある声だった。

「申し訳ありませんわ、降矢さんと綾小路さん」

「誰かと思えばあらあら山田さんじゃなくって？ 一体これはなに？ 先ほどの悲鳴は一体誰かしら」

確かに雫も山田ではなかったように思うのだがと考えていると、山田は実に悪びれない様子で言うのだ。

「ちょっとお友達とお話をしていただけですわ。ただ、ほんのちょーっと手が滑って突き飛ばす形になってしまいましたか……まさかスタッフがその先にいるとは思いませんでしたの。ごめんなさいね？」

「要はわざとなのね……」

櫻子はぼそりと呟く。それを耳にした雫はまさかと思ったが、確かに山田の態度はわざとなのだろうとしか思えないほどふてぶてしかった。

先日の一件を根に持ってなのだろうか。だとしてもこれはやりす

ぎである。

櫻子は倒れこんだスタッフの身を支えると、そのまま助け起こしながら声をかけてきた人物と相對する。

「ごめんなさいというのであれば食事を台無しにされてしまったのと制服をこんなふうになされてしまったのと……どうしてくれるつもりかしら？」

「あら？謝ってるのにひどい言いぐさですこと」

「謝る？謝ってるつもりであれば相応の態度をしてくれないと困るわね。そんな悪びれもせず言われて、ただごめんなさいなんて口だけでいわれて、誰が納得するっていうの？きちんと謝って。それから二度とこんな場所で遊ばないでちょうだい。迷惑だから」

「そうですね。大変迷惑です。教室であるのように大声で喚くのもそうですね、こうした他の学年の方も使う公共の場でそのように暴力的なことをするのはいかかと思えますよ、山田さん」

髪まで濡れそぼっている雫は、滴り落ちるブルーベリージュースを絞ると乱れた髪を撫でつけて纏めてしまう。

そして凜として言い放せば山田はぐつと唇を噛みしめて悔しそうな顔をした。

突き飛ばされた山田の友人 須賀だったようだ がむくりと倒れていた場所から立ち上がると、怯えたような眼差しで言う。

「う、ごめんなさい。あの、ふざけていたんです。それと、あの、あなたも済みません」

須賀は泣きそうな顔をして雫と櫻子、そしてスタッフに謝罪した。そして須賀は山田に訴えた。ちゃんと山田も謝罪をしろと言ったのだ。

けれど山田がそれで謝るはずもなく、結局最終的には須賀の部活

で使う運動着を借りることでこの場は収まった形になったのだが。

「納得がいかないわね」

「まあまあ」

雫は須賀に礼を述べると、そのまま須賀と更衣室に連れだって行くことになった。

ただ、不思議なことに櫻子は理事長室に呼ばれているとその濡れた身体のまま携帯電話を手にとつて駆け出していく。雫はただただ啞然としたが櫻子もあれで忙しい身の上だし、まあ理事長室に呼ばれることもあるのかもしれないと納得するにとどめた。

+++

須賀は山田もついてくるようにと告げると、無理やりに山田まで更衣室まで引つ張つてきた。

職員棟で更衣室　それも、こんな状態でも雫はどの部活にも所属をしていないため、下手な更衣室は借りれないと言うことで、一番端の更衣室の使用許可を取り付けた　の鍵を借り、そして三人で連れだって歩く。

「更衣室なんて私はじめて来ました」

「ああ、そうですね。降矢さんは更衣室なんて使いませんものね」

「ええ、そうですね。部活にも参加を禁止されております……ですからはじめてになります」

「……え？」

須賀はもの言いたげな視線を寄越すが雫は気づかず、周囲を物珍しげに見回しながら歩く。

普段の雫は部活に割り当てられた教室や実験室、職員棟までは入室するが、それでもこういった実際に使われる場所には来なかった。それこそ来る理由が無いためののだが、今思えばこういう場所にも足を向けておくべきだったかと思う。

「新しい発見が多くてとても楽しいです」

「ただ廊下を歩いているだけですよ？」

「ええ、そのただ歩くだけでも貴重な体験なのです」

「何が貴重な体験なのよ……ふん」

「ちよつと！山田さん！」

何かを山田が言っただけらしいが雫はそれに気付かない。

須賀をぐるりと振り返ると、雫は笑みを浮かべて尋ねてきた。

「あの、これは一体なんでしょうか？」

「え？……ああ、それはどこの部活が使っていたんだったかな？うん……」

須賀は分からないようだが、山田にはそれが何か直ぐに分かった。それはホッケーで使うスティックだった。

確かに須賀の部活は球技系で割り当てられた場所で行われているため、知らないのも無理はないか、と山田は思った。

前を歩く二人が談笑をしているのを見ながら、何故か山田はそのスティックの一つを手を取った。

しつくり馴染む……

よく手入れをされているらしい。

グリップを握りこむと山田はそのままそれを背に隠しながら二人の後に続いていった。

それを何に使おうと言うのか、山田自身まだ分かっていないようだが、どうしてかその手からはスティックが離れなかった。

「ああ、分からなければ結構です。自分で調べますから」

「いえ、今度聞いておきますよ。ここ、私は良く来ますから」

「そうですか？では、お願い致します」

そうして可愛らしく微笑まれてささくれだっていた須賀の心は、温かく解れていった。

須賀はそれから雫と和やかに話しをしてくれて、こんなことまで言ってくれた。

「私、降矢さんのこと全然知らなかったのかもしれないね」

「どういうことでしょうか？」

「いえ、とても気さくだし、……あの、こんな迷惑をかけたばかりで言うのもなんですが、これからもこうしてお話をしたりしてくださいませるか？」

雫は声を失って、そして再び声に戻った後に、はいと告げた。

新しく友達が出来たのかもしれないと雫は思った。

山田はずっとふてくされている様子だったがそれでも雫は良かった。

須賀がきちんと謝ってくれたのと、いつかは山田も分かってくれるのではと思ったからだ。須賀が分かってくれたように、きちんといつかは山田とだって友達になれると思った。

良く分からないけれど、張り合われることで疲れていたが、それでもそのいつかを思えば気は楽になった。

前向きになりましょう。

いつかは山田も　それに、千草も分かってくれるはずだと思いたい。

雫は前向きになろうとこれから努力しようとするに誓った。

「ここです」

須賀が鍵を回して扉を開けると、そこには存外広い空間が広がっていた。

「更衣室ってこんなに広いものなんですね」

「ええ。授業で使うものよりも、こういった部活で使用する場所のほうが広く作られているんです。うちの学校は部活は大体が大所帯ですからね。どうしてもこれくらい必要になるんです」

「なるほど、そういうことなのですね」

「えっと、着替え持ってきてきますけど、その前に降矢さんは服を脱いで貰えますか？流石にそのままきいては風邪を引いてしまいますから」

「あ……そうですね」

雫はその場で制服を脱ぎ始めた。

恥じらっていてもどうしようもないため、ぱっぱと服を脱いでいった。

全て制服は脱ぎ終えたのだが、ブラジャーにも紫色のシミがついてしまっている。どうしようかと雫が考えていけば、大至急シミ抜きをすれば直ぐに落ちるはずですよと須賀は言う。

「下着だから……嫌かもしれませんが。でも、出来ればそれもシミ抜きをしてきたいんですが……」

雫は気に入りのブラジャーであることもあり、須賀の言葉を受け

て、もう迷っている暇は無いと悟るとそれも取り払う。

今の雫は靴下とショーツのみの姿だった。

片腕で胸を隠すようにして雫は尋ねる。

「シャワーはありませんか？」

「あ……ここにはついてませんが、ちょっとシャワー室の許可も貰ってきます。確かに頭からかぶってるから必要ですよね」

「ええ……」

出来ればシャワーを浴びて全身さっぱりとしたかった。

流石にこの格好では寒いのが、雫は小さくくしゃみをするに出てきた鼻水をすする。駄目だ、このままでは風邪をひきそうだった。

それを見て須賀は大至急いつてきますと慌てて告げると、山田の腕を引いて更衣室を出ようとする。

ただ、思い出したように雫を振り返って言うのだ。

「あの、鍵はしめていきますね。誰かが入ってきてても困るだろうから」

「そう……してください」

「はい。では、暫くかかってしまうかと思いますが、待っていてください」

「はい、お願いします」

安心させようと言うのか、須賀はにこやかに笑みを浮かべて更衣室の扉を閉める。

だが、雫はその背後に居た山田の表情のほうに須賀の表情と嫌に対照的で気になった。矢張り山田は私のことが気に入らないのだからかと雫は考えたが、少し前向きになってみようと思ったばかりではないかと、頭を振ってそんな考えを頭の中から散らしていった。

それが大いに間違いなことに雫が気がつくのは、それから直ぐ後

のことだった。

がちやりとノブが回り終えたところで鍵を回す音がした。

そこで雫がほつと息をつくと唐突に何かを殴りつける音がした。とても鈍い音だ。

何だと雫は扉に飛びつくが、当たり前だが扉には鍵がかかっている。開くはずも無いのだ。

「済みません、何か凄い音がしましたが、何があったんでしょうか？大丈夫ですか？」

「……た、す……け」

「須賀さん……？」

雫はノブをがちやがちやと回し始める。須賀が何かで怪我をして、助けを求めているに違いないと思ったのだ。

開け！開け！　そう焦れるほどに思うものの、どうしても扉は開いてはくれない。

雫はノブから手を放すと、扉を叩き始めた。

「須賀さん！須賀さん！何があったんですか！須賀さん！！」

須賀の姿も扉には窓がついていないため、見えず、不安だけが募っていく。

何があったのだと思うも、須賀の声はそれから全く聞こえてこない。恐怖すら覚え始めた瞬間、ぞっとするほど低い声音が聞こえてきた。

「須賀さんはもういいわ。使えないから捨てるの」

低い声に思わず雫は扉を打ちつけるのを止めて聞き入ってしまった。

「だって須賀さんだったら、降矢さんのことが好きになってしまったようなんだもの。ね、邪魔されても迷惑でしょ？」

誰の声、誰の声なのと雫は必死に考えるが、あまりにも低く発せられる声音は誰のものか分からない。

「この間は良くも人前で恥をかかせてくれたわよね？」

まさか、と思った。

「山田、さん？」

地の底から這うような声音は、どう考えても山田とは結びつかない。けれど次々に発せられる言葉は山田のこのようなのだ。

雫は混乱してきた。

「あの時も須賀さん達、全員が私の言葉に続いてくれなかった。だから今日は貴方達に向けて突き飛ばしてあげたの。これが罰よって、だけど何？私に説教？いい度胸をしているとは思わなくて降矢さん？」

何を言っているのだろうか、雫は山田と思しき声の言っている意味が分からずただただ信じられないと首を横に振り続ける。

「他の方たちはごめんなさいって直ぐに謝ってきたわ。あの時続いで言えなかったのは降矢が怖かったのって。やだやだ、降矢さん、貴方嫌われものよねえ？」

雫は最早身体が寒いのか、心が冷え切って寒さを感じているのか、最早どちらが寒くて寒さを感じているのかが分からない。

怖い、寒い、恐ろしい。ただただ雫は怯えた。何か分からぬ、得体のしれないものにおびえ続けた。

「でも須賀さんは突き飛ばしてあげたのに、怒るのよ。罰を与えて貰って怒るだなんて、どうかしてるわ」

「……どうかしているのは、貴方です」

瞬間的に扉の外の人間の気配が変わった。

雫は思わず口にした言葉に後悔は無かった。ただ、怖くて怖くて堪らないが、それでもまた喋りたいと言ってくれた須賀のために、何かを言いたかったのだ。

「突き飛ばしてあげたって一体何ですか？突き飛ばす事がまさかご褒美だともいうんですか？須賀さんも他の方も、貴方とお友達だったんでしょう？そうやって恐怖で縛りつけるつもりですか？それは友達じゃない！ただの支配ありませんか！」

「友達？誰が友達だなんて言いました？あの方たちはただの私の取り巻きだわ。それを何？当たり前のように隣に立って物を言うなんて……生意気なのよ」

吐き捨てるように言われれば愕然とする。そして須賀に対してのあまりの言い様に雫はまなじりに涙が浮かんできた。

「大切だからこそ、きちんと叱るんでしょう？！罰として突き飛ばすなんて、叱られて当然です！それを……」

あまりにも酷い言い草に腹が立つ。

雫は怒りのあまりに言葉すらうまく操れないでいると、山田はが

さがさと何かし始めた。そしてチャリリと小さな鈴のような音をさせると言う。

「鍵と制服はもういらないわよね。あんたみたいなチビが降矢の……あの方の妹だなんて信じられないわ。あんたに似合うのは今の格好みたいな裸がお似合いよ。そのままでもいいわ」

「待って！」

制服と鍵？それとあの方とは一体誰のことかと思うも山田はそれには答える気がないのか、くすくすと笑っている。

「制服は捨てておいてあげる。鍵はそうね……もう誰もその更衣室は使えなくなるんじゃないかしら？」

「待って！山田さん！待って！」

山田の哄笑だけが、誰も居ない廊下に響き渡った。

「お願いだから戻ってきて……出して！須賀さん！須賀さんは無事なんですか！出してください山田さん……！」

3 (全ては歪んだ愛ゆえに) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

3 (全ては歪んだ愛ゆえに)

この文化祭の時期に部活なんて行われるはずもない。

よって当たり前だが部活棟の更衣室を使用する人間なんているわけもなく、あれから誰も通りかかることなく、雫は更衣室で三時間くらいだろうかと居た。

チャイムの鳴る音だけが今は時間を知る術だが、それも授業が終わる時間になればなくなるだろう。鐘の音が三度なり、四度なり、もう直ぐ鳴らなくなるのかと思えばぞつとした。もう直ぐ授業の時間は終わりを告げる頃だからだ。

雫はべたべたになってしまった髪を背中に垂らしたままに、小さく震えて震えていた。

寒い……

更衣室にはカーテンはおろか窓一つとてない。恐らくは女子更衣室という性質上、周囲の目を気にした結果のこととは分かるものの、それでも今はなぜ窓一つすら無いのかと苛立つばかりだった。

更衣室内にあるのは鍵のかかったロッカーと簡素なベンチが四つほど並べられているだけだ。そして雫の腕ではとてもじゃないがこれは持ち上げて扉に打ちつけることなど出来そうはすもないサイズのもので、更衣室内には何一つ今の状況を打開なり緩和なり出来るものが一切無かった。

せめて窓でもあれば違ったはずなのに……
窓ないし、それか人通りがある場であつたならば違ったはずなのだ。

暖を取れるものもなく、そして濡れた体を拭う布の一枚も無かつたためか、雫の体は今、氷のように冷えきっていた。

かちかちと歯を打ち鳴らし、誰かこの更衣室の前を通ってくれな

いかと願うも空しく、ただ無情にも時だけが過ぎていった。

そして、気がかりはもう一つあった。

このまま誰にも発見して貰えなかったらと恐怖が募るもまだ自分はいいい。それよりもむしろ雫は須賀が気になった。

時折須賀に声をかけるも、声が返ってくることもなく、ただただ不安だけが募っていたのだ。

安否が気になる。無事なのかと呼びかけるのも空しい程に須賀のいるであろう廊下からは気配のけの字も全くしないのだ。

扉を力なく掻くもかりかりと小さな音が響くばかりで事態が好転するはずもなく、気だけが急いでいった。

この扉を一枚挟んだ向こうに須賀はいるはずなのに、雫は介抱することもできないのだ。

雫はきゅつと唇を噛みしめた。

顔を見て、無事を確かめたい。そう願っているのに未だ背丈すら足りず、腕も子供のように細く肉のつかない腕のため、力でどうにか出来もしないのだ。ただただ焦れる。

「須賀さん……」

寒さに震えながらも雫は声を絞り出す。

恐らくは先ほど山田より、何らかの攻撃を受けた須賀を思うといてもたつてもいられなかった。

助けてと、助けを求めたに違いないはずの須賀は、あれから一言も発せず、それどころか雫の耳には彼女の吐息すら感じられないのだ。怖かった。

けれどそれは、ただ扉を一枚隔てたからだと思いたかった。須賀はただ怪我をしただけだと思いたい。

「けほっ、けほげほっ！」

雫は咳込むと己の体を抱きしめた。

凍えてしまっわ……

季節は秋だ、こんな格好で三時間もいて風邪を引かないはずがなかった。

「須賀さん…… お願い、返事をしてください…… げほっげほっ！ 須賀さ……」

雫は咳込むと、そのまま荒い息になりながらその場へ倒れこんだ。

「はあっ……ふっ、ごほげほっ！」

直ぐにも身を起こそうとするも駄目だ、力が入らないと、雫は倒れたそのままにぐったりと手足を投げ出した。

腕にも足にも全く力が入らなかった。

熱が出てきたのかと雫は揺れる視界の中、自身の体調の変化を自覚したが、それでも自分のことよりも須賀のことが気になった。どうして山田がこんなことをするのかは未だに分からないが、それでも自分の所為なのだろうと言うことだけは分かっていていたからだ。

巻き込んでごめんなさい、ごめんなさいと雫は声にならない掠れ声で言う。けれど扉の向こうからは、何一つ言葉が返ってこなかった。

雫は熱でくらくらとする頭で願う。

お願い、誰か助けて！

「須賀さん……ん……」

どうか、せめて無事でいてと、寧ろは願いながら意識を失った。

+++

山田は中等科の二年の頃に途中編入でこの六花学園へとやってきた。

この学園に通うことは金持ちにとっても一種のステイタスだった。だからこそ親は山田をどうしてもこの学園へと進ませたかったのだ。ただ、山田はどうしてもこの学園へは編入したくなかった。

それはただ一人の少年と離れがたかったがためのこと。お陰で散々親とは揉めたし、相手の素性も調べられて大変な迷惑をかけたもしまった。

ただ、そのお陰で山田は少年を知る機会を得ることが出来たのだが。

「最近私のことを調べているのは君の親御さんみたいんだけど、一体何故なのか知らないかな？」

「それは……」

言いくいことだった。けれど、これは同時にまたとない機会が訪れたことに他ならなかったともいえた。

山田は頬を染めて恥じらいながらも、少年から話しかけられたことに狂喜乱舞していた。

少年は誰とも連まない。群れない。だからこそ山田は手を出しあぐねていた。どうアプローチをかけていいのかと思っていたところだったため、これはこれで好都合でもあったのだ。

山田はこれ幸いと思いつながら表面では楚々とした恥じらいを見せながら口を開く。

自分が少年を好いており、六花学園への編入をせよとの親の言葉をその理由ゆえに突っぱねているため、ふざけるなど激怒された先日のことを話したのだ。

その少年の氏素性を調べた上で恐らくは何かをするつもりなのかもしれないと山田は訴えた。

山田の親もだが、山田自身も少年の素性を知らなかった。と言うよりも山田を含めて誰も知らないに違いなかった。彼の通う学園の誰もが彼を知っているようでいてその実全く知らないのだ。ただ、不思議なことに彼はそれでも学園の中心に位置していたのだが。

山田は言った。

「……好きになってしまつてごめんなさい」

自分が好いてしまつたからこそ大変なことになってしまつたと告げれば少年は笑つた。

これは大層自分に酔つた女だと少年が呆れていることに山田だけが気づかない。

山田は六花学園へはいきたくないと言う。今の留学生活が楽しいからと。離れがたいと告げてみる。

ただ、呆れるほどに狡猾なのか、山田は本当は学園から離れがたいわけではなく、少年の元から離れがたいのだと言葉の端々に滲ませることも忘れなかった。そして山田は哀愁を漂わせるように、ほんの少しだけ眉根を寄せて耐える様に唇を噛みしめて見せる。実に演技派であると言えよう。少年はそれが演技と気がついたらしく、くすくすと笑つた。面白くて仕方がないらしい。

少年は山田の言葉を聞けば聞くほどに楽しそうに笑つと、それでは残念だねとの言葉を発してみせた。これには山田も面食らう。可哀想に、君の所為じゃないよ。そんな言葉が返ってくるものと考え

ていただけに流石に動揺が現れたらしく、見るからに狼狽していた。言葉に詰まりながらも、それが何を指すのかを聞かねばならないと、山田は言葉を繰る。

「何がでしょうか？」

「六花学園には私の妹が通っているんだ。妹の友人になってくれたらいつでも会えるようになるのにね。残念。これで君とはもう会えないわけだ」

どう言う意味かと山田は目だけで問うと、少年は答えた。

曰く、この留学先ともあと半年でお別れ、なのだそうだ。少年は自分はここからいなくなるからもう会えないのに、そんな自分のために編入をやめられても困るし、大変申し訳ないと困ったような笑みを浮かべて言われてしまえば山田の目が一瞬、きらりと光った。

山田は少年が山田との別れを惜しんでいると思った。初めて話をするのに、それでも少年は自分へと好意を持ってくれ、更には自分に妹がいてその友人になってくれるだろうとの言葉をくれたと山田は解釈をしたのだ。

だからこそ山田はそのまま留学先より戻り、親の言うとおりに六花学園へと編入を果たした。

少年は全く、そんなつもりが無かったのは、山田が知るものではないのだが。

少年はただ山田が行くことでほんの少しばかり面白くなればと思っただけだった。

そんな彼の思惑を知らずに山田は彼の言っていた通りに妹を探し当て、同じクラスに編入することも出来たわけのだが、ただ、彼女の思っていたよりも、少年の妹が従順でないことに腹を立てることになったのは、大いなる誤算だった。

山田はぎりりと齒噛みすると、忌々しげに眼前を睨み据えた。

少年の妹を自分の取り巻きの一人にしようと考えていた山田は、

その妹である雫が存外扱いにくい人間であったことが腹立たしくしょうがなかった。

最初のうちは少年に会うためと猫撫で声ですり寄ることも試してみたが、雫は警戒心の塊なのか、するりと交わされてしまうのだ。社交界で身につけた処世術を雫が駆使した結果なのだが、そんなことは山田は知らない。

自分の取り巻きに出来ないとなれば、ただただ雫が憎らしかった。少年は妹のことを、少年のものであると誇らしげに自慢していた。それを思い出すだけで腹立たしくてならなかったのだ。

自分は傍にいることもかなわないのに、ただあの人の妹と言うだけであの人のものとなれるなんて！

ただ、山田は気づかないでいたが、少年が妹のことを所有物とさえ言いきれ程の狂人であり、妹からは遠ざけられていたのだが。ある意味では知らない方がいいのかもしれないこともかもしれない。普通、好いた相手が狂っているとは思いたくはないものだろうから。

山田はつかつかと歩いていくと廊下の隅にあつたダストシュートの中に雫のシミだらけになった制服を突っ込んだ。地下で集荷される他のゴミに交じってしまい、一度この中に落せば最早拾うことはかなわない。

落ちていく制服を見ても山田の心は痛まなかった。むしろ多少なりともすつとしたと目を細めてその場を後にしたのだった。

「鍵はどうしたものかしらね？」

山田は歩いていった先で鍵を片手に暫し考え込むと、くすりと笑みを浮かべて廊下の窓を開け放った。そしてそのままその鍵を遠くへと放るようになってしまうとアルトの美しい声で歌うように言うのだ。

「無くしちゃった。ふふっ、あははははっ！」

廊下の向こうで「助けて！須賀さん！誰か助けて！」との雫の聲が聞こえるのも彼女の機嫌を良くした理由の一つでもあったが、彼女が上機嫌な一番の理由は、自分の邪魔をするものを二人も消せたことだった。

山田は足取りも軽く、そのまま上機嫌で教室に戻っていった。

「これで目障りな人間が二人も消えたわ。今日はパーティね。あはははっ！あははははっ！」

4 (諦めない、生きる、強い意思が今生まれる) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

4 (諦めない、生きる、強い意思が今生まれる)

時折熱に浮かされながら目覚めると、狂おしいほどに思った。力が欲しい、お願いだから誰かを助けたいと、雫は願った。

須賀の声は未だ聞こえてはこない。ただ、意識が無い間に起きて教室や保健室にいつてしまっているのであれば無くともいいがとも考えると、ごろりと雫は寝転がった。

寒いのか熱いのか分からない。熱で頭だけが熱いが、背筋はありえないほどに寒く感じた。

外気は肌寒く、凍えるほどだ。このまま凍死をするのだろうかそんなことを考えた。

寒すぎて体中に痛みを感じて小さく丸くなると吐息がうつすらと白く染まるのが見える。秋だというのに冷え込んでいるのだろうか。それとも熱が高くなっているからなのかとも思うが、どちらにせよ危険なことにかわりはない。早く救助がなければ須賀も自分も悪くすれば死ぬかもしれない。

「助けて……」

何回目だろう。これで助けを求めるのは。

雫は今まで誰かに助けを求めたことは人生の中で数えるほどしかなかったことに今更ながらに気がついた。けれど今日その回数は一気に増加しただろう。

助けて、お願い助けてと何度呼びかけただろうか。

いつしか誰もその言葉に答えてくれないと知ると、雫の言葉は変化していった。

「絶対に、負けない……絶対に……諦める、ものですか……」

今まで何度も何度も諦めてきた。そして今日もそうだ、諦めかけた。

雫は自分はいいから須賀だけでも助けてあげてほしいと思った。けれどそうじゃない、自分も助かり須賀も助けなければならぬのだ。

それには絶対的な力が自分には足りなかった。

「諦めない、絶対に、助かる……」

助けが来ないのであれば、自ら助からなくてはならないのだ。

雫は熱でふらつく体を支え、必死に立ち上がった。

「開いて……開け、開け！」

扉を打ちつける。ただ無心に打ちつけ続けた。

一度、二度、三度……白魚のような腕の腹から血が滲み出ようが構わず雫は打ちつけた。最早熱のせいで痛みすら感じないのかもしれない。

「誰か……誰か……」

須賀を助けて欲しい、自分を助けて欲しい、そう願いながら打ちつけ続ける。こんなことで生を諦めてなるものかと、ただ気力だけが今の雫をつき動かしていた。

熱で眩む視界に大好きな人たちの面影が浮かんでは消えた。

「おとう……さま」

義経とその妻あやこ、そして櫻子と浮かんでは消える顔に会いたいとただ願った。

あの父ならこの状況をどう打開するだろうかと考えてみてくつと笑った。

お父様なら力を使い、扉を吹き飛ばして終わるはず。あやこであればどうしただろうかと考えるも最早思考力すら残ってないのか、考えることすら出来なくなった。

回る視界を手で支えるも、視界は容赦なく回り続けた。雫は眩む視界にあらがえず、ずるずるとその場に崩れ落ちてしまう。

荒い息の下で思う。力があれば、力があつたならば須賀を助け、自身も助かることが出来るのに、と。

「力が、ほしい……」

圧倒的な力が欲しい。いきるための力が欲しいと雫は切に願った。

「たすけ……助けて……須賀さんを……たすけて……」

またも意識が掻き消えようとする中、雫はそう言い残してぱたりと意識を失った。

+++

千草は島田とただ待つだけという作業に飽きたらしく、いつそ置いていきませんか、なんとも薄情な言葉を発した。

「申し訳ありませんが、本日は遅くなるなどといった言葉をいただいておりますので、お嬢様を置いて戻るわけには参りません」

千草は連絡もせずにはぶらついているのかあいつと、雫の連絡ミス

と決めつけて舌打ちを打った。

教室にもいないと奏より連絡があつたらしいのだが、本当にどこにいったのやらである。

千草は何度目かのため息をつくとき車体に思い切りもたれかかった。心配なのか島田が外で待っているため千草もつきあいで車外にいるのだが、お陰で体中冷えきってしまったている。

何してるんだあいつは。

そう苛立たしく思うものの、千草は決して自分からは探しにいくとはしなかった。何故か、探しにいけば負けのような気がしてしまっていたからだった。

とにかく自分からは助けにいかないと決めて、千草は寒さの中耐えることに決めたのだった。

車体にもたれかかり腕を組んでむすりと黙り込んでいたところ、島田の胸ポケットが鳴り響く。やっと見つかったのだろうか。

奏の連絡かと思い千草は身を起こすと、何やら様子がおかしい。島田の表情が電話にでたとたん、緊迫した表情にな変わったのだ。

「はい……はい……で、では私たちもこのまま救助に向かいます。はい、では……」

私たちって俺も含まれるのか？

ぶちりと携帯を切ったのを見ると、何があつたのかと千草は尋ねた。

「お嬢様が何か……大変な事態に見舞われているそうで、学園内にまだいるらしいのですが、どこか怪我でもしているらしく、救助を求めていると……」

「……なんですって？」

らしい、そうで、とは確定的でない情報ばかりだなと思うが、相

手は至って真面目に答えてくる。

「鷺宮さんもこちらに向かっているそうです。私たちも向かいましよう」

「って、いや、……ほ、ほんとなんですか？怪我って」

雫の身に何かが起こっているとしても、どうしてそれが分かったと言っのか。もしや雫から鷺宮へと連絡でもあったのだろうか。そこで体調が悪いと連絡でもあったならば分かるが　　だとしても確定的でない言葉ばかりなのが気にかかった。

千草は慌ただしく駆けていった島田を追いかけている間、島田は必死で答えようとしめない。仕方なく千草はそのまま島田を追いかけて再び六花学園へと戻っていった。

奏は駆けていた。どこへではなく、どこにでもなく。

宛もなく駆けていたが、兎に角雫を見つけたらなければならないという焦燥感に突き動かされていた。

理由なんてあってないようなものしかない。ただ嫌な予感がするだけなのだ。何かあったに違いない、そう思うだけだ。

けれど奏は確信していた。絶対に何かあったのだと。

胸の奥の嫌な感じ、これは絶対そうだ……

奏は駆けながら胸に片手を当てると呻くように言う。

「雫お嬢様……怪我、してる」

きゅっと拳を作ると、奏は祈るように告げる。

「お願いです。どうか無事でいてくださいー！」

どうして自分には鷺宮のような耳がないのかと奏は思った。あれさえあれば自分も直ぐにも雫のもとへと駆けつけられると言つのに。「ここも違う！」

がらりと開けはなつた扉の中に目的とする雫がいないのが分かる。と奏は直ぐ様駆けっていく。

これで普通科棟の扉は全て開けはなつたわけだが、雫は一体どこにいるのだろうか。

焦りばかりが生まれる。

階段を駆け降りている最中に、ピリリリと携帯が鳴り響いた。見ればどうやら相手は鷺宮のようだった。奏は慌てて通話ボタンをプツシュした。

「お、……鷺宮さん！雫お嬢様が！」

鷺宮が相手だと分かっているからこそ奏は叫んでしまった。雫が何か巻き込まれてしまったようだ、助けなくてはならないのに、約束をしたのに、見つけることが出来ない。

奏はためこんでいた恐怖をついぼろりと吐き出してしまっていた。するとそんな奏の言いたいことが分かっているかのように、鷺宮はただ泣くなどだけ言い、奏の今居る場所を尋ねてきた。

「分かつてる！今お前はどこにいる？！」

「今……今は普通科棟、四階です」

「四階か。じゃあそのまま三階に降りた後、連絡通路まで走れ！お嬢は部活棟かスポーツ科棟に居るはずだ！」

「何でそんなところに……わ、分かりました！いきます！」

「俺も今向かつてる最中だ！兎に角お前はそのままお嬢を探してくれ！俺がついたらもつと細かい指示をだす！」

「はい！」

鷺宮が来てくれるのだ、そうと知ると奏の心は一気に勢いづいた。あの人がかかるならば、直ぐにも雫の居場所は知ることが出来るだろう、そう奏は確信しているのだ。

兎に角今は自分出来ることをしよう。そう思い、奏は駆け出していった。

奏が階下へと駆け降りると、そこではったりと出くわした人物が居た。千草だ。

「上にもいないのか？」

「いない。普通科は全部探したけどいいいです。けど部活棟かスポーツ科棟にいるみたいだから、今からそっちに行くんですけど」

「はあ？何で普通科のあいつがそんな場所に居るっていうんだ」

思わず千草はいつもの口調で言ってしまったが最早取り繕っても仕方ないと、奏に対してはこのままでいいかと思いついたようだ。意味がわからんとざつくばらんに話しかけた。

「鷺宮さんが言ったから、雫お嬢様は間違いなくそのどっちかに居るはずなんです」

「なんだそれ。鷺宮って……あのハーフみたいな兄さんか」

「うんと……そういう言い方すると、たぶん凄く怒るはずだから、やめておいたほうがいいと思うんですが……。兎に角、僕はいくらから、それじゃ！」

「あ……おい！」

千草は納得がいかないながらも、もうここは搜索を終えたと言う

のであればここに居ても無意味と思つたらしく、奏についていくことにした。

連絡通路を駆けていくと、大きな観音開きの扉があった。それを開け放つと中に二人で飛び込んでいく。

バラバラバラバラ

けたたましい音が聞こえてくるが、これは何の音だろうかと思わず二人は足を止めてしまった。

その音が聞こえてくる方へと自然に足が向いていくが、気がつけば連絡通路へと戻ってしまっていた。どうやらこの騒音は外からの音のようだ。

「おおーい！」

「……何？おい、なんか聞こえたか？」

「う、うん。と言つかたぶん、これは鷺宮さんだと思つんですけど

……」

「……鷺宮さん？何で、というか何だこの音は」

「……へ、ヘリコプター？」

奏が自信が無さそうに言った言葉にそんな馬鹿なと思うが、そんな馬鹿を貫き通した人間が登場した。

大型の輸送用のヘリの端から縄ばしごを垂らし、そのはしごから手を振る小さな人影が学園の広大な敷地の外からやってきたのだ。それももの凄いスピードだった。

ヘリはそのまま連絡通路の上を通り過ぎる形で過ぎ去っていったが、はしごの上の人物はそのまま通り過ぎる前にはしごからぱつと手を離して通路の上に着地した。ハリウッド映画顔負けのパフォーマンスである。

なんてことはない当たり前前のことをしたという顔をして、鷺宮は告げる。

「へりはあのまま部活棟の屋上に着陸、そして待機させてある。一刻も早く見つけだすぞ」

「はい！」

一人話についていけないのは千草だった。何がどうなっているのかしきりに聞いたがるも相手は話してくれるつもりはないらしく、梨の礫である。と言うよりもそのはなす時間がもったいないのかもしれないが。

「少年、お前さんは島田のおっさんを連れて直ぐに降矢へと戻れ！

向こうについたら真つ先に義経に会うんだ」

「義経さんに？」

「義経に俺はお嬢を連れて病院にいったって伝えてくれ！お嬢はどうやら怪我をしているらしい。ついでに他にスガ？って生徒も怪我をしてるようだな。二人を緊急搬送するって」

「いや、あの、さっきから一体何なんですか？それ、ほんとなんですか？」

千草には信じられない。雫が怪我をしたということも、不確定でしかなく、何を根拠にいつていると言うのか。

せめて雫から連絡がありそうしていると言うのかと思えばどうにも違う様子なのだ。これでは本当にそうなのかと怪訝に思っても仕方なかった。

けれど鷺宮も奏も言うのだ。

「聞こえたんですよ。雫お嬢様の声が」

「少年、俺が何百キロも離れた地で、なんで降矢の家のことが分かったと思う？」

「それって前に話してくれた、あいつに対するイジメのことですか？」

「まあ、そつだ。何でかわかるか？」
「……いえ、分かりません、けど」

千草は口ごもった。

鷺宮は真摯な眼差しで口を開く。

それは、とてもではないが嘘を語っているようには思えないものだった。

「俺は特別仕立ての耳を持つてる。それは千里先の音すら聞き分けることの出来るもんだ。ついでに目も同じだけの距離のものを透かしてみる事が出来る」

「……冗談、」

と思いたかった。

千草はひきつった口をどうにかこうにか操り言えば、鷺宮は真剣な眼差しで言うのだ。

「試してみるか？今島田は普通科棟の保健室を見て、そのまま扉を閉めた。ああ……背後の女子トイレにいるかも知れないと思っに入るべきか入らざるべきかって迷ってるみたいだな？……うん？ああ、女子生徒に何やってるのおじさんって言われて焦って言うてるよ。お嬢様を探しにきたんですってよ。確かめて見ればいい。きつと島田は俺が言ったとおりに動いてたはずだぞ？」

「そんなの……あてずっぽう」

「だと思つなら実際に聞いてみればいいでしょ？」

突き放した奏の物言いに、千草は少々むつとはするもそれでも言い返せなかった。確かにそれはもっともな言葉だったからだ。

「さ、いきましよう。鷺宮さん。雫お嬢様が待ってます」

「ああ。　くれぐれも忘れないでくれよ、少年！義経に伝言！絶対だぞ！」

千草はかろうじて首肯で返すと、二人を見送った。

後には千草の姿だけがぼつんとあり、喧しいほどに屋上に止められたへりが大きな音を響かせていた。

普通科の保健室って言っただけ。

千草は普通科棟の一階まで降りていくと、その前で女子生徒と言いたいになっているらしい島田を見つけた。というよりも女子生徒にまくしたてられて島田はたじたじのようだ。何も言い返せないでいるらしい。

まさか鷲宮の言うとおりここにいるとは思ってもみなかったため、少々度肝抜かれた形になったが、千草は努めて平素のように声をかける。

「どうしたのかな？何かあった？」

爽やかに女子生徒へと声をかければ女子生徒は千草に気づき、途端に大人しくなる。先ほどまではくっつかかると言う言葉が一番似つかわしかったのに、今は借りてきた猫のように大人しかった。

「高遠先輩、このおじさんが女子トイレをのぞこうとしてたんです！助けてください先輩！」

どう見ても助けが欲しいと思っているのは島田のように見えるのだが　島田の目は助けを求める子犬のように潤んでいて庇護欲をそそる……ように見えなくもないほどだ　まあいいかと、千草は女子生徒に言い含めるようにして口を開く。

「済まないね。彼は僕が呼んだ運転手の島田さんなんだ。中まで僕を捜しにきてくれたらしい。ただ、ちよっぴり道に迷ってしまったらしいのかな？僕が遅いから保健室まで探しにきてくれたらしいんだけど、居なかつたからトイレまで探してくれたんだと思うんだ」

ねえそうだろうとにこやかに笑みを浮かべて島田に問えば、島田はこくこくと何度も必死で頷いた。

「だから、ね？島田さんにかわつて僕が謝るよ。これで許してくれないかな？」

「そ、そんな！高遠先輩が謝る必要なんてぜんぜんないんです！それに、高遠先輩のことをそこまで思つて探し回つてくれてた人に私つたらなんてこと……」

その後は簡単だった。女子生徒は千草と島田に深くお辞儀をしてそのまま逃げるように駆けていってしまった。恥じていたのかも知れない。自分のした行為に。

千草は女子生徒が居なくなると島田に、先ほど鷺宮から言われた言葉を告げた。

「大至急、俺たち二人は降矢へと戻るようにと伝言されました。義経さんに伝えると、伝言を言付かつてます」

「わ、分かりました。では車まで急いで戻りましょう！」

手間が惜しいと助手席に乗り込むと、千草は思い出したように島田に尋ねた。本当は思い出したわけじゃなく、いつ言い出すべきかと迷っていただけなのだが。そんなことは島田は知らない。ただ島田は、尋ねられたことに、そのまま忠実に答えただけだったのだから。

「そついえば島田さん、なぜあそこに？」
「え？ああ、ええとですね。先ほど高遠様のおっしゃったとおりなのですが、保健室でもしかして具合を悪くしてお嬢様が寝込んでいるのではと思いついて、ですからあそこに……。その後は背後に女子トイレがありましたので、保健室からそのまま女子トイレにいかれたのかもしれないと思いついてね？ですからここで待つべきか、と思ったのですが、いるかないのかさえ分からないので、声をかけようか迷っていましたらあの女性がきて……。それでこう……。」

お恥ずかしいと島田が恥ずかしそうに言えば、千草は唸るようにして考え込んでしまった。

まさかである。鷺宮が言った通りだったのだ。

そんな馬鹿なことがあるかと思うも、それでも島田が鷺宮と連んで千草を騙すために、こんな手間のかかったことをするはずがないと思うのだ。それはあのとときの鷺宮の表情、そして今の島田の態度、そしてあの女子生徒の怒りの表情、それら全てが全て、騙すためだけにしてはどうにも

おかしいと思うからだ。

千草は深く考え込んだ。

「やっぱり、きな臭いどころの話じゃないな、全く」

どう考えても貧乏くじを無理矢理引かされたのは自分であると思つたのだ。

宗一郎がなぜ自分を選んだのかと今では恨みさえ抱いていた。けれど、それと同時に少々この屋敷に興味を抱いてきたのもまた、事実だった。

ここまでくれば何も知らないで引き下がることなど出来るはずもない。千草は腹を括った。

「絶対にあいつらの化けの皮、ひっぺがしてやる」

+++

淡い燐光を放つのは紛れもなく人の形をしたものだった。

空気の中にあることを忘れてしまったのか、ふわふわと藻が水の中であゆたうようにその髪は淡い光を放ちながらも揺れ動いていた。生きる　その絶対的な意志だけがその人の形をなしているものを生かし続けていた。

力が欲しい。

生き残るだけの力が今、欲しい。

5 (そして強すぎる力が目覚める) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

5 (そして強すぎる力が目覚める)

鷺宮は歩いては耳をこらすようにして、そしてまた駆け出すを繰り返していた。

駆けて歩いて止まって駆けて、それを繰り返してようやく見つけた場所は部活棟の更衣室、それも一番端の冷たい空気が漂う場所だ。その廊下の前には頭から血を流している少女が倒れていた。

奏が少女へと駆け寄ると首筋に指を当て、そして口元に手を翳してこくりと頷く。まだ生きているということだろう。

鷺宮はそれを見て首肯すると更衣室の扉を透かして中を覗きみた。その瞬間、鷺宮は視界を腕で覆って自らを庇った。

「なんつだ!？」

「どうしたんですか?」

「い……いや、ここにいらんだってのは分かるんだが、中を”見て”みたところ、とんでもないぞ。こりゃあ……まさかだが」

鷺宮はいやな予感がした。

そして、それと同時に宗一郎が何故あのような行動に出たのかが少しだけ分かったような気がした。

「一体何を言ってるんですか?鷺宮さん、早くしないと」

「わあってる!」

鷺宮は意を決してドアノブに手を伸ばし、ぐっとそれを握り込んだ。

「……閉まってる」

「え、鍵、あいてないんですか?」

「そのようだな！お嬢はおそらく誰かにここに閉じこめられたんだ！くっそ！」

鷺宮はおそらくは扉の目の前に倒れている雫を考えると、このまま扉を体当たりで無理に開け放てば危険と考えた。雫にぶち破った扉がぶつかってしまふ。

何かドアノブの鍵の部分だけを壊せるものでもあればいい、そう考えて鷺宮は周囲を搜索し始めた。

「体当たりじゃだめなんですか！？」

「扉のすぐそばにお嬢がいるから無理だ！怪我させちまう！」

「そんな！」

奏はドアノブをがちゃがちゃと弄くり回すもやはり開かないと分かる。職員棟へといって鍵を借りてくると告げた。それが一番てっとりばやいはずだからだ。

けれど鷺宮はそんなのは時間の無駄だと言うのか、奏に扉から離れるように言々と物騒なものを持ち出してきたのだ。

「あつた！これを使うぞ、下がってる奏！」

火災が起こった時などに使う、非常用の手斧である。壁に取り付けてあったのを見つけて無理矢理引き抜いてきたようだ。

振りかぶってドアノブに一撃をくれたところ、あんなに手こずった扉は呆気なく簡単に開いた。

鷺宮は扉が開いたと同時に手斧を適当なところに放り投げてそのまま中に飛び込んだ。

「お嬢！！！」

そこには燐光を淡く放つほぼ全裸に近い姿の雫が居た。

その姿に思わず二重の意味で絶句すれば、鷺宮はさっと自分の上着を脱ぎ捨てて雫にそっとかけてやる。流石にこの姿で屋上まで連れていけるわけがない。

上着にくるまれた雫は、それでもなお光を発し続けていた。

「雫、お嬢様なんですか？」

「ああ、そうだ」

奏がいつの間にか背後に居たらしいのだが、あまりの出来事に気配を感じている余裕がなかったらしい。常に自分の大切な人間達には意識をして全員の位置を把握すること、彼らが置かれた状況を把握することを当たり前にしている彼にしては珍しかった。

それを知れば、鷺宮はいつになく自分が狼狽していることに気がついた。

「奏、その子、抱えられるか？」

「やる。だいじょぶ。出来なくてもやるから。大丈夫です」

奏は須賀を抱えると、なるべく頭部を揺り動かさないうで済む形で抱えられるようにと言っことで、そのまま横抱きに抱えあげると立ち上がりこのままでいけることをアピールしてみた。

それを見れば鷺宮は満足そうに笑みを浮かべて奏を褒めてやる。

「そうか。頑張れよ、男の子」

「……それよりも、雫お嬢様は」

「今は無理だ。俺も確証を得られていない。後で義経に確認してもらって……それからになる」

「分かりました」

鷺宮は雫を抱き抱えるとその軽さと冷たさに恐ろしさを感じた。どれだけ長い間にここに放置されていたのだろうか、雫の体は死人のように冷たく冷えきっていた。

一瞬助からないのではと鷺宮は思っても、それでもそんなはずはないと無理にでも思いこんで告げる。

「行くぞ！」

「はい！」

駆け足で二人は屋上まで駆けあがると、そのままヘリで六花学園を後にした。

向かうは降矢グループの抱えている医療部門である、降矢医療センターだった。

+++

雫は低体温症を発症しており、腕にも酷い怪我が見られたが、こちらはまだ傷の程度が分からないようだ。そして共に発見された須賀は頭部を打撲及び裂傷の傷が発見されたわけだが、こちらも傷の深さはまだ分かっていない。

共に重篤の患者としてセンターでは救急治療を行われているのだが、特に須賀の傷は頭蓋骨が陥没していたと分かり、もう少し発見が遅ければ確実に死んでいたと言われぞっとした。

「よく、よく伝えてくれた……感謝する」

「礼なんて言うなよ。お嬢だって、まだ助かるか分からないんだ」

「いや、それでも感謝くらい言わせてくれ。有り難う、雫を救ってくれて、感謝する」

鷺宮は真面目腐って告げられた義経の言葉にいらついた。せめていつものちゃらけた言いくさであればまだ良かったのにとさえ思う。こんな時に真面目に言われてしまうと、もう本当に駄目なのかと覚悟をしなければならぬのではと考えた。酷い言い方かもしれないが、それでも義経が真面目であればあるだけ、それだけ状況は深刻なことを鷺宮は自覚するのだった。

どうして責めてくれないのかとさえ思った。

雫は今現在、体温を少しずつ戻すための治療を行っているが、それでも心拍が停止しかかっているらしく、生きるか死ぬかは本当に分からない、五分の状況なのだ。

もっとお前が早く雫の救難信号 救援要請とも言うか を聞いていたならばと責めてくれればまだ楽なのにと鷺宮は唇を噛みしめながら思う。

自分でどんなに責めて見せても、それはどこか嘘に感じられるのか、こんな責めでは生ぬるいと、鷺宮はもっと誰かにお前のせいだと詰ってほしいと願う。けれど誰も鷺宮を責めてはくれない。

歯がゆいと思う、悔しいと思う。もっともっと自分が意識をこらしていれば、また違った運命だったかもしれないのに。

鷺宮が噛みしめた唇から血が滲んできたのを見て、義経はもう自分を責めないでくれとその体を引き寄せて抱きしめた。

「お前は どうしていつも自分ばかり背負おうとする？」

「義経……俺は、どうしてこう、いつもいつも足りないんだろうかな？」

「足りなくなんてない。きちんと助けられたじゃないか。いつだって俺は感謝してる。だから自分を責めるな。お前は俺のために、いつもよくやってくれてる。だからこれ以上自分を責めるな。お願いだから責めてくれるな……」

鷺宮はそのまま義経の肩に顔を埋めて少しだけ泣いた。四十を越えてなお人前でなくなんて、この主のためでなければ無理だろう。そして義経のまなじりにも、うっすらと光るものがあつた。

「義経様！鷺宮さん！お嬢様が！！」

奏の言葉に二人は腰を浮かすと、最後まで聞かずに集中治療室に飛び込んだ。

中にはいるとそこは幻想世界のようにあり得ない光景が広がっていた。

「なんだ、これは」

無菌室のような状態にされているのだろう、医師もそれを手伝うスタッフも、全てが防護服のようなものを着込んで治療に当たっていたのだろうが、全員が地べたにへたりこんでそれを見ていた。

そこにいるのは美しい妖かしだった。

ゆらりゆらりと水面にたゆたう藻のように揺らめく髪は長く、白とも白金とも言えない、何とも言い表せない不思議な色をしていた。その長い髪をありもしない風に靡かせ、妖かしはゆったりと歩いていく。体重を感じさせないほどに軽やかな足取りだ。

そのこの世のものとは思えない妖かしは、人型の女の形をとっていた。

白く輝く髪よりも、更に白い透き通るような肌は、これも新雪が太陽の光を受けて眩く光輝くようにして光輝いていた。

髪も肌も、きらきらと光を淡く発しているその姿に、思わず目を奪われる。

けれど、そんなものは比較にならないほどに大きな衝撃がこの場に居た全員に走った。妖かしがくるりと振り返った瞬間、全ての

音が死に絶えたのだ。

世界が死んだ、誰もがそう思った。

瞳は赤く血に濡れたように輝いていたが、おかしなことに白目の部分が漆黒に染まっている。それはどこまでも深い闇を思わせる色で、その目を見た者は恐怖を与えるに相応しい色をしていた。

けれど見た者は恐怖どころか神々しさを覚えたのだ。

輪郭が美しいその面輪の中には、小づくりな顔が纏まっていた。

鼻も目も、その一つ一つが繊細で完璧に精緻を極めた細工で作られている。それはまさに神が生み出した美、そのものだった。

恐ろしいほどの美貌の持ち主がそこには居た。

義経も鷲宮も、思わずごくりと生唾を飲み込んだ。生まれてこのかた異性に想いを抱いたことのなかった奏でさえ心を奪われた。

けれど不思議なことに、圧倒的なまでの美の前には、ただひれ伏すしかないらしい。三人ともが美しいと妖かしを見て思いはするが、それ以上に触れることを躊躇わせる何かがあった。

背丈は妖かしの傍にある医療機器と比べて見て分かるのが、百五十から百六十程度だろうか。百七十はないと思われた。

そのほっそりとした裸身を包み込むのは、背がぱっくりとあく形の手術着だ。それが髪を藻のように靡かせているのと同様、ひらひらと蝶が舞うようにして蠢かせていた。

妖かしを見ても、誰もその行く先を阻むことは出来ない。

皆一様に心を奪われてしまったようにただただ見つめることしか出来なかった。

淡い光を放ちながら妖かしが壁に手をすつと翳すと、幾重にも重なっていた分厚い壁が紙屑のようにくしゃりと潰れてしまう。突然のことで誰も言葉を発することも出来なかった。やめろ！そう言い

たいが言葉が出ない。誰も彼もが壁の向こうに居るはずの須賀を思
つて心の中で悲鳴を上げた。

このままでは向こう側の少女の体まであの妖かしはぺしゃんこに
してしまっただろう。そう思ってもどうしても身動きが取れなかつ
た。

妖かしはぐしゃりと潰れた壁がまだあることに焦れたのか、伸ば
していた腕をすつと横に薙ぎ払うようにしてみせた。途端、ぐしゃ
りと潰れた壁が横飛びに横の壁ごと吹き飛ぶと、そのまま空を舞っ
ていた。

横壁が無くなるとそこは外気溢れる夜の帳が訪れた外の空間だ。
一気に外気が流れこんできた。

壁が外へと吹き飛ぶ様を見れば、それを合図に妖かしの呪縛から
時放たれたらしい義経が奏の肩を掴んであれは一体なんだと食って
かかった。

「あれは……あれは、雫お嬢様です！」

「し、雫？あれが雫だって?!」

「本当です！さっきまで髪だって茶色くて……あんな大きくなかつ
たし、急に……ほんとなんです！」

奏の言葉に鷲宮は思わず食い入るように妖かしを見た。先ほど更
衣室で横たわる雫の身体から発されていた光は、これの前触れ
それとも兆候だったのだろうか。

義経は妖かしを呆然と見やる。確かにその顔を見れば、どこか雫
の面影があった。けれどそれではおかしいのだ。あれが雫だとい
うのであればどうしてあそこまで急激に背丈は伸び、髪もそれに連
なるようにして急激に伸びてしまっていると言うのか。

雫の背丈と妖かしの背丈を比べて見ても、どう見ても十センチ以
上の差があった。並べてみるまでもないほどに、それは歴然として
いたのだ。

妖かしはふわりと須賀を覆うビニルの天幕をまたも触れることなく取り払うと、そのまま須賀に近づき、その額にそっと口づけた。すると口づけられたその額から、光がじわりじわりと妖かしから与えられていくように、眩い光が須賀の額に染みこむようにして吸い込まれていった。

「起きて。あなたはこんなことで死んじゃいけない。起きるのよ」

妖かしの言葉に導かれるようにして須賀の目がすつと開く。その顔色に、最早死の影はない。

「生きて、生き抜かなくちゃ駄目よ。生きなさい」

須賀は妖かしの声にうつとりと目を細めると、そのまま、頷くようにしてまた目を閉じた。

妖かしはまた寝入ったらしい須賀の前に立つと、そのまま両手の平で何かを掬うようにして器を作った。そしてその器の中にふうつと息を吹き入れると、光の玉が幾つも浮かび、目映いばかりにその手のひらが光輝いていった。それはまるで、太陽がそこにあるような眩いばかりの明るさだった。あまりの眩しさに義経も鷲宮も思わず目を瞑り、自らの目が焼けるのを庇う。奏はそんな二人の背に隠れて目をぎゅうつと瞑り光の大群から逃れようとしていた。

「皆、生きなければいけない。生きて、生き抜くの。お願い、生きて」

その声が聞こえた瞬間、自らの影すら消え失せる程に周囲には光が溢れ返った。

義経は光に吞まれる瞬間を目撃することは適わなかった。

「雫っ！」

気がつけば辺りを覆うほどの光は消え失せていて、周囲を照らす光は蛍光灯の無機質な光だけになっていた。

「雫？雫は……」

義経は周囲を見回し目当ての人物を見つけ出した方がいいが、言葉に詰まる。未だ雫はあの姿のままだったのだ。

角度によつては金にも見える白髪に、そして赤い瞳　いや、こちらに変化していた。瞳の色は中央が金とも薄茶ともつかない色をして、縁に行くほどに赤く染まっている。白目の方は美しい月白色とで言えばいいのか、薄らと青みがかつた綺麗な色をさせていた。矢張りこの世のものとは思えない程に、その姿は美しいままだ。その美しい姿のままに、雫は須賀の枕元に佇んでいた。

ただ先ほどまでと決定的に違うのは、その身を包みこむ光が消え失せたただの人のように見えることか。そのただの人に見えることが唯一の救いに思えた。あれではどうしても自分の娘だとは思えなかったため、まだこの方が雫らしさが残っていて、安心した。

それがいかに娘とも思えないような神々しい見た目であろうとも、それでもまだ人と見える分、安心出来る　義経は何とかそう思いこもつと努めてみせた。

「雫……」

何度目かの呼びかけを行うも、雫は返事を返さない。

義経は雫に一步二歩と近づきながら問いかけるようにしてまたも

声をかける。

「雫………?」

すると今度は反応があった。のだが、どうにも様子がおかしかった。義経の言葉に振り返ったはずの雫の瞳には、義経の姿が映っていないのか、その表情は気を許したものに向けるそれでは無い。

「雫?」

よもや自分のことが分からないわけではあるまいなと義経は思っても、願い虚しく雫は義経が分からないようで、誰、と尋ねてきた。あまりのことに絶句していれば、義経には興味すらないのか、雫は周囲にある顔を一つ一つ見ていき、最後に悲しそうな表情になり言うのだ。

「居ない………どこ?どこに居るの?」

「………誰かを探してるのか?」

義経は雫に更に近づく。兎に角安心したかった。愛娘の無事を確かめたかったのだ。姿形は変われど、それでも彼女は紛れもなく自分の娘なのだから。

名を呼びまた一步近づけば、そこで雫は義経を初めて認識したように顔を向ける。そこには不思議なものを見るような顔があった。流石にそれには悲しさを感じたが、そのまま義経は両の腕を大きく広げて敵意のないことをアピールすると、大丈夫だと笑顔で告げる。

「僕は君を攻撃しない。僕は君のお父さんだよ」

「おとう、さん?」

「そう、お父さん。雫、もう大丈夫だから。戻っておいで」

戻ってこいと義経が腕を伸ばすと、雫は伸ばされた手を見つめる。けれど次の瞬間雫は首を横に小さく振ると違うというのだ。

「なにが違うんだい？おいで、帰ろう？」

「私の帰る場所は違う。あの人の所よ。私はあの人のことを見つけなくちゃいけないの」

すると雫はまたも淡い燐光を纏いその場から後方に大きく跳躍をした。雫は義経が誰か分からないながらも、それでもこのままどこかに連れていかれることは避けようとしたのか、義経から距離を置こうと逃げたのだ。

義経は慌てて雫を追いかけようとするが、雫は外に、文字通り飛び出ると、そのまま更にもう一度大きく跳躍して逃げ出した。それはまるで巨大な光の玉のように見えた。

巨大な光の玉が闇夜を割り裂いていく。

そこだけ昼のような明るさに見えるほどに、闇夜の中にそれはひと際大きく目立って見えた。

「待つんだ雫！」

義経は割れた壁の隙間から自らも外へ飛び出すと、そのまま雫を追いかけていく。鷲宮と奏もそれに続いた。

雫は一度の跳躍であり得ないほどの距離を稼いでいた。一步踏み出して軽く跳ねただけに見えたそれは、彼女の体を大きく地上から離してしまったのだ。

そのまま雫は風になったように緩やかに地上へと降りていく。たった一步の跳躍にしては大きすぎる。凡そ数十メートルをただの一步で進んだらしい雫は振り返ると義経達が追ってきていることに気づいたらしく、美しい顔を歪めて泣きそうな表情になった。

「こんな時につ！くそ！どうして麗はいないんだ！」

義経は吠えた。こんな時に義経の力は何の役にも立たない。雫を追いたいのにそれこそ足で追いかけて続けることしか出来ないことに彼は苛立った。

「義経っ！お嬢に力はきかないのか?!」

「きいてたらとつくにやつてる！」 掴め” ないんだ！」

鷲宮はそれを聞くなり冗談にも程があるだろう！と叫んだ。義経が止められないものを、ほかの誰が止られるというのか。

雫は前を向くとそのまま、またも大きく跳躍してみせた。あつと思った時にはもう、雫の体は医療センターの前の大通りのほうへと現れていた。距離は更にあり得ないことだが、先ほどの跳躍の比ではない、大凡の概算だが、二百メートルはゆうに移動をしているだろう。

一気に小さくなった雫の姿に悲鳴をあげる。

「……ま、まずいぞ！」

「跳ぶだけじゃなくて闇を駆けることも出来るの?!嘘でしょ!?!」

大通りには当たり前だが車の通りがある。それも尚悪いことに頻繁に使用される道路の一つなのだ。この医療センターの売り文句の一つが「立地がいい」と言うものがあるのだが、こんな時にそれが裏目に出たようだ。

車が頻繁に行きかう道路、そのど真ん中に舞い降りた雫の姿に、お願いだからすぐにまた闇夜に駆けてくれと最早祈るより他ない。

雫はプアッと大きく鳴らされた音に、弾かれたようにそちらを見やる。見ればそこにはトラックが迫っていた。歩行者からだろうが、そこかしこから悲鳴が上がる。トラックの運転手からも悲鳴が聞こえるが、トラックの急ブレーキする音にかき消されてそのほとんどが人の耳には届かなかった。

雫は眼前に迫りくるトラックを目にしても驚くことも出来ないのか、棒のように突っ立っているだけだ。その様子を見て、周囲の間は悟った。最早あの少女は助からないと。光輝く雫の姿に誰も気にすることが出来ないほどに、それはただただ恐ろしい光景だった。

ぶつかる　そう思った次の瞬間、雫は片腕を突き出し、トラックを止めて見せたのだ。

いつまでたつても訪れない衝撃音に、周囲で目を瞑って訪れるはずの惨劇に身を強ばらせていた人たちが、一人、また一人と、恐る恐る目をあけていく。

するとそこには、信じられない光景が広がっていた。

光輝く少女の前で、トラックが止まっているのだ。良く見るとトラックはその場に縫いつけられたように押しとめられていたのだ。

アスファルトの上をぎゃりぎゃりぎゃりつと音がする。見れば大きなタイヤから白煙が吹いていた。無理やりその場に押しとめられているのと、急ブレーキのために巨大な摩擦がそこに発生しているのだろう。それはトラックからあげられる悲鳴のように人々には聞こえた。

そしてようやくブレーキが完全にきいたのかトラックが完全な停止をすると、周囲にきな臭さが漂い始めた。嗅覚に訴えてくるものがあると漸く目撃者達がこれは現実のことなのだと自覚し始めたのか、雫から距離を置こうとす者が現れ始めた。けれど雫はいたって平然としている。周囲の目がまるで気にならないようだ。普段の雫であれば、それは考えられないことだった。

「雫！」

雫の元へと義経がやってきたのを見ると、雫は逃げなくては思い、跳躍体勢をとった。が、雫の身体が傾いだと思った瞬間、義経の前で崩れ落ちるようになって倒れてしまう。間一髪と言ったところで義経が抱きとめれば、その姿は今度こそ、いつもの雫の姿に戻っていた。

幼いその面を見つめて義経はほっと息を吐き出した後、苦々しい顔つきになりこう言った。

「僕の時より酷いな、これ……」

これからのことを考え、そして、後始末のことを考えると頭が痛かった。

漸く追いついた鷲宮と奏は雫の姿を確認すると、安心したのが良かったといい、けれど今後を思えばこんなものはただの小手調べ程度に過ぎないのでは、と言った。確かにそうだろう、義経は首肯するが、付け加える様にして口を開く。

「確かにそっちも大変ですがね、お二人さん？この惨状を見てどう思う？」

二人は周囲をぐるりと見回してこう言った。

「大変だな、お父さん」

「修理費用、簡単に見積もり作っておきましょうか？」

「うわ……有能な部下達で、僕、ほんっと大助かり……」

彼らは助けるつもりが全くないようだった。

6 (記憶はなく、けれど歯車は無情にも動き出す) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

6 (記憶はなく、けれど歯車は無情にも動き出す)

雫が目を覚ますと、そこは自室の寝台の上だった。

見知った天井がそこにあり、ほっと息をつくとき、枕元より声がした。義経だ。

義経は手にしていた筆を置くところにこりと微笑みを浮かべた。

「お早う、雫」

「……お早うございます、お父様」

何と言うことはない朝の挨拶であったと言うのに、義経はいたく感銘を受けたらしく、涙さえ浮かべて見せた。どうかしたのかと雫は言っても、義経は何でもないと言うだけで答えるつもりはないようだ。

「あの、どうして私……」

寝ている枕元に、こうして義経がいたことは今までなかった。それもどうやら仕事をしているようである。何故、と思う。

雫はそこまで言っただけだ。がばりとその場で跳ねるようにして上半身を起こすと、ぐっと義経の胸元を掴み上げ

「須賀さんは?! 須賀さんはどうしたのです?!」

と、須賀の安否を確かめようと必死の形相で食らいついてきた。

とても寝起きとは思えないほどに、それは力強い腕で 義経は小さく目を見張った。

「落ち着いて、雫。危ないから」

「須賀さん！須賀さんを助けなくては！」

「だから、落ち着いて。大丈夫だからね。須賀さんも助けたから、安心して？」

「……ほんと、本当ですか？」

雫の腕からするりと力が抜けていくと、そのまま義経は、とりすがる手をゆっくりと離していく。

「そ、本当。だから寝て。急に起きたらいけないよ。雫は二日間も眠りっぱなしだったんだからね」

「二日？……そんなに？どうして……あれから私、どうしたんですか？お父様」

質問攻めにしようとする雫を、ぐっと押さえつけて寝台の中に押し込むと、義経は丁寧に一つ一つ説明してやるべく口を開いた。そうしなければいつまでもこの娘は安心して横になれないに違いないと思ったのだ。

「鷺宮が雫の助けを求める声を聞いて駆けつけてくれたんだよ。だから後でお礼、言うておくように」

寝台の脇に用意された簡易机の上を、義経はかたしながら語り始めた。

「後ね、雫のことを探してくれたのは、奏と島田、それとあのクソガキもらしいんだけど……一応お礼は言うようにね。まあクソガキだけやらなくても、僕は全然構わないよ？」

爽やかに言い放たれれば流石の雫でも理解した。義経は千草にだけは礼など述べて欲しくないようだ。

書類を全てまとめ終えた義経は、机の片隅にそれを纏めると、席を離れて雫の横たわる寝台の端に腰を下ろす。そこから腕を伸ばすと、そのまま雫の柔らかな和毛を撫でた。

「発見者は鷺宮。部活棟で倒れてた須賀さんを先ず発見して、次に鷺宮の目で確認したところ、その目の前にあつた扉の向こうに雫がいるらしいと分かったことで、無理やりそこをこじ開けて救出し、そして屋上に呼び出しておいたらしいへりで、そのまま医療センターまで向かったんだって」

自分はそこまで全く参加なしだから、本当に伝え聞きで悪いけれどと言い、そんな感じだったのだと聞いたままをそのまま告げた。

「では須賀さんはそこに？」

「ううん？須賀さんはもう退院してるよ？」

須賀はもう降矢医療センターにはいないと告げると雫は暫し逡巡し、自分なりの答えを出したようだ。

だが、その答えは事実とは大いに異なっていた。

「で、では、須賀さんの怪我は深くなかったのですね？良かった…」

だから簡単な治療で直ぐにその場を後に出来たのかと勝手に納得すると、雫は柔らかな笑みを浮かべる。雫は須賀が無事であったことと、山田が犯罪者にならなかつたことで二重の意味で安堵すると、胸のつかえがとれたとでもいうのか、心底安心したらしく、どこまでも力の抜けた声で良かったと繰り返した。

けれどそれを見て義経は苦いものでも噛んでしまったような表情を浮かべるのだ。

「どうか、しましたか？」

「いや、雫、その……なんだろう？」

言い淀む義経に雫は「変なお父様」とくすくすと笑いながら言うが、義経としてはたまったものではない。一時父と認識してくれなかった雫が、こうしてまた父と呼んでくれてうれしくはあるが、それでも何か複雑なのだ。そこにきて「変な」とくれば最早どう返しているのかすら分からなくなってしまった。

樂しげに自分を見つめてくる愛娘の視線を遮るために瞼をおろす。助けて欲しかった。時がたてばたつほどに、あの時にあった出来事可否応なしに義経を痛めつける。この痛みをどうしたらなくすことが出来るのかと、雫の目覚めを待ち望んでいたが、こうして目覚めた雫を前にしても痛みはなくなることはない　むしろ倍加するだけだった。

辛い、誰かきてくれ　その願いが通じたのか、誰か来客がきたようだ。ノックする音が聞こえる。

「誰？」

「俺。追加持ってきたから開けてくれ」

追加の言葉にげんなりとはするものの、それでもこうして二人きりであるよりはマシである。義経は扉を開けに立ち上がると、向こう側に居る人間が入りやすいようにと扉を開けてやった。

「お！お嬢！起きたか！」

「鷺宮さん……お早うございます。それと、助けていただいたそう
で、有り難うございました」

雫は寝台の上にゆっくりと上肢を起こすと、これでは失礼かもし

れないがと前置き礼を述べると同時に、頭を垂れた。

「いっていいって！そんなことより寝てるよ。体に障る」

「いえ、大丈夫です。むしろこんなに調子の良かった時なんて、かつてないほどなんですけど……不思議なほどに」

それを耳にすれば義経も鷺宮も顔をあわせてなにやら雫に聞こえない程度で相談を始めたようだ。雫は首を傾げてそれを見ている。割って入るつもりは無い様子である。

「鷺宮、雫はどうやらあれを覚えてないらしい」

「はあ？だつたつても、あれを覚えてない？！どんな……冗談だろ？」

「冗談だつたら僕は……どんなにいいか。兎に角雫は覚えてない。」

ついでに言うつと須賀さん達にしたことも覚えてないんだ」

「……なん、で」

鷺宮は言葉を失ってしまった。あれほどのことをしたというのに、それを当の本人が覚えていないなんてと、言葉もないようだ。

義経はそんな鷺宮に構わず続けた。

「須賀さんのこともだけど、全部内緒にしようと思う。それは鷺宮も奏もだけど、徹底して欲しい」

「ちよっ！どうしてだ！」

思わず鷺宮が激昂すると、しつと義経は唇の前に人差し指を立てて告げる。

「もしも僕らが言うことでそれを思い出したとする。それで、本当にいって言うのか？」

「いいに決まってるだろ？お嬢がやったこと、それはすげえことなんだ。自覚させてやって誉めてやりたい。なんでそれがいけない？」「いけないね、大いにいけないに決まってるよ」「だから、なんでだ！きちんと言えよ！」

しまったと思った。鷺宮は言い過ぎたと後悔したが時既に遅しだ。義経は纏う空気を一変させると鷺宮に対して怒気をぶつける。それも凄まじいほどの怒気だ。鷺宮は首筋にひやりとしたものを感じる。

「鷺宮、よく考える。雫が全て思い出したなら、またああならないという保証がどこにある。またああなったとして、誰が止められるというんだ。よく考える。馬鹿が」

「だが……お嬢がそれじゃあ可哀想だ。自分がしたことすら誇れないなんて……」

「それはいつか、でいい。俺に止められないものが他の誰に止められるんだ」「……」

それは十二分に承知していたため、鷺宮は反論する言葉がでない。俯いて自身の無力感をひしひしと感じていれば義経が言い含めるようにして申し渡した。

「兎に角今は足が必要だ。麗が戻ってこない限り、雫があれにまた変わろうと俺には手も足も出ない。いいな、麗が戻り次第、雫の中を探る」

それは決定事項を告げるものだった。

鷺宮は愕然とした表情を表に張り付けているが、義経は話が終わったと言うのか、鷺宮の手から書類の山を受け取ると、そのまま簡易机の上に置いて、雫の横たわる寝台に腰を下ろしてしまう。最早

鷺宮と話を続けるつもりは皆無のようだった。

「お話は終わったのですか？」

「うん。終わったよ。雫、あの時の話を鷺宮から聞いたらもう一眠りするんだよ？」

「はい！ 鷺宮さん、須賀さんのことを聞かせてください。もう学園には戻ったのでしょうか？」

「ああ」

そうして鷺宮は、当たり前障りのないよう、雫に答えてやるのだった。

「義経様、報告がございます」

「何？」

雫を寝かしつけた部屋を後にすると、澤田が待っていたとでも言うのか、扉の脇に控えており、報告することがあるとずいとするみ出てきた。

歩きながら聞こえと義経が歩くのを、澤田が続く形で行く。更にそれをおう形で鷺宮が続いた。

「医療センターに収容していた患者の件なのですが」

「うん、どうだった？」

「全員が本日の十五時までには検査を終えましたが、驚くべき結果が出ました。全員、完全な健康体です。数日前に検査したときは末期症状すら出ていた癌患者ですらそのような結果が出ています」

「そう……か」

「あの光のせい、だよな」

「だろうね」

鷺宮と義経が無言になってしまったのを見て、澤田はおずおずと遠慮がちに尋ねた。

「信じがたいことですが、あの……本当にお嬢様がそのような力を発揮されたのでしょうか？」

「信じられない？」

「まあ……今まで、そのような兆候は全く見られませんでしたし」

そこまで口にするればそのまま続きを言うことが出来なくなったのか、澤田は口をつぐんでしまう。それは恐れのようなものかもしれない。人間誰しもが見知らぬ力におそれを抱く。それは当たり前の本能のようなものだろう。

雫の今回見せた力は凄まじいものだった。

「訓練すれば、あり得ないほどにもっと強大な力になるかもしれないわけ、か……」

「まさか、お前……」

「しない。絶対に、しない。あのこの力を開発するつもりなんて、これっぽっちだってないよ。けどね、鷺宮。あのまま暴走されたら、どうするの？君に、責任がとれるの？」

「俺は……」

「答えが出るまで考えてていいよ。僕にも、他に答えが出ないんだから。君もよくよく考えてみるといい」

義経と澤田がそうしていなくなってしまって、それからずっと考え続けてみるも、それでも、いつになっても答えは出てこなかった。

7 (それは一つの可能性と言う道) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

7 (それは一つの可能性と云う道)

雫が身動きができるようになったのは次の日の朝のことだ。起きて直ぐ、奏との朝食をとっていたところで思い出したように言われた。

「そうそう、義経様が呼んでました。なんでも、着替えたらきて欲しいみたいで」

「何かしら？」

雫は早々に食事を切り上げると、千草も奏もまだいる中で着替えを始めようとする。

「おまつ！何考えてる！」

「え？何って……着替えを……」

「わかった！わかったから待て！食べ終わるまで待て！」

雫はぱしぱしと長く分厚い睫を瞬かせると今千草がいることに気がついたようにして悲鳴をあげた。こうまで自分のことを忘れてしまわれているようだと思えば、いっそ清々しいほどだ。

千草は無理矢理口の中に朝食の残りを詰め込むと、逃げるようにして長椅子を後にした。雫が倒れて寝込んでいた間は、雫が寝台を、そして千草が長椅子を使用していたのだ。因みにこの状況になつてからは奏も雫の部屋に簡易の寝台を持ち込んで寝泊まりをしていたのだが、この三人が共同生活を送る中で何か間違いが起こるはずもなく、いたって平和に過ごしていた。

毎日いるのが当たり前になると、雫は雫で千草のことを気にならなくなってきたらしいのだが、それはそれでいい兆候ともいえるが、こうしたところは悪い部分だとしか言いようがない。流石の奏も注

意をするようにと言い含めるのを忘れなかったようだ。
きりりとした顔で奏は言った。

「雫お嬢様、制服が裏表違ってます」

「あ、本当。ありがとう奏」

「どういたしましてー」

どこか彼も、ずれていた。

+++

降矢の屋敷の中に、一つだけ奇妙な扉がある。そこは降矢とは別の家紋を掲げられた巨大な一室だった。雫はその家紋を見て唇を引き結ぶと、扉を控えめにノックする。

「雫、参りました」

「入って」

中に入るとどこか、事務所のような会議室のような奇妙な空間がそこには広がっていた。屋敷の一角にこのような場所があることは一般の使用人は知らない。辛うじて知っているのは羽山あたりだろうか。その他にこの部屋に入室を許可されたものがいたとしても、雫には知らされないに違いないが。

雫は早朝からこの部屋にこもって書類を慌ただしく作っている三人を見て何事かと尋ねた。呼び出されたわりに、雫を見向きもしないのはどこかおかしい。すると義経は自分の前にこいと軽く手招いた。雫はいぶかしく思いながらも義経の元へと歩み寄る。

「ごめんね。朝しか時間がとれなくなってるね」

そう言いつつも義経の手は休むことなく動いていた。

「いえ……忙しそうで、むしろ時間を割いていただいて恐縮です」

「ううん、こつする必要があるから呼んだんだ。だから気にしないこと」

「義経パス。これお前の印鑑必要だわ」

鷲宮から投げられた　とんでもないことだが　書類は空を舞い、義経の手元へと舞い降りた。それを見ながら義経は軽くサンキユーと述べると、そのまま手早くサインと押印を済ませて、澤田へとそれを回す。

「ええと、後の方がよくはないでしょうか？」

呼び出されてなんではあるが、それでもこれは遠慮すべきなのではと思いきや、義経は駄目だと告げた。それは思いの外強い言い方で、少々雫は驚く。それは雫には甘すぎるほどに甘い義経の態度とは思えなかった。

「雫、父上の残した書類を見て気がついたことなんだけど、君の口から聞きたいんだ」

「何、を」

雫は大仰に肩を揺らすと義経の凝視に堪えかねたのか、視線を逸らす。

「理事会の決定とかもそうだけど、一体、何があったの？」

「それは……」

何も無かったといつてもこれでは納得しないだろう。義経は書類を見つけて雫の口から聞きたいと言った。ということは、もうあの理事会の書面を読んだ上であえてこうして雫より聞きたいと機会を設けたにすぎないのだ。そう、雫に拒否権はないのだろう。

そうと知ると雫は腹を括った。

逃げられないのであれば、立ち向かうしかないのだから。

無力を知られることを恐れた雫はもういなかった。

毎日おびえて暮らすのはもうたくさんだ。

命を脅かされて気がついた。誰かを頼らねばならないときに頼ることは、なんら恥ではないと。そしてこうも悟った。もつと他者を信じよう、自らが信じなければ他者からも信じては貰えないのだから、と。

須賀に雫は櫻子に話しかけるようにして話しかけてみた。すると須賀はきちんと暖かく言葉を返してくれたのだ。今までたくさんの壁を作り、虚栄で塗り固めた自身は無意味で無価値なもの、意味がないと悟ったのだ。

何一つ権限が与えられていない、無価値な娘、それでいいじゃないかと思う。

他者にそれを知られることが怖くていえなかった。そして宗一郎に好かれたいと使用人にもこれ以上嫌われまいと、必死で取り繕って”降矢の素晴らしきご令嬢”として振る舞ってきたことも、最早雫には無価値、そして無意味でしかない。

好かれなくとも構わない。

嫌われてももういい。

自分自身で体当たりをして、それで嫌われたならばいいのだ。嘘で塗り固めて、虚仮威しをしたところで何になるというのか。

雫は全てを語り終えると、幻滅をするならばすばいいと付け足した。

「私は私なりに頑張って参りました。この屋敷に雇われている使用人の方にも、そしてお爺様ともなんとか折り合いをつけるべくして参りました。それでも気に入られないのは私に問題があるのでしよう。理由は知りません。必要最低限しか、口をきいていただけませんでしたので。けれどもう、そんなことはどうでもいいのです。笑いたい人間には笑わせておきます。学園でのことも、もう口出しはさせません。部活も委員会も、何もかもを禁止されておりました。人と話すことさえ禁止事項だらけです。けれどそんなもの、もうまっぴらです。私は、私です」

全てを話すことは恥辱とも考えていた。

宗一郎や使用人にされたことを言いつけるような卑怯なまねをしなくなかったのだ。けれどもう隠す必要がどこにあったのかさえ分からない。

雫はただ淡々と事実を有り体に述べていく。そこには何ら熱も何もなく、抜き身の刃のような冷えた潔さしかなかった。

「お爺様がなにを考えていたのかは知りません。ですが生徒会選挙で私は半数以上の裁可にて生徒会長になりました。ですがその当日に妻たるもの、夫より前にでるべきではないとの理由で生徒会長をおろされました。対外的な理由は何一つ説明が行われなかったため、周囲よりいわれているのは、私が相応しくない行いをしたためではないのかといわれております。千草とのことはまた別として私は考

えておりますが、それでも、生徒会のことにも口を出すほどに、お爺様は私を降矢に縛り付けておきたいようです」

そこまで聞き終わると流石に義経もそこまでとは考えていなかったのか、重苦しい息を吐き出すと顔をしかめて呻くように口を開く。聞きしに勝るとはこのことだ。

義経は今父のことよりも娘をどうにかしてやらなくてはなるまいと思う。けれどどこから口を出せばいいのか、それすら分からないほどに雫の心には深く傷がついていた。

「父上がそんなことを……」

ようやくそれだけ絞り出すように告げれば、雫はぴしゃりと言いつ捨てる。もはや義経も邪魔をするのであれば、ということのようだ。

「嘘だとお思いになられるならば結構です。降矢を出て、六花神へと私は参ります。ここよりも待遇はよくはないでしょうが、それでもまだ、人扱いをされるだけマシですから」

「ちょ！ちょちょちょ！待ってよ！そんなこと言っていないから！それに胡粉の雫がいったところで歓迎なんてされるはずないでしょ！？」

「ここでもや義経よりそれを言われるとは思ってもいなかったためか、雫はかっとなって言ってしまった。」

「それでも！ここよりはマシです！！」

思わず大喝すれば義経の目が見開かれたまま固まってしまった。

瞬きすら忘れてしまったのか、ぴたりと制止したままに反応がない。流石に言い過ぎたと反省と後悔の念に苛まれていれば、義経が息

を吹き返したように　けれどどこかおかしさを残して　ぎくしやくと動き始めた。

「……嘘だとは思わない。父上が雫と距離を置きたがってるように見えてたからね。雫がそうなんだって言うならそうだと思う。信じるよ」

本当にそう思ってくれているのかとの疑問が顔に出ていたらしいが、それは直ぐに見破られ、義経の口からもたらされた事実には驚愕した。

「それに、信じるも信じないもないんだよ雫。僕が君に護衛を全くつけなかったと思うてるの？あやこさんと雫、二人には護衛をきちんとしてあげた。ちゃんとそつちからも報告がきててね。だから、本当は全部知ってるよ」

「……なぜ」

ならばなぜ、今まで放っておいたと言っただろうか。雫の中に言えない感情がわいた。怒りだろうか、憎しみだろうか、それは雫にとって初めての感情だった。

「今までなんで黙っていたのかって？そんなの簡単だよ。雫が言い出したくないと考えていたものに対して、僕が先に気を回して手を打っておく。でも、そんなのいやだろ？全部障害がなくて、ほんとにそれでよかった？」

よくない。

雫は頭を振ると、確かにいらぬ心遣いは邪魔であると告げる。無闇やたらとそんな風に、前もって障害を取り除かれてもいいはず

がないのだ。それこそレールの上を歩くように、それはそれで居心地のいい人生かもしれない。何も障害のないなか、ただひたすら前を目指せばいいのだから。これ以上に安全な場所、安全な道はないとさえ言えるのではなからうか。けれど、それでは全くのただの人形とかわらない。操られるままにそのまま前をいく、そんな運命の何がいいのか。それこそ本当に生きていけると言えるのか。そんな障害に一つもあわないですむ人生なんてつまらない、何一つ成長ができなくなってしまうはずだ。そんなのは嫌だった。

今までの人生を否定することも出来ないし、とも告げ、必要な

「だから、雫が続けたい、まだ頑張れると思っっているならやらせようと思っ続けて貰った。けど、ちょっと雫は頑張りすぎたよね。僕、心臓が止まるかと思った。報告を受けていたのより、もっともつと酷くて……どうしてもつと早く言ってくれなかったの？なんでもつと僕らを頼ってくれなかったのさ」

そう言っつと義経は雫を力一杯抱き寄せ、抱きしめた。

「だつて……六花神のお仕事も、降矢のお仕事も、大変そうで」

そんな父や母の姿を見ていれば、自然と雫は遠慮がちになっていた。次第にそれは、しなくともいい我慢に繋がり 後は今の雫を見ればどうなつたかは簡単に説明がついた。

「そんなの、いいんだ。僕が二つの家のために仕事をするのはね、雫を守りたいからなんだから。だから雫を守るために仕事をしてきたのに、雫がその間に傷ついてたら意味がないんだよ」

耳元に落ちてくる声は、どこまでも慈愛に満ち満ちていた。それを受ければ心の奥にあつたしこりのようなものが一つ一つ、溶かさ

れていくようだ。

おずおずと義経の背に腕を回すとそつと抱きしめる。すると益々強く義経は抱きしめてくれるのだった。

「失礼します」

そう告げて入ってきたばかりの奏が目にしたのは、親子の感動の抱擁シーンである。奏は見えてはいけないシーンだったかとくるとそのまま踵を返すとみていませんから！と妙なところで恥ずかしがった。雫の半裸を見たところで頬を染めることもしなかったというのに、奇妙な少年である。

「どうかしたか？」

鷺宮が後ろを向いたままの奏に声をかけると、奏は片手で目を覆い、更に瞼をぎゅっと瞑って何か書類をつきだしてきた。

それを受け取ると中をざっと見てそのまま鷺宮は義経に手渡した。

「届いたみたいだぞ」

「ほんと？」

義経が顔を上げると澤田が意外そうな声を上げる。

「早いですねえ。明日になるかと思っていました」

「さっすが、伊達にいつも暇してるわけじゃないよね」

「まあ、こんな時くらいは大いに働いていただかなくてはですよ。決して安くないお給金を支払っているわけですから」

当然と頷いて二人が言うも、鷺宮はお気の毒にとしか言わない。

いったいその書類には何が書いてあると言うのだろうか。雫は気に

なつて義経の体をよじ登るようにして書類ににじりよつた。その猫のような仕草に義経はくすぐったいよと笑つと、隠すものじゃないからと言ひ、見せてくれた。

「これは？」

8 (執行部、初代部長就任) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

8 (執行部、初代部長就任)

「っそ。任命書。これがかっこ、通うの楽にならないかな？」

その書類は義経の言うとおりで、任命書と題してある。空とぼけた言い方で鷺宮は言う。

「俺たちが生徒会の代の時からそうだったけどなあ、生徒会つてのは仕事山積みなんだよなー、義経」

「そうなんだよねえ、鷺宮。それもこれも、悪いのは普通科と数学科とスポーツ科、全部をまとめた上での選挙だからだよねえ？」

人数多いからまとめるのも大変だよと肩を竦めて言われてしまえば啞然としてしまった。一体、何を言い出すつもりなのだろうか。

任命書の肝心の中身は二枚目の書類に書いてあるようで、纏められて義経の手にあるために二枚目の内容はようとして知れない。

「秋に総選挙が行われて、直ぐに六花祭ですからねえ。とても大変です」

澤田が大きく頷けば、奏までが去年の話を持ち出して語り出す。

「去年の生徒会に参加した人たち、死んでたな。課題終わらないって泣きついてきてさ。でも、かわりに課題やってあげたら怒られたっけ。あはは……数学科の子の課題はおもしろいけど、凄いやからちよつと、同情するかも」

ちよつと同情するのはこつちである。

雫は奏の学友に不憫なと思ったが、いたって真面目に奏は生徒会が悪いと言っただけで自分が何をしでかしたのかは分かっていない様子だ。恐らくは式イコール答えという、とんでもない解き方をして差し出したに違いないと思いつながら、雫は何もいえなかった。言ってもどうせ奏は理解できないからだ。

「だからまあ、このところってわけじゃあないが、仕事を抱えすぎているらしいんだな、生徒会の連中は」

「いやあ、やっぱり元生徒会役員様の言葉は重みが違うねえ。確かに僕が仕事してたときも随分仕事多くなって思ってたもんなー。やっぱり副会長様も大変だったんだ」

義経と鷺宮が生徒会に属していたことを今初めて知ったと雫は思っても、どうにも口を開いてはいけない雰囲気である。遠慮をして口を開かないでいたが、それでもこの会話の内容は実に雫の好奇心を刺激した。

お父様の昔の話！

「馬鹿言えよ。おまえがさぼる文だけこっちに皺寄せがきてたんだ！だから俺はお前の分も、そりゃ……全部ってわけじゃないが負担してたんだぞ！だからあの頃はほんとに大変だったんだ！それをお前、大変だったんだってなんだ！他人事のように言いやがって！働き損にも程があんだろが！俺の労力を返せ！直ぐ返せ！今返せ！！早く返せ！！」

まくし立てるように言われて辟易としている様子の義経は、子供のように唇を尖らせて不平不満を述べだした。どうにも心外といった様子である。

「勝手に全部みーんなやってくれてたのに、何で僕がさぼるなんて

話になつてるの？おかしいよ。ったくさー、あの頃はみんな”好きでやつてることですから”とかつて言つてくれてたのにね。何この変わりよう。月日つて残酷だよ。そして鷺宮が冷たくて僕、泣きそう」

雫の柔らかな髪に顔を埋めると、その場で義経はしくしくと（本当にしくしく口で言つてる）なきはじめた。鬱陶しいとは思わないが、どこまでも人を舐めた男であるとは言えよう。

「四十男がなき真似とかな、全然可愛くないから止める。つつか失せる！うぜーんだよ失せる！！」

「うっわひっどー！何この部下！あり得ないんだけど！！」

二人が言い合いに発展したところで澤田が雫の傍にそつときて、そういうことです、ご理解いただけましたか、と言った。さっぱり分からない。と言うよりもこれでどうやって分かれと言うのか。いつも思うがこの三人は説明するつもりが全くないのでとさえ思った。

「どういうことなんでしようか？」

「ですからね、生徒会の仕事が増えすぎているわけです。それは近年生徒会役員を引き受けていた人間であれば誰しも知っていることでした。ですからそろそろ手を打たねばと考えていたところでこういうった理事会の決定があつたわけですね」

こういった、というのは雫の会長降ろしのことだろう。ほかして言われなくとも、もうどうでもいいことなのだが。気を使つてくれると分かつているだけに、何も言えなかつた。

澤田の言葉を聞いていたのか、鷺宮に関節技をかけながら義経がそれを繋ぐようにして口を開く。

「理不尽な決定だったってことは十分理解してるから。だから、安心してよ」

「そうですね。これをいい機会としてお嬢様には別の役職を持って生徒会の仕事の一部を担っていたらこうと考えている、と、そういうことなのです」

別の役職とはなんのことだろうかと考えていると、関節が決まったらしい鷺宮の悲鳴が聞こえた。見れば義経が勝利宣言をしているところだった。屍のように横たわる鷺宮を奏が指先でつつき回している。何と惨い……

義経がいい汗をかいたと言うように爽やかに汗を拭いながらやってきて言うには、こういうことらしい。

「うちの学校、帝都きつてのマンモス校だからね。そのせいか凄くイベント多いじゃない？人数多いとどうしてもフラストレーションたまりやすくてねえ？お陰でガス抜きが必要なんだよ。それも、結構頻繁にね」

「それは……なんとなくですが、分かります」

「まあ、高校に進んだばかりの雫には分からないかもしれないけど、何かあることに臨時でイベントが開催されたりもするわけ。そのたびにその年の生徒会が工夫を凝らしたイベントを企画立案してくれるんだけど、それが拙かったかな、とも思っただよね……」

どういうことかと目で問うも、答えにくそうに義経が後頭部をかきながら俯く。

「なんて言うか……飽きさせないように、なのかなあ？」

「じゃないんですか？まあ贅沢虫の集まりですからね、あそこは。

同じ家から通う兄弟なんかも多いんですよ。そしてそのお陰でなん

ですが、兄からこういうイベントは聞いたことがあった、もつと派手にしないと姉から馬鹿にされる、こんなのじゃインパクトがない……などとおっしゃられました。大変迷惑を被りました」

確かにそれは迷惑なんてレベルではない、邪魔以外の何者でもないではないか。

いつそ生徒会をおろされて良かったかもしれないと青い顔をしていれば澤田がどこまでも人の良さそうな笑みを浮かべて告げた。

「そういった連中を全員、何度殺してやろうと思ったか知れませんが。全く」

「だ、ただ、だめです！殺したらだめです！」

「雫、雫、澤田君のはジョークですよー？」

「ほ、ほんとですか？」

「うん、そう。澤田は基本的にうちの人間以外には冷たい子だからね。でもまあ、確かにいい加減にしてほしいとは僕も思ってたわけですよ。だいたい、前にやったイベントを、どうしてやったらいけないわけよ？誰がそんなこと決めたんだろうねえ？」

「ああした連中は、恐らく他人のお古が嫌なんでしょうよ」

澤田は生徒会役員当時を思い出して不機嫌なのか、先ほどからざつくりと切り捨てるような言葉ばかり発している。雫は青くなるも義経にははいはいじょーぶだからねー、と言われてしまい何も言い出せなくなってしまった。

「何分金だけはあった学校なのが災いしたな。お陰で注文が多くて多くて……お陰で休まる暇なんてなかったぞ。イベントは増えるわ、金の工面に奔走するわで辛いなのって……。管理する側の苦勞をあいっつら、微塵も考えちゃいねえし」

床に横たわったままの鷺宮が涅槃像のように肘をたててその突きだした手の上に頭を乗せて言えば、復活したのかと義経が言う。雫は悲しくなってきた。

「皆さん、そんなことでいいのでしょうか？人の上に立つことが多い方々ですのにそんな……」

ハイクラススクールであることの自覚があるゆえの発言であったが、それをこの場に居る人間が全員知らないはずもなく、知った上で言われてしまった。下を知らない連中もいるんだよ、と。雫には理解できないことだった。

「どうしてですか？私は今まで、他の暮らしと言うものを散々学ばせていただいてきました。それはとても大切なことです。なのにそれじゃあ……」

「まあなあ。でも、しょうがねえだろ。そういうもん、全部知らないや知らないで、ずっと……それこそ一生過ごす野郎もいるくらいだ。しゃーねえさ」

「改めて言おう。理事長代理として降矢雫に命じよう。」

理事会は行事関連、それも生徒達のための行事を全て取り仕切る部署を設けようかと考えている。生徒会本来の仕事をこなして貰うためにもその方がいいと言うことで……なんだが、それこそこんな雑務にかまけていて、去年の生徒会は散々な有様だったようだね、そういう部署が六花学園には必要だと思っ。違っか？

確かにそういう理由、そして事由があるのであればそういうった機関が学園内部に生徒会とは別組織で必要だと思っ。

「そして降矢雫、それを君に初代部長と言うことで統括していつてほしいと我々理事会は考えているわけなのだが」

義経はそう告げるなり先ほどの書類の二枚目以降のページを見せた。

任命書の他に、そこにはまだ名もない部の設立の手続き、その書類、そして認可は理事が一任するという書類があったのだ。

「理事会が君を後押ししよう。君は生徒会を追われたんじゃない、君はこちらの部署へ就くよう理事会から言われていた。まあ、選挙後からと言うことになるな。どちらにせよ。だから会長職にはつけなかった。つくことを禁じられてしまったんだ。分かるね？だからこそ次点であった彼が生徒会長となった。そして君は生徒会の行事関連の……何がいいか……部署名は。行事関連部署だから、何だろうな？」

義経は仕事用の真面目な口調で語り続ける。雫だけはこういう口調の義経に免疫が無くてどうにも居心地が悪く感じられてならないが、それでも言われることはすんなりと納得出来て、そして何より嬉しく感じられた。

「執行部でいいんじゃないやねえ？つけるなら、六花執行部だろうな。取り仕切るのは理事が認可した行事のみになるってことにも出来るし、まあある意味では一石二鳥だな」

「ですね。最近は無駄にイベント増やし過ぎていましたし、ちょうど良い機会ですから要らないものはさくさく切り捨てましょう」

一番予算を食つやつから消していきましようねと言う澤田の姿に、生徒から暴動が起きない程度にしてほしいなと雫は思う。予算を食つと言うことは、イコール一番派手なイベントに違いないはずなの

だから。

「そして残したものは逆に派手にイベントを組むってか？」

じゃあそれで決定だと告げると、義経は任命書にさらさらと、こ
う付け足していった。

見るとそこにはこうあった。

執行部、部長、降矢隼。

隼はその書類を取ってもいいのかまだ分からない困惑顔である。

いや、戸惑っているだけなのかもしれない。隼にとって都合が良
きことだからだから、だからこそ躊躇いがそこには生まれてしま
うのだ。

義経が戸惑う隼に、けれど、と釘をさすように言うのだ。

「ただし隼、よく聞くんのだ。執行部を立ち上げ、理事の名の元に行
事を取り仕切るとなると生徒会が黙っていないと思う。今まで生徒
達の自主性に任せるとしてきたのをそっくり仕事を、それこそ半分
も取り上げることになるわけだからね。それも当たり前前に覚悟しな
くちゃならないだろう。それこそ彼らの面子もあるだろう。何より
君がと言うのが気に食わないはずだろう。生徒会を追われたと思っ
ていたら新しい部署ってどういうことだと言われることもあるだろ
うし 直接言ってくるような馬鹿が居るかは分からないが 理
事の娘だからって言われることになるはずだろう。隼の面子を保つ
ために確かにこれを作ることを良しと俺はした。けどな、ただ受け
取ってそのまま目出度し目出度しにはならないと思う。必ず戦わな
くちゃならないだろう。それも、隼が相手にするのはこの学園の約
八割を占める生徒達だ。辛い目にあうことも覚悟しなければならな
い。分かるか？だから、受け取るか受け取らないかはお前が決める
んだ」

「八割……」

そこには甘えや惰性でやることは一切許さないとの義経の意思が見てとれた。

栗は都合がいい話なだけではなかったことを認識すると、今度はあまりにも大きな話になっていくことに恐れを抱いた。本当に自分に出来るのだろうか。

「義経、言い忘れた。お嬢、学園側、それと理事側はお前の味方になる。それもこれも生徒会と生徒が散々悪行を連ねた結果のことだったってことなんだがな。学園側も理事側も、部署が出来るならそのほうがいいと、こうきたんだ。金の出所とか生徒会となるとどうしても他の仕事もあるからな、手一杯で総括する部署を欲していたところだったんだ。だからお嬢ならってことで向こうも諸手をあげて賛成してくれた」

……生徒達全員が敵になる。

このマンモス校には教育を充実かつ、完全に行き渡らせるために教師の数も可也揃えているほうだった。多すぎるほどの人数だが、今はその二割程いる教師の数が有難い。

ならばそれが聞けただけでも十分だった。栗は面を上げて言う。

「元より断る理由もありません」

栗は宣言した。

「私はやりませぬ。執行部初代部長に、なります」

きっぱりと言い切れれば、晴れやかな笑みが浮かびあがる。

もう迷うことは無いだろう。雫は前を向いてただ我武者羅に動いていこうと誓った。誰にではない。自分に誓ったのだ。

誰にではないの、自分のために頑張るのです！

すると、その宣誓を受けて義経が確認してきた。

「本気？」

今更何を、と思うが、それも親心ゆえであろう。助けたいと思うのも事実ではあるが、それでも辛い茨道を歩くのはこちらも相当辛いはずだ。それを分かっているだけに確認をしたのだろう。

雫は挑むような目をして言った。

「今も、そして受け取った後も、生徒の数に変わりはないのです。

そして今も、受け取った後も、冷たい視線は何一つ変わらないだからやる。私は、やり遂げてみせます」

そして雫は、六花執行部を設立し、こうして活動を始めることになったのだ。

外伝1 家庭教師を頼む人、頼まれる人（前書き）

他の話を読まなくても読める話かなあとは思いますが。
設定で遊んだ感じなお話。

外伝1 家庭教師を頼む人、頼まれる人

どうしてこのようなことになってしまったのだろうか。

雫は開かれたノートに数字を埋めながら泣きたくなった。

「雫お嬢様、嫌だなあ。どうしてそんな間違いをするんですか。遊んでないでさっさとやっってくださいって言うてるじゃないですか」

何て事はないものを指すようにして言われれば、いつそ自分が本当に馬鹿なだけなのではとの錯覚を起こすが、いやいや、そうではないのだ。奏のほうがこれは無理を言っているのだ。

雫は凝視してくる奏の視線を遮る様に問題集をすつと頭の上に差し出して言っ。

「これでも、ちゃんとしてるつもりなんですけど……」

むしろ可也頑張っているほうである。だが、その頑張りには奏には見えないようだ。

奏はもつとさくさくと問題を解くようにと、いたって簡単そうに告げてくる。けれど雫の今取りかかっているものは高校二年から三年、そして一部大学にさえ出るような問題すらあるという、奏特製の難問だらけの問題集だった。これで簡単に解けたらそれこそ学園でこの先学ぶ必要もないというものである。だと言っのにこの責め苦はどうして浴びせられ続けると言っのだろうか。少しは加減をと思っものの、奏にとってはこんなものはまだまだ小手調べ程度らしい。

雫は許してとぼつりとこぼしてしまっが、最早それは弱音ではなく許しを請っ言葉であって何か違っ。間違っっている気がした。むしろそこまで追いつめられているのかとの雫の有り得ない程の疲弊ぶ

りを伺わせた。だがそれこそ奏にはそんなものは通用しないのだ。奏は楽しそうに笑うと面白いものでもみたような顔をして言った。

「もー、からかうのは止めてくださいって言ってるでしょ？ほら、次は化学ですからねー。ファイトですよー？」

まだこの地獄のような時間が終わらないのだと知り雫は青ざめると、奏は新たな問題集を目の前に積み上げてファイト！と、軽くのたまった。むしろ奏はこの（雫をいびる？）時間が気に入っているのか、その肌艶は何故かとても良くなっているようだ。いっそ悪趣味なと雫は思う。

「お、俺は終わったからな！」

こんなもの！と、問題集とノートを一纏めに投げつけるようにして千草が勝ち誇ったように言うと、直ぐにも逃げの体勢をとりこの場を後にしようとするが、それを逃がすような奏ではない。

投げつけられたノートを一瞬だけ見て、直ぐに千草へ、まだだめだとの言葉を告げた。理由は簡単だ。

「許嫁さん、答えが間違ってる。問い三十七は答えがルートにならないと」

千草の問い三十七の答えは”分からない”との、ある意味では男らしく潔い答えだった。分からないから分からないのだとの白紙回答のようなものだったが、奏はそうは取らなかつたのだ。大まじめに奏はそれを”答え”と取つたらしく、文字が答えは数学ではあり得ないからねと笑顔で言うのだ。千草にとってみれば嫌み以外の何者でもなかつた。（仮に雫に向けて言われた言葉だとしても嫌み以外の何物でもないが）

「……き、却下」

「却下？どういう意味？」

「その答えが間違っていることを却下する！もういやだ！俺は勉強をしたくない！！」

そう告げるなり脱兎の如く駆けだした千草の背中に、奏は容赦ない一撃を放った。ジャラララと金属の擦れる音がしたかと思えば、一瞬にして千草は鎖に足を絡め取られてしまい、気がつけばもんどり打って床に倒れていた。

雫は勢いよく足を取られて頭から転んだ千草を見て震えあがる。その眦には大粒の涙がこぼれおちそうな程にたまっている。

(こ、ここに、怖いですっ！！)

芋虫のように地を這いずりながら千草は吠えた。

「勉強なんて嫌いだ！つていうかお前が教えるのが嫌だ！！つつか嫌いだ！お前の教え方が大嫌いなんだよ！分かれよ！うおっ！やめっ、引くな！引くな！引くんじゃねえええ！！」

奏はよいしょよいしょと千草を絡め取った鎖を手繰るようになると、あるものをあるがままに告げた。それは雫にとつても、千草にとつても、冗談ではない話だった。

「でもね、義経様に頼まれているからなあー。そういわれても、僕も困るんだよね。だから大人しく勉強しようよ？僕が教えるのが気に入らなくても、これが終わらないと君たち二人とも、自室に帰れないからさ？」

あくまでも自分は頼まれたからやっている、そのスタンスでいくらしく、奏は仕事だからとの態度を崩さない。

奏は地べたをもぞもぞと這いずる芋虫になおも言った。

「ああそうだ、この問題集が出来たら義経様が許嫁さんが欲しがってた？えーつとね、GRT-2ですか？なんの頭文字か知りませんが、それをプレゼントしてもいいそうですよ。あれ最新モデルでしたっけ？新作ソフトも幾つかつけてもいいって……」

GRT-2とは次世代ゲーム機の最新型で来春発売予定のとても高価な玩具だった。ただただの玩具ではない。微細な脳波を読みとることにより、よりダイレクトな操作に近付けた高度な技術を取りこんだコンピュータでもあるのだ。

パソコンのOSを複数搭載することも出来、更には脳波を読みとる機械がついて、更にはそこに自分がいると感知することの出来る程の圧倒的な存在感、そして感覚を得ることの出来る高級玩具だ。

「あ、あの……GRT-2を、プレゼント、だと？」

現在十万は最低だろうとネットの掲示板では騒がれている。因みにまだ価格は決まっていないのだが、それもあと数週間で発表が決まっている。それをぽんとくれてやるとは何と気前のいいことか。あつ晴れ、恐れ入るとはこのことだ。

まだ価格さえ決まって無いあんな高そうなもんをタダでくれるだつて？

それも嫌っているはずの余所の子供にだ。千草は嘘だろうと思っただ。けれど、疑うよりも何より、本当に 万が一にも有り得ないことだが、もしも本当にくれたとしたら？と、そう考えると安易に答えが出せないでいるのだ。

千草は実家になるべく負担をかけたくはないと考えていた。だか

ら初めから高価すぎる玩具だあれはと、手が出せないと鼻から諦めていた品だっただけに、瞬時に脳内会議を開いて採決を始めた。

満場一致の採決で「全力でやるうぜー！」となった。(千草よええ……)

同時に千草の中に眠れる気合いが百二十パーセントくらいに、ぐんと一気に跳ね上がった。

最新モデル！ついでに最新ソフト！！

小さな頃から健の家でたまにやらせて貰っていたゲームが、今千草の手に入るうとしている。それを聞いただけで千草の中でやる気が膨れ上がっていくようだった。

「おい、早くやるぞ！」

「そこなくちゃ」

笑みを浮かべる奏は諸手をあげてそんな現金な生徒を歓迎した。

彼は実に優秀な家庭教師であったようだ。

「千草……後で後悔しても知らないんですからね」

裏切り者めと雫は一人悔しげに言い放つと、もくもくと問題集をときにかかっていた。

どうせ逃げられるはずもないのであれば、文句を言う時間すらおしいと雫は考えたのだった。

「俺はやる！やるぞおお！」

「そのいきだよ！ファイター！」

雫は問題集を嗚咽をこらえながらやり遂げると奏に柏手を打たれながら誉められた。

「やっぱり雫お嬢様はやれば出来るんですよ。偉い偉い。最後までよくやり遂げましたね」

一瞬頭を撫でられてうつとりとその気持ちよさに懐柔されかかるも、はっと思い出した。そうだ、彼こそがこのいじめにも似た問題集を作り出した親玉なのだ。

雫はむすつとした表情を作り込むと、奏はもつと簡単な問題を作るべきだと責めた。と言うよりもこのいじめにも似た酷い問題をどうにかしろと言うものである。

けれど奏はそれを聞けば首を傾げて言うのだ。

「もつと簡単ってどんなのですか？」

「そりゃあ……もつと、こう……」

雫は手のひらやら指やらをもそもそ、わさわさと蠢かしながら口ごもる。うまく言い表せない。

「とつ、兎に角！もつと簡単なんです！こう、簡単なやつなんですっ！」

勢いに任せて言うと、ふんと鼻を鳴らして雫は腕を組んでしまう。言いきってしまった後は何とでもなれた。さあ来いと雫が構えれば奏は困ったように頭を掻きながら言う。

「……んーじゃあ、答えが一発で出るやつですね！それならどうかな？いけますか？」

「そ、そうですねー！そんな感じですー！」

そうよと笑顔で告げてみて、雫は後で後悔した。

それは何故か 答えは簡単、奏が次に用意した問題集は、常人では中間式を長大な量を書き込まないと解けないような超、超超難問であったのだ。

「うっ、うえええっ……ぐしゅ……無理……無理ですっ！無理ですううっっ！」

だが、決して奏は意地悪でそうしたわけではない。

雫は言った、もつと簡単にと。すると奏はこう解釈したのだ。そうか、自分がぱつと解けた問題ならば簡単だろうと。これが先ず間違いのだが……。

「ぐしゅ……ふえええっ……」

鼻水を啜りながら雫が問題集に目を落していると、恐怖にも似た感覚を得た。数学の問題で恐怖を感じられるとは、ある意味ではとても貴重な体験である。が、あまりしたいとは思えない体験ではある。

雫は数学の学者かなにかにでもなったような気分になった。問題を読んでも答えがちいつとも頭の中に浮かんでこない、そんな難問だらけが目の前にあるのだ。これをどこの誰が高校生にやれと命じるのだ。どんだけ無体を言うのだこの野郎と雫は怒りなのか悲しみなのか混乱なのか、もうわけのわからない感情のままに悪態までついているが、本人は必死過ぎて気づかない。

それよりもまず、中間式を導き出す公式すらわからないのだ。どうやってこれで説明というのか。

雫はぶるぶるぶる首を壊れた玩具のように振り続ける。口元からは小さく無理無理無理と念仏のように唱えている声が聞こえる

ものの、それは奏には届かない様子だ。

「さ、頑張つて！簡単でしょ？」

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理」

「え？何？」

「無理無理無理……ふ、ふえええっ！奏が虐めますううう！！」

「え、えええ？！なんで？どうして！？なんで泣くの？！雫お嬢様？！」

「いじ、いじめるううう！ばかあああ！奏なんか嫌いいいい！！」

ぐしゅぐしゅと鼻水と涙で顔を汚しながらそう告げると奏は頭を抱えて本気で困惑しているようだった。だが思う、何故これで分かん、と。

雫が泣くのをよそに、こちらはこちらで限界らしい　千草が二度目の匙を投げる、もとい、筆を投げたようだ。

青い顔に脂汗を貼り付けて、千草は席を荒々しく立つと限界です！と、何故かそこだけ敬語で口にしたかと思えば、スタートダッシュが早い、物凄い勢いで飛び出していった。

「もう嫌だ！俺は逃げる！！」

突っ伏している雫の横で千草が扉へと駆けだした途端、奏がその姿を追いかけていってしまふ。確かに突っ伏して泣きじゃくる雫よりも今は逃げ出した千草が問題ではあるう。

だがしかし、思うのだがどうしてなのか。どちらも常よりもやたらと足が速いのだが、あの俊足をそれこそ学園内にてどうして発揮出来ないのだろうか。首を傾げる思いがする。

「二人とも……いつもはもっと、遅いのに……ぐしゅ」

矢張り千草も命がかかる（……）と流石に違うのだろう。けれど奏はあの運動不足を地でいくくせに、こんな時に妙に早いのは何故なのだろう。不思議でならなかった。

「んと……ごめんなさい、千草」

まあそれはそれとして 雫は千草を生け贄にして、自分は逆の方向から逃げることにした。こんな問題の前ではいかな忍耐の雫（銘々櫻子）であつても無理だ、早々に逃げるが吉である。

「ぎゃーっ！」

ズガツシャン！ガシャシャシャシャッ！

何やらけたたましい音が聞こえるが、雫は振り返るのが怖かった。

「だーからも、次は楽しい科学だよ？なんで逃げるのかなあ？」

「お前が教える科学って、どんだけイジメだつて！おまつ、ざっけんなよ！今日出た問題さつきネットで調べたら、どれもこれも大学レベルだろうが！俺は今の学力を向上させたいだけで、大学の勉強がしたいなんてひとつことも言つてねえ！！」

「えー？でも、これ義経様に見せてオーケー貰ったやつなのにい」

これをもつて勉強すると事前に許可までとつていたらしいと聞けば、流石に千草は怒り狂った。奏一人の所業ではないのだから当然といえば当然だろう。

「あんの若作り一号めええええっ！！」

その後もどっかんどっかんと嫌に鈍い音がしたが雫は努めて聞かないふりをすると、そつと扉を閉めて逃げた。

「ひぎやああああ!!」

「千草、貴方の死は、決して無駄にはしませんからね」

きつと雫は前を見据えると、そのまま真っ直ぐに目的の場所へと歩き始める。向かう先は若作り一号の元だ。千草ではないが、雫は抗議する気、満々だった。

表情だけはどこまでもにこやかなのに、雫の笑みを目にした使用人たちは、何か感じるものがあるのか、全員青くなつて道を譲った。いつもであれば道を譲っているのは雫だろうに、今の雫の迫力の前には人をひれ伏させる何かがあるらしい。

「若作り一号……今日こそは許しません」

毎回毎回奏を寄越しては雫を疲弊させてきた若作り一号　もと
い、義経はその頃、くしゃみが止まらなかった。

「へぶしっ!へぶしっ!へーっくしっ!!……あゝ……最悪。何よ
これえ。風邪かなあもっ」

「悪寒とかしますか?」

「いや、わかんない。しないような?なんだろね?花粉症?」

「さあ?この時期の花粉症というとブタクサですから、ならないに
越したことはないと思いますけれど……困りますねえ、体調を崩
さないようにするのも仕事のうちですよ?」

「はい、以後気をつけまーっす」

世話女房よろしく澤田が甲斐甲斐しく義経の世話を焼き始めると、
その隣で鷺宮が一言言った。

「ってかお前、くしゃみだけはおっさんなのな」

そこだけは歳を取っているのかと頷く鷲宮に、義経は引きつる顔で応戦した。

「ほつといてくんないかな？自分だって酒の飲み方はおっさんなくせに！」

「お前……何度言えば分かるんだ！焼酎に梅はいいんだぞ！相性ばつちりなんだからな！」

どうやら二人ともがそのことを気にしているらしい。

そんな中身は老体な義経のもとへ、般若となった雫がたどり着くのはもう少し後のことだ。

「お父様の馬鹿あ！嫌い嫌い嫌い嫌い！」

雫の攻撃はまさに、会心の一撃と言う名にふさわしい程に威力が高かった。

そして、その会心の一撃が、一瞬にして義経の心を木端微塵にしたのは、言うまでもなかった。

「おーい、生きてるかー？」

「……しず……しずく……し、しず」

「死んでますね、完全に」

「南無」

「成仏してくださいね」

外伝1 家庭教師を頼む人、頼まれる人（後書き）

+++

ちよつと悪戯程度のつもりが最初はあつた義経さん。からかい過ぎた模様。

ブロークンハートはこの後暫く戻らなくて、結局妻か娘が戻す羽目になるんだとか。

1 (離れていくもの) (前書き)

再掲載開始になります。

以前読んだものと違う話に恐らく発展するかと思いますが何とぞ御容赦くださいますようお願いします。

特に第三章は恐らく三部に分かれるので、五章くらいまでになるかと思えます。

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

1 (離れていくもの)

海外からの通話が入っております、そう告げられて回されたのは息子からの電話だった。

それは一方的な挑戦状だった。

「何か用か。手短かに言え」

無駄な世間話だったなら今すぐ切るからなと言外に告げれば、そんなことはないよといつも通り、息子 義経は告げた。

「別に時間はとらせないから安心してよ。とりあえずこれだけは言っておこうと思ってね。 あんたの手のひらの上でお望み通り、踊ってやるよ。俺のやりたいようにやればいいんだろ？これが望みだったんだろ？雫のことは前から知ってたけどな、俺はあんたが何か考えがあるんだと思ってた。雫も一人で頑張ろうとしていた。だから止めなかった。けどな、あんたやりすぎだろ。雫が初めて切れたよ。俺の前で切れたんだよ。……なあ、あんた、一体何がしたかったんだ？」

そこまで告げると義経はぐっと言葉に詰まったように声を無くして暫し沈黙した。

そして、宗一郎も何も言えなかった。まだ言えないことがあるのだ。それは息子であろうとも、誰であろうとも変わらず告げてはならない真実だった。

宗一郎は何も言わない、それを義経はどう捉えたのか、もういいとだけ一言告げるとそのまま自らの決意を語り始めた。それは、親子の決別を意味するものに聞こえた。

「俺はこれから全力であいつを守る。それであんたが敵になろうとも関係ない。俺はあいつを全力で守ってみせる。用件はそれだけだ。気に入らなければ戻って俺を止めて見せる。ただし、その時はこっちにもたつぷりと言いたいことがあるからな……帰ってくるならそれだけの覚悟をしておけ」

途中から随分と物騒な　そして親に向けて言うには多分に不適切な程の物言いをされたわけなのだが、宗一郎はそれを受けても怒りに感じるどころか、うれしさを感じたらしく笑っていた。

そして、言うだけ言って相手はぶつりと一方的に通信を打ち切った。ものの見事に要点のみを伝えるだけの通話で、さらにはいっになく挑戦的な物言いに宗一郎は呵々と笑いたくなってきた。

宗一郎は今更ながらに気づいたのだ。息子が何者であったのかを。あれもそうだ、男である前に、一人の父であったか……

息子であった。夫であった。けれど何よりも娘の父だったのだ。宗一郎は嬉しそうに笑みを口元に刻みつけると、歳をとることに薄くなった髪をなでつけるようにし、部下を一人呼びつけて言った。

「六花神の動向と、それとあれの動向を調べ、急ぎ私の元へ知らせるように」

「了解しました」

あれ、で通じるところがこの呼び出された部下と宗一郎の信頼関係を物語っているというものなのか、端的に告げられた命令だけで部下はその全てを理解したようだ。

そして部下が去り、一人になった部屋でぼつりと呟く。

「あれもそうだ、いつの間にやら父親らしくなったものなのだな……」

嬉しいのか悲しいのか、複雑な心境ではあるが、それでも悪くないと宗一郎は思う。

こういう気持ちも、悪くはない。

それがたとえ、親子の決別を意味するものであったとしても。

宗一郎は全てを守るために己のなすべきことをなさねばならない。それは、宗一郎が守らねばならない者に理解してもらうこともかなわないままに、秘して密かに行われなくてはいけないことだった。

たった一つだけ残された真実だった。だからこそ必ずそれは完遂せねばならないのだ。

宗一郎は決意も新たに受話器をとると、ある場所へと電話をかけた。

相手が幾許もせず受話器を取ったのを確認すると、友に接するように気軽に声をかける。

「はじめまして、かな」

宗一郎は、早くも次の手を打つつもりだった。

これが一助となればいいが 宗一郎のその願いを背負うかどうか、それは受話器の向こうの年若い少女の気持ち次第であろう。

だが、宗一郎には分かっていた。少女がこの話を飲むことも、そして、助けとなることを約束してくれることも。

「……それは、言われなくとも、と言いたいところですが、一体どうして私に言うのか……その理由を聞かせてください」

「理由？理由が必要か？」

「ええ」

「強いて言えば、君なら、あれを裏切らないと思ったからだ。それでは不服か？」

「……そう、ですか。そういうことでしたら、間違いありません。私があの子を裏切ることなんて、一生ありえませんか」

宗一郎は鷹揚に頷くと、期待しているとだけ告げて、受話器を置いた。

受話器の向こうでは、櫻子が挑むような目で、壁を睨みつけていた。まるでその壁の向こうには、憎むべき相手がいるとでも言うように。

+++

階下に足を引っかけられて転ぶ雫の姿があった。

櫻子はそれを見て眉を顰める。

雫の足を引っかけたのはあの時やはり彼女へと嫌がらせをしてこようとした山田だ。

懲りない子だわね。

見下ろす先には取り巻きを二人ほど引き連れ、地べたを這うようにしてこけた雫を愉快と笑う少女達の醜悪な光景が広がっている。

誰も助けようとはしない。雫に誰も近づかない。

櫻子は薄く紅を引いた唇を歪めて歯を噛みしめた。

それは当たり前前のことかもしれない。今の雫は生徒の敵という立ち位置に追いやられている。それは雫の望み通りなのか違うのか、それすら櫻子は知らないことだが、それでも彼女はあの立場になったからにはと、精一杯やり遂げようとしていた。それがどんなに変な障害だらけの困難な道であろうとも、頑張っているのは見て取れた。

六花執行部と言うのが彼女が現在所属している部活であった

それも、理事会と教師達の作り上げた、生徒達とは正面から対立するために作られた組織なのだ。そんな組織の代表として祭り上げられてしまっている雫の立場はとても危ういといえる。

「だいたい、ちょっと前に生徒会長職剥奪って事件があったばかりでこんな悪目立ち、無茶苦茶じゃない。」

剥奪された理由も知らされず、悪い噂が流れて二週間、いや、そんなには長くは無かっただろうか。十日前後の日付がたったところでのこれである。噂話に更に悪い話が加わったのだ。

「理事長の威光を笠に着て、やりたい放題しやがって」

そんな言葉が言われ始まり、それが次第に

「理事長にいつて何でも……会長職剥奪の一件、もみ消して貰ったらしいぜ？その上この六花学園を上威光を使い私物化するつもりらしいって。今まで相当猫被ってたんだろ。最低だよな」

「マジかよ、さいってーだな」

「降矢さんってそんな方でしたの？がっかりしましたわ」

こう変化していったとしても、何ら不思議なことではなかった。

そもそも六花学園の掲げる「生徒の自主性をもって学園で伸び伸びと生活させること」を無視しているのだから当然、生徒達の反発は高まっていくのはいたしかたないものがあった。

だからこそかもしれない、それはイジメの格好のターゲットになっってしまったのだ。

雫は櫻子の知らぬ間に、いつの間にかイジメを受けていた。

そして完全に櫻子は隣の教室であったことも手伝ってか、全く知らず、日々を過ごしていた。けれど知る機会は今思えば多分にあったのだ。けれど雫は気取らせなかった。というよりも、櫻子を遠ざ

け、このことに触れてくれるなとやんわりと拒否してきたのだ。

だからこそ櫻子は面と向かってこの件に触れた。知ってからはこんなことは断じて無視することは出来ないからと、当たり前だが首を突っ込むつもりだったのだ。

どうして私に言ってくれなかったの？親友じゃないと口にしたが……けれど雫は駄目だと、無情にも告げたのだ。

「櫻子をこれ以上、巻き込むわけには参りませんので」

「……何を言っているの？私たち、親友じゃない。なのになんで巻き込むとかそんな悲しいこと言うの？私、そんなに信用ないの？私なら大丈夫よ。雫よりずっとずっと強いもの」

「いえ、そうではなくて……」

雫はそう口にするのとすつと視線を外してしまった。

櫻子は逃げるつもりかと雫の薄い肩を掴むと、ちゃんと言えと逃がさずこの場で決着をつけようとしたが、もう無理だったのだ。彼女の腹はもう、決まっていたのだから。

「　　櫻子は、皆さんに好かれています。そして私は嫌われる立場になりました。だから、だからね？櫻子をその場に引き込んだら、いけないんです」

「……何、それ。ふざけないで！勝手にそんなこと決めないでよ！そんな、」

「もういいの！私は一人でやるの！櫻子は全部捨てられないでしょ！もういいから、もう、いいから！！放つといて！！」
「ッ……」

初めてだった。櫻子は雫の激高したあの苛烈とさえ称することができる顔を思い出して思う。

今まで私の前であの子が泣くことはあっても、あそこまで強く怒

ったことがあったかしら？

いいや、無かった。理性の塊の雫は、いつだって泣いても直ぐに立ち上がり、怒りを感じようと、最終的には笑ってすべてを受け流した。ずっとずっとそうだった。

櫻子は拳を知らず作り、力をこめる。

どうして、自分はおそこにいられないのだろうか？何度となく櫻子が自問した問いだった。そしてこれは何度となく浮かび続ける問いでもあった。

2 (宣戦布告) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

2 (宣戦布告)

倒れた雫のもとへと須賀がかけより、助け起こす。そして山田へと食ってかかった。

「あなたたち、最低ね。前が見えない人間の足下にこんな……」
「いいのです。それよりも予算編成まで時間がありませんので、その足を退けていただけますか？書類を踏んでいます」

雫は山のような書類をその細い腕に持ち直すと山田へと告げるものの、山田は聞くつもりがないのか踏んでいると言われた足を笑みを浮かべて逆にぐりぐりと踏みつけるようにして踏みにじった。

「ああーら、ごめんなさい？こっちの足だったのね。真つ黒になっちゃったけれど、これ、読めるのかしらね？」

山田は足下からその書類を抜き取ると、雫の前に黒く汚れてしまった書類を見せつけた。にやついたその表情が気持ち悪いと思うのは櫻子だけだろうか。遠目で見ても、ただただ醜悪さを振りまいているのは山田であって、雫ではない。むしろ悪役を買って出ているのかとさえ思えるほどに、山田は愚かさを周囲に見せつけているように見えた。

ただし、それは山田が気づいていないように見えるが。
馬鹿なのかしら？

雫はそれをみても表情を変えることはない。むしろこんなことをぼつりと呟いてみせたのだ。

それは櫻子にとってみれば、有り得ないような光景だった。驚愕する櫻子の表情を、嘲笑うようにして目の前の光景は変化していく。

「……山田さん、上履きも洗わないのですか？それともまさか、新しいものが買えないわけではありません……でしょうし。にしても、汚いですね。本当に。もう少し靴底は綺麗にするべきかと思えます。六花学園の廊下は常に掃き、清められていると言うのに、それでは汚れているかと思われてしまいます。もしもここで他校の方がいらしたらと思いますと、大変恥ずかしいので、きちんと靴底くらい丁寧に拭いて廊下は歩いてください」

一応は元友人であるため、笑うつもりはなかったようだが、堪えられるものでもなかったらしい。それを聞きつけて須賀は堪え切れなかったのか爆笑した。

ひいひいと笑いながら須賀が涙を滲ませながら言う。

「そ、そうね。きつたない！山田さん、少しは靴くらい洗ったら？それもご自分で。自分で洗わないからそんな汚い靴底になってるのも気がつかないのよ」

笑いながら須賀は山田の手から書類をもぎ取ると、

「うつわ、本当にきつたない！ちゃんと理事側に言っとかないとね。普通科棟一年の山田ジュリがきつたない靴で踏みつけたって。きちんと報告しないと、降矢さんの所為にされちゃうよ」

「それはないと思います。私と山田さんの靴の大きさは一回りも違いますから」

雫としてはただ有体に事実を述べただけのつもりだった、けれど周囲はそうはとらない。雫がさらりとイジメをスルーし、そして尚且つ相手への嫌みを返したようにしか見えなかった。

須賀はどうせこれもただ単にそう思ったから言っただけの言葉なんだろうなと思いつつも笑わずにはいられなかった。げに天然とは

恐ろしいものだ。

「確かに違いのないわね。降矢さんってば可愛いサイズしてるもの」
「あ、でも、その前に私はいつも自分の小物は磨いていますので、そこまで汚くないので、靴底を見せれば理解してくださるか?!」
「…だ、大丈夫、ですよね?」

途中から自信がなくなつたのか、雫が靴底を見るためにちらちらと背後を振り返りながら靴底を見ていると、降矢さん大丈夫だからと須賀が笑つた。

「綺麗だから、安心していいよ」

「本当ですか?」

「本当本当。つてことでまあ、こっちも頂戴」

「え……」

雫の手から無理矢理書類の山を半分ほどもぎ取ると、そのまま須賀は歩き始めた。

けれどふと思いついたように須賀はくると振り返ると、汚いと馬鹿にされて怒りに身を震わせる山田へとこんなことを告げたのだつた。

それは何気ない口調だった。

「ああ、それとね、私を殴つたこと、降矢さんを閉じこめたこと、理事会に今度訴えるつもりだから。楽しみにしててね」

「んなっ!」

「じゃーね、山田さん。ああそれと、山田さんの下っ端二人も、山田さんについてると偉い目にあうかもよ?人のこと殴り殺そうとした奴とつるんでても、いいことなんてないでしょ?昔のよしみだから忠告はしておいてあげる。私、自分を殺そうとしたような奴と一

緒にいる奴らも、とことん、追い詰めるつもりだから。絶対に許さない」

須賀は己を殴りつけ、瀕死になるまで追い詰めた山田を許すつもりはなかったのだ。

山田はあれからずっと毎日怯えて暮らしていた。最初の日は二人ともが学園に登校してこない。来るはずも無かったのだ。もしかしたらまだあそこに二人とも転がっているのだろうか。そんなことを考えていた。それはそれで腐っていたら問題かしらと思う程度であり、死んでいても気にとめないつもりだったのだ。

だがしかし、二日経ち、須賀がやってきた。何故生きているのかと思った。それも、スティックで殴打したはずの頭は綺麗に整っている。確実な手ごたえがあったと言うのになぜと思った。かと思えば四日経つと今度は雫がやってきたのだ。それも、何か新しい組織を作り出し、華々しく着飾って登場したのだ。山田はそれを、許せなかった。

自分こそがその華々しい席にふさわしいのに。そんなことを考えていられたのは最初の頃だけだった。ある程度の時が経てば、今度は恐怖が山田を支配した。

いつ訴えられるのだろうか？いつ同じような報復をされるのだろうか？と山田は怯えていたのだ。

けれど、そんな山田の思いとは裏腹に、何故か二人とも山田に何も言っていない。

だから山田は勘違いをしたのだ。あの二人は何もしてこない、することも出来ないのだと。

そうよ、あれは夢だったんだわ。

何も無かった、だからこそ山田は今歩いているし、二人は笑顔でいるのだ。

そして山田は勘違いをしていたことを恥じたと同時に一気に脳内を切り替えた。

華々しく着飾って帰ってきた雫に嫉妬の炎を轟々と燃やし出したのだ。

絶対にその場から引きずりおろしてやろう、ただそれだけを思っていたと言うのに、これはどういうことなのか。

山田は恐怖が怒りか分からぬものに支配され、体中をぶるぶると震わせていた。その表情はとても悪く、そして青ざめていた。

須賀は容赦をするつもりも、その必要性も感じていない。

本来の考え方で言えば自分を攻撃しようとした人間だけを攻撃すれば終わるものを、須賀はその周囲で燻っている過去の友人たちにまで向けたのだ。雫はそれがおかしいことを告げるものの、須賀は絶対にそこだけは譲らなかつた。

「じゃあ何？友人なのに諫めずただ暴走するのを放っておく奴を見逃せって言うの？」

「そうは言わないけど……」

「私、そういうの嫌いな。そういう何となくでその人と一緒にいるけど、面倒事にだけは関わらないとか、そういう嘘くっさい友情、大嫌いな」

「……」

「私はその嘘臭い友情の所為で死にかけたから尚更なんだけど」

絶対に許せないの。あんな山田さんを放っておくあの子達のこと」

「須賀さん、山田さんじゃなくて他のご友人のことを？」

「ううん、全員だよ。やった本人は悪いと思う。当然でしょう？けどね、それを知ってて放置してるなら、同じだけ最低なんだよ」

雫は何も、言えなかつた。須賀の言葉の中には、かつての自分も含まれているように聞こえたからだ。須賀は自分が許せないのだから。山田の言うとおりに従って、雫をただ悪いと口さがない噂話を悪意をもって垂れ流していた過去、それらすべてが許せないのだ。だからこそ、同じようにしている山田の友人二人にも、イラついて

いるのだ。自分に対してイラつくように、ただただどうして何もしてやらないのだと憤慨しているのだろう。

須賀の言葉に青ざめる山田の友人に、須賀はふっと笑うと、友人なんだから見捨てないできちんと説教くらい出来る様になればいいのにと思った。

けれど彼女はどこまでも優しくない。

きちんと諫めればいいとは思うものの、そんなことをするのは彼女の中では当たり前なのだ。それを出来ない二人が悪い。そう切り捨てると須賀は二人を心の中で切り捨てた。もう二度と友と呼ぶまいと思いつながら。

バイバイ、二人とも。

そして過去の自分をも切り捨てると、もう二度と他者の言葉に惑わされるものかと思った。

私は必ず、自分の目で見たものを信じてこれからは行動していく！そう誓った。

切り捨てられた二人を見ながら思う、諫められないようなら、その危険人物と一緒に静かに朽ちればいい。

須賀は雫に、にっと笑みを向けるとV字を作り、向けた。

「初めて作ってみたけれど、何となくこれ、気分がいいね」

「そうなのですか？」

「うん」

くすくすと雫と須賀が笑っているのとは対照的に、山田の側では二人の少女が怯えた目で山田を見ていた。

「なに、それ……」

「嘘、よね？山田さん」

震える山田へと尋ねれば、山田は不安を押し隠そうとでも言っ

か、大きな声で吠える様にして言う。

「嘘に決まってるじゃない！だいたい、そこに須賀さん達は二人とも元氣そうにしているのに、私がそんなことをしたって……そんな馬鹿なこと、あるはずがないでしょ！」

大体証拠が無いのだから、須賀がこんなところで何を言おうとも関係は無いのだ。そうだ、怯える必要はなかったじゃないかと山田は笑った。

けれど、山田の笑みを見ると、こちらも会心の笑みを浮かべて言うのだ。

「証拠のこと？証拠ならもう理事会に提出済みだよ。私、絶対に許さないから。いこ、降矢さん」

「え、ええ……」

山田が呪い殺さんばかりの表情で睨みつけるのをよそに、二人は悠々と去っていった。

全てを見ていた櫻子は雫が暫く来なかった理由を、今知った。

「そう、そういうことだったの」

詳しい話は分からないが、ただ、山田が何かしたことだけは分かった。

それと同時に気になることもある。

あの休み以降、須賀も雫も人が変わったように明るくなったことだ。何があったのだらうかと気になるものの、今は二人に近付けない。雫がそれを拒否するからだ。

良く笑い、そして、よく発言するようになった。その変化を喜ばしく思わなくてはいけないはずなのに、櫻子はどうしても受け入れがたかった。

あそこは私の居場所だったはずなのに。

櫻子は己の黒髪に顔を埋めるようにしてしまつと、外の世界と自分を切り離してしまった。

常に櫻子の傍には誰かしら取り巻きがいた。それは櫻子の預かり知らぬことではあったが、実は櫻子にはファンクラブのようなものが創設されており、それに取り囲まれるようにして櫻子は常に生活をすることを強いられていたのだ。

良くも悪くも櫻子の盾となるそれに、今の櫻子には鬱陶しいと感じられなかった。

雫と近づくのはいけないことであると細身の少女が言えば、反応することも億劫である。

あなたに何がわかるっていうの！

怒鳴りたいのにそれすら億劫としか思えなかった。

櫻子はもうこの場には居たくない、外界と自分を切り離すべく意識を閉ざしていった。

雫は捨てられっこないと言った。それはこの取り巻きを含む、櫻子の全てを指すのだと考えられる。けれど櫻子は取り巻きくらいならば捨てられる。いつだって捨てられるのだ。

もとよりこんなものを欲しいとは櫻子は思っていない。ただいつの間にか祭り上げられていたのだ。

それは雫も同じじゃない！

なのに雫は櫻子とは違うと言う。

同じように祭り上げられ、人のために動かねばならない状況にあるくせに、雫は自分はいいが、それでも櫻子はよくないと言う。

一体何が違うと言うのか。

私も貴方も同じなのに、違つと勝手に見切りをつけて須賀を共にして去つていく。そんな雫に櫻子は嘆き悲しんだ。

今までどんなに長く一緒に居たと思つているの？

雫お願い、私に隣にいさせて頂戴……

悲痛な叫びは大気を震わせることは無かつたが、それでもそれは、友人の元へと飛んでいった。

「櫻子？」

ふいに雫が振り返ると、須賀は周囲を見回す。何かまたされたかと思つたのだ。けれどどうやら何も無い様子である。

首を傾げながらも須賀は尋ねた。

「降矢さん、どうかした？」

「いいえ……ただ、呼ばれたような気がして……」

「気の所為じゃないかな？何も聞こえなかつたよ？それよりさ、カールと一緒に見せてもらったレントゲン。いや……何て言うか私ね？言いくいつて言うか実は……頭一部潰れてただけど、さつすが降矢医療センターだね。すつこいよ。あれを二日で治すとか、驚異の医療技術じゃない？ちょこーつとぞつとしたけど、でも全然綺麗に治つちやうんだからいいよね！うん、言うことない！」

「そういえば須賀さんは二日で退院だったの？」

「そうそ、それでね」

3 (不和の種) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

3 (不和の種)

宗一郎からの国際電話を切ると、櫻子はもう迷うものかと決心した。

「そうだ、自分はもう、誓ったはずではないか。」

「栗のために生きようと誓っていたはずの自分が、何を迷っていたのだろう。」

「栗……そうということなの？」

「栗はお見通しだったのだ。櫻子が全てを捨てる覚悟で栗と共にある覚悟が無いことを、彼女は知っていたのだ。」

「だからこそ栗は私を拒否したんだわ」

知らないうちに祭り上げられていたが、櫻子はなんだかんだと言いつつもその場所に自分の居場所を感じていたのだ。だからこそ捨てられないでしょと言われて言葉に詰まった。

「怒りをぶつけられて当然よね。栗の親友って言いながら、栗のことやっぱり私はどこかで疑っていたんだわ。だから、私が傍に居てあげなくちゃ、守らなくちゃ、あの子は駄目になっちゃって思ってた。私が居なくちゃって……凄い私、傲慢だわ……」

その傲慢さで栗を自分は失ったのだ。

「自分が守ってあげれば皆は手出ししないなんて、心のどこかで思ってた。けど違う。たぶんそんなことは無理なのよ。学園全部が敵じゃない。そんなの、私がついたからって庇えるわけない。それを

雫は分かっていたのよ……。だから捨てる勇気がないならやめて、雫は止めてくれた……」

どれだけ優しいのかと思う。

雫はこんなにも傲慢な人間を親友と呼んでくれているのに、自分は親友だと言いながらもなんてことをしてしまったと言うのか。

櫻子はじつと布団の上に正座をして瞼を閉じて思考を巡らせた。今の自分には何が出来るのか、今見極めなければ、必ず後悔するはずだ。

一時間か二時間はそのままいただろうか。櫻子はかつと瞼を開くと、浴衣の裾を払いながら立ちあがり、半紙と筆を用意した。文机の上にはもう、硯も墨もある。後は櫻子が筆を取るだけだった。

「もう一人にしない。須賀さんと一緒に守るわ、貴女を。もう二度と今日みたいに、目の前で怪我をしているのを黙ってみている私には……絶対にならない」

決意に燃える瞳の中には、守るべき友人の姿以外はもう、見えな
い。

+++

健は唸る。

どうしてこんな面白味も何も無い実務ばかりの作業になるのか。自分がやりたい仕事は別のことだったというのに、その仕事は、先日いきなり出来た部署に横から搔っ攫われてしまったのだ。

ちよつとばかりこれには面白くなかった。

健は無駄に広い生徒会室で書類に目を通しながら先週からその席

に座るようになったばかりの出来立てはやはや生徒会長である千草に尋ねてみた。

「なー、これ、どういうことなんだよ」

「何がだよ」

「だから、降矢さんの執行部についてなんだけど」

「なんで俺に聞く」

千草は苛立たしげに健へと向き直ると、先ほどまで目を通していた書類を投げて寄越した。

健はそれを危なげなく取ると、唇を尖らせて文句を言う。

「だって、お前降矢さんと仲いいだろ。だからお前なら知ってるかと思って」

「ふざけるなよ、誰が仲がいいかって？そんなはずないだろ」

今度こそ本気で不機嫌になったようで、千草は席を荒々しく立つと健の座る席までつかつかと歩いてくる。二歩も離れていない場所にある、上から見下ろすその鬼のような形相に流石に健も青くなつた。

「だって……仲いいじゃん。昔の話とかに降矢さんの名前出てたじやん。何で？違うの？」

「……」

千草は結局その問いには、イエスとも、ノーとも、答えることが出来ず、一つため息をついて視線を逸らす。

「……早く仕事をしろ」

健は執行部とは何なのか、改めて尋ねてみた。

「結局何で今こんなことになってんだか、良く分かんないんだよな」
「何が」

「だーからっ。降矢さん、生徒会長職剥奪って出たのに、何でこんな執行部とか設立なんてことになってんのかって……そもそもさ、生徒会の仕事、半分も持ってっちゃって……なんつか、ねーよって思うわけよ。実際ね」

生徒会の職務は生徒達と共に築く一年である。その仕事はあらゆる部活に対して支払われる部費の統括、及び支払い。そして委員会に対してもそれは同様であった。

他にある仕事は教授棟との密なやり取りもそうだし、何よりこれが一番の花形であると言えるものとしてはこれがある。

「生徒会主催の行事っつかイベントごと、全部ごっそり持つてくかあ？普通。っつか、ありえねーっす」

生徒会が取り仕切ってきた行事関連の一切合財を今後全て執行部が取り仕切ることになったというこらしい。そんなことを急に言われても信じられずにいれば、そんなことは理事会も教授達も、そして執行部の零も関係はないと言うのか、生徒会より仕事をこっそりともぎ取ってしまったのだ。

唾然としていたのはどれだけの時間だっただろうか、兎に角気がつけば、生徒会の元には残った仕事が半分ぼちだったのだ。これには参ったものだ。

流石に生徒会副会長の椅子が運よく転がりこんできたからとはいえ、そんなことでこれが収支トントンになるとは思えない。千草と健の件は全く関係ないとしても、こんなあまりな仕打ちはどうかと

思うのだ。

生徒会に入ったとなれば行事を仕切って生徒会で華々しく活躍するつもりであった健としては、これは可也な誤算であった。

そもそも行事関連を自分達で作り上げる、それがやりたくて最初は立候補したのだ。それがこれでは話にならない。つまらない予算組分けばかりの仕事なんて、それこそなんのためにこの仕事についたのか分らないではないか。

そんな中、千草は何かを知っているようなのだ。それも、雫についてのようなのである。

だからこそ、健は千草に尋ねたのだ。

「なあ、これ、どういうことなのよ。いい加減説明しろよ。このままじゃ、流石に暴動おきんぞ」

暴動とは、生徒が教授並びに理事会に対し行つたろう、と言つてとだ。

いや、それだけではないだろう。雫個人、引いては執行部に対しての暴動が起きるのだからって時間の問題だと思つて。

生徒達の反発は、収まるどころか日を追うごとに益々強まっていくなろう。このままでは雫に対するイジメで済む問題ではなくなるだろう。

健は続ける。

「イジメも確かによくなーけど、んでも確かにこれはさ、みんながむかつくのだからって分かるわけ。俺もむかつくし。そもそも部の設立理由とか聞いても、今までの生徒会が起こしてきたことの結果として説明されねえし？ぶつちやけどうなのよ、みてえな？分かんねえしさ……っつかさ、生徒会の仕事半分も持ってかれて、お前は何も思わねえんだ？」

「……思わないはずがないだろう」

やっと千草が口を開いたかと思えば、健は頭をべしりと叩かれた。口を開くと同時に手を出すのは、どうやら健に対してのみの態度のようなのでまあ良しとしてやるかと、痛む頭を擦りながら続きを目で促した。

「長くは続かないと思うぞ。確かにあいつはあれで根性があるかもしれないが、それでも今はこの高等科の人間千六百名弱が敵なわけだ。早々長くも続けられないだろ。あと、ついでに言えばどうせあいつのことだからな、理事長代理に泣きついたんじゃないのか？」

「代理？理事長今いないのか？」

「ああ、いない。宗一郎氏は今海外に出かけていて居ないんだ。だからその息子が代理をしていると聞いている」

「へえ、そんな今知ったし。よく知ってたな？」

「ん？……ああ、まあな。だから今は息子　というよりも、あいつの父親が理事長代理だからな、甘やかしてるんじゃないのか？……ま、そんなこと、どうでもいいが」

千草はここまで言う興味を無くしたとでも言うようにして席へと戻った。実際はこれ以上突っ込まれなくなかったからだだったが、それは健には分からない。健が分かったのは、今の理事長は雫の味方だという情報だけだった。

雫に都合がいい、この執行部部長の肩書。それは理事長代理がつけたものらしい、と知れば健は腹の底からふつつつと怒りがわいてきた。

そんなもの、特権階級様様ではないか。ズルだ、卑怯だと健は雫を心の中で口汚く罵った。

確かに健も健で一般家庭の人間からすれば相当な家柄ではある。だがしかし、降矢には到底及ばない。その降矢の権力を振りかざしてのこれは流石に健も腹が立った。

ただし、それが本当に権力を振りかざしているのであれば、だが、健はそこまでを考えようとはしなかった。それは千草も同様だ。

健は雫とは直接話したことは数えるほどだが今まで雫が一人で頑張っているのを知っていた。自身も部活に所属しない中で周囲の人間と溶け込むことに難儀をした経験があった。だからこそ、完全に自分とは違う畑から周囲の人間と溶け込もうと必死になっていた雫を見ていたから凄いと、ずっとずっと尊敬してきたのだ。だと言うのにこれは酷い裏切り行為だった。

それは身勝手な思いかもしれないが裏切られたと健は雫を今、憎いとさえ思い始めていた。

降矢の理事と言う権限を使い、会長職を剥奪されてもなお、新たな役職を得て復帰？冗談ではない。

健はぎりぎり歯を噛みしめ鳴らすと、唸る様に言う。

「なんだよそれ……だったらそんなん、ずりいだろっが」

許せなかった。ろくすっぽ雫とは口をきいたことも無いと言うのに、それでも、雫が許せなくなっていた。

健が憤りを感じているのをちらりと見て千草は嘆息を零すと、使い込んだ万年筆で机を軽く二回程叩いた。その音に導かれるように健は千草を見やると、そこにはあまり機嫌が良くないような顔をした千草が居た。

「さあな。兎に角今は俺たちの仕事をするべきだろ？それに、半分に減らされたからって、全然仕事如山積みなんだ、少しは消化するのに協力しろよ。さっきから俺一人でこれ、やってるんだけど？」

「う……へえい……」

新米生徒会長と副会長の仕事は、まだまだ始まったばかりなのだ。

「ああそうだ、それと健」

「んー？」

「後で解析してもらいたいデータがあるんだが」

「ん、了解。部屋でやっとかから貸して」

健は小さなフラッシュメモリを受け取ると、ポケットに落とし込んだ。

4 (この日、新しい友達が出来ました) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

4 (この日、新しい友達が出来ました)

一人きりの部活は常であれば承認が出来るものではない。当たり前だがこれでは格好がつかないとも言えるが、普通に考えてただのえこ鼻屑と取られるのが当たり前だった。

けれど一人きりにさせるまいと一人、立候補してくれた女子がいた。

それは予想を少しはしていたけれど、まさかの相手 須賀だったのだ。

「入部に条件があるのかなら、諦めるんだけどさ」

「う、ううん！全然、そんなの無いです！で、でも何でこんな……面倒そうな部活に入部なんて……」

条件なんて設けてはいない。ただ問題があるとすれば、嫌がらせを受けるかもしれないという部活であること、これを先にあげて、それでも入部したいかしたくないか、これがある意味では入部条件ではあった。

けれどそれを告げても須賀は手のひらをひらひらと振って言うのだ。

「もう全部ふつきれたの。後、前の部活止めたから。あんな殴られて放置された場所になんて、もう行きたくないし。だから運動部系全滅。お陰で暇なの。後それと別にいいから、そういうの。だから今日からは私、敬語とか止めるから。ね？宜しく、降矢さん」

「え、えつと……よ、宜しくお願ひします」

沢山のことを一辺に言われて雫は半ばパニックを起こしていた。確かに殴られた現場にほど近い場所に何度も何度も出入りする

のは精神的に重圧かもしれない。だからといってそんなに簡単に辞めることを決めてしまっても良かったのだろうか。疑問はつきない。そして暇だからとは言え、それで何故この執行部を、とも思うのだ。風当たりがきついことは周囲の反応からして否応なく理解出来ると思うのに。

ぎくしゃくとしながら雫が深々と礼をすると、須賀は人が変わったように妙なテンション　フランクな態度で告げた。

それはもう、当たり前前の事実のように。

「かたいかたい！敬語とか別にもういらぬじゃない。私達、もう友達でしょう？」

「で、でも……」

でも、と口にして先ほど言われた言葉がようやく脳に行き渡った。

「友達？」

目を丸くして固まっていれば、須賀は変なことを言ったかと思ねてくる。けれど雫は何を答えていいのかが分からなかった。友達、親友と言ってくれたただ一人の友人は今、傍に居ることすら許す事が出来ないと言うのに。それもお互いのため出来ないと言うのに。なのに須賀は更に言うのだ。

「友達でしょう？降矢さんのこと、こんな大変な時に一人にしておけるわけ、ないじゃない」

「で、でも！」

「んー……でもとか言つて欲しくないんだけど。どっちにしろ山田さん達に、もう友達止めるからって言つてきたし、降矢さんを助けたいからって、教授達にも言っちゃったんだよね。はい、入部届け」

そして渡されたのは受理済みの入部届けだった。それを見ても雫は何と返せばいいのかが分からなかった。ごめんなさい、と言えればいいのか、済みません、と言えればいいのか、こんなときに雫は何と返せばいいのかわからなかった。だから正直に告げてみた。

「何と、言えればいいんでしょう」

「え？」

「ごういう時、何と言えればいいのでしょうか。ごめんなさい、済みません……何だろう？信じ、られなくて……」

いつも雫は一人で頑張ってきた。だからこそ、誰かが支えようと傍にいろことを選択してくれること、それすら信じられなかったのだ。理解が出来なかった。気がつけば雫は泣いていた。

「降矢さん、泣かないですよ……」

「ない、泣いてなんて、……な……」

泣いていると自覚した途端に、それは次から次へと溢れてきた。

「分からな……ごめんなさい、ごめんなさいっ」

「ああもう、降矢さんって泣き虫なんだ。知らなかった。何でも一人でやっちゃってたからさ、小さいのに凄い頑張るなあって。妹みたいな見た目ののに、中身全然出来た大人なんだもの。けど、全然違うんだね。驚いた」

そんなのは嘘だ。雫はいつだって虚勢を張って生きてきた。辛くても笑った。怒りを感じていても涼やかな風が通り抜けたような爽やかな笑みを返してみせた。全ては降矢に相応しくあれとの宗一郎

に認められたいがゆえのことだ。けれどももうそれもどうでも良くな
った。

どうせ認めてくれない。

私はあそこに居ない。

降矢にとつてみても、六花神にとつてみても、雫はただの政略結
婚の相手かただの道具　駒の一つなのだ。だからもういい、やり
たいようにやろうと決めた。

なのに、どうしてこんなにも優しくしてくれる人が出来てしま
うのだろうか。

優しくされると涙が出てくるなんて、初めて知った。

「ほんととは私達と同じで、家に縛られて、学校に縛られて、結構嫌
な思いしまくってたんだらうなって思う。違う？」

えづいてしまつて雫は答えられない。

「私、家ではいつもこんな調子。お嬢様とかガラじゃないしね。確
かに家はいいほうだろうけど、そういうんじゃないかってさ、周囲に
合わせなくちゃいけないとか言われて、凄く窮屈だった。降矢さん
のほうも窮屈そうだけどね。あの降矢グループ、降矢宗一郎の孫だ
し。私なんかより、ずっと大変だったんだらうと思う。この間部活
とか入部も許されないみたいな話してて、初めて気がついた。降矢
さん、もしかしたら家から色々と言われて、不自由だったんじゃない
かって」

確かに不自由をしてはいた。けれど、それが誰かに理解してもら
えらとは、思つてもみなかつたのだ。

雫はぼろぼろと泣いた。胸が締め付けられるように痛む。けれど、
不快な思いはしなかった。不思議なことに。ただただ優しく胸が締
め付けられる痛みに、暖かな涙だけが零れ落ちていく。

「だから、同じなんだって、あの時初めて分かって　だからね、もつと降矢さんと話がしたいの。もつと降矢さんが知りたいんだ、私」

「須賀……さん」

「何？」

「本当に、あの……」

何と返せば彼女は喜んでくれるのだろうか、雫は溢れる涙を拭いながら思う。すると須賀は雫の考えを読んだようにこう言った。

「有難うって言うてくれると嬉しいよ」

泣きはらした顔で、私は上手く、有難うと言えただろうか　？

5 (衝突) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

5 (衝突)

執行部の部室は何のあてつけか、生徒会室の直ぐ目の前に用意された。用意したのは理事会と教授達であるため、競え、と言うことだとは思うが、それにしただって行き過ぎである。

二人は揃ってため息をついた。

「抗争が激化するとは、思わなかったんでしょか……」

「案外教授達って馬鹿だと思う」

部室の中をある程度整えると、雫は生徒会から提出された書類と理事会及び教授連とが作成した書類を一から目を通し始めた。

「降矢さん、予算案はこのままでいいの？」

段ボール箱を指して須賀が言うのを見て雫は後で棚が届くので、それは届いた棚に入れることを告げた。

「了解」

須賀は案外働き者だった。言われずともぱっぱと仕事をこなしていく姿は、見ていていつそ気持ちがいい。

今期に組まれている行事はこれだ。

収穫祭　これはスポーツ科棟で行われる行事で比較的安価な経費で行われる行事であるため、このまま継続が求められている。因みにスポーツ科とは言うものの、中には農業科があり、その生徒の作品を元に行われる行事である。

「これは一応採用、ですよね」

他の科が何を教えているのかを知るのは必要なことだ。だからこれは消すべきではないと考え、雫は採用の認可を下ろす。

べたりと採用の判を押すとそのまま雫は自らの脇へとそっと置く。球技大会　これもスポーツ科棟かと思いきや、中高一貫で行われる大型行事である。スポーツの祭典、かと思いきや、何故か近年ではその様相を思い切り変えてきているのだ。

「何それ？えー……球技大会か……それ、すっごいお金食うと思うよ」

「でしょうね……」

一般の学校ではまず有り得ないことに、この学校の球技大会では某テレビ番組のようにしてチーム対抗で行われるイベントに趣旨がえをしているのだ。お陰でセットに毎年莫大な費用がかさむらしく、去年は応援席に居た雫も、その派手さに少々引いた程なのだから。

「去年あたりはどこからか予算ふんだくって来たんだって。お陰で運動部と文化部の弱小チームは悲鳴上げてたの覚えてる」

「ああ、そういえば予算の組み替えが大変だった運動部がちらほらありました」

幾つも掛け持ちで手伝いをしていた雫ならではの言葉に須賀は苦笑する。

「とりあえずそれ、没にするかやり方変えて貰う形にしたほうがいいと思う」

「そうですね」

舞台装置は廃案で行くことにする、又は廃案の方向に検討をすること。そのように書いたものに雫は処理済みの判を押しした。ただし当たり前だが認可の判とはまた別ものになるが。

「次は……百人一首大会だそうです」

「秋、だねえ……」

去年は中等科にて行われた百人一首大会において大変な騒ぎが起こった。内容は当たり前とは思うが、生徒会が行った失策の所為で出来た騒ぎだったのだが、景品が豪華過ぎて貰えた人間と貰えなかった人間とで争いに発展したのだ。あれは頭が痛かった。

「誰よあの、オーロラを見に行こうツアーとか景品に突っ込んだの」

「さ、さあ……」

宇宙くらい行きたかった等といった声もあつたなか何故オーロラかは分からないが、南極や北極に行くツアー代金まで組んだのは学園側だった。ついでに言えばツアー等ないのだ。学園に無理やり頼み込んだ上、更には空母を一隻丸丸借りうける規模でのオーロラなのだ。馬鹿げていた。

「廃案はしなくともいいので、とりあえず景品は別のものにするように働きかけましょう」

「教授達があの頃怒つてた理由、ちよつと分かった……」

「ええ、ですからこうして執行部が作られたのです」

そして須賀に執行部立ちあげの理由を告げると須賀は目を丸くして驚きの声を上げた。

「嘘?!生徒会ってそんなに酷いの!?!」

「いえ、酷いというわけではなく、……いえ、酷いですが」

鷲宮や義経の話を聞くだけでも相当酷いのは伝わってきていたし、もつと派手にと言われるままにやり続けた生徒会の体質の問題も往々にしてあると思う。だから、酷くないと言い切れないものがあった。

雫は目を泳がせて、最終的にこう言った。

「生徒会は仕事が忙しいので分担の話が元から上がっていたのです。生徒側は知りませんが。なので体よく押し付けられた仕事と認識してくださいればいいかと」

「生徒会って、金遣い荒くて更には無能な集団なわけね。よっく分かったわ」

「ええと……うんと……」

間違っているとは言いきれず、言葉を濁してみたけれど、それが答えであると須賀は言うのだった。

雫は正直過ぎたようである。

がくりと肩を落とすと、こう告げる。

「奏が今日からはお手伝いに来てくれるようなので、あの、まだ二日目ですが、メンバーが増えるので楽になるかと思えます」「オツケー。んじゃ席だけはもうちょっと整えておこうか」「そうですね」

+++

兎に角、早々に理事会と話し合う必要があると言っことで、早速理事長室へ行くとうとうということになったわけだが、こちらの件もまだだったことを寧ろ思い出した。

「降矢さん、ちょっといい？」

「ああ、生徒会副会長、成瀬さんですね。こんにちは。申し訳ないのですがこちら急いでおりまして、後でも宜しければ後にしたいだけきたいのですが……」

執行部の部室から一步出た先では、生徒会室の扉を開け放ち、待ちかまえていた健の姿があった。ああこちらの件もまだだったかと思っただが、それでも理事会の方が先である。寧ろ須賀とともに連れだって理事長室に行くとするも、健はそれを阻んだ。

「どこ、行くの？」

「理事長室になります。そこ、どいていただきたいのですが」

「ふうん？何しに？」

あまりにも横柄な態度、そして明らかかな悪意を感じれば須賀は僅かに苛立ちを覚え始める。

「今年度分の行事関連の予算案について、再考をしてもらうために、だけど。そんなの聞いてもどうも出来ないでしょ？どいてくださいよ。それとも、貴方も嫌がらせのメンバーの一人に入ったんですか？それともイジメかな？ま、呼び名はどうあれ一緒よね。やってること同じじゃない」

「イジメ？俺のは違う。俺はただ気に入らないだけだ。降矢さん、執行部ってあなたの私物ってほんとかよ？」

「私物？」

雫は怪訝に思いながら尋ねる。

「俺はあんたと理事長代理が私物化して、好き勝手やってるって話を聞いた。執行部はそんなための玩具つてのもな。それが事実かどうか、聞きたいだけだよ。だから、手間は取らせないつもりなんだけど、そんなでも無理なの？」

私物化、玩具 執行部に対する話にしても、雫は始めて聞いたような話ばかりで困惑する。

「どこで……そんな話が？」

雫はわけが分からないながらも尋ねた。私物化しているつもりは毛頭なかったのもあつたし、そもそも代理であることをどうして一般の生徒が知っていると言うのか。降矢宗一郎が国内に居ないとなれば、また周辺が慌ただしくなるため、そういった細かい情報は基本的に洩れないようにと厳重に情報は管理されているはずだ。それがどうして洩れたのかと雫は訝しんだ。

けれど健はそうは取らない。そもそも降矢の事情なんて知る由もないため、雫が凶星をつかれたと取ったのだ。

健は本当にそんな人間だったのかと言うと、悔しげにつぶやいた。

「がっかりだ、あんたには、がっかりしたよ……」

「成瀬……さん？」

「理事長代理に媚びて言ったんだろ？あんた、生徒の手に委ねてある六花学園が掲げる自主性！あんたはこれを生徒の手から？ぎ取ったんだ！生徒会の仕事をふんだくってこんな……クソツ！！生徒会長の座を自ら蹴ってそうしたって噂もある！どうなんだ？答えるよ！！」

「なん、ですって？」

どういう話が分からず、雫は混乱していく。すると廊下でやり合っていたのが拙かった。周辺の委員会に割り当てられた部屋から、数名が騒ぎを聞いて飛び出してきたのだ。

タイミングは最低で、そして最悪だった。

「理事長代理あんたの父親なんだってな？それともお父様に媚びてお爺様にお叱りを受けた分を取り戻すために執行部なんてもんを作り上げたのか？……それが本当だとしたら私物化してないなんてどこのどの口が言うんだよ！え！？答えるよ！」

雫の話を全く聞かないこの物言いに対し、雫も段々と腹が立ってきた。

「確かに今は理事長は代理の者がしておりますが、そもそもお叱りとはなんです？意味が、」

何とか相手と会話を試みようとするが、雫が何を今言っても聞き入れるつもりはないのかもしれない。

健はしらばつくれるつもりなのかと雫へと怒鳴りつけた。完全に雫の言葉を聞くつもりが無いようだ。

「知らないふりばつかかよ！もうバレてんだよ！いい加減白状しろよ！」

「ああもう！うっさいなあ！廊下で喚かないでよ先輩！それと降矢さん分かんないって言ってるじゃない！何も知らないくせに、最初っから頭ごなしに決めつけてるのはそっちでしょ！？理由を聞いてからにしてよ！執行部の設立理由は生徒会にあるんだから！いい加減にしてはこっちですよ！！！」

須賀が勝手なことばかり言っていると雫の前に立ち、雫を庇うようにして健へと食ってかかる。けれど激昂している健は益々怒りをあらわにして言うのだ。

「はああ?!ふっざけんなよな!生徒会の所為だあ?」

「ちょ、ちょっと止めてください!喧嘩はいけません!」

混乱はしていたが、それでも目の前で行われる喧嘩は止めなければならぬ。雫は目の前で行われようとしている争いに踏み込もうとしたところでぞくりと背筋が毛羽立った。

何?

導かれるように上を見上げた瞬間のことだった。上から何かが降ってきたのだ。

「危ない!」

「きゃああっ!」

6 (悪意が形をなして降り注ぐ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

6 (悪意が形をなして降り注ぐ)

何かが碎ける音と、そして水しぶきの派手に巻き上がる音がしたけれど、雫の視界は突然消え失せていた。

いや、というよりも視界は気がつくとも黒く染め上げられていた。黒く染まってしまった視界は押し当てられた黒い布だと分かると、雫はその布から顔を上げる。するとそこには鷺宮の顔があったのだ。

「お嬢、お前なんでこんなハードな学園生活送ってるわけよ？」

むしろ雫こそが尋ねたかった。

「どうしてこのような場所に？」

「ああー？ええっと見回り？つつか、冷てーなあ……」

雫の先ほどまでいた場所には、大きなバケツが碎けて大量の水を撒き散らしていた。

どうやら鷺宮が雫を庇うためにタックルをかます勢いでぶつかってくれたお陰でバケツをもろに食らわなくて済んだらしい。

「有難うございます」

「いいっていいって。つつかそれよりも平気か？」

「はい。怪我もなく」

落下地点は分からないが、頭上を見上げれば目があった女子生徒が二名程居たため、あの二人がバケツを落したと仮定すると、恐らく、落下してきたバケツには、重力によって更に大きな圧力が加わっていたと推察される。とすると、およそではあるが数百キロの重量があの一みに落ちてきたものと思われる。

女子生徒は雫に顔を見られたことで気が動転でもしたのか、その場から直ぐに引っ込んで悲鳴を上げている。愚かなことだった。

「……怯えるくらいなら、最初からしななければいいのに」

怖がるのであれば、もつと怖がることがあると思うのだ。

バケツを中身入りで落とせば当たり前に人を怪我させてしまうかもしれないことには怖がらないのだろうか。不思議に思いながらも雫は鷺宮の腕の中で考え込んでいた。ある意味ではつわものである。

「廊下が、凹む程って……ほ、ほんとに水が入ってたの？」

須賀が恐る恐るこちらを窺ってくるため、鷺宮の腕の中から立ち上がりつつ苦笑して答える。

確かにそこには廊下が丸く円を描いて凹んで見えた。

「落下物は地面衝突時の衝撃力と落下時間、それと衝突時の速度から計算する式があるのですが……そうですね、以前いただいたもので分かりやすい回答がありますのでそれで答えさせていただきますね。ビルの上から落した植木鉢はおよそ二キロ程だったそうです。ですがそれをそのまま自由落下させた場合、下にあった作業用ヘルメットに直撃し、その結果、思い切り大きな穴があきました。確かその時は三階から落とした実験でしたから、そんなに高い場所からの落下ではありませんね」

さらりと雫が告げると、須賀は声を裏返させて驚きの声を上げる。

「そ、それって中の人死ぬじゃない！」

「ええ、死にます。因みにヘルメットの耐加重量はおよそ二百キロです。ですから、二百キロ以上の圧がそのヘルメットにはかかった

ことになるそうです」

ちらりと雫は転がったままのバケツと盛大に撒き散らされた水の量を目算するところ答えた。

「私の頭にあれが当たっていれば、確実に身体ごとぺしゃんこでしたね」

たった二キロが二百キロになることからして考えられるのは、下手をすれば単位はキロでは済むまいと考えた。

下手をしたら一トンを超えていたのかもしれないと冷静に見ていれば須賀が冗談じゃないと叫ぶ。

「ぺしゃんこでしたね、じゃないでしょおお?! 何冷静に言ってるの! 危なかったんだよ?! あいつらとつちめに行こうよ!」

とつちめるとは何だと雫が尋ねれば、捕まえて学年主任あたりに突き出そうと言うことらしい。新しい言葉を聞いたと雫は言うが、須賀は最早突っ込むつもりもなかった。

駄目だこの子、分かって無い。

雫は首を横に振ると、静かに告げる。

「いえ、仕事が先ですので。鷺宮さん、お父様　いえ、理事長代理はまだいらっしやいますか?」

ふいに話しかけられて驚いたように鷺宮は振り返る。どうやらどこかに連絡を取っていたらしい。

この水浸しの廊下の清掃を頼んだようだ。

手回しがいいことである。

「ああ、まだいるけど。つてもそろそろ理事会の招集かけてつから後三十分もないぞ?」

「いえ、それくらいあれば大丈夫です」

誹謗中傷にも慣れ切ったところのこれだったため、もうある程度の態勢がついていたのもあるが、ああまたか、程度の感慨しかなかった。

須賀には言っていないが、実は雫が一人になるトイレ等で何度か嫌がらせも受けているのだ。頭から水を被せられるくらいは序の口だった。そのため、また実力行使に及ぶ生徒が現れたのかと思った程度で、むしろまたなのかとしか思わなかった。

「須賀さん、参りましょう。それでは成瀬さん、御機嫌よう」

「ちよ、お……おい!」

雫は須賀と鷺宮を伴ってその場を離れようとするが、健はこれには同意できないとばかりにまたもやその進路を阻んできた。

いい加減に不愉快だと隠そうともせず雫は顔を顰めて言うのだ。

「何ですか?」

「おまつ……さっきのあれ、あのまんまにしておくのかよ!」

「あれとは、水浸しのままにして置くなど言うことですか?でしたら鷺宮さんが手配してくれたようですので、直ぐにも係の方が駆け付けてくださるはずかと」

「じゃねえだろ?! あんな危ないことしてきた奴ら、野放しかって言ってるんだよ!」

雫はここまで聞いてやっと理解したという表情になり けれど更に醜悪なものでも見るような顔をして告げた。

「それこそ生徒会の仕事でしょう？仕事を減らされたと言うのであれば、こういう仕事をきちんとしてみせてから　結果を出して見せてからにしてくださいませんか？先ほどの話ではありませんが、ご自分でおっしゃったことではありませんか。生徒会の仕事を取ったと。でしたらどうしてそのように手一杯なのですか？人に押し付けようとするのですか？確かに私が狙われました。ですがここは六花学園です。生徒の自主性を言うことで、学園内部で何かあれば基本的には生徒会が駆け付けることになっていたはずでしたが、…違いましたか？」

全く違わない。

健はぐっと言葉に詰まってしまふ。

何も言い返せなかった。

「生徒会の仕事を何故半分にしたのか、きちんと自分達で考えなさい。そこには前期の生徒会の仕事も全て記載された資料があるのですから。調べられないはずがないでしょう？」

そこまで告げると雫は鷺宮と須賀の両名を伴いその場を後にした。健は言われた言葉を反芻し、けれど何も考えられず呆然とそのまま廊下で突っ立っていた。

「んだよ……」

冷静に対応しているように見えたが、雫は怒り狂っていた。

自分だけではなく、他の人間も傍に居たと言うのにどうしてあのような危険なことを出来るのか、雫には理解できなかった。

自分が気に食わないならば、何をしてもいいと言うのか。

ぎりりと歯を噛みしめる。

「誰も怪我をしなかったからいいものの……」

「降矢さん……」

心配そつに雫の顔を覗きこむ須賀に雫は安心させようと少し微笑む。

「大丈夫です、須賀さん。絶対に私は、負けませんから」

悪意に屈してなるものか、その思いだけが、今の雫を突き動かしていた。

7 (彼女は痛みを知らない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

7 (彼女は痛みを知らない)

教授棟より届けられたメールを読んで呻く。どうしてこうなるのか。義経は軽く頭痛やめまいを覚えた。

目の前に居るのは決して傷つけてはならないと言われている、あの子がいる。

それが何をどう間違ったのか、自ら火の中に飛び込んでしようと
言うのである。

それではたまったものではない。

「何で綾小路さんはこれに入ろうと思うわけ？僕の思い違いじゃないければさ、茶道部の次期部長にとまで言われてるそうじゃない？なのにそれを蹴ってまでどうして執行部に入りたいと思うの？理由を聞かせてくれない？」

疑問だらけである。

義経はよこされたメールを読みながら追記にある「何とか説得を宜しくお願い致します」の文字に更に頭を悩ませた。

そもそも義経としては雫と奏の二人でやらせるつもりしかなかった。とはいっても、奏がやりたがるかやりたがらないかは、大人の自由意思による決定に委ねていたため、雫一人でやらせることも考えていたのだ。まあ、それは最悪の形かもしれないが、それでもやらないよりは雫はあの形のほうがいいはずだから一人ででもと考えていた。

けれど奏は先ほど理事会に執行部入部の手続きをしにきて、ついで今は理事長室で執行部に持っていく書類を纏めているところだった。更に誤算は続き須賀まで雫のためにと立候補してくれたのだ。二人もついていてくれるのであれば心強い、嬉しい誤算だ。そう思った。やってくれるつもりと知って安堵したのは言うまでもないが

けれど櫻子のそれとはまた、事情が違うのだ。

奏は元より頭数に入っていたが、彼女の場合は全くの想定外だ。困るのだ。だと言うのに目の前の少女はにこりと笑みを浮かべて一歩も引くつもりは無いようで、義経の質問に丁寧に一つ一つ答えていった。

「執行部で部長の降矢隼を手助けしたいと思ひまして。それと茶道部の部長に推されたと言う話でしたら、あれは冗談かと思ひました。正式にお話をいただいたようなこともありませんでしたし、何かの間違いかと思ひますが？」

「えー……そうなの？」

思わず小さく舌打ちを打つと、義経は茶道部の面々に対し悪態をつきたくなつた。どうしてもつと「次の部長は君だよ！これからも頑張ってくれたまえ！」レベルのことを言っておかないのか。これでは上手く断ることが出来ないではないか。

義経は差し出された入部届けに呻く。上手く断ることが出来なければ、無理にでも押し切られそうな雰囲気だ。それはいけない。絶対に彼女を執行部のような場所に入れるわけにはいかないのだから。けれどもああでもないこうでもないと考えている間に櫻子は焦れたのか、一言

「入部を受け付けて、貰えますね？」

と聞いてきた。

受け入れるわけにはいかないが、断れる理由も無い。どうすべきかと考えていたところに、間の悪いことに隼達がやってきたのだ。扉を開くなり開口一番隼は告げた。

「お父様！早急に進めたいと思ひますので、どうぞよろし……櫻子

「？」

「雫？どうしたの？威勢がいいわね」

追い返そうとしていたところで雫に來られてしまっただけはもうどうすることも出来ない。義経は机に突っ伏したくなった。櫻子が雫に何か言おうものならば、恐らくはその段階で入部を決めてしまいかねない。

義経は弱り切った。

「パトロール終了しましたよっ」と

「お疲れ、って……何よ。水も滴る何とやら？」

「いやまあな、色々あってな……」

多少だが鷺宮は先ほどのバケツの水を被っていたらしく、少々その髪をぬらしていた。

義経は鷺宮の濡れた髪を拭うために奥へと引っ込んでいる澤田を呼びつけた。

「澤田くん、タオル頂戴」

程なくしてタオルが届けられると、義経は図々しくソファに座った鷺宮の前に立って髪を拭ってやった。黒髪を拭っているうちに気がついたが、黒髪の下はどうやら青に染めているようである。妙なところだけ染めるなあと思えば、鷺宮は言う。

「お洒落だろ？」

「そう？そうかなあ……なんだかこっさり校則違反してる学生みたいじゃない？」

「失礼な。まあ、洒落っ気で染めてるわけじゃなくて、ただつまらんから染めてるだけだからな。んで？なんでお嬢のお友達がここに

来てるんだ？」

「あー……」

義経は鷲宮の頭から手を離すと目を泳がせる。

義経が答えないならばと櫻子はさらりと自らも入部届けを持ってきたことを告げた。奏だけにいい顔をさせるつもりが無いと言つこと、そして、須賀にその場所を取られてなるものかという意気込みを持って宣言する。

「それはですね、私も執行部へと入部をしたいからです。雫を守り、そして――」

「ええ?!だ、駄目です櫻子!」

予想に反して、雫は櫻子の入部を反対してきたのだ。これには義経が驚きに声を上げた。

「え、あれ?雫さん??」

義経は何故との疑問符を頭の中に並べていくが、目の前の少女達の口論は勢いに乗ってしまったのか、留まることをしなかった。

「どうして私が入部するのがいけないの?」

「櫻子は駄目です!絶対に駄目!」

「だから、どうして?」

「だって櫻子は茶道部じゃないですか!」

「抜けたもの」

「抜けた!?それこそどうしてですか!」

「執行部に入りたかったからではいけない?」

「いけません!」

「だから、どうして駄目なの?」

「櫻子は駄目なんです!」

「だから……須賀さんはよくて、奏君もよくて、どうして私だけ駄目なの?理由を教えてちょうだい?そうでなくては私は納得出来ないもの」

「理由……理由は、」

恐らくは納得しないだろう理由しかないのだ。

雫は何と口にしていいか分からず、口を噤んだ。すると須賀がかわりに口を開いてこつ櫻子へと告げたのだ。

「綾小路さんはさ、たぶん、私や降矢さんとは違うと思うんだ」

「どういうことかしら?」

雫と須賀が同じともとれるこの発言に、櫻子は面白くなかった。

まるで自分だけが除外とされる言われが分からないし、分かりたいとも思わない。

「上手く説明できるか分からないけど……綾小路さんはさ、こついつちゃんんだけど、たぶん人から詰られたことなんてない、お嬢様だと思ふのよね。……私も降矢さんも、ある程度慣れてるけど、たぶん、綾小路さんにはそういうの、無理だと思う。馬鹿みたいに嫌がらせしてくるやつのこととか、相手にしたことないでしょ?執行部って入って見て尚更痛感したけど、凄く敵だらけなの。そんな中に飛び込んできて欲しくないって、降矢さんは思ってるんじゃないのかな」

語尾が尻すぼみになっていった須賀の言葉に、雫は半分は当たり前だと思った。というよりもむしろ、それこそが半分の理由だった。

半分は櫻子が耐えられるかは分からないが、それでも巻き込みたくはないからこそ、拒否をした。それともう半分は櫻子が今までの

生活とは全然別の生活を始めなくてはならないのだということを、自覚していなかったから拒否したのだ。

その点須賀は賢かった。このようなイジメは想定内で入ってきたからだ。

だが櫻子は 雫は櫻子から視線を逸らす。

「私じゃ力不足と言うことかしら？」

須賀も雫も言葉には出さないが、そうだろうと思った。

綾小路櫻子は、真っ直ぐに生きてきた少女である。清廉潔白を絵にしたような人間なのだ。

何一つ衝突の無い中生きてきたような人間だった。

ぶつかる前に櫻子の前に立つと皆理解するのだ、ああこの人には勝てないと。だからこそ、今まで櫻子に面と向かって戦いを挑む人間はいなかった。

だが、それを今まさにこのような辛い環境下に置いて大丈夫なのか、それは大いに疑問が残る。確実に櫻子にもその余波は及ぶだろうから。

「人の悪意って、受けた事ない人間が初めて受けたとき？結構きついんだよね〜」

そう言いながら奏がひよっこりと顔を出す。隣から必要な書類を抜粋してきたようで、書類の束を幾つか抱えていた。

面倒くさいことにはかかわらないを信条としている奏の出現に鷲宮と義経は目を見開く。むろん雫もだ。

「どういうこと？私が他人からの害意に対して何も出来ないって言いたいのか？」

ここでまさかの奏の参戦である。櫻子は須賀に雫に、そしてそれを受け入れる側である大本の義経にまで蹴られたことで散々だと思っていたところに、どうやらとどめを入れにきたらしい。これには警戒せざるを得なかった。

ぴりぴりとした空気を漂わせて櫻子はこれに応じる。

「違うの？綾小路さんってさ、今まで人に殴られたことある？」

嫌がらせ、とはまた違う質問なのだろうかと思いつつも櫻子は首を振ってこれにはきっぱりと否定した。

「ないわ」

「んじゃ悪口言われたことある？勿論、自分に対してのことでは？」

そう口にされて暫し櫻子は考え込んだ。

私は悪口なんて、言われたことがあつたかしら？

櫻子が考え込んでいると、奏は肩を竦めて告げた。それは、どこまでも無情で、そして残酷な言葉だった。

「考え込んでる時点で、無いってことですよ。お嬢様と同じ年ってことはさ、綾小路さんはあれでしょ？十五歳なわけだ。ってことは十五年間、今まで悪意を持った言葉を受けた事がない。悪意をぶつけられたことがないってことになるだろうね。そんな人間がさ、今まさにイジメの対象になってる雫お嬢様の隣で頑張れるはずがないよ。だって十五年もの間、一度だって馬鹿にされたことないんですよ？教えてあげるよ、そう言う人間って凄く……打たれ弱いんだよ」

言われる言葉に途中までは反発しようとの言葉が浮かんできたが、

それでも最後まで聞いてしまえばそんな心は萎え萎んでしまった。

櫻子は己の経験値不足と言われたことに大いに不満があるもの、それでも言い返せない。確かに馬鹿にされたことがない櫻子は、いつでも雫が受ける誹謗中傷を聞いて憤りを感じるだけだった。自らは傷つかず、ただ怒りを発していただけだ。それでは痛みを受けた事がないと言われてもしょうがない。

更には確かに十五年もの間、櫻子自身が受けた傷は全くなく、まっさらなままに日々を過ごし続けてこられたのだ。それは常に櫻子の周りには、幾重にも敷かれた堅牢強固な守りがあつたからだが、本人にはそれと知られぬよう動いていたのだからこれは櫻子ばかりに非があるとは言えないのかもしれない。

よろりとするめく櫻子に雫が手を伸ばす。

須賀は学園内であまり（と言うよりも全く）見ない男子だと思いつながらも奏の襟首を捕まえて言い過ぎだろうと告げると重苦しいほどの溜息を吐きだした。

「まあね、確かにあの人が悪口言われてることなんて無いけどさ？それでも言い過ぎじゃない？」

こちらもほとんど初対面の女の子に襟首掴まれるなんて初めてだなあと思いつながら答える。

「そうかな？」

「そうよ」

奏と須賀が話している横で頭痛がまたしてきたようなと呻くのは義経である。義経は席へと戻ると全員に適当に腰を下ろすようにと告げた。

「兎に角立ってるより座って話そう？ちょっと疲れてるからついで

に珈琲か紅茶でも貰えると助かるんだけど……」

「畏まりました」

「あ、澤田さん、ミルク沢山使うからポット二つで」

「はいはい」

8 (それでも傍にありたいと願う) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

8 (それでも傍にありたいと願う)

全員が腰を落ち着け、飲み物も行き渡ったところで鷺宮と澤田の両名は義経の背後にそっと控える。

一つ咳払いをすると、義経が口を開いた。

「とりあえず、雫達の方から聞こうか。雫、何の用があつてきたの？」

「今期の開催イベントの件になります。予算の件は生徒会からきている分として部費がありますが、こちらは、」

「ああそれは違う。部費に関しては部室内の必要なものを揃えるためのものとして使つて欲しい」

「でしたらこの半分で結構です。と言うよりも生徒会の資料を見ますと、全体的に部活に使われる金額が多すぎるような気が致しますが……前々から気になっていたので、今後生徒会と協議して減らすところは減らすべきかと思われれます」

「了解。今度教授連とも話し合つて決めることとしよう」

「話が逸れましたが 開催イベントですが六花祭、桜祭り、収穫祭はこのまま継続。他の祭りに関しましては規模の縮小を提言したいと思ひます」

「何故かな」

「六花祭はその実、外への六花学園の周知を目的とした側面が強くあります。ですからこれを消す事は些か問題になるかと思ひまして。そして次に桜祭りですね。こちらは新入生の歓迎式典も兼ねており、こちらを削ることにより後々新入生が馴染みにくくなる結果に繋がると思われるのです」

「なる程、確かにそうだね」

「そして収穫祭ですが、農業科の作った作物をメインにしているため、こちらはそこまで費用はかかっていないのと、それと食育を推

進し続けている初等科の教育をそのまま繋ぐことは、決してマイナスには働かないはずです」

「結構。ではその三件はそのままでいくこととする。そのほかと言うと何が主に挙げられる？」

「規模の縮小の件ですね？一番でかいのは昨年度行われました球技大会の特設ステージでしょうか？あまりにも馬鹿げたサイズを作り出し、建設費用だけで莫大な費用を投じていたようです。これが昨年度の球技大会の予算案ですね」

雫は義経の机に昨年度、馬鹿げた数字を持って通ってしまった予算案を提出する。それを見るなり義経はうめき声を発してその美しい顔を顰めた。

義経の表情を見て奏は内容が気になったのか須賀に尋ねた。

「因みに幾らくらいだったの？」

「どこかのテレビ番組を模したものを作りたいか………凄いや？桁間違えてるのかと思った。巨大な装置でン千万。大型のモニターを幾つかはめ込んだやつを作ったお陰でそのお値段………んつとに馬鹿みたい。たかが球技大会でしょ？」

「………うわあー、流石にそれはないねえ」

奏と須賀は何故か馬が合うのか、二人でこそそと話しているようだ。そしてその向かい側には櫻子がいるのだが、彼女はあれからずっと沈黙したまま動かない。手元にある珈琲をじいっと見つめていて、何をしてもなくそのままぼつととしている。

ここにきてようやく奏は自分が言いすぎたことに気がついたが、それでもこれは櫻子自身の問題である。何を彼が口出しすることも、最早出来ないのだ。

櫻子自身が結論を出さねばならないことなのだから、それは仕方ないことだった。

「分かった、了解。理事会の予算はその三件を持って他の行事は一時凍結としておくことにする。その三件については生徒会に一時的にいつてしまっているはずだから、後で予算の分配を変えるための書類を作成するから、その時はまた受け取りにくるように」

「分かりました」

義経はそれを澤田へと渡すと、澤田はそのままそれを持っていた黒いファイルの中にそつと差し入れる。

そこで鷺宮が義経に追加だと告げ端的に先ほどあったことを述べた。

「先ほどお嬢の頭上に、推定二十リッター越えのサイズのバケツが落ちてきた。しかもご丁寧なことに中身入りだ。ちょうど館内巡回中で助かった。目の前に落ちてきたのを見て肝が冷えたぞ」

というよりも元から鷺宮は雫の近辺を警戒中でもあったのだが、一応は巡回ということで学園内を見回っていた時だったお陰で助かったのだ。

矢張り雫への風当たりは相当にきついらしいと思い、鷺宮は暗い表情になる。

「……どういうこと？」

義経の目つきが剣呑なものに瞬時に変化した。

「とりあえずお嬢についてるやつに廊下の掃除とバケツを落してくれた犯人は追わせてるが、どうだろうな？目の前に落ちてくるバケツとお嬢が固まって動けなくなってるのを見たんでな、助けたんだが……そっぴやあお嬢、怪我はないか？」

「え……ああ、ありません。大丈夫です。あ……そうでした。先ほどは助けていただきまして、有難うございます。礼を述べるのが遅れてしまい、申し訳ありません」

「いやいや、いいって。で、って、何で俺を睨むのかな義経君？」

鷺宮の顔をぎりぎりと睨みつける上司の姿に澤田はまたかと溜息をついた。

「どうせいつものあれですよ」

澤田の言葉に意味が分からず首を傾げていると、そんな須賀に奏は言った。

「焼き餅だと思えますよ。義経様、鷺宮さんばかりって、いつも怒ってるから」

「ばかり??」

矢張り意味が分からない。須賀が首を傾げていれば目の前でそれは起こった。

「鷺宮の馬鹿！いつもいつつも雫をカッコ良く助けちゃってさ！ずるいよ！僕だって助きたい！カッコ良くこう……」

「雫、大丈夫！？怪我はない?!」

「はい、お父様！大好き！愛してる！」

とかとかかあ!!言われたい!ずるいよずるいよ鷺宮の馬鹿!」
煩く喚き始めた義経に、鷺宮は嘆息を零すと雫へと一言こう告げる。

「お嬢、宜しく頼む」

「え？えええ？！」

「わああん！しずくうううう！」

ベソをかいている父親を前にして突然振られた話に、雫はどうしたらいいのかが分からない。兎に角落ち着けるべきかと思いい両の拳を握りしめてこう言ってみた。

「お、お父様っ！ふぁいと！」

本人は、これでも頑張ったつもりだった。

「ふぁ、ふぁいとっ！」

反応が無いのが怖くて二度目を試してみるものの、義経は相変わらず無反応だった。

「……何故でしょう？」

「あー、なんでだろうなー？」

誰も答えられなかった。

「それと、後は綾小路さんなんだけど……」

義経は厳しい顔つきをしている。いや、厳しいと言うよりも、どこか追い詰められたような顔かもしれない。義経はどうにか諦めて貰えないかと考えていたが、先ほどの話の中で、相当な言われ様であったため、これ以上追い詰めるような言葉を告げるのもどうかと考えていた。

さてどうするべきか　そんなことを考えていれば櫻子がぼつり

と呟いた。

「私は……雫を傷つけるばかりだったのかしら」

「櫻子？」

「私、雫が宗一郎様にあまりよく思われていなくて、酷いことをされてきたのは十分に承知していたの。酷いことをされて、泣いてもいつからだったかしら？雫は泣けなくなって……全部全部、見てきたんだもの。知っているのよ。」

けど雫が泣いているのを見て、私は別に悲しかったわけじゃない。怒りを覚えはしたけど、でもそれだけだわ。だって自分が何かを言われたことが無かったんだもの、だから雫が泣いていても酷いと怒りこそすれ、一緒にどうやって泣くことが出来なかった……」

怒りは感じていた。理不尽だと狂おしい程の怒りを感じたのだ。けれど櫻子はそこまでだった。何て酷い人達なのかと怒りを感じるも、そこまでなのだ。

櫻子は自身で受け止めたことのない、悪意という感情をどうしても理解できない。いや、理解した気にはなれるだろう。けれど真実それでは理解したとは言えないのだ。

「これでは今の執行部には、入れない？」

怒鳴られて誹謗中傷を受けて、蔑んだような目で見られて　そうした中に飛び込んでいくことになる。外からそういうものだと見えて知っていたが、それはつもりでしかないということなのか。櫻子は悲しそうな目をして雫を見た。

「私、今まで酷いことをしてきたのかしら。雫を私は、傷つけた？」「傷つけてなんて……いませんよ。そんな……何でそんなことを言うのですか？櫻子、ただ私は櫻子に傷ついて欲しくないからっ」

「いらぬ！そんなのはいらぬの！私は貴方の傍に居るって決めたのよ！なのは何で……傷なんていい、もういい。幾らでも受けるわ。だからお願い、私を貴方から遠ざけないで。お願いだから傍に置いて……置きなさい！」

酷い様である。

櫻子は豊かな黒髪を振り乱しながら雫の肩を掴んで揺す振る。それは駄々を捏ねている子供のようだった。

雫は始めて目にする櫻子の様子に目を疑う。

「さ、櫻子っ！」

「嫌だ！絶対に私はもう、貴方から離れないから！さっきの話は何？私の知らないところで貴方が害されて……もしも怪我をするだなんてことになったら！そんなこと、今まで考えた事も無かつたわ。でも、執行部ってそういうことをされるのが当たり前なんですよ？そんなの、そんなの駄目よ。私は、絶対に貴方を守る。傍に居たいの……どうかお願いだから……」

懇願と言ふにはあまりにも訴えかけるものが強すぎる少女の様子に、周囲の人間の方が折れてやるのにそう時間はかからなかった。

9 (人を攻撃するということ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

9 (人を攻撃するということは)

どうして上手くやれないのかしら。

少女は齒がみする。

「先輩方、もう少し上手くやってくださらずには困りますわ」

やるならばきちんとやり遂げて貰わなければ困るのだ。雫の周りに守りが築かれてしまったらどうするのだ。今はそのほとんどの活動時間が一人で居る雫に対し、自分が手出し出来なくなったらどうしてくれるときろりとねめつける様に見やった。山田の視線の先には先ほど雫の上にバケツを落した上級生の姿があった。どうやら取り込み中のものである。

生徒会のあれは確か成瀬と言う少年だっただろうかと山田は記憶を手繰る。

健の先ほどの雫とのやり合いにはほくそ笑んだものだったが、けれどこうして上級生を狩りだす仕事につかれてしまうのは少々煙たいものがあつた。

さて、どうするか。

山田は考える。

理事会に報告をされてはならない。だがしかし、先ほど雫と須賀が向かったのは理事長室である。ついで言つなれば雫の祖父が理事長なのだ。もう遅いとも言えるだろう。

だがこうも考えた。

今の雫の声に誰が耳を傾けるのだろうか、と。

山田の目には剣呑な光があつたが、口元はついと孤を描いていた。

「そつよ、あいつの声なんて、誰が聞くの?」

そして更に思うのが、その雫と共にこうして生徒会の仕事を取りあげると言う暴挙をやったのけた理事会がすることに、生徒達が反発を覚えないだろうか、と思うのだ。

大体証拠はあるらしいが、須賀の言う証拠とは一体何だ。

鍵は違うだろう。茂みに落ちたのを確認しているため、あれを闇雲に探していたとしても、見つけ出すのは困難だろう。そもそも投げた瞬間、そして方向を見ていない限りあれを見つけることは出来るはずがないと考えた。

だとすると、殴られた怪我の後とか？ とすると何を出してこれるかと考えた。須賀は二日後には学園へと来ていたことからして、外傷がそれほど酷かったはずはないと考えられる。そして雫は雫であるまま放置されていたとしてもどうせ風邪を引いた程度だろう。肺炎まで発症していればもっと治るまでに時間を要したはずである。それがあの短期間で戻ってこれたことを考えるとどうにも風邪以上のことは考えられないのだ。

そうなると思賀の言う証拠とは、それこそただの打撲程度のことを指すのではと考えられた。

打撲を医者に見せて、そして診断書を書いてもらった。

それが証拠ね。

恐らくは、だが、それ以上に強い証拠が用意出来るはずがないと山田は考えた。

だとすれば後は須賀が殴られたと、そして雫が閉じ込められたと証言があればいいのだろうが、もしも、もしもだが、その証言を二人が理事会にすることが出来なくなったら、どうだろうか。

もっと大きな問題でも起こればそんなことを理事会が言おうが何だろうが、生徒達は決して雫達を許さなくなる。

そうすれば雫と須賀が何を言おうとも、生徒達も理事会も、山田を責められるはずがなくなるだろう。

山田は健と捕まった上級生二人に目をやりながら嫣然と微笑んだ。

「いいわあ、すつごくいい。ふふ、ふふふ。そうよ、私が捕まるなんてこと、あつてはならないんだもの」

もう証言をしていようがいまいが関係ないのだ。
そんな訴えが無かったことにするには簡単なのだから。

+++

健はバケツを落した犯人である二人を捕まえると、生徒会室
千草の前へと通した。

千草は健が入室してくるのをずっと待っていたらしい。腕をゆるく組んで入室を促された。

そんな優雅な仕草を見て自分も動けよと健は歯を剥いて千草へと言葉を介さずに告げたが、千草は片眉をついと上げただけでそれを一蹴した。

訳はこうだ「そんな面倒なこと、お前がやれ」である。
畜生め。

「さて、ここに連れてこられた理由は健……成瀬から聞いていると思うが、何か申し開きはあるかな？」

常とは違い冷たい表情をしているだけの千草に少女達は顔を強張らせている。

「高遠君たら……そんな怖い顔、しなくても……」
「怖い顔？そう、見える？」

健は少女達が逃げないようにと扉を背に立って事の成り行きを見

守っている。

少女達は背後をちらりと見て怯えたように声を発した。

「こんなところに閉じ込めるような真似して！お父様に言いつけるわよ！」

だそうだ。親の権力を当てにしたこの言葉に、千草は笑いがこみあげてくるのを感じた。

馬鹿だなこいつら。

ここは高級学校だ。全員が全員、金持ちなんだよ。

その半数以上が彼女たちと同じく金持ち　いわば特権階級の間が通う学園だと言うことをついぞ忘れていたようであると悟ると千草はおかしくて堪らなかった。

たった一部だ。一部の人間だけが持ちうる特権を、この学園ではおよそ八割の人間がそれを有していると言うのに、どうしてそれを活かせると信じられるのだろうか。

それも、なお悪いことに相手はあの降矢の令嬢たる雫だ。降矢を敵にしてまで相手の親だつてうちの娘は知らないと言っているなどとは言えない。

確かに一部にはその物言いだけで通じるものもあるだろう。

特別枠で入ってきている者達の多くはその身一つでこの学園に通っているのだからそれはそうだ。

けれど何か忘れてはいはしまいか。

お前達が狙ったのは、この学園の理事長の孫娘だつてことをさ。

醜悪なものを見た所為か、千草は少々気がたっているのを感じた。何故こんなにもいらつくのかは分からない。それでもその怒りを持って、少女達に立ち向かえる職につけていて嬉しかったのも確かだった。

千草は先ほどの一件を生徒会室の中から見ている。それは健が扉を開け放ったままに大立ちまわりをしてくれたからに他ならない。だからその全てを見ていたのだ。

雫に罵倒する健も、そしてそれを受けて狼狽し、困惑する雫も。そして、雫の上に落ちてきた悪意の塊も。全て。

胸の内がどす黒く染まっっていくのを感じる。

千草は一言一言、一々相手の癪に障る様に言っただけ。どうせだから相手を取り返しをつかないことをしたことを、きちんと分からせるつもりだったからだ。

さあ、やれ。

千草は少女達を、上手く踊らせる自信があった。後はただ、千草が上手く誘導するだけだから簡単だったのだ。

この少女達は自分達のしたことがどれだけのことだったか、それをきちんと分かってもらわねばならない。そうでなければ、このイラつきは、どうにもおさまりにないからだ。

千草は手で備え付けてある電話を指し示すと、少女達へと促した。それは優しい口調にも聞こえなくはないが、けれど決して甘さだけのものではない。どこか棘が感じられるその言葉には、相手に対する「やれるものならばやってみせろ」との含みを持たせたものがあった。

そしてそれは、少女達にはきちんと伝わったようだった。

もっとそんな含みも伝わらない程に鈍ければ、少女達の運命は変わっていたらどうか、と健は考えたが、そもそもそんなことは無理なのだ。彼女達は千草を怒らせたのだから。

「言いつけられるものならどうぞご自由に言いつけてください。そこに学外へとかけられる電話も置いてありますので、どうぞ、ご自由」

千草は怖いと言われた表情を幾分和らげて告げると、少女達はそ

れをどう受け取ったのか　嬉々として受話器を取って告げる。

「出来るに決まってるじゃない！」

馬鹿な女だ　。

少女達が受話器に飛びついたのを見て千草は目を細めて腕を組み直した。

少女の一人が自分の親の元へと電話をかけて繋がったらしい。その時を待たずして相手が出た事に千草はほつと息を吐き出した。あまり長く待たせられるのは、千草としても本位では無いのだ。まだまだ仕事が山積みなため、本来であるならばこんな少女達にかかずらっている暇は無いのだから。

少女は受話器の向こう側へと助けを求めた。

ただ、愚かにも生徒会室に閉じ込められていると、馬鹿正直のまま答えるとは思っていなかったため千草は少々吹き出した。

本当の馬鹿だな、こいつ。

「もしもし、もしもしお父様？あのね、今、生徒会室に……私、今閉じ込められて……あの、……え？だ、だって……う、ううん！何もしてないわよ？そんな、そんな、何もするわけがないじゃない！お父様、お父様……私を疑ってるの？」

少女が絶望にその表情を全て塗り替えると、千草は少女の手から受話器を無理やりもぎ取った。

「もしもし、申し訳ありません。勝手ながらお嬢様の手より、受話器を拝借させていただきました」

「君は、生徒会の人間かね？」

「ええ、生徒会長に先日就任致しました。高遠千草と申します」

相手は申し訳ないが話を聞かせてくれないかと告げた。その声には、どこか疲れがある。

「何を、うちの娘はしたのかね。あれが生徒会に入ったとは聞かない。何か、したんだろう?」

閉じ込められるようなことを、とは相手は言わなかった。まあ、言いたくも無いだろうが。

「おつしやる通りです。大変言いにくいことですが、先ほど、娘さんは我が校の女子生徒に物を投げました。いえ、その頭上に殺意を持ってしていると受け取られても仕方ないほどの重量物を落としました。意図的に」

「物を、投げた?!重量物!?!」

大仰なまでに大きな声に、そして素つ頓狂な声を響かせられて千草は顔を思わず顰めた。耳が痛い。

「ええ、それも数階上の階より、その女子生徒めがけ、バケツを中身入りで、です。大きさは二十リットルの大型のバケツです。そこにたっぷりと中身を入れて人の頭の上に落とした。分かりますか?これはれっきとした殺人未遂だと私は受け止めています」

高級学校の生徒をよもや、殺意をもってとは相手は声も無いよ。うだ。けれど少女二人はそんなつもりは無かったと千草の背後で怒鳴りつけてくる。

あまりにもそれがうるさかったために、千草は受話器の口を、わざと緩く押さえると、二人の少女へと向き直って言ってやった。

「まだお分かりになりませんか?殺意が無かったで済まされるレベ

ルではないことを貴方がたはしたんです。人の頭の上にあんな大きなバケツを落としたらどうなるかなんて簡単でしょう？中身がそのまま当たれば数百キロの重さです。殺そうと思っていなかったなんて言葉、誰が信じると思いますか？殺意が無かったなんて誰も信じない。そもそも何階から落としましたか？」

「よ、四階……」

「四階から落としたとなりますと、あの重さですからトンで行かないまでも相当重かったでしょうね。彼女の居た場所、見ましたか？廊下が凹んでおりました。彼女が訴えなかったとしても、貴方がたはあの廊下を弁償する程度は最低限して貰わねばならないでしょうね。けれど、それで済むと思ったたら大間違いです」

「廊下の……修理費用くらい、出せるわよ！」

罵声をそのまま浴びせてくる少女達二人に顔を顰めながら千草は不快だと隠さずに口を開く。

「廊下を直すのは最低限といったんです。そもそも四階から同じバケツでなみなみたっぷりと水を汲み入れたものを貴方がたの頭上に落として差し上げましょうか？ぶつかって、怪我をしなかった、死ななかつた、それが証明されてから殺すつもりが無かつたと言ってくれませんか？じゃなかつたらそんなの、ある意味口だけで何の効力もないんですよ。殺すつもりが無かつたで済むわけないでしょう？」

思い切り馬鹿じゃないのかと罵ってやりたいが、わざと受話器の向こう側へと聞かせてやっている以上、そももいかない。

試しにやってみるかとまで言えば受話器の向こう側では恥ずかしいとばかりになんてことをしてくれたんだと叫び始めた。

これが普通の反応だと思っけどな。

「ばっ……馬鹿者ッ！なんたる、なんたる……！！」

10 (覚悟がいると言っている) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

10 (覚悟がいると言いつつ)

少女の保護者たる受話器の向こうの人物は思い切り大喝すると娘を出せと叫び、怒り狂った。

まあ、無理もないな。

これが当たり前の反応だと思う反面、相手がモンスターペアレントでなくて良かったとも思った。モンスターペアレントだったらうちの子をどうして監禁なんて！と怒り狂うところをきちんと叱れる親と言っことでホッとしたのだ。

少女達は受話器の向こう側の声が嫌でも聞こえてしまったらしく、今更になって何をしでかしたのか分かったのか、怯え始めた。

千草の言葉を聞き、そして相手の反応を受け、本格的に何をしたのか、大人達がこうまで怒ることをお前たちがしでかしたのだということを千草は分からせたかった。

どうやらその目論見はある程度成就出来たらしい。

後は、とどめ、だった。

千草はある程度相手の叫び声を聞いてやると、更なる爆弾を落してやった。

「その相手の女子生徒は、降矢グループ代表、降矢宗一郎氏の孫娘でした」

「……な、……なんと、……ほ、本当、かね？」

こんなことで嘘をついて何になるってんだか。

震える声音で問われれば、千草は短く事実だと告げた。

相手はその瞬間、今にも首をくくっってもおかしくない程に、悲壮感溢れる声でこう告げたのだった。

「降矢様の……お孫さま、は……ご無事、でしょうか？」

「無事ですが、けれど大変お怒りのご様子でした」

これも嘘ではない。だが、多少意味が異なるとは言えるだろう。雫が怒りを覚えたのは、周囲に怪我が及べば何とする、と考えたからであり、自分に何をするのか！との怒りでは無いのだ。

だが相手はそうは取らない。

絞り出すような声音で申し開きも御座いませんと、そちらで娘を如何様にもしてくれ、との言葉を告げると、受話器を力なく置いたようだった。

「さて、もう一人も家まで電話を試みようか？」

「い、いや……いい！いい！」

「何？自分からは電話が出来ないのか。仕方ないな。じゃあ僕が電話をしてあげるから、何番かな？自宅の番号、前嬉しそうに教えてくれたよね？」

千草の表情は、常同様完璧な笑顔が張り付いていたが、けれどその中身は全く違っただろう。その瞳は、どこまでも冷たい光だけが広がっていた。

「もしもし、私、六花学園高等科生徒会長、高遠千草と申します。本日は」

千草が笑みを浮かべて受話器片手に親と語らうのを見て、少女は泣きわめき続けた。

千草はただそれを見ても、鬱陶しい煩い女だとしか、思っていなかった。

義経は退室した執行部のメンバーとなった面子を思い浮かべて重

苦しい息を吐き出した。

どうしてこうなったんだろう。

考えてみても分からない。

文字通り頭を抱えて義経は唸る。

「有り得ない、有り得ないよ……」

「やっぱ、あれって有効なのか？」

「何？」

「ああ……綾小路のおば様のことですか」

「うん……」

正直あのことが無ければこうも手を焼かせられる存在ではないのだ、櫻子は。

「父上もだけど、正直綾小路さんとは関わり合いたくないんだよね。守ってって言われてるから家ごと守ってるけど、ほんとにさ、それだけでいいというか……」

これ以上の面倒事として抱えたくはないのだ。

「遺言だから、なあ……」

義経は死ぬ数日前に言われた母の言葉を思い返す。

「義経さん、綾小路さんとの櫻子ちゃんですが、お願いですから気にかけてやってはくれませんか？」

妻に向ける程でなくて構わない、ただほんの少しでいいからと言われてからほんの数日後のことだ、母は亡くなった。だからあれは義経の中では遺言となった。

だからこそ宗一郎と共に、義経は全力で守り続けた。雫よりも早く生まれていた、少女を。

けれど、何故その少女がこうまでも雫にべったりに懐いてしまったのかと、こうなると頭が痛かった。

「ずっと陰で支えてきたつもりなんだけど、降矢が裏から手を回してたってもしかしてばれてる？」

だからこそ雫をどうにか守りたいと躍起になるのかとも思ったが、だとしてもどこかおかしい。

「でしたらあそこまで鬼気迫るものはないはずでは？」
「だよねえ」

そうであればどんなにか分かりやすいだろう。

義経は嘆息を零すと髪を掻き毟ってから席を立った。

「ま、いいや。兎に角今はこっちが先だよね」

「ええ、理事会の方はもういらしています。ですから後は義経様だけかと」

「んじゃ、行きますか」

ピリリリリ……

歩き始めようとした矢先にそれは鳴り響く。誰のものかと考えていれば、澤田が義経の耳へとそつと携帯を通話状態にして差し出した。

その姿を見て鷺宮は先ほどのタオルといい、お前は義経の女房かと思う。そして義経、お前も当たり前のように受け入れるな。

「はいはいもしもし……って、塩見さん！何？」

「何じゃないでしょう？呼び出したのはどこの誰だったっけえ？」
「あはは……冗談冗談。いつ戻るの？」
「んー、もういつでも戻るのには戻るけど、お土産何がいい？そのお土産にもよるかな？」

移動手段によっては土産が潰れてしまつたらうからそれによるだろうと告げられれば苦笑する。別に義経は土産物が欲しいと強請つたわけでもないのに、この友人はいつだって土産を用意してくれようとするのだ。

「お土産よりも、塩見さんが早く帰ってきてくれることが今は一番嬉しいよ」
「……馬鹿」

ぶちりと切られた携帯に苦笑すれば澤田の目がきつくなっていた。

「ええと……」
「何か？」
「……お土産、買ってくるかもってー」
「そうですね」
「さ、鷺宮あ」
「あんだよ」

「こちらもつれない。

義経はため息をつくときゅっと締め上げると、頬をぱしりと叩いた。気合いはこれで入った。よしと言い、歩き出しながら後ろを見ずにこう告げる。

「麗からだ。恐らく今日の夕方にでも戻るだろう。土産は要らない、お前が必要だと告げたから早いはずだ」

「……了解」

なるほどそれである電話かと多少の納得をしたらしい澤田はこくりと頷いた。

「体調、天候によつて変わると思うが、麗が戻り体調を整えた後だな。そうなると明日の夜の予定になると思う」

「分かった。こっちもそのつもりで準備の方はしておく」

「では晚餐は少々軽めにして貰いましょう」

「そうだな、身体が重くちや全力で戦うことなんて出来るわけがない」

そう告げて義経は、雄々しい笑みを浮かべたのだった。

11 (全ては過ぎ去りし過去に) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

11 (全ては過ぎ去りし過去に)

今日はこれまでにしましよと奏に言われて備え付けられた時計を見るともう校内からでなければならぬ時間だった。

「やっばい、早くでなくちゃ!」

大急ぎで四人とも荷物を纏めるとそのまま正面玄関を飛び出して行く。

「降矢さん、明日ね!私帰りこつちだから、じゃあね!」

「はい、また明日!」

「うん、明日ね!」

「須賀さん、また明日!」

「杜村君も明日! 綾小路さん!」

「え……」

奏と雫が須賀に手を振る中、とぼとぼとついてくる櫻子に須賀は元気よくまた明日と明日の約束をする。

「明日は早朝から執行部は動かないといけないからね!遅刻しちゃ駄目だよ?」

まさか自分が須賀から何か声をかけられるとは思っても見なかったらしく、櫻子はきよとんとしていたが、それでも言われた言葉を受けて安心でもしたのか、ふっと一気に緊張が解れたのか、微笑みを浮かべていった。

「大丈夫、遅刻なんかしないわ。御機嫌よう、須賀さん」

「もう、普通でいいのに。バイバイ！」

そうして須賀は走っていった。

須賀を見送った三人は校門まで歩いていく中で暫し話をする事にした。話題は先ほどの櫻子ことだ。

「あのね、櫻子……ごめんなさい」

「どうして雫が謝るの？私が謝らなくてはいけないというのに」

「違うの。私ね、やっぱり櫻子のこと、信じてなかったのかなと思つて。だから……ごめんなさい」

「私こそ！」

「はいはい、もう二人ともそれくらいにしたら？」

奏がいつまでも終わりそうにない二人の間に割って入ると、二人の頭を優しく撫でる。その手は暖かな日向の匂いがした。

「二人とも、自分のことをこれ以上いじめなくてもいいんじゃない？ね？」

雫はそう言われて俯いてしまう。そうして俯いてしまうと雫は奏の年幼い妹のように見えた。ほとんど変わらない年齢とは、どうしても思えなかった。

櫻子も多少なりとも落ち着いてきたようで、じゃあと雫にある提案を告げてきた。

「謝るんじゃないくて、約束しましょう？」

「約束、ですか？」

櫻子は無理に笑っているのか、少し辛そうな笑みを浮かべて雫に向けて口を開いた。

「お互いを信じあいましょう、信頼しましょう。もう二度と遠慮な
んかしないでいきましょう」

「それは……」

「ね？お願い雫」

請われてしまえば雫は言葉に詰まった。けれど、ここでこれを通
ることがどうして出来ようか。

雫は暫し迷った後に、こう答える。

「私はもう二度と、櫻子に遠慮はしません。信頼を、永久に……」

そして櫻子に向けて宣誓するように片手を上げて告げれば、今度
は櫻子の番だった。

「私の中に流れる綾小路の赤き血潮にかけて、貴方を守り続けるこ
とを誓いましょう」

きつぱりとした口調だった。

あまりの内容に雫が啞然としてみると、櫻子は自らの胸に手をそ
っと押し当てて、小首を傾げる仕草を試みせた。そうすると彼女の
愛らしさは数倍も跳ね上がる。それは本人も自覚しているのか片
目を瞑るサービス付きである。相手が同性でも何だか妙に胸が騒い
だ。

思わずどきりすると雫は頬をうつすらと赤く染め上げてしまう。
なんだか気恥ずかしかった。

妙な空気になってきたからか、奏が二人を交互に見つめると、そ
のままどうしたものかと考え込む。助け船を出そうにも何を言えば
いいのだろうか。

とりあえず

「なんか、同じことを誓うんじゃないの？」
「あら、いけない？」

奏は気になって櫻子へと問えば、櫻子は悪戯っぽく笑って言うのだ。

「私が本当に信用しているのも、信頼をおいているのも、雫一人だけだもの。だからこそ、雫のために全力で力を発揮しようと思っ
ているだけだもの。だからこれでいいの。これで」

そう言われてしまったては雫も何も言い返せなかった。

「櫻子さん！」

「高遠……君」

「千草……」

校舎から駆け寄ってくる千草の姿を目にすると、雫は視線を泳がせる。何だか身の置き場が無いような、そんな感覚に陥ってしまったのだ。

千草は雫のことは眼中にないとしても言うのか、そのまま櫻子の手を取って話し始めようとしたのだろうが、櫻子はそこまで甘くは無かった。取られそうになった手をそのまますいと引っ込めると冷たく言い放つ。

「何か御用？」

「用と言えば櫻子さんに会つのが用ですね」

「そう。いい迷惑ね」

「つれないことを……」

寂しげに瞳を揺らす千草の姿を見れば、何故か雫はここには矢張り居るべきではないと思った。奏をちらと見上げると、奏も心得ているのかこくりと頷く。

「えーつと……許嫁さん、僕らは先に行くから」

変なことを言うなよ、とは千草の発した心の声か、それとも雫の発した心の声か。二人ともが表情を一瞬にして変えて各々奏に何かを訴えかける表情を取る。

因みに二人の反応は各々こうである。

雫はと言つと

「櫻子の邪魔をしてはいけません！千草が怒りだしたらどうするんですか！？」

であり、千草はと言つと

「許嫁とか外で言っでんじゃねえ！！と言つよりもお前らと一緒に帰るとばれるからそれ以上喋るなよ！？」

つまりは空気を読め！の一言である。

大変分かりやすかった。

それを見て櫻子は眉根を顰めると、何？と千草に問うが、こんなことくらいで千草の完璧な仮面ははがれおちることは無い。爽やかな笑みを浮かべて千草は言う。

「何か？」

「い、いえ……それより、あんまりそういう笑顔を振りまかないで貰える？高遠君の笑顔は有害だわ」

「ゆ、有害とは……流石にそのおっしゃりようには些か納得がいか

ないと言いますか……」

と言うよりも何と返せばいいのか、一瞬分からなかった。

千草は途端に先ほどまでのように舌が滑らかな動きをしなくなったよつで、しどろもどろになっている。それを見ても櫻子は眉一つ動かさなかった。むしろ冷たく言い放つのだ。

「有害は有害なの。その気もない、なのに女子の前でそんな笑顔を振りまくべきじゃないでしょう？ 違う？」

「そんなことは……」

何故、ばれているのかと千草はたたりと冷や汗を浮かべながら口を開く。櫻子の告げている言葉の裏にある声が彼には聞こえたのだ。

櫻子が告げているのは恐らく櫻子以外に対する女子へのことだ。

千草は少し恐ろしくなった。彼女はどこまで知っているのだろうか。

ごくりと生唾を嚥下すると、千草は取り繕っても仕方ないと考えたのか、悄然と項垂れたようになり何故あの頃のようにいかないのでしょうかとぽつりと零す。それは、あの忘れられない一月のことだろうと雫は思った。

あれは何月のことだったかしら？

部屋に戻れば分かるだろうか、当時の日記が残っていれば分かるだろうと考えていたその時のことだ。雫達の間を、一陣の風が通り抜けていった。

思わず目を瞑ったが、直ぐにも風が通り抜けたのを肌で感じて目を開ければ、そこには悲しそうな眼をした千草が雫を見つめていた。

「昔はこんな形では無かったのに……」

私に話しかけているの？

邸内であるならばまだしも、ここは学園内である。そんなことがあるはずもないと思いつつも、雫は千草から目が離せなかった。千草の声に応える様な声を櫻子が発した。

「それこそ貴方自身の胸に聞いてみなさい。きっとどうしてこんな風になってしまったのか、その理由が分かるはずだから」

「昔は優しくかったですね。とても。僕達を包む世界が、全て、優しくかった」

「そうね。優しくかった」

何、何が言いたいのか？

櫻子は気づかず続ける。自分に言われた言葉がどうか分かっていないのは雫も櫻子も同じだった。

櫻子は千草を見ていない。空を駆け抜ける様に去っていった風を見つめていた。

そして雫は千草を見つめ、千草は雫を見つめていた。

それら全てを見ていたのは奏、ただ一人だ。

「どうしていつもいつも、僕らの間には邪魔が入るんでしょうね」「邪魔なんて最初からないわ。いつだって。邪魔が入るからだと感じているのは、結局それに逃げ場所を求めているにすぎないのよ。何何に邪魔をされたから、だから出来なかった。何何が邪魔だったから、本当はあの時上手くいっていたのに出来なかった。ただ言い訳の道具にしているにすぎないのよ。貴方はそれに気付かないの？」「そうなのでしょうか？」

その千草の言葉が最後だった。

沈黙に耐えかねた櫻子が雫へと別れを告げて、後はそのまま残された三人で迎いの車に乗り込んで帰った。

本当に、どうしてこんな形になってしまったのか。

「昔は、あんなに仲良かったのに」

栗には未だに分からなかった。

12 (二人、持て余す感情) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

12 (二人、持て余す感情)

帰宅すると奏に寝台に押し込まれた。

「あの……もう体調は戻っていますし、寝なくとも」

「そうはいつてもね、元からあまり雫お嬢様は身体が強くないですし、暫く養生しましょうよ」
「ですが」

正直言つて養生よりもまず、勉強がしたかった。ついでにしこたま出された宿題も消化したい。けれど奏は寝台の上でやれと言うのだ。

「サイドテーブルを設置しますから、そこでやってください」

「うう……」

「晚餐は……しょうがないですから義経様達と一緒にでもいいです」

それも本当は駄目だしをするつもりだったのかと知ればがくりと肩を落とす。徹底的に寝かしつける気満々ではないか。これでは本当に病人のようだ。

千草が部屋に入ってくるなりそんな二人を見つけると、まだ雫は寝るのかと尋ねてきた。

体調が戻ったから学園にまた通えるわけではないのかと少々疑問に感じているらしい。

雫としても大いに不満が残る為、何とも言えない。

「寝たいわけではないのですが……済みません。ベッドをまた使わせて貰っています」

「いや、元からそれ、お前のだろうが」

千草は呆れたように言うものの、雫の中ではとっくの昔にこれは千草のものなのだ。だからそう言われてもはいそうですかとは雫は言えない。

何と返したのかと考えていると奏がすつくと立ち上がり飲み水と体温計を持ってきますと言って席を外してしまった。今度は先ほどと違って空気を読みすぎだ。タイミングやら空気の読み方やらが奏の場合、毎回毎回ずれ過ぎているように感じるのは、雫の気のせいではあるまい。

二人きりになってしまつと更に落ち着かない。

雫は寝台の上でとりあえず千草に深々と頭を下げた。

「今日も、ええと、宜しくお願いします」

「……ばーか」

夜も使わせて貰うであろうと思ひ頭を下げたのだが、千草は気に入らない様子だ。困つたと雫がしゅんと頂垂れると、千草は無言で雫の傍に腰を下ろすと寝台へと片手をついて顎をしゃくるようになってきた。

「は、はい？」

わけも分からず尋ねてみれば千草は足を出せと告げる。良く分からないが足を出せばいいのかと雫は寝台の上に正座をしていた足をそのままよいしょと並べて前に出してみた。前屈の姿勢かと思つたが、別に千草は前屈をさせたいわけではない。

雫はここ数日で随分と慣れたほうだが、未だに千草の発する言葉には一々びくついてしまつていた。それでもこの言葉には害はないと取つたのか、実に従順な態度だった。

前に伸ばされたほっそりとした肉付きの薄い足を覆うのは、薄手

のハイソックスである。

千草はその細すぎる足首をそつと掴み上げると、雫は何をされるのかと一瞬身構えた。けれどそれはいくら身構えていても何も出来なかった。

何を思っただのか、千草は雫の靴下を丁寧に脱がし始めたのだ。

「なっ、ち、千草っ！何を！」

「何って……脱がしてる」

「いや、そう、そうだけど、何だか違います！ち、ちぐさっ！」

ただ靴下を脱がされているだけだと言うのに、何故だか恥ずかしくて恥ずかしくて堪らなかった。

頬を真っ赤に染め上げると眦に涙さえ滲ませて雫は懇願する。

「自分で脱ぎますからっ！だから、お願いですっ！千草！」

真っ赤な頬に涙さえ浮かべる雫の顔を見て、何か満足したのだから。千草は笑みを浮かべてどこか楽しそうな声を上げるのだ。

「靴下だけだ。別に何もいやしない」

「で、でもっ！やっ！やだっ！」

結局千草が雫を解放したのは、雫の靴下を両足ともに取り払った後のことだった。

そこで千草は泣き濡れた瞳で見上げてくる雫を見て、思わずはっとした。

俺は、一体何を……？

脱がせている間に散々慌てふためいていた雫は、今も落ち着かない様子でいるようだ。そして何故こんなことをするのかと、千草に非難めいた目を向けてくる。

だがしかし、千草にも分からなかった。何故自分がこんなことをしでかしたのが全く説明がつかないのだ。

「ち、千草……もう、嫌です。靴下はこれからはちゃんと脱ぎますから……」

混乱しすぎた雫の頭は妙な答えを弾きだしたようである。千草が靴下を脱がずに寝台に上がったことが拙いと訴えていると感じ取ったようで、意地悪をされたと取ったらしい。ある意味自分自身でもどうとらえていいのかも分からない行動であったため、それはそれでまあいいのだが、けれど何だか気に食わなかった。

よりにもよって意地悪と取られたことが、気に食わなかったのだが、千草はそんなことには気づかない。

「馬鹿じゃないのか！」

そう言うなり千草は雫の足首を掴んで雫をひっくり返すとそのまま自室へと引っ込んだ。

「ば、ばかっ……」

雫は千草の不興を買ったらしいとは気づきはしたが、それでも追いかけることはしなかった。天井を見上げて言われた言葉を反芻するようにしてみても、何故怒っているのが全く、分からなかったかったからだ。

「何が、いけなかったんでしょうか……」

靴下をどうすればお気に召したのだろうか、雫はその日の晩餐の時刻まで、それだけをずっと考え続けていた。

健は己のした発言を後悔していた。

「どうして、何も考え無かったんだ」

千草から聞いた言葉を健は疑うこともあまりせずにそのまま何故か鵜呑みした。それもそうなんじゃないか？という、どこまでも曖昧なものだったにも関わらずにである。

更に悔やむことがあるとすれば、周囲が言っている言葉を何も考えずに鵜呑みにしたことだろうか。悔やんでも悔やみきれない。

「何で俺は自分で何も考えなかった」

生徒会室の前で栗本人とやり合ったのはつい先ほど。そう、数時間前のことだ。そこまで時間が経っていないからか、未だに生々しくあのやり取りが思い出せた。

自分の胸辺りまでしかない背丈で胸を張って堂々と彼女は言い放つ。

「生徒会の仕事を何故半分にしたのか、きちんと自分達で考えなさい。そこには前期の生徒会の仕事も全て記載された資料があるので。すから。調べられないはずがないでしょう？」

そのように言われてしまえばぐうの音も出なかった。何とも自分達にとって苦い言葉だったからである。

確かに千草も健も、生徒会に入ってから仕事に追われて毎日が一杯である。授業の合間にすら仕事をしなければ追いつかないレベルなのだ。どうにもこうにも尋常な量ではない仕事量である。

お陰で書記や会計の面々も毎日のように駆けずり回る日々を送っ

ており、生徒会室に先日籍を置いたばかりだというのに、大人しくその場所にいられる日がないのだ。

そんな忙しい日々を送っているからか、とうとうと言うか矢張りと言うか、先日出てしまったのだ。脱落者が。

六花学園は部活は全員強制加入ではない。理由は簡単である。雫や健のように、どこか組織に加入することを禁じられている人間もいるためであった。中々難しい家柄の人間が揃っているため強制加入はさせられないのが現状なのだ。そのため、全員がどこかの部に所属していることはないのだが、余程の事情でもない限り、大抵の生徒が部活動に精を出している。加入している生徒は大体が往々にして習い事とはまた違った形で出来るものとして入部している。要は好きで自分で選ぶことの出来るものが彼らにとっては部活動なのである。(とはいっても全員が全員、それに倣っているわけではないただろうが、多くはそうであるという程度である) そんな好きで入っている部活を辞めなくてはならない程の事態にまで発展してしまっただ。

疲労困憊といった様子の会計として入った女子生徒はげっそりと頬をこけさせて言うのだ。

「私、部活はもう、止めようかと思えます」

去年も会計をこの女子生徒は担当していたようだが、それでも今年には新規メンバーが多く、サポートが望めないため無理と断念したようだった。

それを聞いても生徒会長である千草も、副会長である健も、そんな駄目だ、部活を止めるなんて とは言えなかった。それを止めるのであればその分、彼女が部活で抜けてしまうその穴を自分達が引き受けなくてはならないからだ。そしてサポートも確実に行わなくてはいけないが、それは矢張り無理だった。ルーキーにそのままを求められても困るのだ。

サポートに負担を増やすことにと、とてもではないがそんなことが出来るような余裕が他の誰にもあるようには思えなかった。それほどまでに生徒会の仕事は彼らには、怒涛の如く襲いかかってきていたのだ。

健は自室のソファに手足を伸ばしきって悔しげにつぶやく。

「だって、誰がそんなんで結びつくよ。そんでもって何で降矢さんも少しでいいから誰かにでもいわねーのよ」

言ってくればと考えた所で健ははつとする。

あれだけの生徒数が敵　としか今は言いようがないだろう　なっている状態で、こういう理由だときちんと説明したとして、誰が分かってくれる？

大体生徒会の内部事情なんて誰に言える。言えるわけがない。

生徒会の人間と、それこそ毎年の行事や生徒会を面倒見ている教授連、そして理事会くらいだろう。そんなことがきちんと把握できていたのは。だからこそ教授連も理事会も、生徒達へとは多くを告げず様子を見ていたのかもしれないが、それでも何かやりようがあったのではと考えると健は悔しかった。

何も知らされないと言うことは、何故こうまで無力感で健を一杯にさせるのだろうか。悔しくて苦しくて、堪らなかった。

ぼんやりと天井を見つめてその真っ白な天井に清らかな白を連想させる雫を連想して、健は胸がずきりと痛む。

確かに仕事に追われていた。千草も健も忙しかった。それは他の生徒会メンバーも同様である。けれど忙しかったからとは言えこのようなことは許されてはならないことだ。

しかもその生徒会が忙しいということ、それと執行部が設立された理由が　それがよもや結びつくとな誰が考えられるのか。

「ああもうっ！！っざけんなよ！」

だんつと大きな音をさせてソファの背を思い切り腕を叩きつける
と、そのままその場で背を丸めて健は小さくなった。

あの女子生徒二人をあの後、教授棟に連れていった後で聞かされ
た事実。それを知れば衝撃を覚えた。

だが、それと同時に教授に恨みの念を抱いたのも事実だった。

13 (事の真相) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

13 (事の真相)

「大石教授、あの……降矢さん達のことですが……」

女子生徒二人がぐずぐすと鼻を鳴らしながら泣きじゃくるのをあえて無視をすると、目の前の高等科二年の学年主任の大石に健はちよどいいからと尋ねてみた。今回の傷害未遂事件と執行部の件は、少なからずではなく完全にかかわりがある話と言える。だからこそ何も教えてくれない教授連の一人であろうとも、いい加減に話してくれるのではと思ったのだ。

大石は健の言葉にピンと来るものがあつたらしく、苦笑気味に口を開く。ただ、その瞳はどこか険があるように見えるのは何故なのか。

「降矢？ああ、もしかして執行部のこと、お前達も目の敵にしてるのか？」

なるほど、大石にとってみれば雫の敵かとそういう疑いがあるからこそそのその眼差しなのかと納得するがこれには何も返せない。

敵でも味方でも無いと思っているが、恐らくは敵としか相手は思っていないに違いないのだから。

「も、と言いますと？」

少女達を突き出してから押し黙っていた千草が、どういふことかと訝るような目で尋ねれば、大石は肩を竦めて告げる。

だが大石は少々ひねくれた男だった。そのままを告げるのは面白くないと考えたのだらうか、大石は千草達に思考を促すように言葉

を投げかける。

「楽だろ、少しは」

「楽って、何がですか？」

「だから、仕事。楽じゃないか？」

なんとという衝撃の発言だろう。

楽？何が？まさか生徒会の仕事のことだろうか？

健は大石のあまりにも発言に声を荒げた。

「いやいや！全然ですよ！あれで楽って、大石教授……そんな無茶苦茶な。あの仕事量はなんつか、無謀ですよ！？いつか死人を出すレベルです」

健が力説すれば大石はその豊かな腹を揺する様にして一頻り笑うとそんなわけあるかと言うのだ。

だが、健や千草からしてみれば事実なのだから仕方ない。慣れない仕事のお陰で毎日大変なのだ。

「馬鹿を言うな。仕事を半分に減らしてるのに、何が死ぬレベルだ。大げさすぎる」

「大げさとか……え？」

これで半分に減らした？

大石の発した言葉が何故か妙に引っ掛かるように感じて健は考え込んでしまった。お陰で途中で発しようとした言葉がどこかへといってしまったが、そんな健を見て、大石は嬉しそうだった。いつそ楽しげにさえ見える表情でさあ考えると微笑みを向けてくる。その表情は、どこまでも慈愛に満ちたものだった。

そもそも大石は先ほどなんと言ったかと健が脳みそをフル回転さ

せていると、そんな健をよそに千草が口を開く。

「半分に減らして?……もしや執行部は、そのために作られたということでしょうか?」

千草が大石の言葉から察するに、恐らくは執行部とはそのために作られた機関なのだろうと思われた。生徒会の尋常ではない仕事量を見かねて作られたのだろう。そう考えたのだ。

どうということかと目で問う健にもそう説明してやれば、大石はそうだと首肯してくる。

「生徒会の仕事がここ十年くらいで一気に増えたからな。最初は普通科のみだったが、今は数学科棟にスポーツ科棟もある。今年増えた科もあるからな、去年より余程難しくなってる。で、まあなんだ、その中身も相当大きく枝分かれさせたもんだからな、どうしても仕事の数が増えてしまったわけだ。けれど生徒会の人数は増やすつもりが何故かなかったんだよな。不思議なことに。だからこそ十年近く生徒会が悲鳴を上げ続けてたってわけなんだが……。だからまあ、いい加減に新しい部署を設けるか生徒会をもう少し大きくした組織にするべきかと教授連と理事会の開く総会ではそんなことを考えていたところだった。そこに理事会が先日の降矢の件を持ち出してな」

先日の降矢の件とは、恐らくは理由不明のままに生徒会長職剥奪となった事のことではないかとは思われる。だが、大石にそれを尋ねても確かにそうなのだがと言葉を濁すだけだった。

「あれってそういえば、どういった理由での剥奪なんでしょう?」

「理由が良く分かんなくて降矢さんにも聞いたけど、結局分かんないままだったし……」

「いや……俺も良くは知らんのだ。何らかの理由があつて剥奪には違いないらしいんだがな？結局執行部を作る為だったらしいと言うことで後から説明を受けた」

「え……じゃあ、降矢さんだからこそ、新しい部署も任せられるからとかつて、そんな理由だったってこと？」

だが、にしてもどうにも順序がおかしい気がするが、大石にそれを尋ねたところで答えは出ないだろう。そもそも大石自身が知らないのだから答えられようはずもない。

「……ではないかと、思う。まあ、確かに新しい部署を作ったとしても、その仕事量は今のお前達と変わらない量をこなさねばならんそれを下手をすれば一人でやることも考えられていたそうだからなあ……。新しい部署だけに誰も入部を希望しないことも考えうるしな。だからこそ、降矢以外に居ないと言うことだったようだ。一応はあまりそうとらえるなどは言われているが、お孫さまだからな。降矢理事の。だからこそその抜擢だったんだろうよ」

そこには信頼があつたがゆえなのだろうと告げる、大石の暖かな笑みが広がっていた。

何だかそれを見れば健は今まで一体自分は何を見てきたのかと、自分で自分を殴りたくなつた。

健は何も自分で調べようとはしなかつた。何もだ。人の言葉に踊らされ、友人の言葉を聞いてもそれがただの憶測であつたにも関わらず、健は全てを事実と信じ込んでしまった。いや、信じていなかつたにしても、生徒会の人間がそれを肯定するかのよう以外でこれを言うべきでは無かつただろう。

健は悔しげに呻くと苦しそうに声を絞り出した。

「裏切られたとか、ほんとは、降矢さんの方が言いたかつたらうに

……」

勝手に健は期待をしていた。降矢雫と言う少女に。

けれどその期待を勝手に裏切りやがってと詰り、周囲の人間と一緒にになって、よってたかつて罵倒を浴びせたようなものだ。

なんて酷いやつだろう。

健は自身の発した言葉を思い出しては悔やみ続けた。

「ごめん……」

明日はせめて謝りに行くべきだ、そう思い、健はその日はそのままソファで眠りについたのだった。

+++

その晩のことだ、降矢邸の三階、南の窓を叩く音があった。

コンコン、コンコン。

そこは雫の部屋の南に位置する窓である。

さて寝ようかと寝台に潜り込んでいたところでのこれであったため、少々肝が冷えた。

「なあ、コン……何階だ？」

「さ、三階ですが……」

物理的に窓を叩くことは不可能な位置の窓であることに気づけば千草は顔色が真っ青に変化していた。その唇が小さく何かの形を刻み始める。

お化け 雫にはそう読めた。

コンコン、コンコン。

音を発している主はどうやらご立腹の様子である。音がだんだんと強まってきているようだ。

そして、それを聞けば益々千草は怯えるのだ。

「お化け！つて言うかあれだ、幽霊！」

「千草、大丈夫ですから」

額に冷えびたを貼りつけられた雫が答えるものの、千草は悲鳴を上げる寸前の様子だ。今にも卒倒しそうなほどに顔色が悪い。

まさか苦手なものが幽霊やお化けの類いとは知らなかったと思いつつも、雫は雫であり夜は強くはない。むしろ夜は自分の領域ではないと考えている。大概の人間がこれに当たるとは思うが、実際はどうだろうか。夜が自分の領域と考える人間も最近では多いように思う。それもこれも人類が昼も夜も明かりを手にすることが出来たからである。ため、確かにこれは怖かった。

だがもう直ぐ奏が来るはずである。そうすれば部屋の明かりがつけられるはずだ。

手元にスイッチがないことが悔やまれるがそれを今嘆いても仕方がない。

だからこそ雫は待った、奏が来るのを、ただ待ち続けた。

ごくり、生唾を飲み込む。

薄明かりの中で千草が寝台の端を掴んで窓を食い入る様に見つめて動かない。

長椅子で寝るつもりだったらしく、千草はそこに毛布を持って先ほど横になるうかとしていたところだったはずなのだ。一体いつの間にかこちらへときたのかと雫は首を傾げて考えていれば千草と目があつた。

「……………あ……………い」

「え？」

千草が必死になって口を動かそうとしているのだが、恐怖のあまり唇が固まってしまったのか、中々上手く動かせないようだ。思わず氣遣わしげな表情をしてしまうと、千草が焦れたのか、吠えるように言葉を紡ぎ出した。やってやれないことはないのではないかと言いたいところである。

「窓のところ！か、影が見える！何か……居る……！」
「何か……い、いる？」

鬼気迫る表情で叫ばれてしまうと、今度はその恐怖が雫にまで伝染してしまったのか、先ほどまでは大丈夫だと思えてどっしりと構えていられたのが嘘のように、ただただ恐怖しか感じなくなってしまった。

肩を震わせて泣き笑いのような表情で千草へと尋ねる。

「ま、まま……ま、ま、」
「なんだよ！ママって……！」
「ま、……まだ、いるんですか……！」

それだけを尋ねるために相当な力を要したように思う。そこまで口にしただけでもどっと汗をかいた。口を開いただけで窓の外の何かに、それこそ何ぞされるのではと何故か思えたのだ。ワンピースタイプのガーゼのパジャマの合わせを掻き抱き、雫は震え始める。千草が寝台の端からそんな雫を見て何か感じたのか、にじり寄りてくる。

雫からすればそれは、二方向から迫りくる恐怖そのものである。恐ろしさに逃げようとするものの、直ぐにも寝台の上に広がる枕の山にぶつかってしまった。

「大人しくしてろ」
「……っ」

最早言葉も出なかった。

雫は自分を震えながらも抱きしめてくる千草に必死で身を固くして耐えていた。ただただ怖くて仕方無かったのだ。

けれどそれも布越しに伝わる体温と心音を聞いていれば段々と和らいでくるのを感じた。

そうすると今度は周囲を観察する余裕まで出てくるのが不思議だった。

確かに雫は恐怖の対象として見ている千草に寝台に押し倒される形に抱きすくめられてはいるが、それでもそれは、信じがたいことではあるが雫をどうやら守ろうとしているようなのだ。

有り得ない。

とは思うものの、それでも雫は困惑をしながらも胸に暖かな感情が僅かにだが芽生えたのを感じた。それは本当に僅かに覗かせたに過ぎない芽生えだったかもしれないが、着実にそれは芽吹くことを感じさせる芽だった。

早鐘を打つ心音を聞いていれば雫は次第に落ち着きを取り戻す。

大丈夫、奏はもう直ぐ来るから、そうしたら部屋の明かりがつきますからと告げれば、千草はこくりと頷いた。それ以上する余裕が本当に全く無い様子である。それでも雫を見を呈してまで助けようとしてくれているのはどうしてなのだろう。懸命に努力してくれているのが見てとれて、だから余計に困惑するのだった。

どうして嫌っている私にここまでしてくださるのでしょうか。

降矢の娘だからなのだろうかと当たり前にその思考に辿りつけば心が痛い。雫はその降矢の娘と言う名を捨てても、一時この家を出ようとさえ義経に告げた事もあると言うのに、そんな雫を庇うだなんて そんなことをしなくてもいいのにと、自分にはそのよう

な価値すらないのだと、雫は考えれば考えるほどに胸が痛くなつて
いった。

その時だった。窓から酷く恨めしそうな声が聞こえた。

14 (咄嗟に出た、守ろうとする衝動) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

14 (咄嗟に出た、守ろうとする衝動)

「開けてよお、開けてよおー」

「わあああつ！」

「き、……きやああああー！」

千草が恐怖に負けて抱きこんだ雫をぎゅうぎゅうに力一杯抱きしめると、今度は雫が悲鳴を上げた。慣れたと思ったのはその距離にだったらしい。決して肌までは擦り合わせようとはしなかった千草にぎりぎりのところで何とか保っていた均衡が、ここにきてがらりと崩れてしまった。

雫は喉に張り付くような甲高い声で悲鳴を上げた。

そしてその悲鳴は、今現在、この屋敷全てを聴覚により知覚していた鷺宮の耳に入り、そして階下から階段を上がってきている最中の奏の耳にも入り、更には大魔王の耳にも入った。

義経は自室から飛び出すと廊下を挟んで向かいにある雫の部屋の扉を開け放った。

「雫……！」

ぜえはあと息を切らして追いついた澤田が見たものは、煌々と照らし出された明かりの中、寝台の上で仰向けに転がった千草の上にまたがる義経の姿だった。因みに雫はその脇で義経を懸命に止めようとしているのだが、ある意味これは義経の神経を逆なでしているような気がするが、これに関しては鷺宮と奏が来たのを横目で確認したため置いておくことにする。

ぎりぎりと千草の腕を捻りあげている義経に澤田は尋ねる。

「行き成り飛び出していかれて、驚きました。何事ですか？」

「雫の悲鳴が聞こえまして。ついでにここに飛び込んだら押し倒してた馬鹿がおりまして」

「ほうほう、だから締め上げてると」

「あだだだっ！い、いぎぎぎっ！その関節は、そっちには曲がらな、……いぎやあああ！」

「夜中ですのでもう少しお静かに」

「僕はとつても静かだよ？冷静すぎる程に脳みそは冷え切ってる」

雫は違うと言いたいのだろう、首を必死で振るものの、けれど声が出てこないのか焦れる思いをしているようだ。鷺宮と奏の傍を飛び出すと、義経に縋りついてきた。それを義経は自分に助けを求めているととつたらしく、それと同時に、千草に対してどこまでも怒りを覚えていた。

声が出なくなるほどに追い詰めるとは、と、確実にスクラップにするつもりになっていらいしい義経に、いよいよ拙かろうと周囲が本気になって止め始めた。

ここ数日で千草は周囲の信用をある意味ではいい意味で勝ち取っていた。

つまり、千草は女性にそういつた形ではいまのところだが、興味を抱いていないということだった。

女性不信のきらいがあると見た鷺宮と澤田は確実にあのままでは手など出すまいと考えていたため、義経がどんなに不貞（実際は許嫁で婚約をしているのだからこれには当たらないのかもしれないが）を働いたからと言っていても、そんなまさか、そんなことがあるはずがないのだからと考えていた。だからこそそんな義経の怒りも直ぐに収まると考えていたがそうならなかったから周囲は慌てふためいた。

「ま、待ってって！落ち着け義経！」

「そうですねよ、義経様！きちんと事情をお嬢様にも聞いて」

「煩いよ！大体僕は元から反対だったんだ！こんな……男と同室だなんて！」

そう義経が叫んだときのことだ、もう止めてください！　雫がやっと声を限りに叫べた、と思つた時にそれは起こつた。

「開けてよー」

千草はそれを聞いた瞬間、痛みが吹き飛んだわけでもあるまいに、義経を背から振り落とすと、そのまま悲鳴を上げて雫の元へと転がり落ちてきた。

「え……だ、誰ですか？」

「ゆ、ゆゆ、ゆうれい……！」

千草が雫の華奢な肩をがしりと掴み震えながら叫べば、奏がそんな馬鹿なと告げる。まあ、ありうる反応ではあつた。

雫も千草も青い顔をしていれば、義経が我に返つたようで千草と雫の元へと寝台から飛び降りる様にしてくるなり掴みかか　ろうとしたところで再度あの声が聞こえた。

全員が今度はもしや本当に幽霊？と考えた。

明かりがあるのになぜこんなにも暗く感じるのか分からない。

ごくりと唾を飲み込む音が室内に響いたような気がした。こんなにも広い室内だと言うのに、夜は音がよく聞こえるなんて反則だろう。

沈黙に耐えかねたのか、鷺宮が口を開く。

「お……おい、まさかあれか？あれの所為でお前ら抱き合つてたとかか？」

千草は鷺宮の言葉に震えながら頷いて見せた。相変わらずその顔色はとても悪い。

「だってよ、義経。許してやれや」

「そつ……許す許さないとか……そういう問題じゃ……」

兎に角抱き合っていた、そしてそのことで雫が悲鳴をあげていた。これが義経の中では重要なことだった。だからこそ、どんな理由であれ恐怖に引き攀れた悲鳴を発する雫の姿に、義経は怒りをぶつけたのだ。それをもたらす千草が許せずに。

お前はどちらの味方なんだと言葉を発しようとした時、また声は告げる。

「居るんでしょ？ねえ、開けてよおー」

完全に全員が固まると言葉どころか何もかもが出てこなかった。それは涙すらだ。恐怖を覚えているのに涙すら出ないなんておかしいと雫は思ったが、実際に最大級の恐怖を味わったことのある人間なんてものはそんなものである。涙を人は忘れるほどの恐怖と言うものがあるのだ。

ふつと意識が遠のきかけた時、雫は名を呼ばれて意識が戻ってこれた。

「雫ちゃん、雫ちゃんったら。居るんでしょ？開けてよー」

まさか、と思った。

雫は恐る恐る窓辺へと近づくと、その際千草は半ば意識が無かったようにも見えた。窓の傍にしゃがみこんでいる女性を見つけた。

「よつす。久しぶりい」

「な……何をしてらっしゃるんですか、塩見さん」

「んと……全速力で帰ってきたんだけど……もう戸締りしちゃうてるみたいでどこも開いてないんだ。開けてくれない？」

可愛らしく首を傾げながら言われれば脱力した。

「千草、千草」

「……っは！幽霊はどこだ？！」

「幽霊ではありませんでした」

「あれ？なんか新顔がいる？私塩見麗って言うの、君は新しい使用人か何かか？」

「……は、はいい？」

意識が復活して早々、千草の目の前で声を発するのは明るく笑みを浮かべる猫のような女性だった。

そして、その声は先ほどの開けて開けてお化けの声で　千草は意識がまた遠のくのを感じた。

ばたり　目の前で仰向けで倒れた千草を見て塩見が一言。

「根性ないなあ」

「お前、分かってて遊ぶなよ」

「だって、お化けに間違われるなんてあんま無いし。でもねえ、まさか声だけで倒れるとは誰も思わないでしょ」

確かにと、それを言われれば誰も何も言いようが無かった。

起きて早々に千草は何故昨夜はあのようなことをしたのかと自分で自分が分からなくなっていた。

確かに夕方、二人で過ごした時間に何故か過去の自分達を思い出して、どこか気安さを取り戻していたとは言え、おかしいだろう。

「何で、抱きしめた」

有り得ない、有り得ないだろ。

しかもどう考えても庇う形で身体が動いていたことが信じられずに寝台の上で呻いていれば、今度こそ千草は固まった。

寝がえりを打てばそこには、あどけないまでの寝顔を晒す雫の姿があつたからだ。

「なん、なっ、……な、なな、何で隣に寝てるんだよお前!!」

「はひいっ!?!」

雫の目覚めは千草の悲鳴にも似た大喝によつてもたらされたのだ。
つた。

15 (取り立てに必要なのは平手) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

15 (取り立てに必要なのは平手)

四人は早朝より行われている運動部を横目に執行部、部室へと集まった。

一応は文化部であるにも関わらずにこのような朝から集まる理由はただ一つである。

「六花祭まで時間がありません」

そう、六花学園中等科及び高等科による合同行事、六花祭が行われる日付までがそう時間がないのだ。

六花祭開催までに執行部が行わなければならない仕事は山積みだった。

先ずは生徒会に一旦分配されている行事関連に使用される予定の資金を執行部へと回して貰うことが必要である。一応は理事会には話を通してあるが生徒会にもそういう形で移動する旨をしたためた書面が必要であろう。後々面倒にならないためにもこういったものはどうしても必要なのだ。

そしてその資金を元に今度は中等科、高等科より回ってきている資料を元に、今度はクラスごと委員会ごと、部活ごとに、これを決められた金額に分けて渡さねばならないのだ。

「去年まではどれくらい渡していたのかしら？」

「去年ですか？去年は……」

ぱらりと去年の予算目録から見積もりを出されたものを見て、そこからどれだけ出していたのかを見ると雫は驚愕を顔に浮かべる。

「何ですか、これは」

「ええ？何何？」

ずいと須賀が零の手元の書類を覗き込むところも開いた口がふさがらないといった顔つきである。

そこには、白地に黒のインクで書き連ねられた字が浮かんでいるのだが、表の中に書かれているゼロの数字が一つ二つおかしいように見えたのだ。

「道理で……」

それ以上は誰も声が出てこなかった。

ゼロが多すぎるのだ。それも、全てではないにせよ、大体のクラスに部活に委員会にと、分配される金額の桁がおかしすぎるのである。

これでは理事会も教授連もお怒りなわけだと全員が納得するともに、何とも苦いものを噛みしめたような顔になってしまった。

案外この問題、根が深いようである。

ここまで深刻な問題であるとは いや、分かってはいたのだが 思ってもみなかったため、ダメージがでかかった。

「ああ、そういうえば去年は生徒会の行事、僕も何度か手伝ったことあったけど、上限のみ決められてるみたいなのは言われたけど、そこまできかなければ自由に値段設定してよしって言われてたみたいだよ？だからじゃない？」

といつても生徒会がそれを告げただけであり、実際には理事会も教授連もそんなことは納得していないどころか、指示した覚えも無かっただろう。でなければこんなことを零達に押し付けてくるはずがないのだから。

奏が書類を見てそういうことではないかと告げれば、櫻子は何だ

それはと机を叩きつけて怒鳴りつけた。淑女にあるまじき　どこ
るか、いつもの櫻子にはあるまじき　その姿に、三人は驚いて声
も無い様子だ。

「そんなやり方は違うでしょう?!　そもそもこの六花祭はチャリテ
ィーになります。福祉ですよ?　だと言うのにそのような値段設定も
曖昧で……今までのようにやってきたというのですか!」

こう言われても何とも答えようが無かった。

雫は中等科まではクラスの仕事を率先して手伝っていたが資金繰
りについては手出しをせずつきたため、全くそんなことは感知して
おらず、知らない。

そして奏に至ると去年まではほぼ毎年のようにだが、こういった
行事は片っぱしから全て参加を拒否し続けてきたのだ。それにより
そのようなことは話半分で聞いていた程度である。だから知らなく
とも無理は無かった。そして他人事のように話すのは、確かにそれ
を他人からただの茶飲み話程度として聞いていたからその延長で話
しているにすぎないのだろう。

須賀はと言えば部活とクラスでの仕事の割りふりで参加はするも
の、資金繰り等に携われるほどに中心で活動はしておらず、と言
ったところである。

かく言う櫻子も参加はすれど、それでも中心になることはせず
すんだため知らなかったのだ。

よって、ここに居る四人ともが今まさに、真実を知ったとい
うこと。

櫻子の怒りはもつともであるが、どうにも怒りをどこにぶつけて
もいいのやらなのだ。

雫は嘆息を零すと櫻子をまあまあと落ちつけて席につかせる。そ
して全員に昨日作ったプリントを配った。

「そのプリントを見ていただきたいのですが……それは全て頭の中に入れてしまってください。これからは恐らく、そんなものを読んでいる時間さえないはずですから」

三人は言われた言葉を理解すると同時に、出されたものに視線を落として一字ずつ頭の中に叩きこんでいった。

確かに執行部にはもう時間が無いのだ。だからこそ言われた言葉を理解すれば、自ずと身体が動いたのだろう。

雫が提出したプリントを説明し始める。

「まず、我々の今後の予定ですが 生徒会より資金調達と言うことですが、こちらは実際に生徒会室に金庫があるわけでは御座いません。生徒会室にあるのは理事会より毎年一定額が振り込まれるマネーカードがあるらしく、行事関連のみに使用されているカードもあるそうです」

「と、なりますと、そちらのカードを受け取ってくることからスタートせねばならないのね」

「そうなるのですが 申し訳ありませんが、これは櫻子がいつてくれますか？」

生徒会室に自らが出向ければ話は簡単なのだろうが、けれど先日のこともあるため、生徒会室に雫が出向くのはあまり得策とは言い難い。姿を見せるだけでも雫の場合は相手を刺激してしまう。であれば、ここは一番目立たない櫻子が行くのが得策というものだった。雫が告げれば櫻子は微笑して告げる。

「そうくると思った。いいわ、いつてあげる。ついでに何か生徒会から他にも譲り受けるものはあるかしら？」

「あ、はいはい。出来れば成瀬先輩に拳、一発」

「それってあげてくるもんじゃないの？貰うんじゃないかって」

「んじゃ、プレゼントしてきてください。拳一発。別に蹴りでもいいですけど」

須賀は先日の健の言い分が大変気に食わなかったらしく、笑顔で拳を握りしめて言うのだ。余分に数発足していただいても大いに結構、だそうである。何とも血の気が多い少女である。

それを受けてこちらは至極真面目に言い放つ。

「分かった。ヒールははいてないから、踏みつけはしなくてもいいわよね？」

「のりのりなのか……と言つよりもヒールって……」

完全にSMのりである櫻子に、奏は少々引きつった顔をしている。

「ついでだから高遠君にもビンタを一発二発くれてくることにしますか」

にこにここと笑って言われれば何故そうなるのかと思つたが、雫はあえて何も言わなかった。雫が尋ねたところで恐らくはだが、この三人は何も答えてはくれまいと思つたのだ。

それよりも今は時間が惜しかったためこのまま続けさせてもらうことにしよう。そちらの方が先決だ。

「そしてその調達してきた資金を今度は現金化してクラス及び委員会、部活等に集配します。ですが今回からはこちらは変えることにいたしましょう」

「って……さっきの、言われるままに全額だすつてのを？」

「ええ、変えましょう。言われるままに全額を出しているのはどこがおかしいと思うのです。一番いいのはきちんとそのクラスでした

らクラスで、それを正しく使えているのが証明されていないため、それをどのようにに何に使用するのかを明確化していただき、その後で、ではこれだけ出しましよう、とするのがベストだと思います」

と言うよりも、それがどこの学校でも当たり前ではあるだろうが、それがこの六花祭にいたっては成されていなかったのだ。そもそもそれが間違いなものだから正すべきであろう。そういう考え方だった。それもこれも、学園の規模が大きく膨れ上がるだけ膨れ上がったのをそのままにしておいた結果であろうとは思いますが、それにしても酷過ぎる。

「お粗末すぎるわよね」

「ええ。恐らくこれはクラス数が一気に増えてしまったため、生徒達への個別の対応が追いつかないのをいいことに、生徒会への要望をどんどんと生徒達が出したのでしょう。そして金額も好きだけ申請してそれが余ったらまあいいか。そんな程度の使い方です申請する方はやっていったような気がします」

今までの資金運営についてざっと二十年ほどを遡ってみたのだが、生徒数が一気に増えたあたりからどこかおかしくなっていたのだ。

「確かにそんな感じですね。だって半端なお金ないもんねえ」

「だね。費用もこう言ったら何だけど、可也どんぶり勘定でやってる感じがする」

何十万と言う金額を請求されて、それをそのまま払ってやる生徒会もなんだかなあとは思ふものの、請求する側も側である。少しは余所のことも考えれば良かったのに、この学園には金があるだろうから大丈夫だろうという、勝手な考えで動いていたのではないかと邪推してしまう。けれど二十年分を遡って思うのは、矢張りそれは

邪推では無く真実ではないのかとさえ思えるのだ。
何とも頭が痛い事実であった。

「まあ一応さ、チャリティーできちんと請求してきた金額以上は成果を出して返してきてるけどねえ？」

「それでもこれは無いでしょう」

雫は須賀の言葉にきっぱりと言い放つと、今度から使用用途を明確にして請求をすることと銘打つことを決めた。

「確かに我々は学生です。ですがこれは授業の一環でもあるのです。ですからこのようなやり方はいけません。きちんとした道に正すべきだと思われまます」

「異議なしだわ。それは生徒会の方に行くときに伝えてくる」

「……なんで？」

今の話でどこがどう生徒会が絡んでくるのかが分からずに須賀が尋ねれば、馬鹿な子だとの目を櫻子が向けてきた。

「使えるものは親でも使うのよ？折角働いてくれそうな人間がいるんだから、ちょっとくらい役に立つてもらってもばちは当たらないでしょう？」

「ああなるほどねー。許嫁君が惚れた弱みってことか。だって、須賀さん」

「文法が滅茶苦茶ですが、何となくは分かった。とりあえず、色仕掛け頑張つてよ、綾小路さん。高遠会長に一般生徒に向けて言ってもらつつもりなんでしょ？」

「そういうこと。こういう場合教授連や理事会よりの言葉より、余程生徒会長様の声の方がスムーズに聞いてもらえると思うから。まあ……あまり気が進まないけど、大丈夫。安心なさいな。高遠君は

ドのつくMだから、ビンタの一発でもかませば言っことを聞いてくれるはずだから」

手首のスナップを利かせて笑顔で言う櫻子の姿に、周囲の面々は凍りついた。

あの貴公子然とした、生徒会長が？嘘だろう？そんな声が聞こえてきそうな表情を一樣に貼り付けている様は、見ている側は滑稽で面白いものなのだなと感じた。櫻子は思わず小さくふきだすと、知らなかった？と至って気軽に尋ねて見せた。

これまた巨大な爆弾であることは間違いないだろう。

それを聞いた三人はまた目玉が落ちそうな程に驚きに目を見張ったものだ。

「……そ、そうなの？」

「そうなのよ。あいつ、ド変態だから」

「そ、うなんだ……」

「へー、知らなかった。今度殴ってみようかな。食事残した時とかこう……ぐーのほぅがいいのか？」

パーだと手痛めそうだからグーだよな？と奏は拳をつくる。

「さあ？とりあえず今のところは言葉攻めかしら」

「言葉」

「せめ……」

「あら、難しい？」

「いや、あまり……と言うよりも未知の世界過ぎて、戸惑ってる感じかな」

須賀はぼそぼそと囁きと言えるほどの声で零すように告げれば聞かれてしまったらしく櫻子に笑われてしまった。

「そ、そんなにおかしい？」
「だって……そんなに難しいことじゃないわよ？」

須賀が戸惑っている理由を知らながらも別のことを答えれば益々須賀は困り果ててしまう。

「いや、私には凄く……難しいと思う」

「じゃあ今度叩いてみなさい。私が許すから」

「僕もそれ参加してもいい？」

「どうぞどうぞ。案外男の子でも喜ぶんじゃないかしら。ド変態だから」

「そっか。じゃあがんばろっと」

真剣な様子の奏を見れば、須賀は開き直ったらしい。得たりとばかりに頷いて言った。

「じゃあ私も頑張ってみる」

「よし、三人で頑張りましょう！」

「そうしよう！」

会議が終わる頃には、何故か趣旨が変わってしまい、最終的には生徒会長をぶんなくろうつツアーに変わっていた。

因みにそんな三人の横で雫は何をしていたかと言えば、真剣に悩んでいた。

もしかして、昨日の靴下の件はあの後で千草を蹴っ飛ばさなければならぬところを雫が何も出来なかったから不興を買ったのだから、と考えていたのだが、暴力をふるうのはどうにも気が乗らな

かったため、雫は矢張り自分には無理だとがくりと肩を落として深くため息を吐き出した。

「私は、駄目駄目です……」

別に干草に何をどうしてもらいたいとは言わないが、それでも不興を買って怒鳴り散らされるよりはまだある程度円満にイケたほうがいいには決まっている。けれどその円満の秘訣である暴力が自分にはふるうことが出来ないのだ。

「はあ……」

どうすれば殴れるのか、蹴れるのか、雫は小さな紅葉のような手のひらを見つめて嘆くのだった。

15 (取り立てに必要なのは平手) (後書き)

改稿作業してたらお腹が減ってきました。

もう少しで分岐地点まで行けそう。頑張ろう。

にしてもお腹減った。

16 (目覚めちゃったっぽい人) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

16 (目覚めちゃったっぽい人)

千草の元にやってきた健は、困惑していた。

「俺、あの、どうしよう。降矢は俺達の邪魔しようとしてんのかと思ってたんだ」

昨日の大石の話を受けて、一晩考え明かしたと告げる健の表情は芳しくない。

くまが目の下にくっきりと現れてしまっている程にその顔色は最悪だった。

そんな表情にそして発言を受けても、千草は別段驚きはしなかった。確かに千草もどうすべきかと悩んだからだ。

だが、どう考えてみたとしても上手い方法が無いのだ。大体いじめは止めましようと言ってどうにかなるものではないだろう。

「確かに執行部の件は皆話を聞けば理由が理由だけに分かってはくれるとは思う」

だが、その事実があったからとて事実を無理に押し付けて納得しろと言ったところで無理だろう。今は皆、感情が先に立ってしまったているのだ。だから恐らく、それを告げたところで今度は「そういう話があったのに何故説明もせずに無理に動き始めたのだ！実はそれも嘘なんじゃないのか！」となるのは目に見えていた。

そう千草が告げれば健は何でだよと千草にかみついてくる。

「いや、一部そうだった発言が出てしまえば恐らくは全員、また話を聞かなくなる。そうしたら元通り、イジメもおさまる機会を失う

ただだぞ」

「そんな、そんなん……ねえだろ」

やりきれない思いだ。

確かに自分がそうだっただけに何も言い返せないのだ。

人は直ぐに感情に飲み込まれる。そして人の声に飲まれ自己と言
うものを無くしてしまうのだ。

それがどんなにかいけないことだと分かっているも誰もが止める
ことが出来ないできたことで、まだまだ幼い未熟な魂の集まるこの
学び舎で、強くあれと言ったところで誰がそうあれるだろうか。恐
らくは無理だろう。

「なんか、むかつくな……」

何も出来ない己に、だ。

健は唇を血が滲むほどに噛みしめれば絞る様に声を出す。

「俺達そんな信用ねえのかな」

「さあな。あいつにもそれなりの覚悟があつてやつてることだろう
からな。だとしたら、信用とかじゃないのかもしれないぞ」

「何だよ、それ」

「だから　いつか形に出来たら、話そうとか……そういうことな
のかもしれないだろうってことだ」

千草が何気なく放った言葉が健の胸を悪戯に抉った。

どうしてこいつは雫の全てを知ったように言えるのだろうか。

散々健が悩み苦しんだことに、千草はぼんと答えを出してきたこ
とに、どうしてか胸の中にちりちりと焼けつくような焦げた匂いが
漂い始めた気がした。

別に雫は健の何かではない。ただの憧れの対象でしかないはずだ

った。

けれど千草は雫の何かを知っている様子で話すのだ。これが気に食わないのだ。

何でなんだろ。

「ほら、早く仕事しろよ」

「……」

「おい？」

「何でも無い」

それはまだ、ただの小さな熾き火に過ぎなかった。

けれど、それはやがて大きな火に燃え上がるかもしれない、成長する可能性を秘めたものだった。

扉を叩く音が聞こえて入室許可を出すとそこに現れたのは執行部の面々だった。

「櫻子さん。どうしたんですか？何か用事でも？」

自分に用があったならば嬉しいのですがそれはないのでしようねと告げると櫻子はにっこりと笑顔でつかつかと千草の方へと歩いてくる。その姿はどこまでも優雅だ。

その後が続いてきた二人の姿があった。須賀と奏のようである。何やら緊張している面持ちである。

そんな二人の様子を見て、千草と健は何かあったのだろうかと思っ

った。櫻子が笑顔を浮かべているのは常としても 元より様々な表彰を受けるような彼女であるから、笑顔も自然と身についているのは何ら不思議ではないし、それは周知の事実である。更にはそうした

人の前で表彰をされるようになる度胸もつくわけである。だから一人だけ泰然としていたとしてもおかしいところは全くないのだ。後の二人が緊張しすぎているのである。これでは何だと訝しく考えても仕方がないだろう。

「マナーカードをいただきたいのだけれど」

「マナーカード？……ああ、行事関連のものですね。了解しました。手配しましょう。経理の者がかけてしまっているため、今直ぐに用意することがかなわないのですが、後になってしまっても宜しいでしょうか？」

「困るわ。だって時間が惜しいもの。ねえ、早くしてくれないかしら？こちら時間も押しているのよ」

下品にならない程度にしなを作って櫻子が言えば、千草は狼狽した様子で慌てて告げる。

「い、いえ、あのですね。私も勝手にそ……そういったものは持ち出す事は出来ないんですよ。ですから……」

「生徒会長でしょうか？高遠君。それくらいやってくださらないと……ね？」

「いや……あの」

「いいだるもう。千草、俺が伊織には連絡しとくからさ、さっさと出してやれよ」

助け舟が思わぬところからきたお陰で櫻子は誘惑を続けなくてよくなったと嬉々として健へと礼を述べた。不本意極まりなかったため、早々に切り上げられて良かったと思っただのだ。

引きつけた上に更には嬉々として誘惑をしているように見えた奏と須賀からしてみれば、千草が可哀想なことにこれ以上ならなくて済んでよかった、といったところだが、櫻子に聞いたところ、後で

こんな風に真面目な顔をして告げられたのだ。

「しなとか作りたくて作ってるわけじゃない。楽しんでないわよ。失礼ね」

失礼なのはこっちだが、それは言わぬが花である。

櫻子は楚々とした仕草で髪をついと耳にかける。先ほどの艶めいた声音やらしなが嘘のようだと奏がぼつりと呟いたが、須賀はある意味悪夢だと思った。これでは女は怖いと言われてしまうのも分かると言っているものである。

「助かります、成瀬先輩」

「健でいいよ」

「じゃあ健先輩」

健はいつもの明るい向日葵のような笑顔が、幾分しおれたような風情ではあったが、それでも少年らしい快活さが見え隠れする笑みで櫻子に笑いかけると、未だ夢さめやらぬといった様子の千草へと向き直る。

「千草？」

「あ……ああ、か、カードだな。分かった」

そんな、先ほどの櫻子にからめとられてしまった純情な少年を見て、須賀は嘆くように言った。

「男の人って、可哀想だね」

「そうだねー」

それを受けても奏は、どこまでも他人事のように言ったものだった。

た。

カードを受け取ると、櫻子は極上の微笑みを浮かべて千草と健へと礼を告げた。

「有難う」

「いや、降矢さんにも宜しく」

「ええ、伝えておくわ」

「……じゃ、じゃあ、ね。櫻子さん」

「ええ、それじゃ」

言うなり櫻子の手首が唸る。

ぱんと乾いた音が室内に響いたと思えば、千草が頬を押さえて何が起こったか分からないという顔をしていた。いや、実際何が起こったのか分かってないのだろう。実際全てを見ていたはずなのに、それでも健でさえ何が起こったのか分からなかったのだからそれは仕方ないと言えよう。

あまりの出来ごとに呆然としている健の方にもつかつかと寄っていくと櫻子はこちらにも手加減なしの平手をくれてやる。

「なっ、なな、何すんだよ！！痛てーだろっ！」

頬を押さえてぎゃんぎゃん吠える様に言えば、櫻子は腕を組んでにこりと笑ってこっ言った。

「粟に今度何かしたら、それくらいじゃ済まさないから」

これには何も言い返せずに健は声を失い黙り込んでしまった。確かに殴られても仕方ないことをしたと本人も自覚していたからだ。

けれど、健は甘いと言わざるを得なかった。

これで済むはずがなかったのだ。

「失礼」

しなつた腕が鞭のように健の腹に吸い込まれていくと、重い音がドスンと響く。

「ほぐっ！！」

部活で鍛えた腕にものを言わせる形となつた須賀の一発と、

「ついでに僕も。えい」

軽く言う割には重い張り手がきつい奏の一発が加わつた。

「いったあああつ！！」

普段筆以外持たない癖に、先日ここぞとばかりに力を発揮してくれた細い手は、こちらも綺麗にしまつて健の顔色の悪い頬に落された。

まさに鞭で打たれたような音が響いたが、ついで訪れた痛みに健の絶叫が響き渡つたお陰でその鞭のような音は瞬く間に消え去つた。計三発もの攻撃を食らつてしまえば健は生理的な涙が滲んできた。けれど何をされても文句を言えるはずもなく、ただ黙つて三人が帰るのを見ていることしかできなかった。

三人が消え去つた後、ふつと笑つて千草が口を開く。

「……こついうのも、悪くないな」

「いやお前ちよつと寝とけよ」

とりあえず殴られたお陰で螺子がどこかへと飛んだのだろうと解
釈したが、それでもこれはうざすぎた。

もう一度寝かしつけるべく殴るべきか否か、健は大いに悩むとこ
ろであった。

17 (ネクストターゲットは彼の愛し子) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

17 (ネクストターゲットは彼の愛し子)

ところで前置いて尋ねられたのは呼び戻された理由だった。

「凄く急でびつくりしたんだから。向こうで新しい仕事を頼めるかって言われたところだったからほんっと……ね、うん。結局なんで呼び出したの？」

「何でって言われても、何？塩見さんは僕に会いたくなかった？」「茶化さない！」

「僕は会いたかったよ？この間なんてどうして塩見さんがいてくれないんだってほんとと思った。凄く寂しかったんだからね」「からかってばかりだな……」

楽しげに笑うように言われて頬を染めてそっぽを向くと相変わらず可愛いねとからかうように言われてしまう。

からかわれているのは承知のだが、どうにも塩見にはこうした彼の方がなれなくて駄目だった。だから仕方なしにつっけんどんに返す。

「いい加減に教えなさい。結局何があったの？」

「何があったかと聞かれると困るんだけどねえ……助けて欲しかったから、じゃいけない？」

実に意味信なことである。

いけない？と可愛く首を傾げられても困る。

ずいと塩見は義経の机に乗り出すようにして囁くように尋ねた。

「六花神に何か動きでもあったのか？蒼緋とか」

未だに学生時代の言葉が口をついてでるのは塩見の悪い癖のようなものだった。男勝りな口がぼろりと時たま出てしまう。今この場にいるのは身内のような人間しかいないため、別段かまいはしないけれど、それでもたまに咎めるような目を向けてしまう。

「ああ、違うんだ。六花神関係ではあるけどね、それとは全然別物」

そう言われて塩見は肩を竦めて詰まらないとでもいいたげな眼を向けてきた。

それを見て蒼緋でなくて悪かったねと義経は笑う。というよりも、むしろ蒼緋でなければ嫌だったのかと言いたかった。

「蒼緋関係が良かったんだ？」

「別にそういうわけじゃないけど、でも六花神関係でも何か、ちょっといつもと違う用向きっぽいし？それなのに蒼緋じゃないならつまらないのかなあって思ったんだ」

肩を落としてまで残念がる塩見に義経は苦笑した。

「がっかりさせちゃって悪かったね」

「ほんと、がっかりだ」

ぶつと頬を膨らませて子供のようにつくられて見せる塩見に鷺宮が笑った。

そして付け足すように告げたのだった。

「まあ何だ、そうでもねえと思うぞ？まあ命のやり取りにはならな
いだろうが、それでも可也難易度は高い仕事だとは思っ」

「本当？」

鷺宮の言葉を聞けばきらりと目を輝かせて塩見は嬉しそうにきらきらと顔を輝かせる始末だ。完全に子供のような反応だ。

澤田も首肯して口を開く。

「私はこの目で見てはいませんが、それでも義経様も鷺宮も、成すすべもなくといったようですよ。一度目は塩見さんがいらっしやらずなくて、大変苦勞をなされたようで……。相手ごわいかと思われ
ますよ」

そこまで聞けば塩見は俄然やる気がわいてきた様子である。

拳をぱしりと打ちつけると空を切る風切り音をさせてシャドウボクシングを始めた。まるでその様子は、ちょうど良い遊びをみつけた腕白な男の子のようだった。

「いいね！楽しみになってきた！」

けれど今度はこれに待ったをかける声があった。義経である。

「今回の任務はターゲットが逃げた場合の捕獲だからね？勘違いしないでくんない？それと、傷つけても駄目。ただ捕まえて無力化し
て欲しいだけなんだ」

「何よそれ……。降矢君、それって私に殴るなって言ってるの？」

「そりゃあそうだよ当たり前でしょ？怪我なんてさせたらいくら塩
見さんでも殺すよ？」

穏やかに告げられた言葉が、どこまでも物騒な言葉で瞬間的に室内が凍りついた。

義経から向けられる殺気に塩見は全身の毛穴と言つ毛穴が開くのを
感じる。

そして心臓が煩い程に鳴り響けば否応なしに気がついた。義経は

本気で塩見を殺すつもりなのだ。それも、ターゲットに傷をつけただけでだ。

喉を大きく鳴らすと、塩見は今度は慎重に尋ねる。

「……ターゲットは一体誰なの？」

そもそもターゲットは誰なのか、それが問題だった。

人か人ならざるものかは分からない。けれどこの義経の反応からして考えてみるに、恐らくは相当義経とは浅からぬ関係には違わないはずなのだ。

義経と鷲宮の手を煩わせ、その上一度逃げられている相手。興味はつきなかつた。

「今回のターゲットは降矢雫。何の因果か僕の娘がターゲット。依頼人は六花神義経。僕からの依頼になる」

塩見には、それは冗談にしか聞こえなかつた。

「ただ、本気を出さなきゃいけない相手なものも確かだからね。心してかかつて欲しい」

仕掛けるのは今晚にしよう、そう告げられてもどうしても塩見には納得いかなかった。

ティーブレイク中に話す話題にしては物騒極まり無い上に、冗談にしても突き抜けて迷惑なものだった。

何かの間違いだろうと告げるが、だがそんな塩見の訴えは誰も聞いてはくれなかつた。

ただ無言でじっと塩見を見つめてくる視線に、先に耐えかねたようにそっと目を伏せて謝罪の念を唱えるのは塩見のほうが先だった。ある意味では、その無言こそが答えだった。

何となく勘は掴めてきたと思う。

執行部の仕事も何とは無くだが理解出来てきたのは、過去の生徒会が行ってきた仕事を二十年分、全て纏め終えた後のことだった。膨大な資料を纏め上げたところでそのノウハウは頭の中にきちんとおさまった。

首をこきりと鳴らすと棚に全ての資料を収めて鍵をかける。

「生徒会主催で執行部との引き継ぎの六花祭の説明会を兼ねた総会を催したいところですね」

どう考えてもまずはきちんと生徒達全員との話し合いが必要だった。とはいえ全員が集まるには何かと時間と根回しが必要である。

だがそれは無理だろう。

栗達執行部にはそこまでの権限は与えられてはいない。だからこそ生徒会の人間の手伝いが必要なのだ。

だが、全員をどうやって今から集めることは不可能である。

現実的に考えても、集められる人数はクラスや部活の代表者のみだろう。そしてそれ以上は必要ないと言えた。

兎に角今は必要な数の総会を開くこと、会議をもってこれを可決するために話し合いをまずすることを目標に掲げると、栗はそのための草案を纏めにかかった。

「三人が帰るまでに私がやること、やれることをしなくては……」

やることは生徒会ではないが、山積みだった。

控えめなノックの音がしたかと思うと、昨晚幽霊騒ぎを起こしたばかりの若干低めのハスキーボイスが雫を呼んだ。

流石に騒ぎを起こしたばかりなものもあるが、早朝も挨拶を交わしたばかりということもあつてか、耳が相手の声を覚えていたため直ぐに相手に思い当たると返事を返す。

「はい。ちょっと待ってください、今開けますから」

扉には鍵をかけておくようにと三人より口酸っぱく言われていたため施錠をしてあつた。一応は念のためと言うことらしい。確かに先日ここで健とやりあつたばかりであるし、更に言うなればバケツを頭上へと落されたばかりである。用心するに越したことは無い。それを解くとドアノブを回して扉の向こう側で雫が開けてくれるのを待ちわびていた人物を部室内へと招き入れた。

「こんにちは、雫ちゃん」

「はい、こんにちは、塩見さん」

向こう側にいたのは、塩見だつた。

塩見はお土産だと告げて、小さな一人暮らし用程度だろうか冷蔵庫と、その中にどうぞと告げてミネラルウォーターに始まつていくつかの飲み物を差し入れてくれた。大きな手荷物であるとは思つていたが、まさかこんなものを差し入れてくれるとは思わず、驚きに目を見張る。

冷蔵庫に電気ケトル、そして幾つかの食器まで差し入れてくれたのには嬉しくて堪らなくなる。

食器の梱包してある箱を一つ一つ開封していけば紅茶の茶器一式まであるではないか。何と豪華な差し入れなことだろう。喜びに飛

びあがるほどだった。雫は紅茶が大好きなのだ。

「有り難うございます！凄く嬉しい！まだこの部屋には何もありませんし、暫くこの部屋でひきこもっていると言われてしまいましたので……飲み物をどうしようかと考えていたところなんです。まさかこんな素敵なプレゼントをいただけるだなんて」

自分の持ち物さえほとんど持ち合わせていない雫からすれば、それは本当に宝の山に見えた。

塩見の差し入れてくれたその一つ一つを手を取れば、雫を想って選んでくれたことが分かるようなものばかりだった。

優しさにこんな形で触れてしまえば胸にじんと染み入るものがある。

「なんでひきこもれなんて言われるんだ？」

思わず塩見は男言葉で疑問を口にすれば、雫はそれには笑って答えなかった。

塩見はそわそわと落ち着かないながらも執行部の部室内部を見て回ると、いくつか懐かしい資料を見つけたのだ。

「これ……私たちの代のか」

「あ……ええ、それが一番古い資料でした。その後数年分が抜けておりまして、二十年前からは全て残っていました。ご覧になりますか？」

そう言われれば有難くと告げて塩見は懐かしそうに当時の書類束を引っ張り出して読み始めた。少し埃つぽいのが何だか笑えた。

塩見の外見は当時とほとんど変わらないにも関わらず、この学園はきちんとなを取っているのだと思ったのだ。

「ああ……っことは二十年前までは全部捨てたのか。でも、何で私たちのところだけ残ってるんだろっな？」

それは霰にも不思議なことだった。

義経を含めて鷲宮沢田塩見の四名は以前よりの知り合いだった。

それも学友で同い年、つまりはその頃からの縁なのである。

それよりずっとつきあいを続けている四人は、当時の生徒会を運営していた生徒会メンバーでもあった。

彼らが活躍した時代はもう二十年どころの騒ぎではないのだ。

18 (色なしの無能、それが彼女の名) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

18 (色なしの無能、それが彼女の名)

「私たちの頃だったか、生徒数を大幅に増加させるようになって、校舎を増設して改築を繰り返してたのって。気がついたら校舎が中等科高等科共に二つに増えてたな」

今現在は普通科棟と呼ばれているものがもつとも古い校舎なのが、それもあちこち増設を何度も繰り返しているお陰で古いだけの部分はもう、ほとんど無い。

雫は校舎を増設された年代を思わぬところで知ったわけだが、まさか当時をこんな形で知るとは思わなかった。二十年前辺りを少々調べたほうがいいかもしれないと考えていただけに、これはある意味貴重な証言と言えよう。

「その頃校舎が一つ増えたばかりだったのですか」

「そう。だからそのおかげで単純に生徒数も倍になった。だから生徒会役員に就任したばかりなのにしっちゃんかめっちゃんかでね……ほんと、凄く大変だったっけ。急に増えた人数にあわせるだけでも大変でね、そこにきてこれだよ。後から入った連中は以前からいる生徒に比べてどこか派手好きな連中が多くてね。まあ、今言う、成金って言うのかしら？旧家ばかりで下手すれば華族とか、そういう本当に一部の……あまりこう言うのはあれなんだけど、貴族とかだね。昔の。そういう上流階級の人しか通ってなかったわけね。だから洗練されてるって。自分のこと言うのもなんだけど、そういう周囲までが厳選された方達ばかりだったの。そこに近年　ってもここ数十年から百年前とかそういうレベルだけど、それくらいに発展を遂げた家の人間がごっそり入学を決めたわけ。だから、ある意味ではその時に外の人間から一気に……お貴族様が知らないようなものが入ってきたわけ。そのお陰で行事が一気に派手になってっ

「たんだよねえ……」

まさかそのような経緯があつて行事が派手になつたとは知らなかつた。

なるほどと思ひながら興味深い話であると首肯をして、そのまま塩見に話を促そうとしたところで、逆に言いにくいことなんだけどと塩見が切り出してきた。どうやら稗に聞きたいことがあるらしい。

「何でしょうか？」

「いや、あのな？……聞きたいのは、六花神についてなんだ」

「私に、ですか？」

奇妙なことである。

稗は場所が場所だけに、慎重に口を開く。

「私に聞かずとも、塩見さんは色つきではありませんか。私より余程内部の事情にはお詳しいはずですが……」

「いや、そういうんじゃない……要は、私が知らない、血族についてのことなんだ」

ああ、そういうことかと稗は得心がいったようである。

塩見は鷺宮や澤田と同じく外から六花神に入ったものだ。そのため一族のことについては知りえない情報もあるのだろう。なれば納得がいく話だつた。

「こういうのは降矢君に聞けばいいのは分かつてるんだけど、でも、あつちはあつちで色々あるみたいでさ……聞きにくいんだ」

「そう、ですね。お父様は六花神家とは色々ありましたから」

義経は六花神からすれば異端児である。

外の血を入れた淫売の子と言われているのもあるが、それよりも何よりも、あの能力の強さ、高さ、それそのものすらただ事ではないと騒がれているのだ。

だからこそ何かと義経は六花神とは衝突が絶えないでいる。それは今も昔も変わらなかった。

六花神のことになると過去に何か様々なことをされてきた結果か、義経の口は酷く重くなる。だからこそ聞けないのだろうと知ると雫は心得たとばかりに胸を叩いて請け負った。

「何なりと聞いてください。私で良ければ、知りうる限りのことをお教えします」

「……有難う、雫ちゃん」

けれど、塩見の表情は、どこか辛さを訴えているように見えた。

塩見は雫手ずから淹れた紅茶を一口口に含むと、年初めの儀式について尋ねてきた。

「毎年血族は全員いつてるあれなんだけど」

「ああ、毎年二月に行われるあれですか」

雫は紅茶を一口含むと嚙下してからカップをソーサーに置いて答え始める。一体何から話したものでしょうか。

「毎年二月に行われる行事になります。二月と言えば豆まきですよ。二月三日。その日は何の日だか、ご存知ですか？」

「旧正月？」

「はい、正解です。私達六花神家は旧正月に新年を迎えたことを祝い、そして未来を占います」

「そこには私達も参加するよね。あやこちゃんがいつもやっているやつ。あそこまでは参加が許されてるから」

基本的にそこまでが三人の限界だった。

いくら義経と契約を交わしているとはいえ、彼ら三人は色ありとは言え銀朱である。六花神のものとは言えないのだ。

三人以外にも外の人間はいるが、銀朱であれ他の色なしであれ、基本的に六花神でないものは全て退場を余儀なくされている。

よって、塩見がその先を知らなくとも無理は無かった。

「銀朱や角界の方々が退場めされると、私達六花神は色あり色なしに関わらず、その身体に流れる赤い血潮を持つがゆえに奥へ通されることを許されています」

六花神家の新年会は基本的に本家の持つ山で行われる。

その山の中腹にどのように作られたのかは分からないが、巨大な御影石で作られた社がある。

それはとても不思議な社だった。

一つ一つが精緻な作りをされていることもさることながら、そのどれもこれもが運べるような大きさではない石で組まれた社なのだ。それはもう何世紀も前からあるものらしい。古くは一千年以上前の文献にもこの社について書かれている程だと言う。

「誰がどう作ったかが分からないあの神社みたいな場所の、その奥か……一体そこには何があるの？」

「何と言うか……更に山頂へと登るのですが、上にはあの社とは比べようもない程の、あまり見た目には豪華とは言えない、粗末なものがあるのです」

「ぶっん？」

粗末と言つても雫の口にすることだから、どれくらい粗末なのは分からない。一般人のそれとは感覚が違うはずだろうからと考えていたところで、雫から釘を刺された。

「本当に粗末なんです。大きな岩を重ねて組んだだけの建物とも言えないような洞窟ですから」

「そりゃほんとに粗末だな」

荘厳な神殿などを想像されて後で本物を見てがっかりされでもしては悲し過ぎる。

実物は面白味も何もない、ただの洞穴と言つてもいいものなのだ、粗末という印象そのものを、綺麗に飾った言葉で言い表すことは矢張り、無理があつた。

「その洞窟の奥深くには泉がわいていました……下はそのまま山の地形を生かした形なんでしょうね。岩だったり土だったり、自然そのままの空間が広がっています。ただ、そのままでは危険です、前に行くのに不便でない程度に蝟燭などで明かりがとってありますが。洞窟を真っ直ぐ進んでいきますと、ぽっかりと空間が空いているところがあるんです。そこに泉があるのですが……その泉の傍まで来ると、一人一人そこでは毎年能力について調べられます。これが私達六花神家が行っている新年会の本命、ですかね」

塩見がぴくりと動いたが、雫は気づかない。

「毎年そこで全員が調べられるのです。能力について」

何気ない風を装つと、塩見はそのことについて詳しく聞いてみた。

「どんな感じに調べるの？銀朱はそういうの無いし、そもそも自分

の主が知ってればいいだけだからさ。私達銀朱の能力なんてのは。だから調べる方法とか言われてもピンとこないけど……」

「ああ、そうですね。私は毎回何もなймаまで終わりますが、お父様やお母様なんかは凄いですよ？視覚化はご存知ですよね？」

「視覚化……うん、分かる。目に見える形であればあるだけ能力が高いつて言う、あれでしょ？」

「そうですね。通常、能力が無いかあるかで分けられる我々ですが、ある者達はその資格化により差別化されることになっています。つまりはランク付けですね。上を上げるときりがありませんが、下は見えないのが一般です。全く視覚化されず、けれどある程度の能力が付与されているものの中にはいるんです。お父様やお母様や他のお二方と一緒に塩見さんからすれば、その方が有り得ないのかもしれませんが、普通はそういうものなのです」

「ってことは、視えないのが普通なんだ。あんまり他の六花神の連中とは関わりないから知らなかった」

と言うよりも、義経のモノである塩見や鷺宮、澤田に他の六花神が近付きたがらない、と言うのが本当のところなのだが、それは塩見に言ったところでどうにもなるものではない。それどころか耳に入れるのは憚られた。

苦笑して雫は続けた。

「まあ、ある物を触れると身体から隠していても力が溢れてしまうようなものがあるのです。ですが九割方の人間は、これで溢れてきたとしてもほとんど視覚化されるほどの能力者はおりません。ほんの一握り程度なのです。資格化されるほどの能力を持ちえているのは。お父様はそれを行うと光の蔭が身体を覆い、お母様は眩く白く輝いていきます。それはそれは美しいのですよ」

羨望とそして、どこか悲哀を込めた眼差しを向けて雫は虚空を見

つめていた。

それを見れば塩見は理解した、ああそうか、実の両親にさえも懂れて、そして羨んで 最終的に絶望を覚えているのだ、この子は塩見は零の考えているであろうことに気づかぬふりをして明るい声を出して適当な相槌を打って見せた。

「へえ、降矢君とあやちゃんが……それはみてみたいかも」

だが部外者である人間は立ち入り禁止なのだ。

「それは……難しいですね」

「だよねえ」

「ねえ、気になったけど視覚化されない連中はどうやって能力のあるなしが分かるの？」

能力のあるないを見ることが出来ないのであれば、どうそれを理解するというのが、塩見は気になった。

銀朱と違い、彼ら六花神はその血により脈々とそれらを受け継いできたのだ。けれどその能力があるかないかはそれこそ生まれ持った器の差で決まってしまう。元から何も無い、零では無理だ、一も無ければ鍛えようがないのだ。

「確かに全員はないのと、……私のように血筋がどんなに良かろうと持ちえない人間もいますから。そういう差を見分ける方法ですが、基本的に何がこう、といった何かしらの決まったものがあるわけはありません。ただ、決まっているのは何かの反応が現れることが決まっているのです」

それは音であつたり、風が発生したり、薄らと光るものが零れてきたり。その人物により全く異なる反応を見せるものなのだ。

「だから、それが何もないとすれば育てることすらかなわない、ただの色なしとなってしまうのですね」

そう悲しげに笑みを浮かべると、雫はこれで終いだと言うように纏めた。

色なしは六花神においての蔑称だ。

能力なしの無価値な人間と言う、烙印を押された人間のことを指す名なのだ。

さて終わりましたと雫は席を立ってしまったが、それで納得しないのは塩見だった。

立ちあがって棚へと冊子を取りにいってしまったおつとする雫の手を取ると、先ほどの言葉を確かめる様に聞いてくる。

「本当に？」

「な、何ですか？」

「本当に、雫ちゃんは色なしなの？」

「……そう、です。色なしの、胡粉です」

「でも、だって雫ちゃんは」

そこまでだった。

扉を開けて室内へと必要なものを取りにいって来ていた三人が戻ってきたのだ。

「ただいま雫。あら？そちらの方は……」

「ああ、お帰りなさい。こちらは、」

塩見を紹介しようとしたところで塩見は遮る様に言葉を紡ぐ。

「帰るから。それじゃ。お茶、美味しかった。ごちそう様」

「え？もう少しいらしてくださいでも良かったのに」

「うん、邪魔しちゃ悪いだろ？それじゃ、大変みただけど、頑張るって」

「はい。今日は本当に有難うございました。またいらしてください」
「うん。それじゃあまたな」

ひらひらと手を振って部屋を後にすると、尋ねた言葉に早速後悔した。

「聞かなきゃ、良かった……」

塩見は扉を閉めると息を吐き出す。

鉛のような重苦しい息が肺に充満しているようだ。吐き出しても吐き出しても、重くて苦しくて堪らなかった。

「何で？どうしてだ？何も力がない？なのにじゃあなんで私まで呼び出したんだ？わけ……分かんない……」

車を捕まえるとの命令を実行するのは、今夜 深夜零時。

それまで後六時間。

たった六時間しかない時間で、どうすればこれを納得することが出来るのか、塩見には全く、分からなかった。

19 (廃棄の二文字が脳裏をよぎる) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

19 (廃棄の二文字が脳裏をよぎる)

仕事がある程度終わった頃だ、いつもの通りに帰宅をし、いつもの通りに家で過ごしてそして、けれど、ほんの少しだけ今日はいつもと違った。

何がどうとは雫には説明が出来なかった。ただ、何とはなしに今日は空気が重いような気がしたのだ。

やっぱり、奏に知られてしまったのが拙かったのかしら。

確かに拙かったかもしれない。廊下で突き飛ばされたシーンなど、見られるとは思わなかった。

奏と昇降口で待ち合わせる時に静かに怒りを滲ませていた奏を思い出した後悔しきりだった。

けれど、トイレでずぶ濡れで出てきた時でなくて良かったと思っただ方がいいのかしら？

とも思うわけで、これ以上怒らせれば恐らく奏は、その恐ろしいほど明晰な頭脳の全てを持ってでも雫へと嫌がらせをしている少女達を捕まえて何かをするのではと思うのだ。

それは想像するだに恐ろしい。

その所為か、とも思うし、違うようにも感じていた。

上手く説明できない違和感を覚えていれば奏が晚餐だと呼びに来た。

「あ、はい。少し待っていただけですか？あと一行だけ書いてしまいますので」

雫は手元の執行部で明日使用する書類をやっつけてしまおうとしていたところであったため、暫し待ってはくれないかと言ってみた

のだが、その奏の表情もどこか痛々しいものを滲ませていた。

雫はどうかしたのかと尋ねてみるが、奏は何でもないと笑うだけで直ぐに視線を逸らしてしまう。

「何か私、しましたか？」

「え？……ううん？何を言ってるんですか、雫お嬢様。そんな……そんなことはありませんよ」

そう告げる割には奏は雫を見ようとはしない。

また何か自分はしてしまったかと自責の念のようなものを抱きかけるが、雫はそんな自分を叱咤すると、いけないと気持ちを切り替える。悔やみ続けるよりもこちらがからつと笑っていけば奏も安心するはずなのだ。気にしない、そして気にさせてはならないのだ。

そうだわ、後悔はしてもいいけど、くよくよといつまでもしていいべきではない。

そして過去起こしてしまった罪や過ちを悔やみ続けるよりは、それを挽回出来るように頑張るべきだと頭の中を切り替えたと言うのに、どうしてもどこかで弱気な自分が顔をのぞかせる。いけない癖だった。

嫌がらせをしてくる人も、もう別にいい。

何をされても構わないとまでは言わないけれど、だが、それをそのまま悔やんで何一つ出きないままでは意味が無いのだ。

しっかりと仕事をやる。一つ一つ対処していくのだ。

そうだ、自分は万能ではないのだから、嫌われても別にいいのだ。嫌われることを恐れて何も出来ないのでは意味がないのだから

こう思えることが今の雫にとってみれば、十分に成長したと言えたけれどこの日の奏は雫を嫌ったから、雫が何かをしたから、雫に嫌がらせをしてくる人間を見たから、こんな態度だったわけではない。ただ、雫がこの後自らに起こる出来事を知らず、ただただ嬉しそうに、執行部と言う仕事を与えられて浮かれているその姿が痛々

しくて見ていられなくて　だからこそ奏は思わず目を背けるようにしてしまっていただけだった。

この時の奏は無力だった。

義経を止めることも、雫に迫る出来事を知らせることも、許されていなかったのだから。

何一つ許されていないことを恨み、奏は誰に聞かれることのない言葉を囁くように吐き出した。

「済みません、雫お嬢様」

守れなくて、ごめんなさい。

「終わりました、奏。行きましょう」

「はい、雫お嬢様」

そして二人は食堂へと向かうのだった。

+++

「雫、ちょっといいかい？」

「はい、なんでしょうか？」

義経から呼び出されて招かれた先は温室の白いテーブルと対になった椅子がある休憩所だった。

何かと尋ねれば全員揃ったら少し歩こうかとはぐらかされてしまった。一体何があると言うのか。けれど雫はそんな父の言葉に疑うこともせず、ちよこんとその椅子に腰かけると静かにしていた。

この後、何が起るかも知らずに。

鷲宮と澤田、そして最後に塩見が現れると義経が首肯して告げる。

「揃ったようだ、始めようか」

「何をですか？」

きよとんとなつて不思議そうにといかける尋ねて見せた雫に後から来た面々は先ほどの奏と同じような顔をした。それを見ればどこか不安になった。胸がざわつくのだ。けれど雫にはまだ分からない。分かるはずもないのだ。この後自分に何が起こるかなど。

義経は笑みを消すと温室から外に出るための扉を全て指を鳴らすだけで閉じてしまうと、今度は雫の手足の自由を奪い去った。義経がくつと指を握りこむような仕草を試みせた途端、雫の足が両足がべたりと地面に固定されてしまったのだ。それも、強力な磁石が何かを引き寄せられる鉄の塊のようにどんなに力を込めても地面からは離れられない程に、強力な力で縫い付けられてしまった。

一瞬何が起こったかが全く分からないでいれば、義経の口からごめん謝罪の言葉が漏れた。それを聞けば理解した。そうだ、彼にとってこんなことは造作も無いことだったと思いだしたのだ。

義経の力で縫い止められてしまった手足を半狂乱で見下ろす。けれど周囲の面々は至って冷静だった。それもそのはず、こんなのは彼にとってみれば息を吸うのと同じくらい簡単だからだ。けれど、雫からしてみればたまったものではない。

更に追加とばかりに義経が指先をすいとタクトを振る様にして優雅に下ろしたところ、雫の手足一つ一つにずしりと重しが乗った。これにはたまらず悲鳴を上げた。

ようやっと悲鳴をあげたの間違いかもしれないが、悲鳴が出てきたことで現実感が増してきた。どこか夢のような感覚でいたけれど、これが夢であるはずが無いのだ。こんなにも生々しい夢があるはずがないのだから。

「お、お父様！やめてっ！助けて！！」

義経の力は六花神の中でも随一の破壊の力だった。そんなことは今更説明されるまでもなく知ってはいるが、まさかこの身に受けようなどとは夢にも思わない。

雫は何とか腕を動かそう、足を動かそうと必死で抵抗を試みるも、指先一つ動かせなかった。雫の身体には今、椅子に上から押し付けられたように、何十倍もの重力がずっしりと上から押し掛かっている。その上腕も足も、接着剤が何かで固定でもされているのではと思われるほどに、べったりと肘掛に地面にとくっついてしまっただがれないのだ。

身体を擦れば擦るほどに、みしみしと華奢なデザインの椅子が軋む音がする。その音は今や雫に迫りくる恐怖の音であった。みしみしという音が、よりリアルに雫にこれを現実と知らしめるのだから。何故こんなことをするのかと義経を見上げてみるが、その面には何ら感情が浮かんではない。夜闇に紛れて溶けてしまったかのように、義経の表情はその半分以上を闇に溶かしているため窺い知れない。

そしてそれは、鷲宮も澤田も同じだった。

暗い闇夜に溶け込んだ顔の部分に、薄らと光って見えるのはぬらりと光る眼球だけだ。それが噂に聞く悪鬼のように見えて、雫は益々震えあがった。

唯一違うのは塩見だけだろう。塩見は一人だけ雫からそつと視線を外すようにして一人目をそむけ続けていた。

そんな塩見だからこそもしかしたら助けてくれるかもしれない。雫は塩見に必死になって助けを求めた。

身内に　それも大切に想っている父からのこんな所業に身体も心もパンク寸前だったのだ。

だから早く助けてほしかった。助けてと雫は声を限りに叫んだ。

「い、……いやっ！離してっ！離して！塩見さん！塩見さん！助けてください塩見さん！！」

一度助けを求めれば、それからは狂ったように塩見の名を呼び続けた。何とかこの場から逃れたくて、声を限りに叫ぶ。

だがしかし、暫くして返ってきた言葉は、無情な一言だった。

「ごめん……」

それを聞けば目を見開いて雫は一瞬言葉に詰まった。

その瞬間、雫の心は暗闇にどつぷりと落ちていく。

今までずっと一人で頑張ってきた。ずっとずっと一人だった。唯一安らげる時と言えば父や母、それか父の友人である彼らが戻ってきた時だけだった。

ようやくと今までであった出来事を訴えられた。けれどその前に起こった出来事は何一つ変わらないのだ。

辛い学校生活、辛いこの屋敷での生活　それらは何一つ変わらなかった。

そんな中でも必死になって雫は自分の出来ることを探しだした。共に歩んでくれる友を見つけた。

やっと、やっとだった。スタートラインに立てたと思った。

だと言うのに　どうしてここで大好きな父に、信頼していた彼らに、こうして自分は拘束をされているのだ。

雫の脳裏に廃棄という文字が過ぎる。

六花神では場合によっては廃棄される者がいると聞いたことがあった。

こんなときに思いだすことではないと思いつつも、逆のことも考えてしまう。こんな時、だからこそ思いだすのだろう、と。

嫌、嫌だ……廃棄、される？

使えないから、何一つ能力を持って生まれなかったから、邪魔だ

ったんだ、そうなんだ、どうして？ 沢山の言葉が雫の中に生まれては消えていった。

ぐるぐると頭の中を駆け巡る言葉達に否定のしようもなかった。否定するにはこの状況はあまりにも不吉過ぎたのだ。

廃棄、廃棄するんだ。

最早疑いようもなかった。廃棄を義経はしようと言うのだ、雫を。びきりと胸の中で何かが割れる音がする。

廃棄って、何？

何をされるかと考えて、闇夜の中に浮かぶ悪鬼の目玉のようなものを見ればぞっとした。何故だか急に殺されると言うワードが脳裏をよぎったのだ。

そうか、殺されてしまうのか 今まで廃棄されてきた六花神の者達の声なき声を聞いたような気がした。

死にたくなかった、殺されたくなかった。そう思って死んでいったのだろうか。

今の、自分のように。

ぱきっ、ぱききっ、殻を破る音がどこからか聞こえるも、雫はもうそれを気にしようとはしなかった。

死にたく、ない……。

けれど死神の鎌はもう雫の元におりようとしている。

つい先日執行部と言うものを雫のために作ってくれた義経に雫は聞きたかった。廃棄するつもりだったならば、どうしてあのようなものを雫に預けたと言うのか。どうして今まで優しくしたのか、狸々緋だと言うのにも関わらず、それでも胡粉を生み出してしまったことに何ら気にしたそぶりも見せなかったというのに、何故、今なのか。

どうせならばもっと早くにこうしてくれていれば良かったのに…。

何故希望を与えたばかりでこうして、その希望を刈り取られねばならないのかと、絶望一色に染まった雫の心に、義経はすっと腕を伸ばす。

すっと伸ばした腕の先には雫の頭部があつた。そのまま手を大きく開くと雫の額を掴みあげて、文字通り、義経は雫の心に腕を伸ばしていった。

もう雫は抵抗らしい抵抗すら見せなくなっていた。

20 (君の心の中) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

20 (君の心の中)

こうして温室に集まる前、三人を前にして義経が言った言葉があった。

「力を引きずりだせば、この間同様雫は逃げるだろう。だから、覚悟しておいてほしい」

覚悟とは一体何の覚悟なのかは分からない。そもそもあんなにも華奢で小さな雫に一体何が眠っていると言っただろうか。塩見には分からなかった。

塩見は雫にきちんと昼間確かめた。けれど結果は矢張り、塩見の知っている通り、彼女は無能の色なし　胡粉の称号しか持ちえないままだと言う。

そもそも彼女が塩見の能力を使わなくてはならないほどの能力者であるはずがないのだ。

雫には、能力がないと六花神で鑑定を受けてあるのだから。元からそんなことは分かり切っていたのだ。

だが、現実には塩見をこうして呼び寄せるまでの事態に発展していると言うのだ。

塩見にはもう、何が何だか分からなかった。

義経の腕から無数の白く光る蔦のようなものが生えてくる。何ともおぞましい光景だが、そのままその触手のようなものは躊躇うことなくずるずると雫の額へと一直線に伸びていく。

見ている側であればそうでもないが、触手が伸ばされる当人からすれば恐ろしい以外の何物でもないだろう。雫は恐怖のあまり声にならない声を上げて、ついに額にまで伸びた触手にべたりと触れられた途端、その身体は大きくのけ反った。

「……ッ……ッあ！」

か細い悲鳴が聞こえた途端、もう見ていられないと塩見は顔を伏せようとするが、義経は見ていると無慈悲に告げる。目を離す余裕は義経にも無いのだ。

悲鳴が消えたら今度は雫の顔からは一切の表情が消え去っていた。気がつけばそこにあるのは虚ろな目をしたただの抜け殻となった雫の姿だった。

雫は今ここに居る面々の前では表情をくるくると絶えず変えていた印象があっただけに、これは衝撃的だった。同時に、胸が酷く痛む光景だった。

義経はそんな娘の姿を見ても眉一つ動かすことなく腕から触手を送り続けた。

雫の心を裸に剥き下ろすために。

ずるずると伸ばされる触手は雫の額に吸い込まれ続けていく。それがある程度進んだ時のことだ、今度は義経の方に異常をきたし始めたのだ。

義経の瞳はどこを見ているのか、焦点があっていない瞳を雫にじっと向け続けている。

その瞳も良く見ればどこかおかしい。瞳孔が開いているのだ。それを見れば今度は義経が心配になった塩見が動こうとするが、けれどそれは澤田に阻まれた。

「無事、お嬢様の中に入られたようですから、安心してください」

「……入ったのか？」

「ええ。義経様は今、お嬢様の精神なかにありますよ」

塩見はごくりと喉を鳴らすと、全く身動きをしなくなった雫と義経を見た。

二人の身体は、薄ぼんやりと光輝き始めていた。

精神への接触を果たした義経は、雫の中の隅から隅までを探索するつもりだった。

先日の一件で初めて顔を出した、あの全てをまつさらな状態にした雫の姿、あれを見極めるためだった。

あれは何だったのか、今も義経は理解出来ていなかった。あんな例は見た事がない。

いや、六花神の古参の連中でさえ知らないんじゃないか？

恐らくは今までにない血族の者が今、雫の中に存在しているに違いないと考えていた。

雫はあの状態になった自分を知らない様子であるし、そしてあの状態の雫は元の自分のままではないらしい。ならば彼女達は一人ではあるが、別と考えるべきなのではないのか　塩見が来るまでに暫く考え続けて出した答えがそれだった。

あの力を雫が自らの意思で使えることがあるとすれば、それは雫がああの状態の雫と結びついた時だろうと思う。だが、今の状態では無理だろう。お互いがお互いを認識していないのだから。だからこそ、義経はこうして精神に接触してみようを試みたのだ。それがどんなに雫へと恐怖を与えてしまったとしても、必要だからこそやったのだ。

制御出来ない力など、危険過ぎる。

確実に雫の中で何かしらの結びつけを行って帰るつもりだった。それが出来なければ雫の中から何かの答えを持ち帰ろうと考えていた。

雫の心へと義経は呼びかける。

「雫……雫……」

こうして中に潜って可也の距離を進んだ気がする。未だ最奥が見えないが、雫の精神はどうなっているのだろうか。

通常の人間の精神にはここまでの空間はない。

ここまで巨大な内部を義経は見ただ事が無かった。

精神感応能力　義経の能力のうちの一つだ。

これを使えばたちまち、相手の精神を丸裸にすることが出来た。それもそのはず、相手の精神そのものにこれは接触する能力なのだから。

義経は今、雫の中を泳いでいる。たつぷりと空気を含んだ水が心地よく頬を撫でながら流れていく。

「ここまで綺麗な中身も初めてだが、如何せん広すぎるだろう」

義経はそうぼやくと、水の中にどぶんと浸かった。

異世界と言うに相応しい空間がそこには広がっていた。空は抜けるような青、緑は生い茂りどこまでも続いているのだ。そこに中空に浮かんだ塔が一つ立っていて　けれどどう進んでもそこには辿りつけないでいる。

「あの塔だろうとは思ったが……」

進めない。

水を手でかきながら歩いてみた、泳いでみた、船を見つけてそれに乗って漕いで近づこうにもそれも駄目。打つ手なしだった。

何一つ精神に触れても力の片鱗すら見せない上、そんな感触すら感じられず、あの日あったことはもしや夢であったのではと考えたその時のことだった。

何か強烈な光の塊が水の奥深くに見えたのだ。

「……なるほどね。上ばかり見ていて見逃してたわけだ」

目当てのものは恐らく、この光の塊だ。そう目星をつけると義経は水の中に飛び降りる様にして飛び込んだ。

水泡が肌を滑る感触が気持ちいい。

精神世界へと飛び込むと、どうしても裸になってしまっからこれはちょうどいいと言えるだろう。裸で水に飛び込むのならば気持ちいいではないか。

暗い水の奥深く、その心の最奥に位置する場所から光の塊が大きく、恐ろしい程の力を持って鳴動するのが分かった。

ドクン、ドクン、……

21 (その中に潜んでいたものは) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

21 (その中に潜んでいたものは)

義経が近づくほどに、それは力強く、そして早く脈打ち始めた。まるでそれは義経の到来を待ちわびていたと言つように。

光はまるで巨大な卵のようだった。

完璧な球体がそこにある。けれどそれは煌々と脈動するように明滅を繰り返している。まるでそれが生き物であるかのようになり、どくりと。

義経は導かれるようにその球体に腕を伸ばすと、触れるか触れないかのところでその球体から声が聞こえてきた。

<貴方は誰？>

歌うような声に聞こえた。

ただしそれは、破壊の音だった。

精神世界だからこそ、相手の声にここまで力があるのだろう。

その声は義経に牙を剥いて襲いかかってくる。

私を害するお前は誰だ、相手はそう拒絶の意思を持って誰だと尋ねてくるのだ。

どんな答えをもつてしても、恐らくは拒絶以外されないに違いない、そう思うに相応しい声に義経は獰猛な笑みを浮かべる。

そうだ　義経は確信したのだ。こいつだ、あの時あったのはこいつだ。

見間違いなんかじゃなかった、記憶違いなんかじゃなかった。きちんと雫の中に彼女は居たのだ。眠れる雫の巨大な力として、そこに確実に生きて存在していたのだ。

義経はこれを早く雫と同化させてやろうと考えた。

口を開かずに義経は答える。精神の中にきているため、口を使わずに直接心に訴えかけるつもりだった。

名乗りから義経は済ませ、どうにか自分が敵対する意思のないことを告げねばと考えた。

「……僕は」

けれど、牙は無情だった。続きを言わせては貰えなかった。

凄まじい程の力の奔流に押し流されるようにして、その場から一気に押し返されてしまった。飲み込まれないようにするだけでやっとなった。

このようなことは初めてだ。

気がつけば驚くことに義経は現実に戻ってきてしまっていた。

「弾かれたっ！」

そして精神世界と同じように、こちらでも凄まじい怪異が起きていた。

爛々と赤く血のように染まった瞳で睨みつけてくるのは、先日会ったもう一人の雫だった。

力で押し負けたのは初めての体験だっただけに、少々貴重な体験をさせていただいたと告げるなり、義経は軽い挨拶のつもりで口にする。

「やあ、二度目だな」

精神世界ではその精神世界の住人である本人の力が強くなるのが当たり前だった。だがしかし、ここは現実世界である。義経が負けるはずがなかった。常勝無敗、義経は今まで負けたことがないのだから。

義経は雫を拘束している”腕”を更に強めるため、力の出力を上げて捕縛し続けようとしたが、雫が獣のように咆哮すればそれは一

瞬にして弾き返されてしまった。

「う、あああああつ!!」

「なんつ……?!」

硝子が砕けるような音がしたかと思えば、雫の身体を覆っていた義経の力の塊が 先ほどまでは目に見えなかったというのに雫の腕や足から脆くも崩されたと同時に、それは光で作りだされたクリスタルのような可視出来る状態になって儚く崩れ落ちていった。

まさか他者にまで可視出来る程にその力は強いとまでは考えていなかったため、義経は純粹に驚いた。

よもや自分と同じかそれ以上に雫の能力が強いとは考えてもみなかったのだ。

驚きに目を剥いていればもう一人の雫は言った。

「私を閉じ込めようとするあんたは、敵なの？」

それは疑問符であったにもかかわらず、口調は断定するものだった。

だが決して義経は閉じ込めようとしたつもりは無かった。けれどそんなことは相手に伝わるはずがないのだ。

「私の中まで入ってきて、私をどうするつもりだった! 答える!!」

もう一人の雫は義経の返答を待たずに叫ぶと体中から稲光のようなものを発し始めた。

ぱりぱりと乾いた音をさせて稲光が義経を襲い始める。今度は稲妻だったが、触手から攻撃を受けるのは義経の番のようだった。

「そう、あんたがかか様の言ってた敵なのね。私はまだ……死

ねない！！まだ私は見つけてない！まだ死ねないんだからっ！あんなんかに殺されてたまるもんかっ！」

雫は腕を一線させると、義経の周囲に置いてあった美しい色とりどりの花をおさめてあった植木鉢が端から砕け散っていく。その腕からも雷光が迸っていた。

砕けた植木鉢から咄嗟に自らを庇うように動けば雫は華奢な椅子より獣のように後方へと飛び跳ねるとじりじりと構えを取りながら後退していく。

「違うっ！待て雫！！」

「煩い！消え失せろっ！！」

ぐつと雫が身体を沈みこませるような体勢を取った時、瞬間的に閃いた。

「駄目だ雫っ！」

この姿勢はまさか 義経は前回会ったときに雫が空間跳躍をした際の体勢を覚えていた。そして今度もまた同じ体勢を取ったのだ。だからこそ瞬時に脳裏に浮かんだ言葉は、逃げられるだった。

だが、何とか逃げられる前に義経の能力で捕らえられればと考えた が、それは不可能だった。

伸ばした触手は雫に触れる前に彼女は跡かたも無く、忽然と消え失せてしまっていたのだ。

義経は舌打ちを打つと鷲宮に命じた。

「探せ！！」

それだけ言われれば鷲宮は十分だった。

ぱんと柏手を一つ叩くと、鷺宮の目の前に大きな銀盆が浮かぶ。それはきらきらと輝いている。その大きな銀盆は鷺宮の前に静かに佇む様にただ浮かんでいる。鷺宮はその盆に手を翳すと、彼の口からはつらつらと雫の今現在いる方角が事細かく伝えられて行く。

「距離四百五十一、五十二、五十三……方角は、一時の方角。上空二百八十五。拙い、高層ビル街に突っ込んでったぞ」

それを聞けば義経は苛立たしげに唸り声を上げた。後は塩見の出番だった。

今起こった出来事が信じられないながらも、何故自分が呼び出されたのかがこういう理由だったかと理解できると、次に何を命じられるかは言われなくとも理解した。

そして義経は塩見の予想通りにこう命じた。

「俺を飛ばせ！場所は鷺宮から随時指示がある！」
「了解ッ！」

そして四人は雫を追って空を駆けた。久しぶりの空中戦だった。

塩見は先ほど見たものがまだ信じられないでいた。

義経が精神感応　塩見はこの時初めてその能力について鷺宮と澤田に説明を受けた。そんな能力をも持っていたとは知らなかったのだ　をはじめて数十秒後程度だっただろうか、雫の身体がふいに傾いだ。

すると次に起こったのは紛れもなく怪異と呼ぶにふさわしい光景だった。

雫の髪がざわりと生き物のようにゆらゆらと揺れ動き始めた。そ

してその髪が根元から一気に白金に染まっていくのをこの目で見たのだ。

髪が染まった後は更なる劇的な進化を遂げた雫が居て、それにも目を奪われた。

急激な成長を遂げた雫に言葉をも失くす。

ぶるりと塩見は身を震わせる。

「一体あれは……」

全身が煌々と光り輝く雫にはそこまで驚かないでいられたが、矢張り可視化が恐ろしい。

そして何より義経以上に強い能力を持っているのは今まで六花神には存在しなかったのだ。

あえていうなればその能力の差はあれど、あやこと蒼緋が並ぶ程であった。けれど義経と拮抗するほどの力であるわけでもなく、その拘束をあれほど容易く解かれてしまえば最早言葉さえ失う程だった。

「雫ちゃん……君は一体……何なんだ？」

それは誰もが聞きたいことだった。

22 (帝都上空、追走劇開始) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

22 (帝都上空、追走劇開始)

塩見は全員を瞬時に鷲宮の口にした地点まで跳ばすと全員に浮力をつける。

彼女の能力は跳躍だった。雫同様瞬時に別の場所へと現れ出でることも可能であったし、それともう一つは他者へと浮力を発生させることが可能だった。ただし、大量に力を使うため、あまり大人数にこれを付与することは可也辛いのだが。

闇夜を割って現れた場所は確かにオフィス街だった。それも間の悪いことにまだ仕事をしている企業がいくつかある場所だ。

義経は舌打ちを打つと足場となる場所に飛び降りると足にぐつと力を込める。浮力が全身を覆っているため後は簡単だった。ただ跳躍をするだけで、義経は本来であればありえないほどの長大な距離を稼いだしたのだ。

雫の横に並ぶと義経は叫ぶ。

「待てっっていつてんだらうがっ！」

「っっ！っついてくるなああっ！」

こうまで遠くに来たというのにそれでもまだ追われるとは考えても見なかったのか、雫は義経の姿を認めた瞬間、一瞬だが虚を突かれた形になったらしい。その表情は驚きに固まっていた。

けれど次の瞬間、それは怒りに転じる。雫は叫ぶと同時に稲光をまたも発すると、そのままそれを横薙ぎに振り抜いてみせる。

「……クソッ！」

義経は最大跳躍をしたばかりであったため、足場がなく動けない。

かと思いきや中空を思い切り蹴るような真似をして僅かにだが先ほどいた位置から動くの間一髪というところで先ほど居た場所に凄まじい音を響かせて稲妻が駆けていった。

バンツボンツボンツと何かが弾ける音がしたかと思えば、義経の後方は一般人の居住地区だったらしく、稲妻が駆けた先で電信柱が傾いでいた。そして電線が地面に接触しているのを見ればどうやら電線まで切り裂いたようである。恐ろしい威力だった。

後方が可也の範囲で停電に見舞われているのを確認すればここで戦闘を行うのは得策ではないと考えたらしい。義経は塩見を振り返る。

「麗ッ！！」

言われた瞬間に義経の言いたいことを察したらしい塩見は義経の身体を転移させた。

雫は目の前から唐突に消え失せた相手に驚きながらも足場を探しだすと、その場へとふわりとおりていく。

それは突然のことだった。

ふわりと舞い降りていく雫の真横にふつと先ほど忽然と消えた義経が空間を割り裂いて現れたのだ。

「お転婆過ぎる、なっ！！」

義経に脇から思い切り蹴り飛ばされたのだ。

「っー」

流石といふかなんというか 義経の蹴りが見えていたらしい雫に、義経はいつそ感動した。

咄嗟に防御の姿勢を取った雫は蹴られるに任せて大きく真横に吹

き飛んだ。

「きゃああああっ!!」

最低限の攻撃を食らうにとどめた雫は悲鳴を上げながら吹き飛ぶと、まさか同じことが出来る人間がいたとはとこちらも驚きを隠せないでいた。

義経は危なげなく足場を見つけそれに着地をすると後からついてきた三人もその周囲に展開するように着地した。

ビルの屋上のフェンスの上に立つ鷲宮は告げる。

「吹っ飛びながらまた跳躍したっ!!」

「場所は」

消えられてしまえば後を追うには鷲宮だけが頼りである。義経は位置をトレスするように端的に告げると、返ってきた答えに全員の間で戦慄が走った。

「……真上だっ!!」

咄嗟に四人は散会すると、上空より空間を割り出でてきた雫が稲妻をビルの屋上へと落ち様に、叩きつける様にしてきたのだ。

ズウンツと轟音を立てたかと思えばビルが稲光が雫の触れる場所からびしりと音を立てて大きく亀裂を浮かべながら蛇のようにそこからぼこりぼこりと生えてきた。

次の瞬間のことだ、ビルが稲光を纏う蛇に締め付けられる様にして大きく割れたのだ。

「なんつー力だ!!」

「お……驚いた。逃げてたのに、どうして今度は攻撃なんてしてく

るんだ?!」

「さあな！けど、怒らせちまったってことじゃねえのか？」

「最悪じゃないか！」

塩見は四人を覆う力を幾分強めると雫の次の出方を窺う。

「無理ですっ！義経様！お嬢様は無傷で捉えらえるほどの生易しいターゲットではありません！指示を！！」

傷をつけずに捕まえるなんて無理だとの訴える視線を受けて義経は唸る。

だが考えている暇は与えては貰えないらしい。

崩れ落ちていくビルを足場に、雫は大きく跳躍してきたのだ。

それも義経の方へと。

どうやら完全に敵と認識されたようだとなれば義経は後方へと飛び退る。

「降矢君！」

塩見が叫ぶとほぼ同時だった、雫が稲妻を鞭のように振るってくるのは。

間一髪というところで塩見が義経を別の場所へと跳ばすと、ぎりぎりのところで逃げられたのだと理解したのか、義経はどっと汗が噴き出すのを感じた。それと同時に今まで自分に追い詰められたターゲット達はいつもこんな気分を味わっていたのだろうかとも思う。最早迷っていられる余裕は無かった。

「光輝、剣を」

名を呼ばれば心得ているとばかりに澤田は崩れ落ちた、今はも

う足元に落ちてしまっているために遠くなったビルに手を翳すようにして向けると、ぐっと力を入れる様にしてみせた。すると澤田の腕が赤く光る。

足元に瓦礫と化したビルの残骸があるが、これが澤田の腕同様に赤く光始めたのだ。それと同時にそれは大きく変容していく。

どろりと形を無くして水のようにコンクリートの塊が変異していったかと思えば、瞬間間にぐんにやりと自らの姿を変えていった。気がつけば地面には大量の刃のついた剣や刀が転がり落ちていたのだ。

澤田が仕事を終えたのを確認すれば今度は義経の出番だった。

義経は転がっているその武器に腕を伸ばす。といってもそれは自分の生身の腕ではない。見えない幾つもの腕を一気にそこまで伸ばすと音もさせずにそれを義経は自らの元へと手繰り寄せた。

今やそれらは全て、彼の武器だった。

鷺宮が義経へと告げる。

「拙い、通報された」

ビルを大きく割る雷が落ちたと通報されたらしいが、それもこの戦闘を見られれば一環のお終いだっただ。

ばれるわけにはいかない。一般人を巻き込むわけにはいかなかった。

けれど義経はこともなげにこう言った。

「直ぐに片はつける」

そして雷光を発しながら低空を跳ぶ雫の元へと、義経は無数の刃を手に跳躍した。

23 (ファイルの解析結果) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

23 (ファイルの解析結果)

同じ頃降矢邸では図書室で千草が何やら調べ物をしていた。

ヘッドセットをつけて跳ねた髪を無造作にヘアバンドで束ねているのは、自宅で寛いでいたと思しき健だった。

通話は音声のものではなく、映像こみの通話である。

こんな夜更けに何用かと思ったが、先日渡したフラッシュメモリについてと耳にすれば直ぐにも席を立った。こうしてはおれない。

けれど健はと言えば、千草の周囲が寮に見えないことのほうが気になるようである。

「つつかそこどこよ？めっちゃくちゃ派手じゃね？」

「ああ……気にするな」

背景が映ってしまったため少々面倒くさいことになったようだ。

だが千草は話すつもりは無かった。むしろ、話せるとも思っていない。

散々と雫について伝え聞かせているのだ、ここにきて実は許嫁なんだとは言いだしにくいものがある。

そして健には下手な嘘をついてもばれてしまうだろうと思えば説明するのも面倒だった。まあいかと健がフラッシュメモリからの解析結果を渡したいのだがと告げてくる。諦めてくれて嬉しいよと内心でほっと息を吐き出すと、そんなことはおくびにも出さずに表情も変えずに対話を続ける。

解析が終わったと知れば千草の端末を握る手にも知らず、力が籠っていた。

「とりあえず今からパソコンの前まで行く。ちょっと待ってくれ」

千草は邸内にある図書室から出ると、そのまま健と話しながら自室へと戻るべく歩いていった。健とは他愛もない話をしていたわけなのだが、その途中に会いたくもない人物にあっってしまった。

「あれ、許嫁さんまだ寝てないの？」

「ツチ……悪いか？」

思わず舌打ちが漏れるほどには会いたくない人物だった。

「悪くはないけど……」

耳朶に取りつけられた片耳タイプのイヤホンからは健の「許嫁？」と訝る声が聞こえてくる。

本当に最悪のタイミングだった。

千草はアプリに浮かぶ友人に後でかけ直すと告げると、相手の返事を待たずにぶちりとオフのボタンを押してしまう。通話解除である。

「それアプリ？」

「ああ、父親が偶には顔を見せろって送りつけてきたもんだ。お前は？」

持っていないのかと告げれば奏は笑って答える。

「要らないもん」

「ああそうか……」

こいつには必要が無いんだっただ。

鷺宮との先日的一件があったためか、この奏にすら警戒をしてい

るわけなのだが、笑いながら警戒なんてするなと向こうから言ってきた。

「警戒したって疲れるだけだよ？四六時中気を張ってて疲れるだけだから止めておきなよ」

そんなことを言われたところで警戒を解けるわけもない。けれど奏は至って気軽に言うのだ。

「僕からの言葉は常に拾われてるし、鷺宮さんが常に見てくれるからね。だから警戒してるって鷺宮さんに逆に見張られる結果を生むだけだから意味ないよ。むしろ普通にしていたほうがいいんじゃない？」

常に奏の周囲には鷺宮の視覚と聴覚が張り巡らされているのだという。そしてそれは雫にも同様なのだそう。

「しかもこの間の雫お嬢様が閉じ込められてた一件で、凄く過敏になってるから……あまり挑発しないほうがいい」

そうは言われても千草としては挑発しているつもりなどないのだ。けれど相手はそうは取らない。ただ千草が何かをしようとしているのではないか、そうした警戒心から動いているにすぎないのだから。

だから聞いてみたのだ、毎日そんな風に見張られていて辛くは無いかと。

けれど予想に反してこんな答えが返ってきたのだ。

「ううん、全然。だって便利でしょ？音声端末以外持ち歩かなくて済むんだから」

映像端末と音声端末を両方持ち歩くのが主流となった昨今では、そうした考え方は古いと言わざるを得ない。けれど相手が見ていてくれるのだから重いだけの映像端末を持ち歩く必要性が皆無であるうと言っただ。なるほど、とは思っが干草は遠慮したかった。常に見張られているなど、ぞつとしないからだ。

「別にお風呂とかトイレまで見ているわけじゃないのに」
「そういう問題じゃない」

アプリをポケットに押し込むと奏に尋ねる。

「お前こそどうして寝てないんだ。もう結構な時間じゃないのか？」

図書室で晚餐以降ずっと籠り切りでいたお陰で正確な時間は分からないが、それでも可也遅い時間だった。だが奏は首を力なく振って答える。

「主が戻ってこないのに、どうして寝れるっていつの」
「……義経さん、でかけてるのか？」

奏はそれには答えなかった。

「兎に角ある程度したらお風呂はいつちやいなよ。たぶん、もう少ししたら忙しくなるから、今の内に入っておかないと入れなくなるかもしれないから」

どういう意味かと聞きたかったが早く行かなくていいのかと促されて仕方なしに歩き始める。

まあいい、兎に角今はフラッシュメモリの中身の方が先決だ。

パソコンを起動するとアプリからパソコンに通信画面を繋いでしまう。程なくして先ほどとほとんど変わらぬ姿でデスクトップに現れた健に簡単に謝罪をすると先ほどの続きを促した。

「今から送るけど……えっと今アプリ以外繋がってるのないよな？」

「ん？……ああ、そうだが」

「なんか……重いぞ、そのパソコン。何が入ってる？」

「何って……まだ貰って間もないパソコンなんだが……」

回線が重いというわけではないだろう。アプリの通信映像のみを映したに過ぎないため、パソコンに何ら負荷がかかっているはずがない。

けれど実際にパソコンが重いと言われてしまえば、その中身に問題があるはずだった。

「ちょっと……そっち侵入して平気か？」

「……待て、それは……拙い」

健の言う侵入とはこちらのパソコンに対してハッキングを行うと言うことだろうが、少し考えてみてそれは無理だと言うことに気がついた。

否、無理が無理でないかはやってみなければ分からないといったところではあるが、健に今の千草の位置が恐らくはばれてしまうことこそが厄介なのだ。

位置特定も回線を辿れば出来ると以前言われていたため千草はそれだけは止めてくれと答えた。けれど今度は健がそれに納得しなかった。

「何だよ、もしかして実家かそれ？実家戻ってるからパソコンいじるの拙いとか？」

「そうじゃない、が……似たようなものかもしれない」

何と説明すればいいのか大いに悩むところである。

兎に角駄目だと告げると、では今度そのパソコンを触らせると言われてしまう。何やら気になることがあるらしいのだがこれには大変困った。とりあえずそのうちと言葉を濁していたが恐らくは強引に押し掛けてくる日も近いかもしれない。それほどまでに健はこのパソコンに対し、興味津津だったからだ。

「一応解析かけてみたけど、わけわっかんねえ単語ばかりなんだよな。これどこで拾って来たんだ？」

「拾ったわけじゃない。このパソコンの中に入ってたんだ」

「ふうん？ 貰いもんの中にねえ」

データをメールに添付してもらって送信されてくるのを待っている間に話しこんでいれば驚くようなことを言われた。

「とりあえずそれなんだけどな、圧縮データなんだ。色々と見てみただけど結構仕組みは簡単だったな。手間がかかんかったのはいいんだけどなあ……けどあまりにも膨大でちよつと……きちんと開けたか自信ないから、そこだけがあれなんだけど」

あれ、と言われても困るのだ。こちらは素人なのだからもう少し分かりやすく説明して欲しかった。

「……どういうことだ？」

「だから、データの大きさがな、大きすぎんよ。開けたはいいけどこつちも全部確認はしきれなかったんだ。だから後は自分でやってくれよ。つつか……たぶんそのパソコン、それを開くためだけに置いてあったような気がするな。それもしかしてだけど最新型のパ

「ソコンじゃねえ？」

言われてみればそう見える。

真新しいパソコンはみて分かるが、それだけではなくこのパソコンは大変軽い。

そして起動につけても何につけても早いのだ。

お陰で作業がはかどるためいいのだが、最新型と言われれば少々冷や汗をかいてしまう。

そこまでしてもらっていいのだろうか。

家具もそうだが全てを干草のために用意したこの部屋に、そして最新型のパソコン。いたせりつくせりではあるが、こうまでされてもそれだけの価値が自身にはあるのだろうかと考えてしまう。

「俺のパソコンはもう型落ちなんだよ。だからちよつと辛いわけ。

最新型があるならそっちで最初からやるべきだったな。まあ、たぶん開けなくはないと思うけど、どうする？俺がそのパソコンで最初からやり直すか？」

「開いてこのデータが壊れる心配でもあるなら、必要性が出てくるな」

「それも有りうる。兎に角、別に移してやるってことを想定してあるもんかどうかは、それこそハード側に仕組んであるはずだと思っ。だからそこは何とも言えない。俺はそのパソコンを見てないからな」

そう言われると頭を抱えなくなった。

そのうち、ではなく本気で直ぐにも来てもらわねばならないのではないかと思っ。た。

けれど健をここに呼べるか否かで考えれば、答えは否である。無理だった。

うんうんと唸って考え出した答えはこれだった。

「パソコンを……持っていけばいいか？」

健はいつそ呆れたような顔をして

「話を聞く限り据え置きタイプだと思ってたんだが違っんかい」

勿論、千草の下賜されたパソコンは、持ち運びに不便な据え置き型だった。

「それじゃあ無理か……な」

「持ってこれるもんなら持ってこいや」

少々 いや、可也それは難しそうだった。

24 (剣の雨) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

24 (剣の雨)

ビルとビルの合間を縫うように低空で這うようにして跳ぶ雫に、義経は舌を巻く思いがした。

「あれで初陣か、とんでもない奴だ」

「確かに……こうまで一方的にやられるとは思ってもありませんでした」

傷を与えてはならないという縛りがあるからこそここまでやられているのもあるが、それでもこの連戦連勝の土付かすな義経を頭に据える処理班をこうまで脅かせるとは、未恐ろしいものがあった。

まだ完全に目覚めてはいないのは精神へと潜ってみて分かったことだが、その目覚めが訪れたならば、一体あの子がどうなってしまうのだろうか。と義経は親として雫の将来が不安でならなかった。

「これがばれれば六花神の本家のじっちゃんばっちゃん連中が煩そうだな」

「そうしないために私達がやらないといけないんだろっ!」

鷲宮の言葉にかつとなつて塩見が告げれば義経が静かに首肯してみせる。

「その通りだ。行くぞ」

「了解っ!」

四人は遠くへ逃げ小さくなってしまった雫に目を向け高く飛んだ。塩見の力に包まれていなければあまりの風の強さに目も開けられないだろう。

4人が追ってきたことを知った雫はより速度を速める。

ある意味ではオフィスビル街に突っ込んでくれて良かったかもしれないと、こんなときにだが思った。これで駅前などにいかれていれば確実に大騒ぎになっていただろう。帝都の中心部だけあり、どうしてもこんなにも遅い時間だと言うのに眠らない人間が多いようだ。駅前通りへと目をやれば、こんな時間だと言うのに煌々と明かりがともっている。向こうに行かなくて本当に良かったと言いか言いようがない。

義経は無数の刃を構えたままに前を疾駆する雫を捉えるためにビルを跳び電波塔を跳んだ。

脇を常にポジションとして跳ぶ澤田に義経は命じた。

「任せる」

「了解しました。行きますッ！」

「くれぐれも怪我はさせるな」

「無茶をおっしゃる」

それを見るなり塩見は澤田を闇の中に滑り込ませた。

次に澤田が現れたのは鷺宮の追跡する雫の真下だった。

低空を駆ける雫の下から跳び出てくると、その勢いをもって澤田は雫を思い切りまたも蹴り飛ばしたのだ。

「ふっ、うああっ！」

今度はもろに腹部に蹴りが入ったらしく、そのまま雫はなすすべもなく真上に吹き飛んだ。これでは怪我をさせないようにとはいかないだろう。痣で済めばいいがとは思うが、雫のあばら骨が折れていないことを祈るよりほかない。

浮力を付与されただけでなく、今の澤田には義経の力を転写されているため可也の力が発揮できるようになっている。それは単純に

筋力として換算しても相当な力を得ていることになる。普段の義経は己をセーブして過ごしているが、基本的に六花神の血が最も色濃く現れたと言われているだけあり、義経の元からのスペックは有り得ない程高い。

その義経の力を三割落ち程度に威力が落ちてしまうが、それでもほぼそのままをその身に写して動くことが可能になっているのだ。それだけに雫がそれをまともに受けたことによるダメージは計りしえないものがある。

雫は蹴り飛ばされたままに上に吹っ飛ぶと、先ほどまで低空地上より二メートル程度のところを地を蹴って進んでいたと言うのに、今はもう十六階建てのビルの屋上が見えていた。頬を切る風が冷た過ぎて耳の感覚が無くなっていく。

一瞬意識を飛ばしかけるものの、危険を察知した雫の中の何かが警鐘を煩いほどに鳴らし始めた。

咄嗟に身体を中空で吹き飛びながらも猫のようにくるりと半身を捻る様にして体勢を立て直すと、後方にあった高層ビルの壁へと着地する。全面が硝子で出来ている高層ビルのような。着地をした瞬間、びしりと硝子に大きなひびが走った。

垂直に壁に立つとそのまま瞬時に周囲へと視線を走らせる。

どこ、どこだ!?

「こつちだ」

声とともに注がれる視線を感じてそちらへと目をやれば、そこには無数の刃で武装した義経の姿があった。やられる、そう確信した雫は稲妻を身にまとうとそのまま壁を蹴ってその場を勢いよく飛び出していった。それはさながら弾丸のようなスピードだった。

雫は未だ戦う意思が折れない。なぜならば彼女にはやることがあったからだ。それをやり遂げないうちはまだ彼女は死ねない。

「あの人を見つけるまで！死ねないんだからっ！！」

義経が数振りの刃を見えない腕で持つと、空を駆けり様に零へとそれを放つ。遠慮や躊躇いはそこに一切無く見える。

びゅっと凄まじい風を切る音がしたかと思えばつい後を追うように刃を追いかけ、風が駆け抜けていった。

「おまつ！」

鷲宮は流石に声を無くした。まさか娘相手でも容赦なしに武器を構える。どころか武器を遠慮なく投げつけるとは思ってもみなかったのだ。

けれど澤田が鷲宮の傍らまで降り立つと違つと告げる。

「あれはフェイクです。それに」

カフスポタンを外しながら澤田が袖を捲り続ける。流石に彼は埃まみれだ。

「あれは当たっても痛くないでしょう。まあ、……胴体を貫いたりでもしないかぎりは大丈夫じゃないですか？」

「なんて曖昧?! 痛いのか痛くないのかどっちかにして!」

「じゃあたぶん痛いです」

「たぶんはいらねえって」

澤田曰く、あれは刃物といっても刃は潰して作った非殺傷の武器らしい。というよりも剣と言っても澤田が作ったものはどれもこれも、簡単に物質をその形に変化させただけの模造品でしかない。本物に近づけるために刃を研いだ、などということもないため、そ

の剣は存外脆い。

だが、如何せん投げつけた威力が問題である。

あれをまともに腹に食らいでもすれば胴体が上と下とに分かれてしまっただろう。そんなことをさらりと言われれば鷲宮の口からは主を罵る呪詛が飛びだした。

「義経！あんの野郎……ッ！！お嬢を殺したら許さねえぞ！！」

傷つければどうなるかと部下を脅しておいて、自分で娘を殺すつもりかと呼ぶなり、鷲宮はその場を大きく跳躍した。彼には銀盆に映り込む雫と義経の姿がまざまざとリアルタイムで視えているのだ。自分の主が愛する娘を殺す瞬間を視たくないがために彼は跳ぶ。けれど澤田はそれに対してやれやれと肩を竦めて追っただけだった。

「もう詰めに入っていますのに、嫌ですね。からかうと直ぐに本気にするんですから」

そして澤田は塩見に思念を送り闇夜に溶けた。

迫りくる刃に空中では矢張りどうすることも出来ない、雫はまたも空を割って逃げようとするが今度は刃から逃れるべく割った瞬間、跳び出した空間には塩見が雫を追って上空から降ってきた。

「逃がさないっ！」

義経は投げた武器をそのままビルに突き刺す手前で何とか武器を手繰り寄せると塩見の元へと跳躍をする。

彼女が居るのは電波塔、その展望台だった。

「邪魔ああああつ！！」

雫は巨大な一面のガラス窓に思い切り押しつけられ拘束されていたのが不愉快だったのか、

それとも先ほどから追い回され続け攻撃を受け続けているのが煩わしかったのか、まるで女とは思えないような力で拘束にかかる塩見のその身体ごと、一気に燃やしつくす勢いで雫は自らの身を稲妻で包み込んだ。

「……ツツ！！なんて、……強引過ぎるだろっ！」

稲光は雫の身体から進ると、そのまま展望台部分の硝子を端から碎き割っていく。パンパンと分厚い硝子窓が爆ぜる音に雷撃の音が重なり激しい音を周囲に響かせていく。

塩見は自分まで焼かれては堪らないと展望台上の鉄柱部分に跳び退る様になると、今度は雫が攻撃に転じてきた。追って今度は塩見の上空まで一気に跳躍してきた。

上から叩きつける様に攻撃を仕掛けるつもりと分かる体勢に、今度こそ塩見は逃げ場をなくした。先ほどの塩見と全く同じ戦法を取られても、今度の場合は足場が不安定過ぎるのだ。

雫は今、美しい一匹の獣だった。

「邪魔ばっかりしないでっ！私はまだ、死ねないんだっ！」

女豹のような爛々と闘志を燃やして向かってくる瞳は赤く、そしてその腕には死神の鎌よりも余程物騒極まりない　雷撃を放つ前なのだろう　光の玉のように圧縮された稲光がぱりぱりとその手より放たれるのを待ち望んでか鳴いている。

間に合って、お願い！

塩見は来る雷撃に思わず目を瞑ってしまふ。

攻撃が来ると覚悟したその時だ、雫の背後に手繰り寄せた義経が月を背にして浮いていた。

「麗、呼ぶのが遅い　　おいたが過ぎたな……これで、チエツクメイトだっ！」

そう告げると義経は右腕を大きく揮う。すると中空で塩見を狙いまっさかさまに落下していた雫に視えない巨人が襲いかかった。

ぶおっ　　空気が吸い込まれるように雫の身体目がけて駆けていく。すると雫の身体を巨大な見えない腕が思い切り吹き飛ばした。

ダアンツと生々しくも電波塔の鉄骨部分に肉がぶつかると鈍い音が響いた。

生きているのが奇跡のような一撃だった。その攻撃に雫は華奢な身体がばらばらになりそんな程の衝撃を受けるも、それでも死んではいなかった。どうやらこちらも義経達同様に肉体強化を施しているようだ。だが、そうでなければ一撃で死んでいただろう攻撃に、塩見も流石に青くなる。

「……ーッー！」

声にならない悲鳴を上げて雫はめり込んでしまった鉄骨から身体を起こそうとする。まだ動けるのかと義経は驚愕をその美しい面に張り付けていた。

「義経っ、それまでだ」

「間に合いましたかね？」

「ああ、ちょうどいいタイミングだ。流石だな」

遅れて登場した鷲宮と澤田が駆け付けければ、脇と背後、そして前面を完全に塞がれた状態になったらしいと理解する。

ぎりりと雫は歯を噛みしめ鳴らす。

四方を完全に取り囲まれた形になれば後はもう空間を強引に分け入って逃亡するしかない。

だが、それを許す義経ではなかった。

完全にこの瞬間、雫は死を覚悟した。

雫が身じろぎをした途端、雫の身体を鉄骨に縫い付ける様にして義経は思う様刃の雨を降らせてきたのだ。

「きゃああああっ!!」

雫を支える鉄骨が背後でひしゃげていくのが分かる。凄まじい程の量の刃が一気に降り注いだのだ、当たり前だが鉄骨は見るも無残な姿をそこに晒していた。

息をするのも躊躇う程に、それは雫の身体に密着していた。

25 (君は誰) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

25 (君は誰)

「なんで……」

殺さないんだろうとは口に出来なかった。

だが、ただただ不思議でならなかった。これが敵ならば、四方を取り囲んでどうして自分を殺さないのだろう。雫は恐怖を内心では抱えながらも必死で考えた。

殺さない理由を、必死で考えていた。

雫の身体は今、僅かでも動けば刃に切り刻まれてしまうように刃物の檻で囲まれていた。そう、全身を囲むように人型に刃が刃を向けて雫を取り囲んでいるのだ。これでは空間を分け入ることも適わなかった。

完全に身動きを封じられてしまっていることが恐怖を募らせるものの、だがそれ以上の手を打ってこないことが奇妙だ。

呻き声に近い声を上げれば目の前に義経がふわりと舞い降りてきた。その距離はもう、一メートル程もあいていない。

最後の一撃を入れるのは間近でなのかと雫は思った。何故近づいてくるのか、最早その意味をまともに考える余裕は雫の中には無かったのだ。

身動きが取れないときにこんなにも傍近く、敵と認識している人間を寄せてしまうととはと、最早生きることが適わないのかと雫が覚悟した時だった。義経が悲しげな眼差しを向けてくるのだ。

「……何、その目は」

手負いの獣の如く睨みつけてくる眼差しはどこまでも他者を威嚇するものしか存在しない。

信用を得られるはずもないだろうとは分かっているが、それで

もその中身が愛娘であると知っているだけに義経は辛かった。

雫の頭部にほど近く置かれた刃を全て片腕を払うようにして薙ぐだけで刃を払い落とすと、雫の顔に自分のそれを寄せる。

「な、何す……やつ！やつ！やつ！」

「動くな……手荒なことはしたくなかった」

煌々と光り輝いていた雫の額にそつと自分のそれを重ねれば、雫から発されていた光がうつと消え失せた。

そして今度は義経の身体から青白い光がじわじわと二人の身体を包みこんでいく。

「やめ、止めて……何、やだっ！やだっ！やめろっ！！」

義経は雫に二度目の精神感応を始めたのだ。

自らに侵入してくる義経に雫は半狂乱になりかけるものの、義経は真摯な眼差しで静かに告げる。

「頼む、俺を受け入れてくれ」

あまりにも静かなその言われように、雫は拒否することを一瞬忘れた。するとそれをいいことに義経は一気に雫の中に侵入していった。

ゆっくりと、だが確実に義経は雫の中に侵入を果たしていくのだった。

「……………く、あ……………はっあああつ！！」

「大丈夫、怖くない……………だから、受け入れてくれ」

「い、や、ああああ……………ああ、あ……………」

疲弊しきつていたためか雫の精神に簡単に侵入を果たすと、今度は至って楽に雫の奥深くへとやってこれた。

先ほど侵入を果たした水場がもう目の前にある。

けれど先ほどと違うのはその水の中から光が零れて溢れ出てきていることだろうか。

それは神秘的な光景だった。

水面から上空へ、塔へと向かって光の玉が水泡のようになぐにやぐにやとした、形を持たない形となって登って行くのだ。

そして水の中を見てみれば光が少なくなっているかと思いきや、こちらは何故か上に光を溢れた分だけ減るといっわけでもないらしい。逆に光が溢れんばかりに膨張しているように見える。

義経はその水の中に跳び込むと、先ほど触れられなかった光の玉に触れるべく一気に奥へと泳いでいった。

光の玉の奥には儂げな風情を醸し出す光の精が居た。

全身を淡い光で包みこんだ光の精は弱弱しく義経へと訴える。

<入ってこないで……>

どこか痛みに震えている様子に義経は気遣わしげな目を向けた。

<入ってくるな……こないで……>

二度三度と訴えてくる声を聞くも、義経はそれには構わず水を分け入って光の精　雫の元へと向かっていく。

雫はどうにかその場から義経を追い出したいようだが、義経とて二度も追い払われるわけにはいかなかった。二度も任務に失敗する

なんて真似は遠慮願いたい。

裸体を目の前に晒してしまうことになったことを悔やんでいるのか、雫はしきりに見るかと告げる。けれど義経は光の台座にどうにかしがみ付くのがやっとの様子。雫の姿に目を奪われていた。

それは天女か何か　人ならざるもののような姿だった。

人外の美しさに息を飲む。

光の精、天使、天女、他になんと言い現わせばいいだろうか。

美しくひかり輝く乙女の姿に心を奪われていれば、乙女は悔しい悲しいと咽び泣き始める。それは見る者の心をも悲しみに染めてしまう悲痛なものだった。

<まだ、見つけれられないのに……どうして、こんな奴に……>

「こんな奴にとはまた、嫌われたものだな」

肩を力なく震わせて嘆く雫の足元にゆっくりと降り立つと、その華奢な背に手を触れる。

「漸く、触れることが出来た」

触れる寸前で毎回逃げ続けられていたことが、彼の中ではあまりにも辛く悲しい出来ごととして記憶に残っている。

愛娘が突然変貌をきたしたかと思えば、今度は自分を忘れて飛んでいってしまう。これが悲しくなくて何だと言っのだろうか。

そつとその背を撫でた後、光を束ねたような美しい白く輝く髪にそつと触れた。それは壊れものを扱うように丁寧な仕草だった。

真珠のような煌めく涙を一粒零すと、雫は上体をゆっくりと起こした。

<……お前、誰？>

触れられてみて何かが雫の中で変わったらしい。義経を肩越しに振り返るとその顔をまじまじと見つめ始めた。

義経はそれには答えず

「敵じゃない、とだけ今は答えておく」

<敵じゃ、ない？>

「ただ俺は、君と話がしたかっただけなんだ」

それが本当だとは直ぐには信じられないに違いないが、それでも聞く価値を見出しはくれたらしい。雫はその場ではてなと言う表情を浮かべてはみせたが、それでも警戒心は幾分薄らいだ様子だ。

そしてきよとんとした雫が瞬きをぱちりと一つしたのだが、困ったことにたったそれだけと言うのに、瞼の周りで光が弾けたように見える。それが弾けた瞬間、それこそ魔法を使われたのではと思える程に心を奪われてしまった。

「……末恐ろしいな」

まだまだ雫を子供と思いたかったが、それもそろそろ難しくなるのかもしれないと考える。

屋敷の奥深くに閉じ込めてしまおうか。誰の目にも触れさせぬようにして大切に慈しもうか。

こんなにも美しく育った　それもかなり劇的なまでにはあるが　娘の姿にそんな馬鹿なことを考えてしまうほどに義経は心配していた。そしてついでにはあるが、やはり許嫁云々の話は白紙にしていたきたいと真剣に考えていた。

26 (君の名は) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

26 (君の名は)

義経はそつと雫を助け起こすと台座の上に腰かけさせる。

その際に少し触れた腰は異様なほどに華奢な腰だった。現実の雫と同じくらいかと思うと義経は少々悲しくなった。

どうして雫はこの状態にならないと育たないんだ？

栄養は完璧、成長を妨げていると思われるストレスからも徐々に解放してやれるとは思うが、一体何が原因なのかは今のところ突き止められてはいない。

あまりにも成長が遅すぎるために最近では不憫過ぎて堪らなくなるのだ。

身長もその細かな部分の見た目もそうだ、成長の兆しが見られないことが周囲に不安を与えていた。

あどけないばかりの見た目には別に不安よりも愛しさを覚えるが、それでも背がある時より全く伸びなくなったことには不安よりも先ず不憫さを覚えた。

義経は雫に尋ねる。以前の反応からして、これだけは最初に確認せねばと考えていたことだった。

「名前は？」

<……まだつけて貰えない>

悲しそつに雫は目を伏せながら答えると、義経はわけのわからないといつた顔をしてみせた。いや、実際にわけがわからないのだが。

「まだつけて貰えないってどういうことだ？」

矢張り名は無いのかと思ったが、雫の名ことその”降矢雫個人”としての記憶を無くしているだけでなく、雫は誰かに「名を与えて

貰うことが出来ない」と言っているのだ。

それがどういふことなのかと考えて、一瞬言葉に詰まった。

自分以外の保護者がこの状態の雫にはついていないことになるのだろうか、そこまで考えたところで雫が更に続けていった。

「
> がか様がまだ名前は要らないって言ってたの。だからまだ名は、
ない……」

「……」

一体これはどういふことなのか。

今義経の目の前に居るのは極度なまでに不安定な存在でしかない、娘である前に血族の娘だった。そんな雫に名をつけられないと”がか様”が言つとは一体、どういふことなのか。

そのかか様と言う人物がこの場に居るのか、はたまた雫を現実世界で何らかの形で言うことを聞くように手なずけたのか あまりにも分からないことだらけだった。

現実世界でそのかか様とやらと雫がであったのであれば、それこそ雫は強烈な暗示にかけられていると推察出来る。

それも、悪いことに恐らくは六花神の人間が暗示をかけた張本人になるだろう。

だがそれでは説明がつかないことがあった。

六花神に雫は、完全に無能者として知れ渡っているのだ。だが、今日敵対してみても感じたのは、無能と呼ぶにはあまりにも強すぎる力をその身に宿していたことだ。

それを六花神がもしも知っていたとすれば、それこそ無能扱いする必要性は皆無なのだ。

まだ雫が六花神に連れ去られていない、それこそ答えだろう。
そう結論づけられる。

だがしかし、精神世界に本人以外の人間がいるとは今まで聞いたことも見た事も無い。

では、それこそかか様とやらは一体誰なのだ。
それこそ有り得ないことではあるが、もしかや六花神ではないのか、
とも考えた。

ならばそれは一体どこの組織のものなのか。
まさか研究機関が独自に　とまで考えて思う。だが、この雫を
研究畑の人間が、どう手なずけると言うのだ。

そもそもまだ気になることはあった。

雫をそもそもがだが、不安定にしたのはかか様という人物なので
はと疑いを持ったのだ。

かか様って誰だ？

何者なんだ？

<お前、本当に誰？>

「……誰だと思う？」

<何だろう、懐かしい感じがする……かか様が言ってた、よしつね
みたいに……>

そう告げるなり雫は義経へと手を伸ばす。

義経は雫の言うよしつねが自分のことではないかと思うものの、
確信が持てない。

だが、あまり他に聞かない名であるため、まさかとは思った。

<かか様が言ってた、よしつねが来るまでここから出ちゃいけない
よって。けど、よしつねはまだ来ない。まだ、来ないの……>

会いたいと零しながら雫は義経の腕にそつと触れると、次の瞬間、
それは起こった。

義経の腕に触れた瞬間のことだった、雫は雷に打たれたように、
背を思い切りしならせてぴたりと止まった。まるで義経に感電でも
したとでも言うようにそれは痺れたようにびりりと瞬間身体を震わ

せたのだ。

ついで雫が意識を取り戻した後で義経に言う。それは信じられないものを見るような目だった。

<お前……よしつね？>

「……」

<お前がよしつねなの？>

ここまでくれば否定することも意味はない気がしていた。

否定する材料も無いのだ。

義経は首肯すると慎重に尋ねる。

記憶が戻ったということだろうか。それとも何か義経に触れることによって、義経に関する記憶が雫の中に流れ込んだとでもいうことだろうかと目まぐるしく思考を巡らせていく。

「そう、だ……が……どういうことだ？もしかして思い出したのか？」

けれどそれあっさり否定されてしまったらしい。

雫は嬉しそうに花をも欺く笑みを浮かべれば、義経を見て感極まったかのごとく涙を流し始める。水の中だと言うのに、涙が見えるとは不思議なことだとぼんやり義経は考えた。

するとぼんやりとしていた義経の目の前で、雫の身体が急に青く光始めたのだ。

それを見つめて雫は嬉しげに眼を細める。

白く、そして薄らと金に煌めいていた光に、今度は青い光が点つたかと思えばそれは雫の手のひらに集束していく。

<暖かい……きた……やっと、一つ目がきたよ>

青い光はそのまま雫の手に吸い込まれると、雫は手のひらを胸の中心にそっと押し当てる。

そこで一瞬ふわりと雫の身体が薄青く光るとそのまま元の白金色に戻った。

一体これはどういう現象なのかと、目の前で起こった事態についていけない義経を置き去りに、雫ははにかむような可愛らしい笑みを浮かべて告げる。

一人だけ理解したようなその物言いに更なる混乱が自分の中に生まれたのを感じたが義経はまあいいかとも思った。雫が笑ってくれるならば、今はそれで良しと考えたようだった。

<戻ってきた、私の力が。よしつねが来たら戻る様にしておくってかか様言ってた。よしつねと、やっと会えた!>

涙して雫は義経の胸へと飛び込んでくる。それを尻もちをつきながら義経は受け止めると、何が何やらといった様子だが、それでも敵意を向けられなくなったただけましかと思いなおす。

「……行こうか」
<うんっ!!!>

目の前に広がるのはもう、暗い水底ではない。夜の帳がおりた冷たい風が吹く街の中だ。

雫はいつの間にか怪我が癒えていた。

もう大丈夫だと判断した澤田は、手をすっと上げると雫を取り囲んでいた無数の刃が消え失せる。

拘束を取り除かれた雫は、目の前で穏やかに笑みを浮かべる義経に顔をくしゃくしゃに歪めて飛び付いた。

「やっと会えた!会いたかったよしつね!」

まるで恋人達のラブシーンのようである。

先ほどまではあれほど警戒心を剥き出しにしていたというのに、劇的なまでの変わり様だった。真っ直ぐに義経の胸へと飛び込んでいく雫の姿に、周囲はわけが分からなかった。

「お帰り」

だが、雫の名を義経は、呼ぶことが出来なかった。

27 (互いに疑問に思うことがある) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

27 (互いに疑問に思うことがある)

おかえりという言葉に雫は素直に嬉しいと感じた。だが、その嬉しいという気持ちと同時に、雫の中に納得のいかないものがむくむくと首をもたげてわき上がる。

確かに逃げられるから追いかける、その道理は理解出来た。

彼は雫と話がしたいと言っていたのだから、それは当たり前前に雫が逃げれば追いかけるだろう。

だが、ならばどうして話をしたいがためだけに追いかけていたはずの雫を、ああも執拗に追いかけてまわし続けた上、更には遠慮容赦なく攻撃を仕掛けてきたのだろうか。

ちよっと待つて見せるくらいの余裕を持ってくれたのであれば、と考えたところで雫ははっとした。確かに何をされずともその場を自分は後にしただろうと思った。

雫には見つけ出さねばならないものがある。だからこそこの場に留まるわけにはいかなかったのだから。

でも、何で攻撃までするの？

それだけが雫にはやっぱり納得がいかなかった。

目を吊り上げながら、やっと出会えたばかりの探し人へと流石に先ほどのことはどういう見かときつい口調で問いただします。

「なんで痛いことするの。剣投げたり、蹴ったり……よしつね、敵”か”思った」

敵というのは何ををもって敵と言つのかと尋ねれば、雫は当たり前前
のことを話すように口を開く。

「敵は、敵。ムカガミの中のニンゲンは、全部敵って言った」
「それも君が言ってるかか様が教えてくれたのか？」
「うん。かか様は何でも教えてくれたよ？ムカガミはよしつねだけしか頼れないからって」

つまりは義経のことをそのかか様とやらは知っているわけだ。

義経は雫に視線を向けたままに思考を巡らせる。

どういうことだろうか。義経をかか様とやらは知っているらしいが、義経にはその相手が誰なのかが全く分からない。

大体かか様ってのは何だ？

かかと言つ名そのものを指すのか、それとも母を意味するのかが良く分からない。

ただ雫にそれを問いただしてみたところで答えは得られないため、どうしようもなかった。

このもう一人の雫には、決定的に足りないものがあった。

そう、経験則から学ぶ知識などがごっそりと抜け落ちたかのように何も無いのだ。

いや、何も無い言い過ぎかもしれない。ある程度のものを知っているのは、こうして相対して会話をしている義経自身が身をもつて知っている。

だが、そうした経験則から学ぶべき物事の一切が無いお陰で、質問をいくらしてみたとて欲しい答えが返ってこないことの方が多い始末なのだ。困ったことに。

そもそも義経からしてみれば、こちらこそが重要なのだ。

雫は攻撃をしてくることを咎めるのかもしれないが、義経からしてみればこちらを咎めたい。

「会いたかったなら、何故逃げる？今まで散々逃げてくれたおかげ

でこつちは大変だったんだぞ」

「でも、……よしつねがよしつねだって分からなかった。かか様が攻撃してくる力を持つてる奴らは全員敵だって聞いてた。よしつねのこと、だから最初は敵だと思ったもの。だって……だから、敵だもん。敵に捕まったらいけないもの。だから逃げたんだもの。なのに、よしつねが怒った……」

「怒ってはいない。怒っては」

ただ猛烈にかか様とやらに殺意　もとい、怒りがわいただけだ。

義経は頭が痛くなってきた。

かか様とは本当に一体何者なのだろうか　そんなことを義経が考えていれば、雫の長く伸びたばかりの真っ白な髪がふわりと風の下から攫われるようにして広がった。

すると雫の手のひらに淡い光が溢れだし始めたのだ。

何をするつもりなのかと一瞬義経は身構えたものの、雫はお構いなしである。そとと義経の擦過傷に手を置くようにすると、傷に向けて光が吸い込まれたのだ。

熱い　そう思った時には光はもうどこにもなく、濃い闇が広がっているだけだった。

「!?!」

「綺麗になったよ、よしつね」

傷のなくなつた滑らかになつた肌に手をすべらせると、その上に頬を押し当てて満足げに告げる。

どうやら傷を癒してくれたらしいと知れば、義経は全身に負っていた小さな手傷を見やり、ついで有り得ないものを見るかのように呻き声を発した。

「流石に、見るのと受けるのじゃあ全く違うようだ」

先ほどまで擦り傷を少々負っていたはずの部位はもうどこにも存在しない。

「もう、怒らない?」

ああ、それで治してくれたのか。

義経は怒られたから許して欲しくてどうにかこうにか、考えあぐねた上で出した雫の結論だと察すれば苦笑して言ったものだ。

「ああ、有難う。もう、怒ってない」

「良かった! よしつねもう痛くない?」

「痛くない」

美しい完璧なまでの美貌を誇る少女が可愛らしく微笑むと、絵も言われぬ程の魅力的な表情がそこに生まれる。

盛大に破れ、解れてしまった服は仕方ないが、それでも傷が無いだけ随分とマシになったほうだろう。そう考えつつ義経は全身に違和感がないかどうかをくまなく調べ始めた。特に問題は無いようである。

「凄まじいな……」

今まで一族の中で癒し手は生まれたことが無かった。それは六花神の始祖からずっとだ。それを思えば本当に希有な存在だと雫は言える。

いつまでもいつまでも、そんな能力者が生まれることを願ってやまなかった。

元より六花神は戦うことを宿命づけられた一族である。だからこそ癒し手をずっと求め続けていたのだ。

だが、いつの世であろうともその存在は生まれ続けることが無かった。

それがどんなにか欲しいと願いつづけたとて叶わなかったのだ。けれどまさか、そんな奇跡のような存在が己の娘として生まれ落ちてくると誰が思うだろう。

どこもかしこも全く異常は見られなかった。

実に不思議な体験だとは思うが、雫の癒しの能力は味わってみなければ恐らくは分からないだろう感覚だ。それこそ筆舌に尽くしがたいと言つに相応しい感覚だった。

手指　その指の先までが全て完璧なまでの精度を誇り、精密に作りなおされていくような、そんな不思議な感覚だった。

肌の一枚一枚、いや、それどころか細胞の一片までをも完全な健康体に作りなおされたかのような、圧倒的な清々しさだ。それを今、義経は得ていた。

「まるで、生まれ変わったような感覚だな」

「生まれ変わる？」

鷲宮がどういふことかと尋ねてくる。こちらは無傷かもしれないが、その隣に立つ二人は少々　というか、可也衣服はずたずたで切り傷擦り傷があちこちにあるようだ。満身創痍とはいかないまでも、あまりこのまま外に居続けるのは些か問題が　いや、非常に宜しくない格好であるとは言えよう。

「どうせなら私達も綺麗に治して欲しいところなんだけどな。その感覚とやらも味わってみたいし」

塩見が肩を自分で叩きながらそう言うも、雫は何をする気も無いようである。むしろ塩見達を警戒しているのか、義経の背後にさつと隠れる様にしてその背にしがみついている有様である。これでは

治療を期待するのは無理なようだ。

塩見は疲労を色濃く滲ませた顔で言う。自分も入れて四人もの人間を同時に跳ばすのは大変骨が折れる仕事なのだ。それだけに疲労困憊 そんな言葉では到底言い表す事が出来ないほどにそれはそれはきつかった。

「正直、本気でしんどいからやってくれるのをちよっぴり期待してただけだなあ……残念だ。ほんっと……残念」

「おいおい、大丈夫か？」

澤田は涼しい顔をしてはいるが、塩見はと言えば本気で辛そうだった。

顔色は夜闇であるため分かりにくくはあるが、それでも悪いのは見てとれる程悪かった。

その肩に手をかけてみれば体温が若干下がっているようである。冷えたのか、それとも そう考えてみたが、ここでは満足な治療は出来ないだろう。

それこそ、雫が手を貸してくれるつもりにでもならなければ。

塩見は辛そうに笑うと、それでも場を和ませようとしたのか鷺宮にこんなおねだりをしてみせた。

「んー……本気でしんどい。鷺宮君、おんぶ」

「いやまあ……役得と思つて引き受けてしんぜよう」

につこり鷺宮が笑い、両手を広げる。傍目から見ても実に怪しい笑みである。

さあ来いと言つことなのだろうが、少々、と言つよりも物凄く遠慮をしたくなつた。

塩見はぶんぶんと首を力強く振ると、引きつる笑みを浮かべ率直な感想を述べて遠慮をさせていただいた。

「あははーあ……遠慮しておくよ。なんだか貞操の危機的なものを感じ取ったから」

「あら残念」

肩を竦めて仕方ないとはかりに言うものの、鷺宮は本気で塩見を心配していた。

能力者の多くは、能力の使いすぎによる死を迎える。

だからこそ今の顔色の悪さがそれにならなければいいと思ったのだ。

28 (知らなければならぬこと) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

28 (知らなければならぬこと)

そんな中、雫がおずおずと口を開く。

「よしつね、この人達は敵なの？」

この人達と言うのは恐らく、「よしつね以外の人間」である義経の従者たる三名を指すのだろうと思われた。

すると義経は背後に隠れたまままでいる雫に、肩越しに優しく声をかける。それは否定する言葉だった。

「いいや、違う。俺のものだよ」

「よしつねなの？」

人を物扱いするようなこの言葉に、実際に言われた側になる三人はと言うと、それを受けて怒りを感じるわけでもない様子だ。むしろどこか誇りでも感じているような、そんな誇らしい笑みを浮かべている。

そして義経自身それを当たり前のように告げるのが何とも形容しがたいものがあるが、そこにきて受け取る側もそうなのかと至極当たり前に受け止めるのが何ともいいようがない。

といつてもそれを一般の人間に向けて言えば当たり前だが反感を買うのは必死である。けれど今の雫には分かりやすいようにと言葉を選んで口にしたようである。

続く言葉はこんな言葉だった。

「そう、俺の従者。意味は分かるか？俺のものなんだ」

「うん。狸々緋のよしつねに、守り手がいるのは分かる。契約者っ

てことでしょ？」

教えて貰ったことのある知識をつつかえつつかえ口にする雫の姿に、義経もなるべく分かりやすいよう言葉を選んで口にしてやる。とは言え、どうやらかか様とやらが雫には相当な量の六花神についての知識だけは植え付けてくれたようだ。よもや契約者についても教えてあったとまでは義経も思っても見なかった。

「そうだ、随分昔になるが、契約を交わしてからずっと、俺の傍を離れず常に守ってくれている、大事な仲間なんだ。それが今、怪我をしている。分かるな？」

「……うん」

雫の瞳が僅かに揺れた。

不思議な虹彩を持つ雫の瞳に、どこか怯えのようなものが入り込んでいる。だがそれも当たり前かもしれない、義経はその薄い肩を掴むと、責めるような口調で雫にこんなことを告げたからだ。

「怪我をした理由は分かるか？」

分からないはずがないだろう、そう言外に告げてくるかのように、その瞳には雫を責める色があった。

それを見れば雫は思わず視線を逸らす。その強すぎる眼差しを、まともに受け止めることはどうしても出来なかった。

「……私を追いかけてきて、……それで、私が攻撃したから……」

義経はどこまでも容赦をするつもりが無いようだ。

甘さの一切を無くした言葉は鋭い刃のように雫の心を抉りつける。

「そうだ。君が攻撃を仕掛けた。そして彼らは負傷した。 とい

つても、その多くは飛んできたコンクリート片や硝子片で出来た怪我だからな、そこまで大きくはない。麗の場合は追いかけている俺たちに力を使い続けた結果だから、またこれは違うが……」

そう言われちらと視線を向けて見れば、そこには頬に滲んだ血の跡も生々しい塩見や澤田の顔があった。確かに怪我もそこまで大きくは無いただろうが、それでも見ていて気持ちのいいものではない。

雫はきゅっと唇を引き結んだ。

「じゃあ問題だ。何故、そのコンクリート片が飛んできたのかは分かるか？」

「……コンクリート片って、なに？」

雫の物知らずさがここにきてまたも現れるが、それに嫌な顔を一つせずに義経は答えてやった。

「さつき君が壊した建物を構成している物の一つだ。硝子もそうだが透明な板のようなものだ。それ自体は殺傷能力はない、が、それでもその端などを触ったりすれば手が切れたりする。とても危険なものだ」

雫は先ほど足場にした高層ビルの硝子片を思い出した。

足場に数瞬という程の僅かの間だが、することになったあの透明な壁、あれが硝子というものかと理解すれば、それがどれだけ危険なものだったかを思い知る。

そして碎いて壊した建物、それを吹き飛ばした事実もまた、彼女を打ちのめした。

雫は頂垂れるようにしてぽつりと呟くように先ほど自身がしたことでであると、それらを認める発言をした。

「……私が、壊して……だから、その人達は皆、怪我したのね」
「そうだ。だから、怪我をしている。どうしてそんなことになったかは覚えているか？」

そんなことはわざわざ言われなくとも覚えていた。

「よしつねが、追いかけてきたから。それに、攻撃してくるから。だから、私は攻撃し返した……」

語尾が言い訳がましいものになってしまったが、それもしょうがないように思われる。

雫からすれば、起きて早々に目の前に居る人間が自分の身体の自由を奪っていたのだ、恐怖から即座に逃げることを選択したとしても、誰が悪いと彼女を責められるのだろう。

誰もが責められるはずもないのだ。

雫は義経を見つけるまで、味方となるものがかか様以外一人もいなかったのだから。

守り手たる契約者、それを得ることで初めて義経自身も精神の安定を得たのを思い出す。

けれど、だからといってこれをそのまま放置しておくことは出来なかった。

始めが肝心とは良く言ったもので、今の雫にも始めのうちの教育が肝心と考えたらしく、義経はこれを常識としてきちんと備え付けることを第一とすることに決めたようだ。

自分のことだけは信用してくれるつもりになったららしい雫に、言い含める様に告げる。

「そうだな、その点に関しては俺も悪かったと思う。だが、君はいけないことをしたんだ。だから俺は攻撃をした。それは理解して貰いたい」

「私、何も悪いことしてない!!」

雫はかっとなって叫ぶと、義経の腕を振り払おうとした。けれどそれを許せるはずもない。

駄目だと逃げようともがく雫を力で押さえつけると、良く聞くんだと続けようとする。

だが、そこに割って入ってきた声があった。鷺宮である。

「いや、したぜ、お嬢」

「……」

雫はどうしても義経以外の声に答える気がないようにである。鷺宮が何か口にしても、ふいと視線を逸らすだけで何を返そうともしない。

澤田が鷺宮の説明を繋ぐ形で引き受けた 子供に接するようにしてやんわりとした口調で澤田は出来るだけ雫を刺激しないようにして口を開く。それは保育士などの職業に従事しているのではと思わせるほどの堂にいった話し方だった。

「お嬢様、今までは外に出して貰えなかったんですよね？」

「……」

「ですが外には外のルールがあります」

「るーる？」

人の警戒を解く喋り方というものもあるらしいと関心していれば、そんな関心をよそに、雫が澤田の声に漸く答えるつもりになったらしい。口を開きだした。

最初はただの端的な質問だったかもしれない。それでも先ほどまでは全く言葉を発せず知らんふりを決め込んでいたのだから、随分な進歩だと言えよう。

澤田が言葉を更に分かりやすく噛み砕いて説明してやる。
すると雫も少しずつだが会話をし始めた。

「決まり事です。約束ですね。約束は分かりますね？」

「……分かる。約束したら、絶対に守らないといけないんだ」

「その通りです。素晴らしい答えだと思います。 外のルールは大変お嬢様には窮屈かもしれませんがね。外では人は飛んではいけないのです」

これはこちらの世界では当たり前ではあるが、人は元来、空を飛ぶものではない。

そしてこれもそうだが、一部この世界に存在する、能力者達だが、これらにも能力に制限がかけられており、全ての人間が空を飛べるわけではないのだ。

だからこそ、空を飛ぶことは人の注目を集めてしまう。

それこそ、能力者達の中でも際立って異能と呼ばれる能力ゆえに、雫がその能力を知られてしまえば手に入れようと躍起になって上は動き出すはずだ。それだけは避けねばならなかった。

ただでさえ、雫には癒しの能力があるのだ。目立つ行動は避けるように教え込むのは必要不可欠だった。

29 (それは始めて感じる罪悪感と言つ感情) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

29 (それは始めて感じる罪悪感と言っ感情)

「……何で？だって……それじゃあどうやって移動するの？だって……ねえ、本当に飛んじや駄目なのよしつね」

だが、彼女にとってみれば移動手段はそれ以外ないらしい。そうと知れば本気なのかと一瞬唖然としてしまふ。それはこの場にいる面々、全ての思いだった。

「おいおいマジかよ」

「私だって、自分の身体をずっと支え続けたらきつついよ？なのに……もしかしてさ、能力の限界値、底なしなの？」

跳躍能力は大変貴重とされているのは、使い勝手がよすぎるが、その分使いきって直ぐにも能力者が死んでしまうことからその希少性が高まっている能力だ。

塩見はその中でも相当希有な存在でもある。その跳躍出来る距離、それが他の跳躍能力者三名よりも一番長く、継続時間も多いたためだ。だと言っのに雫の話の話を聞いていると、まるで一日中でもそこから中を跳び続けられるようにすら聞こえる。

信じがたいことだった。

塩見は少し羨ましいと思った。それだけの力があればもつと義経の力になれるのにと、そんなことを考える。

そんな塩見の様子をちらりと見ながら雫に向き直って義経は、どうやら初歩の初歩から教えなくちゃならないらしいと、今までも分かってはいたことだったが、それでもこうまで酷いとは思っても見なかったらしく、痛み始めた頭にそつと手を当てながら言っ。

どうしてかか様は、こんな簡単な常識については教えておかなかつたのか、ある意味では不思議でならなかつた。

「ああそうだ、駄目なんだよ。ここは飛ぶことが許されている場所じゃないんだ」

「……なんで？だってそんな……変」

お前の方が変なんだよとは言えず、義経は大いに困り果てた。

塩見も困っている様子だ。こちらは自分が同じく跳躍能力を持っているからか、移動手段にこれをしょっちゅう使っているからだろうが微妙に居心地が悪そうである。

そんな塩見をぎろりと睨みつけると、澤田は微笑を顔に浮かべて雫へと告げる。

「外にはお嬢様や私達のように、飛べる人間が少ないのです」

「そう……なの？」

信じられない様子である。

当たり前前に跳べる雫の常識と、こちらの一般常識とは、恐らくは天と地程の差もあるのかもしれない。

「そうだよ。だから飛んじゃいけないんだ。他の人達は、飛べないのが当たり前なんだ。だから、騒ぎになる」

「……さわぎ？」

騒ぎとはと聞かれて義経はそうだな、と例え話をし始めた。

「君はこの世界が、その移動手段の多くを徒歩　つまりは歩くことによって行われていると知って、驚くか？」

「……まさか、一日中歩くなんでないでしょ？そんな……疲れることとするはずないもの」

塩見は全力で突っ込みたかった。一日中跳び回ってる方が疲れるわいと。

「必要とあらば一日歩くこともあるな」

「そうですね、登山家の方なんかですとそうです、一日歩き通しながら話も良く聞きますよ」

「とざん？」

「山を歩くんだ。山は分かるか？」

「山は知ってる。よく山までかか様と競争するもの。でも、山なんて直ぐに頂上まで行って降りてこれるのに、どうしてわざわざ歩いてのぼるの？なんで？」

「それがこの世界の当たり前なんだと言っても、信じては貰えないか？」

「だ、だって……そんなのおかしい……」

「なら、こちらの世界の多くの方が跳べないとすると、君とこちらの世界の歩く人々、どちらの方がおかしいと映るか……」

「……」

「それが問題なんだ」

雫はまだ信じがたい様子だった。

「人が出来ないことが出来るとなれば、おかしいと皆唱え始まります」

「……だって」

「君を俺はおかしいとは思わない。けれど、こちらの人間は、その多くがこんな力を持ってない、胡粉なんだ」

猩々緋として義経を理解している雫に対し、義経は分かりやすい言葉として六花神での位を引き合いにだした。

胡粉とは六花神では何一つ能力を持ち得なかった無能者のことを

指す。

そして、先ほどの言葉の意味をあえて説明し直すならばこうだった。

この世界には、無能者である非能力者ばかりが闊歩している。そして能力者の多くは、その存在を見咎められたならば、おかしいと唱えられることになるだろうと、そう告げているのだ。

意味をどうやら理解したらしい雫は、目を見開いて驚きに染まった表情からぼろりとありえないと零す。

「有り得ないなんてことはない。非能力者達ばかりが存在するこの世界では、俺達のような能力者は見つかるだけで化け物扱いだ。ばれることはそのまま、死を意味することもある。それほど危険なことなんだ」

「駄目よ！まだ私は死ねないもの！死ぬなんて……そんな、見つかるだけで、ほんとに……嫌よ、よしつね」

雫にとっては当たり前に使っていた能力、それを否定するような世界に突然放り込まれたようなものなのかもしれない。

そうと理解すれば義経は罪悪感のようなものが胸に芽生えたことを知った。

だが、悲しいことにこれは避けて通れない現実なのだ。

そして忘れてはならない事実でもある。

「君が捕らえられるかもしれない。騒ぎが起こるかもしれない。だからこそ俺たちは君を捕まえるために追いかけた」

最早雫は返す言葉を無くしたらしい。

黙りこくって静かに義経の言葉を聞いていた。

「捕まればどんなことをされるかも分からない。そんな世界だ。だ

「からこそ俺たちは、君を追いかけ、追いつき、人の目につく前に攻撃を仕掛けて無力化しようと思った」

あまりにも抵抗をされるためにやむなく攻撃したと告げれば雫の顔にはもう、悲しみしかない。

それと共に、雫を押しつぶそうとする罪悪感に、今やずっしりと押し掛かれてしまっているらしい。胸を押さえて辛そうな顔をしていた。

ちらと視線を向けてみれば、そこには鉄骨の傍にしゃがみこむ塩見の姿があつた。

「私が……私のため、だった」

怪我を負わせたことも許されることではなかった。

けれど、追いかけさせたのは自分だった。

全ての理由は自分にあると漸く自覚した雫は、どう償えばいいのかわからなくなった。

壊したのも、夜闇を駆けたことも、最早取り返しのつかないことである。

あまりにも衝撃がでかかったらしい雫は、事実には打ちのめされてよろりとふらつく。咄嗟に義経がその背に手を回したが、ここは未だ電波塔の上である。後一步二歩と下がっていたらそのまま真つ逆さまである。大変危険な場所なのだ。注意をするようにと義経は嗜める。

「そうですよ、お嬢様。全ては貴方を思うがゆえです」

「そうじゃなかったらこんな疲れること、必死になってするわけないでしょ」

「心配だからこそ、こうしたんだよ。分かるか？心配するってのは」

口々に三人にそう言われてしまえば益々雫は頂垂れる。謝ってももう、許されることではないのかもれない。背に腕を回して支えてくれる人の顔を見上げて問う。

「……よしつねも、心配した？」

「……ああ、心配で心配で……気が狂う。だから、もう二度とこんな危ないことはするな」

その言葉を聞けば、何故か胸がくすぐったいような、そんな奇妙な感覚がする。

雫はふわふわと浮いているような感覚を胸に抱きながら義経を見上げ続けた。

何故だろう、とても不思議な感覚だ。

どこかへと消えてしまいたいとも思うのに、けれど不思議なことにもっと傍に居たいとも思う。本当に不思議な感覚を抱いた。そしてとどめとばかりに義経に辛そうにこう言われてしまえば、胸に沢山の熱いわけのわからない感情が浮かんできってしまう。

「俺の前から消えるな、居なくなるな」

「……わかつ……た……」

かか様がこんなことを言っていた時があつたことを思い出す。

「人から心配をされるのはね、とても嬉しいものなんですよ」

「そうなの？」

「そうなのです。とてもね、嬉しいものなんです。胸が暖かくて、くすぐったくて、嬉しいのに何だか気恥ずかしいような気がしますね。けれど、決して不快ではありません。とても、優しく愛してくれて。愛に溢れた美しい労わりの心がそこにはあるのです」

ああ、漸くかか様の言っていた言葉を理解出来たのだと感じた。

雫は今、まさに愛を感じているのだろう。

心配をされるといふことの嬉しさを感じて、優しさを感じて、労わりを感じている。

そこにはまさに、愛があるのだ。

「有難う……ごぞいます」

雫の胸の中に今、愛の花が咲き始めた。

30 (天災による倒壊、と言ふこと) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

30 (天災による倒壊、と言いつつ)

治癒の能力と言うものを身体中で体感すれば言葉もないようだ。

絶句してこれは何たることかと澤田と塩見は互いに目を交わすようにすれば、息をすることも忘れてしまったのか、そのまま彫像のように固まってしまふ。

それを見れば一人だけ残念そうに言ったものだった。

「ざーんねん。俺だけ怪我なんもしてねえからなあ、治療して貰えねえし」

「まあ、守は後の楽しみとしてとっておけばいい。さて、澤田、これは直せるか？」

義経は倒壊させた建物を指して澤田へと尋ねる。

なるべくならばこれは無かったことにしたかった。

だが澤田ははっきりと無理だと告げた。

「無理ですね。これでは直す事も出来ませんよ。跡形もないようなビルは、私にはどうしようもありませんので。それは諦めてください」

「……となると、困るな。人為的に起こしたものだとなればいいんだが」

義経は倒壊した建物を見下ろしてその倒壊の原因が一般人にばれることを懸念していた。

先ほど通報を受けたということもあるが、これを直せないとなれば少々困ったことになってきた。

なるべくならば穩便に済ませたいと思っていたがそうもいかなくなってきたようだ。

倒壊したビルの現場に小さな明かりが幾つか灯り始めた。

「……わー、野次馬かなあ？」

「どうでしょうね。案外警察の方かもしれませんよ？」

「懐中電灯抱えて？どんだけ仕事熱心なんだよ」

「一応、帝都一、眠らない街ですから。万が一に備えてこちら辺一帯は夜中でも警備が厳重なんですよ」

「うわ、そんなところでやってたの、私達」

塩見があまり長引かなくて良かったと心底ほっとした様子で言えば全くだと鷺宮が頷いた。

雫一人だけ何のことやら分かっていない様子である。

こつも人が近付いてきてしまったとなると、それこそ澤田の能力は使えないだろう。

仮定の話ではあるが、目の前で倒壊しているビルがまた新たに生えてきた、なんてことはそれこそ絶対に、あり得ないのだから。

そもそもが雫の壊したビルを澤田が直せないかと問われたとしても、澤田の能力をもってしてもこれをどうすることも出来ないのだ。せめてある程度の外観が分かる程度に壊れているならばまだしも、全壊である。直しようがない。

鷺宮の能力は知覚能力。

塩見の能力は跳躍能力。

そして澤田の能力は分解、そして再構築だった。

この能力は一見すれば便利そうではあるが、その縛りは塩見の能力と同じく強い。

その構造を完全に把握出来ていなければ無理なのは当たり前ではあるが、分解したはいいが、再構築をすることも出来ないものがあるのだ。

要は簡単な構造をしたものであれば出来るが、（それも硝子をぐにやぐにやに溶かして丸めるなどならば簡単に出来る程度だ）全て

を再現することが不可能と言うことだ。

義経に澤田は口を開く。

「何らかの天災として局地的な被害を被ったため、ビルの倒壊が起こった。これでいいのではないでしょうか？」

と言うよりも、そうするより他はないだろう。

雷でも落ちたことにすればいいと言われれば、仕方ないと義経はある場所へと電話を入れた。

「ああ、済まないんだが、今から十分も前くらいか、警察へと通報があつた時刻は分かるか？」

受話器越しに相手がこう答える。

「ええ、ありました。今から八分前になります。これが何か？」

「それなんだが、その一分か二分前くらいに、帝都東地区あたりで巨大な落雷があつたことにしてくれないか？」

どこに連絡をしているかは分からないものの、義経は本気で倒壊したビルが壊れた原因を、天災によるものにしてしまつつもりらしい。

何とも無茶苦茶な男である。

だが受話器の向こう側の人間はもっと無茶なことをやってのけた。

「了解致しました。そのようしておきましょう」

「済まないな」

「いえ。ついでに何か壊れたことにでも？」

「そうだな。ビルが一棟、壊れたことにしてくれと有難い」

「なるほど、ではそのように取り計らっておきましょう。それでは

失礼致します」

「ああ。また連絡する」

そのように、その一言で何と片がついてしまったようだ。

そして本当かどうかは知らないが、義経は電話を切るとしれっとこういった。

「落雷があつたそうだぞ。怖いな。ビルが一棟倒壊してしまつたらしい」

「そうだなあ、確かに雷は見えたもんな？」

「そうですね。落雷が落ちてビルが倒壊なんて、凄まじいですね」

何ともわざとらしい会話である。

塩見は呆れてこういったものだった。

「私はどうしてもこれにだけは参加が出来ないんだ」

「……」

雫が義経の傍でどうしたものかとそわそわとしているのを見れば、塩見はそれを制するようにして告げる。

「あー……参加はしなくていいからね？」

とりあえずと口にする、澤田は傷一つ無くなった腕をぺたりと地面としている展望台の天井部分につけてしまう。

「ここは比較的簡単な構造をしていますから直してしましましょうね」

言つなり澤田の腕が煌々と赤く光始めた。

すると腕から展望台を包み込む程の赤い閃光がはなたれ
気がつけば展望台は新造した間も無い頃の姿を取り戻していた。

「これはこれで問題あるかもしれないな」

「でも仕方ないだろ？これ以上どうもしようがない」

後は直せるのは壁を破損させてしまっている高層ビルだけだろう。それだけ直すと倒壊させてしまったビルの前に手を合わせ、五人はその場を後にした。

その晩、帝都の有名なオフィス街の一角が騒がしくなったのは、言うまでもないことだった。

+++

パソコンの主電源を落とすと千草が叫ぶ。

「ふざけるな！！」

健ではないが、膨大なその内容量に舌を巻く思いがする。

千草は受け取ったデータを前にして、何を開けばいいのかが分からなかった。と言うよりも、どこから手をつけていいのかが分からなかったのだ。

元からおかしいとは思っていた。

ただのテキストデータにしては、そのデータの大きさがおかしいのだ。

大体、テキストファイル一つで、安いパソコンの中に入ってるハードディスクの半分くらいの大きさのデータだ？

フラッシュメモリにデータを落した時も思ったものだが、何故こ
うまで重いデータなのか、不思議で不思議で堪らなかった。

そこにきて開けたというその中身は更にとんでもない量があつた
のだ。

これを千草一人でその全てを調べるのかと思うと、ぞつとしない。
開いたデータはこの最新型（と思しき）パソコンの、そのおよそ
四割を占めるサイズのデータだったのだ。

この時点で千草が自棄になつて席を蹴つて部屋を飛び出したとし
ても、なんらおかしくはなかった。

基本的に千草は大変気が短いのだ。

31 (君の名は今日から) かがり (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

31 (君の名は今日から「かがり」)

降矢邸、その前庭へと降り立つと全員が全身についた埃を払うよう命じられた。

「後でメイドに怒られる。きちんと落せよ」

「なんつか、偶に思うんだが義経はメイドの姉ちゃん達より弱いよな」

「……………」

無言で鷲宮を睨み付けつつ全身を払い落したはいいが、服は全員ともはずだぼろである。捨てるより他ないだろう。

義経は気に入っていたのにと呟くなりシャツ　今はもう、ただの汚い布切れとかしたものを引っ張りつつ雫へと尋ねて見せた。

「そう言えば……………さっき話が途中だったが、君は名が無いと言ったな」

「……………うん。まだ、貰えない」

「無い？え、だってしず」

塩見が雫の名を口にしようとした時、義経は目配せだけでその声を封じてしまう。

雫は何かを思い出したのか、そうだと口にするなり義経を見上げて弾むような声で言った。

「かか様がよしつねにつけてもらいなさいって言ってた！よしつねつけて！私の名前！」

「な、名前って……………」

期待するような眼差しで見上げられてしまえば、義経はうるたえ始めた。

彼にとつてみれば雫は雫だ。見た目が変わろうとも、中身が変わろうとも、大事な娘には違いない。

だが、その娘の一面であるもう一人の雫は名を未だ貰ったことがないと言う。

そしてそれを新しくつけて欲しいと切に願っているのだ。

これには大いに参った。

なぜ、かか様とやらは俺に名前をつけさせようとするのだ。それこそ自分でつけなければいいだろうに。

そんな二人を尻目に、鷺宮が澤田へとこんなことを尋ねた。

「雫じゃいけねえのか？」

「ややこしいとは思いませんか？それに、お嬢様には黙っておくと義経様は言っておりますし」

黙っているつもり義経が、雫にまた同じ名を贈ろうはずもない。ではどうするつもりなのかとも思うが、彼らからしてみればそれこそ立ち入れる話題ではない。

何せ雫と義経は親子である。そして名付けと言う問題が問題だけに、間に割って入れる問題ではないからだ。

義経は大いに困った。

名をと請われたとしてもそんなものが咄嗟に浮かんでくるものではない。

散々迷いに迷って、頭の中にふわりと浮かんだ名を口にした。それは、遠い昔に辛く悲しい過去と共に忘れ去られた名であった。

我ながらどうかとも思うが、それでもこれは、雫につけるべきなんだろうな。

ある一人の少女の名を、雫にもう一つの名として義経は与えた。

「か……かがり。かがりはどうだ？」

「かがり？」

「……そう、かがり。君は今日からかがりだ」

かがりと与えられた名を噛みしめる様にして雫は胸に刻み込んでいく。

雫　いいや、今はかがりとなった少女は義経に花開くような笑みを向けた。

「私がかがり。私は、かがり！有難うよしつね！」

それを見て、漸く義経も笑みを浮かべたのだった。

主達の話が済んだのを窺えばさてと前置いて従者たる三名は告げた。

「風呂入るぞ風呂！」

埃まみれで仕事を終えた後は、当たり前だが風呂が恋しくなるものだ。

鷺宮は疲れを吹き飛ばすように元気よく告げると、澤田がにこやかな笑みを浮かべてこんなことをのたまった。

「そうですねー、背中流してください鷺宮」

「何で俺がそんな」

「年長者ですから、少しくらい気を使ってください」

「半月も離れてない誕生日だったよなお前？！」

「え？なんですかよく聞き取れませんか？」

肩を疲れたとぼんぼんと叩く年よりじみた真似をしながら言われれば、鷺宮は軽く殺意めいたものが湧いた。

同じくこちらもくたぐたぐと言つのにどうして他人の背中まで流してやらねばならないと言つのか。全く分からない。

けれど澤田の悪ふざけに乗る様にして義経までがこんなことを言うのだ。

「守、俺も背中流してくれ」

「だから、何で俺が?!」

「じゃあ私も私も」

塩見までが笑いながら頼んでくれれば鷺宮はきりりとした引き締まった表情でこう返した。もう半ばヤケクソ気味である。

「よしきた任せろ。ついでに裏表万遍なく洗ってしんぜよう」

指をわきわきと蠢かせて言われてしまえば流石に塩見の表情がそのからかう笑みのままに凍りついた。

けれどその顔色は真っ青だ。実に分かりやすい友人の姿に鷺宮は苦笑する。

「ごめんなさい。冗談です。許してください」

「期待させておいてそりゃあないんじゃない?」

本気で無理だと青くなったり赤くなったりと忙しなく表情をくると変えて拒否する塩見に鷺宮は堪え切れず爆笑した。

そんな中、かがりが義経の解れた袖を引いて問う。

「よしつね?」

「ん?なんだ、かがり」

「ふろつてなに?」

その瞳は白目の部分が真っ青な赤ん坊のような色をしていた。それを見ればまだ生まれて間もないような無垢な存在なのだ。か
かりを認識し直した。

もう雫とかがりを混同しないようにせねばならぬだろう。
名を改めた時点で義経の中ではある種の一線が引かれたのだ。

「風呂つて言うのはな、温かい水が沢山溜まっている大きな器、だ
な。全身温かな水で洗い清めた上でその器の中に入ると、とても気
持ちがよくなる。疲れも取れるんだ。だから今日は疲れたろう。か
がりも入ろうな」

「うん！よしつねと入るー！」

義経はその瞬間固まったが、まあ、まだ中身が赤子のようなもの
だしいいかと思いなおす。

そしてよくよく考えてみれば、雫とは一度か二度程度しか一緒に
風呂に入ったことが無いことを思い出した。

「まあ、いいか」

「何がまあいいんだ変態紳士」

「まさか、入るの？入っちゃうの！？」

「……いけない？」

義経が真顔で尋ねれば止めようとしていた塩見と鷺宮は何故か言
葉に詰まる。

何故だか義経の方に理があるように感じられるから嫌だ。

鷺宮が押し負かされまいとかつと目を見開いて義経を睨むように
して口を開く。

「義経……若干じゃなく、可也犯罪臭がプンプンなんだが、テメエ
……本気なんだな。本気でそんな犯罪を犯すつもりなんだな？」

「よし、守、言いたいことはそれだけか。どこが犯罪なんだか聞かせていただきたいな？うん？」

汗を垂らしながら言われれば、義経は開き直ったかのように胸を張って言うのだ。

何がそんなにおかしいのかが分からないと。

そもそも親子なのだから、別に構わないではないかと思うのだが、周囲はそうは思わないらしい。

「いや、可也犯罪臭がするのは当たり前でしょとか、私からも言わせていただきたいなあ」

「麗までそんなことを言うのか。ならよし、麗も一緒に入るか？三人で。全身くまなく洗ってやればいいんだろ？」

「凄いこと言った！！って言うか何でそうなるんだ？！」

さらりと義経に返された言葉に塩見が無茶を言うなど叫ぶも全く義経は動じない。

それどころか更にこんなことを告げるのだ。

「かがりと二人きりで入ったら犯罪だって言うならお前が入ればいいだろう。それに二人きりが拙いようだしな、三人ならば問題は無い。なんなら奏も入れるか？」

「お断り！嫌に決まってるじゃないか！」

更には未成年を一人プラスして入ろうぜ！とまで提案をされれば却下を申しつける以外ない。

ジャツジするのは塩見だ。

他の誰の意見も聞きたくは無かった。

そして公平に多数決なんて取るつもりもない。

それも当たり前だろう、この場にいる女子は塩見と雫の二人きり

だ。そのうち一人がまだ倫理やら道德やら性教育やらが成されていないとなれば当たり前だが塩見以外ジャッジを下せるものがあるはずもないのだから。

「そつだぞ義経！俺が塩見の代わりに入るから、それで許せ！」

「それも却下だ！」

「塩見さん！？なんてことを！塩見がはいらねっつーから俺が入ってやろうとしているのに、そんなご無体な！」

「いや、無体とか大げさだし。兎に角却下！ストップ！っていうか澤田君はいいとしても鷺宮君は却下！論外！アウト！あんただけは駄目だ！」

「あれおかしいぞ。俺だけ駄目とか塩見が言う。なんて酷い差別だ！あんまりじゃないか！」

わざとらしくも鷺宮が涙をためて塩見に酷いと迫るものの、そんなものが塩見に通じるはずもない。

再度駄目だしをされている鷺宮を見て義経は全くだと告げる。

「お前の方が犯罪臭いだろう、どう見ても」

更にはこんなことを澤田も言うのだ。

「ですよねえ。……この犯罪者がっ！」

「澤田君が吐き捨てるように言う……」

そんな中、揉め事の種を作ってくれたかがりが首を傾げてこんな言葉を口にしたのだ。

当たり前こそつだと信じていたように彼女は口にした。

「皆で入るんじゃないの？」

32 (ブロークンハート) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

32 (ブロークンハート)

「……」
「……」
「……」
「……」

みんな一緒に仲良くお風呂……

流石にその考えは大人達には無かったようである。

けれど精神年齢が恐らくは相当低いと思われるかがりは更に続けて言う。

「違うの？」

「……」
「……」
「……」

「いよっし！全員で入るか！！」

義経は何やら乗り気のようである。

「本気！？嫌だよ私！」

「駄目なの？」

なんで？と言わんばかりにくりくりの大きな目でかがりが塩見を見て首をかしげる。

「……つく！卑怯なっ！！」

「麗、かがりは何も言っていないぞ」

「そうですね、ただ子犬のような目で見てくるだけですもんね」

「私がわんこ好きなの知っててやってるだろー！ずるい！！卑怯なっ！わー！！」

「諦める」

ほんと男三人に肩を叩かれ、塩見は折れた。全員で入ることがほぼ決定した瞬間だった。

男湯でいいだろうと告げて全員を移動させるようにかがりはイメージをする。

「場所は俺の頭の中から読みとるんだ。いい練習になるだろう。さ、やってみろ」

「うん。頑張る」

素直にかがりがそう返すと、義経はかがりの額に己のそれをそつと擦り合わせる。

かがりは義経の思考を読むとこれから跳ぶべき場所に狙いを定めた。

次の瞬間、五人は降矢邸の本日の男湯である、岩風呂にきていた。上手く移動が出来たのだろうかとかがりが周囲を見回すと、生まれたままの姿を晒す少年の姿があった。

これは言わずもがな千草のことである。

千草は行き成りぱつと現れた五人に固まっている。

そして、ふっと自身の置かれた状況を思い出すと、全身をお前は瞬間湯沸かし器かと言うほどに瞬間的に真っ赤にすると、今度は直ぐ様青くなる。そして口をぱくぱくと、開けては閉めてを繰り返している。どうやら言葉が上手く出てこないようだ。

「ん、……なっ！な、ななっ！」

すると今度はかがりだけでなく鷲宮までもが千草の姿に気がついた。

「あれ？少年、なんで……って、あー……なんだ、いや、……すまんすまん。手違いだ」

手違いだと言われて納得がいくものでは無かった。

「何が手違いだよ。元から汚れたままで邸内を歩くべきじゃないからってそのまま風呂場に直行しようって話で言ってたじゃないか。意味分かんない」

「そうですね。元からここに直接来るつもりだったんだから、手違いも何もありません」

そう塩見と澤田が告げたところで千草にこちらも気がついた様子である。

二人は千草に気がついた途端にすっと即座に視線を外してこう言った。

「えーっと……ごめん」

「何と言いますか、申し訳ありませんでした」

そして後は義経だけが謝っていないわけなのだが、義経も悪いと思っっているようである。彼にしては珍しく素直に謝罪を口にした。

「ああ……まあなんだ、許せ」

「ゆ、許せるかー!!」

千草は半分泣いているような表情で忽然と現れた面々を見回すと、

悲鳴を上げずに済んだだけでも自分を褒めてやりたいと思った。

かがりはどうやら何か目の前の少年に悪いことをしてしまったらしいと知ると、そのままちよこんと頭を下げた。

わけが分からないながらも、目の前の少年が泣きそうな目をしていたから咄嗟に謝らねばと考えたらしい。そんなところは実に雫そのままだった。

「ええと、ごめんなさい」

「おお！かがりちゃん良く出来ました！そうだよー、ごめんって言えるのはいいことなんだぞー？」

自分より幾分大きく成長したかがりの頭を撫でてやれば、かがりは猫のように目を細めてうっとりとしている。

「きもちい」

「ご満悦の様である。」

義経はそんな娘を捕まえて言った。

「だがな、かがり。あれには謝らなくていいぞ。あれは嫌いになってもいいからな」

真剣な表情でそう告げれば今度はかがりがわけが分からないといった顔を始めたようだ。

「なんで？嫌い？」

「そうだ、あれは嫌いになってくれ。頼むから元に戻っても嫌いになっしてくれ」

「もと？」

「こっちの話だ」

こつちの状態の雫　かがりだが　に刷り込みのようにして千草を嫌いだという意識のようなものを植え付けるつもりらしい義経は、ある意味ではなりふり構っていられないようである。

娘を守る為それだけ必死なのかもしれないが、それでもそんな主の姿を見れば従者達は情けなさそうに言ったものだった。

「どうせなら本人に言ってやんなさいよ」

「本人にも言ってる。だが一応な、どちらにも植え付けておくにこしたことはないだろう？」

堂々と言うものだから始末に負えなかった。

「意味分かんないからな！　って言うかあんたら一体何なんだよ！　行き成りこんな……男湯なんて出てきやがってっ！！このっ……」

慌てるように脱いだばかりの衣服で大事な場所を隠すようにして千草が叫ぼうとしたその時だ、

「かがりのこと、嫌い？」

吠える千草にかがりは可愛らしく首を傾げて問いかけた。

そこで漸く千草はかがりの顔を見たようである。先ほどまでと違い、その表情は瞬く間に変化していった。

瞬間的に血液が沸騰したんじゃないかと言うくらいに熱くなっていく。

「なっ……いつ、あ、の……」

最早しどろもどろである。

真っ赤になった後はどうして舌がもつれて言葉が出てこないのかと自分自身に嫌気がさした。

だがはたと千草は気がついてしまった。

完璧な美貌を誇る少女が自身の目の前に行き成り現れたのだ。それもほぼ全裸と化した自身の目の前にだ。

そして場所も悪いことに風呂場ときたものだった。

千草は唐突に泣きだしたくなかった。

「も……もっつ、何なんだよあんたらああー!!」

こんなことならば奏にさっさと入る様にと告げられた時に入っておくんだと激しく後悔した千草であった。

ひとめぼれと言うものを知った次の瞬間、千草の純情な男心は碎け散った。

33 (義理でも兄弟なんて有り得ない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

33 (義理でも兄弟なんて有り得ない)

悲鳴を上げる見知らぬ少年が裸体であったため、かがりは成る程、ここでは衣服を着用しないのだなと理解するなり、早々に自分の身体から衣服をはぎ取りにかかった。といってもそれは元々雫のきていた私服である。それも先ほどまでの移動やら戦闘行為やらでもう、元の形状をわずかでも保っている部分はないのだが。

袖口をかがりがぐつと引きちぎるようにすると周囲は悲鳴をあげてそれを止めにかかった。

「ちよっ！おい、待てよ！！女湯は今日已向こう！檜風呂！！そこに居るちっさい姉さんと一緒に向こうの檜風呂いけよ！！」

慌てて千草が叫ぶと、かがりは意味が分からないといった様子で告げたものだ。

「ここじゃ駄目なの？よしつね、別の場所？」

「いや、麗は別がいいと最後までごねたからな、檜風呂に入って貰うつもりだが、かがりは俺と一緒にいいんだろっ？」

「うん。よしつねと入る」

「ならここでもいい」

「何言ってるんだよ！こ、ここ、混浴？！嘘だろ？！」

義経と入るイコール男湯であるここに入る。つまり俺も一緒？の図式に悲鳴をあげる千草。

「かがりは風呂が初めてなんだ。だから誰かが入れてやるべきだ。いけないか？」

「そ……いや、まあ、よく知らないですけど……本人がいいって言

うなら、いいんじゃないですか？」

納得がいかないというスタンスを崩さないながらも、千草も男である。ある程度の下心を持つての発言だった。

あまりにも鮮やかなまでの切り返しぶりに従者である三名は微妙な顔つきになった。

「なっ、……なんだよ」

「いやー？なんでもありませんよー？」

下心ありきかと周囲の面子が気がつくものの、そんなことはかぎりには分らない。

義経も、そして目の前にいるまた新たに会った人物もいいと言ってくれたのだから、ここで風呂に入ってもいいのだなと理解しただけだった。

「少年は大人だなあ……」

鷺宮はしみじみと言う。

「そうですねえ、鷺宮のように最後まで皆で一緒に入りたいとごねませんでした」

「ごねるだろそこは男として」

「どっちが変態紳士なんですか」

どう考えても鷺宮が変態紳士の称号には相応しかった。

「と、まあ冗談はここまでにして　麗、檜風呂に向かっぞ」

「え……」

そのまま踵を返すようにして義経は出入り口へと向かうと、今度は別の悲鳴がわいた。それはどこか嘆きの声にも似た声だった。

「なんで今日は別なのよ！ありえねーだろ?!」

常日頃から義経を護衛する目的で、鷺宮か澤田が共に湯殿に入るようにしている。けれど今日はそれがないと聞けば不安になったのだろう。鷺宮は絶叫する。

「今日はこちらが一緒だからな、麗にする」

麗、行くぞ　そう声をかけられた塩見はといえば冗談だろうとこちらも頬を赤く染めあげてヒステリックに叫んだ。

「わ、……私一応女なんだけど!？」

「見れば分かる。麗がいいんだ」

「なっ!!……そ、そそ、そんな言い方、ずるいだろ……」

「麗、早くしろ。かがりに細かいところまで説明してやってくれ」

義経に呼ばれたかがりはどこに行くのかと少しだけ不安げだ。けれどここは人数が多くて寛げないから別に移動をすると聞かされれば、満面の笑みを浮かべて別の湯船を目指して義経についてしまった。

後に残された塩見はといえば、口をあんどりと開けて言葉も出てこない様子だ。

「早くしろって……そつ、嘘だろ?」

唾然呆然といった体の塩見を羨むような声を上げるのは鷺宮だった。

「こちらはこちらでいつまでも混浴にこだわり続けている様子である。まあ、男であるのだからそれは当たり前なのかもしれないが、それにしたってしつこい男である。」

「……塩見さんたらずりい」

「ずるいと思うなら変わってくればいい！」

「お、まじで？女湯入ってもいいの？」

「入ってもいいよ。ただし即座に通報するけどね！」

「入っていいと言っているにも関わらずに全然許すつもりがない件
！！」

女の敵な発言に対しては許せる道理が全くない。

塩見は鷺宮の足を払うようにして蹴り飛ばすと八つ当たりめいた言葉を発する。

それも何とも物騒な言葉でだ。言われた方は慣れているのか特に堪えた様子もなく返してきた。

「鷺宮君なんて降矢君に切り刻まれちゃえばいいんだ！」

「こんなイケメンに向かってお前なんてことを言うんだ。勿体ないとは思わんか！」

「思いませんね」

澤田が早々に着替え始めながらさらっとこれに答えた。

付き合つのも面倒だが、いつまでも埃まみれの服装でいるのは嫌な様子だ。薄汚れて擦り切れた衣服をはぎ取ると、傍にあったダストボックスへと適当に放り込む。

「だよねえ澤田君。鷺宮君は残念すぎるイケメンだから別にいいよ、切り刻まれても、磨り潰されても、何されても」

上半身裸になつた澤田を見てもこちらは眉一つ変えない。塩見としてもこれくらいは慣れているということだろうか。

干草は手近にあつたタオルを手に取ると、股間を隠すようにしておいた衣服とそつとそれを取りかえた。

そしてその衣服は元の場所に戻して明日以降、洗濯されて戻ってくるのを待つことになるだろう。

「え、なにその生々しいの。嫌だな、切られるまではいいけど、磨り潰すとかなんか怖い」

「よし分かつた、降矢君に頼んでくるな！切り刻んで欲しいって言つてるつて！」

「磨り潰されるのは遠慮したいところだが、だからといって切り刻む方を頼んでいるわけではないんだがな！」

「ついでですから骨を拾うのは私が請け負いましょう。きちんと燃やして後処理はしてあげますからね」

「あれ？なんか違うぞ？」

「澤田君がいるなら心強いね」

「わあ、何その鬼のような布陣。俺、逃げ場なしか？」

切る人〃義経。

燃やす人〃澤田。

提案する人（助けを求めても無視されるであろうこと必死）〃塩見。

ここまで決まつた途端に、鷺宮の逃げ場がなくなった。

全員が鷺宮の命を狙っているとはどうということなのか、友達がいない奴らめと毒づくくと、鷺宮は大げさなくらい身振りを作つてこつ言つてきた。

「別にいいじゃない！たまに女湯に憧れるくらい、いいじゃない！」

声を大にして叫ぶことがこれとは大変恥ずかしい大人である。

関わりたくないなあと思いつつ、千草はそうつと脱衣所から湯船へと続く扉へと足を進めていく。

確実に憧れだけにとどめてはおけないだろう鷺宮を捕まえるなり塩見が吠える。

「いいわけあるかあ！じゃあ私が男湯のぞきたい、興味あるっていつたらどう思うんだよ。気持ち悪いだろ？それと同じことだからね！」

分かれ、と言われても鷺宮に分かるはずがない。

そもそも男にそんなことを言う塩見のほうが愚かとしか言いようがなかった。こういう点では塩見は実に男を知らないと言えるようだ。

鷺宮は嬉々として口を開く。

「ウエルカム男湯へ！どうぞどうぞ」

「むしろ招かれた！？」

「どんどんい」

「つく！！男湯と女湯の考え方の差って大きいのか……！！」

「いや……そこは男と女の考え方の差かな、うん」

「それはないはず。だって降矢君は君みたいに変態じゃないからね！」

ぎゃあぎゃあと言いいいがヒートアップしてきたその時だった。

義経が遅いと一言いいにきたらしい　と言うよりも塩見を連れに戻ってきたようだ。

脱衣所までつかつかとやってくる　と塩見の襟割りを軽く掴みあげ、中空に浮かせてしまう。

「うわっ」

「お前達、忘れていたようだが今は夜中だ」

「はい」

「煩いぞ」

「申し訳ありません、義経様」

「麗、いつになったらもう少し静かになる？ ったく、この猫は本当にもう……困った奴だな」

「……ぷう。猫じゃないんだけどな」

中空に宙づりにされた塩見は拗ねたのか、唇を尖らせて腕を組んでぶすくれている。

義経は強制的に言い合いを黙らせるため、見えない腕で塩見をつり上げてしまったのだ。そうされると塩見は巨大な猫科の動物に襟首をぱくりとくわえられてしまった子猫のようになおとなしくなった。塩見の見た目は猫のようであるためか、そうされていることが悲しいことに本当に似合っていた。

だがそれを鷺宮が告げれば塩見は納得がいかないのか、ぎろりとただでさえきつめに見える猫のようなつり目で睨みすえてくる。

「なんだと！ 鷺宮君もつられてみるよ！ これ、結構きついんだぞ！」

「全力で遠慮させて貰おうか！」

そう鷺宮が笑いを堪えながら口にしたところで澤田が義経を制して告げる。それはどこか憚るような物言이었다。

「義経様、一応ここには彼も居るのですが……」

彼と他人行儀に呼ばれる者は、この場に置いては千草の他にいないだろう。

そろりそろりと足を運んで漸く風呂場へと足を踏み入れられるところで足を止められてしまった。

「いや、俺は別に……」

見ていないし見たくは無い。むしろ無理やり見せられている感すら覚えていた千草は、これ以上関わらせないで欲しいとさえ願っていた。

千草は首をぶんぶんと振って見ていない！と叫び始めたがそんなものが通用するはずもないし、元よりここにきた当日には同じように宙づりにあった人間が今更何を言っているのかと言った目で義経は見てきた。一応は義経もそれについては覚えているようだった。

塩見はそういえばとつられた状態で義経に尋ねた。

「彼は一体何なのかしら？ 使用人かと思ったんだけど、ここ使うなら違うわよね」

目の前に若干怯えた様子でいる千草の顔を見て、男言葉がなりを潜めてしまったらしく塩見はいたって普通の口調へと戻ると、首を傾げながら更に続ける。因みに未だ吊り下げられたままである。

「ここは屋敷の住人だけしか使っちゃいけない場所だし……ねえ僕、一体君は何なのかしら？」

何かと突然問われた千草は、びくりと弾かれたようにして塩見のくりつとした丸い大きな目を見る。

そこにはただ疑問だけが浮かんでいるようだ。

どこか探るような目つきで塩見が見つめてくれば、千草は居心地が悪くなってきたらしい、視線をそっと外して言う。

「何って言われても……」

千草にはうまく答えられない。

むしろこちらが聞きたいくらいだ。そして早く風呂に入りたい（逃げたい）。

そもそも千草は認めていない。ただ流されるようにしてここに連れてこられて雫と共に生活をしているだけだ。

それも、ほぼ強制的に。

そこに千草の意志はない。

ただ、言ってしまうえば宗一郎の望むとおりにここで生活を送らねばならないから居る。彼からしてみれば、ただそれだけの理由でここに居るのだ。

他の居場所があればとつくの昔に出ていっているだろう、そう思えるほどにはここに住むことを、彼自身認めていなかった。

それは恐らく義経も同様なのだろうと思われた。

「宗一郎氏がここに住むように、と……言われまして」

「おじいちゃん？ そういえばおじいちゃんには私、まだ会ってないんだけど、おじいちゃんはどこに居るんだろ？ というよりも、おじいちゃんがここに住めって言ったの？ほんとに？」

塩見は千草の言葉を受けて驚いた様子である。だが、そこまで衝撃を受けたわけではないようだと分かれば少々戸惑った。

どうしておかしいとか、変だとか、嘘をつけ、とか言わないんだ？
それが不思議に思う。

ただ、疑われても他に千草には答えようがなかった。

彼には未だに許嫁だの婚約者だの言っただ言葉が受け入れられないのだから。他の答えがありえようはずもない。

首肯すれば塩見が言う。

「おじいちゃんつたらまた拾ってきちゃったのね。んー……ならまあ降矢の家族つてことなのか。じゃあ、宜しく。私は塩見麗。君の名前を覚えてくれないかしら？」

宜しく、と口にされ、手を差し出されたものの千草は躊躇った。

流石に股間にタオルを当てるだけの全裸と言う状況で、妙齡の女性と握手はいただけないだろう。

躊躇っていれば塩見もそのことに頭がいった様子である。後でにしようかと告げてきた。

とりあえず先に名前だけでも名乗ろうと、千草は自身の名を口にした。

「高遠千草と申します」

「オツケ。千草君だね。ところで君は、まだ養子にはなっていない？」

「え？」

まだ、とはどういう意味だろうか。

婿養子？

養子と言えば今現在、千草は自身の置かれた身から想像出来るのはこれだけだ。

何故まだ何も知らないはずの塩見から、そんな言葉が出てくるのだろうかと千草は困惑する。

すると塩見はそんな戸惑う千草をよそに話し続けていく。

「……あれ？おかしいな。だっておじいちゃんが個人的に連れ帰ってきたんだから、降矢君の兄弟になるんでしょ？違うの？」

どういう意味なのだろうか。千草は益々混乱していった。

宗一郎の癖なのだが、気に入った子供を拾ってきては、誰彼構わ

ず養子に迎えてしまうのだ。そんな風に増えていった義経の兄弟は、今や実の息子にも把握出来ない数がいた。

けれど宗一郎の上手いところは、その拾ってきた養子達が財産を！遺産を！と金に狂う者が居なかったところだろう。

そういった者をきちんとその審美眼で判断しているのだとすれば、相当確かな目を持っているといえるだろう。

塩見が首を傾げていると義経は乾いた笑いを響かせ、こう言った。「冗談ではない、と。」

「こんなのと義理の兄弟になるくらいだったらミンチにするよ」

因みにミンチにするのは当たり前　と言ってしまったもいいのか悩みどころではあるが　だが千草のことをだ。

兄弟になったとしたら自動的に挽き肉にされるとあつては千草も黙ってそれを聞いていられるはずもない。

即座に言う。

「すみません、ここまで物騒な兄はいりません。遠慮願います」

仮に兄弟になったとしても、その兄弟仲は非常に宜しくなさそうだった。

34 (約束された子供) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

34 (約束された子供)

「よしつね、これも泡なんだって！ぶくぶくして柔らかい！」

はしゃぐかがりを視界にとらえると、義経は良かったなとだけ返してやった。

岩風呂と違って檜風呂は湯船がいくつもある。

そのうちの一つに体を清めて早々に飛び込むようにして身を沈みこませた。

実に気持ちがいい。

一人で大きな湯殿を使えるというのは最高の贅沢だと思った。

いつもは鷺宮と澤田が常に義経をガードするためにいるため、中々寛げないのだ。

時折こうして塩見に頼むのもいいかもしれないなどと不平なことを考えてみる。ただし、その場合は塩見からの猛烈な抗議を食らうことは予想済みである。まあ、そんなものがあつたとしても義経が気にするかどうかはまた別の話ではあるが。

塩見が子供のよういきゃっきゃと泡を飛ばして遊び始めたかがりを叱りつける。

その手には柔らかなスポンジが細かな泡にまみれて握られていた。

「暴れない！おとなしく！」

「……むっ」

叱られたかがりは小さくなると、塩見に黙って体を洗わせ始めた。しかし手元の泡をこねる作業はやめるつもりがないようだ。未だにもこもこの泡をこねていた。

その様子はまさに小さな子供のようだ。

義経はそんなかがりに構うことなく衝立の向こうの一際小さな湯

船で足を伸ばして疲れを癒していた。

一応は塩見もいるため見ないようにとの配慮からこうした位置になったのだろうが、塩見からしてみればあまり変わらなかつた。

「まあね、確かに男湯にかがりちゃんを入らせるとかないよね。な
いとか分かつてるけどなんで私なんだろうとか……」

やはり納得がいかないと必死になってかがりを洗う塩見に、義経は衝立越しに告げる。

「麗、そうあまりむくれるな。鷺宮の目はちゃんと奪ってきたじゃないか」

「そういう問題じゃないの！」

「じゃあ遠見を戻すか？」

遠見とは透視や遠くを見ることの出来る鷺宮の能力である。散々揉めた上でそれを鷺宮から奪うことを条件に塩見は一緒に入ること
を了承したのだ。

「戻されたら困る！」

「じゃあこれでいいじゃないか」

よくはないが、妥協せざるを得なかつた。

塩見がこのままこね続けければ、遠見を鷺宮に戻されてしまうのだから。

義経は軽く嫌がらせめいた脅迫をすると、またゆったりとくつろぎ始める。

「あー……いい気分だな。癒される。仕事をしてきた後だからなおさらだな」

「私は癒されないけどね！」

それはそうだろう。男と一緒に風呂に入るだけでも神経過敏になるというのに、自分よりちょっと大きな、中身は幼稚園児のようなかがりの世話しながらの入浴では疲れなど癒せるはずもない。むしろ増大すると言ったものだった。

「何か言ったか？」

「やればいいんでしょ！！」

「頑張れー、麗。きちんとできたらご褒美をやるっな」

「心がこもってない！うー、また子供扱いするんだから」

「子供扱いなんてしてないさ。大体、そんなにどこもかしこもそんなに育った子供がどこに居るって言うんだ？」

「降矢君！！」

「あははははは」

塩見の身長は一般的な女性のサイズで百五十半ばといった程度だが、その身体つきは実に豊満だった。

それを指して言われてしまえばセクハラだと塩見は怒鳴りつける。ただし、嫌がっているようには見えなかった。

「どうせ、誘惑なんてさせてもくれないくせに……」

使いどころがない無駄な贅肉めと思いつつ、塩見は自らの身体も洗い始めた。

身を清めた塩見は、同じく身を清めたかがりを伴って義経の元へとやってくる。ただしその体にはバスタオルがぐるぐるときつく巻き付けてあった。かがりにも同じくきつく巻きつけてあるため、湯

船に入ろうともそれは取れることは無いのだろうと思われる。

義経はそれを見てもなにを言うこともない。鷺宮とは天と地ほどの差だ。これが鷺宮ならば湯にタオルをつけるとは何事かと、それこそいちゃもんをつけてきているに違いなかった。

塩見は義経の入る湯船の直ぐ隣の湯船にぞぶんと音をさせて体を沈めると、頭だけだしてかがりに言う。

「後はお風呂を堪能するだけだから。どうぞ、入ってごらん？」

言われたかがりは義経をじっと見つめ、そして頷き返されたのを見て再度塩見を見つめれば、こちらからも頷きを返された。

そこで意を決してかがりは湯船に腕を突っ込んだ。

「ふわあっ！……何これ……」

それは思わず入るのを諦めてしまいそうなほどの熱さだった。

思い切り躊躇なしで腕を突っ込んだ所為だろうが、いきなり自分を襲った熱にかがりは酷く裏切られた思いでもしたらしい。涙目だった。

かがりは義経に助けを求めるような目を向ける。

「どうやったらこんなところに入れると言うのかとその目は訴えていた。」

「ゆっくり入れろ。あまりがつつくな」

「がつつく……」

「おいで」

「……怖くない？」

「怖くない」

義経はかがりに向けて手を差し出すと、それを取るように目で促

した。

かがりはそつとその差し出された手をつかむと矢張り躊躇う気持ち
が頭を擡げてきてしまうようだ やっぱり怖いと口にした。

「怖くない。ゆっくり体を熱さにならすんだ。ゆっくり……ゆっく
りだ」

「ゆっくり……」

義経に引かれるままにかがりは指先から慎重に腕を湯の中に沈め
ていく。

「……あつたかい」

「そう、これは体を温めて疲れを癒してくれるものだ。だからさつ
きのような入り方をすると、熱すぎて倒れることもある。危ないか
らもう二度とするな」

「……うん、分かった。やらない」

素直に返すとかがりは足も同じようにして沈ませていって最終的
に首から下を全身、湯の中におさめることに成功した。

「かがり」

「なに、よしつね」

湯に浸かることが気に入ったのか、寛ぎ切った笑みを浮かべてい
るかがりに義経は尋ねた。

「かか様はどこにいる人なんだ？かがりとはどういう関係だ？」

「かか様は私を守ってくれてる人。いつもは桔梗の間にいるの。最
近はあまり見ない。忙しいのになって、思っ」

「そう、か……」

最近はその姿を現さないとするととなると、網を張っておけば捕まえられる。とも限らないのかと義経は考えた。

「よしつね、かが様に会いたいの？」

「ああ、会いたいな」

「そう言っと思ってた」

「……何？」

かがりはそう告げるなりくすくすと笑いだす。

「かが様が言っただの、よしつねは必ず、自分に会いたいと言ってくるはずだって。ほんとだ、その通りになった」

かがりは義経に告げるなり湯船の中を四つん這いで這いまわり始めた。

「行儀が悪いよ、かがりちゃん」

「ぎょうぎ？」

「あー……人前でやるのは良くないこと、かな。そういうことは兎に角しっちゃ駄目。分かった？」

「うー……分かった」

しよげたかがりはその場で方向を反転させると、義経の元へと戻ってくる。

どういうことだろうか、義経は考える。

かが様は義経のことをどこまで知っているというのか。

義経はかがりに尋ねた。会いたいと分かっていたというのであれば、ならば当たり前だが会ってくれるのだろうかなどと考えたからだった。

「かか様と、会えるのか？」

「ううん、会えない。私から会いに行つたことはないもの。いつでも行き成り来て、行き成り帰っちゃうの。桔梗の間には時々遊びに行くけど、会つてくれない時もある……。ただ、よしつねが来たらこう言つてつて、言われてる。『鍵を探しなさい。手助けを出来るだけしてあげなさい。必要なものは必ず、目の前に現れる。六花神が欲する力は、鍵を全て手に入れた後、私の中に返される』つて言つてた。けど、その私の中にして言うのは、本当は貴方つて言われたから、かがりに返されるつてことだつて思つていいのかな？かか様取りあげた力が、よしつねに会つたことで一つ戻つてきたから、私、また鍵を探さなくちゃ。一つ見つけられたんだから、残りも絶対見つけられるよね。そして全てを見つけたら、その時はやつと……会えるんだ。あの人に」

そう言つて義経の身体にぺたりと額を押し付けてくるかがりを見て、義経は呻くようにこう言つた。

「六花神が欲する力、だと？まさか、かがり、君は 約束された子供なのか？」

34 (約束された子供) (後書き)

ここまででは完全に変えられない話でしたが、ここから少しずつ話
が変わります。

編集長かった……

1 (目的を同じくする者達) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

1 (目的を同じくする者達)

山田のように降矢雫を恨んでいる人間は存外多く存在した。

今回執行部設立などにより、表面だつて責めることの出来る材料が与えられたからか、その者達が堂々と雫を詰る様を見て、山田はこれらの人間は己と同類であると言うことを確信した生徒達を端から勧誘していった。

そのうち、上手く勧誘していった生徒達と周囲の生徒達への誘導が段々と上手くいっていった時のことだ。雫を女子トイレの個室へと押し入れ、そこで水をその頭からぶちまけたことがあった。それがどうやら人伝に山田達の息のかかつていないものにもばれたらしい。そこまでは良かったのだ、そこまでは。

山田は窓の外の、のどかな景色を見つめながら深いため息をついた。

気づけば勝手に誘導せずとも生徒達は雫に牙を剥いた。

それは単に羨ましくてと言う幼い感情だったり、目ざわりであるとの自己中心的な考えだったりするが、それら全てに共通するのは、降矢雫がちょうどいいターゲットになり下がった、という事実だろう。

どこの学校にでも、どこのクラスにでも存在する、ある程度の悪意をぶつけてもいい存在。

変化のない刺激のない日常に加えるちよつとしたスパイスになるスケープゴート。

それによもや降矢の家の方が選ばれるだなど、今までの六花学園であれば考えられもしないことだったろう。

傳くことこそが当たり前前の存在である雫に対し、彼らは悪意を持って もしくは面白ずくで攻撃することを覚えた。

それはいつしか彼らに愉悦をもたらしたのだらう。

いつからか、山田達の思いもよらないような方法で雫へとその牙

を剥いたのだ。

再び深いため息をついて振り返る。

「あれは失敗でしたわね」

「ああそうだな。まさかあんな目立つ場所でバケツを頭から落としてくれるだなんてな。俺らよりよっぽど恨んでいるわけでもあるまいに、単に面白くでたとしても、あれじゃあ単に周囲を固められて、はいお終いだ。それじゃあ上手くないだろ」

「そうよね。だってあれじゃあ失敗しなくたって直ぐに死んでおしまいじゃない。それじゃあつまんないわ。もつといたぶっていたぶって壊れていくのを見てからじゃないと……納得出来ない」

山田は同盟を組んだ面々を見やると、満足そうに笑みを浮かべた。そうだ、そうでなくてはいけない。

この恨みはあの程度の攻撃をくれてやるだけで納まるはずがないのだ。

「兎に角暫くの間は警戒がきついでしょうから、それとなく周囲をあおる形で続けるとしても、何か決定打が欲しいところですよわね」

このまま周囲からの悪意をぶつけ続けて貰うとしても、表だって堂々と攻撃を加えるとあとあとこちらの方が動きにくくなってしまふ。そう考えるとその決定打を手に入れるまでは周囲には適度にやってもらえるようにと誘導も加減をしなければならぬ。

匙加減は難しいだろうが、それでも今は、それすら楽しめる程度になってきていた。

「そうだな……何かないもんか……」

とどめを刺す為に必要なものが後一つ、一つでいいから欲しかっ

た。

「何か、降矢雫の弱みか秘密の一つでも手に入れられれば……」

+++

屋敷の中へと帰りつくも早々に長椅子の上に行儀悪くダイブする。決して人には見せられないほどにはしたなくスカートの中を肌蹴た状態で身体を伸ばしているその姿に、見慣れてはいるのだろう、呆れた様子で溜息を一つついてメイドがその足元へと跪く。

その足からそつと磨き抜かれた華奢なデザイン革靴を抜き取ると、足をぎぢぎぢと今では締め上げているだけの存在になりつつある靴下を抜き去る。

「お嬢様、飲み物をお持ちしましょうか？」

「ええ、頼むわ。そうね、疲れているようだから砂糖をたっぷり入れたココアがいいわ」

「畏まりました。マシユマロはいかがなさいますか？」

メイドは主人であるこの少女が、ココアの中にマシユマロを入れてじゅくじゅくと溶かしつつ飲むのを好んでいたためこう尋ねたが、矢張り今日もマシユマロを入れてじゅくじゅくと溶かして飲む方を選んだようだ。

「沢山入れて」

「はい。では直ぐお持ちいたします」

メイドは深くお辞儀をすると少女の部屋から足音もさせずに出て

いった。

日本人とアメリカ人とのハーフだった母は、若い頃は特に際立って美しかったらしい。

今でもその美貌は衰えてはいないが、それでも、山田は自分には及ぶまいと思っっている。

ただしそれは、口に出して言うべきことではないが。

クォーターであるため、山田自身、目鼻立ちが整っていると言うことだけは自覚しているの、そういったスタンスできただけに、それ以上の態度を取れば鼻つまみものであることくらいは重々承知しているのだ。

日本人の美徳らしいが、謙虚に、慎ましく、その言葉が実を言えば山田は大嫌いだ。

大体、何故本当のことを言って不快に思われねばならぬのだろう。山田は分からなかった。

「私は綺麗。私が一番美しいのに……本当のことを言って白けた顔をされるなんて、有り得ないわ」

だからこそ、こうしたことは表に出さないように、なるべく謙虚にするよう努めてきた。

周囲から弾かれないように。

山田はそのことに、心底嫌気がさしていた。

1 (目的を同じくする者達) (後書き)

第四章開始です。

序章なのできな臭い話だけです恐縮ですが続きます。

2 (メイドの友人) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

2 (メイドの友人)

山田は長椅子に腰をおろして先ほどのメイドと今日も仲良く談笑していた。

ある種、幼い頃から奉公に来ているだけあり、山田とは姉妹のような関係を築けているわけだが、そう思っているのは恐らく、山田だけなのだろう。

メイドは使用人であるとの態度を一切崩していないと言うのに、山田はころころと鈴を転がすような声音で、メイドの前で学園内でこのことを、面白おかしく話して聞かせていた。

その温度差がどうして山田には分らないのか。それがメイドには不思議でならない。

「結局、降矢雫には執行部以外、残らなかったのよ」

「と言いますと?」

「だから、結局、執行部に入ったメンバー以外、だあれもあいつの元になんていかないの!ふふっ、いい気味。私を侮辱した罰だわ。どうせ執行部のメンバーだって本当は降矢雫のことなんて憎たらしくしか感じて無いに違いないわ」

「そうなのですか」

適度に相槌を打つと、メイドはそつと瞼を伏せる。

降矢雫 見た事もない少女だが、山田のこの執着としか言いようのない感情をぶつけられ、今はどうしていることだろう。さぞかし鬱陶しいと感じているはずだ、そんなことを思う。

山田は熱いココアに溶かされじゅくじゅくと小さく音を立てるそれを一口含むと、実にいやらしい笑みを浮かべて笑いだす。

「ええそうよ。どうせ皆降矢の名につられてるだけに決まってる

わ。馬鹿な子達。ついていく人間が間違っているわ。おるかよね、そうは思わない？」

これにも曖昧に頷くと、メイドは甘味を勧めてみた。少々話を聞いているのが煩わしくなってきたのだ。

するとこれに山田は気を良くし、用意された焼き菓子を一つ拾って口の中へと放り込んだ。

ほろりと口内で解けると、焼き菓子は山田の喉の奥へと押し流されて消える。

それを合図にと言うわけでは無いのだろうが、山田はうふと思いついたようにこんなことを口にしてみた。

「そうだわ、ねえ、使用人同士が仲がいいと聞いたのだけれど、友人とかやつぱりいるの？」

珍しくも自分以外の人間に悪意以外で興味を示した主に、メイドは少々戸惑いながらも口を開く。

自分のことなど、何を話したものが 考えた末、メイドは件の少女の元で働く一人の友人のことを語り始めた。

「何でも降矢邸にて働いているそうで」

「へえ、そうなの」

「仕事は私とは同じかどうかまでは教えて貰えないんですけど矢張り内部情報漏えいに関しては、徹底しているんでしょうね。教えたら首が飛ぶと笑いながら言われました。今はどんな仕事をしているのか……彼女とはお嬢様も出席なさったパーティですが、こちらで会いました。向こうもそこには付き人としてついていましたよね。お互い驚いたんですよ。実は彼女とは、元から知り合いなんです。と言うよりも友人ですね。暫く疎遠にしまして……けど、不思議な縁です。それ以来、時々会っています」

その彼女の担当している先はあの広い屋敷の中の一部なんだとか。入ってはいけない部屋が幾つもあったり、果ては庭園は庭師が小まめに整えていても毎日どこかしらの個所を手入れしなければ間に合わない広さなのだ。とまで言えば、その広大さには二人ともに恐れ入ったものだった。

「庭師も一人じゃなくてそれですからね、相当広いのねと二人で話していました」

ここまででは山田も特に変わり無かったと思う。いや、実につまらなさそうにメイドを見てくるため、もう話すのを止めるべきかと思いを始めていたあたりだった。

先日特に印象に残ったことですがと前置いてこんな言葉を口にした。

メイドにはそれこそ世間話の範疇であるそれが、まさか山田の心を旨い具合に捕らえようとは考えもしなかったのだ。

「その子が勤め先で恋仲になっている男の人がいるのですが、なんでも隠れて付き合ってるそうなんですよね。表ざたにするには少々問題があるんだそうです。難しいですね、恋って」

うつとりとした表情で語る相手の姿に恋愛中とは羨ましい限りである。と口にしたことを思い出す。

メイドはこの屋敷に勤め始めてから五年経つが、職場でそのような関係を同僚と築いたが最後、辞めて貰うと言われているだけに、同じく使用人仲間の中ではそのような間柄になろうと思ってもならないでいる。それだけに羨ましいと思う。

この屋敷にはそれこそ、来客が少ないのだ。同僚との恋愛を禁止されている上に外からの客もあまりないと言うとなると、まさにとど

こで相手など調達しろと言つのだと言つことで、お手上げ状態なのだ。

それこそこの仕事を辞めてからしか手に入らないだろう存在に、羨んで何が悪い。

ぽつぽつと語っていけば、山田が口を開く。ただし、メイドは気づかない。

「……その子、」

「降矢邸には三年で……ああ、何でしょうか、お嬢様」

「いえ、続けてちょうだい」

「畏まりました 降矢邸には勤め始めて三年で、ですか、去らなければならぬそうですね。やっぱりそれだけ情報漏えいに関して徹底されてるんでしょうね。三年以上勤められないそうですね」

そこまで聞くと山田は何やら考えているようだ、難しい顔をしてココアを啜ると席を立った。

「その子、その彼氏とのことは、何故表ざたに出来ないのかしら。やっぱりうちと同じで恋愛禁止なのかしらね？」

「いえ、そうではないそうですね。ただ、身分違いなんだとか。それでも彼氏の秘密を守るために私はここで一緒にいるの、彼を守らなくちゃって言ってました。健気ですよ、人には決して言えない関係、その上……まあ推測ですが、そのお屋敷の中枢に位置する方と恋仲なんじゃないでしょうね。その彼氏が抱えた秘密って結局お屋敷の秘密なんじゃないですかね？だから秘密を守るために協力してるんじゃないかなあと」

秘密を守ることがどうして彼女にまでかわるのか、それは分からないながらも、メイドは二人の仲を応援することにした。

身分違いの恋、それは女性達のあこがれの的である。

自分はここを辞めるまでは恋すら出来ないが、今を楽しんでほしい、そう、心から願っていた。

ほうと羨むように吐息を漏らすと、メイドはいつの日か自分も誰かと愛し愛される仲になりたいと夢想する。

そんなメイドを見て、山田は喉の奥でくつと笑った。

「恋する乙女はいいわよね、ほんとに」

「ええ、本当に羨ましいです」

「ね、……羨ましいわよね」

雫が思っている以上に、降矢には存外敵が多く存在したようだ。

やっかみ半分、と言ったところなのだろう。

日本人が多く通うこの六花学園では、矢張り日本人の気質として色濃く強く出るあまり褒められた性質ではないそれが今回、顕著に出たらしい。

大体の日本人が諸外国よりもそれは強く出るのだそうだが、才能ある人間が、成功をおさめ、そして、没落する様を見てはやりと笑う、そんな嫌な性質を抱えているようだ。

最早それは病的とも言えるそれだったが、皆表立ってはそのようなことは基本、しない。

ただ、今回の雫のように、突けるところが出来ればそれこそ、こぞってそういう脆くなった場所を突く。

それも、その人間が、酷ければ死んでも突くの止めない。

やっかみとは、時に人を殺すのだ。

事実、雫はこのイジメが始まった当初、頭上に中身入りのバケツが降ってくることにより、命の危機に陥ったわけだが、やっかむ人間は、大抵、そのことを正義と思ひこむ。

殺し終えた後も、むしろ天罰とさえ思ひこむ者すらいるのだ。

それこそが実に厄介なものと言えた。

降矢宗一郎　降矢グループと言う、巨大な企業グループのトップであり、そこに現在、総帥として君臨している歳は八十を超えた老獪な男である。

巨大企業グループともなれば、矢張り周囲を押しつけて進めてきた事業の一つや二つ、あるのは当然と言えた。

そのうちの幾つかは、恐らくだが潰れた企業もあつただろう。

そうしたところは簡単に調べがついた。それこそ、降矢は完全に株を公開しているからだ。

どの事業に進出しているかなど、調べるのは造作も無いことだった。

「お陰で簡単だったわ、降矢に恨みを持っている人間を探し出すのは」

沈黙を守っていた目の前の二十代半ばの女は、この言葉を受けて静かに口を開く。

「……結局、何を言っているのか、分かりかねるわね」

「あらそう？」

山田は足を組み直しつつ面白そうに笑うと何気ない風を装いこんな言葉を口にして見せた。

それは、どこか何かを匂わせるようなニュアンスの言葉で、それをこの女がどのように受け取ったかはまた別だろうが、喫茶店の一角で繰り広げられるこの会話を、周囲は別段、変わったふうでもなく、普通に聞いていた。

「あなたの好意を寄せている相手……ですか。私、知ってしまったの。ねえ、秘密、ばらされたくは無いのでしょうか？」

それがどんな内容なのか、知らない癖にこんな含む様な言い方を
する山田は、実に狡猾であると言えよう。

見る見るうちに目の前の女の顔色が変化してきた。

ただ、予想していた反応では無かったのが妙だ、とは思うが。

予想していた反応としては、言わないで！と直ぐにも山田へと縋りついてくると思っていたのだが、そうではなかった。

「……あの人を、どうする気？返答次第じゃ貴女、容赦しないわよ」

脅迫しているのはこちらなのだが、この女、本当に分かっているのだろうか。むしろ脅しているのはどちらかと言えるほどにその表情は緊張した面持ちに変化し、そして、怒りを通り越して相手は能力のような表情になってしまっている。

一体どうということなのか。

どうやら本当に秘密は存在するようですね。

山田はとんでもない秘密を抱えた人物と、この女は付き合っているらしいと確信するや否や、勝利をも同時に確信した。

この女を押さえれば、確実に勝ちは決定するのだ。

それどころか、この女ともども、その彼氏とやらも押さええてしまえば更にいいだろう。

そつと山田はテーブルの上に持ってきた小さな機械を取りだすと、それを女へと押しやる。

受け取れ、と言っことらしい。

「これは？」

「貴女方の秘密、ばらさない代わりにですが、私の頼みを聞いてくれますわね？」

否は言わせない口調だ。そして、女が断れないことを知ってのこれである、嫌らしいとしか言いようが無い。

女は目を細めると、顎を若干持ち上げて言う。

「何をすればいいの？」

「話が早くて助かるわ。降矢隼の秘密、これが欲しいの。けれどあの鉄壁の防御でしょう？内部に人をやるうにも難しくくて……ですから、それに秘密を納めてきてほしいのです。いかがかしら？やっってくださいる？」

元より断れるはずもない。そして隼の秘密をと聞いて心の中で少し安堵した。

彼のことじゃないんだ。

女はそれを手の中に納めると、そっと口だけ笑みを浮かべて告げた。

「彼のこと、バラしたら貴女……ほんとに容赦しないから。……殺すわよ」

承諾の返事にしては物騒なものを投げかけると、女は席を後にした。

後に残された山田は、ひやりとした何かに抱きすくめられたような気がして、ぶるりと震えた。

「何なの、あれは……」

不気味な女だと思ふやくと、山田も会計を済ませ、喫茶店を後に

した。

3 (目に見える形、目に見えない形) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

3 (目に見える形、目に見えない形)

制服を脱いで丁寧に畳んでいると、須賀が気遣わしそうな目を向けてくる。それが今は少々、鬱陶しいと感じるのは雫の我がままだろうか。

「痣……増えたね」

「……そう、ですね」

自分は気にしなくても、それを目にした人達が気にしてしまうのであまり見せないようにしたいのだが、学校内での着替えはそうもいかない。

お互いに何と言ったものかとも思うが、それでもこれは互いに選んだ道だ。

嫌がらせは別にこれくらいならばどうと言うことではないと言うレベルで済んでいるとは思う。それはあくまでも雫から見れば、ではあるが。

須賀はどのように考えているかは知らないが、けれど、あまりいい感情は抱いていないように思う。

一部の生徒は確かに信用してくれたと思う。それは仕事できちんと返せればと、必死で執行部が動いて見せているからもあるだろう。これはきちんとしていれば人はついてくるという、いい典型例であるとも言える。

だが、それ以外の大部分の生徒達は未だ、頑なだった。

二人は着替え終わるとそのままグラウンドへと向かった。次の授業は保険体育だ。

ジャージの袖口を弄びつつ須賀は言いくそうに口を開く。

「私は……さ、別に突き飛ばされたりとかしないけど、降矢さんに

はそういうのばっかじゃん？その、攻撃って言うか……何て言うか……いつか……向こうが本気になったらとか思つと、やっぱ……私、気が気じゃないんだけど」

見ている気分が悪いよと続けられれば雫は苦笑した。確かにこれは、言いにくかるう。

生徒達の嫌がらせは本当に単なる嫌がらせレベルでしかない。そう、今はまだそのレベルだ。

まだとしか言えないのが苦しいところではあるが、それでも今のレベルであれば何とか耐えられるだろう。それこそ殴る蹴ると暴力には訴えられていないのだから。

「皆さんが単純に無視だけで済んでるだけでも有難いです」

「ど、どこが！？だっ……突き飛ばされたり結構してるじゃん！」

「それは……全て私にきてくれるのであれば、それはまだマシですし」

「ふざけないですよ！むしろ降矢さんだけきつついんだってば！おかしいくらいに！」

否定する須賀は必死の形相でそれを告げるも、雫には良く分からなかった。

おかしい、のだろうか？

周囲の冷えた眼差しも、露骨な嫌がらせも、雫には慣れたものだったから。どうしてもそれがおかしいと言うことが、理解出来ず脳の中に染みわたらない。

曖昧に頷くと雫は須賀と伴い他の生徒へと合流した。

「それではペアを組んでください」

「はあーい」

そこでも矢張り、冷たい眼差しが二人を迎えるのだった。

+++

グラウンドにて準備運動を終えたところでふいに一人の女子生徒からきやあと弾んだ声が上がったかと思うと、クラスメイトの女子がほぼ全員、トラックの隣で行われている男子サッカーへと群がっていった。教授が居なくなっただれてきたところでのこれだったために、二人は驚いた。

「何、これ」

「さあ……？」

雫はその長く厚ぼったい睫を瞬かせると首を傾げて女子たちがすっ飛んでいった方を見やった。

「高遠会長と成瀬副会長だわ！」

「男子は二年生と同じ時間に体育でしたのね」

「ああんもう！どうしてここには記録媒体が無いのかしら？撮影出来ないじゃない！」

どうやら今日の授業は男子のみだろうが、二学年と合同授業のようである。クラスメイトの男子達と、二年の同じクラスと言うことで何かと合同で授業が行われるのだが、千草と健が合同授業と言うことで二人がグラウンドの中央へと進み出てきたからこそその騒ぎのようである。

こうして見てみると矢張り二人は人気があるのだと雫は思ったが、隣の須賀は少し険しい表情を浮かべている。

「女子は計測なのに、男子はサッカーなのね……」

体育倉庫からボールやチーム分け用に使うであろうノースリーブの番号が振られたシャツも用意してきたようだ。それらを用意してきてこれよりいざ　　と言うところらしい。

ようやくこれでサッカーが出来ると男子一同はグラウンドの使われていない面へと集まると、シャツを手渡し始まった。

「よし、チーム分け始めるぞー」

「ういーっす」

チーム分けが即座に決まってしまうところは矢張り男子だからだろうか、あの子とは嫌だなんだといちいちいざこざが起きないのは実にさっぱりとしていて清々しく感じられる　　とまでは言い過ぎだろうか。今の雫と須賀からすれば、それは羨望の的でもある光景である。

「楽そうでいいですね」

「そうね、男子ってほんっと……楽でいいよね」

そんなことを羨ましげに呟けば、サッカーが始まったようだ。

「成瀬様ー！頑張つてー！」

「会長頑張ってくださいませー！」

「完全に応援モードですね」

「うわあ……どうしょこれ、收拾付かかない？」

自分達は五十メートル走を計測するようになると言われているにも関わらずに、本当にこんなことでいいのだろうか。クラスメイトの女

子は雫と須賀を置いて、その全てが男子の応援にいつてしまった。

「……ま、まあ……確かに自分達で計る様にとおっしゃってはおりましたよね。自習と言うことで監視の目もありませんし……気持ちも分からなくはないですが……」
「ほんとにそう?」

雫は答えられなかった。正直、人のスポーツをしている風景を見ても、何が面白いのか分からない人種であるため、千草や健がサッカーをしていようがなんだろうが、クラスメイトの男子がやっているがなかるうが、どうでもいい。

須賀の問いには答えず視線をそっと逸らすと、雫は足元に落ちていた計測用のストップウォッチを拾い上げて言う。

「……けれどもこういうのは……いいのでしょうか?」

確かストップウォッチを受け取っていたのは保健体育委員の生徒だが、放り投げていったらしいと知り、雫は肩を落とした。

授業より、そちらがいいと言うことでしょうか?

雫にはその気持ちは理解出来なかった。

須賀は元より運動馬鹿と自分でも自称していたこともあるだけあり、このあまりの態度に切れたようだ。突然怒りのあまり叫び出した。

「いいわけないじゃんーっ! ああもう、知らない! っていうか、どうせ私達の言うことなんて聞くはずないもんね。無駄無駄!」

確かにそうだろう、雫に須賀にと、二人は今、大半の生徒達から無視をされている。それはクラスメイトも例外ではないのだ。だからこそ、二人が何をいっても聞き入れられることはない。

「とりあえず、私達だけでもやっちやおつよ？」

「そうですね、やりましょう」

そう言うわけで、二人はさくさくと五十メートル走の計測を始めることにしたのだった。

4 (大転倒、そしてお姫様抱っこ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

4 (大転倒、そしてお姫様抱っこ)

別にズルをしたいわけではないが　一時間に計測は二人きりと言うこともあり、即座に計り終えてしまった。けれど当たり前だが時間が余ってしまった　これはもういつそ、時間内一杯ががんばって計りまくり、一番いいものを結果としよう、そう思うのは当たり前のように誰でも思いつくようなことだろうと言いたい。

須賀は五回目を計り終え、雫はもう、十二回目だった。これはもう単純に、納得がいく数値を出せたかどうかが如実に現れた結果になる。

「い、行きますっ!」

「よーっし!じゃあ行くね!よーい……どんっ!」

須賀がゴールで腕を下ろしたのを見た瞬間、雫は勢いよく走りはじめた。

全力で足を振りあげ、振り抜く。心地よい躍動感を感じるものの、けれど雫はあまり運動が得意と言っわけでもないため、どうしてもその足は重く鈍い。

ゴールだと思い更に足を伸ばすが、須賀がストップウォッチを見て告げる言葉は駄目との一言。

「さっきより落ちてる」

「……はあ、はあ、……うっ……駄目ですか」

ふらふらとゴールより先でへたっているのだが、須賀はこれでは中学生レベルであろうと告げる。何ともきつい一言だ。

「何が……足りないのでしょうか。昔から、……歩くのも……走る

のも……苦手で……」

「歩くのって……ちよつと後で個人面談ね。詳しく聞かせて貰うから。うーん……走る方はたぶん……って言うよりも、もうちょっと体力つけたほうがいいかも？走るよりも十回くらいの走り込みでそれだけバテるのは拙いと思う」

「そ……そつち……です、か」

雫はのろのろと起きあがると、そのままスタート地点へと戻っていった。

戻る途中、ふらふらとした足取りで考える。

体力をつけるにはどうしたらいいのでしょうか？

元より雫は器用な方では無い。むしろ相当不器用な方だ。

奏のように天才ではないため、突然天啓を受けたかのように式が解けることも無く、古文書を読み解くことが突然出来る様になっただりもしない。単に勉強時間がそのまま成績に現れるタイプだった。今の学力の維持を続けながら、そこで体力をつけるために……となると、相当厳しいだろうと言える。

「そうだ……耳でヒアリングを聞きながら走る、と言うのだったら……」

時間に無駄が無いかもしれない。

よし、その方法でいってみよう、雫が汗まみれの拳をぐつと握り締めた時だ。危ない そんな声が聞こえたかと思うと、視界が突然ブラックアウトした。

「降矢さん！！」

須賀が慌てて駆け寄るも、雫は酷い有様だった。

元から走り込みを何本も続けた後だ、体力は完全に底をついてい

たと見るべきだろう。そこにきて側面からの打撃　いや、顔面にも多少かかっていたようにも思う。雫の顔にはくつきりとその痕があるのだから。

「い……た……」

「やだっ！血だらけ……」

ふらついていたところにまともに避けることもせずに雫は側頭部への殴打　サッカーボールを食らい、ふらついた足ではまともに踏ん張りがきかなかつたに違いない、膝と手を咄嗟に出したのだから、体重を支えきれずにもろに叩きつけたようだ。ただボールを受けてこけたにしては酷い怪我をしていた。

膝からも手のひらからも、そして顔にまで擦り傷があるのを見れば須賀は青くなる。

「降矢さん、痛い？顔と膝と手以外、どこか痛いところない？頭は？
ねえ！？」

「あたま……は、くらくら……しますけど……だいじょうぶ
大丈夫じゃないでしょ！？」

最早まともな思考は働かないほどに強い衝撃を頭部へと受けたりしいと知ると、須賀は雫の身体を横たえて周囲へと視線を走らせる。

「誰か！……いや、保健委員の人！」

けれど女子生徒は冷ややかだ。むしろ冷たいどころか数名は醜い笑みを浮かべてこちらを見てくる始末だった。誰も進み出て来ない。

「……もういい。降矢さん、私、教授呼んでくる！だからちょっと待ってて。私じゃ運べないから、だからごめん。待ってて」

ふらつく頭で雫はいいと須賀を制すとそのまま起きあがるつもりだが、須賀は駄目だと雫を寝かせようとする。これくらい平気だと言いたいらしいが、小石が膝に大きく入り込んでしまっているのだ。下手に歩かせたくはない。

誰かつ！

「ご、ごめん！さっきのボール、俺が……」

須賀が雫と悶着を起こしていた時だ、二人の元へと走ってきたのは健だった。

健はまともに誰かにぶつかっただらしいと騒ぐ男子をわらわらと数名引きつれて登場したのだが、怪我をしている雫を見て、途端に青くなる。

顔に膝に手に、どうやればそこまで酷くなると言いたいほどに雫はたったボール一つでこの怪我なのだ。驚くのも無理はない。

「ふるやさ……」
「ご、ごめん！お、俺！女の子の顔になんてことっ！」

「あの……いいです。元から私、うんどう……得意でなくて……受け身……とれずに……申し訳ないです」

むしろ謝られることが恐縮だと雫は言うが、須賀も健もそんなのはどうでもいいから保健室に行こうと言う。

須賀は健からもその言葉が出たことでそうだと思いなおす。

「私、教授に言ってきますから！だからその……保健室に連れていってください！」

「あ、お、おお！連れてく！うん！」

須賀が慌てて飛んでいくと、健は雫の手を取り助け起こそうとするが雫はその手を拒否するかのようにつきと引っ込める。

「降矢……さん、今くらい……いや、今だけでいいから、我慢してくんないか？」

我慢するしないではないのだ、雫からしてみれば。

千草と同じく嫌われているだろうと思われる生徒に、そのまま手を煩わせていいものか、とも思う。

「降矢さんこいつの手が嫌なら俺おぶってどうか？」

他の男子がそう告げるのを聞くと、むっとした様子で健は言う。

「俺が……責任取るから、お前は引っ込んでればいいだろ」

「責任っておま……」

「いや、だって顔に傷とか……」

自分で言っただけで凹んだようだ。健は雫にそれから謝り倒すと強引にその手を取って起こそうとする。

だが、雫の膝がその時、ふいにずきりと痛む。

「いつ!?!」

「ええ!?!い、痛む?!痛む!?!」

膝を抱えて雫が呻くのを見て、健は慌てて雫の膝を見ると突き刺さる小石と中に入ってしまったっている小石を見つけた。

本当にまともにつけたらしいと知ると健はこの足では歩けないと判断した。

助け起こすなど、論外だ。

「起こしてとか無理だろ、だから俺がおんぶって言って……」

「いい、俺が運ぶから。お前ら、触んな」

「……健？」

健は雫の膝の裏に手を回すと、そのままひょいと横抱きに抱え上げてしまう。

「やつ、止めてください！下ろして！」

「あのね、足駄目になって歩けないんだから、下ろせるわけないだろ？降矢さんはちょっと大人しくしてればいいよ」

「いらぬです！自分であるけますから、だから」

雫はあくまでも健を拒む姿勢だが、そんな雫の言葉を、健は受け入れられるわけがなかった。

途中から雫に対して無言になると、残された男子にこう告げた。

「俺これから保健室いってくつから、悪いけど教授戻ったらそう伝えて。俺が怪我させたから治療してくるからって」

「分かった」

そして健は雫のために揺らさないよう、慎重にその身体を運んでいった。

後に残された女子たちは面白くないと言う表情をして口々に言うのだ。

「何あれ、お姫様きどり？」

「歩けないふりとか……あっざとい」

「嫌な女」

5 (責任を取らせて) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

5 (責任を取らせて)

「どうして校医はいないんでしょうねー」

保健室のベランダ側へと雲を連れていくと、そこで健は雲を手すりを支えに無理やり立たせた。

「ごめんね、膝洗っちゃうから、ちょっとの間立ってて……」
「……はい」

もう逆らうことも馬鹿馬鹿しかった。

横抱きに抱え上げられれば何故だか羞恥と恥辱に狂いそうになるし、それが終わっただけでもいいだろう。痛みくらい、何とでもなる。

「いっつー!」

膝に埋まった小石は存外でかく、そして石に土にと水で落とされていく工程は、何ともきついものがあった。

「い、ごめん……」

流水で土と粗方の石を払いのけると、現れたのは擦り剥けてしまった膝と手だ。肉に埋まった石が見えるのと、奥へと入ってしまった石も見えて健は困った。

「手は綺麗になっただけど……」

これを指先で摘むのは自殺行為だと思われた。逆に押し込んでし

まいかねない。

中に入り込んでしまっている石も、これ以上何かすれば押し込んでしまいかねないだろう。そう思うだけで何も出来ない。健はせめてピンセットで、と思い保健室を覗きに肩を貸してやりつつ覗きこむが、矢張り校医の姿は無く、そしてどこにあるのか良く分からない。散々考えた末、健は雫に一言ごめんと告げると、その膝に唇を寄せた。

「な、何を！」

焼けるような痛みだった。

熱い、そして痛い。傷口に直接触れられることによる痛みも確かにあるが、その傷口を吸い上げられる痛みときたら、酷いものだった。

流水のお陰で冷たさで痛みが麻痺しかかったところで熱による痛みのぶり返しがきたのだ。膝ががくりと折れた。

「いつ、いたっ、やだっ……やめて、いたいっ！」

膝が折れて崩れかかると、目の前にある柔らかな髪にもたれかかり訴える。

「やめてください……ピンセットで……ないなら……ないで、ナイフで取るでもなんでも……」

そこまで口にする、ふいに膝から唇を離して健がこう言った。

「そしたら傷が残る。それに、もっと痛いよ？」

そう言うなり健はぺっと何かを口から吐き出した。

「小石……」

「二つ取れた。まだ、奥にあるっばいからもうちよつと我慢して…

…」

「やつ……やだ」

ふるふると力なく顔を横に振る雫に優しく笑みを浮かべると、健はまたその膝に接吻を落とす。

「いつ……いつ……！」

ひと際強く吸われたかと思うと、何かが膝から抜けたらしい。唐突に先ほどまでずくずくと味わっていた膝の疼痛が一気に消え失せたのだ。残るのは、じくじくとした熱を産み続ける擦過傷による痛みだろう。これくらいならば歩くのには支障がなくなったはずだ。結構でかいのが取れたと言いつつ自分の口を軽くすすいで健は雫の頬にも水をあててやり、その土を落とすと綺麗にハンカチで拭いてやる。

全て綺麗にし終えたところで雫をまた横抱きに抱えると、保健室へと入っていった。

雫はもう、横抱きにされることに特に不満はなくなっていた。

けれど、雫はそのことに気づかなかつた。

椅子に雫を座らせると健は周囲の棚を漁り始めた。

「えつと……どこ、だろ？ つつかあれ？ 洗ったら消毒で、そんで…

…絆創膏はあんだだけでつかいんだから無理だろうし……」

健が棚の中を「こそこそと漁っていると中身がばらりと零れ落ちて

きた。

「うおわっ!」

「包帯……落っこちちゃいましたね」

「うん。うわまじ個包装されてて良かった」

小さな筒がばらけているのを見て雫は苦笑すると、思い出したかのように表情をあらためてそっぽを向いてしまった。それを見る健は寂しそうだ。

「……」

「あの、さ」

やっとのことで消毒液を見つけ出すと、健は脱脂綿などが見つからないので校医の机に置かれていたティッシュボックスを片手に雫の前へと膝まづく。

消毒液は霧吹きタイプだ、腹の部分を押すと中身が傷に振りかかった。

「いつつう……」

「ごめっ!」

「いえ……」

続けてくれと言葉を繋ぐと、申し訳なさそうに上目遣いで健は雫をちらりと見、そして治療へと戻る。痛いけれど、これくらい我慢せねばならないだろう。雫は歯を食いしばって耐えた。

しょっちゅう突き飛ばされたりしていても、こういう痛みとは全然違うのだ。痣を幾つ作るうとも、あんなものはこれとは全く別種の痛みだと思いい顔を顰めた。

すると突然健は全く違う話を始めた。

「あの、あのな？俺……ほんとにあんときは、悪かったと思ってる」
隼は答えない。健はそれをいいことに話し続けた。

「勝手に勘違いして、勝手に……なんか、他の奴の前であんなこと言って、……たぶんさ、俺があんなこと人目があるところでしたのも、今のこういう……なんつの？イジメ？……を加速させる要因にもなっちゃってっかなあーって……思うんだ」

答えようがなかった。

そうだとも言えるし、そうではないとも言える。

突如としてぽつと現れたばかりの執行部が、半分以上の学園イベントを削る旨を伝えたのだ、これで不快に思わないはずもない。行き成り出来たばかりの部活がそれを仕切ることになったと言われたらはいそうですかと、そんな快い返事が返ってくるはずがなかった。健の反応は尤もであるとも言えるし、人目は確かに拙かった、とも思う。だがしかし、ある意味では誰の所為でもないのだろう。何にでもそうだが、時代が変わる時にはそうだ、いつだって痛みを伴うのだろう。今隼が感じている痛み以上に、もっと苛烈で、過酷なものが伴うはずなのだ。

「だから、悪かった。ごめん、せめてちよつとでいいから考えるべきだった。悪い！ほんつと、ごめん！許してくれなんて都合がいいことなんていわねーからさ！だから、あの……ちよつとでいいから……仕事、手伝わせてくれないかな」

「何を……」

この申し出は予想していなかった。

隼は意味が分からないとばかりに困惑した表情を浮かべると、健

は困ったように笑う。

「執行部、どう考えても人手不足だろ？だから、俺らも生徒会頑張るし……だから、余った時間になるだろうけど、手伝わせてくれな
いか？」

「いえ……そんなこと……」

「手伝わせてくれよ！お願いだ！酷いことしたんだからそれくらい、
させてくれよ！」

必死の形相で迫る健に押されるように雫はそつと健から視線を剥
がし横を向くと、健が目を逸らすなとばかりに肩を掴み引き寄せる。
強引な、とはいえず雫はむしろ言葉を失いかけた。

「……………む、無理です。だって、そうしたら今度は生徒会が何故
執行部について話になってしまいます……そうしたら……」

「そんなのどうでもいい！やりたいからやるんだ！……なあ、お願
いだから……やらせてくれよ……頼むよ」

「そ……無理……です……」

「降矢さん……だって俺……」

気づけば息もかかるほどの距離にある互いの顔に二人は気づかな
い。

だが、それを気づかせてくれた人物がいた。

がらりとふいにその二人だけの空間を割って入るものが居た。義
経である。

素敵な笑顔と言える素晴らしいほどの笑みをたたえた義経は、か
らからと笑いながらやってきて唐突にこう切り出した。

「何を？させて？欲しいって？」

「へ？」

「おとう、さま？」

「何を？僕の雫にさせてほしいって？」

「い、いや……なんか勘違いしてねえっすか？お父さん」

「君に父と呼ばれる筋合いは無い！」

特大の雷が落とされた途端、二人は硬直しきってしまうがその雫の顔をまともに見た義経は凄かった。二発目の雷をためこみ始めたのだ。

肩を小刻みに震わせたかと思うと、息を思う様吸って一言。

「俺の娘の顔に傷を作ってくれたのかクソガキ！！」

「え、ええええ、ああ、あの！お、俺！責任取りますから！」

「ああ？責任を取る……だあ？」

どすどすと足音も荒く保健室へと入室してくると、義経は健の襟首を捕まえて凄む。

最早完全にやのつく人である。

「え、ええとその……その……お、女の子の顔に傷をつけちゃったんですから……その、よ、お嫁さんにします！」

「ふっざけんなああ！殺す！絶対殺す！」

「いやいやいや！止めて！……ん？ああそっか！降矢の家に俺が婿に入ればいいんですね！！」

「ちげえよ！死ね！っつか殺す！」

「婿養子になりますからお父さん！」

「だからお父さんじゃないっつってんだろクソガキがあっ！！」

「え……あのあの、お、お父様っ！もうやめてーっ！！」

5 (責任を取らせて) (後書き)

ここら辺は書いててグロいって言われましたがそんなこと無いと思
いたい。

微グロ程度だと思いたい。

そしてエロいと言われたけれどエロいだろうか、疑問だ。

6 (初参加) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

6 (初参加)

夜も遅い時間のことだ。昼間の不快な出来事を思い出し、少しばかりだがいらつきながらも準備をしていた。

するといつからそこに居たのか、確かつい数分前までは確かに廊下で就寝の挨拶をして別れたばかりだったはずだ、その姿はいつの間に変容してしまったのか。

かがりは朗らかに笑うと笑みを浮かべたままに言う。

「よしつね、今から行くんでしょう?」

「行くつて、どこへ?」

「だから、狩りに。ねえ、私も連れて行って?」

どうやら雫から転変したのは義経が荒魂を鎮めに行くのを肌で感じて、ということらしい。

そうと知ると義経は呆れたように溜息をついて告げる。

「子供は寝る時間だ。それに、お前は実戦なんてまだやったことがないだろ。だから無理だ、連れていけない」

諦めると言外に告げるもかがりは納得していない様子だ。

「いや。私は義経とついてくから。義経が何と言おうとついていくから」

後はもうどうすることも出来なかった。

義経は跳ぶことが出来ないのだから、かがりを巻くことなど不可能だった。

深いため息をついてかがりを見ると、昼間雫が怪我したはずの膝

などが綺麗に治っていた。どうやら自分で治してしまったらしい。明日起きた雫はさぞや驚くだろうと思うと、また一つため息をつけて澤田たちとの約束の場所へ向かった。

澤田と塩見には当たり前だが驚かれた。

何故ここにかがりが居るのかという顔をしているが、それこそ、こつちが言いたい台詞だった。

義経は申し訳なさそうに二人に言う。

「ついてくると言ってきかないんだ」

「それはまあ……」

「ま、いいんじゃない？つても、最初だしさ？見てるだけだろうけど」

澤田が隣県との狭間に設置した楔が反応を示したことを先日察知したため今日はここにきているのだが、矢張り帝都は帝都でも、県境は深夜ともなると人通りはおろか、灯り一つ無かった。

これが帝都中枢ともなればまた別なのだろうが、行き成り別世界にきてしまったようで不安になる。

「何て言うか、大禍時のあたりからヤバいくらいだね。きてる」

きている、と言われても別段目に見えて何かが変わったところは無いのだ。だがしかし、肌にぴりぴりと来るこの感覚は確実に何かがある証拠だ。

義経はかがりを背後に庇うようにすると、胸から何かを引き出して目の前に投げつける。

それは小さな石に見えた。

石は反射する光も無いのに、何故か妖しく煌めいてきらりと光り闇夜へと自ら溶けていった。

「……飛んでった」

「そう、あれには意思がある。浄化するべき何かを見つけ出そうと飛ぶ、そういう習性があるんです」

石は空を切つてぐんぐん進む。それを見ていた三人もこれに置いていかれてはならないと直ぐ様駆けだした。

かがりはこれに慌ててついていくため駆けだしていく。

「……速度が速い。遠いか？」

「かもしれません。けれど場所から見て何でしょうね？祠でもあったのでしょうか？」

「どうなんだろう？」

三人はかがりを振り返らない。当たり前だ、遊びではないのだから。だからかがりは必死に追いかけた。

三人は石を追いかけるうち、気づけば山の中に居た。

「はあ、はあ、はあ」

走ってはならないという言葉を忠実に守っているかがりは、体力も足の筋力も無い自らの身体が恨めしく思い始める。

足、重い。

足だけではなく、腕も振り抜くのがやっとだ。

荒い息の下でどうして三人は、ああまで早く駆けられるのかと疑問はつきない。

「じ、……なじゃ、あの人なんて、……見つけれない……」

三人に追い付いた時にはかがりは汗まみれだった。

「かがり、大丈夫か」

「う、うん。平気」

全然平気ではなかったが、それでもかがりはそう口にした。

目の前に居たのは毛むくじゃらの大きな獣だった。

獣が地を這うごとに周囲の木々が薙ぎ倒されていく。凄まじい大きさを。獣が移動した後は全て、津波か何かに薙ぎ倒されたように太い木すらも一本も残らず叩きおられていた。

「会話は今回のも無理なタイプだねっ」

塩見は距離を取りつつ義経をちらりと見やる。義経もそれに応じる様に首肯すると胸元から何かを取り出して横薙ぎに払うようにしてそれを投げ打った。

それは紐状のものに見える。

投げ打ったものをそのままに、義経は獣の注意を引きつつ駆けける。

「兎に角暴れているのをどうにかしないと、捕まえるぞ」

「了解」

澤田は獣が通りぐちゃぐちゃになった木々を溶かし、練り上げると、そこには矢のようなものが出来上がる。前回の剣と同じくこちらも単純でいて原始的な武器だが、それだけに扱い易いものだ。

そして近くに生えている真竹に手をやると、そこから竹を溶かし、形を変化させていった。

「ゆ、弓矢？」

「そうです。良くご存じでしたね？」

「かか様、弓矢よく、使うから……」
「なるほど……では、どちらの腕前が上か、しかとご覧になってい
つてください」

言つなり澤田は弓を引くと、矢継ぎ早につがえては射出していく。
射られた矢は空を切りさき、獣の行く手を阻むようにその足元へ
と飛来していく。すると、獣は驚きに声を上げると進行方向を変え
て別の来た道を帰ろうとする。けれど、それはこちらの狙い通りの
動きだった。

逃げた方角には先ほど投げた紐が木と木を繋ぐようにしてかかっ
ていおり、獣はそれ以上逃げる事が適わない。これはただの紐で
は無い。彼らを封ずるためのものを織り込んだ、場を作るための紐
だった。

獣は本能的にこれを嫌がると、取ってきた道を返そうとするのだ
がその先を阻むのは塩見だった。

「おおーっと、こっちは通行止め！」

塩見はこちらも紐を投げ打つと獣は動けない。更に別の方角へと
逃げようとするが、そちらに逃がしてなるものかと澤田が矢をつが
えて三本、連射してやればこちらは駄目だと残された最後の方角へ
と逃れようとするが、そこに待っていたのは義経だ。

こちらにも来させるわけが無いだろうと不敵に笑ってそこも紐で
閉じてしまふ。

後は澤田が閉じれば結界内へ全員で入りこみ、そこで　という
段階まで来た時だ。獣はこうなれば破れかぶれだと言つことだろう
か、澤田へと矢ももるともせずに突っ込んでいく。

低い唸り声が出たかと思うと、澤田は後方へと即座に退いた。矢
で威嚇することが出来ないのでは、下手に手を出せば大変なことに
なる。

けれど、澤田は逃げたがその後ろにいたかがりは何が起こってい

るのが分からなかったのだろう。目の前に迫りくる巨体に、反応が
出来ずにいた。

「え」

「かがり、早く逃げろ！」

「……っ！」

7 (目を逸らしてはいけないこと) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

7 (目を逸らしてはいけないこと)

声も出なかった。

気づけばかがりは後方へと吹き飛ばされていたのだ。

疲弊しきっていたのも悪かったかもしれないが、もろに何か丸太のような大きく太いものがぶち当たると、かがりは防御を取ることにも出来ずに吹き飛び、義経達の元へと転がっていく。

「無事か?!」

抱きとめて貰ったらしいが、声なんて出てくるわけもない。かがりの胃の中身は激しく揺すられたお陰で中身が飛び出しそうだ。

回る視界も漸く何とか視点が定まるようになってくると、かがりは右腕を前へと突き出し、ぐっとその指先まで力を込めて叫ぶ。

拙い 義経はそう思ったが遅かった。

次の瞬間、かがりの右腕からは雷撃が放たれていた。

「消えちゃえええ!!」

次の瞬間、空が白むほどの光がそこには溢れ返っていた。

次にかがりが気がついた時にはそこは、ただの焼け野原だった。

「あ……」

「気がついたか」

「よしっね……さっきのは」

どうしたのかと痛む頭を押さえながらかがりはその場から起きあ

かりつつ尋ねてみると、義経は無表情に淡々と告げる。

「消えた。いや、消えつつある。かりがさつき放った一撃でな」

かりはそれを聞くと思いだす、そうだ、さつき自分はやれたではないかと。

褒めて欲しくてかりは義経へと飛び付くと、満面の笑みをたたえて言った。

「よしつね！私上手くやれたでしょ？ねえ？」

けれど、褒められるどころか、義経から飛んできたのは平手だった。

ぱんと乾いた音がしたかと思えば、かりは何が起こったのか分からない様子だ。呆然として何故？と、その顔には書かれていた。

「無理やりついてきた上、荒魂を浄化せずに消し飛ばすとはな……」

お前は馬鹿か」

「え、だ、だって……」

「だってじゃない。相手はこの山の神と崇められていた猪だった。

神は崇る。かり……お前は……」

神が崇る、そう言われても意味が良く分からなかった。

かりは呆然と義経を見て、ついで周囲へと目を走らせていく。すると目についたのは困ったような表情を浮かべている澤田と、視線を逸らす塩見の姿だ。その足元には煙を噴き上げる今にも消えてしまいそうになっている一匹の大きな猪がいた。

先ほどまでの巨体ではなく、二回りも小さくなったその姿に、けれど猪にしては矢張りでかい獣は息も荒くかりを暗い血走った眼で睨み据えていた。

何故だか分からないが、ぞっとした。

かがりは自らを抱きしめる様に二の腕を掴むと、ふるりと震える。

「こ、怖い」

「当たり前だ。相手は今にもお前を呪い殺そうとしてるんだ。これで怖くなくなったら何が怖い。神を怒らせたら……どうなるか……」

義経の表情も暗い。それを見ればかがりは今更ながらに自分ಗとんでもないことをしてかしたことを悟った。

仏は崇らないが、神は崇る。

矢張り連れてくるべきでは無かったかと思うが、今となっては後の祭りである。

義経はせめて少しでも愛娘へとかかる分を減らしたく、神の元へと膝を折って懇願する。

「神よ、あれはまだ、何も知らない娘なのです。どうか、崇るのは私に」

倒れてなお、義経の上背よりも大きなその身体からは、生気という生気が溢れ出ていつてしまっているのか、目を動かすのもやっとの様子だ。

猪は深く詫びる義経を見て、ついでかがりを見て告げる。

それは直接頭の中に語りかけてくるものだった。

それも、声ではなく、感覚としか言いようのないもので語られるそれは言葉以上にダイレクトにかがりへと届く。

猪はその狂おしいまでの胸の内をさらけ出していった。

「う……く……」

猪はただただ恨みつらみを訴える。

それは人に対するものであり、そして緑が消えゆくことに対する深い悲しみでもあった。

猪は特別なことを望んではいなかった。ただ当たり前存在していたものが変化していくことへの憎しみ、悲しみ、怒り、嘆き、それらをただ一心に訴えるのみだ。

気づけばかがりは両の目から涙が溢れていた。

「なんで、どうして、緑……削らないで。皆暮らしてるの。いや、いやだ」

「……かがり？」

「殺される、殺されるよ。痛いよ。嫌だよ!!」

かがりは頭を両腕で抱え込みつつふらふらと猪の元へと歩いて行く。

今、かがりは猪の神になり、そして猪の神はかがりになっていた。二つの魂は一つになり、全てを同調させていく。

その辛さも、悲しさも、全てを等しく感じ取ると、かがりは最後に猪の太い首に縋りついて泣いた。

全てが愛しくて、そして全てが憎くて。

「ごめんなさい。痛いこととしてごめんなさい」

三人は、わけも分からずその様子を呆然と見やる。

かがりは愛しげに眼を細めると、猪の瞳へと語らうように告げるのだ。

「大丈夫、もう、大丈夫だから……」

最初は蛍のような光がかがりの身体から幾つか浮かび上がってくるだけだった。だが、気づけばかがりの身体と猪の身体の周囲を取

り囲むようにして、それは優しい光をともしていく。

「これは……」

「かがりか？」

それは劇的なまでの変化だった。

今にも消えそうになっていた神の姿は、かがりによって、その姿を完璧なまでに修復されてそこにある。

猪もそれは予想していなかったことのようにだ、酷く驚いたように自らの太い首を巡らせて己の身体を確認している。

「もう怪我はない？」

猪はかがりに直接語りかける。

「そう。じゃあ……山を戻しに行こう。川を戻して……木々を植えよう。沢山生やせばまた皆戻ってくるよ。行こう」

8 (未知の力) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

8 (未知の力)

かがりと山の神の事件ともいうべき出来事から二日が経過した日のことだ、義経は腹立たしげにレポートを叩きつけるようにして机の上に放り投げた。

未だにあの日の出来事は信じられない　いや信じたくはないことだった。

神の通常癒えぬ傷さえ癒して見せたかがりに、義経は言い知れぬ不安を抱く。

「荒魂を沈め、和魂と同じレベルにまで落とす……並大抵なことじゃない」

人の魂は一霊四魂といい、一つの魂が四つに分かたれているとされる考え方だ。そして神の場合はその魂の性質には二通りあると言われている。それは人間の場合は四つの魂があると言う意味だが、神の場合は二つの側面しか無いと言うことをさしている。

一つは和魂　様々なものを実らせると言った恵むことなど、神の優しい側面のことだ。

二つは荒魂　天変地異などを起こす、神の荒ぶる魂のことを指す。

この二つは対になり、常に天秤にかけられているようなものと考えられている。片側が大きく膨れ上がると、一気に神の魂はそちらへと傾いてしまうのだ。

両者がちょうどいいバランスでつられているのがベストではあるが、中々そう上手く行くものではない。

そして昨今自然神に対する人側の態度は矢張り、軽視してかかっている。神からは映っているようで　どうしても破壊、破滅への衝動を容易に膨れ上がらせる傾向にあった。

「ははあん……つても俄かには信じがたいな」

鷺宮が義経の叩きつけた山神の鎮静化についてのレポートを拾い読みあげつつ言えば、義経は目を伏せて愚痴を零す。

「お前がいないから……あんなことに……」

「おいおい」

じろりと自分をねめつけた義経を見て、鷺宮はいやな予感を感じ、じりりと後ずさる。

「そつだ、良く考えたらお前がいなかったからあんなことになったんだろつが！お前がきちんと周囲をあの時探知していれば……っ！」

ふいにそのことに気がついて義経が鷺宮へと食ってかかると、怖いと鷺宮はその場から慌てて逃げ出した。

「逃げるな！」

「逃げるわ馬鹿！お前顔こえんだよ！！……ったく。つても、しょうがねえだろ？俺だつて六花神に別で依頼を受けたりするわけだし。そりゃまあ、お前優先にはしてるけど……どうしても向こう側を優先しろつて命令も下るんだし」

「俺と向こうの狒々爺どものどつちを取るんだ！」

「女みたいなことゆーな！」

紛らわしいわと言つたり鷺宮はその頭にべしりと報告書を叩きつけた。

その中には、かがりのことは書かれていない。

当たり前だ、六花神へと届ける報告書になど、かがりのことが書けるはずがなかった。

あの日、帰宅した時にはかがりは雫に戻ってしまい、そのまま倒れるように眠ってしまった。

矢張りあの幼い体には相当の負担が掛かっていたのだろう、義経は雫が怪我した膝に丁寧に包帯を巻くと、まだ傷があることを偽装した。雫は翌日、痛くない足を不思議そうにしていたが、まだ怪我は治っていないのだから包帯は暫くはずしてはいけないと念を押すように伝えてあるため、傷がなくなったことには気がついていない。実に素直で結構なことである。

義経は報告書を受け取ると、自分の席まで戻り、深くそこへ腰を下ろした。

「傷が治るだけじゃない。それこそ完全な時の逆巻きだと思う」

「逆巻き？」

「そう、……山の地肌が見えていた部分が……抉れた土を腐った木や虫の死骸なんかだと思うが、そういうものを一気に時を進めて？だと思っただが　土にしたり、……逆に木が枯れかけているのを見て生きられるようにと新しい生命力を持ってきていた。ただし、それは俺にはどう見ても、時間を戻してそいつを蘇らせたようにしか見えなかった」

恐らくそれと同じく、雫の怪我や以前治癒して貰った時のことだが、あれは怪我をしていたことを無かったことにしているのと同じようにと告げられると、鷲宮は考え込んでしまう。

「……だとしたら過去をどうやって知るんだ？」

傷を癒すのではなくて、過去あったものそのままにしようとしているとしたら、過去の傷の無い形を覚えているのが前提の話になら

ないかと言われれば、そのあたりは全く分からないと義経にお手上げのポーズをされてしまった。

「と言うよりも、なんだが……いまいちあの力がどういうものなのかが分からない」

「まあ、初めて現れた能力だからな。調べるのに時間もかかるのは当たり前ってもんだらうさ」

ただし、癒すわけでは無くて、時間を操るだけだとすれば、以前病院で病を完治したことなどは大変困ったことになる。

「後日また改めまして病気にかかっていたいただきます、なんて言われ
てみる、持ち上げて落つことすの原理でもう患者達は立ち直れんぞ」
「言えてるな……」

その能力の解明は、急務のように思われた。

+++

同時刻、千草は第三遊戯室　　と言ってもここはフィットネスマ
シンだらけのジムと言えるだろうが　　で大いに汗を流している
ころだった。

千草の趣味は武道、そして肉体強化だ。そんな千草にとってこの
遊戯室は、越してきて良かったと屋敷で喜んだ数少ない施設のひと
つだ。

最近では毎日自分の足で動かずに送迎は人任せにしているため、運
動不足解消と言うことでランニングマシンに先ほどから陣取ってい
るわけなのだが、雫をここで見かけたことはない。と言うよりも、

基本的に雫は学園から帰宅すると、早々に制服から部屋着へと着替えるとそこで勉強に取りかかる。休憩と言うものを取っているのを見た事が無かった。

「あいつ、他に趣味とかないのか？」

ふいにマシンに乗りながら、そんな疑問が頭の中で浮かんできた。勉強以外で確かに雫が他にやることをやっているため、他の部屋で見かけることもままあるが、それでもこうして千草のように暇を見つければマシンで汗を流す、と言うシーンだけは見た事が無い。

と言うよりも、雫が暇そうにしていたことはあっただろうかそんなことをぼんやりと考えてみた。

もっとも運動を積極的にしている雫というのも想像しにくいところではあるが。

「勿体無いな……こんなに凄い施設が家の中にあって、使わないなんて損だろ」

ランニングマシンは元より、他にもストレーングスマシンにバイクマシン、ウエイトトレーニング用のダンベルなどもあるのだ。個人の邸宅でここまで物が揃っているところは中々無いのとは言える。体を動かすことが大好きで動かすことによってストレス解消をしている千草には夢のような空間でもある。

一気に十数人がトレーニングに励めるほどに道具が揃えられていると言うのに、雫はここに現れることはない。それが千草には不思議でならなかった。

ピピッと短い音を鳴らされランニングマシンが終わりを告げると、千草はマシンから足を止めて降りる。

身体中汗まみれだ。息も荒い。

「……さすがに気持ち悪いな。シャワーあびるか」

9 (それは始めの一步) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

9 (それは始めの一步)

この広い遊戯室には無駄にただっ広いと言えるシャワールームがあった。

これも千草がこの屋敷で喜んだ物のひとつだ。やはり運動してすぐその汗を流せるというのは良い。

遊戯室と同様、こちらもあり活用されていない勿体ないことこの上ないものだったが、千草は頻繁に利用している。というよりも先日のお風呂場での騒動からこつち、暫くここをM Y風呂として利用させて頂いていたのだ。

幾つかあるシャワーブースの一つに入ると、千草はシャワーの持ち手を捻る。

ちよつと熱めだが運動で火照った肉体には気持ち良いと感じるお湯が頭から全身に伝い落ちる。熱いシャワーを頭から浴びるとほつとすると同時に、とてもすっきりする。この瞬間が千草は好きだった。

軽く全身をそのまま洗うと、シャワールームから出て着替える。少しだらしがなが濡れた髪のまま自室へ戻った。

その時ふと気になって、雫の部屋へと続く通路から首を突っ込むと、雫は今居るのかといつも雫の姿がある場所へと目を向けてみたと矢張りそこには雫の姿があり、かりかりと忙しくシャープペンを滑らせる音が聞こえる。

不健康だと言えるほどに最近益々青白い顔になってきている雫を見て、千草は少々お節介を柄にもなく焼いてみようと思った。

「おい」

雫は一拍置いてから声のした方へと頭を動かすと、椅子から転げ落ちそうになるほどに驚いて見せた。

「な、なな……何でしょうか？」

少々これにはむっとした。

「……なんでそんなに驚く」

「い……いえ……ただ、なんとなくですが……」

雫は慌てて机の上から教科書から参考書までを全て片付けると、千草へと向き直る。

「どうかしましたか？まだ、迷いますか？」

「道案内が欲しいとは誰も言っていない！」

「それは……失礼しました。先日のことがあったのでつい……」

実は先日大いに迷って迷ってついにはどこか迷い込んだ部屋に取り付けられた受話器を取ると、義経に不承不承ながらも助けを求めたことがあった。それを例に挙げて雫は言っているのだろうが、あれは無かったことにしていただきたい。と言うよりも忘れろ、早く無言になってしまった千草に雫は軽く咳払いをすると、誤魔化すように再度千草へと尋ねた。

「では、一体何用でしょうか？」

「ああ……それは、だな……」

ずばり、考えていなかった。

いつも机にかじりついている雫をちょっと連れ出そうと思ったものの口実が思いつかない。と言うよりも、元より接点が無さ過ぎるのと、雫に今までできてきた口が問題だった。

お陰で千草は、雫に何と言って連れ出せばいいか、これが分から

なかった。

千草は雫からの視線を受けて目を泳がせると、何か無いか何か無いかとつかかりを探し、最終的にこんな言葉で落ちついた。

「に、庭を案内してくれないか」

「……はあ」

「だからっ！庭！庭はまだ、……そのなんだ、案内はして貰ってないからな。うん」

「分かりました。では行きましょうか」

「ああ」

こうして二人は庭の散策に連れだって行くことになったのだった。

洋風の降矢邸ではあるが、広大な敷地内には純和風の建物が幾つか存在する。今日はそこまでの道と通路を案内しようと雫は告げると、千草の方を振り返りこう言った。

「外灯が無い方へは行かないくださいね。センサーがこの時間帯は起動していますので」

「ちよっと待て。どういうことだそれは」

「ですから、センサーです」

さっぱりわかりません。

雫はその場にしゃがみ込むと暗がり指さして言うのだ。

「あそこを見て下さい」

言われるままに千草もしゃがみこむと、暗がりの中を目を凝らして見やった。

暗がりの中にはうつすらと赤い線が浮いていて、常時これが移動しているのだ。赤外線センサーだとそれに気付くと千草はこの広大な敷地内全てにこんな仕掛けを施してあるのかと少々呆れたものだった。

「物凄く金がかからないか？」

「まあ恐らくは。ですが、安全はお金では買えないそうですから……」

そもそも自分はそこに暮らしているのみでしかなく、その所有者がそうする必要があると云うのだから口を出しようもないと雲が言うと、確かにと千草は頷いて見せた。宗一郎がそうやって取りつけたものに文句を言うのであれば、同じくらいこの屋敷に住んでいて貢献しているのであれば権利はあるうが、そうでないならば口を出すだけでも生意気なと言われるだろう。

「桜があるな」

「ええ、ここは春の家ですから。春にまつわる花が植えられています。春になると、それはそれは美しいですよ」

「雅なことだな。もしかしたらこの屋敷……敷地内には、四季の家が全てあるんじゃないだろうな？だとしたら相当な風情を楽しむ人なんだな、宗一郎氏は」

「良く分かりましたね、千草。そうですよ、春の家、夏の家、秋の家、冬の家。全て揃っています。今日は一番近い春の家を案内していますが、本来ならば今の時節、秋か冬を案内したいところでした」

これには呆れたが宗一郎と言う男は相当風情を大事にする男なのだろうと千草は思った。

古来 平安時代などには貴族の家で四季をつかさどる、四つの庭を持つ屋敷があったそうだ。それは大変贅沢なことではあるだろ

うが、四方に庭を分け、更に四つに内部も区分けされた邸宅を作り、四季を楽しむと言うのだ。そこには四季を大切に作る宮廷の華人達の心が垣間見えるようにさえ思う。

千草はまさか邸宅を四つにわけて作るのではなく、一つ一つ贅沢に四季をわけて作ってしまうとはと驚いたようだが、そうした贅沢は嫌いではなかった。古来よりの四季の楽しみ方を知っている宗一郎に、むしろ好感を抱いたほどだ。

「夏は小川が流れているのです。涼やかで、あれも美しいです」

「それもいいな。けど、春にここで花見としゃれこむのも、実にいい……」

うつとりと千草が酔ったように言う言葉に、雫はつられたようにその顔をじつと見やった。

すると何かに弾かれたようにして雫は千草の顔から勢いよく視線を外すと俯き、囁くようにぼつりと呟く。

「……ずるい」

「何か言ったか？」

「いえ……帰りましょうか」

「ああ、そうだな」

屋敷へと戻ると、千草はいいものを見たからだろうか、声を弾ませて雫へと言った。

雫はこのような関係になってから、初めて千草からこんな言葉をかけられたのではないかと思った。

「今日は有難う。また案内してくれると嬉しい」

「あの……あの、その」

「次は夏、その次は秋、冬は……来月、さ来月あたりにいかないか

「？」

共に連れだって出かけようと当たり前のように次の約束を取り告げようとする千草に雫は戸惑いを隠せないでいたが、けれど一つ一つと深呼吸をすると、口元を僅かに緩めて是非にと答えた。

「冬の家には火鉢があるんですよ」

「火鉢！いいな、火鉢。一度でいいから使ってみたかったんだ」

「千草は変わってますね。火鉢って結構難しいんですよ？それに、温まるまで結構時間がかかるし」

次は夏の家か。

次は一体いつになるのか、互いが珍しくも次回を楽しみにしている散策。

またどこかに連れ出してやろう、またどこかに案内しよう、二人ともが互いのことを気遣ってやれるだけの余裕が出てきたからこそ温かな時間。

それは僅かにでも二人の距離が縮まったひと時の出来ごとだった。

9 (それは始めの一步) (後書き)

まだ手すら繋げない二人。

ちよっともじくさするのが続きます。

10 (じゅめん、その一言が背中を押した) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

10 (じゅめん、その一言が背中を押した)

今日の護衛は塩見のみで二人は屋敷内にて資料整理と情報収集が仕事だった。

天眼の器を自身の周囲に展開すると、その幾つかの端末と、そしてパソコンを開き、それと天眼の器自体をリンクさせる。機械
と言うよりも電子機器類全般とさえいいか、塩見はこれらが苦手であるために、鷲宮の資料整理を手伝えないため、消去法で澤田が残り手伝っている。

幾つかの端末とつながった状態で、先日新たに戦力として加わったかがりの資料を展開していくと、澤田が首を傾げてこう言った。

「おかしいですね、何故かエラーが出るのですが……」
「……エラー、それなあ、俺も小まめにデータを纏めてるんだが、どうしてもかがりお嬢ちゃんのデータだけが測定不可能になっちゃまうんだよ。まあ、初めての能力でもあるからなあ、比べて測定するもの自体ないってのがネックなんだろうが……困るんだよな、数値化出来ないって、一番めんどくた嫌いつつか……なんつか」

六花神に提出するわけではないが、それでも定期的に計測しておかねばならないのだ。

彼らにとつて、それら数値はいつ変動するか分からないものだ。そして、変動すると言うことは即ち、死期が迫っていると言うこととで、それを知らないでは話しにならない。

澤田は考え込むと、ぼつりと口にする。

「難儀なものです」

突然ぱたりと倒れられるのは困るし何より、敬愛する主の宝たる

子だ。そして自分達も彼女のことを何より大切に思っていると言うのに、その彼女を調べることが出来ない。前もってその底を見ることすら出来ないでは不安は常にこれから付きまとうことになるのだろう。そう考えるだけに彼らの上には、ずんと重く押し掛かるものがあるようだった。

「まあいいでしょう。映像とその時の周囲にもたらした事象 被害などを目算でだけ出すだけでも。義経様のその高い破壊力の数値から、大体……その大凡を算出してしまい、誤差はある、とするだけでも違うはずですよ」

今のところかがりの力と比べられるのは義経くらいしかいないため、そうするより他ないと言われればそうだなと鷺宮は首肯する。

「まあ、それくらいだよな。俺らが今出せるのつつつたら」

二人はある程度の区切りがつけられるまでそうして資料づくりをすると、食堂へと降りて行った。

時刻はもう、正午を回っていた。

昼は軽いものを用意してくれたらしい。たつぷりのアボカドを使用したコブサラダとバジルソースがきいた冷製パスタだ。

皿から取り分けると、二人は早速これを胃の中に納め始めた。

少し昼食の時間としては遅くなってしまったため、他の使用人たちは、もうそのほとんどが食事を終えたらしい。残るは二人が食事を終えれば皿も片付くと言うことなのか、給仕をしてくれたのはメイドが一人だけだった。

義経達と食事を共にする時以外は鷺宮達は自分たちの食事は大抵自分で取り分ける。だがこのメイドは水をそれぞれのコップに注ぐ

など、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれていいのだが、何やら澤田がそれが、妙に引つ掛かる。

こっそりとおかしくはないかと鷺宮へとふっってみるが乗ってこない。

「何でだよ、お前おかしいぞ？」

「いえ……そうですね、気の所為、ですよね」

それを見ればまあいいかと、澤田はそのことを頭の片隅へと追いやった。

鷺宮が乗ってこないと言うことは、危険は無いはずだからだ。何より、世話をしてくれるメイドからは不審に思う視線などは感じない。このごろ色々なことがあったから少々過敏になっているのかもしれない。

彼の天眼の器でこの屋敷自体を見張っているはずなのだから、おかしなところがあれば、直ぐにもこのメイドは捕まるはずである。それがないのだからこう振ってみて、反応すらないのだからそうなのだろう。彼女におかしなところなど、あるはずもないのだ。

安心した澤田は、食事へと戻った。

パスタの味は大満足だ。文句なしの絶品だった。

メイドは二人が食事を終えると、カトラリーを片付け始まる。

食後に珈琲を楽しんでいると背後で、硝子の砕けたような音が聞こえた。

先ほどのメイドがカトラリーを割ってしまったようだ。

「またお前か！先月もあれほど注意しろと言っただろうが！」

「済みません！済みません！」

皆が休憩に入っていると、メイドが疲れているところを休憩なしに一人だけ給仕に回ってくれたのに、更に怒られるのでは可哀

想過ぎる。何より二人のカトラリーを割ってしまったのだ。責任があった。

澤田が立ち上がるよりも先に鷺宮が立ちあがり深く腰を折り謝罪しているメイドのそばへ行く。

「料理長、誰にだって失敗くらいあるだろ？なあ、許してやってくれよ」

「いや……だってねえ」

「私達の給仕に残ってくれて、一人でやって疲れてしまったんですよ。ね？そうでしょう？」

澤田が寄越したこの助け船に、メイドは何度も頷くともう一度済みませんと大きく謝る。

「だから許してさしあげてください」

これでは自分が悪者かと弱ったとばかりに肩を竦めて料理長は言うのだ。

「お二人にはかないませんなあ。次からは気をつけるんだぞ、いいな」

一人折れる形で料理長は二人への挨拶もそこそこに休憩するため自室へと戻る。その背に向かってメイドは、もう一度勢いよく頭を下げると声を張り上げた。

「は、はい！有難うございます！あの……お二人も有難うございました！」

「いいえ、こちらこそ。休憩時間を削ってしまい、申し訳なかったです」

「今度からなるべく早めに食事には来るよ」

メイドはこれには苦笑して、なるべくそうしてくださいとだけ答えた。

特に、これといった、記憶に残らないとある出来ごとだった。

+++

同じ頃、雫は執行部で使う資料を手に部室へ向かってあるいていた。

昨日のうちに仕上げようと思っていたのだが、千草との散歩に予想以上に時間が掛かってしまい、仕上げる事が出来なかったため、今のうちにやっつけてしまおうとしたのだ。

「あつー！」

けれど資料は雫の手から、突如として巻き起こったつむじ風によって攫われてしまったのだ。

「や、やだっー！」

慌てて雫が散らばって飛んでいってしまったそれらをつままえ、あるいは拾うも、全てを捕まえるのは難しかった。つむじ風はどうしても雫に意地悪をしたらしい。

「おっとー！」

「え……」

通りすがりだったのだろう、健が雫の追いかけていた資料の風に巻き上げられていた分をその場より高く飛び跳ね上手く掴んでくれたらしい。本当に運動神経がいいのだろう、健を見ていて雫は羨ましくなった。

何て綺麗なんでしょうか。

「これ……つか、降矢さんだったんだ。なんか女子が紙を一生懸命追いかけてたから手え貸したんだけど……」

とまで言うと健は口を噤んでしまう。

他意は無かった、これは嫌がらせでもなんでもなく、単に大変そうな生徒がいたから手を貸しただけなのだと口にして噤んでしまった雫は罰が悪そうな顔を浮かべた。

健の口をつぐませたのは雫だ。

そうだ、雫は先日健のことを拒んだ。健からの助力、生徒会からの助力、それを拒んだ結果、健は矢張り気まずそうに雫を見てくる。恐らく雫も今、同じ顔をしているだろう。

その後続く言葉はあれですか？私だったら取るべきでは無かったですと言う、後悔の言葉？

後悔を私はしているのでしょうか？

きゅつと雫は唇を噛みしめると、健の元へと進み、資料をその手からもぎ取る様にして受け取ると、有難うと固く強張った声音で告げた。

「なんで……」

「それでは」

雫はそれだけを告げるとそのまま元来た道を引き返そうとするが、健の腕にそれは阻まれてしまった。

強引に腕を取られ、何故と問う健に、雫は困惑する。

「何を、言っているのですか？」

「いや、だって……なんでだよ」

「だから、何を言っているのですか。意味がわかりません」

「だから……泣いてる」

言われて雫は反射的に言ってしまった。

「泣いてなんていません！」

「あ、いや……悪かった。泣いてはねえよ。ねえけどさ……泣きそ
うつつか……泣いてるように、見えたんだ」

気づけば互いにごめんと一言だけ、謝罪の言葉を口にしていた。

11 (手を繋ぐなんてふしだらよ!) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

11（手を繋ぐなんてふしだらよ！）

雫が執行部の部室の扉を開けると、櫻子が最初笑みを浮かべて雫を出迎えてくれた。

けれど健の姿を認識した途端、その表情は強張った。そして奏と須賀は二人を目を丸くして見つめている。

矢張り、連れてきては拙かったのかもしれない。

「あの、ごめんなさい。連れてきてはいけなかったでしょうか？」

「そういうんじゃないわ。雫……男嫌いじゃ、無かったの？」

「男嫌いだなんて言ってます。それはまあ、苦手……ですが……」

引きつる櫻子を余所に、雫は俯いて答える。

それは忘れ去りたい過去だった。

苦手、と言えるまでに男性についての多くを雫は知らない。知りたいとも思わない。

雫は性の対象として雫を見てくる異性が恐ろしかった。だから、今では完全に自身をそういう対象として考えないようにしていた。

誰かから好かれていたことも、誰かへと慕わしいと思う気持ちも、全て無かったものとするために。

いつしかそれもしなくとも済むようになった。

本当に恋心と言うものや、ときめき、と言うものを忘れ去ってしまったからだ。

いつか雫がそれをもう一度手にすることが出来る日は、来るのだろうか。

雫は櫻子に苦手であることを告げるも、櫻子はそうじゃないと怒鳴る。いつになく厳しい物言いをする櫻子に、雫は首を傾げる。

「あの、どうしてですか櫻子。成瀬さんは別に、……ただ、資料を

届けるのを手伝うと……」

「俺、いいよ、中で茶なんて……」

「いえ、拾っていたいただいたのですから、お礼くらい……当然です」

健が困ったように言うのも櫻子の神経を逆なでしたようだ。ぶちりと何かが切れる音を櫻子は自身の中から聞いた気がした。

「手伝うだけで何故手を繋いでくる必要があるのよ!」

櫻子の言葉に須賀と奏も無言でこくこくとうなずく。二人の目線は先ほどから同じ、雫達の手元にあった。

「え」

「あ……これは」

健が頬を染めるのを見て、そして雫が戸惑い、けれどその顔に色恋に狂う何かを見つけ出さなかったことで安堵の吐息をもらったものの、それでも矢張り、納得いかないと櫻子は叫ぶ。

「資料を拾って貰った!それはいいわ!けれどどうしてそれとこれとが繋がるの!」

さらに二人はこくこくと頷く。

「いや……なんか降矢さんふらふらしてて危なかしくてさ。ほつといたらまたこけそうになってるし、だから……その……手を繋いできました」

「いえ、結構歩きやすくてですね」

雫が慌てたように櫻子をなだめようとして言った言葉は逆効果だ

った。
櫻子が咆哮する。

「むしろ歩きにくいはずでしょ！いい加減にその手をきりなさい
！」

「わわわっ！ご、ごめんなさい櫻子！」

「す、すみません！！！」

執行部の規則にその日より加わったものがあつた。異性と手を繋ぐことを禁ずる。

部室内部だけとはいえ、実質的な男女交際禁止令が発布されたの
だつた。

中学生か！？と須賀は心の中で突っ込んだ。むろん、声には出せ
なかつたが。

「あの、櫻子……？」

「安心してね。中には誰も……どんな男も近づけさせないから」

ふふふと暗い表情で笑う櫻子は、先ほどから雫の手を握り締めて
離さない。時折痛いのですがと言われるとその手を緩めるようだが、
その姿を見ているといっそ執念か、とまで思うほどだ。

「うわー……鉄壁の防御すぎるよねえー」

「雫お嬢様が箱入りだつた理由、分かりました？櫻子さんが外には
いて、中にはあのこわーい義経様がいたからなんですよ」

「うん。ってというか、愛され過ぎでしょ。一部にだけどさ」

「ね」

「ね」

昼食を終えて鷺宮が秘書の職務中、胸ポケットを弄ると、一瞬で表情をこわばらせた。

ついで出てきたのはこんな声だ。

「……ない」

義経は小さなその声に書類から顔を上げる。

「何よ、その顔。真っ青だよ？どうかした？」

「いや……そのなんだ、無いんだ」

義経が怪訝そうな表情を浮かべると、澤田が紅茶を注ぎつつ言った。

「余程大事なものなんですか？そんなに顔色を悪くするなんて、余程のことでしょう？」

そう言われて鷺宮は一步後退する。

「い、いや……そんなこと……あるような、無いような」

「どっちも」

実に怪しい。

義経が席を立つと、鷺宮へと詰め寄ってぐいと顔を寄せて言う。

さあ、吐けと。

「僕に隠し事なんていい度胸じゃないのさ。ほれ、言いなさい。さ

くっ」と

けれど鷺宮は隠し事など何も無いと告げるなり、その場から尚も後退していく。怪しいなんてものじゃなかった。それこそこれでは、疑ってくださいと言っようなものである。

鷺宮は詰問されている間も、自分の胸元を漁る手を止めようとはしない。

どうやらそこに常に常備してあるものが無いようだ。するとふと思い出したように澤田が告げる。

「そういえば、胸元にはいつも、義経様から誕生日プレゼントにいただいた、万年筆を入れていましたよね？あれは一体……どこにやっただんですか？」

鷺宮の胸ポケットに常に刺さりっぱなしとなっていたそれは、今はどこにも見えない。

万年筆の頭が飛び出ていないポケットに、いつそ違和感すら覚えてそう尋ねれば、鷺宮はいよいよお終いだとばかりに顔色を蒼白にして今にも身投げしそうなほどだ。

「まさか、無いと言うのはそれですか？」

「た、確かに昨日はスーツの胸ポケットに入ってたんだよ！ってか俺、帰宅してから抜いてないぞ！？な、無くしたなんてそんな……」

物を大切にし、壊れても思い出のある品物はしまっておくほどの鷺宮は、自分が信じられないといった表情を浮かべているが、矢張り、どんなに胸を弄ってみてもそれは見つからないらしい、その事実信じられないと呟いた。

今にも泣き出しそうな顔になってきた鷺宮を見かねて義経は言う。

「あーああもう、いいよ別に。なくしたならなくしたで。後で別のももの買ってあげるから、そんな顔しなくてもいいよ」

「いや……そんなこと言うなよ……」

鷺宮からすれば、義経からの従者となつてからの初めてのプレゼントであつたそれは、とても大切なものだつた。

それを代わりの物を用意するからと言われれば、何だか悲しい。頂垂れるようにしていると、ぽんと頭を軽く叩かれて言われた。

「別に、許すとか言つてないし。暫く鷺宮は僕の言うこと、何でも聞くように。わかつた？ じゃないと許さないからね」

「……いいのか？」

「良くないけど、でも物は物であつて、いつも身につけててくれたんだから、別にいいよ。無くなつたなら無くなつたで、それはまた意味があつたんじゃないのかな？ だからいい。ほら、元気出してよ。冷めちゃうから、紅茶、早く飲もう？」

「有難う、義経」

「いいから」

11 (手を繋ぐなんてふしだらよ!) (後書き)

櫻子はある意味アホの子

12 (俺は野菜が大嫌いだ!...と云う宣言) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

12 (俺は野菜が大嫌いだ!…と宣言)

自分のを使えばいいという義経の厚意を断り、部屋へ変わりの万年筆を取りに戻った鷺宮は部屋の隅に光るものをみつけた。

鷺宮は慎重にそれを手に取ると、それは半年前に無くした愛用していたカフスだった。

随分前になくしたものであったため、壊れたところが無いかじっくりと観察してみた。

どうやらヒビの一つも入っていないようだを確認すると、ほっと息を吐き出して笑みを浮かべる。

「何だ、新品みたいに綺麗なままだな。良かった」

このカフスは気にいっていただけに、なくした時は大層凹んだものだった。見つかってくれて良かったと、見つけたそれをポケットの中に放り込むと、後で洗浄してまた使おうと鷺宮は相好を崩す。

万年筆を手に仕事に戻ると、先ほどとは違った明るい顔に澤田が声をかけてきた。

「おや？何かいいことでもありました？」

「ああ、部屋で前でちよつとな。なくしたもんが出てきたんだ」

「それは良かったですね」

「ああ」

嬉しそうに目元を綻ばせながら鷺宮は、先ほど中断してしまった書類に目を通し始めた。

そんな鷺宮をみて、義経と澤田はそつと笑ったのだった。

晚餐はその日いる家族全員で、これは降矢邸での決まりごとだった。

この日きちんと在宅していたのは義経と鷺宮、そして奏だ。

澤田は外へ仕事で出てしまっていた。

雫と千草は後からやってきたのだが、何やら雫の様子がおかしい。少々気分がすぐれない様子である。

顔色が悪いと義経が雫へと言うも、雫は大丈夫だと返すばかりで、義経はなおさら不安になった。

常日頃から雫は体調が悪くても無理を推してしまうところがあるため、義経としては気が気ではないのだ。

「全然大丈夫じゃないよ！何て顔色なのさ！」

「えあああ、お、お父様っ！」

慌てて雫へと義経が飛びつき体温から脈拍にいたるまでを細かく調べていくと、その脇で千草が言うのだ。

馬鹿馬鹿しいと。

「単に嫌いなものが出るから嫌だって話をしてただけです、体調が悪いわけじゃないから安心したらいいんじゃないですか？」

「ち、千草！」

頬を染めて雫は千草を咎めるような視線を向ける。けれど千草は素知らぬふりをして自分の席へとついてしまった。

残された雫はぼかんとした義経の顔が何だか見れなくて、俯いてもじくさと指をいじり始める。

何とも居心地が悪い。

雫は何と切り出すべきかと思案し、そして俯いたままに何とか絞り出したものはこんな言葉だった。

「あの、私、苦手なんです……今日の、あの、……ラムが、駄目なんです」

「……ラム肉？」

「あの、あのっ……私、元からあまり肉料理は、好まなくて、ですね……その……ラム肉やマトンは……その…………匂いが、強くて……」

シェフが確かに匂いをどうにかすべく香草などで匂い消しをしてくれはするものの、それでも嫌いな人間からすれば、少し仄かに薫る程度でも駄目なものは駄目なのだ。それでなくても嫌いならば敏感になりがちである。だから雫は羊の肉全般がどうしてもダメだった。

雫が全身真っ赤になりながらそう告げると、いい加減に席に着けと千草から冷たい声で言われる。

「お前、いい加減に席に着けよ。スタンバイしてくれてるメイドさん達に悪いと思わないのか？失礼だぞ」

早く来いと椅子を引いて雫へと促す様を見て、奏と鷺宮は苦笑する。義経の傍よりも自分の傍に早く来いと言うことだろう。本当に、これで何故自覚が無いのかと思う。

千草は雫が赤い顔をして義経と喋っているのも気に入らなければ自分の元へ来ないのもいやらしい。ただし、完全に自分の中では自覚が無いようである。周囲としては見ていて実に面白いことになっていた。

雫が申し訳なさそうに益々深く俯くと、今にも消え入りそうな声で言う。

「……済みません」

だがこれで納得しないのは義経だ。こんな状態で自分の元から行かれてしまうのは嫌だった。

雫が千草の脇に用意された席へとつこうとするも、義経がそれを阻む。

「おいで」

「え、でも……」

「いいから」

強引に義経は雫を脇に座らせると、メイド達に雫の分はこちらへと用意するようにと告げる。

こんなに涙目で顔を真っ赤に染め上げた可愛い雫が余所の男のところに行くなんて危険過ぎるっただらありやしない！

義経は自分の傍に置いておかねばと使命感に燃えていた。

食事が始まると、前菜としてサラダが小量、目の前に置かれた。

他にもセロリ、人参、キュウリのピクルスと、枝豆のポタージユス
ープが出された。どれも雫の好物の野菜がメインで使われているものばかりだ。

思わず零れた雫の美味しそうという言葉に、義経は顔を綻ばせて言う。

「良かったら僕のも食べる？」

「い、いえ！お父様のものまで手を出すなんて出来ません！それに次が入らなくなってしまいますし！」

「そう？」

「はい、大丈夫ですから」

雫は前菜にはうきうきとしながらフォークを手に取り口に運び始めたが、逆に千草はフォークにスプーンにと、一向に進まない様子だ。口へほとんど運んでいない。

義経も基本的に野菜、特に青い色のもの（緑ものもそうだが）は好物であるため、特にこのポタージュスープの塩加減が絶妙で思わずおかわりと言いたくなるほどだったが、次が確かに控えているためシエフ、というよりも料理長にまた後日作ってくれるように頼んでおこうと密かに思った。

「でもそっかー、雫は野菜が大好きなんだね」

「はい」

「うーんやつぱ親子なんだねえ僕も野菜大好きなんだよお」

「本当ですか？」

「もちろん！料理長は野菜料理が上手だよ」

でれでれとだらしない顔で雫と会話している義経を見ながら、粗方胃の中に納めた所で奏が千草の皿の上がほぼ全て残っていることに気づき、首を傾げた。

「あれ、許嫁さん、食べないの？」

「いや、……これはだな」

千草は何も言いだせず　　どころか口ごもってしまう。

すると雫が呆れたように、もしくは拗ねたように言うのだ。

「こんなに美味しいのに、どうして千草は野菜が嫌いなのでしょう
か？不思議です」

自分が野菜をここまで好きなのに、それを理解出来ない人がいると言つのも中々に悲しいことなのだろう。雫はどうして野菜を好きになつてくれないのかと尋ねた。

けれど、そんなものは嫌いな人間からしてみれば、あまりにも酷い言い草としか言いようがない。先ほど自分は青白い顔でラム肉が食べれないと言つたくせにと干草は心で毒づいた。

「俺は……野菜は嫌いじゃない！」

「じゃあ、食べてください。ほら、ピクルス、美味しいですよ？」

雫が口の中に小さく切られた人参を放り込むと咀嚼を試みせる。それを見て干草に何を言えと言つのか。

ね？と雫はにこりと微笑むが、だからどうしたと言いたかった。

「違う！俺が嫌いなのは、人参ときゅうりと枝豆！それと……トマトだ！」

「全部じゃない」

というよりも、今言われたものは全て出されている、という意味だが。

サラダの入った小さなボウルの中には可愛らしいミニトマトが添えられているし、枝豆はポタージュにされて鎮座している。そして人参ときゅうりはピクルスにされて僕をお食べよ！と言っているように見える、が、それは奏の見間違いかもしれない。干草があまりにも目の前の野菜たちの前で苦惱しているため、そのように見えたのかもしれない。

12 (俺は野菜が大嫌いだ!...と言つ宣言)(後書き)

千草||子供

雫||頑張ろうとはしている子供

奏||良く食べます

義経||めっちゃ子供

13 (それは彼に絶望をもたらした) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

13 (それは彼に絶望をもたらした)

「違う！全部じゃない！まだある！」

「そう言う意味なの！？」

義経はがっくりと来たが、そもそもこの歳で人參嫌いやその他、野菜嫌いを声高に叫ぶなど、余所では聞いたことがない。

なんて恥ずかしいクソガキなんだと思うものの、こうして預かっている以上、きちんとさせたいと思うのは親心(?)である。

心を鬼か羅刹にして、義経は千草へと辛そうな表情を作って言うのだ。

「そうだよね……そうだ……そう……そう！僕も辛いっ！」

「はあ？」

「けどね、やつぱりほら、……よそのお子さんを預かってる以上はきちんと食育すべきだと思っただよね！」

「まあそうたるな」

鷺宮は適当に相槌を打ちつつもポタージュを掬って口へと運ぶ。

「しよっ、食育ってそんなんでしたっけ！？」

思わず悲鳴の千草に義経は聞く耳もたず。

「おだまり、というわけでちゃんとお食べ。お残しは許しませんよ」

にしゃ、とチエシヤ猫のような口角をにまりと釣り上げた笑みを浮かべる義経に、ああこれが狙いかと鷺宮は呆れた。本当に人へ嫌がらせ出来る時には全力でやろうとするやつだと思う。どのつく最

低な人間だと思った。

「無理つす無理つすありえねつす」

「普段と違う言葉づかいがついて出るほど嫌かよ少年……」

「千草……そういえば料理長さんが嘆いていました。みじん切りにした人参と玉ねぎ、残してくれたって。あれだけ細かく切ってもまだ除けて残してくるとは思ってた……ちよつと呆れてました」

雫が俯き加減で悲しそうにそう告げると、千草は顔を真っ赤にしてそんなことはしていないと言い張るのだ。

だが、雫が言っているわけではない、第三者の声なのだから千草がなんと言い張ろうがここで料理長が除けて置かれて悲しいですと言ってしまうは無意味なのに、どうしてこうまで無駄に言葉を重ねようとするのか、雫には意味が分からなかった。

「……流石にそれはさ、どんびき。年齢考えようよ許嫁さん」

「う、煩い！……だ、大体、人参が入ってるのが悪いんだ！俺は悪くない！」

「千草の栄養が偏らないようにと、料理長さんが必死で考えたのですが……」

ため息をつく雫に、義経はよくも可愛い雫にため息つかせたなとばかりに野次を飛ばす。

そんなことくらいで怒らないでくださいお父さん。

「そうだよクソガキ！」

「俺の名前はクソガキじゃありません！……な、なら！お前だってセロリ食えよ！セロリ……！」

千草は雫のカトラリーを指して言うのだ。

「セロリだけ撥ねてる！」

「こ、これは！……そ、そうです！あの、……ええと……」

先ほどまで非難していただけあり、雫は強く言いだせなかった。

セロリは幼い頃からどうしても苦手だった。

というよりも、雫は匂いが強い食べ物は全て苦手なのだ。よってセロリもしかりなのだ。雫は涙を滲ませて食えと千草が迫るため、震えながらフォークに刺したセロリを口へと運び……

「や、やっぱり無理です！匂いがっ！！」

かちゃんと雫にしては乱暴にカトラリーにセロリ付フォークを戻す。

それを見るとふふんと千草は鼻で笑い高らかにいうのだ。

「ほらな！！こいつだって食えないじゃないですか！俺にだけ言うのはずるいですよ！」

何と言う子供の理屈だろうと半眼まなこで三人は見やると、これは食育に時間がかかるかもしれないと真面目に考え始めた。

義経だけはもうこいつは無理だと諦めが入ったようで、千草を無視して雫の手を取り優しく微笑みを浮かべて告げるのだ。

「大丈夫、雫。セロリなんて食べなくても生きていけるよ」

「お、お父様っ！」

あほである。

けれど二人にとってみればこれはなんだか感動のシーンらしい様

子。

雫はセロリの刺さったフォークを優しく手から取りあげられると、そのままそれをぱくりと代わりに食べてしまった義経を見て感極まったようにその胸に飛び込んで有難うと言うのだ。

二人してやたらキラキラしている。美形二人だけあって大変美しい光景で、何やら美しい親子愛のように一見見えるが、その実ただの親馬鹿だったと言う話である。

鷺宮と奏が揃って口を開いてこう言った。

「馬鹿ですか」

一人納得がいかないのは千草だった。

「ふつぎけんな！俺は駄目でそいつはいいってなんですか！えこ贔屓ですか！」

「そだよ？当たり前？」

「言い方むつかつく！大体！人参だつてきゅうりだつて枝豆だつてトマトだつて！！食べなくなつて生きていけるんですよ！」

「違います！千草は基本的に野菜が全て嫌いでしょう？本当は全て食べたくない癖に！野菜はきちんと摂取しなければいけないんですよ！」

「おまつ！お前だつて肉類全般苦手じゃないか！」

「当たり前です！動物なのですよ？！可哀想だとは思わないんですか！」

「はん！馬鹿じゃねえのか？可愛ごぶつてんじゃねえよ！」

「ちよつと待てクソガキ、馬鹿つてもしかして世界一可愛い雫のことじゃないだろうなあ！！てめえ……何様のつもりだ、殺すぞ」

「うつつうつつせええ！よそ様の大事なお子様つて言つなら俺も大事にしるー！」

千草の人格が完全に崩壊した瞬間である。
ぎゃあぎゃああと三人が喚くのを見て奏はどうして残せるんだろうかと首を傾げている。

「お前は手のかからない、いい子だなあ」

「そうかなあ？」

「苦手なもんがあっても、文句ひとつ言わずに食べるしなあ」

「まあ……食べられない時代もありましたし」

ぼつりと口にされた言葉に鷺宮は言葉に詰まる。

こんな時は何を言えばいいのだろうかと思ひ、けれど、今何を言ったとしてもどこか嘘くさくなるのでは、表面だけ取り繕ったような言葉になってしまうのではないと思ひ、言葉が出て来なかった。代わりに鷺宮は奏の頭をぐりぐりと撫でまわしてやり告げるのだ。

「いい子に育ってくれて俺は嬉しいぞ」

「や、……やめてください……恥ずかしいから」

「何か言ったか？」

「いえ……なんでも……」

奏の頬は少し、赤かった。

どうにも奏は雫以外との触れ合いが苦手だ。

雫にはただただ楽しく嬉しくてしょうがなくなるこの距離も、他の人物に対しては恥じらいが先にきてしまう。困ったものだとは思ふものの、どうにも直せないものだった。

「今週一週間は野菜強化週間！はい決めたー！」

「義経さん……そんな……分かってるんですか？そ……馬鹿な……」

それでは俺は何を食えと？」

「だから……野菜でしょ？」

13 (それは彼に絶望をもたらした) (後書き)

野菜くらい食べ

14 (暗い未来しか、想像できない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

14 (暗い未来しか、想像できない)

与えられた自室で女はベットに寄りかかり座っていた。

女の姿はあまり見えない。それもそのはず、夜だというのに女は部屋の明かりをつけていないのだ。カーテンの隙間から注がれる、淡い月明かりだけが女をうつすらと浮かび上がらせていた。ぶつぶつと小さな声でしきりに何かを呟いているその姿は、一種異様であった。

やっと降矢邸で勤められることになったかと思えば、三年で辞めさせられるなんて聞いていない。

女は強く歯を噛みしめると、どうにかして彼の元に留まれるようにと考え始めた。

「三年、三年なんて聞いてない……聞いてないもの」

彼の役に立つためにこの降矢邸へ入ってきたと言うのに、まだ何も出来ていない。それどころかあんな女にここが狙われているとなれば、益々女はここを去ることなど考えられない。

ぎゅっと服の裾を両手で握り締める。

そう、彼を守るのは自分しかないのだから。

盲目的に女はそう信じていた。

あの雫と同じクラスの少女　あの女が何を考えているかは知らないが、こうなるともう、彼へと隠しだてせずにこのことを伝えるべきか迷う。

実際のところ女は、三年経てば辞めなくてはならない、確かにそれは聞いていたのだ。だが、女は甘く見ていた。それが単なる脅しのようなものだろうと。

この降矢の役立てば辞めさせないよという、三年はある意味試用期間と同じと見なさい、だからサボるのではないというそれは脅しめいたものだと思っていたのだ。

だが、実際のところは全く違った。

役に立とうが立つまいが、三年という期日がくれば、全員、辞めざるを得なかったのだ。

三年まで女は後二週間、そこにきて次の勤め先の紹介をしようかと尋ねられはたと気づく。ああ、もう三年勤めたのかと。だが、そういうった感慨深いものは確かにあったが、けれどそれを受け入れられるかは別だ。

言えるか、言えないか、女は暫く考え続け、ある答えを出した。

その瞳にはもう、迷いは無かった。

+++

雫には行儀見習いだけは今も家庭教師がついていた。

それ以外の家庭教師は週に一度のみ、みつちりとした授業をくんで一日取りかかる家庭教師がいるが、こちらは行儀見習いなどではなく、完全に学力　と言うよりも、経済などの、降矢グループで直ぐにも戦力に取り込めるようにと先日よりつけられている企業ノウハウを教える教師だった。因みにこれは、千草と二人で教えられているもので、雫は少々懐疑的にこれを見ていたが、それはまた別の話だ。

行儀見習いは幼い頃からついているが、これは常に住みこみの家庭教師が一人いるのだが、理由があつて三年に一度はその人物を変えらるることになっていた。

それは、他使用人も同様である。

今年で三年か、二年か……どちらだっただろうかと雫は考える。

この女家庭教師は、雫を立派な淑女にすることが仕事だが、実際、幼い頃からずっと淑女教育のみは欠かさずしつけられてきたために、一通りのことは全てマスターしてある。

降矢の公式行事に出る際に、雫へ淑女教育をしていなくて恥をかくのは降矢である。雫は宗一郎、ひいては降矢そのものを飾るためのアクセサリーなのだ。

だからこそ、淑女教育に関しては、手抜きなどあっていいはずがなかった。

学力向上に関しても、酷くなればあまりにも見つともないという理由でだが、家庭教師が派遣されるようになる。まあ、そうなる前に鬼教官である奏が登場するのでそうだったことは中々ないのだが。雫は淑女教育に、更には企業運営に関するノウハウも最近増えたともなれば、その二つを何とか頭の中に叩き込むだけでも精一杯だった。

雫には身の回りを世話してくれる者が居ないのだから、それも当然かもしれない。

普通の金持ちの家の令嬢であればもしないことだろうが、雫には、それが当然だった。自分の身の回りの世話をして、そして学力を落とさないようにせつせと毎日の予習復習、そして学力向上のためにも勉強もするのだ。更には淑女教育の復習もかさず行う。これは可也の重労働だ。これで他の何かを勉強する暇など、雫に僅かでも残るはずが無かった。

確かに衣服は洗っては貰えるが、ただそれだけだ。

嫌がらせとして時折焦がした服を返されることもあるため、気にいった服のみは自分で洗う徹底ぶりである。雫もこれで中々気の抜けない日々を送っていた。

ベッドメイクに小まめに部屋の掃除をするのも雫本人が行っている。靴を磨くのも自分だ。様々な備品の数々を磨くのだって雫がまめめめしく自分でしていた。

あれだけ広い部屋である、それはもう、暮らすだけで大変な一苦

労だった。

これで食事も用意して貰えていなければ、それこそ零は今の学力を維持することすらままならないのだろう。そんなことをぼんやりと考えていた。

そんなことを考えていたため、浮ついていますねと声をかけられ、ぴしゃりと白く小さな手の甲を叩かれた。痛い。

恨みがましげな目を向けると、そこには行儀作法の家庭教師、エマが居た。エマは零の母親からの伝手でこちらに配属になったらしく、特に身辺調査らしきものもせず、即座に採用が決定した日英ハーフの女性だった。

何でも、イギリスの貴族の娘なのだそうだが、実際のところ、零はエマを詳しくは知らない。

そもそもエマのことは、降矢邸の誰も知らないのかもしれないが

「……申し訳ありません」

「早く姿勢を戻しなさい。そんなことではミスター高遠に相応しいレディーにはなれませんよ」

奥歯をかみ締める。なぜ母親がエマをここへ寄越したのか、零には理解が出来なかった。

レディー？そんなものになりたいと一言も零は口にすることはない。

そして、それこそ思い違いもはなはだしいとは思っているが、千草も間違っても零に「俺に相応しい女になれよハハーン！」などと言ってくるはずもないのだ。

そもそも千草がそんなことを言ったところで「千草、頭が湧いたのですか？」と素で聞き返す自分がいるなと思ひ、零は嘆息を零す。

エマは二人の関係が、今後きちんと発展するようにと考えているようだが、そのこと事態間違っている。

元から関係が進むことすら有り得ないところ、どこをどうすればきちんと許嫁から婚約者、果ては婚姻関係を結び仲睦まじく……などなれるというのか、そんな優しい世界、千草と雫の間にいたっては、ありはしないのだ。

仮面夫婦程度であればやっていけるだろうか、この言葉を何度思い浮かべただろう。

ふと、先日千草と庭を散歩したことを思い出した。

もしかしたらあれぐらいの距離感ならば　いや、それも長くは続かないだろう。

「　常につま先から指先まで美しく見せる様に心がけなさい。…

…ミス雫！笑顔が足りていません！」

「はい……」

慌てて上っ面だけの飛びきりのスマイルを貼り付けてやると、そうだと鉄面皮が言い返す。

そもそもエマの方が笑顔成分が足りていないように思うわけだが、このところエマが何故かは知らないが不機嫌なため、それを下手に突くと蛇が出てきそうだ。言わぬが花である。

こっそりと吐息を零すと、雫はまたも先ほどのことを考え始める。それはどうしても頭の中から消え去ってはくれなかった。

櫻子のことを今も好んでいる千草が、どうして雫ごときを好きになると言うのか。どこるか、雫に「俺に相応しくなれ」などと言ってくるのはそれこそ、未来永劫有り得ない。天地がひっくりかえろうと、そんなことは有り得ないのだ。

頭の上に光沢が眩しいほどに磨き上げられた林檎を乗せ、危なげなく雫はラインの上を滑る様に進む。林檎はただの一度も揺れることもない。素晴らしい足運びである。

幼い頃、これが出来なくて何度家庭教師からは鞭で打たれたことか、思い出すだけでも息が苦しくなるほどだった。

それは最早、完全にトラウマになっていると思いはするが、トラウマごときで社交の場に出なくて済むなら、もう二三個しよい込むところだ。けれど降矢はそれしきのことでは雫を公の場から遠ざけたりはしないのだからやるしかない。

腹をくくれ、雫。

何をどうしたって、やるしかないのだから。

15 (いつだって超特急) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

15 (いつだって超特急)

授業が終わると、雫はふらふらとした足取りで部屋へと向かう。細身のハイヒールが長時間の授業でむくんだ足に食い込んで痛い。早くこの歩きにくくて痛いだけの代物を脱ぎ捨てたかった。

よろりと壁に手をつけて身体を支えていると、足が上がりなくなってしまうた。

「……………体力が……………限界です」

気づけば床にぺったりと腰を落として座り込んでいる自分に、雫は参ったと空を仰ぐ。けれど見えたのは高くはあるが、天井だけだ。今日の扱きは一段ときつかったが何ゆえなのか、八つ当たりではあるまいなと思いつつも妙に勘繰ってしまう。

「も……………何故なのか、本当に……………こここのところ機嫌が悪いようだし、……………参ります」

三年勤めさせてしまえば、嫌でも義経か宗一郎が彼女を辞めさせるはずだ。

だからエマとの付き合いは、長くともあと一年、最大であと一年経てば彼女は居なくなるのだ。

だが、そうと分かっているにも、言いたいことはある。

「早く……………代わってくれるといいのです、が……………」

恨み節、だった。

暫く休んでいようと、雫はそのまま廊下の端に置いてある長椅子まで這うように進んでいくと、その上に行儀悪くごろりと身を投げ出した。自室は階まで違うため、動くことは無理だ。確実に途中で行き倒れること必死である。

何とかここまでこれたが、今度は体力が回復するまで、一步も動けなくなってしまったのだ。さてどうしたものかとも思うが、足が痛いし背中が痛い、ついでに叩かれた場所まで痛いとなれば動くことは当分、無理そうだ。

大人しく寝ていよう。そうすれば奏か鷺宮が見つけてくれるはずだ、そう考えていた。

もつとも奏は雫を運ぶことも出来ないほどの非力なのだが。

ふっと雫は淡く笑う。それはいつそ、儂げな笑みに見えるものだった。

特注の大きなガラス窓からの明かりが、燦々と入り込むこの場所は、どの階にも作られてある休憩所だ。談話室とも言えるこの場所は、廊下からそのまま入れるところにあるもので、大きく決る様にして作られた段差だけで、ドアも壁も何も無い、全てが解放された空間だった。

どの部屋で休むのもこの階では難しいと言うことで、ここまできてぐったりと身体を投げ出しているわけなのだが、先ほどから何やら廊下の向こうにある、遊戯室だろうか　が、妙に騒がしい。

気になって雫が意識してその会話を聞いてみようとする努力してみると、どうやらそれは女の声のようだった。

「秘密って言われても……困る。大体、それがどんなものか知らないし……手掛かりすら無いんじゃない……」

「秘密？」

一体何のことだろうか。

相手は誰かと話しているらしいのだが、相手の声は聞こえてこな

い。と言うよりも、女の声だけが大きく聞こえてくるだけなのかもしれないが、これでは会話の内容がきちんと把握することは難しかった。

「邪魔を、すればいいの？」

「……」

一瞬、何やら女の声に緊迫した鋭いものを感じさせられると、雫はうっつと怯んだ。

一体何のことを話しているのだろうか。耳を凝らしていたところで、女が会話を切りあげたようだ。その足で廊下へと出て階段の方へと近づいてくる。

咄嗟の判断の勝利と言えはいいのだろうか、それともある意味では敗北だったのだろうか、雫は何故か会話を聞いていたのが知られてはならないと思った。

急いで目を瞑ると、全身の力を抜いて長椅子にくぐつたりと身体を横たえた。寝たふりだ。

そうこうしていると足音は廊下　それも、雫のすぐ横にきたらしい。

硬質な音が響いていたのが止まったのだ。

何故、横で止まるのだろうか。

壁を隔てた向こうであったため、その声の主が女と言うことしか分からなかったが、それでも足音から分かるのは、随分と高いヒールをはいていると言うことだ。

いえ、それとも歩き方が……

「……呑気なものね」

そう言い残してその足音の持ち主は去っていった。

残された雫は音と共に気配が完全に去るまでそうしていたが、安全と認識した途端、ぱつと跳ね起きる様にその場から起きると、喘ぐように口を開く。

「あれは……エマ……？」

先ほどの会話の内容も確かに気になるが、それよりも気になったのは別のことだ。

「凄い……何故なの？汗が……止まらない」

仕事中の義経達ではないが、思い切り能力を全開　それも直ぐ傍で解放されたような、エマからはそれくらいの圧迫感があったのだ。

あれは紛れもなく殺気だろう。
ぞくりと背筋が寒くなる。

「エマ、貴女は一体……誰なんですか？」

そして先ほどの会話は一体　？

エマは身辺調査無しで入り込んできた、その事実が今、雫を闇の中へと突き落としていくようだった。

言い知れぬ不安を抱いて震えていた間に、いつの間にか自室へと戻っていたらしい。

そこには知った天井があり、ほっとした。

そして、愚かかもしれないが、それでも先ほどのことは夢だったと、雫は思うことにしたのだ。

殺気をエマからぶつけられたとは思いたくなかった。

自分の直ぐ傍に危険があったとは、誰しも信じたくないのかもしれない。

ただ、あまりそれは、賢いとは言い難いことであるのは、言うまでも無いが。

+++

あれからと言うものの、かがりと義経は練習も兼ねて神々への訪問を欠かさなかった。

「今日はどこまで行くの？」

その問いに応えるのは鷺宮だ。銀盆を空へ生み出すと全員の前へと差し出す。するとふっと銀盆は鷺宮の前から滑る様に進み出て、中心へと浮かんだ。

銀盆は中央へと行くと推進力がなくなったのか、そのままぴたりと止まってしまふ。

「……これは？」

「絶対知覚能力……それを他者へも分かりやすく知覚できるように視覚化するための能力とも言うか。俺達はこれを、天眼の器と呼んでいる」

古い名から取ったと言っても、かがりには分からないかと義経は微笑むと、鷺宮に促す。

鷺宮は天眼の器に腕を伸ばすと、その器の上に空が展開し始めた。空が展開し始めた途端、今度は器が大きく広がりを見せ始めた。

それはまさしく、小さな世界がそこにあると言えるほどに、精密に、緻密にそれは描き出されていた。

「凄い……」

「だろっ?」

「うん!守は凄いね!」

人が、街が、山がある。川も海さえそこには生み出されていくのだ。圧倒的なまでの存在感を有するそれは、まるで自分が神になっただかのような錯覚をかがりへと与えた。この器に腕を突きいれたが最後、器の中の世界に住む生き物は、全て、死ぬのではないのか。そう思った。

それを読んだわけでもないだろうが、鷺宮がやんわりと止める。

「それ、止めてくれな。腕突っ込まれるとマジで世界にヒビが入るんだわ。危険なんでそっとな?」

「う……うん」

どうやらかがりは知らないうちに腕を伸ばして触れようとしていたらしい。すっとかがりは伸ばした腕を引っ込めると、罰が悪そうにちらと鷺宮の顔を窺った。

「かがり、安心しろ。天眼の器の世界にヒビが入るうとも、現実世界には天災レベルの出来ごとが起きるに過ぎない」

だから安心しろと言われ、かがりは目を丸くする。

「いや……過ぎないってちょっと……どうなのよそれ」

「一度だけマジで指突っ込んだら地震が起きてな……それ以降俺も中身に触れたことはないんだ。だからマジ、勘弁な……」

義経の上に巨大な岩でも落としたいなら話が別だが　そう脅すわけではないだろうが言われれば、かがりは何度も激しく頷いた。

「や、やらない！よしつねが死んだら嫌だから」

「……では感謝ですね。義経様の傍にいれば、我々は死なないようですよ？」

「すげえそれ……こええな」

義経と遠く離れた瞬間にずどん、なんてことが無いようにせねばと鷺宮は苦笑した。

天眼の器に煌めくのは星が四つ。この四つの星は全て、活性化しつつある荒魂の位置である。

だが、それはまだ、直ぐにどうにかしなければならぬものではないものだ。ならばどうしていまそれをするのか、と云うことだが

「とりあえず一番近くの川に行くか」

星の位置を確認しつつ言われた言葉にかがりは鸚鵡返しをするように呟いた。

「かわ……」

「兎に角一度確かめたい。かがりの癒しの能力が、あの山の神以外の荒ぶる魂すらも鎮めることが出来るのかを」

かがりは星の位置を確認すると、鷺宮へと自分達の今いる位置を尋ねてみると、ここだと指さされる。天眼の器の上で見るとそれは、おおよそでだが腕一本分の長さと言ったところだろうか。

「方角はどっちになるのこれ？」

いまいちかがりには地図の見方が分からないが、鷺宮にはこの器を見ればおおよそのそれが分かるらしい。実に羨ましいことだった。

「そうだな……ここから北東になる。そこをそうだな……かがりお嬢ちゃんと言うと三回も最大跳躍してみれば見えるはずだ」

「分かった！じゃあやってくる！」

「え、ちよ、おい！」

誰も行けとは言っていない！と義経が叫ぶのも虚しく、あつと思つた時にはもう、かがりの姿はここに無かった。

一同呆気にとられた。

塩見も予備動作の一切をなしに瞬間跳躍をされるとは思ってもみなかったのだろう、自分を同じ力を使い移動したとは信じられない様子である。

「嘘だろ……？」

「あんの馬鹿が！」

またもかがりは勝手に行動し始めてしまったようだ。先日の一件でもう勝手はしないと書いていたのにこれだ。何と言うことだろう。

「……つく！追いかけるぞ！」

「へーい」

差し迫った状況と言うほど切迫していないお陰か、鷺宮の態度は実に投げやりだ。

その頭を強か（したたか）殴りつけると、義経はかがりが落ちた先を見つけるよう指示する。するとそこは、意外な場所だ。

15 (いつだって超特急) (後書き)

超立体ゲー ルアース的な

ある意味意外でもなんでも無かったと言っか。

16 (空から降ってきた少女) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

16 (空から降ってきた少女)

「はえっ!?!」

「え?」

声が聞こえる方に自然と引き寄せられるように健は上を見上げる。すると、声の主は少女のようだ。その少女が健の上に降ってきたのだ。

「わっ、わわわっ、わああっ!」

「……ちよっうわ、なんですとおお!?! わっわっわああっ!?!」

ハンモックが大きく揺れ動いたかと思うと、バランスが取れずにくるりとハンモックが反転し、先ほどまでは優雅に揺られていたと言いつのに、無様にも地に落ちてしまった。

更には上に落ちてきた少女を、またも腹で受け止めることになり二度に渡り腹でその体重を受け止めた健は悲鳴を上げる。

「ほくおうっ!」

かがりは驚いたように目をしばしばと瞬かせると、自分の下敷きになっっている健を見下ろして首を傾げる。

かがりは健に庇われた(たぶん勘違いだろうが)ようだとなると、健を気遣うような目を向けたものの、けれど周囲に満ちた警戒するような幾つかの眼差しに、瞬間的にその場から跳ね起き、戦闘態勢をとった。(その際思い切り健の腹の上を踏みつけて跳ね上がったために、再度健は腹を押さえて呻くことになったのだが、かがりは気づいていない)

だがしかし、それは駄目だと健がかがりの腕を強引に引きよせ、

その腕の中に囲い込んだ。最初背で庇うつもりだったが、かがりを引き寄せた時、そのまま腕の中にすっぽりとおさまってしまったためにそのまま腕の中に囲いこんだらしい。

「ひゃわっ!!」

「落ち着いて! って、無理か。えっとね、俺んちの庭に放牧つつか放し飼いでいる番犬がいるんだけど、そいつらが今、突然現れた君のことを警戒してるんだよ」

「大丈夫……私の事なら心配しないでモ」

番犬くらいどうにでもなると続けたかがりに対し、番犬は番犬でも、うちのもは種類が違うと叫んだ。健の家で飼っている番犬は、かがりの身長体重など、はるかに凌ぐほどの大きさなのだ。押し掛からればその体重で身動きも出来なくなるだろう。それどころか噛みつかればその細い腰でも一口で噛み砕かれてしまいかもしれない。

無茶なことはさせられない。突然現れたとはいえ、まだ相手は少女のようなのだ、死なせたくはなかった。

「死にたいなら話は別だけど!! っていうかどうやって入ってきたか知らないけど、このままじゃ君、本気でかみ殺される! 兎に角このまま俺の腕の中に居れば安心だから、このままちよつと待っててよ!」

「だからっ……」

かがりはこれくらいの数の大型とはいえ犬程度であれば、それこそどうとでもなると言いたいが、健の真剣な眼差しにぶつかる声を奪われてしまった。

健は番犬の名を呼ぶと、警戒させないように、だが鋭く号令をかけた。

すると、途端に番犬は散り散りに方方へと散っていくのだ。

「……すい」

主であることをきちんと分からせてあるのだろう、聞きわけのいい犬達にかがりは瞬きを数回して、健の顔を見上げた。その瞳には憧憬の色が見える。

「はあ……ほんと危ない。……ん？もしかして犬はあまり見ない？
驚いた？」

「ううん、そういうのじゃない。凄くなって……思ったの」
「ふうん？」

健は番犬が完全に消えたのを確認するとかがりの拘束を解いてやる。

そしてもういいだろうから今度は話を聞かせて欲しいと健はかがりを前にして口にした。

一応はかがりの命を救いはしたものの、それとこれとは別である。かがりが依然として不審者であることにはかわりないのだ。

「何で君はここに居るのかな？」

「え？……それは……うーんと……いるから、いる？」

他になんと答えればいいのか分からず、かがりは首を傾げるも、健としてはいまいち答えが答えになっていないことで不満が残る。

参ったなあと頭をかくと、健はもう少し分かりやすく噛み砕いた質問に変えてみた。

「や……だからさ、何でっていうか、どうやってここに入ってきたんだっつーことで」

「跳んできた」

これまた端的な答えである。だがしかし、これもまた答えとしてはどうかと言える。

「……まあ、確かに上から落ちてきたけど……つつても……いやまあ、うん……」

何故か分からないが、どうにも会話にならない少女であると言っただけは分かったために健は色々諦めたらしい。

「兎に角、こんな真つ暗闇の中じゃ顔も分からないしなあ……部屋の中に行きますか。悪い子には思えないけど……なんか、知ってるような気もするし。もしかして君さ、学園であったことある子だったりする？」

もしかして忍び込んできた女子生徒ではあるまいかと訝る眼差しで健はかがりをじろりと睨むようにして見るが、かがりは何のことやらという様子だ。

「ま、いいや。兎に角ここだと危ないから中に来いよ。……あ、そうそう。武器は持ってないみたいだけど、攻撃とかしてこないでくれる？してきたら流石に通報しないといけないからさ。あと、一応これ、脅しじゃないからな」

警戒は多少だがしているんだぞと念を押すようにして、健はかがりの腕を引いて広大な庭から自室へと引き返していく。

かがりはそれに何のことやらわからないながらも、ついていかなばならないらしいと素直についていった。

首を傾げているのは本当に何故連れて行かれるか分かっていない

からだろう。だが、ならば何故ついていくのかと言いたいのだが声高に叫ぶことさえ許されない。それは当り前だろう、ここは高級住宅地なのだから。下手に騒げば、いや、騒がなくなるとも見かけた人物が怪しげに見えればそれだけで通報されかねない土地なのだ。

部外者と言うだけで通報されたこともあったかと、子供の時分だった頃を思い返して義経は歯ぎしりする。あれはもう二度と味わいたくはない。

そう、その様子を敷地外から見て歯がゆい思いをしていたのは義経達だった。

「なんつつつで早速一般人に捕まってるんだ！！しかも成瀬！最っつ悪じゃないか！！」

先日の一件以降、目の敵にしている成瀬健　その人に降矢邸から跳んで直ぐにも捕まるとは一体どういう見たと叫ぶも虚しい。

ぼんと肩を叩かれて塩見と鷺宮へと言われた。

「諦めなよ」

「こうして少女は大人の階段を一步ずつ踏み出すんだよ馬鹿が」

「一步つてどこよ」

「どこつて何言ってるんすか塩見さん。言わせんなつつの馬鹿」

「馬鹿がじゃないだろっ！かがりは何も知らないんだぞ！さっきだつて何て言つてた！？跳んでとか普通に言つてただろうが！危険だろうがっ！！」

からかうことを目的とした二人の声に対し、義経は真面目に危険なことだろうと叫ぶ。だがしかし、二人とてそんなことは分かっているのだ。それでもなおふざけるのは、単に暗い気分になっていても、どうにかなるとも思えないからだ。

「兎に角……どうすんだよ、おとーさん」

「そだよ、おとーうさん？」

「……そんなの、決まっている」

「？」

ぐつと握りこぶしを作って一言、高らかに義経は宣言した。

「俺達も堂々とお邪魔するに決まっているだろうがっ！」

それはそのまま過ぎて、面白味にかけた。

厚ぼつたい睫が瞬くと、金粉が周囲へと散ったような錯覚を覚えた。

何と言う美しい少女だろうかと驚き、そしてその顔の造作をみて、更に驚いた。

「どこの国の子、なんだ？」

妙な話ではあるが、どこの国の顔とも思えない、それはそれは空恐ろしいまでに美しい顔をしているのだ。

けれど健はかがりを見てもほうつと見惚れるわけでもなく、単純に美しいものを愛でるような目つきで見ると言う。

「……ハーフ？つても、いや……なんか、こついうのも行き成り聞
くのつて、不躰か？よくわかんねーけど」

「はーふ……」

かがりが鸚鵡返ししたことで健は矢張りそうなのかと首肯する。

「いやさ？日本人離れしてるから、どこの子かなーって……でも……」

…なんか、すげえ綺麗だけど、知り合いに似てる気がするわ。だからかな、なんだか……妙な話だとは思っけど、安心する」

健はそう告げると、適当に寛いで欲しいと席に座る様にと促した。

16 (空から降ってきた少女) (後書き)

と言っわけで健の上に降ってきました。

17 (親不孝者……のようです) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

17 (親不孝者……のようです)

かがりは寛げと言われても、どうやればいいのか良く分からない。そもそも、彼女の辞書にはそんな言葉は載っていない。

「もしかしたら知り合いかもな。血縁者だったりして。なんか……
だったらちよつと嬉しいかもなあ。……なあ？そんでさ、君……名前
前は？」

「かがり」

「歳は？」

「とし？」

「年齢だけど、幾つなんだ？」

「うんと……まだ十五？かなあ」

実に曖昧な答えである。

首を傾げて眉根を寄せて深く考え込むかがりに健は警戒するだけ無駄だなこれとは思ひ、噴き出した。

「オーケー、かがりちゃんな。俺は健。んで？なんであそこに居たの？」

「ちよつと間違った。本当はもう少し先に出るつもりだったんだけど、間違ってたけるの上に落っこちたみたい。ごめんなさい」

意味は分からないながらも、謝罪の言葉を口にするかがりに健は苦笑する。

「父さんや母さんのお客さんじゃないことだけは確かなんかね？」

そう呟くとかがりは何のことであろうかと首を傾げた。と言つこ

とは、矢張りかがりは不法侵入を果たしてきたらしい。

何の目的があったのか　これをどう聞くべきかとも思ったが、警戒するだけ無駄な少女だ。ざっくりとそのままストレートに聞いてまず間違いなかるう、そう判断すると健はそのまま尋ねてみた。

「一体なんでまたうちに？どうして入って来たんだ？金目当て？」

だとしたら少々見当違いなことをしていると思う。現金なんて成瀬の屋敷はそのまま置いておく主義ではないし、そもそも普通の家であろうとも、現金が大量に置きっぱなしにしてある状況は中々ない。

見た目が貧弱そうに見えるかがりだけに健はこの場で暴れられようがなんだろうが構うものかと開き直った上でここまで聞いていた。どうせ容易くどうにか出来る、そう思っていたからだ。

「だから、ここに入るつもりは無かったの。単に通り道だったから落ちて……うーん……」

何と言えがいいか。

かがりのその言葉を耳にすると、健がきょとんとして、ついで爆笑した。

「んじゃ何か？君……いや、かがりちゃんはほんとに落っこちただけなのか？」

「……うん。落ちたの、吃驚した」

「ってことはパルクールの子かあ。確かに近所に趣味でパルクールやってる連中のサークルみたいのがあったけど……まさか夜中まで人の家を使ってやってるとはねえ？」

パルクールとは運動方法、もしくは街中を無駄のない動きで動く

ための移動術とも言える自分の体だけで移動するスポーツだ。

街中を走り、壁を飛び越え、そして壁から壁へと飛び移る。それらをハイスピードで動き回る、まるで現代の忍とも言える移動術。

また彼らは皆全て等しく、個々の持ちうる限界値を押し上げ、更なる高みへと自らを導こうとする向上心の塊、そして好奇心の塊の連中でもあった。とはいっても、健の知っている彼らサークルのメンバーは、だが。

なるほど、壁を登って屋根の上に飛び乗る途中で落ちたのだろうか。と一人納得すると、かがりのことを見て健は再度爆笑した。ある意味この少女は運がいい。自分の上に落ちていなかったら、屋根からのあの高さだ、まず間違いなく助からないだろう。

「むー……笑わないでっ！」

「無理だっつもの！パルクールで壁捉えるの失敗して落っこちるとかほんと馬鹿！つか夜中に何やってんのよ。あぶねーなあ」

「夜中だからやってたんだもの！もう！たけるの馬鹿！」

もういい！と言うなりかがりは窓の外へと出ていこうとする。健は慌ててこれを引きとめると、その腕をぐいと引いて引き寄せた。

「わり、けど……こっちは駄目。番犬いるっつったろ？」

「大丈夫だったら」

「駄目。危ないから駄目……ってこの、香りは」

かがりを引き寄せた時に香ったこの匂い、これは先日嗅いだものにそっくりだった。まるで本人を前にしているかのように。と感じて健は頭を振って違うと思いきもうとした。

いや、けど、この匂い……これは降矢さんの……

ピーッ！

びくりと二人は肩を揺らして同時に身体を離れた。

音のした方向には、赤く光るスイッチがある。健はそれに臆することなく進んでいくと、応答を待つ回線を開いた。先ほどの音は別室からの呼び出し音だ。

「何？」

開いた窓に映るのは、健と同じ髪の色をしている、まだ働き盛りと言える年齢の男だ。健の父親である。

「健、応接室においで」

「ん？応接室って何？誰かお客さん？」

応接室は普段使用しない部屋だ。基本的には客が来た時以外使用しない部屋である。ここに呼び出すからには恐らく、健をその客と目合わせたいのだろうとは思うが、こんな深夜に一体どんな客人なのか。しかも健を呼び出しとは一体どういうことだろうか。

健は父にそれはどんな客だと胡散臭そうな顔を試みるが、父はにやりと意地の悪い顔をして言うのだ。

健の父の口から飛び出した言葉、それは、とんでもない言葉だった。

「そちらに一人お嬢さんが来ているだろう。いつの間に連れ込んだんだ？この色男が」

「はあ？！ちよちよ、なんで知ってるの！？」

それを聞けば益々父はにやついて続ける。

「こんな時間まで人様のお嬢さんを連れ込んでお前……何やってたんだ？え？」

「いやいやいや！今日あったばつかの人だし！？てかなんか勘違い

してない!？」

何やら良からぬ勘違いをしているような父に対して健は誤解を解こうと必死だが、それは逆効果のようだ。誤解を解こうと思えば思うほど、ずっぽりと沼の深みに入り込んでいくように抜けなくなっていく。

「あまりにも遅い帰宅だと言うことで、相手のお父上が迎えにきてしまったぞ。きちんと謝るんだからな。分かったな、健。……」
「た
くお前は……せめて私達に紹介くらいしてもいいじゃないか……水
臭い」

「水臭いも何もないってば!だから、違うんだって!」
「言い訳はいいから、早くお嬢さんを連れて応接間に来い。いいな」
「ちよつと!」

言うだけ言うと父は通信を切ってしまったようだ。

健は苦々しい顔をして閉じた窓を見つめ続ける。そこには小さな文字しか書かれていない家庭用端末がある。

健は膝を折るとその場で低く唸る。

わけが分からなかった。

「なんで?なんでなんで?つか君のお父さんって誰!?行き成り
なんで夜中……」
「つかこんな時間よ!?ここに居るのなんでばれ
んの!?超怖いんですけど!」

意味が分からず混乱が酷くなってきたところで健はその場で転がりたくなるも、かがりがその肩に手を置き大丈夫かと尋ねてくる。
一人矢鱈と冷静にそんな言葉を告げてくるかがりになんだか健は泣きたくなかった。

何で君は落ち着いてんだよ……。

その時またもふわりと香ってきたその匂いに雫の影を見た健は目を見張る。

矢張り、同じ匂いだ。

けれど無垢な色をした瞳が、健にそれが雫とは違うのだと言うことを知らしめてくる。

「……………っあの、さ」

「うん、なに？」

「その……………」

床にぺたりと座りこんでいるかがりの前に居住まいを正して正座になると、咳払いを一つしてからこう尋ねた。

「君は降矢さんと、親戚か何か？お姉さん、とか？」

「おねーさん？」

「あの……………君にちょっと……………っていうか、似てる。……………似てるな。良く見るとっていうか……………なんで気付かなかった？すげえ……………似てる」

「ごくりと生唾を飲み込むと、健はかがりの両肩に手を置き、そつと顔を近づけてその顔を食い入る様に見つめる。

「そつくり……………だ。かがりちゃん、君は一体……………」

「たける？」

名を呼ばれた瞬間、先ほどまで全く感じなかった、全身を包み込む様な温かな感覚と共に、どくりと心臓がひと際高く高鳴るのを感じて健は自分自身に驚いた。

「たける？」

「あ……かがり、ちゃん……」

頬に いや、今は首から上全てに血液が集中していくのを感じる程だ。健の顔は今、真っ赤に染まっているはずだった。

「あの……」

言葉もろくに操れなくなった健を案じたのか、かがりがそつと手を伸ばしてくるのを頬に受けると、健の顔は益々紅潮していく。

もう限界だ 健がかがりを抱きしめようとした、その瞬間に、大魔王の声が聞こえた。

「何を、してるんだ？え？」

その低い声とともに首がきゅつと絞まる。

「……ふぐう?!」

首根っこをがしりと捕まえられたらしいと気がつくが、それはもう凄まじい力であったために、健はそれこそ、手も足も出せない。格好悪くも健は、かがりから引きはがされた上に、背後の人物より腕一つで吊り下げられていたのだ。

わあ、力持ち………つて、この声は ……!!

健は機械仕掛けの人形のように首をぎくしゃくと動かしてその人の顔を拝んで見れば、矢張りそこには忘れたくとも忘れられない、恐怖の大王の顔があった。

「消えたい……」

わつと顔を覆いたくなるも、そのようなことが出来る体勢になく、

猫の子のように健は首根っこを押さえられて相手のいいように吊るされるだけだ。

「やあ、成瀬健君。君はあれかな、大変手が早いようだね」

恐らくは先日の変の一件のことを指すのだろうが、あれは不可抗力であると言いたい。

だが、それをくちにするのは、今の健には許されていないのだ。

「いや……何のことですかーってか、何で俺の部屋にいんのお?!」

そうだよこは俺の部屋だと健は内心叫ぶものの、義経の背後には父の姿があった。恐らく、健が遅いためにここまで二人できたのだろうと察すると、さつと顔が青くなる。

「あああああ、あんたがおとーさん!?!」

「あんたとは何だこのクソガキ」

「ええと……済みません、お父さん!?!」

「だからお父さんと呼ぶなと何度言えば気がすむ!?!」

「そうかー、知らなかったよ降矢君。君のところの娘さんと僕の息子は一体いつの間にそんなに仲良くなっていたんだい?にしても、……お父さんかー、なんだか妙に歳を取ったように思うねえ」

感慨深げに言う父の姿がいつそ憎かった。

健は背後から締め上げられ、時折吐き気を伴うほどの強い圧迫感と高い悲鳴を上げていると言うのに、わなわなと健は肩を震わせ
て思っ。

息子の心配しろよ!この父親は !

健の父はかがりの前に膝をつくとにこりと人の良さそうな笑みを浮かべて言うのだ。

「じゃあ私が君の父でもあるわけだね。お父さんと呼んでくれませんかね、可愛らしいお嬢さん？」

「おじょうさん？……おとうさん」

「はい。ところで君のお名前は？」

「かがりです。えっと……はじめまして、おとうさん」

完全にかがりは意味が通じていないだろうと二人には分かれると言うのに、健の父には悲しい(?)ことにそんなことは分からない。かがりと二人で楽しそうに話を進めてしまっているように見える。

何だか妙な方向に話が進んでしまっているがと思いはするものの、健にそれを止める手立てはない。

ぺこんとお辞儀をすると、かがりは柔らかい笑みを浮かべるこの”おとうさん”に好意を抱いたようだった。

「かか様に似てる。優しそうな笑顔、そっくりだ」

「よく分からないけど優しそうかい？」

「うん、おとうさんは優しい人」

「そう。なあかがりちゃん、これからは度々私達親の元へも顔を出してくれると嬉しいんだがね。私の息子は大変親不幸な奴でね？私達親には今日のそれこそ今だよ、それまで君が居ることを知らせてくれなかったんだから！こんなに可愛らしいお嬢さんと交際していたことを知らせないなんて、本当に酷い親不孝者だとは思わないかね？」

健の父の話にいたく感銘を受けたらしいかがりは、可哀想とその頭を優しく撫でてやる。

そしてなんの冗談なのか、かがりは

「……たける、悪い子」

と口になると、ぎっと健を睨みつけてくるのだ。そんなかがりに健もたじたじである。

そして有り得ないだろうと叫ぶなり、健はかがりへと声を大にして言う。

「いやまてかがりちゃん！流されてもいいの？！そもそも親不幸って意味分かってる！？って言うかあれ？おかしい！なんだかおかしい方向に話が向かっていつてます！！ねえそうでしょうお父さん！！」

健は背後の義経を振り仰ぐが、最後の言葉が拙かった。お父さんなどと呼ばれて義経が冷静でいられるはずもない。

「だからお父さんと呼ぶなと言っているだろうが！」「ぐぐぐ、いぎ……う……まじ、それ以上、は……」

というよりも、かがりが健の父親をお父さんと呼ぶのはいいのだろうか、薄れていく意識で思いながら、かくんと健の首が折れた。

「あ」

「落ちたね」

完全に健が被害者でしか無いことを知る人物は、その時、悲しいことにこの空間には居なかった。

17 (親不孝者……のようです) (後書き)

大人げない大人

そして学ばない子供

おとーさんなんて呼ぶから！(えー

18 (水の大蛇) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

18 (水の大蛇)

結局あの後には後日また来てくださいと健の父に言われ、今日のところはこの辺でと、夜も遅いために引き揚げてきたわけなのだが義経は元からの予定とされていた河川へと辿りつくとも膝を屈してぐずぐすと鼻を嚙って泣きじゃくる。

「成瀬なんかに渡すもんか……、僕だつて！僕だつて父親なのに、まだお父さんつて言ってもらえないのに！なのに成瀬父はおとうさんつて呼ばれるし、あんの手の早い息子さんは僕の可愛い娘二人に手えだしてっ！！」

別に手はまだ出してないだろうよと周囲はそんな義経に呆れ顔だ。

「ああもうこの父親つてすげえ鬱陶しいな」

「よしつね、どうかしたの？」

「こつちもひでえな」

「酷いね」

良くは分からないものの、かがりは義経の頭を軽く撫でて謝罪の言葉を述べた。

「……………かがり？」

いい年して目をうるませて娘であるかがりを見上げた義経に、かがりは可愛らしく首を傾げると、小さくぺこんと頭を下げてきた。

「あのね、今度からちゃんと義経の言うこと守るから。だからごめんなさい、許して？」

なんてうちの娘は可愛いんだろうと、その仕草だけで義経は機嫌が直ったらしい。

途端に父の威厳と言わんばかりに義経はきりりとその表情を厳しいものに変え、かがりへと接する。

先ほどの鼻水啜っていた画のお陰で色々と台無しなのだがと従者がぼやくものの、そんなものは義経の耳には入らないようである。実に都合のいい耳を持っているようだ。

「……もう、下手に動かないと約束するか？」

「うん。だからあの……何が悪いか駄目か……教えてほしい」

「……分かった。じゃあ、今日はとりあえずこの川の神の荒れる御霊を癒しにかかろう」

すつくと義経はその場から立ち上がると、川の神を呼び出す為に言挙げの儀を取り行つた。

荒ぶる魂はものを見ない。

この世の理で創りだされ構成されているものを何一つ見ることが出来なくなるからこそ、自分を祀ってきた民すらも容易くその手にかける無情さを得られるのかもしれない。

呼び出された川の神は、川から水の大蛇がせり上がるようにずりりとそこから顔を出す。

水を撒き散らしながらその長い尾を無造作に打ちおろしてくると大蛇は闇夜にもはつきりとわかるほど、自らのその長い胴体を覆い尽くす程に綿密な紋で覆い尽くしていく。

それは臨戦態勢を意味する対戦闘用の攻撃用の紋だった。

紋が浮かび上がった大蛇を見て、全員が距離を取るべくその周囲へと展開した。

「まだ荒魂だけで独立して動き始めてはいない……この状態ならば先日のように癒しを使えばその御霊は浄化され、元あるべき位置へと針は戻るだろう」

かがりに癒しを促そうとした義経は、川からずるりと伸びる水流を見てこれはと声に出した。

かがりもまた水流を見つめて義経に声をかける。

「よしつね……」

「ああ、恐らくこれは一度手合わせをと望んでいるんだろうな」

熱烈歓迎か、暑苦しいなと叫ぶと、義経はかがりを抱きかかえその場から後方へと飛び退る。間一髪だった。義経の先ほど居た位置には深々と水で出来た鋭い切っ先が突き刺さっているのだ。水の勢が増せば人体すら軽々と突き刺すことも可能、どこるか大岩ですら真つ二つに切ってしまうことすら有名だ。虫の標本のように地面に深々と縫い取られるように突き刺されるのは願い下げだった。

「ちげえだろ！単に荒魂が強くなってっから戦闘、災害、ここら辺にしか頭がいかねえだけだろが！」

大蛇は牙を剥いてそのまま襲いかかってくる。

「和魂が全く作用してないのかな？今日は戦闘なしだと思ってたのにー！」

こんな想定外だと塩見が悲鳴をあげるが、澤田はそんなのいつものことだろうとため息をつく。もちろんその瞬間も大蛇の攻撃はやまない。

大蛇が気配だけを頼りに尾を振り回し大地を抉る。一撃二撃と尾がふるわれる度にその水の尾が深く地面を掘り下げていくのだ。完全な破壊衝動のみの御霊に堕ちた神ではないだけに、やりにくいものがある。

川だけあつて上流から流されてくる水のお陰で相手は無尽蔵にその身体はいくらでも修復がきくが、こちらはそうではない。あの尾で一度でも殴られればそのままお陀仏だろう。

かがりも義経も、跳びかかってその大蛇の首を捕まえようとしてみるが、相手は水だ、捕まえられようはずもない。

全員全身ずぶ濡れ、そして体力もどんどん削られていく。だが、川の神はそれこそ、ぴんぴんとしていた。

「そつえばさ……川つて、初めてな気がする」

川の神は確かにやったことはなかったように思う。

鎮魂の儀は、毎回山神、地神、海は二度ほどあっただろうか。自然神はそれくらいだ。川の神はやったことがない。お陰で打つ手が全く分らず困っているのだが。

「守、川つて……上から流れてるんでしょ？」

突然かがりに声をかけられれば、鷲宮は驚く。

自分よりも大蛇と接近しているかがりは、じつと大蛇から目を離さない。何か策でもあるのだろうか。

「ああ……そうだけど」

「じゃあ、一旦、流れ止めたら……駄目？」

水が延々と補充されてしまうのであれば、その元を断ってしまえと言つことらしい。川に住む生き物からすれば何て事をとば思うか

もしないが、非常事態だ、やるしかあるまい。

「……そうか、ナイスアイディアかがりお嬢ちゃん！義経、川を堰き止める！兎に角今は弱らせる！そうするしか方法はない！」

「成る程な 地図の書き換え、申請しとけよっ」

義経はにやりと笑うと空へと高々と腕を突き上げる。すると、周囲に点在していた岩が一齐に浮かび上がった。

「あほ言え！終わったら直ぐ戻せっつーの！」

浮かび上がった岩を義経は、大蛇が生まれずると這い出るその上流へと一気に打ちおろしていく。

ガグツガゴンツガゴゴンと、岩の積まれる音が次々としたかと思えば、川の水かさが一気に減っていった。元が急流であったためにその水の勢いは今、ほばないに等しい。

大蛇はもう、元の大きさを保つことが出来ず、更にはその美しい輪郭が崩れはじめたようだ。

仕掛けるなら、今だった。

だが、相手は目を潰された荒ぶる御霊。そんな状態になればこそ、最後の最後まで力を振り絞り戦おうとするのだ。

「もういいんだよ、もう、いいんだ……」

かがりが大蛇の前に飛び出るとその腕を大きく広げ、大蛇を迎え入れようとす。けれど見ている方はかがりが大蛇に食われるのを待っているようにしか見えなかった。

「駄目だーっ！」

義経の叫びも虚しく、
かがりは大蛇の大きく開いた頤にはくんと
飲み込まれた。

19 (名もなき神) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

19 (名もなき神)

水の流れの中にかがりは居た。

ここはどこだろうかと首を傾げながらも、かがりは前へと進もうとする。兎に角荒魂を見つければならないからだ。

けれど、身体を動かそうとしてみて、初めて分かった。かがりの体は水の鎖に絞められていたのだ。

「なぜ私の邪魔をする」

人の形をした水の塊がかがりの目の前に突然現れた。

人の形をしたその水は、人の形をかたどりながらも、激しくぐるぐると水流は荒れている。それを目にすれば、これこそがあの大蛇なのだとかがりにははつきりと分かった。

これこそが川の神なのだ。

水を堰き止められてなお抵抗している。いや、堰きとめられたからこそ怒りは激しいのかもしれない。

「違う。邪魔してない。私は助けたいだけ」

「助ける？なぜだ」

「助けたいから」

理由など無い。ただ山の神と対峙した時にかがりは学んだ。その悲しみを、そしてその怒りを。

だからこそただ助けたい、命そのものを守るために動きたい、その一心でかがりはここにいるのだ。

けれど川の神はそれを理解してはくれなかった。

「ならば何故水を断つ！」

激しい言葉と共に、かがりを締め付ける鎖が太くなっていく。それと共に体中をぎりぎりと締め上げる強さが増していくのだ。

けれどもかがりは顔色ひとつ変えずに目の前の川の神を見つめ続けた。

「貴方と話がしたかったから。あのままじゃ私は貴方と話ができない。助けられない。私は貴方を助けたいのに」

けれど神は信じなかった。

そのような甘言など聞きたくないとはかりに、かがりの言葉を直ぐにも否定してくるのだ。

「嘘だ！嘘だ嘘だ嘘だ！！人間は簡単に言葉を変える！人は簡単に信仰をやめる！」

かがりの辞書には信仰という言葉はない。

だがこれだけは分かった、この神はただただ悲しみに打ちひしがれているだけなのだ。

悲しいとの気持ちから、それはそのうち絶望を呼び覚まし、はてはこうして荒れ狂う御霊となり果ててしまったのだ。

「私は真の名すら忘れてしまった！人々の信仰はなくなり、その名すら失ったのだ！分かるか！」

水の勢いは留まる事を知らない。

ぎりぎりと締め付ける勢いが更に強くなっていくことに、かがりは一瞬視界がくらむ。

けれど、対話をやめようとは思わなかった。それだけは出来なかった。今止めればこの神はそれこそ駄目になってしまふ、そんなの

はいけない、許せない。

「私は貴方を助けたい。嘘じゃない。」

かがりはただ静かに助けたいのだと繰り返した。それしか今、怒りに支配された神に向かつて口にすることが出来なかったのだ。

かがりの体は水の鎖による締め付けに、その血流が妨げられ、両手は最早元の色を忘れてしまったかのように、汚らしいまだら色の紫色になりつつあった。

激しい苦痛がかがりを絶え間なく襲い続ける。

けれどもかがりは目の前の神を、ただ静かな目で見つめ続けた。そして助けたいのだと静かに語りかけ続けた。

どれだけ時間が経ったのか、いつしかかがりは何も言わず、そして、何一つ口を使い言葉を発することも出来なくなった。

また、神もその間、何も言わなかった。

かがりはそれでもその力強い眼差しで、貴方を助けたいと訴え続けたのだ。

何が合図となったのか、次第に人の形をとっていた水の塊に勢いがなくなってくると、静かな声が響いてくるのだ。

それはかがりの鼓膜を響かせてくるものではなく、胸の奥深くにじわりと溶け込むように語りかけてくるような柔らかいものだ。

「……まことか」

「私は嘘は言わない。貴方を助けたい」

強く言葉を重ねたかがりに、水は完全に動きを止めると、次の瞬間ぱしゃんと弾けた。

それと同時にかがりの拘束も消えた。

がくりと膝を折るかがりの目の前に、薄く淡い水の衣を纏った少年が現れた。

少年にかがりは花のような笑みを向けると、ほっとした溜息と共に、嬉しいとの言葉をかける。

「やつと会えた」

それを受けて少年は、悲しそうな、けれど戸惑うような顔をした。

「名前すら忘れてしまった僕は、もうどんどん弱ってる。このままただ終わりを待つだけかと思っていたのに……」

全身が薄い水色をした子供は、確かに神としての力そのものを失いかけているように見える。

子供は蹲ると泣きじゃくって言うのだ。

「消えちゃうのは嫌だ……嫌だよ……」

弱り切って忘れ去られて、そうして最後には干からびきり死ぬしかないというのは悲しい。かがりはまだ痺れの残る両腕を少年の背にまわすと、そのまま全身を包み込むようにして抱きしめる。

「死なない。私は生かす為にここに居る。まだ貴方は死んではいけない。生きよう?」

「……生きられるのかな?」

「生きられる。信じて、お願い」

かがりの目を真っ直ぐ覗きこんでみると、少年は力強く口にした。

「信じる。僕を、助けて かがり」

かつと一瞬、空が白むほどの明かりがそこに溢れた。

眩しさに目を瞑り、そして目を開けた時には全てが終わっていた。

「ただいま、よしつね」

「……お帰り、かがり」

かがりは微笑むと、すつと一人の若い男の手を引いて義経へと紹介する。

「さっきの蛇の子。こっちはね、よしつね」

「始めまして、と言うのもおかしいかもしれないね。先ほどぶりで。僕の名前はイオリ。先ほどかがりにつけて貰ったの」

イオリと名乗った男は、歳の頃は二十代半ばといったところだろうか。かがりを愛しむものを見るような目で見ると、そつと抱き寄せてその額に口づけた。

「なんっ!?!」

義経は目を剥くが、相手は曲がりなりにも神だ。手は出せない。

いや、出そうとはしてみたものの、従者達に力一杯止められたのだ。

かがりは微笑みを浮かべてその胸に手をやると言う。

「驚いた。すっかり大きくなったね」

「ああ。かがりが名前をくれたから、僕は力を取り戻す事が出来たんだよ。まだ、全てではないけれど、それでも可也の力が戻ってきたよ。」

たよ」

「良かったね」

「ああ。 そうだ、申し訳ないけれど、義経、さん？」

「……何かな」

引きつりながら義経は先ほどの大蛇が姿を変えた男に尋ねる。すると男はこう、困ったように告げるのだ。

「岩を元に戻してはくれないかな。癒しの能力は確かにすばらしいけど、それでも堰き止められている水の流れにより、今現在、僕の中で生きる全ての生き物が死に絶えようとしている」

懇願するように言われれば、すっかりと忘れていたとぼんと手を打つ。けれど義経がそのまま干からびればいいのに、と言う声を発しようとするのはまたも従者に阻まれてしまった。実に懲りない男である。

岩を退けると川そのものにもかがりは癒しを施していく。

「生き返るようだね、かがり」

「おめでとう。身体全部治って良かった」

ふわりと微笑むと、かがりの身体を引き寄せ男は告げる。

「君のお陰だ。有難う、癒しの姫君」

そして男はかがりの可憐な唇を風のように素早く奪い去ると、そのままぱしゃりと波紋を作り、何処かへと消えていった。

「くっ……くちび……唇にまで!？」

残された者達はただ呆然と男の居た場所を見つめていた。

「もう、会えないのかな」

かがりがぼつりと呟くと、会えなくてもいいよと義経が思い出したかのように激昂する。けれど、答えた声は義経だけではなかった。男の声もまた、聞こえたのだ。

《大丈夫、また会える。水のあるところであれば、僕はいつでも君の呼びかけに応えよう。愛しているよ、かがり》

「なん、なななな……」

ふるふると肩を震わせて怒りを堪える義経に対し、かがりは川の前座り込むと、その流れに手を触れて優しく囁くのだ。

「分かった。また会おうね、イオリ」

20 (彼女は一体何者なのか) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

20 (彼女は一体何者なのか)

健はあれから考えていた。

「どう考えてもおかしいよな？」

昨夜はまるで突如として接近してきた台風のように全てを薙ぎ払い、そしていつの間にか退散していた二人のことを思い返す。

かがりとは一体何者なのか。

「降矢さんとこって三人兄弟だったろ？」

それはあまりにも有名すぎる事実だった。

それも、長兄次兄、そして雫の三人だ。なのに自分の娘と言うことでかがりを連れ帰ったわけなのだが、もしや義経には隠し子が居たのだろうか。謎である。

あれから寝ずに考えてみたものの、矢張り問題が問題だけに結論を勝手に推論して出すべきではないだろう。もしも間違っていたとしたら隠し子なんて言葉を出したが最後、訴訟問題に発展しかねない。相手の方が格上と分かっているだけに、下手に騒げば両親に迷惑がかかるため、慎重にならざるを得ないのも事実だ。

「一応ね、理事長代理と父さんは何か友人同士みたいですが……無いと言いつつ切れねえもんなあ……」

隠し子だとしたら、バラしたなあ……ってなことにもなりかねないわけ……

健は中々覚悟が決まらなかったものの、理事長代理 へと聞き

に行くかと思いきや、覚悟が決まらず雫の元へと行くのだった。
矢張り義経の元へと行き成り行くのは少々　　と言うよりも物凄
く、怖かった。

「まあね、隠し子じゃなくなてかがりちゃんだけが、実子ってことで
も考えられるわけなんだけど……」

どちらにせよ分からないと呟くと、健は腹をくくって立ちあがっ
た。

教室の扉は開け放たれていた。そこから首を覗かせて健は教室内
に居る適当な少女を捕まえて声をかける。

「ごめん、ねえ君、ちょっといい？」

「な、成瀬副会長！え、ああ、はい！なんででしょうか！」

突然やってきた学園の有名人である健に声をかけられた、それだ
けで舞いあがっている様子の少女に健は気づかず、人の良さそうな
笑みを浮かべるとちょっと雫を呼んで欲しいと言っただ。流石にこ
れにはあからさまに嫌そうな顔をするものの、駄目押しでにこりと
健が微笑むと、少女は夢見心地といった表情に瞬時になり、ふらふ
らと雫の元へといっってしまった。

少女がいつてしまうと途端、健は人垣に囲まれてしまった。

「副会長！どうかしたんですかあ？」

「ああ、いやその」

「成瀬先輩だ！」

「きゃああっ！」

おおもてである。

そんな少女達の様子に、呼びだされた雫はちよつと困ったようにそれを眺める。少女たちの熱が下がるのを待とうかと思つたが、かといつてこのような、学園祭などが差し迫つた時期でもあるため、準備時間として割かれた今の時間がなくなつてしまふのだ。

準備時間で本日午後の部は完全に時間を個々のクラスや委員会などで割かれているために、どこの教室も喧しいことこの上ないが、けれど今の健の周辺より煩い教室は恐らく無いだろう。

雫は、恨まれたくはないが仕方ないと、嘆息を一つ零すと、健に声をかけた。

「あの」

雫が姿を現したと、この声に直ぐにも健は反応を返す。

小さな影が視界に入り込んだ瞬間、ぱつと輝いた表情を浮かべ、そして困つたように眉を顰めて躊躇いがちに声をかけられれば気づいたようだ。自身を取り巻く少女達が邪魔で近寄れないらしいと。

遠慮しないで堂々と割り込めばいいのにと思ふものの、健はそれは言わず、少女達へと視線を戻して軽くひらひらと手を振り会話はこれで終わりだと合図する。

「ごめん、ちよつと降矢さんに用事なんだ」

全員にごめんと軽く謝ると、雫を伴いそのまま中庭へと消えた。

少女たちが醜い嫉妬に満ち満ちた眼差し、で雫を睨みつけていたことなど気づかずに。

二人はほとんど無言で中庭にさしかかるところまで来たが、どこに向かっているのやら、雫にはあてどもなく歩いていくようにしか

思えなかった。

沈黙に耐えかねたように雫が口を開いた。

「あの、……済みません、何か用があるのでしょう?」

先日から段々と雫の態度が軟化してきていたのを知っているため、健もある程度話しやすくはなった。そして雫自身、少しは苦手かもしれないがある程度話せる男子、と言う程度には健のことを話しやすいと感じてきている。

ただ、雫としてはこうして人目につくような形で外に連れ出されると少々　というよりも可也迷惑なのだが。

知ってか知らずか、健は困ったようにしてへらりと笑うと、言いくそように告げる。

「いや〜……あのさ、ちょっとつかぬことを聞きたいんだけど」「……つかぬこと……どうぞ。答えられることでしたら答えます」

そう返されれば内心安堵の息をついた。

にべもなくばっさりと言られる覚悟も一応はしていたのだが、そうはならなくてほっとしたのだ。

健はそれならばと、先日のかがりと義経の関係について、尋ねようとした。

けれど、自分の言葉を待つように、健の目を静かに見つめる雫に、再び口を閉ざす。

そして何故か、「やっぱあれだ、止めよう」と言うのだ。

雫はわけもわからずぼかんとしてしまった。

どういうことが。

もしや自分ばかりかわれたのかと思い、少々眉根をきゅっと寄せ軽く睨んでやれば、健が若干たじろいだ。

「何故ですか？」

刺々しい声音になってしまつのは仕方ないと思う。

雫が非難するような声のトーンで尋ねてやると、健はまだからかうつもりなのか、「お父さんにそっくりな……」と言つのだ。

一体どういう意味なのか。

「いや、あのね？その……違つんだ」

「違つ？」

雫は首を傾げる。

健が大変不本意といった表情を浮かべているため、気になった。

どうかしたのかと口にするも、健はため息をつくだけで答えようとはしなかった。

ただ一言だけこう告げた。

「場所を変えよっか」

「？……はい」

良く分からないものの、雫は頷いた。

その背後では生徒達が興味津々、あるいは敵意満々と言つた様子で二人を見ていた。

健は中庭にきたところで気がついたものの、雫は未だその視線に気づいていない様子だ。これは中々に鈍い子なんじゃなからうかと健は重苦しい息を吐きだした。

「どつかしましたか？」

「いいや？なんでもないです」

二人は静かなところへ、と言うことで、雫が案内を買って出てくれた。

健は雫がどこに行くつもりかは知らないものの、それでもこのまま時間を無駄に過ごす事はないとついていくことにする。

今の時間は六花祭に向けての準備時間である。本日は午後の授業は丸々準備時間に割り当てられているため、流石に堂々とサボりですと言って歩くわけにはいかないものの、それでも休み時間内に戻って来なければという縛りはないから気が楽ではある。

だが、ついた先でそのお気楽そうな表情は、一瞬で凍りついた。

21 (不本意だが、仕方ないこともある) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

21 (不本意だが、仕方ないこともある)

「やあご機嫌麗しゅう、成瀬君」

やたらきらきらと怖いまでの笑顔で近づいてくるのはまじうことなき義経である。

相對する健はと言えば、内心で絶叫を上げていた。「誰か助けて！大魔王様がいらっしやいますよ！」と、助けを呼びつつ全力でこの場から逃げ出したかったところだが、出会いがしらで襟ぐりを掴まれて逃走すら許されないことに涙する。

一体自分が何をしたと言うのか。

いい大人にこうまでも直接的にかつ、暴力的なまでに攻撃をされなければならぬ理由はなんだ。

健は引きつった唇を無理やり動かして何とか挨拶を返した。

「はは……ご機嫌麗しゅうございます、お父さん」

義経が迫る分、健はじりじりと後退するが、悲しいかなもう背後は壁である。

健の襟から手を離れたかと思うと、義経はすっと両手を、それはそれは優雅に伸ばしてくるのだ。

見目麗しい顔もそれと共に更にぐっと迫ってくるわけなのだが、それに見惚れている暇すらないらしい。

低音で囁かれる言葉は、本当に君は罪を罪と意識しないね、などといった、健に一見、誤解を与えかねない台詞回しではあったが、その後に続く言葉は、「ああ、やっぱりそう続くよな」と、そういうものだった。

「……君は実に学ばない男だな　僕をお父さんと呼ぶなと言って

いるだろ!!」
「は、はいいい!!」

ぎりぎりぎり自分の頬が音を立てるのを健は初めて聞いた。そしてこの頬にかかるだけでもない激痛もだ。

頬をただ抓っているだけで何故こうまで痛みを与えられるのか。いつそ聞かせて貰いたかった。

雫が静かで話が出来るところとして選んだのは、理事長室だ。確かにそれは間違っていない選択だろう。

理事長室が嫌い、もしくはこの場合、学校長室でもいいが、それらの部屋が嫌い学校など、それこそ聞いたことがない。

ただ、健にとってみれば思いつくはずもない、それは最悪の選択だったことは確かのようなのだが。

「それで、一体どのようなご用件でしょうか？」

頬を散々捻られ真っ赤になったそこを雫が渡してくれたよく冷やしたタオルを当てつつ健は視線を泳がせる。それにしても義経が健の頬を抓っている間にこの冷やしタオルを用意したようだが、こういった気遣いよりも、義経を止める気遣いが必要ではないかと言いたい、助けてくれるつもりは無いようなのでこれは言っても仕方がないのだろうか。何ともやるせない気分だった。

健は考えた。

結局降矢さんに聞くよりか、直接本人に聞いた方が早いっちゃあ早いよなあ？

ならば本人に聞いてみるか？

いやだがしかし、本人に聞いてみてここで雫が誰それ、となるのは拙い気がする。

考えに考え、そして　　といったところで義経からきついジャブが飛んできた。

「何よ、もしかして雫を下さいとか言うつもりじゃないでしょうな。そんなことを言いに来たんだったら埋めるよ?」

「すみません、違うんで勘弁してください」

暴力反対と告げてみても「そんなの関係ねえ!」とばかりに殴られるのだ、義経ならばその「埋める」という言葉も、有言実行とばかりに軽くやるのではないかと思い、健は俯き加減だったが、即座に返した。

仕方なしに健は少々濁して先日のことを尋ねてみる。

「あの、昨夜のことでちょっと……なんです」

ここまで告げてみて、これがかかりが雫に内緒の話と言うのであれば人払いをと求めるだろう。

逆にそれをしないというのであれば雫公認、と言うことになる。

さあ、どう出る?

だが、義経はこんな態度に出てきた。

手もとの端末をいじると、どこぞへと通話を開始したのだ。

「……あ、もしもし?僕だけどー?ちょっとおたくの息子さんが僕にいつきなり探りいれてきてきついんだけどー?っていうかさ、今学園内まだ授業中なわけよ。そんな中理事長室特攻仕掛けるとか結構勇気があると言うか何と言うか……ええー?何爆笑してるのさー?やめてくんない?って言うかあのねえ、そっちに今度からうちの子、遊びに連れていけなくなるかもー?」

それでも別にいいよねと締めくくるのを聞けばあんぐりと健は大
口を開けて言葉も出ない。

会話の内容からして確実に相手は健の父だろう。そうと察した次
の瞬間には、健は義経から端末を取りあげた。

「ちよちよちよ、ちよつと待ってくださいよ！父さんすげえ昨日の
……ええと、……ああもう！あれだよ！早く連れて来いって言つて
んのに！！これでマジ来ないとかになつたら俺のこと家に入れない
とまで脅すんすよ！？帰宅難民は嫌ですよ！」

実は義経は昨夜、鷲宮に帰宅した後の会話を盗聴するように伝え
てあつた。

その結果分かつたのが、かがりをまた連れてこい。今度こそ正式
にあのお嬢さんをお招きするようにと厳しく健が父から言われてい
たのを知っていたのだ。だから健に対してはこれが有効な手段であ
ると思つたらしく、義経は下手なことを口走られたならば今度はこ
うしようとして、かがりの件をそれとなく雫に分らないように匂わせ
たのだ。

健としてはかがりのことは彼女じゃないんだ幻想だと告げたいと
ころだが、両親があれほどまでに「やつとうちの息子にも彼女が出
来たのか」と喜んでいるのを、違う　実際は何度も違つと言葉を
重ねたのだが、聞いてくれないので諦めた節もあるが　と幻滅さ
せてもいいものかとも思う。中々に辛いところだった。

誤解は早く解いたほうが矢張りいいよねあとも思うものの、それ
でも健自身がいいのと、両親の矢鱈と押しが強いのが合わさつ
てどうにも言いだせないのが原因のようだが、そんなことは義経か
らしてみれば知ったことでは無かつた。

兎に角、その苦悩を知っているだけに義経はその脆い部分を突こ
うと考えたのだ。

一人わけも分からず困惑するのは雫である。

首を傾げてどういふことかと言う表情を浮かべていた。

健は雫の反応と先ほどの義経の反応を見ると、ああそうか、雫は知らないのだと納得すると、雫へはもういいので暫く席を外してくれないかと告げた。

ここまで連れてきてくれて、だと言うのにこれは酷いとは思っても
の致しかたないだろう。

「……そうですか、では澤田さん達と隣でお茶でもしておりますので、終わりましたら呼んでください」

そう言つて、雫は理事長室の脇にある個室へと引つ込んでいった。雫が消えたのを確認すると健は義経へと食つてかかる。

「なんつて脅し文句ですか!!こっちはなんて聞けばいいんだろう
つてずっと悩んでたつてのに!!」

うん、どうやらこの子はやられてもやられても学習しない子らしい。

頬の痛みも消える暇もなくのこの行動だ。義経はこれで千草の友人という健に対し、どうやらこの二人は見た目は兎も角も、性格は間逆だなと結論付ける。

千草はいまだに義経にびくびくしているが、健は逆で何度も何度も痛みを伴つたとしてもだが、学習をしていない。

いや、もしかしたら学習はしているが、それとこれとは話が別だという時には、きちんと発言はする、そうした勇氣を持ち合わせている、ともとれるかな?

なるほど面白いと一人笑っていると、健が怪訝そうな表情を浮か

べて見せる。

こうした人物は嫌いではないが、かといって年齢からそういった馬鹿な行動が取れる、とも取れるわけで　難しいところかもしれない。

このまま大きく育てば面白いかもしれないなどと考えてみるが、まあいい。

まあどちらにせよ雫のことがある分、千草のことも健のことも、認められるわけもないのだ。

義経は健に椅子をすすめると、自身も目の前の椅子に腰かける。

「それは何？かがりのことは隠し子か何かかーってことを聞きに来たわけ？」

「そりゃまあ……そう、ですけど。え？じゃあマジで隠し子？」

「いいや？違うよ？かがりは隠し子じゃなくて、あの子も養子なんだ」

あの子も、と告げ、ちらと隣の部屋を横目で見やり、困ったような表情を浮かべて見せれば健は罰が悪そうに視線を落とす。

義経はしれつと嘘をついたのだが、健はそんなことは知らない。

これは誰かにかがりを知られてしまった場合にと考えていたストーリーである。それをまことしやかに語って見せただけだった。

「かがりはね、親戚の子なんだけど、ちょっと親御さんが不幸にあつてね。まあ、そこは他の養子の子達と一緒にだよ。あの子も可哀想にと思って引き取ったんだ。だから僕は彼女の親代わりってわけ。その時の後遺症やら何やらで、彼女は記憶障害を負ってもある。そのお陰でって言ったたらなんだけど、君も少々幼く感じたはずだ、そうだろう？」

確かに先日あったかがりは歳の割には幼く感じられた。一つ下と

は思えないほどにその内面はどうにも幼すぎると思う。
健が首肯すると義経は続けた。

「あの子の中身はまだ十歳にも満たない、幼い心なんだ。だから大切に育てているんだけど見た目が見た目だろう？」

「いやまあ……そう、ですね」

「下手に虫は寄りついて欲しくないんだ。けど、どうにも成瀬君のご夫君には誤解をされているようだし、君もその様子だと一度ご両親には彼女であることとして紹介したのかと思っているようだしね。ついでにかがりも君のところでもう一度君の顔が見たいようなのでね、一度くらいはそちらに連れていければ……とは思っている。ただね、中身があれなのでね。十分配慮はして貰いたいんだ。ね、利害は一致しているわけだしどうだろう？ 駄目かな？ こっちもそっちのいいように話は適当にあわせるから、いいかな？」

「……………」

大変な申し出である。

義経としては本当だったらもう二度と健とは会わせたくはないと思っていた。

けれどもかがりには健に恐らく、会いに行くなと言ったところで会いに行くだろう。先日何故か仲良くなってしまったらしい健に、自ら興味を示し、更にはそう遠くない未来には勝手に会いに行ってしまうだろうことを考えると、先手を打つべきだろうと思われた。

まあ、物凄く、不愉快ではあるが。

イオリといつでも会えるとの話があった後、かがり義経を振り仰いでこういったのだ。

「そうだ！ よしつね、たけるとも会えるよね？」

というよりも、今すぐ行く気満々の様子ですかかがりさん　そ

んな駆けていってしまいそうな様子で言われ、義経は大いに焦った。後日一緒にご挨拶にいかなくては、相手方に失礼なのだと言々と諭し、漸く分かったとの言葉をもぎ取ったのだ。これで会わせないなどと後から言おうものならば、義経としても大変、困ったことになるだろう。

確実に、最低でもかがりに嫌われることだけは免れまい。

もう健とは会えないよ、何を馬鹿なことを言っているんだと口にした時のかがりの表情からしてそれは確実だ。

泣きたい……

ぷるぷると泣くのを堪えて何故駄目なのかと言われ、何故も何も無く、駄目なものは駄目なのだと言ったのが拙かったのだろうが、最終的に「なら、よしつねのこと嫌いになる……嫌い嫌い！馬鹿！」と、義経的禁句ワードの数々をかがりが口にしてくれたのだ。

正直、あれをもう一度聞くくらいならば一度会わせてやればいいんだろう！？と、いっそ投げやりな気持ちになったのも事実だ。

要は健の手を鈍らせればいいのだ。

かがりの中身はまだ幼児であると告げれば、些かその手は鈍るだろう。むしろここで食指が動くとかかりにするような輩であれば、それこそそのまま海底奥深くへと沈めてくれようと思う。だがそうではないのであれば、健とその両親をも抱き込み、子供だから手を出すなとってしまったほうが安全である。

義経はにこりと微笑むと、そのうち彼女を伴って遊びに行くよと告げた。

それを聞けば健は苦笑して言う。

「なんか父さん、すげえ気合い入れてたから、来る時は早めに連絡

してくれると助かります。彼氏っぽくふるまえるかは分からないですけど、頑張るんで」

「まあ、その時は宜しく頼むよ」

二人の会話がそんな風に、切りよく終わったところで、事件は起こった。

ボタンと勢いよく隣室と繋がる部屋の扉が開いたかと思うと、噂の人物が飛び込んできたのだ。

「よしつね！この服肩きつい！」

しらんがな。

かがりが栗の制服を着たままに変身してしまったようだ。

そうとは知らない健はなんてぴっちりとした丈足らずな制服を着こんでいるんだと驚き、そして恥じらった。それと同時になんてタイミングで登場してくるんだとも思う。

だがこちらは凄いい、義経は思わず吐血仕掛けた。

なんて制服をきてくるんですか栗さん　じゃなく、かがりさん。

「な、なん、なんで澤田君?!なんでかな澤田君!?!かがりを捕まえておかないのはなんでかな!?!」

うつかり制服で健の前に登場とは、何と言うタイミングの悪さだろうか。義経は神を呪った。

澤田がかがりの後から個室のドアよりひっそりと申し訳なさそうに出てくると、何と取り繕ったものかといった様子でちらちらとかがりと健とを交互に見ながらも義経に答えたが、どうにも向こう側も凄いことになっているようだ。

澤田の手も胸もびしょぬれである。

何があったのか大変気になるところだが、聞かない方がいいので

は、とも思えるのが怖いところである

「いえ、あの、先ほどその……突然変わられまして……対処が……遅れました。申し訳ありません」

かがりは、ぱたぱたと義経の元まで駆け寄っていくと、犬のようにその足元にじゃれつくと、べたりと傍にへばりついて離れない。義経もそんな風に愛娘にじゃれつかれれば悪い気はしないというもので、すっかり絆されてしまった。

だがしかし、かがりが途中で健に気づいてしまって

「よしつねよしつね、今日はいつもと違うねー。いい匂いもする。ふふふ。……あ！たけるだ！こんにちは、たける」

今の今まで完全に義経以外のものが見えていませんといった様子のがかりが、健を見つけた途端にまた、輝くばかりの笑みを浮かべてみせたのだ。これには義経がむっとした。

「こ、こんにちは！つつか、あの……その制服、絶対サイズあつてないぞ？」

健は義経の表情がわからさまに変わったのを見て冷や汗をかくものの、それでもかがりとまた会えたのは嬉しくて、笑みを返して見せた。

だが、その服だけは些かどうだ、ただだけない。

健はサイズがあまりにもあっていない、どこもかしこもぴちぴちになってしまっている丈があつていない制服を着ているかがりに嗜めるように言うと、かがりはぱちくりと目を見開いて首を傾げて言うのだ。その様子が可愛くて、けれど様々な葛藤があり、あまり素直に可愛いとは言えずに苦笑する。

22 (自由がない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

22 (自由が、ない)

「さいず?」

「サイズ、あってないから……その、さ……なんつか……いやまあ、似合ってっけどさ?」

付け足すように加えた一言に、かがりはいたく気にいった様子だ。

「似合う? 似合う似合う?! 嬉しい!」

二人の前に立ちあがると、その場でくるりと回り、嬉しそうに飛び跳ねた。それは子供じみた喜び方だったが、かがりには酷く似合いの感情表現だった。

あまりにも可愛らしくて思わずこんな言葉を口にしてしまう。

「はは……なんか、可愛いな、お前」

「かわいい?」

「うん、可愛い」

ふわりと健は笑みを浮かべると、足元のスカートの丈だけは正解かなと言う。確かにかがりには、丈の短いスカートが大変似合っに見えるのだ。これが雫ならば膝を隠す程度の丈が似合いと言えるのだが、かがりになった途端に膝より十センチ以上も上の丈が似合うのだから不思議なものである。

可愛いと言われてご満悦のかがりは健の腰かけるソファのその脇に、跳びこむようにして座り込むと、彼の肩を借りてすり寄った。

「嬉しい」

これが大変花の様に愛らしい、更には憎からず思っている相手であれば、当たり前だが嬉しいもので 健は優しい笑みを浮かべてかがりを見つめていた。

健は義経から語られた嘘の過去をまともに信じてそして考えた。この子のために自分に何が出来るかと。

「俺さ……頑張るから」

「うんと……分かった。頑張ってね、たける」

「ああ、頑張る」

何やら見つめ合って二人は大変いい雰囲気である。

二人でそうして微笑み合う様を目の前で見せつけられればいい気がしないのは義経だ。

にっこりと笑い一言。妙に弾んだ声で言うのだ

「前言撤回、ぜってえ成瀬邸には連れていかねえから」

「は、はあああ！？なんで！？なんでなんすか！？だ、……だってさつきは連れていくって……」

「ぜってえいかねえ」

声が矢鱈と爽やかでかつ弾んだ声なのが恐ろしい。彼の怒りの程を示しているようで健は青くなった。

だが、そんな義経や健の考えなど知ったことではないのだろう、かがりが言う。

「えー？かがり行きたいよ？たけるの家行きたい。駄目？よしつね
「駄目、絶対」

標語のような受け答えに、健は地に顔を擦りつけんばかりに頼んだ。

「い、一度だけでいいんです！お嬢さんを僕に貸してください！」
「僕のかかりはレンタルしてませんので……！」

いつの間にか健もがかかりが来なければ困ると、その空気に完全に飲まれていたのには従者達が笑ってしまった。元は健の両親だけが乗り気で、健一人だけが乗り気でなかったはずなのに、今では一番連れて行きたいと思っているのがまるで健のようなのだ。

不思議なもので、嫌だと言われると人は連れていきたくなくなるのかもしれない。人間とは本当に摩訶不思議な生き物である。

だがしかし、当の三人だけがそのことに気づいていない。

「ぜーったい僕のかかりは貸出しません！」

「そこをなんとか！十分だけでいいので！」

「お願いされても駄目！っっていうか十分だけとか有り得ない！一分どころか一秒だって貸出禁止！僕のだからね！」

「よしつね、たけるの家にいったらどうしていけないの？」

「五歳児を手にかけるようなド変態だからだよ？」

「へんたいだからなのか、そうなのか！」

「理事長代理！変ないい方しないでください！それに五歳児じゃなくて十五歳児です！」

「中身が五歳児並み何だよこのド変態が！」

「ド変態かー」

従者は言った。

「あれ、かがりちゃんはどこまで分かっているんだろね」

「さあ？」

「じゃあよしつねはなに？よしつねもド変態なの？」

従者は思った。

「親子じゃなければまさしくあいつこそがド変態だよな」

口には出せないが三人の気持ちは一つだ。奴はドのつく変態だと三人ともにそう思っていた。

「かがり？僕はね、紳士なの。分かった？」

誰もこれには同意出来なかったのは言うまでも無い。

「紳士は紳士でも、変態紳士だよなあ」

これには流石に、誰も何も言葉を添えなかった。賢明なことである。

+++

千草がここ二日あまり、ほとんど食事に手をつけなくなってしまった。

その様子を見て降矢邸の面々の感想、もとい、予想はこうだ。

「嫌いな物だらけで食べたくないんじゃないの？」

奏がざっくりとこう答えたところ、ほぼ全員がそれしかないよなと頷いた。

ものわずらいの種だらけのこんな屋敷にいるからだ、とは誰も考えないようだ、酷い連中である。まず一番最初にそれこそ考えよう

ものだらうに。

千草の野菜嫌いはここに居る全員が知っている。だから、それ以外に答えは無いように思ったのだ。

けれどたった一人雫だけが「いえ、流石にそれだけでは無いような……」と言葉を濁したのだが、実際のところはどのなるだろうか。寝台の上で丸くなって鬱々としている千草へと雫は話しかけてみた。

「あの、……千草、ちょっといいですか？」

いつもであれば自分から挨拶はするが、それ以外話しかけようとはしない雫自らのこの行動に、千草は目を見張り驚いた。

だが、寝台の端にちょこんと正座し、千草と目を合わせようとはせずに、ただただ寝具の皺を数えている雫に、矢張り緊張はあるのだなと理解すると、千草は居住まいを正して同じく寝台の上に正座し、真向かうようにする。

「何か用か？」

「いえ。ただちょっと気になったことがあります。それについて伺いたいです」

特に用事らしきものは無いのだがと言う雫に、千草は多少落胆したのを感じたが、直ぐにそんな自分自身を否定する。

そんなことがあっていいはずがない。

話しかけられて気分が多少高揚したなどと、あつてはならないことなのだから。

「……で？何が聞きたいって？」

「……あの、食事は……美味しく、無いですか？」

どういうことだろうと訝るような眼差しで見ると、雫は気配でそれを察したのか、もう少し具体的に言わねばならないと感じたらしい。

「その……最近食事を残しがちのようなので、好みのものが出ないと言うことでしょうか？それとも体調が悪いのですか？お医者様を呼びますか？」

雫の言わんとするところがここで漸く分かったらしく、千草はああそういうことかと思った。

それと同時に、こんなことも思った。

最近食が細いため、どうやら心配をかけてしまったらしい。それは何故か、千草の中に妙な満足感を与えてくれた。

妙に尻のあたりがもぞもぞと落ち着かなくなる感覚がするが今はそれどころではない。雫が心配そうに千草を窺っているのだからきちんと答えてやるべきだろう。

咳払いを数回すると、千草はそっぽを向いて多少言葉をつつかえながらも口にした。

まともに雫の顔を見れない。

それは、雫からすれば信じられないことだった。

「いやまあ……あれだ。この家の食事ってさ」

「はい？」

「お、お上品、過ぎるよなって」

「はあ」

別に千草だって美味しいものが毎日食べられるのは有難いし嬉しいとは思っている。だがしかし、毎日ああいうものでは正直、飽きるのだ。

「だから、俺はさ？なんていうか、せめて昼間の間にでもな、その……買い食いして帰りたいと言うか何と言うか……ほら、だから、自由が無いだろこの家！」

自由、と言われて雫は首を傾げる。

「自由と言うと、どういうことを自由と言うのでしょうか？」

「だから、全部決められてるだろ？朝から晩まで、時間が全て組み込まれてる。何時に起床、何時に学園へ、何時に迎え、何時に……って！それがあるから結局……買い食いも出来ないわけだ」

雫はこれにぽかんとした。

自由が無いと言うのはそんなことなのだろうか。

雫はあまりにもおかしい言葉を聞いたとばかりに千草へと向き直ると、丁寧に言葉を紡ぎ出した。

「千草、それは間違っていますか？」

23 (口にした本人だけが気付かない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

23 (口にした本人だけが気付かない)

「……何がだ」

まさか間違っていると言われるとは思わずむっとする。
そんな千草に雫は真顔で言うのだ。

「自由が無いと言うのは、拘束をされていると言うことではないのでしょうか？だとしたらそれは間違っていると思うのです」

拘束、束縛、そういう言葉は使いどころが間違っではまいか、
そう告げる雫に千草は更にむっとする。どうして伝わらないのだろうか。

「……時間って言う拘束は受けてるだろうか」

「それはまあ、確かに時間が厳しいのは分かりますが、暇な時間と言うものは、自ら捻りだすものなのですよ？」

「少なくとも雫はだが、この屋敷の中で幼い頃からそのように学んできた。」

要領をよくしななければならぬ。勉強がもつと効率よく出来れば、
家庭教師もそう長く縛りつけたりはしませんよとやんわりと言われたことを思い出した。

時間とは捻りださなければ削られていく一方なものだ。だからこそ成績を落とさないようにと、半ば脅迫概念を覚えつつも雫は勉強をし続けるのだ。また、幼い頃のように家庭教師に一日二日と拘束されないように。

それにだ、降矢の家の者が休まねば、下の者　つまりは使用人達に休暇を与えることも出来はしない。普通主が休みも取れず働き

続けともなれば、部下たる使用人たちは、遠慮をして休むことなくせつせと世話を焼き続けるはずだからである。それはいけないと教わった帝王学の基礎中の基礎である。これくらいは当然だろうと言いつづは当たり前前にそれが普通のことだと思っていた。

けれどこれは今度は千草が通じないと言いつづことらしい、千草は唸ると低い声であのなあと零へと口を開く。

何だろう、根本的に零の言いたいことと千草の言いたいことがすれ違っているように思われるのは気のせいだろうか。

千草はすれ違つ話しにちよつと待ったととめ置くと、兎に角そういうことではなくて、単にブラブラと過ごす時間のことだと告げてみた。

暇な時間を作るわけではなくて、単なる帰り道などをぶらつくと言う、たったそれだけのことがしてみたいのだ。それが恐らく零には分からないのだろう。まあそれもそのはずだ、一度たりとて零には、そんな時間が与えられたはずもないのだから、想像することすら出来ないのは当たり前だろうと言えた。

「だからさ、ほんのちよつとの時間をな、帰り道を歩くだけでもいいんだ。毎日ちよつとずつそういう変化があると、刺激があるだろ？今日は他校の生徒とそこですれ違つたとか、帰り道の道草で見つけた店の中で見つけた本が掘り出し物だった……とか。そういうのが……何て言うか、結構楽しいんだ。そういうのを思い出してちよつとな……買い食いもその一部だ」

この屋敷に越してきてまだ一月も経っていないが、短期間で妙に里心（？）が芽生えてしまったわけでもないのだが、千草は過去を懐かしみ、そしてその当時していた買い食いの味を思い出してはああ食いたい、こんな味付けなんかじゃなくて、もつとジャンクな味がいいんだ！と思うがために、どうしても舌や胃袋が、フルコースのようなお上品な味を受け付けなくなってしまうていた。

舌と言つのは一番記憶に残る部分であるとも言える。

他に鼻もそうだが、基本、五感で記憶したものについては人間と言つものはなかなか忘れない。

そのうちの舌が最近妙に昔を懐かしむのだ。

「どうせお前は食べたことがないんだろうけど、たこやき旨いんだぞ」

「たこやき……」

と言つても、ほとんどの六花学園の生徒は食べてみたことが無いだろうが。

「たこやきとは……姿焼きみたいなものですか？」

「はあ？」

姿焼きも実は知らないのですがと添えられれば思わず呆れ顔をしてみよう。

どうやら名前からしてたこをそのまま焼いたものを想像したらしい。確かにそういうものを想像してもおかしくはないネーミングだが、あまりにも実物とは違いすぎる。

流石にこういう家庭で育っているだけのことはある。本当にジャンクフードとは無縁の世界に暮らしているのだ。

干草自体がもともと、ただの中流家庭の出自だからもあるだろうが、そういうジャンクフードは馴染みの食べ物だった。と言つよりも、むしろこういう豪邸で出されるような食事こそ、普通の家庭では滅多にお目にかかれないご馳走なのだろうが、それは雫は分からない。

普通の家庭ではちょっと外出先であれを食べようか、と言つ気軽にそういうことが出来るのだと言つことを干草は述べたかったが、雫にそれは伝わらない。単にたこやきを食べたこと無いだろうとそ

の言葉の意味そのままに受け取った。

食べ歩きもまさか封じられるとは思っても見なかったため、正直千草としては参っている。

いや、それは段々と屋敷と学園とを行ったり来たりとしているこの生活に嫌気がさしてきた、の間違いかもしれない。

八つ当たりと言うわけではないが、千草が雫へと言う。どうせお前は知らないのだろうと。

「ラーメンだつてちよつと遠出して食いに行くレベルの旨さだ。食べ歩きとか、出来るなら連れて行きたいところだが……ラーメン、分かるか？」

「それは……話には聞いたことはありますが……」

実際に食べてみた事は、ない。

そう告げるなり千草は狂ったようにその場で力説し始めた。

ラーメンについて、こうまで何故熱くなれたのか、千草は後で首を傾げてしまうのだが、この時は本当にラーメンを知らない雫がとんでもない異邦人にすら感じられて、思わず熱く唾を飛ばして語ってしまった。

あそこのラーメンは常に長蛇の列だし、下町イタリアンの店はリーズナブルで学生の懐具合も知ってくれていたため、嬉しいサービスまでしてくれた。つけ麺発祥の店って実は結構な数が言ってるけど、あそこがそうなんだ などなど、雫に千草は力説して見せた。雫はあまりの力説ぶりに驚嘆してみせたが、そんなことには千草は気づかない。むしろもっと驚けとばかりに彼はその病みつきになる旨さを語るのだ。

「だから……旨いんだ！」

「……う、あ……はい」

勢いに飲まれる形で雫はごくごくと頷いた。
素直に頷いて見せなければ、更に話が続きそうだったので必死だった。

「ふん、分かればいい」

けれどやっぱり雫には、いまいち分からなかった。

頷いた後に曖昧に返事をする、矢張り良く分からないと首を傾げる。

実際に食したことが無いのだから、こんな反応が当然なのかもしれない。

どうしてもたまに食べたい味と言つものがある。

そしてそれは千草にとつてはだが、こんな豪邸のシェフでは再現不能な味なのだ。

繊細な味付けではない、がっつんと胃に来る味だ。

中々上手く説明出来る自信は千草にはないが、フレンチやイタリアン、懐石料理などでは味わえない、そんな味付けだ。語彙のレパートリーが少ないがために中々説明に困る味付けではあるが、一度食べさせれば必ず雫も分かってくれると思う。

だからこそ、こんなことを口にしたのかもしれない。

「何なら今度行くか？つても、運転手つきなんだろうが。一度は食つてみるべきだと思うぞ、あれは」

雫はそれを聞けば耳を疑った。

あの千草が自分を誘う？

いっそ冗談かと思いはしたが、違つのだろう。千草は真面目な顔

をしていたため、それは冗談でもなんでもなく、本当に雫を食事に誘っているのだと分かった。

雫はあまりにも普段の千草では考えられないことだったために、思わず太ももをこっそりと抓ってみた。

痛い。

と言っことは夢ではないのだ。

「驚きです……」

24 (案内してね) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

24 (案内してね)

雫は驚きのあまりに返事を忘れていたのだが、千草も返事を聞き
たかったわけではないらしい。返事を聞いていないことも気になら
ないのか、その場でぐんにやりと倒れ込んで腹を抱えて呻き始める。

「……ああ、想像したら腹減った。せめて夕飯くらいは食べておく
んだった」

今日も三食を全てほとんど残してしまっているため、胃袋の中身
はこんな夜中にもなると空だ。こんな豪邸では普通の家には大抵あ
りそうな買い置きのカップラーメンすらないに違いないと思うと、
千草は更に胃をきゅると可愛らしく鳴らして寝台へと突っ伏した。

「駄目だ、もう寝よう。これ以上腹が鳴るとマジでヤバイ。食糧庫
まで走る勢いだぞ」

良くは分からないもののほら寝るぞと促されれば、雫は素直に寝
台の端に身体を横たえ、目を閉じた。

結局同じ部屋で寝起きをするようになってからと言うもの、室内
にはなんだかんだと言いつつも未だに奏が居るため、そのほとんど
を二人で過ごすことはないのだが、最早千草も直ぐにも手を出そう
と言う気もないらしい。

千草は千草で雫とは反対側の端に身体を横たえたと、そのままこ
ちらも素直に寝入った。直ぐにも寝入らなければ、胃がぎりぎり
絞られるような痛みすら発していたのだ。

だからこそではあるが、それでも異性と同衾していると言うのに
緊張すらもつ見せなくなっているらしい。

後から寝室へとやってきた奏は、そんな二人を見て呆れるように

言うのだ。

「義経様、許嫁さんが何かしたら殺せつて言ってるけどさ？もうそんな心配無くない？」

僕もつ自室で寝たいと嘆息と共にそんな言葉を漏らすと、奏も簡易寝台に腰をおろしてそのままその上に身体を横たえた。

そもそも奏には体鍛えるのが趣味です、な干草を殺すほどの力はないし、基本一人で寝るのが好きな奏は本気でちよつと参っているのだが　そう鷺宮にばやけば、苦笑してぽんと肩を叩かれ満面の笑みを浮かべ雫の部屋へ押し込まれる毎日だ。鷺宮も矢張り、義経の部下なのだと思わざるを得ない。

ちらりと二人が寝ているベットをみる。

「許嫁さんはきちんと雫お嬢様が好き……けど、雫お嬢様はどうなんだろう？まだやっぱり、自分が異性の対象として考えられないのかな？」

自分以外の人間が、恋だの愛だのと言うのは分かるし祝福も出来るが、それがこと自分が関わりと途端に鈍くなるのが雫だ。

何も元からこうだったわけではないが、あの事件以来、それが段々と強くなっているように思う。

矢張り歳を取ると言うことは、嫌でもそういつことと向き合うようになるものなのだろう。

奏はそつと寝入る雫へと目を向けると、そのあどけない寝顔を見て悲しそうな笑みを浮かべた。

いつかそうしたもののが全て無くなれば、雫はきちんと恋愛が出来るようになるのだろうか。

出来ることを信じて、奏は瞼をそつと閉じる。

それはどこか、神へ祈りをささげているような顔にも見えた。

粟は考えた。

要は千草は買い食いをしたいのだろう、そう思った。

それはそうだろう、今までとは全く違う生活を、それも急に強い
られているのだから。

以前は当たり前にしていたことが出来なくなるというのは、それ
なりに辛いこともあるのだろう。

あれほど熱弁をふるう千草など初めてみたのだ。よほど何かが溜
まっているのだろう。

そうとしか思えなかった。

だが

「問題はそれをどうするかですよね……」

では先ず、買い食いをどうすれば出来るだろうか　ということ
である。

奏に問いかければ、笑顔で無理ですとにべもなく、ざっくりと切
り捨ててきた。

粟の問いかけに対して、答えはコンマ単位で返されるのだ。何と
素早い。ちよつとくらい考えてみてくれてもいいではないか。

これには流石に酷いと言わざるを得ないだろう。

「そんな、だって」

「だってじゃないです。危険です。買い食いなんてもってのほかで
す」

「ですが……このままでは千草がやせてしまいます」

本気でそう思っているらしい雫は、眉根を寄せて心配だと何度も口に出している。

呆れたもので、千草が苦手だなんだと言いつつも、それでも千草の健康などを心配するのは雫にとっては当たり前のようなのだ。

それが少し面白いと思う。

奏は本当に面白い二人だと思いつつ、内心微笑ましいものを見るような気持ちになっていたが、それは表面には出さないようにつとめた。

兎に角買い食いは推奨できないけれど、それでも義経達に言うだけは言ってみると告げると、奏は席を立った。

その日の午後、送迎に現れたのはいつもの豪華な黒塗りの車ではなく、真っ赤なスポーツカーだった。

そして、運転席から現れたのは鷺宮だ。今日は秘書の仕事は無かったようで、屋敷からそのままやってきたと告げられ、三人はさあと後部座席に乗る様にと促される。

「あー……お嬢は隣な」

千草と完全に密着することは難しかろうと気を回した結果、雫を助手席に隔離することにしたようである。

「今日は運転手の島田さんはお休みなんですか？」

「いや？交代しただけっつかまあ、そんなところ。んで？お前さんの行きたい店つつのはどこよ？流石に徒歩で帰してやるわけにはいかねえからな、俺が連れていくからそれで我慢して貰うことになるがそれでいいかい？」

雫ははっと背後の奏を見る。奏は少し肩を竦めるとミラー越しに鷺宮と目配せした。

「え……」

千草はどういう意味だろうと言葉を失えば、雫が嬉しそうな声を上げた。

「鷺宮さん、本当ですか？ 買い食いとやらに連れて行っていただけるんですか？」

「ああ、今日は俺の奢りだ。どこでもいいぞ。好きなところにつれて行ってやる」

それを聞くと雫が手を打って嬉しいと弾んだ声を上げると、鷺宮に礼と共に抱きついた。

そして千草を助手席から乗り出すように覗き見て言うのだ。

「良かったですね、千草。これから寄り道をして帰れるそうですよ

！」

「え……」

目の前で繰り広げられる健全ではあるが盛大にいちやつかれた後でのこの言葉だっただけに素直に喜べないでいれば、続いて言われた雫の言葉に千草は息を飲む。

「絶対に食べたほうがいいラーメン、連れて行ってくださるのでしょっつ。」

どうやら、自分のために寄り道、そして買い食いができるように

用意してくれたい。

自分の言葉を理解できないながらも、一生懸命千草のことを考え
てくれたらしい雲に、少し胸が熱くなったのに千草は気がつかない。

「ま……まあ、な。覚悟しておけよ、絶対にうまいって言わせてや
るからな　済みません、そのカーナビにアプリってリンクさせら
れますか？」

「おお、出来るぞ。住所とか入れてあるのか？」
「ええ」

千草は自身のアプリを取りだすと、そのままそれを肘おきの先に
作られた台座の中央へと置くと、そこからアプリを中心に円が幾重
にも台座の上に広がっていった。

円に指を触れてそのまま幾つか現れたタブのうちのカーナビと言
うタブに持っていくと、そのまま二つがリンクしたらしい。雲の前
でカーナビがアプリからのデータを受信し始めたことが描き出され
ていく。

千草が幾つかいじる動作をすると、そのままカーナビの前に窓が
幾つか広がりを見せ、最終的に目的地への案内図、そしてその情
報を数点表示して留まった。

「……あー、じゃあ行きますか。お前らところで、腹は空かしてき
てんだろっな？」

「勿論です」

それは昨日も今日もほぼ何も食べてない千草からの声だった。

「そりゃそっだろっな」

これには全員が笑いを禁じ得ない。

兎に角久しぶりのジャンクフードである、しこたま胃袋の中に詰め込んでくる気、満々だ。

「寄り道なんて初めてです。楽しみ」

寄り道だけでなく、学校、屋敷、もりむらの施設、そして降矢グループなどの会社以外の場所に行くこと自体が未経験の雫は胸をときめかせた。

そんな雫を見て奏も、僅かに微笑む。

「おう、楽しみにしとけしとけ。少年ご推薦の品だからな。これ吃不味かつたら百叩きの刑に処してやるから覚悟しとけよー」

「は、はあ?! ちよ、本気ですか?!」

「本気本気、マジ本気。俺嘘つかない」

「そこは嘘つきましょーよ!?!」

「俺は誠実な男だっ」

「意味わかりません」

「僕はとりあえず甘味が何か食べたいんだけどそっちはおススメのとか無いのかなあ」

「あつ私も甘いものを食べたいです」

「お前ら助けるよ!?!」

こうして四人は千草のおススメ、帝都プチ買い食いツアーに向かうことになったのだった。

24 (案内してね) (後書き)

ある意味保護者つきのデート
そして本人たちだけがそれに気付いていない

25 (僕だけの零距离) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

25 (僕だけの零距离)

遊戯室でのことだった。

奏がごろごろと長椅子に身体を横たえて、気に入りの蔵書を読んでいた時だ。雫が乱入してきた。

「奏！これを見てください！やっと解けました！」

「んー、どれですかー？」

「ごろごろと奏が転がりながら上体を起こすと、そこにはノートを抱えてはしゃいだ雫がいた。

見てくださいと自信満々に差し出したのは数学の奏より出された問題だ。何とか解けたとはしゃぐ様子が可愛い。

「えー、何何？ $1/2nd$ ？んでこっちは……おもりの質量を大きくしていくとー……うん、そうだね。 M/m はゼロに近づくから加速度 はー……うん、 g に近づく、が正解。おめでとーございませ、雫お嬢様。正解ですよー」

奏が本にしおりを挟むなり、微笑みながらそう告げてくるのを受けると、雫はノートを片手にその場で拳を握りしめて歓喜して声を上げる。

そして気づけば雫は感激するあまり、奏の背に飛び乗る勢いで奏その身を横たえていた長椅子へとダイブした。

気まぐれに出す奏の問題は、とても難しく頭が痛くなるほど集中しないと答えが出ないものが多い。その分、問題に集中していればほかのことを忘れたれるのでいい気分転換になるのだ。

そして正解するととても心がすっきりする。

奏は雫が何かもやもやしている時を狙ったようにこうして問題を

出してくれる。今回のように。

「うわっ！危ないですよ雫お嬢様」

「やったやった、解けました！ ええと、奏、これは何の本ですか？」

奏が非難する目を向けているにも関わらず、どうやらそんなものは気にすることでも無いということか、雫は全くそんなものに注意を払わない。それどころか無頓着だ。気にせず奏の手にする本を覗きこんできてこれは何だと興味津々の様子。

奏は閉じていた本をしおりの挟まれているページから開くと、これは幸福論だと告げて中身を中途半端なページではあるが、見せてみた。

雫は開かれたページへと首を突っ込むようにして覗きこむと、ぱしぱしと長い睫を瞬かせる。

ついで出てきたのはこんな言葉だ。

「……途中過ぎて分かりかねます」

それはそうだと奏はこれを笑い飛ばした。

「僕が読み終わったら読むといいですよ。宗教的な考え方が無いからいいですよ。Bラッセルの幸福論、ですね。もう半分くらいですから明日明後日くらいまでには読み終わるかと思えます」

「……んー……おススメでしたら一度読んでみようかな」

「是非そうしてみてください。おススメです」

因みに二人の距離は零距离である。奏の上に半分乗り上げるような形でぴったりと密着している雫に奏は苦笑する。

恐らく、世界中で唯一、雫がこうまでべったりとへばりつくのは

奏だけだろうと言える。

千草には絶対に許す事が出来ない距離だろう零距离に、奏は内心誇るべきか、それとも警戒されないことを嘆くべきかと少々頭を悩ませるが、そもそも奏には雫は単なる仕えるべき家の少女であり、ついで言うなれば過去には友人になって欲しいと雫本人に直々に宣言されて傍に居るわけだ。決して色恋沙汰には、それこそ一生なることは無いのだろうと思う。

そんな完全に甘さが皆無なべたべた具合であるからだろうか、義経にも警戒されたことはない。

雫自身もそうだ、あのような事件があつてからも雫は唯一奏にのみ、その警戒心をあらわしたことはない。

それ以外の男子は全て、義経でさえ、暫くの間は触れることすらかなわなかったことを思い出せば、今の距離を手放す事など奏には無理だ。恐ろしい。

今の距離をずっと保てるのであれば、それこそ全てを放棄してもいいだろう。

奏は雫の唯一心許せる零距离の友人であり続けたい、そう思った。

「雫お嬢様」

「なんですか？」

「今度また、絵のモデルになってください。そろそろ冬の家あたりでどうですか？山茶花が見頃でしょう？寒牡丹も来月には見頃でしょうし、それを背景にどうでしょう？」

「どうでしょう、と話を振られたほうの雫はと言えば、首を傾げている。

「たまに思うのですよね、奏の記憶力って、不思議だなあって」

「何がですか？」

「いえ……だって普通は絵のモデルって言うと、何十時間もそのポ

ポーズを取り続けるでしょう？けれど奏の場合、そのポーズを一度取ってしまえば、それを頭の中に入れっぱなしにすると言うんですもの。それでよくあかも鮮明に全ての絵を頭の中にとどめおけるものだ、いっそ関心します」

「そうかなあ？」

奏からすれば、何十時間もとめおく必要性が分からない。

画材もアクリルを使用するため、乾くのはそう遅くは無い。だからそこまでモデルに重労働を強いるわけではないだろうが、それでも長い間の拘束は矢張り現金だろうと言える。と言うよりも可哀想だ。

「同じポーズなんて結構大変だと思うんですよ。それにさ、少しずつポーズもだれてくるだろうし、一旦そのポーズや細かな表情を覚えちゃえば、それで済むよねーって……ううん、駄目なのかな、そういうのって」

「さあ？普通は無理なんじゃないかな、とは思いますが、駄目とは思いませんよ」

少なくとも瞬間記憶と言う特殊能力が無ければ無理だろうと心の中で付け加えると、ぴくりと肩を揺らす。どうやら音も無く近づいてきたものがあつたらしく、傍近くまで寄ってきて始めてその存在に気がついたものがあつた。メイドである。

二人同時に起きあがると、尋ねる。

「なんででしょう？」

「義経様がお呼びです」

「分かりました。行きましょう、奏」

さっと奏から降りて先を歩く雫に、なくなってしまったためもり

を奏は少しの間惜しんだ。

25 (僕だけの零距离) (後書き)

つまりは男として見られていないんですが

26 (あなたと出会うために私は歌う) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

26 (あなたと出会うために私は歌う)

能力者達には、一体どんな風に見えるのだろうか。雫はこここのところ、時折そんなことを考えてしまうことがよくあった。

「ずっと、考えないようにしてきたのに」

何故か最近、幼い頃に考えてきた能力者だったらと言う”もしも”を考えてしまうことが多い。それは一体何故なのだろうか。

もうそれが叶うわけがない望みだと知っていると言うのに、散々諦めざるを得ない状況に陥ってきたと言うのに。

雫はふつと突然最近多くなってきた眩暈を感じて身体を傾がせた。

あ、駄目。。

意識が途切れる　そう感じた瞬間には、雫は深い眠りの淵へと落ちていった。

そして現実世界には、眠りから目覚めたばかりの漂白されたばかりの眩い白さを誇る、かがりが居た。

「お早う、かがり」

「お早う、よしつね」

かがりは眠気を散らすように軽く目をこすると、花をも欺くほどの華やいだ微笑みを浮かべて言うのだ。

「よしつね、疲れてるの？」

「さあな、疲れている……かもしれないな」

雫とかがりの入れ換わりは、今までは飽く迄も夜だけだった。平日の学園内で変わることがないためまだ許容範囲かと思っていた突然の入れ換わりにも、先日の理事長室での一件があり、その安全神話は破綻してしまう。

「まだ眠っていないくて平気か？」

案に寝ているとこの義経の発言に対し、かがりは気づかずふわりと笑みを浮かべて告げるのだ。

「沢山寝たもの、もういい。今日は行くところがあるの」

「行くところ？それはどこだ？」

「かがり、さっき呼ばれたの」

そう告げるなり、かがりはソファから上体を起こして耳に手を当てると、ほら聞こえるでしょうと言っただ。

義経は同じように耳をすませて周囲から音を拾おうとしてみるが、一体どの音なのか見当もつかない。帝都内、それも中枢にほど近い場所に立つ邸宅であるため、どうしてもある程度騒がしいのは仕方ない。

帝都の星すら見えない夜の喧騒は、義経にとってみても日常の一部だ。日常とは当たり前にそこにあるものであり、それを意識して聞き分けると言われても難しいだろう。どうにかしてその中の音をより分けるにしても、あまりにも情報が少なすぎた。

義経が首を傾げているのを見ると、かがりは笑いながらしょうがないなあと、まるでいとし子を柔らかかに甘やかすようなニュアンスで口にする、義経を連れてテラスへと移動した。

まだそう遅い時間帯でないためか、空は漆黒と言っよりも、どこか群青と言った色をしている。外の秋風が肌に気持ち良かった。

外気に触れてみたところで、何も変わらない。何かしらの音が聞

こえてくるのかと思いきや、そんなことはなかった。

矢張り聞こえないよと義経はかがりへと告げようとするものの、かがりは胸の前で手を組むと、義経の前でふいに歌い始めたのだ。

「私の声が聞こえる……」

「何を……」

始めるのだろうか、そう続けたくとも、義経の声は喉の奥で絡まり、出てくることは無かった。

それは美しい調べが目の前で奏でられていくのだから、そこに無粋な言葉などかけられるはずがない。

【私の声が聞こえる？

貴方へと呼びかけるこの歌声が

貴方は今どこにいるの？

闇の中怯えているの？

私はただ貴方を助けない

守りたい 救いたい

私は貴方の心を 身体を

癒す為に そのために生まれてきた】

かがりの歌とかけあうようにして、相手はそれに応えてきた。

それはあたかも元からそうした二重奏曲であるかのように、二人は歌う。

この声は一体誰なのだろうか。男なのか、女なのか、子供なのか大人なのか、それとも老人なのか それすらも判別が難しい歌声だった。

《お前などに癒せるはずもない
この傷は この痛みは
誰に癒せるものでもない

人の子よ 愚かなる人の子よ
お前は何も知らない
痛み 傷つき
苦しめられる辛さを知らない

神錆びるほどの月日を生きた事があるか
苔むすほどの月日の何と気の遠くなることか

人の子よ 愚かなる人の子よ
お前は何も知らない
痛み 傷つき
苦しめられる辛さを知らない》

【貴方は傷ついてきたのね
貴方は私に似ている

貴方はいつも傷ついてきた
貴方はいつも怯えていた

私は貴方を知っている
貴方は私に似ている

貴方はいつも怖かった
貴方はいつも嫌ってた

自分を 世界を 全て嫌ってきたのね】

《そうだ私は怖いのだろう

私は全てを嫌う 全てを憎む

私は全てが恐ろしい

私は全てが憎らしい

私を嫌うこの世界が嫌いだ》

【私は貴方の声が聞こえる

貴方は私に似ている

消えない傷を負って

人に 世界に 裏切られた

その絶望 嘆き 全て知ってる】

《人の子よ 何故お前は私を見つげられる？

私は一人朽ちていこうとしていると言っのに

今更何故私を見つけてしまったのだ

もう遅い 私の嘆きは深い

もう遅い 私の悲しみは深い

裏切られた 打ち捨てられた

もう私は疲れた

私は一人静かに消えさる魂》

【辛いよね 悲しいよね

それでもなお諦められないよね

人の子に希望を見出しているのね

大丈夫 私がいる

私が貴方を助ける

私を貴方の元へ導いて

私は貴方 貴方のために生まれてきた

貴方を癒すため

貴方を導くため

今の貴方を

貴方のありのままを

今ある全てを

私に曝け出せばいい

【私が全てを包んであげるから】

それは幻想的な光景だった。

かがりが歌を歌う度、そして相手がこの歌に応えるたびに木々が揺れ動き、風がざわめくのだ。

それはまるで世界が震えているようだった。

27 (ただ出会ったために歌う) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

27 (ただ出会ったために歌う)

かがりの歌を待ち望むように、それは嬉々として震え続けているように見えた。

歌が一節歌われるごとに彼女の髪はゆらりと、いつの日のことだったか、あの時と同じく水面に揺らぐ藻のようにゆらゆらと浮かびあがり、自ら光を発して揺れ続ける。こんなにも風がざわめいていると言うのに、それは一人だけ世界から隔絶されたかのような光景だった。

「美しい……」

思わず義経はそう口にしていた。

歌い終わるとしつとりと微笑んでかがりは告げる。

「こっち、こっちに居るみたい。イオリが連れてってくれるって。

行こう?」

わけが分からないながらも、義経は手を引かれるままに進んでいった。

降矢邸には庭と呼べるものが幾つか存在するが、中でも巨大庭園は圧巻だ。中央に巨大な噴水を設置しており、それを囲むようにして整えられた薔薇の垣根が幾重にもある。

垣根を越えた中ほどに設置されている巨大噴水の前まで連れて行かれると、そこがかがりは噴き上がる水に手を差し伸べて、そこに誰が居るわけでもないのに呼びかけた。

「イオリ、来たよ」

するとかがりの呼びかけに応えるように噴き上がる水が蠢き始めたのだ。

それはまさに、度肝を抜かされる光景だった。

水はうつと曲線を描いたかと思うと、次の瞬間虚空に円を描いて流れ落ちていく。物理法則を無視したこの動きにこれは一体何が起こるのかと、義経は瞬間的に身構えた。

けれどそう身構えた次の瞬間には、そこに義経よりも二回りも大きく太い水の柱が一本立ちあがり、それがはち切れるほどに更に膨れ上がると、今度は人の形が作られていくのだ。

そして、気づいた時にはその水の柱は先日出会ったばかりのイオリになつていた。

自分も大概不思議や超然とした化け物であると感じていたが、それでもこれはそういう次元ではないだろう。

義経達六花神は、タネも仕掛けもないものを使うだろうが、それでもだ、水の中に突然現れたりすることは出来ない。と言うよりも、人の身では無理だろう。

相手は矢張り神なのだと再確認したところで義経は唾をぐくりと飲み込むと、構えを解いて最上級の礼を取った。

イオリは青い艶やかな髪を肩に垂らし、同じく青い束帯を身につけて噴き上がる水を背にそこに居た。力を取り戻した後のイオリは淡い色から濃い色を力と共に取り戻し満面の笑みをたたえている。

「会いたかった、かがり」

イオリは目を細めて愛しげにかがりを見つめると、水の上から腕を伸ばしてかがりを手招く。かがりはその手に自らのそれを伸ばすと、義経を振り返って言った。

「行こう、よしつね」

「行こうって……どこに？」

「神様のところ。ね、イオリ。さっきの子は、ずっとずっと待ってたんでしょ？誰かが気づいてくれるのを。きっと何とかしてくれるって。ずっとずっと、待ってたんだよね？」

かがりは義経の手を取ると、自らも水の中に足を踏み入れつつそうイオリへと尋ねた。イオリはかがりの問いに対し首肯するところ返した。自分の時のように癒してあげて欲しいと。

「谷の奥で今にも消え行こうとしているように見えるよ」

「早くしないと……。消えてしまっっては遅いもの。消えてしまったら、黄泉路に駆けりさることも出来ない。そうしたら手遅れになる」

一人わけも分からず困惑しているのは義経だ。

何とはなしに話を聞いていて読みとれたのは、かがりが先日行ったイオリへの癒しを必要としている神がどこぞに居ると言うことだ。

それは、先ほどの歌で返してきたあの声の主なのだろう。

そして、イオリはその相手を知っているのだろう。だからこそかがりを連れていこうと言うのだろうと思った。

ただし、その移動方法は分からないが。

これから一体何が起ころのか、義経には、全く見当もつかなかった。

イオリが腕をすつと上げると二人を水の布のようなものが下から立ち上がると、これがかがりと義経をまるで優しく包み込むようにして上から覆い隠していくのだ。

完全に水がその全身を覆った瞬間、さっと水が噴水の中へと落ちていく。

気づけばそこには、元の通り優美な曲線を描いて水が流れ落ちる、いつもの風景を作り出している噴水しかなかった。イオリと共に、二人の姿はどこにもなくなっていたのだ。

+++

二人はイオリが生み出した水の玉の中に居た。

「ここは一体……」

玉の内側はぐにやぐにやとしていて頼りない手ごたえしか返してこない。まるで水面にべったりと手のひらを押し付けたような、そんな感覚がした。

玉は今、ゆっくりと川の上を滑る様に動いているが、それだけでも不思議な感覚がすると言うのにどこをどうすればそうなるのか、気づくとどこかの谷底を移動していたのだ。

これには流石に驚いた。

驚いたと言うよりも、肝を冷やしたと言つべきだろうか。義経は心底ぞつとしたのだ。

いつの間に敷地内から出てきてしまったのだろうか。

「かがり、歌って欲しい」

「分かつてる」

かがりは谷に住む神に呼びかけるためまたも歌う。

【貴方は今どこにいるの？

私はこうしてここにやってきた

どうか姿を見せてほしい

愛しい貴方

私は貴方を救うためやってきた

貴方は今どこにいるの？

私はこうしてここにやってきた

どうか私の前に顔を見せて？

可愛い貴方

私は貴方に出会うためにやってきた】

朗々と紡がれていく美しい旋律に、谷が僅かに揺れ動く。地が揺れ動き、風が震え、まるでかがりの存在に怯えているようにさえ見えた。

何故怯えていると思うのか、義経は自分自身でさえどうしてそのように思うのか、説明がつかないことだった。

彼女は歌い続ける、ただ神に会わんがために。

どこかでこれを見た事がある。

義経は忘却の彼方へと思いを馳せる。

いつの日だった、これを見たのは。

『義経、風の神様はね、美しい調べを奏でると出てきてくださるの

』

あれは

「本当に来るとは……」

「私は嘘は言わない。それよりも、貴方こそ来てくれて嬉しい」

そこには小舟に乗った男が、一人櫂を手に薄らと今にも消えてしまふようなほどに儂げな風情でそこに居た。

まさか、これが先ほどの歌に応えて出てきた神だとしても言うのだろうか。

かがりは上に手を伸ばすと、男にこの手を取る様にと促した。

そう、小舟は宙に浮いているのだ。

男はかがりの手を取るのを、僅かに躊躇ったものの、けれど最終的にはその手を取った。

そして躊躇いがちに言うのだ。

「本当にお前は私のために、生まれてきたのか？」

「そう。私はこのために生まれてきた。癒す為に、愛しむために」

言うなりかがりは取った手をぐいと引き寄せると、消えかかった男が小舟から引きずりおろされる。あつと思つた時にはもう、男は水の玉の中にどぷんと音をさせて入り込んでしまつていたので。

男はかがりに文句を言う体力も残つていないと言うのか、引き寄せられるままにぐつたりとして身を任せていた。

それをいいことにかがりは男の頬を両手で挟み込むようにして優しく持つと、そのままその額に己のそれを押し当て、優しい光を男へと送り込み始めたのだ。

「熱い……あつ、い」

「大丈夫。もう大丈夫だよ。一人じゃない。怖くない。悲しくない。貴方はもう、一人で傷つかない。だから……安心していいんだよ」

「もう、一人ではない？」

男は目を見開くと、近過ぎて焦点の合わない位置に居るかがりを

見やる。

それはどこか、縋りつくような目に見えた。

「そう、一人じゃない。一人ぼっちなんかじゃない……貴方は私が助ける」

かがりがそう口にした途端のことだ、水の玉の中に光がかつと溢れた。

そして光が消え失せた次の瞬間には、男は美しいその姿を取り戻して見せていた。

「これは……」

「お帰りなさい。もうこれで辛くないでしょう？」

男はかがりを前にして微笑むなり、その額に口づけると、どこへなりと消えてしまった。

恩知らずなのかと義経が何か礼くらいあっても良さそうなんじゃないかと少々不満そうに考えていれば、イオリが言うのだ。

「あの人もやつぱり、かがりと共に在ることを選んだね」

そんな意味深なことを告げるのだ。

どういう意味だろうと義経がイオリへと尋ねようと振り返ってみると、そこはもう、つい先ほどまで居た谷ではなく、噴水が吹き上がる巨大庭園の中だった。

「……流石に勝手すぎないか、神よ」

28 (救世主かと思いきや) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

28 (救世主かと思いきや)

風の神は古来より、神霊を運ぶ使いのような仕事をもしているといわれてきた。恐らくはあの小船は、彼が神霊を運ぶ際に使用している船なのだろうと思われる。

義経は谷、そして崩された山の修復をして眠りについたかがりを思い出すと眉根を寄せて考え込む。

結局そういうことなのだろうか。

最初は義経の母がそれと考えられた。そして次は義経だ。だが結論は出ない。

そもそもが六花神の誰もがその存在を知り、そしてそれと同時に知らない。そのことからしてかがりであるとの確証が、得られるはずもないのだ。

だからこそ義経の母、そして義経、その妻、現在は蒼緋と言われているわけだが、何度も何度も期待をし、何度も何度も違うのだろうかと疑われてきた存在だ。

そもそも、存在しているのだろうか。これからも存在するのだろうか。それすら分からない。

「六花神がずっとずっと、探し続けてきた存在……約束された子供」

それが一体誰なのか、それは義経には答えることが出来なかった。

+++

さて問題です。突然女子生徒の集団に捕縛されました。そのままこれまた引きずられるようにして女子トイレの中まで連れて行かれ

たのですが、一体この後、何をされるでしょうか。

「答えは簡単ですよね」

「何言ってるのよ!」

どんと背中を押されて無理やり個室へと押し込められると、こゝで覚えてきたのだろうか、女子生徒達はバケツに水を汲みいれ鞆の待つ個室の上から顔を出して言うのだ。

「扉締め切ったから、悲鳴上げたければ上げれば？まあ、どうせ誰も助けないわよね。女子はみいんな高遠会長も成瀬副会長も騙した最低な降矢のご令嬢って言うので貴方のこと嫌っているものね」

先日から鞆と仲がいらしいと騒がれたした千草と健だが、どうやら鞆の冷ややかな（とまで言ってもいいものか迷うところだが）反応とは裏腹に、周囲は二人を誑かしている女との認知であるらしいと知る。

鞆にとってみれば、その認知はただただ不快極まりないものだった。

お陰でだろうか、女子に囲まれてトイレで恐らくは私刑にあっているのだろうか、鞆はただただ面倒くさい、どうして自分がこんなことをされているのだろうか、それも、勘違いでなのだから嫌だ、それくらいにしか感じていなかった。

最早それはずっと続くイジメに対する心の麻痺なのだが、本人がそれを気づいているかは不明である。恐らくは気づいていないだろうが、それが幸いなのかそれとも不幸なのか、それは何とも言えないものがあった。

「はあ、そうですか」

気の無い返事を返す雫に周囲を囲む生徒達は一気に色めきたった。開き直ると強くあれる、と言うわけでもないのだが、雫は最早感情を出すのも面倒だとばかりにさっさとやればいと相手へと促すと、何を激昂するところがあるというのか、かけてやるわよ！と叫ぶなり、雫へとバケツの水を思う様ぶちまけたのだ。

だが、雫が目を瞑って俯いて待っていれば、来るだろう大量の水はいつまでたつてもやってこない。

その代わりに降ってきたのはバケツをぶちまけた女子生徒の声だった。

「きゃ、きゃあああつ！」

驚いて雫が顔を上げると、そこにはぶちまけられただろう水が、雫を逸れて膜のようになりそこにあったのだ。女子生徒は何よこれとヒステリックに喚くと、個室を前に他の女子生徒達も喚きだした。

「何よ、水ぶちまけたんでしょ？」

「や、……違う！何、あれ……うそ、何なのよあれ」

腰が抜けたのだろうか、個室に乗り上げていた生徒はずりとそのままトイレの冷たい床に落ちたらしく、べちりと鈍い音が響く。

すると、落ちたのを見計らうようにして、雫を覆っていた膜がずりどまりとまるで生き物のように蠢いたのだ。

雫は声も出なかった。

水は雫の頭上を大きく跳ね上がる様にして文字通り飛んでいくと、天井すれすれまで浮かび上がり、目標目がけて凄まじい勢いで飛びこんだ。

それは凄まじい豪雨だった。

足元から覗き見える外の光景は、どんな台風か豪雨がそこに存在しているのかと言わんばかりのもので、ここが室内であることを一

瞬忘れてしまう。

バケツをひっくり返したような雨に、室内で（それも最悪なことにトイレの中の水だ）見舞われた女子生徒の集団は、金切声をあげて逃げていった。

化け物と叫ばれていたような気がするが、こんなところに無理やり押し込めた時のお前達の方が余程化け物だろうと思うような、それこそ醜い顔を浮かべていただろうに…… 雫は嘆息を零すと、これはもしかしたら義経の仕業なのだろうかとぼんやりと考えていた。

それ以外思いつかなかったからだ。

けれどそれは裏切られることになった。

「かがり、一体なんなんだい。さっきの人間達は」

雫を閉じ込めていた個室の扉が弾け飛ぶと、扉の向こうには束帯を身に付けた、全身を青で纏めた歳の頃は二十歳前後 いや、それより少し若いかもしれない、年若い男が立っていた。

事態が飲み込めず、ぼかんと大口を開けて雫が呆然とたたずんでいると、男 イオリは首を傾げて言うのだ。

「かがり……ちょっと、いや、可也縮んだ？」

全体的に膨らみも無くなったし、そもそもそこまで小さくなただだろうと不満げに言われれば、「一体貴方は誰なんですか？」との、当然の疑問はぶっ飛んだ。

それどころか雫は、この時始めて人様に手を上げたいと思った。いやもう可也本気で。

「そのままの格好でいられるとあまり嬉しくないんだけど……。なんだか童女に無体を働くようにしか見えないし。ねえ、早く元の姿に戻ってよ」

「どう……もう許せません！！死になさい！！と言っよりも殺します！天誅です！正義は我にあるのですっ！」

イオリは何故行き成り殴りかかってこられるのかも、怒気をぶつけられるのかも分からないが、兎に角これだけは言いたいと口にす
る。

所謂それは、もうこれ以上は口を噤んでおけばいいのに、と言っ
やっである。

「そんな小さい身体で僕に手が届くと思うの？本当にどうしたのか
が」

「わあああんっ！もう、もうっ！絶対に許しませんからああっ！」

29 (彼は言葉を選ばない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

29 (彼は言葉を選ばない)

義経はある意味関心していた。

「凄いなあー。今まで雫がこんなにあからさまに怒ってるのなんて見たこと無いよ」

どうやったのか詳しく聞かせて欲しいと告げる義経に、イオリは首を傾げて考え込む。

イオリとしては何もおかしなことを口にしたつもりは一切ないのだ。

イオリはゆったりとソファに身体を横たえると、サイドテーブルに置かれた水鉢に指先を入れてゆっくりとかき回し続けている。どこか水と繋がっていないとまだ不安定なのだと言うのがイオリの談なのだが、雫にはちっとも意味が分からない。

そもそも未だにイオリが何なのか、一体どこの誰なのか、それすら分からなかった。

「柔らかな膨らみがなくなったと言ったんだ。それとまあ……些か縮み過ぎているとも言ったわけだけだ」

口にしたのはそんなものかと言うイオリに、義経はそれを聞くなり途端に目を泳がせてああそういうことと納得したようだ。

それは雫の手前、なんとも返しにくい言葉だった。

当たり前だがイオリは気にした風も無く、雫に続けて言うのだ。早く元に戻れと。

ついでに彼はこうも言った。

「それだと無理だよかがり。童女のようにしか見えない。やっぱり

触れにくいんだ。ねえ、早く戻らないの？」

「またも雫が気にしていることを遠慮もなしに口にしてくるイオリに、雫はそりゃあもう腹が煮えくりかえるほどに怒りを感じた。」

「何故初対面の男にこうまでも好き勝手言われなければならぬと言っのたろうか。」

「胃がぐらぐらと煮え立つほどの怒りを覚えれば、次の瞬間、雫は柄にもなく髪を逆立て怒鳴りつけていた。」

「貴方……よくもそんな。私と貴方は初対面ですよ！？それを行き成り……もうっ！！大体、私のどこが童女ですか！もう私は十五です！もう立派に……」

「十五？」

「そ、そうです！十五歳です！」

ふんと胸を逸らしてもう十五歳なんだからと言っ雫の姿は、確実に年相応かそれ以下に彼女を見せていることだろう。

なるほどこれはいいと義経はほくそ笑むとそんな義経の心境を知つてか知らずかイオリは深いため息を落としてなお彼女の逆鱗を刺激し続ける。

子供らしくいられる時間がなく育つた雫を見るたび、せめて怒りだけでももう少し分かりやすくあらわしてくれればと常々思っていたため、これは義経としても喜ぶべきものだった。

「イオリがぼんぼんと言葉を包まずざっくりと言っため、面白いほどに雫は怒りをあらわにするのだ。それを見れば苦笑してしまう。」

「まるで雫のことを知っていて、そして更にはそれをつれいている義経のためにやってくれているのではないかとさえ思うが、これですなのだらうからあまり褒められたことではないだらう。今は義経が許しているからいいとしても、良くはないが、他の人間に対しこれをさせるわけにはいかない。はつきり言っ揉めること必死

である。

「……矢張り元の姿に戻った方がいいと思う。それではどう見ても十を数えた童女にしか見えないもの」

いや、もつと幼くしか見えないと続けられれば我慢の限界だったのだろう、雫の平手がイオリの頬に綺麗に飛んでいくと、次の瞬間にはぱんと乾いた小気味いい音が理事長室に響いていた。

「ナイスフォーム、アード、ナイスフルスイング……」

殴られたイオリはと言うと

「……凄い、人の子に殴られたのは初めてだ」

感動を覚えていたようだった。

「死になさい！死ねばいいのよ！馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！もっつ、もっつもうもっつ！お！貴方なんて大嫌いです！！」

+++

とりあえず個人面談をしてから、二人を和解させる方向に持っていきこう、そんな形で話を持っていくつもりということで、一旦雫にイオリの意見も聞くから隣の部屋にと席を外すよう促した。けれど雫は義経のこの言葉を受けるなり、当たり前ですと、隣になんていられるはずありませんと告げるなり足音も荒く席を立っていつてしまったのだ。

それを見送る二人はと言うと、

「小さなかりは可愛らしいな、それにしてもどうしてあんな小さな姿でいるんだろう？小さいと色々面倒なのに」

つい先日まで童の姿でいたからだろうか、その言葉には「もう二度とあんな姿になりたくはない」と言う、切々としたまでの訴えが混ざっているようだ。

そしてこればかりは冗談ではないと言いたいが、義経に君があんな姿に変えたのかと言わんばかりの疑わしい目を向けてきている。

これには流石に参った。

下手に冗談で「そうだ」とでも答えてしまえばその瞬間、何をされるか分からない。

あれはつい先日のことなのだ、イオリが二人を連れて一瞬で数百キロと言う距離を移動して見せたのは。そのような力を見せつけられてなお、逆らったりからかったり出来るわけもない。

義経は警戒を解いてくれということなのか、両手を上げて僕はそんなことはしていないと告げると、無条件降伏を誓った。

「好きにしていよいよ。頭の中を読んでもいい。だから僕のことを疑われても困るんだよ……それで何かされても、こっちは手の出しようがないってほんとに身にしてみて分かってるんだからさ。脅かさなくてもいいよ。そんな馬鹿なことなんてしないから。ほら、どうぞ？」

これを受けてそこに確かに嘘は無いと感じたのか、けれどイオリは水鉢に触れていなかった方の指を突きだすと、そのまま義経の額に触れた。

指と額からはぼたぼたと水が滴りを見せている。

イオリは義経の額に円を描くと、円の中央に指をとんと突いて言

う。

「嘘はついてなさそうだけど、何故かがりがああなのかだけでも…
…見たい」

見るとは一体どういうことなのか。

義経が内心首を傾げていると、それは唐突に起こった。額がひんやりとした冷たさを感じたのだ。ひやりとした瞬間、今度は義経の額から何かがずりりと抜き取られるような気色悪い感覚がその身を襲った。

反射的に義経がイオリの指から飛びのくと、もう終わったと淡々と告げられるのだ。

「記憶を読みとらせて貰った」

そう告げるイオリの表情はどこまでも落ち着いていて、先ほどの感覚とのギャップに戸惑う。

義経は恐る恐る額に手を触れると、そこに何かないか、調べるが、イオリが笑って言うのだ。

「別に中身を抉り取ったわけでもないのに気にし過ぎだ」

「……そっちがそう言っても、こっちはそれを信じられるほどじゃないんだ。軟な心臓しか持ちあわせがないんだ、勘弁してくれ」

そもそも何をされたか、何がされるか、それすら分からず行き成りである。これで少しも怯えない方がいっそおかしいと言うものだ。どうやら何も無いらしいと知ると義経は大きく深呼吸をひとつすると、そのままイオリに尋ねた。じつとりと嫌という程かいた背中の汗は、未だに消えない。

「それで？記憶を見た感想は？」

「……信じられないのが半分。けど、道理でかがりが僕のことを知らない風に見えたわけだって言う、納得するのが半分と言うところ」

イオリは横たえた身体を起こすと、ソファの上に胡坐をかいた。

「さて、どうしたものかな。義経と言ったよね」

「ええ」

「義経、君はかがりと雫とを結びつけない方がいいと言う。僕もその意見に賛成だ。あの年齢であの外見だ、恐らく成長を妨げているのは何か封印を施されているのかもしれない。そうでなければかがりと雫がああまで背丈から何から何まで違つのは解せない」

それは確かに考えていたことだった。

かがりが何故ああまでも育ち、そして逆に、未だに雫は成長する兆しすら見せないのか。

義経としても、ある時期を境にびたりと成長が止まった我が子と思うとそこが一番引つ掛かるところだった。

「かか様と言ったか、その者、捕まえて問いたださねばなるまい…

…」

30 (彼女はずっと見張られていた) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

30 (彼女はずっと見張られていた)

奏が居ない、そう言われて探しに行くことになったのだが、櫻子も須賀もどうやら奏の居場所が見当もつかないらしい。

「あんなに簡単なのに、どうして分からないのでしょうか？」

そのことが、いつそ不思議だった。

雫は真つ直ぐに図書室へと向かうと、本の山に埋もれる様にしてひっそりと本を楽しんでいる図書室の主たる司書へと声をかける。

「こんにちは、申し訳ありません、奏、居ませんか？」

そう尋ねると司書はるくに雫を見もせず、脇に拳を突き落とす。途端、悲鳴が上がる。

「ひぎゃあっ！い、痛いよ！何するの瑞名瀬さん！！」

「ああ、やっぱりここでしたね。奏、二人が呼んでいます。行きま
すよ」

高い幾つもの本の山から首だけ出すと、奏は山の外にいる雫とよ
うやっと思つたと思つた瞬間に嫌そうな顔をして言うのだ。

「ええ！？まだ読み終わってないんですけど」

奏の悪い癖なのだが、一度読み始めた本はよほどのことがない限り（それこそ義経あたりに呼び出しされたりしないかぎり）最後まで読まないと気がすまないらしい。まあそれも初めて読む本に限つての話だが、どうやら手にしている本は初めて読む本らしかった。

「……あと何ページですか？」

「十ページ前後……」

「じゃあ数分で読み終わりますよね？早くしてください」

「はい……」

奏がそのまま、また山の中に消えゆくと、今度はこの積み重ねた山が気になった。

雫はため息を零すなり、司書へと告げる。これを片付けるがいいな？と。それは最早ただの宣言に過ぎないそれだったが、この図書室にどつしりと腰を下ろした司書は、如何せんその腰が重い。そして何よりこれが肝心でもあるが、雫に興味の一切がないため、この司書は話しかけても無視だった。お陰で先ほどのように自分は言った、と言う、ある種の既成事実めいたものが欲しくての宣言だ。言わないよりか、言った方がなんぼかまし、その程度の言葉だった。司書とは奏を通して知り合ったが、人には興味が無いというスタンスを貫いている人物らしく、雫もまともに相手をされたことがない。

これで図書室の運営をどうやってやっていけるのかと疑問に思うこともままあるが、なんとかなっているらしいのだ。これでどうやって？と思うがそこは色々とあるらしい。

通い詰めている生徒達の表情を見れば満足しているように見えるため、まあいいかとも思う。

雫は目の前の本をこっそりと抱えると、一冊一冊棚を調べて元の場所へと納めてくる。

「普通、司書さんと言いますと、図書室の整理はあのかたの仕事でしょ？」

何やらあべこべであるように思うが、この際致し方ないだろう。

割りきりが肝心だった。

雫は柵にほぼ全てを戻し終わるとあと一回柵へと本を運びにいけばいい程度になったところで本に取りつかれたように、まさに食い入るように本を読む二人に呆れたように言う。

「たまには足を使わないと、歩けなくなっちゃいますからね」

「……うるさい」

「だいじょぶですからおきになさらずー」

二人ともがこんな返事だ。肩を大きく落とすと、雫はその場所を後にした。

最後の本、それは大変分厚い二千ページを優に超える分厚さの本だった。

それを小さな手に持つと、雫は脚立をのぼり一番上の柵へと腕を伸ばす。

低身長が恨まれるが、ここで言っても仕方が無い。

それこそ今一番文句を言いたいことは、雫よりも四十センチ近く身長が上の奏がただらと本を読み続けている今の状態に文句を言いたい。

ぶるぶると雫がつま先立ちになって腕を伸ばすも後ちよつとと言うところで届かない。壁に手を突きどうにかこうにかとやっていたところだ。どんと最近慣れた衝撃が雫を襲う。

ただし、それは平時であればただの慣れた衝撃だっただろうが、こうして足元が脚立の上と言う、実に頼りない位置であったためにそれはまともに雫を襲った。

しまったと思った時はもう遅い。雫は柵を咄嗟に掴もうとバランスを崩した自分の身体を立て直そうと必死になった。

結果的に二次災害が起こったわけなのだが 雫の上に柵のあら

ゆる位置から本と言う本が降り注いだ。

棚もバランスを取ろうと躍りになってしがみついてくるのを受け止めるのだ。当たり前だが思い切りぐらついた。

お陰で棚は大きく揺れ、そしてその中身を雫の腕を突いた部分どころか、その棚のあらゆる部位から撒き散らしていくのだ。

そこは惨憺たる有様だった。

「うわはあ……こりゃあ酷い」

言われなくとも分かっている。雫は荒れた棚周辺にぺたりと尻を押し付けて半べそをかいていた。

「ご、御免なさい……」

「いいよいいよ。それより戻しましょう」

「はい……」

結局、雫が直ぐにも雫を先ほど押した人物を探したが、居たはずの位置には誰も居ないため、危険だろうと言う声すら発することは出来なかった。

ただ出来たのは、謝ることだけだ。

雫は棚へと一冊一冊拾いながら元の位置へと戻していくと、司書瑞名瀬が驚くことに雫の元へと寄ってきてしゃがみこみ言うのだ。

「……突き飛ばされてた」

雫は目を見張った。

目撃者がここに居たのだ。

「見て、いたんですか？」

「女、セミロング、校章から言って……二年」

人間無関心、本が世界の中心の瑞名瀬が校章まで見ていたとは驚きだ。

「……そう、ですか」

学年が上だ。

雫は本を一冊手に取ると、瑞名瀬へと頭を垂れる。

「あの、有難うございます。それと……済みません。貴重な本も多いでしょくに、これで中のページが折れていたりでもしたらと思うと本当に……」

そこから先は言葉にならなかった。

雫は俯いたままに泣きだしたいのか怒りを堪えているのか、自分でも良く分からなくなってしまった。

何なんだろう、その言葉だけが今の雫の心情をあらわしていた。

瑞名瀬はもう口を開くのも億劫なのか、けれど雫がいつになく落ち込んでいる姿に何か思うところでもあったようだ。その小さな頭にぼんと手を置くとぎこちなく頭を撫でる。

雫はあまりにも驚いたためか、普段であれば悲鳴を上げているところを、悲鳴をあげることすら忘れて見入ってしまう。

ちなみに本棚の間に二人して座っているため、物凄い近距離だ。これでどきりもしないあたり、雫の恋愛遺伝子は現在、死んでいるらしいことが分かる。

「あの……」

雫が瑞名瀬へと何故自分などを慰めようとするのかと尋ねようと

口を開いた時だ、奏からそんな二人を見て、こんな声を上げた。

「なんか僕お邪魔？」

「ひえ、そ、そんなことありませんよ!？」

瞬間にじにじと膝歩きで瑞名瀬から離れる雫。

そんな雫を気にもせず瑞名瀬はじろりと奏を睨む。

「……早くしろ」

「瑞名瀬さんは人使い荒いよね……」

その時まだ良かったのは、図書室を利用している生徒がちょうど居ない時間帯だったことと、雫を攻撃しようとする人物が、そのまま居残らなかつたことだろう。

これが先ほどどんと背を押してきた人間がいたとすれば、そのまま雫と瑞名瀬とを見てあらぬ噂を流していてもおかしくないほどに、今の二人は急接近していた。

けれど、人目は確かに無かつたかもしれないが、三人をじつと見つめる冷たい目は、確かにそこにあつた。

暗闇から覗く、それは望遠レンズだ。

じつとそのレンズを通してこれらを観察していた人物がいたことを、雫達は知らない。

31 (侵入者、あり) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

31 (侵入者、あり)

それはそれぞれがそれなりに平和に過ごしていた日のことだった。鷺宮達は優雅にティーブレイクをしていたのだが、鷺宮が急に険しい顔を作り押し黙る。

そして、ティーカップをいささか乱暴にソーサーに戻すと、迂闊だったとふいに口を開いたかと思うと苛立たしげに舌打ちをした。

「第二警戒網に引つ掛かったものがある」

と言つても、と続けられた言葉は、三日も前のことなのだがいつものものだ。随分と前のできごとである。いつにない失態に対し、義経はらしくないなと訝る様子だ。

鷺宮は警戒網に引つ掛かっていたそのデータを参照するために天眼の器と自らの目をリンクし始めた。

「鷺宮、一体何があつたんですか？」

「いや、それは……ああつと、ちよつと黙つててくれるか？俺の目に何かはまだ分らんが、引つ掛かつてるんだ……」

義経は息をひそめて鷺宮の横顔を見やる。

鷺宮の言葉を耳にすれば、澤田も塩見も途端にその目つきが厳しくなった。

それぞれ、ティーカップをソーサーに戻し、鷺宮に一気に視線が集中する。

天眼の器にリンクしていくと、周囲に配置してあつた目達が一斉に活発に動き始める。

「一体何だ？」

鷺宮は忙しくもなくものを風景をと映し続けるそれを制御し、妙に気になるそれを見つけて出した。

「これは……」

鷺宮は息を飲む。

即座に天眼の器を目の前に展開していくと、鷺宮は三人に拾った映像を見せつけて言うのだ。

「この女……先日期限切れで退職してたよな？」

期限切れとはあまり雇用に関して使わないような言葉ではあるが、それが当たり前のように鷺宮はその言葉を使用する。

「そうですね」

そう相槌を澤田はうつと、他の二人も同意を示すように首肯する。その女が退職してからもう、三日だ。

銀盆の上に映し出された女性は、冷たい眼差しで雫を、そして、千草を見ている。その手には、何やら小さなつるりと光る物体が見える。それも、注意深く見ていなければ気づかない程度の大きさのものだ。

それは、小さなカメラだった。

義経はじつくりとその女の顔を目に焼き付ける様にしてから口を開いた。

「……他には、何か、していなかったか？」

「……それが」

言い淀む鷺宮に鋭い眼差しが向けられる。

「何だ」

「送迎と……恐らく、幾つかの二人でいるシーンはやられているよ
うだ」

言葉とともに、それぞれ確認できたシーンを義経達の前に展開す
る。

幾つものシーンで彼女は雫の周辺に出てきていたようだ。その力
メラを手にとって、何をしていたかなどと推理するのは簡単過ぎた。
雫と千草だけはまだ分からないが、その女は雫と千草を盗撮し
ていたのだ。

それが雫を、もしくは千草を誘拐する目的なのか、それともこの
屋敷の情報を などの様々なことを考え、義経は怒り狂いそうだ
った。何故、そのようなゴミを屋敷の中に雇い入れたのか。
ぎりぎり歯を鳴らすと、義経は鷺宮へと怒鳴りつけた。

「何故今まで気付かなかった!」

「……申し訳御座いません、……義経様」

鋭く飛んできた叱責に対し、鷺宮は悔しげに表情を歪める。常で
あれば済まんと言い、そして義経もそれを聞いてまあ好しと、あっ
さり受け流していただろう。

けれど今はその有り得ないほどの失敗に叱責を飛ばすどころか激
昂している状態だ。下手な言葉を言えば、それこそ鷺宮であろうと
も容赦なくその拳の餌食になるだろう。

それも、ただの拳などではない。その破壊力は拳一つでも岩をも
砕く力を秘めているのだ。下手をすれば命はない。

雫をはじめとした家族達を守るために常に張り巡らされていた監
視の目。その大切な役目を、義経から信頼を持って任されていたに

もかわらざるの失態だ。それはこの美貌の主の信頼を裏切る行為だった。

義経の前に三人は跪くと深く頭を垂れる。連帯責任を問われるのは必至だと、従者達は敏感に感じ取ったのだ。

主の許しと命令を待つために跪く。

義経は憎々しげに目の前の机をだんと荒々しくも叩きつけると、拳で叩いた部分がいともあっさりと碎け散った。バランスを崩した机は、上につっていたティーカップにカトラリーにと、床にばらばらと落としながら一気に傾かせていった。儂げな陶器の割れる音が、室内に生々しく響く。

力任せに物を壊し続けたいと言う破壊衝動に、このまま身を任せてしまいたいところだが、そんなことをしたところで意味は無いだろう。身のうちに激しく渦巻く怒りを、危うい皮膚の内側でぎりぎりに押さえつける。

暗い表情で碎けた机の破片を一つ拾い上げると、そのまま握りしめる。そのままそれを手の中で粉々に、それも手の力だけで磨り潰すと、足元へとそれを塩でも撒くように撒き散らしてしまう。

低い押し殺した声で義経は言う。

「許さない……」

目の前にばらばらと降ってきたその粉末を目にすれば、三人はぞつとした。

「急ぎその女を」

見つけ出して参りますと続けようとすると、義経から罵声の如く上から浴びせられたのは純粋な怒りに染まった叫びだった。

「見つけ出すのは当たり前だ！」

「……っ！……っ、連れて参ります」

そう三人は宣言したが義経の怒りは存外強いようだ。冷たい光をともすその眼差しで、三人の部下へと告げた。

「喋れるようにしておけば、後はどうしても構わない。兎に角連れて来い。直ぐにだ」

「了解しました」

三人は一瞬にしてその場から消え失せると、影に控えていた義経の私兵達も一斉にその命を実行すべく動き出す。

義経は直ぐにも件の女を連れ戻し、先ほど撮っていたデータを取り戻せば何とかなるか、と思考に思考を重ねるが、不安は拭い去れない。

雫にどこかの手のものから、何らかの危害がこれにより及んでしまったとすれば、一体何とする？

「ああ、怖い怖い怖いよ、雫」

義経は自らをかき抱くようにするとふると身震いする。

娘を失うかもしれないという恐怖は、どうしてもぬぐい去ることは出来ない。

その目はどこまでも虚ろだった。

32 (ばらまかれた写真) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

32 (ばらまかれた写真)

降矢の名を背負うことにより、一般社会からも追われる身である降矢の血を引く雫は、六花神の家からも恐らくはそのうち、同じく追われ始める様になるのだろう。そう、今回の出来ごとで思い知った形になった。

今回の相手は　あの女の雇い主が誰かは知らないが、どうせろくな連中でないことだけは確かだ。身代金を支払ってなんとかなのであればまだいいが　いいやそうではない。そもそも奪われるなるものかという気概を抱き続けねばどうする。父である自分が諦めてはならないはずだと自身に義経は言い聞かせた。

恐らくは降矢を強請目的で孫娘とその近しい人物として千草を　と言ふことなのではと推測が経つと、自身の身に流れるその降矢の血そのものに嫌気がさした。

どうして雫にまで類が及ぶのか。

自らの守ろうとしているものは、いつか誰かに奪われてしまう。そうと知っているからこそ、必死になって守る。だが、恐らくは守り切れずいつの間にか奪われ引き裂かれ、切り刻まれる。その未来は誰から聞かされることなく分かるのだ。

悔しいが、宗一郎が母にしてきたことは正義なのだろう。それ以外義経にもどうやっても出来るはずが無い。

義経は自身の無力を感じていた。

掠れた声で笑い続け、そして義経はつぶやいた。

「雫に何かあったら……俺は、……どうするかな？」

あの女のことを。

暗い表情で天井を見上げ、そして最後に笑った。

それは狂った笑みだった。

この時義経は、雫と千草が狙われるのは降矢の名を背負うがためだと信じていた。

だがそれは間違っていた。

雫そのものが狙われていたと言うことに義経が気づくのは、これより数刻先のことだ。

そして今まさに、雫の目の前に、それは曝け出されようとしていた。

+++

校門を奏と千草と並んで歩くわけではないが、けれどある程度近くで歩いているのもそろそろ慣れた。

距離にして一メートル程。これだけの距離が開けられていれば、雫は千草と並んで歩くのも平気になってきていた。

「……なんだか昇降口の方、煩いですね」

「そうだな、また何か張り紙でもあったんじゃないのか？」

千草が無遠慮にあの時のことを持ちだして言うことに、雫は俯き加減で返さない。それでも雫の手は微かに震えていた。それを見咎めた奏が雫の手を取ると、安心してくださいとも言うのか、その手を軽くだが、力を込めて握ってくる。それを受けて雫は奏に微笑みを浮かべて見せた。

「ありがとう」

「いいえー。さ、行きましようねー」

「はい」

どちらが雫の許嫁なんだか分からない構図だった。

昇降口へと近づきつつあったところで、三人の前　いや、雫の
前に立ちはだかるものがあつた。

「ちょっと、お待ちなさいな」

「あの……何か？」

執行部設立よりこつち、ずっと校内にて生徒達から居ない者として扱われてきた雫だけに、声をかけられたということではなく、この前を塞ぐと言う行動自体に驚きを見せた。

雫の目の前に立つのは美しいといって差し支えない少女が三人だ。けれどその美しさは少々、人工的な美しさに見える。

雫が美しくふわりと咲き誇るのを待ちのぞんでいる蕾のように、飽く迄も自然に大輪の薔薇として咲き誇るのを待っているように見えるのに対し、少女達は全身をくまなく磨き上げ、年齢にしては過度に見えるほどの化粧まで施しているのだ。これを人工的と言わず何と言うのか。

矢鱈と年齢からするとけばけばしい印象を与える少女達に、奏はうわあと思わず口にしてしまった。

そのうちに咲き誇るだろう姿を待ち遠しく思える雫を見て、そして千草は目の前の少女三人を次に見つめると、内心で気色悪いと吐き捨てた。

あの女みたいだ……

どこか作られたような美しさを持つ少女達は、雫と千草を順に一瞥すると、ふんと鼻を鳴らして言うのだ。

「並んでくるってことは、あれ、本当なのですね」
「本当……とは一体？あの、一体何の事を……？」

雫を睨み据えつつ言われた言葉に困惑しながら返すものの、それに返す言葉は無いと言うことや、行き成り少女達が迫ってきたかと思えば、ぐいと無理やりに襟首をひっ捕まえられ引きずられるようにして連れていかれてしまう。

これには流石に呆気にとられてしまった。

だが、雫が痛い離してくれと訴えるのを耳にして我に返る。

「……お、おい！君達っ！」

「雫お嬢様に何をするんですか！」

突然のことに二人とも反応が出来ないでいたのをいいことに、少女達はずんずんと前へ足を進めていく。すると、潮が引くように目の前から人垣が割れていくのだ。

奇妙なほどにそれはデジャブを感じる光景だった。

靴のまま廊下まで引きずられていくと、そのまま壁に叩きつけられるようにして放り投げられる。軽すぎる体重の所為で雫は廊下に投げ出されごろりと地面で一回転して壁で止まった。

脳がぐにやりと歪んだように感じる。

「う、ううん……」

呻き声をあげて雫が床から上体を起こすと、雫を囲むようにして沢山の少女達が居た。

その顔は全て、恐ろしいと感じるまでに怒気を帯びたものだった。

「返しなさいよ……」

「……何を」

主語が無いことで言葉の意味が分からないと困惑して返すと、ふいにその言葉に触発されたように一人の少女が雫の肩に拳を突き入れてくる勢いで肩を掴み、そのまま壁に叩きつけてきた。

「あうっ！」

ぎりぎりと言葉に押し付けられる場所が痛む。雫はこんなことを朝からされる意味が分からないと戸惑いしかない。だが、その戸惑いは取り繕うものでしかないと決めつける様に少女達は言うのだ。

「この女狐！カマトトぶるのはやめなさいよ！」

「最低ですわ。一人何も知らない聖女のような顔をして、……そのくせ裏ではあのような」

「汚い雌猫」

罵られるだけ罵られると、雫の脳はすうつと冷えてきた。

ああ、今までは静かにイジメなど、この六花学園の名にしおう名家の自分がやるわけではないではないか。そのようにしてきたのが、今度は直接的に攻撃と言う形のものに変化したのか、それくらいにしか雫は思わなかった。

名家の子息子女であるものが八割の生徒数を誇るだけあり、イジメなど恥だと表だってやらなかっただけ、まだいい方だと考えていたが、どうやらこれは直接的なものに切り替わったと見た方がいいだろう。

ある意味ではこう言う方がやりやすい。見て分かりやすいだけ楽だった。

屋敷でも最初はただの無視から始まり、こちらがどうでもいいと感情さえも何一つ動かなくなり、麻痺したようになってしまえば次

に始まったのは直接的な攻撃だったと思い出す。

これも同じかと、心のどこか冷えたところで思っていると、千草が雫の肩を掴む手を、へし折る勢いで掴みあげた。途端引き攣れた悲鳴が上がる。

山のようにいる生徒達を押しつけてここまで来たためか、その息は上がっていた。

みしみしと骨同士が擦れる嫌な音がする。

「この手を、離して貰おうか」

「い、痛っ……高遠、会長……」

引きつった顔で少女は千草を見て、一瞬、媚びるような目をしたが、千草の目には強い怒りしか見えない。それを見た途端、少女は雫を何故か睨みつけ、直ぐに雫を掴んでいた手を引っ込めた。

雫は奏に助け起こされると、冷えた眼差しで少女達と向かい合う。千草はそんな雫を背に庇うように立つと、どういふことかと少女へと詰問した。

いや、少女達へと問いただしたの間違いだろう。

「い、嫌ですわ。私は降矢さんとお話があったのに」

痛む手を擦りながら引きつる笑みを浮かべて言う少女に、千草は感情の籠らない声で言う。

「話し合いには見えなかったが？」

「いいえ、降矢さんと話し中でした。ねえ、そうでしょう降矢さん？」

千草に媚びるように笑う少女は、雫へと顔を向け話を会わせるとでも言うのか強い視線で睨みつけてきた。けれど、どうしてそんな

話にあわせねばならないと言うのか。雫は冷えた視線のまま、「話し合いではなく、単に暴力をふるわれました」とだけ、淡々と告げた。

「唐突にここまで引きずってこられ、そして壁に叩きつけられました」

その上肩を力一杯掴みあげられたわけなのですが、どうせ痣が出来てしまっているでしょうから見ますかと千草へと口にされれば少女はそれ以上は言わせてなるものかとばかりに声を大にして叫ぶ。

「っ!!そ、そんなことはしていません!」

「いいえ、されました。これだけの衆人環視の前でしてくれたと言うのに、よもや忘れろと?無かったことにしろとおっしゃる?ああでも、皆様お友達でいらっしやるようですから、身内を庇うような真似をなさる可能性もありますね」

どうやら怒りにまかせてこうしたことをしでかしたらしいと知ると、雫は笑いしか浮かんでこなかった。

昨日までは随分と徹底して証拠が残らないようにやってきたというのに、今日から始まったイジメはどうやら大変お粗末なものらしいと思った。

千草もこれに首肯すると「確かに引きずっていったな。俺も見た」と言い、少女達にどういふことかと詰め寄った。

千草が詰問を何度か繰り返すと、それまで黙っていた少女達を庇うように声を張り上げた少女が居た。

どういふことなのか、それは雫の前ではこしばらくは静かにしていたはずの山田だった。

いつのことだったか、食事中に邪魔をされたことを思い出してまたか、と雫は軽く息を吐き出す。

「高遠会長と降矢さんが不適切な間柄なのが悪いのではなくて？」

少女達が血迷って雫へと手をあげたのはそれが理由だと告げる山田に、雫は首を傾げる。どういふことなのか。

それをどつとつたのか、山田は含み笑いを浮かべると、二人の姿をちらと見つめ、更には奏までを見て言うのだ。

「矢張り高遠会長が降矢さんを庇うのは、そういつた間柄だから、でしょうか？」

勿体ぶつたような粘着質な話し方に雫は眉をよせる。

「山田さん？」

「貴方達、後ろの張り紙、ご覧になりました？」

山田に背後に張り出されている紙を読んでから皆さんとは話しをするべきではと言われると、三人は訝るような目を向けるものの、それでも一応と背後を振り返り読んでみることにした。

そこに張り出されたのは、千草と雫のプライベートショットであった。

「何ですか、これは」

「ふふ……『不純！婚姻の約束もない男性を自宅へ！降矢邸元使用人の証言。二人はすでに同棲中。降矢雫、学校生活のみならず、私生活でも権力行使！同じ寝室で就寝も！』……ですって」

にやりと山田のいやらしい笑みが目の前にあるわけでもないのに、声を聞くだけで脳裏に浮かんできた。山田は嬉しそうにこの張り紙

に書きだされた言葉を読みあげているのだろうと思うと、逆に頭が痛かった。

愚か者も、ここまで極まるといっそただただ痛々しいだけだ。

「そう言えば…… 雫お嬢様、先日、使用人が一人辞めましたか……」

そうだ、三年の期限が切れたという理由つきではあるが、一人辞めたかと思いだすと雫はあの方ですかと苦笑して言う。

確かに彼女ならば千草とのプライベート空間など、直ぐにも撮影が可能だろう。そして今現在勤めている人間がやったにはお粗末すぎる。跡が必ず残ってしまうようなことをして、逃れられると本気で思っていたのだろうか。

何となくあの時だろうかとぼんやりと思いだす事が出来た時、雫の頭の中はすっきりしてきた。

ただ、問題は写真だけで彼女が屋敷を後にしたのか、それが問題である。

お父様達の方へは何も余波はいつていないと見るべきでしょうか。それだけが分からなかった。

32 (ばらまかれた写真) (後書き)

ちよつとここら辺から一気に進んでいくかと思いますが、ついてきていただければ幸いです。

33 (追及は止まない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

33 (追及は止まない)

六花神の秘密へと辿りつかれてはならないため、三年の区切りを設けているものの、それでもたった三年でも秘密へと辿りつくものもいる。

二人のプライベートだけが撮られたのか、それとも他にもそう考えるとぞっとする。

兎に角、少女達が騒いでいる理由、その元がこれらしいことは分かっていたものの、これだけなのは分からないものの、良く意味が分からなかった。

それは千草も同じようで

「……おい」

「はい」

「何でこれで俺ではなくお前が何か言われるんだ？」

そもそも権力行使と言われても、千草が権力を行使されたわけではなく、単に親と宗一郎との約束ごとがそのまま千草へと適用されただけだ。

千草は元よりもこの件については部外者であり、当事者であると思っっている。

親同士（片方が親では無くその上の祖父という肩書ではあるが）の約束が適用されることはこういった上流階級層ではままたることではないのか。それも、婚姻などに及ぶ約束事はそれこそ当たり前前にされてきているはずだろうにと思う。

千草が雫へとどういふことなのかと説明を求めると、雫だって分からない。そもそも雫はあれの妻になる身、としか説明を受けていない。あれとは言わずもがな千草ではあるが、それは二人の間では当たり前のようにある事実である。

だからこそ、それ以上のことを知り様もないのだ。

そしてこれが肝心ではあるが、どうしてこの話を当事者以外の人間がやいのやいのと言うのか、そのことが理解出来なかった。

「……よくは分かりませんが、とりあえずここに書きだされていることから察するに、不潔であると思われるのではないのでしょうか？ 婚前交渉をしていると言うことでは？」

「いや……一応は別に許嫁なんだからいいんじゃないのか？ それがあつたとしても」

「そういう言い方は誤解を招くよ二人とも」

奏がため息をつく。

実際は健全にも、雫が体調を崩してからと言うもの、ずっとこの三人で同じ部屋で就寝となつているため、そのようなことは一度たりとて無いのだが。

三人とは、雫、千草、奏の三人である。

雫の熱が下がつたとなつた日、奏は意気揚々と肩の荷が下りた、早々に自室でだらだらと過ごしてやるぞと引つ込む予定だったのだ。そこに義経が背後へとすつと立つとぽんと肩に手をおいて一言。

「簡易寝台、そのまま使つていいから」

「……は？」

「明日からもそのまま、あそこで過ごすように」

「え、義経様？」

到底信じられないことを口にする主に奏は慌てて振り仰ぐと、そこには満面の笑顔を浮かべた義経が居て　けれど、その目だけが完全に笑っていないのを見てぞつとした。

逆らつたら確実に殺される。

義経は笑顔で奏に更に続けていう。

「あのクソガキが何か事へとしたら、即座に殺して貰っていいから」

そして手渡されたのは刀である。「わあ、重い」なんて場にそぐわないほどの明るい声で口にしたものの、内心では「助けてお父さん！」である。何て精神的にも肉体的にも対ひね重いものを気軽に渡してくれるのだこの馬鹿親はと思ったものの、それは今更いつたところでどうしようもない。

「あの、僕……犯罪者になんて……」

なれないと告げようとするも、義経は短く何の根拠もないようなことを言ってくれる。

「大丈夫」

「いやその、人なんて殺せな」

「大丈夫」

「いやだからその」

「大丈夫」

「あの」

「大丈夫」

大丈夫しか口にしない義経に対し、最終的に奏は「分かりました……」の一言を口にせざるを得なかった。

そういう背景があり三人で寝ているのだが、どうやらそのことは情報外らしい。

それを知れば事は少し考え込む様な顔をしてみせる。

つまりは……そのことを知らされないような位置に働いていた人物、ですよね。

だとすると、先日辞めたばかりの人物ではないのかもしれない。栗が最初にあたりをつけた人物とは、今度は違った人物が脳裏をかすめたのだ。

矢張り、そのためにちよくちよくと来るようになったのかとエマのことを思い出して歯ぎしりする。

「言われの無いことではあるんだが、さて、どうするべきか」

栗はこの言葉に肩を竦めると、ざっくりと切り捨てるような鋭さでいう。

「こんなとき女性は不便ですよね。知っていますか？男性の場合は数をこなしておくべしと言うそうです」

そういった事柄のですがと付け加える栗に対し、男二人は一瞬耳を疑った。あの栗の口から何が飛び出た？

「あの、栗お嬢様？」

この人凄いことを言いだしてしまったよと奏は慌てるが、千草も栗も真剣に話し合っていて、奏のことなど眼中に無さそうだ。声さえ聞こえていないに違いない。

「けれど女性の場合は始めてであることを責ばれる。無理やり奪われることすら許されないそうです。ねえおかしいですよ、女性の方が圧倒的に力では敵わないというのに。これは差別だとは思いませんか？」

「いやまあなんだ、確かに差別だとは思う。けどなあ……俺もこれ差別受けてると思うぞ」

「どこらへんがどのようによ？」

「俺がこれだとまるで、ヒモのようだとは思わないか？流石にどうかと思う……」

写真を見て、そしてスポーツ紙か週刊誌のようなあおり文句を見て、千草は深くため息を吐きだした。

まるで高遠の家が降矢の家に、息子を金で売り払ったように書かれているのだ。

流石の千草もこれには多少なりと不快な表情をしてみせた。

「……嫌がるのはそこだけなんだ」

千草も雫も一頻りああでもないこうでもない周囲を置き去りにして話合った結果、少女達及び山田へところ告げた。

「一応私共は許嫁と言う間柄ですので、お気づかいなく」

「そもそも高遠の家と降矢の御大が決めた事に、君たちが何故怒りを覚えるのか全く分からないんだが……兎に角、彼女への暴行はきちんと謝罪して貰おうか」

堂々たるこの物言いに對し、周囲はざわついた。張り紙にあるように、写真で常に一緒にいる二人の姿だけではなく、許嫁と交わす間柄、と言うのは周囲の生徒達にとってみれば初耳である。

だが、この言葉にも怯まないのは山田だ。

山田もその事実は知らなかったようではあるが続けた。ある意味あっぱれな精神であると言えよう。

「許嫁であろうとも、婚約者としてお披露目も済ませていないでは

ありませんの。例え許嫁であろうとも、披露すらしていないのでは、それは単なる口約束だけの間柄。それこそ親同士が単に言っているだけに過ぎない間柄なだけでしょう？それなのに高遠会長を自室へと引つ張りこんで毎日のように二人で寝ているそうですわね。不潔ですわ。汚らわしい！！」

知っていますのよとふんぞり返って言われると、雫は千草と奏に小さな声で尋ねてみた。

「あの、これって奏も一緒に寝てますって言うべきですか？」

「悪化するから止めて」

ついでに巻き込んで欲しくないと奏は思わず顔を覆う。

僕はただの一般人ですと小さくなっている奏に、雫が微笑みかける。

「降矢で暮らしているのですから何を今更」

容赦ない。

可哀想にと思ったわけではないだろうが、千草が助け舟を奏へと寄越す。ただ、それが助けになっているかは甚だ疑問ではあるが。

「むしろこいつがいたたまれないだけだと思っが？」

「そうですか……」

「きちんと人の話は聞きなさい！！」

三人で話しているのがばれたようだ。むつと三人は唸ると声を揃えてまあいいから早く続けると告げる。開き直ったものが勝つ、と言うことだろうか。実に悪びれない三人である。

「矢張り執行部立ちあげも親の助力あつてのものですか？学園の私物化、更には高遠会長までだなんて……最低ですわね。どうやっておねだりしたのかしら？宗一郎氏に高遠会長が欲しいとでも言ったのかしら？おお嫌だ。しかも高遠会長と親同士が決めた許嫁という間柄であると言つものにも関わらずに、どうしてどうして……最近降矢さん、成瀬副会長とも仲が宜しいそうではありませんか？」

何やら話がおかしな方向へと飛んできたなと雫は首を傾げるも、向こうは完全に正当なのは自分であるとばかりに続けていく。

確かに健とは最近仲がいいが、どうやら相手方は誤解をしているらしい。

雫は二人へとまたぼそりと尋ねた。

「あの、成瀬さんと仲がいいと言つのは、彼女に対して何か不利益をもたらすことなのでしょうか？」

雫が仲がいいのが嫌だと言つのであれば、山田も仲が良くなればいいとも思うし、それだけではなく千草と健と二人ともに仲がいいのが羨ましいのであれば、ならば友人に立候補すればいいと思うのだ。

実に不可解なことである、雫は本気でそう思っていた。

それは千草も同じようだ。

「なんかあんじゃねえの？良く分かんが」

「嫉妬でしょ？うざいなあ」

雫はこれには分からないので、曖昧に頷いて終わった。

「はあ……そういうものですか」

「だから、人の話を聞きなさいと言っているのです！」

つかつかと山田は雲を通り過ぎて写真が張り出された壁まで行く
と、壁を強く叩きつけて言う。

「これを見まして？」

33 (追及は止まない) (後書き)

物凄く本人達だけのほほんですが。
追及が続きます。

34 (これはキスなどではない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

34 (これはキスなどではない)

雫は背後へと振り仰ぐと、そこには矢張り写真がある。先ほど見た千草とのツーショット以外の写真だ。

そこには、健との先日の保健室での二人きりの治療シーンのショット、そして奏との親しげなじゃれあいのショット、瑞名瀬との親密そうに見えるショットが貼り付けられているのだが、雫は全てを見ると、ぽかんとした。

いつの間に撮ったと言うのか、その全ては盗撮のようだった。

「千草のものもそうですが、これもいつの間に撮ったのでしょうか……」

全てのショットに雫は、それこそ思い当たる節どころか、身に覚えがたつぷりあった。

どの写真も際どいシーンに見えるように角度を調整して写しているのが嫌らしいところだが、それこそ今さらだ。

呆れたように雫は言う。

「保健室で足を治療していただいたところ、それと奏とのじゃれるところですよねこれ。それと、瑞名瀬氏に忠告を受けている時のシーンですが、角度が違うだけでこれだと熱く見つめ合っているように見えるから不思議です……」

実際は色気の欠片もないところだったし、雫はその前に怪我をするところだったわけで、色気など皆無なのにそれが全く伝わってこない写真にはあと溜息を吐きだす。

なるほど、真実はこうしてマスコミなどに消され、誤解を生む様なものをねつ造されるのですねと雫が悲しそうにつぶやくと、今こ

ここでそういう答えでいいのだろうかと思はばんやりと思った。的を射ているようで射ていないような、何だかとても間んでいるだけで居心地が悪くなる空間である。

「何を言ってるらっしゃるの？写真が全て真実を物語っているじゃないの！ほんっと……降矢さん、貴女は昔からそうでしたわね。男を誘うのがお上手で……相変わらずのことだと思いましたわ」

突然何を口にするのかと雫が怪訝そうな表情を浮かべると、山田はにやりと笑ってこう言った。

「一昨年のことでしたわよね、生徒会室で……組み敷かれた貴女は……ふふ、本当に、最低」

瞬間、雫は足元ががらがらと音を立てて崩れ落ちた気がした。

山田は知っているのだ、あの時のことを。

鍵をしめたはずの記憶の扉がかちやりと音をたてた。噴出す悪夢が彼女を襲う。

ふいに足元が定まらなくなったように、雫は膝をがくがくと震わせ始めた。

奏ははっと雫を見る。

「やめ、て……」

知らず雫は自分の手を耳の方へとやる。もう聞きたくない。けれどそれは、雫の聴覚に無理やりに侵入してくる。

「男を誑かす嫌な女……ねえ、ほんと貴女って最低なのね」

山田の囁きに被さる様にそれは雫の記憶の底から蘇る。

『ずっとずっと君のことが好きだった……』

『君も、期待していたんだろ？』

生温かい空気が首筋をなでたような感覚がして、思わず雫はそこを押さえた。

山田が雫の目の前で、勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。

ぐらぐらと頭の芯が揺れ始める。

『止めてくださいっ』

一度そう叫んだ、叫べた、と思う。だが、次の瞬間雫の華奢な身体は横に吹き飛ばされた。

何気なく振るわれたように見えた平手が、雫の身体を押さえつけられた机の上からたたき落としたのだ。

初めて振るわれた暴力に、雫はぶるぶると恐ろしさに震えていた。何が起こったのか分からなかった。

ただ、雫にその時理解出来たのは、抵抗すればまた殴られると言うことだ。

怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い。

その時のことが一気にフラッシュバックしてくる。襟を寛げられた。

『大丈夫、優しくするから』

息遣いが気色悪くて吐き気がした。

嫌だと頭を振ると、また平手が飛んできた。

そして少年の手が雫の身体を這いまわり

「ひゅっ……ひっ……っ」

雫はもう、完全なパニックを起こしていた。

ひゅうひゅうと呼吸を吸い続けるだけで、雫は吐き出す事を忘れてしまっているようだった。

「お嬢様っ」

奏の自分を呼ぶ声も耳に入らない。自分を抱く手の熱にフラッシュバックを起こした雫は強い拒絶を示した。息が苦しい。

呼吸の仕方すら思い出せない。

何をどうすれば息を吐き出せるのか分からず、雫は混乱をきたした脳を抱え、山田の声も最早耳に入っていないようだった。

「っ……はっ……っあっ」

俯き、まるで陸に打ちあげられた魚のように口をぱくぱくと開き、自分を抱きしめる雫を見て、山田はさも愉快そうに笑った。

「本当に最低。生徒会室で貴女、一体あの時何をなさっていたのかしら？ねえ」

くすくすと笑い続け山田は更にあの時の記憶を揺さぶる言葉を投げつける。

恐慌状態に陥った雫のことなど知ろうともせずに、多少具合が悪いのか程度の認知なのだろうか、山田は俯いて呼吸を吸い続けるだけの雫の襟ぐりを掴みあげて引き立たせる。

触れてくる他人の手に、雫は小さくひっと悲鳴をあげ拒絶しよう

とするが、山田は信じられないほどの力で雫を掴んで放さない。

「この 売女」

その冷たい抑揚をわざと抑えた言葉に周囲の女生徒達は身を震わせた。そして一時の激情が嘘のように目の前の異様な光景にそつと身を引く。それほどに山田の行動は異様だった。

女生徒達を引かせるほどの言葉はしかし、雫の耳に届いたのかは怪しい。

山田の言葉とそして引き立てられた雫の尋常でない様子に気づいた千草は山田の手から無理やり雫を取り戻す。

すると千草は直ぐに雫が過呼吸を起こしていることに気付いた。

すぐに処置をしなければと思うが、山田が煩い。千草が雫を奪うようにして取りあげた事が気に入らないようだ。

だが、そんなことを今いつている場合でないことに、何故気付かないのか。

千草は煩く喚き立て始めた山田に一喝して黙らせた。

「黙れ馬鹿がつ！相手は呼吸困難を起こしてるのが見て分からないかつー！！」

「……ッ！……」

千草はどこを見つめているのか分からない雫に、ゆっくりと呼吸を元に戻すよう呼び掛けるが、雫は一向に元の状態に戻らない。すでに周囲の言葉すら耳に入らないほどのパニックを起こしているのだ。

ちつと舌打ちを打つと、千草は奏へと何か袋状の物はと尋ねた。

このままだと過呼吸により救急搬送しなければならぬレベルになるだろう。その前に処置が出来ればと言うことだったが、奏は生憎と、そのようなものは持ちあわせになかった。歯を食いしばり首を

ふる。

「ごめん、無い」

千草はひゅうひゅうと息を吸い続けて涙を浮かべ始めた雫を一瞥すると、その目を片手でそっと覆い自身に言い訳をして深呼吸した。

これは、違う。人命救助だ。

キスなんかじゃ……ない。

35 (爆発) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

周囲がざわつくのが分かったが、重ね合わせた唇の柔らかさに暫し千草は酔い痴れた。

相手は過換気症候群をおこしている、ただの病人だと言うのに、心のどこかでやっと触れられたと感じているのだから拙い。

千草の心の中には、櫻子も、先日あのような場所で突然の出会いのあった少女もまだ、居ると言うのに。

そこまで考えていいや違うと内心で頭を振った。

これはそうだ、違う。キスそのものにだ。相手が雫であろうとなかろうと、そうに違いない。いや、千草はそう思いこみたかった。

それはそれで確かに最低かもしれないが、それでも千草は雫のことが気になる存在であるとは認められなかった。

長年憎み続けてきただけに、それは己の矜持が許さない。

胸が漸くゆっくりと上下し始めたのを確認すると、ゆっくりと千草は唇を離していく。

そして慎重に目の上に被せてあった手のひらを取り払うと、雫の様子を観察し始めた。

目を見開き驚きに身を震わせているが雫の瞳には理性が戻ってきている。

「もう、大丈夫だな？」

その手首を取ると脈が安定しているかをてきばきと調べ、そして乱れた衣服を整えてやるように奏へと指示すると、山田へと向き直って千草はそのでかい頭は飾りかと吠えた。

雫が自身に怯えてまたも過呼吸に陥っても困るため、千草は雫から身体を離すとそのまま一步、山田へと距離を詰めて間近で睨み据

えてやる。

「人の過去を土足で踏み荒らして、あまつさえ相手が死ぬかも知れなくなってる状態で、なお、お前は何を口にした」

あまりの千草の迫力に、生徒達は一斉にたじろいだ。

「何を……」

「過換気症候群、またの名を、過呼吸症候群。精神的に不安定になると呼吸を正常に出来なくなる病気だな。あいつが呼吸を上手く出来なくなつて俯いていた時にお前は一体何をした？」

「……何って」

「無理やり顔を上げさせるために襟を掴みあげて更に過去の出来事をあげつらい、あいつにその記憶を呼び起こすことで過呼吸を起こさせた。それもあいつは止めてくれと言っていた」

「……」

「過呼吸はな、心臓発作を併発して、死ぬこともあるんだよ。お前、あいつが死んだらどうするつもりだった？」

「……そんなこと」

飽く迄も起こりうることであり、確実に心臓発作が起こりうるかと言われれば違はずだろう、そう言おうとする山田をびしゃりと千草は切り捨てる。

「どうするつもりだったかと聞いている。普通科棟普通科一年Aクラス所属、山田ジュリ。お前のしたことは一人の生徒を死に至らしめるかもしれないかった、重大な過失である。それでもなお言い訳をするつもりか」

そこまで口にされてしまえば山田は悔しげに顔を歪めて唇を噛み

しめる。

どちらが正しいことを言っているかなど、周囲の目にも明らかだった。

+++

雫は呼吸が元に戻ると何が起きたのか、一部記憶が欠如しているものの、フル回転で脳みそを使い状況を整理していった。

山田はここでどうにかしなければならぬ、あの、雫にとって忌まわしい過去を知っているのだから。

兎に角どこでそれを知りえたかは知らないが、生徒達を使い、今まさに学園を牛耳っているらしい状況はどうにかしなければならぬだろう。下手をすれば学園の頂点に立っているようなこの状況で、雫のあの過去をばらまかれてしまうかもしれない。それは避けなければならぬのだから。

雫は奏に大丈夫かと不安げに見つめられるが大丈夫だと返し弱弱しく笑みを返して見せた。

今は、倒れているわけにはいかない。

どうやら山田に過去について言われてから記憶が多少抜けているらしいと知ったが、そんなことよりも雫は気になることがあった。

「奏、あの写真のあの時……私達の傍には誰がいましたか？」

「誰……誰って言うと……多分、あの……女の人」

本を読んでいる時に撮られた写真は、奏にとっては誤算中の誤算だった。

奏は瞬間的にその場で起こった出来事を、写真で切り抜いたように録画したビデオで撮り終えたもののようにその全てを思い出す事が出来るが、一つだけ例外がある。

それは、完全に自己の殻にこもり外界と自身とを隔絶してしまう瞬間　読書中と絵描き中である。

絵を描いている時は食べることも忘れ、寝ることも忘れ、自分にある体力の在庫すら忘れて描き切ると、最終的にその場にぶっ倒れるのだ。そしてその後はこんこんと寝続けてしまふ。実に非人間的ではあるが、奏とはそういう人間なのだ。

そして読書中、瑞名瀬も大概似たようなものではあるが、奏は読んでいる時に視界に何が入っても活字しか思い出せないし記憶になくなる。目に入らないのだ。

その時のたつた一つの例外が雫だ。

雫だけが奏の視界に映りこめるし他の誰も真似できないことだった。

だから写真に写されている当時、雫のことは記憶しているが、誰が居たかと言われると記憶があやふやだ。

確か女の人がいたように思う、その程度の認識しかなかった。

雫は壁にもう一度視線を戻すと押し黙る。

この写真、これを誰が用意したか、それこそが必要な情報だった。

「　これ、たぶんですけど、雫お嬢様の写真だけじゃないですよね、確実に」

「と言つと?」

「いや……何て言うか、逆にここまで義経様や鷲宮さん達が写り込んでないってことは、個人個人で別個で撮っていると解釈したほうがいい気がする」

確かにそうだ、そう考えると分かりやすい。

屋敷の中では雫、千草、奏の三人しかここには張り出されていない

い。それも確かに雫の記憶している限りでも、この写真に写されているだろう時間帯に場所では、義経を含めるあの屋敷の住人たちは通らない場所であり、通らない時間帯に撮りおろしているように思える。

だとするとそれこそ、他の住人の細かな挙動までを熟知していると考えるのが妥当だろう。

「完全に誰がどこに居て、どこに何時くらいに現れる　そこまで知っている人間じゃないところまで他人が写りこまない時間帯に撮れないと思う。なんだかんだ言いつつも雫お嬢様の周囲には義経様の部下がべったり張り付いてるからね。それがなるべく避ける時間帯を選ばないといけない」

「私はその方達とは見識が全くないので分かりませんが、確かに誰かの気配がして、安心させて貰うことはあります」

一度ああいうことがあってからと言うもの、雫は一人が不安で仕方なくなってしまうことがままある。するとそれを知っている義経は、配下の者に時々そういう時は気配を分からせて安心させてやるように言い含めていたようなのだ。

そういった人間も、奏や鷲宮など、義経以外でも雫の気心が知れたものが傍にいる場合は遠慮をしてか傍には居なくなる。

相手はそれを知っているのだ。

となると、それこそ益々怪しい。

「考えたくはありませんが、屋敷の中の住人の、その全ての位置を常に把握していた？」

使用人まで把握してあったとするならば、そう考えればこの写真は何とか撮れるという結論に達すると、雫は次の瞬間、煮えるような怒りを覚えた。

「お父様が、危ない」

途端に先ほどまで雫を縛りつけていた見えない呪縛は弾け飛ぶ。倒れて間もないためだろう、雫の身体には見えない重しがどつと乗っているように思えた。けれど今それが瞬間的に吹き飛んでしまったのだ。

今雫を支配するのは雫を組み敷いたあの男ではない。煮え滾る程の怒りだ。

先日辞めたばかりの人物、兎に角その人物が一番怪しいのは間違いなかった。

あの人だ、そう確信が頭の中に閃いた瞬間、雫は奏を伴い三人を取り囲む生徒の群れをかきわけ駆けだした。

「お、おい！」

「千草、お父様達が危険です！早く戻らなくてはいけません！」

35 (爆発) (後書き)

心の中で、爆発したんですけれど、なんだか思い浮かばなかったの
でこうなりました。

人のことじゃないと怒れない子。

自分のことで怒れないから損ばかりする。

36 (1)から入んで終わりにしよう) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

36 (11) 入らへんで終わりにしよう

千草を置いて二人は走り出す。それに続いて千草は慌てて駆けだした。

これを撮ることが出来ただ一人の人物に思い当たると、雫は直ぐに自らの大切な物 家族に類が及ぶことを恐れたと同時に、腹が立った。

そしてそれは、容易に雫の中に潜む、ため込み続けた怒りに結びついた。

「どこへ行くんだ！」

「逃げるんですの!？」

逃走するつもりかと山田のそばからは多少離れていた生徒達が喚くのも構わず、雫は人の間を縫って行く。

けれどふと言い忘れていたことを思い出したらしく、途中雫は振り返るところ山田へと返した。

「貴女が降矢邸の中の者を買収して、その写真をでっち上げたまでは構いませんが、早く行かなければ、彼女はもう解雇されています。私は彼女を早く見つけ出さなければいけません。ですからこれは逃げるわけではありません、証人の確保に赴くのです」

「証人？」

どういうことかと訝しむ生徒達は山田と雫とを交互に見ている。

大体、写真をでっち上げたとはどういうことかと山田へと詰め寄るまではいかないものの、皆目で問うていた。どういうことだ、これはと。

雫はもう、これをでっち上げたことだとするしか方法は無かった。

その写真が真実を写したものであったとしても、中身を映しては
いないからだ。けれどそれは、見る者には分からない。ならば誤解
を生む様な写真をつくられたのだ。そうしてしまった方がいい。
つくりあげられたそれを提示されてこんなことをされるのは不愉
快だ、そんな態度を隠す事も無く雫は全面に押し出した。

そもそも、降矢邸の中に山田が介入してきた時点でこちらの思っ
つぼだ。それこそ、煮るなり焼くなり好きに出来る。

それこそ、もう何ら止め置く必要はないのだから。

法に訴えることすら出来るのだ、人を巻き込んでなお続けられて
いく嫌がらせに、いい加減にこころへんで終止符を打ってやろう。
雫はそう考えた。

「ええ、証人です。他人の家にまさか人を送り込むと言うことの覚
悟は出来ていらっしやるんでしょうね、山田さん。これはれっきと
した違法行為になります。彼女を捕まえて貴女から頼まれたと言
葉が出てくればどうなるか、まさか分かっていないはずがありませ
んよね？……盗撮？盗聴？それも真実を写していないものを学園に
張り出すと言うことは何を指しているか、まさか分からないはずも
ありませんよね？ここは公共の場です。公共の場でこのようなこと
をすればどうなるか……知らなかったではもう、済みませんよ
念を押す為に伺いますが、あそこに張り付けてあった写真は、貴女
の用意した写真ですね？」

先ほどの雫へと見せつけてどうだとばかりにふんぞり返っていた
山田を見れば一目瞭然だろう。確実に山田ははずだと雫は考えてい
た。

するとそんなことは知らないと言山田は即座に否定するも、雫はそ
れこそ証人が必要ですから、だから帰らなければと言う。

山田はまさか証人や違法など、そんな大げさなことになるとは思
っても見なかったのか、顔を真っ青にしている。

「一つ知っているかしら山田さん。警察は私のような小娘が、ただ学校でいじめられた程度では動いてくださらないかもしれませんが、こうして他人の家に入り込んでまで盗撮をした、させたとなればね、それはれっきとした犯罪です」

「……」

山田は海外留学をしていた。そのお陰で雫よりも年齢が上なのだ。だからこそ、罪に問えば子供ではなく確実に大人として裁かれる年齢だった。雫の年齢だとても大人として裁かれるが、それでも問題はここにかかっているだろう。成人にどれほど、ほど近いか。山田は雫と違い、少年法を適用すべきとは、間違っても声をあげられるような年齢ではない。

それが執行猶予がつこうが、実刑だろうが、関係はない。どちらにせよ罪に問えるという事実、それは確実に変わらなかった。

「更には名誉棄損、それも、公の場所でこうした大人数の前でとなればなお、罪は深い。これは直ぐにも警察に動いて貰うことが出来るでしょう。一応前科はつきますね。更に損害賠償、それと……今後何かされればと考えると怖いですから、接近禁止令も裁判所から出していたくことにしましょうか。不審人物どころの騒ぎではありませんからね」

「不審人物って……馬鹿馬鹿しい」

引きつってはいるものの、山田は嘲る様に口にするると居直ったのが出来るものならばと言う態度だ。

それを見て雫はよくぞ言ったと首肯して続けた。最早逃がす理由も消え失せているのだが、それは山田だけが飲み込めていない事実だ。

「それと、これは脅しじゃないありませんので。先ほど言った通り、犯罪だから警察に行くと私は言いましたね。その場合、私は警察に行きますから！」と、宣言しても実際は行動しなかった場合、それは恐喝行為になるそうです。ですので私はこれから実際に、警察に行きたいと思いません。証拠と証人を持って。更に次はその足で裁判所ですね。顧問弁護士を呼ばさせていただきます」

雫の言う顧問弁護士とは、あの降矢財閥お抱えの顧問弁護士である。それは下手な弁護士を雇うよりもずっと素晴らしい切り札だ。今まで何度も降矢財閥の中で起こったトラブルを素晴らしい勝ち星という形で解決し続けてきたエキスパートでもあった。

弁護士、この言葉には流石に雫の決意が本物であると思ったのか、山田の顔は今や蒼白だ。

それこそ遅きに過ぎるが、ここまできたらもう、カードを切った雫にすら、それは止めることは出来ない。

「……私は何度も見逃してきました。いじめも、私物を壊されることも容認してきました。そして忠告もしましたよね。これは須賀さんがですが。けれど貴女はそれを無視してなお、こうした行為に出た。その行為、万死に値します。覚悟しておきなさい。最早容赦致しません。そして、須賀さんの言葉ではありませんが、同じことをしていた方々も、証拠証人が出てくればどうなるか、分かっていますね？私は今まで大人しくこれを甘んじて受けてきました。けれどももう、こうまで公然とやられて黙っているわけには参りません。叩き潰させていただきますので覚悟なさってください」

屋敷内にある六法全書を奏と共に暇つぶし程度で読んでいたため無駄に知識があったことが役に立ったかもしれない。雫の口からはつらつらと、訴訟を起こすにあたる知識がわんさと飛び出してきた。ただの学生。それも、中等科より持ちあがったばかりの高校生

が知っているにはおかしいほどの知識を披露してみせた雫に、山田はまさか、元からあの女と結託していたのではと思っただ。

元から山田をはめるつもりであの女と組んでこうして……山田を貶めるために　？と考えるが、実際はそんなことはない。それは邪推にも程があるが、それこそ、そんなことは思っただも言えるはずも無かった。それこそ山田が、あの女を使って雫の秘密を何か手に入れようとしていた事実を周囲に暴露してやるのと変わらない。そんなことを聞けば最後、山田は破滅の一途を辿る。

やっとのことで山田は力なく首を横に振ると、口にしたつもりが無い言葉がついて出ていた。それはまさに、今の彼女の心をあらわす言葉だった。

「嘘よ……」

「……嘘かどうか、その身を持って知るといい　行きますよ、奏。千草も。彼女の身柄を拘束します」

三人が駆けて行くのを見て、騒ぎを聞きつけてやってきたらしい少女が二人、人垣の中から飛び出してきた。

「ちょっと待って、降矢さん！私も行く！」

「私もよ！雫、待ちなさい！！」

須賀と櫻子だ。確かにこんなところに執行部である二人を置き去りにするのは問題だ。

雫は今日だけはこう広々とした空間が確保された車内で良かったと思いつつ、二人を拾うと、そのまま目的とする人物の住まう場所へと向かった。

「絶対に逃がしません」

証人に逃げられる、それは断じて許す事は出来なかった。

37 (そして立ち場が逆転する) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

37 (そして立ち場が逆転する)

後に残された山田はと言うと、悲惨の一語に尽きるだろう。

山田が腕を僅かに　ただの何気ない仕草だったのだが　振りあげただけでも生徒は群れを作つて山田から距離を置こうとする。少しでも関わりがあると思われたら　そう考えるだけでも怖いのだろう。生徒達は一樣にそんな顔をしていた。

「な……何故そんな……皆さん怖い顔をして……ね、ねえ？」

山田は馬鹿馬鹿しいと言いながらもくるりと振り返る。

気にしたら負けだ。弱みを見せればどうなるか　虚勢でも何でも良かった。弱みを見せたら負けだ。山田は自分には努めて関係ないという風を装おうとした　が、それは甘いと直ぐにも知ることになった。

生徒達は山田を校舎へと入れようとしないのだ。

人垣でくまれたバリケードとでも言うべきか、山田を見つめる目、それを一つとつてもどれも鋭さが凄まじい。視線だけで殺せるならば、山田は百回は死んでいるだろう。それほどに強いものを皆、浴びせかけていた。

「何よ……何なのよ一体!!」

そう吠えた瞬間だ、山田の目の前にすつと歩み出てきた生徒がいた。山田の同志達だった。

降矢雫を同じく憎む者、そのはずなのに何故か彼らは山田をきつく睨み据えている。どうということなのか、訝しむような目を向けるも、次の瞬間、更に信じられないことを耳にした。

「今まで降矢さんの悪い噂や執行部の悪い噂を流していたのはあんただったんだな」

「貴女が降矢さんの陰口を撒き散らしていたのね」

信じられない言葉だった。山田は自分の耳を一瞬疑った。

これは一体どういうことなのだ。彼らは皆、山田の同士だったのではないのか。

けれど同士だった者達は、山田を睨み、益々増長したかのように続ける。

「良くも俺達を騙しやがって」

「最低ね」

「俺達、こいつに騙されてたんだ」

口々に言われ、山田は混乱する。

何を言っているの？

自分達だってやっていたじゃない。

ねえ、何を言っているのよ。

けれどその言葉は口から出ていかない。あまりにも怒りが、そして混乱が極まったお陰か、喉が絡まり声が出て来ないのだ。

そして極め付けがこれだった。

「嘘……じゃあ、須賀さんが言ってたこと、本当だったんだ。」

山田さんと友達でいると、いいことないよって。私、怪我させられたんだからって。頭割られたって言ってた……嘘、やだ……」

それは、須賀が切り捨てた少女二人だった。

彼女達は涙ながらに語る。須賀が何をされたと言っていたのか、今まで山田に怖くて従っていたことも、全てをだ。

静寂があたりを支配する。

誰も何も言えなかった、山田さえだ。

けれど心はもう、全員が猜疑心の塊になっていた。

それもそれは、雫に対する陰口は全て嘘だったのかと言う物だ。

そして、山田がそれを全て撒き散らしたのか、と言うことだった。

巧妙に他人の言葉を操って、行動をも操って　そうして学園全体で雫をいじめ続けてきたのかと知れば生徒達は全員、自分達も騙された被害者だと認知した。間違っても加害者にはなりたくなかった。当たり前だ、加害者ともなれば、雫を　降矢を敵に回して今までいじめをしてきたことになってしまう。誰もがそのリスクを心のどこかで避けたいと願っていたのだ。自分達が面白づくで雫を攻撃していたことを、あたかも忘れてしまったかのように、生徒達は皆、山田を憎んだ。騙されたと、今まさに憎み始めていた。

全ては山田へ返ってきていた。悪意も何もかも。

こんな馬鹿なことがあるか　そうは思いはするものの、それでも今これは、山田へと襲いかかる現実だった。

最初はただの小さな石ころだった。

それが山田の額目がけて投げ打たれたかと思うと、次第にそれが雨あられと降り注ぎ始める。

「い、やめ……やめてっ！」

痛い止めてと悲鳴を上げるも一度始まった行為は誰にも止められない。

今まで雫へと執行部へと向けていた悪意を全て自分達の中で無かったことにするために、生徒達は山田へと、贖罪と言うわけではないのかもしれないが、それらをぶつけるつもりで石を投げ打った。

罪びとでない者に罪であるはずと悪意をぶつけ、更には蔑んだ。そのことを生徒達は無かったこととしたいのだ。

誰かにそそのかされたからだと思いたい、だからこそこうして皆、飛礫を投げ打ち続けるのだろう。

頬を掠めた石を見て、山田は心底ぞつとした。

「やつ……止めなさいよ！石なんて当たったら怪我をするでしょう！？何を考えているの！」

それは当たり前前の言葉だろうが、そんなもの、誰が聞くと言っのか。

雫にバケツを落とした、頭から水を被せた、石を投げた、わざと肩をぶつけて階段から落とした 皆、生徒達が行ったことだった。

だからこそ、石飛礫ごときと生徒たちは言い返す。

さも山田だけが雫をイジメ続けていたように。

「降矢さんだつてそう言つてた！」

「皆を騙していじめさせてたくせに！」

「突き飛ばしてただろ！」

「貴女だつて足を踏みつけていたじゃない！同じようなことをされて何？被害者面なんてしないで！」

騙されていたんだ 同志たちの最初の声はこうして山田一人に

全ての責任を押し付けるためだったのだと今更気づいても、もう遅い。山田へと怨嗟の声は止まない。

止めるよと誰かの声が聞こえるものの、そんな声は直ぐにもかき消されてしまうのだ。

山田は悔しげに歯を食いしばる。

何と言うことだろうか。酷い悪夢だと思いこみたいが、痛みが絶え間なく襲ってくるためにそれも出来ない。

ああそうか、雫をどうにも出来そうになくなったため、山田が全て悪かったことにしてあいつらは逃げるつもりなのだと理解すると、山田は悔しさと憎しみで胃が煮えくりかえりそうだった。

「警察何かに、連れて行かれるはずが……ない。私は、私は……そんなことを、してはいいもの!!」

していない、そう叫び続けるしかない。

けれど雫が口にした言葉には雫を真実と思わせるだけの力があつた。だからこそ生徒達は雫を信じた結果、山田が嘘をついていると思つたのだろう。攻撃は止まない。いつまでも罵倒の声も止まなかつた。

山田は雫達が消えて間もない校門へと石が降り注ぐ中駆けていくと、端末を手に取り、分かれてから一時間もたっていない山田家お抱えの運転手を呼び出した。

「大至急戻ってきて!早く!」

山田は車へと飛び乗る様にして乗り込むと、運転手へと叫ぶ。

「降矢邸へ!誤解を解くのよ!」

誤解を解くのではないだろう。山田は確実に雫へと何か良くないことをするつもりだろう。そんな予感がした。

健は山田を追いかける生徒達の隙間から共に追いかけてつっそれを聞いていたが、その目は、その口は、今まさに狩りに赴こうとしている獣の如く、爛々と光り輝いていた。

「あれは……確実に説得や誤解を解くためじゃないな……」

ぼそりと近くで囁かれた声にぎよつとする。

そして声の方を振り返ればそこには、恐ろしいほどに美しい女いや、男が居た。

性別不明のその男に、確認のために健は男ですよねと尋ねるが、

不愉快そうな顔を浮かべると、男はそれは何の確認だと冷たく言い放つ。どうやら男で間違いはなさそうだが、間違えられそうになったと言っただけでも不愉快らしい。

男は健を見てまともぼそりと聞こえるか聞こえないか程度の声で言う。

「止められなかったようだな」

どうやらこの男には見られていたらしい。

健は山田への意味のない攻撃を止めるよう、何度も生徒達を止めようとしたが、けれどお前も被害者なんだぞと逆に諷められた。

あんなコラージュ写真なんて作られて、酷いことをされて何故庇えるとまで言われたが、それと攻撃をしていいかはまた、話が別だ。けれど力及ばず、誰もその言葉に耳を貸そうとはしなかった。

男はちらと校舎を見て呟く。

「俺にはどうしようもないしな……」

「何か？」

「いや……これから降矢邸へと戻る。……お前、行くか？」

どうやら男は自前の車を持っているようだった。一つの鍵を見せつけて告げられた言葉に健は一にも二もなく頷いた。

それは男と挑む、山田との追走劇の始まりだった。

37 (そして立場が逆転する) (後書き)

暫く暗い話しが続きます。ほんとに済みません。

全部終わったら四章はハッピーエンドっぽく終わるはず、はずなのに……どうしてこんな暗い話しが暫く続くんだろうか。書いてて長いなーって思う。

38 (満ち足りた笑顔) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

38 (満ち足りた笑顔)

櫻子は、静かに怒りをふつつつと煮え滾らせている雫の手を掴むと、心配そうに顔を覗きこんでくる。それを受けて雫は表面だけは有難うと受け取っておいたが、今は一人で怒りを感じていたかつた。むしろ今は労わりはいらない、そんなものに甘え続けるほど自分に甘くしたくなかつた。

虫が入り込んでいたと言うことは彼女からしてみれば、すなわちそれは家族を危険にさらしてしまつたと言つことだ。

しかも山田が送り込んだともなれば、それは雫の所為でと言つことなのだろう。

ここにきて漸く雫は山田に敵視されていることに気付いたようで、これは自分の所為であると責任を感じていたのだ。

私の所為……私の所為でお父様に、お母様に、奏に 皆を危ない目にあわせたかもしれない。

雫は自分自身が許せなかつた。先ほど山田へと切つた啖呵はそれこそ、自分自身を罰せられるならば自分を罰したい。そんな自分へ向けたかつた言葉だ。

厳しい表情で黙りこむ雫を見て、須賀は押し黙つてはいたが、矢張りいつまでも自分の中に押しとどめていらなかつたのだろう。

些か場にそぐわないかもしれないが、はしゃいだ声で「すかつた」と口にする須賀に、雫は目を見張る。どういふことだろうか。

「あの写真とか、ほんとに凄くむかついてたから。でも、張り紙をはがそうとしても全然近寄れないし……ごめんね、何も出来なかつた」

その言葉に雫は首を横に振る。その気持ちだけで十分だ。そもそも執行部に対する風向きはとて強い。厳しいとまで言ってしまうほどにきついそれに立ち向かおうとしてくれた、その心意気だけでも素晴らしいし、そして何より有難かった。

いたわる気持ちよりも、余程今はそういうものが嬉しい。

「凄く嬉しかった。さっきの啖呵切ったの、かつこ良かった！ほんと、なんか……すーっごく、すかっとしたの！やっと山田の天下が終わる！……みたいな。でもなんか、不謹慎ってのは分かっているの、ごめんなさい」

「いいえ……そうですよ。今までとても沢山辛い目に合わせてしまいました。須賀さん、今まで申し訳ありませんでした。これからはもう少し頑張りますので」

雫が何をどう頑張るつもりかは分からないが、須賀は首を横に振って笑って言うのだ。

「ううん、これからも一緒に頑張ろうよ。一人でなんて止めて。私も、もーっと強くなるから。隣でサポート出来るようになるから。だから、今日みたいに一人であんなのと立ち向かわせないから……今度から、隣に居させて。頼むから……今日みたいに一人で立ち向かわないで。ちょっと……すかっとしたのは事実だったけど、でもね、あの……私、凄く怖かった。降矢さんが何かされたらどうしようって。だから、私強くなる。貴女の傍にいられるくらい」

怒りのあまりもあつたが、他人の目など気にせず立ち向かう雫に、須賀は頼もしさと共に、あまりにも怖れを知らない無謀な行為と見たらしい。

涙を滲ませながら須賀は続ける。

「突き飛ばされたりさ？水ぶっかけられても全然気にしないみたいにしなくていいから、偶に弱音はけるような奴になるから、私。だから、もう少し頼ってよ、お願い。一人で啖呵切ったの見て、直ぐに傍に行こうとしたけど、守ろうとしたけど、一人で全部やつちゃって……降矢さん、私、貴女のこと守るから！守られてばかりじゃなくて、守って見せるから！だから、だから、もつと頼って！もつと何か……言って？こんなに直ぐ傍に居ても全然、近くに居ない人見たいな扱いしないで！目だけ悲しそうな目なんて……もうさせないから。あのね、降矢さん、降矢さんはもう、一人じゃないんだよ？降矢さんの傍にはもう、……私も、綾小路さんも、奏君も……居るじゃん」

同じ執行部に入って、友人になると宣言したにも関わらず、実際は守られてばかりで何一つ返せていないのではないか。ずっとずつと心のどこかで須賀は気に病んできたが、それが今日、一気に表に現れたのだ。

そうして吐きだした言葉とともに櫻子達を見れば、須賀同様にどこか悲しい顔をしているのが見える。無力感に齒を噛みしめる。

何一つ出来ていないのではないか、ではない、出来ていないのだ。返せるものも何も無い、傍で頼りにさえされていないようにしか感じられない。もうそんなのは嫌だ。

鼻を嚙りながら須賀は言う。

「私、私、ちゃんと貴女に頼りにされるくらい、頑張るからね。……だから、もう一人であんなことしないで。一人でなんてもう……行かせないから」

盾にはどうせなれないだろう、それは知っている。

須賀は自分を良く分かっていて。自分はそのまでは強くなれないだろうと。

けれど自分にだって隣に立つてともに戦うことくらいは出来るだろう。いいや、それくらいになりたかった。

須賀は雫に抱きついて思った。

彼女のことを、知れば知るだけ悲しくなると。

同世代の少女よりも、こんなに小さな体にどれだけのものを抱えているのか。

ただ一人で立ち向かうその姿を見てもそう感じたが、それ以上に恐らく、雫の本質はもっと寂しく、悲しい存在なのだろう。何故かは分からないがそう思える。

雫は雫でああして不自然なほどの突然の言葉には、こうした理由があつたのかと思った。

けれど矢張り、雫には分からない。

ただ一人で何かに立ち向かうことは、今までの彼女からすれば当たり前前だったからだ。

ある種、それは雫の生き方そのものだ。

雫からすれば、彼女を守るものは何もない。

家も、親も　義経もあやこも、基本的には雫を守ってくれらるうが、ほとんどを一人で過ごしてきた彼女からすれば、居ないも同じだ。

ここ最近がおかしいくらいなのだ。こうまで傍で守られていること、それこそが異様なほどだ。

だからこそ、今まで雫は自らを守る術を自らで編み出してきた。

今回もそれを実行してきたまでだった。

脳みそをフルで使い、相手から逃れる術を即座に編み出す。そしてやりこめる。

ただ、山田が最終的に全てを被せられ石を投げられることになっていたとは露とも知らない雫は、そこまでをするつもりは無かった。ただ、今のいじめを受け続けるくらいまでは受け入れるが、けれど家族にまで　周囲にまで害が及ぶのは有り得ない。そこまでになつてしまったのであれば、即座にこれを対処　潰す以外無かつ

た。

他家から利用されるな、お前のために何かをしてやれるだけ降矢は甘くない、そう言い聞かされて育ってきただけに、須賀からのこの言葉に雫は戸惑った。

背まで回される腕に、そして直ぐ傍で泣く友の顔に、ただただ困惑した。

けれど奏と櫻子がそれを見て笑うのだ。

そして、千草が顎を軽くしゃくると、須賀の背にお前も手を回してやれと雫にだけ聞こえる声で小さく告げてきた。

背に腕を回した瞬間、須賀は声をあげてわんわんと泣きだした。

「そう、それで正解ですよ、雫お嬢様」

奏の言葉が無ければ、雫は戸惑いから須賀の背に回した腕を直ぐにも取り払ってしまったことだろうが、そう口にされてしまえば、腕を動かす事も出来ない。

雫は暫しの間、そのままの体勢で、困惑し続けていた。

ただし、その表情は、どこか満ち足りた顔をしていた。

「……………共に……………居てくれる」

夢見心地とも言える心境だった。

39 (開かれたドア) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

39 (開かれたドア)

雫は先日辞めたあの人のだろうと目星をつけている人物の住所を端末から屋敷へとアクセスすると、その名簿を呼び出して検索にかけた。先日居なくなっただけの人物 該当する人物はただ一人だ。

「見つけました」

目当ての人物の住所を割り出すと、雫はカーナビに向けて端末から情報を発信する。

そして車内電話にて雫はそこへ向かうように頼むと、更にこう付け加えた。

「辞めてからもう三日も経っています。これでは遅すぎるかもしれません。ですから多少……法は破って貰っても構いません。こう言う時こそ財力という名の権力をかさにきて動きましょう」

要は法律なんて関係ない、ぶっ飛ばせと言う命令である。

これを受けて島田は破顔すると、では飛ばしますと短く返し、シートベルトをつけるように付け加えた。

「行きますよ。舌はかまわないでくださいね」

その言葉と共に次にやってきたのは途轍もない加速だ。

奏が胃が吐き気を訴えているよと笑顔で答えると、雫はこれにこちらも笑顔で返して見せた。

「それくらい根性で何とかしてください」

酷い返しである。

そんな受け答えをのほほんとしている二人を見れば、これはどうやら一度や二度の無茶ではないらしいと悟る。

降矢邸の人間でない三人だけは、凄まじい重圧が前方からくるのをどうやれば耐えられるのだろうかと必死で考えているようだ。

シートベルトをつけてなお身体を持つていかれそうになるのを全身の筋肉を総動員して耐えているような有様である。

とてもではないが、二人の様にはいかない。

「いつそのこと宗一郎様のお名前を出してしまいますかー。そうすれば止めたら一大事だもんねえ」

政界財界とを太いパイプで繋ぐその名前は、それこそ、下手に止めれば大変なことになると言う脅しにも使える。事実今までそうして義経は時間との戦いである時は法定速度をぶち抜いて移動していたことがあった。雫は今回命じる側であるが、雫も奏も、本来はその横にちよんと座ってみているだけだった。そのため、加速には慣れているがこつした無茶ぶりをするのは初めてだ。わくわくとしているからこそその笑顔なのだ、三人だけが知らない。

「そこは島田さんが色々と手を回してくれるはずです。いつもお父様の時にやっていることですよものね。ですが今日は一応、悪事を正しに行くわけですから大義はこちらにあります」

だから安心ですねと告げる雫に三人はシートに埋もれそうになりながら首をぶんぶん横に振る。

その答えは有り得ないだろう。だが、それを口にできるような状況ではない。今にも胃の中身がせり出しそうになるのを、三人ともやっとのところで堪えているようなありさまだ。口をひとたび開いてしまえば、最早どうすることも出来ない事態になりかねない。

兎に角今は安全よりも時間である。

「かつ飛ばしてください。全力で」

「了解しました」

更に加速した車に奏はオーバーホールが必要になるかもしれないなどと、のほほんと考えていた。確かにそれは、必要そうだ。

+++

帝都中枢より車で四十分ほど飛ばしてついたのは、県を跨いだ先にある、都市部から少し離れた場所に立つ、マンションだった。

喧騒とは程遠いしっとりとした空気が街を包み込んでいるのを見て、どこかで見えた事があるようなと雫が漏らすと、奏がここはと青ざめた。

「どうかしたのか？」

「いや……でもそんなまさか」

奏が力なく首を横に振っていると、背後から須賀が飛び出してくる。

「うー……吐きそう。最悪……」

そんな須賀の背を擦ってやるのは櫻子だ。もう駄目ねえと口にして甲斐甲斐しく世話を焼いてやっている。

いつの間にもやらそこまで仲が良くなっていたのだなと雫が關心していれば、奏が少し強張った様子で二人へと告げるのだ。

「具合悪いなら待っててくれる？ちょっと相手が暴れるかもしれないし、そんな中、庇いながらなんて難しいから」

その様子から何かピンと来るものがあつたのか、島田が二人を車内へと多少強引に押し込めると、三人に手早く告げて車内からはあかないように鍵をロックしてしまう。

「どういことだ」

流石に千草がそう尋ねるも、奏はまだ確証がないからとだけ言い、二人を伴い一気に駆けだしていく。

おかしなことに、奏はマンションのどの部屋だかを雫から聞くことなく、その部屋へと辿りついて見せた。

その事実こそが、大問題を引き起こす事になるとは、この時、思いもよらなかつたのだった。

目的の部屋に真つ先に辿りついた奏に雫は住所を何故知っていたのか気になつたが、先に奏からこんなことを聞かれて困惑する。

「雫お嬢様、ここなんですよ？」

「……知っていたのではないのですか？」

ならば何故ここに真つ直ぐこれたのか気になりはしたものの、奏は言葉が続かないようだ。何と口にすればいいか分からないといった顔をしている。

雫も何を聞けばいいか分からず、二人で暫し視線を絡めあつてい

るだけだったが、その二人の沈黙を引き裂いたのは千草だった。
わざと大きなため息を吐き出すと、どうするつもりかと聞いてきた。

どうするつもりとは、どういうことだろうか。

「だから……ここ、鍵どうするんだよ」

「あ……」

「お前ら、肝心なところが抜けてるぞ」

千草がため息を吐き出しながらドアノブに手をかけて口を開く。

「いいか、こういうのは普通、鍵がかかってあいてないもんなんだ。
だからここは定石で言つと管理人あたりにだな……」

と口にしたところで三人はドアノブを一瞥し、そしてドアを見ると唸った。

「管理人は……要らないようですね」

何故かドアは、あいていた。

40 (部屋の主はおらず) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

40 (部屋の主はおらず)

「何故貴女がここに……」

女は息を飲んでそこにたたずんでいる。

その手元にあるのは特殊警棒だ。光る獲物を前に、雫は瞬間的に身構えた。

けれどそんな雫を背に庇うように背後からずいと飛び出す腕があった。千草だ。

雫は気づけば千草の背に庇われる形になっていた。

びくりと触れる背中にびくつきはしたものの、雫は不思議と千草に触れるだけで今までは恐怖に引き攣れた声が飛び出していたと言うのに、今回、それが出ない。

何故なのか自分自身不思議でいるも、千草は何も言わない。そして奏も多少目を見張りはするものの、こちらも何も口にはしなかった。

ただし、触れられる距離にまで近付けたようだと分かると、ふわりと微笑を浮かべてくるので、雫は一瞬どきりとした。

雫は千草の背に庇われながら口を開く。

始めてかもしれない、彼女にこうした口をきくのは。

いつも彼女は雫にとって、高圧的で上から押さえつけるような言葉を好んで使っていたように思う。

それはまるで、雫そのものを嫌悪しているかのよう。

それが何故なのかは知らないものの、それでも何故か毎回、会うたびに厳しく扱われた。どんなに完璧に見えても、荒を探してやりこめられたことを思い出せば悲しくなる。

どうしてそこまでされなければならぬのか。

「貴女なのですか、エマ。私は貴女ではなくて、メイドの彼女

だと思つていましたが、まさか……貴女は彼女と組んでいたのですか？それとも、メイドの彼女の上司は貴女？」

そう、そこに居たのはエマだった。

いいや、それともエマ単体で行つて 様々な考えが飛び出してきたが雫は頭を振つてそれらを打ち消していった。

そうではない、エマがここに居ると言うことは、まさしく、メイドの彼女 堀井初枝とエマが繋がっていたということに他ならないだろう。

雫は残念ですと告げると、すつと深く息を吸い込む。鷺宮に聞こえる声を出す為だ。

鷺宮ならば、たとえ数千キロも離れていようとも、それこそこの地球上に居るのであれば、彼の目が、耳が、雫を必ず捕捉する。だからこそ雫はただ、鷺宮に助けをと叫べばいいだけだった。

「……ちぎ、」

口を開いた瞬間だった。エマから鋭い声が飛ぶ。

だがその声は、意外と言えいいのか、落ち着いたものだった。

「無意味なことはお止めなさい」

それはどういう意味なのか。エマは三人と対峙するように真向かうと、獲物を畳み大腿部に取り付けられた革ベルトに挟み込むように仕舞いこんだ。

その出で立ちはどこからどう見ても怪しく、更にはそれがどこか映画の中の暗殺者と言うものを連想させるものには見えない。

常の踝までを覆う長スカートの落ち着いた衣装しか見慣れていないためか、あまりにもかけ離れたイメージを与える服装だ。だが、その衣装のなんと着慣れた雰囲気を与えることが。

そのあまりにも怪しげな衣装を着こなしていることに対し、千草は訝る。

エマとは一、二度だったが、千草も顔くらいは見た事があった。

「……おい、こいつ、お前の家庭教師じゃなかったか？」

「ええ……それも、行儀作法の教師でした」

そこまで口にしたところでエマは肩を竦めて見せると、短く違うと告げた。

「違うと言うのは？」

「だから、私は家庭教師なんかじゃないわ。降矢雫、貴女を守るエンジニアントなのよ」

「私を、守る？」

「そう。兎に角私は貴女の敵ではない。これだけははっきりしているわ」

そう言われたとて納得など出来ようはずが無かった。

「今は説明している時間が惜しいの。私は紅桔梗様の命で動いています。詮索は後になさい。あまり遅くなると手遅れになるわ」

言いたいことは山ほどあるが、紅桔梗と言われてしまえば雫は言葉に詰まった。

それが何を示すかなど、今更雫に説明が必要な言葉では無かったからだ。

それは六花神の一族そのものを縛れるほどの名だ。そして、雫に對してもその名は特別なものだった。

「おいおいおい、何でお前らが居るんだ。つつか……なんだあ

「？」

声のしたのは背後からだ。

三人はエマに意識を残しながらもちらと背後を振り仰ぐと、そこに鷺宮と澤田、塩見の三人の姿があることに驚いた。

互いが互いに何故ここにといつた表情を浮かべていることに少し笑えた。

どうやら、全員ほぼ同じくらいの時刻に気付いた様であると思っただのだ。

エマの姿があることから、後から来た三人が周囲を搜索し始める必要があるかと尋ねると、その必要はないだろうと淡々と返してくる。どうやら三人もエマの素性を知っているらしい。

となると雫達はエマを警戒する必要がなくなったことで全員ほっと息を吐き出した。

矢張り、一般人として生活しているだけあり、こういったことにはなれないし、不向きだと三人は思っていた。

心臓が未だにばくばくと煩く鳴り響いているからだ。

「貴方方がいらすという事は、猩々緋殿も動かれたということとで宜しいのでしょうか？」

「ああ、うちの主もかんかんでね、なるべくなら直ぐ様生け捕りにして持ち帰りたかつたんだが……」

どうやらもぬけの殻のようだとぼやくと、エマも首肯する。どうやらエマもつい先ほど、雫達よりも僅かに早くついたばかりらしい。そして、この部屋の主はその時にはもう居なかったということのようだ。

澤田が慎重にエマへと尋ねる。

「エマ、ここに堀井は退職後戻ってきているのでしょうか？」

「最低でも一度、二度は戻ってきていると思われれます。ただし、確実に昨日から留守にしているようなので、一度戻ってきて荷物を置いて　もしくは着替えを持って、出て行ったのかと」

言いながら堀井の使用していたキャビネットを示すと、素早くそれに塩見が取りつく。

中身は確かに、随分と減っているように見えた。

「長期の旅行？」

「いや……逃げたところの場合は考えるべきだろう」

「一体どこへ？」

41 (シンキングタイム) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

41 (シンキングタイム)

降矢の屋敷からそのままここに来たと言う足取りを掴んで言う大人組に対し、雫は暫し考え込む。

だが、直ぐに何か閃いた様子で少々お待ちくださいと、屋敷の端末にリンクしたままであった己の端末を持ちだし、周囲に展開してみせた。

先ほど端末に呼び出したのは、堀井初枝の個人情報の全てだ。これこそが今、役に立つはずだった。

幾つもの窓が宙へと開くと、そこには堀井の容姿を写し取った写真、そして彼女の略歴、更には家族構成から何から何までがその場に映し出されたのを見て千草はそんなことまで調べるのかと思わず口にした。

改めて、降矢の屋敷に勤めに入る人物を厳選すること、そのものの厳しさを知って気がした。

「一応……犯罪歴があるなしだけでは分からないこともありますが、ある程度は鷺宮さんが調べられますし……後はまあ、伝手があるのでそこからその人物の名、もしくは家族ないし、親戚ないし、その名前が怪しげな場所から出ていないかどうか、それを調べるのは必須なのです。それこそ今回のようなことがないとは言えませんので」

そう言われれば納得せざるを得ない。

「……そう、ですね。孤児と言うわけではありませんが、それでも付き合いのある親戚と言うものが悉く居ませんね」

展開された情報にある通りであるとすれば、堀井は五年以上

前に両親を亡くしている。その上堀井の両親は元から親戚との付き合いがあるほうではなかったらしく、よって親交のある親戚と呼べるものの一切が無かったようだ。

更に言うとなら友人関係と言うものもそこまで深いものがある者もな
く となると、堀井がここから逃げ出して身を寄せられる知人などはいないことになるのだが……

雫は首を横に振って、彼女自身の知り合いの元では無いようだと言
告げると、先ほどあった出来事を語った。

山田から雇われてかどうかは分からないものの、それでも山田は
確実に噛んでいる、と言うものである。

千草も奏もこれに同様の感想を述べると、大人組は揃って顔を見
合わせて唸る。

「何でまたそんな……山田つつたらあれだろ？あのお嬢のクラス
の派手派手女子」

「派手……いやまあそうだと思う。俺の記憶にあるのも派手な女の
イメージだけ、ですし」

千草が鷺宮にげんなりと返すと益々分からないと言った言葉が飛
び出る。

「一般企業の御家柄で、特に降矢とは競う業種らしきものが何も無
いような家だったよね？それでなんでまたそうなるわけ？」

「降矢の秘密を奪取となれば、確かに物によつては高く取引される
でしょうが、そのようなことを六花学園に通うような生徒がする？
それも考えられませんしね……」

下手なことをすれば一発退学も辞さないような厳しい学園だ。

更に言えば、本人の人格、そして両親など、周囲の環境がきちん
と整った人間であること、それは学園へと入園するのに当たり前

審査がある。厳しい審査を潜り抜け、そのようなことをする生徒へと育つとは思えない。

そして何よりこれが肝心ではあるが、そのような生徒をほいほいに入れるようなはずがないのだ。

どうしてそのような生徒が入園してしまったのか、それが問題だった。

その時ふいに千草の声が割って入る。

「なあ……それさ、逆なら簡単だよな」

「逆と言いますと？」

「だから、逆。犯罪者とか……まあ、その家庭教師じゃあないが、暗殺者とか？元からそういった人間を入れるのは難しいとしても、中に元から入っている生徒をそれに仕立て上げるならそう時間は要らないだろ？」

そしてそうまで難しいことではないのではと言われ、全員、顔を見合わせて黙り込んでしまう。

確かにそれならば簡単だからだ。

「私は暗殺者ではない」

エマのこの言葉は意図的に全員が無視し、可能か否か、それを談義することになった。

「出来る、か？」

「相手はまだ子供だぞ？」

「いや、でもさ……情報を手に入れるだけでいいなら、育てるってもそんなに手間はいらさないよね？」

「確かに、そうですね」

「では……矢張りそういうことなのでしょうか？」

兎に角、山田が個人的に降矢に悪戯を仕掛けたのか、それとも山田はまだ氷山の一角なのか、いやいやそれよりも実は山田の親の企業が新しく進出してくるところに降矢の企業が入っているからなのでは　　などなど、様々な意見が出はするものの、いまいち状況が把握出来ないでいる。

そんな中、奏がそろりと申し訳なさそうに口を開いてこう言った。

「あのさ……多分だけど……派手女さんはさ、雫お嬢様が嫌いで嫌がらせ目的でやったくらいだと思っよ？だから、あつたとしても降矢の家の秘密を奪取するくらいで、企業秘密までは手を出してないと思っ……」

だから企業にハッキングまでかけられていないから、降矢グループの企業サーバなどにはその足跡さえ残っていないのもそう考えればつじつまが合わないかと言われ、全員が沈黙してしまった。

先ほどから鷺宮が降矢グループ、ひいては六花神の方にも直結している巨大サーバに目を向かわせ、片手間のようにだが中の情報を探っていた所でのこのコメントである、まさか、と全員が言葉を失ったのだ。

澤田が有り得ないと首を振って言うのは、当然だった。

「だって……降矢ですよ？嫌がらせにしても狙う山がでかすぎます。そのお嬢さんはその……何と言いますか、馬鹿なのですか？」

澤田の言葉に奏はさらりと言う。

「だから、馬鹿なんじゃないの？」

身も蓋も無い言葉である。

間近で山田を見てきている雫と千草に澤田達は問いかけるように目を向けるが、そつと目を逸らされた。

どうやら相当根深い恨みでも与えていたのだろうかと思うも今はそんなことを言っている場合では無い。雫は全員に兎に角何でもいから手がかりをとだけ短く発し、自らも堀井の自室へと入っていた。

42 (To dear Shiro) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

42 (To dear Shiro)

女の一人暮らしにしては大層広い空間が確保されていることと思う。私室も驚くほどに大きな部屋が確保されていて千草は驚いた。

だが逆に、零は一般的な広さはこれくらいなのかと、案外自分の部屋と変わらない(そうでもないと思うが)と簡単な感想を述べた。だがそれは、即座に一般を知る千草に有り得ないと否定されてしまふ。

「これは間違つても一般的とはい難い部屋だ。と言うよりも、可也大きな部屋だが、本当にここにその堀井つてメイドは一人暮らしをしていたのか？」

「ええ。でも……ご両親の遺産であつたようで、今の御給金が良くてここを買えた、と言うわけでは無いようです」
「なるほど。遺産で買ったつてことか」

だとしてもなんだつてまたこのようにだだつ広く、しかも自分はほとんど帰つてこないような部屋を購入したのだらうかと千草が首を傾げていると、奏が続いて私室へと首を突っ込んできたのだが、どうにも中を見た瞬間から顔色が悪い。

思わず千草はどうかしたのかと尋ねるが、ぶるぶると青い顔で首を振るだけで埒が明かない。

「おい、一体なんだ。今更車酔いか？」

そついう千草はと言うと、こちらは車酔いは確かにしているものの、それでもそんなことで人前で倒れることなど格好悪くて出来なつてと言つてどうか、傍から見れば完全にぴんぴんとしてます自分、と言つようにしていた。無駄に格好つけな性格がこついうところに出

ているわけだが、別にそれは悪いことではないので無理に青い顔を引っ込めようとしている千草を知っていても、雫は素知らぬふりをしてやった。矜持を貫こうと言うのであれば、それを守ってやるうと言っことだ。

奏がじりと後ずされば流石に顔色どころではないだろう、雫もその様子が尋常でないと気づくや否や、その手を取って大丈夫か？とこちらも尋ねる。

だがしかし、奏は言葉を失ったままに何も返そうとはしないのだ。あまりの事態に雫も千草も応援を呼ぶことにしたらしい。

けれど二人が声を発するよりも早く奏が悲鳴を上げた。

ついで出てきた言葉、それはあまりにも奇妙なものだった。

「こ、ここ、気持ち悪い！何なの堀井さんって！？だってこの部屋だって、そのカップだって万年筆だって机だって布団だって……シートまで？！も、もうヤダ！嫌だ嫌だ嫌だ！」
「ど、どうしたんですか奏？一体何が……」

引き攣れたこの声に反応を返したのは何も雫と千草ばかりではない。別室を搜索していた鷺宮と澤田がやってきてどうかしたのかと飛んでくると、その尋常でない様子を見て仰天したようだ。

奏は滅多なことでは悲鳴すら上げないため、見慣れぬ光景に驚いたのだろう。

鷺宮は奏の肩を掴むとどうかしたのかと気遣わしげに言うものの、益々その悲鳴は強い恐怖を訴えるのだ。

わけも分からず混乱するばかりの奏を辛抱強く落ちつけようとしている鷺宮の脇で、澤田が私室へと足を踏み入れると、こちらもびたりと足を止めて一歩も動けなくなってしまうたようだ。

一体この部屋が何だと言うのか。

「ここ……ここは一体、何です？」

「何って、堀井の私室なんだろ？」

「いえ、分かりませんか皆さん。ここ……何か似てるんですよ」

良く分からないが違和感を覚えると口にされれば、雫は首を傾げながらも私室の中へと足を踏み入れじつくりとその中を見回していく。

何が何に似ていると言うのか。

あそこまで奏を恐慌状態へと陥れたものとは一体 雫は寝台、そして机、更に壁へと目を移してそこで漸くちよつとしたものを見つけた。

それは、一枚の写真だった。

「これ……」

「何だそれ」

「鷺宮さん、です」

壁に一枚、鷺宮の写真が貼り付けられているかと思えば、その周囲を取り囲むように幾つも鋳でとめられた写真に何かの紙の端切れにと、一見すれば無造作にべたべたと貼り付けられているように見えた。

一体何が貼り付けられているのだろうか、そつと雫はその貼り付けられている壁に寄るが、さっぱり意味が分からない。

「ああん？俺え？」

何で堀井の部屋に俺の写真なんてと呟くと、鷺宮は未だ落ち着かない奏をそこに置いて、私室へと足を踏み入れる。

けれど、一步踏み入れた途端にこちらも眉を顰めて訝る様にするのだ。

「何だ、この部屋」

「鷺宮、何だかこの部屋……おかしいですよね？」

「いや……おかしいつか……なんだ？なんか、知ってるような……ここ、どこだ？」

首を傾げて自らが感じた違和感を口にする二人に対し、何故分からないと奏は怒鳴りつける。振り向けばそのあまりの形相に二人は驚いた。普段の奏からはとても考えられない顔をしていたからだ。

「どうして分からないんですか二人とも！ここ……これは……鷺宮さんの部屋です！鷺宮さんの六年前に潜入任務で、その時使用した部屋なんです！だから、広くてあたりまえです！機材が運び込めるように、広い部屋を確保したんですから、当然でしょう！？」

それを耳にすれば雫は目を剥いた。

鷺宮、澤田もはっと目を見開く。

「……ここがそうなのですか？」

どういふことかと目で問う千草に雫は説明してやる。

「以前、ちょっとした任務があったらしく、一般の施設に潜り込むために、マンションを借り受け、そこで……と言ったことがあります……」

当時、降矢邸からの荷物運びを手伝うため奏はこの場所に来たことがあった。

「このマンションを見て、まさかと思った。けど、やっぱり……部屋まで一緒だし！……しかも、その……ペン、義経様の、ペンだ」

「え……」

雫が壁ではなく、指さされた机へと目を向ければ、そこには綺麗に箱に入れられた万年筆があった。

思わず雫はそれを取ってまじまじと見つめると、流麗な美しい文字で書きとられた字があった。

” T o d e a r S h i r o ”

「これ……」 T o d e a r S h i r o ” っ て、文字があります
が、鷺宮さんこれは……」

43 (それはとても大切な物) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

43 (それはとても大切な物)

雫の言葉が聞こえていないのだろう、鷺宮はそれを食い入るように見つめていたかと思えば、突然、手だけが別の生き物になってしまったかのように、手だけが鷺宮の意思に反して雫の手元へと伸ばされたように見えたかと思えば、それをあたかもむしり取る様にして取りあげた。顔どころか目線すら動かすことなくの動作であったために、少々不気味なと思ったが、そんなことは今はどうでもいい。問題はその万年筆だ。

鷺宮は万年筆に刻み込まれたその字を、指で愛しげに優しく撫でさすると、一筋の涙を零して言うのだ。

「あ、……あつた、あつた……義経、あつた」

「鷺宮……」

それは鷺宮が義経の部下になり、非人間的な生活にも多少慣れてきていた時のことだ。義経が当時はまだあのような性格ではなく、それこそ真面目腐った顔をして言ったものだ。

「これ」

「ん？なんだそりゃあ？」

「やる」

当時の義経は端的な物言いか酷く饒舌になるか、その二通りしかなく、その時はまさに言葉が足りな過ぎて全く意味不明だった。

突き出された手に乗るのは小さな小箱だ。それを受け取ると、鷺宮はプレゼント？と尋ねる。するとそういうものではないのだがと返され、まあ貰ったものなのだからと鷺宮は開けるぞと一言断り、小箱を開けた。

義経が言いにくそうに口を開く時点で相当面倒なものだと思ったのだ。

だからこそ早々に開けてしまつて問題を解消してやろうとしたのだが、そこに納められていたのは、いかにも高そうな万年筆だ。

それこそ、何の変哲もない万年筆の登場に、鷲宮は首を傾げた。とんでもないものが出てくるかと思いきやのこれである、何故こんなものをと疑問に駆られても仕方なかったと思う。

貰つてもいいのかと尋ねた後、お前の物だと返されはしたが、何故なのか気になつて更に突っ込んで尋ねてみた。

「どうして万年筆？俺なんかオネダリとかしたっけか？」

「いや……誕生日つて、何かを渡すものなんだろう？普通は」

「ま、そりゃ……普通の家ならそう教えられる、かな？」

良くも悪くも一般家庭とは程遠いところで育つた二人は良く分からないと言つことだろう。

当時の義経はそんなものを貰つたところで嬉しいと思えるような感性をこつそりむしり取られて監視され続けていたし、鷲宮は大量に貰い続けてそんなものに何か価値があるのかとさえ思つていた。

両者ともにまともには言い難い暮らしをしていたためにそうなのかと聞かれても、どちらもが答えを持ち得なかったのだろう。

なるほどこれはプレゼントなのかと納得するとはたと気づく。

先ほど、何と言われたらうか。

「誰の、誕生日だつて？」

「お前の」

「……いや……俺の誕生日つて、先々月っすけど……」

そつだ、とつくの昔に過ぎている。

どついうことかと益々混乱してしまえば、ついで言われたのはこ

んな、可愛らしい言葉だった。

「俺だけだつて聞いたから……だから、その……遅くなった、な」「いや、良く分かりませんが、どういうこと？」

「だから、俺だけお前に誕生日に何も渡してないって聞いて、……用意したんだ。遅くなつたけど、使え」

要は、澤田も塩見もプレゼントを贈つたと言うのに、自分だけ贈っていないのが嫌だったらしい。更には歳の割に妙に拗ねた子供のような物言いも相まって、男にこんなことを言うのは何だが、可愛らしくて仕方がなかった。

「お前なあ……」

照れもあつてがしがしと頭をかいている鷺宮に、義経はどう思ったのか、罰が悪そうにこんな言葉を口にした。

きまり悪そうに義経は、ぼそりと言い　それは、今まで貰つたどんな言葉よりも、破壊力が満点の言葉で、鷺宮はあまりのことに一瞬、声を失つた。

「は、初めてだつたんだ。人に、何か買うのなんて……」

「おま……そんなん、」

反則だろう。

「だから、その……遅くなって、悪かつた……」

恥ずかしかつた。けれどそれと同時に嬉しかつた。

ずっと仕えよう、そうは思っていたけれど、義経は未だ六花神からの枷により、精神が未発達で、鷺宮が心を尽くしても何一つ返る

ものはない。

だがそれも構わないと思っていた。
仕えようと思ったのは、この男に惚れたからだ。

全てを守るために戦おうとするその意思の強さ、気高い志に惚れたから仕えよう、傍に居ようと言った。だからこそ、何一つ返るものがなくともいい。構わないと思っていた。

だと言うのに、こんなのは反則だ。

貰えるはずが無いと思っていたものが、こんな風にぼろりとまさか、こんなに簡単に手元へと転がり落ちてくるとは思っても見なかった。

義経から与えられることがあるとすれば、それこそ、もっともつと先の未来になるはずだと、そう思っていた。いや、諦めていたと言うのに。

「お前……ずつりいなあ」

「よく、分からない」

「ずりいんだよ、お前」

そう口にする、鷺宮は手にした小箱をぎゅっと胸に押し付け泣き笑いのような表情を浮かべて言う。

「絶対に大切にやるから。有難う、」

「……そう、か。これからも宜しく、司郎」

始めて恥ずかしそうにはにかんだ笑みを向けられたのもその日だった。

鷺宮はなくしたと思い悔いていたその贈りものを胸に抱きしめると、司郎は俺だと告げる。

「司郎は、俺なんだ……」

「……どういうことだ？だって、鷺宮さんは鷺宮守だろ？なら、司郎って、だって……んじゃあペンネームか何か？」

千草の疑問は尤もだ。だが、それは全く違う。

雫は全員に目配せして、暫し思案したかと思つと、澤田へと義経について尋ねた。

「義経様は降矢郎にて指示を出しています。ですから……」

「そう……。ですが一度、お父様は千草に六花神義経と名乗っています。ならば……なんだかんだと言いつつも、千草を受け入れるつもりがある、と言うことですよね？」

「かもしれません。ロングギャラリーの一件もありますし、それに何より……宗一郎様が入れると口にしている。ならば……話してもいいのではないでしょうか？」

雫はその言葉を受けて、きゅつと唇を引き結ぶと、千草へと目を向ける。

何と言えばいいのだろうか。

「鷺宮司郎は……鷺宮さんの元の名前です」

「元の名前？」

「兎に角今言えるのは、それだけです。帰宅してからにしましょう。ここではどうでもどんな耳がないとも、限りませんから……」

44 (失せ物の行く先) (前書き)

今回の話はグロではありませんが、大変気持ち悪い思考の持ち主の話が出てきます。

読み飛ばしてもなんとか繋がるようにはするつもりですが、気持ち悪い人、と言うよりもぶっちゃけストーリーカーがです。

そういう人物がやってくることとか、読んでも気持ち悪いと言うだけでまあいいかと許せる方のみ読まれるのを推奨します。

ストーリーカーされたことのある方などは読まない方がいいかなと思います。

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

44 (失せ物の行く先)

持ち直した奏と澤田が私室の細々と置かれたものを調べていけば出るわ出るわ、鷺宮の私物が、堀井の部屋からは、ごっそりと山のように出てきた。

いや、出てきたという言い方では追いつかない。その部屋にある物のほとんどが鷺宮の私物であった。

奏は青白い顔をしながら、けれど真剣にそれらをひとつひとつ確認していた。

「万年筆だけじゃないよ、このクリーム、鷺宮さんが愛用してるやつだし」

「カップにソーサー……このカトラリー、まさか……」

忘れかけていた記憶がよみがえる。

料理長がカトラリーを割ってしまったメイド　今思えば堀井だが　堀井に「またお前か！」と怒鳴られていたが、あの時、カトラリーはきちんと棚に戻されたのだろうか。そして、棚に戻そうとして、それから誤ってカトラリーを割ってしまったのだろうか。

そう考えてはたと気づく。

実際は、割れたものは別のものであった可能性があったのではないが。

澤田は屋敷で使っているものと同じカトラリーを見て、その表面をじっくりと食い入るように見つめてみせる。

すると分かったのは、このカトラリーが使用済みである、ということだ。

誰かが使ったまま、ここにある。

それが一体誰の使用済みのカトラリーなのかなど、澤田は考えた

くも無かった。

背筋を先ほどから這いまわるそれに気付かないふりはもう、出来ない。

「気色わりい……」

「壁のこれ……鷺宮さんの字です。先ほどは何か分かりませんが、鷺宮さんの字ですよ、これ」

一枚一枚が全て違うそれらの紙片は、どれもこれも、くしゃくしゃだったり燃えていたり、原形を留めていないものだらけだ。

それもそのはずだ、内容を読む限り、鷺宮の仕事について書かれているものばかりだからだ。

そういった紙片が、鷺宮の写真と入り混じり壁一面に張られている。

それを見て、心の底からぞつとした。

堀井はこの部屋で、毎日鷺宮の私物に抱かれながら眠っていたのだ。

鷺宮は呆然と紙片を見つめながらつぶやいた。

「それ……俺が屑入れに突っ込んだやつだぞ……」

それを聞けば千草が流石に今まではそんなことは無いだろうと、有り得ないと思いき口にしなかったのだろうが、最早限界と言ったことか 悪いとは思いが無理だと前置いてからこう言った。

「あんた……ストーカーされてたんだろ、この堀井って女に」

「俺が？」

「そうだ。この部屋さつきからあんたの物だらけだ。さつき見つけたカフスだって、あんたのだったんだろ？」

「……ああ」

「先日カフスが見つかったって言ってましたのに……」

あれは糠喜びだったというのか。

先日なくしたと思っていたカフスが見つかったのは鷺宮にとっても澤田にとっても、記憶に真新しいものだ。

だが、その実は違ったのだろう。

元からカフスはなくなっていなかったのだ。盗まれてここにあっただけなのだから。

澤田は深く息を吐き出すと、苦り切った顔で言う。

「あれは恐らく、盗んだのがばれないようにすり替えた新品でしょうね。それを鷺宮の部屋にさり気無く配置しただけ……だったんでしょうね」

盗んで、そして新品を置いておく。それこそ巧妙に鷺宮の私物を堀井は手に入れ続けていたのだ。

元の物を失敬して、そしてなくしたと思いきませる。いいや、本人が勝手にそう思いこむだけだろうが、鷺宮は「またなくしてしまっただか」と思いこんだ。実際、しょっちゅう物がなくなれば、そのうち勝手に「自分は物を直ぐになくす人間なのだ」と思いこむことは考えられる。そしてそう遠くない日付にそれが見つかれば「おかしい、なくした？ いやでも……」などと考えていた所に見つかるわけだ、本人の勘違いと思わせることに成功するのだろう。

鷺宮は、よく物を失くす粗忽者として自分を認識してきた。そして周囲もそのように随分と前から思っていたはずだ。

だが、その実は違ったのだ。

彼の私物の本物がここにあり、そして私物の偽物を本人に持たせていたのだから全く違ったのだ。

巧妙に私物をに手にする方法を堀井はその自らの職により確保していたのだ。

メイドならば、私室に侵入することなど容易だ。掃除婦としての仕事もしていたようだから、それはそれこそ簡単だっただろうと簡単に推測が成り立つ。

そしてメイドならばこそ、その私室での私物や先ほどのカトラリーではないが、洗い場に侵入してそれを割ったと見せかけて持ち帰ることも出来たのだろう。

実に巧妙に張り巡らされた工作だったと言うわけだ。

その方法を全員が理解したところで益々不気味だと唸るように言っただけだ。

「いや……だって、なんだってまた俺なんだ？ だっておかしいだろう？ 俺の、どこが？！ だ……って、俺はその堀井って女の顔なんてそれこそ今回の話で漸く知ったくらいだったんだぞ？！ その俺になんぞ！？ おかしいだろ、有り得ないだろ」

兎に角ストーカーされる理由そのものすら思い当たらないし、堀井と何の接点も無かったと告げる鷺宮に対し、周囲はまるで汚物を見るような目つきになってきた。

彼らの目は一様に「お前、また女遊びして手ひどく捨てたのか？」と語っている。普段の行いを鷺宮は深く反省したが、この件だけは断じてない。鷺宮は屋敷の女に遊びで手を出そうなどと考えてみたことすらなかった。

「……っつか、マジで気色わりい……最悪だこの女。何でもかんでも揃えてる。カトラリーも使用済みって、どう考えてもあんなのだからこれ！」

「俺の使用済みかなんて、分かったもんじゃないだろ！」

「あんなのに決まってる！ 大体」

そつ口にしようとしたところで、奏と雫がひつと息を飲んだ。

どうかしたのかと二人は先ほどまで怒鳴り合っていたのも忘れてそちらを見ると、そこにあっただのは鷺宮の衣服一式だ。仕事用から私服、何から何まで全て揃っていた。それこそ、下着まで。

それを見れば全員寒気どころではなく、ただただ嫌悪に吐き気を催してきた。

「なんつ……何なんだよ堀井つてやつは!!!」

「い、いやあああつ!」

鷺宮も千草も、そして雫まで恐怖に引き攣れて喚き始めたと言つのに、青い顔をしながらも、澤田と奏はそれらをじっくりと検分していく。

「これ、全部一度鷺宮さんがなくしたり、もしくは洗濯から随分長いこと戻ってこないって言ってたやつですよ」

そして、こちらもカフス同様、数日後にはきちんと本人の元に届けられた。

それも、洗いたてで新品同様になって、だ。

これも言わずもがな新品同様などではなく、新品だったのだろうと気がつけば、嫌になる。

「です……ね。後で戻ってきたことを大層喜んでいたのを覚えています」

「嘘でしょ？全部こつちが本物だよ。それも……鷺宮さんの香水の匂いがするから……多分、それこそ全部、……着たまんま？」

それを聞けば、周囲はあまりのことに言葉が出なかった。

44 (失せ物の行く先) (後書き)

そこまで気持ち悪くはないと思うんですが一応まえがきに書いた通り、ストーリー話は微妙にこう……取り扱いが難しいですよ。うえー、不気味ーって笑える人ならいいんですが、本気でちよつとした文面でも無理！ってなる人がいらつしやるので、無理そうだなってちよつとも感じたらスルーが一番と思います。

45 (全て彼女の計画通りに) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

45 (全て彼女の計画通りに)

全員が絶句する中、鷺宮が着たままを取っておいたのだろうと最後まで口にした奏も、その体臭のしみ込んだ衣服の匂いに何かが刺激されたのか、堪らずキッチンへと駆けていった。最早限界だったのだろう。

澤田もそろそろ限界のようで、奏が駆けて吐しゃ物を撒き散らしているだろう音をさせればつられたようだ。こちらはトイレまで駆けて行き、じゃばじゃばと豪快に水の音をさせながら胃の中身を撒き散らしていった。

「ま……間取りも同じだよな、この私室なんか特に」

これも言わずとも分かるが、鷺宮の私室の、だが。

一度、二度と話をしにいくという名目で彼の私室へと入ったことがある千草は、間取りが小さくなっただけで完全に一致すると呻くように告げる。

鷺宮の私室は馬鹿にでかい部屋で、二十畳を優に超えるスペースが確保されているのだ。寝台などがあるスペースとは別の私室のみの空間がそれだ、その巨大な空間、そこと比較すべきではないとは分かっているものの、それでも可也小さくされたと言わざるを得なかった。それも、この堀井の私室が、であるが。

鷺宮は苦り切った様子で頷くと、目頭を押さえて口を開く。

「……認めたくはないが、そう……だな」

「んで、あんたのもんで全部揃えられてる」

確認するように言われれば、投げやりに答えた。

「知りたくもなかったがな」

ただし、鷺宮にもわけが分からなかった。
堀井の真意がまさしく、分からない。

けれどそんな鷺宮に気づいていないのか、千草はあえて無視する形で話を進めていく。

「そんな堀井って女からしたら、ここは宝の山なわけだ」

「そりやお前、無理やりな結論過ぎるぜ。相手がそれこそストーリーだったらつてことが大前提じゃねえか。そんなの無茶苦茶だ。きちんと調べもしないでそれはあんまりだろうが」

だが、それには千草は賛同出来ない。

これはどう見ても いや、誰が見てもこれでは鷺宮が堀井にストーリーカーされていたと取るべきなのは明白だったからだ。

異常ともとれる偏愛だ。単なる山田ないし、もしくは他のどこかの組織からの依頼で動いている末端の構成員程度かと思っていたら、開けてびっくりという奴だ。

異常者であるとは誰も、つい先刻まで思っても見なかったのだ。

鷺宮の言葉に対し、聞こえているだろうに持論を構わず千草は続けた。

兎に角今はこういう可能性がないか、ああいう可能性はないか、そういう観点から探るしかない。

「そんな宝の山をほっぽり出して、その女は一体長期でどこに出かけたんだろうな？」

その答えは、扉の外からもたらされた。

「その答えはこれだね、はいこれ」

塩見とエマがやってきてぴらりと渡してきたのは一枚のパンフレットに見えた。

「美容外科クリニック？」

そこに書かれていたものは、短期からも受け付けている流行りのプチ整形から完全な顔面の別人になるほどの手術、その全てまでを引き受けてくれる、とある美容外科病院についてが紹介されていた。

「まさか」

「そのまさかのようだよ」

「どうやら完全な整形手術を受けて新たな戸籍をも購入する予定も立てているようです」

戸籍を売っているバイヤーの所在まで辿りつくルート、そして外科手術、それらが記されたものが書かれたメモがあったと言う。

ただし、これはいつバイヤーに会うなどの時期が書いてあるわけではないため、本当にこれは仮の予定というものなだけだ。日程でないのが惜しいが、これこそが重要な手掛かりには違いなかった。ならばもう、それは当たり前だろう。

「逃げる算段はもう………ついてるってことだよな」

「こうしたルート確保までされていると言うことは、確実に何がしかのでかい組織が関わっているはずですよ。矢張り、大元がどこにあるならば、ターゲットの確保は不可欠でしょう」

エマのこの一言に六花神の関係者は揃って頷いた。

ただ一人、千草だけはまるで映画の中に迷い込んでしまったかのように、事態を夢か何かの中にいるようだと、他人事のように感じ

ていた。

「ところでご両人よ、出番を見計らっていたような出方だったな？もしかしてお前ら、ずっと見てたのか？」

「いいえ？見てはいませんでした」

「単に気持ち悪いとか叫び声が聞こえたから待ってただけだよな？」

「ええ。そんな不快な部屋に入りたくなかっただけです」

「……俺らだって長居をしたくてしてたわけじゃねえぞ。全く。お前さん達が早くそいつを持ってきてくれりゃあ、俺たちだってこんなもん、見なくて済んだつてのによお……」

「ですがそれにより私物が見つかったのも事実でしょう？さっさと本当に必要なものだけ手にとってください。全て焼却処分しますから」

「なんだつて？」

焼却処分と言われれば干草はどういうことかと聞き返した。だがエマは当たり前だろうとばかりにいうのだ。

「こんなもの、何に使用していたか分からないのに全て持ち帰れるわけがないでしょう？……まさか、持ち帰りたいなんて言うのではないでしょうね？」

そうなら貴方の神経を疑うわと、エマは冷たく言い放つ。

「ああ、いや……うん、そうだな。全部燃やしてくれ」

俺には義経から貰ったペンだけがあればいい、そう言い残して鷲宮は部屋を後にした。

物に思いは込めない、あるのはその時の贈った者からの気持ちだけだ。

それさえ戻ってきたのだから、彼にはもう、他の物は必要無かつた。

46 (ヒュプノシス) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

46 (ヒュプノシス)

聖林美容外科クリニック、そこが堀井の昨日から入院している病院だ。

そこはあのマンションから見て更に郊外に位置する場所にあったために、櫻子と須賀は島田に屋敷へと先に連れて戻って貰った。

帝都より段々と離れていくとなれば、二人をこのまま連れまわすわけにもいかないだろう。かといってこの時間帯に学園に戻すなど出来ないため屋敷へとあいなつたわけだが、後で二人からは盛大な抗議があるだろうことはもう、覚悟していた。

なんせ先に島田へ連れて帰る様にと告げた時、直ぐ様端末に二人から連絡が入ったのだ。電源を直ぐに落としたが物凄く留守電などに喚き散らしていたのが聞こえて怖くなった。

雫は澤田の運転する車両から降りると絶望一色に染まった声で言う。

「追及をされましても、一体堀井さんのことはどう言えばいいのでしょうか？もつ……お終いです」

かんかんに怒っていた電話口の声を思いだして雫はふるふると全身を小刻みに震わせている。

お終いとは言い過ぎだとは思うものの、今朝のあれがあつたばかりだ。須賀としてはあまり離れたくないのだろう。

また何かあれば、その時こそ自分は と意気込んでいた彼女を思いだして千草も奏も苦笑した。あれでは雫がまた無茶をしにいくのではないかと思っても仕方ない。

そしてそれは事実そうだ、自分達は無茶をこれから押し通しにくいのだから連れて行けなかった。

けれどそれが千草にも奏にも分かるといふのに雫にはまだ分から

ない。

頼ることをずつとしてこなかった後遺症とも言つべきものかとも思うが、こればかりは経験則だ、これから雫自身が学ぶしかないことだった。

兎に角雫は、二人の怒りがどこから来るものか分からず、だからこそ尚更怖いのだ。

どうその怒りを鎮めればいいのか分からないのだから、その恐怖も分からなくは無いのだが　だからと言って誰にもそれはどうすることも出来なかった。

「いやまあ……お終いつてこたあねえだろうが」

事実、何と言えはいいのかは鷺宮達にも答えようが無かった。

郊外にあるというだけではないだろう、まるで西洋の城のような重厚で華美なつくりをしたクリニックの中に入ると、我々は彼女の元雇用主なのだが少々込み入った要件で直ぐにも話さなければならぬことがあると言い、なんとか入れて貰えるよう手配すると、鷺宮と澤田、そして子供三人のメンバーで行くことになった。

塩見とエマは元より肉弾戦を得意とするため、こういうことは不向きなのだそうだ。そこらへんの事情は子供たちには分からなかったものの、そう言われれば納得するしかない。

美容整形、それも外科手術の病院だと言つのに、このような怪しい集団を、それこそ患者の親戚でもないのに入れてしまつてもいいものかとも思つたが、千草のそんな疑問には雫が答えてくれた。

「澤田さんの目は、いつも細めているのは人とあまり目を交わさないようにするためなのです」

「どういうことだ？」

「視線を交わすことにより、澤田さんは相手を　簡単な命令だけ

ですが　言うことをきかせられるようになってしまふんです。それこそ一目あえばそれだけで十分です。だから、あまりそれは乱用すべきではないと言うことで、目を開かないようにしているそうです」

それは契約したことに對する付加価値だ。

稀にそれはあるのだが、契約し、従者としての能力の覚醒以外にも、時たまこうした別種のもが身体に現れることがある。

澤田のこれもそうだった。

目そのものに出たために、様々な不便さが出ているらしいが、こ
う言う時は有難い。

だから先ほど受付で堀井初枝はどこに居るかと尋ねにいき、そこ
に入ってもいいかと尋ねに行く役目を買って出たのが澤田だったと
告げられれば、何故一人で先ほどクリニックに出向いていったのか
漸く納得がいった。

他の人物は逆に邪魔だったのだ。

同じように目を見られても困るし、命令する人間の声が複数聞こ
えてしまつても、術中にはまつた相手が混乱しかねない。それは拙
いと言うことだろう。

成る程納得したとばかりに頷けば、雫は随分と物分かりがいいな
と感心した。

外の人間にもかかわらず、千草はこういう、突拍子もないことを
言われても案外直ぐに慣れてくれるようになった。それがいいか悪
いかは分からないものの、凄いと雫は素直に感心していた。

だが千草としては凄いですねと感心したような目を向けられても
嬉しくはないのだろう、雫からの尊敬の眼差しを無視すると、こち
らも凄いなと口にしてくる奏のことも無視してさっさと先を歩き始
めてしまふ。そして二歩三歩と二人から離れて、ようやく息を吐き
出した。

千草からすれば二人の方が余程凄いな。なんせ二人は生まれてから

このかた、ずっとこのようなわけのわからない連中と一緒になのだ。そのほうが大変に決まっている。

胡散臭いものを見るような目で千草は澤田を見てこんなことを言ったものだ。

「あんたら……立派に詐欺師になれるな」

様々な情報を得て、相手を籠絡し、更には面倒になればその目で無理にも言うことをきかせられるとなればもう、敵などいないに等しいだろう。

それこそ詐欺を働くにはもってこいだと請け負えば、呆れたように返される。

犯罪に使ったことは無いし、今後使う気だつてさらさらないと。

「なんでだ？それこそやりたい放題じゃないか。まあ……捕まるところがないとは言い切れないけど」

「あのなあ、百パーの確率で捕まらないならそれもいいかも知れんがな、まかり間違つて俺達が捕まってみる？それこそ痕跡が残るだろうが。もみ消せないこともないが、それでも、面倒に巻き込まれない方が余程いい。俺らは一般市民なんだぜ、坊や」

「絶対に一般市民じゃあないだろうが、言いたいことは分かる

千草は面倒くさげにははいはいと何度も首肯して返した。

そんな能力があるのだから、てつきり、もっと派手に様々なことをやらかしているのかと思っていたがどうやら違うようだ。

「それとな、俺をこれと一緒にすんな。つつか……少年もいい加減に驚かなくなってきたもんだなあ」

これと言われた澤田が鷲宮の尻の肉をぐっと摘むと捻りあげる。

すかさず鷺宮の指が澤田の脇の肉を掴みあげるとこちらも容赦なく捻りあげてやった。

「はは、痛いですよ鷺宮」

「そうかあ？俺も痛いんだがな、澤田君」

疑問符を浮かべる三人に、二人は元のように直ぐに戻ると続きを促す。

「ほつといてください。要は……慣れです」

「慣れ、いいじゃありませんか。慣れることはいいことですよ。貴方にとつても、私達にとつてもね」

それには賛同しかねた。

千草が降矢邸の住人達に慣れる時がくるならば、それはまさしくあの屋敷の中の奇妙な住人たちと運命を共にする覚悟が出来た時だろう。

それにはまだ いや、可也の時間を要することだろう。

ただし、時間がかかれば何とかなると言う目算も何もたつてはいないのだが。

「一生来ない気がするけどな」

「そうかー？そつでもねえよ、なあ、お嬢？」

「さあ……？私には何とも言えません。ただ、これだけは言えます。千草が手を取ろうとすればもう、そこには手が差し出されているのです。だから、いつだつて千草は内側に入ることが出来る」

ただ、それは一方通行でしかなくて、帰りの切符は、用意されていない。

矢張り自分には過ぎたものだと首を振ると、千草は先へ進もうと

全員の足を促した。

47 (会ったことも無い、君) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

47 (会ったことも無い、君)

暫く進むとそこは開けたホールがあった。そこはどう見ても病院とは思えないつくりで、外観と同じように、実に豪華で煌びやかな景観を誇るホールを見て、千草は呆れたように言ったものだ。

「なんていうか……金の使いどころを大いに間違ってるよな。大体ここは病院だよな？」

おかしいだろうと言う千草に、ふむと奏はつぶさにそれらを観察して確かにという。

「美しさを追求する美容整形だけにずいぶんと煌びやかですね」

「そういう問題でしょうか……」

子供たちの若干呑気な会話を背中であきながら澤田は隣を歩く鷺宮を見た。

すると鷺宮が廊下を歩きつつ、ふいに前置きなく口を開いた。

「なあ、何で堀井初枝は俺に……執着するんだ？ ストーカーって言うのもなんだか解せないし……どういふことなんだろうな」

それは今更とも言える疑問であった。

一人ごとのように漏らされたその言葉に、雫は首を傾げる。確かにそうだ、自室、それも私室、そして寝室に割り当てられた部屋にあのように鷺宮の私物を蒐集することからしてまず、堀井の異常性は見えてくる。

だがしかし、その実分らないのは何故、そのように鷺宮一人に焦点を当てたのか、そこである。

だが、そこを疑問として口にしなかったのは奏と千草である。何を今更と二人が口々に言えば、そういうことじゃなくてと鷺宮がその言葉を封じる。

「だから、そうじゃなくて……俺はあの写真のお嬢さんを知らないんだよ」

「知らない？知らないとは鷺宮さん、それは一体……どういうことでしょうか？」

人となりを知らない、と言うことだろうか。

もしくは　と、考えていた所で鷺宮が語調を多少荒げて言う。

「知らないつつたら知らないの！言葉の意味そのままだよ。もちろんメイドなんだから屋敷内ですれ違うとかはそりやま、多少はあったはずだが、俺はあのお嬢さんに何であれほど惚れられたんだ？そっからして分からないんだっつ。大体、ストーカーってのは惚れたはれたなはずだよなあ？」

「そういう場合ももちろんありますが　ストーカーと言うのは異常な他者への執着ですから、嫌いだと言う負の感情からなる場合もあるそうですよ」

となると、惚れられている可能性だけではないと言うことか。

益々持つて分からないと鷺宮が首を横に振ると、雫がおずおずと口を開く。

「あの、本当に心当たりはないんですか？相手の方は三年も働いていただいたのですし、三年もあれば鷺宮さんは私と違い、メイドの方々ともある程度屋敷の仕事のことなどで、会話などなさったりすることもあるのでしょうか？そっいったことで好意を持ったということもあるのではないのでしょうか」

「いいや、全然全くこれっぽっちだつて無かつたぜ？堀井つてやつとは言葉を交わした記憶すらねえよ。なあ、澤田」

「……さあ、もしかしたらですが、職務上話をしたことはあつたかもしれませんが、それでも個人的に話をしたことは無かつたはずですよ？」

この二人はほとんど二人で組んで仕事をするだけに、澤田が知っている範囲ではそれはないと断言されれば雫は首を捻る。

私用で確かに外出することは彼ら従者にもある。だがしかし、私用とは言えいつでも義経の命　六花神の命があれば、戻れる範囲内に身を置かねばならず、常にその居場所は伝えておかねばならない。それこそ、どこぞの軍人やレスキュー隊員等と同じである。

二人一組で常に出歩くようにしていると言うのは、そういう職務上と言うこともあるが、不測の事態などを考慮し、と言うこともあるのだ。

誰かが義経を警護しなければならぬ、更には仕事もたった一人で出向くことは無く　となればそれこそ、鷺宮本人と接触していれば、誰かが気づいても良さそうなものだがそれが全く無いようなのだ。

更に言うなれば屋敷のメイド達とはそれこそ、個人的な接触はタブーとされてきている。理由はこちらにも至極単純なものだ　どこからどう、何がばれるとも限らないからだ。

だからこそ思うのだ、どこでどう、堀井と鷺宮に接触があつたのか、それが分からないと。

「どうということでしょうか？」

分からないと雫は首を傾げるようにして考え込むと、この言葉に對し、奏が先ほどまで噤んでいた口を開いた。

「もしかしたら……いや、ううん……もしかしたらですけど、ほんとにそういう組織の人なのかな？ だったら……鷺宮さんの潜伏先だった場所をおさえて、そして私物を押さえて……鷺宮さんになり替わろうとした？」

最初に自ら捨てた答えを口にする奏に、それは無理だろうと千草が首を横に振る。

鷺宮と堀井の体格差はそれこそあり過ぎる。堀井は華奢とまではいかないものの、平均的な女性そのものの体格をしている。身長は百六十センチ、そして体重も平均体重と言ったところで五十二キロだ。容姿は平凡と言ったところだろうが、それでも美容外科手術を受けるとなってはもう、分からないだろう。

それに対して鷺宮はと言うと、身長は元より、体重もそこそこある。がっしりとした体格とまではいかないものの、見栄えのする男性像だ。これを持ってきて「これになりかわれ」とは誰も言うまい。そもそも、言ったところでなれっこない。

「それこそ荒唐無稽すぎる。大体、なりかわるも何も、性別が違う。なりかわれるわけがないだろう」

「いや……それは飽く迄一つの考え方というか……だから。後はもう、どこかで鷺宮さん本人が忘れているようなことでだけ、堀井さんが鷺宮さんから何かされて　？それで恨みからの犯行ってのはどうかな？」

そういう線もあるだろうけど実際はどうだろうかと首を傾げる奏に、鷺宮は酷く疑わしげな視線を超越す。

その目は言っていた、俺がそんなことするような奴にお前には思えるのか、と。

それにはあえて気づかないふりをして澤田が奏の言葉に答えてやる。もうここにくれば鷺宮の個人的な感情どころの騒ぎではないの

だから仕方ない。

「奏君、それだとお嬢様が狙われるのがおかしいですよ」

「ああそうか」

じゃあ本当に何が目的の犯行なのだと頭を抱えてしまった奏に、
雫はちよつと変だと鷺宮へと、それこそ何度目かの質問であるが尋
ねた。

本当の本当に、と念を押して。

「……接触もなかったのですか？」

「ねえよ。どこるか今回堀井ってお嬢さんのマンションにいく話し
になって初めてそのお嬢さんの存在を知ったくらいだ。それまであ
んなメイドがいたことなんて知らなかったんだぞ？」

それでどうやって知っていると言えるんだと言われれば雫は肩を
竦めた。どうやら本当に知らないようだ。

だが、これには澤田だけが同意しかねた。

彼は鷺宮が忘れている事項をただ一人この中で覚えていたからだ。
堀井がカトラリーを手に入れたらうあの日のことを、違和感を
覚えたあの感覚を。

沈黙を守る澤田に鷺宮が首を傾げるものの、何となく問いただす
事が出来ない雰囲気だ。どうかしたかと尋ねたものの、矢張り、言
葉が返されることは無い。

「相手は知ってる、けど鷺宮さん自身が知らないとなると……」

矢張り背後に何者かがいて、と言うのが妥当なのだろうか。
兎にも角にも急いで堀井を確保しなければならなかった。

47 (会ったことも無い、君) (後書き)

暫く鬱展開過ぎて申し訳なさすぎる

48 (ねえ、私は上手にやれたかしら?) (前書き)

ここらへんからホラーではないですが、ストーリーカーの本領発揮です。

耐性がない方はご遠慮ください。

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

48 (ねえ、私は上手にやれたかしら?)

そこは院内の豪華な空間と比べてあまりに素っ気ない場所だった。真っ白な空間の中にぼつんと寝台が一つあり、そして周囲も白で塗り固められた一室の中に彼女はいた。

彼女自身も真っ白に塗り固められたかのように白一色で、そのまま溶けて病室に同化してしまうのではないかとまで思った。

だが、彼女が白くなったわけではない。単に全身を包帯でぐるぐる巻きにされているために真っ白になってしまっただけだ。それを解けば肌の色がするりと剥けて見えてくるはずだった。

堀井は病室に入ってきた面子を見て嬉しそうに目を細めたように見えた。実際はどうかは分からないものの、包帯の下で目が細まった様に見えたのだ。単に顰めただけかもしれないが、口元も引きつりながらも笑みの形をかたどろうとしているように見えることから、笑っているように見える。

「こんにちは、堀井さん。術後と言うことですが、御加減はどうでしょう?お話は出来ますか?」

気遣わしげに雫が尋ねると、堀井は興奮した様子で首肯する。

あまりにも勢いよく頷いたためか、首元が引き攣れたようでも首を押さえて呻く堀井にそつと雫は手をやる。

「大丈夫ですか?!」

だが、それは澤田に阻まれてしまっ。

「何故ですか!? 離して!」

掴まれた手を振りほどこうとするも、澤田の力の方が強い。

どうしてこのようなことをするのかと睨みつけるも、澤田は冷たく言うだけだった。相手の真意がまだ掴めていない以上、近づいて何かあつたらどうするのか、そういうことのようなのだ。それを言われると雫は軽率さを恥じて身体から力を抜いていく。

「済みません……」

「いえ」

鷺宮が全員が一番尋ねたかったことだろう言葉を口にした。

「お嬢さんはどうやら全身整形を選んだようだが、そうまでして徹底して逃げようとしていたと言うにも関わらず、何故、俺達がここに姿を見せてはしゃいだ様子を見せた？理屈があわないんだが……一体どういうことだ？」

答えてみてくれないかと口にされれば堀井は長くなった睫を瞬かせる。どうやら睫の移植手術をも受けたようだ。自身の頭髪を移植したのだろうか、まだ瞼全体が腫れていたが長い睫はもう、彼女の瞼の淵を彩る立派な睫になっていた。

くぐもった、妙にしゃがれた声を響かせて堀井はこれに答えた。

「何故……私が……逃げないと、いけないの？」

「何故って……逃げようとしたからこそ、君は戸籍を手にし、別人になりすまそうとしたんだろ？そして見た目もそれに伴い変えなきゃならん。ってことでの全身を整形じゃないのか？」

そうでなければ何だと言うのか。

術後、まだ一両日しか経っていないためか、全身に様々な管やら針やらが刺さったままの身体で、堀井は必死に鷺宮に訴える。

「私は、逃げるためになんて……そんなこと……じいない、い」
「まさか……声帯まで手術したのか？」

しゃがれた声で必死になって言葉を紡ぐ堀井に声までとは恐れ入ると鷺宮が益々引いた様子で口にする、澤田が頭を振って違うだろうとこれを否定した。

「いえ……手術していたら一週間近く声は出せないはずでしょう。だから恐らくは全身麻酔による後遺症とでもいいですか、まだ麻酔が抜けきっていないのではないのでしょうか？」

だとしても不気味である。

全身をミイラのように包帯でぐるぐるの雁字搦めに巻きつけて、更にはしゃがれ声で鷺宮へと痛む全身を引きずってまで訴えようと言うのだ。これをホラーと言わず何を言うのか。

あまりの様相をきたしてきたため、千草は一步二歩と堀井から距離を取る。

冗談でも何でもなく、本気でこんなものの傍に居るのは精神衛生上宜しくない。

たじろぎながらも鷺宮は果敢に尋ねた。

「お嬢の写真、あれはじゃあ一体なんだ？他にも降矢からなんか持ってたんだろ？山田ってお嬢ちゃんとはあんた、一体どういう繋がりだ？」

こつ問いを投げかけると、堀井はにまりと笑みを形作るとけたけたと笑い声を発して言うのだ。

よくやったと褒めてくれと。

一体、何の冗談かと思った。

それこそ全員、耳を疑った。

「あいつ、貴方の秘密を……じゃべろうと、しだの。だから……私、あ、あなたの、ために、したの」

全く話が通じない。

「貴方のためにした？一体それは、どういうことなのですか？」

堀井の言葉に千草ははっとした。

「そうか！貴方のために……貴方の秘密……なあ、鷺宮さん。この人、あなたのことを山田の馬鹿から守ろうとしてるって言ってるんじゃないか？」

「守ろうと？」

鷺宮は澤田と目を交わし合つと首を傾げる。

守るとは一体、どういうことか。

「じゃあ何か？山田のお嬢ちゃんってのは、俺らの秘密をなんか知ってた？」

「降矢のですか？……では、降矢を脅迫しようとしていたのは山田さんのご実家、と言うことでしょうか？」

二人でどういふことかと堀井へ問うような目を向けると、けたけたとまた不気味な笑い声をあげて彼女は笑いこう告げた。

「わたし……じ、上手く、やれたでしょ、う？ねえ、じ……司郎、さん」

瞬間、室内の空気は固まった。

48 (ねえ、私は上手にやれたかしら?) (後書き)

どんどんストーリーカー怖い話になるので申し訳なさ過ぎて
そして知人からストーリーカーマジ怖いつて、リアルな話を聞いて作
った話なので、リアルに書いていけばいいなあとか思ってみたり

49 (私は何でも知っている) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

49 (私は何でも知っている)

「わだ、し……は、司郎を、守れ、た？じろ、う……わたし……上手く、やれ、た、でしょう？」

司郎、司郎、愛してる。司郎、司郎、貴方は私が守る。大丈夫。ねえ、褒めて？ 何度も何度もそれだけを繰り返す堀井に狂ったのかと千草は震えた。

あの部屋といい、この女は狂っている。

そしてこの狂気は全て、目の前にいる鷺宮に向けられているのだ。雫もあまりのことに固まってしまっている、そんな雫を奏が引き寄せ自分の体温をわけるように自分の腕の中に囲うように抱きしめた。

けれど雫は力強い腕の中にあつてさえも、堀井から目が離せないらしく、食い入るようにして堀井を見つめ続けた。

鷺宮がわなわなと肩を震わせたかと思うと、ついに次の瞬間、吠えたのだ。どうしてだと。

「お前は、お前……何故俺の名前を知っているんだ？ 一体……お前は何なんだ？」

最初、あまりの剣幕に全員が怯みはしたが、堀井は逆にそれを受けて、さも今思いだしたかのようにまたもけたけたと不気味な笑い声を発して告げるのだ。

その二人の落差を見て、何故だか雫はぞつとした。それどころか今や、言い知れぬ不快感が雫の背筋をずるとせり上がってくるようだった。

守るように回された奏の腕を無意識にぎゅっと雫は掴んだ。

「知ってる。知ってる。わたし、貴方のこと、なんでも……しつでる。う。ほんと、うの、名前……も、じ、実家、も……全部……知ってる。司郎、名前、三度変えた……の。けど、わたし、しってる……の。だって、司郎とわたしは、運命で……結ばれてるも」の

それを耳にすれば今度は澤田と雫、あの奏までもが目を剥いて怒りや警戒を露わにし出す。

千草だけがその言葉の意味が分からないでいるものの、今は聞いてくれるなということだろう、雫がそつと首を横に振って黙っているようにと目で言っ。

良くは分からないものの、千草は頷くと事の成り行きを更に一歩下がって見守ることにした。恐らくここからは、彼らの家の事情が絡んでくることなのだろう。

「わだじと司郎は、運命で……結ばれている……の。わたしは分かっ……てるの。全部。司郎……は、だっ……大変、だった……。いつもいつも。わだ……しも、あなたの、特別だから……分かる。わたしも貴方の……こと、頑張っ……サポート、していくから。ね？これからは……いつも一緒、よ」

「意味が分からない。俺はお前を知らない」

首を横に振りつつ言われる言葉に対し、けれど堀井はめげないでいや、気にも留めていないのだろう、続ける。

と言うよりも鷺宮の言葉が耳に入ってさえいないようだった。それも、酷く都合のいい部分だけを聞かぬふりを続ける堀井に鷺宮は段々と追い詰められていつている。

見ていてあまり気持ちのいい会話ではなかった。知らないと何度口にしても否定されても、堀井は自分のいいようにしか取らない。

恐らくは頬の肉が引きつるからだろうが、くすくすと小さく可愛

らしく、まるで少女のように笑いさざめく声は、今はけたけたと不気味な笑い声しか響かせない。

そしてそれは、鷺宮の心を少しずつ少しずつ、浸食していくのだ。

「なにいつてる……の？ああ、そっか、恥ずかしい……の？ふふっ、司郎ったら……かわいい……い」

「やめろ……俺は、俺はお前なんて」

「そうそ……う、司郎のお手伝いをもっともっと……効率よくするため……にね、わだ……し、顔……変えた、から。三年……たつたら、辞めないといけないなん……て、ね？ありえない、わ。もう……戸籍、買うの、だい。へんだった……んだ、か……ら。げほげほっ！」

堀井がせき込むのを見ても、雫も今度は手を貸そうとはしなかった。今手を出せば、堀井に食われるような、そんな錯覚すら抱いていた。そんなことはあるはずが無いと言うのに、それでも怖かったのだ。この目の前にいる、堀井初枝という人物が。

鷺宮が一步一步と背後へと恐怖から遠ざかるうと後退していくのを目にしても、堀井は気づかない。自身が鷺宮を怯えさせていると言う事実。

むしろ面白そうに、そして楽しそうに、鷺宮と共に居られる今に酔っているようだった。

「しろ……わだじ、……また三年、あそこで働いて、貴方のため……のために、もっともっと……役に、立って……見せれば、あそこで……ずっと……働ける、ように、なるはずだから。待ってて……ね」「やめ、止めてくれ……なんだ、お前、一体何なんだ……」

「やだ……司郎、変だ……よ。なんで……怯えてる……の？変な、しろ、う。そう……だ、あの女、は……秘密……知っているって……私を脅してきた、から、いつも通り……始末するんで……しよう

「？」

あの女とはこの場合、山田のことだろうか。

その前後の台詞から、始末と聞いて穏やかならぬことを考えてしまったが、まさかなと千草は周囲の面々の顔へと視線を走らせていくと、どうやら始末とは、考えた通りの殺すという意味らしいことを察する。子供である雫に奏にと、その二人までもが酷く強張った表情の中に、冷たいものを感じさせるようになってしまつのを見れば、嫌でもそう確信せざるを得なかった。

そうと知れば千草は、なんてところに足を踏み入れてしまったのかと己が不幸を省みてみたものの、それでももう遅いのだろう。

今更「はい、やめた」とはいかないのは誰が考えても分かることだ。そろそろ身の振り方を考えるべきかとも思ったが、そのまえに自分への自由選択が与えられているかを考える。恐らくは、ほとんど自由とも呼べない選択肢以外ないのでは、と思った。そしてこの勘は恐らく外れないだろうとも思った。

鷺宮は不気味さもあり、とうとう悲鳴にも似た声をあげて壁まで後ずさると白い布に包まれた堀井から目を離す事も忘れて叫ぶ。

「お前はなんだ？！一体、なんなんだよ！？」

「だいじょぶ……わだじ、やる……から。さいじょ、だから……言うこと、聞くために、写真……用意しただけど、でも……たぶん、まだ何か言ってくるはず、だよ。あいつ。今なら……油断してる、から……だか……ら、これ……終わったら……始末、してくるから、司郎……安心、していい……。秘密……守る……」

最早限界だった。

鷺宮の脳内は最早パンク寸前だ。何故自分達の秘密をこうまで深く知り、更には事細かに理解したうえで発言してくるのか。

一体彼女は何者なのだと考えてみても、一向に分からない。

そして不気味に笑い、何度お前を知らないと言おうと口を開こうとも気にしないでいいとばかりにその鷺宮の否定する発言を無視するのだ。
堀井の私室のこともあった。

鷺宮のその全てを保存するかの行為だけでも怖気が全身を襲ってくると言うのに、ことうした鷺宮の隠していた秘密までいつの間にか暴かれているのだ。恐怖と言葉で言い表す事など最早不可能。ただ恐ろしさから鷺宮は、ぎゅっと手で強く耳を塞ぎ嫌だと叫ぶ。それは鷺宮が堀井という、狂気そのものに負けた瞬間だった。

そうして叫び続けたかと思えば、今度は急に押し黙った。かと思った次の瞬間のことだ、鷺宮は吠えた。絶叫した。
もう嫌だとのその魂からの叫びに、全員が圧倒された。

「鷺宮……さん」

全員がもう限界で、中でも鷺宮は当事者だ、その精神的な負担も相当なはずだった。それを思えば何も言いたせない。

「何だ、何だ何だ何だ何だ何だ何だ何だ何だ！お前は一体何なんだ！何なんだよ！」

「司郎ったらどうし……たの？変な、司郎」

けたけたとまるで動じない堀井に、鷺宮はもう嫌だとその瞬間、切れた。

流星に煩いと病院内で叫ぶなど言うことだろう、個室を仕切る扉が開け放たれたが、そこに居たのは看護師ではなくエマだった。

50 (暗転) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

中々戻ってこない雫達の様子を見に来たのだろう。

扉を開けて途端のこれである、エマも驚きはしただろうが、止めることは出来なかった。

鷺宮はその場から地面を蹴ると、堀井の顔面目がけて拳を振りおろそうとした。

あまりの恐怖から、堀井そのものを消そうとしたのかもしれない。恐怖そのものを消し去ろうとした鷺宮に、全員、指一つ動かすことも出来なかった。

それこそ義経程ではないが、彼の拳もそれだけで凶器だ。当たれば堀井は無事では済まない。

強行手段とも言えるそれに待ったをかけることも出来なく、全員がしまったと思った瞬間のことだ。

殺意を漲らせて飛びかかる鷺宮の前に、ぱつとその人は忽然と現れたかと思えば、次の瞬間、鷺宮へと強力な蹴りを見舞っていた。

綺麗に腹部へと入ると、鷺宮の体は綺麗に背後に飛んで壁に叩きつけられた。鷺宮も流石に身体を九の字に折り曲げ低く呻く。

強烈な一撃だった。

「何してるんだ馬鹿！」

塩見は強烈な蹴りを見舞った瞬間、その場で猫のようにくるりと堀井の身体を横たえているパイプベッドへと着地を決めると、任務を忘れたのかと大喝した。

突然現れた塩見に驚いたが、エマの手にしている端末がちかちかと点滅しているのを見れば、雫は「ああ、エマが塩見さんと呼んでくれたんですね」と理解した。

よくもまあ、あの状態で端末を操作出来たものだと感心すると同

時に、自らの身体を縛りあげている、目に見えない束縛を少しずつ解いていく。

あまりにも強い緊張に縛られていたのは、何も零一人では無い。千草も奏も、澤田でさえ全身をぎくしゃくときこちなく動かす様を見れば、それほどまでに堀井そのものに全員が恐怖を感じていたのだという認識を改めて抱いた。

塩見はパイプベッドからひらりと降り立つと、呻く鷺宮の襟を掴んで自らの方へと引き寄せる。

「何があつたか知らないが、自分を忘れて勝手な振る舞いはしないでよ！降矢君からの命令は生かして連れ帰ること！忘れたの！？」

「う……るせえ……」

「煩いじゃないよ！馬鹿じゃない！？」

そこまで口にしたところで塩見は気づく、鷺宮の瞳の中に、ただならぬ程の恐怖が見え隠れしていることに。

それを見つけた瞬間息を飲むと、塩見は慎重に尋ねた。

一体、お前に何があつたのかと。

けれど鷺宮から答えが返ってくることはなかった。

鷺宮が口を開くよりも、二人を取り囲む人間が口を開くよりも、それよりも早くその声は跳んできたからだ。

それは塩見を強く非難する声だった。

「しろ……に、何するの、よ！」

「……まさか、君……堀井初枝？」

塩見はゆっくりと振り返ると、堀井の姿を視界の中におさめて呻く。

彼女もまさか、全身を整形しているとは思ってもみなかったのだろう。包帯を全身に巻きつけて、腕も足も力が入らないのだろう。

小刻みに肩を震わせながらパイプベッドの上を這い、二人の方へと近づいてくる堀井に、塩見はぞっとした。

ガシャンと音を立てて点滴が倒れる。

「司郎……怪我はない？」

「……」

「なんてこと……ずる……の！」

ベッドから這い出て二人へと迫る堀井に雫は慌てて止めようとした。両腕に突き刺さる無数の管に針にと、彼女の腕に引っ張られて今ではもう包帯は血まみれだからだ。

もう止めるとベッドの上に戻るのだと言っても堀井は聞きはしない。

彼女の目につづるのは、それこそ鷺宮と、彼を害する塩見だけなのだろう。

塩見もこれを見てなるほど、自分が呼ばれたわけはこういうことかと思いはしたがそれも今更だ。

やった後で今更あれは違つと、そんな言葉を発したところで無意味だ。そもそもそんなもの堀井は聞く耳持たないだろう。

そして、堀井自身先ほどのことが間違いだつたなどと口にすればどうにかなる相手でもなさそうだ。

どうするかと考えていると、掴んだ襟ぐりから伝わる感覚がおかしなことに気がついた。

見れば鷺宮の様子がおかしいのだ。

なんだと思ひ訝る様にして尋ねてみるも鷺宮は答えない。ただただ酷く怯えた様子で何も無い地面を見つめているだけだ。

尋常でない様子の鷺宮を見て、そして迫る堀井を見て、塩見はどうするべきかと迷っていたが、そこにエマが最悪だとぼやくように口にしたかと思えば、次の瞬間無造作に堀井の傍へと寄っていき、その首に手刀を叩きこんだ。

容赦のない一撃である。

これには武道の心得のあるものでさえたまったものではないだろうが、もともと堀井はそういったものは何一つやったことがなかったらしく、あっけなく昏倒した。

それを冷たい目で見降ろすと、エマは堀井に触れた手の部分を、まるで汚物に触れた後のようにハンカチで拭いさる。

「本当に最悪ですね。このターゲットは一体なんですか？気色悪い」

51 (六花神という一族) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

51 (六花神という、一族)

「気色悪いってエマ、あんたねえ……」

ベッドがから上半身が落ちた形で昏倒している堀井を塩見が元通りベッドへ寝かせると、

あまりな物言いに流石に腹が立つたらしく、塩見がエマへと詰め寄るが、エマは気にした風でもない。

むしろお前は何も知らないからだとはかりにいうのだ。

「大変不快なものが視えました。気色悪い。触れるんじゃないわ……」

そう最後に付け足された言葉を聞けば、一体それは何の事かと雫は首を傾げた。

けれど塩見にも澤田にも何やら意味が通じたようだ。だからか、堀井からは一体何が視えるのだと二人は尋ねた。

「ターゲットの中身、貴方がたも視てみれば分かりますよ。不愉快ですね。……なんでしたら見ますか？」

どうやらエマは相手に触れることにより、何かが視える能力者のようだ。更には自分の視た者を他者へと見せる、視界共有まで出来る様である。

能力者としては相当高いレベルにあることを知れば、雫は思わず口を開いてしまった。どのような能力を持ちえているのか、単純な興味があったのだ。

「あなたも鷺宮さんと同じく、周囲へと自分の視たものを見せるこ

とが可能な能力者なのですか？」

雫の声に対し、エマは一瞬、蔑んだような目を向けると、鼻を鳴らして黙っていると告げる。

「色なしは黙っていてくださいます？私、本当は色なしと同じ空気すら吸いたくないんです。紅桔梗様からの命でなければこんなところ……私が来るはずがないじゃありませんか」

にべもないこの言葉に雫は驚く。

そしてエマは今まで、いやいや　もしくは仕方なく雫の家庭教師をしていたことを嫌でも思い知ることになった。

そしてこれも同時に知ることになったのだ。

そうか、エマは六花神の血族なのだ。それも、保守派の人間なのだろうと。

保守派の人間は、六花神の血族こそを貴び、更にはその血の濃さにより上下関係を確立する、それが六花神と言う一族ではあるがそれがもつとも濃い人間達だ。

雫の父である義経は半分ほどその血を宿しているが、その能力の高さゆえにあれこそは稀なる存在として尊いものと扱われているが、けれど雫は違う。能力も持たず生まれ落ちた、ただの落ちこぼれだ。半分ほどしかその血を持たずとも、その能力はぴかいちだと義経は一族からは恐れ敬われているが、雫はその血を引いていながらも、何一つその身に宿す事の出来なかった無価値な存在。

だからこそ、血を第一に、そして能力を第一にと考える六花神の人間は、雫を蔑み、侮蔑する。

無価値な存在として生まれ落ちた雫のことを、誰も哀れとは思わない。ただただその存在を無駄なものだと否定され続けてきたのだ。エマが雫へと他の一族の保守派の人間同様にこうした態度をとることからも、その能力、そして血統こそを重んじる保守派であるこ

とは明らかだ。

雫が口を噤んで俯いてしまったのを見れば、まるで親の敵でも見るような目で奏はエマを睨みつけた。

エマは奏の存外に強い眼差しを涼しげに細めた眼で受け止めると、不思議そうに尋ねたものだ。

「お前は杜村の者でしたね。杜村が六花神に反抗的な態度をとるのですか？あまり、それは褒められたことではないと思いますが……？」

奏の育った杜村のことをさし、エマはそのような態度をとるとは無謀に過ぎないかと、ある種脅迫めいた言葉を告げてくるのに対し、奏はそんな脅しが何になると、それを反射的に突っぱねた。

「煩い！一体あんた達六花神が、僕らに何をしてくれたっていうの？杜村に援助してくれてたのは六花神じゃない、降矢だ！君らはあの人を……見殺しにしようとしたくせに！なのに今更六花神に反抗するな？ふざけるなよ！雫お嬢様に謝れ！」

穏やかならぬワードがぼんぼんと飛び交う中、千草だけが話についていけない。

兎に角いい加減に少し声のトーンを落とせと全員にいうが、聞こえているのか怪しいものだ。

エマは奏の言葉にわけが分からないとでも言いたげに首を傾げれば、何故だと問う。

「何故私が色なしなどに謝らなければならないのですか？」

至極不思議そうなその声音に、啞然としたように奏は一瞬、言葉に詰まった。

けれどエマにとってみれば、それは当たり前のことだ。

色ありを貴ぶことも、色なしを蔑むことも、それはエマの育つ環境から生まれくる当たり前のものであった。

だが奏からすれば、どうしてそのように同じ人間同士でそうまで序列をつけたがるのかが分からない。

そもそも色があるか無いかなどと、日常生活でそんなものは無いのだ。だと言うのにどうしてそんなもので優劣が決まるのか。奏がエマを睨み据える中、雫はもういいとその袖を引いてみるも普段からは考えられないほどに怒りを感じているのだろう。奏は雫の声にも良くないと怒鳴ると、目だけで射殺せそうな勢いで彼女を睨み続けるのだ。

そんな三人を見ていて余程気になったのだろう、千草が雫の耳元へと口を寄せると、疑問に思っていたことを尋ねた。

「おい。色なしって、何だ？」

「……色なし、とは、以前お話したかと思いますが、私達の一族は……特殊能力を携えていることはご存知ですね？」

義経が見せてくれただろうと口にされて首肯する。

今でも吊り下げられて首を絞められたことは忘れられないことだ。

「そういった能力を持っていない、無能者のことです。一族の中に、稀に生まれ落ちてくるのです。そういった、何一つ能力が発現しない子供というものが」

「……それが、色なし」

「ええ。何故色なしかと言いますと、上から紅桔梗、猩々緋、これがお父様になります。そして杜若と、全て色の名で階級が決められている……とでも言いましょうか」

「紅桔梗……と言うと、青紫？」

「良くご存じですね」

そう口にするると雫がそれに続けるように答える。

「猩々緋が赤、杜若が青、紺、そのような色に似ていますかね。その順番があり、上から権力が強いのです。まあ、一部例外がありまして、大抵どこにでもあるかと思いますが、我々一族の中にも、外で言う元老院のようなものがあります」

元老院と言うと、それこそこの国にもそのような機関が存在するものだ。

国だけではなく、六花学園すらそうだ。基本的な運営は学園側である教授連が執り行い、その助言などをするために理事会が更に別の組織として存在する。

その存在の意味は、一か所に権力を集中させないようにと言うのがまず一つ。そしてもう一つが多方向からの客観的な視点を持つことがどこの組織にも必要なことから、その存在がどこでも重要視される。

長く生きている分、様々なことを知りえるからこそ、だからこそ助言が出来る。その知恵を持ち成り立っていることを聞けば千草は鷹揚に頷いて見せた。それは当たり前のことだからだ。

「……つまりは爺さん連中がその上に居て、んで取り仕切ってるってことか。まあそうだよな、一か所に権力が集中するのはよくないだろう」

「そうです。だから彼らの権力は大きくはありませんが、長老達は紅桔梗、猩々緋よりは発言権は大きい。多くを知っているからこそ、年かさで負けている紅桔梗も猩々緋も、強くは逆らえないのです」

これを聞けば千草はもしかして、紅桔梗と猩々緋と言うのは、た

った一人のことを指すのかと聞いた。

たった三種類の階級しかないと言うのに　確かに例外である老人がどれくらいの数か居るかは分からないものの、居るが　その二つをもしや一人ずつが占めていると言うのかと尋ねれば、雫はその通りだと首肯する。

「……なんだそれ。ふざけてんのか？　じゃあ何か？　紅桔梗つてのと猩々緋つてのが国王と王妃なら、元老院がいて……で、杜若とやらが貴族か？」

じゃあそこに入れられないお前はどうかなるとの思いから、千草はそんな国があつていいはずがあるかと口にしたものの、雫はそれを額面通りに受け取って口を開く。

「ああ、そのような形ですね。けれど残念、少し違います。杜若は貴族ではなく、その例えで言うなれば、それこそ国民でしょう。色ありまでが六花神では人として認められる存在ですから」

52 (どうすればいいのか分からない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

52(どつすればいいのか分からない)

さも当然と口にする雫の表情は、無表情のように見えて、それでいてどこか悲哀の色が見てとれる。それを目にするのと千草は言い様のない感情を抱いた。

何だそれは。

「ふざけんなよ、お前」

「……そう言われましても」

自分に言われても困るとばかりに眉をひそめる雫に、千草は掴みかからん勢いで告げる。

「違う！何で怒らないのかって言うてる！！あいつが怒って、何でお前が怒らない！お前、自分のことだろ！？腹が立たないのか？！」
「腹が……いえ……そんなこと」

雫は視線を彷徨わせると、そのまま俯いてしまう。

腹が立つか立たないか、そんな怒りの感情は雫の中には湧いてこない。ただただ湧いてくるのは悲しみだけだ。

そして、いつしかそれも諦めた。手放した。

悲しいと思うことさえ無意味であると、もう小さな子供の頃から諦めてしまったのだ。

諦めざるを得ない状況ではあった。

周囲がそれが当たり前としてくるのだから当然だろう。

だからか雫は、奏のように、そして、今それを知ったばかりで怒りをあらわにする千草のように、感情を表に出してこれを不当と訴える気力がもう無いのだ。

「……義経さんに言おう。こんなのおかしい」

「いいえ」

「じゃあなんだ！おかしくないって言うのかお前！」

「いえ、そんなことは……」

どうなのだろうか。

雫が更に言葉を添えようとしていたところに、それを割って入る声があった。　　と言っても、雫と千草の会話に割って入ったようではなく、それはエマと奏の会話に割って入る声だったようだが。

澤田が大きな声を上げる。

「少しお静かに！いいですか皆さん、ここは病院ですよ」

ここまで来る間に、ナースステーションで少々騒ぐと思うが、少し多めに見てくれと澤田が前もって看護師達にきわめて強制力の高いお願いをしてきたものの、それもいつまで持つか分からない。

澤田の能力は本当に突然変異的に生まれたもので、持続性にかけては難ありとの、使い勝手がいいようで悪い代物だった。

だからこそなるべく早めにここを切り抜けて屋敷へと戻ろうと考えていたと言うのに、何故こんなところでこんなことになっているのか。

澤田がいらだたしげに細めた目のままエマへと向き合つと、彼も奏同様、先ほどの発言には憤りを感じていたらしく、奏の前へと進み出ると、すつと腕を横に払うようにしてエマへと泰然として立ち向かう。

「エマ、本家ではどうだか知りませんが、我々は狸々緋直属です。そしてその狸々緋の庇護を受けている杜村に対して、その言いようは流石に見て見ぬふりはできません。撤回なさい」

そこまで口にする、更に澤田はこう付け加えた。

「それと、お嬢様は猩々緋のご息女。無礼は許しません。猩々緋直屬として命じます。エマ、先ほどの発言を撤回なさい」

「何故、撤回などしなければいけないのですか？それに私も紅桔梗様からの命を受けてここにいます。それはたとえ直屬でなくとも、同じだけの権力を一時的にですが有していると言つことに他なりません」

「あのね、いい加減聞き入れなよエマ。あなたの言ってることは、本家以外じゃ通じないの。ここはそうね　猩々緋直屬の庭つてこと。あんた達保守派の出る幕じゃないよ」

だから大人しく引いて、ついでにさっきの言葉も撤回しなと告げる塩見にエマは驚くことに笑みさえ浮かべて見せるのだ。

絶対的優位を信じて疑わないエマと、その存在が許せない三人。塩見までもがエマと対峙し、じりじりと睨み合っているのを見れば、雫は目を剥いて驚いた。

今までここまで六花神に表だつて反抗を示したことがかつてあっただろうか。

澤田も塩見も、外からの人間だ。中の人間と、下手な軋轢を生み出すのはあまり褒められたことではないと、憤ましく控えていたことしか覚えが無い。

だと言つのに今日はどうしたことなのか、奏までも含めてこんなにも強く反発をして　雫はわけもわからず困惑する。

だが、そのように三者に囲まれてなお、エマは動じない。それもそのはずだ、エマは普通に考えれば杜若だろう。だがしかし、澤田も塩見も杜若ではない。保守派のエマからすれば、ただただこの二人の言葉は不愉快なだけだろう。

なぜならば二人は

「お黙りなさい、銀朱めが。身分を弁えない無礼な振る舞い、許されると思っっているのですか？」

「貴方がたはいつもそれだ。杜若であることを鼻にかけ、我々を銀朱と蔑む」

「当たり前でしょう。銀朱など所詮捨て駒。それを我々と同様に扱えるはずがないでしょう？」

そこまで口になると、矢張り血統こそが第一であると締めくくり、エマは最後に雫をちらと見て一言付け足した。

「ですが血がどんなに良くとも、時々まがい物も生まれたりもしますが。こればかりはね、どうしようもないでしょう。狸々緋とさえど矢張り外の血が半分も入っているのですから……いい意味としてはありませんが、それこそ、血は争えないでしょうね」

雫のことだけでなく、エマは義経、更には宗一郎のことまで出して侮蔑の言葉を紡ぎ出すと、言うだけ言って満足したのか、もうこの話は終わったとばかりに視線をそのまま雫から外し、ベッドの上の堀井の首元に手を添える。

矢張り触れただけで気分は悪そうだ。触れた瞬間に青ざめた顔が印象的だった。

そんな自儘なエマの行動、そして発言に対し、室内の人間はほぼ全てが殺気だつてさえている。

だがしかし、ここで手を出せば負けだと分かっているだけに塩見も澤田も手が出ない様子だ。ただ、そんな風に大人であることを悔いる表情を浮かべているため、それが平気と簡単に堪えられると言わけてはないようだ。むしろ人目が無ければその場で戦闘が始まってもおかしくないのではないか。そう思わせるには十分な殺気を放つ二人の姿に、雫は青ざめた。

そんな二人はともかくも、鷲宮は心神喪失状態であり問題はない

のだが、一人、大人ではなく、まだ身も心も子供の人物が居た。

「お前……ッ！」

奏がエマへと掴みかかろうとするのを、雫が短く制した。

「止めてください！」

「ですが雫お嬢様、こいつが今、何を言ったのか分かってるんでしよう？」

「分かっていますが、ですが今は」

「分かっているならその手を退けてください！」

「奏っ！私がいいと言っています！」

だが、そんな風に雫が小さな体で必死に奏を制するのを見て、エマは呆れたように言ったものだ。

「本当に惨めですね、貴方がたは。猩々緋殿の情けに縋り、生きている。恥ずかしくはないのですか？」

その言葉には本当に、砂を噛む思いがした。

だが実際には、口の中いっぱいに広がるのは血の味なのは、一体、どうしてなのだろうか。

52 (どろすればいいのか分からない) (後書き)

これから怒涛の勢いで話しが出てくるんですが、大丈夫かなとハラハラしながら書いてます

53 (夢を見ていた) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

53 (夢を見ていた)

奏が大人しくなり周囲に沈黙が訪れると、エマはふつと両腕を、鳥が羽ばたくように大きく広げた。

広げられた腕の先から光が溢れだすと、淡い光が周囲に降り注ぐ。あつと思つた時には光はその場に居た人間をことごとく飲み込んでいった。

「貴方達が今居るのは、私の見た夢の中」

「夢？」

光の中に満ちる声はエマのものだ。この光の繭の中に映るものは実際にエマが見た堀井自身の夢なのだと言う。だがそれは夢などといったどこか不確かなそれではなくて、いつそ本人の『記憶』と限定して言っても差し支えが無いだろうものでもあった。

「まずはそう 幼い頃に出会つた夢との対面から見ましようか」

普通、夢と言うのであれば、もっと歪みなくまっすぐで、とても美しいものだと思つただろう。だがしかし、堀井の夢は先ほどまで見てきたものだけに、全員がただただ絶句するしかない、そんなものだった。

私が彼をはじめて見たのは幼稚園生の頃だった。

幼い私が靴を失くして途方に暮れていた時のことだ、彼がそんな私を見つけてくれた。

彼は幼い私を安心させるために優しく声をかけてくれた。

「おーおー、すげえ泣き声が聞こえるな。……おっと、お嬢さん。なんだ、どうした？……って、ああ……靴がなくなっちまったのか」

彼は私の足元に気がつくのと、そつと近くにあったベンチまで抱きあげてそこにおろしてくれた。足がこれ以上痛まないようにと、優しい気遣いに、その頃の私は全く気がつかなかった。

幼心にさえも彼の声は、とても安心感を与えるものだと思った。

「ちよつと待つてな。……ああそうそう、直ぐ戻るからそこ、動くなよ？」

「……う、うん」

返事を返せたことに満足してくれたのか、彼は私の頭をぽんぽんと軽く叩くと、満足そうに笑みを浮かべる。黙りこくって泣きじゃくっているだけではどうすることも出来なかったからだろう。返事が返せるのであれば大丈夫だなと笑うと、彼はいつてしまった。

鼻を嚙りながら私は、ただひたすらに彼の帰りを待つていた。

どうして待たなければならぬのかなど良く分かっていなかっただろう。ただ私は命じられるままにその場で彼の帰りを待つていた。程なくして戻った彼の手にあったのは小さな靴だ。それも真新しいもので、わざわざ新品を買ってきてくれたようだった。

サイズは私の残った方の靴を持つていつて、同じサイズのものを購入してきたため、ぴったりだ。

わざわざ私のために買ってきてくれたことなど、その時の私に分かるはずもない。その時の私はこの綺麗な男の人から貰った靴が、同じように綺麗で、それがただ嬉しくて堪らなかった。

ただそれだけだった。

今思えばもつと他にも考えようがあったらうにとしか言いようがないが、当時の頭ではそれくらいしか考えられなかったのだ。

だから有難うと口にして、そのまま私は彼の元から駆けりさった。

「もう失くすなよ！」

「うん！お兄さん、有難う！」

それが彼との初めての出会い。

二度目は高校生になった時のことだった。

入学式の時に教師として現れたのが彼だった。一目みてあの時の彼だと私には判った。信じられない偶然が重なったお陰で、私達はまた会えたのだ。

運命だと、思った。

「覚えてますか、私あの時の助けてもらった者です」

本当はそう言いたかった。けれど彼にそう言いたす前に、彼の前に彼よりもっともっと、美しい人が現れたのだ。

その人を見た時、私は呼吸が止まるかと思った。

あまりにも美し過ぎて、人じゃないのかもしれないなんて、馬鹿みたいに思ってしまったのだ。

幽霊、それとも死神、はたまた天使か　そう考えた後で思った、そうか、その人は彼をこの世ならざるところへと連れ去っていているのかと。

本当に、後から考えればなんて馬鹿なことを考えてしまったのかと思っただけだ。彼がその人に何かされるのではないか、そんなことさえ考えてしまったと言うのに、私は彼の前に助けに飛び出すことが出来なかった。

私は彼を助けられなかったのだ。

これは後に、私の中で傷となって今も残って私を苦しめ続けているものだ。

その人は別に、彼を害したりはしなかった。

ただ、私の予想通り、それはただの人でないことだけは正解だった。

その人は彼を司郎先生と呼び、親しげにその脇に腰を下ろした。すると彼もその人を迎えて嬉しそうに笑うのだ。

「なんで来るんだよ」

棘のある言い方の中にも不思議と嬉しげ　それもどこか弾んだような響きが聞こえてきて、私の胸の中にちくりとした痛みが走る。

「寂しいかと思って」

「いやまあ、潜入捜査つすから？寂しいも何も、一人は当たり前じゃないの」

それなのになんでまたお前が来るんだと呆れたように言われれば、その人は拗ねた物言いで口にする。

「来たらいけなかったのか？」

「いいや？そんな罰あたりなことを誰が口にするもんか。来てくれて嬉しいよ。ほんつと、ある程度知らばったら暇してたからな」

その時の私からとってみればそれは、衝撃的なシーンだったと思う。

その人と彼は、私なんか立ち入れない何かがあるのだと思うには、それは十分な会話だった。

たった一言だけだと言うのに、私は彼の前へと出る勇気を、それだけで全て挫かれてしまったのだ。

その人は彼へと僅かに口角だけで笑みをかたどると、彼に本台に

入ろうと促す。

「それで、状況はどうなってる？」

「こっちの棟は調べましたがね。全然だな。いそうにねえ」

「じゃあ、残るのは旧校舎か。……旧校舎となると、確か昔、石が祀られていたって聞いたな」

「石？」

その人は、過去に旧校舎に祀られていた『ご神体』についてを語りだした。

それは、私も初めて聞いた随分と昔に忘れ去られた、名も無い”神様”のことらしい。

「正式な名称は決められておらず、そこに元から存在した、大きな岩が、雨風により削られていき、形を成したもので、それを神と呼んで祀っていたらしい」

「随分と古いタイプの神さんだあな」

彼も関心を示しているのか、顎を撫で上げ興味深そうにその人の話に耳を傾けていた。

「そうだな。確かに社も何も無かったようだし、本当に祠とそのご神体のみがあるだけだったらしい」

「ふうん？それが旧校舎の場所にあっただってのか？」

「まあ、そうなる。兎に角何も新校舎にないのが分かった以上、司郎がここに居る必要はもう無いな」

「ってえと俺はお役御免かね」

そうおどけたように彼は口を開くと、その人の前で大仰に腕を開いてもうちよっとは教師を続けたかったがなあと続けた。その言葉

を聞くと、思わず私は小さな声で「え……」と口にしてしまったが、どうやら二人には聞こえなかったようだ。良かった。

ほっと安堵の息を吐くと、私は彼を注視しようと目を凝らす。

一体どういふことなのか、まだ入学式を終えたばかりだ。だと言うのに彼は辞める？そんな馬鹿なことがあつていいものか。大体教師が一学期の始まつて早々に辞めるなんて話、今までどこの学校でも聞いたことが無かつた。

「冗談にしても有り得ないことだと私は二人の会話を聞くために、僅かに身を乗り出した。

「……なんだ、そんなにその仕事は楽しいか？司郎先生」

少しむつとした口調でその美しい人は額に僅かな皺を寄せて彼へと云つ。

その人は、彼が教師をしていることが不満のようだ。

それを受けて彼はと言うと、嬉しそうで　　これまた面食らつた。どういふことなの？

「つつか、その司郎つつのすんげえ久しぶりな呼び方だよなあ。最近じゃあ鷺宮としか呼ばれてなかつたからもうな、なれなくてむず痒い」

「酷い言い草だな」

鷺宮？

え、だつておかしいわ。

彼の名前は入学式の時に教師を紹介するという名目で、学校長から名を一人一人呼ばれていたから知っているが、鷺宮なんて名前じやなかつた。

柿沼司郎、校長からはそう呼ばれていた。

あれはじゃあ……違うの？

あれが違うと言っているのであれば、学校長の呼んだ名前は偽名と言いつことになるだろう。だがしかし、偽名を使い教師になれるのか。いや、そもそも教師をこんな中途半端な時期に辞めることなど出来るのか、そもそも旧校舎つて一体　わけが分からなかった。

「じゃあ名字で呼ばれたいならそうしてやろう　鷺宮」

「いや、そっちで積極的に呼んで貰いたいわけじゃねえっつ。単に、司郎って呼ばれんの、何年ぶり？数年ぶりじゃねえかなあと思って。流石に懐かしいわけです、はい」

その人からすれば、彼の本名を呼ぶことのほうが重要だった様子だ。偽名で呼ぶのも嫌だから、だからこそ本名を一部に入れて呼んだと言いつのに　と言つことのようにだ。

ならば、本当に柿沼司郎との名は、偽名と言つことなのか。

その人はつるりとした形良い顎に手を当てて考え込むと、ちらと視線だけを上げて彼に尋ねた。

「……そんなに、前か？」

「前だろ。大体今の俺の名前自体ちげえし。鷺宮彰人。な？音からして全然違う。名を変える理由は確かに分かるんだけどなあ……」

「……」

「やっぱりさ、本名でお前とは知り合ったわけだし、ついでに言えばそっちが俺の本名なのはいつまでたっても変わらんのよな。俺からすれば。名を変える必要は確かに分かる、けどやっぱりな、親兄弟にももう、呼んでは貰えない。俺の今の名前はそんな名前なわけだ。だから何と言いますか、偶にはそっちで呼んで欲しいと思うわけよ」

くだらん感傷かもしれないが、この名であることを覚えている人

間に、呼んで欲しいと思う。そう思っちまうのはいけないことかねと、罰が悪そうに彼が口にする、その人はどうしたらいいのかわからないのか、首を傾げてしまう。

ただ、何を思ったのか彼の名をぽつりと呟くと、その袖を軽く引くのだ。

さも、これでいいかとばかりに、小さな子供がまるで親の注意を引きたくてするように、くいくいと可愛らしく。

「司郎」

「なんだ？」

それはあまりにも顔とのギャップが激しくて、私はなんて可愛い人なんだろうと身もだえしそうになったけれど、彼はそんなのは見慣れているとも言うのか、苦笑してどうかしたのかと、柔らかな笑みを浮かべて尋ねるだけだ。

彼のそんな余裕が見て取れると、ああ、これは似合いの二人だなと思った。

私のようにその人の一挙一動に恥じらったり頬を染めたりはしない、だからこそ彼はその人の傍に居て様々なことを任されているのかもしれない。

何となくだがそう思った。

54 (私の運命そのものなんだから) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

54 (私の運命そのものなんだから)

彼の言葉を受けると、その人は首を傾げて暫し考え込んだかと思えば、何か思いついたらしい。こんな言葉を呟いて見せた。

「呼んで欲しいって言ったから」

「……お前ねえ」

「何だ？」

「いやあ？なんつつかさ、あやこ嬢ちゃんと関わってから変わったなあ。ほんつとすんげえ丸くなった」

「……丸い、か？良く分らないが」

「丸い丸い。なんてか……棘だらけだったのが丸くなったよな。可愛いわ、その方が」

「……あまり、嬉しくは無いんだが」

可愛いと言われてまたも眉を顰めるのを見て苦笑すると、彼は別に悪い意味で言ったわけではないと告げる。

ただ、

「まあ、俺もあまり面白くはないな。男だしな、お前」

と付け足すのは忘れなかったが。

それから話が淡々と進められていった。

旧校舎に今日の深夜、何かを張ってから探索に乗り込むこと。何かの部分は良く聞き取れなかったものの、彼に何か良く分らないが、包みを手渡していたことからその中身を使用するのだろうとは思った。

それと、辞表は要らないが、学校長に明日までには例の件は片付けるとの報告はしておいてほしいと言つこと。

そして最後にその人はこう締めくくつた。

「写真とか、記憶媒体に写つてしまっていないか、きちんとチェックすることは忘れずに。どこでどう露見するか分からないからな。用心しておくように」

「わあつてますつて。何年俺がこういうことやってると思つてんのよ」

名前と顔と、そんなものが揃えられないようにちゃんとやっておきますつてと口にする、二人は重い腰を上げてそのままその部屋から出て行つた。

後に残されたのは、私一人。隣の準備室にぽつんと私一人だけが残された。

「……彼は、鷺宮司郎で、鷺宮彰人で、……それで、柿沼司郎」

そう口にしてみて、初めて私の中で実感を伴い先ほどの会話が鮮やかによみがえる。

それと同時に私の記憶の中に深く刻みつけられた。

そう、彼のその名を今、全て知っているのは私だけだと。

そう自覚した瞬間のことだ、胸の奥で何かが弾けた。視界が一気に開けるような思いもした。

「そう……そうよ。私だけが知ってるんだ。だつて言つてたもの、名前も写真も、残せないつて！じゃあ、私だけが彼の秘密を知ってるんだ！」

どうして彼が名を変えねばならないかなど考えなかった。兎に角

私は彼のことをもつと知らなくてはならないと思った。だって運命の人なんだもの、それが当たり前だと信じていた。

「あはっ！今の名前は鷺宮彰人！それだけでも分かっていたら十分だわ！」

そうだ、今の世の中情報は正義だ。正義を勝ち取るにはまず情報を制すること。そう言われるほどに情報化社会と化している。

それは逆に言えば、様々なところで情報を得ることが簡単に出来ると言つことでもあった。

私はその日から、彼のことを、彼達のことを 熱心に調べ始めた。

+++

不死の一族、そういうことなのだ結論をつけるには、二年の月日がかかった。

「いいえ、不老かしら？」

よくは分からないものの、彼らは老いることをしないようだ。

調べれば調べるほどに謎が深まり、それと同時にもっともつと、彼らのことを知りたいと思った。

大学生になったある日、アルバイトに精を出していた時のことだ、偶然にも客として彼らは現れた。

彼の隣に居たのは、あの美しい人ではなく、小柄な女だった。

そしてその親しげな様子から見とれたのは、どうやら彼女もまた、彼の仲間なのだと言つことだろうか。

と言うことは、矢張りそうなのだ。彼らは仲間を着実に増やしていつているのだ。そう私は確信した。
その日は彼と彼女に軽くサービスを追加して仕事を終わると私は帰宅し、彼のことを纏めた資料に今日のことを追加していった。

「……やっぱりそうなんだ、あの人達は海外で言う吸血鬼みたいなものなんだ。日本だと何かしら？……妖怪とかあまり綺麗な彼らには似合わないけど……元人間なのは確かなのよね？……吸血鬼か……そうよ、だから仲間を人には知られないようにこっそりと増やしているんだわ」

一度目の出会いは偶然、けれど二度目の出会いは必然だ。三度目があったのであれば最早、この出会いが運命でないのであれば一体何と言うのだろうか。

私は彼の資料にうつとりと顔を埋めると、早く追いつかなくちゃと夢見心地に囁いた。

「彼は私を待つてる。私が早く追いつくことを待つてるんだ」

だからこそ小さな頃の私を見つけ、優しくしてくれた。そして私の通うことになった学校の鬼をあの日、退治してくれたのだから。

あの日、深夜旧校舎に向かうと、そこには異形の者と戦う彼らが居た。

驚きはしたものの、納得したのも事実だ。ああそうか、そうして彼らは様々なところで今まで生きてきたのだろうか。

そうして更に数年の月日が経った。私は彼の住まう屋敷のメイドとして彼の傍に立てるようになった。

彼に給仕をする時、彼が優しく声をかけてくれるのは私が特別だからだと思った。

この屋敷に勤めている人間ですら、その本当の名を知らない。そう、矢張り私こそが特別で、私こそが彼の運命の人なのだ。

彼が屋敷へと帰ってくると、私はいの一番で出迎えてその上着を受け取り直ぐにも給仕に取りかかる。

「ああ、助かるよ」

私が特別だから、私にだけこうして彼は声をかけてくれる。

他のメイドがどんなに彼に尽くしてみても、彼からここまでの優しい言葉をかけて貰ったことは無いだろう。

私は優越感に浸っていた。

そして、それと同時にこの頃からある焦燥感に苛まれていた。

それは、『いつになったら彼は私を迎えにきてくれるのか』と言うことだった。

途中両親が交通事故にあい、亡くなった。そのお陰で遺産を相続し、彼が鷺宮彰人の時代に一時使用していたマンションを購入したが、彼の居た空間、彼の居た世界に身を置いてみても、何一つ変わらない。

「何がいけないの？」

どうして私を迎えにきてくれないのだろうか、その言葉を何度反芻してみても、答えは見つからない。

一つ一つ、彼の物で彼の部屋を埋めていく。そうして彼を身近に感じれば感じるほどにおかしいとの思いは日に日に強くなっていった。

「私は特別なんでしょう？」

途中、正体を知られてしまった人間に、丁重に『退場』願うこと

にした日も見たことがあったが、それを見てなお私は確信したと言
うのに、何故私をまだ迎えにきてくれないのか。

「だっておかしいじゃない、私のことは始末しに来ないのに」

私が特別だから、私だけを愛しているから、私が運命の人だから
だから彼は私が彼のことを知っていたとしても、その記憶を奪
わない。

なのにどうして？

「どうして迎えにきてくれないの？」

焦燥感は次第に苛立ちに変化していくのにそう時間はかからな
かった。

「どうして、どうしてなの？だってもう私には時間がないのに」

もう若くはなくなってしまう。もうじき私は三十路に程なくして
到達するだろう。だと言うのにどうして彼は迎えにきてくれないの
か。このままでは彼と並んで立つ時に困るではないか。

「だって私、おばさんになっちゃう。そんなの、きつと彼だって困
るのよ」

何をしていると言うのか。

がりがりがりがり、がりがりがりがり、爪を噛んでいくうちにい
らつきが少し収まってきた。

ああそうか、分かった。

堀井はすつくとその場に立ちあがると、室内に充満する、彼の匂いを肺いっぱい吸い込むと、彼に抱きすくめられたような心地を味わい、その気持ち良さにうっとりとし身をゆだねた。

そうして暫く彼に身をゆだねてから堀井は、ゆっくりと瞬きを一度、二度とし、どこか壊れたような笑みを浮かべてこういった。

「そうだったのね、彼は私を待っているんだ。私が待っていちゃいけないかったの、そうよ、そうだったの。じゃあこうしていたらいけないわ。早くしなくちゃ。私がもう、貴方に相応しい人間になつたから、もう仲間になれるからって、伝えに来るのを待っててくれたのに。私ったら全然気づかないんだもの、駄目ね。彼には悪いことをしちゃったわ。こんなに待たせてしまって、呆れてないかな？大丈夫よね？怒るかしら？……でもそうね、怒っても最終的に許してくれるわ。だって、私は彼の」

運命そのものなんだから。

54 (私の運命そのものなんだから) (後書き)

書いててキリキリしていました

読んでくださっている方のほうがキリキリかなとも思う

何て言うか申し訳ないです

そしてまだ暗いモードが進みます

終わったら…… な展開が待ってるんですが……!!とかも言う

いたい

けどまだアップ出来る状態じゃないからいえな……

55 (あのだと変態がああ!という叫び) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

55 (あのだ変態があああ!という叫び)

エマが広げた腕を閉じると淡い光は粒子となり、映し出されていた映像がかき消えていく。悪夢は終わったのだ。

全員が深く息を吸って、吐き出した。どの息も、重く苦しそうな音を響かせている。

堀井は幼少期、自らが鷺宮へと選ばれたことにより、彼女の元に迫りくる『何らかの害悪』を取り除くために、鷺宮が自分の通うことになっている高校の荒魂　彼女は鬼と呼んでいたが　を鎮めに来たと思っていたらしいが、その実は全く違った。

どちらもそれは、単なる偶然が重なった結果のことに過ぎなかったのだ。

ただ単に、鷺宮のお節介が爆発した結果が幼少期のそれで、そして高校も、学校長からの依頼により、不可思議な現象を止めるためにと言うものだった。

どちらも勝手な堀井自身の思い込みからくるものだったのだ。

「けれど、それを言ったとしても、本人は決して認めないでしょうね」

それを信じることこそが、堀井自身を今、堀井自身たらしめているのだろう。そうとまで思えるほどにそれは狂信的なものを感じさせた。

千草が不気味なものを感じたようで、ぶるりと身震いをして唸るように言ったものだ。

「盲目的に信じている。宗教屋に似たところがあるな」

「そういう言い方はどうかと。にしても一時期お父様達の周辺が騒がしかったことがありますが、こうした背景からだったので

すね」

「って言うത്？何かあったのか？」

「ええ。お父様の周辺に、ちよつと……民間の素行調査会社と言いましようか？要は探偵業を生業としている方が少々、うるついでいたのです」

堀井が雇ったものだと言うことがこれではつきりしただけに、ほつとしたのも確かだ。

「妙な組織と繋がりが無さそうと言うことは分かりましたし、そして以前のあいつの方々も、個人的に鷺宮さんのことを調べるためだけだったと分かったからにはもう、妙な話ですが、安心ですね」

「一人全然安心出来ない人もいるけどね　まあいいや、兎に角先に移動するよ。その子連れて。いいよね、澤田君」

「ええ、宜しくお願いします」

そうして塩見はもう恒例となった瞬間的に現れ、瞬間的にその場より消え失せるという移動術で消え去った。毎度のことながらそれは実に見事なものだった。

後に残されたのは心神喪失状態の鷺宮と澤田、そして雫ら子供連中三名と、エマだ。

それら全てをぐるりと見回すと、澤田が気が重そうに口を開く。

「さて、我々は帰りますが、これからエマはどうしますか？もう、帰られますか？紅桔梗の元へ」

「紅桔梗様、です」

丁寧に訂正を入れてから、エマは前髪を撫でつける様にして真面目腐った声で答える。

「いえ、まだ任務がありますので。このまま同行させていただきませぬ」

それを聞けばこの面子で車内のせまい空間に押し込められるのかとの絶望の思いから千草は天井を仰いで思わずこころ漏らした。

「せめて車内で角突き合わせるのだけは勘弁してくれ」

この切実な願いに澤田は首肯すると、もっともであると告げる。

ただし、無理なことは無理だと告げる性質らしく、こんなことをのたまってくれた。

「ではそのようにしましょう　とは言えませぬね。こればかりは何も起こらないように祈っててください」

「……そうさせて貰います」

どうにも頼りない言葉だった。

+++

栗達が病院を後にしようという頃、すでに降矢邸へ向かい走行する車の中にちよこんと座っていた須賀は、今日と言う日は何とと言う厄日なのだろうと思った。それも、何故自分だけがこのような目にあわなければならぬのだとも思っていた。

勘弁してよ。

車内に軟禁されたかと思えば、間をおかずに二人を乗せた車は元来た道を走り去っていくのだ。栗達を置き去りにしたままに。

どうということだと思ったものの、ドアは開かない、更には走行中

の車内なのだ、どうにも身動きが取れなかった。

そこまでも驚くべきことだったろう、一般的な十代の女子として見れば、それだけでも非日常的な一幕である。

だが、それだけでは今日と言う厄日は終わらない。

まず第一に、あの大和撫子を絵にかいたような美少女である櫻子を、自分がまさか宿める役になるうとは思ってもみなかったと言うことだ。

走り去る車内にて、参ったなあなどとぼやいている暇などありはしない。暇さえあれば櫻子は車内で暴れ回っているのだから須賀が大人しくしていられようはずがなかった。

「雫！雫があの変態に！！」

食われる！と叫んでは先ほどから広い車内の中を狂ったように這って回っては叫び散らす。しかもそれだけでは飽き足らず、車内を内側からがんと容赦なく叩きつけるのだ。須賀がそれを見て青くなるのも無理は無かった。

この車が一体いくらすると思ってるんだ！　そんな悲鳴は声にすらならない。一台が一千万を軽く超える値段をするものだと告げて見たところで、恐らくは櫻子の暴走はとまらないのだろう。

もう勘弁してくれと思うものの、いつかな櫻子は止まらない。

その様子を見て須賀は、まるで暴走機関車のようだと思った。

今の櫻子は、どうにかこうにかなだめようとしてみても、人の話を聞きはしない。

「変態じゃないから！それにいくら綾小路さんが高遠会長のこと嫌いだとしても、一応降矢さんからすれば許嫁らしいしね？！それに……それにだけど、高遠会長は一応降矢さんのこと好きだと思っよっ。」

そうでなければ雫を庇い、ああして山田の前に立ちほだかるなど
すまい。

だから案ずるな、何とかなるだろうと告げれば、益々櫻子はいき
り立つ。

「好きとかやめて！！雫はあんなのと一緒になんてしないんだから
！！」

きいと叫ぶと車内からがんがんと窓をたたき割ろうとし始めたの
を見れば須賀は悲鳴を上げた。人様の持ち物になんてことをしよう
とするのか。そしてお前、これは指紋一つつけるだけでも肝が縮む
レベルの車なんだからいい加減にしろ　とはもう、声が出なかつ
た。

「ちよ、ちよつとやめて！洒落にならないから！！」

「洒落もへつたくれもないわ！しっ、雫の唇を奪った上に、そつ、
そんな……許嫁ですって？！認めない！認めないんだからあああ！
！」

「人工呼吸！人工呼吸だよ落ち着いて綾小路さん！！」

血走った目で櫻子が手当たり次第に窓に物を投げつけるのを見て、
須賀は絶叫を上げた。

「もう、いやあああああつ！！」

今回の一番の貧乏くじは、須賀だったようだ。

55 (あのだ変態がああー!という叫び) (後書き)

久々の櫻子と須賀でした

56 (信じがたい事実) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

56 (信じがたい事実)

「メルセデスベンツ……クロスオーバーU S Vか」

なんてものを用意してくれたんだろうかと、千草は病院に来た時と全く同じ感想を述べた。

それを耳にすれば奏がすかさずこう尋ねる。

「もしかして許嫁さん、車とか詳しい方なの？」

「いや、一般常識程度しか知らないが……にしても、なんでまた一千万超えの車でくんだよ……さっきも言ったかもしれないが、車内に足跡付けるのもびびるだろうが」

こんなものに乗って、それこそ指紋を一つつけただけでも戻った時に義経から何と言われることか。

下手な痕もつけられないではないかと青くなる千草に、奏はへらりと笑うと、力なく言う。

「もうそこは慣れてよ……僕もほら、何て言うか、慣れたからさ……」

一瞬にして老けこんだ印象すら与える言い方で言われ、どこにそんな慣れを感じ取ればいいのだろうか。無理だ。慣れなど感じられるはずもない。

勢いよく千草は首をぶんぶんと横に何度も振れば、しっかりしろとその青ざめた頬を叩いて正気に戻れとしてみるが、奏は何やらぶつぶつと呟いていて千草の恐怖を煽るばかりだ。

むしろ奏のその表情を見ていれば、これに乗ることがどれほど危険なことなのか、それを感じ取ってしまい、千草は益々目の前の艶

々と磨き抜かれ光沢が眩しい鋼鉄のそれに、乗り込むことが嫌になる。

「慣れてねえよ、それは慣れてねえだろ、膝めっちゃ震えてるだろがお前。がつくがくじやねえか。つかお前のお陰で俺も怖い怖い怖い。もう何これ乗れない！お前の所為で乗れなくなったじゃねえかよ！」

「いやもうなんか、……………慣れたとでも思わないとこの車になんて、乗れない……………」

そうだろうとふわりと微笑みを浮かべる奏に、千草は声が詰まった。青ざめた表情で、そんな笑みを浮かべるな。そしてそれと同時に理解するのだ、ああ、この車両に乗り込むことは即ち、死すら覚悟しなければいけないのだなと。

かくて庶民派二人はびくびくとしながらも、一台一千万超えの車両に乗り込むのだった。

雫の隣には乗せられないと、エマは助手席に隔離されたのだが、運転席に座る澤田はと言えば固い表情だ。

それも当たり前だろう、ああまでも自分の主を悪しざまに言われれば、温和な澤田でさえも気分は悪い。それどころか自身をもう認めないとの発言まで飛び出たのだ、これで怒りを覚えないのは不健康というものだった。

一番後部の座席へと座らせた雫の脇には、奏が固めている。その前を鷺宮、そして千草が座る。

「そう言えばなんだが、さつき、良く分からなかったんだが、紅桔梗と猩々緋が一位と二位の位どりなんだろ？」

ふいに尋ねてくる千草に、雫は一瞬何の話かと思いはしたが、ああ、先ほどの話の続きかと思い、その問いに丁寧に答え始める。

「いえ、そのあたりの位どりはほぼ同じレベルになります。その下が杜若です」

「んまあ、それくらいだとして 要は、俺が言いたいのは、杜若までがその……なんだ、六花神なわけだ」

上位に位置する紅桔梗、猩々緋が六花神では絶対的権力者であるならば、その下は杜若が支配される層であるのだろう。そして、その枠とは別に長老達がいる。そこまでが六花神という、枠そのものに位置することになる。

そこまでの確認が済むと、千草は更に雫に尋ねた。

「じゃあ、銀朱ってのは何にあたるんだ？」

「銀朱は……その、何と言いますか」

何と言えばと思案しているのか、言い淀む雫に、エマはざっくりと切り捨てるような回答を前から寄越す。

「捨て駒よ」

その言葉にまだ言うかと、奏も澤田もいきり立つが、狭い車内な上に、澤田は運転中だ。それを分かっているからか、エマもこれ以上は言うつもりはないようだ。

浮かしかけた腰を元の位置に戻すと奏が口を開く。

「……捨て駒なんかじゃない。銀朱はそんな不必要ならって、簡単に切って捨てられるものじゃないんです」

彼らの一族の名は、いつか義経が名乗った時の姓、『六花神』と呼ばれているらしい。

六つの花の神、それはどこからきた名なのかはよく知らないそうだが、奏はこう答えた。

「ほんとは色々と言があるらしいんだけど、詳しいこと良く覚えてないんだよね」

「私もそこまで詳しくはないのですが、中国やインドの方の思想からつけられたようです」

雫が付け足した言葉に、千草は首を捻って考え込んだ。

「思想、ねえ？」

前を向いたままで、時折ちらちらと鏡越しに見つめてくる視線が痛いものの、千草は至って真面目に彼ら『六花神』の者達の言葉を聞いていた。

「どこからきたかは知らないけれど、六花神は昔からこの国に居たんだ。その姓を持つ者達は皆、血族という繋がりを第一と考えている。そうだなあ……言わば、同族しか愛せない人種だった……って聞いているよ」

繋がりを持つて動いている、までは一体何のことを言っているのかと思っただが、同族しか愛せないとなると、その話はまた、かわってきたものになる。

「じゃあ何か？愛せないってことは……血族間しか婚姻を認めていなかった、とも取れるんだが」

そこまで口にする、千草は言い淀み、それから暫し間を置いてから慎重に口を開いた。

「……もしかして、愛せなかったと伝わっているだけで、他族との婚姻を認めていなかった、ということか？」

一族間でそうした取りきめが暗黙の了解で公然とは違ってくるかもしれないが、あった。過去にそういうことをしていた一族というのは確かに多いと聞く。だがしかし、まさか知り合いの家がそのような一族だったとはと呻くように言う千草に対し、雫も奏も顔を見合わせて微妙な、そして複雑な表情を浮かべてみせた。

それは困ったような、そして千草のことを面白がるような節のあるものに見えた。

「正解、は正解かな。つまりはそういうことだよ。許嫁さん。別の家、別の血を入れることを六花神の一族は昔から酷く嫌がっていたんだって」

「……昔、から？」

それはつまり

「そうです、千草。今も六花神は、血族間でのみ、婚姻を許されている、そういうた、自らの血統のみに拘る一族なのです」

それを耳にすれば、千草は喉を詰まらせた。

奇妙な音を立てる喉頭を押さえると、聞き間違いなどではないのだろうかと思いを押し尋ねてみたが、矢張り、聞き違いなどではないと言っ。

驚くべき事実だった。

「冗談だろ？だつ……ここは日本だぞ！？しかも、現代の日本だ！そんなことをすれば、遺伝子は？奇形だらけになるんじゃないのか！？そもそもそんなこと……、法律上、許されないだろ！」

それがどれだけ近い婚姻を成すものであるか、千草は知らない。兄弟間、親子間ということはまさかないだろうが、だがしかし、雫と奏の口調から聞きとれるのは、まず間違いなく、そう遠くはない血族での婚姻が推奨されているということだろう。

それは恐らく、他家からの血を持つ者はまさしく忌まれる存在であるという証明で、そして、それと同時に血が近い者同士、伯父甥叔母姪……エトセトラエトセトラ。そこまでのレベルでの婚姻すらなされていた可能性があるのだろうか。

そこまでを考え、千草は呻いた。

六花神とは、そういった近親間のみで交配を続けてきた一族であるのか。

そして、千草は更に嫌な事実気がついた。

義経は六花神であると名乗り、そして鷲宮も澤田も塩見も、恐らくはそれに連なる者になるのだろう。そこまで詳しくは知らないものの、一応そういうものなのだろうと千草は自分なりに解釈している。それは、義経がこうして彼ら三人を自分の手足として徴用し、使っていることから分かる。そしてあの異能だ。あれは六花神であることの証明であるように、少なくとも千草には見えた。

ということとは、六花神は、あの通りの『不老』という図式が千草の中にこの時、成り立った。

千草がああ屋敷にきたばかりのあの日、あの時、何と言われただろうか。

老いない理由はまさしく、そこにあるのではないか。

千草は言い知れぬ恐怖を感じ、ぞつとした。

それと共に千草はある事実にも気がついてしまう。

六花神が不老の一族だとするならば、宗一郎は不老ではない。そ

の妻は異様なほど若く美しいままで描かれ続けていたが、けれど宗一郎の見た目は年々、老けこんでいっていた。

確かに老いは彼の身体に迫りくる厳然たる事実そのものだ。ということは彼は 六花神ではない。

そこまで気がつけば、千草は先ほどの色なしという呼ばれ方をした雲に、そして血族間の婚姻に、一気に結びついた。

そうか、恐らく雲は 六花神の一族では半端ものなのだ。

祖父に宗一郎を持つことにより、半端な存在として生まれ、更にはその身に能力を宿していないと言つことで、それは更なる異物として六花神には映るのだろう。

あのロングギャラリーの絵を思いだしそうということかと千草は呻く。

雲だけではないのだ。異物は。

雲の兄 長兄である啓一も蔑まれる一因を抱えていると言つことなのだろう。

「嘘だ……」

そう思いたかった。けれど千草が推論を組み立てていけば、それはまさしくその通りなのだろうとしか言えない図式に勝手に組み上がっていく。

今までの周囲の言動、そして様々な人物達の様々なその時取った行動、そして周囲の態度 それらから勝手にそれは一つの結論に結び付いていった。

それが、たとえどんなにか千草が信じたくないものであるとも組み上がっていつてしまうのだ。

57 (紛い物の赤) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

57 (紛い物の赤)

六花神が考えている、最も高貴な血こそが自らの六花神の血統、それだけなのだろう。

だからこそ混ざり者の上、半端ものとして生まれた雫は、そして啓一は、六花神としては完全な半端な存在なのだ。

そしてそれは義経も抱えているが、それでも彼は能力がありと、千草は気づきたくもないことに、どんと気づいていつてしまい、頭が、身体が、今にも悲鳴を上げて叫び出したい気にさせられる。

ただ雫を恨んでいれば、憎んでいればすむ問題が、こうまでも周囲から、それも彼女からしてみれば、親戚からだ　辛く当たられているのを目の当たりにさせられれば、千草が同じく辛く当たることなど、最早出来ない。不可能だ。そこまで千草は外道には堕ちれない。

気づいてしまった今ではもう、ただ雫を憎むだけでいられた日は、恐らく、戻ってくることは無いのだろう。

眩暈でも起こしたように千草がぐらりとその身を傾がせるのを見て、雫はどうかしましたかと尋ねたが、何でもないと云うばかりで千草は何も答えない。

千草は言えるはずも無かった。お前のことに全てではないが、気がついてしまったなどと、今更体よく答えられるはずもなかったのだ。

「いいから、続けてくれ」

前の席に埋もれる様にして身体を深く沈めていく千草に、雫は少々躊躇いはあったものの、それでもそれが彼の意思ならばと続ける

ことにした。

「……六花神のその血族間のみの婚姻は、矢張り遺伝子に異常をもたらしました。血が濃くなりすぎて、それ以上子供が生まれなくなる時期が出来たのです」

中々に興味深い話しではあった。

普通、血が濃くなりすぎた結果としては、そのような結果が生まれることなど、先ずない。

子が出来ないと言うのが奇形児が生まれると言つ意味であるならばとは思つが、恐らく本当に子が単に生まれなくなつただけ 孕むことが出来なくなつただけなのだろうと思う。

それは、言葉をあまりオブラートに包まず、それこそ包み隠さず話そうとする雫や奏の姿勢からそう感じ取つたものだが、それは間違つてはいないはずだった。

「子供が生まれないとすれば、やっぱりね、血が濃くなりすぎたからじゃないかって話が時折ちらほら出るわけ。まあ、自分達でも異常なほど、一族しか愛せないことを知っていたからね。六花神は。だからこそ、やっぱりおかしいって思った、その時の一族の若い人が言つたんだ。『外から血を入れてみてはどうか』って」

流石に年かさの者が口に出すには、それは躊躇われるものだった。六花神として生きてきた時間が長ければ長いほどに、それは口に出すことが難しいことなのだろう。だからこそ、禁忌をおかすことに、多少なりと向こう見ずにやれるもの 若いものが口にするのを待っていた節が長老達にはあつたと言つ。

「一度外からの血を入れてみたらこれがドンピシャ。女達はまた子を授かる様になつたんだ。じゃあまた子を授かれるようになったん

だから、もういらないよねって、まがい物は排除されて　長年、この堂々巡りだよ。馬鹿みたいだよね」

「一度はその血を入れておきなから？」

「そう言うこと。外からの血を入れることを同意したくせに、なに子供が授かれるようになったみたいだから、もうお前要らないよねって……毎回そういうことが起きていたみたい。六花神の歴史は本当に……業が深いよ」

そこまでからからと、彼にしては珍しく嘲笑を浮かべると、次の瞬間、恐ろしいほどに暗い表情になり、奏はふいに口を嚙む。

思わず千草はどうかしたのかと、躊躇いがちに声をかけた。

すると、奏は口元だけ笑みをかたどって言うのだ。

「それが、雫お嬢様と、啓一様が六花神に受け入れられない理由」
「……」

雫が俯くのを肌で感じ取ると、千草は奏の無遠慮な言い草に少々、腹が立った。

けれど奏は無関心を装ってそのまま続けるのだ。

「紅桔梗、猩々緋、上位者はこの二人。圧倒的な能力を有する者だけがそれにつける役職みたいなものだね」

「役職……」

「実際に仕事を請け負っているのをまだ、許嫁さんは見た事はないみたいだけど、猩々緋という名はね、六花神最強を意味する名なんだよ」

ということとは、義経はその、最強の力を使い自分をあのように殺そうとしてきたのか。

そうと気づくと何やら千草は怒りがふつつつとわいてきたのを感じ

じた。

「こちとらただの一般人だと言うのに、ある意味では人類最強の間があんなことをしてもいいのだろうか。」

「まあ……よくはないんだろうな。」

「ここではたとえ千草はあることに気づいた。」

「六花神の上位者は紅桔梗と猩々緋、であれば 猩々緋は最強。では、紅桔梗は一体？」

「千草は奏へと上体を捻って顔を向き合わせると、今わいたばかりの疑問をぶつけてみた。」

「なら……紅桔梗は？」

「すると意外や意外な言葉が返って来たのだ。」

「ある意味最弱を意味する言葉、かな？」

「けれどこれには否やと唱える声が別の場所から上がった エマである。」

「エマはつんと鼻を若干上に向け、見下ろすようにして千草に顔を向けると告げる。」

「違います。紅桔梗様は最弱などではありません。紅桔梗様は絶対的な力があります。それが例え、戦う力でなくとも……」

「戦う力じゃ、ない？」

「杜若は彼ら猩々緋と紅桔梗二人を支えるためにいる、彼らの手足となるべく存在する者達。そして色なしは通称、というよりも六花神で与えられる蔑称のようなものだから、許嫁さんは使わないでね。あまり、雫お嬢様に聞かせたい言葉じゃないから」

蔑称と聞けば、千草は口を嚙む。

だからこそ、雫はああも打ちのめされていたのかと気づいたのだ。

「本当の呼び名は、啓一様と雫お嬢様は、胡粉。白を意味する名で呼ばれてる」

なるほど、だからこそ色なしと呼ばれるのかと思った。

紅桔梗、猩々緋、杜若、それらは全て色が存在するが、胡粉は白だ。色があるものを色あり、それ以外のまつさらな白は色なし、そういう区分として六花神では考えているのかと千草は納得した。

だが、それだとおかしい。

「じゃあ銀朱は一体なんだ？卓越した二者を助ける手足が杜若。なら、銀朱はどういう区分になる？」

銀朱とは赤だ。色あり色なしで意味するならば、色ありになるのだろうか、エマのあの様子ではまた違うようだし　そもそも最初から皆、六花神は三つの階級であるように言われてきただけに、解せない。

銀朱、その名のつくものは一体何を意味するものなのか。どこに位置するものなのか、その実全く知れないのだ。

「銀朱は、直接的に紅桔梗、そして猩々緋からの血を分けて貰った存在だよ」

「血を……？」

血と聞けば穏やかではない。

飾らない言葉でしか言わない奏の口から出た言葉なのだ、恐らく、その血とは比喻でもなんでもなく、義経の血そのものを指すのだろ

う。

それを引き継ぐ形で、鷺宮がぼつりと呟いた。
千草は先ほどまでだんまりで暗く俯いていた男が言葉を発したことに、若干驚きはしたが、その言葉の内容のほうに驚きだった。

「義経の血を、飲むんだ」

「血を、飲む？」

人が人の血を飲むこと、その意味を知っているだけに千草は息を飲んだ。

人が人の血を摂取すると言うことは、通常嘔吐作用が働くため、それは出来ないように人間の身体は出来ている。

それを出来る？

そうなればそれこそ、義経の血そのものに何らかの特別な作用があるのではないか、そう思わざるを得ない。

鷺宮は首肯するとそのまま続ける。

「そう……血を飲むと、銀朱になれる。だからこそ、杜若は、銀朱にいつだって嫉妬してんだよ」

自分達は同じ六花神の中の人間だったのに、よそものの鷺宮たちにその血を承る榮譽を奪われたから、だからこそ、悔しいのだ。そう告げる鷺宮の言葉に、ああなるほど、だからこそエマが異様なほど彼らに突っかかってきていたのかと千草は納得した。

自分達のものであるという、そうした独占欲が六花神の中にはあったのだろう。

それも、義経自身に対してのそれだ。

だがしかし、義経は彼ら三人を選んだ。理由は分からないながらも、外の人間を選んだのだ。

それが同族しか認めない六花神の矜持をどれほど傷つけたかは、

千草に分かるはずもない。

そこまで言いきられば、頭に来るのはエマだ。

嫉妬しているからこそ銀朱に突っかかって来るのだと言われているも同然のその言葉に、エマは身を乗り出して鷺宮へと食ってかかる。

「嫉妬など馬鹿馬鹿しい！そもそも曲がりなりにもあの方は我らが抱く狸々緋です。それを卑しくも紛い物の分際で、その高貴な血を賜るとは……！！」

「だから、お前さんは俺たちに、嫉妬してるんだろ？」

ばっさり切り捨てるように言われ、エマは顔を真っ赤にしてその涼しげな表情を、まがまがしいものに一変させていく。

「どこがですか！余所ものの分際で！我らの高貴なる血を賜ることが無礼だとは思わないのですか！それも……狸々緋ですよ！？少しは遠慮したらどうだったのです！」

遠慮とはどういうことが。

「無礼つてのはどういうこと？あんたらの狸々緋様つてのは、俺達を選んだんだよ。違うか？適正者としてよそものを選んだことは昔っからあったことだろうが。その何がいけない？そもそも無礼な物言いしてんのは、エマ、あんただろう？」

「どこがです！銀朱の分際で……」

エマが何か能力を発動しようと言っただろう。手にふわりと蛍のような淡い光が集まってきた。間近に雷光が落ちたような明るさを発する義経達に比べれば、それは酷く弱弱しくうつるものだった。

だがしかし、千草からすればそれは十分に圧倒される光景で

エマが毛を逆立てて鷺宮を睨みつけるのを見れば、雫が待ったを出した。

「お二人とも、まだ千草への説明中です。説明以外の私怨などはよそでお願いします。それにここは車内ですのでお止めください」

たまに千草は思うのだ、雫は存外、相手が誰であろうと言葉を選ばないことがある、と。

しかも頭が悪いわけではないため、それがどういったことを意味するか、雫は分かっているはずだ。だがそれをやってのけるのだから、相当な勇気を彼女は持っていると言っことなのだろう。そういった部分には、千草は素直に感心していた。

エマが悔しそうに捨て台詞めいたものを吐き捨てるが、それでも邪魔だと言われたことで相当傷ついている様子だ。ひくひくとその頬は引きつっているが、それでも車内で大人げないとは自分自身でも自覚したのだろう。

「……色なしの分際で」

はき捨てるように言うエマに、ぽつりと鷺宮は呟く。

「どつでもいいが、もうそれ、言えなくなるだろうな」

「……それは一体どういう意味ですか？」

「いや？そりゃあ、あんたが勝手に考えるこつた」

教えてなんてやらないさ、勿体無いからな　そう鷺宮は意味深に告げると、雫と奏へと続きを促した。

58 (風と踊るう) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

58 (風と踊る)

けたたましい音をたて、高速の標識がべごとりと音を立てて目の前でひしゃげて見せる。

咄嗟にハンドルを澤田が切ってくれたお陰で助かったが、どうやら突風が巻き起こったお陰でこうなったと知ると、車内の面々は顔を青くして一様にぞっとした様子だ。

「いつくらドイツ車だつたつて、あんなん食らつたらやべえぞ」
「た、台風？それとも何？竜巻でも起こったの？」

そのような兆候が周囲に見られないため、全員が酷く戸惑っているが、ハンドルを握っている澤田の表情は戸惑いなどという、生易しいものではなかった。

必死の形相でハンドルを握りしめているのを見れば、凄まじい圧力が車体にかかっていることが分かる。

「やっと見つけた」

声が間近で聞こえたかと思えば、次の瞬間車体へとかかる負荷が一瞬にして消え失せた。

何だ何だと全員が車内、車外と周囲へと目配せしていけば、うすぼんやりと、そこには光る舟とそれに乗った男が居た。

何の冗談なのか、その舟は雲達が乗った車両と共に並走しているのだ。首都高速道路だと言うのに、水が一滴も存在しえない場所ではどんな手妻でそれは動いてみせているのか、あまりの出来ごとに干草は思わず目をこすった。夢か幻かと眩くが、それは厳然たる事実として、そこに文字通り、横たわっているのだ。

男の姿を目にして驚いたのは、何も干草ばかりではない。雲達で

さえも酷く驚いて見せていた。

その様子を見て、千草は彼らも驚いていると言っことは、彼らの知り合いであるからこういうことが出来る、というある種の異常に対する御約束が崩れた事により、更なる恐慌状態に陥った。

「なっ……こ、こここ、これ、なんだよ?!」

「千草、何だ、ではなくて、どちらかと言えばこの場合、誰だ、ではないでしょうか？日本語が間違っているように思います」

「冷静過ぎんだろうが!! もうんなもんはどうでもいいつつかどっちでもいいんだよ!! 一体これは誰なんだ!?! お前らの知り合いじゃないのか?」

ゆっくりと櫂を漕いで車体と並走するそれを指さして言うことに、雫は人に指を指すのは と語り始めた。

「だから! 落ち着き過ぎだろっお前!」

「むしろ混乱してるから雫お嬢様はそんな丁寧に答えてるんだと思うけど!」

こちらも相当なパニック症状を訴えているらしい奏は、悲鳴を上げるように金切声で叫ぶ。

「わけのわからない混乱の仕方をするな! って……なんだ!?! 舟が寄って来たぞ!?!」

気づいた時にはもう遅かった。

舟に凄まじい勢いで車体がごとく押されたかと思うと、次の瞬間には途轍もない速度で車体がそれに押されるようにして進み始めたのだ。

それも、途轍もない凄まじい速度でだ。

ぐんぐんと迫りくるカーブに自らがけたたましい音をあげて近づいていくため、即座に澤田はハンドルを切った。壁とあわや接触かとの傍まで迫ったが、なんとか舵を切れたことに安堵の吐息を吐きだすが、車両がそこで緩やかな速度に戻るわけもなく、更に勢いを増して弾丸のように突っ込んでいった。

雫はシートベルトが上体を、そして腰を凄まじい力で締め付けてくるのを何とか緩めたいともがくが、そんなことが出来るほどの余力が残らないのだ。腕も足も、全身でこの速度に耐えようとすため完全に身動きが出来なくなってしまっている。悲鳴も喉に絡まり出では来ない。このままでは発狂してしまいそうだ。

左右に大きくゆすぶられ、そして常に最高速度で突っ走る車両に振り回されて、車内に乗っている全員が、今や意識を保っていることが不思議なくらいだった。

そんな中、雫達が一台の黒塗りの車両を見つけ、思わず「あ」と口を開いた。

こんな時だけ声が出るのもおかしく思えたが、矢張り、虚をつかれたのかもしれない。

それは、つい一時間も前に自分達が乗っていたあの車両だったからだ。

向こうもこちらに気づいた様子で　だがしかし、凄まじいスピードであるため、気づいた時にはもう、中に乗り込んでいる三人の顔は目視不可能になってしまっていた。

「さ、くらこ……怒ってるうううう！」

「よく、顔が分かったな！」

「一瞬ですが……見え、たんです……よおおおっ！」

「う……吐きそう」

「やめ……はく、なああああー！」

ぐんぐんと速度を上げて瞬く間に消え去ってしまった車両に、櫻

子達は全員、ぽかんとしていた。

どうやらこちらには舟の姿は目視出来なかったようだ。車だけが凄まじい勢いで走行していくのを見ただけらしい。

先ほどまではその姿を目視して、あんなところにいる！と怒髪天をつくように怒り狂っていたが、その凄まじい速度を見せつけられれば櫻子は怒りという感情すら一瞬、忘れ果ててしまった。

「何、あれ」

須賀がぽかんとした表情を浮かべていれば、その脇ではわなわなと肩を震わせて櫻子が怒りに震えた様子で言うのだ。

「島田さん……こちらも飛ばしてください。もう、大至急こちらに追い付くように！いつちゃってええええ！」

「綾小路様……それはちょっと……もう、オーバーホールが必要なほどに一度飛ばしておりますし、これ以上やりますと……」

最悪、車両が完全に駄目になると訴える島田に、櫻子は知ったことではないと告げる。

人様の持ち物だからということなど、今の櫻子には通じない。そもそもそんなことは頭の中から吹っ飛んでしまっているようだ。

「いいから！今すぐ飛ばしてください！！早く隼達に追い付くように！！」

「わ、分かりました」

そのあまりの迫力に気圧される形で慌てて島田は眼前に意識を傾けると、つかまっていてくださいねと念を押して一気にアクセルペダルをぐんと深く踏み込み、隼達の車両を追うようにしてエンジンをふかすのだった。

「ひゃあああああああつっ！とめ、とめてええええ！！」
「須賀さん、何これくらいで音をあげているの！！」
「だっ、さっきは綾小路さんだ……っ！気持ち悪いって……」
「ふ、ふふふふ、こんなに熱い戦い、はじめてよ……さあ、飛ばしなさい、島田さん！！」
「は、……ははっ！畏まりました！！」

島田の目の色が変わりきらりと光ったのを見て、須賀は絶望した。

「なんか目覚めちゃった？！も、もう！いやあああああ！！」

+++

警察に捕まらない程度に速度超過をして移動するその車に、肉薄するレベルで迫り、車体を寄せて行く車があった。

「その車！速度落とせよ！」

「危ないぞ」

「そんなこと、分かってるよ！おい！落とせ、速度落とせよ！！」

健は窓を開けて隣の車線を疾走する山田の乗った車両に怒鳴りつけるが、相手の車両は健に一瞥だっしてくることはなかった。

むしろ更にぐんぐんと速度を増していくのを見れば、振り切りにかかっているのだと分かる。

瑞名瀬が危険と判断したのだらう、健の目の前の硝子がせり上がっていく。

その時目にしたもの　それは、速度を上げていく、その車の中

の人物と、目があったのは一瞬だったが、それだけで十分だった。身体中を墨で塗りつぶしたように黒い霧が覆い尽くす山田は、その長い髪の中から爛々と光る、どこまでも深い闇色をした眼をこちらへと向けていた。

その目は憎しみのみを映し出していた。

「なんだ、あれ……」

「……」

「目が光ってた。なんだ、あれ。なんなんだよおっ！！」

健の叫びに瑞名瀬は舌打ちを零すと、アクセルを踏み込み、いつもどおり短く呟く。

「とばすぞ」

その声にこたえる様に、瑞名瀬の駆るマイバッハは唸りを上げた。

58 (風と踊るう) (後書き)

因みに全く関係ない話ですが、瑞名瀬さんの乗ってるマイバッハは、降矢邸から借りたマイバッハです
司書の給与で買えるはずもない

59 (無能だからこそ恐れるのだ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

59 (無能だからこそ恐れるのだ)

一体何者なのか　いや、男からは怪しい人物ではないと言うことも言われ、そしてその身は鷺宮たちにより明らかにされており、一応は安心出来るのだろうが、それでも先ほどのこともあるため、どうにも信用がおけない。というよりもしんきがわくのだ。

せめて男の名を知りたいところだが、何故か鷺宮も澤田も、その名を明かそうとはしない。

だからこそ男のことが気になって仕方ない人物がいた。

それは誰もがそうかもしれないが、その中でもひととき強い興味を示しているのはエマだ。彼女は千草と奏の後をゆっくりとついていく大きな男の背を、警戒もあらわについていく。

その背に隠れて見えはしないが、そこには雫が庇われるように、慈しまれるようにして、大事にしまいこまれているのだろう。

エマの見立てでは、男は確実に人ではない。それは千草も奏もわかっているだろう。

だが、鷺宮も澤田も男のことについては「義経のところについてから」と口にするだけで、何も喋ろうとはしなかった。だからこそ聞けずにつつといたのだ。

雫とてよくも知らない人物のその腕の中に囲われていれば、さぞかし居心地が悪かろうに、更には相手がどうやら人ならざるものがある……となれば、下手に騒げば　と考えているのだろう、身じろぎ一つするのも気を使っているように見えた。

「あれは一体……なんなのですか？」

「そいつは俺たちに聞いているのかね？」

鷺宮がつるりと顎を撫でさすりつつ尋ねると、とぼけるなどエマが言う。

「あれは……悪しきものではないとしても、一体なんなのですか?!
何という力、そしてそれも、たった一人の色なしに懐くなどと……
危険ではないのですか!」

何故か男は途轍もない力を見せつけこの屋敷に辿りついたかと思えば、今度は車からよろよろとした頼りない足取りで降りた雫をふわりと手も使わずに抱えあげた。かと思えば、男は柔らかな笑みを浮かべて雫を自身の腕の中に囲ってしまうのだ。そしてそれからその場に居る雫以外の人物たちの顔を一瞥すると、興味もなさそうに「呼んでいる」とだけ告げて、義経の元へと案内をし始めた。主語すら言うのが億劫だとも言うのか、決してそれ以上口を開こうとはしなかったのだ。雫以外には。

ただ一人、雫にだけ優しい笑みを向けている男に、エマはその時から警戒を向けていた。

あのような力を持つものを、ただ一人の人物がいいように使えるかもしれないという事実。それは六花神という一族。それは組織とも言えるが、それを根底から揺るがすものにすらなりかねないと言ふことだ。

雫は色なしだ。

下手に能力がなくてよかったととるべきか、それとも自身が力を得たわけではないようだが、どちらにせよ莫大な力を彼女は得た。その事実にかわりないだろう。

きゅつとエマは唇を引き結ぶと、鷺宮と澤田へと向きなおり口を開く。

「危険ではないですか。あれは色なしです。それをあのよう……」

「何が危険だっつんだかか全く分からないんだが」

「分かるはずでしょう!？」

いつまでとぼけ続けるつもりなのか、エマは焦れるような思いを抱えて叫ぶ。

「今まで能力がないと言われてきた色なしです！それが力を手に入れるとは、それが分からないはずがありませんでしょう！」

そう叫んだ後で息を切らせて足下の石段を見つめていると意地の悪い声がエマの耳へと滑り込んでくる。

「ああそういうことですか。今までおぼっちゃま　啓一様も、雫お嬢様も、あなた方には大変、いびり尽くされてきましたしね。お二人から何か仕返しをされるかもしれないと怯えているわけですか」

なるほどなるほどと澤田が何度も頷きながらこれを言えば、ああそういうことかと鷺宮もようやく納得がいった様子である。

だが、いつものどこか飄々とした様子を一変させて鷺宮は真面目な表情で言うのだ。

馬鹿かと。

「今まで散々自分たちがやってきたことを仕返しされたとしても、それでお前らが文句を言おうとするのはおかしくうよ。もしも報復がお望みだつてんならよ、お前さん達はちゃんと頭からそいつをひっかぶってこいや。お嬢にはその権利があるし、そしてあの男にもその報復を行う権利がある　というよりも許されてると思うがね」

物騒な言葉を口にする鷺宮に、エマは知らず肩を震わせる。

先ほどの風を操る能力、それは凄まじいものだった。

雫たちが乗っていた車両重量はおよそ二トン五百キロ。そこに乗っている人間の体重もプラスされるわけだから三トンは行かないま

でも相当な重さであることは確かだった。

それだけの重さを動かせるだけではない、更にそれを風を巧みに操り、文字通り押し出したのだ。

六花神の能力者にも風使いはいる。だがしかし、彼はそこまで強い風を起こせない。

風でものを押し出すことが出来たとしても、恐らくはその上限は数十キロがせいぜいだ。2トンをゆうに超える大きな鉄の塊を、どうして運ぶことが出来るだろうか。

あれはどう見ても人の身にはあまる力だった。

「あの方はお嬢様に大変恩義を感じております。それもそのはずであります。あの方はお嬢様に命を救われています。それゆえあなた方の今までしてきたことに関して、あの方がなんたることかと激怒しましたが、私はさして驚きませんよ。それどころか一瞬にしてあなたたちが引きこもるあの山を消そうとも、仕方ないとさえ感じるほどです」

然もありなんと頷いて言われれば、エマは反射的に反論の言葉を紡ごうとする。

「なんつ」

「なんたることってか？じゃあお前さん、お嬢に今までしてきたこと、今この場で言えるか？それもあの男にだ。ケイにもお嬢にも、ほとんど赤ん坊とさえ言えるような時からお前さんら、一体何をしてきたってんだ？忘れたわけじゃあるまい？」

言つて見ると言われ、エマは言葉を失ってしまふ。

雫を小さな子供たちが殴りつけているのを見たこともある。啓一にいたつては、盛大にやり返そうとしていたが、多勢に無勢だ、それは無謀と言うしかないものだった。

それは親が　大人たちが啓一と雫を「色なし」と蔑み、そしてまるで病原菌でもうつるかのように「近寄るな」と、傍へとすら寄せ付けなかったことが起因しているのだろう。

存在を徹底的に無視し、そして蔑み、嘲り、傍に寄せることすらしない。

義経がいかに大きな力を持った崇拜すべき人間といえど、能力のないその子供は敬うべき存在ではないのだ。徹底的な血族主義で能力主義。それが六花神の一族。

大人たちはそうして近くにくることを良しとせず、更には当たり前のように無視をする。

他の子供たちには決してやらないことをされる啓一と雫は、六花神では異質な存在だった。

親がそれなのだ、その子がそのまま「こいつにならば何をしても許されるのか」と勘違いをしても仕方なかった。

殴る蹴るの暴行は、最初のうちだけだ。気づけば能力の試し撃ちに使われるようになるのも、時間はかからなかった。

全身に水をあびせられたかと思えば、風がその小さな体を掬いあげて木の上に放りあげてしまったこともあった。痛みだけを与えられる能力により、声が枯れるほどに叫びをあげ続けていたこともあった。

そのほとんどが大人たちが「それ以上やると死ぬ」との判断がおりるまで誰も止めず、見て見ぬふりをしてきた。

今になり、啓一が六花神の名のつくものを全て拒否するように、旧正月以外、山に出入りをしなくなったのも頷ける話だろう。

山に行けば毎日のようにそのようなことをされ続け、いったい誰が恨まずにいられようか。誰がそんな非人間的な扱いをしてくる連中のことを同胞と思えようか。

たとえ血が繋がっていようと、そのようなもの何の価値があるというのか。

雫も啓一も、六花神は自分達の血の連なる一族であることは知っ

ていても、その価値は何一つ存在しないのだ。

だから今になり、雫があそこでされたことをうつかり口を滑らせたとしても、それにより山が一つ消し飛んでも、雫を誰が責められるのか。

鷺宮と澤田は冷淡とも言える眼差しを向けてエマへと告げる。

「俺たちがあの二人を助けに行つた時、それをお前らは銀朱だからと生意気言つなつて邪魔してくれたよな。その連中の顔、俺は今も忘れてねえぞ」

憎しみはいつになつても消えない。忘れられない。風化などさせるはずもない。

鷺宮は真つ直ぐにエマを見据えてやると、エマは怯んだ様に一步、足を引いた。

「あの方は報復を望まないでしょうが、それでも報復をなさろうとするのであれば、私もそれに参加しようとは思っています」

断る理由は何もない。それどころかそれを邪魔する理由すらないのだ。彼らには。

「今までしてきたことがそっくりそのまま返ってきただけだ。何も困ることはねえだろ？」

「お嬢様が耐えられたんです。あなた方大人が耐えられないはずがありませんよ」

水責め、火責め、風もたつぷりあるから如何様にもしてやれると言われれば、エマは青い顔で転がり落ちるようにして階段を降りていく。

その様子を見ても、二人は少しも笑いもしなかった。

恐怖を感じられるだけまだ余裕があるなと冷静に見れたからだ。

59 (無能だからこそ恐れるのだ) (後書き)

暗い部分が続いているんですが、面白いと言っていただけで恐縮です
もうちょっと続くのでお付き合いください

といっても四章までで終了とかそういうわけじゃないですが

60 (秘密の地下室) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

60 (秘密の地下室)

屋敷の奥深く、使用人のうちでも二名しかその場所のことを知らない地下室へ続く隠し扉を澤田が開く。

こんな広い屋敷だから隠し部屋はあるんだろうと思ってたが、まさか隠し地下室なるものがあるなんてと、重苦しい雰囲気の中、千草は内心げんなりしていた。

澤田達につづき薄暗い地下への階段へと足を踏み入れると、つんと鼻を突く嫌な匂いが千草を出迎える。

「何のにおいだ」

「……薬、かな」

「薬？」

千草は脇を進む奏に尋ねるも、奏はその問いを無視して進む。

下へ下へと進むとより暗く、壁に手を這いながらでないと危なくて進めない。更にはその壁も湿っていて、気をつけないとすべるのだ。お陰で千草は慎重に足をすすめていった。

はじめとして薄暗い、天井からは時折水がぼたりぼたりと垂れてくる、そしてこの鼻をつく嫌な匂いだ、進めば進むほどにそれは強さが増してくるのだから更なる不快感が喉元までせり上がってくるのを感じた。

暫く階段を無言で降りて行くとそこは開けた場所で、部屋全体が古びた石壁で出来ており、そして中央には椅子に足を固定された先ほどの女がいた。

堀井は満面の笑みを浮かべ、鷺宮を迎える。

「ああ、やっぱり司郎は来てくれた！」

先ほどの舌足らずな言葉づかいはどこにいったのやら、薬が抜けたのか堀井は普通に口をきけていた。

「義経様が酷いのよ。何を知っているのかって、うんざりするほど同じことをずっと聞いてくるの。ねえ、司郎からも言つて。こうなる運命だったんだつて。もともと決まっていたことなんだから、そんなにおかしいことじゃないのに、義経様はおかしいわ。私のことを睨むんだもの。変なの」

そしてくすくすと可愛らしくくすくすと喉を転がして笑われれば、鷺宮は口元をおさえ、膝をついてしまふ。今までのことが一気に頭の中に蘇ってきたのだろう、強烈な吐き気を堪えている様子は、事情を知っている面々にとってみれば、あまりにも痛々し過ぎるものだった。

「司郎！？どうしたの司郎！？義経様、この足を解いてください！司郎が！」

堀井は鷺宮が倒れたのを見ると膝を揺すつてなんとか鷺宮の元へと行こうとするが、椅子に拘束された足がその自由を奪う。けれどそんな堀井を見ても義経は何とも思わないのか、眉根をぴくりとも動かそうとはしなかった。

「これで良かったのだろうか？」

そう言い地下室に現れたのは先ほど雫達を強引に連れてきた男だ。雫は男の膝の間で居心地悪げにその肩を抱かれている。どうにも困惑しきりといった様子に見えた。

ちらとそちらを一瞥すると、義経は重苦しい嘆息を零して言う。

「雫、その神はタケミナカタ、とお前に呼んで欲しいそうだよ」
「タケミナカタ、神……」

きちんとした名で呼ばれたタケミナカタは、首をゆっくりと振って否と告げると雫の柔らかな髪をひと房掴みあげ、優しくそれを手のひらに包み込むと、慈愛に満ちた眼差しで見つめてくる。

「タケミナカタでいい」
「……ですが」

神をその総称を取り払って呼ぶなど、無理だ。恐れ多くてとてもではないが出来ない。

タケミナカタは雫を屋敷まで無理やり風で押し込むようにしてその乗った車両ごと連れ帰ると、降りてきた雫の傍に佇み自らのことを語って見せた。

タケミナカタはイオリから聞いて知っていたらしく、雫とかがりの事情にも精通している様子だ。きちんと神であること、そして雫の傍に居させて欲しいとだけ告げて、こうして雫の身をそっくりと軽く拾い上げるとその膝の間に納め、愛しむようにし始めた。

その様を見ても義経はいつものように娘に触れるなど暴れることは無かった。むしろそこならば安心だとも言うのか、直ぐに義経は冷たい視線を堀井へと向けると、彼女が邪魔だったのだろう、ス Tangan を容赦なくその薄い寝巻に包まれただけの腹に押し当て、スイッチを無造作に押した。

ほとんど手足が動かせる状態にないところでのこれだったため、びくんと一瞬手足を突っ張ったかと思えば、存外呆気なく堀井の手足はぐったりと伸ばされる。

「でっ」

義経は腕を組んで傍に置かれていた椅子に腰掛けると、やってきた” 司郎 ” に尋ねた。

「何で司郎ってこの女は知ってる？麗は『自分の仕事のこと知り得たようではない、参加しなかった時期のことのため、詳しいことは分からない』と言っていた。だからお前が答える」

義経は鷺宮に顎をしゃくって命じるが、澤田がその前に割ってはいる。

「義経様、そのことについてなのですが、鷺宮本人は、心身のダメージが大きく、かわりに私が答えます」

「私も、あの、お父様。私と奏も同じものを見ました。だから答えられます」

一瞬だめだと、あくまでも本人にこたえさせようと考えていた義経だが、雫を抱える男と目があつたため、いたしかたないと頷いた。

+++

屋敷の内部を調べられていたのは、雫のことを、というものではなかったようだ。むしろ雫は巻き込まれた被害者だ。

タイミングがいくつも重なったがために起こった出来事だったのだろう、そう結論がついた。

厳しい顔をしている義経に、千草がおずおずと話しかける。

「あの、いいですか？」

「よくはないけど、いいよ。たまには話を聞いてあげよう。何？」

「その……なんで司郎なんですか？鷺宮守でしょう？名前が違うんですけど、潜入捜査って、そこまで本格的にするものなんですか？」
「ああそういうこと……そうか……そうだよねえ」

ここまで知られてしまつては、いい加減に表向きの話だけではないられないだろう。

義経は全員に席に着くように話すと、上に腕をつきだした。

するとその腕に引かれるようにして、するすると沢山の椅子が義経の頭上から降りてくるのだ。

一人で椅子は円を描くようにして綺麗に囲んでいくと、その中央にはこれまた大きな卓が上から降りてきて中央に収まった。

全てが綺麗におさまつてしまつと、義経がさあ全員どうぞと座るように促される。

「どこから話してあげようか」

ぼんやりと中空を見つめる義経の眼は、見た目に反して、長い月日を見つめ続けてきたことを裏付けるだけのものがあつた。

嫌気がさすほどその顔のまま生きているのだと、その表情から嫌でも千草は悟らざるを得なかつたのだ。

卓を用意した義経は、ああそつだこれも忘れていたと用意するのは水瓶だ。それを上からまたも手を使わずに取り出すと、そのまま卓の端に置いてしまう。そして雫に呼んであげると雫へと促した。周囲はこれに対し何のことか分からないと首を傾げるだけだが、雫には意味が分かつたらしく、苦々しい顔をして本気なのかとでも言いたげな目を義経へと向けてくる。

雫は困つた。

タケミナカタだけでもよく分からないというのに、ここにきてイ

オリまで呼べと言うのか。

千草と奏、そしてエマだけはそれこそ完全に何のことか分からないという表情を浮かべているが、タケミナカタの膝に座る雫が目の前にいるだけに、その表情はただそれだけではない。

まだ何かあるのか、というものと、これは千草だけだが、どうしてそんな男の膝の上にいるのだという、軽い怒りのようなものが見えた。

鷲宮たち義経の従者三名は、イオリのことかと程なくしてそのことに思い当たれば居住まいを正してイオリの登場を待っている。これでは呼ばないという選択肢は与えられていないのだとしか言いようが無かった。

雫は迷った末に小さな声でイオリと呼んだ。

するとイオリはその声に応えるようにして、水瓶の中からぐるぐると水しぶきをあげて飛び出してきたのだ。

そして開口一番言った言葉はこれである。

「……………何これ狭いんだけど」

61 (無意識のうちに手に入れていた刃) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

61 (無意識のうちに手に入れていた刃)

不満の声を上げるイオりに義経は適当に言う。

「地下室なので勘弁してください」

水瓶しか用意できませんで申しわけありませんねと吐き捨てるように口にする義経に、イオリは水を一滴飛ばすと水場くらい全ての部屋に用意をしておけと告げた。義経は絶対に雫の部屋には水は用意するものと誓った。むしろ噴水の水も全て止めてやるうかとさえ思った。

ずるりと全身をそこから出すと、イオリは水瓶を抱えて雫の脇へとやってきて微笑む。

「やっと呼んでくれたね、小さな雫」

「……小さな雫は余計です」

先日最悪の出会いを経験した二人だが、イオリは別れる際このようなことを雫へと約束させた。

何かあったら名前を呼ぶこと。必ず助けに行くからといい、最後には半ば無理矢理約束させた。名を呼ぶことを。

それから言うもの、一度たりとて雫はイオリを呼ばず、ずっときていた。だがしかし、タケミナカタを呼びだし話をするからにはイオリを仲間外れにするわけにはいかないと判断したのだろう。義経は呼ぶようにと雫へと命じたのだ。

ぶすりとした表情を隠そうともせず、雫はイオリからそっぽを向いた。

それを見てもイオリは凹まない。それどころか、嬌笑を浮かべてその頭のとっぺんに小さく口づけを落としてきた。

慌てて雫が背後をふり仰ぐが、すると今度は待つてましたとばかりにその小さな花弁のような唇にまで口づけられてしまった。

「……ッ!」

「真っ赤になるなんて、本当に小さな雫は可愛いね。さて、ところでなんで僕を呼び出したの？助けが欲しい？」

イオリは先日から行き来を何度かしているらしく、タケミナカタとはある程度親しくなったらしい。タケミナカタの脇まで椅子を水で運ぶと、水瓶を卓の上に置いて雫の髪を弄びつつ尋ねた。

「じめじめとしていて僕はここにおいても特に問題はないんだけど、あなたは辛いだろくに。大丈夫なの？」

「特に問題はない。彼女さえ居れば」

膝の上に抱いた雫がいるから問題がないと口にするタケミナカタに、イオリは少々悔しそうに言ったものだ。

「僕も今度抱きしめたいなあ。小さな雫はとても柔らかさそうだ。いいよね？」

「だ、だめです」

「なんで？」

「だめだからです」

「……鼻痕だ」

「なにがですか」

「タケミナカタには許してる。ずるいよ。鼻痕だ」

「ち、違います！これはその……成り行きです」

「成り行きなのか？」

「お、……おろしてくださるのであれば」

下りたいともごもごと口にする雫に、悲しそうな眼差しを向ける男の姿に、ちくりと胸が痛む。

いいよね、いやだめだ、なんで 先ほどから三人はこの問答の繰り返しだった。

大変可愛らしいやりとりである。

だが、それを見ていて楽しいとは決して言えなかったのが義経と千草だ。

二人は卓を割る勢いでだんと勢いよく叩きつけると、怒号をあげた。

「いちゃいちゃ禁止！つていうか雫から離れなさいその二人！！」

「おい馬鹿！何やってんだ離れる！！」

この声に対し、神は言う。

「何故そのようなことを命令されねばならぬのか」

「おい、その人間。その馬鹿というのは『うつけもの』という意味か。僕知ってるぞ、この間この家の中で学んだからな」

「ほう……そうなのか。しれもの、うつけもの、そういった意味なのか。勉強になるな」

どうやらこの若い男二人は、明治以前から生きているらしいと千草は知った。馬鹿というのは明治以前は使わなかった言葉だからだ。

だがしかし、いくらなんでも不老だからとて、何十年どころか百年以上もの間、その顔のまままで生きているとなると話は別だ。義経たちも何度見てもおかしいと思っていたが、これはどう考えても今まで感じていた比ではない程おかしいと感じる。というよりも変だ。化け物だと言いやがなかった。

その化け物二人がにこりともせず千草へと言う。

「雫が『しれもの』だと言う根拠はなんぞ、人の子よ」

「僕らの雫をまさか、理由もなく罵ることはないだろうからね」

どんな理由ありきなのか聞かせると告げるイオリの目をまともに見れば、千草は毛穴という毛穴が一斉に開いたのを感じた。

凄まじい威圧感だ。それを覚えれば、くらりと千草は視界が一瞬失せたのを感じる。

なんだこれは。

「いや、あの……」

おろおろと雫がしていたかと思うと、意を決して口を開いた。

「い、いつものことですから!」

それはとどめの一撃だった。

「あーああ……なんでこんなことに」

ぼやく奏は雫とともに元きた階段まで引き返して、ことの成り行きを見守ることにしていた。

下の空間から激しい物音と共に小さく悲鳴が聞こえる。

おろおろとする雫をどうどうとおさえるが、本当に困ったことになった。

鷺宮がエマを引きずつてくると、同じく階段の入り口に四人でそつと身を隠し、こちらもおさまるまで様子を見ることにしたようだ。

「千草は大丈夫でしょうか」

自分の一言が現在の状況を引き起こしてしまったため雫はまた青い顔をしていた。

「大丈夫だと思うよ……たぶん」

「さすがに殺しはしらないと思うぜ……たぶん」

「たぶんって……あの、物凄く……不安なのですが」

エマがわなわなと肩を震わせて口を開く。

「あな、あなたは……なんてことなの」

雫を凝視してエマがごくりとのを鳴らす。

「一体なんのことですか？」

雫ただ一人が分かっている。

エマの見立てでは、彼ら二人は神だろう。

その神をただの一言で使役することの出来る人物。それを警戒しないほうがおかしいのだ。

やはりエマの懸念していたことは現実となるかもしれない。

たった一言、馬鹿と言っただけでこれだ。過去起こった出来事が明るみになれば、あの隠れ里たる山は、一つまるごと消し飛ばすかもしれない。

そして、それは雫が望むと望まざるとに関わらずそうなるだろうと予測がついた。

エマは手にぐっと力をこめる。

先に消すしか……ないだろう。

ごきゅぐ、喉が奇妙な音をたてて唾を飲み込んだ。

61 (無意識のうちに手に入れていた刃) (後書き)

零からすれば無意識下ですが、そういうわけではない
ついでにいうと報復されても仕方ない人達とも言える
やるやらないは別として

62 (僕達は三世代目) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

62 (僕達は三世代目)

嵐のような状況が過ぎ去り、ぐったりとずぶぬれの椅子に崩れ落ちそうになる体を必死で支えながら千草は義経のほぼ真向かいに座っていた。

「君が降矢家について知っていることはどこまで知ってるのか聞かせてもらえる？特に、僕と雫について」

「……」

千草をまつすぐに見据える眼差しは痛いほどだ。

けれど見つめあう二人を見ていて、周囲は何やら視線をよそへ向けていた。まともに見れないのだ。ずぶ濡れの千草と義経がきりりと真剣そのものの表情を浮かべていても、どうにもしまらない。それは先ほど散々神二人にぼろくそにやられたがゆえなのだが、この際それは割愛しよう。ただ真剣味に欠ける画になっているということだけは確かだが。

千草は惑いつつも口を開く。

「前に聞いた六花神義経って言うのは知らないですけど、降矢義経についてなら、多少は知ってます。降矢宗一郎の息子で、義経は三男として生まれた。長男は交通事故により若くして死亡。啓一という男児を一人残し、他界したと。次男にも子供が一人。それで……次男も病死したので、海外留学中だった三男が二十歳の時に、啓一とともに雫を引き取った、と。降矢家となると有名ですから、誰でもこれくらい知っているんじゃないかと思います」

降矢邸に来ることになった折り、せめて基礎知識以上のものを仕入れようとしたのは記憶に新しいが、それはあえて口にはしなかつ

た。これくらい実際に六花学園では知っていて当たり前前の知識だったからだ。むしろこのレベルでさえも知らないとなれば、一体君はどこの誰の運営する学園に通っているのかと、義経に嫌みを言われかねない。それは嫌だった。

宗一郎のもとに長男として生まれたのは頼光だった。そして次男は正成。三男が義経だ。

宗一郎の趣味のようで、息子達全員に武将の名をつけたらしい。それぞれ時代が違うだけにどうとも言い様がないが、全員がそれぞれ英雄視される人物達の名であった。

現在は啓一も雫も、三男である義経が引き取っていることは知っていたために、千草はこの屋敷にきてそれを目の当たりにしてもそう驚かなかった。義経がいることも、雫と仲むつまじい様子も。それは当たり前のものでして受け止めていた。

義経が雫を引き取ってから時間がだいぶ経っているため、それはどこにもおかしなことなどないと感じていたのだ。

義経が引き取った兄達の遺児を、我が子のように大層可愛がっていることは、降矢のことを少しでも詳しいものだったら誰でも知っている話だからだ。

「現在は、従兄弟だったかな。もう一人引き取ったので啓一と雫の間に一人増えたというのは聞いてます」

あくまでも記号として雫の名を口にする千草に、雫は微妙な表情を浮かべている。

「じゃあ義経という人物は、雫たちにとってみたら何にあたる？」

自分のことではないような話し方に、奇妙なものを感じはするが千草は首を若干捻りながらも素直に答えた。

「そりやまあ……養子？を、引き取っている、優しい叔父であり、父であるかと」

長兄から引き取った子となると、当たり前にはそれは養子となるだろう。それは義経から見ればだ。

そして雫や啓一からすれば、義経は義理の父親であり、それと同じに叔父にあたる存在だ。

そう口にすると義経は首を傾け、千草の目をのぞき込むようにして言うのだ。

そんな模範解答な答えは一旦頭の中から排除すること、そう言われ、続けられたのはこんな言葉だった。

「君ともどうせあと何十年も一緒なんだろうから、教えてあげる。

降矢宗一郎の三兄弟のうち、長男も、次男も、全てそれは僕なんだよ」

「……」

「僕の名前は頼光であり、正成でもある。そして今の名前は義経だ。僕は降矢義経であり、降矢頼光であり、降矢正成であったもの。そして現在は六花神義経として、六花神の猩々緋たる人物。それが僕だ」

義経は一言一言をじっくりと千草に分からせるように紡いでいくと、意味が分かったかと尋ねてきた。

意味など分からなかった。いや、分かりたいと思わなかった。

それをそのまま呆然と口にすれば、義経は可哀想なものでも見るような目を向けてくる。

「長男であったころの僕は、十六歳の旧正月を迎えた日か、それから極端に年をとらなくなっていた。二十二の時にはもう、見た目と年齢のギャップに周囲を困惑させていた。能力が強すぎた所為な

んだらうけど、僕は他の一族の者達よりも、歳を重ねにくい体質だったんだ。だから、啓一が生まれてからある程度時間が経ったある日のことだ、僕は自分を殺さなくちゃいけなくなった」

義経の言葉を繋ぐ形で澤田が続ける。

「……幸い、義経様のお母上はそのことを予知していましたので、六花神のもとで定期的に男児を生んだようにと、架空の人物の戸籍を定期的に得ていました。これにより、義経様はそれ以降、次男としての人生を歩み始めました。降矢宗一郎の息子、次男正成の誕生です」

「無茶苦茶だ」

どうにかこうにかそれだけを絞り出せば、義経は首を横にふって残念だとも言うのか、悲しそうな目を向けてくる。

「僕は言ったよね？僕の年齢は四十二だって。三男としての年齢は四十二だけど、実際の年齢はもうそろそろ六十の大台に入るところだよ」

いや、六十はもう超えていただらうかと首を傾げて言う義経に、いよいよ千草は絶句してしまふ。

その二十代前半としか言いようのない見た目で、どこをどうすれば六十という数字が出てくると言うのか。

「六十歳……？」

義経の言葉を素直に真に受けたとしよう。そうすると長男としての年齢から数えて考えれば、確かに六十近いことにはなる。それはあくまでも長男が生きていた計算上なりたるものだ。

それをそのまま義経にあてはめたとしても有り得ないと言いがよい。義経の見た目年齢は、どこをどう見積もっても、二十代前半にしか見えっこないのだ。

「……見えませんよ、六十だなんてそんな」

「だよ。だから僕も父上も母上も困ってね。だから僕は 僕自身を殺す羽目になった」

それは、酷く重い言葉だった。

知らず唾が口の中に溢れてくるのを感じると、千草はごくりとその唾を飲み込む。何故かそれは苦味が感じられた。

この場でただ一人、そのことに驚いていたのは、千草だけだ。

周囲を見回してみても、誰も驚きもしていなかった。

その事実が何故か、辛い。

集まる視線に耐えきれず、千草は俯けば、そこに畳みかけるように澤田の言葉が耳へと飛びこんでくる。

「そして、それは私たちも同じだったんです」

+++

「降矢君の血を飲むことによつて契約出来ることは聞いたでしょ？ その血を得ることで私たちには彼と同等の力を入れることになった。 まあ、劣化版だけだ」

「おかげで俺らも年を食わない。だから、まあ……ここまでくれば分かるように、司郎は俺の本名だ。一代目の名前になる。鷲宮司郎、それが俺の……親から貰った名前だ」

「だから……司郎」

そう堀井は呼んだのか。

「っそ。んで、俺らも六十ちつけえの。司郎として大学、大学院までいって、その裏では六花神で仕事をして、この屋敷で生活してきた。それからだな、頼光が事故死したことにした時、俺達も時期を多少ずらして死んだことになった。んで、知っての通り、正成は海外在住だっただろ？」

「え、ええ。次男の正成は、確か降矢の海外部を総括するために動いていましたよね」

「第一世代を私達は全員死んだことにした後、直ぐに海外へと移動して、第二世代に移行したんだよ。それからほとぼりが冷めて皆私達の顔なんて覚えて無くなった頃、こっちへ戻ってきたんだ」

少しでもばれる可能性をなくすため、四人は必死だったのかもしれない。

「そして第二世代期間中に色々と仕事をこなしていき、あなたもご存じの通り、第三世代　今現在の名ですね。こちらの名にかえてから、我々は未だ十代で通る顔立ちでしたから、慌ただしく過ごしてきた高校生活をもう一度やることになりました」

とんでもない詐欺である。

年齢詐称どころの騒ぎではない。

お陰さまで六花学園内部には、我々の名前は二つずつ、どの人物もあるでしょうと言われれば、千草はあることに思い当たった。

「……だから、生徒会メンバーとしての名で列挙されているのは今の名前なのか」

色々と納得がいった瞬間だった。

第一世代としての名では、これといった目立つ活躍はしていないように思う。降矢頼光の名は、確かに輝かしくはあったが、目立つ委員に生徒会にと、どれも参加をしていない。

ただ、いくつかのイベントには借りだされていたが、それだけだった。

64 (不適格者の末路) (前書き)

あまり酷くはないと思うんですが、グロ注意。
人が死にます。

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして
造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固
有名称で特定されるものとこの作品は何の関係もありません。
ご了承くださいませ。

64 (不適格者の末路)

ここまで話をすると千草への説明はもう済んだと見たのか、エマが堀井の中に巢食う願望について語り始めた。

「不老、そして鷺宮司郎、この二つに異様なまでの執着を見せている人物です」

人であるならば いや、生き物であるならば誰もが望むだろう不老に執着を見せるのは、何もおかしなものではないだろう。だからこそ義経も納得はしてみせたが鷺宮に対しての異様な執着、これには義経は眉根を寄せて不快げな顔をしてみせた。

「鷺宮……？不老、ね。まあ、結びつくかなあとは思ってどこでそれがばれたのかは分かるか？」

「ばれたわけではなく、自然と知ったのだと。何せ、幼い頃に出会った人物として、彼女は二代目である、鷺宮彰人の頃の彼を知っているからです」

「……ああ、なるほどね。名前だけが違うだけで本人だと気づいてしまったのか」

それは面倒だと口にする、塩見と澤田は顔を見合わせてしまった。その表情はどこか、かたい。

それを見れば義経は他にも理由があるのかと尋ねた。危険因子がまだ他にもあるのであれば、それも摘み取らなくてはならないからだ。

「それが」

すると、とんでもない事実が分かった。

「会話を、聞かれていた？」

「はい。鷺宮と正成様だった頃の会話が、当時、女学生だった頃の彼女に聞かれていたようで……」

それを耳にすると、義経の顔色は激変した。

勘違いだったと思わせることは簡単だが、詳しい話を聞かれていたとなれば話が別だからだ。

義経は堀井を拘束する縄を力で引きちぎったのか、突然ばつんと大きな音をさせて堀井を拘束していた縄が弾け飛んだ。

そして自由になった手足を無造作に空へと放り投げる様にして持ち上げると、義経は全員を椅子ごと机からぐつと一瞬にして遠ざけてしまう。勿論腕など使いはしない。あたかも目の前から思い切りぐつと椅子ごと突き飛ばされたような形で吹き飛んだのだ。

イオリが慌てて水瓶を掴み何だと訝るような目を向けるが、義経は怒りに我を忘れてしまったのか、無言である。

腕を伸ばした先の宙に浮いた堀井だけを怒りに染まった目で睨みつけていた。

ざわりと風もないのに義経の髪が風に飛ばされたように音も無く揺れる。

机の上が綺麗さっぱりと広くなると、義経は突き上げた腕をそのまま振り下ろした。

途端、浮いた堀井の包帯塗れの身体が、円卓の上に叩きつけられたのだ。

ずだんとけたたましい音を立てて堀井を叩きつけると、義経はそのまま油断を塵ほどもするつもりはないのか、ぎりぎりとおから押しつぶす勢いで机に彼女を縫いとめる。

衝撃で起きた堀井はこれに驚いた。瞬きをするだけでやっとの状況に、困惑しきりの様子だ。

「な、何?!何なの!?!」

「先ほどお前のことは聞いた。俺達の仲間になりたいと、そういうことでいいんだな?」

不老、それに執着しているのだから、当たり前前に仲間になりたいからこそそう考えているのだと思った。

困惑しきよろきよろと目だけは忙しなく動かしていた堀井は義経の言葉を聞いた瞬間、一瞬ほかんとしはしたものの意味が分かった途端に満面の笑みを浮かべてその通りだと言った。

「いいんだな、お前は。元の生活に一切戻れなくなったとしても、それによりお前のもっとも近い者達に会えなくなったとしても、それで、本当にいいんだな?」

念を押すようにそう尋ねてみたものの、堀井の答えは決まっているのか何をそんな今更とでも言いたげだった。

「やっぱり!ええそうよ、いいに決まっているわ!大体、そんなの惜しくなんてないもの。だって、私は特別なんだもの!選ばれたんだもの!老いていいはずがないんだもの!ふふ、ふははっ!ふ、ふはははっ!嬉しい!やっつと、やっつと私に気づいてくれた!あははっ!あはははははっ!司郎のことを私が守らなくてどうするって言っの?ねえ、お願い。早く私を仲間に入れて!私は司郎のことを守らなくちゃいけないんだもの!」

これでは司郎と呼ばれる鷺宮自身が目的なのか、それとも不老こそが本当の目的なのか、その言いようでは分からない。けれどどちらもが彼女の中では真実であり、長年追い求めてきた夢そのものなのかもしれない。義経にはどうにも判断がしかねた。

「再度問う。本当にいいんだな？お前には適正がない。その状態で仲間になれば大変なことになるかもしれない。どんな結果になってもいいというのであれば仲間にしてもいいが……だが……」

それは無理だろうと、適正が低い人間が仲間になるための契約を行うと、命に関わることもある。もしもそのようなことになれば本当に後には引けないのだと、義経は若干躊躇いがちに、そして迷いつつ口によれば、堀井は一体義経の言葉の何を聞いていたのか、仲間にしてくれるのではないのかと吠え、詰る。

「だが……それで君にもしものことがあれば」

どう責任を取ればいいのか……こう口にすると、義経急に口を噤んでしまう。

堀井からすればこんなにも盛大に義経から撒き餌を施されたような状態で御預けを食らわされたようなものだろう。生殺し以上の何物でもないというものだ。

堀井は上から押さえつけられて身動きできなくされていることも忘れ、全身に力を入れて声の限りに叫んだ。

「いいに決まってるじゃない！私は特別なの！もしもなんてあるはずがない！だって私は選ばれたんだから！私が選ばれないなんて、おかしいんだから！」

支離滅裂なこの発言だが、本人はいたって真面目だ。

これを聞いて義経はそうかとだけ短く返すと次の瞬間何を思ったのだろうか、身動きの出来ない堀井の上に、自らの手のひらにナイフを突き立てたかと思うと、あるうことかしたたり落ちるその血を浴びせかけ始めたのだ。

「ひっ」

顔面に向けて生暖かい血液がぼたぼたと落ちてきたことに堀井は悲鳴をあげる。その表情は嫌悪と恐怖に一瞬にして染まりきってしまふ。

「なにっ！？い、いや！」

だがそれは義経の、「俺の血を飲むことが、お前の愛して止まない司郎と同じ生き物になる、唯一の道だ」との発言により、ぴたりとおさまった。

「……血を飲むの？血……そう、そうなのね。吸血鬼ってそうよね、そういうものよね」

まるで私ったらおバカさんとも言いだしそうなほどに、勝手に話を進めて勝手に納得したようだ。

何度も大きく頷くと、先ほどの嫌悪はどこへいったのか、すつと大きく口を開いた。それはまるで、大好きなお菓子を口に放り込んでもらえるのを待つ子供のような仕草にも見える。

瞬間、栗ら子供三人は、顔をうつとそむけた。正視に耐えかねるこの光景に、笑みを浮かべているのはただ一人、堀井だけだ。

顔面に血を目一杯浴びた堀井は、喉を鳴らして血を飲むと、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「……ふ、ふふ、やった、やったわ！これで私は司郎と同じ！……ずっとならぬと一緒よ司郎」

そして最後に愛していると締めくくると、一見すれば愛の囁きめ

いた台詞ではあるが、聞いている者達からすればそれは、脅迫めいたそれにしか聞こえなかった。

笑いはしゃぐ堀井に義経は一瞬氷のような目を堀井に向ける。

義経は治癒力も通常の比ではないものを持つているため、きゅつと傷つけたばかりの手のひらを指で撫でれば綺麗な表皮がもう現れた。それを確認しながら義経は堀井へと念を押しすように尋ねる。

それは確認なのだろうと、後から思えば考えられたものだった。

「何ともないか？」

「……？ええ、何ともないわ。……もしかして、何かないといけなの？そういうことなんですか、義経様」

取ってつけたように、時折混ざる敬語に笑いもしないで義経は言葉を返す。

「いや、何かあったらいけなから聞いてるんだ。本当に、何も無いんだな？」

「ええ、それはもう」

血まみれでにつこりと笑みを浮かべる堀井に、義経は無表情だ。

「言っているじゃない、だって私は選ばれたんだから。だから私は……くっ！」

礫にされたままに堀井は胸を張る様にして誇って口を開いていたが、急に顔色を悪くして、口からぶくぶくと血泡を吹き始めた。見れば全身を小刻みに震わせて酷く苦しそうだ。

「ぐっがつ、あゝあゝ……あああああゝっ！……！」

「ひっ！……お、お父様！お父様堀井さんが！」

雫は義経へと助けを求める声を発するが、義経は答えない。

「……………」

「ちよつと……………拙いだろ！なあ、そいつ、拙いつてほんと！泡吹いてる！」

そんなことは見ればわかることだが千草は義経の直ぐ傍まで行くと、堀井を早く解放してやってくれと懇願するが、義経は聞く耳を持たない。むしろ益々強い力で抑え込んでいるのか、円卓はみしみしと酷い軋みを上げていた。

「きゃあああつー！！」

雫が悲鳴を上げたのを聞きつけると、千草は義経では無く、雫の方へと目を向ける。だが雫のしているのは円卓だった。

「……………なん、だ、これ……………」

円卓の上では、じゅくじゅくと肌という肌から音をさせ、いつの間にか全身をまっ黒く染め上げた堀井らしきものが暴れていた。正確に言えば、義経の力により円卓に縛り付けられているため、円卓の上ではたばたと指先や顔など、動かせる部位を全て使って忙しく蠢いていたと言っべきだろう。

まるでそれは、浜に打ち上げられた魚のように、びちびちと白い腹を見せて息も絶え絶えに苦しそうに蠢いているようだ　そんなシーンを連想させた。

「適正なしの人間なんだから、お前が俺のものになんてなれっこないだろ。……………だから言ったじゃないか。ほんとに……………馬鹿な女だ」

64 (危険予知) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

64 (危険予知)

詳しい話はエマから聞いたが、山田の手先となり零の身边に被害を及ぼす写真を撮っていたこともそうだが、自らの肉体が老いることのない肉体であるために苦しみ悩み抜いた義経達のことを、少しでも理解をしようとしなかったことで義経は強い怒りを覚えていた。いや、堀井に今や、憎しみすら抱いていた。

どれだけ自分達が大変な思いをしたのか分からないならば、いっそその身体で分かかって貰おうと、同じことをしたのだ。

鷲宮達従者に振舞った、血。それを堀井にも飲ませた。

「って言うかね、僕のモノを何勝手に私の司郎なんて呼んでるわけ？うざいんだよお前」

肉親にはもう会えないことを知っていて尚、義経についてきてくれた鷲宮、澤田、塩見。彼らは義経のものであり、彼らからすればまた、義経は彼らのものなのだ。そうした契約をした。

四人はまさしく運命共同体だった。

それを知らずに勝手に割り込んでこようとされて、知らず苛立ちが脳天を突き抜けていたのかもしれない。

義経は、こうなることを知っていて、堀井が血を求めるように仕向けた向きがあった。

だが、それは何ら恥じることもないと考えていたし、悪びれる様子も無かった。

邪魔ものだから排除した、彼からすればたったそれだけのことだった。

ぐずぐずと泡になりながら崩れていく、先ほどまでは堀井だった

ものを見て、慌てて澤田は雫達子供を避難させた。

隣の部屋に移動すると、エマでさえ青い顔をしていた。

「なんだ、あれ。ほんと一体何なんだよあれ！！」

千草が恐怖に引き攀れた叫び声を上げると、その問いに答えるかのように義経も遅れて部屋へと入ってきた。

ちらりと雫を見ると怯えた顔をしていた。可哀想には思わない。いずれ知るべきことだからだ。

ただし、今までの義経であればそれは、異常とも言える行為だろう。

雫を六花神と名のつくものからどこまでも遠ざけようとしてきたと言いつのに、今回はさも見せつける様にして死体をこさえて見せたのだ。

雫の中にかがりという存在が生まれてしまったことにより、雫はこれから六花神に嫌でも向き合わねばならないだろう。六花神との関わりは、かがりという媒体を得て、雫に結びついてしまったのだ。遠ざけるばかりが守ることではない。知らせることにより守ることもまた、重要なのだ。

だからこそ、知らなければならぬものをこれからは、隠す事はしようとは思わない。

それがどんなにも汚物に塗れたような汚らしいものであるうとも、見せなければならぬのだ。

「適正値のゼロの人間だとあなるだけってこと。と言っても、僕の血と適正が六割もあれば契約は可能だけどね。完全に零だったからこそ、ああなった。要はあの女には、僕の血を受ける価値すらなかった。ただそれだけのことだよ」

「血を受ける価値すらない？」

「僕の血は、六花神でも一番強くてね。お陰で僕の血に適正がある

六花神の人間は酷く少ない。もしも適正があつたとしても、六割以上の適正值がなければ、血を受けただけでもあなるんだ」

ゼロでも死亡、一割でも死亡、五割を超えても、死亡。

六割を超えて、義経の肉体と、精神と、適応することの出来る人間でない限り、彼の血を受け入れることは不可能だった。

だからこそ六花神の人間を、当時の義経は見向きもしなかった。

彼の血を受けるに値しない人間しか、当時の六花神には存在しなかったからだ。

それを聞けば千草は呻く。

「じゃああんた、……あんたは知ってて、こうなることを知っててあの女に血を飲ませたのか！？……なんてことをっ！！」

掴みかかりはしないが、余程掴みかかりたかったのか、その形相は酷いものだった。

千草はぶるぶると全身を怒りに震わせて義経と向き合う。

どこまでも底が知れない男だった。

この男は顔色一つ変えず、冷酷な判断を下し、堀井を処分したのだ。

ぎりぎり歯がすり減るほどに噛みしめれば、義経はいつそ面白がるような目で千草を見る。

「何それ。怒ってるの？変なの。不気味だって、君だって言ってたろ？エマから記憶を抜いたものを見せて貰っただろう？君らは全員気持ち悪がってた。そうだろう？なのにどうして怒るんだ？わけが分からないな」

首を傾げて本当にわからないといった様子の義経に千草は震えた。こいつは本当に人の血が通っているのかと思った。

不気味だからといって、殺していいはずがないではないか。
千草は有り得ないものを見るような目つきで見つめる。
気持ち悪かった。不気味だった。何より 目の前の男に、純然
たる恐怖を感じた。

「……あんだ、おかしい。狂ってる!!」

どこがだと面白そうに問いかけてくる声を見無視し、千草は義経の
底の深い、得体の知れないものを見つめ続け生き続けてきた、深い
闇の底のような瞳を睨み据える。

目を逸らしたら負けだと思った。

「だってあの女に僕はちゃんと念を押ししたよね？それでも止めない、
人の話を聞かない。嬉々として受け入れたのはあの女だ。血を受け
る、あの満面の笑み、それが答えだろう？ たとえそれが、僕の
望んだことだとしても、彼女の死、それは、僕の所為じゃない」
「……」

「選ばれていると思いきんで毒をあおった。たったそれだけのこと
だよ。そこには何も無い。ただ純粹に自殺志願者だったって、それ
だけだろう？」

おかしなことは何も無い。

ただ起こるべくして起こったのではと口にする義経の顔は、笑顔
だった。

ふいに雫が首だけを急に上向けたかと思うと、何の変哲もない天
井目がけて唐突に叫ぶ その動きはまるで、獣の様な仕草だった。

「何か、来る！」

「……何を言ってるんだ、お前」

千草が雫を訝るような、それでいて呆れたような目で見つめその顔を覗きこもうとすると、雫は澤田へと千草の顔に指を一本突きつけ「これは邪魔にしなければならない」と、突然わけの分からないことを言ってきた。

これ、とは自分のことだろうか。

千草がこの突然の雫からの罵倒(?)に目を白黒とさせていると、義経達は気づいたらしい。雫が雫では無く、かがりに変わり行くこととしていく。

慌てて澤田は千草の肩を掴むと、意識が正常に戻る前に千草をそのまま連れ出していく。

「一体何だ、かがり」

「よしつね、何か良くないものが来るよ」

その声に触発されたように、鷲宮からも声が上がった。

いつの間にかこちらも天眼の器を作動させており、その半球の上に幾つもの円が浮かび上がる。その円の中に映り込んでいるのは黒塗りの高級外車だ。ただし、どこかそれはスポーツカータイプに見えるもなくもない、少々軟派な車に見えた。間違ってもお堅い仕事の間が乗れるものではないだろう。ある程度格好をつけることを知っている人種ならば、先ず選ばないような車だった。

「……この車に、なんだか妙な反応があるんだが」

「よしつね、イオリ、タケミナカタ、上に行こう。もう直ぐあれが来る」

「かがりが望むのであればどこへなりと共に行こう」

「君の望むままに」

65 (戦闘開始) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

65 (戦闘開始)

二人は雫の赤く染まり始めた目を笑み崩れた眼差しで見つめ返すと、そのままうっつと消え失せた。雫を見送るとイオリはタケミナカタは顔きあい、イオリはその場の水瓶から突如として何の前触れなしに溢れでた水に吸い込まれるようにして、そしてタケミナカタはその場にこちらでも突然巻き起こったつむじ風のようなものに巻き込まれ、消え失せてしまった。

つむじ風にあおられた髪を押さえながら義経は塩見をちらりと見る。

「俺達も行くぞ、麗」

たった一言、たったそれだけで指示は完了していた。

ぶわりと全身を包む熱を感じたかと思えば、気づくと外気が頬をなぶっている。一瞬の移動だった。

外に移動した瞬間のことだ、先ほどの黒塗りの車両が豪華な門扉を突き破る勢いで進入してきた。

開けると義経が前もって指示しておいたお陰で、ぎりぎり門は突き破られずに済んだが、本当に間一髪だった。

スイッチ一つで自動で門は開くように作られていたが、開きつつある門の中央を凄まじいほどの煙を巻き上げて突き進んでくる車両に、なぜか全員がぞくりと寒気を感じる。

「これは確実に荒魂だな。おいおいおい、しかもどう考えてもかなりの年期が入ったやつだろ。一体何だつてまたこんなのが入ってきやがんだ」

全身が総毛立つようなほどに凄まじいものが突入してきたと告げると、それくらい全員肌で感じているだろうと苦笑された。

「なんせ、目の前にきてるんだから」

遠くに見える小さな門からばく進してくる車両を見つめ、義経は胸元へと手を差し入れた。

「何のために嗅ぎまわっていたのかが分かればいいが、憑いた人間本人と話が出来ればいいんだが、どうやらそうも言っていられないようだ」

「確かあの子だったよね、その情報を嗅ぎまわっていた相手って。何で荒魂憑きになってなってるわけ？」

「……それは分からないが、兎に角これだけははっきりしてる。此処がこれから戦場になるってことだけはな」

ただし庭までは許せるが、屋敷を壊されるのは有り難くないと口にする義経に、塩見と鷺宮は肩を竦めて見せた。意味は問題はそのか？である。

主のものの考えが変わっていることは重々承知しているが、それにつけてもこれは流石にどうかといえる。

義経と同じように門から目を離さないまま、雫は雫から、完全に見た目までをもかがりに変化してしまうと、その白い髪を靡かせきつと眼前を睨み据えた。

そして、あれを知っているとかがりは告げるのだ。

「あれ、見たことがある。たぶん、学校ってところだよ」

かがりは真っ直ぐに車両　ではなく、その中に乗り込む山田を

見据えると、矢張り活性化してしまったかとはかりに言うのを聞けば、義経は耳を疑った。

「まさか、六花学園で見たのか？」

この禍々しいまでの邪気を纏った荒魂を。

「よしつねが学校って言うってた場所で、色んなところで見たよ。たぶん、あの人間に誰かが植え付けたんだと思う。だってあれはおかしいもの」

かがりがそう口にしたときのことだ、車両は彼女の目の前で屋敷の大扉の目の前に滑り込むようにして停車すると、運転手が這々の体で転がり下りてきた。

「た、助けてください！」

さらにはこんな言葉が口から飛び出たのを見れば、流石に放っておくことは出来かねた。慌てて塩見が運転手を助け起こして何があったのか聞いてみると、震えながら悲鳴のような声を上げて叫ぶ。

「お嬢様がつ！お嬢様が！ひっ！！」

助けてくれと縋りつく運転手は、しかし次の瞬間言葉が出なくなってしまった。山田が運転手に続いて自らでドアを開けて降りてきてしまったからだ。

慌てて運転手は自らの仕える家のお嬢様から凄まじい勢いで遠ざかると、塩見の背に隠れるようにして許しを請い始めた。

そんな運転手を見向きもせず、山田は真つ直ぐに義経の前へとやってくると、にっこりと爽やかな初夏の風を思わせる微笑みを浮

かべて言った。

「理事長代理、こんな突然の来訪にさぞ驚かれたことでしょうが、ですが話を聞いていただきたいのです。先ほど理事長代理の娘さんである雫さんに、私が誤解を与えてしまったようで……それで私、その誤解を解きに参りましたの。理事長代理、娘さんは、どちらにいらっしやいますか？」

言葉の途中から、ゆっくりと山田の全身から滲みでてくるものがあつた。

それは最初、陽炎かと思つた。

気がつけばそれは滲みでてくるどころか、後から後からずるずると、皮膚を突き破る勢いでわき出てくるのだ。青白く見えたかと思えば、赤く揺らめき 不思議に色彩を変化させ続けるそれを、全身からゆらゆらと立ちのぼらせている。

知らずそれを見つめる者達は、飲まれたように息を詰まらせた。その様を見て義経は思つた、山田の魂は食われてしまったのか、と。

神の荒魂の質量は人のちつぽけな魂など、呆気なく飲み込んでしまったのだろう。

今や山田の肉体は、巨大な炎が一時的に仮住まう、いわば傀儡と化しているようだ。先ほどから口に行っている言葉はどれも山田のそれだと分かるのに、妙に感情が無いように感じる。

ぶつけられる言葉に、感情が伴っていないように思われるのだ。

だからこそ山田の魂は最早欠片ほども残っていないのではないか。そうは思いたくはないが、その精気のないガラス玉のような目玉を見れば最早彼女はそこに居ないのだろうと、義経は半ば諦めにも似た感情を抱く。

表情も発する言葉にも、違和感などないにもかかわらず、感情だけが伴わない、ある意味では虚ろな傀儡。

だがしかし、かがりがじつと義経を見つめ、首を横に振るのだ。そして一言、

「居るよ」

と言った。

意味は勿論、山田の魂がまだそこに居るといふことなのだろう。その言葉を信じるのならば、直ぐにも分離作業に入らなくてはならなかった。

泰然と向かい合い、目だけはしっかりと山田の拳動を捉え、追い続ける。

「あいにくと娘は留守でね」

「あら、残念ですわ。けれど困ったわ。私、誤解を解かなくては帰れないのです。待たせていただいても宜しいかしら？」

困る、とも言いだせずに義経が一瞬押し黙ると、ずいと進み出る影があった。

「あなた、誰？」

かがりが山田に突然割り込む形で会話に入った。それも、内容は全く繋がらない形でのそれに、山田は酷く驚いた様子を浮かべる。けれどそれは、どこか妙な間がaitaもので、それもほんの僅かな違和感を義経に抱かせるものだった。

「私は降矢雫さんと同じクラスの山田と申しまして」

「違う、そっちじゃない。あなたは誰か、私はそう聞いているの」

苛立ったように告げるかがりに、山田は普段の他人を自分よりも下に見るような表情をせずに、いたって普通に、さも困ったように眉根を寄せて口を開いた。

それを見て奏は、普段時折見かけた山田と、今の山田が全く違う表情を浮かべていることに対して疑問が頭に浮かんだが、それをどう口にすべきか躊躇する。

「そっちじゃないとはどういうことかしら？よく意味が分からなくてよ？」

困ったように微笑む山田に、かがりは苛立ったように重なるように尋ねた。

「中身の名前は山田ジュリ。自分でそう言ってる。さっきから煩いほどに助けてって聞こえるもの。ただし、あなたに共鳴をしているお陰で、助かりたいのか助かりたくないのか、良く分からない状態になってるようだけど。……けど、あなたは違うでしょ？あなた、一体誰なの？人のふりが凄く上手いけど、でも無理。あなたの力は強すぎる。そんな器じゃ保たないくらい。人間なんかじゃないってことは直ぐに分かるもの」

淀みなく答えていくかがりに、義経は声が聞こえるのかと尋ねた。その表情は厳しい。

「聞こえる。ただ、段々弱ってる。早くしないと手遅れになる。ねえお願い、その体から早く出ていって。じゃないとその体は直ぐにも砕けちってしまう」

けれどかがりのこの言葉に山田は呵々と笑って言うのだ。そんなことが出来るかと。

「早々にばれてしまったかと思えばそんなことを……。無理ね。到底聞けるはずがないわ。久しぶりに外に出られたのに、どうしてこんなにも居心地のいい器から出ていかなければいけないの？長い間閉じこめられて、ようやく外に出られたというのに、我はまだこの器で何も楽しんではいない。勿体無くて出て等いけぬ」

うつとりと愛しげに自らの肉体の、その肉感を手のひらで楽しむように擦り、撫で上げつつ言われればかがりが怒りにさつと頬を染めた。

「そうさのう、この体で存分に楽しんでからならば出て行ってやる」

いつ砕けるとも知れない、そんな脆い山田の身体の中に居座り続けると言う、山田のその中の人物　いや、荒魂に、かがりは怒りもあらわに告げる。

「そこから出てあなたなら実体化くらい、簡単でしょう？」

つつと口元を歪めると、徐々に口調を変えながら山田は言うのだ。

「ほほ、分かっているのう。人の子の体にてこれより久方ぶりの享樂を味わおうと言うのじゃ。これは肉の器がなければ出来ぬことだからの。我は存分に楽しませてもらうつもりよ」

それまで出てはやらないと続けると、最後に諦めよと締めくくるのだ。

「享樂？」

いつたいそれがどういう意味なのか分からず、かがりは困惑した様子を浮かべるが、周囲にいる面々は意味が分かったようでさつと表情を変えて山田を見やる。

それではこの荒魂は、定期的にこうして人の身体を借りて外に出ているということか。

義経はどういうことかと混乱した頭で考える。

それは神々と交信し、更には贄をもって神を喜ばせることをしてきた者達が居ると言うことになるのだろう。

だがしかし一つ誤ればどうなるかなど、今の山田の現状を見れば直ぐに想像がつく。

人の身体を手に入れて、現世で好き勝手にする神が居ないとも限らない。危うい賭けだと知ると、義経はその連中は一体全体何と言うことをしてきたのだろうかと思っただ。

「下手な餌なんぞくれやがって、面倒なことになったじゃねえかよ」

「そうだな。味をしめたのだろうな」

何度も何度も、人の身体を手に入れて、享楽に明け暮れることがあつたのだろう。

その見返りに人に何を渡したのか、渡していないのか。それは分からないものの、それでもこの目の前の荒魂が味をしめてもつと欲しいと欲するには十分だった。

「本当に面倒なことになってきたな」

まだ、山田には聞かなくてはならないことが山というほどあると言つのに。このままではそれを聞けなくなるかも知れない。その懸念さえ出てきた。

かがりの表情から山田はなにを感じたようで、こつ付け足すように言った。

「なあに、案ずるでない。ちゃんとこの体の主にも、存分に肉の快楽を味わわせてやるつもりよ。戻ったとき、とんだ好きものになっているやもしれぬがな」

それはそれで面白かろうと告げる山田にかがりはそんなことさせるわけにはいかないと叫ぶ。

意味がよく分からないのだから、かがりは暫くそのからだから出ていくつもりのない様子の山田の体を操っている神に、憤然として立ち向かう。

「何をするつもりか知らないけど、そんなことしたらその身体の元の持ち主が死ぬわ！そんなこと、させられるはずない！出て行きなさい！」

「イヤじゃというたらどうするつもりじゃ？」
「力づくでも」

退けてみせようと口にする前に山田は牙をむいてかがりへと飛びかかってきた。

65 (戦闘開始) (後書き)

あとぢゃーとー……

頑張ろっ

66 (赤い目の彼女に、彼はあわなければならない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

66 (赤い目の彼女に、彼はあわなければならぬ)

がんと千草は目の前の鉄製の扉を叩き叫ぶ。

「おい！！開けるよ！一体何なんだよ、おい！！」

体当たりを何度かしてみたが、千草の身体は開くどころか逆に扉から弾き飛ばされる始末だ。全く開く気配すら見せなかった。歯ぎしりしながら千草は叫ぶ。

「おい、あいつは……あいつは一体何なんだ！何が起こったんだよ！おい、開ける！開けるよ！！」

澤田に強引に雫と引き離された瞬間、千草の目に薄らと赤く揺らめく何かが映った。

それは赤く血のように染まった雫の目だ。

そしてあの言葉、あれを耳にして千草はそれこそ有り得ないことだが、雫は別の何かにあの瞬間、なっていたのではないか　そう思った。

いや、思ったというよりは感じたに近いかもしれない。

千草は感じ取っていたのだ。敏感に。

己の許嫁が同じく人ならざるものになっていたことに、千草は気が付いていたのだ。頭のどこかで。もしくは第六感とも言える、超感覚によって。

赤い目、あの目を千草はどこかで見た事があった。

どこでだっただろうか、それが思いだせず更なる恐慌に千草を陥れていく。

「誰か、ここから誰か出してくれ！！お願いだから！！」

あの目をした雫にもう一度、千草は会わなくてはいけなかった。いけないはずだと、そう千草の中の何かが告げていた。

+++

かがりの前に突如として突風が巻き起こったかと思えば、山田を大きく弾き飛ばした。

弾き飛ばされた山田は投げ出された足をくつと身体に引き寄せると、猫のようにその身を丸めて一度二度と身体を回転させて綺麗に後方へと着地すると、驚きに目を見張って前方を見つめる。

「何だえ！？……うぬは……何故このようなところにいやる？」

「それはこちらの台詞だろう。そちらこそ何をしている？」

山田は心持ち首を傾げると、目の前に立ちはだかった男の頭のとっぺんから足のつま先まで、それこそ舐めまわすように見つめて行く。

どこをどう見ても、男は生身の姿に見えた。

人の肉体を纏い、そこにあたかも人と見まがう形で存在するそれに、山田は再度尋ねた。

「そのような身体、どこで手に入れたのかえ？我にも教えてたもれ」

見たところ人の肉体を纏っているわけでもあるまいに、何故そのように自前の肉体を持ちえているのか酷く不思議がついていた。

男は風の神であるタケミナカタだ。イオリと共にかがりをいつでも守れるようにと、他の者達　六花神などをそれと知らない部外

者に、姿を見られぬようにと姿を隠して実はかがりの背後に控える様にしていたのだ。

大いなる御霊であるタケミナカタもイオリも、その御霊を实体をもってそこに存在する。そのことに山田は酷く驚いているようだった。

イオリもタケミナカタも、出会ったばかりの頃は薄ぼやけた、どこか存在を希薄化された存在だった。

けれど今の二人はきちんとした存在感を得てそこに居るのだ。

血が通っているかのように、そこには温かみを感じられる存在。

山田は涎を垂らさんばかりに目の前にあるその羨むべき同胞の姿を見つめると、矢張りそれは我にこそ相応しいと呟くと、唐突に大口を開けて寄越せと叫ぶ。

「何ゆえそなたがそれを持つ。それは我のものよ！我の元にこそ、

それがあるに相応しい！寄越しやれ！タケミナカタよ！」

「……堕ちたものだな」

山田はタケミナカタからの言葉にかつとなつたのか、目を見開き片腕をぶんと力任せに薙ぎ払う。そんなことをしてもタケミナカタとの間には距離が開き過ぎているが、別に山田はタケミナカタを殴ろうとしたわけでは無かった。

その薙ぎ払う腕の先の手のひらから、びゅっと力任せに投げ出され、勢いよく飛び出したのは細い糸だ。

それが束になり、凄まじい勢いでタケミナカタへと迫りくるのをふっと一息ふいただけでタケミナカタはこれを防ぐ。

「この地には大いなる山がない。よつてお前はその力の源たるものが何もない状況だ。あとは”より合わせる”ための糸だけがお前の唯一自由になるもの。そのような状態で、完全に蘇った私とお前では、まるで話しになるまいよ」

「蘇つたとはどういうことかえ？」

益々タケミナカタへの興味がわいてきたらしい山田は、詳しく話を聞かせて貰おうかと叫ぶと、その薄い唇をがっとなくと、その口からも大量の糸を次から次へと吐きだしていく。

それは川のように滝のように、凄まじい勢いでタケミナカタへとねり、迫る。

けれどそんなものはタケミナカタにとってみれば、単なる子供の兇戯にも等しい行為だった。

無駄なと呟くと、これも風の障壁を瞬時に生み出し簡単に阻んでしまう。

攻撃が一つも当たらないとなれば山田はぎりぎりと言葉を噛みしめて悔しそうにするのだ。

神々の攻防を見ていることしか出来なかつた義経は塩見と戻ってきたばかりの澤田に援護を頼んだ。

「これより結界を張る。張り終えるまで援護を頼む」
「分かりました」

呆然とこの応酬を見ているだけではいけないと、今更ながらに自分のやるべきことを認識した様子で、義経は少し慌てた様子で胸元からそれを取り出した。

このままでは、流石に人目につくだろう。

いくら降矢邸が広大な敷地の中に建つとは言え、それでも遠目からでも何か飛び跳ねていたりすれば、いつ人に見られたりするかわからないだろう。

ましてや人がそれこそいつ集まってくるかも知れない、そんなただの人家なのだ。

手早くこれは覆い隠さねばならないものだった。

ただし、

「あれだけ猛っている荒魂ともなると、更にこっちが閉じ込めようと……閉じ込められるとなれば牙を向けるかもしれない。無いといとは思うが、その時は頼んだぞ」

「分かってるって。降矢君には一步も近寄せないから安心して頂戴」

ぱんと拳を打つと、塩見は少年のようにからりとした笑みを浮かべて胸を叩いた。

それを見てはやし立てるのは鷺宮だ。

「ひゅ〜、頼もしいじゃないっすかあ。んじゃま、俺も周囲の警戒を強くするために調べっから、俺のことも援護宜しく」

「……そっちはどうにかしろ」

さらりと義経が若干冷やかな眼差しで言つのを聞けば、鷺宮はえつと言葉に詰まった。

「なんで？」

「変な女に色目なんぞ使いやがって……」

冷水を浴びせるがごとくのこの物言いに對し、鷺宮は一瞬何のことか分からなかったらしい。

言葉に詰まったと同時に、何を言われているか分かったようだ。

堀井のことかと思いたったが、今度は分かったら分かったで大いに不満が残るらしい。勢いよく首をぶんぶん振ると異議を申し立てると叫ぶ。

「つ、使ってないけどね！？何？！何なの一体！？義経さんってば何でまたそんなこと言っわけ！？」

「そうですねえ、抜け駆けです」

決まった相手を作る時は全員に申告をすることと、あれほど言いましたのに、酷い奴だあんまりだと澤田は嘆く。だがこれに対しても鷺宮はがなりたてておかしいと叫ぶのだ。

「言葉の使い方がどうにも間違ってますよ！」

「いつかやると思ってたけどやっぱりねー……」

「うわあ……俺まさかの犯罪者扱いだよ。なんでだよ」

流石に男二人に言われるのはからかい半分と分かるものの、鷺宮は塩見に女性側からこうまでも冷たく言われるとなると本気でそう思われているのだろうかと若干不安になった。本気で犯罪者のごとく、自分はいけないことをしたのだろうかとはかりに思うもの、よくよく思い返してみても自分は悪くない。むしろ被害者だった。勝手に惚れられ、勝手に私物を漁られ、勝手に運命の伴侶たるべしと決められていただけ。鷺宮には何ら落ち度は無い。だがしかし、そんなものは彼ら三人にとってみれば関係ないらしい。

義経は再度冷たく言い放つ。

「信じてたのに。この嘘つき野郎が」

「こつちはこつちで何故か俺の奥さんみたいな発言をかます！一体なんだお前ら！？俺は誰かにそこらへんで惚れられることも許されませんの!？」

そんな叫びに澤田がにつこりと微笑みながら

「惚れられるとか生意気ですよね。鷺宮の癖に」

と言い、塩見が続けて

「だよ、鷺宮君の癖に」

と言う。

そしてとどめに

「鷺宮の癖に生意気だ」

義経がそんな言葉を残して三人は鷺宮をただ一人残して配置に
いてしまう。

残された鷺宮としては、なんだか泣きたいような笑いたいような
気分させられた。

だがしかし、思うにこれは、ある意味ではとてもいいことだと言
えるだろう。

「だってなあ？」

先ほどのあれは、三人が三人なりに、堀井に対してか、鷺宮に対
してか、「やいている」と言うことに他ならないのだから。

「嬉しいんだかなんだかなあ。もちっと三人とも素直になってくれ
りゃあいいもんを」

これだからあの三人とは友人を、そして運命共同体でいることを
止められないのだ。

どうにもこうにもむず痒いものを感じながら鷺宮は周囲に天眼の
器を張り巡らせていく。

「後でなんかあいつらに奢るか」

さて、どこに連れていこうかねと、鷺宮は、三人へとるるご機嫌取りのためのプランを練り始めた。

67 (呪われた血に違いない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

67 (呪われた血に違いない)

気がつけば巨大庭園の生垣を壊し、そして噴水を破壊している山田とタケミナカタに、イオリは嘆く。

「僕、動きにくくなるよ」

噴水を破壊されるのは、水場が無ければ動きを制限されるため、イオリとしてはあまり有難くないことだ。

なるべくならば噴水だけは残してくれれば良かったのにとタケミナカタに言いたくはあったが、だがしかし、タケミナカタとしてはそうも言っていられない事情があった。

山田が撒き散らした大量の糸は、今や庭をほとんど埋め尽くすほどになっていた。

大量の糸がうねうねと自らでうねり、寄り集まり、そしていつしかそれは糸の束が寄り集まって出来た蛇になった。

山の如くうず高く積み上がっていた糸が、勝手に寄り集まって蛇になっていく様だけでも怖気が走る光景だった。だがそれは、蛇を模ったそれが意志を持って動き始めたそれに比べれば、まだまだ恐怖は薄かっただろう。

それらはタケミナカタを、かがりを、イオリを　襲い始めたのだ。

結界を張り巡らせている最中だった義経達も、例外に洩れなくこちらにも襲われ始まった。

驚きに目を見開くものの、今止めるわけにはいかない。

義経は庭に一つ一つ楔を打ち込みつつ、襲い蛇を手刀でうち落とし、蹴りあげた。寄せ付けたら一巻の終わりだ。飛びつく気配を見せた蛇は全て叩き伏せた。

義経がそうして打ち落とした蛇の数は相当な数だった。けれど、

それでも足りないのか、襲い来る蛇の数はもつといる。それを塩見と澤田とで叩き落とすのだ。

「まだですか、義経様！」

民家に蛇が大量発生したところなど見られてもしたならば、目も当てられない騒ぎになるだろう。早くしなければならぬ。

かがりも雷を使い糸を焼き切るが、それでもなお足りなかった。いくらでも山田は糸を吐きだせたのだ。それは、無尽蔵に蛇が生まれて出てくることに他ならない。実質的にかがりがその総数を減らし続けなければ蛇は増え続けることになる。けれど結界を張っていないとなれば大手を振ってこの蛇を一掃する攻撃を仕掛けることも出来ない。それでは拙いのだ。

義経は分かっていると焦りを滲ませながらまた一つ結界の元となる楔を穿つ。

「まったく、こんな時にエマは何やってるんだか。紅桔梗から遣わされてきたって言う割には、全く役に立たないよね」

言いつつも塩見は芝生を抉り、その下にある土を抉る勢いで拳を地面を這う蛇目がけて叩きつける。蛇の山が一瞬にしてその胴体を千切れ飛ばして身動きをしなくなった。

力任せに糸を千切るくらいならば一応は人が行っていることとして処理は出来るだろうと言うことだろうが、それでも些か派手すぎるだろう。澤田は一般人が地面を抉っている場面なんて見たら、それこそ即通報ですよと呆れたように言ってくる。

「何言ってるのさ、警察なんかきたって平気じゃない。そんなの夢でも見たんじゃないですかって言えば十分だわ」

「あのね、今はとっても優秀な撮影機器が出回っているんですよ？」

あほですか、あなた」

そう返されてしまったては塩見はうろつろと視線を彷徨させた。

「う、埋めとくよ」

「意味が分かりませんが」

「全くだ！」

義経がまたも楔を投げ打った。

広大な敷地を、それも屋敷へと被害を出さないようにと屋敷周辺までを覆う結界ともなると、その楔の数は普段よりも多くなる。

それも単に四角を普段通りに作り出すのとはわけが違う。だからこそ、時間がかかっていた。

「……面倒くさいな。屋敷、ついでだ、半分にしよう」

ついでに壊して貰おうと若干キレ気味に義経が言い放てば、自棄は止めてくれと澤田が冷静に止めた。

義経が我に返った後になり、あの部屋に置いてあった秘蔵のなたらが無いだの、なんたら壺は気にいつていたのに！などと喚き立てるのは、分かっていたからだ。

「大体、屋敷が半分になつてるのを見たら、宗一郎様が戻ったら雷が落ちますよ。それでもいいんですか？」

義経は暫し沈黙した後、それも面倒だなと漏らした。

その表情は、笑えることに苦々しいものだった。

ぴちよん……ぴちよん……

机の上に水滴が一定のリズムを刻んで滴り落ちてくる。

薄暗い地下室で一人、エマは両手で自分を抱きしめて震えていた。目の前にある物体から目が逸らせないままにエマは恐怖で震えているのだ。

先ほどの堀井のような症状は、見た事がなかった。

初めて見た。

適性なしとは言え、肉体を滅ぼすような血を持つ同族の話など、エマは聞いたことも無い。

「あの方は、なんて恐ろしい力を持っているんですか」

恐怖に全身が竦み上がるのを感じた。

一族でも六花神の力が色濃く現れたものは、その血がもたらす影響が強い。そしてそれは、契約者を選ぶ時、如実に現れるものだった。

血が濃ければ濃いほどに、それが契約する相手にどれだけの苦痛を与えるか。それは想像を絶する苦痛すらあるとエマは聞く。

ただし、それほど強い血を持つものは、ほとんどいなくなったのも事実だ。

血が薄まり続けている中で、そのような血族のものはほぼ居ない。それが現実だった。

適性があれば血を受け入れる際の痛みはほぼ無いが、その血に対する適性が全くなければ、もしくは適性があっても、その値が足りなければ血がその契約者。血を受けたものにそのまま跳ね返るようになっているのだ。

それが適性なしの人間に与えるのは時に痛みであり、時に記憶をなくすなどのものであったり、時には人ならざるものになってしまったりする、そのような様々なケースが想定されるもの、だった。

だが、先ほどエマが見たものは、そのどれにも属さないだろう。人が一族の者の血を得たがため死ぬなど、そんな話は聞いたことが無い。それどころか、前例が無い。

血を受けたものの身体を僅かな血肉、そして骨を残すのみで滅ぼすなど、聞いたこともなかった。

エマは義経にも、その血を受けて平気でああして歩いていられるあの三人に対しても戦慄を覚えた。

あんなこと、有り得ないのに。

「紅桔梗様は、あれを知っているのでしょうか？」

あのような危険な血を、膨大な血の力を宿した人物を、紅桔梗は知っていて隣に置けているのか。それがエマには酷く気にかかった。自らの敬愛する六花神の当主たる二名の内の一人があそこまでの化け物だとは思わなかった。

紅桔梗は知っているのだろうか。

エマは力の入らない萎えた膝に湯を入れるべく、ばんと膝がしらを叩きつけると、よろよるとその場から立ち上がった。

元は堀井だったものの放つ異臭が堪らなく、鼻につく。

横目でちらとそれを眺め、エマは地下を出ていった。

自分はこんなところであるのような者達の、血に、狂気に、飲み込まれてただただ震えているわけに行かないのだ。

「『』報告、しなければ……」

あの男が危険な存在であると、エマは伝えなければならなかった。

68 (逆戻りの空間) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

68 (逆戻りの空間)

壊れた噴水から四方八方に水が噴き出し暴れ回っていた。お陰でイオリは足場には困らないものの、それでもいい気分はしないようだ。

「どうして？イオリはこのほうがいいんでしょう？」

かがりは地面をうごうごと群れをなしてやってきた蛇を、全身に帯びた雷を更に膨れ上がらせて退ける。

かがりの顔色は心なしか悪いようだ。それがイオリを苛立たせる原因を作っていたが、かがりはそんなことに気づきもしない。

かがりは常に全身に雷を帯び続けていた。それは、常に放電し続けなければ、足元の蛇が直ぐ様襲いかかってくるため、一瞬たりと気が抜けないような状況なためだ。そのため今まではほぼ無尽蔵に力をふるえるとされてきたかがりでさえも、その消耗が激しいようだった。

顎を伝う汗を乱暴に拭くと、乱れ始めた息を整えつつイオリの表情を窺う。

水場があつたほうが自由に動けるならばその方が良いはずだ。だがイオリはそうではないよと首を振って告げるのだ。

「確かに水場があつて嬉しいは嬉しいけど、それでもここは、あの日、かがりとあつた場所だから。悲しいよ」

だから凄く腹が立つのだと締めくくると、イオリはその場に次々と雨を降らせていく。

その雨はどれもこれも凄まじい水の勢いだった。雨と言うよりは

鋭い槍が次々と降り注いでいるようなものだろう。

蛇は瞬く間にかがりといオリの周囲を一掃されていった。

その太くなつた胴を射抜かれ、まるで生き物のように絶命していく様を見て、イオリは仮初めの命を与えられたものとはいえ、あまり気分は良くないと漏らす。

だが、気分が良くないのはむしろ山田のほうだろう。生み出し続ける蛇に幾ら限りがあるうが無かるうが、目の前で次々と駆逐されていくのを見ればこちらも当然腹が立つというものだ。

山田は糸を大量にまた生み出すと、今までに生み出した蛇達を一所に集める指示を出し始めた。

「一体何を……？」

糸が寄り集まり蛇となり、更にその蛇が寄り集まると大蛇が生み出された。

常にその全身を覆う鱗は変動を続けているらしい。うぞうぞとその鱗は蠢き続けているのだ。

不気味な光景だった。

だが、自然界に常に身を置く彼らタケミナカタやイオリにとっては、蛇など至極見慣れたものだ。直ぐ様攻撃を再開していく。先制攻撃である。

切り裂くような鋭さを持った風を起こし、大蛇の胴にぶち当てる。すると今度はその風であいた大穴を更に広げるべく水球が放たれ、あいた大穴の位置で炸裂した。凄まじい水の勢いに太い丸太のような胴が真つ二つになってしまう。

実にあっけないものだった。

かがりは荒くなつた息を今度は感激のあまりだろうが更に荒くして、はしゃいだような声を上げて言うのだ。

「凄いな、タケミナカタもイオリも、あんな大きなやつを簡単にや

「つつけちゃうなんて！」

けれどそれに水を指すように馬鹿にしたような笑い声が上がった。

「愚かな。良く見やれ。その蛇はまだ生きておるぞえ？さあ、まだまだその蛇は遊び足りぬと申しておるようだわ。 たんと食らうがいい！」

山田が言うが早いか 見れば大蛇は胴を細い糸で出来た蛇が互いに身を寄せ合うことでその胴にあいた大穴をとつくに塞いでしまっていた。そして山田の言葉に従うように、大蛇はぶんと尾を芝生ごと抉るようにして薙ぎ払ってきたのだ。

イオリとタケミナカタは咄嗟に自らを庇うように目の前に障壁を作ることで凌ぎ切ったものの、かがりは幾分離れた地点にいたのが災いしたのだろう。まともに大腿部分に食らってしまったようだ。足がぼつきりとへし折れなかったことだけが幸いだろうか、大きく横に薙ぎ払われたかがりはそのまま生垣の中を二度三度と突き破り、そのまま正門の脇の壁までずどんと大きな音をさせて叩きつけられた。

「かがり!!」

イオリ達が駆け寄ろうとしたその瞬間のことだった。

開け放たれた門扉の中へ侵入してくる車があった。

間の悪いことにかがりか壁に叩きつけられたのをまともに見てしまったのだろう、車から転がり落ちるようにしてその人物は下りてくると、かがりの元へと駆けよっていく。

まさか知り合いとまでは思っていなかったようだが、見知った顔が倒れているのを確認すると、恐怖は倍増したのだろう。震える声で冗談だと言ってくれと呻くように口を開く。

「かがりちゃん！……何？何だこれ？おい……なあ、何だよこれ？」

その無残に散った白金の髪に覆われた顔をからは、僅かに血が覗いて見えた。見間違ふことなどあるものか。これはかがりだ。

何のアトラクションでもない、冗談でもない、かがりはまだ現状が把握出来ないものの、何故か壁に叩きつけられ、負傷していた。かがりの傍にきたのは遅くなったが健だった。山田を追いかけやってきたが突然のこれで酷く心を乱しているようだ。

健は膝をついてかがりの肩を抱き起こした。そしてさりとかがりの髪がその頬から流れ落ちていけば思った以上に怪我の度合いが酷いことを悟った。

「なんで……ほんと、嘘だろ？」

目視で怪我を一つ一つ確認していけば、そのあまりの酷さに一瞬健は怯んだ。

彼女の身につけている服は六花学園のセーラー服だが、それはところどころ擦り切れ穴も沢山あいていた。本当に酷いもので、どこもかしこもぼろぼろだった。

腕も足も赤く腫れ上がり、元から漂白したような白さを持つかがりの素肌は今や、くつきりとした赤と白のコントラストが描かれていた。

先ほどのかがりは思い切り背を壁に打ち付けていた。背から滴る血に、そして額も切ったのだろう、鼻先まで垂れてくる血が嫌になるくらい目の中に飛び込んでくる。

震えながらその服に手を伸ばす。

確かに門を潜ったその瞬間に、飛び込んできたわけのわからない大蛇はそれは恐ろしかったし、ここはどこなのか、本当に日本の閑

静な住宅街なのかと驚きもした。けれどそんなことよりもかがりが致命傷を負っていないか、それを確かめることのほうが重要だった。震えながら健はその服の下を確かめようと手を伸ばしていくと、そこで待ったの声が入る。

「その下郎！かがりへと汚らしい手で触れるな！」

言うが早いか、かがりの身体の前に水を飛ばしてつるりとした水の膜を一瞬で生み出すと、健とかがりに二人が触れられることのできない空間を瞬時に作り出した。

そこには時代劇の役者かと一瞬疑ってしまふほどに驚く時代錯誤な衣装　束帯を身にまとったイオリの姿があった。

目の前に突如として生まれた空間に弾かれるようにして健は背後の地面に上体を叩きつけられると、かがりにも同様の力が働いたようだ。かがりも空間に弾かれて吹き飛んだのだ。

それも意識のない状態だ、健よりも激しく力が働いているように見えるほどに、景気良く吹き飛んでしまった。

これにはイオリもタケミナカタも慌てた。

「かがりちゃん！！！」

「くっ！！風よ！！！」

危つく背後の壁にまともなぶち当たるところだったかがりをタケミナカタが咄嗟に風の障壁を生み出す事により、なんとか防ぎはしたが、それでもその衝撃は全て殺せたわけではなかった。再度の衝撃を受けたかがりはずりとその場にまたも倒れ伏す。

そんな未だに倒れたままで気絶したまま身動き一つ出来ないかがりの元へ行こうとするも大蛇に阻まれるのだ。

「よそ見をしている暇があるのかえ？ほほ、食め、大蛇よ！」

大蛇がその巨大な口をがぱりと開けて鎌首もたげて一直線。ずどんと彼らを土ごと抉る勢いで食らう。だが間一髪、二人は大蛇の一撃が来る寸前でこれをかわした。

「邪魔を……するな女郎が！」

「ぬかせ小童！」

怒りをあらわにしたのはイオリだが、それを受けて山田も本気になったらしい。一匹では満足できないと言っているのであればと次々と蛇を生み出し始めたのだ。

蛇はいつしか大きな流れを作り、川のような流れが降矢邸の巨大庭園の中に生まれた。

川はいつしか生き物のように周囲を猛威をふるい、次々と薙ぎ払っていくのだ。

「ずずず、ずず……」

「これは……」

彼らの目の前には、大蛇が既に一匹いたが、それと対を成すように瓜二つの大蛇が今まさに産み落とされたようだ。

「あれが餌よ。栄養たっぷり、たとと食らえ！」

餌と言われた二人は次の瞬間、二匹の大蛇に襲われ始まった。

「もっともつと蛇がいるのう。たとと用意してくれようぞ？」

ずるずると大蛇が攻撃している間も山田は蛇を生み出し続ける。タケミナカタもイオリも奮戦したが、大蛇が新たにもう一匹生み

出されたお陰でどうにも動きが取れない。

だがしかし、最愛の彼女の元に駆けつけたどこの馬とも知れぬ若い男の姿があり、それが更には先ほどは彼女の服の下を覗こうとしていた奴ともなれば話は別である。無理やりにも大蛇の元から二人は抜け出た。

呆気にとられたのは山田のほうだ。大蛇をそのままにしていっては思ってもみなかったため、一瞬虚をつかれたものの、面白いとにやりと笑う。

そして、それと同時に二人の弱点を見つけたと、思った。

「見つけたぞえ……」

+++

瑞名瀬の駆る車に続く形でそれは飛びこむつもりだった。

門扉が開け放たれている。これは異常事態であると島田は思った。常であれば門扉は常に閉ざされている。それを端末から呼びかけることにより、解放されるのだ。それがなく、開け放たれていると言うだけで珍事なのである。

そんな中、目の前に、滅多に目にしない、車庫にあまりいない車両が門扉から直ぐ手前に止まっているのだ。瑞名瀬の乗ってきた車両である。これを見て、益々珍事だと思った島田は、更にアクセルを踏み込んで、そのまま門扉へと飛びこんだ　つもりだった。

門扉に飛び込む寸前、地面から光が立ち上ったのを確かに見た。けれど次の瞬間、光は屋敷を囲う壁にそう形で綺麗に縦長の

それも可也の高さの壁になり、島田の目の前にそびえたつたのだ。

ぶつかると思った。もうブレーキを踏みこんでどうにかなるレベルの距離ではなかったのだ。

だがしかし、目をギュツと瞑り来るべく衝撃に備えるようにしたが、一向にそれは訪れない。

恐る恐る目を開けてみれば、島田は何故か、車に乗ったままに元来た道を走っていたのだ。

「……さ、さつき、私達門を潜ったよね？」

「ええ。潜ったわ。それどころかたぶん、突然現れた壁にぶつかったはずよ。それなのに、何故つい先ほど通ってきた道に居るの？」

島田だけではなく、櫻子も須賀も、同じ光景を目の当たりにしていたようだ。だからこそ言えるが、これは決して夢などではない。現実なのだろう。

島田はごくりと生唾を飲み込むと、恐る恐るアクセルを踏み込んでいく。

徐々に近くなって見えてきたのは、先ほど見たばかりの壁のない、いつもの降矢邸、その広大な敷地を覆う壁、そして先ほど見た時同様に、開け放たれている門扉だった。

「夢なの？」

「全員で白昼夢を見たとしても言うの？ そんなの……有り得ない」
「けど……」

壁は、どこにも無かった。

どうすべきか、門扉を潜る手前で停車し、暫し考えた。

三人はもう一度門扉を潜ることをするべきだとの結論に至った。

だがしかし、先ほど同様、門扉を潜るといつの間にか元来た道に居るのだ。

二度、三度、四度……何度やっても同じだった。

車は先へと進めない。進むことが出来ないのだ。

「頭がおかしくなりそうだ……」

思わず島田が漏らした言葉に、櫻子も須賀も同じ気持ちだったの
だろうが、頷いた。

69 (大隆起) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

69 (大隆起)

ばきばきと山田は崩れつつある、自らが入りこんだ器に手を添えて舌打ちを漏らした。

「脆いものよの、人の器というのは」

見目が気にいっていただけに惜しいことだがいたしかたない。これが終われば廃棄せざるを得ないだろう。

口惜しい。何故あれが我に手に入らないと言うのか。

圧倒的な存在感。そして肉を得たかのようなその質感。それは山田が欲して止まないものだった。

それがまだ手に入られていないと言うのに、このような脆い身体では駄目だ。矢張り、タケミナカタのようなあのよう完璧な肉体が欲しかった。

イオリの領域は水。それはほんの数滴の水でも十分に彼の存在できる場になる。

そしてタケミナカタの領域は空気。もっと厳密に言えば、風が起る場所、その全てが彼の場である。密閉された完全な空間ではない限り、彼の存在できない空間は無い。

そして山田は山が彼らのそれだった。

確かにタケミナカタの言うとおり、ここ帝都には山は無いが、それでも山と続く地面が山田の足元にはある。

山田の領域はこの日の本の国、その地が続くところであればその全てが自らの領域であり、場である。

「見くびるなよ、若造が」

原初の夫婦神の元に遣わされたことすらある程の存在である自分

を、あまり軽んじない方がいいと、山田は大蛇に翻弄され、そして今はかがりの元へと駆け寄る二人に意地悪く笑みを浮かべて見せた。地面にそつと山田は手を触れる。その時腕から頬からと、ばきばきと音を立てて器が崩れいくのを見れば、最早猶予はないのだと嫌でも感じた。

芝生と抉れて地面が剥き出しにされてしまっているところの土の感触は生の草の感触と、土の温かみが感じられて懐かしさに僅かに頬が緩む。

「踊るがいつ！」

山田が触れる大地が途端、揺れ始めた。

それも地鳴りを上げての大きな揺れだ、結界を張り終えたばかりの義経達は咄嗟に何が起きたか分からずに地に伏せた。

鷺宮は天眼の器で周囲を監視をしていたが、地震の予兆などは何一つ感じられなかった。数値が一つたりと出なかったのだ。今までどんなに小規模な地震でさえ拾ってきただけに、有り得ないことと驚愕に目を見開いた。

「一体何だ……こんなこと、有り得っこないっつのに」

結界を築いた外に、先ほどから数度侵入を試みたものを排除するべく意識を集中していればこれである。鷺宮は意識の半分を結界の外から戻すと、結界内部に眼を幾つも置き始めた。

「これは……！」

美しい巨大庭園の芝生、それは丹精込めて庭師が作りこんだものだった。長さ、そして色も美しい芝生は、きちんと整えられていてそれはもう見事な巨大庭園の一部だった。そんな芝生は今や幾つもの

の箇所で地肌が剥き出しになり、そして幾つもの箇所で剥き出しの地肌を晒し芝生も斑な状態で　目を疑ったが大きく何箇所も隆起していたのだ。

そしてひと際高く隆起した大地の頂きに、突き上げられるようにして健とかがりが折り重なって倒れていた。

+++

ぼこんぼこんと地面が不自然に抉れ、そして不自然に盛り上がる。隆起する。

かがりと引きはがされてお前は何ものなのかと追及を受けていた健は、滝のような汗を流しながらも物騒な義経を思わせる二人に囲まれつつどうにか逃げられないかと思っていたが、それはふいに足元を大きく揺すぶったのだ。

ぐらりと傾いだ瞬間に、タケミナカタもイオリも同様に足元をすくわれた形になったようだ。

よろりとよろけたために、これ幸いと健は二人の間をすり抜けるように飛び出した。

これには待てと、咄嗟にイオリが手を伸ばしたが、足場が更に悪くなりそれも途中で引っ込んだ。

待てと言われて待てるわけもなく、健は身軽にもひよいひよいと足場を見つけてはその場から遠ざかっていこうとした。

けれど、ふいに気になってかがりの方を見てみたのは、幸か不幸か　かがりが隆起する大地に、飲み込まれるようにして押しつぶされようとしていたのだ。

ゆっくりゆっくりと倒れて意識の無いらしいかがりが土に飲み込まれながら押し上げられ押しつぶされていく。

頭で考えるより先に身体が動いていた。助けねばならなかった。

その場から大きく跳躍すると、健はかがりの飲み込まれつつある大地の根に手が引つ掛かった。そのまま勢いをつける形で上に乗り上げると、かがりを抱きあげその場を後にするべく大地を蹴った。だが、それは許されない行為だったようだ。

山田は逃げる健の元に、大蛇を遣わしたのだ。

抱えたかがりの胸を突き破る勢いで突っ込んでくるその巨大な頭に、健は抵抗することすら出来ず、そのまま二人で大蛇の勢いそのままに、瑞名瀬と共に乗ってきた車両の直ぐ傍に叩きつけられた。

「ぐっ、は……っ!!」

背骨が軋み頭蓋が歪む。そして一瞬、視界さえ眩んだ気がした。

地面に二人で手足を投げ出し折り重なり倒れていれば、大蛇はそれでも足りないと言うのか、更なる追撃をしようと言うのだ。

健は痛む手足のことなど忘れて、上にある華奢な身体を脇へとずらすようにすると、抱えて動けないことをその瞬間瞬時に悟ったのだろう、今出来る最善を尽くそうと考えた。

かがりの上に自らの肉体を持って盾としようとしたのだ。

背後に迫る気配を感じ、健はぎゅっと全身に力を込めてきたる衝撃に身構えた。

70 (用意されたのはただ傍観者という席のみ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

70 (用意されたのはただ傍観者という席のみ)

それは目の前で起こった出来事だった。

衝撃の瞬間を目撃することになったのにはわけがあった。

三人は車のままでは入れないのではないか、そう思ったのだ。だからこそ、櫻子は下車し、須賀もそれに続いた。ただし島田は車両をほっぽりだしてどこかに行けるわけもなく、こちらは車上にて待機となった。

車をおりた二人は門扉へとゆっくりと、警戒しながら近づいていく。

どちらからでもなく声を出す事を禁じていた。

一見すれば門扉の向こう側は、普段と変わらぬ姿を晒しているように見えた。だがしかし先ほどのことがあるため、二人ともが目に見えるだけのものを信用出来なくなっているらしい。

そつと須賀はその手を差し出してみる。門扉の向こう側へと。

すると、不思議なことにそこに何か柔らかなものがあったのだ。

ただの空間のほずのそこに、柔らかな、それでいて何とも形容しがたい感触のものがある。

それは恐らく透明で、だからこそあちら側を透かし見せているのだろう。

更にそれは、恐らく先ほどから自分達の行く手を遮る何者かの正体なのだろうと須賀は考えた。

柔らかなそれに触れたのを感じ取れば、今度は視界が一瞬にしてぱつと開けたのを感じる。先ほどまで見えなかった扉の向こうが、何故か柔らかな何かに触れた途端、視界に飛び込んできたのだ。

「ひっ！！……なに、あれ」

須賀の顔色を見て櫻子は訝る様に尋ねてくる。

「どうかしたの？」

「どうかって……だってこれ……なんで？」

櫻子は須賀の様子を見ても、ただただ首を傾げるばかりだ。どうやら、須賀が本気で何を見て怯えているかが分からない様子だ。

そうか、矢張りこれに触れていなければ見えないのだと悟れば、須賀はこの空間に触れてみるよう促した。

百聞は一見にしかずである。見て貰った方がいいと判断したのだ。

「何よ、これ……」

何も無い空間に触れた途端、それは目の前に突如として現れた。

高々と小さな山の頂に供えられた供物の如く、一對の男女が折り重なって倒れている。

それをとぐるを巻いてじっと観察しているのは大蛇だ。

よくよく見れば大蛇はうようよとそこかしこに蠢いている。一抱えどころか、大の男が二人で漸く抱えられるほどの太い胴を持つ大蛇さえいる。異様なほどこかさである。

それが山を囲んでいるために、山の周囲へと近づこうとしているらしき人物達は中々に近寄れないようだった。その人物達にはそれぞれ大蛇が宛がわれているのか、山から円を描くようにそれは散り散りに散って配置されているようだ。

何かのSFかファンタジーの一幕のようなシーンが突然飛び込んできたことに、二人とも度肝を抜かれた。

思わず絶句していると、須賀はあることに気がついた。山の頂きに供えられている男の方の顔が、よくよく見れば見知った人間だったのだ。

「あ、あれ……健先輩だよな」

「……嘘、なんであんなことになっているの!? 血まみれじゃないの!」

折り重なった男女の一人が健であると分かった途端、二人は柔らかな壁へと突っ込んで行こうとするが、そうするとまたもだが、いつの間にか立ち位置を移動させられているのだ。

「……も、もう! 一体これは何なの!」

恐怖に竦みそうになる心を櫻子は叱咤する。

須賀は壁へと直ぐ様戻ると、そうつとその壁に触れ、中を覗き見た。矢張りそうだ、これは内部へと入れなくするものなのだろう。そうと知れば二人はぎりぎり、悔しさに歯を噛みしめる。

よく見れば、健の胸の下で血を流しているのは同じく六花学園の生徒の様だ。あのセーラー服は見間違いようがない。

山の頂きに抱かれた二人が、血まみれで横たわっている。そしてそれを助けに行こうとしているらしい人物達は未だ近寄ることが出来ないらしく、大蛇に苦戦しているようなのだ。

何と歯がゆい光景だろうか。

健がそこに倒れている、良く観察していけば山の向こう側から跳び上がり、頂きへと強引に向かおうとしているのは義経だろうか。

大量の剣を携えて縦横無尽に飛びまわるその姿は、普段のあの怠惰な様子からは想像も出来ないものだった。

だがそれも大蛇が切っても切っても直ぐ様再生してしまう身体のために無意味のようで、山へと近付けないことが悔しそうに唇を血が滲むほどに噛みしめている。遠目から見ても、義経が口から血を垂らして憤怒の形相で大蛇と相対しているのが分かるほどだった。

「え、SFの世界過ぎる」

「それを言うならファンタジーじゃないの。一体何なのこれは」

とてもではないが、このようなことは現実と直ぐ様二人は受け入れられなかった。

「雫……ねえ、貴女一体どこに居るの？まさか、あそこに倒れているのは貴女ではないわよね？」

不安から飛び出た言葉に、須賀がはつとした。

健の影になり、そのほとんどが見えない彼女に不安が募る。

「お願い、無事でいてちょうだい」

こんなわけのわからない光景を行き成り見せつけられて、更に雫はこの中に居ないのだ。

立ち入り禁止のこの柔らかな膜が、狂おしいほどに意地の悪いものに見える。

誰か、お願いだから説明してくれ、そう櫻子は叫ぶ。

だが、そんな叫びもむなしく、この場に居る誰もがその言葉に応えられるものが居ない。

早く中へ入りたい、だがこの膜が邪魔だ。二人は、何をどうすればいいのかもわからず、途方にくれるばかりだった。

71 (血の味のする口づけ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

71 (血の味をする口づけ)

瑞名瀬は健が降ってくるのを目視するなり慌ててその場から急発進して見せた。あまりのことにどこに移動をすべきか、移動のタイミングを逸してしまっていたのだ。だが、それが結果として悪い方にいったらしい。

かがりと健が降ってくるのを華麗なハンドルさばきで避けると、瑞名瀬は急いで車を走らせていく。

目指すは車庫だ。兎に角この場から離れた方がいいと考えた時、そこが一番最初に頭に浮かんだ。

高級車が埃を巻き上げつつばく進していけば、その途中で見知った顔を見かけたため、慌てて急ブレーキを踏むと瑞名瀬は扉を跳ね開けて乗れと叫んだ。足が竦んでいるのか、その人物は咄嗟に「え……？」とだけ言葉を発すると何故移動しなければいけないのかも分かっていないような表情を浮かべている。

面倒くさそうに瑞名瀬はその腕を取ると強引に引き寄せ、シートの上に引きずり落とす。

扉はあいたままだが閉めている時間が惜しい。瑞名瀬は急ブレーキをしたのと同じくらいの、今度は急発進を試みせた。

「……瑞名瀬さん」

「死にたいのか」

「……ごめんなさい」

上質の本革のシートの上に這い蹲るようにして奏はしゅんと頂垂れる。

そんな奏に容赦なく瑞名瀬は質問を浴びせかけていく。

「一体何があった。入ってきた途端のこれだ、俺の図書室は無事な

「んだらうな」

「そこはたぶん無事です。先ほど義経様が屋敷全体に保護をかけていましたから」

「……それはまさか、屋敷の中にはこれが終わらない限り、入れない、と言うことになるんだらうか？」

ハンドルを切りながら瑞名瀬が尋ねると、奏は申し訳なさそうに謝った。

「たぶん……入れないです」

その言葉を耳にした瞬間、瑞名瀬は表情一つ変えることなく言い放つ。

「……滅べ、跡形もなく」

「僕！？僕じゃないですよねそれ！？」

慌ててシートの上に座りなおすと、瑞名瀬へと自分はある関係があるがないと、支離滅裂な言葉で言いわけを始めた。

「これはあの……どうやら物の怪って言うんでしょうか？なんか、そういうのが来たようで」

「……あの女か？」

学園で見た山田のことを指して言う瑞名瀬に、女と言うのが山田であれば正解だと返した。

それを受けると瑞名瀬は重苦しい息を吐き出しながら告げる。

「お前達が出ていった後、黒い影が学園の中に見えた。あれがお前が言っていた荒魂、と言うやつなんだらう？見たら報告するように」

と言われていたから来て見ればこれだ」

瑞名瀬は俗に言う、所謂『見える人』だった。

ただし見えるだけで何一つ対処が出来ない、使えない能力だと本人は常々感じている代物だ。

自分でも持て余していたこの力に、価値を見出したのは奏だった。

「見えるなら、僕達に力を貸してくださいませんか？」

それからというものの、街の中のどこそで異常なものを見かければその都度報告を入れるようになった。

ただし、今まで見つけたのは異常な場、もしくは単なる幽霊と言われるものに過ぎなかったのだろう。

だがしかし、今日見たものは確実に違った。

それは禍々しくも巨大な何かの塊だった。

その巨大さは一語に尽くしがたいものがある。一つ二つと、教室を突き抜けるほど巨大な影が校舎にべったりと張り付いていたのが見えたのだ。圧倒的なその大きさに、瑞名瀬はこれは直ぐにも奏を捕まえて話すべきだと悟った。

そこで健も同じ方向へと向かうのであればと拾ってきたにすぎなかったのだ。

事情を話し終わると奏が呻いた。

「だからあそこに居たんだ」

健がきたのは想定外すぎるものだった。

恐らく、健があの場合にあのような形で来なければ、ああまで神二人が心乱されることも無かったろうし、かがりもじきに目覚めたはずだった。

頑丈さは折り紙つきの六花神の　それも巨大な力を有した彼女

だ、自己治癒力もそんなしょそらの比ではない。

だが健が現れたことにより、場が崩れた。

神々が焦りから山田から視線を外してしまったのだ。それによりあんな結果になってしまった。

奏は唇を噛みしめる。

何たることだろうか、必死で義経も、皆も戦っていると言うのに。車を車庫の中に押し込めるようにして停めると、二人は屋敷を壁にする形で元来た道を引き返していく。

「僕……せめて雫お嬢様と契約、しておけば良かったです」

「……契約とはあれか？前に言っていた、特殊能力が芽生えるという」

こくと頷くと奏は言う。

「実は僕、雫お嬢様とも義経様とも、適性値が完璧な値を示しているんです。ただ、雫お嬢様には必要はないと言われていました。これは義経様からでしたけど、一族の中で働かせるつもりは無いってことでしょうね。でも、今になって必要があったって分かったわけで……複雑ですけどね。せめて義経様と契約していれば僕はこうして、ただ逃げ惑ったり、悔しい思いしなくてすむのかなって………思いました」

そこまで口にするると、奏は足をもつれさせてその場でこけてしまう。

あまりの自分のどんくささに、奏はついに一粒の涙を流した。それを見て瑞名瀬は淡々と言うのだ。

「そんなへっぴり腰で戦えるわけがないだろう。そもそも本当にこんな書物の中のようなことをやっているとは思わなかったぞ。魔法

使いと言うやつなのか、それとも超能力者と言うやつなのか、……
どちらにせよまともではないのには違いないな」

そんなことを言われれば聞き間違いではなからうかと、あんどりと大口を開けて奏は言葉を暫し失った。言葉を取り戻した奏は、慎重に尋ねる。

「……ファンタジー小説とか、読むんですか？意外です」

「本なら何でも読む。宗一郎さんが好き嫌いは良くないと……まあ、そんなことはどうでもいい。兎も角もだ、見ているだけで震えているやつが戦えるとは思えない。お前は大人しくそのままにいるほうがいい。そのほうが俺も安心する」

「……それは心配してくれてるんですか？」

きよとんとした目で奏が思わず口にすれば、些か傷ついた様子で瑞名瀬が言うのだ。

「お前が居る方が楽しい。だから、命を粗末にしなくていい。人には相応しい場というものがある。それがお前には戦う場ではないことだけは確かだ 行くぞ」

「……はい」

前に行く瑞名瀬の背を追いつつ、奏は思った。

それでも僕は、雫お嬢様の傍に居たいんです。

どんなにか恐ろしくとも、どんなにか危険が伴っても、傍にありたいと望むことはいけないのだろうか。奏には分からなかった。

++++

ぱちりと目を開けると、目の前に影が指していることに気がつく。そしてその影は、一人の男の顔が近くにあるためにつくられた影のようだった。

場にそぐわないと思わず健は笑いながら零してしまっただが、目覚めたかがりが惚けた様子ながらも、嬉しそうに健へと告げた、そのたった一言が嬉しくて妙にくすぐったい気持になった。

「お早う、たける」

「お早う。良かった。お前、身体大丈夫なんだな？平気か？」

そう言う健の方が顔色が悪い。

首を傾げてかがりが何のことかと尋ねるが、健は痛みが無いならいいと、ほっとした様子で言う。

するとどつと疲れがきたのか、健がかがりの胸へと突っ伏した。かがりが起きたのを感じ、何とか上体を起こし、その顔を覗き込んでいただけだったようだ。だがそれも、かがりが目覚め、無事であつたことを知ればもういいということが、くずおれるようにして健はその上に倒れ込んでしまった。

これに驚いたのはかがりだ。

かがりは全身を覆っていた擦過傷に幾つもの裂傷にと、そのほぼ全てを、動けるまでに自己治療で、自身でも知らないうちに治療してしまっていた。だからこそ、先ほどの攻撃を受けた際の記憶が一時的に喪失されていても、別段違和感も何もなかったのだが、目の前の身体が血に染まっていること、そして血を大量に失い、自身も怪我こそほとんどがもう癒されているものの、それでも足りない血液により身動きが出来ないことに気づき、慌てふためいた。

何故動けないのか、そして何故健は血まみれで自分の上で倒れているのか。混乱したかがりは健の頬を両手で挟み込むようにして掴むと、その頬にかかった髪を乱暴に退けて血の気の失せた顔を良く

見よつと持ちあげた。

するとそこにあつたのは、蒼白になった健だ。

「たける!」

あまりにも酷い顔色に、かがりは真つ青になる。それを見て、苦笑して健は言った。

「……ごめんな、役立たずで。なんか、気が付いたらざっくりやられてやんのな、俺」

乾いた笑い声を上げるとそれだけで疲れたのか、瞼すら開けるのが億劫そうにしている。

それを見てかがりは力なく首を振ると、怪我なのか、大丈夫かと必死で尋ねるが、大丈夫でないことは誰の目から見ても明らかだった。

うーうーと泣きじゃくっていると、かがりが何か閃いたのか、血まみれの顔を健に寄せてきた。

「良く聞いて、たけるには私と適性がある。私と契約すれば、少しは楽になると思う。それは保障する。ほんとは全身を治してあげたいんだけど、たけるを治すには、私がかろう少し休まないと無理みたい……ごめんなさい」

と言うと、ちらと横目で大蛇を一瞥すると、先ほどのことを思いだしたのか、一気に言う。

「ぐずぐずしていたらまたさっきのことみたいになる。それはあまり嬉しくない。たける、私と契約して。お願い、力を貸して」

真剣な目とぶつかれば、一瞬気圧されるようにして健は怯んだ。

「お願い、皆を助けたいの。力を貸して、たける」

真摯な響きを発するそれに、健の心は大いに揺さぶられた。そして、迷っている暇が無いことを悟ると、健は心を決めた。

僅かに首を傾けると、どうすればいいかと健は尋ねた。

大蛇が闊歩していて、ついでに山が行き成り作られて、更にはそこかしこの大地がパズルみたいに出っ張ったり引っ込んだりと忙しない。そんなものを見せられれば契約の一つ二つ何だと言うのか。このままむざむざ殺されるくらいならば、これが最後だとしても、かがりと共にありたい、かがりに賭けてみたい、そう思ったのだ。健が了承を示したことを確認すると、かがりは健の頬を情緒もへったくれもなく掴みあげ、そのまま多少強引に引き寄せた。

「……ッ!」

気づけば二人の距離は、ゼロだった。

72 (一人目の契約者) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

72 (一人目の契約者)

口の中がいやにぬるついている、何を流し込まれたのだろうと考
えていれば、かがりの声が耳に届く。

「飲んで」

何を、とは聞けなかった。考えることすら出来ずにそれを飲み下
せば、ほっとしたような表情で見つめてくるかがりと目がかちあっ
た。

「それで少し動けるでしょ？」

え？と思いつつ健はその場にゆっくりと起き上がってみた。自ら
の身体を確かめるように慎重にだ。

「……………つ、これ……………あの、これはさっきのが……………なのか？」

驚くことに先ほどまでは瞼一つ開けるのが億劫だったのが嘘のよ
うだ。

けだるさが残るが、それでも随分と楽になった。

一体何を飲ませられたのかと思っただが、かがりはその可憐な唇を
寄せてくる際、何を含むこともしなかった。となれば、自ずとそれ
が何か分かるというものだ。

唾液かそれとも　と考えていると、口の中の血じゃ、契約には
足りないとかがり告げる。

「……………んん？」

一体、かがりは先ほど何と言ったのだ？

「私の胸にも今、血がたつぷり溢れてるでしょう？そこから、なるべく心臓に近い場所から血を飲んで欲しいの」

「え……いや、ちよつと待って！？さっきの血なわけ！？嘘だろ！」

大蛇に思い切り体当たりをされた時のものだろうか、もとはまっさらな素肌をさらしていただろうに、今では乳房と乳房の間が血で溢れかえって見えにくくはあるが、うつすらと凹んで見える。そこから血が未だにたらたらと、糸を垂らしながら脇腹へと伝っていくのが見えれば、ぞつとしないというものだろう。

実際には大きく陥没していてもおかしくなくらいの力があのとさかかったのだろうが、それでもかがりの体はそんな大きな怪我を致命傷を負わなかった。

人よりも頑強な肉体をもっていたがゆえだが、健はそんなことは場所が場所だけに、そして時が時ゆえに考えられもしない。

痛々しげにそのへこみを見つめて躊躇うような動きを見せるが、かがりは早く血をと健へと促すばかりだ。健の躊躇など分からない様子である。

仕方なく、ええいままよとばかりに、健は未だ血を滲ませ続けるそこへと口を寄せた。

乳房に自然と唇を寄せる形にはなるが、恥じらいも何もないかがりを前にして、こちらが恥ずかしがっていても変に思っただけだ。堂々と、せめて恥ずかしがらずに唇を寄せられたら良かったとは思っが、実際はどうだったのだろうか。健には分からなかった。

唇の中に溢れてくるそれは、むっとする鉄の匂いとは裏腹に、不思議なことに甘露とさえ言って差し支えないほどにそれは甘く、そしてまるやかな口当たりをしていた。

けれどそれはおかしなことに、それが喉の奥へ駆け抜けた後には焼け付くような、それでいて仄かな刺激も与えてくるのだ。

これは本当に、人の血液なのだろうか。
嫌になるほどくせになる味だった。

渴きを癒すように、健は気づくと夢中でそこにむしゃぶりついていた。

滑らかな素肌に舌を這わせ、血を啜る。それもかがりの言うように心臓の真上のあたりからだ。常ならば羞恥に頬を染めていてもおかしくないほどの行為だが、躊躇いも何もかも吹っ飛ばすほどにその血は甘く健を誘惑し続けた。

健は自分が人の 同族に少なくとも見える少女の血を啜るという、禁忌をおかしていることになど気づかない。

そのとき考えていたことを言葉に言い表すとすれば、甘く刺激的な味にする、魅惑の果実に舌を這わせていた。その程度の考えしかなかった。

むしろそれ以外に考えられなくなっていたのだ。

「もう、これ以上は駄目」

突如として入った待ったの声にも気づかずに、健はなおも血を啜り続けようとするが、力の入らない手を動かして、ぐいとかがりは健の頭をそこから離す。言ってもきかないと分かっていたのだろうか。

頭を無理にそこから離され、ようやく健は我に返った。

「……お、俺」

なんてことをしたのだろうか。

我に返った途端、わいてきたのは自責の念だ。

けれどもかがりは細い息をはきながら、微笑を浮かべて言うのだ。

「たけるの中に、新しい力が生まれたと思う。たける、顔をこっち

に」

呼ばれて健はかがりの顔のそば近くへと寄せると、かがりがその額に己のそれを押しつけるためにぐいと首を掴んで更にそばへと引き寄せた。

額と額がぺたりと張り付くようにしてくっつくと、今度はその押しつけられた額の驚くほどの熱さに瞬間健は身を引きかけたが、そこで気がついたのだ。体が自分の自由にならないことに。

瞬間的にパニックを起こしかけるが、かがりはそんなことなどお構いなしに勝手に話を進め始める。

「契約の言葉とか何も考えてなくてごめんなさい。これから私は貴方のものです、貴方は私のものになった。貴方は私の一部。貴方は私のもの。それと逆に、私は貴方のものです、貴方の一部になった。貴方の手足は私の手足、貴方の傷は私の傷。生きるのも死ぬのも同じ。永久にこの契約が続くことを、私は宣言する」

「や……何、何だそれ」

情けない声を漏らした瞬間のことだ、触れた額から光が溢れ、迸り、全身がまるで洗われるように光が駆け抜けていくのを呆然と見つめる。

ざあつと光のしぶきが全身に降り注ぐ。それはまるで、細胞が全て組み替わっていくような感覚だった。

一つ一つ、成瀬健という少年をかたどっている細胞の一片までもが死に絶え、また新たに生まれた、何故かそんなイメージが頭に浮かぶ。

じりじりと全身が焼けつき身体中がばらばらになるような感覚がして、気づけば全てが元通りになっていた。

「なんだ……これ……ほんと、これ何？」

ふわりと酷く優しげな笑みを浮かべると、かがりは言った。

「これで私がたけるを守れるようになった。だから安心して、たける。たけるはまだ戦い方を知らないでしょ？その体の使い方分からないだろうから、私が貴方の手足を動かす。だから体で覚えて、生きる術を今ここで学び取るのよ」

どういう意味か、聞くまでもないだろう。

気づくと健は自身の意のままにならない体がふわりと浮いたのを感じた。その次の瞬間頭の中に直接聞こえる声に驚く。

『たけるの力は超人的な身体能力みたい。どれくらいの時間をこのままで動けるか分からないけど、考えるよりも動いて試してみよう』

試してみよう、と言われても、試すのはかがりで自分ではない。

なにをするつもりなのかと頭の中で言葉を紡げばかがりにそれは通じたらしい。

だが彼女は健の言葉を聞く気はないのか、心の底から驚嘆したような声をあげて凄いとつとつととと囁くように言うだけだ。

かがりは健に、跳躍一つでここまで生身で浮いたのだが、何も感じないのかと尋ねた。

『どういう意味？跳躍一つで………なんだって？』

きよろきよろと、健は視界を動かせないものかとしてみるが、矢張り首も全く言うことをきかない。けれどよくよく観察してみれば、視界の端には遠くに見えていた屋敷が、見上げていたのが二階か三階かだったものが、今では何故か下に見えた。

そもそも山の頂にいた健は、足場となったその頂が一気に遠くな

ったことに今更ながら気づいて慌ててしまう。そしてこれも更に今更なのだが、全身に風を感じていた。

一体なにがどうなればこれほどの跳躍力を身につけるといえるのか。

かがりはただの一飛びしかしていないというのに、凄まじい脚力だった。

『周りをよく見て。周囲がおかしいと思わない？』

『そういえば……何でみんな、止まってるんだ？』

周囲を取り囲んでいた大蛇たちがその場をずると、その重そうな胸を引きずって闊歩していたのが嘘のように、今ではその身動きを止めてしまっている。

それどころかよく見れば、健につかみかかる勢いできていたイオリもタケミナカタも、ぴたりと身動きを止めてしまったようなのだ。遠目で見える義経達など更に凄い。跳躍したままぴたりと動きを止めてしまっているのだ。

時間が停止したのかと周囲を見て健が言えば、かがりがそうではないと言う。

『たけるの能力は超人的な身体能力。だから、よく見て。みんな僅かだけでも動いているはずだから』

かがりの声に導かれるようにして周囲を見てみれば 観察といえるほどにじっくりはみれないが 僅かに皆動いているのが分かった。

それはハイスピードカメラで捉えた映像のように、そこだけ隔絶された映像のようだった。

まるでただ一人だけ、健だけが世界に取り残されたような状態だと、それを見て愕然としていれば、くすりと笑いながら違うのだと

かがりは告げる。

『皆が貴方を置き去りにしたんじゃないやなくて、貴方が皆を置き去りにして、動いているの。貴方が早すぎるのよ』

72 (一人目の契約者) (後書き)

なんだかここにくるまで随分かかった気がします
長かった！

73 (光の矢) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

73 (光の矢)

実際に論より証拠だと、かがりは健の手足を繰り大蛇を続けざまに屠っていった。どれもこれも一度大穴があいた程度ではすぐに戻ってしまうのを知っているため、かがりは大蛇を一匹ずつ、その凄まじいほどの脚力を持って大きく蹴り抜いてその胴をまず真つ二つにすると、そのまま分かれた胴を更に拳で、脚で、細切れに切り刻み、引きちぎっていくのだ。

義経達在必死の形相を浮かべている中でのこれだ。健は奇妙に感じながらも、自身の手に入れたばかりの力と言うものを、ようやくここにきて実感できてきたらしい。

『すげえ』

素直に喜びをあらわすように、己の手に入れたばかりの力に陶醉するような声を上げる健に、油断しないでとかがりは手厳しく告げる。

『まだ終わってないよ、たける』

そう告げた瞬間、今度は全身から黒いもやのようなものが滲み始めている山田の元へとかがりは健の体をつつこませていったのだ。

完全に元の人物が誰か分からなくなっている山田を見て、健はなんだこの化け物かと内心で毒づいた。

全身のうち、三分の二を黒い何かに覆われて見える山田の姿は今やただの化け物だろう。

黒いもやは巨大な人の形に見えた。それが山田の体に必死で寄生しよう腕を伸ばしてとりついているのだ。

かがりはその黒いもやの巨人めがけて健の凶器とかした脚をふり

ぬく。だがしかし、もやの巨人には健の脚が当たらない。

ぶんとふり抜いた勢いそのままに、もやの巨人をすり抜けた脚に驚きの声を上げると、健はそのまま勢いあまって体を傾がせた。

寸でのところで足を踏ん張って立ち止まれたものの、もう少しでそのまま芝生の上にごろりと無様に転げてしまふところだった。

『……やっぱりきかないのね』

『きかないって?』

『それは　もう少し協力してね、たける』

そう告げると、健の腕を使い、山田の体を背後から羽交い締めにしたのだ。

そしてかがりは多くを言うつもりは無い様子だ。健にこのままで居るようにとだけ告げると、健を一人残して健の中から消え失せた。何とはなしに自分の中からかがりがいなくなったのを感じると、健は途端にその力を維持できなくなり　そうなった瞬間、時が元のとおりの流れを取り戻したのを感じた。

「なんだ……これは」

驚きの声は義経だった。

それはそのはずだろう、いきなり目の前にいた大蛇が引きちぎられていなくなり、小さな蛇が、そして蛇の残骸が大量にそこにいるだけなのだから、これで困惑しないほうがおかしい。

よくは分からなかったが一齐に消えた大蛇がまた元に戻らないとも言い切れないため、大蛇の元となる蛇を一掃し始めた。

タケミナカタとイオリは目の前の大蛇がいなくなったからだろうが、蛇を一振り腕を払っただけですべてを屠ると、かがりの元に直ぐ様向かう。

横たわるかがりの傍らに膝をつく、二人が心配そうに声をかけ

てくる。けれどもかがりはそんなことは無用と、力が入りにくいと告げ、ただ上体をおこしてくれるようにとだけ言う。

「そのような状態で体を起こすなど……いいから寝ているがいい。無茶はするな」

「無茶じゃない。やらないといけないことなの。お願い、二人とも」

それは決して懇願するような同情をひくようなやわな眼差しではなく、ただただ真摯な瞳だった。それとぶつかれば二人は負けを感じ、自然と折れる方向へと気持ち傾いていくのを感じた。

仕方ないと嘆息を零すと、かがりこそと二人で助け起こす。

かがりはその感謝を述べて、二人の手を借りる形で両腕を前へとすつと真つ直ぐ構えた。

眼前にあるのは健と、それに羽交い締めになっている山田だ。

健は必死に暴れる山田を抑えながらじつとかがりを見つめていた。何が起こっているのかもわからないまま、それでもかがりを助けてくれた健。そんな健も今、その目には恐怖の色があった。

かがりには安心させる様に小さく頷いて見せ、言うのだ。

「私を信じて、お願い」

信じると言われても、一体なにがなにやらもうわけが分からない。そんな中、腕を構えてなにををするというのかと健が訝っているとかがりは、ぱんとその場で合掌すると、腕を何かの構えで開く。するとその手の中には、輝く弓と矢がいつの間にか生まれていた。

あまりのその眩しさに驚いたものの、山田がそれを見た瞬間、暴れる力が一気に増したため、そんな驚きもどこかに吹き飛んでしまふ。

「うぬら、我が誰か知っていてこのようなことを!? 我は」

「ちよ、嘘だろ!？」

暴れる山田にはかり意識がいつていたが、かがりは真っ直ぐにこちらに狙いを定めているのだ。

きりきりと弓矢を引き絞り定めた狙いはタケミナカタとイオリにより、支えられているため、よほどのことがない限り、あれは外れそうもない。

それを見て健は呻いた。

矢張りあれは腕の中の山田を射抜くためのものなのだ。けれど山田とこれほど密着していれば、もれなくあの矢は健の身体をも貫通することは間違いないだろう。

咄嗟に逃げるべきか逃げざるべきかと考えたところで、はっと気づいた。

信じるとは、これのことだったのだ。

まっすぐに健はかがりの目を見れば、その目は大丈夫だと言っているように健には見えた。

その瞬間、腹は決まった。

健は叫ぶ。

「こい、かがり!!ここを撃て!」

「止めるおおおっ!」

健の声に導かれるようにして、びゅつと矢が放たれた瞬間、きいと甲高い獣のような声を上げて矢は山田の胸へと一直線に跳んでいく。

そのまま吸い込まれるようにして胸の中央へと光の矢がたんと突き立つと、矢は山田の全身へと巣くう、黒いもやを瞬時に一掃する。あっと思ったときには、しがみつこうと必死で山田にとりついてきた巨人も先ほどの矢に被われてしまったのか、山田の体のどこにもいない。健の腕の中にいるのは、朝みた山田の姿そのままの、華

奢な体だった。

「嘘だろ。これ……あの子だったのか？」

この時はじめて健は、これが朝あのようなことを引き起こした、山田であることに気がついたのだった。

73 (光の矢) (後書き)

超身体能力とでもいいますが、健はそういう能力。

色々とまだあるんですが後から出てきたりする子もおるので今のところそんなもので。

74 (終幕) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

74 (終幕)

目の前を残像が駆けていたと思った、次の瞬間には形勢は逆転していた。

いつの間にか健がぴんぴんとしており、さらには真っ黒な塊の化け物をとらえていたのだから驚きだ。

それに矢をつがえた少女が男二人に支えられて放った矢は、凄まじい威力だった。

化け物があれに当たった瞬間、消滅してしまったのだからそれは相当なものだろう。

気づけば二人は手に汗握り、目の前で起こる出来事を食い入るように見つめていた。

「……降矢さんじゃ、なかったね」

「ええ……」

けれどちつとも嬉しくない。ならば雫はどこにいったというのか。櫻子は少女の元へと降り立った義経を見つめ、そしてその傍らに一人、また一人と集っていくその彼の秘書たちを見て、不信感もあらわに言うのだ。

「雫は、これを隠していたのね。私にさえ、これを隠していたのね」

「いや、そんな言い方……」

「だってそうじゃない。私はほとんど生まれた頃からの親友なのに、……なのに私、ぜんぜんこんなこと知らなかったわ。どうして言うてくれなかったのかしら？ 酷い……」

櫻子の言い分も確かにわかるが、須賀には黙っていた雫の気持ちもわからなくもない。

だいたい、一体誰にこんなことが言えるだろうか。そもそも言ったところで誰が信じるというのか。

須賀自身も今この光景をリアルタイムで見ているのにさえも、これが現実なのかと疑ってしまう。まるで映画の中のワンシーンのようにしか思えないのだ。

二人が居る場所がまさに安全圏だからなのだろうか、被害にあわない場所で見てる状況が、より彼女にそう感じさせた。

雫だつて黙っていることに何の良心の呵責も感じなかったのだから、いいやそんなはずはないと、そんなことを須賀が考えていれば、屋敷の方から一人の幾分背が高めの女性がよるめきながらも歩いてくるのが目に入った。

義経の元に最後にきたのはエマだった。知らない人物の登場に、櫻子はいつたいあれは誰かと首を傾げる思いがした。

「声、ほとんど聞こえないわ」

「なんて言ってるのかな」

+++

「これは一体……」

遅れて登場したエマは、酷い顔色をしていた。

彼女は謀報などの仕事ばかりさせられていて、人の生き死にかかった仕事は今までしたことがなかったのかもしれない。だとすると初めて見た死体があれば、確かにこんな顔色になってしまってもおかしくはなかった。

エマが必死で地下から這い上がって見れば、酷い惨状だったのだから絶句しても仕方ない。

遅かったなと義経が口にすれば、鷲宮が屋敷へ通ずる道は全て閉じてあるんだから、こじ開けてでてきたはずだから、遅くとも仕方ないと、ある種だがエマを庇うようなことを言う。

「ふうん？あの閉じられた道から出てきたのか。案外本家もやるじやないか。それで？もう敵はいないが、どうする？」

今更出て来られてもねえと嘲るように言われれば、むっとした表情を浮かべてエマは口を開いた。

「……………どうするもなにも……………貴方はやはり危険です。それに」

そう続けようとしたところで、義経の背後にいたかがりの存在にエマは気がついた。

彼女は一体誰なのかと、目で尋ねるが誰も答えようとはしない。関係者でないのであれば、拙い、そう考えたからこそその問いだったが、義経達は逆に警戒も露わにエマへときつい眼差しを浴びせかけた。

だが、そんなものにも気付かないほどに、エマはかがりを注視していくと、ほどなくしてあることに気づくのだ。

「あれは……………先ほどのあの……………強い力を持った……………神？」

先ほど雫に遣えるようにしていた二人の神が、先ほど雫にしていたのと同じようにかがりへと傳えているのだ。深く考えなくとも、それを見るだけでだいたいのところを察することは至極簡単なことだった。

まさかこれとは、エマが雫とかがりを結びつけて考えたところで、ちようどかがりが「もう動けるくらいになった」と口にして、タケミナカタに引かれるようにして立ち上がると、射ぬかれ打ち捨てら

れるようにして倒れ伏している黒い塊の元へと向かうと、そのぶすぶすと黒煙をあげる体を見下ろす。

先ほどは巨人かと思まがうほどに巨大だったその姿は、いつの間にか本当にちっぽけな姿になってしまったようだった。

「我が、我が消える……消えてしまっ……あ、あああ、止めよ……止めよ！……助けてたもれ。人の子よ」

まさか神である自分がこうまでたやすく討ち取られるとは思っても寄らなかったのだろうが、ぼろ雑巾のように打ち捨てられ、目の前に立つかがりからの更なる攻撃を加えられることに脅え、這い蹲って許しをこうた。

神が人の子に許しをこうなどとその誇りが許さないだろうに、それでも黒い塊は情けをとく。

どんなにか悔しくとも殺されるかもしれないとなれば別なのだろう。

だが、そんな己を惨めと感じたのか、黒い塊は小さく震え嗚咽のようなものをいつしかもらし始めた。

「なぜ、かようなことに……久方ぶりに出られたというに、……ほんに、……うっうっ」

もぞりと全身を小さくまるめると、黒い塊は己の惨めさにさらに泣いた。

それを見て、健はかがりに言うのだ。見逃してやれないのかと。

「なんか、これ、可哀想だよ。殺さないであげれないのか？」

「たける、酷いこというのね。私は一度も殺すなんて言っていないに」

「……違うの？なんか、勝手にバスター系な仕事についてんのかと

想像してたわ」

よく悪魔被いなどというと、相手を滅ぼすまでやるのはマンガでも読むから、てっきりそういうことなのかと思ったと口にすれば、かがりを囲む二人はマンガってなんだろうと顔を見合わせて首を傾げてしまう。

かがりはというと、これに知ったかぶりをするわけではないが、よくわかっていないながらもどうでもいいのか、ただ違っただけ答えた。

そつと黒い塊の前に膝をつくと優しくその背を撫でさする。

「大丈夫。ゆっくり治そうね」

途端、奇跡の光が降矢邸内に溢れたのだ。

うつと全員が視界を庇うようにしているなか、エマは吐き気から下を向いていたことが幸いしたらしく、その光がわつと溢れた瞬間を見ずにすんだ。そして唐突に溢れだした光に導かれるようにして顔を上げると、とてつもないほどの光の中にあらゆる命が息を吹き返していくのを目の当たりにしたのだ。

それはまさしく奇跡の瞬間だった。

「これは……」

息をのむ。

抉れた土の上に芝生がすさまじい勢いで根を張り、葉を生い茂らせていく。光が溢れ続けるかがりがあるその場所からはずいぶんと離れているというのに、光があたったその場所から、見る見るうちに生きる力が溢れてくるようだった。

それはエマの肉体も例外ではないらしい。
いつの間にかすさまじい吐き気はきえ失せ、エマは心地よい陶酔
に身をゆだねていた。

「まさかこの力は、癒しの力だとも言うのですか？」

膜の向こう側でも同様に、須賀が驚愕に目を剥いていた。

「芝生が……え？すごい……」

素直に感嘆たる思いでいたが、ふいに気づかなくともいい所に気づいてしまったようだ。

須賀は先日の頭部を強打された一件を思い出し頭を無意識のうちに手を伸ばし、さすりだす。

「じゃあこれ、もしかして……私の怪我がすぐに治ったのって」

芝生だけではなく、これがもしや人の傷さえも癒せるとしたら？
須賀はそう考えた。

だとすればあれは治療の成果などではなく、あの少女の力だった
ということなのだろうか。

須賀が驚きに目を見張っていれば櫻子は無力感からだろうか、その
場にずるずるとへたりこむと、ぽつりと須賀にさえ聞こえない声
で言った。

「ねえ雫、私は一体、あなたのなんなの？」

絶対に傍を離れはしないとあの日、またも誓ったと言うのに、その
決心はこの光景を目の当たりにした途端、容易く崩れ去ろうとして
いた。

凄まじい光に目を焼かれかねない勢いでいたかと思うと、いつの間にか光はきえ失せていた。

74 (終幕) (後書き)

と言っわけで山田さんにくっついてたのはククリヒメでした。

75 (荒魂より和魂へ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

75 (荒魂より和魂へ)

健は光が消え失せたところで目を慣らそうとぱちぱちと瞬きを数回繰り返して気がついた。

「おわっ！なんだこりゃ！土くれだらけだったのが芝生もつまさじゃないかよ！しかもなんだあ？木もこんなでかかったか？」

土がむき出しにされてしまっていた部分は全て芝生に覆われて、そして木々は巨大な樹木へと変貌を遂げていた。目をつむっていた間に植え変えたのかと思っただけのもの、そんなはずもなく、全身の傷が癒えているだろうと告げられれば、それと同じことだとさりとて言われて気がついた。

全てがかかりにより癒され、そしてその腕に優しく包まれたのだと。

「これが私の能力。あなたの身体能力強化と同じ。治療能力」
「凄いな……ほんと、すげえ……」

全身を覆う傷が完全になくなっていることに気づくと、健は声も出ないようだった。

けれど次の瞬間、がくと膝の力が抜けるのを感じたかと思えば、地面が近くなっていた。

「……あ、れ？何これ」
「返しだな……」

声のするほうを仰ぎみて見ればそこに居たのは義経だ。

どういう意味かと健が力の入らない足腰を抱えて問えば、能力を

使いすぎるとそうなることがあると言われ、愕然とした。

「……無尽蔵に使えたりはしないのか」

「当然だろう。元はただの人間なんだ。強化されてるからとはいえ、無茶な動きをしたんだろう？」

健からすれば、勝手にかがりが人の身体を使ってくれたからだったが、どちらにせよ健の身体が無茶な動きをしたことにはかわりないため、あえて黙っていた。

「それに使い方もまともにならないで初めての实战だ。膝が萎えるくらいで済んでいるだけマシと思え」

「うーあー……了解です」

怪我也癒えて身体中ぴんぴんとしているはずなのに、何故だか妙に身体中がだるく、眠い。

奇妙な感覚になれないでいれば、かがりが心配そうに顔を覗きこんでくる。

「大丈夫、たける？」

「ん、へーき。怪我也ないし、大丈夫だよ」

そしてふいに視線を先ほどの黒い塊が居た場所へと向ければ、健は絶句した。それどころか果ては卒倒するかと思っただけだった。

「なん、……いや、これ、……ええっ!？」

目の前にいたのは天女だった。

それも絵巻に出てくるような本物の天女だ。

ふわりふわりとその纏った羽衣を、風もないのにたなびかせて驚

いたような顔をしている。

その顔はきつく、幾分気の強そうなところはあるが、微笑むだけでそれはそれは美しい顔になるだろうと健は思った。

奇妙な形に結い上げられた髪に触れ、そして自らの頬にそつと手を触れて見て、更に驚愕に目を見開くと「これは一体なんだえ！」とその女は叫ぶ。

「これは一体なんなのかえ！？これは……何という女童か、これはうぬがやったのかえ？」

「それはかがりのこと？」

女童と、耳慣れない言葉で呼ばれ首を傾げて尋ねたものだが、女はひらと羽衣を軽く振り、鷹揚に頷いて見せる。

「そうじゃ、うぬのことよ。これはうぬが全てやったのかえ？」

「……そう。私がやったわ。御霊を癒して力を与えた。もうどこも痛くないでしょう？」

「生き返った心地よ。それにしてもかようなことがまさか人の子の身にしてできてしまうとは、凄まじいものよのう」

健はもしかしてと口にするとかがりに一呼吸おいてから尋ねた。

「それがさっきの真っ黒なあれか？」

「うん、そう。真っ黒ちゃんだよ」

先ほどとは真逆の立場になったらしく、女が今度はその耳慣れない言葉に、まさかと思うがと口を開く。だがそれは、決して耳慣れないからと言うそのままの意味ではなく、単に自分がまさかその形容詞で呼ばれるわけはなかるうな、という所謂脅しである。

だがしかし、それが一般常識に疎いかがりのような少女に通じる

かといえ、どうかという疑問は出てくるが。

「…………それは我のことかえ？」

女が若干ひきつりながら問えば、かがりはぱちくりと瞬きをしてからこう答えた。

「真っ黒けっけ」

「我はそのような名ではない！我の名は、ククリ！ククリヒメよ！そう呼ぶがいい！」

それを耳にした後、健とかがりはぱちくりとさせ、ついで顔を見合わせて言うのだ。（これはかがりだけがだが）

「真っ黒けっけ？」

「…………つゝうぬらあああ！そこへなおい！誅してくれる！」

「俺関係ねええええええええ！ふっざけんな！おい、かがり！あつちに逃げるよ！俺を巻き込むな！」

「やだ！たけるは私と一蓮托生なんだからね！いつでもなんでも一緒一緒！そう言ったじゃない！もう忘れたの？たけるのばか！」

もう知らないとはかりにぶいと横に首を振られれば健は自身の負けを悟った。

「…………っんっだよ！可愛いなあ！」

途端、三人での追いかけてこが始まった。

それを見守る神二人はというと、まさかククリがこのようになるとるになぜとそんな話をしていた。

「ククリは我らとは違い、きちんと祀られていたはずだろう。それが一体なぜこのようなことになったのか」

疑問はつきない。

「いや、それどころか僕らより酷いよ。僕らはまだ自分の意識があったじゃないか。でもククリはそれが無い。意識すらほぼ失うほど完全に荒魂としての方に傾いていたんだよ。これはどう考えてもおかしいよ」

「……そうだな」

タケミナカタはククリヒメがはしたなくも裾をけたてて走るのを見ながらふいに口を開く。

「ここ数年か、ククリの姿を見なかったのは」

いや、それとも十年以上だったかと、曖昧な数字をぽつぽつと口にすれば、何の話かとイオリが聞き返す。

「いや、今はいい。後でにしよう」

嫌な予感を感じながらも二人はククリとそれに追いかけられるかがりと健を見守り続けることにした。

全てが終わるのを屋敷のそばから見守っていた二人はというと、凄まじいと今更ながらに言ったものだ。

瑞名瀬はおもしろそうに言う。

「想像を絶するな。確かにこれじゃあ危なくて、一般人は近寄れな

い

「まあ、そうでしょうね」

「ついでに近寄らせるなんてできないな……」

「ええ」

「それで、あれがあいつなのか……まあ、育てばああなるだろうという見た目ではあるな」

瑞名瀬は一人勝手に納得が言った様子を浮かべて首肯すると、関心したように奏が言う。

「よくわかりましたよね、あれが雫お嬢様だつてことに」

「そのまま育てばああなるという見た目だ。あれでわからない方がおかしい」

ざっくりと言われてしまえばなにも言い返すことができなかった。義経でさえ一体これは誰かと、最初疑ったくらいだったのに、瑞名瀬はそれすらなく最初から見えてわかっていたというのだから驚きだ。

「とにかく、これが終わったら学園のほうもよろしく頼む。なるべく早急にだ」

「……そんなに図書室が大事ですかあ？」

あきれたように奏が言えば当たり前だと返ってきた。

瑞名瀬は学園の安全からこうして言っているわけではない。学園の蔵書がすばらしいため、そこが壊されることが嫌なのだ。

だからこそこうして頼んでいる訳なのだが、下心ありありのこの頼みのために、奏はすっかりとやる気をなくしていた。

言うだけ言うと瑞名瀬は奏をおいてさっさと正面口まで歩き出す。慌ててこれについていくが、さて、どうしたものやらだ。奏は深

くため息を吐き出すと、これからのプランを練り始めた。

+++

唐突にうつと呻き声をあげると、ともに駆けていたかがりがその場に胸を押さえて倒れ込む。するとその瞬間、美しい白金の髪が色をすうつと取り戻していったのだ。

そして咄嗟に支えた健の腕の中で、ぐんぐんと手足が縮んでいくと最後にあらわれたのは雫だった。

これには今日一番の驚きを味わった健だが、それと同時に様々なことに合点がいったのも確かだった。

「そっか……だから、なんか見知ったように感じたんだな」

驚きながらも小さな雫の体を抱えあげ、義経の元へと駆けていくと、慌てることなく、そして義経が冷たく言った。

「これから君にいくつか話さなければならぬ。まずは契約のことだが、君は雫からもかがりからも、今後離れて生活することができなくなるだろう。……君はかがりの　そして雫の血を、定期的に飲まなければ死んでしまうからな」

「え……」

義経に雫を渡しながら健は目を見張る。

「それとエマ……」

くつと首だけを動かし義経はエマを見つめ、そしてその動きを瞬

時に封じると続ける。

「君にも少々込み入った話をさせてもらわなくちゃいけなくなった。紅桔梗のところに戻るのには別に構わないが、それはちよつとした細工をさせてもらってからになるだろう。大丈夫、痛くはない。何も雫たちのことを話さなければ、だけどな」
「ひっ！！」

恐怖に引きつった声を上げるが、そんなことはお構いなしに義経は続ける。

片手で器用に雫を抱きかかえながら義経はエマへ向かって手を伸ばす。

ぐつと喉にめり込む勢いで指を差し入れられると、指から何かがぬるりと出てきてエマの首にとりついた。あまりの出来事に竦みあがるがそれはエマの首に容赦なくぐるりと巻き付き、一気に締めあげてきた。

ぎりぎりと締めてくるそれに、エマは助けをこご。早くせねば窒息してしまうと必死の形相だ。

だがそれにも義経は冷たく言い放つのだ。

「その首輪は、僕らの意にそわないことを口にしようとしたとき、お前の首をへし折るものだ。言おうとただけでもそれは首が締めり始める。完全に口にのぼったと、のぼると確信したときに、その首輪はお前を殺す。死にたくなかったらこれからの発言には気を付けて生活するんだな。 本家の飼い犬」

あまりの出来ごとに絶句すれば、エマは呼吸さえ忘れてその顔を見入る。だが、呼吸を取り戻して息を整えてからエマはきつと義経の顔を睨み据えて言うのだ。

「こんなこと……長老たちが許しませんよ」

「あいつらがどう思うだろうが知ったこっちゃない。俺は俺のものを守る。ただそれだけだ。そのために何人死のうが知らない。興味がない。俺のものを俺が守る、ただそれだけのことだ」

それだけ言うと義経は興味が失せたのか、エマから意識を切り離した。

途端エマはその場に倒れ込んでしまう。つかみあげていた義経の力が意識から切り離された瞬間、消え失せたからだ。

エマのことなど最早どうでもいいのか、今度は健のほうへと視線を向けて口を開く。

「契約者となったからには君は一人では死ぬことのできない体になった。そのことはよくよく肝に命じておくように。それじゃ、詳しいことは中で話そう。澤田、庭を適当に直しておいてくれないか。これじゃあ酷くて結界を外す事が出来ない」

「分かりました。寸分たがわぬとまではいきませんが、なるべく早めにみれる程度にはなおしてみせます」

だが、それを受けてククリヒメが自分もやってやろうとふんぞり返って告げたのだから義経は驚いた。

まさか神が庭仕事などに手をかそうとは思わなかったに違いない。

「山に地にと、そこは私の領分よ。それくらいならば我が元に戻してやろう。喜びやれ」

尊大なこの物言いに、義経は苦笑することもなく真顔で頷いた。

元来神などこんなものだ。

タケミナカタとイオリがおかしかったのだろうと今ならば言える。

「では頼みます
はい」
行くぞ。こっちだ、ついてこい」

76 (それぞれの行方) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

76 (それぞれの行方)

血の秘密、そして義経たちの秘密を聞かされ、この秘密の守り人に今日から自分もなるのだと言われれば健は素直に頷いた。

そんなに簡単に頷いてもいいものかと呆れたように言われたが、いいのだと健は言う。

「だって、降矢さんも……その、かがり……も、俺が守れるなら守りたいし。それに、それ以外ないんでしょ？ だったら迷うことなんてないです。俺やります。大丈夫です。秘密だって守れる。あの二人のためだから」

自分のあの怪我ではあの時下手をしたら死んでいたに違いない。

あれだけ打ち付けられ痛みを感じなかったのはそれほど体の感覚が麻痺していたからに違いない。今、自分が普通の人間ではなくなったことに驚きと衝撃が改めてあるが、あの時とった選択に、決して後悔はしていない。

良くも悪くも現状をそのまますんなり受け入れる。それが健の長所だった。

先ほど起こった出来事を全て自分の中で消化しきった上での発言と気づけば、義経はまあまあ及第点をくれてやってもいいかと軽く首肯をして告げる。

「そうか　なら、そうだな。俺の娘達を頼む。これから俺たちは一蓮托生だ。娘たちを、よろしく頼む」

義経がこう口にしたのを境に、健を囲む全員がにこやかによろしくと次々に告げていく。

そんな光景を義経の腕の中で寝入った雫、ただ一人だけが知らな

かった。

では二週間に一度は最低でも血を飲みにくるようにと告げられて健は帰されるが、次に待っていたのは千草だった。

扉に何度も体当たりをしていたらしく、全身打ち身に青あざにと、酷いなりをしていた。

櫻子に須賀にと、健とは別にもう帰してしまい、面倒なことは終わったと思っただけにこれがかかりきた。

千草からの凄まじい追求がはじまったのだ。

「さっきのは、あれは一体なんなんだよ！あのメイドだって……」「いいか、あれは秘密なんだ。それが守れないならお前をもつ二度とあの部屋から出してやれなくなる。あの地下室からだ。いいか、ここを、この部屋を出ていってもまだそれを口にするようなら、俺はお前の口を封じることになる。これは脅しても冗談でもない。本気だ」

ぞつとした。

咄嗟に受け止められなかったその強い眼差しを、千草が視線をそらすようにして避けると、これ幸いとばかりに義経は畳みかけるように告げてきた。

「栗へもこの話は一切するな。最近、学園での出来事がたたつていくようにね、心労がたまっている。あまり負担をかけるようなことを口にするな」

栗のことも聞きたいことだらけだった。

あのわけの分からない突然の強い口調、あれは絶対に栗などでは無かったはずだ。

けれどそうも思っても肝心の話しすら禁じられては何をどうすることも出来なかった。

悔しげに唇を噛みしめると、絞り出すように千草は分かりましたと口にした。顔は結局、最後まで上げられなかった。

「分かればいい」

それだけ告げると、もういいなと義経は部屋を後にした。

残された千草は、やりきれなさから足下にあったゴミ箱を、腹立ち紛れに思い切り蹴りあげた。

「くそっ……」

このまま巻き込まれるだけでいいのかと、自問を繰り返し……最後に止めた。

どうすることも出来ないのであれば、せめて流されようと思ったのだ。

せめて雫とともに流され、その先に何があるのか見ようと、そう思った。

+++

健の元にその晩、一本の電話が届いた。

「はい、成瀬健は俺ですけど」

どうして自分にかかってきたのか分からないこの電話に対し、健は警戒を隠そうともせずによれば、相手は父親にはもう話をつけて

あると切り出した。

「……え、いやそんな待ってくださいよ！だってそれって……千草がやっつてることじゃ」

『……………』

「……………いや、そんな」

あまりの言葉に声を失っていると、健はこれで納得したようだ。勝手に相手は思いこんだようで、通話を勝手に切ってしまう。

後にのこされた健はというと、嘘だろうと眩き、呆然と切れたままの端末を見下ろしていた。

今日は一日、本当にわけのわからないことだらけだった。

+++

雫は次の日が休みでよかったと思った。あんなことがあった次の日に、学校ではどうにも気が重い。

今日はせめてゆっくりとしよう、どうせ明日からはまた大変なのだから、そう思っていた。

だが、それは甘かった。

起きてそうそうに配膳をしながら奏からもたらされた言葉に、雫は完全に我を失った。

「あ、そうそう。雫お嬢様。昨日のことはきちんとお礼をしながらはいけませんよ。相手は命の恩人なんですから」

「……………なんのことですか？」

「昨日、雫お嬢様は覚えていないのでしょうか、過呼吸を起こして倒れたんです。そこを人工呼吸だったのかな？許嫁さんがしてくれ

たおかげで雫お嬢様は助かったんですから、お礼くらい言わなくちゃ」

「な……え、あ……うう、うそ、ですよね！？嘘ですよね千草！」

人工呼吸ということは、唇を重ね合わせたということではないか。この歳でそんなのまだ早い！（因みに雫は家族とのキスはノカウントらしく、更に言えばキスは結婚式でするものだと言義経から教えられていて、それをそのまま信じているのだ）と、雫が慌てて千草に仰ぐと千草は憚然と言いつつ。

「人工呼吸じゃなくて、過呼吸は何かで二酸化炭素を入れてやらなくちゃいけないんだよ。手頃な袋もないし、だからああしたんだ。というかなんだ、嘘って。俺がそうしたらなんかまずいのか？」

いらだった様子で言われれば雫はぶんぶんと言を激しく振って言う。

「そうじゃ、なくて、だ……だって、いえ、あの……人命救助とはいえ、く、く……口づけですし……！」

真っ赤になりそう口になると、そのどこがいけないのかと千草は尋ねる。

「見も知らないやつならともかく、お前は俺と許嫁なんだから？だって別にいいだろ。ほかのやつとしたわけでもないのに」

これを言われはじめはぽかんとしていた雫は、ややもたつてそうかとほつとしたように告げる。

「そうですよね、だって千草ですから、いいんですよ、キスして

も」

千草はいずれ結婚する人だから、結婚式でする前にしたとしても咎めを受けるはずもないと、本当にほっとした様子で微笑すら浮かべてこう口にした雫に、今度慌てたのは千草だ。

ぶつと口に含んでいたミルクを盛大にふきだすと、なんてことをと叫ぶ。

雫はこれに首を傾げてきよとんとしていた。

「き、キスじゃない！あくまで人工呼吸めいた……そのなんだ、口づけだ！」

「いえ、だからそれはキスというんじゃない……」

「ち、違う！キスなんてそんな……いや、あ……う、とにかく違う！違うんだからな！！」

そこまで言うとは恥ずかしさからか、千草はほとんど朝食を残したまま逃げるようにしてベッドを後にしてしまう。雫と奏はこれに顔をみあわせて首を傾げたものだ。

「いったいどうして怒っていたのでしょうか？」

「さ……男心は複雑なんでしょうね」

「そうなんですか？」

「まあ、僕もよく分かってないんですけど」

ほのぼのと二人で朝食を胃に納めていると、部屋の角から千草が着替え終わったのだろう、今にも出かけられるような格好になって早くお前も着替えると告げてくる。さっきの今で何を言うのかこの男は。

首を傾げてどういふことかと尋ねると、庭の案内の続きをせがまれているようだ。早くしろとだけ告げて、またも千草は自分のテリ

トリーへと引っ込んだ。

「早くしたほうがよさそうですね、雫お嬢様」

「……はい」

慌てて雫は食事を喉の奥へと押し込むようにして飲み込むと、手早く着替えをすませて千草を呼んだ。

そして千草は雫の全身をじっくりと眺め、満足のいく出来だったのか、よしと頷いて出かけることになった。

後に残された奏は、あれは一応「服が可愛い、似合っている」と言っているつもりなのだろうかとほんやりと考えた。

「……せめて口に出せばいいのにねえ」

言葉すくなも大概にすべきだろう、少なくとも「よし」と言われなくても嬉しい女子はいないことだけは確かだった。

77 (二人目の…許嫁候補?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

77 (二人目の…許嫁候補?)

ホールを出てさっさと歩き始めてしまう千草を雫は慌てて追いかけると、千草がぬつと腕を一本ぶつきらぼうにつきだしてきた。なんだろうこれはと首をまたも傾げていると、千草は遅いから手を掴んでいればいいだろうと言うのだ。

これにはどう反応したものかと躊躇っていると、早くしろとせつつかれる。

仕方なしに雫はおずおずと千草の手に最初は軽くちよんと爪の先で触れ、二度三度と指の先、腹などで確かめると、なんとか大丈夫そうだと分かる。すると雫は思い切ってその人差し指を軽く握り込みこれでいいかと顔色を伺うようにしてみせる。

やはり、手を握るのはまだどこか恐ろしかった。

だから指一本だがいいかと問えば、千草は雫に初めて笑みを浮かべて見せたのだ。

「今……」

「なんだ？」

雫が口を開いた途端、その笑みは失われてしまったけれど、確かに先ほど笑みを浮かべたのだ。千草は雫に向けて、笑みを浮かべてみせたのだ。

そのことが嬉しくて、なんでもないと雫はふわりと笑ってついていく。

距離がまた一步、近づいたと思った。

「今日はどこに行きますか？」

「そうだな……ぶらぶらと半日くらいは歩けそうだしなあ、ここ」

半日も歩く体力はないものの、それでも雫は生真面目に返す。

「そうですね。広いですから」

あてもなく歩こうかと話していたところで、いつの日のことだったか、見た光景がまたも広がっていることに気づき、雫は顔がこわばるのを感じた。

「引越しの、トラック？」

「……な、なぜですか？だって」

誰かくるとは聞いていない。

それは確か、あの時も同じだったかと思い、奇妙な既視感を感じ不安げに雫は瞳を揺らす。

トラックが二人の脇をすり抜けていくと、続いてきたのはリムジンだ。

それが二人の真横で静かに停止したかと思えば、窓がスライドして、そこに現れた顔に二人は更に驚いた。

「お早う。あー……今日から俺もこの屋敷に住むことになった？から。ってわけで……宜しくな」

こちらにも不意であるという体であることに、けれど千草は不快感をあらわにして真っ直ぐに見据えている。

まるでそれは、雫は己のものであると宣言するような眼差しにも見えた。

「一体どういうことだ。それが宗一郎氏の意味なのか」

「……いや、つつかそんな顔すんなよ……けどまあ、そうらしいよ。つても実際は俺も良く分かってないんだ。昨日の晩に行き成り降矢

宗一郎さんから電話が入つてるとかつて母さんから言われて、父さん出張中で……母さん泡食つてるしすつげえびりながら電話出たらなんか……許嫁なんだとき。父さんとはもう、話はつけてあるから……一応な、お前もいるし、何で俺なわけよと思つただけどね、なんか……事情があるらしい」

「事情？」

雫からのこの問いに、健はぎくりとしたように強張つた表情を浮かべながら雫を見つめる。そして目があった途端、みるみるうちに真っ赤に顔を染め上げていく健に対し、千草が一体何がどうなっているのかと、わけもわからぬ苛立ちを覚える。

「いや……その、うん。ちょっと、色々あるんだよ。まあ、な……そういうことだから」

「こら。説明になつてないぞ」

「いやまあ、説明出来るような話しじゃねえんだよ。分かれよ」

「……」

分かりたくもないと、千草は全身で言っていた。

雫はそんな二人をかわるがわる見つめるも、二人は表情こそ違えど、どちらとも一歩も引く気はないようだ。

「一応な、許嫁候補つてことに二人ともなつたらしいから。だからまあ……なんつの？これからそういう意味でも宜しくな、千草」

この宣戦布告に千草はびくりと眉を跳ねあげた。

そして雫に握られた人差し指からそのまま雫の手を絡め取ると、そのままぎゅっと握りしめて健へと良いだろうと、望むところだと告げた。

「ち、千草……?」

雫は手からじつとりと嫌な汗をかきはじめるが、そんなことには千草は気づきもしないで雫に　ではなく、健に見せつける様にして雫に言っ てきかせる。

「行くぞ。今日は夏だ……」

「あ のっ！千草、早いです!」

ぐいぐいと先を進む千草に引つ張られるようにしていけば、雫は足をもつれさせて時折よろける。千草はそれを知っていても足を止めようとはしなかった。早くこの場を去りたいと、その気持ちだけで先を進み続けた。

健の視界に入れさせたくはないと、雫の手を引き続けるのだった。

どうして今更許嫁を候補などということにしたのだろうか。雫は宗一郎の考えていることが益々分からなくなってきた。

千草を気にしていたから、だからこそ雫と　と思ったはずなのだ。けれど健には、そういったものが何か、あったのだろうか。

千草と宗一郎には、幾つかの共通点があった。だからこそ、宗一郎は千草ならばとこの屋敷へと引き入れたのだ。

けれどそれとは逆に、健にはそれらの一切が何一つ存在しないのだ。

一体これはどういうことなのか。

この二人目の許嫁の出現に、雫は波乱の幕開けを感じるのだった。

1 (壊れた人形) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

1 (壊れた人形)

それは急激に膨れ上がったかと思いきや、彼女のそのばんばんに膨れ上がった気配が何の前触れもなしにぷつぷつと途切れたのは数刻前のことだ。

ようやく都合がついて出向いてみればどうしてこのようなことになっているのか 全てがまっさらな色をした空間に、自身までをまっさらな色に染めかえられたらしい少女がそこにはいた。

診察をしやすいようにと着せられたガウンはまっさらな洗いたての白さで、目に眩しいほどだった。そしてそれを身につけている少女 山田の肌は、たった一日で色が抜け落ちてしまったかのように病的な白さを蒼緋の前に晒していた。健康的に目に痛々しい程ではないにせよ、日焼けをしていた肌はどこに行ったというのか。

天井を見つめ続ける山田の瞳には、恐らく天井の模様すら映っていないのだろう。ひらひらと眼前で手を振ってみても視線がその動きを追ってくることはなかった。

蒼緋は慎重に寝台の端に腰をおろすと山田の様子を事細かに観察し始める。

髪を一房ほど軽くつまみ上げ、そしてあいたままではうつつとただ上空に固定された眼球を軽く触れるようにしてみる。反応は無かった。

そして額にそつと指を向けるとその額の中央に指を触れた。

それはとても、丁寧な動きをしていた。まるで、爆発物にでも触れるかのような手つきであった。

ひたと指を向けた瞬間のことだ、蒼緋の視界を一瞬で埋め尽くそうと、それはあたかも牙を向くかのごとく、やってきた。音も無いのにやってきたそれは、蒼緋の内に触れるべく腕を伸ばしてくるのだ。

それは山田の記憶だった。

両親に囲まれた記憶、華やかな日常生活、そして最近の記憶なのかこれは　華麗なドレスに身を包んで優雅に微笑む自身を見つめ満足げに微笑むと、くるりと鏡台の前で回って見せた記憶があった。これは恐らく、彼女の何らかのとても嬉しかった記憶なのかもしれない。そのドレスを身に付けた記憶が一番美しい色彩を放っていることからそれは考えられた。

蒼緋は山田ジュリと言う少女の中に入りこみ、山田は蒼緋の中に入りこむ。蒼緋は今、山田であり、山田は蒼緋だった。両者はこの時確かに全てを共有していた。あらゆる記憶を、感覚を、全て共有することで蒼緋は彼女自身の記憶したものを全て知ろうとしていたのだ。

それがどれくらい長い時間続いただろうか、蒼緋はやや食傷気味になりつつもそれを見続けていたが、それはある時を境に変化する。

山田の中に蒼緋が求めてやまない影があらわれたのだ。

「……っ」

ぴくりと蒼緋の肩が揺れる。

小さな影、それは恐らく雫だろうとは思った。だが雫と確証を得るには、何故か存在感が薄すぎるのだ。

山田が見た光景がそこにあるはずだというのに、その影のみが何故か印象のことごとくが薄すぎる。

一体これは何だろう。

場面が変わり、今度はその影のことを指しつつなのだが、山田はあれをどうにかしようと思つた。数名のものたちを使い、画策し始めた。それは蒼緋があの日つけたモノにより、増幅された恨み、怒り、憎しみなどの負の感情が突き動かしたものだ。

あの日つけたモノは、蒼緋の思った以上の行動を山田に引き起こしてくれたのだ。

山田は影に接近し、影をどうにかせんと目論見続ける。どうしてもあれが邪魔だとあの日刷り込んだ通りの行動をし続けてくれたのだ。

蒼緋はその記憶を眺めながらもほくそ笑む。ここまではおおよそだが計算通りに進んでいたようだ。

そしてこれが最新の記憶だろうと、蒼緋がまた新たな記憶にふれていくと、そこに広がるのは昨日山田が体験した出来事であった。

それが眼前に広がるのを心待ちにしていた蒼緋は、突如それに裏切られることになる。

蒼緋が求めてやまない雫の影に、ようやくと山田の記憶を媒体にしてだが触れたと思った瞬間、ぶつりと山田の記憶　精神と、突如接続が切られてしまったのだ。

なんだと訝るものの、蒼緋は別段気にした風もなく再度の接続を試みる。接続が切れたとしても、まだそこに山田自身があるのだ。記憶がある。ならばもう一度それを見ようと思うのは当然のことだった。

だが不思議なことに、再接続は何故か不可能になっていたのだ。それも妙なことに、山田へと何者かが強力な暗示をかけたのか、記憶が途轍もないスピードである影にかかわる部分　どころか、蒼緋と知り合うところまで、かき消されていくように、凄まじい勢いで一つ一つの記憶と言う情報の塊が次々に消去されていく。

あっと思った時にはもう、山田の中には蒼緋とあの日出会い、互いに微笑みあう2人の記憶しかなく、それ以降の出来事は何一つ残らない。消え失せてしまっていたのだ。

「馬鹿な……何だこれは。一体……何が起こったと言うんだ」

愕然と呟いてみるも蒼緋の問いに答えてくれる声はない。

何が原因でこうなったのか分からないままに、山田は病院の奥で、大切な二人の出会い、あの日の記憶を抱いたまま、眠り続けるのだ

った。

「蒼緋様？」

「……」

「気分が優れませんか？何かお持ちしましょうか？」

顔色を窺う部下に更に気分を害したのだが、それは今更だ。いつだって彼らは蒼緋にとって腹立たしい存在だった。居るだけで気分を害される存在だった。

蒼緋は手を払うだけで鬱陶しい部下を追い払うと、自室で一人になり、考えた。

義経と数年前に決別してからだっただろうか、雫のことがようとして知れなくなったのは。

あの日山田と追いやられた海外で会ったのは天の助けとばかりに、あの山から無理矢理引きはがしてきた御霊を張り付けた。それも、じつくりとじっくりと可愛がった後の荒み狂った荒魂と化したそれをだ。

山田に馴染みそれが身体の隅々までとけ込み取りこまれたのを確認すると、それを蒼緋は眠らせた。そして遠くない未来に羽化するようにそれに目覚めの時期を指定して封印し、山田を雫の元へと送り出したのだ。

蒼緋と近い血のものに反応して目覚めるようにと施したあの封印は、確実に雫のもとで解かれただろう。そして解かれてまっさきに荒魂が山田の中で共鳴を起こし、雫へと憎悪という形で現れるはずだった。

憎悪を持った山田が雫に何をするかは分からなかったものの、荒魂が憑いたとなれば相当派手なことをしてくれることは予想がついた。そうしたものを指し向ければ義経も、あれは雫へと仇なすものだそう遅くなく動き始めるだろう。

全ては蒼緋の計画通りに進んでいたはずだったのだ。

降矢邸内部に施されたもの、それを解除するまでは蒼緋は決して愛する妹のもとへとはいけない。

荒魂はそれを解呪するのに一役買ってくれるはずなのだ。だといいうのに今回、それは山田の精神が計画途中に壊れてしまうという形で不完全な結果に終わった。

荒魂に山田の体と心が、耐えきれなかったのだ。

「……雫」

いつになったら君に会えるのだろうか。

ぼつと音をたてると、暗い室内が一瞬にして青く染まる。

目の前に巨大な炎が現れると、いつまで待てばいいのかと蒼緋は尋ねた。

もう待てなかった。何年待ったことか、引き離されて数年の間、雫はどれだけ育ったことだろう。会いたくて堪らなかった。漸く会えると思っていたのに今回それは、失敗した。

ぎりぎりと蒼緋は肘おきを強く握りしめると細工を施されたそれが軋む音を上げる。

蒼く炎が揺らめくと、それは今度白い炎に変化する。形のないそれが蒼緋に語りかけているようにも見え、そうでないようにも見えた。

「僕は全てを手に入れるものになるんだろう？ そう君は思ったじゃないか！」

蒼緋が叫んだと同時に、ぱんと背後におかれていた空の器が音を立てて壊れ落ちる。

それを前にしても、炎は動じることはない。炎はただ悠然と彼の前に立ち、そして決して彼の問いには、答えることはなかった。

「社長、社長つたら！」

ばしばしと容赦なく肩を叩いてくる幼い声に若干イラつきつつも蒼緋は至って大人しく丁寧に言葉を返した。

「何だ、騒々しい」

「午後はPVの撮り、見に来てくれるって言ったじゃないですか！時間がきちゃいますよ！ほら、起きて起きて！」

若干面倒くさいと思いつつも、蒼緋はこれまたいたって大人しく少年についていくのだった。

とりあえず今は仕事に没頭しよう。後でまた何がしかの好機はくる。蒼緋はそう思うことで己を保とうとするのだった。

2 (零にベッドはいりませんか?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

2 (零にベッドはいりませんか?)

少しずつ消えていく記憶については鷺宮も義経も、ずっと考え続けてはいた。

いったい誰があんな仕掛けを施したのか。

「あんなの、並の人間の仕業じゃないだろ」
「血族か？」

そう尋ねられてもなんとも返せないと、鷺宮は肩をすくめてしま

う。
鷺宮の持つネットワーク、天眼の器の外部構築用データだが、これの中には今まで鷺宮が知り得た情報をためおくものがあつた。その中には六花神の能力者たちの情報も事細かに記してある。だが、その中にもこんな能力のある人物のデータは、一つも存在しないのだ。

義経は沈黙する。

「データがないなら集めればいいのかね？」

こりゃあ早速エマが役に立ちそうだと笑って告げる鷺宮に、義経は結論がでたならばもういいだろうと立ち上がると背中告げてその場を後にした。

それを見て鷺宮は鼻を鳴らすと苦笑気味にこれを送り出すのだつた。

+++

目の前で片づけられていく天蓋付きの寝台に、雫はただただあつげに取られた。

雫の手にあるのは、あろうことか宗一郎からの手紙だった。今まで宗一郎からそのような何かを直接もらったことなど一度たりとてなかった。

だからこそ驚き、そして信じられなかった。何故自分の手元にこんな手紙が届くのかと、届いてからしばらく経っても雫はその手紙をあけることが出来なかった。

けれど事態が急変したのは手紙を受け取ってから一時間後のことだった。

まだあまり私物がない千草の部屋に人が一気に雪崩れこんでいったかと思いきや、今度は雫の部屋にまでこれが入ってきたのだから驚いた。

突然の闖入者達に驚き声をあげると、「降矢宗一郎様からのご依頼でして、寝台を移動するんだそうですよ」と作業をしていた者たちがにこやかに答える始末だ。雫には全く意味が分からなかった。

ぼかんとしているうちにあれよあれよと寝台は解体されて持ち去られ、気づけば雫の部屋の寝台のあった場所には、がらんどうの空間が広がっていた。

床に残された寝台のあとのかすかなへこみを見て、それが現実であることを認識する。

「……………今日からその…………ど、どこに寝るとおっしゃるのですか、お爺様」

そしてここにきて漸く雫は手紙の存在を思いだし、これを読む決意を固めたのだった。

ペーパーナイフで開封すると、かさかさとした音を立てて中に入っている手紙を取り出す。

乾いた音を立てて手紙を広げると、そこに書かれていたことを読むにつけ、雫は気が遠くなっていくのを感じた。

「そんつ……お爺様、私に一体どうしろとおっしゃるのですか……」

そこにあつたのは許嫁候補が二人と増えたことによる平等性の確保と銘打たれたそれだった。

なんでも、許嫁としてふさわしい二人を見繕ったがいいが、やはり雫が最終的に選ぶほうが好ましいと思うとあり　勝手に見つけてきて今更なにを言うのかとも思うが、そこはそれこそ今更なのだろう。だが、雫からすればどうせならば最後まで自分で勝手に決めてくれて欲しかった。そこまでされてしまったのならばこちらも諦めもつくというのとどうしても思ってしまうではないか　寝台を雫の部屋から引き払うので、ほかの部屋で寝るようにといったものだ。

要約すれば、許嫁候補二人のところかわるがわる寝ることにより、（あくまでも寝泊まりするだけで男女間については一切触れていないが、恐らくはそうそうにどちらかと男女の関係となるがいいという意図があるのだろうと思われる）相手2人と親睦を深めてどちらか決めるといふことなのだが、雫はここまできても予想の斜め上をいった。

「ほ……他の寝台を借りよともうしましても」

借りられる寝台なんてあつただろうか、などとのたまうのだ。

これには寝台を運び出す段になったあたりから室内に慌てて駆け付けた時から一緒の二人も苦笑してしまった。

雫が呆然としてしまっている中、一人に出来ないと奏と塩見は駆け付けてきてからずつとそばに居たのだ。そして手紙を読むと言うので何があっても大丈夫だと、中を読むことを促したのも二人だっ

た。

内容はきちんと二人とも確認済みである。だからこそ思うのだが、その勘違いはどうやれば出来るのか、と。

呆然としている雫を置き去りにし、塩見に奏はぼそぼそと、小さな声で話しかける。

「これって、どう読んだって許嫁さんと、後からやってきた許嫁さん、どちらかのところで毎日ベッドを借りなさいって書いてありますよね？」

「まあ……そうとしか読めないよね」

二人にはそうとしか読めなかったが、雫にはそう読めないようだ。そもそも雫にとってみれば、許嫁候補とされた千草と健の部屋をいつたりきたりをするなどといったことは、考えもつかないことだった。

それは素晴らしい淑女教育を受けてきたからこそなのだが、宗一郎はまたしても計算違いをしたらしい。

どうせならば取り繕った言葉など廃し、そのまま直接雫に「2人のうちのどちらかと寝ろ」と 破廉恥きわまりないこの文言をいえるかどうかはこの際置いておいてだ 言えればいいものを、またも妙に取り繕ってかかれた言葉により、かかれた言葉を額面通り（？）に受け取るという暴挙 いや、勘違いをしたのだ。

雫の偏差値を疑いたくはなかったものの、決して悪くはないはずだ。ただ単に、そういった異性や性などに関してのみ、この偏差値が極端に低くなるのはもう、ある種お約束というものなのか 重苦しい息を二人は吐きだすと、雫の肩をぽんと叩いた。

「義経様に相談しましょうね、雫お嬢様」

にっこり。

「大丈夫だよ、何とかなるから」

ここに。

「え、ええ……そうだといいのですが……」

笑顔で表情を固めた二人はなでなでと、雫の頭を優しく優しく撫であげて、義経の元へ向かったのだった。

二人を見送った雫は、ちよこんとそのまま床に座りこむため息をついた。

「一体これからどうなるのでしょうか……」

それは誰にも分からなかった。

二人は義経にこれを報告すると、とりあえず宗一郎には後で色々何をするつもりなのかはこの際割愛させていただこう　するとしても、雫がまともな神経を持ち合わせていてくれた助かったと、義経は心底ほっとした様子で胸をなで下ろしたのである。涙さえ浮かべて見せていた。

宗一郎からの言明により、干草にも、そして新たに加わった条文では、健に関してもこの件では手出しするなとあるために、雫が2人の部屋に通おうと言う場合は完全に手出しが出来なくなってしまふところだったのだ。そこを雫のこの発言によりなんとか一難去ったといったところか、なんとか首の皮一枚で繋がったようだった。

あとは雫をなんとか誘導できれば　と義経は知恵を絞って考え始めた。

「誘導つてなんか……なあ？」

「ええ……」

「何よ？」

ぎろりと従者二人を睨みつけると義経は犬のように吠える真似をしてみせる。これを受けておお怖いと鷺宮は肩をすくませると、からかうように言ったものだ。

「いやな？まるでお嬢を騙すみたいな物言いだなあとな」

「……騙さないし。僕別に、雫に悪いことしようとしてないし」

「……」

「何よ？何なのさ。何か言いたいことがあるなら言えばいいじゃないか」

何となくだが言葉が続かなかった。

「何だつて言ってるだろ！？」

若干騙すようだと言われてびくついたので顔に現れた義経は、不安から従者二人をあまり力の入っていない拳でぼすぼすと打ちつけるような真似をしつつぷりぷりと怒っていた。これで案外義経も、肝が小さいのだ。

娘を騙すような真似をこれから自分はそのだよなあと、指摘されて気がついたからか、義経はそれから落ち着かず、そわそわと気もそぞろなまま晚餐を迎えたのだった。

3 (誰の部屋で君は寝るのか) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

3 (誰の部屋で君は寝るのか)

そして健が降矢邸へときたその日の晩餐の席のこと。雫がおらずと義経へと宗一郎から届いた手紙の件を切り出した。

「あの、お父様。お爺様から今日より別の部屋で寝るようにと言明がくだりました。自室はもう、寝台が片づけられてしまっていて…その…なにぶんこのようなことは初めてのことで困っております、どうか助けてくださると…嬉しいです」

誰もそんなことが何度も経験しているほうがわけもないだろうし、そもそもそんなことがしょっちゅうあるような家は嫌だ。そんな体験が何度も続くほうが稀ではないかと思っただが、雫を傷つけてもということ、全員が黙ってこれを聞いていた。

少々重苦しい空気が続いたが、これを払しょくするためにと、妙に明るい声が上がった。

別の人物に寝台を借り受けよとはまた面白いと、鷺宮は両腕を広げて雫に「隣の俺のところにくればいいだろ」と告げると、雫はこれになんと返したものと周囲を見回した。すると澤田がこれに「変態の相手はしなくとも結構ですよお嬢様」と言うので、雫はいたって素直に「わかりました」と答えた。なんとなく鷺宮の言葉を真に受けるのは、先日の一件から怖かったのだ。ストーカーがどれほど恐ろしいものか、知ったばかりでそれに追われていた人間と隣で寝るのは少々勇気がいる。

そしてそれを聞けば鷺宮は肩をがくりと落とす、ふつうに凹んだ。なんだろう嫌われちゃったっばい？と、幼い頃から可愛がっていた娘のような存在の雫にふられたことがよほど悲しかったようだ。

「なんならうちにくる？」

塩見がこちらも軽く誘うものの、雫はこれに難色を示した。普通に考えれば同じ女性として気楽にお願いできる所だ。

しかし雫が若干苦手としている兄、蒼緋の部屋と同じ階に塩見の部屋はあるため、どうしてもいつ帰ってくるかもしれない恐怖が頭の中にこびりついているため、くつろげない。

今いる階と兄弟だというのに分けられたのは、雫が緊張のあまり息すら出来ないような状況が続いたための措置だった。

塩見のほうもそれを知っているだけに、ただ言ってみただけから気にしないでいいと簡単にそれを取り下げてくれた。

とりあえずここまでで分かったのは、雫が許嫁候補2人の部屋で寝台を借り受ける話に直ぐに持つていかないことだ。

彼女の頭の中には彼ら2人の寝台を借りるという意見はないらしいと知るやいなや義経はほっと安堵の吐息を漏らす。

そして義経は唐突に鷹揚にうなづいて見せると、別の人から借りるようにと宗一郎から本当に言われたのかと尋ねた。これは確認である。

宗一郎の手紙の内容を、全ては義経も把握していないのだ。

「別の人の部屋で寝るようにとだけ書いてありますが……あの、それですね、私が考えたのは、奏の部屋には二段ベッドがあります。そうですね、奏」

「え……まあ、そうですね」

「使用人部屋のお下がりでしたよね。こちらなのですが、私、本日からそちらにうつっても宜しいでしょうか？」

奏は孤児院出身の身分であることを今も気にかけており、養父へと金を使わせることを極端に嫌っている。

そのため、今も使用人部屋から古くなったものを下げ渡してもらって、それを使用しているものが多々あった。二段ベッドはその一

つだ。

慎ましく生活している奏の部屋ならば、気心も知れている相手でもあるためいいかと思つてということだろう、にこやかに告げる雫に対し、奏ものほほんとしてじゃあそうしますかなどとのたまう。

だがしかし、奏の笑顔が凍り付くのにそう時間はいらなかった。

義経が「何OK出してるんだ貴様」とばかりにぎろりと、雫に気づかれないように奏を射殺さんばかりににらみつけてくるのだ。それを眼にした途端、奏はさつと顔色を変えて雫に猛然と言いつつ。やばい、このまま了承したら僕は死ぬと、奏は一瞬で己の命の危機を感じ取つたのだ。

「だ、だだだだためです！僕の部屋はちょっと今そのつ、改装中で！」

「……そうなのですか？……ああ、でしたら改装が終わるまでは私も簡易寝台で寝ますので、それからでしたらいいですか？」

これを耳にした義経からは更に奏へと向けられる視線が険しいものに変化した。訳すると「もう少しいまい嘘をつけるだろう貴様」である。素人さん（？）に対して無茶振りにも程がある。

ぶつかる視線の強さを肌で感じると、とうとう奏は雫へと義経の元へいけばいいだろうと叫んだ。奏も必死だ。

そもそも雫と一緒に寝るなんて羨ましい！と言つのであれば、相手の男にいらむ暇があるのであれば、自ら立候補でもなんでもすればいいと思うのに、どうして義経はそれが出来ないのだろうか。奏は大いに疑問を抱いた。

けれどそれを受けて雫はでもと若干戸惑つた声を上げる。

すると今度は義経が、この世の終わりとばかりにがくがくと全身を震わせて、今にも泣きそうになりながらいうのだ。

「もっ、もも、もしかして……べ、別の男の方がいい……の？そ……」

…そんな！うちの雫がそつ……そんな……」

父親よりも若い男を取るような子だったのかと絶望する義経に対し、雫は夜遅くまで仕事をしている義経の邪魔をしたくはないと続けた。

どうやらこちらは都合よく義経の絶望の声が聞こえていなかったらしい。ある意味面倒のなくていい親子関係である。

これを聞いた義経はそんなことはないと言う。

その答え方が物凄く必死すぎてそろそろこれを見守っていた従者達の心が痛い。主が親ばかり過ぎて軽く死にたくなってきたくらいだ。三人の限界も近いようである。

「そんな忙しくないから平気だよー！それに、いそがしくても面倒なのはほら！従者のみんながここにも三人もいるし？手伝ってくれるから平気だよ？なんも遠慮なんてしないでいいんだよ？ね？僕のところにおいてよ雫」

むつちや自分の仕事を押しつける気満々の主に対し、三人はいい加減にいさめるべきかどうか、大いに迷った。だが、ここで止めて後で面倒なことになっても困るし　と思うと何も口を挟めない。

仕方ないので「仕事の能率をもう少しあげていただければ私も賛成です」と、それと分らないよう釘をさす程度に澤田が雫と義経に言ってみた。最早なるようになれ、である。

これを助け船として義経も「ほらね、大丈夫って言ってるよ」と雫に満面の笑みを浮かべて言うのだった。

とんだ茶番じゃねえかと千草は毒づくが、何故かこの声は上がらない。奏はそれに少々懐疑的な顔を浮かべていた。

そんな奏に気づかず、雫は上目遣いでもじもじしながらも、隠しきれない笑みを押さえつつ尋ねる。

雫からすれば父親と寝るのは本当に初めての甘えられる2人きり

の時間だ。基本公人の人であるため、今まで義経にもあやこにも、雫はべつたりと甘えられたことはなかった。そのため、本当にそれが実現するならば大変嬉しいことだった。

「……いいんですか？」

「ああんもう、親子なんだから頼って頼って！」

「えっと……はい！きよ、今日からよろしくお願いいたします！」

ぺこんと勢いよく頭を下げると、雫はぱつと花咲くような笑みを浮かべて義経へと向ける笑みを深めた。

それを見守るのは従者と奏と。そして、義経により唇を縫いつけられたかのように固められた千草と健だ。

こちらはどちらも大変不本意極まりないといった顔である。

手足もきつちりと縫いつけられたように椅子から動かせない中、口もこのようにされては、いったいこれでどうやって助けを求められようか。いや、求められっこなかった。

2人は顔を見合わせて視線だけで会話した。

「あれってさ、俺たちのところで交代で寝とまりするようになってこじゃなかったのか？」

「だろうけどな。どうやら義経さんのところで寝泊まりが確定したようだ」

「……なんか、おかしい気がする。ついでにこの状況もおかしいよな気がする」

きて早々の荒々しいこの出迎えに、健は軽く心で泣いた。

どうにも宗一郎の思うとおりにはならないようである。

そして二人の思う通りにも行きそうになかった。

3 (誰の部屋で君は寝るのか) (後書き)

喋れないから文句もいえねえ

4 (この関係に名をつけるなら) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

4 (この関係に名をつけるなら)

いつそ場違いとも言える豪華な室内に自分の荷物が運びこまれている。

所在なさげに健は室内の隅っこの椅子にちよこんと座らされていた。手伝おうとしたら丁寧に断られてしまったのだ。

そうして自室が手早く整えられていくのを見れば苦笑するしかない。ああ、本当に俺は引越してきてしまったんだなあ、妙な感慨の様な物を覚える。

割り当てられたのは中庭が見える一室だ。どうやら千草の部屋が隣になつたらしい。先ほど隣室も騒々しい音が奏でられていたのでそちらにも誰か越してきたのかと尋ねて見れば使用人の一人がこう言つたのだ。

「ええ、旦那様より高遠様の部屋を移動せよとのことでしたので」「移動?」

「ええ。先日まではお孫様と同じ部屋で御座いました」

お嬢様ではなくて、お孫様が この物言いに少々の引つ掛かりを覚えるものの、健は愛想よくこの使用人と会話を続けていった。そこで分かつたことに対してちよつとばかり面白く思えなかつた物事があつたのだが、さて、どうしたものやら。

「ちよーつと、千草に聞きたいよなあ?」

栗のあの態度からして、恐らくは何も無かつたとは思えるが、千草が無理強いをしていない、とは限らない。

健は思い切つて千草の整えられたばかりの部屋を、尋ねることにしたのだつた。

ノックを二回、程なくして現れたのは不機嫌も露わな千草だ。恐らく自分も似たような顔をしているのだろうと気づくと、健は妙に笑いがこみあげてくるのを感じた。

「入れて貰える？」

「……入ればいいだろ。どうせ俺達は居候同士だ。それにそもそもがそれを俺に断る権限があるのかすら疑わしい」

皮肉なこの物言いにも健は怯まず、千草に続いて中へと入っていた。

「これ私物？」

健はこのまま寝れるサイズの長椅子を見つけると、そこに行儀悪くもどつかりと腰をおろしてごろりと横になる。

「でかくね？」

「……でかいな。ついでにそれは私物じゃない。俺がこの屋敷に持ちこめた私物は、寮にあった教科書やら参考書やらの紙媒体のものと、少しばかりあった衣服のみだ。実家においてあるような身近なものとしての荷物は何一つ運びいれられなかった。お前と違って俺は、ほとんど攫われてきたようなもんだったからな」

千草は健の目の前に置かれた一人掛けの椅子に腰をおろすと、疲れたのか目を閉じて目頭を押さえる真似をしてみせた。

「攫われた？」

「寮に宗一郎さんからの遣いってのがきてね、勝手に私物纏めて後

は”行くぞ”の言葉のみだ。途中で父さんから電話が入って無かったら通報してたぞ」

とんでもない話である。

「んじゃ何か？お前の場合は降矢宗一郎から連絡なしだったのか？」

前置きなしとは一体全体どういう見なのかとばかりに健はごろりと長椅子の上で身体を起こすと、驚きに目を見張って千草の話に食い付いた。

けれど千草は千草で訝るような眼差しとともに、健の話に興味深そうにこちらも若干食い気味に尋ねるのだ。

「……お前は宗一郎さんから連絡が入ってからきたのか？」

自分の場合とはあまりにも違った出迎え方をされた相棒に、若干居心地の悪さを感じて健は頬を軽くかいた。

「いやまあ、……そういうこと。昨日帰宅したらちよつとな……急に電話が入ったとかって言われてそんで……」

これを聞けば千草は天を仰いで呻く。どうして自分には前置きが一切無かったのかと。健にこれだけ手順を踏んだ行動が出来るのだから、自分にもそうしてくれればよかったのにどうしてなのか、いつそ問いただしたいところである。

この世の無常か、千草が差別だと嘆いていると、健がそれはもういいからと話を変えようとしてくる。こちらは千草の置かれた状況が、あまりにも不憫で話題をなんとか逸らしたかったのだ。

兎に角、健からしてみれば雫との、そしてもう一人の雫　かがりとの関係が気になった。

意を決して健は尋ねてみた。

「降矢さんとは、その……どういう、感じなんだ？」

「……どうって」

「だから、どういう感じになってるんだってことだよ」

健が食い入るように見つめてくる視線が何だか怖くて、千草は視線を俯けながら逸らすと、考え込む様な表情を浮かべて唸る。

「どういう感じって、何だ？」

千草は考え込んだ。

そもそも雫とはそれこそお世辞にも仲がいいとは言えない状況だ。反目しあうような状態である生徒会と執行部。そこにきて昨日のあれだ、あまりいい感情は持てなかった。

ただし時折二人きりである時は互いの間を漂う雰囲気は以前よりも軟化しているのは感じている。

昨日漸く触れても恐怖に引きつった顔を見なくて済むようになった、本当にこれからの関係だった。

だからこそ千草は、どういう感じと尋ねた時、どういうもこういうも、これからではあるが、分かりやすく発展した関係があるのかと言う意味なんだろうなとぼんやりと考え込んでしまったのだ。

いつまでたっても唸り声を上げ続けるだけで答えが返ってこないことに焦れて健は千草に掴みかかる勢いで跳ね起き、そのまま一人掛けの椅子まで這うようにしてはたばたと迫ると、肘かけから乗りあげ、がしがしとその肩をゆすって見せた。

「ちょっと、おいおいおいおい！！どんな関係だ！昨日は手なんて繋いで二人とも仲良くしてたし！もしかして俺、ここに住めとか言われたけど邪魔っけなんか！？なんか場違い！？場違いなわけ！？」

答えると揺するが千草は答えない。

本当に、この関係はなんとしようすねばいいのだろうか。千草にはどんなに考え込んでも分からなかったのだ。

5 (甘い口づけをあげる) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

5 (甘い口づけをあげる)

妙な関係になど、それこそなる予定が無かった健と、一体どうしてこのようなことになってしまったのか。

雫は前を行きながらも背後に大人しくついてくる健の気配を感じ、その都度重い息を吐きだす。

何故今更許嫁が候補と言った形で一人増やさねばならないのか。ようやくと千草との生活に慣れたところだったというのに、これでは不意打ちにも程がある。

階段を一段一段と雫が優雅に降りる間も、健は足音をあまりさせない、軽やかな足取りでついてくる。千草とは大違いだった。

健の身体は瘦躯と言っているほどに細身だ。だが、それでいてその筋肉は存外しなやかに何事をもこなす強靭さを兼ね備えてもいる。体育の授業でも一人大活躍時すらある、それくらいに彼は使うための筋肉を兼ね備えていると行って過言ではない。

それとはまた違うのだが、千草の場合は確かに中肉中背とまでは言わないまでも、相当こちらからも引き締まった筋肉を持つ、細身の肉体ではある。鍛えているからこそその肉体だ。これは素直に美しいと雫も感心していた。

屋敷にきてから少し経った頃だ、千草はトレーニングルームを見つけ出すと、そこで身体を鍛えてもいいとの義経から許可を得たらしく、それ以来、毎日とはいかないまでも、鍛え続けているようだった。

ある意味それしかやりようがないのかもしれない。

雫と同室であるにもかかわらず、思いも通じず、となれば過ごす時間を最小限にとどめたいと思うのも無理はなかった。

千草が肉食獣のような全体的に引き締められた肉のついた身体と称するならば、健の場合は草食獣の脚のような、無駄のない、それでいて走ることに特化した筋肉を身につけていると言えるだろう。

う。

肉食の獣と草食の獣、この二人が親友だと言うのだから不思議なものだ。

両者の筋肉の付き方をああでもないこうでもないと考えている間に、目的地についたようだった。

雫はくるりと振り返ると、ここが浴場になると案内し戻ろうとするが、健がここにきてふいにその名を呼んだことで雫の意識が消え去った。

健は雫の意思を無視するようで少し心苦しかったが、目の前で変化する彼女に笑みを浮かべた。

目を瞑った彼女は淡く光って一瞬とも言える短い時間で姿が変わる。

ふわりと眩く輝くその髪に、はにかむような笑みを浮かべてかがりは微笑む。

「たける、こんばんは」

「こんばんは、かがり」

ふいに健は気になっていたことを聞いてみた。

「なあ、どうして俺と義経さん以外には口調が冷たいんだ？何か理由があるのか？」

「そうかな？良く分からないけど」

「けど？」

更に突っ込んで聞いてこようと言う健に、かがりは僅かに居心地の悪そうな表情を浮かべるが、健は引くつもりはないようだ。それを受けてかがりは肩を窄めて背を軽く丸めると、そつと半歩引いて視線を周囲に彷徨わせる。

「二人はあのね、いいんだけど。……かか様にあんまり人は信用し
たらいけないって言われてるから、かなって……」

冷たくしようとしているわけではないのだと慌てて付け加えると、
かがりは頂垂れた。

それを聞いて健は悲しそうに瞳を揺らす。

言葉を交わす前からそうして壁を作っていたのでは、仲良くなれ
るものもなれるはずもないではないか。

そんなことを考えている間にも、かがりはしどろもどろと言ひ募
る。自分でも良くは無いと多少なりと感じていたのかもしれない。
叱られた子供の様な顔に見えた。

「危険な外に行く時は、気をつけなさいって言われてるから、だか
ら、緊張してる……かな」

「そっか……」

外と言うのはどこかは分からないものの、かがりの今までの態度
から察するに、義経と健が居てもぴりぴりと緊張した空気を漂わせ
ているのを感じるため、恐らくは屋敷内に居ても緊張は続いている
のだろうと思われた。だとすればかがりは雫の内側に居る時だけ、
内において、外に出ていくとは現実世界のことを指すのではないかと
思った。

ここに存在する瞬間は、常に恐怖をどこかしらに帯びているのか
と思うと、何だか可哀想にさえ感じる。

「そのね、狙われてるらしいって、聞いてるから……だからね、こ
めんなさい……」

かがりのこの言葉に、健は首を横に振ると、悲しそうに、だが優
しく微笑んだ。

「謝ることないよ」

ただ、少しばかり悲しいだけだから。

健は昨日言われた言葉を思い出した。

義経に「かがりもそうだが、雫もこのことが知られれば命の危険すら出てくるだろう」と言われていた。それをかがりはかか様からずっとずっと、言われ続けて育てられてきたということなのだろうか。なんだか急に物悲しくなってしまった。

しみりとしてしていると、かがりが慌てたように言い繕ってくる。

「たけるはあのね、危なくないって思ってたよ！だってね、その…
…かがりと契約出来るって、最初に会った時から分かってたから」
「……最初に？」

かがりがあの日、頭上から落ちてきた時のことを言っているのだろうか。

健の言葉にそうだと勢いよく頷くと、かがりは満面の笑みを浮かべて言う。

「うん！契約者は私を助けてくれる人だから、たけるは私のことを助けてくれる人なんでしょう？だから怖くないもの。ね？」

「……そうだな。俺はお前のことを守ろうと思う」

全力で。

そうだ、最初に出会った時からかがりを健が助けることは運命づけられていたのかもしれない。

自然に健はそう思えた。

しかしそう思えたことに少し驚いた。

客観的に見てこんなのはおかしいだろう。数回しかあったことの

ない他人を、文字通り命がけで守っていこうというのだ。

それも、ただの一介の高校生が、だ。

馬鹿げていると思う。まるでどこかの漫画か小説の世界のようだ。本気でなんの迷いなくそんなことを考えているとすれば、ただの馬鹿か、誇大妄想の激しい変態だ。

けれど健は実際に命がけになるうとも、目の前の少女を守ることになんの抵抗も感じなかった。

本当に、それが不思議なのだが、すんなりと胸の真ん中に、すんとおりてきたのだ。

盾となり鉾となり、彼女に襲いかかる全ての災厄から彼女を守る。そうするべきなんだ、俺は。

そんな想いがすとんと胸におりてきてしまったのだ。

ふわりと優しくとも、真っ直ぐな視線でかがりを見据え、健は言った。

「いつまでも守り続けるよ。お前のことを」

「うんっ」

ずっとずっと傍に居よう、この、悲しい運命を背負わせられた少女とともに。健はそう誓った。

先日のように、半ば強制的に背負わせられたものとは違い、彼女と共に歩む人生も、今ではそう悪くはないと感じていた。

+++

「そっだ、たける。そろそろご飯が欲しくない？」

「うんっ？」

とはいっても食事の時間は　と考えると、これのことだとかかりが爪で自らの手のひらを切り裂き、健の眼前に生々しくも血を滴らせる手を差し出してくるのだ。

あまりのことにぎよっとして身を引こうとしてみたが、何故か足から根が生えたかのようにしてびくりとも足が動かない。

それどころか健は、ごくりと、知らず生唾を飲み込んでさえたのだ。

そんな自分に健は思わずぞっとした。

「満月が近いから血が欲しい周期が近いはずだよ。いるでしょ？」

「……い、いや……それは」

あまり、欲しいと思いたくは無かった。

どれだけ深く傷つけたのか、かかりの手のひらからはまだ血が滴り落ちてくる。

全身が凶器のような一族だ、爪一つであも手のひらを容易く傷つけるなど、人の身では出来はしない。

いらぬ、欲しくないと思いはするが、目の前で一滴一滴と血が滴り落ちるのを見せつけられ続けると、理性がぐらぐらと揺すぶられる。

嘘だと思いたかった。

大体の場合が二週間に一度も摂取すればいいと言われていただけに、これは予想外の出来ごとだった。二週間に一度で済むはずだった。それどころかそれ以下でもいいはずだった。そう健は説明を受けていたのだ。

だと言うのにどうしてももう血がこんなにまで欲しいと思ってしまうのかと、健は己自身に内心で吐き捨てるように最低だと詰った。

体質が変化しているとは確かに義経から説明があった。

けれど昨日の今日で直ぐにも血が欲しいと思ってしまうなど、おかしい。

これでは自分は人の血を好んで飲む、吸血鬼ではないか。
まだいいよと力なく笑いながら告げる健に、かがりは若干むっつとして血を更に付きつけて言うのだ。

「何言ってるの？飲まないと死んじゃうんだよ？」

それは聞いた、聞いたけれど　昨日飲んであれだけ後悔したのだ。昨日の今日で飲む気には、どうしてもなれなかった。こればかりはどうにも気が引ける。

躊躇の気持ちが見てとれたのか、かがりは暫し考え込み、自らの手のひらにちゅっつと音をさせて唇を這わせた。

ぴちゃりと舌を這わせる音を耳にして、健の背筋にぞくりとした何かが走る。

「う、わぁ……」

このまま聞いていたら何か彼女に、よからぬことをしてしまいうで健はぱつと視線を外して視界を瞼を落として閉じてしまう。

自分で血を綺麗に片付けるつもりなのか？と、良くは分からないまでも血を目の前からなくしてくれようとしてくれているらしいかがりに、健はほつとすると、ごめんなと申し訳なさそうに言うのだが、ただし、なるべくかがりに集中しないようにしてだが。

上ずった声に自分の緊張度が知れると、半ば自嘲気味に健は笑う。相手にはそんな気が全くないと知っているのに、勝手に煽られてしまっているのかと、なんだか笑えるのか、泣けてくるのか、分からなくなってしまった。

頭を冷やそう、風呂場に沈んでさっさと頭の中をリセット……だな。

ぶつぶつと健が呟いていると、かがりはちゅるりと最後の一滴までを啜り取り終わると、漸く傷口から顔を上げて健を見た。

「……………ん」

かがりはあれしきのことと素直に諦めたわけではなかった。

突如かがりは、血を始末し終えたばかりの、べったりと血のりがついた唇のままに口づけてきた。

6 (許嫁的恋愛解体新書?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

6 (許嫁的恋愛解体新書?)

「んう……っ!!」

濃厚に漂う血の匂いに充てられてくらりとする。

驚いて少しあいた口の隙間に、かがりは口に含んでいた自分の血を一気に流し込んできたのだ。そして気がつけば口中に滑り込んできていた生温かいものを、そのまま喉の奥へと押しやっていった。

逃れようと身を擦るも無理だった、匂いにあてられた健はいつの間にかがりの唇をむさぼりだしていたのだ。

その瞬間、健は理性の籠が急速に緩む音を聞いた。

血を一滴でも多く飲み込みたいと、必死で唇を貪った。

唇から零れおちた一滴までを舌で追いかけて、唇を這わせ、大切に飲み干す。

「んっ……たける、ちゃんと飲んだ？」

「……それってばあれ?……血い、ですよー?」

「うん。そう。だって契約をしても、儀式が暫く出来ないみたいだから、血が欲しい頻度はこれから更に上がるし、下手したら飲む量が足りてないだけでもたけるは死んじゃうかもしれないんだよ?そんなの駄目なもの。だからちゃんとご飯は食べることにいいですか?」

そういえば義経からも昨日言われたが、儀式が出来ないことによる弊害、と言われていたが、何故儀式を行えないのかが健には良く分からなかった。というよりも通常二週間に一度の血の補給がまさか今回のように毎日の補給?となるのでは、弊害というレベルの話ではないではないか。学園生活は一体どうなるのか、想像するだに

恐ろしい。

後でこれは聞いてみたほうがよさそうだと、健はこの後義経を捕まえようと誓った。

まるで食わず嫌いを責められているようだと思いつつも、健は今度こそ神妙に返事を返してみせた。

「了解つすー……」

「それで宜しい。よしよし」

頭をぐりぐりと撫でまわされても嬉しいのやら悲しいのやらである。

せめて血の味のしないキスをしたいと思うのは、我がままだろうか。

「なあ、もう帰っちゃう？暫くこっちにいんのか？」

「よしつねから呼ばれてるからもう行かなくちゃ」

そしてふわりと全身を覆い始める淡い光に健は慌てて声をかける。まだ飛び立たないでくれ、話は終わっていないのだ。

「じゃあさ！義経さんのところに俺も行くから……えー、そのなんだろ。待ってて……くれる？」

この言葉にかがりは何故か目を見張るが、直ぐにこくと頷いて待っていると告げてくれた。

健は思わずガツポーズをすると、かがりの消えいく背中を見送って直ぐに浴場へと駆け足で入っていった。

衣服を脱ぐのも今は楽しい作業だ。鼻歌まで飛び出してくる自分が、健は嫌いじゃなかった。

会えることが嬉しい、話せることだけでも心が浮足立ってくる。

浴室に脚を踏み入れ洗い場に向かうと、これからのプランを練り始める。心は最早この場にはあらず、だ。

「まずは歯あ磨いて、んで……血の味のしないキス……だな。うん」

それと、順番は前後してしまつたかもしれないが、好きだ、その一言が言いたかつた。

二人きりになれる時間があればいいが　そんなことを考えながら健は湯船に浸かりにいった。

「今日、降矢さんは義経さんのところで寝るつってつけど、かがりはどうするつもりなんか」

かがりのままで居るのであれば、自分のところに来てもらえるのではないかと思ひ、そんな邪な妄想から頬が緩む。

「たった数日前にあつた女の子なんだけどなあ……どうしてこんなに気になるのか」

雫が居たからなのか、それともかがりだからなのか、それを考え……そして止めた。

「降矢さんも、かがりも、どっちも降矢さんだ。どっちも好き！それでもいいし！」

俺はやるぞ！二人の騎士になるんだと、拳を突き上げて浴槽に浸かっていた健を、急激に現実を引き戻す声があつた。

「何言つてんだお前」

「……………」

振り返ると、腰にタオルをあてた千草が健をじっと見つめていた。

「……いいお湯ですね」

「それでいいしってなんだ？堂々とした二股宣言だな」

かがりつて誰のことだとかけ湯を浴びながら言う千草に、健は慌ただしくも口を開いて非難する声を吐き出した。

「どっから聞いてたのこの人！？止めて！プライバシーの侵害だぜそれ！」

「大きな声で言ってた馬鹿が何言ってる！？プライバシーを叫ぶなら、もっと小さな声で言ってるアホが！」

「アホとか言う奴がアホ！」

高校生男子が二人、男湯で叫んでいると、隣の女湯では塩見とかがりが浴室にいた。

お陰でばつちりと先ほどの声は全て聞こえていたわけなのだが

「かがりちゃん、早めに降矢君のところに戻ろうね。入ってきたばかりでこれじゃなんなんだけど……なんかあんまりこの話は聞かせるべきじゃ無さそうな気がするんだ……」

「良く分かんないけど、早くよしつねのところに戻るの？なら早くする」

大雑把に全身を洗い早々に湯船に浸かりこんだかがりに向けて、塩見は真顔で頷きつつ言う。

「よし、いい子だ」

義経が呼んでいたのは、塩見とお風呂に入ってきてちゃんないなさい、ということだったらしく、居ないものだとばかりに思っていたかがりは、健の直ぐ横でいつの間にも戻ってきていてどっぷりと湯船に浸かり、気持ちよさそうに目を細めていたのだ。これこそ健には言わない方が良さそうなことだと思つと、塩見は可哀想だからお風呂のことは彼には言うんじゃないと念を押すと先ほど足を入れたばかりの湯船から、早々に出て行き風呂場を後にしてしまった。

慌ててかがりはその背を追うも、先ほど言われた言葉の意味が全く分からず気になるようだ。ねえねえ何でと親を困らせる子供になりきつて質問を浴びせ続けてくる。

「なんで駄目なの？歯を磨くのはいいことだつてよしつねが言つたよ？ねえなんで？」

血の味のしないのくだりは良く分からないものの、歯を磨くという部位は理解出来た様子だ。

塩見は痛む頭を放置して、かがりに注意した。

「だから、そこを聞いてたから、言つちや駄目なの！！分かつた！」

「……はい」

「よし、いい子ー！」

+++

義経の寝室に入ったのは始めてのことだ。ふかふかの寝台の端に腰を下ろすと、うずうずとしながら雫は寝台を眺めやる。それを見かねた義経が言うのだ。ダイブしたいのだろうと。

「そんなこと……」

幼い子供みたいなおことを考えていた自分の気持ちを読まれていたことを知り、顔を真っ赤にした雫は首を振る。

「別にはしたくないなんて怒らないから。僕の部屋でくらい遊んでいいんだよ。好きなだけどうぞ、トランポリンみたいにして遊んでいいよ」

こう言われてしまつては、今度は無碍に断りにくいものがある。そして結局雫は、義経の寝台で時間にして十分程度、遊ぶことになった。

ぼーんぼーんと飛び跳ねる雫を眺めている義経の表情は穏やかを通り越して、不気味なほどにでれでれとだらしなく緩んでいる。いや、むしろ顔面が歪んでいるとさえいつて差し支えないほどに、それは緩みきつていた。

でれでれとだらしない表情を浮かべる義経に、呆れたように鷺宮が言う。

「狼が二匹に増えたのにまあ、ここのお父様は呑気なもんだなあ、おい」

この言葉には流石にぴくりと義経も反応を返す。反応があつたのを確認すると、鷺宮は脇に居る澤田に続けて言った。

「少年はお嬢には無理強いせんとしても、新しい方はどうなんだ？ そっち関係の資料とかあるか？」

素行不良とまでは言わないものの、女性関係がどうなっているのか知りたいと言われれば、澤田はもう調べ上げてあると一枚の資料を提出してきた。

それは六花学園より取り寄せた、簡単な素行調査の資料に目を通しつつ澤田が告げるには、あまり良くはないですねとのことだ。一体それはどういう意味か。

「成瀬健という少年は、女子生徒より言い寄られることが相当多いようです」

「まあ、顔は悪かあねえもんな？」

顔の造作は悪くはない、むしろいいほうだ。だとすれば健は相当爛れた生活をしているのではないかと、義経が聞いているのを百も承知で好き放題うそぶいてやると、またも義経はぴくりと反応を返した。

それを見て、鷺宮は一瞬にまりと笑みを浮かべると、更に不安を煽るような言葉を紡ぐ。

「爽やか美少年！男の俺から見ても可也可愛い方になるよな、ありやあよ？つてことは、だ」

「そりやあまあ……恋愛関係は恐らく、経験豊富なのではないでしょうかね？」

こちら辺で義経の肩がびくと跳ねたのを確認すると、澤田が可哀想だと思ったのだらう、資料の報告に戻った。

「ご安心を、義経様。成瀬君は高遠君と違い、見た目とは裏腹と申しましょつか、自分から仕掛ける方では無いようですよ？ただまあ……こちらは毎回勝手に女子生徒達から本気になられ、ストーリー

行為に近いことまでされるようです。……となりますと、そうですね、手練手管が育っていなくて良かったと取ればいいんですかね？

良く取るならばそうだろうと告げる澤田に、鷺宮がそれでいいのかと突っ込んだ。

「それは……いいのか？」

「いいんじゃないですかね？ 高遠君よりも私は好感を抱きましたよ？ 成瀬君は間違っても恋愛には長けているとはこれでは言えないでしょう？」と云うことはきちんとお嬢様に向き合ってくださいですよ」

最初見た時はスマートに付き合っでは別れられる、千草と同じような少年なのかと思っていたらしいが、澤田曰く「それは素直すぎて無理なんでしょう」と言われ、鷺宮が見た目まんなんだなとこちらも意外そうに言ったものだった。

「少年がプレイボーイっぽくやってるらしいって聞いてたからなあ、親友らしいからこっちもそういう関係は同類なんかと思ってたよ」「どちらかと言うと不器用すぎて、断つても一方的に粘着されるようです。これはお嬢様にも言えることですが、彼へも警護を増やすべきかもしれません。未だ粘着している女子生徒は多いようですから……とまあ、それくらいの少年ですから、恋愛方面においては、こと信用してもいいのではないかと思われまます」

そう締めくくると、澤田はただし、と付け加えて言うのだ。

面倒になってきましたねと。

そうぼやくように言われれば、義経も確かに面倒になってきたなあとしひしと感じていた。

ちなみに、なぜ寝るだけという段階の義経の部屋に鷺宮達がいる

かかというと、雫の最低限の寝るために必要な荷物などの移動を手伝っているからだ。

ついでに駄目父まっしぐらになりそうな主をちょっとからかおうという悪戯心もある。そして見事に義経は駄目父になりそうな自分と葛藤（抵抗すら出来ていないが）していた。

一人だけでも手に余っていたと言つものにも関わらず、許嫁が二人目とはどんな冗談であろうか。これで三人目も用意されたら確実に義経は発狂するだろう。

それだけでなくとも神々からの寵愛も凄まじいと言つのに、ここにきて何の冗談か一人厄介者が増えるのだから笑えない事態が続いていると言えよう。

痛む頭を抱えつつも、目の前で可愛らしい愛娘が遊ぶ光景が可愛らしくてついつい頬が緩んでしまう。

これで男が寄り付かなかつたら本当に幸せだなあとにこにこしている、雫がぶんぶんと高く跳ね上がった先で腕を振って声をかけてくる。

「お父様ー！」

「どうかした、雫？」

「じゃーんぷー！」

言うなり雫は義経の胸へと飛び込んでくると、ごろごろと喉を鳴らしてすりよってくる猫のように、目を細めてその腕の中でまったりとし始めた。そんな雫を抱きとめた義経は、優しい笑みを浮かべてその頭をなでてやる。

「今日は甘えっ子だね？」

からかうようなニュアンスで告げて見れば、雫は「甘えっ子は嫌ですか？」と、僅かに怯えたような目を向けてきた。それを見れば

義経は、そんなことはないときぎゅつと強く抱きしめてやる。

「甘えられて凄く嬉しいよ」

雫は義経の大きな腕で抱きしめられると、なんだか不安が全て消し飛んでしまうような気がした。

7 (こうして激ニブお嬢様が出来あがったわけです) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

7 (こうして激ニブお嬢様が出来あがったわけです)

「義経様、成瀬君のことなのですが……」
「何？」

先ほどの続きを申し上げても宜しいでしょうかと告げる従者に義経は不満顔だ。雫との逢瀬を邪魔されたくはないらしい。

「早く言つてよもう」

「実は、よくよく調べてみますと……彼は告白を上手く断れないだけではないようなのです」

「……と言つと、何？」

「いや……その……」

「じれったいなあ！ぱつと言つちゃつてよ！ぱつと！」

「では簡潔に。こちらも高遠君と同じく、恋愛などは一応数をこなしているようなのです。ただしそのお付き合いにおける形は真逆と
いいますか……後腐れなく付き合い合つては別れる高遠君とは違い、
こちらは付き合つと実に甲斐甲斐しく世話をするなど、一人の女性に
尽くすタイプのようです。……が、一応は片手ではきかない程度に
お付き合いがあつたようでした……」

「……」

初心で常に追いかける側の少年かと思いきや、健も健で経験はそれなりにあると言われれば、途端に義経の目の色が変わった。
ただストーリーカーされているだけならばまだいいが、雫の他に女性
関係があつたという、ただそれだけでも義経にとってみれば大敵だ。
女慣れしているという事実、ただそれだけでも警戒に値すると義
経はとつた。

義経がわなわなと肩を震わせていると、鷺宮があっけらかんと言

い放つ。

「まあなんだ、狼だな。二匹目の。報告を前半部分だけ聞いてるだけだと、初心だからお嬢に手を出せそうにもないやつかねーなんて思ってたもんだが、なんのなんの、本気になったらかつくじつに手なんて直ぐにつけてくる感じじゃね？」

これで千草が居なければ時間をかけてゆっくりと健は雫と向き合うところだろうが、千草というライバルが直ぐ目の前に居るのだ、本気になれば雫を早く捕まえねばと動き出すはずだろうと言われる、義経は今にも卒倒してしまいそうなほどに顔色を悪くしていた。

「冗談ではない。」

「……」

「」

こ、しか聞きとれなかったために、二人はずいと義経の顔へと耳を寄せるが、次いで飛び出た言葉に鷺宮は思わず馬鹿過ぎると漏らしてしまった。

「殺そう」

「止めようっつか止めるまじで」

とてもではないが、洒落に何てならなかった。

ぎゅうと全身を強く抱きしめてくる力強い腕に困惑する。どうかしたのかと雫は義経を仰いでみるが、いっかな反応が返ってこない。おずおずと呼んで見れば漸く義経から反応が返ってきた。

「お、おとつさま……?」

「雫!」

「はっ、はい!」

けれど雫にはこの後言われた言葉が良く分からなかった。

「男は狼なんだよ!?分かる!」

「え……いえ、あの……はあ」

肩を掴んでがしがしと揺すられながらも必死で紡がれる言葉に、雫は若干引き気味である。

「成瀬んとこのは狼だから!あんの馬鹿と同じね!狼!!近づいたらいけないよ!」

「え……ええと……とりあえず必死過ぎて怖いです、お父様。落ちて着いてくださいね」

怖い、そして落ち着けと言われ、義経はしょんぼりと頂垂れると、話をどうか聞いてくださいと、父親のくせに義経は雫へとへりくだつてめそめそしながら言い募つた。こちらも雫が心配なため、必死である。

だがしかし、雫はそんなこと気にもせずと言つのだ。

「先ず第一にこれがあり得ませんが お二人が今までお付き合ひしてきた方は、大変、見目麗しいお方ばかりでした」

「雫だつてそうでしょ!」

義経はさも当たり前とばかりにこれを言うが、雫はぴしゃりと「現実を見る」と切つて捨てる。

「それは臍肩目でお父様が見ているだけです。　なので、私が相手にされるわけがありません。言っただけなんです、こんな見た目の私ですから、今までそうだった意味合いでの好意を持たれた試しが無いのです。……分かりますか、お父様。可愛いとおっしゃってくださるのは櫻子や須賀さん。そして身内である皆さんだけなのです」

それが間違いようのない現実であると告げる愛娘に、義経は唇を震わせ、首を力なく振る。

「そんなこと……」

だからそんな心配するだけ無駄だし、それどころか、そもそもが宗一郎の命がなければ二人は来なかつたであろうし、そして降矢というブランドが無ければそもそもだが自分などただの路傍の石に過ぎないのだと、若干雫に憐れんだような目で言われてしまえば、義経は悟った。

僕が悪かつた……悪かつたって分かつてるけど、これはあんまりつてもものではないですか、神様！

今まで自分達がそうした物事から極力雫を遠ざけ続けてきたからこそ、雫はこうまで危機管理が薄いのだろう。そう痛烈なまでに今まで行ってきたことを後悔するが、最早遅い。

男を意図的に周囲から遠ざけられ、そして本人も今まで忌避されて育ってきただけにそれは最早根深いものとなっているようだ。

自分など不要なものであると、そして好かれる『はずがない』のだと。雫はそうかたくなに信じている。

雫は「私は生意気としか今の今まで見て来られたことはありませんし、今までもそうだったものをどうしてこれから違つと思えるのでしょうか？異性からそのように思慕の念を抱かれるなど……そのような未来はありませんよ」と淡々と、そしてそれでいて義経

に現実を見るよとばかり言われるお陰で、義経からしてみれば散々である。雫を本当に心配して言っているというのに、これでは単なる親馬鹿扱いである。

話を通じないお陰で、義経は何ともじれたい思いをした。

雫はそんな義経に気づかずに、生温かい眼差しで続ける。

「ですから心配するだけ無駄です。そもそも二人にと言いますが、千草は私に今まで手を出そうとしてきたこともありませんでしたし」「いやあそれは……」

ありましたがあなたが気づかずにいただけですお嬢さん。

「成瀬さんは校内一の美人と付き合っていたこともあったと言っていますし、こちら私など、気にかけることもないでしょう」

比べられてしまえば、どちらかいいかなど分かりやす過ぎるほどですと言われれば、義経は何故そうまで卑屈になるのかと声を大にして言いたくなくなった。

現状で雫にもかかりにも惹かれてるように見える健を、そのままで簡単に気にかけてさえこないだろうと言いついてしまつのは、些か不憫に感じるほどだ。だがしかし、矢張り雫はそうした視線には気づかずに続けるのだ。

「兎に角、ありもしないことを騒ぎたてられても困ります。そもそも……恥ずかしいです。自意識過剰と思われて、何だか、むしろ悲しいです」

「雫……」

しんみりとした空気の中、男三人は、自らが激ニブに育てたこのご令嬢を、どうしたものかと内心頭を抱えてしまっていた。

おやすみなさいと礼儀正しく三人に挨拶すると、三人の大人が寝ても余裕のある寝台の端っこにそそと若干躊躇いつつも雫は入り、そしてあっという間に寝入ってしまったようだ。

どうやら雫が大変寝付きが宜しいようだとなると、義経ははっとして……そしてついで苦笑してしまった。

自分は愛娘の、たったそれだけのことも知らなかったことに今まで気づきもなかったのだ。

雫の幼さが目立つ愛らしい寝顔に胸がほんわかと温まる。

だが、この笑顔を守るためには、やらなければならないことは山積みなのだ。

三人は早速作戦会議を始めた。

議題は勿論、雫を今後どうするか、である。

「これは全面的に我々が悪いと思います」

「右に同じくそう思う」

「お、同じく……そう思うよ……」

馬鹿じゃねえのかコイツ（ここまででは考え過ぎであるが）と愛しの我が子より思われている事実、義経はこれ以上ないまでに打ちのめされているわけのだが、このままでいいわけがない。澤田は心を鬼にしてぐすめそと泣きの入った義経を放置 選択が間違っているように思われるがまあいいだろう して話を続けた。

「矢張り近づくと男は全て排除、これが拙かったのではないでしようか？」

元から宗一郎から近い友人を取りあげ続けられていた雫ではあるが、そこにきて更に義経やその配下の者達が、新たに恋心から近づこうとしてきた少年達を叩き伏せてきたのがまず間違いなく悪かったのだろうと言えた。

「やっぱりさ、今まで告白しようとしたら潰すってやってたわけだが……一度か二度くらいは告白くらい、経験させといたほうが良かったんじゃないかね？」

実際は雫を好いたという、たったそれだけで義経は少々この場では言えないことまでしたこともあるのだが、あえて黙っていた。そして、それをこの場では唯一知っている澤田は黙っていた。

「雫に？」

「っそ。告白を何度か受ければ嫌でも多少　ま、実際は多少どころじゃないんだがよ。この際そこは置いといてだ。……もてることが分かるってもんだろ？そりやまあな、降矢の名前に群がる虫は多いよ。けどさ、それだけじゃなく、本当にお嬢を好いてた野郎もいたわけじゃねえか。なのに……当のお嬢はそんなことすら知らないこりゃあ拙いぜ？」

「そんなこと」

分かってた。

自分が男の目にどう映るか、それを知っている女と知らない女では、雲泥の差があるのだ。

下手な男に引っ掛からないようにと、義経の部下達はこぞって雫から男というものを遠ざけ続けてきた。

彼らは全て一様に、雫を愛している。雫の知らぬところで彼女をどろどろに溺愛してきたのだ。

群がる虫の駆除は、雫が知らぬうちにそれは行われてきた。

鷺宮も澤田も塩見もそうだが、常に貼り付けておいてある部下数名も同様である。ちなみに、学園内の手の届かないところでは櫻子が自主的に排他していたのだが、これは義経達にとってみれば、いい意味での誤算が働いた結果だが、この場ではこれは割愛しよう。

自分達が大事に大事に育ててきたというのに、それこそがまさに悪かったと知れば、全員落ち込んでしまうにちがいがなかった。

三人でどんよりと落ち込んでいれば、鷺宮が暗い空気を振り払うようにしてふいにこんなことを言いだした。

「やー……でもさ、頭おかしい父親扱いか……。あれはある意味傑作だったな。痴呆が始まったみたいに取り残られたんかね。悲しいなあ、お父さん？」

ぼんと義経の肩を叩いて言われたこの言葉に、義経は最初耳が遠くなったのかと思った。言われた言葉がとんと理解出来なかったのだ。

すると今度は澤田までもが悪乗りしだした。自分達がしてしまったことの結果、いつまでもそのことを話し続けると言うこと、これに耐えられなかったのだらう。

「いえ、流石に痴呆までは考えていないんじゃないんですかね？悪くてもボケが始まったくらいではないかと」

「えー？そうかあー？」

お嬢だって流石に自分の父親がこんなじゃ拙いと思いはじめたんだと思うと続けられ、義経は真顔で二人へと告げる。

「……鷺宮君は一年くらいこれからただ働きで。澤田君は無休で一年間鷺宮君のお世話」

すると途端に手のひらを返したのは澤田である。

平にご容赦をとばかりにがばりと義経の前に平伏すのだ。

「私が間違っていました義経様！！」

それに続くのは鷺宮である。こちらもただ働きが辛いのか、必死である。

「給料なしとかマジ止めてくださいお願いします義経閣下ああ！もうなんですかあ、冗談ですよ。もう、お人が悪いんだからあ！」

だが、鷺宮がどれだけご機嫌を取ろうとしてみても、義経はただ無表情に無慈悲に、

「煩い黙れ死ね」

と言うばかりで決して受け付けようとはしなかった。

ここまで来ると本気だと分かってきたのだろう、澤田も鷺宮同様なりふり構わなくなってきたらしい。義経の足元に縋るように一生懸命に言い募った。

「後生ですから鷺宮の世話を一年なんてあまりにも辛すぎます！それも無休でだなんてそんな！惨すぎます！！こんな男と毎日一緒だなんて……一週間でも発狂するレベルです！それを一年だなんて！！」

「いやおい。それは俺に対してあまりな発言だろうよ」

思わず鷺宮が澤田へと突っ込むが、義経も澤田もそんな言葉は聞いていない。

義経は澤田に片眉だけついと跳ねあげる様にして僅かに目を見張る様にするが、それでもやはり興味は無さそうにしている。どこまでも今回は許す気が無いようだ。

「確かに辛いかもしれないよね……期間も長いしさ。でもね、僕だつてそれくらい傷ついたんだよ」

「今まさに俺が傷つけられている件について」

「ほんのジョークだったのです！ですからそのようなご無体をおっしゃらないでくださいませ！これより、より一層、粉骨砕身働きますので！どうか！どうか！！」

「えー？でもなー？僕の心は傷ついちゃったしなー」

「どうか、どうか後生ですから……ッ！！」

目の前で繰り広げられる茶番とも言える主従の会話に、鷺宮は半分呆れ、そして半分物悲しくなりつつも、胸にそつと手を当てて視線を逸らす。

「……なんだろう、手ひどく傷つけられているのは俺の心の方じゃないのか？なあ、違つっていいのか？」

誰もその声には答えてくれなかった。

8 (血に飲み込まれた者) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

8 (血に飲み込まれた者)

夜遅く、とある一室で苦しそうな呻き声が聞こえていた。

喉が焼けつくような痛みを覚えると、気がつけば喉を掻き毟っていた。

熱い、熱い、熱くて堪らない！

喉が焼ける、痛い、苦しいと健は呻く。だがこんな夜中だ、雫だと起きてはいまい。

それに　もしも起きていたとしても、雫は義経の元でぬくぬくと眠っているはずだ。起こしに行けるはずも無かった。

「喉が、渴く……喉が……」

この感覚には覚えがあった。

血を欲しているに違いない　健は自らの身体に今まさに起こっている変調を、頭のどこかで冷静に捉えていた。

先日かがりから、初めて血を分けて貰った時のことだ。血が喉の奥を滑り落ちていくのを感じれば、喉が歓喜をもってこれを出迎えたほどだった。

自分がどれだけ乾き、飢えていたのかを、健自身にまざまざと知らしめられたように思ったほどだ。

あれを思いだすと健は矢張り、かがりに言われたことは事実だったのだと思わざるを得ない。

今日、それもあの時、血をちゃんと貰っておけばよかったと、今更ながら後悔しても遅かった。

たった一口しか貰わなかったが、実際にはもっと必要だったのだらう。

シーツを掻き毟る様に、もぞもぞと力なく芋虫のように指をシー

ツの上で蠢かせると苦しさに泣いた。

「熱い……苦しい……」

息を荒くしていけば、視界すらも揺れてきたのを感じた。全身に力がもう、入らないのだ。

揺らめく視界を抱え、何とか起きあがれないかとやってみないが駄目だった。

「マジ、どうすつかなあ……俺、死ぬの？」

熱さが限界に達し始めた時、涼やかな声音が耳朵を打った。

「成瀬……さん」

「……降矢、さん？」

思わぬ闖入者に、健は束の間痛みを忘れた。

雫は頬を両手で挟み込むようにそつと押さえると、ぼんやりとしながら言葉を紡いでいく。

その言葉は、実に不可思議なものだった。

「あれ？……おかしいです。私、……お父様と寝ていたのに、どうして？」

早く帰った方がいい、と格好つけて言うべきか、それとも情けなさが事情を良く知りもしない雫の方に血を求めてみるべきか。健は迷いに迷って追い返そうかとした時だった。

健の前に雫がやってきて膝をつく、先ほどまで自分でそうして

いたように、今度は健の頬を両手でそつと挟み込むようにして掴んでくるのだ。一体何がしたいのかと、喘ぐ健はわけも分からず苦しい息の下で雫を見ていた。

「　　やっぱり足りなくなっちゃったんだね、たける」
「かが、り？」

その瞬間に一陣の風が雫をざあつと攫うようにすると、途端劇的なまでの変化が彼女に訪れた。

真っ白な髪がさらりと健の頬に流れ落ち、瞳が赤く染まっっていくのを見た。

それはそれは、美しい光景だった。

「アルビノ……」

極々普通の人がアルビノに変化する瞬間など、どこで見られると
言うのか。

可哀想にと言うと、かがりは手のひらを爪ですつと引くような真似をしてみせる。するとそこからたたりと溢れだしたのは赤い滴だ。それが細い線を描いて健の前に差し出された。

「飲んで。さあ、早く」

そこからは無我夢中で血を啜った。禁忌だと言う考えは、最早健の中には欠片も残っていない。生きるために必要なことだからだ。今の健にはそれが理解できた。もうこの甘美な血なくては自分は生きることが出来ないのだと、健は今まさに、身を持って知った。

手のひらを強く吸い、更に血をあふれさせると、今度はしとどに手のひらの中央に溢れ出てきたそれを舌で掬い取り、嚥下する。大切な宝物のようにそれをささげもつ手はしっかとそれを握りしめ、

はなさない。

気がつけば歯の根が酷く疼くのを感じた。一体それが何なのか分からないうちでも、健はその疼きに耐えきれずにかがりの血を益々強く吸い上げる。

食べたい　それが性欲的なものなのか、それとも食欲的な渴望なのか分からないが、健は突き動かす欲望に身を任せる様にして血を啜り柔らかな肉を食み続けた。

かがりは自らの爪で引き裂いた手のひらの傷が少しずつふさがってきたのを感じると、もうすぐだなと、赤く転じた瞳を揺らしつつ鋭い痛みに耐えていた。

これくらいの傷であれば普段はものともしないのだが、それを常にぐちぐちと広げられるようにして血を啜られているのだから堪らない。

早く終わらないかと待っているかがりは膝の上に置いたあいた手で拳を作り、賢明にこれに堪えているが、そろそろ辛かった。簡単に傷がふさがるとはいえ、それでも痛みがないわけではないため、きつい。

じりじりとした気持ちでいれば健が何を思ったのか、手のひらから血が出なくなったのを確認すると、今度はかがりの指を一本丁寧に口の中を含み、ゆっくりとこれを舌で転がし始めたのだ。

「やつ……め、て」

それは奇妙な感覚だった。

舌で指をただ舐められて飴をしゃぶる様に転がされているだけだと言っのに、何故か妙にくすぐったくて、気持ち悪い。

気持ち悪さにはいやいやと頭を振るも、目の色が完全に変わってしまっている健は、かがりの拒否する姿が視界にとらえられても一向に止めるつもりがないらしい。

熱に浮かされたように健はかがりの指を一本しゃぶり終わると、

今度はそれを口から出すと軽く音を立てて口づけた。それも一度、二度三度と続けられればぞくりとかがりの肩が軽く震える。背筋に走るこの痺れは一体何なのか。

「たけるっ、たけるっ！」

「……………」

無言のままに健はそのまま歯の疼きを納める方法を探すべく、かがりの身体を貪り続ける。

血が欲しい。歯の根が疼く。

「たけ、る？」

ざわり、ざわり、健の纏う気配が変わっていくのを肌でふつつつと感じ取ると、かがりは取られた腕を咄嗟に取り返そうとするが、それは熱くねっとりとしたものに阻まれた。

「いつ…………やだ」

それはゆっくりとした動作だった。

熱い唇が手の甲に押しあてられると、次にきたのはねっとりとした熱い舌の感触だ。それが手の甲をゆっくりと、腕の方に向けて這ってくるのだ。

腕を取り返そうにも背筋を這いよるそれがかがりの身体の自由を奪う。

黒いシートの上に、白金が散った。

++++

緩く結ばれていたりボンをゆっくりと焦らすような手つきで解いていくと、全身を薄紅色に染め上げたかがりと目があった。

「たけるっ、たけるっ」

その声にこたえる様にして健はかがりの掴んでいた側とは逆の手を掬い取るとその甲に接吻を落としてやる。すると、己の頬にかがりの力の入らないだらんとした手のひらを押し付けてうっとりとかがりを見やった。

「たける……」

名を呼んでも言葉さえも返ってこないことに気が狂いそうになる。

この男は、一体誰だ。

ゆっくりと顔を寄せてくる健に恐怖を感じると、かがりはぎゅっと目を閉じる。

「……ッ」

首筋に口づけられた。それも、熱くて頭の芯までとろけてしまいそうになるほどの熱を移されて。

「やだっ、やだっ！ たけるたけるたける！ たけるったら答えて！ たけるー！」

健は答えない。

目の色が変わり、そしていつの間にか生えた犬歯は獣じみた長さのそれに変化していた。

見た事も無い健の様子に、そして姿に　　そしてかがりは身動き

さえ封じられてしまったという事実にも初めてに近い恐怖を覚えた。
怖い怖い怖い怖い！誰か、助けて！！

9 (血の宿命) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

9 (血の宿命)

それは奇しくも雫と同じく、異性に対して手籠にされることに對する強い恐怖、それだった。

本来のかがりだったならば健を押しつけることなど造作もないことだった。

けれど恐怖のあまり逃げることも出来ない。

動かないのだ。体が。

それがさらに恐怖を煽った。

「やだやだやだやだっ！助けて、助けて！」

全身に力が入らなければ助けなど呼ばないのにと、屈辱すらも内心感じてはいるものの、最早それすら口に出す事も出来る余裕がない。

荒い息が、熱い唇が、触れるたびに得も言われぬ痺れをかがりに与えてくる。

それが酷く恐ろしかった。

嫌だと何度も口にし続けていたところで、色の濃い影がかがりに落とされる。あっと思った時はもう、ぼんやりとした影に飲み込まれていた。

「んっ、んんっ、んうう！」

一度二度三度、途中から数えることすら出来なくなった。

触れるだけの口付けだったのは気遣いからなのかどうなのか。そもそも健に今、そのようなことを考えられるほどの人としての理性が残っているのだろうか、そんな疑念が生じるものの、かがりもそ

んなことを考えられるほどの頭は今はないようだった。

それは熱く、そして体中が痺れて、妙に肌が粟立つような奇妙な感覚だった。

身体の芯が痺れを覚える。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

けれど不思議と逃げ出したいような感覚と同時に、このままもつと健に貪られてしまいたいという欲求があった。

これは一体何なのか。

健に食われたいと自分は思っているということなのか？

自らが大型の肉食獣に捕食される小動物になったような、そんな奇妙な思考に囚われる。

大型の捉えられ、肉を千切られ骨を砕かれる。それを待ちつけている獣など、そもそもこの世の中にいるのだろうか？と、ぼんやりと考えていればかがりははつとした。

馬鹿な……

そんな思考が脳裏をかすめた事実それそのものすら有り得ないと、先ほど自らで考えていたものを思考すらなかつたことにしようと思いを振って思考を散らす。

ちらとでもそんな言葉が脳裏を掠めた事実が許せずに、かがりは今度こそひと際大きな声で助けを求めた。

「た、助けて！たける！」

嫌だと拒否する意思を乗せた声は今度こそ健に届いたのか、健はかがりから名を呼ばれた瞬間、ぴたりとその動きを止めた。

そして先ほどまで色が変わってしまった瞳は、元の鳶色に戻っていた。その瞳の色を見た瞬間、かがりはやっと戻ってくれたとほっと息をはきだした。

正気づいたばかりなのだろうが、瞬きを二三度繰り返すと、何故目の前にかがりか居るのかといった具合に心底驚いた様子の健は軽く目を丸くしてみせていた。

「……………れ、かがり？」

「たける……………」

くしゃりと顔を歪めると、かがりは健に飛びついた。

「おわっ！」

「良かった……………良かった……………たけるっ」

「え……………何？かがり？」

「うん、うんうん！かがりだよ！」

健が別人になってしまったかと思った。

健が恐ろしくて、そして自分自身に起こったこともわけが分からなくて恐ろしくて　かがりは健に飛びつくと、ただただ先ほどまで感じていた恐怖に泣いた。

「どっか、いつちゃ駄目じゃない！たけるは……………私のものなんだから！」

喉を詰まらせ嗚咽に塗れ、それでも声を絞り出すかがりに健は困惑しながらも優しくその背を抱きしめ撫でた。

そして優しく説き伏せるように言うのだ。

「ごめん、ごめんな？もうどっかいたりしないから」

良くは分からないものの、何か悪い夢でも見たのだろうと判断した健は、苦笑しながらもかがりを必死で慰めた。本当に中身は子供だなどと考えて、必死でもうどこにも行かないで欲しいと言いつける様を見れば自分が守ってやらなければという庇護欲すらわいてくるものだ。

涙に塗れた頬を指で拭ってやるとそのまま頬に軽く口づける。その涙の塩辛さが、妙に彼女を生々しい人に見せた。雰囲気すらそこ

にないようなそんなかがりだからこそ、それが何故だか嬉しく思う。

「絶対、絶対だからね！約束なんだからね！！」

「ああ。約束する。ごめんな」

「……ばっ」

そしてまたひと際強く抱きしめられたところで健はこのまま一緒に横になって眠るくらいは許されるだろうかなどと考える。

それは決して邪な気持ちはないものの離れがたかったのだ。けれどそこに水を差すようにして声がかけられる。

「……お邪魔かな？参ったね、助けを呼ばれてきてみれば、なんだか人違いだったかなっ」

二人で抱き合っている寝台から声のする方へと振り返ってみれば、そこにいたのは鷺宮だった。

「あれ？なんで鷺宮さんがここに？」

「先ほど救難信号が届きましたね。寝てたんで後れちゃったんだがいらんお世話だったようだ」

肩を竦めてさてどうしたものかといった様子である鷺宮に健は首を傾げる思いがしたが、事情が事情だけにかがりは別のようだ。

ちよつどいいと口にすると思経と話がしたい、彼女はそう告げるのだった。

+++

何故ここに居るのか分からず困惑顔の健に、義経も鷲宮も困ったような表情を浮かべていた。

「あの……俺、もう自分の部屋で休んでいいですか？なんか、体調悪いの治ってるみたいなんで」

ついで早々初日で深夜の呼び出しなんて有難くもなんともないと言うことだろうが、健は居心地悪そうにして周囲を見回すが、三人は健を返してくれるつもりはなさそうだった。そもそもが、当事者は健でありかがりだ。片方をこれで返すことなど出来るはずもない。眠い寝かせてと告げる健にきっぱりとかがりが判決を下した。

「よくない」

「え……」

「いいわけねえだろお前。死にたいのか？」

「は？」

睡魔の訪れを一気に吹き飛ばすほどにそれは大きなインパクトを健に与えた。死ぬ？

死と言う、それはあまりにも不吉な言葉に健は耳を疑った。聞き間違いではないのだろうか。

「いや……言ってる意味がよく分からなくて……」

義経の寝室に深夜に集まっていると言うこの現状が凄まじく居心地が悪くて健はもぞもぞと腰を浮かせては逃げ出したいと思っていた。

だが、ことは健を抜きにして語れるほどに簡単なことではなかったのだ。

「まさかこんななまで強い作用が出るとは思ってもみなかったな」
心底参ったとでも言うように、義経は疲れ切った表情を浮かべると両手で顔を覆って上を見上げた。

「……………どういうことですか？」

「契約して、血を固定する儀式が必要なことはいったよな？」

それは昨日のことだ、倒れたかがり 雫に戻った彼女を連れて、健に今後のことを話したが、その時の話で最重要なものといわれ、告げられた話の中にそれはあった。

それを思いだして健は首肯すると、やや首を傾げながら、思いだすようにしてそれを口にしてみせた。

「……………ええまあ。けど、本家にはなんでしたっけ？かがりのことがバラせないからとかって……………だから儀式は当分お預けなんでしょ？」

問題は雫とかがりのことが解明出来ないという点もあるそうなのだが、実際は違う。

その全容が未だ解明されないかがりの能力に、義経達は未知数の力を感じとっていた。それはまさしく六花神が遠い過去から探し求めた力を持つ者であるかもしれない、その疑いがここにきてから突然生じてきてしまったのだ。

だからこそ、明かせない。

明かす事が出来なかった。

六花神にこのことが明らかになれば雫ともかがりとも、今生の別れになるかもしれないのだ。だからこそ義経は、慎重にならざるを得ないのだ。

それに。

きゅつと義経は唇を軽く噛みしめる。

未だに明らかにされていないものは確かに気にはなりはするが、それ以上に気になるものもまだ、山ほどあるのだ。この件に関しては。

健に全てを話すことはまだ出来ないでいる。理由は簡単だ、こんなところに突然連れてこられて、昨日の今日で全て把握しろとは流石に酷過ぎて言えないのだ。だからこそ早くにかがりに慣れて欲しい、雫に慣れて欲しいとは思っていたが、まさかこのような事態に陥るとは、正直義経でさえも予想はしていなかった。

義経が考え込んでいるのを見れば鷺宮が話しを中心に立った。

「昨日話してなかったとは思うが 俺達義経の従者達も定期的に主の血を摂取してる。言わば儀式をしても血は飲まなくちゃあならんわけだ。そこまでは理解出来るか？」

「ええつとー……結局、かがりと契約した限り俺は、血に縛られるってことでいいんですよね？」

「まあ、そういうことだな。 けど、お前さんみたいにそこまで血が欲しくなるのも頻繁じゃねえな。量もそう必要としないし……俺らは主の血を定着させてあるからな、それのお陰でそう大変でもない」

「定着……」

ここまで聞いて大体の話はぼんやりとでもいいからつかめたかと言われ、健は曖昧ではあったが、頷いて見せた。実際、良く分からないことだらけではあったが、一旦ここでは覚えて帰って後で把握するに努めるのでも構うまい。

鷺宮が続けようとする、義経が話を引き継ぐ形で健へと口を開いた。

「君はかがりの血をあいつた形で図らずも摂取したわけだが 健君。君の身体がかがりの血を求める頻度がどれくらいになってし

まうのか、俺達にも予測がつかない。なにせ、こんなのは前例が無いんだよ」

真面目腐った表情で言われれば、事の深刻さが漸く健にも分かってきたのか、段々と顔いろを変えていく健に、鷺宮も悪いとは思っていた様子で義経の言葉を繋ぐようにして続ける。

「どうなるか予想もつかん。だが分かっていることを今から言うから良く聞けよ？」

そう前置かれて告げられたのは血の契約をしたもの達にまつわる話だった。

10 (舅の婿いび……れない?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

10 (男の婿いび……れない?)

「血を得たものは身体能力を主とほぼ同様まで高めることに成功する。といつてもそれは、血を完全な形で取り込むことが出来る者のみ、限られた特権のようなものだが」

「つてことは、取りこめないとうなるんですか？」

「……死ぬな」

「……嘘」

「じゃなかつたら取りこんで血が拒絶するか血を拒絶するかした奴そのものの肉体が欠損するとかか？」

「……けっそん」

腕が血を飲んだ途端に本来ならば吹き飛んでいたと、そういうことだろうかと思ひ、健はグロいと呟くが、大人二人にそれは聞こえないらしく、そのまままるで世間話でもするような気軽さで続ける。二人の語るその話が、他人にどれだけの衝撃を与えるかなどとは露とも考えないようだ。

「血を飲みこんだ臓器が使えなくなったり、同化の始まった腕が溶け出したりだなあ。そんなもんだ」

想像通りですか、何それ笑えない。

そしてそんなもんだ、ではない。とんでもない話ではないか。

なんてものを自分は飲み込んでいたのだろうかと一瞬青ざめるが、かりはそれに特に何を思うでもなく義経と鷲宮の話に耳を傾けていたので、健もそれに倣うことにした。彼らの話を聞いてただ息を飲む、それだけでもこの場からは浮いてしまふ、それが何故だか悔しかった。

それに、そもそも今更だ。騒いだところで無意味だろう。健の中

にはもう、とつくの昔に正常な形で血は取りこまれているのだから。昨日、あの時、健は血を飲んだのだから。

「血を取り込むことに成功した宿主は、主の僕になる。ここが主従になるための『契約』だな。だからこそ、あれは血の契約と呼ばれているわけだ」

「……へえー、なるほど」

無駄に捻った名前ではないのを知ってまあそんなものかとも思った。

そしてそれと同時にそういう名付け方で良かったとも健は思った。無駄にひねくって考えられた呼称ほど、呼びにくく恥ずかしいものもないからだ。

「血の契約を施された宿主は、血を欲する時に直ぐにも血を取り込むことの出来る態勢が整っていないなければならない。じゃないと、血が摂取しなければならぬ時に出来なければ死ぬからな。元が異物を取りこんだわけなもので、そのところはどうしようもない。血を押さえつけるためには血以外にないもんでね。だからこそ定期的な摂取は止められないわけだ」

六花神の血そのものが劇薬みたいなものだからそこは諦めてくれと言われれば、本当によくぞ自分は無事だったものだといっそ呆れかえるほどだった。

実は自分が凄い存在だったらしいと知ると、妙に感心してしまう。健は自らの血の主たるかがりの様子が気になると、ちらとその顔を盗み見てみた。するとかがりとはつちり目があったのだ。と言うよりもかがりはじつと、あれから健のこゝろを見つめ続けていたようだった。そのことに気がつくどと気恥かしくて、けれどどうすればいいのか分からなくなった健は仕方なく愛想笑いを浮かべてみた。

間が持たなかつたのだ。すると何故かがりは神妙な顔つきになり、口を開いてこんな言葉を口にしてきた。

「……ごめんなさい」

「なんで謝るの？」

答えは返ってこなかった。

それが何だか悲しくて、健はかがりの手を義経達から見えないようにして隠れて取ると、力強くぎゅっと握りこむ。

「……たける？」

「大丈夫、何があっても俺は君から離れないから」

「……………うん」

握った手は、熱かった。

「だから定期的に来いってことだった……そうでしたよね？」

当初の予定では宗一郎からのこういつた横やりは予定になかったものだ。だからこそ定期的に健がここに通って来なければならぬはずだったのだ。その理由は先の理由の通り、血の摂取、ただそれだけだ。延命に必須なそれをかさず行わなければならない。ただそれだけのためにここにくることを言明されていたのだ。

「そういうことだ。主の傍に仕える契約をした時から、君達従者は主と完全な一心同体にならなければならない。病める時も、健やかなる時も　そんなわけじゃないが、麗なんかは俺に嫁ぐくらいの覚悟で来たと後から聞かされたものだ。健君もそれくらいの覚悟が

必要だ。君は今更かもしれないが、それくらいの覚悟はあるのか？」

宗一郎からの件を承諾してこの屋敷に来たと言っているのであれば尋ねることなど野暮だったかと問われれば、健は真剣な面持ちになって答える。

愛想笑いでお茶を濁したくはなかった。

「覚悟は決めてあります。だって俺、かがりのこと、守りたいから
勿論隼のことだ。彼女たちを守りたくて健はここに 降矢邸
にきた。」

昨日、血まみれだったかがりを見て健はもう、とっくに腹をくくっているのだ。

日常にはもう戻れないだろうと。彼女達のことを知らない日々、
終わりを告げるのだと。

血を飲んで決定打になったそれは、二人を守りたいと、ただそれ
だけのシンプルな願いだった。

それが叶うならばどこにでも行く。どんなことでもする。何があ
ろうと迷わない。そう決めたのだ。

健からの決意を聞けば僅かな苛立ちと、そしてそれと同時に嬉し
さをも覚えた。それは娘の父としての感情だった。

義経はこの時健に、こいつならば愛娘のことを託してもいいかと、
そう考えたのだった。

「……ならいい。それくらいの覚悟があるのなら、任せよう」

まあ、舅の嫁いびり的なことをして妨害くらいをするのは許
して貰おうとは考えてはいたが。概ね理解は示している……つもり
だった。

「まあ変なことしたら殺すけどな」

真顔で告げる義経に、鷲宮はこちらも真顔でずばり言う。

「義経、それぜんぜん認めてないよな。というか、ヤバいことするだろうこいつと疑ってかかってるよなお前」

「するんだろ！？どうせ！けどお生憎だね！絶対に邪魔してやるんだから！！」

するんだろ、と言われても困る。

健は結局、『する』とも言えず、『しない』とも口にすることは避けた。どう答えても今の場合、地雷のような気がしたのだ。

けれどももう一つの地雷がここで起動したらしい。

「よしつね、たけるに何かしたら、私はよしつねのこと嫌いになるから」

それは決して大きな声で言われたものではなかった。むしろぼそりと小さな声で言われたにも関わらず、それは三人の耳朵に重くずしりと重さまで感じるほどに鮮明に届く。

「……………つくー!!」

一体何を画策していたのやら、義経はかがりの言葉を受けて舌を噛み切らん勢いで唇を噛みしめると、今にも自害しそうなほどの表情を浮かべて天を仰ぐ。

その目は充血してかろうじて涙を流さないといった状態だ。いや、少し顔を傾げるだけで留まっている涙は頬を流れ落ちるだろう。よくよく耳をすませてみれば、父の威厳などといったことを小さく呟

いているのが聞こえた。

「血の涙だな……」

「健君……」

上を向いたままの義経は健に声をかける。

「は、はいっ!!」

「後で二人きりで話が……ある……」

血の底から這つような声音で言われ、健はぶるりと震えあがる。
ホラー映画を見ているよりも余程怖かった。

「……ご、殺さないでください」

あまりの恐怖に本音をぼろりと口にすると、かがりが義経を威嚇するようにして口を開く。

「よしつね……」

「別に違うんだからね!! 何もしないんだからね! ただ僕は説得したいだけだから、かがりが思ってるようなことはしないよ! 和平的に物事は解決すべきだと僕も思いますからね!!」

この世の中で一番物騒に見える人間が何か言っているよと鷺宮は内心思ったか思わないとか。

11 (契約者それぞれの発作) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

11 (契約者それぞれの発作)

「定期的に身体が血を欲すると、血が体内で暴れるらしい。これは俺は経験してないから分からないが　確か、鷲宮なんかは矢鱈と疼くって言うよな」

「……変態扱いされそうだからその言い方勘弁しろ」
「……え」

二人の会話を耳にした途端、嘘でしょ嫌だ私汚される！って言うよりこの二人ってまさか　ということが脳裏をよぎったかは知らないが、健は真っ先に自らの身体を庇うような真似をして見せる。すると誤解ですよそこの少年と鷲宮は慌てて付け足すように言うのだ。

「ちょっと待て！なんか誤解です誤解ですおかしいっすわあああ！疼くってのは俺の場合、俺らは主から血を取り込みやすいようにな、歯が生えるんだよ！っつか牙！お前さんも生えて来なかったか？犬歯が特によつきり生えると思うんだが……こいつが生えて疼くんだよ。だからどうしても駄目だな。疼いて疼いて酷いってよく言ってたことがあっただけだ。だから誤解をするな！」
「ああー……確かに疼きはしたかな？」

なるほどそれでかとへらへらと笑い始める健は自らの肉体が凶悪に改造されているにも関わらずにどこまでも呑気だった。ある意味肉体が血を取り込み終えて満足をしているからこそ、楽観視出来るのかもしれないが、これで先ほどまでのような状況であればどうなっていたのか、その反応を想像するだに恐ろしかった。

「麗の場合は矢鱈と俺が食べたくなくなると言ってるな」

それを耳にすればぽかんと大口を開けて健は一瞬どういう意味か考えはしたものの、そのまま聞いてみた。

「それはー……あの、性的な意味で？それとも捕食的な意味で？」

真顔で義経は答える。

「捕食的な意味で」

「……怖い！」

食べちゃいたいとうつとりと言われても、腕をへし折る勢いで力を入れられれば百年の恋も冷めるよなと遠い目をして言われれば、一体何があつたのかと健は気になった。ただし、聞けば最後の気がして聞くに聞けなかったのだが。

「澤田の場合は矢鱈とそういったことがしたくなるらしいので血をやったら逃げるようにしている。と言つても基本的にあいつはそういう自分が大嫌いらしくてね、どうにも困つた話だが、毎回自分の中の衝動を抑え込むのに苦労するらしい。だが、それがなんとかそれでおさまらなかつた時だな……時折メイドが食われて、次の日あたりにな、辞職を願ひ出てくることになるからなあ……あれだけはもうそろそろ止めて欲しいところだ」

後悔するくらいならやるなと言いたいものだがこればかりは本人の意思でどうにかなるもんじゃなから無理だろうと後頭部を掻き篦りながら言われれば、お気の毒としか言いようがなかった。

一応尋ねてみた。

「やっぱりその食べるってのは」

「性的な意味でだ」

きっぱりと言われてしまえば聞いた方が逆に居心地の悪さを味わう羽目になった。

「……………エロいな……………澤田さん」

辛うじてそれだけ口にするのと視線を逸らす。どうにも罰が悪くて顔が見れなかった。

ふいに話題を変えて義経が話を振ってきた。

「健君も血を吸った後の記憶が無いんだろう？」

「まあ……………はい」

「一時的に跳ぶならまだしも、血を吸う頻度が問題だろう。下手をすればそのまま血に囚われた獣になり下がる可能性が出てくるか…

…

「……………どういふことですか？」

獣になり下がるとは、どうにも穏やかならぬ話である。

「かがり、健君はどういう風になった？」

「え？」

突然話を振られてかがりは困惑顔だ。まだ自分が尋ねたいことに話がならなかったのか、今の今まで話の中に突っ込んでくるのが無かったと言っのに、ここにきてまさか義経から話をふられるとは思ってもみなかったようだ。

「……俺の見立てだと、その少年は疼きもそうだが、主をどつちの理由でか知らんが、食いたいとは思うようだなあ」
「俺っ」

疼きを感じたところまでは自分でも覚えていたものの、それでもかがりを食いたいなどと感じていたのかまでは分からないため、健は大いに焦った。まさか自分までそんなことを考えてしまっているだなんて、思いたくもなかったのに、そのケがあると云われれば悲しくなる。

「いや、今がどうかじゃなく、血を欲するあまりな。俺らもそうだから気にすんなよ」

「……」
「血が欲しくて、だからこそ主に傷をつける奴もいるからなあ。そこはどうとも言えないわな」

これは義経の従者がと言うわけではないらしいものの、それでも健はその言葉に慰められることは無い。

「じゃあ……俺、拙いんですか」

このままで居るのは　とは続けられなかったものの、それでもその意味は伝わったらしく、義経がその問いに答えていった。

「拙いとは言い切れない。そもそも、君が居なければかがりはどうなっていたか分からない。感謝している。有難う、健君」
「……」

有難うというその感謝の言葉にすら慰められるものはない。どうすればいいのか、それすら分からずに健は泣きたくなった。

「感謝はしている、そして君はかがりの恩人だ、そこは本当に君は誇ってもいい。分かるか？君は一人の少女を救ったんだよ」

「でも」

「いや、でもなんて必要はない。君は女の子を救うことの出来る、ヒーローなんだ。だが、それに伴う後遺症、これが問題だ」

「後遺症……」

「そう、君の身体の問題なんだ」

「たけるはどうすればいいの？」

ずっとかがりはただそれだけを聞きたくてここにきた。ようやく聞きたくて仕方なかった疑問を口にだすと、義経は真剣な眼差しでかがりを見つめる。

「どうなるか分からない。だが、健君を支えるのは主であるかがりしか出来ない」

勿論、雫もそこに含まれるが。

「血を与えて彼を生かすのはお前だよ、かがり」

「……うん」

「抱きしめてあげればいい。慈しんであげればいい。自我が消えかけた時に俺はいつもそうしている」

特に麗が涎を垂らしながら「食べちゃいたい」とうっとりとした表情を浮かべて迫ってくる時はそうしていると云われれば、かがりも決心がついたようだった。（これにより益々健は引いたがそこはこの親子の目には都合よく入らない様子だ）

「分かった！たける、今度からかがりか頑張るから！たける、もっ

「とちゃんと血は飲んでね！」

「……や、だってそんな」

自分自身でどうなるかも分からないと言うのに、かがりを害する可能性もあると言うのに、それで血をどうして摂取出来ると言うのか。

健が躊躇う様子を見せると、かがりはそんな気遣いは要らないと言うのか、ぎゅっと健の手を握りしめ、言う。

「私はたけるが死ぬのなんて嫌。だから、絶対に飲まないなんて言わせないから」

「……………」

「生きるのよ、たけるにはそうしななければならない義務がある」

「……分かった。血は飲むから、だからかがりも俺のこと、遠慮なく止めてくれ。気が付いたらお前のこと食ってたなんてそんなの……洒落にならない」

それだけは絶対に、嫌だった。

かがりと別れてから健は考えた。先ほどのことを。

血を貪っていた間の記憶が一部、欠けていた。それを自覚すれば、今度は先ほどのかがりの様子が脳裏に浮かび、参ってしまう。

そして自身がどれほどまずい状況に置かれているかを知れば、健は途方に暮れた。

「たった一日でこれとか……ねえよなあ」

明日からどう生活するか、目下の悩みはこれだった。

「血を得て俺はどうなるんだろう……」

かがりには結局教えては貰えなかったそれは、一体自分にどのような変化をもたらすのだろうか。

歯が疼いて仕方なくて、主を噛みつけるだけの獣になるのか、はたまた主を食らい尽くしたいと牙を剥くのか。

どちらにせよこれから健は注意しなければならぬことが山積みだ。

「性的な意味で食うならまだしも、噛みちぎってましたとかだったらほんつと……洒落にもなんねえし」

絶対にそれだけは避けなければと思いつつ寝台に潜り込むと、嫌なことに頭がいった。

「俺……明日から学校どうすんのよ」

まだ満月はやってきていない。けれど満月が近づくにつれ、それは強くなると思う。

「これ以上血を欲しくなる頻度が増したら俺……どうなるんだ？」

学園生活が本当に送れるのか、健は急に自信が無くなっていくのを感じた。

「降矢さん……俺……」

かがりも確かに心配ではあるが、同じ匂いを発する雫に自分は牙を剥かずにいられるのか。健は分からなくなってしまった。

何も知らない雫を巻き込めない。それは、義経からの厳命でもあ

つたが、健自身雫が何も知らないと知って血を欲しいとはどうしても言いだせそうにない。

「俺……どうすれば……」

先の見えない不安から、健はこの日、一睡もすることが出来なかった。

12 (目立つという認識は皆無です) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

12 (目立つという認識は皆無です)

健が眠れない一夜を過ごした翌日、平日であるこの日は学生組は当然のことながら学校がある。そこで雫達はちよつと迷っていた。

車内から下車しそのまま全員で……と、行けないこともないわけなのだが、全員でここで登場して悪戯に人の視線を集めても果たして本当にいいものだろうかと迷ったのは、何も雫だけではなかった。雫と　　といつても他は奏だけで千草と健は何がいけないのか、とどのつまりは理解していないようなのだが　　これを受けて呆れたように奏が口を開いて言った。

「一号さんと二号さん、ちよつと流石に昨日の今日でこれはないでしょ。つて言つてもさ、確かに休み挟んでるけども。そのまま全員でいけば注目されるだろうに……ほんとにそのこと分かつてるの？」

一号と言われたのは千草だ。そして二号が健か。

これは奏曰く、『許嫁さんが増えたので、最初からの許嫁さんは一号さんで、後からきたほうの許嫁さんを二号さんつて呼びますね』とのことだ。二人も増えてどう呼べばと迷った末らしいのだが、名前前で呼ぶと言う選択肢は彼の中には無いらしい。

健はそれを聞けば複雑そうな表情を浮かべて見せた。

「二号さんつてもる愛人て感じだな……」

と遠い目で呟いている。なんとも言えない妙な気分になったようだが、如何せん相手は奏である。健の気持ちになど構つつもりはないようだ。

千草は奏の声に馬鹿かと、たった一言で彼の意見を即座に否定すると、そんなことをしても無意味だろうと告げるのだ。

「無意味って……そうでしょうか？」

奏がむっとした様子で言うも千草は気にした風も無い。そして間違っているとは微塵も感じていないのだろうがさも当然といった様子で語るのだ。

「無意味は無意味だ。そもそも山田さん？だったか　彼女の件でも分かるように、同棲していることなんて調べようと思えば簡単に調べがつくことだ。俺が寮を出ていることも、健が家を出て引越し業者に連れられて降矢邸に入ったことも、簡単に調べがつく。違うか？」

「それは……」

確かに違わないのだが、奏の言いたいこととは根本的に千草の言いは違う気がするのだが、千草としては、元よりも衆人環視の目が光る中、登校しなければならぬのは当たり前だということのようで、否が応でもそれは慣れるべきということのようだ。

だが、その意見そのものこそが奏は受け入れられないと言っているのだが、千草は気づかない。

「他人の目なんて気にしてどうなる？大体な、言いがかりをつけてきたい奴は昨日じゃないが、いつであるうとどこであるうと、それこそどんな時だって言いがかりをつけてくるものはつけてくるんだ。それは仕方ない」

割り切りが大事だと言われれば、奏は違つたらうと声高に反論しようとするのだが、それは健の声に遮られる形で封じられてしまった。

「かもな。でもまあ、自分達から吹聴しなければいいんじゃないのか？俺ら一緒にすんでまーすなんてさ、自分からわざわざ言わなきゃいいんだし。な？それに、自分から目立つ真似をしなきゃあ、大丈夫だろ」

並んで歩いてたくらいで何かになるはずがないだろうと前置くと、なるようになるさと纏めて健は千草の腕を取って歩き始めた。千草はいいやいやながらも引かれるままに歩いているというスタンスだ。それを見れば雫と奏は顔を見合わせた。

華のある男児が二人、それも手と手を取り合って朝も早くから並んで歩くこの光景自体、実に目立つこと夥しいのだが、本人達のみそれを自覚していないようである。

それにしても

「視覚の暴力ですよね……」

「……ええ、酷いものです」

男子としてはまだ発展途上の身体付きであるためか、そうまで暑苦しくはないのだが、如何せんどちらもが学ランということもあってか、非常に見目が宜しくない。といっても、これでがたいのいい少年が二人並んでいるのよりはマシはマシなのだが、健は全員でこのように登校することが初と言うこともあってか、浮かれているようだ。千草と手(?)を繋いで並んで歩くことに違和感すら覚えないうほどに浮かれ切っているようだった。

そもそもがおかしいのだが、

「大体俺ら役職さえなきゃ目立たない一生徒だもんな。全校生徒に知られてるような降矢さんじゃあるまいに、一緒に並んでたところで行き成りどういっご関係ですか？になんてならないと思うけどな」

固まっていたところでそんなには騒ぎにならないだろうと、むしろ目立つことなんてないないと思えば、健がからからと笑いながら言うのを聞けば千草が幾分呆れたような声でこちらも言うのだ。

「お前は違うだろう。顔が随分と広いんだ、それこそそんなレベルで済むとは思えん」

単なるそこらの生徒に埋没する程度の人間でしかないと言っているのは些か謙遜が過ぎるだろうと告げる千草に懐疑的な表情を浮かべて健は首を傾げた。

「かなあ？……いやあ、そんなことないよ？フツーフツー」

「どこがだ。謙遜は止めにして」

「あー、そゆこといいですか？つつか、それを言うなら千草だって目立つだろ」

「……生徒会長だからな。ある程度は顔も売れているし知られているだろうが」

決してお前ほどではないだろうと括ろつとする千草に、健はそんなことはない、更に否定する言葉を連ねるのだった。

「そうかあ？そついうん抜きでもお前、目立つだろ」

両者はまじまじと互いを見つめ合つと、何故分からないのかと、だからこそお前は駄目なんだと内心では双方ともに考え、視線をほぼ同時に外すのだった。

それを受けて雫が奏に思わず、離れて歩きましょうと言ったとて、悪いことなどあるものか。

「知らないって、怖いですね。雫お嬢様」

「ええ。二人とも目立つ自覚がとことん無いのですね」

こくこくと頷きながら前の二人を見ている雫にお前もな、という目を奏は向けるが、雫はこれに気づかず、さてどうするかと対策を練るべく思考を凝らし始めたようだ。

雫自身、自分に付属する降矢と言うブランド、これのみが自分の価値でしかなく、自分の存在を周囲が認めるのはこれがあってこそと考えていた。だからこそ周囲に自分を認められたくて雫は必死で何でもこなし続けたのだ。

だが実際はそうではない。

その可憐な容姿もそうだが、雫に幼い頃から施された数々の授業が彼女のその動き、そして纏う空気までをも他者を圧倒し、魅了し続けるものに変容させていた。その素晴らしい所作も、その近寄りがたいほどの完ぺきなまでの潔癖さを湛えた静謐な眼差しも、降矢というブランド抜きでも雫という、いち個人を魅力的なものにしていった。

それを雫本人だけが知らない。

先ほどの話ではないが雫も

「私も一時的に奏のように名乗る姓を変えれば何とかならないものですかね」

などとのたまい始める始末だ。

一応は冗談だと言っているが、降矢の一員でさえなければこんな面倒事に巻き込まれなかったに違いないと信じ切っている顔をしている雫に、奏はどうするべきかと悩み、頭痛すら覚え始めた。

とりあえず賢明にも奏は

「僕みたいな一般人ならまだしも、二人がこれだというのはちょっと無理がありますよ……」

とだけ告げてお茶を濁す事にしたようだ。

ここで下手に雫も可愛いから目立つよなどと言おうものならば、雫は有難うと返すだろうが社交辞令だとしか受け取らないのが分かっていた、それだけに面倒は避けるべしと考えた。

美辞麗句の類の言葉を万と重ねようと、雫は決して自らの容姿が秀でたものであるとは認めないと、経験則から奏は知っていた。

「私は降矢のブランドがどれほど明確に他人に影響を与えるか、それを知っています、彼らは知らなすぎますね。どれほど顔が売れているか……彼らは知らない。知らなすぎます」

奏でさえも彼ら二人のことは知っている。

高遠千草は近年急成長した高遠エンタープライズ取締役社長の子息様で有名だ。高遠エンタープライズから始まった企業興したが、それだけでなく高遠の家は関連企業を幾つもの家にもつ成長していた。最近ではスポーツ関係や投資信託などの分野が有名だが、どちらにせよそれは最早高遠の家を、ただの一企業、一般人とは言えないものにしていた。

成瀬健も成瀬グループ企業の取締役の後継ぎ様だ。こちらは巨大なグループ企業を纏める父と祖父が居ると言うことで、全てにおいて雫と似たような環境で育ってきたと言えるだろう。

どちらも名前が売れに売れている。

そもそもそれらブランドがなくとも二人は目立つ。

目鼻立ちもそうだが、纏う空気が、その動き一つが　人の視線を奪うのだ。

「歩いていたら視線を引き寄せられるレベル」

そう称されるほどに彼らは他人を惹きつける。

それはまだ若く青い果実かもしれないが、それでも熟すればどれほどまでに他者を惹きつける存在になりうるのか、それを考えるだけで成長が待ち遠しい逸材だった。

だと言つのに本人達には全くと言っていいほどにそれらの自覚が欠如しているようだった。

「　　つてもまあ、降矢さんにくっ付いてたら嫌でも自立つかない？」
「それ以前の問題です！」

呆れを通り越して怒りすら覚えるが、雫は二人にそれ以上何もいわず、奏を連れて歩きます。どうやら二人のことはそのまま放っておくことにしたようだ。

「え？何で怒るの！？おーい！俺らも一緒に行くよ！待ってよ！
つて、千草、行くぞ」

「……別にいいだろ。ゆっくりいけばいいんだから」
「おいていかれるだろが！行くぞほら！」

慌てて健は千草の腕を引いて、雫の後を追いかけるのだった。

13 (あまりにも恥知らずな者達) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

13 (あまりにも恥知らずな者達)

「お早う降矢さん」

「お早うございます、須賀さん」

少々きこちないまでも、須賀は笑みを浮かべて見せる。先週末の一件では、目撃者になったあと、先ほどのあれは何かとは流石に聞けず、そのまま櫻子と連れだって帰ったが、知ったからにはこのことを話すべきか、それとも黙っているべきか、須賀はなるべく早くに決めなければならぬと思っていた。

何が最良の道か、それを選ぶのは自分だ。

決断を迫るのは他者ではない、自分だ。

そして選り取った答えを誰かの所為には出来ない。

そして須賀はそれを、誰かの所為にするつもりもさらさらなかった。

「あの……それ」

「はい？」

なんでしようかとにこやかな笑みを向けてくる雫の顔が、今の須賀には痛すぎた。

ふっと顔を逸らす須賀に、雫は首を傾げる。

「どうかしましたか？」

「いや、あのね？その……」

何と切りだすべきか。

そもそも、須賀は自分がどうしたいのか、それすら結論が出せていなかった。

「降矢さん、お早うございます。今日もいい天気ですね」

須賀と隼が話していると言うのに、そんなものは目に入らないとでも言うのか、割って入ってくる声があった。

それも、一人では終わらずに二人三人と集まってきたかと思えば、そろそろとダースで数えられる程度に人が集まってきた。

須賀はまだ先日的一件を生々しくも覚えていたために、あまりの馴れ馴れしさに、無遠慮さにむつとする。

「……お早うございます、皆さん」

隼はやや返事が遅れたものの、特に平素と変わらない返事を返し、頭を垂れる。

それを見れば何だか須賀は、裏切られたような気持ちになった。降矢さん、そいつらに今までいじめられてきたじゃない！！

無視をされた、足を引つ掛けて転ばせられた、突き飛ばされたなのに挨拶をお辞儀付きで丁寧に戻すなんてと、須賀は決して理不尽とは言えない怒りを感じた。

奏は生徒達が近寄ってきたので数歩後退して事の成り行きを観察しようと言うことらしく、ただただじつとこれを見つめている。

そんな奏に千草は「大事なお嬢様の隣にいようとは思わないんだな」とでも言いたげに、最低だなどでも言いたいのか、蔑んだような色をその目に湛え、そして直ぐにその目を逸らした。

そしてまだあれから休日をつたの一日しか挟んでいない状況のこの対決であるため、千草はそつと隼の脇をいつでも間に割って入れるようにと立つと、その逆側をさり気無く健が固める。

健も先日の一件に対して、思うところがあるようで、流石に放つては置けないようだ。

両脇を固める二人に周囲はこぞって質問を浴びせかけた。

矢張りテーマはこれだ「一緒に登校してきてましたけど、高遠会長は分かりますが、成瀬副会長は一体何故なんですか？」といった内容だった。

千草は首を傾げながらも「よく見ているな」とぼそりと呟き、健はといえば「やっぱり降矢さんクラスになると、その出入りすら見張られるんじゃない？」と、問われてもいないのに返して見せていた。

「自分が元凶とはお二人とも思わないわけですか」

雫は絶対にお前らの所為だろうとばかりにぎろりと二人をねめつけると、二人は「え、違う？」とばかりに顔を見合わせてしまう。

互いが互いに無自覚のようで、奏は本当になんて面倒な三人なのかと天を仰いだ。

「三人とも目立ちますもの、仕方ありませんわ」

「ねえ、どうして成瀬副会長と一緒に登校なさってきたのかしら？教えてくださらない、降矢さん」

この、媚びの色が透けて見える言葉づかいに、須賀は反吐が出ると内心吐き捨てた。

雫に媚びて、先日の一仕事をまるで無かったことにしようと言うのか、皆、何事もなかったかのように振る舞ってくる。

その事実が須賀には到底許せなかった。

山田は入院したと聞いた。それは義経からだった。

程なくこれは学園全体に事実として噂が流れるだろう。

山田ジュリは降矢雫と言い合いをして、警察沙汰になり、そして気が触れてしまったのだと。愚か者の末路として語られるのだろう。確かにそれは事実であり、けれど、それと同時に真実を伝えてはいなかった。

ただしそれは、須賀には今後、永久的に知らされないことだ。

そして須賀は、知ってしまった事実をどう言おうか、言うまいかと休日の僅かな間に考え続けていた。

正直な話し、須賀自身、知らないと言達か思っているだろうことに、別に構わないとさえ思っていた。

話したければ話してくればいいし、自分を守ろうと、助けようとしてくれた言達には、須賀は感謝こそすれ、怒りなど覚えられようはずもないのだから。

山田が先日あのような形でいなくなってしまったお陰なのか、他の生徒達はやれ嬉しやとばかりに、全ての罪を いじめという、陰湿な嫌がらせを、山田だけがしていたことにしてしまおうとでもいうのか、全てのその罪を押し付けて生徒達はしらんふりして話を進めようとしてくるのだ。

さも何も無かったかのように。
あまりにもこの厚顔過ぎる振る舞いに、須賀はぶちきれ寸前だった。

山田に確かに先導されたかもしれない。だがしかし、それに乗っていたのは誰だったのか。

そして誰が面白づくで言を、須賀を 他の執行部の面々を攻撃したと言うのか。

これではあまりにも酷過ぎる。そのやり様もその厚顔さも、全てをひっくり返して、破廉恥極まりないとしか言いようが無かった。

流石にこれを受けて千草も健もこの連中に呆れたものだ。

だが、奏はと言つと、ただただ静観するばかりで何を考えているか分からない。

これまたその態度が須賀は気にいらず、思わず奏に跳びかかってしまおうかとも思ったが、それどころかとんでもないことに、とうの本人である言の表情は、山田と共にいじめに率先して加わっていた生徒達のそんな態度に怒りを感じるどころか、むしろどうでもいいという顔をしているのだ。

何も感じていなかったわけはないだろうに。

いじめられて辛いとも零せず、心で確実に泣いていたはずなのだ。
雫は。

だと言うのに。。。
雫がまるで生徒達のあまりな手のひら返しに流されるようになってお陰か、生徒達は一気に凶に乗り始めてしまう始末だった。

「そういえば先日の執行部と生徒会のことですけど、和解なさったんですってね？矢張り許嫁同士ですもの、仲互いをしたままではいけませんわ。これから夫婦になるお二人ですもの、仲良くなさらないと」

「本当にお似合いです事。羨ましいですわ」

おべっかか……

須賀はふつふつと感じていた怒りを、この時一気に爆発させた。
涙すら滲んできた。

こんなの雫じゃないと、須賀は短い付き合いの中で、雫の気高さはこんなものではないはずだと、怒りをあらわにとつとつ叫んだ。

「降矢さん、なんで怒らないわけ！？おかしいよ！だってこいつら……こいつら……今まで何されたか忘れたわけじゃないんですよ！
？ねえ、おかしいよ降矢さん！」

目の端に光るものを湛えて訴える須賀に、雫は首を傾げて疑問の言葉を口にする。

「別に……怒る意味がわかりませんか？」

それを受けて須賀は愕然とした。

怒りを感じていたのは、須賀だけだったと言うのか。

一緒におかしいと、理不尽さに、やるせなさに、泣いてはいなかったか？

確かに雫は泣いてはいなかった。彼女は常に強くあった。

だが、それは表面だったのことであり、内心では酷く傷ついていたと須賀はそう信じていた。

それは本当に、信じていた『だけ』に過ぎなかったと言っのか。裏切られたと、須賀は感じた。

「だって……何されたのこいつらに！酷いことされたじゃん！」

思っだして、降矢さん。そう須賀はなおも言い募る。

けれど、雫は矢張り強い感情を見せず、またも首を傾げるだけだった。

「そうですか？」

14 (許すわけもないだろう) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

14 (許すわけもないだろう)

雫の言葉に須賀は唾然とした。

雫からしてみれば相手がこのような嫌がらせをしてくることはほぼ当たり前のことの感覚だった。

嫌がらせをしてくる人間のほうがデフォルトであり、むしろ須賀などのキャラクター性を持った人間こそが、イレギュラーなのだ。

不思議そうに、私のために泣いてくれるのですかと問うと、雫は須賀の前に立ち、その頬の涙を拭って見せた。その際、ぼろりと瞼の淵から涙が零れおちた。その様が何故だか妙に、彼女を憐げに見せて、雫の胸が僅かに痛む。

須賀の声に対し、雫の受け答えのドライさを見て、生徒達は一樣ににやにやとした嫌らしい笑みを浮かべて見せる。それが嫌で嫌で堪らなくて、須賀は自分が惨めに思えてきた。

私、馬鹿みたい……一人で泣いて、怒って……馬鹿だ……

雫は無言で須賀の腕を取ると、そのまま生徒達の前に身体ごと向くと、須賀への答えを示しだす。

本当はもっともつと油断をさせておいてから叩き落とすプランではあったが、予定変更である。

雫は脇にある須賀の顔を見上げると、

「私がいつ、忘れたと言いましたか？ふふ、須賀さんは早とちりにも程がありますよ？別に私はああして『されたこと』を忘れたわけではありませんよ。それに、私が忘れる必要ありませんし……？」

ちらりと周りの人々を見渡して雫は微笑んだ。

最初十名程度だった雫達を取り囲んでいた生徒は、この時にはも

う、数十人へと膨れ上がっていたわけなのだが、一様にその顔色はさっと、瞬時に色を失くしていくのは、見ていて圧巻だった。

「大体どうして忘れてさしあげるなどしなくてはならないのでしょうか？ そんなこと、勿体無くて出来ませんよね？」

瞬間、周囲の人々は固まった。

勿体無いとは皮肉なのかそれとも　と考え、千草に健までもがぞっとしたのか、その表情はやや引きつって見えた。

「ただ、わざわざそのことで自ら行動を起こす必要はないと思っ
ています。……まあ、それも今は、ですけれど」

この思わせぶりの言葉の次に、雫は更にこう付け加えた。

「そもそも自分のやったことを相手に謝罪すらせずに都合よく相手に忘れて貰えると思っ
ているような方々と話す言葉すら、私はもちえないだけです。ご心配なく、須賀さん。私は決して貴女の思っ
ているようなことを考えていたわけではありませんよ？」

須賀はこの、予想外の雫の言葉にびっくりして言葉もでない様子で固まってしまった。

それは千草や健も同様のようだ。

ただ、奏だけはこれを遠い目で見ており、そつと雫からその視線を外して溜息を吐きだした。

そつ、雫が大人しく何も言わない、他者の意のままに操れる単なるお飾りの令嬢かと言ったら、それは大間違いなのだ。

幼い頃から屋敷の本当に一部の人間以外には、その存在すら認識されないような子供には本当に過酷な環境を生き抜いてきたのだ。

ただただこれで大人しいだけで生きてこれるはずもない。

雫の内面には、驚くほどの強靱な精神が基礎となつて眠っているのだ。

その上には、いざとなつたら言葉でも、他人などなますに切つて捨てられるほどの鋭い刃を武装して持っている。

ただし、それが表にでたことなど数えるほどもないが。

それを知っているのも極極少数である。

必要が無ければ雫は、そんなものを無暗矢鱈と振りまわすような人間ではないからだ。

降矢の名を持つ者がそれをすれば、たちまちどうなるか、知っているだけに賢明な雫はそうはしてこなかったのだ。

ただ、それだけのことだった。

長い付き合いから雫の内面を少なからず知っている奏をちらりと見ればこちらは当然といった顔をしている。

むしろ学生達に気の毒そうな眼を向ける始末だ。

切り捨てられて当然のことを六花学園の者たちは雫にしたのだ。

これは当然の報이었다。

雫達は全員そのまま、生徒達を置き去りにして歩き始めた。

須賀の手を引きながら、若干でもすつとしたかと思ひ、いいやそうでもないかと思ひなおした。

せめて須賀の気が多少なりと晴ればいいと思ひあえて口にしたことだったが、これで良かったのか、とも思ふ。

放置しておいても良かったものをわざわざ思い切りこちらから手袋を投げつけ、果たしあいをししかけるような真似をしなくとも

と思ひ、いやと思ひなおした。

誰の心を守らなければならぬかを考え、雫は友人の心、そして気持ち優先するほうを選んだ。

必要なのは須賀であり、あの生徒達の矜持やら親などへの体面で

はない。降矢に睨まれたということと彼らがどうなるうとも、雫には関係のないことだ。

ふいに雫は思いだしたように千草にじろりと責めるような目つきで睨みつけると言った。

「そういえば、あの経費、早く落としてくださいませんか？こちら落としていただかなければ仕事が進まないので我々執行部としても困ってしまうのですが」

「いやちよつと待ってよ降矢さん！こつちだつて今慌ただしいのに」「そんなこと知ったこつちやないよね、雫お嬢様？」

「そうですね。知ったことではありません。そちらは去年に比べ、仕事が減っているはずでしょう？なのにそう遅くては……」

「……善処する」

だからあまりそう責めてやってくれるなと健を庇うように口にする千草に、お前がしょつちゆうティーブレイクするから進まねえんだろつが！と健がブチ切れた。そもそも先ほど千草を庇ったのは健である。その健に向けて言うにはあまりに酷い言葉だった。

流石に自分だけの所為のように言われるのは、温厚な健とは言え我慢ならなかったようだ。

そんなやり取りを目の前で繰り広げられ、須賀はそこにきて漸く笑顔を見せると、ふつと何かに気づいたように、きよるきよると周囲を見回して首を傾げている。

どうかしたのかと雫が尋ねるが、聞こえているのかいないのか、須賀はこんな言葉を口にした。

「　　そういえば、綾小路さん、今日遅いね？」

　　櫻子はその日、珍しくも休んだ。

例え櫻子が一人抜けようとも、仕事は待つてはくれない。

六花祭までもう猶予もないため、執行部も、そして生徒会も慌ただしく仕事をこなさなくてはならなかった。

生徒会室と執行部部室を何度も何度も往復するのは雫達執行部の面々だ。どの顔も、忙しいとその顔に書いてあるため、どんなに生徒会の千草と健以外の面々が嫌がろうとも、文句は言えなかった。たとえ口にしたとしても、聞いて貰えはしないのだろうが。

文句を言うのであれば、生徒会側の仕事をさっさと終わらせてから文句を言え、そう言われかねないほどに、生徒会の仕事がたまっているからの往復であると、流石に生徒会の面々でさえも気が付いていたから何を言うことも出来なかったのだ。

だがしかし、それとこれとは話は別で 部外者がしょっちゅうどころか忙しなく行ききするのが当たり前だが面白いと言えるはずもなく、大いに気分を害していますと顔に張り付けたままに生徒会のメンバーは本日の仕事をこなしていた。

15 (血に囚われた獣) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

15 (血に囚われた獣)

「雫お嬢様、僕これ、教授棟の方にもっていきますね」

「あ、理事長室にこれも持って行っていただけますか？」

「分かりました」

「ちよつと待て、理事長室の方面に行くならそれは半分持つ。俺もそっちに用事があるんだ」

手元の書類が半分以上ごっそりと消えて唐突に軽くなったのを見て奏は目をぱちくりと瞬いて見せた。

「うわあ、一号さん、助かります〜」

流石力持ちですなうわあいとはしゃぐ奏に良かったですな奏と雫はにこにここと笑みを向けている。それを見て、何だか無性に腹が立った千草は奏にがなりつけた。

「だから、それを止めると言ってるだろうが！」

奏と千草はぎゃいぎゃいと、ほぼ一方的に千草が喚きつつ生徒会室を出て行った。

それを見送る雫と須賀も、この後は執行部部室での仕事だからとはけてしまい、残ったのは生徒会のメンバーだけだ。

健は急に静かになったなあと思いつながら端末に入力をこなしていくと、ふいに昨夜と同じか、それ以上のものを感じて思わず心臓を押さえた。

どくん、思い切り心臓が跳ねる音がするのを感じ、健は呻く。

「う、あ」

「成瀬君？どうか……したの？」

「いや……なんでも……」

ない、とは口にすることは出来なかった。
唇に何かが刺さったのだ。

「いてっ……」

健の口端が、何かに歪められていた。

「歯、が……うっそだろ？」

犬歯がによつきりと伸びている。では先ほどの心臓の痛みは、空腹に耐えかねた身体が発した危険信号だとも言うのか。

健はぞつとするのと同時に、先ほどまでは感じなかった強烈な渴きに喉がごくりと鳴るのを感じ、恐慌状態に陥った。

『飲まなければ死ぬ』

『月の満ち欠け』

『疼きが止まらなくなる』

昨夜聞いた言葉が頭の中に何度も何度も響く。

ぐんぐんと身体の中で巨大に膨れ上がっていくばかりの渴きに疼き、これを覚え健は自身に対する恐怖が押さえられなくなってしまった。

「いや、だ……いやだあああ！」

「な、成瀬君!？」

心配そうに健の顔を覗き込んでいた女子生徒の身体を突き飛ばし、健は生徒会室を飛び出した。

そして向かうは目の前の扉 執行部部室である。
健は雫に会わなくてはならない、雫に いや、かがりに。
ばんと扉を押しつけるように荒々しく開け放つと、健は喉を押さ
えて眩む視界で周囲を探る。

「か、かがり……降矢さ……」

ぜえはあと荒い息の中で見つけた姿はもう、霞みがかかり良く見え
ない。

「かがり……かがり、かがりかがりかがり！」
「……………」

尋常でない様子の健が入室してきたことで、こちらも酷く驚いた
様子だ。

恐怖からなのか、それとも驚き故なのか……背後にじりじりと後
ずさり、声すら出せずにいる。

血、血が欲しい。早く。

猛烈な渴きから健は目の前の『食糧』にぬつと腕を伸ばし、無造
作に床に押し倒した。

『食料』のことになど、構っていられる余裕などなかった。

健からすればことさらゆっくり時が過ぎているように思えたかも
しれないが、実際は目にもとまらぬ速さだった。

いつの間にか引き倒されていたのだ。

そして、首に牙が突き立っていた。

いつ歯を立てたのか、いつ引き倒され押し倒されてしまったのか、
分からなかった。

痛い、と思うことすら出来なかった。

「……………はっ、……………っ……………いっ」

声も出せない。凄まじいほどの恐怖だった。

助けを呼ぶことなど、頭の中から吹き飛んでしまっていた。

一体何が起きたかも分からずに、ただただ自らに起こった出来事についていけずに頭が真っ白になってしまっているのだ。

息が出来ない、咳をしたいのに吐き出す事が出来ないのだ。

ここにきて漸く頭が巡ってきたのか、助けを求めなければと思っ
た。

だがしかし、どうすればいいというのか。相手はぎらついた目を
持つ狂人だ。そして知り合いでもある。どうすればいいのかわから
なかったのだ。

痛みに耐え、真っ白になった頭でごろりと力なく横たわっていれ
ば、鼻歌でも歌いそうなご機嫌仕様の”雫”が扉を開けて入ってき
た。

「ただいま戻りました……た……」

健が食らいついて放さなかったのは、須賀だった。

ぞろりと目玉を動かして、須賀の首に歯を突き立てていた獣が雫
の姿を目にとめた途端、のっそりと緩慢な動作で動き始めた。

須賀の血を口に含み、違うことに気がついたのだらう。獣は、まず
いと一言言つと、ぺつと音をさせて床に血を吐きだした。

人語を解するだけまだましなのかと思えるほどに、それは異様な
色彩を放っていた。

髪も目も、健は鷲色の明るい色彩を持つ少年だ。

それが今や異質なまでの変容を遂げていたのだ。

瞳はぬらりと光る金で、肉食の獣を彷彿とさせる色あいだ。そこ
に髪も更に鷲色の色が抜けて、派手な、と言ってしまうほどに明

るい色彩を放つのだ。

肌の色合いも健康的な色をしていたと言うのに今は何故か病的なまでに色が抜け落ちてしまっている。

まるでそれは、漂白したかのような姿だった。

床に膝立ちになると、ゆらりと身体を傾がせながら獣はすつくと立ちあがる。

ふいに突き刺さっていた歯が抜き去られたからだろうか、須賀は栓をしていたものが抜けたところからぴゅーっと、放物線を描いて血が溢れてくるのを他人事のようにぼんやりと見つめ　一気に視界がクリアになった。

鮮やかな血が視界に入ったことで我に返ったのか、身も世も無い声を上げて首を押さえて怯えた目を健に向けた。

それはまるで、化け物でも見たような目をしていて。

「い……あ……や……やだあ……」

僅かでも離れようと床を蹴って逃げようとする須賀の姿は、まるで溺れかけの犬のようだ。無様に水面をもがき、暴れているように、床の上を力なく足を蹴っているのが哀れと映る。

「どっ……」

何がどうなっているのか分からなかった。

顔の造作を見れば一目でそれが健と分かる。倒れているのが須賀と言うことも分かる。

けれど、何故健が須賀の首に食らいつき血を流させているのか、全く分からなかった。

そしてその見た目だ。わけの分からないことだらけだった。

「こ、れは……そんな……」

「いや……ああ……」

混乱した頭を揺さぶったのは須賀の悲痛で弱弱い声だ。雫はそれを耳にした途端、咄嗟に守らなければならぬと須賀をかばい健との間に入った。硬直している場合ではない。

「どうしたのですか、須賀さん！成瀬さんも！」

健に注意を払いつつ、雫は須賀に手を伸ばす。がくがくと震えている須賀をよくよく見れば、出血が止まらないようだ。

なんてことでしょう……

きつと雫は健を睨みつけた。

その途端のことだ、健は漸く瞳を揺らし、人の色を取り戻した。といつても、その目に獣のような思考能力の欠如が見られなくなった、と言うだけなのだが。

健は苦しそうに胸を押さえると、頼りなく瞳を揺らし雫を見つめると、はつと途端に目を見張り怯えたように言い募る。それはまるで、今まさに自分のしたことに気がついたかのような仕草に見えた。

「ふ……るやさん……俺……ごめん。俺……なんてことを……！」

苦しそうに体を折り曲げその場に蹲る健に、けれど雫は血を流す須賀とを交互に見て、須賀のほうに今は早くどうにかせねばと、須賀の上から覆いかぶさるようにしてその傷口を強く圧迫した。

意識を保っているのかいないのか、雫はその血の気の失せた頬を叩き、声をかける。

「須賀さんっ！須賀さん大丈夫ですかっ！」

「降矢さ……わ……私、な……なにがなんっ……血、血が……助け……て」

自らも片手で出血を抑えようとする須賀は、空いた手で雫へと纏るようにその細い腕をつかむが、そんな須賀に、雫はどうしたらいいのかと混乱する。

「須賀さん！」

早く鷺宮を呼ばなければと、雫は声を張り上げた。鷺宮さん早く来てと、たったそれだけで彼はここへと駆け付けてくれるだろう。

だが、鷺宮が駆け付けるよりも早く、それは雫へと忍び寄ってきた。

そのとき背後に迫る気配に雫は全く気がつかなかった。

これがかかりであればまた違ったのだろうが、雫では気配を悟る術に長けていないため、忍び寄る気配に気づくことは不可能だった。

16 (辛い夢を見ぬように、君に一つの魔法をかけた) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

16 (辛い夢を見ぬように、君に一つの魔法をかけた)

それにいち早く気がついたのは須賀だ。彼女がひつと悲鳴をあげると、その声に雫が反射的に振り返えろうとした瞬間、首筋に焼けるような痛みを感じた。

「つつつ!!あ……なっ、るせつ……さっ!？」

健は雫の首筋に噛みつきながらその小さな体を強く抱きしめるように両手を絡めた。

昨日までは存在しなかった、肉食の獣のように獲物をただ傷つけ、捕食するためだけに長く延びた犬歯で、そのほっそりとした首に傷をつけると、傷口から溢れだしてきた新鮮な獲物の血を思う様吸い出していく。

ずちゅるるる、ずるるる、自らの血を啜られる音が、あまりにも生々しくて雫はたったそれだけのことで脳が真っ白になった。恐ろしいほどの飢餓からの解放と共に、甘い蜜のような血を口いっぱい満たしていくと、その甘露に健は酔っていく。

腕の中の雫の抵抗が、全くなかったことにも気がつかないようだ。

熱い吐息が首に吐き出されるたびに、雫は妙なくすぐったさと恥ずかしさを感じるが、それよりも強く感じるのは痛みと熱が急激に消え失せる喪失感だろう。

「なる、せ……え……あ………うっ………」

指先すら自らの意志で動かせなくなるのを感じると、雫は全身を強く抱きしめてくる男の腕に嫌悪の念すら抱けなくなる。

全身を軋むほどに強く抱きしめられ、ゼ口距離で熱い吐息を浴び

ているというのに羞恥に嫌悪すら最早持つことが出来ないのだ。

「い……や……」

怯えながら後ずさる須賀に、雫は必死に首を動かし早く逃げろとせめて言いたかった。けれど、それすら健は許そうとはしないようだ。

雫が余所見を出来ないように雫の顎を捉え、あろうことが

「俺だけを見て」

と、口にして、雫の唇に何度も何度も触れるだけの口づけを落とし始めた。

異常なまでの独占欲を雫にぶつけてくるも、雫は何故と瞳を揺らし困惑するばかりだ。

そもそも健にそうまで独占欲をぶつけられる理由が雫には思い当たらない。

まるで他のことに意識がいかないようにと意識を引きつけるために、優しく触れて自分だけを見つめる様にと促してくる。

口づけを落とされるたびにそこから漂う濃厚な血の臭いにむせかえるようだった。

口づけも驚いたが血の味に臭いと、あまりにもきついそれに、意識を急激に引き戻されていく。

これほど血の味を、臭いを、身近に感じたことはない。いつぞ嫌悪すら感じる。

けれど雫には、抵抗する手立てが今、何もない。

血が足りない、動けない……思考すら……出来ない……

薄れる意識に雫は焦る。拳を何とか作ることは出来たが、健を殴つても意識を取り戻させたいと願うものの、腕はあげられそうになかった。

このままでは　　と思ったその時のことだ。
ドガッ

意識を手放そうとしていたその時、激しい打撲音とともに全身に振動が伝わると、手放しかけていた意識が一気に戻ってきた。

「っ…………なに、が？」

「悪い、お嬢」

「鷺宮さん!？」

ずるりと雫の上に健が気を失い倒れ込んできたのを見て、どうやら当座の危機はさったことを知ると、雫はふらつく頭を抱え力なく笑って見せた。

「遅いです…………鷺宮さん」

「いやもう、ほんつとごめんな」

+++

「…………済みません」

「もう！なんで外出なんてしてるのさ！お陰で雫が大変な目に会ったじゃないか！」

「面目ない…………」

今日の見張りはどうやら鷺宮と、他の雫の会ったことのない従者だったようだ。

だがしかし、鷺宮は遅い昼食をその時とっていたらしく　更にはその従者も何やら別の不測の事態が出来たと言うことで、席を外していたようだ。

もう少しで雫は限界量を越えて血を吸われていただろうことを考えると、義経はぞっとした。

あと少しでも遅ければ、雫は緊急搬送とされていたかもしれないのだ。

この場で力なくではあるが、笑っていてくれる雫に義経は感謝しきりだった。その顔が見れるだけで嬉しかった。

「自分だって血の反動が強いんだから、分かるでしょ！？成瀬んとこの子がヤバいことくらい、分かってたじゃないか！なのにどうして目を離したの！」

「……すまん、それはその……俺の落ち度だ」

義経は情報漏えいの時ほど本気では怒っていないようだが、それでも鷺宮は激しく落ち込んでいた。

雫を守れなかったことにも腹が立ったが、それよりも何よりも、須賀のことだ。

須賀は今現在、応急処置を施して降矢医療センターへと緊急搬送をされているのだ。ひと月の間に二度もの怪我、それも重傷レベルのものである。それを余所様のお嬢さんに負わせるなどと酷く落ち込み胸が痛んだ。

「まあ……須賀さんのことは仕方ないよ。後で記憶操作はしとくから、だから次は無ないように」

「やつ！それはちょっと拙くないか？」

「何故ですか？」

雫は鉄剤を飲み若干顔色が良くなった顔で鷺宮へと尋ねる。義経も同様の疑問が頭をよぎったのか、こちらも鷺宮へと問うような眼差しを向けてくる。

「だからさ、俺らはまだ、やったことがないだろ？一般人を吸血とか。けど……お嬢ちゃん是一般人だ。今後何か出たら……どうするつもりだよ。記憶を失っていたら、それこそ何一つ自分の身体の変化に気が付けないんだぞ？それじゃあ困るだろうが」

「けど……」

須賀にとってみれば、先ほどのあれは恐ろしい記憶だ。これを抱えたままでもた日常生活に戻るのかと思うと、無理があった。

いや駄目だと口にする義経に、雫も須賀に無理はさせられないと強く言う。

「……じゃあさ、身体に妙な違和感が感じられたら記憶が戻る様に細工をしてくれないか？身体に妙な違和感を覚えたり、妙な感覚になり始めたりしたら……そうだな、お嬢か義経んとこにいかなくちゃならないと思いきむ様な……暗示か。そんなものをかけておいてやれよ。じゃないと……何か起こって一人で対処の仕方分かんず、あの子は泣くことになる」

そんなの可哀想だろうかと、自らの落ち度の所為でそうなってしまったらと、鷺宮は悔しげに唇を噛み締めつつ、絞り出すように口にした。

「暗示……お父様、そのようなこと可能なのでしょうか？記憶を封じつつ、何か身体に変化が出たら知らせる様に暗示をかけるなど……」

雫は義経を仰ぎみて尋ねると、難しくはあるまいかと口ではそういうものの、目はしっかりと出来たら嬉しいのだが、と語っていた。それを受けて義経は弱った。出来ないとは、言いたくなかったのだ。

「最善は尽くしてみるよ。暗示は一応……前にもやったことがあるしね」

雫に、だが。

そんなことを知らない雫は嬉しそうに微笑みを浮かべて有難うございますと返す。

鷺宮は、目の前の親子から、視線を外してぼつりと、「悪い」と呟いた。

その声は、義経だけの耳に届いた。

義経は、何も言わなかった。

17 (ムードは大切なんだぞ?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

17 (ムードは大切なんだぞ?)

何となく落ち込んで見えた雫の頭をぽんぽんと叩くと、瑞名瀬が大丈夫とでも言うように、本当に口の端が僅かにではあるが、持ちあがる。

慰めてくれているのだろうか？

あんなことがあった部屋にいられずに、ふらふらと奏の元へとやってくるれば案の定、瑞名瀬とここ、図書室で本を読んでいた。

一冊二冊と彼らが本を読みふけている間に、雫の心も段々と落ち付いてきた。

そんな時のことだった。

瑞名瀬が手にしていた本を読み終わったようで、ぱんとハードカバーの本閉じてこんな言葉を口にした。

「そつだ、掃除をしよう」

この唐突の言葉に、奏は目を見張った。

天変地異の前触れかと思った。

瑞名瀬は自らのことを何もしない、何一つ興味のない男だった。

掃除はおるか、放っておけば顔すら洗わず風呂にも入らず、一日中部屋で本を読んでいる。当たり前だが食事なんて忘れている始末だ。

放っておけば一人では生きていけないこの男が、宗一郎に引き取られてきた記憶も生々しい奏からすれば、これは一体何の冗談かと言える言葉だった。

「えつと……僕死ぬんですか？」

「奏、意味が分かりません」

雫が二人を呼び付けにきたところでの会話（？）だったために冷静に雫がこれに返すも、奏は何も返せないようだ。

「掃除とは……瑞名瀬さん、一体何を掃除なさるおつもりですか？」
「帰りの掃除だ。おい、お前達の親玉に後で会わせる。大掃除をして貰いたい」

「……え、親玉？」

奏が引きつりつつも尋ねるが、瑞名瀬はそれだけ言う今日は何も喋りたくはないと、喋りつかれたとも言っのか、だんまりだ。口を開くのも億劫そうに、今日はもう疲れたと雫の髪をひと房握り、くいくいと引いて早く連れて行けと雫の帰りを促した。

「えっと、今日は会わなくてもいいのですか？」

恐らく親玉と称されたであろう、義経に。

雫のその問いに瑞名瀬は面倒くさそうにこくりと頷きで答えると、ひと房握った髪を手に取り、くいと引いた。

歩け、と言うことらしい。

雫は瑞名瀬のこちらも腕を取ると、腕を引いて歩き始めた。

「帰りの運転が面倒なんですね？」

またもこくりと頷くと、瑞名瀬は小さな欠伸を漏らす。どうやら眠い様子だ。

「医療センターによってから帰るつもりなのですが、それでも宜しいですか？」

これまたこくりと頷くと、早く歩けと瑞名瀬は更に足を促して見

せた。

これをぼかんと大口を開けて見送ってしまっていた奏は、意識を取り戻すと、置いて行かれまいと声を上げて二人を追いかけた。

「ま、待つてくださいよ！僕も須賀さんのお見舞い、行きます！！」

+++

一人二人と少人数しか乗り合わない、水上都市の観光用の舟であるゴンドラにも似たそれを繰り移動していると、ククリヒメが恋歌を風に乗せ呼びかけてくるのが聞こえた。

それは美しい天上の調べだった。

《一つの食べ物を分かち合うように

私はあなたと生きる 時を分かち合いたい

生きる喜びも 悲しみも辛さも

私はあなたと 想いを分かち合いたい

あなたの想い その行方は

まだ分からない

けれど私はあなたと分かち合いたい

あなたの想い、とく恋（来い）

私にあなたの想いよ、恋（来い）

大切に 今を あなたと分かち合いたい

大切な 明日を あなたと分かち合えたら

それは素晴らしい明日だと 私は想う……」

全身に柔らかな絹がゆるりと巻きついたような、柔らかな女の腕が絡みついたような、そんな錯覚を覚える。

凄まじい音の洪水だった。

最初は染みいる様に胸の中にじんとしみ込んできたかと思えば、気づくとどつと雪崩れを起こしたように胸の奥深くを揺さぶる様に入りこんでくる。

素晴らしい歌声だった。

歌い終える頃にはタケミナカタがククリヒメの頭上に舟を漕いでやってきて言った。

「何が愛しき人だ。恋歌などで呼び付けるな」

歌の歌詞で分かったものの、愛しき人と揶揄されて呼び出されるのは流石に気分を害した。そもそも愛してなどいないだろうとタケミナカタは言うものの、ククリヒメは偶にはそういう趣向もいだろうと、わけのわからない理由でそれを退ける。

「うぬのような唐変木に呼びかけるには恋歌くらいでちょうど良いではないか。さ、乗せてたも」

タケミナカタは一度も乗せるとは言っていないにもかかわらず、ククリヒメは乗る気満々だ。止める間もなく彼の繰る舟に手をかけて乗り込もうとしていた。

その姿に眉をひそめ、そしてため息をついて、タケミナカタは勘弁してくれと言う。

そもそもククリヒメは一人でも自由に移動が出来るのだ。他の神々と違い、移動に難があるわけでもあるまいに、足に使うとはお

かしな話であった。

けれどククリヒメは許可も得ずに勝手に乗り上げたかと思えば急に先ほどまでの上機嫌さをかなぐり捨てて眉根を顰めて告げてきた。どこまでもその言い様は不愉快そうな音に満ちていた。

「……………なんじゃこは、狭いのう」

「……………降りろ。今すぐに」

ククリヒメが乗り込むと、そこは満杯になってしまったのだ。

たった一人、それも女性が座っただけで布がこんもりと山を築いているがそれでも足りず、縁から溢れるほどだ。たつぷりと裾に余裕を持たせた衣装であるために、定員が三名以下となっている舟に乗りあげるには少々具合が悪そうだった。

重苦しい息を吐き出すとお前が乗ると狭くてかなわんと、タケミナカタは呆れたように言う。

「ぬしの舟が狭苦しいのが悪いのである？もっと広く作り変えればよいではないか」

「……………私一人であれば必要なものを、何故」

そんなものが必要なのか　そう続けようとしたところで、ククリヒメがずいとタケミナカタの眼前に指を一本突きつけて「それよ！」と叫ぶ。

「……………なんだ」

「なんだではない。うぬはちと勘違いをしておるまいか？ここにはあの女子おむすめも乗るのであるう？」

「……………そうだな」

女子とククリヒメが指して言うのは雫でありかがりであるあの少

女のことだろう。そうと分かっているからこそ、タケミナカは素直に頷いた。

すると今度はそうであろうと満足げに頷いて、けれど、と返す言葉に幾分棘を交えてククリヒメは言うのだ。

「これでは”むつど”も何も、あったものではないではないか！ちと考えい愚か者が！」

「むつ、ど……」

とは一体なにか。タケミナカは首を傾げてククリヒメをそつちのけで考え込んでしまった。

それに気付かずククリヒメも、話しに熱が入ってきたのか、「大体うぬはちいとも乙女心と言うものが分かっておらぬ！」と、何やら講釈を垂れ始める始末だ。「だから一体むつどってなんだ」と呟くタケミナカにはお構いなしである。

それが軽く十分程度続いた頃か、ようやく熱が冷めてきたらしいククリヒメがこう締めくくった。

「……こんな狭苦しいところに案内するとは、ほんに気の回らぬ男子よのう！最悪じゃ！ほれ、大きゆうせい！こんなところで愛も何も、語れたものではあるまいて！」

要はこれらの話を纏めると、「舟をもつと大きくしろ」と言うこととだろうかと、タケミナカはククリヒメの手に持った豪華な細工の施された扇子で殴られながらそう解釈した。

「大きくと言っても……どうすればいいのだ」

これを受けるとククリヒメは、途端に嬉しそうに華やいだ声で言

うのだ。大きく舟を作り直すのかと。

大層嬉しそうに、それも食い付きが大変良かったために若干タケミナカタは引いたものの、かがりに必要とあらば止むをえないと首肯して述べる。

「そうなのう。　　まずはあれよ、何十年……いや、何百年か前のことだったかのう？何と言ったか……そうよ、安宅船よ！あれはいいのう！あのように多く乗りあいが出るものが良いのではないかい！うむ、そうしようぞ！ほれ、早く作り直すが良いわ！」

安宅船と言うのは日本の軍艦である。それも室町時代からの軍艦で、実際にタケミナカタもその目で見た事はないものの、とても大きな船を人間が作ったという話は聞いていたので知っていた。

そのため、軍艦と知っていたからこそ、軍艦では少し具合が悪くはないかとククリヒメに尋ねたのだが、ククリヒメはそんなことは無いと言う。

「何を言う！良いではないか！軍艦じゃぞ？乙女の胸がこう……きゆうんとして心躍るといふものよ！」

「だが……軍艦だぞ？かがりがそんなものを見て喜ぶとも思えないが……」

「ふん！乙女心の分からぬ無粋ものが何を言うか！我の性別を知らぬわけでもあるまい？同じ女である我が言つのだぞえ？信用出来ぬと申すのか？失礼である！」

これを受けてタケミナカタは、舟を大型のものに作り変えるという提案は受け入れたとしても、ククリヒメの「軍艦こそが乙女の胸を躍らせる」という言葉には賛同しかねた。

そのためタケミナカタは、ある人物に相談に行くことにしようと考えた。

「では、専門家に聞いてくるから、お前は余所へ行くがいい」

「何じゃ！我を放り捨ててどこに行くと言つのかえ！？待ちりゃ！」

そして面倒くさいものに絡まれたなあとばかりに、はあと重苦しい息を吐き出すと、タケミナカタは降矢邸へと向かったのだった。ククリヒメを置き去りにして。

「待たんかー！ー！！」

17 (ムードは大切なんだぞ?) (後書き)

兔に角、ククリはずれている

18 (プロデュースしてあげる) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

18 (プロデューズしてあげる)

「頼もう」

古風なこの呼びかけに対し、作業に没頭していた奏も流石に意識が現実世界に引き戻されたらしい。

温室で　つまりは登校しないで午前の授業をサボタージユしているということのだが、そんなことは学校という概念の存在しないタケミナカタに分かるはずもない　創作活動をしていた奏の元に現れたのはタケミナカタだ。突然のこの予期せぬ来訪者に、奏はぱちくりと目を見張り、ついで言った。

「ちょうど良かった。今、貴方を描いていたんです」

「……描く？とはなんだ？」

そもそもちようどいいなどと言われるとはちらとも予想してもみなかったため、幾分居心地が悪そうだ。むしろ逆だろうと思うのだが、予想の範囲外のことが起こると対処が出来ないらしい。

「絵なんですけど……僕、実は人物画は随分と描いてなかったんですよ。なんですけど食指が動いたと言いますか……ほら、今、こういうものを描いています」

そう言って奏がタケミナカタの目の前に差し出して見せたのは、一枚の美しい人物画だった。

カンバスに描かれた人物は、どこまでも神秘的な人物だ。古風な意匠の服を身にまとい、それでいて違和感を一切感じさせないまでの堂々とした佇まいをしている。

大きな鳥ばかりを数羽従えて、堂々たる体躯で空を眺める様子が、

この人物は今にも羽ばたいていつてしまうのではと、どこかそんな
思いを抱かせる絵だった。

その描かれた男の顔が、神秘的かつ空への憧憬を感じさせる表情
からそう思わせるのだが、本人はいたって普通に

「これが私か」

まるで他人事のような口調に、奏は焦ってしまった。

「え……似ていませんか！？……今回は自信作だったんだけどな。
どうしよう……似てないなんて……」

描き直すのも惜しいとしよげる奏に、そういうわけではないのだ
とタケミナカタは告げる。

「その……なんだ。私は自分の顔などほぼ見ない。イオリのように
始終水に囲まれているわけでもなし、姿を映すものが傍にないのだ。
だから……あまり顔はみない」

それこそ数十年に一度も見ればいいほうだと告げられれば、奏は
あんぐりと大きく口を開いて暫し声を失い 今度は声を取り戻し
たかと思えば一言、「勿体無い」とだけ零すと、はらはらと静かに
涙を零し始めた。

「それは美に対する冒瀆です！数十年に一度とか！勿体無いにも程
があります！と言うよりも道理で服装もワールドだと思いましたがよ
！！」

鏡を見ていないのであれば納得の姿だと、怒りもあらわに告げる
奏に、タケミナカタはたじたじだ。

そして何故こんな話しになったのかと、若干困り顔である。

そもそもここに来た理由のりの字すらタケミナカタは奏に告げることすら出来ていないのだが、それにタケミナカタ自身が気づいていない。

タケミナカタはワイルドの一言で言い表してもいいのか、大いに困り果てるような服装をしているのだが、奏はこんな時までも人のいいのを發揮して言うのだ。

やれ上背があるのだからもつとすらりと流れるような衣装を身につけるだの（今きているボロは元は麻の衣だったのだろうが、今では見る影もなくなっている。擦り切れたボロ切れの上からどこかからの献上品だろうが、更紗の美しい衣を纏っているのだが、それだけが逆に異様に浮いて見えた）やれその履き物はなんだ、解れが酷過ぎて元の形状が分からないではないかだの（なめし革を紐で縫いとめた、それこそ石器時代かと皮肉ることが出来るほどに、それはとても古い作りをした履き物だった）散々な言われようだ。

「もつと有効活用しましょうよ！せめて義経様じゃありませんが、『僕は今日も格好いいかな？』くらい冗談めかして人に尋ねてください！『ねえ髪の毛跳ねてるよ？』『え、嘘有難う』とか、そんな会話すら貴方達はしないんでしょう、どうせ！？」

「……髪の毛はねてるよ？」

何だそれとはばかりに鸚鵡返しに返されたこの言葉に、奏はぶちりと切れた。

「棒読みじゃないですか！綺麗なものはより美しく！綺麗でないものは綺麗にしよう！そうでしょう？！頑張りましょうよ！素材はパーフェクトなんですから！」

「……う、うむ」

そして気がつけばタケミナカタは、本日居残り組の塩見と奏に、全身を弄られることになっていた。

ただし奏に関しては、塩見より「午後は学校行こうね」と言われってしまったため、有無を言わせず連れ出される予定になったわけなのだが。

所在なさげに立つタケミナカタを、二人は散々にその容姿から立ち姿までを批評しつつくして、それから服装に言及し始めた。

「まずは青かな？それとも緑？テーマカラーを決めたいよね」

「ですね。僕としては緑かなって思っんですけど」

顎に手をあて塩見はうむむと考え込む。

「因みにその心は？」

「風のイメージが僕の中で緑なのと、イオリ様の衣装が青でいらっしやいますから」

被るのはナンセンスだろうと告げられれば塩見は首肯して納得であると告げるのだ。

「んじゃあ緑にしようか」

テーマカラーが決まったとなれば後は服装のテーマである。これもカラーが決まったとなれば存外簡単に決まったようだ。

曰く、顔立ちが落ち着いているが、身が引き締まっっていて堂々たる体躯なのだから、これを使わずにどうする、と言っことらしくそれを活かした衣装にするようだ。

「……う、動きやすいものにしてくれるならば」

これ以上の言葉は、流石にタケミナカタの口からは出て来なかった。

逆らえばどうなるかを本能的に察したようだ。

いつの間にか立ち場が逆転しているのだが本人達は気づいていない。

矢張り人というものは時として神よりも強いものである。

上を下をと脱がされつつも、タケミナカタはようやっと何故この場に来たのかを思い出したようで、奏へとククリヒメとの会話で出てきた舟について尋ねてみた。

「カナデと言ったか。そなた、かがりの従者だったな」

「いや……まあ、そんな感じですかね」

従者であり、友人でもある雫のことを思い出し、かがりも似たようなものかと思ひ首肯する。

それを受けたタケミナカタも満足そうに頷くと、続けた。

「彼女の気にいるものにしたいたいと思うのだが、……軍艦とは、乙女心とやらの響くものなのか？」

「ぐんかん??」

「そうなのだ。ククリが言っていたのだが、軍艦は乙女心に訴えかけるものがあるというのだ。私はそのようなことがあるはずがないと言っただが、ククリは自分が言うのだから間違いはないと……本当なのか？かがりは軍艦の方がいいのか？」

「……話が良く見えませんが、一体どういうことですか？」

かくかくしかじか　と、先ほどのことの起こりを語ってみせる

と、塩見は目を閉じ、そして沈黙すると、あたりはしんとした。その次の瞬間のことだ、かっと目を開いたと思うと、その瞬間に拳を作り塩見は力説し始めたのだ。

「軍艦は、萌えない！」

「燃えない……？」

そうか、自分の使っているような船と違い燃えないのか、それはいいなと頷いていれば、塩見は勝手に続けていく。

「とうか、日本の軍艦は萌えじゃない！そして元から軍艦自体、萌えじゃなくて燃え！だからそれは違うよ、ククリ様が特殊なだけだと思う」

暗にそれはかがりが軍艦を良しとしないと言っていることを告げている発言であったため、あからさまにほっとした様子を浮かべると、タケミナカタは大いに喜んで見せた。とはいえ、表情はあまり変わらないタケミナカタのため、二人にその喜びが伝わったかは微妙なところだが。

「そうか、良かった」

「けど、ククリ様が言うのももつともだよ。あれだと狭いとは言えるから」

「……そ、うなのか？」

自分的にはジャストサイズだったために、しょんぼりとタケミナカタはしよげてしまう。そうか、あれは狭いのか。

「ええ。せめてもう少し大きくしてはいかがでしょう？」

移動用にしてはタケミナカタの舟は荷物も置けない狭苦しい舟だろうと告げると、湖のボートサイズじゃどうだろうと奏は考え込み始めてしまう。

かがりとタケミナカタが並んで座ったところでそうまでも狭苦しいわけもないが、それでも広いかと言われれば頷けない。

「大きくすべきなのか？」

その問いに関しては二人は答えず、塩見が何も持たない手を、まるで絵筆を持った手をさらさらと動かすような真似をして、奏にこんな提案を試みせた。

「奏君。なんか見本見せてあげてよ。こう……描けるでしょ？」

「……あー、じゃあ、今から描いてみますから、ちよつと見ててください」

そうして奏は鉛筆を取ると、それまでのほんわかした表情は引き締まり、さらさらと近くにあった紙にまるでそこに存在するかのようにつ、生々しいほどの立体感、存在感を持った帆船が描き出していた。

それを見つめ、感心した様にほつつと熱のこもった息を吐き出すと、タケミナカタは

「……見事なものだな」

と、言葉は少ないものの賛美の言葉を投げかけるのだった。

「お褒めいただきまして恐縮です」

にっこり微笑んだ奏はもういつもの奏だ。

そして衣装も二人のプロデュースにより決まると、早速タケミナカタは白い船体が眩しいまでの帆船を作りだしたのだった。

19 (ファーストインパクトは平手) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

19 (ファーストインパクトは平手)

ただいま戻りましたと、帰宅したばかりの雫を待ちかまえるようにしていたのはククリヒメだ。

誰なのでしようと首を傾げてククリヒメを見つめていると、ククリヒメの方がずいと雫の前に進み出る。そして上から下まで舐めまわすようにじっくりと検分していくと、最後に「縮んだな」と、いつの日のことだったかイオリが以前呟いたような言葉を呟いたのだ。

「……………」

毎度(?)おなじみのこととはいえ、またも暗に低身長と指して言われたことに一瞬にして沸点を越えたらしく、かつとなって雫は

と思いきや、相手の方が早かったようだ。

ぱんと乾いた音をさせ、気づけば雫は床に倒れ伏していた。

「あ、……………う?」

頭が冷たい床の上に落ち、どうやら思い切り頭を床に打ち付けてしまったらしいと気づくが、手足は毛あしの長い絨毯に抱きとめられてこちらは無傷なのか痛みもない。どうせならば柔らかかに頭も抱え止めてくれればよいものかと思いはするが、落ちる場所など絨毯の側で変えられるはずもない。

雫は床の冷たさを頬で感じとりつつも、この状況のわからなさに泣きたくなった。

帰宅して早々のこの仕打ちは本当に一体なんの冗談なのか。

そもそもこの華奢ではあるが大柄な女性は何なのか。

初対面の方にこのようなことをされる言われが分からずに、雫は混乱した頭で床を見つめ、そしてその女性を見つめ、痛みから生理

的な涙を流した。

「……………ぐすっ」

ククリヒメは高下駄を音もさせずに進ませると、床の上にある顔を眺め鼻を鳴らす。それは実につまらないものを見た時のような反応だった。

彼女の位置からは雫の顔が見えない様子で、泣いているのは分かったらしいが、あれくらいの一撃で倒れるとはとむしる薄らとだが怒りすら覚えているようだった。

「……………そこなもの、ほんにあの日の女童かえ？おかしなものよ。あの日と違い、うぬには何の力も感じられぬ。……………うぬは、なんだえ？」

似た人物程度だったかと言われ、けれど気の流れや気配などは似ているのだが、よもや自分が鈍っただけかとククリヒメは一人ぶつぶつと呟いている。

それはまるで、倒れた雫のことなど、最早頭の中から消え失せてしまっているかのようにだった。

「えっ……………」

毛あしの長い絨毯の上で手足を縮こまらせていくと、ようやく頬を思い切りぶたれたのだと気づいた。床にしたたか打ちつけた頭の痛さのほうに頭がいつてしまっていて、頬の痛みをつい忘れてしまったようだった。

じわりとまた新たな涙が滲んできたが、悟られたくなくて雫は急いで顔を拭う。するとちょうど顔を寄せてきたククリヒメが雫の涙に気がついたらしく、今度はなんの冗談なのか目の色を変えて飛び

ついて来た。

倒れた雫の前にどんと膝をついたかと思えば、息を荒くして、まるでアルコール中毒の患者のように小刻みに指先を震わせて雫へと手を伸ばす。

「……なんとまあ！うぬはめんこいのお。ほんに……涙がよう似合
う」

「ひえ！？」

息を荒くしつつ迫ってくるククリヒメに雫はたじろぐが、そんなことはククリヒメには関係ないらしい。そもそも気づいてさえいないのだから、うっとり見つめてくるだけで雫の恐怖が見えているのかいないのか 分かったものではなかった。

「いやあ……」

本能的な恐怖を感じ、雫は絨毯の上を溺れた犬のように手足をもつれさせながらもがき逃げる。するとそれを見て益々愛しそうに目を細めてうっとり、囁くようにククリヒメは言うのだ。

「もっと鳴き声が聞きたいのう……」

言うが早いかまたも雫へと平手が飛んできた。

「ひあっ！」

雫が悲鳴をあげるとククリヒメはぞくぞくと背筋を震えが走るのを感じた。

「あまやかな音色を奏ではないか。良いぞ、良い。そなた、慈

しんでやるつぞ……なあ？」

「ひっ！！やああっ！！」

完全に正気を失っていると言える、何かに浮かされたようにうつとりと言葉を紡ぐククリヒメに、雫は恐怖に竦んでしまって、最早指先一つでさえ己の意思で動かす事が適わなくなってしまった。

助けて、助けてと頭の中では煩いほどに声が出ると言うのにどうしてなのか、唇は恐怖に固まり言葉などいくら待っても出て来ないのだ。

「ほれ、抱きとめてやるつぞ。ちこつ寄れ」

「い、やああ……」

にじりよってくるククリヒメに対し、雫は腰が引けている様子だ。いや、もう腰が抜けてしまっているのかもしれない。

そこに突如として雫の救い主が現れた。

「ストップ。それ以上は駄目だよ、お姉さん。っていうか、お姉さんは殴って気持ちいい人なわけ？ちよつと降矢さんにそれは刺激が強すぎると思うんだけど」

雫と千草は島田の運転により車で先に戻ってきたわけだったが、健は運動がてら　　と言うよりも、能力の継続時間などの把握のために学園からここまで、自分の足で帰ってきたのだ。それはものは試しだと言われ、補助としてつけられた塩見という監視役のもと、駆けてきたのだ。

それは途中で倒れればフォローを得られると言うことで健としても安心していたのだが、戻ってきてこんな惨状を見せつけられるのでは、安心どころか何故共に帰宅しなかったのかと言う後悔の念しかわかない。

健は雫をいつの間にか横抱きに抱えてククリヒメから距離を取ると、雫へと迫っていたのが今更ながらに昨日の大柄な女性だったことにはたと気づく。

「……なんじゃ、うぬは。我はそのちんまいのとらぶらぶ中じゃ。無粋な真似はするでない。邪魔立てすれば容赦せぬぞ」

これを受けて恐怖に引きつった顔を浮かべていた雫が、ラブラブとは一体どういうことかと若干正気に戻った。

そこで漸く千草が玄関の扉を潜って屋敷の中へと入ってきたのだが、三者を見て首を傾げたまではないものの

「さつき塩見さんがケーキが待ってるってのと二階遊戯室で遊ぶわよって言われたんだが……二階の遊戯室は二か所あったがどっちだ？」

と尋ねてきた。そんなこと、それこそ三人は知ったことではない。雫が辛うじて遊べる場所であるのであれば東館の方だろうと言うのを聞くと、千草はさっさと行くぞと雫と健を促してそのまま歩き続けた。

まるで、ククリヒメが見えないとでも言うように。まるっと無視だ。

「……こ、このーうぬら、待ちりゃー！」

あまりの反応に一瞬ぼかんと見送ってしまったが、自分を無視するとは許せないとククリヒメは声を荒げる。そんなククリヒメからそっと離れて健は雫を抱えたまま千草を追いかけ声をかけた。

「お、おい……千草」

「何だ？」

「その……いいのか、あれ？」

雫が歩くというので健は雫を床に下ろして並んで歩きはじめると、背後で床を踏み鳴らして地団太を踏んでいるククリヒメを指して言う。けれど千草はそれを一瞥するだけで興味も無さそうにして歩みすら止めなかった。

理由は

「義経さんからああいうのには関わるなって言われてるからな」

と、それだけだ。

だがしかし、健はそれだけを聞けば全てを悟ったらしく、お前も難儀だなと言いくそうに口を開いた。

千草は健がククリヒメと話しているのを見て、自分とは違い、あの程度知れる立ち場にあることを一瞬にして悟ったのだろう。

そして、健とは違い、千草は知ることを許されてさえいないのだ。それに意義すら申し立てることすら出来ず。そして、それに悔しさを抱いていても露わにすることすら出来ず。

「千草、次の散策はいつにしますか？」

雫が自身もあまり知らされていないことをだが、千草は更に束縛が多いらしいと知ると、何を思ったのか鼻を嚙り涙をぬぐい去ると、自ら千草を誘い、庭を歩こうと告げる。それを聞いても前後の会話との繋がりが分からず、健だけが困惑している。

そして雫のあまりの突然のこの誘い文句に千草が一瞬目を見張ったが、次の瞬間柔らかな笑みを浮かべて週末にでも家庭教師が帰ったらと返した。

答えが返ってきたことに雫はほっとした様に笑みを浮かべるとに

ここにこしながらさらに言葉を重ねた。

「ケーキは一体なんのケーキでしょうか？」

「いつも通りあれじゃないのか、小さいケーキが何種類もあるプレート式」

「ですが塩見さんが誘われたのでしょうか？塩見さんはケーキなど、お菓子作りが趣味なのです。だから」

いつの間にか一步下がって健は二人の後を追う形で歩いていた。すんごく仲いいいな。

もしかしたらとんでもなくお邪魔だったのかもしれないと思いつながら健は歩いた。

健はかがりのため、そして自らが生きるためにここに居るが、許嫁候補との新たな役目を宗一郎から受けたのは昨夜のことだ。千草と雫の仲の良さを目の当たりにすれば、どうして呼び出されたのか、疑問を感じる。

これで仲が悪く打ち解ける気配がないのであれば新たな火種を投下すればなんとか　と言うのも多少分らないも無いのだが、本当にどうして自分が連れてこられるのだから分らない。

内心首を傾げる気持ちでいれば、目の前でそれは起こった。

本当に、ほんの僅かにだが、千草の指先が雫に触れてしまったのだ。その瞬間、全身に針を毛羽立てるようにして雫は気配を尖らせる。

一瞬目を疑った。

20 (奇立ち) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

「……何だ？」

思わず声に出してしまったらしく、慌てて口を閉じると、雫が振り返りどうかしたのかと目で問いかけてくる。千草もやや遅れて振り返ってくるのを見れば、更なる出来ごとに気がついてしまったのだ。そうか……そうなんだ。

千草は雫のことが好きだ。当人がどう答えようが、どう思っているようが、健にはそう分かった。

それは同じく健が雫をそうした意味合いで気にかけていたから分かったことだ。

けれど雫は千草に恐怖を抱いている。それも、可也根深いものがある、重症な部類の恐怖だ。

まずそれは、間違いなく恋愛関係になんかなれっこないほどのものだと気づいた。

だが、ならばなおのこと、どうして千草がいるところに健が呼ばれたのだろうか。益々もつて宗一郎の考えていることが分からなくなる。

許嫁候補、といった形にせずに、千草を許嫁から馘首してしまえばいい話ではないか。

そして新たな形でそこに健を　　と言うのであれば分かるのだが。そこまで考えてみて、健はにこりと人の良さそうな笑みを浮かべると、二人に

「何でもない」

と告げ、二人の真ん中に割り込むようにぐいと足を踏み入れた。

「おいっ！」

抗議の聲が上がるも、無理に健は二人の手を一つずつ取りずんずんと前に行く。

「ちょうど甘い欲しかったんだよな。ちょっとここまでかけっしたら腹へって腹へって……早くいこーぜ！」

「な、成瀬さんっ！足が早いです！」

「健！こら、健！」

「降矢さんは、お互いさ、そろそろさん付なしでいいんじゃないかなって思うのよ。んでさ、千草は噂のパソコンと合わせるよな」

「はあ！？……いやまあ、助かるが」

「おう」

二人の腕をぐいぐいと引きながら進めば、千草は困惑した様子だし、雫はどうすればいいのかわからないと言った様子だしと、散々なことになっていた。

「え、ええと……」

「成瀬さん、とかやめない？俺も健って呼ばれたい」

「……ですが」

「俺も千草と一緒にじゃん？許嫁候補だよ？健って、呼んでほしい」

「……た、健」

その響きが、妙にかがりと重なって、健は寂しさからか、嬉しさからか、笑みを浮かべた。だが、その笑みがどのような笑みかなど本人に分かるはずもない。

同じ階に用意された部屋のちょうど真ん中あたりで二人の手を放すと、健は二人に言った。

「十分後ここ集合なー。着替え済ませたらここってことで、はい解散」

着替えを取りだして千草はきているものを脱いで適当にその場に放り投げると呻く。

「なんだあの腕力は」

つい先日腕を取った時など、あのような力があっただろうかと思いい、千草は唸る。

「あれじゃまるで、義経さんみたいな……」

口にしたところではっと気がついた。そうだ、まるでではなく、あれはそう、義経と同じとまではいかないが、それに近いほどに凄まじい力だったじゃないかと。

あまりにも強引に手を取られたため千草は咄嗟にそれを払おうとした。けれど出来なかったのだ。

腕を払おうとしたが、健の腕は肩から根が生えたかのようにびくともしない。腕の筋肉を僅かにでも動かす事が出来ないほどに、それはとても強かった。

そこに思い至るとぞっとした。そして、己を取り巻く環境にも言い知れぬ不気味なものを感じ取るのだ。

「もしかして……健はもう、義経さん達と……」

「ぐくりと生唾を飲み込んだところで、扉を叩く音がして、千草は正気に戻った。

「千草」

雫の声だった。

「……今、行く」

平素のふりを装って、千草は私服へと着替えると、私室の外へと足を一歩、踏み出した。

先ほど感じたのは何も、恐怖だけではなかった。

むしろ怒りにも似た感情がふつりとわき上がるのを感じ、そして、そんな感情を持って余しているのを自分自身で自覚し始めていた。

細かなことを打ち明けるのでも、何故自分ではないのか。義経も雫も、どうして自分ではなくて後からやってきた健になのかと怒りすら覚えていた。

秘密は守る、守ることは出来る。自分だって　と嫉妬のような感情すら抱くもそれは叶うことのない千草だけが抱く、我がままのようなものなのだろう。

「あれ？そのシャツどこの？見た事ないやつだな」

人懐こい笑みを浮かべて千草へと手を伸ばしてくる親友の姿に対し、わけのわからない感情が湧きあがる。

どうして雫はこいつに　！！

わけのわからぬ感情に揺さぶられるが、千草はそんな感情を表に出す事を良しとしない。

平然と、淡々と、健の問いに返していく。

「……この間澤田さんからお下がりで貰った。服の系統が似てるか

ら、若い頃に着ていた服が着れないかって」

「それいいなあ。羨ましい。俺にもなんかくんねーかなあー？」

「お前は服の系統合わないだろう……」

「えーじゃあ鷺宮さんとかあ」

服の系統で言うならば、澤田は千草と同じで、鷺宮は健と同じ部類にあたる。以前鷺宮が身につけていた意匠が自分の感性にあっていたのだろうが、健はああいう系統であれば着れなくはないと首肯している。

だがそれに、千草はざっくりと言うのだ。

「背丈が合わないだろう」

「ひでえっ」

口では適当に健の相手をしながらも、すました顔で二人の後をついてくる雫に、千草は顔を見もしないで怒りだけをぶつけ続ける。

どうして仲間に引き入れられるのが自分ではなかったのか、どうして健にしたのか、自分でも良かったはずではないのか　ただただその思いをぶつけ続けるのだった。

21 (さあ、大掃除に出かけよう) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

21 (さあ、大掃除に出かけよう)

次の日のことだった。

放課後でいい、お前達の親玉に会わせると言われ、雫と奏が連れだつて瑞名瀬を義経の元へと案内していったのは。

奏は本日午前はサボタージュしたわけなのだが、いつの間にか学園に登校して来てのほほんと部室に居たのを見て、雫はいつ来たのだろうと思つた。

するとそんな疑問が顔に出ていたのか、奏はにっこり笑つてちょっと大きな船で送つて貰いましたと言い、益々わけの分からないと首を傾げたのだが、奏はそれ以上説明する言葉を持たないようだ。

義経と真向かう瑞名瀬は、実に優雅に足を組んで紅茶を啜っている。ただし、口の端から紅茶が一筋、つうつと顎を伝っているのがその優雅さとその美しい顔を全てぶち壊しにしてくれているが、雫がそれを見かねて顎をハンカチで拭つてやりつつ、紅茶を含んで洪面を浮かべ始めた瑞名瀬を見かけ、「ああそうか、洪いのですね」と告げて、砂糖を一つ、そしてミルクを入れてやり味を整えてやる。実に甲斐甲斐しく世話を焼いて見せていた。

そんな雫の横では奏がクッキーを一つ頬張ると、美味しいと目を輝かせていた。

こちらは雫の手を煩わすことなくちんまりと座つてお行儀良く食べているが、気に入らないうつらなクッキーをにこにこしながら食べてい、て瑞名瀬の世話ということは眼中にない様子だ。(というよりもこの場合は雫の世話役を、だろうが)

三人揃つと誰が世話係かといった立ち位置に変化してしまつようだ。これを初めてみた義経は、俺の娘に何をさせているんだと、瑞名瀬にぎりぎりとお睨みつけてやつた。

だが、瑞名瀬はそんな視線を受けてもどこ吹く風である。涼しげな表情を浮かべて紅茶を啜っていた。(相変わらず汚らしい飲み方

だったか)

「あの、ところでお父様の前にきたわけなのですが、瑞名瀬さん、何かお話があったのではないのですか？」

雫のやや躊躇いがちなこの言葉を受けて、瑞名瀬は何度も思いだしたようにその場で首肯しながら……何故か慌ててクッキーをほおばり、そして紅茶を口に含み　と、完全に義経よりもお茶をしかきたことそのものが目当てなのかとばかりに、飲んででは食ってと、そちらにはかり意識がいつているようだ。てっきり話し始めるとばかり思っていただけに、雫も何故今、口に放り込んだと頭が痛そう

だ。
義経が腹立たしく感じているその間もぼろぼろとクッキーの端を落とし、紅茶の滴を落とすと、忙しなく周囲を汚していく始末だ。何とも汚らしいと義経は醜悪そうに顔を歪めてみせた。

「も、もう！一体君は何なのさ！？ってどうか僕の雫を召使みたいに使わないでよね！」

「……めしつかい？」

そうだろうかと雫を見つめ、瑞名瀬が首を傾げると、確かにそう言えるかもしれないとこちらは視線を逸らした。反論が出来なかったのだ。

瑞名瀬は視線を逸らす雫に対し、ふむと口に手を当てて考え込む。そしてややもたって開口一番言った言葉がこれだった。

「いつも助かっている」

「認めた！？雫を使えばにしていることを認めたの君？！なんてやつだ！最低！！」

そしてこれに対して雫はきよとんとした表情を浮かべて、何故か「それは良かったですね」と言うと、にこりと微笑んだ。

その様子はまるで、長年連れ添った老夫婦のようである。

瑞名瀬より初めて感謝の念を述べられたが故の雫のこの発言だったのだが、義経からすれば、「雫さんあなた何を言ってるっしやいますの!？」である。

驚愕に顔から目が零れ落ちんばかりに義経は眼を見開いて見せるが、雫は一向にそんな義経に気がつかない。

そんな義経に知ったこつちやないとばかりに瑞名瀬はぼろぼろと更にクツキーの新しい欠片を落とすつも口を開いた。せめて飲み込んでから喋れ。

「大掃除をして貰いたい」

「大掃除い?つて……君自身が今まさにここを汚しているだろうに。どういうことよ?君、どう見ても汚す専門だよな?もしかして僕にどっか掃除しろつてこと?何それ意味分かんないんだけど」

雫だけではなくて、義経にまでもこの男は掃除を言いつけるつもりかと思つと、あまりのその突拍子のない頼みごとに有り得ないと内心では可也の噴飯ものであった。

だがしかし、流石にここで雫の知り合いでもある瑞名瀬を大笑いで叩きだして塩をまくのは簡単ではあるが、それをやったが最後、雫に何を言われるか分かったものではない。

雫と瑞名瀬の交友関係度、それが問題なのだ。

そこそこの付き合いをしているのであれば、下手なことをすれば義経に対する雫の好感度が下がる。

それはあまりにも嬉しくないことだ。

だからこそ義経は面白くないジョークだなと鼻で笑う程度に納めておいた。(まあ、これもこれであまりいいニュアンスに雫に取られかねない態度ではあるが、それでもまともに返せるほどに余裕が

なかつたのだ」

有り体にいってしまえば「ふざけるな、おとといきやがれ」と義経から言われたわけなのだが、瑞名瀬はその通りにその発言の裏に隠された真意をそのまま汲みとれたわけではないまでも、そんな言葉に怯むことなく違うと口にし、続きを語るべく更に言葉を続けるのだった。

「掃除は帰宅する道すがらに大量に落ちているアイツらのことだ」「アイツら？」

ぴくりと義経はその言葉に反応をすると、少々耳を傾けるつもりになったようだ。先ほどまでと違い聞く姿勢を取り始めた。

「帰り道に最近よく見える様になった。それと、ちよつとこの間気になるものも見かけて……お前なら、あれをどうにか出来るんだろっ？」

あれ、と言われて雫は首を傾げていたが、義経にはそれで通じたようだ。

それは通常視えないもので、そしてそこに暮らす人々にとって、よくないことをもたらすものである。

それが瑞名瀬の帰宅路に居るらしいと聞けば、同じ六花学園に通つてくる生徒にまで類が及ばないとも言つことなか、義経は更に詳しい話を聞こうと瑞名瀬をやや強引に連れて、別の部屋に移っていった。

残された雫と奏はといえば、どうしたものかと顔を見合わせて、そして

「戻りましょうか」

「そうしますか」

と言つことになつたようだ。

雫と奏は自分達の荷物を取りに、執行部部室へと戻っていった。

+++

何故か帰宅する車の運転手が澤田に変わったかと思えば、後部座席の大量にある椅子の真ん中を陣取る形で控えていたのは義経だ。

「はあ〜い。いらっしやいましー」

「は、……はあい……？」

車内には、ひらひらと手を振る義経と、その脇に本をじつと読みつけて身じるぎ一つしない瑞名瀬の姿があつた。

誰だこれと言わんばかりの千草の様子に雫は何と言つたものやらだ。

瑞名瀬は完全に本の世界の中に入り込んでいるらしく、こちらの様子は見えていないようではある。が、自己紹介くらいは自分でして貰いたいと願うのは、こちらの我がままなのだろうか。

奏も何だと訝りながらもここは乗車すべきではと雫を窺う姿勢である。乗るべきなのだろうが、先ほどの一件もあり、何かこの後するのではないか　そう思うだけに素直にこのまま乗っていいものかと迷つ心が出るのも事実。

そんな時、健が早く入りなよと、内部が見えないからこそいたつて気軽に言ってくれるのだ。

「いや……そのう……」

先ほどのあまり仲の良さそうでなかった二人組が仲良く（？）車内で鎮座ましましているのだ。警戒せずにこれで入れと？と雫が若干引きつった顔で健を見るも、健は中に何かあるのかと確かめようと首を突っ込んできた。

「はいはい、おっじゃまー……あー……あー？あれ？」

「はあい健君。ちょっと僕とドライブしない？」

義経のこの言葉には、全員が何故か全力で拒否したいと感じたのであった。

だがしかし、乗らなければ降矢邸のあの遠い家まで帰れるはずもなく、乗るといふ選択肢しかないのであった。

22 (布川書店) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

22 (布川書店)

全員が車内に乗り込むと、瑞名瀬は思いだしたように「そこから国道に乗ってくれ」と運転手の澤田へ告げた。

その後は千草にとってみれば、何故と思える事態が待っていた。

「ちょっとこの後大掃除をしに行くことになってね。だから君たちにもついてきて欲しいわけ」

「大掃除？」

「っそ。つてもね、ただの掃除じゃなくて、道なんかにある、ちょっと未練とかを残して死んじゃった人とかが生きてる人に害を及ぼしている場所なんかがあつてね。その害になっちゃってる死んじゃった人の駆除とでも言うかな。まあそんなところ」

まあそんなところ、ではない。

義経は言うだけ言うたとさつさと自分は寛ぐことを決めたらしく、早々に後部座席に取り付けられている冷蔵庫と冷凍庫をあけて、グラスを取り出しミネラルウォーターを飲み始めた。

「あ、あの、お父様？」

そんな理由で連れまわすのは一体どういうことなのかと、もっと詳しく説明を求めたくて、雫は義経の袖をくいと引くと、義経は雫達にもグラスにミネラルウォーターを用意してくれた。

「あのー……義経様。その、いいんですか？」

「何を？」

「いえ……ですから、許嫁さん達を連れてきてしまっても……という事なんですがー」

所謂荒魂とかした御霊を鎮める仕事もそうだが、こういつた悪霊退治もまた、時たま引き受ける義経の仕事の一つである。

だがしかし、ここには健はまだしも千草が居るのだ。何故この面子で と、奏が思っても仕方のないことだった。

それは千草も同じようだ

「俺を連れていってもいいんですか？」

聞くな、言うな、そう脅しをかけられたのは真新しい記憶である。

なのにどうして そう思った。

すると義経は肩を竦めてこう言うのだ。

「父上が何を考えていたのかわりたくてね。それが これで分かるんじゃないのか、そう思うんだよ」

だから付き合ってくれるねと確認するように告げるが まるで拒否する権限を与えないような語調で言われたその言葉に、千草は嫌な予感しかしない。

「……そうですね。どうせこのままいけばその現場に連れていかれるよりないでしょうから、付き合いますよ」

「そうね、付き合ってくれれば嬉しくてよ？」

にやりと義経が意地悪く笑って告げるのを受けて、千草は苦々しい顔だ。

雫はおろおろとしているものの、自分も初めての父の仕事振りを見学と言つこともあってか、千草と義経の会話に割って入る余裕はなさそうだ。楽しみな部分もあり、不安な部分もありと、内心は複雑な様子であり、とてもではないが千草にまでどうこう出来る余裕

が無い。

奏はと言えば大変そうだなあと、まるで他人事のように考えていたのだが、今ではもう、瑞名瀬の読んでいる本を横から一緒に眺める始末だ。まるで現実感がないその様子に、雫は何故か安心を覚え、次第に心が落ち着いてくるのを感じた。

「ええと、お父様。私達では……見ていだけでも宜しいのでし
ようか？」

「うん。そうして頂戴。危ないからあんまり前には出て欲しくない
けど、何が起こるか分からないから用心だけは欠かさないでね」

「はい」

「了解です」

「ん。宜しい」

雫と千草が頷くのを横目に、健はここまで聞いても全く意味が分
からないようだ。悪霊退治って何それとばかりに首を傾げている。
だが、これがまともな反応なのかもしれない。

そんな健に義経は、意味深な笑みを浮かべると、

「まあ……いつてみれば分かるよ」

と、告げるのだった。

雫にとってみれば、そこは初めてくるような場所だった。

「古本屋さん……」

「……………」

無言で瑞名瀬はその扉を潜り、中へと入って行ってしまふ。それ

を慌てて雫は追った。続いて義経達がついていくが全員が一斉に入ると出入り口付近は流石に窮屈だった。

「……狭いな」

周囲を見渡しながらこの言葉を聞いて、千草は顔を顰めてみせた。矢張り、自分はこの人達とは違う世界で生きてきたのだと思わざるを得ない。

「……これが当たり前なんですけどね。何と云うか、義経さんのような人はこういうところ、普段来ないだろうしなあ……」

余程「あんなたたちのような金持ち連中は」と言いたかったものの、千草はそこをぐつとこらえた。

言うだけ無駄というのもあるのかもしれないが、それにしても場違いな面子である。

高級学校の制服を身にまとい、そしてそれを連れている父兄と思しき瑞名瀬と義経は、矢鱈ときららしい二人だ。澤田がその背後に慎ましく黒服で控えているのも更にその存在を古書店という、この場所から浮き上がらせていた。

雫が周囲をきよるきよると物珍しげに眺めていれば、奏はふらふらとどこかへと足を向けて行ってしまった。何か自分の食指の疼きそうな本でも探しにいったのかもしれない。

千草と健は何とはなしに雫をじっと眺めているが、その表情が実に対照的と言えた。

千草はと言うと、雫を眺めていくうちに、何故かその眉間には皺が縦に刻まれていき、険しい視線を向けている。

健はと言うと、雫を見る目は可愛らしいものを見つめる目なのだが、これまたある意味おかしなものだが、子供に向ける眼差しや愛玩動物に向けるそれに、何故か似ているように見える。

この反応を見て対象的なと義経も澤田も思ったものの、放っておくことにしたようだ。

今回ここにきたのは瑞名瀬の依頼あつてである。今この段階で片付ける優先順位が上なのは依頼だ。

そういうこともあつてか、あの三人のことはとりあえず一旦放置しておくことに決めたようだった。

といっても、義経としては寧に何かあれば　ないし、彼ら二人が寧に何かした場合だが、その場合は何がしかのことは　保護者として当然の措置に限るものだが　取らせて貰うつもりではあつたのだが。

瑞名瀬はいつになくにごやかな表情を浮かべて、店主の元へと歩み寄る。

「おじさん」

「……おおー！どうしたね。何かまた欲しい本でも出来たのか？」

どうやら相当な馴染み客であるらしい瑞名瀬の顔を見つけると、店主である初老の男は嬉しそうに顔をくしゃりと歪ませて笑みを作った。

そしていそいそとやってくるとその背後に立つ、恐ろしく目立つその場違いな美しい男に気付き、息を飲んだ。

「こりゃあ……どうかしたのか？　怜治君がお友達を連れてくるなんて、初めてじゃないか。ついでにとびきり綺麗な人だな……　怜治君と並ぶと、対で作られた人形みたいだ……」

対、と指して言われたのは義経のことだ。

義経は何でこんなのと対なんて言われなくちゃならないと内心では盛大に目の前の男を罵ったが、流石に初対面の気の良さそうな人を捕まえてそんなことを出来るはずもない。

お陰で表面上は大人しくしているが、黒いオーラの漂う義経に、うっと背後の澤田が一步後ずさった。とてもではないが、不機嫌過ぎるのが伝わってきて近くに寄れなくなったらしい。

これに瑞名瀬は暫し顎に手を当てて俯き考え込むと、ゆっくりと面を上げてこう言った。

「友達……?」

そつだ、と言われても、違つ、と言われても確かに微妙な気持ちにはさせられたらう。だが、この反応はこの反応で、何か気に食わないのは気の所為なのか。

義経は咳払いをすると、店主の男に自分から声をかけた。どうせ瑞名瀬のことだ、義経達を上手く紹介なんぞ出来るはずがないのだから。下手な紹介をされるくらいなら、自分からしてしまおう、そう思った。

「布川書店の店主はあなたで宜しいんですね?」

「あ……ああ。私が店主の布川だよ」

「私、瑞名瀬氏からの依頼でこちらに参りました。いわゆる被い屋のものです。名を六花神義経と申します。宜しく」

義経は小さな名刺を取り出すと、店主布川にすつとそれを差し出す。

被い屋と聞いた途端、布川は瑞名瀬を仰ぎみて 何やら意を決したようである。

「こちらへ……奥にどうぞ」

出入り口には店じまいの看板を下げるのもそこそこに、布川は三人を連れて奥の部屋に姿を消した。

23 (最低な駄目人間) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

23 (最低な駄目人間)

奏はうろつろと書店の中を歩き回るも、その全ての棚を回り終えると落胆に肩を落とした。

「何も無いや……」

降矢邸の図書室、そして六花学園の図書室、そのどちらもが蔵書が素晴らしいものであるためか、読んだことがある本しか無かったのだ。

がっかりだとばかりに肩を落とすと、奏は出入り口に向かって歩き始めた。

「あら？どうかしたのですか、奏。何だか元気が無さそう……」

「あはは……」

肩を落としていたのを見られてしまい、心配そうな目を向けてくる雫に、奏は何とも居心地の悪さを味わう。

何と言ってもその背後に引き連れている少年二人の目がきつい。千草はこれで自分で気づかないのが本当に不思議なくらい、奏にあっちへいけとばかりの目を向けてくるし、健は健で雫と奏が二人で話し始めた途端、寂しげな目を雫に向けている。まるで犬のようなその目にこちらが悪いことをしているような錯覚さえ抱く。

奏は自分のポキャブラリーの無さを悔やむが何とか理由を捻りだし、その場を後にした。

けれど雫はこんな時まで持ち前の天然さを発揮して、奏へこんなことを告げるのだ。

「奏！あまり遠くにいったはいけませんよ？三十分以内に帰ること

！危ない道には入ってはいけませんからね！！」

「はあーい！」

勢いよく腕を上げて応じる奏に、雫は未だ不安げな表情を浮かべている。

奏が入り口の扉を潜りぬけて見えなくなってしまうと、ついに行ったほうがいいでしょうかと気をもむ様子はまるで奏の母親のようだった。

それを見てお前は何を言っているんだとばかりに千草が言った。

「あいつだって子供じゃないんだ。そんなに心配するなんて……むしろあいつが不憫だろう」

子供扱いをされて嬉しい年齢ではないのは、見ただけで分かる。それだけに可哀想だと言うのだ。

千草のそんな言葉に反射的に顔を上げるものの、雫は言葉に詰まった。

何と言いだせばいいのか、上手い言葉が見つからなかった。

「そうじゃなくて、ですね……」

千草のきつい眼差しを受けると、すっと視線を逸らし俯いてしまふ。

それがなんだか気に食わなくて、千草は雫にぐいと詰め寄るがいつもならばここで邪魔は入らないのだが（義経達が居る時は非カウント制だが）ここで健が割って入った。

「まあまあ。なんか理由でもあるんでしょう？雫がそうまで気にする

んだからさ？」

雫、と健に何気ない風に名を呼ばれ、雫は一瞬ぎくりとした。あれから名を呼ばれる機会もなくいたというわけでもないのに、矢張り、慣れない。

「こういうのは数をこなすと慣れるもんだから　　っても、早く慣れて欲しいけどね？」

健はそう口にして笑っていたが、雫はこれになれる日など、一生来る気がしなかった。

雫にとって名を呼ぶものは両親と従者の三人、そして櫻子と奏のみだった。

それ以外は降矢のブランドのみを指し、彼女のことを呼んだ。後はお孫様、だったかしら？

呼ばれ慣れない人から呼ばれることの恥ずかしさなのだろうかと思いつつも、雫は恥ずかしさから染まった頬に手をあてて更に俯く。

千草は二人のやり取りにむっとしながらも入ることが出来ないのか、押し黙ったままだ。

それをいいことに健は雫の手を取ると、首をくいと傾けて向こうへ行こうと言った。

「なあ、それよりもここに俺らまで連れてきた理由ってのは、もしかしたら今話してるんじゃないのか？聞かなくていいの？行こうよ」「あ……そう、ですよ。行きましよう。お父様達のところへ」「……んじゃ行くか……って。え？あれちよつと待って!？」

健が仕切ろうとしたわけではないのだが、雫を引いて行こうとしていたところに、千草がやや強引に雫の腕を掴み、ずんずんと先へ

と進み始めたのだ。

雫はそれに引きずられる形のままに、真っ青になって全身が引き攣ったように強張っている。それを手に触れた感触から感じると、健はしようがないとばかりに握った手を優しく再度握りしめてやった。

安心感を与える様に、それはじんわりと健の熱を伝えていく。すると雫は健の方へと振り返り　ぎこちないまでの笑みを浮かべるのだった。

「行きましょう」

「ああ」

そうして三人までいってしまつと、奏だけが表に残つた形になったのだが　奏は約束の三十分が経つても、戻ってくることは無かつた。

おかしいと気づいたのはそれから二十分も経つてからだ。

鷺宮からの通信で、彼らはそれを知つた。

いらつしゃいと手招く美女の誘いを受けて、奏は一人、小道を進み続けるのだった。

「　　凄く綺麗だ……」

「そつでしよう？……ね、だから、ずっとここに居てくれるでしょつ。」

瑞名瀬が人を伴つてこの古書店に来るのは珍しいを通り越して初めてということもあつてか、布川は驚きつつもこれを歓迎してくれ

た。

なんでも布川と瑞名瀬の付き合いは、それこそ十年以上の付き合いだという。

「もう最近　といってもここ数年のことだが、家族ぐるみの付き合い合いでも言うのかな、ふらつと時折やってくる怜治君を見つけると、食事の世話を焼いたりなんだりと、よくしたもんさ」

それを聞けば雫は、ああここでもかと頭が痛くなった。

「やっぱり、瑞名瀬さんはそんなに前から食事を忘れて？」

「ああ。まあね。そうだなあ……ちよくちよくきてたと思っただらばつたり来なくなつて……それで次に来たときにはげっそりしてるなんてしよつちゆうだった。最近は血色もいいし、心配はしてなかったんだけどね。もしかしてお嬢さん達が面倒を見てくれたのかな？」

これに雫は曖昧に頷いて見せた。

だが、それで済むはずもなかったのは義経や彼女の許嫁二人である。どういふことかと雫に彼らは詰め寄った。

「え……ええとその……瑞名瀬さんは、ですね、食事を忘れて読書に没頭するタイプです。その、それと研究もですけど、没頭すると食事を摂ることも、服を着替えることも、掃除も……お風呂もですか……酷い時はそのう、今が何月の何日か、自分がどこにいるのか、それすら忘れてひたすらそれに邁進し続けてしまうような方なんです。……そういうこともあり、奏とよく食事を……その……」

時折振っている、と言われれば、義経は澤田にどういふことかと

尋ねた。

「え……ええと、よくは私も分からないのですが……」
「んもう！使えない！！って言うか雫のこと見張ってる鷺宮なんかは知ってたんじゃないの！？どうなのよそこそこ！」

今すぐ電話して聞いてやるんだからと義経が端末を取り出そうとするのを雫が慌てて止めると、今度は千草はあからさまに不快そうな目を向けてくる。

その脇に座している健は「そうなの、ふうん？」と、これまたどう判断したものか分からないような顔を向けてくるが、雫としてはどの顔も、何故か今は見返せないほどに、妙な圧迫感が感じられた。

い、威圧感が……

雫がじっと三人の視線に耐えていれば、瑞名瀬がその手を軽く握って見せる。

突然のこれに、雫はぱつと顔を上げるものの、大丈夫と言っている目とかちあい、ふつと強張っていた身体から一瞬、力が抜けた。

「雫っ！」

「ひゃいっ！！！」

「……どういうこと？きちんと説明して欲しいんだけど」

義経が若干怒りに引きつった表情でこう尋ねると、雫はふいに何か合点がいったことでもあったのか、一瞬目を見張ると、そうかと何度も首肯しつつ一人納得がいったような満面の笑みを浮かべた。

突然の雫の表情の変化に、義経達は益々もって分からない。

雫は茶を啜りつつ何か思考を凝らし始めた瑞名瀬を見て、それから義経を見つめると悪戯っぽく笑うところだった。

「お父様は知らなかったのでしょうか？……まあ、無理もありませんが　瑞名瀬さんはお爺様が引き取った、お父様の義理の弟に当たります。ですから義理の兄弟ですね。ここ二年ほどは降矢邸内で暮らしているのですよ？」

そういえば義経達はここ数年、帰宅してきても数日寝泊りをしては、直ぐにも仕事に出かけてしまい、降矢邸内には居なかったと思いだすと、雫は妙に納得してしまった。

「瑞名瀬さんと奏と、三人で時々食事を摂ることもあったのですが……そうですよ、お父様は居なかったことのほうが多かったです。うん！これで分かりました」

解決ですねと雫が満面の笑みを浮かべて言うそれに、全然解決していないと内心ではぶんぶんと首を横に振る男達の姿があった。

だが実際には、ただただ呆然としてしまって、口を開くことすら出来なかったのだが。

24 (風車の店主と奏) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

24 (風車の店主と奏)

「……………え、よく聞こえなかったんだけどもう一回言ってくれないかな？」

義経はぎしりと固まると、雫に引きつった笑みを浮かべて指を一本立てると、ワンモア！ワンモア！と、何度説明をさせてもそう繰り返す。

雫も「ですから……………」と何度も説明を繰り返すが、どうやら義経は決して認めたくないだけのようだ。

「食事も風呂も忘れられるような駄目人間と義理の兄弟！？うっそでしょ、そんな有り得ないんだけど！！」

それだけ叫ぶと身もたえをして全身で嫌がる義経に、雫はおおろとし始める。

言われている側の瑞名瀬はと言うと、「駄目人間？そう？」と、布川に尋ねているが、布川はあえて言葉を返そうとはしなかった。誰がどう見ても、瑞名瀬が駄目人間であることは明白ではあったものの、可愛がつている当人にそれを言えるかと言われれば、また別の話だからだ。

その様子を見て、千草は首を傾げた。

「その……………瑞名瀬氏は、研究職の人なのか？俺の記憶違いじゃなければ、瑞名瀬氏は図書室で司書やってなかったか？……………うーん、瑞名瀬氏が何をやっているんだかよく分からなくなってきたんだが……………」

千草のこの言葉に、雫は慌てて付け加えるように瑞名瀬のことに

ついで語りだした。

「瑞名瀬さんはある分野の博士号をいただいているのだそう……私はそれについてはよく分からないのですが。ただ、その分野のこと以外ではありませんね。読書をするなど知識欲を満足させること以外には……こういつてはなんです。頭が働かないようなのです。ですから見かねたお爺様が瑞名瀬さんを引き取ってきたと……そういうことのようにして」

食事の世話なりなんなりと、自動とは言わないまでも、使用人に定期的にさせるようにしている、とのことだった。

ただし、掃除だけは下手なところを触られると分からなくなるといふこともあってか、瑞名瀬の研究が一段落したあたりで、瑞名瀬の機嫌を伺いつつ、妙な話ではあるが、掃除をさせて貰う……らしいのだが。

「じゃあなんでまた司書さんに？　つか司書の瑞名瀬怜治って、その瑞名瀬さんでいいんでしょう？」

健も一度は耳にしたことのある、図書室の窓辺の麗人とは彼のことだろうと言われれば、雫は若干首を傾げながらも曖昧に頷いて見せた。

「お爺様からの意向なのだそうです。瑞名瀬さんに、もう少し人と関わって欲しいからということと、それと……もう少しだけでいいから、時間というものを学んで欲しいそうです……」

「ああ、なるほどね」

無理やりにも時間に厳しい仕事をさせて、そしてもう少しまっとうな生活を送れるようになればと、そういうことなのかと思い、一

同これに納得した。

ただ、納得したと同時にこれはどこまでも深く痛感したことだったが、残念ながらそれは、あまり実を結んでいるようには思えなかった、ということだが。

「父上……あんまり頭良くないのかもしれない……」

瑞名瀬がそんなことでどうにかなると考えていたのだから、これはある意味だが、相当に宗一郎という人間は、お人よしの物の考え方をするのもかもしれない。

なんでまたと義経がずんと落ち込んでいれば、千草がこんな、慰めるような言葉を言ってきた。

「いや、計算違いってレベルじゃないから、そこは宗一郎氏が悪いとは思えないんですが……」

だからあまり自分の父親をそう馬鹿にしてやるなと口にすれば、珍しくも義経が千草の言葉に慰められたのか、素直に有難うと口にするのだった。

布川が瑞名瀬におかわりの茶を注ぐと、瑞名瀬が口を開いてぼそぼそと語りだしたのはある事件のことだった。

「このあたりで、女の声が聞こえると噂になっている」「
「女の声？」

瑞名瀬に義経がこう尋ねるも、瑞名瀬はそのままだんまりを決め込んでしまい、ただ黙々と茶を啜り続ける始末だ。もう喋りつかれたのだから、雫が口の端から垂れる滴を拭いやりつつ疲れまじ

かと尋ねると、こくと首を振ってうとうとと眠たげな顔になってきた。

「お前、一体何のためについできたんだ。」

全員が瑞名瀬にこう言いだしたかっただのをぐっと堪えていれば、布川が瑞名瀬の言葉を繋ぐように口を開いて語りだしたのは、このあたりに纏わる、とある事件だった。

「怜治君の言う通り、このあたりに女の子の声が聞こえるって、妙な怪談話になってるんだがね。困ったことにこれが最近、ただ怪談話をして怖がるだけじゃ飽きたんだろうが　幽霊を見つけようってネットなんかで盛り上がっちゃってるらしいんだよ」

「ネットで？」

「まあ、肝試しみたいなもんなんだろうが、現地の人間からしてみればいい迷惑だよ。それに　こう言っちゃなんだがね、危険でもあるからね……」

正直手を焼いていた　ということ、瑞名瀬にぼやいたことが今回の切っ掛けだったようだ。

だが布川の言葉を耳にした途端、義経の顔色が変わった。

「……………危険、ということ」

本当に何かが出る、ということだ。

そして『危険』ということは、以前その女の声を聞いた者に、直接何かがあったということでもあるだろう。

それも、危険というからには怪我などを負ったということだろうか　ごくりと義経が喉を鳴らせば澤田と義経は目配せをしあい、すべきことをするために、布川に詳しい話を聞くことにした。

「一体何があつたんですか？もしかして、声以外にも何か…………あつ

たり？」

声を響めて尋ねてくる義経に、布川は一度視線を外し、ややも経つてから口を開いた。

「ああ。地元のもんは皆、神隠しにあつたんだと言っているよ」
「神隠し……」

水を打ったようにしんとなったその空間を、割る様に入ってきたのは通信端末の発する音だった。

義経が電源を切っておけば良かったと言いつつ、布川に一度席を外すと断ると、端末に出て腰を浮かし たかと思えば、一瞬にして表情を強張らせて身動きを止めてしまった。

「 奏が……居なくなつただと!？」

+++

奏は布川書店を出ると、周囲を散策すべくあてもなくふらつき始めた。

どこでどう見つけてきたのやら、帝都にしては珍しく小さな脇道がひしめく珍しい街並みをしている。

これが下町というものなのだろうか、奏には馴染みのない街並みに、自然と心が躍る。

整備の進んだ道ばかりではなく、矢張りこういった昔ながらの町並みの残る道が、まだあってもいいと思った。

「うーん、ここいいなあー」

この場所をそのうち絵のモチーフにして見るのも良いかもしれない、そんなことを考えながら歩いていけば、奏の目に小さな屋台が入った。

屋台の横の小さな椅子に腰かけているのはその屋台の主なのだろう。麦藁のつばの広い帽子を被って俯いているのか、奏の位置からではその表情どころか、口元すらも窺うことが出来なかった。

「こんにちは、坊っちゃん。風車はいらんかね？」

「風車……珍しいですね」

からからから、からからからから。

一陣の風が舞いこむと、朱色の風車が一斉に音を立てて回りだした瞬間、奏は気がついた。この古風な町並みと秋晴れの青空、そして朱色の風車が見事に溶け合っているのだ。

何と言う素晴らしい光景なのだろうかと、奏は息を飲んだ。

「……綺麗だなあ」

ぼつりと呟いた言葉は、風にのってどこか遠くへと運ばれてしまったようだ。男の耳には入らなかったらしい。

からからと鳴る風車に思わず見とれていれば、男は麦わら帽子の下から口元をにつと歪ませて浅黒い肌に皺を刻みこませる。

「そうかい？まあ、坊っちゃんみたいな子にとったら珍しいのかもしれないねえやなあー」

男は秋　それも最近では肌寒くなってきた時期だと言うのに、タックトップに半ズボン、そして足元は草履といった出で立ちだ。恐ろしく軽装なその男の姿に、奏は首を傾げつつも別のことを尋ねて

見せた。

「今、何時ですかね？」

端末という端末の一つも身につけない奏は、こういう時に苦勞する。

奏についている鷺宮の目や耳は、こちらの言いたい言葉を言えば応えてくれるわけではなくて、ただ聞いていてくれるだけなのだ。完全な一方通行での監視であるため、言葉を返してくれるわけではないために、ちよつとした用件を知りたい時には大変苦勞する。

奏は周囲を探してみても、時計がどこにも無い事が分かっていたためにこうしたことを尋ねてみたものの、男は時計だったらほれそこにあるだろうと指を指して見せたのは空だった。

「お天とさんを見りゃあいい。今は　そうさな、昼過ぎかい？」

見れば太陽の傾き加減から、割り出せる時刻は簡単に見積もってみても二時か三時か……と言ったところか。

奏は男にそうか、こういう方法もあったのだとぼんと柏手を打つと、改めて男に感謝を述べた。

「時計以外に知る方法があるんですね。すっかり頭から抜け落ちてました」

有難うございます、と言ったところで奏は困った。

本当は、もつと細かい時間を知りたかったのだ。

けれど男は腕時計も身につけていない。それどころか時計を持っていないのかもしれない。

迷った末に奏は男と別れて元来た道を引き返すことにした。

雫との約束の時間に、もう間に合わないかもしれないからだ。

「結構歩いたからなあ〜……もしかしたら怒ってるかも。うー……
どうしようかなあ」

怒られたら嫌だなあと考えつつも奏は実にのんびりとした足取りで歩く。

遅いから怒られるかもとは思えたとしても、奏は、早く帰らなければと、走ろうとまでは考えない。疲れることは極力したくないのだ。

だがそうは言ってもと大きく息を吸い込むと、誰にともなく首肯して告げた。

「まあいつか、怒られる価値のある散歩だったよね」

綺麗なものを沢山見つけられたのだ、これはこれで悪くはない時間だった。そう納得すると、奏はゆっくりとまた周囲を見回しながら歩き始める。

のんびり、のほほん。奏はゆっくりと街並みを満喫しながらそのまま歩き続けたのだった。

25 (無限ループ迷子) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

25 (無限ループ迷子)

「事件です」

奏はあれからどれくらい歩いたのか、のんびりと足を運んでいけば、またもからからと風車の奏でる音のする、あの小さな屋台に出会った。

そして、その店主である男にも。

奏は目を見開く。

「えー……っ」と

僕向こう行きましたよね、と男に尋ねてみるも、男は首を傾げて坊っちゃん何言ってるんだいと、まるで奏がどうかしてしまったのかと心配するような言葉を発するのだ。

「向こうも何も、坊っちゃん、ここ初めて通るじゃねえのよ。どうかしたのかい？迷子かね。嫌だねえ……そんなくらいのでかさなんだ、迷子なんて格好悪いことしてなさんな」

まるきりの初対面であろうと告げる男に、奏は急激にざっと血の気が引いて来るのを感じる。

「い、いやあー……そうですねー……」

誤魔化すように奏は笑うと、男の前から逃げる様に走り出す。
元来た道へまっしぐらだ。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

奏は一心不乱に走り続けた。

あの男は一体なんなのだ。そもそも、この道はなんなのだ。

先ほどどれだけ歩いたかと思っただけだ、飽きるほど歩いたかと思えば、またあの男が目の前に風車の屋台を伴って現れたのだ。

愕然とした。

これは一体どんな現象だと言うのか。

奏は走り続ける。このわけの分からない恐怖から逃れるために。

走っていけばまたも男に出会い、男はまた「風車はいらんかね？」と尋ねてくる。

どんなにもう会いたくないと奏が願っていても。

男は目の前に現れ続けるのだ。

そうして、坊っちゃん。風車はいらんかね？と声をかけてくるのだ。

ぞつとするなんてものではなかった。

「何ここ何ここ何ここ！」

けれど毎回、走れば走るだけ、奏は男に会う距離が詰まっていくのを感じた。

最初は長い長い距離を走っていたのに、十を超える回数男に会った頃にはもう、百メートルも走ると男の姿が目の前に見えるのだ。

「坊っちゃん、風車はいらんかね」

奏はとうとう根負けする形で地面にべたりと座り込むと足を投げ出した。

「も……限界っだああああ！無理！足がもう棒です！！ほんともうここなんなの！？」

荒くなつた息だけではなく、普段では考えられないほどに奏は語気を荒く喚き立てると、男は目を見張つて驚いた。

「なんだかお疲れのようだなあ。どれ、茶でも飲んでいくかい？」
「お……お茶……くださいいい……」

へろへろになりながら這つて男の元へと向かうと、男は奏を屋台の前にある、小さな一軒家の軒先に案内する。

丸椅子を奏に寄越すと男は麦茶を小さな硝子のコップに汲んでくれた。

それを喉に押し流すと、得も言われぬ清涼感が喉を突き抜ける。

「くっ、……うっうっうっ！美味しい！！」

「そうかいそうかい。ただの麦茶だが、喜んで貰えたなら嬉しいやね」

男もからりとコップの中の氷を鳴らしながら、喉に麦茶を流し込んだ。

「そうだろそうだろ。もう一杯いるかい？」

「……はい！」

二杯三杯と口に運ぶとようやく人心地ついたようで、奏はふうと息をつくつと、この場所にまた、迷いこんだ時のように屋台の目の前でぼつと小道を見つめ続けた。

「……こっ、本当に綺麗だ」

「そうかね」

「ええ……本当に……」

じーわっ、じーわっ、じーわっ、じーわっ、みみみみ……
蝉の鳴く声がする。

「夏ですな……」

「そうさ、夏だよ、」は

いつまでも。

いつまでも、ここは夏なのさ。

男の表情はいつの間にか能面のように表情が欠落していき けれど、奏はそれに気付かないままだ。

奏はいつの間にかその夏を彩る空間の中、暑さを感じるのが当たり前になっていった。

「あれ？僕、何で長袖なんて着てるんだろ？おかしいなあ……」

それは本人の気付かぬうちに、ゆっくりと、浸透していった。

「あら？ここら辺じゃ見かけない人ね。おじさん、この人だあれ？知り合い？」

見上げるとそこには、夏の照り返しのきつい日差しの中、日焼けに困ったことなどなさそうなまでに、真っ白な肌を持つ少女が居た。

「僕は」

+++

鷲宮からの連絡の内容は、奏が行方不明だというものだったが、これに首を傾げたのは健だった。

「行方不明って……そんなの、音声端末でもいいから、持ってないの？通話すればいいじゃん」

さもそれが当然とばかりに言われてしまえば、雫と義経は顔を見合わせ沈黙してしまう。

すると、そこでやんわりと千草が健に言うのだ。

「いまどき有り得ないと思うかもしれないが、あいつは何一つ、端末は持ち歩いてないんだ」

「……嘘だろ？」

「本当だ」

本当だと言われれば、今度こそ健は絶句してしまった。

今時音声端末、液晶端末を持ち歩いていない人間など居ない。確かに無償でこれらは手に入るものではないものの、降矢で暮らしているのだから、それこそ持っていないはずがないのだ。

端末とは、決して安いものではない。だが、無理をしようと思わなくとも、買えなくはない程度の値段である。

奏は降矢の人間だ。端末は無償提供されるわけではない上、安価でもないもの。それでも、それこそ高価なものさえ安易に手に入る位置にいるのだからと、当たり前前にそう健が勘違いしてもそれは仕方ないことだった。

けれど雫が言いにくそうに言うのだ。

「奏は、その……降矢の家の者ではありませんが、名字からも分かる通り、降矢の養子になっていてるわけでもありませんし、元から孤児という経歴の持ち主でして……」

「え……孤児？」

孤児になんら偏見もないのだが、それでも健は驚いた。それと同じ時に矢張り降矢はそうした慈善事業に篤いのだなと関心したようだ。だが、続く言葉に健は度肝を抜かれた。そしてそれは、千草も同様だったようで 目を見張って二人は驚愕していた。

「私とその昔、奏を拾ってきて……それから一緒に暮らしているのです」

ですから降矢といえど、その身分は瑞名瀬とは違うと言われれば、健は混乱してきたのか、頭を片手で抑え、意味が分からないんだけどと複雑そうな笑みを浮かべていった。

流石に降矢が、ではなくて雫が拾ってきたというのは予想外の出来ごとだったらしい。だが、義経が二人にやんわりとわって入る様に口を開いて雫への質問をシャットアウトしてしまう。雫にはどうやら聞いて欲しくはないようだった。

「誤解しないで欲しいんだけど、別に奏に対する差別とかで端末を渡してないとかじゃないからね。奏は孤児院育ちの子供なんだ。だから……物を買い与えたくても、させてくれない。勿体無いつて、奏本人が言うんだよ。無駄遣いするなつてね。それはうちの雫も一緒だけど……奏の方はもう、病的とさえ言える」

そのような端的なまでの説明を終えると義経は端末を切って布川に話をと、再度話を促した。

先ほど大仰なまでに（この場合は当たり前前の反応だったろうが）奏の所在が分からないことに驚き慌てていた義経の、このあまりの変わり様に健は何故と疑問を投げかけた。

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！！あいつ行方不明なんだろ？！なの……なんでそんな平然と仕事って切り替えられるんだよ！探しに行かなくてもいいの！？」

健がそう義経に喚くも、鬱陶しいとばかりにぎろりと彼を睨みつけると、義経は布川に更に促す。

そして健にも言うのだ。

「奏はただの行方不明じゃない。あいつは端末を持っていなくても、発信器のようなものが常にくっ付いてる。それがぱったりと位置をトレース出来なくなっただよ。この意味が分かるか？」

分かるか、と言われても健には、義経があの日義経のように、圧倒的な存在感を有し始めたことしか分からなかった。

義経は尚も続けてこういった。

「この世界のあらゆるところに居たとしても、あいつの位置が分からなくなるなんてことは先ず、有り得ない。それが位置不明の状況に陥ったとなると、十中八九、間違いなく、あいつは、奏は、ここじゃない、別のどこかに行ってしまったことになる」「ここじゃない……どこか？」

千草が怪訝そうな顔を一变させ、一瞬にして全身の毛を逆立ててぶんぶんとその場で横に首を振り出した。

「じよ、じよじよ、冗談じゃない！……出たのか！？出るのか！？」

言わずもがなそれは、所謂この世の住人ではない、『あれ』である。

「出るって……高遠君、君、先ほだから一体何を聞いてたんです？
出るって何度も言いましたでしょう。怪談話で危険とくれば、安
易に想像がつくでしょう？」

やんわりと澤田がこう言えば、千草は冗談ではないとその場から
すっと立ち上がると、一目算に逃げだした。

「あらあら……困った子ですねえ」

「……………ふん」

根性なしのガキだなと義経が鼻で笑うと、そんな義経に向かって澤
田が一言、

「けれどあの様子ですと、過去に何らかのトラブルでもあったよう
に私は感じましたが、どうなんでしょうね？矢張り……見える子、
なのでしょうか？」

「……………分からない。見えるか見えないかは、それこそ実際に一緒に
対峙してみなければ分からないものだからね」

26 (迷子二人目) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。ご了承くださいませ。

26 (迷子二人目)

「千草っ！千草っ！危険ですから……千草ーっ！！」

雫は千草を追って布川書店を後にすると千草の姿が小脇の道の中に消えようとしている。あれは　と、追いかけるも、追っていた背中が突如として消え失せてしまったのだ。

「嘘……でしょう？」

それは千草が二人目の失踪者になってしまった瞬間だった。

雫が呆然とその場でへたりこんでしまえば、周囲を少しずつつ取り囲んでいくのは地元の人達だろう。どうかしたのかと声をかけてくるものが始まるが、雫は一向に反応を返そうとはしない。むしろ反応が返せないほどに驚くような出来事が目の前で起こってしまったからなのだが、そんなことは周囲の人達は知らない。

「おやまあ、フランス人形みたいな綺麗な女の子じゃないの」

「中学生？あら、六花学園の子かしらこの子。大丈夫？お嬢ちゃんお嬢ちゃん？」

「どうする？警察でも呼ぶか？こんな可愛い子、このまま放置しておいたら大変なことになっちゃうぞ」

「そうよねえ……危ないわよねえ……」

夕方で時期が時期だけに、そろそろ暗くなってきたというところである。こんな時間、こんな暗さで女の子を一人、このまま置いておくのは危険だろうと話合う周囲の声も、雫の耳には届かない。

ざわざわと人だかりの山の中で雫がぐるぐるとどうしようどうしようと考え続けていれば、人垣をかき分けて割って入ってくる者が

あつた。

「すみませーん！ここに可愛い女の子がいるって聞いたんですけど、俺の知り合いかもしれないから通してくださいーい！」

流石にこの知り合いの声に雫は意識が戻って来たらしく、ぱつと振り返ればそこにいたのは健だった。

千草に続いて雫までも駆けだしたために心配になって後を追ってきくれたのだろう。

だが十分もしないで外で人垣に囲まれるようなことになっているとはと、当然ながら呆れていた。

「なんでこんなに人に囲まれてるの？ちょっと驚いたんだけど」

「え？……ええ？あ、……あれ？？」

雫は周囲を取り囲む面々をぐるりと眺め、何故と疑問が表情に現れたものの、心配でついていたんだと一人の四十から五十くらいの初老の女性が笑ってそう告げると、雫は慌てて全員にぺこぺこ頭を下げ始めた。

「す、済みません！！何やらご迷惑をおかけしたようで！」

「いいんだよ。それよりも本当に大丈夫なの？」

「そうだぞ、行き成りそんな頭ぶんぶん振ったら、まーた貧血で倒れちゃうよ」

「ゆっくりしていくと良いよ」

「身体は大丈夫？何か……水でも飲んでいく？」

家が近所だから飲み物を持ってこようかと告げるおばあさんに雫はもう大丈夫だからというものの、おばあさんは全く信じていないようだ。先ほどへたりこんでいたのが急に起きあがったのだから不

安に思うのも無理は無い。

「あのっ、あのっ……本当に、有難うございました」

この優しい言葉に先ほどの出来ごとで放心していた雫は安心したのか、涙がぼろりと一粒零れ落ちてしまった。

涙にぎよつとした健は慌ててハンカチを出そうとして 無い、忘れてきたか落としてきたのかと頻りおたづけばどうやら腹が決まったようで、雫の頭を抱きよせてそのまま自分の胸を貸して泣かせてやった。

「えっ、あのっ！」

慌てて雫は胸から顔を外そうと手を突っ張るも、健は更にぎゅつと抱きこむようにしてしまふ。放すつもりはないようだ。

「も……ほんと何？何なの今日。千草はホラー苦手とかで逃げだすし、雫は雫で追っかけてったら泣きだすし、義経さんはあの奏君？のこと探すつても布川さんの話聞いてからとかって言うし……俺わけわかんないことずくめで困るんだけど……マジ勘弁してくれよ……」

「すみ、ませ……ひぐっ」

「あああああっ！ごめんっつてば！別に責めてるわけじゃないの！ただ……もうちよつとこっちきてから説明があつてからならわかんだけどさ？俺こっちきたばっかりだよ？それなのに幽霊とか……本気なのかよって思う」

千草が目の前で忽然と姿を消したために、雫はあまりにも精神に負担がきていたためにちよつとこのことで涙がぼろぼろと零れてしまふようだ。

奏が居なくなつたことにもとても驚いたことだろう、そこにつけて目の前で千草が消え失せる　二度も同じ日に、それもそう変わらない時間に消えたとなれば雫でなくとも驚くと言ふものだった。

ある意味では奏が消え失せたと聞いた時はまさか、と半信半疑の部分もあつたのだろう。それが千草の目の前からの忽然と消え失せるといふその光景を目の当たりにしてしまい、奏もでは　と、急に現実めいたからこそこのこれだ。健にもそのように流石に見当がついていた。

ただ、だからってね、急に泣かれると困る。

健は雫のあまりの泣き顔の可愛らしさに胸が締め付けられるようだった。

そして、それと同時にこんなことを考えてしまふ。

自分がかもしも、あの幼馴染である奏や、千草のように忽然と消え失せてしまったら　事件などに巻き込まれてしまったら、君は悲しんでくれるのだろうか。

知れば知るほど雫に、かがりに、惹かれていく自分がある。そのことに気づけば健は参つたなと思うのだ。

今まで好きになつた子は確かに居たけれど、そのほとんどが相手から好意を寄せられて段々とだった。ああ可愛いな、そうは感じていたけれど、今感じている胸の締め付けられるような感覚は、あつたか　そう問われれば難しい。

もしかしたら、彼女たちの恋する相手を見つめる眼差しに、恋をしていたのかもしれない。

一生懸命なその眼差しが、眩しくて可愛くて、だから惹かれていたのかと思えば苦笑してしまふ。

そんなの恋じゃない。

けれどこんな真逆のパターンははじめてだ。雫とかがりにこんなにも好いて欲しいと願ってしまっ、そんな浅ましい自分に気がついて、むしろ健は自分自身で驚きを隠せなかった。

まさか、とは思うが、健は今、初恋というものをしてるのだからかと考えてしまった。

賢明に雫を慰めていれば、初老の女性が「幽霊?」と、怪訝そうに口を開く。その目は、いかにも胡散臭そうな目をしていて、少々これには辛いものを感じた。

「……その……知ってるんですか?ここらへんの幽霊のこと」

「いや……幽霊って言っても、そんなのねえ……」

困ったように初老の女性が脇に立つ男性にそう言えば、男性も後頭部を掻き毟りながら眉をひそめて考え込む様な顔になってしまった。

「もしかしてお嬢ちゃん、誰か目の前で消えちゃったのかい?」

+++

少し進んだところに、道路沿いに席を設けたジュースバーがあったので、そこで話を聞けることになった。

初老の女性と男性に、そしてジュースバーの看板娘の女性に加わり、話をするに。

十代前半から二十代前半くらいの男性が、近年、行方不明になる事件が頻繁に起こっているというのだ。

それもなんでも、長身の男に限りということなのだが、女性曰く

「長身って言ってもね、百七十も超えていれば行方不明になっちゃ
うみたいで……」

「ただし、同じ場所を隣り合って歩いていたはずの男の子は無事だ
つたらしいんだよ」

健はこれにどういうことかと尋ねると、男性が口を開いた。

「なんでもね、残った男の子はまだ成長期前だったんだろうね、百
五十センチそこそこだったらしいんだ。だから、失踪者は長身だろ
うって、言われてるんだよ」

たまたま、だったのかもしれないが、それにしても居なくなった
者達は、その全てが長身であり、年齢もほぼ同じ頃とくれば、これ
も共通項目と見て間違いないだろうと言うのだ。

栗がそれで千草もだったのかと首肯しながら口にすれば、居なく
なってしまったのは千草君と言うのかと女性が口を開く。

「ええ、そうです。もう一人が私の幼馴染で……名前は奏と言いま
す。二人とも……今日、居なくなってしまうって……一人は目の前で
……消えてしまったんです」

「……うーん、やっぱり神隠しってのは本当なのかもしれないねえ」
一人ごちるように初老の女性がこう言えば、看板娘の女性が眉を
顰める。

「やだよ、おばさん。そんなの迷信でしょう？それに……ほんとに
神隠しなんてなったら怖いよ」

どうせただの失踪だと、女性は早口で言うと、警察だってそう言ってるって締めくくるのだ。

「でも、目の前でぱっと消え失せたって証言だって出てるのに、神隠しじゃないっていうなら何故彼らは消えたんだ。おかしいじゃないか。世の中には説明の出来ないようなものが沢山あるんだよ。神隠しだって日本には昔からあったことだ。行き成り消え失せて……帰ってこない。失踪者扱いになる。知らないわけじゃないだろう？ 何度も地域の者達で話したじゃないか」

「だってさ……」

不気味ではあるが、認めたくはないが、それでも今まさに目の前で消え失せたとの情報さえ出ているのだ、これでただの失踪だろうと言われても、根拠が無さ過ぎる。そして、それを信じられるほど雫は自分の視力を馬鹿にしてはいなかった。

苦しい言い分かもしれないが、見間違いということもあるだろうと女性は応戦するものの、違うと思うと雫に即座に言われ、押し黙ってしまった。

「違うって……雫、もしかして何かここ……あるの？」

例の神との闘いで学ぶところがあつたらしい健は、ひっそりと声を響めて尋ねるも、雫は俯きがちに、ややも躊躇いながら口にした。

「あるとか、……私は良く分かりませんが、それでもお父様がこちらにいらしたのですから、何かあるはずですよ。こうした怪事件も時折、仕事としてこなしているの……余程この事件が不可解だと感じたからこそ、ここまで足を向けたはずなんです。だから、これは警察では手に負えないと判断したということなんです」

三人は雫の言葉に首を傾げるような顔をしているが、健だけはその言葉になるほど、といった多少ではあるだろうが、得心がいったような顔をしていた。

「じゃあさ、調査しよう。義経さんの役に立つために！」

それだけ言うと健は「あのっ、お姉さん、紙とか無いかな？くれない？それとペンも！」と、隣に居た女性から紙とペンを借り受け、この周辺の地図を描いて貰うことにしたようだ。

即断即決。雫の言葉を受けた途端、即座に行動にしてみせる健に、雫は困惑する。

「何をするつもりですか？」

雫がそう尋ねると、健は調査だよと真剣な面持ちを雫に向け、そしてにっこりと最後に笑ってこういった。

「見つけ出さないといけないっしょ？だから、やるの。雫も手伝って」

そうして健は雫の言葉を信じ切って見せると、その言葉を裏付けるために調査に乗り出すのだった。

27 (失踪するポイント) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

27 (失踪するポイント)

ファックスに使用するコピー用紙しかないがと言われ、取り出したのはコピー用紙が五枚だ。五枚もあれば書き損じても大丈夫だろうとは思っただけだと、女性は躊躇いがちに言葉を紡ぐ。

それを健は嬉しそうにはにかみながら感謝を述べて受け取ると、今度は周辺の地図を三人に書いて貰うことにした。

「周辺の地図ねえ……そりゃあいいが、一体どれくらいの規模で？」

「そうだなー……結構広く見て欲しいんですけど。なるべく失踪者が全員こちら辺で見なくなったとかって、噂がある地点が全部乗ってる様にして欲しいんです」

「それは……どれくらいだろうね……」

ふむと男性が思案するような顔になると、初老の女性が兎に角描いてみようと言った。

「紙が足りなくなったら五枚もあるんだ、テープでくっ付けばいいんだからはみ出すのなんて気にしないで細かく描いていこうじゃないの」

「そうだな。よし、そうしよう」

そして全員が一丸となって地図を描くためにコピー用紙に取りかかっていった。

+++

義経は布川の話を大方聞き終えると、現地調査のためにと布川を連れ出し町の商店街に向かっている。

するとその一角に、人だかりが出来ているところがあるのだ。義経は首を傾げるも、布川にあれば何かイベントでもやっているのかと尋ねるも、布川は今日はそんな予定はないよと、こちらも疑問を顔に張り付けて言うのだ。

「行ってみましようか」

「そうだな。行ってみよう」

三人でその場へと足を向けると、近づいてみれば聞いたことのあるような声音が二つ、耳朵を打つ。

「　　ってことは、ここら辺って山なんですか？」

「小さな起伏のある山があって、その高くなつてるところにも、もうビルだってお店だっ立っちゃってるから、中なんて見えないけどね」

「この奥でしょうか？」

「だね。行ってみようか」

「そうしましょう」

雫と健が説明を受けて席を立ったその時だ、義経が現れた。

「何してんの、君ら」

義経が現れた途端、人垣がざつと割れていく。それを目にしてはちぱちと雫は瞬きを二三度し、健はモーゼだなと呟いた。二人ともその後しこたま怒られたのは言うまでもないことだが。

それにしても恐ろしいほど目立つ男である。

義経が現れた途端、雫や健が霞んでしまうほどの堂々たる気配を

放っているその男に、周囲の意識はあつという間に浚われてしまった。

それまでは雫や健が可愛い、綺麗、どこの学校だのと尋ねられては作業を中断されていたというのに、義経が現れた途端、義経にその視線は全て奪われたのだ。そしてあまりの迫力あるその美貌に、誰一人と声をかけることはない。

というよりも、声をかけるようなことが出来ると思ってさえいないのかもしれない。

「始めから一緒にやってれば良かったな」

「ええ」

そうすればこちらの失踪者への質問をする合間に、面倒な「好きなものは何？」だのといった、煩わしい無関係な質問で手を焼かされることもなかったのか。そんなことを考えながらも面白いなと健は義経に集まる目を見て考えていた。

「不思議だね」

「何がですか？」

「いやね、俺らに向ける目は凄く、……何て言うか、こっち向いて！こっちと話してよ！ってやつなんだけど、義経さんに対しては、ただ見惚れてぼうつとなつて……凄く、声を奪われるような感じみたい？」

だからだろうか、周囲の声は今、どこにもない。

雫と健が声を小さくして話している、これ以外どこにも聞こえないのだ。

「なんかすげえなあ」

圧倒的な美というものを目の当たりにして、そして、その圧倒的な美を有する人間と、共に暮らしているという事実には健は苦笑するのだ。

自分の人生は今、相当面白い方向に転がっていつているようだ。そう思うと健は最近のこの日常が、途端に悪くないものに思えてきた。

まだその全てを説明してもらってはいないけれど、それでもわけが分からない、そんな毎日が、刺激的で楽しいと思うのだ。

布川を伴っている義経に、「やっぱりこれから現地調査なんだ？」と口にする、健は先ほどまでこの地域に住んでいる人の協力を得て作っていた地図を渡してみせる。

「なんだこれは？」

「それね、地図なんだけど……よく見てくれます？その赤い丸。そこが全部失踪者の消えたと思われる地点で……それで、奏君は分からなかったんですけど、さっき消えたばかりの千草が、その点になります」

上手く出来てるだろうと笑って告げる健に対し、義経は無言である。

一つ一つ説明をしようかと思ったが、義経からしてみれば、奏の話と千草の話以外は、今言われたとて困るかもしれない。そう考えた。

だからそのように赤い丸を指さしながら言ったのだが、義経は健の言葉に暫し声を失うと、ややも経ってから聞き返してきたのだ。

「……………なんだって？」

ここで雫と健ははたと思い出した。

「ああああ！忘れてた！」

「そうです！お父様、千草が！」

わあわあと二人で騒ぎ始めたのを見て、その言葉を聞いていけば義経は澤田と顔を見合わせて泣きたくなかった。

そうなのだ、雫も健も、二人ともが忘れていたのだが、千草までもが失踪してしまったことについて、連絡を入れておかなかったのだ。

千草が失踪した事実を知った途端に、義経は何かがぷつりと切れたらしく、だが流石に人前ということもあつてか、低い声でぼそりと言うのだ。

「何足引つ張ってんだあのガキ……」

余程叫び散らしたかったと見えて、拳を握りこんで腕が小刻みに震えているのを見れば、ああ、暴れ出してしまいそうで不安だと雫ははらはらと落ちつかない。これでいて雫は案外父である義経の気の短くそして荒い気性を心得ていた。

一人でも沢山だというのに二人も身内で失踪者が出たとなれば今日中に何とか、ないし、早めに始末を終えなければどうなるか分からない。

そもそも神隠しで数年見つからないこともザラなのだ。下手をすれば見つからないこともある。

そこにきて預かっている子供である千草の失踪である。

奏だけでも一杯一杯と言うところでのこれだ、義経と澤田が呆れかえりながらもぶち切れたとしても仕方なかった。

地図を見て布川が一言こついった。

「これは……円を描いているようだね」

「円……」

義経がおもむろに地図を広げてそれをじつと見つめれば、見えてきたのは確かに円だ。それも、先ほど雫と健が見に行こうと言っていた、小さな山を取り囲むようにそれはあった。

「一体なんでしょうね？」

円を描くということは、その中央に何かあるのかもしれないと口にする澤田に、義経は口到手を当てて暫し考え込むと、布川に尋ねた。

「この中央には何かあるんですか？……そうだな、例えば昔社があったとか、それか……祠のようなものがあつたとか」

これに布川は考え込むそぶりも見せずと言つのだ。

「いいや？あるのは桜が一本だけだよ。大きな桜でね……そういや昔はそこらへんからもその小さな山が見えたはずだよ。山と違ってもちよつとした高台ってほどしかないような山だったけどね。この道路よりも十メートルか二十メートルか？それくらい高いだけだから、もう店やビルが建つちまったら見えなくなっちゃったけどねえ……」

道理で山と言われても見えないわけである。義経はそれでかと頷くと、兎に角その山を見てみようと言つて現地に行くことにした。

その際雫と健にはここで待つように言い添えると、義経は澤田と

布川を伴って行ってしまった。

「ちえー、ここまで俺らが調べたのにさ」

唇を尖らせて不満を述べる健に、雫はくすりと笑うと慰める様に言うのだ。

「……仕方ありませんよ。健……まで、居なくなられたら困りますし。ね？我慢してください」

可愛らしくそう告げる雫の姿に、健はなんとも妙に居心地が悪く感じ、居住まいを正して誤魔化すようにへらりと笑うと小さく「ごめん」と謝った。

「今は自分達に出来ることだけしましょうか」
「だね」

そして二人は周囲の者達にまた聞き込みを再開するのだった。

28 (桜の木の下) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

28 (桜の木の下で)

義経達は小道を右へ左へと動きながら、やっとの思いで建物の奥にしまいこまれてしまったように、忘れ去られてしまった小さな山を見つけた。

「ここらへんも、もっと大きく開けていたのに、いつの間にか小さくなっちまったもんだ……」

桜の木が一本だけ植わっているだけで、他は雑草が覆い尽くしているだけのそこに、義経は何か他に嫌なものでも感じたのか、腕でうっとうと口元を覆うようにしてしまう。

澤田がそんな義経に尋ねた。

「そこまで酷いのでしょうか？」

「……澤田はこれ、感じないもんなあ……僕はモロだから可也……きつい」

義経の目には黒いもやがかかったように見えるそこは、まさに何か分からないが、まさしく『いる』場所だった。

これが見えないなんて羨ましいと呟くと、義経は布川に失踪者が増えた時期などがあるのか、それとも今までずっと失踪者がこの近辺で現れていたのかを尋ねた。

確実にこの場所が関連していることが分かったが、肝心中身の詳細が分からない。

果たして相手は一体何者なのか、せめて失踪者をこの場所が連れていく理由となる出来ごとの手掛かりが欲しかった。

すると布川がふと思い出したように告げるのだ。

「そういえば……去年ここいらにだろうけど、雷が落ちたんだよ。確か その頃じゃなかったかな。失踪者が出始めた頃は」
「雷に触発をされて……ということでしょうか？」

眠っていた何かを呼び醒ましたのが落雷だったかそうでないか、それは分からなかったものの、原因の一つではあるようだ。

落雷が落ちた時期からと言われ告げられた失踪者の数は、恐ろしい程の数に上る。

十八人の少年だ。これが去年からの一年間で失踪したというのだから驚きの数字である。

「なんで警察とか、本腰いれて捜査しないわけ？意味分かんないよ」

そうなつてくると益々もって穏やかではない。

落雷で何かが活性化するという話はままある。となると 義経は布川へとふいにこんなことを尋ねて見せた。

「誰かさ、失踪者じゃなくて、以前……可也前かもしれないけど、ここで死んだ人とかの話って聞いたことないですかね？」

この問いに関しては、布川は分からないとしか答えられなかった。

「申し訳ないね。私も一応はここに住んで長くはあるが、それでも知らないこともあるようだ。役に立てずに申し訳ない」

「いや、大丈夫です。布川さんが知らないとなると、もっと昔の出来ごとのようですから……逆に絞り込みが出来るようになりました」

義経はそう告げると、鷲宮へと連絡を入れた。用向きとしては先ほど布川へ尋ねたのと同じ用件であるが、尋ねられる間もなく、今探しているところだから待っているとの返答が返ってきた。

どうやら奏が消えてからずっと、こちらの様子は逐一観察していたらしい。

「悪いね、ほんと……お前が一番心配だろうに」

消えた奏のことを、毎日毎秒気にかけている鷺宮に、今この場で探索に加われない歯がゆさがどれほどあるのか、それは本人にしか知り様がない。

鷺宮はそれには答えずに、黙々と作業をこなしていく。すると、程なくして端末越しに聞こえた言葉に耳を疑った。

『……これ、か？対象者の名前は三島れい子、若い女だったようだ。死亡した当時の年齢は十四。その桜の木の下で首を掻き切られて死亡している。死亡時期は明治二十一年。因みに首を掻き切られてはいるものの、殺害されたわけじゃない』
「なんだって？」

雫と同じくらしい歳の頃の女の子の首が掻き切られているという事件でありながら、それが何故か殺害されたわけではないとは一体どういうことなのか。まさか自殺？自分で首を掻き切るなど可能なのか。そこまで考えてみたところで鷺宮が言いにくそうに言うのだ。

『どうやられい子さんとやはらは、ある男と心中したかったようだ。そっちの男は十六。名前は木下正一。そんてまあその心中相手の男も首のあたりを切られていたものの、こっちは傷が浅くて大事には至らなかつたらしい。心中したその日のうちに、倒れた二人がその木の根元で発見されて、れい子さんだけが帰らぬ人となったようだ。

だがまあしかし……れい子さんとやはらは相当その男を好いていたようだ。最後の最後でこの人のことは切れないって言って、貴

方は生きてと笑顔で死んだと記事には書いてある』

それは死ねなかった男が収容された病院で漏らした言葉だと記事にはあると言われ、義経は唸った。

ならば何故、次々と同じ年頃の男をその女は連れていくのか。

更に追加の情報としては、もつと昔から失踪者事件は続いていたということが分かった。恐ろしいことだが、明治のその頃からもうずっと、この近辺では失踪事件が続いていたのだ。

それも、人々の記憶から消える頃になると、ひっそりとまた新たな失踪者が生まれ、だからこそ今まで気づかれもなかったのだ。この事件が連続失踪者事件であると。

「分かった。有難う、一旦切る」

ぷつりと義経は端末を切ると、見ていた澤田が険しい表情を面張り付けた義経にどうということかと尋ねた。

すると義経は布川と澤田に向けて言うのだ。

「ここで心中事件が昔あったらしい。明治時代だそうだ。そしてそれからというものの、数年に一度程度の割合で、同じ年頃、背格好の少年が失踪しているそうだ」

「馬鹿な……そんなに前から失踪者が続いているれば、流石に誰かがおかしいと気がつくじゃありませんか」

布川が有り得ないと口にすれば、義経がこう答える。

「数年に一度の割合だったんですよ。だが、今のような頻度だったら確かに近辺に住む人が流石に気がついたでしょう。布川さんもそうですね、去年から十八人もそんなに一度に失踪すれば、誰でも気がつく。だがその前は数年に一度、それも消えるのはたった一

人だった。だからただの失踪事件で片がついていたんです。いや、もしかしたら失踪なんて取られなかったかもしれない。単なる家出人扱いだった可能性だってある」

「そんな！失踪ですよ！？それに……それにこれは、失踪なんかじゃない！消失ですよ！もう……こんなのは失踪なんてレベルで語れる話じゃないでしょう。それこそ……そうですね、神隠しです。もうこんなのはただの失踪じゃない！神隠しではありませんか！」

布川が現実では　いや、まともでは有り得ないことであるところの事件を評すれば、然もあらんと義経も澤田も首肯して言うのだ。

「そうですね、これは常識では語れない事件であると思います。だからこそ私達がここにきました」

この言葉のなんと心強いことだろうか、布川は何とかその失踪者達を助けてやって欲しいと深く頭を下げたのだった。

29 (夏の町) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

雫は義経の消えた方をちらちらと窺ってみては落ち込む、を繰り返していたが、もう何度目か、同じようにそつと小道を窺うようにちらと見上げてみれば、そこから義経達が現れた。

「お父様！」

暗がりから出てきた三人の前に、雫は慌てて駆け付ければ、三人は厳しい顔つきで雫を迎えた。

その表情に雫は足を止める。

健も雫に続いて駆け付ければ、それを見て恐る恐る尋ねたものだ。

「なんか……状況、よくなさそう……っばいつすね？」

「いい悪いってレベルじゃない、最悪だ」

「最悪って……お父様？」

雫は心細くなったのか、そつと胸の前で手を組み合わせると、指を絡めきゅつと握りこむ。

何があったのか、それは大変気になるのだが、聞けるような雰囲気ではない。

義経は二人には答えず、そのまま雫と健が先ほどまで話を聞いていた町の住人達の元へと行くと、この地域の周辺を　というよりもこの小さな山の傍に、その年代の男を近づかせないようにとの封鎖をしてくれと言うのだ。

「調べたところ、この周辺でもう何十年も前から失踪者が続出しているようです。これからその元を絶ちに行きますが、それまでは絶

対に近づけないようにしていただきたいんです」

要点のみのこの言葉に、住民たちは勿論、絶句した。

そして近づくなの言葉に全員が落ちつけていた腰を浮かして酷く錯乱したようになってしまふ。

確かに突然のことだから、その反応も無理もないだろう。

雫は自分も確かに驚きに眼を見張ってはいるものの、半ば覚悟していたこともあってか、落ち着いていた。

ただ、兎に角奏をどうにか助けたい。千草はあの後どうなったのだろうか、無事なのだろうかと不安だらけでぐちゃぐちゃと考え続けていて、辛かった。

早くどうにかしたいと気だけが急ぐが、自分にはどうすることも出来ないのだ。

本当に、こういう時はいつでもそうだが考えてしまふ　どうして自分には、何の能力もないのかと。

鷺宮さんのように、お父様に情報を提供出来たら役に立てた。

せめてそれくらいは出来るかと思っていたが、それはとんだ勘違いだったのかもしれない。自分が何を調べようとも、鷺宮の手に入れた情報には敵わない。

そもそもが健がいなければ、雫は一人ではあそこまで動くことは出来なかった。

健がいればこそ周囲へと聞き込みなど動くことが出来ただろうが、いなければ恐らく、今もあの場で惚けていたことだっただろう。

本当に、辛い　そう思った。

「もっと役に立ちたい……」

近しい者が危機に陥っているというのに自分はただ、手をこまね

いているよりないのか。

雫はただただ現実に打ちのめされていた。

義経と澤田が手分けをしてあの場所へと続く道を封鎖する手はずを整えていくのを見れば、雫は居てもたつてもいられずに、自分も何か出来ないかと尋ねた。

だが当たり前のように何も出来ることはないとすっぱりと断られてしまった。

雫はしょんぼりとそれに頂垂れると、健がそんな雫を慮って二人に食い下がったのだ。

「なんか、……ほら！なんかあるだろ！手伝えることくらい！」

「無い。お前達に出来ることはこの場で大人しくしていることだ。

いいな、動くなよ」

「そんな……」

健は雫がその非情なまでの物言いに傷ついたのだろうが、酷く打ちのめされたのを見てそつと支えてやったが、倒れこんできたその背のあまりの軽さに驚いた。

以前抱きしめた時の重さを比較してみてもこんなにまで軽かったかと思っただが、そういえば以前は雫ではなくてかがりだったかと思っただす。

「ま……待ってるだけなんて……嫌なんです。奏も、千草も、大切なんです」

雫はお願いだからと懇願するしてみたが、それを見た義経の反応はと言うと、あまりいいものではなかった。

というよりも、悲しい反応を返された。

義経は聞き分けの無い子供に呆れたように小さく溜息を零すと、
どうして分からないとばかりに雫を見て、きつい眼差しを向ける。
そこには隠しきれない憤りすら垣間見えて　それを見た瞬間、雫
の胸は激しく痛んだ。

「う……め……なさい」

震える声音で呟くも、義経の耳にはそんな言葉は届かない。
義経はやんわりと雫に言い聞かせる様に言うのだ。

「何が起こるか分からない。これからあの山　というよりも丘と
呼ぶべきなのか……あの上に生えている桜の木に巣食っている悪霊
を叩きつぶしに行かなくちゃいけない。奏もあのガキも、僕が助け
るから。だから雫は大人しくしてるんだ。いいね？」

悪いとは思っている。何一つ力を持たない足手まといがいつて何
になる　それも分かっていた。

それでも、それでも行きたかった。傍にいたかった。

一人ぼっちは嫌だった。

健がいてくれても、それでも失いたくない。

ここに置き去りにされたくはない。

可能性があるのならば、見届けたいのだ。

雫はきゅつと唇を結ぶと、尚も口を開いて言い募ろうとする。

「でもっ」

「でも何も無い。弁えなさい」

けれど直ぐ様それはぴしゃりと切り捨てられるように言われてし
まえば、次の言葉は出て来なかった。

目の前にいるのは降矢義経ではなく六花神義経その人だ。

こうなるともう、雫は健と二人で、素直に送りだすより他なかった。

ぐっと唇を噛みしめると、雫は二人はちゃんと戻ってくるはずだから安心して待っていていようと、二人の消えた方をじっと眺めて待っていてが、無理だった。

そんな簡単に思いこむことが出来たら、それこそ楽だっただろうに。

雫は千草が消失した地点まで戻って来ると、その場で膝を抱えて丸くなった。

「雫……」

躊躇いがちに発せられた健の声に、雫は鼻を嚙りながらこういった。

「健……二人はきつと、きつと……帰って……きますよね？」

「……帰ってくるよ、きつと」

+++

奏は少女と取りとめのない会話を楽しんでいれば、すっかりと周囲は暗くなってしまった。

ああしまったな、もう夜だ、帰らねばと、重い腰を持ちあげれば、少女が言うのだ。

「もう帰ってしまうの？」

「え……うん。帰るよ。だってもう夜も遅いし」

「でも……この辺はこの時間帯だと真っ暗よ？お家は近いの？」

近いならばいいが、遠いならば暗くて帰るのに難儀するだろうと言われれば、奏は首を傾げて自分の家がどこだったか考え込んでしまった。

何故か奏には自分の家がどこだか思いだせない。

いや、思いだす事が出来なくなっていた。

それを見れば少女は目を丸くして麦わら帽子の男と顔を見合わせて言うのだ。

「ねえ、もしかして迷子なのこの子」

「どうやらそうらしいんだが……困ったもんだね。駐在さんどこにでも預けておくかね」

二人から迷子だと決めつけられて頭の可哀想なやつといったレッテルで見られてしまえば、奏は居心地が悪そうに身の置き場のなさそうな顔をしだす。

「でも、可哀想だね。駐在さんつたら厳しいもの」

「そうは言ってもあそこに預けるっきゃないだろう。それよりも三島のお嬢さん、あんたこそ帰らなくて平気かね？もう陽もくれる。暗くなったらこのご時世だ、物騒だよ」

麦わら帽子の男が心配そうにこう言えば、少女はそうねと返しつつも心配そうに奏を見やっただまだ。

奏は麦わら帽子の男に「駐在……そっか、交番は向こうでいいんですか？」と尋ねているのを見て、少女は決心がついたようだ。

「いいわ！私が駐在さんに話してあげる。明日迎えに行くから、お家を探しましょう！迷子になったって言ったって、そこまで遠くではないはずだから大丈夫よ。きつとお家は見つかるわ。安心して」

「え……いいよ、そこまでして貰うわけにいかないから。それより君は早く帰った方がいいよ。夜になったら危ないもの」

それだけ言うと、奏は麦わら帽子の男に指さされた方角を向いて歩き始めた。

交番で寝泊まりとは初だなあと呑気に考えながら、衣服がいつの間にか長袖から半袖に変わっていることに気づきもせず……

次の日の朝、奏が駐在さんと交番の中でぼけっとしていれば、少女が朝も早くに訊ねてきて言うのだ。

「朝ごはん、持って来たわよ」

駐在さんに台所を借りて朝食を作ろうとしていた段階だったので、奏はこれに驚きはしたがせっかくの好意だからと受け取ることにしたようだ。

「じゃあおみそ汁だけ作るから、駐在さんとちやぶ台囲んで待ってよ」

「分かったわ。ふふっ、なんだかこういうのって新鮮で素敵だね。朝抜け出してくるなんてはじめて！」

浮かれている様子の少女が奥へと行くのを見送ると、奏は肩を竦めた。なんだかついていけない。

手馴れた仕草で薪をくべて火をつけて、鍋が沸いたら具材を投入してと朝から重労働である。

「あ……なんだか不便に感じる」

今までもずっとずっとこうやって料理を作ってきたというのに、
どうしてか今日に限っては特別不便に感じるのだ。ただ味噌汁を作
るだけだと言うのに。

奏はこれに内心では首を傾げながらも、何となくそう感じるだけ
だろうかと思いつつやっとの思いで味噌汁を作り終わると、これを
椀に注いで二人の待つ食卓へと持っていくた。

すると、待っていたのはちゃぶ台の上のとても豪華な食事だ。

「うわあ……これ、もしかして朝からこれだけ作ったの？」

「まさか。私じゃないわ。ハウスメイドに用意して貰ったのよ。さ、
食べて食べて」

「じゃあ……い、いただきます」

30 (彼女の探し求める人) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

30 (彼女の探し求める人)

朝から豪勢な食事を終えると奏と少女は周囲を散策に出かけた。

「中々見つからないわね。遠いのかしら」

「分からない……ほんとに家、どこなんだろう？」

ぼつりと呟いた声を拾われたのか、少女から不安げに尋ねられる。

「もしかして、記憶喪失というやつなのではないの？」

「記憶喪失？」

「そうよ、頭の病気よ。記憶を失ってしまう怖い病気なのよ」

少女からそう疑われていると知り、奏は表情を曇らせた。

「そんな病気じゃ……ないよ」

「ないよ、とは言ったものの、証明する術はない。」

というよりもむしろ奏自身、言われてみてもからまさかそうなのだろうか、自らに対しての疑念が生じてきた。

「そういえば、僕の家はどんな家だったっけ……？」

奏はたったそれだけのことすらも、もう、思いだす事が出来なくなっていた。

少女は落ち込んだ奏を連れて小高い山の上に来てきた。

「ここら辺で一番高いところなのよ。ここから見れば何か思いだすかもしれないわ」

その山の上にはまだ若い桜の木が植わっていた。太さから見ても、二十年程度しか植樹してから経っていないに違いない。

奏は山の上から町を見下ろしてじっくりと観察してみたが、見えるのは見慣れない町だけで、特に見知った建物は何も無かった。

本格的な迷子であることに気がつく、奏は途方に暮れた。

「僕、帰れないのかな……」

「そんなに落ち込まないで……大丈夫よ。駐在さんにだってお話してきたんだし、近いうちにあなたのお家、見つかるはずよ」

「だと……いいんだけどなあ……」

桜の木の脇にへたりこむと、奏は膝に顔を埋めて静かになった。

「だい、じょうぶ？」

「うん……」

返事をしつつも全然大丈夫そうには見えなかった。

少女はそんな落ち込んだ奏を見れば放っておけなかったのか、桜の下でぐるりと回ってにっこり笑って言うのだ。

「大丈夫よ、私がいるわ。あなたには私がいるから、だから安心すればいいのよ。一人じゃないもの。安心して、ね？」

青々とした葉が少女に降り注ぐようにしてざあつと風と共に舞い散っていく。

綺麗だなと思ったが、何故か奏はそれが口に出て来なかった。

少女が固まる奏にそつと手を伸ばしていくと、奏は何かを受け入れる様にそつと目を閉じる。

「そつよ……いい子ね。ふふっ……」

自分を受け入れようとする相手の姿に少女は嬉しそうに微笑むと、そつとその頬に手を這わそうとする　が、「待て！」と、割って入る声があった。

そこに居たのは千草だった。

千草は少女が奏に触れようとしたのを止めたはいいが、奏は依然として目を瞑り、心どころか意識さえもここに無いようだ。

何でこんなところに一人でできてしまったんだろうかと疑念が浮かぶが、今そんなことを考えても意味は無い。

目の前で奏が千草曰く、『あれ』に捕まっけていても、『あれ』から助けてくれる人は誰もいないのだ。

何か出来るのは今、自分しかない。

千草は覚悟を決めると、今までの恨み辛みをぶちまけるように目の前のあれに向けて叫び散らした。

「ああもう！いつもそうなんだお前らは！俺を勝手に引きずりこんで、勝手に恨みごとをぶちまけては俺を頼ろうとする！！見えるからってなんだ！だからどうした！見えるからってなあ、なんでもかんでも出来ると思うなよな！！勝手に成仏でもなんでもしろよ！他人様を巻き込むな！」

過去に相当『あれ』の関係で嫌な目にでもあったことがあるのか、千草の言葉には必死さが漂っていた。

千草は目の前の少女に怒鳴りつけると、兎に角奏へは触れるなど、

「今外すなんてありえないだろおお俺！」

義経がこれを見ていたとすれば「ノーコン」と言われてしまうこと請け合いです。

最悪だと呟くと、千草は少女に、もうどうすることも出来なくなつたからか、猫があらしをふくように、毛を逆立てる勢いで威嚇し、喚く。

「そいつに近寄るなよ、化け物！！」

起こすことに失敗した千草は少女をどうにか奏から遠ざけようと考えるが、手持ちのものはもう何も無い。

じりじりと距離をつめつつ全身をまさぐるが、いっかな何も見つからない。

なんで今日に限って何も他に持ってないんだ！！

ペンでもなんでもどうしてポケットに入れておく習慣がないのかと悔やんだが、元よりも千草は何かを身につけておくのが嫌いだった。

身に着けておいたその何かが、万が一千草がつまづくことなどにより、自分に襲いかかる凶器とかすのが分かっているから怖いのだ。

「黙れ！！」

少女は化け物呼ばわりされたことに遺憾であるというのだろうか、先ほどまでとは裏腹に、獣のごとく叫んだ。

可憐に鈴を転がすようなすずやかな声音はどこへ行ってしまったというのか。

「あの人じゃない！あの人じゃない！あの人じゃない！！ あの人じゃないなら、要らないわ！！」

低くうなった後そう叫ぶと、少女は奏へと向けて拳を振りかぶった。

「やめろ！！」

+++

義経は澤田を伴いれい子の縁の者を訪ねたが、ここで二つほど選択肢がでてきた。

「二つってなんですか？」

澤田が問えば義経は真面目腐った顔をして言うのだ。

「キャッツアイするか、それとも真正面からおじゃましますって言うか……二つに一つだよね……」

どっちがいいかと真面目に思い悩む主を置いて、澤田はさっさと大きな玄関扉までいくと、古式ゆかしいドアノックを鳴らした。

「馬鹿言っていないで、行きますよ」

因みに恐らくはキャッツアイ＝中にとどこからか忍び込もうぜ！という意味だろうが、ぶっちゃけどうでもいい。そんなことはしない

し、万が一にもやらせはしないからだ。

「え〜？つ〜ま〜ん〜な〜い〜い〜い〜い〜！」

身内が悪霊に捕まっているからか、義経は無理に普段通りに振る舞おうとしているのがわかり、なんだか澤田からしてみえば痛々しく映った。

仕事中とあらば義経は、素で仕事をするのだが、作った馬鹿息子としてのキャラクターを普段通りに演じ続けているのは奇異だ。

そして雫の前では逆に素になってしまったりと、余程余裕がないと見えて心配になった。

ノックを終えて数秒経つと、中からゆっくりと間延びした声が届く。

「はあい、どなたかしら？」

「済みません、こちら三島さんのお宅でしょうか？」

「ええ……」

がちやりと扉が開いてでてきたのは、ふわりとしたどこか柔らかな砂糖菓子のような雰囲気を持つ、優しげな老婦人だった。

「あら珍しいこと。こんなところに美形が二人。どんな御用かしら？」

楽しそうに笑う婦人に二人も軽く笑みを浮かべてこれに応えた。

31 (黒髪の人形) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

31 (黒髪の人形)

夕方、というよりももう夜とっていい時間帯だ。こんな時間に訪ねてきて何用かと尋ねる婦人に義経は時間もないためか、単刀直入にれい子のことを知らないかと尋ねてみた。

因みにここに入った時に示してみせた身分は、義経の六花神の名ではなく、降矢の名のほうだ。

三島の家もどうやら財界に身を置いているようで、知らぬ仲と言うわけではないらしい宗一郎に、先ほど目の前で義経の電話を通して話をつけてもらい、中に通して貰ったのだ。

「れい……子？」

二人の身元は確かに明らかではあるものの、全く訳の分からない唐突のこの話の切り口に、婦人は首を傾げてしまう。

「ええ、明治時代に遡りますが、あなたよりも……恐らくは三代前くらいのご当主の娘さんだった方なんです……こちらの方について、今、調べている最中なのです」

「まあ……私の方を？」

何故調べているか、については知らなければ知らない方がいい、とは、宗一郎よりの助言であった。

三島婦人が知れば困ることになる、とまではいかないまでも、面倒なことになるやもしれない。そう言われるがままに婦人は受け取ると、詳しくは聞かなかった。宗一郎がああまでも念を押して言うのだからと、義経達に手を貸してやるだけにするつもりでいたのだ。ある意味人がいいとも言えるこの行動だが、逆にいえばそれほどまでに宗一郎との関係は強固である、とも取れるものだった。

「もしも何か知っていれば……それも、何かの手がかりでもこちらにあればと思っただのですが……ありませんか？」

婦人はうつんと唸ると、ちょっとお待ちになってと、どうやら三島家の系図が残っているらしく、それを見せてくれるようだ。取ってくるので待っていてほしいと言われ、二人はホールで待つことになった。

ホールといっても広く作られており、長椅子もテーブルもあるため、ここで待たせられたとしても特に問題はなかった。

二人はここまで強行軍できたため疲れていたのだろう、長椅子に腰を落ち着けると端末を操作するなどして時間を潰すことにした。

端末には、鷺宮からの定期的にあの桜の木についての情報が入ってきていた。

今のところ次の犠牲者は出ていないようだ。

神隠しの新たな噂話はその町の住人からも出ていないようではなかった。

「れい子……ああ、確かにおりますね」

婦人が系図を指し言えば、やはりこの家で間違いはないかと思いい、婦人へと更につつこんだ話をすることにした。

「流石にデータベースには彼女がどのように弔われたか、埋葬されたかなどは書かれていなくて……やはりきた甲斐がありました」

この発言に婦人は驚いたようで、一体何を言っているのかと義経の顔を見上げれば、義経は険しい顔で言った。

「れい子さんは未だ、こちらの世界に囚われております。このことはお話すべきか迷いましたが……幽霊、と言うものを信じますか？」

突然のこの言葉に、婦人は困惑しながらも曖昧にさあ？と首を傾げた。

婦人は大変賢い人だった。

いる、ともいない、とも言うべきではないと、曖昧な言葉こそが良いものであると、そう教えられたままに応えたのだ。

だが、義経が求めていた答えではなかった。

「あなたの感じるままでいいんです。幽霊がいると思いますか？それともいない？」

「……それは、どう、……なのでしょう？」

行き成り来てこんな突拍子もない質問である。婦人が困惑してこれ以上答えられないことも、分からぬでもなかった。

まあいいかと義経は更に言う。

「れい子さんはこちらの世界に肉体を失ってもなお、存在しているのです。そして困ったことにどうやられい子さんはこちらから離れたくないようです……何かれい子さんに纏わる話を……聞いてはおりませんか？私はそのためにこちらまで来ました」

「纏わる……話と、言われても……」

戸惑う婦人に澤田が当時の資料を端末からテーブルに指でラインを引いてやると、テーブルの上には当時一面を賑わせた心中騒ぎの新聞記事が現れた。

それを指示しつつ義経は続ける。

「恋人と心中騒ぎを起こしてお亡くなりになられたと伺いました。

ですがどうにもおかしいんですよ。恋人を思いやって死んだはずの彼女が、なぜこの世にとどまり続けるのか……。普通なら恋人には生きて欲しい、なんて言って死んだら直ぐにも成仏するでしょう？なのに彼女はまだここにいる。それも、どうやら恋人を探し続けているようなんです。私はその理由が知りたいんです」

まさか前の当主の娘がそんな死に方をしていたとはと驚く婦人は眩暈でも感じたのか、くらりと身体を傾がせて長椅子の背にもたれりと、肩でせいぜいと喘ぐようにして言うのだ。

「……突然すぎて、何がなにやら……」

もつともなことである。首肯しながら澤田は義経のあとを続けた。

「婦人、彼女はまだ、誰かを待ち望んでいるのです。なにか……。恋人に向けての手紙など、ありませんか？流石に半世紀以上たっているため、なかなかに難しいかとも思うのですが……。何か、こちらの世界に彼女をつなぎ止めるものが……。何かがあるはずなのです」

婦人の背を擦りながらこう言えば、義経が正面から頭を下げて頼むのだ。

奏と千草の命がかかっているとともう時間がない。早くしなければと必死だった。

頭を下げるくらいどうということはない。頼むから何か出てきて欲しい、ただそれだけの気持ちで義経は深く頭を下げたのだった。

「お願いします。三代前の当主が何かを……。娘さんであるれい子さんの遺品を何か残してはいませんか？もしくは明治からの伝わるもので、家宝として残されているものなど……。なんでもいいんです。彼女とつながる何かが欲しい」

義経のこの言葉を受けるや否や、婦人ははつとしたような面もちになると、こちらへと二人を伴い螺旋階段を足早に上っていく。

「そうだわ、三代前の当主が娘を思つて作ったという……人形があったはずなのよ。何かが残っていると言うなら、あれしかないと思うの」

「人形？」

慌ててついていく二人はこの言葉に眉を顰める。

よりもよつて人の形を取つたものかと思つた。

「ええ。確か娘の遺髪で作つたとか……それはそれは美しい黒髪をしているのですよ。当時の当主は私にとっては少し遠い血で、ちよつとどんな方だったかすら分からないので恐縮なのですが、伝え聞くところによりますと、娘に似た人形を作らせたとか……こちらです」

婦人は奥まつた一室に入ろうとドアノブを回し

「あら？……あかないわ。おかしいわね」

がちやがちやとドアノブを何度も回すものの、婦人はどうしても扉を開けることが出来ない。とうとう焦れてどんと扉を叩きつけると後ろに二人がいることを思い出したのか「お恥ずかしい」古い家ですからと誤魔化すように笑ってみせる。

だが、二人は笑うどころか険しい顔をしてじつと扉を見つめていた。

「失礼。少々強引に入らせていただきます」

澤田が言うなり扉めがけて蹴りを入れるが扉はびくともしないのだ。

確かにこれは中から何らかの力が働いているに違いないと思い、手加減をなしに今度は肩からぶつかっていく。

「ああっ！な、なにをするんですか！！」

「おかしいでしょう！この屋敷は古い。にも関わらずこんなにも扉が頑丈なんですか？」

確かにいいものはいつの時代でも頑丈につくられている。

だからとはいえ大の男の手加減なしの一発を、びくともせず悠然と受け止めてなおそこに整然といるというのは、何が何でもおかしいというものだ。

義経がそう指摘すると婦人は考えがそこにいったらしく、ぞつとしたようだ。顔色を変えてごくりと唾を飲み込む。

澤田めがけて義経は叫んだ。

「サポート！」

「はい！」

阿吽の呼吸だった。

澤田は返事を返すのと同時くらいにその場をあげると婦人と扉の間に体を滑り込ませる。

義経はあいた扉の前に容赦のない見えない巨大な手を突き入れると、内側へと扉がひしゃげて吹き飛んだ。

義経は果敢にも中の様子を知る前に身一つで飛びこむと、中ではあつと驚くような光景が待っていた。

32 (願いはただ一つだけ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

32 (願いはただ一つだけ)

「これは……一体何だ……?」

「ごくりと生唾を飲み込むと、今度はいやな汗が滲んできたのを感じた。

普段から使われていないだろう室内は窓もカーテンも締め切られ、空気も淀んでいた。そんな中、人の子供ほどの大きさの、黒々とした髪を持つ人形が沢山の人形を従えてこちらをじつと見つめていた。何対の目玉がこちらを見ているのか、数えることも気の遠くなるようなその光景に、義経はじりと後ずさる。

大きな人形が件の遺髪を使った人形だろうことは明白だった。

けして広くは無い、物置として使われて久しい室内の一面にびっしりと人型の人形ばかりがきっちり並んでいる。それだけでも妙に心がざわつくというのに、中央の大きな人形は明らかに異様な空気を纏っていた。

義経がごくりと生唾を飲み込む。すると、黒髪の人形の口が、がぱりとあくど、そこからとんでもないことに、聞き覚えのある声が聞こえてきたのだ。

『ああもう！いつもそうなんだお前らは！俺を勝手に引きずりこんで、勝手に恨みごとをぶちまけては俺を頼ろうとする！！見えるからってなんだ！だからどうした！見えるからってなあ、なんでもかんでも出来ると思うなよな！！勝手に成仏でもなんでもしろよ！他人様を巻き込むな！』

「……た、高遠のとこの?」

「高遠君、……ですよね?」

二人はほぼ同時にそう呟くと、一瞬にして気が抜けたのを感じた。

どんなにおどろおどろしい声が聞こえるかと思えば知った声で気が抜けてしまったのだ。

「もしかしたらこの人形、あちら側と繋がっているんでしょうか？」
「……かもしれない」

だとすれば、まだ千草は生きているということだ。

ごくりと義経は唾を飲み込んだ。気を抜いている場合ではない。

さあやるか　そう考えていたが、そんな呑気に構えてられる状況ではないらしい。

そう、続く言葉を聞けば、最早一刻の猶予もないことを知ったのだ。

「あの人じゃない！あの人じゃない！あの人じゃない！！　あの人じゃないなら、要らないわ！」

そしてがたがたと黒髪の人形が震え始めたかと思うと、目玉がぐるんと動き、白目になった。

それだけでも、うっとしたというのに、次の瞬間、黒髪の人形を取り囲んでいた他の人形も一斉に白目を剥いて　あるうことが義経達に一斉に襲い掛かってきたのだ。

『死ンジャエエエエエエエエ！！』

+++

とろんとした目でまどろみの中をたゆたっていれば、奇妙な声が聞こえてくる。

『許嫁さんが危ないんだ。助けて』

「許嫁……………」

目をごしごしと擦りながら本の山から起きてみれば、どうやら布川書店の奥の部屋で寝てしまっていたらしい。

あふと欠伸をすると瑞名瀬は首を鳴らしてふらふらとしながら頼りない足取りで立ちあがった。

『義経様、お願い早く』

「……………義経？」

はて、どこぞで聞いた名であったなと首を傾げつつ声の聞こえる方へと足を向けていけば、瑞名瀬の足は自然と布川書店の扉を潜り、気がつけば雫の居る商店街へと向いていく。

『助けて、お願い助けて』

近づけば近づくほどに大きくなってくるその声に、瑞名瀬は頭痛すら覚え出す。

そしてあまりにも大きくなったその声に、瑞名瀬はとうとう叫ぶのだ。

「煩いぞ奏！！」

「……………え？か、奏？」

瑞名瀬は頭を響かせて聞こえる声以外の声を耳にしてはつととなった。

気づけば目の前には雫が居て、そして、二人を取り囲むようにして大勢の人がこんな暗くなり始めた時間帯だということにも関わらず

にわんさといろのだ。

どれもこれもが瑞名瀬をじっと見つめているその目に、瑞名瀬の方が耐えかねたのか見るなど叫ぶ。

「見んなって言われましても……」

突然やってきて突然叫んだ人間を、そりゃあ誰だって奇怪なものとして見るに決まっている。それを見るなど言う方が間違っているのだ。

無然とした面持ちでそう返してやれば瑞名瀬はむっとした顔で若干頬を染めて健をじっと見つめる。

「なっ！なんすか！？怒った！？怒っちゃいましたの！？」

そんな妙な雰囲気醸し出した二人の間に雫が割って入ると、健に大丈夫だと言い、そして瑞名瀬に尋ねるのだ。

「奏が……どう、したのでしょうか？」

雫はそう慎重に尋ねると、瑞名瀬が聞こえるだろうとすっと腕を上げてある位置を指さして言うのだ。

「向こうの方から奏の声が聞こえるだろう？」

向こう、そう言って示されたのは桜のある方角だった。

雫はこれを聞くや否や、駆けだした。

二人はまだ生きているのだと、瑞名瀬が答えを示してくれた。ならばもう迷うことは無い。

雫は瑞名瀬の言葉によって義経の命令など頭の中から吹き飛んでしまった。

雫はただただ一直線に、桜の木の下へと駆けていくのだった。

コンクリートの壁の合間をすり抜けて、辿りついたのはぽっかりと空いた空間だ。

その中心に桜の木が一本、聳え立っていた。

不思議なことにその桜は、そんな日照不足に陥りそうな場所に生えていると言うのに、葉は生い茂り秋だと言うのに枝ぶりも見事なものだった。

雫はその桜を見つめ、喘ぐように呟いた。

「な、……何故、桜が光って……？」

桜は蛍光塗料でも塗りつけてあるのか、眩いほどの光を発していた。

葉の一枚に至るまで、煌々と光り輝いている。

それを見て呻くも、怯んでいる場合ではないのだ。あの中には二人が囚われているのだから。

「お………お願いします！二人を………か、返して……！」

桜は当然ながらこれに応えない。

雫はきゅつと唇を噛みしめると、再度言った。

「奏も、千草も、返してください！私の、大切な人なのです！お願いします！」

矢張り桜は応えない。

雫はそれから何度も何度も叫んだ。桜からの応答がなくとも、何度でも声の限り叫び続けた。

「お願いします！！私の声なんて聞こえないのかもしいけないけどっ
！でもっ、でもっ！反して！お願いだからあの二人を、返して！！」

33 (零の大切なもの) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

33 (雫の大切なもの)

健は義経の言葉を思い返す。

歳の頃は十代半ば、そして男が狙われる。身長に対しても定義があるようで、その全てに健は当てはまっていた。

雫が瑞名瀬の言葉に反応し、駆けていった時に身体が咄嗟に動きはした。が、雫に続けはしなかった。

端的に言えば怖かったのだ。

だが、健は震える手で拳を作り、ひとつ大きく空気を吸い込むともう迷わなかった。

迷ってなどいらなかった。

「やっぱさ、女の子が勇氣出して飛びこめるんだから、俺も……やんなきゃ格好つかねえよな」

きっと健は雫の消えた小道を見上げると、周囲の制止を振り切って駆けていった。

そして、驚いたことにこれを追いかけてくるものがあつたのだ。

「なっ！！あんたは危ねえって！帰れよ！」

「……俺も行く」

ついできたのは瑞名瀬だった。

確かに歳の頃は二十代も後半に差し掛かっているのもあり、年齢制限的には引っ掛かりはしないだろうが、それにしても無謀に過ぎた。

危険と分かっている何故来ようとするのかと、健は瑞名瀬を押し留めようとするものの、それを聞く瑞名瀬ではない。

「行く、じゃないって！あんた一般人だろ！大人しく待っててよ！」

「……一般人？ならそれはお前もだろう？」

「俺はっ……」

思わず禁じられた言葉を口にしようになり、慌てて口を噤んだが、何と言ったものだろうか。

まさか闘う能力がある　幽霊だかなんだか良く分からないものに対して、これが通じるかは定かではないものの、あるにはある

とも言いだせず、じりじりとした気持ちでいるもそんなこと、相手に分かるはずもない。

兎に角先へは行かせないと瑞名瀬の前に健は立ちはだかるが、そんなことで動じるはずもなく　構わず健を押しつけて先へと進もうとするが、健はそれを許す事など出来ない。

「いやっ！つつか、俺一般人じゃねえの！俺は……あの、義経さんの関係者なの！だから、あんたこそ一般人なんだからって……」

健が瑞名瀬と言い合いになっていると、闇夜をつんざくような叫び声が聞こえてきた。

「あああああああああ！！！」

驚き二人はそちらへと振り返ってみると、先ほどまでは暗かった坂の上が眩しい程の明かりが溢れていたのだ。

「な、に……？」

+++

奏が意識を取り戻すと、そこでは千草と少女が相對していた。いいや、今では少女だったものは、幽鬼となり果て、千草を襲っていたのだ。

「あの人、あの人はどこなの！？私は……あの人に会いたいのに！！」

違うなら要らないとの言葉通り千草を襲い始めた少女は、千草の首を目掛けて腕を伸ばしてくる。それはどう見てもある意図をもつてふるわれたものだろう。

殺される！！

千草は少女の腕を振り払うようにして飛びのくと、飛び退った時に何気なく少女の下方に視線を走らせた時に奏の意識が戻ったことに気がついた。

「起きたか！早く逃げろ！」

「え……う、うん！」

逃げると声をかけられるまでぼうっとしていた頭だったが、ここにきて急にクリアになった。

逃げなくちゃ、そう思った。

「そうなのね……あの人を……貴方達が隠してしまったのね……」
「……おい、なんでそうなる？！」

先ほどまで少女から感じていた、どこか懐かしい空気、それが今はただただ嫌悪、忌避という感情に染まっていた。

胃の中が冷えた石でずっしりと埋められているような感じがする。重い、重いのだ。

「雫………？」

背後に健と 瑞名瀬だろうか？ 気配を感じるが、雫は振り返るうともしなかった。

雫は二人を放ったままに、先ほどまでしていた作業に戻る。

桜の木肌にがりがり、爪を突き立て叫ぶのだ。

それはまるで懇願するように、祈るように、後生だからと力の限り叫び続ける。

「返して！二人を、……返して！！」

一心不乱に掻き篦り続けるが、爪の端が剥がれ血が溢れだしてくる。それも当然だろう。相手は生木なのだから。

痛い痛い痛い。でも、二人を失うことを考える方がもっと痛い。

胸を抉られるような、こんな痛みを雫は知らなかった。

だから雫は血が出て、指がどんなに痛くとも構わず木肌を掻き篦り続けたのだ。

「お願い、返して……返しっ……うっ！！」

爪が一枚指から弾けるようにして千切れると、腕にもう、力がほとんど入らないことに気がついた。

あまりの鬼気迫る雫のその行為を、健は飲まれるようにして見続けてきたが、剥がれかけた爪を と言うよりも手を抱えて雫が呻くようにして蹲ったのを見て、我に返った。

「ちょっと、おい！もう駄目だって！何してんだよ！！」

「だって……だって……」

「馬鹿！血だらけじゃねえか！」

慌てて健がハンカチか何かをと胸元を探るものの、清潔な布の類は持っていないかったようで、ついてきていた瑞名瀬にこちらが無いかと尋ねてみたが、首を傾げられてしまう。どうやらそのようなものは持ちあわせておらぬ、と言うことらしい。聞いた健が間違っていたようだ。

雫は一体、どれだけの力を込めて桜の木を引つ掻き続けていたのだろうか。筋肉が強張り過ぎて、最早使い物にならないまでにそれは疲労を起こしていた。

ぐいと瑞名瀬が雫の腕を引いて、押しと繰り返してみても気がついたが、内出血すら起こしているらしく、僅かでも腕を動かそうとただけで、雫の腕は痛みを発するようだった。

雫は己の両腕両手を震えながら見ていた。指の腹は木を掻き走った時に傷つき、何本もの線を刻み血が滲んでいる。爪が剥がれた指以外の爪も、肌との境目からじわりと出血しているようだ。

頭の片隅でぼろぼろだなど思った。

自分のありつたけの力で木を掻いたのに、目の前の木は少し木肌が剥がれたくらいだ。

それを見れば本当に自分は無力だと思った。

そんな雫を瑞名瀬が見下ろす。

「お前は……何故こんなことをした？あいつに任せておけばいいだろっ」

「そっだよ、雫。義経さんが待つてろって言ったのに……こんな……血だらけで……」

痛々しげに顔を歪めて言われれば、雫の胸はきしりと痛んだ。確かに待つていれば良かった、とも思う。

だが、ただ待っていることなど出来なかったのだ。

「大切な、二人なんです……」

俯いて涙を零しながら言われれば、今度は健の胸が痛んだ。

「それって……」

わなわなと唇が震える健は、その先を口にすることが出来なかった。

余程尋ねたかったのだ、「それって千草のことか」と。だが聞けなかった。恐ろし過ぎて。

雫は二人を諦められない理由があった。

だって私が自分から作ることが出来た、初めてののお友達なんです。

初めての友人を失くしたくはない　それこそが雫の、こんな状況になったからこそ出てきた、ピュアな想いだった。

34 (優しい世界) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

34 (優しい世界)

自分の我がまを、愚かにも唯一許してくれる存在が奏だった。幼い頃からずっとずっと、何があっても、どんなに辛くても一緒に居てくれた相手だった。

千草は唯一外の世界で自分から作ろうと思った、自分から作るこゝとが出来た友達だった。

今は確かに仲互いを起こしているのかもしれない、雫も傍に今は居たいとすら思えない。それほどまでに緊張を強いられる相手だ。

けれどそれでもだ、いつかまた、仲良くなれたらと考えてしまう。初めての外のお友達、初めての我がまを言えるお友達　奏は傍に居てくれることが当たり前になっていて、千草は少し前まで考えられもしなかったが、今は一つ屋根の下で暮らす事になってと有り得ないことに、そんな変化の中に、少しの安らぎを得始めたところだった。

二人が傍に居ることに慣れきってしまひそうになった、そんな日々が続いていた。

そんな折、千草との間にある、緊張も僅かではあるが和らいできたところに健が現れた。

お陰でまた、心臓が飛び跳ねる毎日に逆戻りだった。けれど、今はそんな生活が愛おしかった。

親でさえ傍に居れない、そんな毎日が当たり前だった。使用人でさえ口をきいてくれないことさえあった。それが雫の日常だった。

最近が恵まれ過ぎていたのだと雫は言うが、それは違つと健は思う。

それくらい願ってどこが悪いと言うのか。
優しい世界の何がいけないと言うのか。

「奏が居て、千草が居て、健……も居て……こういう毎日が当たり前になっていくのかなって、思ってしまったんです」

ぼつりぼつりと語りだす雫に、健は目を見開いた。

「俺、も？」

居ていいのかと、まさかとの思いでそれを聞いていれば、雫は更に続けるのだ。

健は信じられない気持ちでそれを聞いていた。

最近では驚くことに、神であるイオリやタケミナカタ、ククリヒメ等も時折雫の元を尋ねてくるようになって　そんな、雫を取り囲む、優しい世界が溢れ始めた。

「なのに、失いたくなんてないんです」

ずっと一人で耐えてきて、やれなくはないと自分でも感じていた。けれど存外、自分が脆いことに気がついた。

それは、自分の周囲に好意と言う、光が当てられるようになり、気づいたことだった。

その時に気づいたのだ。

今までどれほど周囲の人間に助けられてきたのかを。

「ずっと一人で頑張ってきたと思ってた。けど、全然違ってたんです」
「……雫」

「私、我がままになりました。みんなに、傍に居て欲しいんです」

「我がままなんてそんな……そんなこと、ねえだろ」

「私っ、私っ！！」

雫は面を上げると、健と瑞名瀬の顔を見つめ、ひと際大きな涙が

「ひ、つら、けえええええっ!!」

+++

同じ頃、人形達に取り囲まれて全身をぎぢぢに締めあげられて意識を手放そうとしていた義経達は、一瞬、何が起こったか分からなくなっていた。

首を絞めつけてくる黒髪の人の子程の大きさの人形が、急に停止したかと思うと、次の瞬間がたがたと震えだした。

そしてその人形が激しく身体を震わせ始めた途端のことだ、同じく二人に取りつき身体を締め上げ骨までへし折る勢いで力を込めていた小さな人形達が、停止したのだ。

「げほっごほっ」

絞められて呼吸を止められていた喉が解放された途端、急激に酸素を取り戻そうと身体が自然と動き出す。全身で呼吸を取り戻そうと頑張ったためか、肺が痛いほど咳き込んだ。

酸欠で頭ががんとしていたが、これこそ好機よとばかりに、義経は黒髪の人形の頭を掴み、部屋の中を人形達をかきわけ走る。

そして締め切った窓を開けると思いきり人形を放り投げて中空でぐつと義経は手を使いその何も無い空間に閉じ込めたのだ。

中空で人形はもがき、苦しみ始める。

球体関節のいたるところから光が漏れ始めたのを見れば、いけると思った。

「火を寄越せ！なんでもいい！！それと促進剤になるものもだ！」

この命令に人形から解放され、咳込みしゃがみこんでいた澤田は、急いで婦人と共にアルコールを用意し、ライターを用意しと、義経に手渡した。

すると義経はそれを容赦なく人形の元へと投げつける。

アルコール瓶は人形にぶち当たり、中身を全身に浴びせかけると後は必要なのは火、だけだった。

「くたばれ、化け物が」

先ほどまで苦しめられた相手だったからだろうが、憎しみすら込めて火のついたライターを投げつけると、勢いよく人形の全身が燃えていった。

『ぎゃあああああつー！』

義経はそのまま人形を中空に固定したままに、それが灰のひと欠片になるまで燃やし続けた。

完全に相手を葬り去れたことを確認すると、義経は婦人に言うのだ。

「ご協力、感謝致しました」

この場の後始末は後日すると口にして、二人はその場を後にした。まだ彼らには、桜の木の始末が残っていた。

「これでもう、桜の木に憑いていた女はいなくなっただけだが」「確認しないことには何とも言えませんよ」

どうか無事で居てくれ。ただそれだけを願っていた。

35 (逃げさせては貰えない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

35 (逃げさせては貰えない)

奏を地面にたたき伏せると、意識を飛ばした奏はもうどうでもいいのかそのまま放置して、今度は千草に掴みかかっっていく。

これに千草は逃げるも、相手は体力など持たない、底なしの幽鬼である。どう考えても粘られれば歩が悪いのは千草だ。お終いだつた。

「くっそ！」

千草は何か無いかと逃げながらも数メートル先に落ちている鉄パイプを見つけると、それを大きく振り被る。

「くんじゃ……ねえ！」

大きく振り被った鉄パイプは幽鬼の頭からざっくりと縦にまともにぶち当たった。すると幽鬼を切り裂くようにして鉄パイプが頭から一直線に、何の手ごたえも与えずにするりと引き裂いていく。それを見れば千草は唾然としてしまうが、ここで惚けている場合ではない。慌てて奏の元へとパイプを手に持ったまま駆け戻っていった。

「おい！大丈夫か！」

「う……ううん」

呻いている奏を見ると何とはなしに大丈夫そうだとほっと息を吐き出すと、奏に肩を貸してやりながらこれを起こしてやる。

鉄パイプに手ごたえがないのが少々引っ掛かるものの、相手は消え失せた。逃げるならば今だ。

ぶんぶんと左右に鉄パイプを振りまわしながら千草は奏を連れて

桜の木まで駆けていく。

この世界の一番の高台はここだ。ここからならば幽鬼がいつ現れても対処が出来る。そう考えた。

「くそ……どうやってここを抜け出ればいいってんだ……」

汗が額を伝ってくる。千草の目は泳ぎ、あたりを必要以上に見回していった。

じりじりと見えない何かに追い詰められている気がする。

義経を待つべきか否か、そう考えてはいるものの答えは出ない。

そもそも義経達が自分達を探してくれているかすら、千草には分からなかった。

いや　もしかしたら誰も気づいてさえくれていないのではないのか、そこに考えがいつてしまうとぶるぶると首を振ってそんな考えを散らした。

嫌な考えしか浮かんでこないのは、不安だからだ。

恐怖が頭を支配する。

「……どうしたら、いいんだよ……なあ」

こんな時に浮かんでくるのが先ほど追いかけてきてくれた、雫だと言っのが何だか笑えた。

途中立ち止まるうかとも考えたが、もう少し追いかけてきて欲しくて、足を止めなかった。

何故そんなことをしたのか、理由は自分でも分からなかったが、いい。兎に角会いたかった。雫に。

「逃げなくちゃ、いけない」

何としても。

必ず戻ってまた、雫に会いたい。何故か千草はそう考えていた。理由は分からないが、それでもいい。兎に角会わなくてはいけないと、そう思った。

そう思うと不思議と心は落ち着いてきた。

千草は奏を桜の木の根元にもたれかけさせるようにして下ろすと、鉄パイプを両腕ですつと構えなおすと、瞼を閉じて深呼吸をし、かつと今度は目を開いた。

刮目せよ!!

逃げ道は必ずあるはずだ。袋小路になどなっていない、必ずどこかに道があるはずなのだ。

「いいや、むしろ無いなんて認められない。認められないんだよ」

必ず帰るんだ俺は、そう呟くと町並みをじっくりと鉄パイプを構えたまま見下ろし、道らしきものを見つけようと眺めやる。

見つけなければ食われるか、それとも引き裂かれるか　兎に角生き残れないことだけは確かだ。

早くしなければならぬ。千草は焦った。

その所為か全く気づかなかつたのだ。背後から迫りくるその冷たい腕に。

「さつきは酷いことしてくれたわね！やっぱり殺さなくちゃいけないわ、貴方達なんて……邪魔なもの！」

次の瞬間、幽鬼の腕に千草の胸は貫かれていた。

+++

その時だ、奏が気づいたようで、千草の上に乗った幽鬼に向かつて千草の投げたコインを投げた。

それは綺麗な放物線を描き、幽鬼の後頭部に吸い込まれていくと、幽鬼は先ほどの鉄パイプとは違い、消えるどころか奏の方をぎろりと見据え、怒りも露わに鋭く腕を剣のように変化させるとそれを凄まじいまでの勢いで奏へと突きいれてきた。

刺される！ そう思った。が、そうはならなかった。

瞼をぎゅつと瞑ってきたる衝撃に備えた奏は、恐る恐る目を開いてみて驚いた。

幽鬼が腕をこちらへと突きだした形で止まっていたのだ。

「え……なんで？」

千草も自分の身体が自由になったのを確認すると、そのまま幽鬼に先ほど同様、鉄パイプを叩き込んだ。

だが、これもおかしなことに、先ほどとは違い、きちんと効いたのだ。

がんと幽鬼の脇にこれがぶつかると、幽鬼は痛みには呻く。悶絶している幽鬼を見れば千草は何故かは分からないものの、幽鬼にこちらの攻撃が通用することを悟った。

であれば話は簡単だ。

「今だ！！」

千草は幽鬼をもう一度鉄パイプで殴りつけると昏倒し、まともに動けなくなった幽鬼を無理やり叩き起こし、そのまま桜の木に押し付け、鉄パイプで突き刺そうとした。

殺さなければ、倒さなければこちらがやられる。やらなければ、そう思った。

だが、相当な覚悟が必要だった。

千草はごくりと唾を飲み込むと、目を瞑ってそのまま幽鬼に突進していく。見なければいい、そう思ったのだ。だが、それは甘かった。

幽鬼が痛む頭を抱え、何とかこれを凌いだのだ。

「殺す……殺す……」

「ひっ！い、許嫁さん！！どうするのこれ！？」

「お、俺が知るわけないだろ！？」

どうすればいいのだと千草と奏がパニックに陥ると、周囲をかつと眩い光が一瞬にして包み込んでいった。

「……わ、あああああっ！」

「ッッ！」

『ひっ、ぎゃああああああ！！』

36 (正々堂々とじゃんけんで勝負) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

36 (正々堂々とじゃんけんで勝負)

雫が力を入れていくと桜の木に出来た裂け目からは光の束が溢れ出てきた。

「私は力が欲しい！二人に私は……居なくなって欲しくない！！」

かつと光の束が更に光力を強めたのを見れば何と凄まじい光の渦だろう、健と瑞名瀬はとも目を向けてはいられないと顔を覆ってしまった。

目もくらむ様な凄まじい光量に、啞然としてしまう。

「なんだよこれ！？」

雫には何の力も無いと義経は言っていた。

「かがりという別人格があの子のかわりに力を使っているらしく、本人は全く力を使えないんだ。だからこそ君が守ってほしい」

義経は以前、健にそう告げていた。

健はそれを鵜呑みにしていたが、とんでもないことだ。

「どこが力がないだよ。桜が……それも生木を割るとか、冗談だろ？」

雫が桜の木を引き裂くと、その腕の動きに従うようにして、雫の全身から何か引きちぎられ解れていくのが見えた。

音も無く何か小さなものが溢れ出てきているのだ。

健が目を凝らして見ると、それは無と言う大量の文字に見えた。

「……なんだ、あれ」

無と言う文字が雫の全身をぐるぐると廻りながら紐解かれるようにして、大量に連なっていたものが帯状に解き放たれていくと、気づけばそれは数瞬も立たずにふっと霧散していった。

それと同時に桜の木の亀裂からずりりと奏が悲鳴を上げて出てきた。

雫は奏を抱きとめるが、自分より遥かに大きい奏を受け止めきれず尻餅をつく形で倒れてしまった。

それでも腕の中に温かい奏が戻ってきたことに大きく息を吐いて震える指でそつと奏の顔に触る。

「お帰りなさい、奏」

「えーと……ただいま、帰りました、雫お嬢様」

いつも通りの暢気な声で奏が言葉を返すと雫はほつとしたのか、緊張の糸がぷつりと途切れたらしく、そのまま押し倒されるような形で意識を手放してしまったようだ。桜の木の根の瘤の間に長い髪を散らし、雫は瞼を閉じて身動き一つしようとはしない。

「お……おいおいおい、雫………気絶したのか？」

奏はそろそろと雫の腕の中から這い出ると雫の小さな手を取り眉を寄せる。

自分達のためにがんばってくれたのだと胸が痛んだ。

「分かんない………雫お嬢様、寝てる？それとも気絶なの？」

一気にやつれたようにげっそりと頬をこけさせて倒れている雫を見おろすと、健はおろおろとしながらもその身体をゆっくりと地面から抱えあげ、抱きこんだ。

だがしかし、先ほど見えた雫を覆っていた無の文字。あれを見た所為か、雫を抱く腕もどこかこわごわといったもので力強さが感じられない。

「さっきのはなんだ？無と読めたが……」

瑞名瀬に背後から話しかけると、健は息を飲んだ。

あまりのことに心が、そして頭が、ついていかなかった。

瑞名瀬の何も動じていないような顔を見て何故かむっとしたが、健はなるべく自分も平素を装って応えてやった。

「たぶん、そうだろうとは思う、……けど」

「……こいつは、何なんだ？」

何、と尋ねられてみても、健は上手く言い表す事が出来なかった。健にとってはお嫁さんで、そしてそれと同時に千草にとってもお嫁さんで、奏にとってみれば主であり、命の恩人というものなのだろうか。瑞名瀬に関しては分からないものの、恐らくは友人の一人程度の認識はあるはずだった。

義経にとってみれば愛娘で、守るべき弱者で。

そして、それは健にとっても同じだったはずなのだ。かがりとは違い、雫は守るべき存在だった、はずなのだ。

けれど今は

「よく、分かんなくなっただかも……」

ただのか弱い少女ではなくて、かがりといった存在を宿す不思議

な少女だった雫。それは確かに守るべき対象ではあるが、父である義経でさえ、雫のことには不明瞭なことばかりだとは言われていて、それでも、こうまでわけの分らない生き物だとは思ってもしなかつた。

確かに雫は最初から、素直に守られるような存在ではなかつた。一人で最後の最後まで抱え、何とかして自分だけで生き残ろうとする。親の力が絶対的な権力を有しているが、それと共に絶対的に越えられない壁をそこには常に感じていた。

自分はその庇護の元に存在してはいるものの、その傘の下にいるのに何故か常にぼろぼろだった彼女。

傘があるのにその中に、どうしてか入れては貰えなかつたようだった。

認められたい、存在意義を感じたい。兎に角何かを成さねばならないと、常に何かに怯える様にして頑張り続けていた雫の姿に、健は凄いなとは思いはしたが、守ろうとはしなかつた。

健もただの傍観者の一人に過ぎなかつたからだ。

今では状況も変わり、守らなければならぬ存在であると言われ、自分自身雫を守らなくてはいけないと自覚していた。

「けどさ、なんかもう……なんだろうこれ……」

もやもやとした消化の出来ないこの気持ちなんだ。

健は胸の中に出来たばかりのしこりに、小さく唸った。

彼女は一体、何なのだろう。

今更なのだがそのことについて、健は答えを何一つ、知らないのかも知れない。

+++

奏に続いて千草までもが桜の木より吐き出されてきたのを見れば、これこそがまさしく別の世界への入り口だったのだと悟る。

「こ、ここは……」

裂けた桜の木の股から這い出てきた千草に、健は驚きと共に良かったと軽く涙が視界の端に滲んできたことを知る。だが、それを千草から指摘されればそんなわけないだろうと乱暴にこれを拭いた。なんだか気恥ずかしくて堪らなかったのだ。

「無事で良かった……雫が頑張ったから……」

だからだろうかと続ければ、千草は首を傾げている。

そんな千草に、健に抱きとめられているままの雫の髪の毛をそつと撫でながら奏は言った。

「僕は見えてたよ。雫お嬢様が……桜を割ろうとしてたの、見えた」「桜つて……これのことか？」

自身がまだ半分ほど埋まっている桜を指して言えば、奏は見えなかったかと尋ねてくる。生憎とそんなシーンは千草には見えなかったため、首を傾げるだけだ。

「雫、力が欲しいんだってさ。俺らのこと、失いたくないと。消えて欲しくねえんだと」

「……………」

かがりでは無かった。髪の色も、その背丈も、そして、目の色さえも彼女に変わることなく雫は別次元へと腕一つで繋いで見せたの

か。

「あのね、僕らの目の前で……鬼？かな。鬼がね、真っ二つに裂けて……消えたんだ」

「鬼？」

「そう、鬼。たぶん、あれがあの世界を作っていたやつで、たぶん、雫お嬢様があれをどうにかしてくれたのかなって……なんとなくだけどそう感じた」

ただ、別の場所からも何がしかの力がかったようには感じたのだが、恐らくそれは義経だろうと思うと推測を立てて言う奏に、実に慣れているなど健は思う。

「よくまあ、冷静に言えんね。俺ならなんなんだよーって……叫んでるだけになりそうだわ」

そんな言葉に奏は目を丸くすると、ふっと笑って言った。

「確かに慣れてるかも。子供の頃からだったから。見えるの。それが当たり前だし、不思議でもなんでもなかったからかな、いつも対処して貰えたから、全然それが普通になってた。これってそっか、おかしいのかもね」

「かもじゃなくて、十分おかしいっつの」

健は皮肉るように笑いながらそう言い終えると、今度は雫をひたと見つめると押し黙ってしまった。

「なあ、雫ってほんとに力、無いのか？」

「え？」

「いや、さ……さっき割ったってお前も言ってたじゃん？だから……」

…もしかして、なんか……あんの？」
「それは」

奏が口を開こうとしたその時だ、桜の木から千草が最後の足を一本、引つ掛かっていたのをぐいと引きぬいた途端にそれは溢れだしてきた。

がしゃがしゃがしゃ、ざらららら……凄まじい音を立てて溢れだしてきたのは人骨だ。一体何人分のものなのか、それを考えるだけでもぞつとしない数が一気に溢れ、桜の木の根を埋めていく。

思わず千草は跳び退るようにしてその場から逃げると、真っ青になり先ほどもまでの雄姿はどこにいつてしまったというのか、悲鳴をあげて奏の背後に隠れるようにした。

「い、許嫁さん……」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイってマジでそれは無い。無い無い無い無い無い無い無い無い無い無い服とか微妙に解れてるって言うか劣化して残ってるのが尚更ヤバさを強調してるから！かたせよっ！俺の前から消してくれ！！」

「怯え過ぎだよ……」

奏はそう言うと、健に再度先ほどの話の続きをし始めた。

「結局お嬢様が何かしたと感じたのは……事実だったってことですかね？」

「え？あ……ああ。雫、お前達二人を呼びもどす為に……何かの力を使ったみたいだ……」

けれどそれを受けると奏は

「雫お嬢様にそんな力、ありませんよ？確かに僕も感じはしたんで

すが……一体どういうことですか？」

そんなこと、健が聞きたい。

場に沈黙が訪れると、腕の中で気を失ったままでいる雫をだしに、健はもうここから立ち去ろうと告げる。

「警察とか呼んでおけばいいだろ？……兎に角、こんなとこに寝かせてなんていらんねえし。帰ろう」

かがりと雫は違つと認識していた奏は、これはどういうことなのかと混乱していた。

健が無言でそつと雫を抱き抱えると、坂道を下り始めた。

数歩進んだところでそんな健に待ったの聲がかかる。それは何故か刺々しい声だった。

「……何、千草」

流石にその刺々しさにむつとして、健はくるりと振り返るが、そこにはこちらも妙にむつとした表情を浮かべている千草の顔があった。

「いや……俺が運ぶ」

それだけ言つと千草は雫の青い顔を見つめながら、やや強引に健の腕から雫を攫おうとするが、黙って健も雫を攫われるわけにはいかなかった。

「なんつ……！おい！止めるよ！いいって、俺が運ぶから！」

「いい、お前こそ遠慮しろ」

「はあ！？お前が遠慮するべきだろここは！」

二人がいがみ合っていると背後からのっそりと瑞名瀬がやってきてこんな提案をしてきた。

「……じゃんけんで」

「……じゃん」

「けん？」

面倒だからそれで決めて後腐れなくしろとだけ告げると、瑞名瀬は奏を伴って先に行こうと行ってしまった。

後に残された二人はというと、若干むっとしながらも、両者引く気がないのであればじゃんけんで雌雄を決することになったようだ。

「じゃーんけーん……」

「ぼんっ!!」

36 (正々堂々とじゃんけんで勝負) (後書き)

後からの分際で正々堂々も何もないですが

37 (父、来訪) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

37 (父、来訪)

宗一郎はその報告をほぼタイムラグなしに聞いていた。お陰でこちらでは深夜どころかあと二時間もすれば起床という時間だった。

八十越えた老体には日常の起床リズムが崩れるというのは中々辛いものがある。

呼び出しのコール音が鳴り響くと、枕元のランプに灯りをともし、そのまま流れるような動作でベッドサイドに手を伸ばすと受話器を取った。

その電話は義経の配下のもので、宗一郎とも繋がりのある人物からもたらされたものだった。

『お方様、本家が動き出しました。申し訳ありませんがもう私の手には……』

本家と聞いた時、ピンと来た。

とつとつ起こってしまったのだ、避けたく思っていた未来が。

「高遠のところの息子はまだ……気づかないか」

『いえ、それが……気づく暇も無いと申しますか……』

宗一郎の元に逐次話が来ていたために知ってはいたが、予想をはるかに超えて、雫の元での生活は、千草には負担になっていたようで 宗一郎の残したあれを取り出し受け取る準備すら、出来ていなかったようだった。

宗一郎は忌々しげに寝巻の合わせをぐいと引き寄せぐしやくしやになるまで掴みあげると、寝台からのろりと起きあがり、日本へと連絡を入れる準備に取り掛かった。

かといって、そのまま宗一郎から直通で千草まで掛けるわけには

いかない。一度別の場所を通してするべきだ、そう考えた。
そのため、宗一郎はある別の場所を経由して千草へとコンタクト
を取るようになったのだが

+++

「え……父さんから、電話？」

「そのようですよ。なんでも急ぎだそうで。今からこちらに来ると
のことです。大事なお話だとのことですので、夜分ではありませんが、
応対する仕度をなさってください」

羽山は戻り寛ぐべく制服を脱ぎ、さて　　としていた千草を捕ま
えて仕度をし直せと言う。千草は訝しく思いながらも素直にそれに
従い、身支度を整えた。

「父さんが……何の用だ？」

元から千草にはあまり関心がないのか、自分から近づいては来な
いような父だった。また、千草からも積極的に父に関わろうとはし
なかったがというのもあるが。それがまたどうして夜中に尋ねてく
るのかと思ひ首を傾げるも、来ると言い、もうこちらへ向かってい
るのだから仕方ない。待つより他無かった。

本当ならばまだ寝たまま目覚めない雫の元に居たいところだっ
たが、健と奏を置いて千草は一階の右側の方の応接室にて待つこと
にした。

因みに応接室はこの屋敷の来客の多さを如実に表していると思っ
たのだが、二部屋もあり、それもどちらも特大だ。雫の部屋のただ
っぴろさよりは幾分小さめだろうかという程度であり、あまりの広

さにむしろ落ちつかなかった。

あー、でも、相手をインパクトで圧倒するならこれはいいかもしれないか。

最初に通された部屋で、相手の度肝を抜いてしまう。そして相手がけおされているうちに交渉を自分に優位なようにすすめていく。そういう狙いがあるのであればこれは大変効果があると思った。

「玄関で相手の人となりが見分かれるとも言うしな」

それはトイレなどの場所もそうだが、ここはまず、圧倒的な応接間のインパクトの方が強そうだと思った。

千草が室内をしみじみと観察していれば、どれだけ飛ばして来たと言うのか、千草の父がこの季節だと言うのに、額に汗かきやつてきた。

何をそんなに焦っているのかと訝しげに思い父を見やる。久々に会った所為か、少し老けたように千草には思えた。

「千草。久しぶりだな」

「……ああ、うん。久しぶり」

挨拶を終えると、今度は奇妙な沈黙が訪れた。

一体何を話せばいいのか、親も子も、分からないといった様子だった。

そんな時、ここに案内をしてくれた羽山が千草の父にあることを促したのだ。

「高遠様、電話を……」

それを受けるとああと、慌てて胸元から通信端末を取りだすと、千草にこれをと父は手渡してくるのだ。

「え……何だよこれ」

行き成りの来訪に行き成りのこれである。思わず問うが父は急かすのみだ。

「いいから、早くしなさい！」

険しい顔で無理やりにも端末を耳につけられてしまえば、千草は渋々といった様子で受け取った。そして待つこともなく、それは千草の鼓膜を響かせるのだ。

『そちらはこんばんは、といった時間か？千草君』

この声は……

『まだ、君にあげたパソコンは、開けていないようだね』
「あ、あの……」

受話器の向こう側に居たのは、宗一郎だった。

38 (千草のパソコンから現れた白無垢) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

38 (千草のパソコンから現れた白無垢)

千草は父と別れの挨拶もそこそこに自室へと駆け戻ると、宗一郎より命じられたことをしにとりかかる。

くそっ、なんでパソコンを開いてないって分かった！

もしかこのプログラムを開くと何か宗一郎の元へと行くとでも言うのだろうか。

健に以前パソコンの中のテキストデータを解凍して貰ったことがあったが、あれは別の方法で開こうとすると飛び出す、言わばブラフだと言う。

本当のプログラムはこのパソコンの中でしか開くことが出来ない。なんでも、本体であるマザーがこの地下に眠っているというのだ。そのマザーに直結するプログラムであるがゆえに、このデータを正規の方法で解凍するとすれば、このパソコンできちんとした手続きを踏み、開かなければならないそうだ。

そうしなければデータはブラフが発動し、無駄に膨大な文章データを排出するだけとなっているのだという。

「冗談みたいなことしてるよな……無駄に面倒なことを……」

とは言いつつも、多少は理解出来るような気がした。

それだけ千草に託したいものが重要なものであるということなのだ。

ただ、理解出来ないのが、そのデータを渡す事が出来ない相手と言うのが、六花神であり、義経でもあるということだ。

何故、息子である義経まで駄目なのだろうか。

百歩譲っても六花神は駄目と言うのは分かる。雫から聞いた話だけでも、相当に胸糞の悪い連中だとは分かるからだ。

だがしかし、義経は彼にとっても可愛い息子なはずなのだ。六花神のトップツリーの一人とはいえ、敵であると切り捨てるのは些か腑に落ちない。

まあ、敵とは言ってなかったけど……見つかったらいけない奴の一人って、一体どうということなんだ？

分からないことだらけだが、兎に角これだけが大切なことだった。雫を本当の意味で守ることが出来るのは、千草だけであり、そして、これは誰にもばれてはいけないことなのだ。

義経にも、健にも、ばらさないこと。そう告げられた。

そのたった二つだけは守れと言われた言葉に、千草はなんだか自分が慰められた気がした。

最近、雫との間に健と言う、千草の中ではイレギュラーな因子が入りこみ、不愉快な気持ちにを抱えていたため、そう感じる。

ぎこちないながらも、雫と同じく千草も、この距離が縮まっていたことを実感しつつあったのだ。だが、それを邪魔するものがあった。それが健である。

幾ら相手が健でも、今回ばかりはただただ邪魔だと思えなかった。

その上あの異様な力。

義経さんと同じ、力。

自分では無く、選ばれた者は健だった。そのことが大いに千草のプライドを傷つけていたのだ。

だが、これで千草も同じように雫の『特別』になった。

千草はプログラムを教えられた手順で攻略していくと、最後のエ

ンターキーをタンと勢いを乗せて押しこんだ。

「これで……いい、んだよね？」

後は千草の端末をパソコンに繋げ、そしてマザーとパソコンからプログラムのコピーが始まるだけだった。

ごくりと生唾を飲み込み、コピーが終わるのを待った。

その時だ　コンコンと扉をノックする音が聞こえた。
思わずぎくりとした。

多少上ずった声で返事をする、扉の方へと向かい、顔だけそこから覗かせた。

「……なんだ、健か」

「なんだって、んだよ。むかつくな。……それよりさ、飯いかね？
今からなんか軽いの用意してくれるって。俺腹へって腹へって」

ぺこぺこと言いつつ健が千草の袖を引こうとするも、千草はそれをすつと避ける。

「え……何？まだ怒ってんの？大人げなくね？」

「違う。ちょっと……少しだけやることがある。だから……後で食
うから先にいってろ」

「えー？マジで？あの奏つてのもいかないとか言っただけど。俺一
人で食うの？それすげえ寂しくねえ？」

不満げに顔を歪める健に、千草は額をぺしりと叩いて手をひらひらと振って更に出て行けと追い払うようにしてしまふ。

「義経さんとかだっているだろうが。そっちでも誘え。俺は今忙しい」

「それこそねえわ。……じゃあいいよーだ！皿ごと貰ってくつから待ってるよ。んで部屋で食おう。それならいいだろ？」

健が階段に向かいながら言うその言葉に、まあいいかと千草は頷きで返すと、健は今度こそ笑って階下へと降りていった。

パタンと扉を閉じると、生きた心地がしないとずるずると千草は扉にもたれてよりかかる。

「冗談じゃない。なんてタイミングだ」

そう一人ごちていると、ふいに部屋の照明が落ちかかるのを感じた。

停電かともたれていた扉から離れ、部屋の中央へと行くと、バチバチと千草の端末から、まるで小さな雷が発生しているかのように、電流が迸っている。

「う、嘘だろ!？」

まさか漏電かと思い、パソコンから端末との接続を切ろうとするのだが、触れようとしても触れない。それどころか千草は自分の机に近づくことさえ出来ないのだ。

ふざけるなどパソコンへと近づいて行こうとするも、迸る電流は益々荒れ狂い、まるでアーク放電をしているプラズマボールがそこにあるようだ。

ここはどこぞの科学館かよと内心想いつつも、千草は身を低くしながら机へと近寄っていく。慎重に、少しずつ進んでいくが、近づけば近づくほどに何か良く分からない圧力を感じ、身体中が重く、苦しくなる。

やっとの思いで机の直ぐ足元までくると、一気に机の上のパソコンに襲い掛かった。

「くっ、らえっ!!」

パソコン本体からコンセントを非常事態ということで無理やり引き抜き、物理的に強制終了をさせたわけなのだが　コンセントを引き抜いた瞬間、干草は思い切り大きな何かに横に薙ぐような形で吹き飛ばされた。

だんと何も無い壁に叩きつけられると、ずるずるとそのまま床まで落ちていく。

「……ちよつと、まで……聞いてないぞ、こんなの」

パソコンは落ちた。端末もこれで終わったと思ったが、先ほどコンセントを抜いた時に一瞬、視界に映ったのだが、端末は依然として起動し続けていた。

パソコンとの回線はまだ、繋がっていたのだ。

「冗談だろ……?」

パソコンは切れている。それは可也無茶な接続の切り方をした干草自身が知っている。にも関わらずにああして端末はパソコンとの繋がりを維持し、更には起動状態で何事かをし続けているのだ。

恐らくそれは、宗一郎より託されたあれであることは明白で。

「なんてもんをあの人は押し付けてくれたんだよ……」

最悪だと呟きながら、今度こそ終わらせてやろうと端末まで駆けていくと、ふつと今度は放電が納まったのだ。

呆気にとられてそれを見ていれば、放電が先ほどまで行われていた場所に、一人の少女が居た。

少女は無言で千草の前に跪くと、端末を差し出してくる。
そこに書かれていたことは、少女からの言葉なのだろうか。

《これから貴方のサポートをさせていただきます。宜しくお願い致します》

跪いた少女のほっそりとした身体を包み込むのは真っ白な白無垢のような和装で、角隠しや綿帽子を身につけてこそいないが、美しい花嫁だと千草は思った。

真っ白な髪がその背を伝い床にまで流れており、実に美しいと思わず見惚れてしまう。

《行きましょう》

「ああ 案内を頼む」

なんの疑問も持たず、千草は少女の手を取った。

39 (言の葉の力を行使する)

つい先ほどのことだった、身体からすつと何か温かいものが抜け出るのを感じたのは。

「ああ、いったか……」

宗一郎はそれだけを呟くと、少し早いかと思いつながらも寢所を後にした。

まだ彼には、やらなければならぬことが山とあるのだから。寝ているわけにはいかなかった。

全てはこれから始まるのだ。失敗するわけには行かない。

愛するものを守るためにこの日までやってきたのだから、絶対に失敗するわけにはいかなかった。

少女は顔の半分の造作が分からない、奇妙な出で立ちをしていた。布で半分ほどその顔を覆い隠し、白無垢のようなまっさらな白を纏って目の前にいる。

目から鼻の頭近くまでを隠されていると、中々に不気味なものを感じた。

そして少女は更に不気味なことに、千草が何も言わずとも歩くだけで、静々と一歩下がって後ろを、足音も立てずについてくるのだ。この、一歩下がった背後からついてくる、と言うのがみそである。

まるで噂に聞く背後霊か何かか。

そんなことを不謹慎(?)にも考えながらも廊下側の扉を開け放

つと、そこに居たのは　いつの間にもここまでやってきたのか、羽山がいた。

羽山は千草を見るとすつと頭を下げてくる。

「……何か用ですか？」

そう尋ねながらもついてくる少女を隠そうと身体を動かすと、頭を上げた羽山は結構ですよと言う。

「いそぎ、動きましよう。白の方がいるのであれば、もう貴方様には何者にも咎められることなく動く力が備わったということ。であれば早く動くが肝要でありましよう」

「何を……言ってるんだ？」

千草が首を傾げていれば、そのまま羽山は千草を無理やり伴って先へと進み始める。

一体なんなんだと恐る恐る羽山の後ろをついてゆくと、羽山は振り返らずに千草に問いかけた。

「宗一郎様よりお話はどこまで聞きましたか？」

この言葉を受けて、漸く千草は「こいつも仲間か」と分かった。

すると先ほどまでとは打って変わって千草は従順な態度を取ると、羽山の手に自らを預けるようにして歩き始める。

信用していい人間であるということだろうか。千草の態度はそのように見えるものに自然と変化していた。

「あいつを助けるために、この……人？　が……必要なこと。あいつは今、色々と封印されてたものが解けかかっていること。それが解けると　まずいこと。それだけは聞いている」

慎重にそう答えると、羽山は更に千草に向かって問いを重ねた。

「それが解けるとどうなるとは？」

「それについてはまだ……詳細はあつて話そうとしか聞かせて貰っていない」

「結構です。ではそのように致しましょう。今現在、私にも貴方様にも、鷺宮の若造の張った監視の目はきいております。今は自由の身です」

自由の身、と聞いて驚くのは、矢張り千草にも監視の目は向けられていたことだろうか。

何故か奏にもついていたが、まさか千草にまでとはと、流石に千草も驚きを隠せないでいた。

すると羽山はそのまま続けて言うのだ。

「この屋敷は昔から、雫様には大変辛くあたつて参りました。それは聞き及んでおりますか？」

何故自分にここまでへりくだつた言葉づかいになるのか、と思つたが、そこには今は言及せず、千草は一応は、とだけ答えた。

「使用人がある日、見えないところで雫様に暴力めいたことを働いたそうです。ですが私もそれを関知出来ず……結局はみすみす許すような状況に。それからです、鷺宮はこの屋敷に住む住人に監視の目を張り巡らせるようになったのは。使用人からも何かされていなか、常に見張るようになったのです」

常に見張られているのは、それすなわち目を持って守りたいがためであると語る羽山に、まさか自分までがその庇護の下にあったこ

とを千草は驚いた。

「三年周期で使用人の雇い入れをしているのは、何も頼光様がたのためだけではないのです。雫様の御身を守るためでもあったのです」

頼光と言うのは、義経の本来の名だ。

「本当ならば私も……雫様を守りたいとは思っております。ですが……それは、それだけは許されない……」

一体どういう意味なのだろうか。

羽山が口惜しそうに顔を歪めるのを見ながらふと思い出す。

そうだ、羽山は雫にああまでも辛辣な表情ばかり向けていたというのに、何故今『雫様』と呼ぶのだろうか。

けれどそれがどういうことか尋ねようと口を開こうとした時にはもう、目的地についてしまっていた。

そこは先日まで千草も住んでいた同じ部屋のもう一つの扉 雫の私室兼、寢室の部屋の扉だった。

扉を静かに開け放つと、そこはしんとしていた。

奏が雫を見ているということだったがその奏も何故か椅子の背に上体を完全に預けきって意識が無いようだ。寝入っているのかぴくりとも動きを見せないでいる。

流石に首が背もたれから落ちているのは危険だろうと揺すって起こすべきかと傍に近寄ろうとするが、背後をついてきていた少女が千草の背に触れ、ゆっくりと頭を振って駄目だと告げる。

するとそれに羽山も気づいて駄目だと言うのだ。

「今はこの屋敷全体を包み込んであるものがあるのです。ですから彼はそれによつて寝ているだけ。能力の無いものに対してこれは効果があつてきめんなだけです。ですからむざむざそれを意味無くするよ
うなことだけはなさないで下さい」

そう言われてしまえば千草は手を引つ込めて多少　妙な話だが、
名残惜しげに奏を見やる。

なんだか見捨てるような気がして、心のどこかが軽くだが、痛んだ気がした。

「それよりも早く雫様を連れてここを出しましょう」

「あ、ああ……」

千草は急かされるようにして簡易寝台に横たわる雫を抱き起こすと、そのまま両腕で抱えて先ほどまでと同様に横抱きに抱え歩き始めた。

向かう先は車庫だ。

「本家が来る前に……急ぎましょう」
「分かつてる」

そう返して黙々と歩いていけば廊下の端に倒れた使用人の頭があつて　そこまでは良かったのだ。

使用人の向こうにどうしたんだと駆け寄る健の姿を見つけるまでは千草も気にしていなかったというのに、こんなところで出会ってしまうとは。

健が人の気配を感じて面を上げると、そこにあつたのはこれから向かおうとしていた先にいるはずの人物である二人と、何故かそれを引き連れている執事の姿だ。

「千草……何、してんの？……え、って言うか執事の羽山さんだっけ？何してんですか？」

ちよつとわけわかんないんだけど、手を貸してくれないかと、倒れたメイド服を着込んだ女を抱き起こそうとする健に、羽山は起こすなと言っただけで、手を貸そうともしなかった。

「はあ？……いや、だってこんなとこで行き成り倒れたんだぞ！？俺、こつこのつて分かんねえけど、……ええと、なんだその……救急車だろ！？兎に角マジ、ヤバいつて！」

健の言い草も分からなくもない。千草が健の立場だったならば、それこそそうしていただろうという、当たり前のことを健はしようとしているのだ。

けれどそれは今、邪魔なだけだった。

「その使用人には眠って貰っているだけだ。だから……俺達が出ていけば目覚めるはずだ。心配する必要はない」

「必要は無いつて……何言つて」

「お……おい、雫が……」

健に言われて気が付ついた。千草の腕の中で雫が赤く薄らと光を帯びていることに。

千草はとうとう始まってしまったのか、雫を見てもそれくらいの感想しか抱かなかつた。

だが健はそうはいかない。なんでそんな真つ赤になっているんだと、まるで怯えたように言つと、更には何故ここに雫がいると千草に食つてかかつてきたのだ。

雫は未だ目覚めないまま、それどころか暫くは安静にさせるべきだと義経から言われていた。

それはあの場所に居た全員の前で言われた言葉だった。
だと言つのに何故連れ出してきたのかと、健は怒りを露わにして
千草の襟首を掴みあげた。

「放せよ」

「ざっけんなよ！！お前こそ雫を元に戻せよ！！初めて力を使った
雫に、どんだけの負担がかかっているかなんて、俺らにはわかんねえ
んだぞ！？それをためえ……お前を助けるために雫がどれほど頑張
っていたのか……分かってんのかよ！！」

「……………」

健のこの叫びに対しても、屋敷中は静まり返ったままだ。
義経達もどこに消えてしまったのか、誰ひとり現れない。

千草が答えないうえ、健はわけも分からぬ衝動のままに千草に怒
りをぶつけるべく、拳を振りかかった。

普段ならばこれくらい、流せたはずだろうに、何故か雫が間に入
るとどうしても狂う。

それはお互いがお互いにそうなのかもしれない。それど
振り被ったその拳は、けれど千草にあたることもなく、それど
ころか振り被ったままで全身の骨格が、筋繊維の一つ一つが、突如
として完璧な静止をしてしまったのだ。

「な……んだ、これ……」

意味が分からない。

何が起こったのかと健が唯一動く眼球を忙しなく動かすが、何一
つ分からない。

ただ分かったのは、泰然と千草とその脇に居る羽山が健をさも当
然であると言いたげに、健のその動かぬ身体を見ていることだろう。

「お前……なに、した？」

何とはなしにそう思った。

千草がこれをやったのだと。

けれど実際には、千草は身動き一つしてはいない。

ただ、一言、健に口を開いたただけだ。

『止まれ』

たったそれだけを口にされた途端、健の時間は有り得ないことに、
静止した。

そこで漸く健は気が付いた。

千草と羽山が、金縛りにあったように身動きを止めてしまった健を置いて、階下へと降りていくのを音もさせずについていく少女の存在に。

「なん、で？」

ふわりと美しい白の衣装と溶け込むように、その肌は真っ白なしみ一つない美しさを誇る。

髪はどこかから光が当たると、目にも鮮やかな金を時折反射して返すのだ。それが膝よりも下にさらりと流れて、更にその存在をどこか浮世離れたものにさせていた。

口元に紅だけはけてはいるものの、その白はまさしく、かがりその人だった。

「かがり……か……かがりい……っ！」

健は愛しい少女の名を呼ぶと、ふいに千草の後をついていく少女が僅かに振り返る。

けれど直ぐに元見ていた方を向いて千草の後をついていってしまった。

気が付けば健は、その場に使用人の女と共に、廊下の中ほどで倒れていた。

赤く不気味な色を発している雫と、千草の後をついていってしまった愛しいかがりのことを考えながら、健は意識を失ったのだ。

40 (ただひたすらに遠くへ) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

40 (ただひたすらに遠くへ)

他にこの屋敷で現在動きが取れるものもないためか、千草と雫を連れていけるのはたった一人、羽山だけだ。

運転手は居ないので安全運転を心がけますが、本職の人間には敵いませんのであしからずとは言われたものの、羽山の腕は中々だった。雫を車の振動で落ちないようにクッションで安定させていたが、それすら必要ないように感じたほどだ。

「それではどこへ向かいますか」

首都高に乗るコースを取りつつそう羽山から問われれば、千草はただ一言「遠くへ」とだけ告げた。

宗一郎からの指示でもあった通り、出来る限り遠くへ行くこと。今はただそれだけが雫を守る術なのだから。

街灯の明かりが視界を光の帯を伴って去ってゆく。

車内で暗い夜道をじっとただ無言で眺めていた千草に対し、羽山はふっと笑ってこう言った。

「ようやく受け継がれたのですね」

それは言外にずっと待ち続けていたのに、千草が長い間気がつかなかったことを責めていた宗一郎と、こちらも同じ気持ちであったことを指す言葉だった。

そのため、千草は恥じたように視線を伏せてぶっきらぼうに言い放つ。ずっと目の前にあった答えを用意されたあの箱に、自分は全く気づかず数週間を過ごしていたとは、何たることかと流石に自分でも呆れる思いがしていたのだ。

どれだけ健を羨んでも、寧ろ理不尽な怒りを覚えようとも、目の前にあんな答えそのものが置かれてあるのに気づかずに過ごしていたのだから、ぶつける相手が間違っていると言うものだろう。

本当に怒りをぶつける相手は俺自身だ。

自分自身で問題を解こうともせずに、ただただ指をくわえていいなど言っているだけだったなんて、あまりにも格好が悪すぎた。

「……済みません」

ぶつきらぼうに言われた謝罪の言葉の次にきたのは、しょげたように続けて言われた二度目の謝罪だ。それを聞けば羽山はおかしそうに笑って言うのだ。

「本当に気を揉みました。あれを開いていただけかなくてはもう、我々にはどうすることも出来ませんでしたから」

「……………」

千草のパソコンと端末、それに構築されたのはある疑似人格だそうだ。

なんでも、宗一郎の持つ研究所、そちらで作ったものだそうなのだが、この疑似人格は義経達をも凌ぐほどの力を備えているのだそうだ。

義経をもって研究をした結果出来た副産物だと言っていたが、何故千草に託そうと思ったのだろうか、それはまだ聞けていない。

マザーコンピューターに本体があるとは聞いているため、端末にあの少女型をした疑似人格がいるのは、そのほんの少しの力を宿した仮初めの存在なのかもしれない。

けれどもこうして傍に居ると、その圧倒的なまでの質感は存在が本

当はそこにはない、ただ目に見えるだけの投影画像に過ぎないのだ、
そう言われていても疑うほどのものだった。

端末を持てる不思議と言つのもあるが 問題は、触れられない
こと、だろうか。

手を差し伸べられた時、そつと手を取つたのだ。

けれど千草の指はそこに、何の熱も感じ取れはしなかった。それ
は冷たさも同様の結果である。

軽く触れあつたはずの指先は、すつと何も無い空間をかくように
落ちていく。

それを感じ取ると千草は嫌でも思つたものだ、ああここに彼女は
居ないのだと。

存在がないはず、にも関わらずに触れられる無機物質、それを目
にして千草は深く考え込んだ。

そんな時、何故か健の恨みがましい、そして悔しげな瞳がガラス
窓の向こうに見えた気がした。

それは見間違いかもしれない、けれど先ほどのああいった別れ方
もあつたため、嫌に気になる。

千草はガラス窓から視線を羽山に切り替えると、健は無事なんだ
ろうかと尋ねた。

まだ、手に入れたばかりの力の本質や使い方を知らないため、不
安があつたのだ。

すると羽山はハンドルを切りながら丁寧に答えてくれた。

「我々が抜けた後のあの屋敷では、倒れていた者たちが続々と目覚
めているはずでしょう。特に危険はありません」

「疑いたくはないけど……本当なのか……とか、思います」

探るようにして羽山の顔を覗き込むと、羽山は苦笑気味に顔を歪

めると更に答えてくれた。

「そうですねえ……危険なものではありませんが、記憶が一部前後している程度の障害は残る可能性はあります。ですがそれが危険と言えるでしょうか？ 普段から私達は物を忘れず。けれどそれは機械ではない私達にとっては、ごく自然で当たり前のことです。むしろ私達は、物を忘れることにより、人から愛される存在であると、自覚していますか？」

「……どういう意味ですか、それ。良く分からないんですが」

物を忘れるからこそ、人から愛される存在　そういうものであ
ると言われても、中々飲み込めないものがあつた。

けれど羽山は言うのだ。

「機械はそこに無機物的な、血の通わない冷たさがあると私は思う
のです。人は時折記憶を失くします。失くすと言っても後で『あれ
なんだったか思い出したよ』などと言うことがありますよね？ それ
こそが人の持つ愛される点なのだと思うのですよ」

「そういうものですか？」

「そういうものですよ。では仮に全て何でも覚えていたと
しましょう。それは少し、取っつき難い人物であるとは思いません
か？」

そう訊ねられてみれば、ああそうかと千草は首肯した。

「確かにどこか近寄りがたく、侵しがたい」

「ね。そういうことなんです。ですから記憶を多少失うことは人
の持つ美点でもあり、欠陥があるからこそ、人は愛される。　で
すから彼らは少しの記憶を失うことなど、常同様まま起こりうるこ
とのため、記憶が多少前後していようとも、特に何の不都合もなく

元の通りに動き始めるはずでしょう。ですからそこに、危険はないのです。馬鹿な子ほどかわいいとはよく言ったもので、多少記憶がとんでいても人は気にしない生き物ですからね。他者も、そして自分自身さえそれを認識しないままに記憶の穴を自分達で埋め始めることでしょう」

千草にそう告げながら、羽山はちらと後部座席をミラー越しに眺めた。

そこには白無垢の少女が、雫を見下ろして触れられもしない身体を、そつと撫でる様に腕を動かしていた。

それも必死に、ことさら必死にだ。

何故触れられないのか分からずに、彼女は必死に雫へ触れようと努力する。

だが無情にも、それは叶わぬ夢のようだ。

そんな中雫は、ただただ身体中に押し掛かる重圧を耐える様に、先ほどから淡い光を発し、呻き続けていた。

+++

雫は暗闇の中で全身を飲みこむ勢いで焼く業火を体感し続けていた。

必死に両手で顔を庇った。熱が、熱さが、炎が、悲鳴をあげ続ける口にも進入してこようとすする。

熱い苦しいと何度叫んでもそれは消えることはない。むしろ炎は益々大きくなっていくばかりだった。

熱い、痛い、苦しい、怖い、助けて！悲鳴をあげ続ける喉も限界を迎えて血の味が口に広がる。

火が大きくなっていくと、周囲が段々とその灯りで見えてきた。

皮肉なことだ。だが、そんな周囲の景色に気を配れるほどの余裕など、あるはずもなかった。

41 (神のおわすところにて) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

41 (神のおわすとこころにて)

じりじりと自分の肉体が、肌が、焼ける音が雫の耳に耳障りな音を届ける。静かに、そして確実に肌が焼けていくのが雫には分かった。

苦しい熱いともがいていれば、そこに一人の少女がやってきて雫を見下ろしてくる。

「初めましてかしら。こんにちは、雫」

「あああああつ！！熱い熱い熱い！！」

「貴女のことをずっとずっと待っていたのよ」

「ひああああつ！痛い！お父様お母様！助けて！いやああああ！」

「ねえ、熱い？雫、それはそんなに熱いの？」

少女は雫に向かって真っ直ぐに腕を突き出してくる。

雫はそこで漸く少女に気がつく、危険だと叫んだ。けれどその叫び声はただの獣のような鳴き声に近いものになっただけで、意味のある言葉になどならなかった。

少女は雫の危険という言葉も気にせず指を近づけていく。

「ねえ、本当に熱い？」

え？

少女が雫の頬に指をそつと這わす。

「本当に熱い？」

少女の指先が触れたそこから、火が吹き飛ばされるようにしてかき消えていくのを感じる。

熱風がぶわりと巨大な風に押しやられるようにして押し飛ばされた。不自然なほどに巨大な風が、その指先から生み出されたのだ。

目の前の少女が何かをしたのかと混乱しながらも驚きに目を見張れば、少女は圧倒的な眩さを放ちながらも、赤い目をしていることが分かった。

少女自身が眩く光り輝いているために顔の造作は分かりにくくはあったものの、それでもその赤目だけは何故か異様なほどにくつきりと雫の目に映った。

「ね？熱くないでしょう？」

「……うん、熱くない」

先ほどまでの熱さに痛みにと、呻いていたのが嘘のようだった。

熱くないどころか、肌の焼ける痛みがもうない。

あの苦しみを感じなくても良いとほっとするよりも、むしろ今は戸惑いを強く感じる。

まるで先ほどまでのことが幻であったかのように感じていれば、少女はそろそろもう起きなければならぬという。

何故だろう、先ほどまではただ暗く冷たく、そして業火の炎に焼かれていたから恐ろしい場所としか感じていなかったこの場所に、出ていきたくないと感じるのは。

出たくない、感じるままに首を横にふるが、そんな雫に少女は微笑んだような気がした。

けれど、何故か少女は駄目だと言うのだ。

微笑んだように感じたのは、雫の気の所為だったのだろうか。

「駄目よ。貴女を待っている人がいるんだから、貴女は戻らなければならぬ」

「私を待っている人がいる？」

少女は雫の目の上に手のひらをそつと覆つようにして被せる。

「そう。さ、目をあけてごらんさい。そこに貴女を待っている人がいるから」

少女は雫のまぶたの上から手を離す。

雫は少女に言われるままに真つ暗やみの中から目覚める様にしてみると、そこにあつたのは千草の顔だ。

少女の目隠しが外された途端場面が切り替わつたように見えた所為で、奇妙に感じたが、雫は少女の言う、自分を待っていた人は千草なのだろうかと若干戸惑いながらも口を開く。

「お早うございます、千草……」

本当に、千草は自分を待っていてくれたのだろうか。そんな疑う気持ちがあくのも無理は無い。二人の距離は未だ遠い。

けれど起きて早々に千草は寝ると雫に言うのだ。

何故かと首を傾げてみれば、千草はまだ疲れが残っているだろうと言つ。

「今日は……色々とあつたからな」

「そう……ですね」

言葉を返しながらも思う、今日は何があつただろうかと。

学校から帰り……ああそつだ、朝方から色々とあつたのだと思いだすと、雫はこくと頷いた。

確かに今日は疲れている。色々とありすぎた。少し眠るべきだ、そう思った。

「帰宅するまでの間、寝ているといい。今度はゆっくり眠れるはずだから」

「はい。そうさせていただきます。おやすみなさい千草」

少女の言葉があつたからか、素直に千草の言葉を聞くことが出来た雫はそのまま、またすつと寝入ってしまう。

雫が寝たのを確認すると、千草は一つため息をついた。

さらりと雫の額にかかった髪の毛を払ってやると、嫌な汗をかいたと己の額の汗を拭い、羽山に高速を降りて貰うとそのまま近くの山まで車を回して貰った。

手近な山と言うことでおりた先は特に名も知らぬような山だった。けれど羽山はこの山を知っているらしい。

「なんだか導かれたようにも思いますね」

千草は後部座席で苦しんでいた雫の枕元に座すため助手席を一度はおりたものの、運転席とは端末で常に通話の状態にあるため、会話は出来た。

端末を通してどういふことかと尋ねると、羽山はフロントガラスから山を見上げて言うのだ。

「ここは伊勢神宮がある場所です。言うなれば神山の一つでしょうか」

いつそのこと霊峰富士に行くべきかとも思ったが、中々に追っ手がしつこくかかるためここまで来たのだがと告げる羽山に、千草は引っ込んだ汗がまたもぶわりと出てくるのを感じた。

「追っ手？」

そんなものが居たなどと、千草は知らなかった。

知らされもしなかったのだから当たり前なのだが、そうやってくと今度は何故知らされなかったのかと言う理不尽な怒りを抱く。

「ええ。別の者が雫様と同じ力を感じさせるべく陽動に動いているのですが、あまり……芳しい状況に働いてはいないようです。矢張り雫様の力が活性化しているでしょう。このままではいずれ見つけましょう。ですから高速を飛ばしてこちらまできたわけなのですが」

本来であれば雫を一旦隠す為に霊峰富士へのルートを取ろうとしたのだがと告げる羽山は、ここ伊勢神宮でも同様のことが可能であると考えたようだ。だからこそこの場所を次に目指したのだという。雫が目覚めぬならばこのまま京都へとルートを変えようと考えていたようだが、そこで目覚めた雫を見て、何か導かれたように感じると言うのは嘘ではあるまい。

「因みに千草様は霊峰富士には行ったことは？」

「ありません」

「そうですか。では神社などには行かれますか？」

「それは……まあ」

初詣にお宮参りなどで日本人なら一度は必ずいったことがあるだろう。

「神社と言つのは神のおわす場所、聖域になります。神社などに出向いて、どこか神聖な空気を感じ取ったことなどはありませんか？」

神聖な空気、と言われると確かに感じた事があった。

その場所に足を踏み入れた途端、すつと身体中が清められたように、うつと軽くなるのだ。

不思議なことに昨日までの辛さなどが身体から出ていったように感じると、不思議と楽に感じることもある。そんなことがあったとふと思いついたように語ってみれば、羽山はそれこそがまさしく聖域に足を踏み入れた証拠だと言うのだ。

「聖域はその場所自体が膨大な力が働いているのです。ですから聖域を隠すにも、聖域である場所に出向くことが一番重要であった……」

「宗一郎様が遠く、と言われたのは、恐らく聖域にいけとそのまま口に出す事が危険だったからでしょう」

だからこそ遠くへ行けと宗一郎は命じたのか。

「でも……だったらなんで途中からそんな面倒な言い回しに変わっただんですか。最初は結構普通に教えてくれたのに……途中からそんな遠まわしになんて」

奇妙に感じると口ごもれば、羽山も暫し何か思い当たることがあるのか沈黙すると、ハンドルをゆっくりと切った。

夜中だと言うのにも関わらず、伊勢神宮周辺の道路は、高速でもないのに嫌に混んでいる。

「もしかしたら、あちらにも今、なんらかの手が伸びてきたのかもしれませんね」

だからこそ下手な言葉を言えず、そうしたヒントに近い言葉だけを告げたのかもしれないと言われれば、なんだか嫌になった。

千草が託されたというのに、千草にはそんなことが何一つ分から

ないのだ。

遠くへ、と言われれば羽山は直ぐにも霊峰富士かと理解した。けれど千草にはそれが全く分からなかった。

何故かそれが辛かった。

伊勢神宮外宮駐車場とは、伊勢神宮の社の本当に直ぐ傍にある駐車場だった。そこまで入りこむと羽山は車をとめ、後部座席へと乗り移ってきた。

「千草様」

名を呼ばれば千草はこくりと頷いてみせる。

千草は深く呼吸をすると、目を瞑り、神経を集中させて、ゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。

それはまるで神に仕える者達が、朗々と祝詞を唱える様子に酷似して見えた。

『持たざる娘、力を持たぬ娘。得られぬ娘、愛されぬ娘。愛を求め
る娘　だが、何も得られぬ悲しい娘』

そこまですを唱えると、雫の周りにふわりとどこからともなく浮かび上がってきたのは無という文字が大量に並び描かれた帯びだった。それが何本も何本も現れたかと思えば、雫にまるで水にゆられる藻のようにしてふわりふわりと巻きついていく。

『愛とは無縁、縁とは無縁。悲しきさだめ、悲しき運命。交わらず、混じらず、理解されず理解出来ず、独りある、独りあれ』

帯びは雫を繭のようにくるんでいくと、次に雫の目に耳に口にと、

穴と言う穴から内側へと入りこみ始めたのだ。

白い肌が黒く灰色をしたもので埋め尽くされて行くのを見れば、羽山は慣れた事とはいえ、恐ろしささえ感じていた。

ずるずると文字が肌の上を這う様は、何を置いてみせても不気味だ。生理的な嫌悪感すらわいてくるほどだった。

『誰もがお前を愛せずに、誰もがお前を知りもせず、誰もがお前と交わらぬ　それすなわち無となりて消えよ』

千草が全てを唱え終わると、文字の大群が雫の中に突如として凄まじい勢いで飛びこんで行く。

帯びが肌に吸い込まれて消えていき、口の中に少しずつゆらゆらと消えていつていた帯は、今度は雪崩れこむように侵入をしていくのだ。

先ほどまでの藻の動きがまるで嘘のようなその俊敏な動きに、千草も呆気に取られた。

そして全ての文字が飲み込まれると同時に、雫がその場で仰け反って目を見開いて痙攣しているのが見えて、千草は途端に蒼くなつた。

「なっ！！なんで！？な、……何も危険なことなんて無かつたんじやないのか！？」

「そんな馬鹿な……い、いえ。危険はないはずです……危険など……」

羽山も雫の様子に驚き戸惑っている。

「かつ、は……っつ！……ひっ、ああっ、あっ……あああっ！」

「ないはずじゃ意味がないだろ！！おい！起きろ！起きろ！！起き

ろ　雫……」

千草の必死の叫びもむなしく雫は痙攣を続けるのだった。

42 (血まみれの小鳥) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

42 (血まみれの小鳥)

深夜、静かに走る車の中、じつと目を瞑り組んだ足に両手を乗せて瞑想していた蒼緋は、

巨大な気配がふいに消えたのを敏感に感じ取ると苛立ったように大きな舌打ちを打つ。

禍ツ子の気配を追って山から下りてきたものの、まさかここにきてそれが途絶えるとは思ってもよらなかった。

「……消えた」

「はい。ですが、これは一体……」

静かに発した蒼緋の言葉に運転者は戸惑うように答える。

蒼緋はその言葉には答えず、苛立ちそのままに美しい顔に似合わない洪面の表情を浮かべた。

禍ツ子の出現は読まれていたことだった。

約束された子供、そして禍ツ子の出現、これがまさか同一の年代に起こりうるとはと、年寄連中の驚きよう、怯えようは酷いものではあったが、それでも蒼緋は怯えることなく堂々とこれに迎え撃つつもりでいた。

蒼緋は自分の力がある意味では試すのにいい機会だと考えていた節もあつたのだ。だというのにその機会が棒にされ、腹が立った。

巨大な力を得て生まれたがゆえに、その力に振りまわされ、翻弄されて生きてきた。

一体何のためにこの現代に、このような巨大な力を得て生まれてきたのか、彼にはその理由が欲しかったのだ。

そして禍ツ子の出現を捉えた。

だからこそその好機と考えていたというのに 蒼緋はひひ爺どもの元へ戻るぞと言うなり、自分は寝ることにしたようだ。

必ず捕まえて見せる。

八つ裂きにして、蒼の炎で焼きつくしてやる。

蒼緋はそう決意すると眠りの淵に落ちていった。

その禍ツ子こそが彼の愛しい妹だということに、彼はまだ、気がつかない。

+++

雫は目が覚めると、記憶が無くなっていることにまたも絶望した。どうしてか最近、よく記憶が飛ぶのだ。今もそう。

「鳥さん……」

何故か寝巻のまま中庭を歩いていたらようだ。

夢遊病と言っのたろうか、裸足のまま外に出て歩いていたらようだ。足裏は恐らく、泥土に汚れ、まっ黒だろう。

雫の手の上にあるのは、小さな小鳥の血まみれの姿だった。羽は手折れ、血が滲んでいるのを見れば、悲しくなったのと同時に恐ろしくなった。自分に。

私は……私は……

自分がこの小鳥の翼を折るようなことをしでかしたのかと思うと、雫は恐怖にかられ、その場に膝をついて咽び泣き始めた。

泣いたところで小鳥の翼が蘇るはずもないが、それでも申し訳な

くて辛くて堪らなかったのだ。

狂人になってしまったのだらうかと雫は震えながら咽び泣いていると、小鳥が甘えるように助けを求める様に、雫に向かって小さくさえずる。

それはただの感傷に過ぎないものだったかもしれない。けれど雫は小鳥の呼びかけに応じる様にその姿を辛くとも、目の中に納めた。するとそこで気がついたのだ。

「翼が……治りかかっている？」

小鳥の翼が折れたのは、前のことのようにだった。翼の傷は自然治癒により、ふさがりかけていたからだ。

それを見た雫は、記憶の無い中で小鳥を自分は助けたのかと思っ
た。

飛ぶ能力を失くした小鳥が落ちたのを、雫は拾い上げたのだらう。
そう確信すると、雫は直ぐに動いた。

「奏！奏！起きてください！奏！！」

泥まみれで中庭から表玄関まで駆け戻ると、ホールを抜けて三階まで駆けあがっていく。奏の部屋は使用人の奥棟へ続く廊下にほど近い部屋だ。そこまで勢いよく駆けていくその途中に、まだ陽が昇る前だと言つのに早いことで、健と出会った。

「朝から騒がしいね。どうかしたの、雫」

「え、えつと……お、お早うございます！健」

ぺこんと頭を勢いよく振ってさげるが、何だか健と顔を合わせるのが恥ずかしく、一歩引いてしまう。すると健はふわりと笑って挨拶を返してきた。

「おはよう、雫。ところで急いでたみたいだけど、何かあった？」

早朝だと言うのに急いでいるんだから相当だろうがと言われて思
い出した。

「あの、小鳥が……」

そつと差し出された手のひらに乗った怪我した小鳥の姿に、健は
これは酷いと言うと、一階に雫を連れて下りていった。

個人邸宅だと言うのに、この屋敷には治療にのみ使用する部屋が
ある。そこに連れていったのだ。

健は小鳥の翼を広げると、治りかけかと呟きながら傷口を消毒し
ていく。

「治ったら飛べますか？」

「それは……分かんないけど、でも……飛べるといいよな」

「はい……」

人間用の傷薬を塗布してもいいものかと思つたため、消毒と添え
木程度だったが、応急処置を済ませた小鳥に二人は何か食事を与え
ることにした。

「この時間つてき、厨房の人、もう起きてるんかな？」

「いえ……流石に起きてないはずですけど……」

「んじゃあ厨房からちよこつと拝借するか」

これだけ大きな屋敷ともなると厨房もそこのレストランよりも
広い。壁一面に業務用の冷蔵庫が並んでおり、奥には大きなパント
リーもあるのだ。

その矢鱈と広い厨房にこっそりと忍び込むと、冷蔵庫の中から野菜を漁り、その中からキャベツを取りだすと、これを人間の一口サイズ程度千切り、戻す。

そして奥のパントリーから米を探すと出てきたのは雑穀に白米にと数種類のを発掘した。

「雑穀の方がいいの？」

雫がそれをひとつかみ掴むのを見て首を傾げると、健は白米を元に戻す。

「雑穀の方が栄養価が高いんです。だからこっちのほうが、良いと思う……」

雫はそれを膝の部分の布を掴んで上まで持ちあげると、たわんだ布の窪みにさらりと流し込む。

そのまま二人で治療室に戻ると、雫と健は二人で小鳥に餌をやった。

小さな嘴で必死に小さな粒を摘んでは喉の奥に押し込もうと上を向く様が愛らしい。

自然と二人から零れる笑顔に、まるで昨日のことなどなかったようだと思っただが、ふいに二人ともが気が付いてしまった。

「昨日、何があったんだっけ？」

「え？昨日は月曜日？火曜日？」

治療室の壁にかかる時計の電子盤に描かれた文字に驚く。

日曜日は覚えている、土曜日も覚えている。金曜日はあんな事件が舞い込み、酷く疲れたのも覚えているのだ。

曜日がおかしい。それも、自分達の時間の感覚こそがおかしいよ

うに思う。

「どれだけ二人で困惑していたのだろうか、外はもう朝日が昇っていた。」

朝日が昇れば二人の元に、まず真っ先に食事を運ぶ奏がその不在に驚き　三階では大変な騒ぎになっていた。

「栗お嬢様が居ないんです!!」

43 (失ったもの、それはなに?) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

43 (失ったもの、それはなに?)

大慌てで出先から戻ったばかりで突つ伏すようにして寝入っていた義経達もこれに跳ね起きると、雫を捜索にかかった。

鷲宮の目があるため、程なくして見つかりはしたが、見つかったところで何とも言えない感情が湧き起こる。

いつもならまっすぐ相手の目を見つめる瞳は、今は落ち着かないように揺れて奏を見上げている。

「ねえ奏、どうして私はこんなに記憶が欠落しているの？私は……病気なのですか？」

「俺も……覚えてないんだ、昨日のこと。なあ、これ、なんなの？」

朝日を背に、二人がやつれた顔をしているのを見て、奏はわけも分からず二人を攫うようにして抱きしめた。

奏には何も言えなかった。

何が起こっているのかがそもそも、理解出来なかったのだ。

そんな三人を見守る大人達も困惑している様子だったが、この場でただ一人、最後に駆け付けた千草だけが罰の悪そうな顔をして直ぐにその場を去っていった。

「羽山さん、行きましょう」

「はい、千草様」

解れるたびにこうして宗一郎は雫を壊していったのかと思うと、悲しく、苦しかった。

そしてこれからはその役目は千草が引き継ぐのだ、そう理解した途端、千草は胸が抉れるようだった。

けれど協力しなければならぬ、本家が動き出してしまったのだ

から。

「俺に、出来ることをしなければいけない。そうなんですよね、羽山さん」

雫のことを思えば、重い、重い役目に千草は確認を求めてしまう。それが自分の役目なんだと。

「はい、その通りで御座います」

私室の扉を開け放つと、そこに待っていたのは白い布で顔を覆っている白無垢の少女だ。

少女はゆっくりと頭を垂れるとふわりと笑った。

少女は何も言わないと言うのに、何故かその笑みに、慰められたような気がした。

+++

千草の元に現れた少女は、義経達を遠ざけるのにも一役買ってくれていたらしい。らしい、と言うのはただ聞いた話に過ぎなく、見たわけではないため確信がどうにも持てなかったからである。

「本当にその……」

あれだけ強い義経達をどうにかすることなど可能だったのだろうかと思ひ、疑うように千草が少女を見ていれば、少女は表情一つ変えることなく黙っているだけだ。むしろそれを見て面白そうに答えてきたのは羽山のほうだった。

「言いましたでしょう、彼女はそのため居るのだと」

昨夜、義経達どころか、他のひっそりと控える様にこの屋敷の随所に配置されていた顔すら知らない従者達すら出て来なかったことを思い出して千草はごくりと息を飲んだ。

それが本当だとすれば、少女はとんでもない力を宿していると言うことだろうか。

「同じようなことを命じたそうですね」

「同じと言つと……眠って起きたらこのことについては、忘れる」と。そういうことですか？」

雫にも健にも、同じように力を使い暗示をかけた。そして少女もそのように義経達全員を相手に力行使したのだと言つ。

「では、昨日のことは本当に何も」

「ええ。覚えていないはずです」

そう言ったものの、羽山の顔色は優れない。

「何か……あつたんですか？」

「……それが、その」

どうにも歯切れが悪い羽山に千草は言つてくださいと告げると、

羽山は重い口を開き、昨夜のことを語ってくれたのだ。

「昨夜、本家の追っ手について、状況は逐一入るようにと、端末で別回線も開いていたのです」

千草との通信との他に、常にオープンで回線を開いていたということだろうか。

「そちらは配下の者達からの通信なのですが、こちらに、その……義経様達の方からも妨害がかかり……」

「なんで、そんな」

義経はこちらの味方なのではないのかと思ひ愕然としていれば、羽山は首を振って言うのだ。

「義経様からすれば、雫様を攫うものは全て敵で御座いましょう」

別の地点で釘付けにすべく先手を打ってあったものの、雫が屋敷から連れ去られたのをどこでどう知ったのか、彼らはこれを追ってきたというのだ。

「敵に回すとあれほど厄介だとは思いませんでした……」

そう重苦しい息を吐きつつ告げる羽山に、それでもきちんと記憶は消せたのだろうかと問えば、分からないとの何とも言いようの無い答えが返ってきた。

「分からないって、そんな!」

「本当に分からないのです。白の方もおっしゃっていましたが、記憶を消せた保証がないと……記憶を失ってはいるようなのですが、そのことに今朝の雫様のように、早々に気がついてしまっている。その上、我々を疑っているようなのです」

「我々って……その、羽山さん達を?」

それを聞けばぞつとした。

ここに来た当日に向けられた、あのぞつとするほどの敵意が圧迫された首の痛みと共に生々しく蘇る。

ただ揉めていただけでのあれだった。

では、雫のみならず、義経の記憶まで奪い去った今はどうされるのだろうか。

そうだ、自分はこの短い期間に見てきた。義経の身内に害する者に対する激しい敵意を。

じゅくじゅくと音を立てて崩れていく肉体が脳裏に浮かぶ。アレも怖かった。けれど一番怖かったのは　その姿を氷のような無表情で見ていた義経の姿。

千草はごくりと生唾を飲み込むと軽くぶるりと全身を震わせてから頬をびしゃりと叩き、自分に言い聞かせるようにしていった。

「それでも　それでも俺は、あいつのためにやらなくちゃならぬんだ」

44 (父の口に出せない苦悩) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

44 (父の口に出せない苦悩)

隼達が出かけていくのを見送ると、義経は二階ホールより自室へと戻っていった。

その足取りはいつも通りだが、従者達にはいつもの主らしくないことが分かった。

そつと窺うようにして後をついていく従者達に義経は、そんな彼らなど存在しないかのように自室の寝室まで押し黙り引つ込むと、靴を脱ぐのも面倒なのか、そのまま身体を寝台の上に投げ出す。

「降矢君……」

塩見がおずおずと室内に入ってくると大丈夫かと気遣わしげに伺ってくる。

なんだ塩見かとはかりにちらとその姿を視界におさめると、義経はまたシーツに顔を埋めてしまった。

いつもであればここで「おいでおいで、どうかしたの?」それくらいは言ってみせるところだが、今の義経には無理だった。

何せ、精神的に酷く弱っているからだ。

呼びかけに答えない義経を見て、廊下で様子を窺っていた二人にせつつかれ、塩見は義経の元へと向かう。後に続いて二人も入ってきた。

ぎしりと音をさせて三人は義経を囲むようにして寝台の端に腰をおろすと、一人が義経の靴を脱がし、一人がその襟元を寛げる。義経はされるがままだ。そして最後の一人が上着を脱がして楽にさせてしまうと、ようやく息をつけたとばかりに義経は深く息を吐き出した。

「ねえ、皆」

「なんだ、義経」

義経の呼びかけに鷲宮が返事をし、残りの二人はじつと義経の次の言葉を待つ。

「須賀圭のことだけどさ……どうしよう」

先日健が噛んでしまった相手である須賀。彼女は今も隔離病棟にて治療中だ。

それは一般の病棟とは隔離しておくべき理由が全く違うし、それどころか周囲を取り囲むのは医療のスペシャリストではなく、研究者が大半だった。

須賀には今、徹底的な治療では無く、解析が行われているのだ。

それは何故か 感染している疑いがあるからだ。

感染者、それが今の須賀の呼び名だった。

それが嫌に頭にちらつく。

「もしも、もしもだよ？感染していたら……どうしよう？」

あまりにも怖くなって義経はシートに埋めた顔をそのままに、小さく身体を丸める。そうしているとまるで、身体は大きな子供のようだった。

「記憶は操作出来るけど……でも無理だよ。感染していたら？本家に本当は隔離が普通でしょ？でも……今本家に隔離要請すれば何故噛んだのかって話になる。僕の従者達が今、そんなことをしでかすはずもないほどに長くこの血と付き合っていることは皆良く知っているもん」

暴れる血を抑えつけて活動を続けている義経の従者達はもう、言

わば血との付き合い方をよく知っている玄人と称してもいいかもしれない。

そして健はまだ初心者だろう。

それも調べれば分かってしまうが、血を定着させていない銀朱なのだ。

健も須賀も、調べれば直ぐ様分かってしまうのだ。

それに噛まれた須賀は、もしも本家に調べられれば直ぐにも露見してしまうだろう。

血を定着させていない、何者かがいることに。

そして何故そんなことをしているのかとの追及が入ればもう、雫に行きつかれるのは遅かれ早かれといったところだろうとそこまで思考がいったところで義経は顔を手のひらで覆う。

「感染……ねえ、降矢君。本当にその……須賀ちゃん、噛まれちゃったの？」

塩見が訊ねれば、澤田が冷たく言い放つ。あの傷口を見たでしよう。けれど塩見はぶんぶんと首を振って更に言うのだ。

「だ、だってさ？須賀ちゃんが噛まれたって、……吸われたって、感染はしないじゃないか！だからその……もしかしたら、感染だっと思ってないかもしれないじゃない」

かもしれない、かもしれない、今の段階ではかもしれないというただの憶測だけだった。

だが、その憶測は毎回雫に関して言うなれば、義経にしてみれば全て、最大級で危険なものばかりが脳裏を過る。

「じゃあしてないって安心してて、後で違ったらどうするわけ！？僕だつてもしかしたら感染だつてしてないかもしれないって思ったよ！？でも、感染してたらどうなるの？雫だけじゃない、よそのお子さんだつて危険な目にあうんだ！須賀圭を本家に隔離はその場合どうしようもないかもしれない！けど、じゃあ雫は？！あの子だつてそうだ！そしたら僕は……どうすればいいんだよ……」

よそのお子さんとは健のことだ。

義経は義経なりに健のことをよその親から預かっている子供だと考えている。その子供にまで危険が及ぶとなれば、最早恐ろしいとも言えないほどに恐怖を感じていた。

確かに雫を失うのも怖い。だがしかし、預かっている他人の子供にもしものことがあるらばどうすればいいのだ。

人に代えはきかない。

確かに義経は簡単に人を殺す。

だがそれは、自らを守るためであり、家族を守るためであり言わば、何かを守るといふ理由がなければそれをしない。

理由がなければ人殺しなど誰がしたいものか。

この間の堀井初枝もそうだった。

彼女もまた、害を成すと判断し、殺そうと考えた。

エマも害を成すならば喜んで消そう。だが、今はまだ泳がせるべきと判断し、逃がした。

紅桔梗の元で何をしているかは知らない。

定期的に鷺宮が確認をしているらしいが、義経はもう興味を失っていた。

千草もそうだが健もそうだ。義経なりに気にいつていた。

雫を形は違うかもしれないが、見守る仲間とも考えていた。

だが、須賀のことが露見すれば、健も雫も危ういのだ。

「で、でも、須賀ちゃん……雫ちゃんの初めて出来た外のお友達だよ？ 櫻子ちゃんみたいにお婆様からのって話しじゃなくて、ほんとに初めて出来た友達なのに……須賀ちゃんいなくなったら、雫ちゃん」

「分かってるよ！！そんなの言われなくたって知ってるよ！！」

だから尚更辛いのだ。

須賀が皆の危険を脅かすような存在になればどうなるか。

健も雫も勿論のことだが、義経の抱える他の家族も問題だろう。

それは勿論、従者達も入っている。

彼らをも預かる身として、義経は須賀を一人どうにかすれば、とも考えた。けれど未だ出来ないのは雫との繋がりがあるからだ。

彼女は雫の初めての友人なのだ。

それこそ、本当に対等な立場で話せる　いずれは心の奥深くのことも深く話し合える親友になるかもしれない、そんな大切な大切な友となるかもしれない存在。

だからこそ、感染したとの確実な結果が出てからしか、どうすることも出来ないは今もまだ様子見と言って見守っている。

だが、分かっているのだ本当は。

須賀を消せば済む話だと。

だが、それがどうしても出来ない。

「……怖いよお」

義経はここ数週間、降矢邸に戻ってきてからずっと精神状態が悪化し続けていた。

理事長代理、それを引き受けた日がもう何年も前のことのようにだった。

「父上が何を考えているか、分からない。雫も……本当に禍ツ子なのかな？約束された子供なのかな？」

声が涙声になってきたのを感じ、塩見はつられるように自身も泣き始めてしまった。

「ご、ごめんっ！わ、わわわ私、そのっ……ごめん、降矢君」

泣きながら塩見は義経の背に抱きつく、ぎゅうぎゅうとその身体を何かから守る様にして力をこめて抱きしめた。

誰が一番不安かなど、分かり切ったことだった。

宗一郎が何かしていることは皆、知っていた。だが彼は、何年も前からだが、鷲宮にさえトレス出来ないのだ。

位置把握も出来ず、声も拾えず姿も見えず　それが何故かなど理由は分からないながらも、何がしかの仕掛けがあるのだろうとは考えていたが、特にこれが害とならなかつたため、放っておいた。

そもそも争う相手ではなかつたことがそれはあつたものの、それでも今になりそれを後悔していた。

あの時調べておけば、何か分かつたかもしれないというのと。

トレス出来ないだけではなく、宗一郎は何か、先日千草にしたのかもしれないと義経は感じていた。

それは千草にも何か、宗一郎と似た感覚を嗅ぎ取つたからだ。

父親である宗一郎に千草の関係、繋がり。そして雫の不安定な力、そしてかがりの存在。血の定着をなされていない健のいつ起こるともしれない暴走　それら全てが義経の精神状態を引っ掻きまわし、ぐちゃぐちゃにしていく。

誰か、誰か助けて。

あやこさん　……！！

何度その名を呼びたく思ったことか。

けれど義経はそうはしなかった。

彼女は呼べばきてしまうだろうが、彼女にはこれを聞かせられないわけがあったのだ。

「粟がせめて、せめて約束された子じゃなければ……」

本家から追われ、命を狙われるような存在でなければと願うものの、義経の考えている通りにはならないことだけは確かだろう。

あれだけの力を宿している存在だ。限りなくそれは黒に近いグレイ。

従者たる三人は何も言えず義経をじっと見降ろしていた。

せめて須賀が感染していないことを祈る、それしか今出来ることは何一つ、無かった。

44 (父の口に出せない苦悩) (後書き)

お父さんも色々と悩んでいたというお話でした
続きます

45 「何故忘れてるんだ？」（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

45 「何故忘れてるんだ？」

シヨートホームルームの前の朝の時刻、まだ大半の生徒達は登校していない時刻に、執行部の部室の簡素な椅子に座って雫は考え込んでいた。

記憶が無いことに気が付きはしたけれど、ところどころ覚えてい
る部分があった。

それは健に血を吸われたこと、健と契約したことなどだ。

「た……その、あの……たけ、たける」

健と呼び捨てで呼ぶようには言われていたような記憶があるが、
妙に飛び飛びで思い出せない。だからか、気恥ずかしいのと違和感
を感じるのとで呼びかけるだけでもなんだか妙に緊張してしまう。

雫が名を呼んだことで生徒会の書類を読んでいた健は「んー、な
になにー？」と雫の傍へとやってくると、どうかしたのかと首を傾
げる。

「あの、何だか……二人で何かを忘れているような気がするんです」

朝のこともあり、恐らくは二人共にかけた記憶があると言つこと
には気が付いていた。

恐らくそれはとても大切なことなのではないか、とは思つが、上
手く思い出す事が出来ない。

「昨日、一昨日、たぶん……それくらいの時間のこと……健と何
か私、していませんか？」

「俺と……何か、か……」

首を捻って考え込む二人に、千草と奏は顔を見合わせてしまう。
特に奏ははらはらし通しだ。

今朝簡易ベッドまで起こしにいけばそこはもぬけの殻で、やっと見つけたかと思えば二人して酷い状態だった。

誰も何も声をかけられないような状態で　奏はそれから酷く二人のことを気にかけていたのだ。

千草と言えば端末を握りしめたまま二人をじっと見据えて微動だにしない。

そして考えこむ二人に対し、ふいに言葉を放った。

「なあ、櫻子さん、今日も来てないのか？」

「え……？」

雫はその言葉にきよとりとし、大きな目を瞬かせる。

厚ぼつたいほどに乗ったまつ毛がぱちぱちと動き、重くは無いかなどと間近で見っていた健はそんな全く関係ないことを考えてしまった。

「櫻子……今日も？もって……どういうことでしょうか？」

雫が不安げに訊ねれば、そのままだとばかりに昨日も来なかったと言っ。

「え……？だって、その……き、昨日？櫻子が？だって櫻子が休むなんてそんなこと……するはず」

雫も優等生だが、櫻子は更に優等生だ。

品行方正で絵にかいたような優等生をしているのは、この場にいる奏を除いた三名もそうなのだが、櫻子の場合はこの学園に通わせていただいているという考えが頭にあるため、尚更なのだ。

絶対に和を乱さないこと、そしてはみ出さないこと。それは休むことも入っているようだった。

「だって櫻子は休むことは絶対にしないはずなのに」

旧家と言うだけでお金がないからと、勉強だけが取り柄とこの学園に通わせて貰っていることを心の底から感謝している櫻子は、宗一郎のためと、どんなに体調を崩そうとも休むことはなかった。

雫との不仲は知っているし、よくはないと感じている。けれどそれでも、自分にとっては恩のある人物だった。だからこそ櫻子は宗一郎の態度に憤慨しても、雫のことで反発を表に出したことはない。それがどんなに理不尽だと考えても、いうに言えない事情があった。

「通わせていただいているのだから、迷惑はかけられないものね」

そう言うっては頑張らないとしてきた櫻子にしては珍しいいや、それよりも酷く気にかかった。

珍しいのではなく、奇妙にさえ映る。

「……お見舞いに行きたいけれど、許してくださるかしら」

花を贈るだけで今までは見舞ったことなどなかった。外出を禁じられていたためだ。けれど今回のこれは今までにないことであるため、どうしても見舞いたかった。雫はそれほど櫻子が心配だったのだ。

ぎゅっと胸元で手を握り締めると雫はそうだとぱっと面を上げる。須賀も行きたいはずだ。二人で言えば義経だって快く許してくれるはずだ。と思ったところで、須賀も居ないことを干草に指摘され、知った。

雫はどういうことかと自分の知らない　　いいや、覚えていない

事実を耳にして驚愕する。

すると千草はしれつと言つのだ。

「お前ら、何で覚えてないんだ？須賀さん、お前達の前で倒れて入院したんだろ？」

「……は？何言つて」

自分達の前で倒れたならば、何故覚えていないというのか。それこそ有り得ないことではないかと健はそんなの嘘だろうと戸惑いに目を見張る。すると更に千草は当時の様子を思いだせる範囲でなのだろうが、ぼつぼつと語り始めた。

「執行部で倒れたつて聞いたが……健、お前こそ何を言つてる。お前もその場に居て、倒れてる須賀さんみて騒いでたのはお前だったんだろ？なのになんでお前が忘れてるんだよ。おかしくはないか？」

健は目を見開いて混乱をきたした頭を抱え呻きだす。

雫も同様のようだった。

千草は一人端末を覗き込むと、ぼそりと、大丈夫だと首肯しつつ呟いた。

奏がその動きを目ざとく見つけると、端末のディスプレイを何気なくを装って見やる。するとそこには須賀圭の文字と綾小路櫻子の文字が躍っていた。

その全てを読み解くことは出来なかったものの、これにより、千草の行動や発言に、奏は今後違和感を覚えることになる。

「一号さん……貴方は……」

長男の啓一が生まれた時、本家の人間はひどく落胆したが、義経達は喜んだ。

啓一が異能を持たない普通の子供だったからだ。

普通であると言うことは義経にもあやこにも、嬉しいことだった。自分達のように能力を持っているのだからと一族のために奉仕し続ける約束され続ける生を生きなくて済む。

そしてそれと同時に、子供にそれを強いることをしなくても済むと言う安堵もあった。

けれど蒼緋はぎゅつと義経は強く目を瞑ると、雫も啓一と同じように生きて欲しかったと呻く。

啓一のように、普通の人生を送って貰いたかった。

それは親としてほんのささやかなまでの願いだった。

普通に生きて欲しかった。ただそれだけが願いだったというのに

「ねえ、どうしようか」

義経は問う。

「なんでこんなことになってるんだろう。ただ普通の子として育てて行って欲しかっただけなのに」

何が言いたいのかを分かっただけはいたが、義経が何がしかの答えではなくて、ただ聞いて欲しがっていることを敏感に感じ取ると、塩見はその意を汲んで訊ねる。

用意されていた言葉を答える様にして塩見はそれを口にした。

「……普通に？」
「そう、普通に。普通に年を食って、年老いて欲しかった。啓一みたいに……僕らみたいに世界から取り残されて辛い思いをしないで済むように……」

塩見にはそれが良く分かった。

時代に取り残されていく感覚も、身近であった周りの人々に置いていかれてしまう感覚も、全て実感として知っていた。

従者としてついていくことをあの時確かに誓いはしたが、それでも最初の一人目となった知り合いが死んだ時、辛かった。

ただひたすらに、辛かった。

義経も鷺宮も澤田も、時期を置かずしてそれを経験している。

だからこそ、啓一が生まれた時、普通の人間として生まれてくれたことに、義経だけでなく、鷺宮達も心から喜んだ。

蒼緋が生まれた時は、なんとしてもこの子を守らねばと皆が誓った。

自分達がそばにいれば自分達のような悲しみは減らせることが出来るだろうと。

それが今は……

そして普通の人間として生まれたはずの雫が……

ぎゅっと何も言えず塩見は義経の頭に手を伸ばす。

柔らかな髪が指を通ってすり抜けるのがなぜか妙に悲しく感じる。

掴みたいのに掴めない、それは今の二人の距離のようで、それがただただ物悲しい。

46 (守りたいのに) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

46 (守りたいのに)

義経はぐつと何かに詰まったようにして胸を抑えると、次の瞬間塩見の肩を掴んで叫ぶ。

それは恐怖の叫びだった。

「ただ静かに暮らして欲しかったのに……あ、ああああ、あああああつ！……どうしようどうしよう、い……いい、嫌だ！本家の連中に追われ始まつたらどうしよう？！本家の連中に殺されそうになったら？いやだ、雫が死んじゃう！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！」

塩見の肩を掴んでいた手は力なく下りていくと、そのままシーツをぼすぼすと音を立てて叩きつける。

蒼緋が生まれた時、これこそが我らが待ち望んでいた総主よと本家は皆喜んだ。

だがしかし、それと共に怖れもしたのだ　　禍ツ子が出現するところを。

禍ツ子は総主となるべく生まれた蒼緋の天敵だ。

総主は六花神を導く者。その天敵ともなれば六花神全体の敵とさえ言える。

雫がもしもそれと露見すれば、本家は迷うことなく雫を殺すだろう。

須賀がもしも感染していればと、義経が怯えるのも無理はないことだった。

どうしようどうしようと怯えて　　ついにははらりと涙を一粒一粒と零し始めた義経を見て、塩見はうるたえた。

そして思わず手が伸びた。

ぎゅっとその身体を包み込むと、小さな身体で塩見は義経を全身

で受け止めた。

「泣かないで。大丈夫だよ……大丈夫だから、ね？」

鷺宮も塩見の胸に抱きしめられた義経の背中をぼんぼんとゆっくり落ち着かせるように叩く。

「そつだ。泣くなよ。父親のお前が娘を守らんでどうすんだ。……な、義経。大丈夫だから、俺らがどうにかするから」

全ては仮定の話しだからと、従者である三人も考えてはいた。けれど何故か不安が拭いされない。

何かの予感なのかそれとも　と考え、それに気づかぬふりをする。

澤田が寢室を離れていたかと思えば戻ってきて義経の前にすつと陶器で出来た美しい模様の描かれたティーカップを差し出してきた。それは慰めることが苦手な澤田が、落ち込んだ義経に決まって出す飲み物。

「あ……ホットミルク？」

匂いをくんとかぎとると、それが蜂蜜を落とし込んだホットミルクであることに気がつく。ふわふわと漂ってくる匂いにつられるようにして、義経は頭を持ちあげた。

シートをぐしゃぐしゃにしながら起きあがり、ぺたぺたと這って澤田まで近寄るとそれを受け取ると、恐怖に体が冷えていたのだろう、じんわりと指先から温まっていくように思える。

ずずつと鼻を噉ってへにやりと眉を下げてごめんとぼつり、眩いた。

「弱音なんて……吐いたらいけないのに……」

自分が強くあらねばならないというのに、冷酷でいなければなら
ないというのに。

そうでなければ本家の年寄衆に潰される。

紅桔梗の意思に潰される。

自分が強くなければ皆を守れないのだから。

ホットミルクを手に俯いて微動だにしない義経に、困ったように
三人は顔を見合わせると、誰からともなく義経に手を伸ばしていく。
そしてその身体をぎゅっと守る様に包み込むように抱きすくめると
笑って言うのだ。

「何のために我々がいるんですか？」

「俺ら、お前と一緒に生きるために契約したんだぜ？」

「なのに……私達を守るためだけに生きようとなんてしないでよ」

そんなの辛すぎた。

それを聞いた途端、義経は目を見開くとまたぼろりと涙が一滴、
頬を伝って落ちていった。

「い……嫌だ、このホットミルク、しょっぱいよ……」

+++

「義経、行かないと……」

雫達が出ていってもう、一時間近く経過していた。そろそろ義経
もでなければならぬ時刻である。

「……………」

けれど義経はあれから泣きつかれて寝てしまった。

それはそうだろう、あれから散々ぎゅうぎゅうに三人で抱きしめて泣かせてやったのだから当然だ。

今まで泣くに泣けず、独りで抱え続けてきたのだから、それを限界まで吐露させたことにより疲れきってしまうのは当たり前のことだった。

「いつもあんまり言わないからね」

察することしかさせてくれない主の姿に三人は苦笑する。

どうして心配していることに気づいてくれないのか。

「俺らってばそんな頼りなく映るのかねえ？」

まるで心外だとばかりに肩を竦めて言う鷺宮に、澤田はそれだけ愛されていると言ってくれませんかと囁くように言う。彼にしては珍しいこの茶化すような物言いに、鷺宮は笑みを深める。

「さてさて、どうするかね？このスリーピングビューティーは。無理に起こすのは忍びないが……仕事は待っちゃくれませんか」と

「仕方ありませんね。起こしますか」

よいしょといいながら澤田が義経を起こそうとしたところで、塩見が自分を送るから、ぎりぎりまで寝かせておいてあげてくれと拝むように手をあわせて頼み込む。

「ですが……………」

「そつ……これは、分かつてるけど！！疲れてるし！ね？！その……
やっぱり泣いて疲れて眠るなんて相当……夜も寝れてないんじゃないかな
いかなって思うから……だから……寝かせてあげようよ……」

そんな風にしよげかえって言われてしまえば仕方ないと、二人は
義経の寢室を後にした。

後に残された塩見は、義経の子供のような寝顔にふっと笑みを浮
かべてさらりと髪を指で掬った。

「あとちよつと、ちよつとだけ……眠りの世界でゆっくりしてね」

それだけしか自分には出来ないから。だから君に眠りの世界でだ
けでも、ゆっくりして欲しいのだと。

46 (守りたいのに) (後書き)

漸く何が、というのが出てきたように思います

無駄に長いと言つことわざくくりと切られていた方には申し訳ない
感じですが前置きいくつも必要な話だったのでここまで逆に付き
合ってください方には有難く々々

47 (君だけの罪じゃない) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとのこの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

47 (君だけの罪じゃない)

二人が出て行って数分経った頃のことだった、義経がふいにぼそりと呟いたのだ。

「ねえ、雫さ……昨日鷲宮にもトレス出来なかったけど……その間、どこにいったんだろう?」

寝ていたとばかり思っていたため、義経の柔らかな髪の毛を掬って手触りを楽しんでいた塩見は僅かに目を見開き驚くが、義経の問いにゆっくりと頭を振ると分らないと短く返す。

「ん……そうだよ。須賀さん、さ?」

「うん」

「もしもだけど、健君の血が混じってしまったら……死ぬよりももっともつと、惨いことになるよね」

「……うん」

過去に一度だけ見た事があった。それは本家の地下牢に置かれた囚人達だ。彼らは混じりものと言われ、血が中々安定しなかった銀朱に噛まれ、その血を吸われるのみならず、その血をほんの一滴でも混じらせてしまった者達だ。

彼らはそこで悲しいことだが、《飼われて》いる。

文字通り獣のように自我を失くし、人としての生活を送れなくなった彼らを、そこで飼っているのだ。

自我をなくし獣のように咆哮をあげ、そして血が混じったが故に、人より長く生きてしまう哀れな者たち。

「須賀圭が混じりものになったら……どう、なるかな？」
「分からない。けど……そうならないと、いいと思う」

混じりものが自我を失くさず生活出来た例は少ないと聞く。
そしてその生活出来た数少ない例も、そのほとんどが本家の監視
下に置かれ、徹底的に調べられた。

そこにはプライバシーもプライバシーもない。あるのは単なる
実験体としての名だけだった。

人としての自我を保っているにもかかわらず、じつと監視され続
けるのと自我をもなくし、人としてではなく、単なる動物のように
飼われ続ける毎日と、果たしてどちらがましなのだろうか。

「……まだ嘸まれたただけだし。だったらそんな……ね？健君の血が
入っちゃったとか、ないかもしれないしさ」

なんとか慰めようと言葉を紡ぐも塩見は己の無力感を痛感してい
た。

上手く言葉を操れない。義経の心にのしかかる負担を取り除いて
あげられない。それが塩見にずしりと重く押し掛かる。

二人で沈黙していれば沈黙に耐えかねたのか、義経の端末が喧し
くも鳴り始めた。

それは 須賀圭を収容している隔離病棟からの連絡だった。

「そうか、分かった。直ぐに行く」

電子音をたてて端末の通信が切れると、義経は無言で起き上がっ
た。

「降矢……君？」

恐々と窺うも、そこにあるのは義経の冷たい表情だけだった。その奥に垣間見えたのは、悲しげな揺れる瞳だ。一瞬にしてそれを見れば悟ってしまった。

「須賀圭は 感染してる」

一瞬、部屋の音がすべて消えたかのように感じた。自分の鼓動の音だけが聞こえ、耳障りでならない。

「嘘……だよな？嫌だよ！嘘だよそんなの！だって、そんなの無いよ……！」

間違ってるんだろうと義経の肩を揺すぶって違う答えを引き出そうとするが、そんな取りみだした塩見と反して、今度は義経が酷く冷静になっているようだ。静かな表情で緩く首を左右に振る。

「本当だ。麗、雫のために、健君のために。そして何よりも皆のために、やらなければならぬ。分かるな？」

分かるなと言われても分かりたくもなかった。ぶんぶんと首を振って嫌だと叫ぶと塩見は懇願するような目を向ける。

けれど義経は静かな声で塩見に諭す。

「皆が死ぬことになるかもしれない。それでもいいのか？よく、ないだろう？」

「でも……！」

塩見はひと際大きな声で叫ぶ。が、義経の冷たい眼差しともろに視線がぶつかり、一気に気持ちが悪えてしまったらしく、肩を

いからせていたのが、がくりと落ちた。それを確認すると、義経は淡々と塩見に命じるのだ。

「病院へ」

「……………分かり、ました」

塩見は義経の前にすつと手のひらを上向けて差し出すと、その上に義経はそつと己のそれを重ねる様に差し出した。

二人で瞼を同時に閉じると、祈るように言葉を紡ぎ出す。

「僕が君に命じるんだ。麗、君はただ、僕を連れていっただけなんだよ」

「駄目。私が連れてったんだ。私も降矢君と同罪なんだから」

「麗……………」

「自分だけの罪にしないで。私も飲むから。罪を飲むから……………」

娘の友人を殺すと言う罪を二人で飲み込むのだ。

義経はそつと長いまつげの奥から塩見を薄目で見つめると、瞼を再度下ろし、覚悟を決めた。

覚悟が決まった途端、全身から伸びている従者達とのリンクを全てぶつりと切り離すと、それらを塩見にのみ繋ぎ直す。

「麗、俺が命じる。隔離病棟に連れていけ。須賀圭を、殺しに行く」

「君の御心のままに」

そして二人は光を一筋残して消えた。

48 (目覚めて声が聞こえた) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

48 (目覚めて声が聞こえた)

ふいに澤田と鷲宮は歩いてきた足を止めると全身を雷に打たれたように強張らせ、同時に顔を見合わせた。

「切れた!！」

それは雫の守りについてきた者も同様で 従者達は全員が全員、それから恐慌状態に陥ることになった。

「ふざけんなよあいつ!!俺の《天眼の器》まで塞いでやがる!今何かあったらどうすんだ馬鹿が!」

「私も何も生み出せない……義経様、まさか……須賀圭は……」

感染、していたのですか?

+++

須賀は知らない天井を見つめ、身体がいうことをきかないことに焦れた。

「……どう?」

意識が朦朧としている。視界が何故かうすぼんやりとしているが、本当にここはどこなのだろうか。

そして起きあがるうにも全身が痛みで覆われていて、何故か鈍い反応しか返さない。

なんなんだろ？

視界もきかず、思考も定まらず　そして何故か記憶を手繰ろうとしても記憶があいまいで、何故このような知らない天井の下で起きることになったのか、その理由がどうしても思い出す事が出来ないでいる。

そつと部屋に入った義経は、須賀の目があいていることを知り、胸に更に苦さが広がってくるのを感じる。

せめて眠ってくれていたらならばまだ良かったものを　そう考えしてしまうのはこちらの勝手な都合だろうが、それでもだ、死にゆくものの悲しげな瞳を見つめて　と言うのはあまり嬉しくない。

義経達は研究者である白衣に身を包んだ男に話しを窺うことにした。

冗談でもなんでもなく、検査結果が間違っていることもなく本当に感染してしまったのかと義経は注意深く耳を澄ませて話しを聞いた。

「間違いは、ないんだね？」

「ええ。残念ですが感染しております」

男の声にも苦々しさが滲んでいる。当たり前だ、ベッドの上で寝ているのは、普通の家庭に育った普通の少女。このようなことがなければ今も外を自由に歩いていた少女なのだ。

「血液中に反応が……出たんだ」

危険因子である、細胞。銀朱の血が混ざることにより構築され始めてしまうそれは、間もなく須賀の肉体を蝕み始めるのだろうか。

「ここ数十分間に急速に増えてきております。危険です」
「そう……そうだね」

危険な存在と言われ、義経は面を伏せた。

雫のただ一人、現状で作ることが出来た友人が、雫を追いやる危険な存在になるだなんて、何と言う皮肉だろうか。

それも彼女はただ巻き込まれただけに過ぎない存在だ。なのに危険とその存在を否定されることになるうとはと、あまりにもその存在の虚しさ悲しさに義経は内心、泣きたくなった。

男は脂汗にまみれた顔で告げる。

「本家に連絡を……本当にその……取らなくてもよいのですか？」

本家から義経を慕ってついでにきた男だけに、白衣の男は須賀の現状をよく知っていた。知り過ぎていたほどだった。

だからこそ恐々と訊ねるのだ。

「こんな平地では、いつ目覚めるとも知れないですし、あまりにも無防備過ぎます」

言わんとすることは分かっていた。

本家に連れていかないと決めたのかと、本当にそうするのだかと注意深く訊ね、ならばどこか安全な場所に隔離すべきだろうと言うのだ。

それこそ本家の地下牢のような牢獄に。

けれど

「無理だ。確かにそういった施設が僕個人の資産の中に無いとは言わない。だが、繋いでおいて本家以外の場所で、何らかのアクシデントが起きたとなればどうなる？天災だっていつなん時起きるとも

知れないんだ、どこも安全とは言い難い。……そして感染者が、もしもだが……逃げたとすれば？まず間違ひなく無駄な犠牲者が出るのは最低でも、起こりうる想定内の出来ごとだろうね」

「……………」

「そして、それは避けなければならぬんだよ」

「……はい、おっしゃる通りで」

白衣の男はじつとりと汗をかいて主の言葉を待った。

「やっぱり須賀圭は、殺さなきゃ……いけないだろうね」

「……………」

「……………」

じつと塩見と白衣の男が俯き言葉を失くしこれを聞いていれば、須賀もまた、これを聞いていたようだった。

何を言っているの？

須賀圭 どう聞いても自分の名だと思い目を見開く。

一気に頭が覚醒したが、それと同時に混乱が極まった。

どうして私が殺されなきゃいけないの？

冗談？

だが、冗談にしてはたちが悪すぎる。

ぐるぐると回る思考に視界にと、忙しなく須賀はなんとか起きあがりうつとしたのだが、何か重いものが押し掛かってでもいるのか、胸辺りから腕ごと包むようにしてぐっと上から圧迫されるようにして身動きがとることが出来ない。

更に足も同様であるようだ気づけば、恐怖が段々と足元から競

り上がってくるようだった。

動けない……？

身動きを奪って、そしてまさか 殺そうとしているのかと、誰かが自分を攫ってきたのかと、段々と須賀は遠からずといったところの思考に辿りつくとなんとかして逃げようともがきはじめた。けれど腕も足もほとんど力なんて入らない。

助けて……

声さえ出せずただ殺されてしまうというのか。

義経は須賀に光を背に近づくと、須賀からは逆光でその顔が誰だか分からない。

「起きちゃってるんだね、完璧に。……可哀想に」

「……た、す……け」

マスク越しに言われた言葉に、義経は痛みを覚えたように顔を顰める。

そして白衣の男に命じた。

「苦痛を与えたくは無い。何か……痛みを与えずに死を与えられるものを……くれないか」

「畏まりました」

白衣の男は部屋を後にした。

残された須賀は助けってくれと逆光で良く見えない中、白衣の男に目で訴えるが、男はそれに気づかぬふりをし、去っていく。廊下でちらと目を向けた瞬間、目があったように感じたが、それにすら見

なかつたこととしたのだった。

誰か、助けて　　！！

49 (奪われた記憶の行方) (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの現実世界とは似て非なる世界をイメージして造り上げています。

そのため実在する人物や歴史上の人物、団体そして国家、その他固有名称で特定されるものとの作品は何の関係もありません。

ご了承くださいませ。

49 (奪われた記憶の行方)

『助けて　　！！』

わんわんと頭の中で銅鑼を響かせたような音がしたと思えば悲痛な叫び声が頭の中に木霊する。

大音量のそれに雫は堪らず呻き声をあげて頭を抱えて倒れ込んだ。

「いつ……つうつう……」

『いや、嫌だよ死にたくないよ！殺されたくないよお！』

雫が床の上に髪を散らして呻くも、それはいつまでも続く。

「あつ……つう、あああ！」

これはなんなのですか！？

バクバクと心臓が早鐘を打つ。そして脚はもう、がくがくだ。とてもではないが立っていられない。

「雫お嬢様！？」

雫ががたと音をさせて倒れ込んだのを見て、奏は血相を変えてかけよるが、その傍では同じようにして頭を抱えて仰向けに倒れこむ健の姿があり

「……な、なんなんだよおい！？」

千草と奏は二人の傍に跪くとその顔を覗き込むが、二人ともそれは酷い顔色をしていた。

二人が今まさに感じているもの、それは 二重三重にと誰かの
声が頭の中で鳴り響き、恐怖が全身を包み込む。それは今まさに、
須賀自身が今、リアルタイムに感じている恐怖そのものだった。
がちがちと歯の根が合わず歯が音を立てる。胃が縮こまる。急激
に高まる恐怖が全身に留めておけないほどだ。

『嫌、止めて!!』

雫はがくがくと震えがくる全身を包むように自身を抱きこむと、
これはまさか須賀の声ではないかと呻く。

「須賀さん？」

健が問うと、雫は突如びくりと肩を震わせて悲鳴を上げる。

それと同時に健も胃がひっくり返るほどの衝撃を胃に受けた。そ
れは凄まじいストレスによる過剰なまでの自身への攻撃である。須
賀の身にまさにそれが起きているのだが、そんなことを二人は知ら
ない。

『誰か……助けて!!』

雫はそれを聞いた瞬間、弾けるようにして飛びあがると、部屋を
飛び出していった。

「雫!!」

「雫お嬢様!!」

「お、おい!!」

健が慌てて追いかけていくのを見て奏はついていこうとこちらも
駆けだしたものの、ついていけるはずなどない。雫も健も一般人と

は言い難いレベルの肉体を得ているが、奏は悲しいかな、一般的なレベルをはるかに下回るレベルの足しか持ち合わせていないのだ。廊下に飛び出して追いかけてみたものの、二人の姿はもう、追いかけるどころか影も形もどこにも、見当たらなくなっていた。

「雫、お嬢様あ……………」

ぜえはあと息も荒く喘いでいればその背後で千草が厳しい顔で真っ直ぐ、二人の消えた方向を睨んでいた。

彼の握る端末には、追いかけてよとの文字だけが点滅していたが、動くべきか迷っていた。

「……………何なんだよあいつら」

+++

雫を慌てて追いかける道すがら、健はおかしなことに気がついた。誰も雫を見ていないのだ。

雫が駆けている中、ようやく登校をしてきた生徒達が廊下には溢れかえっていた。

けれど彼らは一様にして雫の方を見ていない。それどころか自らに迫る勢いで走る雫が目の前にいるというのにも関わらず、よけようともしない。

登校時間に屋上に向けて全力で今の時間帯でそんな場所に向かうはずが無い場所に走っているような状況だ。そんな他の生徒とは逆走しているような人間がいれば、異様に映るはずなのに、何故か誰も気にも留めない。

「なんでだ……?」

雫が避け、人の合間を縫って駆けるのを健が追いかける。その間に健には幾つもの声が飛んできた。

「お早うございます、成瀬さん」

「先輩、お早うございます」

それはまるで、雫がこの場所にはないかのような振る舞いでそれらに「お早う!」と返しつつも健はわけも分からぬ不気味さを感じていた。

雫は屋上まで来ると、途中廊下に置いてあった小さな花瓶を一つ失敬してきたのだが、それを手に空を見上げる様にして叫ぶ。

「イオリ!」

すると雫の手にしていた花瓶の中の水が跳ねまわったかと思うと、次の瞬間凄まじい勢いで蛇のように細長い軌跡を描いて飛び出してきたのだ。

「なんだい、小さな雫」

そう言いつつイオリは周囲に見られぬように声が聞こえぬようにと結界を張り巡らせていく。二人きりの逢瀬を邪魔されたくはないようだ。

「小さな余計です!」

ここでやつと追い付いたと健も屋上に飛び出すと、イオリの存在をみとめておやと首を傾げる。

イオリはと言えば無粋な邪魔が入ったなとは思ったが、健は今や雫の一部であるため、結界が除去せよとの命令に従わぬため、弾きだせないようである。雫と自分以外を弾くようにとしてあったがゆえのものだが、思う通りにいかないことに腹を立て、イオリはむつとする。

「イオリ……さんですっけ？」

一体何でまた神様なんて呼び出したんだと健が首を傾げていれば、雫は緊急事態ですのと、答えにならない答えを返してくる。

「きつと須賀さんに何かあったに違いありません。健も聞いたのでしょう？殺されるとの声を」

「あ、ああ」

「須賀さんのことも私は覚えていなかった。櫻子のことも。そして健と私だけがそれを覚えていない。そうなるって怪しいのはお父様達です。お父様は人の記憶を操る能力を有しています。……確かに他にもそういつた能力者はおりますが、現時点で一番怪しいのはお父様。そうなたらもう、鷺宮さん達にすら頼めません」

だからこそイオリを呼んだのだと告げる雫は、イオリの結界内部に居ることを確認すると、これは声も拾えないのだったなと確認を入れてきた。勿論そうだとイオリは頷く。

「小規模だけれどこの三人を今、世界から隔離しているような状況だよ。だからこそ今私は、雫と内緒話が出る。嬉しいかい雫？」

ふわりと極上の蕩けるような微笑みを向けてくるイオリにふんと

顔を逸らして小さいなんて言わないならとっても嬉しかったですが！と、いつにないことだったが、子供のように今日は拗ねっぱなしのようだった。健はそのことに少なからず衝撃を覚えた。

「おっどろきだな。雫でもそんなん言うんだ？」

大概の事はさらっと受け流している雫しか知らなかったため、それこそ年相応の形で怒らせることが出来るイオリに驚きを覚え、それと同時に羨望すら感じたようだ。すげえと声を漏らしている。

「だって失礼なんですよ！初対面でいきなり小さいなんて言うんです！あんまりです！私だって大きくなる努力くらいしてるのに！！」

「だって実際小さいじゃないか」

「……も、もおおおお！イオリなんて大嫌い！！」

50 (水の橋の先)

がらりと突如開け放たれた扉の先に居たのは鷺宮だ。血相をかえて慌てて飛びこんできた鷺宮は、教室に戻った奏に駆けよると、一般の生徒の目もあるというのにそんなことになどお構いなしに訊ねてきた。

「お嬢はどこだ!」

奏は驚いたが、鷺宮に肩を揺さぶられながらも素直に答える。

「お、お嬢様ですか? えっと……執行部の部室から飛び出してっつきりですけど……」

あれからどこにいつてしまったのか、雫は見つからない。

奏の体力ゲージでは長く追えるはずもなかったため、諦めてこうして教室に戻ってきたわけのだが、そんなこと、鷺宮であればそれこそ知っているはずだろうに、何故そんなことをわざわざ教室に出向いてまで訊ねてくるのか、全く意味が分からなかった。

だからこそつい言ってしまったのだ。

「自分の目で見ればいいじゃないですか。どこにいるのか。もう僕の足じゃ追えませんよ。まさか雫お嬢様があんなに足が早かっただなんて……」

もう困ったなあとはやくように言えば、だんと鷺宮は机を叩きつけて叫ぶ。

奏はうわっとのけ反る。

「そ・の・監視が奪われたんだよ！！今や義経も行方不明だ！お嬢もって……こいつは本格的にヤバいぞ……おい、奏、今日は合法的に休ませてやる。ついてこい」

問答無用でがしつと腕を掴むと教室から引きずり出す。

「え、えええ！？」

ちょうどその時のことだ、教授棟から一人の教師がやってきた。奏の教室の授業をするためだろうと思いい、鷺宮はその教師に「奏は今日早退です。申し訳ないんですが家の事情で早退なので後で詳しい話しは連絡に参りますので」と勝手に話を進めてしまう。

それを聞けば奏は泡を食ったようにして何を言っているんだという顔をしているが、元からサボり癖がある奏である。途中からまあいいか？とも思いなおしたようで、不満そうな顔を浮かべながらも大人しく鷺宮の腕にとっつかまっている。

何よりこういう時の鷺宮には何を言っても無駄だということを経験で分かっていた。

教室で他の生徒達が見送る中、奏は首根っこを掴まれて大層派手な早退をする羽目になったのだった。

ずるずると引きずられながら奏は溜息をつく。

「あー……もう勘弁してくださいよお……」

背後では未だざわついた声が聞こえる。

これは当分の間、学校はサボりだなと奏は思った。

目立つことおびただしい鷺宮の登場で、明日から暫く周囲が騒がしくなることは必定であろう。静寂を愛する奏はこりゃ明日からはとてもじゃないけど教室なんていられそうにないなあなどと思いいながら早々に雲隠れ　この場合はサボタージユであるが　するこ

とに決めたのである。

だがしかしこの男は無情にもさらりとこのようなことを言い放つ。

「明日はきちんと送り届けてやつから、まあ今日は我慢してくれや」
「……いやあ、それはいいかなあ？」

もう休む気満々だった奏はあははと笑いながら視線を逸らす。鷺宮は何やらぴんときたらしい。流石長年の付き合いである、奏が休もうとしていることに気がついたようだ。

「きちんとお前は明日、学校に行くんだよ。分かったな？」

ぐいとドアップに顔を寄せられ、ドスのきいた声で言われれば、奏はうつと声に詰まる。鷺宮は目をそらさない。奏も逸らせない。そして数十秒後に奏は白旗を上げることになった。

「……はい」

「よし、いい返事だ」

鷺宮に勝てるほど、奏は年季がまだいっていないのだ。

けれど同じだけの時を生きれたとしても、奏が同じだけの器量を身につけられるかと言えば、また別の話しなのだ。

+++

イオリは花瓶を抱えてその美しいほっそりとした指先で中空に丸く輪を描くようにしてみせた。

すると指先の描いた軌跡が水の輪としてふわりとその場に留まり、

雫と健にこんな情景を写しだしてきたのだ。

それは病院の可動式の寝台の上に横たわる、須賀の姿だった。

「須賀さん!!」

「雫の見たいものはこれだね?」

イオリが確認するように言ってきた。それに対して雫は慌てて頷くと、もっとよく見せて欲しいと言ひ募る。

けれどイオリはゆっくりと見ている暇はないようだよと言つのだ。

「どういう意味だそれ?」

健は疑問を口にするが、イオリは淡々とそれに返すだけだ。

「この子の天命は消えかけているようだね。とても 変則的にその運命は変えられた……と言つよりも、ねじ曲げられたようだけど。この子はもう死ぬよ。それをゆっくりと見ていたいと言つのなら、話しは別だけれど」

「そ……そんな!! 須賀さんが死ぬ!？」

「このままただ見ていればね。けど、助ける方法はちゃんとある」

イオリは目を細めて笑みを模ると、雫の前から水の輪を消して見せた。

雫は必死だった。須賀が死ぬと言われ心臓の鼓動が止まるかと思うほどに衝撃を受けた。けれど助けられると言われれば、更に大きく心臓がどくりと脈打つ。

今ならば助けられる、その方法があるだなんて。

ここでそれに取り縋らなかつたら一生後悔するだろう。

雫は迷わず そして間髪いれずその方法とやらに飛びついた。それ以外、考えられなかった。

「どうすれば助けられますか?!イオリ!!」

イオリは雫の言葉に、すつと腕を振って答える。

腕が振られた途端、空に水のかげ橋がかかった。それはとても美しい橋で、まるで天の回廊のようであり、そして天の遣いの通った軌跡のようでもあった。

その美しいかけ橋がさつとかかればこれはなんだと二人は首を傾げるようにしてイオリへと目を向ける。

「この道の先にその子がいるよ。雫、君を待っている。私は水だ、だからこそつについてはいけないけれど、雫、君はどうすればいいか、もう、分かっているよね?」

「ええ。イオリ、有難う。感謝します。そして、いつてきます

!」

「お、俺からも有難うな!いつてくる!」

雫が何を考えているのか水のかげ橋の先が見える、屋上のフェンスの方へと駆けていくのが目に入れば、健は慌ててそれに続いた。けれどそれを阻むものがあつた。イオリである。

イオリは健の腕を取り、真剣な表情を作り言った。

「あの子を　雫を頼んだ」

自分は水のある場所しか動きが取れない。花瓶の中に入った少量の水分ではそう長くこの場にすら留まることは出来ないだろう。だからこそついていくことは出来ないし、その身を守ることが出来ないけれど、この先に何が待ち受けているか知っただけにイオリは警告をしてくれる。

「何があってもうるたえるな。雫を守り通せ。分かったな」
「ああ、分かってる」

健は神妙に頷くと、雫の後に続いた。

駆けて行く途中、段々と記憶の欠片が健の中に集まっていった。

腕の運び、足の運び、筋肉の力の入れ方　　そうだ、自分は雫の、
そしてかがりの所有する武器となったのだ。

健はそのことを思い出すと全身の血液を　　銀朱となった全身の
細胞を活性化させていく。

「そんなん他人に言われるまでもねえよ。俺が二人を守るんだ……
雫ッ！行くぜ！舌ぁ噛むなよ！」
「はいっ！」

雫は低い位置から燕のように駆けてくる健を振り向きざま確認すると、そのまま目を見開いたままに両手をぎゅっと胸の前に縮みこませて待ちつける。すると雫の身体は次の瞬間には大空の彼方にあつた。

「わっ……！！！」

全身を風に翻弄される。横抱きに抱えられているために、足の先は酷く無防備だ。風にあおられるままに足先が冷たくなっていく。

超人的な跳躍力を有したために、とてつもない距離を一気に稼いだ健は、空を飛翔し凄まじい勢いで飛んでいく。その姿はまるで一匹の獣のようだった。

学園の敷地内を抜けると、今度は住宅街を突っ切ろうとしている。その次は人の多い通りに入るため、このままで行けるのか、大丈夫なのかと健は方角を確認するために今はもう頭上遙か彼方になってしまった水の橋を見上げる。

「健、そのまま真つ直ぐです！」
「ああ！」

民家の壁を駆けあがり、屋根伝いにいくことを決めた様である。
屋根の瓦を踏み抜く勢いで駆けていく健に、必死にしがみ付く雫の姿はもう、イオリからは見る事が出来なくなっていた。

「あの子達は……馬鹿なのか？全く……タケミナカタ！」

イオリが名を呼ぶと、呼ばわれた途端に一陣の風がその場に巻き起こった。

それは小さな竜巻になり、つむじ風程度にまで一気におさまると、そこには一人の男が立っていた。

「なんだ行き成り」

「呼び出していきなりで悪いんだけどね、私はこんなだから……雫を助けてあげてくれないか？」

「雫を？」

どういうことかと訝しむタケミナカタに、イオリはすつと腕を持ちあげ前方を移動しているであろう二人の姿を指さした。

「あそこに見えないか？私にはもう見えなくなっちゃったけれど、風の神である貴方ならば見ることが出来るはずだ」

「あれは……雫とその従者か。一体何をしている？」

「雫が助けてほしいってさっき呼びかけてきたんだけど、ねえ、お願いだ。あの二人に力を貸してあげて欲しい」

イオリがそうして頼み込むと、相分かったとタケミナカタはふっ

と指先を呪いか何かなのか、くねらせたかと思うと指で作られた隙間に向かってふつと息を吹きかけた。するとその隙間から吹かれた風に乗って、どこからともなく巨大な船が空へと突如現れいでたのだ。

それにひらりとタケミナカタは飛び乗ると、そんな巨大な船がどうしてそれで動くのか、小さな小舟用の櫂一つで行く先へとぐんと漕ぎただけで、一気に小さく見えなくなった。

それを見守ると、イオリは花瓶の中の底が見え始めたのを見て、「ああもう時間のようだね」と呟くと、その場から忽然と姿を消した。

イオリの腕の支えが無くなった途端、花瓶は宙から瞬間に落下し、儚くかしゃんと音を奏でて割れてしまったのだった。

51 (透明な存在、空飛ぶ船)

澤田と鷺宮は雫も確かに気にはなつたが今は確実に居場所が分かる義経の方が先決だった。

「早まるなよ義経!!」

恐らくは須賀は感染したのだろう。だからこそ義経は二人から繋がり切り離した。

雫の大切な存在である、友人を取りあげる、その瞬間を見られなくなかったからだ。

そこまでが容易に想像がつくと、今度は猛烈に腹が立った。

「何で俺らに一言も言わない!どうして逃げる!？」

奏は大人二人が怒り狂っている間、冷静に車内に内蔵してある端末の先を見据えていた。

端末の指し示すその場所は、降矢の病院、その隔離病棟だ。

「雫お嬢様……」

雫がいる先もまた、恐らくそこなのだろうという予感がした。

奏は須賀の現状を今初めて耳にしたものの、驚くよりも何だかそれで合点がいったのも確かだった。

須賀がピンチに陥っているからこそ、二人はああして倒れたのではないか。そして何故倒れたのか、その理由はまさしく、須賀があの二人と同じ血を介し始めてしまったからなのだとすれば合点がいく。

「須賀さん……」

どうか無事でいて欲しい。雫も、須賀も、健も。

助手席で端末を食い入るように見つめ、そして眼前のフロントガラスの向こうを見つめ、奏は祈る。

無力過ぎて彼にはそれくらいしか 悲しいがそれくらいしかすることが無かった。

+++

タケミナカタの巨大な船が何故か千草には見ることが出来た。問題だったのはそのこと事態だろう。

「空に船が……飛んでいる？」

授業が始まったというのに、そんな夢のような話しを思わず口走ってしまえば当たり前だが静まりかえった教室内で注目を浴びないわけがなかった。

大半の生徒が千草の言葉につられるようにして窓の外を眺めやり、そして教師も眺め、寝ぼけているのかと言われた。

「空に船なんて浮くわけないだろ？それとも何か？雲の形が船に見えるましたってことか、高遠」

「ちがっ！！ほらそこに、船が飛んでるじゃないですか！！」

千草は自分だけの目にあれが見えているはずなんかないと、思わず声を大にして叫んでしまったが、誰ひとりとして千草と同じものを見てはいないらしい。あんなにも窓の外には大きな船が浮いてい

て、それは一瞬にして住宅街の方面へと風に乗って移動したというのに、誰もがそれを見られないのか、千草のしているものは誰も見ていないというのだ。

「なん……なんで？」

思わず喘ぐように生唾をぐくりと飲み込みながら言えば、教師が疲れているんじゃないかと告げる。

「あんなお屋敷に住むことになれば、俺でも気疲れしそうだからなあ……高遠、あんまり寝れてないんじゃないか？」

「……………」

いつもの千草であれば「そうなのかもしれません」と、苦笑しつつも自分の言葉を引つ込めたはずだ。けれど今日は雫の今朝の件があったからか、苦しさに胸が押しつぶされそうだった。

『あれは無にしなければならぬ。封じておかねばならない存在なのだよ』

宗一郎は雫のことをあれと呼び、名すら呼ばない。そしてその存在を否定し続けることを千草に課した。

そのさじ加減の難しさを説かれたものの、千草にはまだ、その調整は難しかろうとも言われていて 未だに上手く出来たのかは分からなかったが、一般生徒達が雫を見ようともしない現実を突きつけられれば恐らくは成功したのだろうと思う。確認は、それこそあの屋敷の中では出来なかったが、学園に登校してきてようやく成功した実感をもてたものの、それでも矢張り、後味が悪すぎる。

宗一郎からは雫を守るためにそうしなければならぬと言われたけれどそれは、こつも惨いことなのか。

千草は拳をぎゅっと握りしめる。

恐らくこの端末に宿った《力》が、千草にあの人には見えない船を見せているのだろうが、雫はそうした世界で今まで生きてきたのかもしれない。

確かに千草には今まで、雫の気配が薄く感じられていた。

薄気味悪く、どこかそこに居ないような存在で　妙に希薄化された幼馴染のその姿に、一時期怯えもしたものだ。

顔の造作はしっかりと覚えていたはずなのに、何故か雫と話を切り終えた瞬間にはその顔を直ぐ様忘れてしまう。

それこそが宗一郎が今まで雫に与えていた『無』なのだとなり、驚愕するとともに納得した。

ああ、だからこそ雫を自分はああしてどこにいるか分からない、存在の不確かなものとしか認識出来なかったのかと。

ただ、雫に対するこの不快感はまた別物だった。

千草は雫を憎みもしている。いいや、憎いと思っっているはずだった。

けれど今、自分が健とは違った形で雫を守れと言われ、そのことに何故か使命感を覚えているのもまた事実。

雫がこうした、誰からも理解されない世界で生きていることをこの一瞬で理解し、体験した千草は、胸の中に芽生えた罪悪感という感情で押しつぶされてしまいそうだった。

誰もがあいつを知らない、認識しない世界で生きるって……どんな気分なんだ？

厳密に言えば実際は誰もが、という括りではないものの、それでもそのほとんどの者達がそうした遠くの存在としてしか雫を認識すら出来ずにいる。

いくつかの制限を設け、ようやく雫を認識することの出来る、あの種のだが『枠』が出来上がる。それは眼鏡と言ってしまうてもい

いかもしれない。

雫を認識するにはその眼鏡が必要だが、ほとんどの人間達はそれを持ってはいない。

恐らく、千草も持ってはいなかったのかもしれない。

いや、半分は持っていたと信じたいな。

無かったなどとはどうしても、認めたくなかった。辛すぎて。罪悪感が重すぎて。

周囲の人間が怪訝そうに見守る中、千草は窓の向こうに映る船が米粒大にまで小さくなり、ややもせずに見えなくなるまでそれを見守った。

他者の視線はそのまま、雫が常に感じている理解のされ無さそのものだろう。

誰からも理解されず、誰からも愛されず、誰からも必要とされない。

それはそうだ、雫はそこに存在しないようにと呪いをかけられているのだから。

以前は宗一郎から、そして今は 千草からそれは行われている。

「俺は……」

千草がぎゅっと左手に握った端末に力を込めると、それを見計らっていたかのようにして端末が手のひらに激しい振動を伝えてきた。反射的に端末を覗き込めばそこにあつたのは、いつものごとく端的な指示だ。

「先生、俺、やっぱりちょっと具合が悪いみたいです。白昼夢

みたいの見るし……申し訳ないんですがちょっと席をはずして保健室で休んできたんですけど」

「お、おお。そうだな。休んでこい」

「はい。すみませんが失礼します」

千草はクラスメイトの大丈夫かと案ずる声を丸つと無視すると、教室の扉をがらりと開け放ち、廊下へと出ていく。そして扉を閉めた瞬間、人の目が消えた途端に千草の姿は六花学園のどこにもなくなっていた。

52 (あなたの代わりに私がやるから)

脚部にほぼ限定していたとはいえ、普段以上の力を引き出すように肉体に強いたばかりだ、健の骨に筋肉に、そして細胞の一つ一つにまでと、その全てがまるでぎしぎしと悲鳴を上げているようだった。

こんな状態でなければもっと空の旅を満喫したいところだが、中々そう上手く世の中は運ばない様子である。

「水の端っこ、見えてきた？」

息が中々整わないのは矢張り、能力の使用限界を越えて跳躍を続けたからかと思いいたるが、それでも弱音だけははきたくない。健はぐつと唇を噛みしめ、たえた。

「ええ。もうつきます。健、もう少しの間、辛抱してください。終わったら病院で見て貰いますから」

雫の気遣わしげな視線を受けて、健はやりわりと首を振って丁重にそれは辞退する。

「いいっていいって。それよか絶対に雫の血の方が俺には必要だから」

病院なんてどうせ気休めだろうし、そもそもこんな体では、恐らく普通の病院になかかれまいと思っただからこそ冗談半分程度の軽い気持ちでそう答えたものだったが、真面目な雫はそうは取らなかつた。

「え、ええつと……その、それはっ」

そんな返しが来るとは思ってもいなかったようで雫は慌てふためくものの、それでも何が弱ったその身にきくのかを知っていたため茶化すようにも駄目だとも言えなかった。かわりに顔を、それこそ首元まで真っ赤に染め上げて襟首をぐいと開くと、震えながら消え入りそうな声音で告げた。

「ど、どござ……」

船のへりにしがみ付き、震えながらうなじが見えるほどに首を逸らせて待っている雫は、自分では意識をしていないだろうが、とても扇情的で　そしてどこか背徳的な匂いをさせていた。矢張りその幼い肢体がそう見せるのか、どこもかしこも折れそうなほどに華奢な骨格を支えるその柔らかな肉がうっすらと色づいて見えて、どうにもそそるものがある。

目の前に抗いがたい引力が生まれたのを感じれば、健は唸ったものである。一つ年下というだけでそうかわらない年齢なのに、どこか歳幼い子供を無理やり手籠にかけているようなこの背徳感に健は半分押しつぶされそうで、そしてもう半分は　酷くそそられてい

「ああもう、えっろいなあもう」
「た、健」

いつくるのかと瞼をぎゅっと閉じて健を恐々と待っている雫の顔には、良く見ればうっすらと涙すら浮かべているのが見えて、ごくりと喉が鳴った。

これ以上の我慢は、どうにも出来そうになかった。

「ごめんな」

いつの間にやら伸びた犬歯で雫のうなじに牙を立てる様にして穴をあけると、そこからこの世でもっとも健好みの味のする飲み物を啜る。

他のどの食事も受け付けなくなるまでに身体が消耗しようとも、この飲み物だけは恐らく、喉を通るに違いない。それほどまでに雫は、健にとって極上の果実だった。

その食事風景をじっと見つめているタケミナカタは興味深そうにそれを見守っていたが、食事というものを暫くの間摂っていなかったためか、旨そうに雫を食む健の姿にそうまで美味しいものなのかと疑問に感じたようだ。

「なんだったら食ってみる？」

雫は俺のだけどしどしと口元を濡らし、常になくついと釣り目が上がった目じりをいと細める様にしてみせる健に、ぐったりとした雫は慌てて俯いた。そんな雫を見ればタケミナカタは興味がむくむくと湧いてきたようだ。雄の性が刺激されるものがあつたのだらう。

だがしかし、もう目的地についてしまうようである。

「残念なことだが、それは後日改めてということにでもしようか」

「そうだな。今はこっちが優先だよな」

口元を汚す血のりをぺろりと舌で舐めとると、恍惚そうに表情を歪ませて健は我先にと飛び出した。

へりを踏み台のようにして跳躍すると、真っ直ぐに水の橋の先端へと弾丸のようにおりていき、あっという間に目的地についてしまったようだ。

「タケミナカタさん！」

「我々も行くぞ」

+++

注射器を受け取れば義経はいつになく、自分の身体が恐怖からくる震えがきているのを感じ、力なく笑った。

どうしてこんな時ばかり！！

「降矢君……」

「笑っていいよ」

「笑えるはずないじゃないか！！」

塩見は義経の傍らに立つと、小さな丸椅子に腰かけた義経の頭を引き寄せ胸に抱く。義経の目には涙が浮かんでいた。

雫の友人を殺さなければならぬ。それも、雫のために。雫を取り巻く環境のために。

せめて恨まれたくないと即効性の毒薬を用意して貰ったが、それは慈悲の気持ちからではなくて、そこにあるのはただ一つだけ、義経自身の良心の呵責だった。

弱い自分が情けなくて涙が出てくる。

「ほんとに、駄目なのかな？」

やらなければならぬのだろうか。

「駄目だよ。だって、仕方ないじゃないか……。ぼ、僕だって、本

当は嫌だよ？でも、でもさ」

他の誰にこんなことを頼めると言うのか。

そして、ここで須賀を野放しにして、もしも悪化すれば、今後何か起きたら誰がどう責任を取るのか。取れるのか。

そもそもがそうだが、責任問題云々という話しなどではもつすまない。

「生きるか死ぬかの、死活問題なんだよ、塩見さん……」

だからこそ、義経も苦渋の決断だった。

塩見は力いっばいぎゅっと義経の頭を抱きしめ、泣いた。

薬を守らなければならない。その一念で義経は震える手で毒薬が込められた小瓶に手をかけ、注射器をそこに突き刺し　　と思ったが、これが中々入らない。当然だ。指も手も　　義経の歯の根さえもがちがちと音を鳴らすだけで合わないのだから。こんな状態で、注射器を操れるはずもなかった。

今までだって本当は人殺しなんてしたくなかった。

義経は苦しさも悲しさも恐ろしさも、全ての感情を蓋をするようにして見ないようにし、それらをこなし続けてきた。

だって、やらなきゃ、皆が死んじゃうから。

誰かがやらなければならない。ならば、自分自身の手だけを汚そう、義経はそう誓っていた。

自分の守りたいものを守るためだったらいくらでも汚れよう。血に塗れよう。痛みさえも甘んじて受けていこう　　そう、思っていたと言うのに。

「雫の友達っただけで、なんでかな？……こんな、手が震えてる」
強くなつたつもりだった。

皆を守るほどに、強く、強くあれていると信じ続けていた。
けれど、義経は脆かったのだ。どうしようもないほどに。

「こんなことくらいで……ッ！」

須賀の命と義経自身の守らねばならない者達の命の数、それを天秤にかけて考えても、それでも矢張り、震えは止まない。

「こんなことなら、あの爺さん達の操り人形だった頃に戻りたい」

自らでは何一つ考えずに、周囲から行動の基盤を整えられてただ生きるだけ　生活するだけのただの人形に戻れば、義経は血を吐く様な思いでそう吐き出すと、塩見に怒鳴りつけられた。

「降矢君……だって、そんな！そんなのないだろ！？君は、ようやく取り返したつてのに、なんでそんなことを言うんだよ！？」

「だって、仕方ないだろ！？こ、怖いんだよ！！僕、……だって、僕、僕は……雫の友達を、殺したくなんて、ないのに」

本家の連中から取り返した義経の　は、こんな時に邪魔をする。
さえなければ、義経は今、完璧に成すべきことを成しただろう。
それも、簡単に。

が邪魔なんだ。

注射器を握る震えの止まない手首をぐっともう一方の手で掴んでみるが、矢張り震えは止まない。

「怖い……なんて、思ってる場合じゃないのに」

そんなことをしている間にも、須賀の中でその遺伝子はどんどんと組み替わっていつている。人ならざるものに須賀は、進化してしまっているというのに。

「早くしないと手遅れになっちゃうのに！」

その進化を誰も止められない、そう分かっているのに。

「出来ない、出来ないんだよ……」

義経の指先から、ぼろりと注射器と毒の詰まった小瓶が落ちると、つと義経の頬を一筋の涙が伝い落ちた。

それを見た瞬間、塩見の中で何かが弾けた。

「なら、私がやる……！」

「駄目だよ！塩見さん……！」

「義経君はいい！黙って見ててくれればいい！ううん、見てなくてもいい！目を瞑ってて！私がやるから！だからもう、泣かないで……！」

塩見も涙と怒りと悲しみとでもう、顔がぐしゃぐしゃだった。

もう大好きな友であり、想いをずっと抱き続けている長年のパートナーでもある相手のその顔を、そんな辛さだけでぐちゃぐちゃになんてさせていたくない。

私じゃ幸せに出来なかつたけど。

それでも、笑っていて貰うことくらいは出来ると信じている。

だからせめてこれが終わったら、私の前で笑顔を見せてくれれば

いい。塩見は注射器に毒液を一気に吸いあげると、須賀の剥きだしにされた腕に針を刺し、「言だけ」「ごめんね」と詫びる様に告げると、注射器の中身を一気に押し込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620r/>

六花神

2011年12月24日12時48分発行